

バカとのび太の召喚獣

絆と愛に飢えるシリアス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界はかつてドラえもんが言っていたのび太と将来結婚するはずだった静香とは結ばれなかった世界……。そしてドラえもんがいなくなったあの日からバラバラになった四人

その中のかつての駄目な少年は高校生となり新たな出会いと始まりでもあった

目次

プロローグ

プロローグ

人物紹介（ネタバレ注意）

試召戦争編

自己紹介

宣戦布告

勝算

Dクラス戦

Dクラス戦 戦後

女の子の手料理

ランチタイムの惨劇

Bクラス戦開幕前

Bクラス戦開幕

協定

仕掛け

Bクラス戦 終戦

Bクラス 終戦交渉

交渉

Aクラス開幕戦

Aクラス戦 第2試合と第3試合

決意と決着

召喚獣戦争終戦

戦後の放課後

ラブレター事件

1

3

5

12

17

22

31

35

41

46

51

59

64

70

77

83

91

96

100

106

111

116

清涼祭

準備期間

隠し事

交渉

清涼祭開始

営業妨害とお仕置き

妹登場

敗者は一人でいい

Fクラスの報復

チャイナ服の交渉

襲撃と死刑執行直前

準決勝Aクラス

誘拐事件

激怒とお仕置き

隠されていた真実

決勝戦

決勝戦2

最後の決戦

祭りのあとの打ち上げ

如月パーク編

事始め

時には諦めは肝心

恐怖は常に身近に

仕掛けるのは常に身近に

目標としていた夢

287

278

269

261

254

248

237

228

221

214

208

202

193

186

180

176

167

161

154

148

141

135

126

避けられない運命

293

如月パーク後日

300

料理

303

プール編

時には逃げるのも大事

306

呼ぶメンバーは？

311

言葉は大事

314

時には疑いを持とう

318

時には慎重に考えよう

325

勝負は真剣にしよう

332

強化合宿編

時には隠したいこともある

338

扱いの悪さに涙

346

時には犠牲もやむ得ない

349

亀裂

357

時には反省

366

怒らせていけない奴は身近にいる

370

謝罪

378

仲直りのあとは・・・

382

人の暴走は恐ろしい

385

メールは最後まで確認して送ろう

391

夜はいつでも油断できない

397

興奮しすぎるのはダメ！

401

時にはお話が必要

407

お仕置きの時間

412

お人好しはやはりお人好し

416

暴走の翌日……

423

補習のその後……

427

恋路と修羅場

始まりはいつも突然に……

432

嵐の前の始まり

436

嵐は徐々に近づく

438

明久の事情説明

443

明久の隠していた事実

448

島田への説得

453

演技と亀裂

459

亀裂のあとには……

465

手料理の偵察とゲーム

471

必殺仕事人は身近にいる

480

嵌めると挑発

485

準備と開幕

493

過去の悪夢とデビュー

499

対話と戦闘へ

509

決着と粛清

514

暴露と……

519

事故と理由

524

動揺と決断

530

謝罪と対面

536

再会と解放

543

期末試験編

仲直りと異変	547
昼御飯と疑惑	553
疑問	558
対面と爆弾発言？	564
料理は最後まで見ることに	573
食事とお仕置き	580
勉強と苦勞	585
狙い目と休み時間	589
のび太と勉強しよう！	593
小さな過去	598
制裁と予定	604
天然には勝てない	609
勉強と葉月の寝言	615
人はどこか似ているものだ	622
霧島家へ・・・	628
勉強と食事室へ	632
挑発と暴走	637
交渉と協力	643
動揺と血の制裁	648
女子トークは恋話が定番	655
男子のお泊まりの過ごし方	660
朝から見てはいけないものもある！	665
見直しは必須！	668
試験後の帰路にて	673
オカルト戦争	

脱走とお仕置き

675

鉄人の精神的攻撃のその後

680

始まりは突然に・・・

685

言葉はきちんと選ばう！

690

逃げるときはどさくさ紛れにいこう！

697

敬語使えるようになろう！

702

嫉妬はだめだよ？

705

なぜ敬語を使う!?

708

暴露と女の怒り

713

サボった分、痛い目に会う！

719

ゲストは・・・

725

脇役はやるときはやる！

728

耐性無いものはきつい光景

734

やり返すときはきちんとやり返そう

741

保健なら任せろ

745

歓喜と悲鳴

750

何年たっても変わらない・・・

754

破壊の後の惨状

758

暇なときは怖い話を？

763

屈辱は与えるもの

766

作戦とお茶

773

物は投げていけない！

777

引っ掛かる理由と心配事

781

疑念？

787

姫路の怒り

792

明久の怒りと決着
混ぜるな！危険！

夏休み

ちよつとした話

計画を立てよう！

興奮しすぎて・・・

ワシは男じゃ！！

海と言えば、恒例の・・・？

小さなご褒美？

ナンパはみたら止めよう！

まさかの爆弾発言！

ナンパはダメ！絶対に！

浴衣は可愛い！

夏祭り のび太の場合

夏祭り ジャイアンの場合

夏祭り スネ夫の場合

断れば・・・

控え室と悲しみ

夏の黒歴史

お祭り後の遺恨・・・

夏と言えば・・・？

夏の夜に・・・

その帰り道にて・・・

悪いことしたらそれなりに仕返しされる

旅行の帰りにて・・・

912

906

902

897

892

886

880

872

866

863

859

855

851

845

840

834

830

825

821

817

814

809

805

797

王様ゲーム I

915

王様ゲーム II

920

始まりは……

930

暴露は本音と共に

932

本音の被害は続く

935

被害は止まらない……

939

現在の被害受けたものは……

943

被害はここにも???

947

本音とは時に……

952

巻き込むの決意!

958

やはり……

961

今度は……

965

合体とは……

967

二人を混ぜると……

971

お前のものは……

974

血は似るもの

978

親バカありがとうございます!!!

982

混ぜても隠せないもの

987

人の黒歴史はいくつもある

990

バカにバカと言われたくない!

994

言葉はきちんと気を付けよう

998

メはやはり……

1002

可能性……

1006

夏のある日の休み……

1011

探索しながら昔話するのもあり

1013

怒ると怖いのは……

時は過ぎてても……

少しした時間

怒りたまると

怒りがたまりすぎた原因は……

出会ったのは……

一方……

思い出すのは……

その後の惨事……

召喚野球大会

夏休み明けに……

転校生と言えは……

やっぱり……

突然の後には……

開幕前に盛り上げるのは……

開幕戦！

やっぱり頼れる男

同点の後には

時には真剣勝負に！

ここで決めないと……！

一回戦の試合のあと……

次の相手は……

ある意味言葉は気を付けよう

嫉妬は……

スネ夫の仕返し

空気を変えるのは・・・

マウンドの最強の狩人

ランチタイムと・・・

ランチタイムのあと・・・

決勝戦開始

ルールを知らないにも・・・

鉄人の教育

知らないものは仕方がない・・・

喧嘩と理由

流れを変えるために・・・

突然の出来事

復活の・・・

活躍をするのは・・・

男を見せろ!!

閉会式

バカとテスト召喚獣のび太とく奪われた召喚システムを取り戻せ！

）

とある日の日常

依頼と懸念

夜遅くの出来事

静かな夜の出来事

夜の報告会

翌朝の出来事・・・

ガキ大将出る・・・

ひとつの報告

12211215121112051199119611911186

118311761172116611631159115411511148114411401137113211271122

謝罪と報告

約束を果たすとき……

再会と衝撃

衝撃は止まらない!?

修羅場?

メンバーは……

判明したのは……

到着と疑問

いざ！侵入！

トラップは基本だ

出てきたのは鬼!?

鬼と喧嘩

身をもつて感じた痛み

次に立ちふさがるものは

覚悟決めるものはいつだって

勝つために……

友の技は偉大なり

次の試練は……

ここから先は……

任す理由と冷や汗

友と信頼されるもの

立ちふさがる親玉は……

敵の正体は……

見破るには……

怒り

諦めたくない・・・！

変わらない信念

すべての決着をつけたその後・・・

取り返した召喚システムと報告

バイトをしよう!!

バイトをしよう!! I

バイトをしよう!! II

バイトをしよう!! III

バイトをしよう!! IV

バイトをしよう!! V

バイトをしよう!! VI

ドラえもん&バカテス ??Lost Hero??

食べ過ぎ注意!!

朝の激痛連続

朝の不幸 I

朝の平穏な?日

小さな激震?

面談と心当たり?

面談後のクラスは

夜の・・・

疑問と望まぬ戦い

別れと意地

翌朝と明久の朝

小さな違和感

小さな進歩

1431142714241419141314091406140313981394139113861381

137313671362135913551351

1347134013351330

小さな進歩後

夜の裏山へ散歩

夜の裏山の発見

裏山の探索 II

悲劇の夜

憧れ

もう一つの夢

願いと希望

手がかりを求めて・・・I

記憶を・・・

手がかりを求めて・・・II

手がかりを求めて・・・III

手がかりを求めて・・・IV

手がかりを求めて・・・V

手がかりを求めて・・・VI

迫る魔の手 I

迫る魔の手 II

迫る魔の手 III

迫る魔の手 IV

敗北と涙

情報と議論

昔話と説得

学校と抜き打ち

再会と頼み

手がかりと対面

遙か先へと・・・

提案と作戦

敵の本拠地へ進撃！

未知なる敵

迫る敵の悪意

怒り

友達だから助ける

女同士の闘い

女同士の闘いⅡ

女同士の闘いⅢ

次なる敵・・・

リーダーのお仕置き

待ち受けていた敵は・・・

選手交代

明かされた敵

立ちふさがる敵

望まぬ戦い

叫び

衝突

魂の叫び

フラグ

罠

実験と生死さ迷いかける

正体と復讐

慈悲なき衝突

救出	_____
援軍	_____
敵意と迫る時間	_____
明かされた最後の名	_____
復讐と悪夢	_____
逆鱗	_____
怒り	_____
約束	_____
二人でひとつの名前は……	_____
激突	_____
脅威	_____
一方その頃……	_____
決意	_____
意地と増援	_____
増援と……	_____
反撃開始	_____
終わりと見せかけて……	_____
豹変と悪夢	_____
決死の覚悟	_____
残されたもの	_____
覚悟	_____
異空間での激戦	_____
打開策は……?	_____
二度あることは	_____
けじめ	_____

旧友

反撃と怒り

まさかの覚醒？

誰よりも速く鋭く……

決着

決着 II

決着と正体

君の名は……！

旅の別れ

ひとつの真相

またね

謝罪

帰ってきた日常

帰ってきた日常

さらっと衝撃告白！

さらっと衝撃告白！II

さらっと衝撃告白！III

噂

バカの襲来

久々の学校と御法度おこす

のび太の粛清タイム

ラッキー？

二次被害

布告

宣戦布告後……

188918861883187918761872186918631858185318491845

184218371831182718221818181418091802179817941790

Fクラスの作戦	1892
Eクラス作戦会議	1895
Eクラス開幕!	1900
裏の裏	1904
七夕	1909
反逆	1915
反逆した理由	1918
反逆者の友情と……	1922
健やかに……	1927
策	1932
乗り込み	1935
第395話	1938
EバカとFバカの決着	1942
第397話	1946
決着を……!	1949
第399話	1954
第400話	1957
第401話	1961
最終回 君の名前は……	1964
良い夫婦になろう (特別編)	1969

プロローグ プロローグ

4月：

それは新たな出会いと始まりでもある季節でもある。空は青空で桜が舞い落ちる春に一人の少年が門の前に歩いていった

「おはよう、野比」

「おはようございます！西村先生！」

門の前に立っていた屈強な男は西村宗一。彼はトライアスロンを趣味とし、アマチュアレスリングの心得もある肉体派教師で通称「鉄人」である。西村先生は生活指導室を根城にしており「規律を乱すものには鉄拳制裁」という教育方針から「生活指導の鬼」として生徒から恐れられている

「ん？野比よ、俺に向かって鉄人と言わなかったか？」

「気のせいですよ。僕は口も出してませんよ？」

「それもそうか、すまん。・・・つと忘れるところだった。野比の振り分け試験の結果だ。この紙の中に書かれているのがお前の二年生のクラスだ」

「結果見なくつても分かってますよ」

そういつて渡された封筒の中に紙が入っていてこう書かれていた

野比のび太・・・2年F組

その紙を見てのび太は特に不満そうになく笑っていた

「あははは、やっぱりかー。まあ普通はそうですね」

「すまんな、ルールは変えられないからな。それより野比・・・もう怪我は大丈夫なのか？」

「もう大丈夫ですよ。大丈夫じゃなければ今ここにいませんよ」

元気だとアピールするように腕を回していたのだが、西村先生は少しかだけ申し訳なきように話していた

「それもそうか・・・。事情が事情だけに仕方ないとはいえ・・・遅刻して受けられなかったのは残念だったな」

「仕方ありませんよ。それに学校のルールは絶対ですから」

そういつて動こうとすると、鉄人……もとい西村先生がのび太の肩を両手で掴んだのだ

「野比よ……」

「はい？何ですか？西村先生」

「お前は確かにバカなところもある……」

「え、あれ？なんか西村先生に悪口を言われてる？何だか泣きたいですけど……」

「しかし！お前はお前だけはまともに頑張ってくれ……！苦労かけると思うが!!」

西村先生が必死にのび太に頼んでいるが、頼まれたのび太は、戸惑いながらも……

「えつと……？とりあえずわかりました！頑張ります！」

何でこんなこと言われてるのか分からないのび太だったが、どちらにしても勉強は頑張ろうと思った

「時間とらせてすまん、そろそろFクラスに行くんだな」

「はい！（僕は頑張るからね……約束を守るよ……だから安心してね？ドラえもん……）」

かつての小さな少年は高校生となり、二度目の春を迎えた。これから先に待ち受ける波乱の高校二年生の生活が始まろうとしていたのだ

のび太は新たな出会いを期待して彼は今日も勉学を励むのだった……

人物紹介（ネタバレ注意）

名前：野比 のび太

所属 2―F

外見：言わずとも国民的に知られているドラえもんに出てくるもう一人の主人公だが、変わったのは久保利光がつけている色違いの青眼鏡をつけているぐらいで後は身長が伸びたぐらいだった

得意科目：科学（400点）

苦手科目：英語（50前後）

総合成績：Aクラスのメンバーに入れる実力

召喚獣：西部劇で出てくる帽子をかぶり武器は二丁の拳銃である

この世界の、のび太は源静香とは付き合わず失恋した世界で高校はかつてのメンバーとはバラバラになったのだ。その後は、他のメンバーとは連絡とってないそうだ

そしてドラえもんが未来に帰ってしまい、のび太はドラえもんとの約束を守るために必死に勉強を励んでいた。その努力が報われたのか一科目はAクラスに匹敵する実力が身に付いたのだ

昔と変わらず、昼寝する癖が直ってないが勉強等はしつかりするようになった。運動は並みの程度になったと本人は言っているが、そこは本当かどうかは本人のみしか知らない

時々、昼寝するときには屋上か日当たりのいいところで昼寝するのだ。のび太のお気に入りの昼寝場所を知ってるのはごくわずかである

ヒロイン

三上 美子（みかみ よしこ）

所属 2―E

アニメに出ているキャラでE組のサブリーダー的な存在である。しかし、あまりにもアニメでも原作でも出番少なかったみたいだ。尚、のび太とは何らかの面識があるらしいのだが、のび太自身は覚えてないみたいだ

性格は優しく面倒見がいいが、男には素直になれないのが本人の悩みだそうだ。

学年で可愛い子トップ10に入っている。因みに一位は霧島と姫路、三位は木下秀吉らしい。島田は5位で優子7位で6位が三上だそう。本人達はこの事を知らない

・のび太と吉井明久がお互いに中学の時に知り合いで、のび太は自分よりバカな人初めて見たと言うと明久が君の方がバカでしょ？と反論して一回大喧嘩したが後に親友として仲良くしている。因みにのび太は観察処分ではないのだが、明久は原作通りに観察処となっている

・坂本雄二とのび太は小学校は同じだったがお互いに面識はなかったが噂はお互いに聞いていた。霧島とも知り合いで、主に霧島の暴走に止めようとするのがのび太の役目となっているそうだが、稀に連帯責任でお仕置きされるといいう理不尽にのび太は食らっている

・のび太と姫路は一年の時同じクラスで、島田とは吉井を通じて仲良くなり、たまに分からない日本語をのび太に聞きに行くのだ

試召戦争編

自己紹介

西村先生と別れた僕はFクラスへと向かったのだが、そこで見たものはあまりの酷さに固まったのだ

まず最初に見た第一声は

「廃屋？」

僕の目の前にはボロボロの山小屋のような部屋がある。場所が違うのかな？と思ったが《2―F》って書いたプレートが貼ってあるし、どうやらここがFクラスのようなだ

悩んでも仕方ないからとりあえず教室に入るがその光景もまた固まったのだ

「床は和式・・・これは僕はいいのだけど問題は荒れているのが酷い。しかも机じゃない・・・見たらわかる！卓袱台だ。しかも結構ボロボロで今にも壊れそうなものがちらほら。座布団はかなりくたびれており、座つていても痛くなるだけでしょ？」

誰もいないからなのか自然と愚痴を言いながら、とりあえず後ろの席に座ったのだ。そして時間もあるのを確認したのでまずは皆が来る前に掃除だね・・・

開始して十分・・・

「ふう、畳は荒れていたのは仕方ないから今の僕では厳しいけど、掃除したら少しは綺麗になったかな？」

辺りを見渡すと埃まみれの所は綺麗になり、最低限は綺麗に戻ったのだがいかんせん、限界があるよね・・・

そう考えていたら教室に誰か入ってきたのだ

「一番乗りでは無かったか。ずいぶん早いな。のび太」

「おはよう、雄二」

彼の名は『坂本雄二』僕も最近知ったのだが、彼は昔僕と同じ学校通っていたのだ。まあ、面識なかったけど高校になってから仲良く

なったのだけど、ここにいないもう一人の親友と三人で行動することが多かったのだ

「代表はやっぱり雄二でしょ?」

「当然だ!」

Fクラス代表となると、学年順位は251位。全体で300人なので、その数値は全く褒められたものでは無いがジャストその順位を狙うのは並大抵の技量では無いのだ

「そういえば、お前は試験受けられなかったんだな?寝坊とかじゃないだろ?」

「あははは・・・まあ色々合ったのさ」

雄二はそういうところは鋭いんだけどね

「まあいい、お前はうちの戦力になるからな。それより、後ろのだけはやたら綺麗なものは掃除したのか?」

「うん、ここに入ったとき廃墟かな?って思ったよ。せめて掃除して綺麗にして欲しかった・・・」

「同感だな・・・」

お互いため息つきながら、他の生徒が来るのを待っていたのだ。恐らく彼もこのクラスだろう…嫌!そうに決まってる!僕はそう思いながら席を座ったのだ

教室の席が埋まったのは始業時刻から大体10分後くらいの事だった

「すみません、ちょっと遅れちゃいました♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「・・・雄二、何やってんの?」

そんなやり取りに僕は遅れてきた生徒に声をかけたのだ

「おはよう。明久」

「あれ?やっぱりのび太もいたんだ。雄二もいるぐらいだから」

「よし!明久、覚悟しろ」

「何を覚悟するの!?!」

「冗談だ・・・1割は」

「後の9割は!？」

「つと、そろそろ先生来るから座ろう。明久、安心して冗談だから」

僕がそういうと二人も座ったのだ。やはりこの二人は面白い。ちなみに明久は僕の隣の席に座ったのだ

担任が入ってきて、皆は聞く姿勢になったのだ

「えー、おはようございます。このクラスの担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は汚い黒板に名前を書こうとしたが、チョークが用意されていなかったらしい

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

嫌々、机が卓袱台で椅子が座布団の時点で明らかに不備ですよ。意見言つて変わるならしてほしいけど・・・どうなんだろう？

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです!」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

「聞いた意味は!？」と僕は口にしだそうだったが我慢したのだ。そして自己紹介をしてくださいとなり、廊下側から一人ずつ喋り始めたのだ

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

若干古風なしゃべり方をするこの男子は僕の親友の一人だ。彼は外見：ぱつと見女子にしか見えない。いわゆる男の娘というやつなのだろう。双子の姉がおり、その姉と瓜二つな事も拍車をかけているのだろう

因みに学年で可愛い子ランキング入ってることは本人は知らない

「・・・土屋康太」

趣味は盗聴、特技は盗撮というとんでもない奴である。裏で色々

問題行動を起こしているが、簡単には証拠を残さないので捕まったりした事は無いようだ。君は怪盗カルパン三世か!?!と云ったこともある

「島田美波です。生まれは日本ですがドイツ育ちなので日本語の読み書きはあまりできません。趣味は吉井明久を殴る事です♪」

「誰だ!?!恐ろしい事いったのは!?!」

突然明久が叫ぶと島田は笑顔で吉井の方に振り向き「ハロハロ♪」といった。対する明久は恐縮していたのだが、そういえば、たしか島田さんは僕に日本語の勉強教えてと言われた事あるな。理由は聞かないけど、なんか必死に頼んでいたのも覚えている

たまに間違えるけど、彼女なりに努力しているのは僕は知ってる

「吉井明久です。僕の事は『ダーリン』って読んでください♪」

「「「「「ダーリーイリーーーン!!!」」」」」

「・・・失礼、忘れて下さい」

多分、場を和ませる為の明久なりの小粋なジョークだったのだろうがまさかクラスの大半の男子が乗ってくるとはなあ・・・。このクラス・・・大丈夫なのかな・・・西村先生の言葉の意味わかったよ

さて次は僕の番だけど自己紹介は長すぎたらダメだから普通にしよう

「皆さんはじめましての方もいると思いますが、僕の名前は野比のび太です。一年間宜しくお願いします」

僕の挨拶が終わり、座ろうとすると・・・

ガラガラガラ

「お、遅れて・・・すいません・・・」

「ああ、ちょうど良かった。今自己紹介の最中ですので、お願いします」

「あ、はい! 姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「質問があります!!」

「何ですか?」

「どうしてここにいますか!?!」

一人の生徒が姫路さんに質問していたのたが人によつては失礼な

質問だよと僕は思うけどでも疑問に思うのは仕方ない

何故ならあの姫路さんは定期テストの上位の常連だ。おまけに容姿はかなりのもので、美少女と呼んで問題ない。そういう意味でも目立つ人物だが、確かに彼女にはもうひとつの噂があったな・・・たしか・・・

「えっと・・・試験中に熱を出してしまいました・・・」

ああ・・・そうだった、姫路さんは同じクラスだったから知ってるけど、病弱なのもそこそこ有名だ

『ああそうそう、俺も熱（の問題）が出たせいでこのクラスに・・・』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったなあ』

『妹が事故に遭ったって心配で・・・』

『黙れ一人っ子』

『前の晚彼女が寝かせてくれなくって』

『異端者がいたく！』

『ウソデス！ユルシテ！』

そんな姫路さんのいったあとに、あっちこっち言い訳オンパレードが出ていたのだ。のび太もこれはひどいと呆れていたのだ

「あの、えっと……」

「姫路さん、席は自由だよ。とりあえず座っておいたら？」

「あ、のび太君。ありがとうございます」

姫路さんは逃げるように明久の隣の空いている卓袱台に座り、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す。よほど緊張したのだろう

「あのさ、姫・・・姫路」

明久の台詞にかぶせて声をかける雄二。狙っていたね・・・そしてぎめぎめ泣かないの、明久

「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」

「坂本 雄二だ。体調はもう大丈夫なのか？」

「あ、それは僕も気になる」

試験で倒れた光景を目の前で目の当たりにしていた明久はその話題になったので思わず口を挟む

「よ、吉井君!？」

なぜか明久の顔を見て姫路は必要以上に驚いていた。

「姫路・明久がブサイクですまん」

雄二が全くありがたくない悪意あるフォローをする。というかフォローするつもりなどハナから無いのだろう。だが姫路は慌てて訂正するかのように言ったのだ

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「そ、それって誰ですかっ!?!」

誰だろう？僕も気になって聞いていたら

「確か、久保……」

利光だったかな

ガシャン！

僕は思わず顔面から机へと倒れたのだ。そして明久も涙目になりながら抗議していたのだ

「ほんとうにいつてるの!?!それ!?!」

「安心しろ、半分冗談だ。・・・半分はな」

「え？残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり元気です」

雄二は話題を変えて姫路に質問したのだ。相手されなかつた明久は怒っていた

「ねえ雄二！残りの半分は!?!」

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

「あつ、すいませ……」

明久の声に反応した福原先生が注意しながら叩くと教壇が壊れた
「……替えを持ってきますので、それまで自習してください」

「(そこまで脆いのははや問題だろ!?!)」と言いたくなつたが我慢した。暫くして戻ってきたのだが、先生らが戻るまでの間に雄二と明

久は教室の外でなにか話していたのだ。いったい何を話してるんだろ？

「坂本君、あなたで最後です。自己紹介をお願いします」

「やっとか。さて……」

雄二は自分の席からゆっくり立ち上がり堂々と教卓の前まで進む

「俺がこのFクラスの代表の坂本雄二だ。俺の事は坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

そう？それならば……

「マツスルゴリラ」

「誰がだ!はったおすぞ!」

好きなようにとって言ったのに……ツツコミいれてきたね

「ゴホン、諸君らに訊きたい事がある。Aクラスは一人一人にシステムデスク、パソコン、エアコンにリクライニングシート。更には菓子や飲み物も完備。そして正面にはウン千万するであろうプラズマディスプレイが鎮座しているわけだが……」

雄二は無言でゆっくりと辺りを見回す。そしてゆっくりと口は開いて言ったのだ

「……不満は無いか？」

!!「……大有りじゃあああああああああああああああ
!!!」

!!「……だろ!!これに関しては俺も代表として問題意識を持っている!!そこでだ、我々Fクラスは、Aクラスに対して、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う!!」

Fクラスの下克上が始まろうとしていたのだ

宣戦布告

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとっては現実味のない提案だった

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるのは嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

そんな悲鳴が教室のいたるところから上がる。確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだ。しかし、姫路さんにラブコールしている子誰だろう？度胸あるなーと思うよ

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺たちが勝たせてみせる!!」

しかし坂本は自信満々にそう宣言した

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

否定的な意見が沢山出ているのも頷ける。何せ、この学年では最底辺のクラスなのだから

「いいだろう。それを今から説明してやる」

不適な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす。すると雄二は一人の男を呼んだのだ

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ／＼」

流石だね、必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる土屋。そこまで堂々とやっておいて今更……

姫路が顔を赤らめ、スカートのすそを押さえて遠ざかると、康太は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した

「土屋康太。こいつはあの有名な、寡黙なる性職者(ムツツリーニ)だ」

「……………!! (ブンブン)」

ムツツリーニという言葉聞いて、クラス中が騒ぎだす

「何だと!?あの男が!」

「見ろ!あの堂々とした態度!」

「まさに寡黙なる性職者(ムツツリーニ)……!」

…康太…いや、ムツツリーニというあだ名はその名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられるのだ。時々友人が犯罪に走らないのか心配だ…。いや、盗撮している時点でoutか…

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知っているはずだ」

「えっ?わ、私ですか?」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

雄二の言うとおり、姫路さんはFクラス最大の戦力になるはずだ

「ああ。彼女さえいれば何もいらぬな」

…さつきからラブコールしている人は本当に誰?ある意味凄
いけどさ…

そんな考えをしていたら、雄二は次の戦力になる人の名前を挙げた
のだ

「木下秀吉だっている」

「おお……!」

「ああ。アイツ確か、木下優子の」

僕は彼がどんだけの学力があるのかは知らないけど恐らく盛り上
げるために名前をあげたのだろう

「当然、俺も全力を尽くす」

まあ以前は神童と呼ばれていたからなあ。何せあいつと同等だつ
たからな…。まあそれはおいといて、雄二の頭の回転は正直すごいと
思うけど果たして今はどうなってるのだから?

「それに、吉井明久だっている」

—シーン……—

一気に士気が下がった!!

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね？」

「誰だよ、吉井明久って？」

「聞いたことないぞ？」

あつちこつちで疑問が出ていたのだが、それもそうだろう。しかし明久は別の意味で有名だから

「ホラ！折角上がりかけてた士気に陰りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを一一って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ!!」

「観察処分者ってあの……極限にバカなヤツに付けられるっていう代名詞か？」

誰かがそういうと明久は慌てながら否定していた

「ち、ちがうよ！ちよつとお茶目な生徒につけられる愛称で……」

「いかにもバカの代名詞だ！」

「そこは否定する所だよね雄二!？」

残念ながら僕が否定してあげよう！

「いや、事実バカでしょ？君は」

「のび太に言われたくないよ！このバカ！」

「君に言われたくないよ！少なくとも僕は君より学力は上だよ!？」

そんな漫才の傍ら姫路が恐る恐るのび太に質問したのだ

「あのう……のび太君、観察処分者って、どういうものなんですか？」

「たしか、教師の雑用係だね。特例として物に触れる召喚獣で力仕事をこなすといった具合にね」

「それって、凄く便利ですよね？」

「ううん、残念ながら現実は一方向的に便利なんて事は無いんだ。観察処分者仕様の召喚獣はフィードバックがあつて、召喚獣の疲労の一部は本体に帰ってくるし、攻撃されれば痛覚の一部が体を襲う」

そんな物騒なものに任命されるのはよっぽどの問題児だけであり、

故にバカの代名詞とも呼ばれているわけだ。

「それって、非戦闘員がいるってこと？」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「まあ言い方はあれだけどね？間違いではないよ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね？のび太は然り気無く頷かないで！」

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

「最低辺だと呼ばれているクラスに、こんなにも有能な奴らが集まっているんだ！さあ、勝ちたい奴はペンを取れ！決戦の刻は近い!!俺たちFクラスの真の実力を！上に居る優等生供に見せつけてやろうぜ!!」

「「オオオオオーーーーー!!!」」

「お、おー……」

姫路さん、ノリが分からないなら無理に頑張らなくてもいいんだよ？まあ、いいっか。

「それじゃ明久、Dクラスに宣戦布告してきてくれ。開戦時刻は……今日の午後。昼休みが終わってからだ」

「ちよつと待った……下位クラスの宣戦布告の使者って、エライ目に遭うよね？」

「心配するな大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない、騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

雄二は力強く断言する。ああ、明久は完全に信じてるよ。クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は使者らしく毅然とした態度で教室を出て、Dクラスへと歩いて行った

騙されてるよ？明久……とは言っても代わりに僕がいくかと言うても即答で言えない。うん、この後の行動が分かった……

「帰ってきたら暴れそうだな～：頭痛くなる」

「あのお、のび太君大丈夫ですか？」

「僕は大丈夫だけど・・・はぁ本当に頭痛くなる」

「何だかよくわかりませんがお疲れ様です」

姫路は頭抱えているのび太に労っていたのだ。別の意味で苦労しているみたいだ

勝算

「騙されたあ！」

数分後、ボロボロになった明久が教室に転がり込んできた。

「やはりそう来たか」

「やはりってなんだよ！使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことが予想もできないで代表が務まるか」

「少しは悪びれろよ！」

そんな雄二と明久のやり取りに姫路さんが近づいて心配そうに言ったのだ

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

おお、姫路さんは本当に優しさの塊だよ

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ。島田さんも心配してくれてありがとう」

島田さんも本当に優しい・・・

「そう、良かった……ウチが殴る余裕はまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

島田さん・・・それとどめだよ!?仕方ないから、僕も明久を起こさないとい

「大丈夫？明久」

「うう、雄二よりのび太の方が優しいよ」

そんなのび太と明久のやり取りを見ていた雄二は指示だったので

「さてと、ミーティングしに屋上行くぞ。のび太もついてこい」

「勿論だよ。ほら明久行くよ」

「うう、せめてもう少し休ませてほしかったよ……」

屋上にかかるとき、島田さんがなにか恐ろしい雰囲気纏いながらぶつぶついていたけど何かあったのかな？また明久が地雷踏んだ

? そんなこと考えていると屋上についたのだ

屋上

「じゃ、会議を始めるぞ。明久、宣戦布告はしてきたな?」

坂本がフェンスの前にある段差に腰を下ろしたので、のび太らもそれにない腰を下ろす

「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど?」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね?」

島田がそういうと坂本は頷いていたのだ

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ?」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ? 吉井君ってお昼食べない人なんですか?」

姫路が驚いたように明久に言ったのだ

「いや。一応食べてるよ」

「間違ってるぞ、明久」

「なにが?」

「お前の主食は水と塩だろ?」

雄二の言葉にのび太は頷いていたのだ。それにムキとなったのか反論したのだ

「むっ! 失礼だな! きちんと砂糖だつて食べているさ!」

「いやいや、明久。水と塩と砂糖つて、食べるとは言わないよ……?」

「舐める、が表現としては正解じゃな」

「驚異の生命力……」

そんな明久の言葉にのび太、秀吉、土屋は反論したのだ

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

そんな明久に憐れだと思ったのか姫路さんが恥ずかしそうに言ったのだ

「……あの、良かったら明日は私が弁当作ってきましようか?」

「……」

機能停止になったのだ。見かねたのび太は明久に呼び掛けたのだ

「落ち着け明久。そして現代に帰ってくるんだ」

「本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ・・・」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

坂本の言葉に嬉しそうに吉井は頷いていたのだ。しかしそれをつまんなさそうに言ったのがいた

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったらですが」

「それは楽しみじやのう」

「……（コクコク）」

「……お手並み拝見ね」

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

坂本たちがそういうと姫路も嬉しそうに頷いていたのだ

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き——」

「明久、今はやめとこう？今振られると弁当の話はなくなるよ？」

のび太がそう止めると明久のいった言葉は・・・

「——にしたいと思っていました」

その瞬間・・・男達は固まったのだ。当の本人は言い逃れできたと思ってるのかドヤ顔だった

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ？」

「明久・・・お前はたまに俺の想像を越えた人間になるときがあるな・・・」

「だって・・・お弁当が・・・」

そこまで欲しいのか!?とのび太はあきれていたのだ

「さて、話が逸れたな。試召戦争の話に戻ろう」

「そういえば、確かにそうですね」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え?でも、僕らよりはクラスは上だよ?」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど実際のところは違う。オマエの周りにはいる面子をよく見てみる?」

「えーっと、美少女が二人と馬鹿が二人と、ムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!」

「ええっ!?雄二が美少女に反応するの!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミいれたいんだけど」

「ちなみに明久、美少女二人は誰なの?バカつてのも気になるな」

僕は気になったことを明久に質問したのだが彼はキョトンとしながら答えたのだ

「なにいつてるのさ?のび太はバカに決まってるじゃない?美少女は姫路さんと秀吉に決まってるじゃないって!間接が曲がってはいけない方向に曲がっているっ!」

「吉井、私が美少女に入っていないのに、木下が入ってるってどうゆうことよー!」

「痛いっ、痛いよ島田さん!ギブ!ギブ!」

「美少女だなんて、そんな……」

「わしは男じやと言うとろう……」

「明久だから諦めよう……そして助けられないよ。島田さんも程ほどにね?」

「分かってるわ♪とどめよー!」

「うぎやあああ!!」

数分後明久は元通りに戻り、姫路が坂本に質問したのだ

「今回戦争した理由はなんなのですか？」

「今回の理由は・・・」

「―それはそうと！雄二勝つ勝算はあるの？」

「ふう：仕方ないな。勝つ勝算はあるのか？そんなもん決まってる！

いいか、よく聞けよお前ら・・・。ウチのクラスは――最強だ!!」

不思議だけど、なんの根拠もない言葉なのに雄二の言葉にはその気にさせる『自信』があった。勿論、その言葉に明久も何かを感じたようだ

「面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「：（グツ）」

「が、頑張りますっ」

「良いね！やろう！」

こうして全員で何かを成し遂げてみるのも悪くないかもしれない・・・と思っただけだった

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕らは勝利の為の作戦に耳を傾けた

Dクラス戦

昼休みが終わると、Dクラス戦開戦したのだが作戦としてはこうだ

僕と姫路さんは持ち点が0なので、僕は科学と数学の補充試験受ける。姫路さんは現国から始めるとにしたのだ。僕らが補充試験している間は戦場では秀吉率いる先行部隊で、そこそFクラスの間あたりに明久が部隊長の中堅部隊が配置されている

「科学と数学の補充試験お願いします！」

「私は現国からお願いします！」

「分かりました。制限時間は1時間ですよ」

今回の試験監督に呼んだのは学年主任の高橋先生。全科目の採点の権限を持つ数少ない教師でその採点速度が恐ろしく速い事でも有名だ

「(科学はいつも通り高めに取ることと数学は200点取ればいいかな?)…よし！」

「それでは…始め!!」

待っているよ!明久!皆!必ず助けに行く!

明久side

「吉井!木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ!」

島田さんは一体何が足りないのだろうか?うーん、あっそうか!わかったぞ!

「胸だ!」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

なんか、キレられた。なんでだろう?僕は変なこと言ったつもり無いのだけど

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと!」

確かに明久の言う通りだと思ひ島田も集中したのだが前線部隊の様子を聞き取る

僕らの同じクラスの生徒がひとり負けたそうだ。すると

『さあ来い！この負け犬が！戦死者は補習！』

『て、鉄人!?嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別抗議だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金二郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ！誰か、助けっ——イヤアア——（ボタン、ガチャ）』

…うん、これは不味いね…このままでは不味いな…よし！これしか方法はない！

「島田さん、中堅部隊全員に通達！」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

そんなの決まってるじゃないか…！

僕は自信満々に島田にこういったのだ

「総員退避、と！」

「この意気地無し！」

次の瞬間、島田さんの行動はあまりにも早くって見えなかった。目が見えない！…ってか痛い！！

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

島田は腕を組ながら明久にお説教したのだ。その間も悶え苦しんでいた明久は徐々に視力戻ったのだ

「いい、吉井？ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない？」

!?そうか、僕は間違えていたのだ！ありがとう！島田さん！

「ごめん。僕が間違っていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう！」

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱いかもしれないけれど、これは戦争なんだから多対一で戦えば良いのよ」

島田の言葉に聞き明久は目が覚めたように確りし直したら、伝令係が島田に情報を伝えたのだ

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ！吉井、総員退避で問題ないわね？」

かなり問題ありのような気もするが……気のせいだろう。うん！島田さんの意見に賛成だ！

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「ええ！私たちは精一杯頑張った！」

そう思っていると同じクラスの子が紙を見ながら伝令を伝えたのだ。

内容はなんだろう……？

「《逃げたら殺す》」

「総員突撃!!!」

「そうよ！行くわよ！」

明久と島田はダッシュしながら敵陣地に入ってしまったのだ

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

ああなんだ。秀吉か。やっぱり女子にしか見えない。癒しの天使が目よ前にいる

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうなの？召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「なら補充して！ここはうちと吉井に任せなさい！」

「すまぬ！たのむぞー！二人とも」

そういつて、秀吉はFクラスの方に戻っていったのだ

すると島田はなにかに気づいたのだ

「！吉井！不味いわ、五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点常連よ」

「なら高橋先生呼ぼう！」

「そうね！行こう」

そう話して高橋先生を呼ぼうとすると

「あつ、そこにいるのもしや、Fクラスの美波お姉さま！五十嵐先生、こつちに来て下さい！」

「くっ！ぬかったわ！」

Dクラスの一人に島田が見つかった。このままだと戦闘になる。すると明久の下した判断は

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕たちは先を急ぐよ！」

島田を一瞬で見捨てたのだ

「ちよつ・普通逆じゃない!? 『ここは僕に任せて先を急げ!』 じゃないの?！」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

「お姉さま！逃がしません！」

「くっ、美春！やるしかないってことね……！」

Dクラスの美春とか言う女子はすでに試験召喚獣を呼び出していた。島田もそれに応えるように声を出す

「試獣召喚っ！（サモン）」

呼び声に応じて島田の足元に幾何学的な魔法陣が現れた、島田の召喚獣は軍服にサーベルを持っている相手の方は普通の剣に鎧。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待つてました……」

「ちよつとー！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

……二人にながあつたんだ？と思った明久は気になり質問しようとしたのだ

「ところで島田さん、お姉さまってー」

「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

「このわからずや！」

2人の召喚獣が激しい鏢迫り合いを繰り広げる

「島田さん！向こうの方が点数が高いんだから、真正面からぶつかったら不利だ！」

「そんなこと言われなくてもわかってるけど、細かい動作は出来ないのよっ！」

直後、均衡が崩れ、島田の召喚獣が力負けして得物を落とす

化学

Fクラス 島田美波 53点

VS

Dクラス 清水美春 94点

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

島田の召喚獣の喉元に剣が突き付けられる。腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいだが、首や心臓をやられたら即死——つまり補習室行きだ。これは下手に動けない。

「い、嫌あつ！補習室は嫌あああ」

「補習室？……フフツ」

楽しそうに笑いながら、清水が島田の手を引っ張る。

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いてますからね」

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

「殺しますよ……？美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

無駄死は嫌だ。そう考えた明久が取った行動は……

「島田さん、君のことは忘れない！」

「ああっ！吉井！なんで戦う前から別れの台詞を!？」

明久は撤退しようとしていると・・・島田にとっては救世主が来たかのような声がしたのだ

「全く試験早く終わらしてもらって雄二に許可もらったらここに来たのに・・・どういう状況？明久、島田さん、後で説明してもらおうね？」
「(野比!?) のび太!？」

ここにいるはずのない友人がいたことに驚いた島田と明久だったのだ。対する清水は邪魔物が来たと思ひ敵意剥き出しにしていた

「誰ですか？私とお姉さまの愛の時間を邪魔するものは誰であろうと倒します・・・！」

「なるほどね・・・状況は理解したよ・・・お前の相手は僕がするよ」

「Fクラスが私に勝てると思うのですか!？試獣召喚っ！(サモン)」

「今回は調子悪かったからな・・・でも負ける気がしない！試獣召喚っ！(サモン)」

科学

Fクラス野比 のび太 [点数] 300点

S

Dクラス清水 美春 [点数] 41点

のび太の召喚獣はガンマンの姿で二丁で出てきたのだが、みんなが驚いたのは召喚獣の姿じゃないのだ。出てきた点数に固まったのだ

「「えっ?!」」

「やれやれ、知らなかった？僕は科学が得意だって？」

「くっ！」

やけになつて突撃を仕掛けるも、のび太はあっさりとかわし、美春の召喚獣は撃ち抜かれたのだ

「ガンマン相手に突撃・・・無謀だね。勝負は僕の勝ちだよ」

「戦死者は補習ー!!!」

西村先生が戦死した清水を補習室に連れていったのだが、島田に「このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」という、と

V

ても危険な捨て台詞を残し、補習室へと連行されていった

そんなのを見送っていたら、吉井が島田に声をかけていたのだ。のび太は島田の雰囲気やバイと思い、少し距離とっていたのだが明久は気づいてなかった

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」

「さあ！のび太！戦争はまだまだこれからだよ！」

「吉井いつ！」

「は、はいっ」

「……ウチを見捨てたわね？」

「……記憶にございません」

島田の明久に対する殺気がのび太の方にもヒシヒシと伝わってくる

「……………」

しばしの沈黙。そして……

「死になさい、吉井明久！試獣召ー」

これは不味いと思ったのかのび太が大慌てで止めに行ったのだ

「はいはい！島田さんは落ち着いて！明久は味方だよ！」

「違うわ……違うのよ！野比!!こいつはウチにとっては最大の敵よ!!」

「否定はしないけど、とりあえず島田さんは本部に連れていくよ」

「ありがとう……って否定してくれないの!?!」

「自分の行動に胸を当ててみなよ……とにかく、そこは任せたよ！」

のび太は明久の行動に内心頭を抱えるが島田を本部に連れていくのが優先だと行動を早めたのだ

教室がはいても島田の興奮は収まらなかったのだ。そしてちょうど試験終わった姫路は驚いていたのだ。見かねた坂本がのび太に説明を求めた

「うん？どういう状況だ？説明しろ。のび太」

「ああ、島田さんが怒ってる理由はAのせいだよ。とはいっても、後から来たから分らないけど、多分Aが原因」

「なるほど、島田の説得はのび太に任せて姫路は俺と行動しといて。後でのび太も援護しに出るだろう」

「姫路さんお願いしますね」

「は、はい！」

そういつて姫路は坂本と共に教室を出たのだ。そしてのび太は島田を落ち着かそうとしていた

「さてと、島田さん落ち着いて？まず深呼吸して」

「うるさい！野比！あいつをメタメタニしてやる」

「（一体なにしたのさ…明久）とりあえず、明日お仕置きしたらいいからさ？今は頑張ろう？雄二のことだから明久にきつい食らったと思うよ」

「なんでよ？」

「さっきの放送聞いてなかったみたいだね？結論から言えば嘘の情報流すのに、雄二が考えて流したのさ。それで明久は今頃被害飛んでいるよ。だからお仕置きは明日でね？」

「うん、悪いわね・・・お陰で落ち着いたわ。ふっふふ、吉井・・・明日は覚悟しなさいよ！」

ゆらゆらと赤い炎をまとっていたのは気のせいだと思いたいと遠い目になったのび太

勝負は終盤へと

のび太は島田と共に戦場に出ていき、近衛部隊と相手していた。島田は数学なら得意だと前に出ようとしたが、のび太が止めたのだ

「島田さんは下がつといて？Fクラスの野比のび太が近衛部隊に数学で申し込めます！サモン！」

Fクラス野比 のび太「点数」280点

VS

Dクラス近衛部隊 「平均点数」118点

「何!?!とんでもない実力だぞ!?!」

「行くよ！姫路さん！そっちはまかせた!!」

「は、はい!!気をつけて!」

姫路は平賀に声をかけたのだ

「あれ、Aクラスの姫路さんが何でここに?」

「あの…その…え、Fクラス姫路瑞樹、Dクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます…」

「えっ?あ、はい…」

「え…つと。さ、サモンです」

現代国語

Fクラス姫路瑞樹

〔点数〕 339点

VS

Dクラス平賀源二

〔点数〕 129点

「えっ!?あ、あれ?」

「ぐ、ごめんなさい!!」

姫路が謝りながら平賀を討つたのだ。こうしてFクラスVS Dクラスとの試召戦争は僕らFクラスの勝利で終わった

Dクラス戦 戦後

Dクラス代表 平賀源二 討死

【うおおーっ！】

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳につんざく大音響が校舎内に響き渡る

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで、豊や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるんだがらな」

「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな！握手してくれ！」

F組の生徒たちが坂本を持ち上げていた。そして握手してくれとせがまれていて皆、坂本に握手していた

「雄二！僕も握手してくれ！」

明久が完璧な笑顔、正に笑顔という概念そのもののような表情を顔に貼り付けて爽快に近寄ってくる

そしてその手には……不味い！！

ガシッ

「のび太……どうして……手首を押さえるのかな……？」

「押さえるに……決まってるっ！！」

「ぐあっ！！」

ヒューー サクッ

「………」

「雄二、のび太、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「………」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、手首が曲がるように痛い！」

「今、何をしようとしたの？ねえ？どう考えても危ないでしょ？何をするつもりだったの？」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「のび太、変われ」

「了解」

「うぎやあああ!?!もつと腕が痛いよおおお!?!」

のび太とは入れ違いで今度は雄二が明久を捻りあげる

「おーい。誰かペンチを持ってきてくれー」

「雄二、それはさすがにやり過ぎたけど、お仕置きは止めないよ」

「す、ストップ!僕が悪かった!」

「……チツ」

ああ、やり足りないって顔だね。まあ明久が悪いからフォローしないけど

さてきて、刺さった包丁抜こうか・・・

「つて、これ抜けないよ!!どんだけ研いだの!」

どんだけしても抜けないのでかなり不安ではあるが放置しておく。刃が完全に埋まってるので怪我する事は無いはず・・・多分

「まさか姫路さんがFクラスにいたとはな・・・」

背後の声に振り向くと平賀の姿があつた

「あ、その、さつきはすいません……」

別の方向から姫路も駆け寄って来て平賀に謝罪する

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

確かに、騙し討ちまがいな事をしたが勝負は勝負だ。姫路が謝る必要はない

「ルールに則つてクラスを受け渡そう。ただ、こんな時間だから、作業は明日で良いか?」

「いや、その必要ない」

「えっ?雄二、どういうこと?折角普通の設備を手に入れることができるのに」

その様子だと忘れてるみたいだ。仕方ないな。説明しよう!

「明久、忘れたの?僕らはAクラスが目標でしょ?」

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか?」

「いいんだよ、Dクラスの設備には一切手を出すつもりはないみたいだし」

それでも僕の説明にまだ納得いかない明久に雄二が言ったのだ

「少しは頭を使え、明久。そんなんだから『バカなお兄ちゃん』って中学生に言われるんだよ」

「それか、小学生に言われたりしてね」

「……人違いです」

「まさか言われたことあるの(か)!!?」

明久・君は時々僕よりもすごいと思うよ?そこでの尊敬はしなくてね。雄二が咳払いして続きをいったのだ

「と、とにかくそれでいいか?そちらには何も不利はないだろう?」

「それは俺達にはありがたいが:それでいいのか?」

「もちろん、条件がある」

「何だ?」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるあれを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。しかし、あれはDクラスのものではなくBクラスの物である。平賀は怪訝な顔になりながら聞いていた

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう?」

「これをどうしろと?」

「まあ大した事じゃない。俺が指示を出したらアレを動かなくして欲しいだけだ」

「次のBクラス戦に必要なんでな。設備を壊せば教師に睨まれる可能性はあるが……どうだ?やるか?」

「本当にそれだけで良いのか……?」

「ああ。それだけだ」

「いいだろう。飲もう」

「まあお互いに損はないからね」

「そうだな。お前たちがAクラスに勝てるよう願ってるよ」

「本気で思ってくれてはないね？」

のび太がそういうと平賀は笑いながら言ったのだ

「そりやそうだ。流石に実力差があり過ぎる。ま、社交辞令だな」

「さて諸君、今日はご苦労だった。明日は補充試験があるから、今日はゆっくり休んでくれ。それでは、解散!!!」

こうしてDクラス戦は幕を閉じたのだ

女の子の手料理

その日はのび太は何時もより少し遅く目が覚めたのだ。時計を見たときはまだ遅刻する時間ではないのだが、ただでさえFクラスなのだから、遅刻しては不味いと思つて学校まで走つていき、なんとか遅刻は免れた

「おはよう」

「ごめん、ごめん遅くなつたよ」

「おう、二人共。時間ギリギリだな」

偶々廊下で会つた明久と教室に入ると雄二と挨拶をしたのだ。すると

「吉井！」

「ん？くはっ!!」

「・・・え？明久いつの間か吹っ飛ばされてる?！」

島田さんが明久にバックキック を喰らわせたのだが、早すぎて見えなかった・・・

「し、島田さん・・・痛いよ・・・」

「アンタ昨日ウチを見捨てただけじゃなく器物破損の罪までかぶせたわね・・・!」

般若のごとき形相で明久に迫る島田さんだったのだ：明久、強く生きて：：僕では止めれないよ。濡れ衣したのならなおさら悪いよ：：「おかげで彼女にしたいくないランキングが上がっち やつたじゃない!」

「二(まだ上がる余地があった事が意外だ)」

「いや、僕のせいでは：腰の関節が千切れるように痛ぎやあああああああ!!!」

「ーと、本来は掴みかかっているんだけど」

掴みかかるところか殴つた後じゃないか。いや、蹴つたつといった方が正しいか・・・それに既に掴んでいるよ・・・

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん、さつきから鼻血が止まらないんだ。それに腕も痛いよ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど。監督の先生、船越先生だって」

「あつ、そう言うことね・・・明久頑張れ。原因は昨日の放送だよ」

「まさか・・・いやあああああああああ!!!」

僕は島田さんと明久の会話を聞いて悟ったのだ。明久・・・先生から無事に逃げればいいよね。さてさて、授業の用意をしよう！うん！巻き込まれて迫られるのが怖いからではないからね！そんな事の本人は叫んでいた

そして、昼休みになり回復試験も無事に終わったのだ

「ああ・・・疲れたよ」

「うむ、流石にきつかったぞ。しかし、のび太は化学はそんなに消耗してなかったのう」

「あははは、まあこの回復試験で、化学さらにパワーアップしたけどね。そういえば明久は船越先生相手にお疲れさま。どうやって解決したの？」

のび太は明久にお疲れと言いつつ、どうやって解決したのか？と質問したら

「近所のお兄さんを紹介したよ」

「うまいこと逃げたね・・・(名も知らない近所のお兄さん・・・頑張ってください)」

名も知らないお兄さんに頑張れと心のなかでお祈りをしたのだ。そんな中、雄二が生き生きと昼食へと動いたのだ

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯にするか!!」

「ん？吉井たちも食堂いくの？だったら一緒にいい？」

「そうじゃのう」

「……(こくり)」

「じゃあ僕はソルトウォーターでも・・・」

「あ、あの。皆さん・・・」

恥ずかしそうに話し掛けてきたのは姫路だったのだ。のび太はもしかって・・・と思ってるよ

「お、お昼なんですけど、昨日の約束の・・・」

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ！」

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

姫路は嬉しそうに「良かったあ〜」

「むー…ッ瑞希は意外と積極的なのね…」

ボソボソと言う島田の声をに聞いたのび太は苦笑いしていた

「(もつと素直に明久に接したらいいのに)」

二人が明久の事が好きなのは知っている。しかし、口にも出さないし馬にも蹴られたくないので黙っているのだ

「せっかくのご馳走じゃ。こんな教室ではなく屋上にでも行くかのう」

「それもそうだね。明久たちもいいかな？天気もいいし」

「うん、賛成だよ」

のび太の質問に皆は頷いていたら

「よし！お前らは先に屋上行ってくれ！」

「うん？どうしたの？雄二」

「折角だから全員にお茶を買いにいくのさ。みんなもそれでいいかな？」

「二」「うん！（・・・構わない）！」「三」

「あつなら！ウチも手伝うわ！のび太たちは先いつといて？」

「なら、僕も手伝った方がいいんじゃないかな？」

「いや、屋上はおまえのテリトリーだからお前は先につれていっついでくれ」

「了解」

のび太も手伝おうとしたが雄二がお前は先に上がっついでいってくれとやんわりと断られたのだ

「風が気持ちいいね〜」

屋上に着いたらすぐに姫路さんがシートを敷いてくれたので皆はそこに座る

「あのあまり上手くはないんですが・・・」

そんな謙遜をしながら姫路さんが弁当のふたをあけると　きれいに盛り付けられたおかずとおにぎりがでてきた

「「おおっ!!」」

「凄いよ姫路さん!塩と砂糖以外の物が入ってるよ　!」

「それを今言うの!?!君本当に何を食べてるの!?!」

そんなつつこみをのび太はしていたのだ。確かに・・・普段は何を食べているのかは気になってしまう

「吉井君や皆に栄養をつけてもらおうと思っ張り切っちゃいましたっ」

「姫路はいい嫁さんになりそうじゃのう」

「ん?」

「あれ、どうしたの?のび太?急に唸って・・・」

「なにか忘れてるような・・・」

「雄二達の事?それなら後で来るでしょ?」

「いや、なにか重要なことが・・・うーん」

うーんなんだろう?とのび太は思い出そうと必死になっていたのだ。そんなのび太をほっておいて明久はエビを食べようとしたのだ

「じゃあ、早速このエビフライを・・・」

ヒョイ

「あつ!ずるいぞムツツリーニツ!」

食べ物・・・家庭科・・・!?!不味い!

「!待て!待つんだ!ムツツリーニ!」

パクツ

ゴツ!

ビクンツ・・・ビクンツ・・・

「!?!」

ムツツリーニは正座のまま真後ろに頭をぶつけ、まな板にのせられた鯉みたいに痙攣している・・・

「わわっ!?!土屋君!?!」

姫路に声をかけられるや否や康太は根性で起き上がり、姫路にむけてサムズアップする

「……(グッ!)」

「あつ美味しかったんですね!良かった」

きつと『凄く美味しいぞ』って言いたいんだろうけど足が生まれたての小鹿みたいに震えてるよ?

「皆さんどんどん食べて下さいね!」

「(くっ、間に合わなかったか…ごめん!ムツツリーニ!)」

「(ねえ二人共、さっきのムツツリーニどう思う?)」

「(…どう考えても演技には見えん)」

「(だよねヤバイよね…)」

「(姫路さんは一年の手料理で同じ班の人皆は倒れたよ…そして、記憶は完全に飛んでいた。そう、今の今まで)」

「(…嘘お!?)」

マジだ。そして未だに原因不明だ

「(明久、のび太!お主ら身体は頑丈か?)」

「(正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少なすぎるから…)」

「(多分大丈夫…)」

「(…ならばここはワシに任せてもらおう!)」

「(そんな!危険だよ!)」

「(待つんだ!そんな死に急ぐな!)」

「(大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋でな、ジャガ イモの芽を食べた程度ではビクともせん!)」

必死で説得しているが、秀吉の意思は固いようだ

「(安心せい、ワシの胃袋を信じて…)」

「待たせたな!」

秀吉が見た目に反して男らしいセリフを言おうとし た時、雄二が戻ってきた

「へえ、こりや美味そうじゃないか?…もらうぞ」

「あっ！待って雄二！」

のび太が慌てて止めるも坂本の口は・・・

「ん？」

パクッ

ガッ！

カラカラカラカラ：

雄二が倒れた時に散らばった缶の音がやたらと響く
：
間違いない、本物だ・・・

ランチタイムの惨劇

雄二が倒れた・・・やはり本物のようだ・・・そんな雄二は、地面に倒れながら目のコンタクト取り合っていた

「(貴様ら・・・毒を盛ったな?)」

「(・・・毒じゃないんだ・・・)」

「(・・・姫路さんの実力だ・・・)」

「お待たせ・・・って坂本?!どうしたの?大丈夫!？」

島田さんが来るが事情は見えないため知らないようだ。これは知らないほうがいいのかな?雄二うまいこと誤魔化してね

「ちよ・・・ちよつと足が攣ってな・・・」

「階段をダッシュで駆け上がったからじゃないの?」

「そ、そうじゃな・・・」

「そう?坂本って結構体鍛えられているって感じなんだけど?」

さすがにそれはごまかせないよね。どうしよう?」

「あ、そういえば島田さん。その手についているあたりにさ・・・」

とつさに明久が島田さんに話してきた

「ん?なに?」

「さつきまで虫の死骸があつたよ?」

明久がこういうと島田さんはやばいと思つた顔で立ち上がり手を払う

「ええ!?早く行ってよ!!」

「ごめんごめん。とにかく早く洗ったほうがいいよ?」

「そうね。ちよつと行ってくる!」

そういうと島田さんは屋上から出ていく。多分被害を出さないようにするための明久の嘘だろうけどいいのか?それって自分の首を絞めているだけじゃないかな?でも判断は正しい!

「島田はなかなか食事にありつけないでおるのう」

「明久もつと早く行ってあげたら良かったのに」

「そうだね。これはミスったな」

「二ハツハツハハ!!」

「(明久、今度は君が行け)」

「(無理だよ。絶対死んじゃうよ)」

「(さすがにわしもあれを見ると決意が鈍るのう・・・)」

「(というか後ろの二人はいいの？痙攣したまま動かないよ・・・)」

「(たぶん大丈夫、少しすれば治ると思う・・・多分)」

真つ青にして痙攣しているあたり絶対危険だよ！

「(雄二が行きなよ。姫路さん雄二に食べてもらいたいと思っているはずだよ)」

「(そうかのう。わたしには明久に食べてもらいそうなんじゃが)」

「(そんなことないよ。乙女心をわかってないね!)」

「(俺からすればお前が食べたくないって本心がダダ漏れなんだが?!それに、わかってないのはどちらかというとお前のことだ——)」

雄二が続きを訴えようとしたら明久がとつた行動は・・・

「(ええい!往生際が悪い!!) あっ!姫路さん。あれはなんだ!？」

そういつて明久は天に指指すと姫路さんはその方向に注意が向いた

「(ええ!?!信じた!?!)」

「(おらあ!!)」

のび太は姫路が明久の嘘に信じたことに驚き、明久はその瞬間姫路の弁当を坂本の口に無理やり詰め込んだ

「もがあ!!」

口に入れ瞬間坂本の目が白黒になり、意識が飛びかけているように見える。そして無理やり咀嚼させてのどに流し込もうとしている

「お主、思った以上に鬼畜だな!？」

「(雄二いい!?!)」

秀吉は明久の行動に驚いていて、のび太は雄二の方に向けより、小さい声で生きているか?と呼び掛けていた

明久は雄二に咀嚼させ終わると何もなかったかのように姫路さんに話す。そして姫路さんもさっきの惨劇をみていないため、笑顔でこちらを見る

「はれ?もう食べたのですか?」

「お弁当おいしかったよ。ねえ?」

「うん」

「うむ、大変いい腕じゃな。」

食ってないからとりあえず適当に返事をする。

「雄二なんか「おいしいおいしい」って言つてすごい勢いで」

僕はちらつと雄二の方を見たら力なく首を横にふっていた。

ああ・・・大丈夫じゃないね・・・

「そうですか。うれしいです!!」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二」

「う・・・うう・・・あ、ありがとうな。姫路」

目をうつろにして言うセリフではないとおもうけど、傷つけないためだ!

「あ、そういうえば最近おいしい喫茶店が」

明久が別の話でごまかそうとした瞬間。姫路さんが手を叩いて何かを思い出した。

「あ、そういうえばデザートがあるんです」

「ああ!あれはなん・・・」

明久が同じ手口をしようとしたため、僕はそれを止めた。さすがにもう通用しないだろし、何より嫌な予感しかない。

「(つちよ!のび太!なにすんのさ!?!もう一回雄二に流し込めばすべて解決するんだよ!)」

「(馬鹿言うな!?!これ以上行くと俺でももう持たん!)」

「(これは雄二にしかできないんだ。だからここは任せたよ!)」

「(そんな少年漫画みたいな笑顔で言われても無理なものは無理だ!!)」

「(意気地なし!)」

その一言で坂本の何かが切れた音がした。

「(そこまで言うならお前にやらしてやる・・・!!)」

そういつて坂本は右手を握り、腰を低く構えた

「(なにをするのさ!?!)」

「(ごぶしを貴様のみぞおちに打ち込んだ後存分に詰め込んでくれる

!!」

「(いやあ!殺人鬼!!)」

仕方ないと思っただのか二人の男が重い腰を上げたのだ

「(ワシ(僕)が行こう!!)」

「(無茶だよ!?!死ぬよ!秀吉)」

「(俺のことは率先して犠牲にしたよな!?)」

「(大丈夫じゃ!ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう...)」

のび太も食べようと決めたら雄二が止めていた

「(のび太もよせ!死ぬ気か!?)」

「(耐えられるはずだ!今の僕は!きつとあの料理と比べたら行けるはず!)」

「(正気に戻れええええ!?!そしてあの料理ってなんなんだ!?!お前の過去に何があつたのだあああ!?!)」

そんなやり取りしている間に姫路が不思議そうにのび太達に聞いてきたのだ

「どうかしましたか?」

「あ、いや!なんでもない!」

「あ、もしかして...」

嫌がってるのがバレたか!?

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ!」

デザートはヨーグルトとフルーツのミックス(のように見えるもの)なのだ。確かに箸では食べにくいだろう...いなくなつた今!

姫路さんは見ていない!これを機に食べよう!!

「ごめん...のび太も秀吉もこんなこと任して...」

「気にしないで。過去経験してるから耐えられるはず!」

「いや...行けるのかわからねえが...頑張ってくれ!」

「それじゃ行こう...」

「そうじゃの」

のび太たちは一呼吸置いて...

「いただきます!!」

一気に容器を傾けて口に流し込んだ

うん。ヨーグルトとは思えない強烈な酸味が口いっぱい広がって中に入っているフルーツかどうかわからない物体の甘味のない苦みを生みだs：

「ごばああつ!!」

「げぼううつ!!」

のび太たちは吐血したかのように声を出してその場に倒れ、意識を失った

Bクラス戦開幕前

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

危険な昼食を終え、何とか復活した僕らも含めて、皆でお茶をすす。特にのび太と秀吉は大量にお茶を飲んだのだ。そんな中、島田が坂本に次のことを質問していた

「なんで次の相手はBクラスなの？ どうしてAクラスじゃないの？」

「正直に言おう……」

雄二が神妙な面持ちになる

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない……」

「それじゃ、ウチらの目的はBクラスに変更ってこと？」

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さつきといってることが違うじゃないか」

島田の言葉を継ぐように明久が間に入る。どうやら彼も坂本の言葉に疑問を持っていたようだ

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ。訳を説明する前に……明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるよな？」

「し、失礼な！ もちろん知ってるよ！ 設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

のび太は内心は、どの口で言っているの？ と思いつながら聞いていたのだ

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい！」

「ムツリーニ、ペンチ」

「……(スツ)」

「僕の体を爪切りいらずにする気か!」

明久・・・その答えはないよ・・・あつ、姫路さんがカバーするみたいだ

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけね」

「ああ。島田の言う通り、そのシステムを利用して交渉をする」

「交渉、ですか?」

「なるほど。Bクラスを倒せば、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉するわけだな」

「のび太の言う通りだ。それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。しかし・・・」

「しかしなんだ?秀吉」

雄二は秀吉の言葉の続きを待っていた

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか?こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう?」

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

「じゃあ。まずはBクラス戦に集中ということだよね?雄二?」

「ああ。細かいことはその後の説明してやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけどね」

島田さんも納得して引き下がったのだ。まあ雄二は頭の回転が早いからいくつか作戦は頭にいれてるのだろう

「で、明久」

「ん?」

「今日のテストが終わったらBクラスに行って宣戦布告して来い。時間は明日の正午からだ」

「断る!!」

明久が怖い表情で坂本に詰め寄った

「ええい!!雄二には入った時の疎外感と痛みがわからないから平気で

頼めるんだ！お前が行けバカ雄二!!」

「アホぬかせ。俺が行って何のメリットがある？」

「じゃあ僕が行くと何のメリットがあるのさ。」

「俺が傷つかない。それとおまえの傷つく姿が見られる。一石二鳥だろ？」

「き・・・貴様の血は何色だー!!」

「・・・赤色でしょ？」

「いや!?のび太!?今ボケる要素あった?!」

僕がボケたら明久が珍しくツツコミいれてくれた。だって君たちにふりまわされてることを思えば・・・ね？

そんなやりとしていたら雄二が仕方ないと言う顔して提案したのだ。何をするのだろうか？

「仕方ないな・・・明久！じゃんけんできめるぞ！それなら不満はないな？」

「じゃんけんでなら不満はないよ！」

「しかし、ただのじゃんけんは面白くないよな？・・・心理戦も含めてのじゃんけんをするか」

「いいね！それなら僕は・・・グーを出す！」

「そうかそうか！なら、俺は・・・貴様がグー出さなかったらブチコロス」

!?!それ脅迫だよ!?!明久も生まれたての子羊見たいに震えないで!?!それ心理戦ではないよ！

「いくぞ、じゃんけん・・・」

「うわー!!!」

パー（雄二）

グー（明久）

「決まりだ。行って来い」

「嫌だ!!絶対に嫌だ!!」

「まあまあ落ち着こう?明久はじゃんけん負けたらいくつてルール納得したのでしょ?」

僕がそういうと明久が「うつ・・」と悔しそうにいつていたのだが、雄二が笑いながら明久に聞いていた

「Dクラスの時みたいになるの心配してるのか？それなら大丈夫だ！俺の目を見るよ！嘘ついてるか？」

「うん。嘘の塊しかない」

おお!?すこし、明久が雄二を疑ったぞ!?さあ雄二どうする？

「心配するな！Bクラスは美少年が好きなクラスだぞ」

「それなら、確かに大丈夫だね」

信じた!?やはり、君は騙されやすいよね

「でもお前不細工だからな・・・」

「なっ!?失礼だな！どう見ても365度の美少年じゃないか!」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「・・・同じ意見」

「正しい答えは360度。だけど、明久は、5度かな？」

上から雄二、秀吉、ムツツリー二、そして僕が言うとな明久が涙目になり

「・・・みんな嫌いだ!!!」

「とにかく頼むぞ」

こうして再び午後のテスト漬けが始まったのだ

「・・・言い訳を聞こうか・・・!!」

Bクラスに宣戦布告に行った明久は暴行にあつたのか、千切れかけた袖を手で押さえながら帰ってきたのだ。まあ見事にボロボロにされたね・・・

「予想通りだ」

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

「落ち着け（こう）」

雄二が明久の鳩尾に攻撃して、僕は軽く頭にチョップしたのた

「ぐふあっ！」

雄二が鳩尾を攻撃したのがあまりに効いたのか苦しんでいたのだ。

本当に雄二は明久に手加減しないね・・・いやしてるのか??

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

「うう・・・痛い」

「明久・・・取り敢えず、あと一分で動けるようになってね?」

明久はまだ呻いていたがさすがにほっといてかえるのは・・・ね?

無意味だけどとりあえず言おう・・・アーメン

Bクラス戦開幕

「さてー！野郎ども！総合科目のテストご苦労だった！そして準備はいいか!?」

「「「おおおお!!」」」

雄二の声にFクラスの皆は盛り上がっていたのだ

「いいか!?今回の相手はBクラスだ！やる気は充分か!?」

「「「おおおおおおお!」」」

先よりも声がでかくなってきたなく、さて今回の重要なところは……?

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない!そこで前線部隊の指揮を姫路とのび太にとつてもらう!」

「がっ、頑張りますっ!」

「任されたからにはやるさ!」

「野郎共!きつちり死んで来い!」

「「うおおおー!」」

キーンコーンカーンコーン

何とも絶妙なタイミングでチャイムがなったけど、雄二は狙っていたね

「よし、行ってこい!!!目指すはシステムデスク だ!」

「「サー、イエッサー!」」

今回の作戦はまず敵を教室に押し込むことが目的なので、渡り廊下戦は絶対に負けられない。のび太達は廊下へと駆け出した

「いたぞー！Bクラスだ!」

のび太達は数学、英語Wを武器にBクラスに突っ込む

理由はBクラスは文系が多いのと、数学の長谷川先生は召喚範囲が広いのからだ

「大丈夫?姫路さん」

「は……はい……」

ほんのちよつと走っただけなのに姫路さんは息も絶え絶えだ。だ

けど、代わりに僕が指揮をとろう！

「皆！必ずBクラスを討ち取るんだ！」

「「おう!!」」

しかし、戦力の差がありすぎる！このままでは突破されかねないので、僕が前に入る！

「長谷川先生！Fクラスの野比のび太がBクラスの三人に申し込みます！試獣召喚！」

「俺たちを相手にするだど!?嘗めやがって！」

「「試獣召喚」」

そして、召喚した三人は召喚獣を縦にならびながら声高らかに叫んだのだ

「喰らえ！」

「我らの連携！」

「ジェットストーリー〇ムアタツ〇！」

この攻撃の攻略は知ってるさ！

僕は先頭にいた男の攻撃を回避したあとに先頭にいた踏み台にして、もう一度ジャンプし、真ん中の召喚獣の頭を撃ち抜き、そして、1番後ろの召喚獣の回り込み、背中を打ち込んだ！

そしてとどめに、最初にいた先頭の男が振り向く前に速打ちで頭を撃ち抜いたので

・・・召喚獣だからよかったけどね

「何イイイ!?!」

「我らの連携攻撃が破られた!?!」

「こいつ・・・何てやつだ!?!一瞬で我らの三人を討ち取った!?!」

数学

Fクラス 野比のび太 350点

vs

Bクラス 黒滝 0点

Bクラス 黒山 0点

Bクラス 黒得 0点

昔、よくアニメを見ていたから攻略も知っていたのさ。さあ、声高らかに士気を上げないよ！

「Bクラスの三人を討ち取ったぞ!!このままこの調子で撃ち取るぞおおおお！」

「「「おおおお!!」」」

そんな反対側ではBクラスが慌てていた

「岩下・菊入が戦死したぞ！」

「黒トリオもやられたぞ!？」

「バカなあ!？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

姫路さんも上手くやっているらしい。そんな彼女も掛け声していたのだ

「み、皆さん!この調子で頑張って行きましょう!!」

そんな様子にBクラスは慌てていたのだ

「「「おしゃ!!やるぞおおお！」」」

「さて、姫路さん、明久に秀吉!ここは須川に任せて一旦教室に戻ろう」

「え?何で?」

明久が疑問を口にすると思吉が理由を思い出したのだ

「Bクラスの代表はあの根本じゃたのう」

「根本って…あの卑怯者で有名な根本?」

明久が僕に確認してくる

「うん、何されるかわからんし、雄二が危ないかも知れんからね」

「雄二なら喧嘩吹っ掛けられたら返り討ちしそう・・・」

「そこには否定しないけど、まずは戻ろう!」

明久の言葉には否定しないけど僕達はクラスに戻ることにした

「うわ酷いね・・・」

「ここまでとはのう・・・」

「Bクラス代表根本・・・噂通りだね」

明久達と教室に戻ると、穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムが目飛び込んできた。正直ここまですると思えなかった

「これじゃ補給がままならないね」

「地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな支障はない」

明久と秀吉と話していると、雄二が教室に入ってきた

「雄二…どこに行ってたの?」

今教室に入ってきたんだから壊されたのは、その間だろう

「協定を結びたいと言う申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

「協定?」

「ああ。4時まででに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し」

それだけならこつちにめちやくちや有利だな。姫路さんの体力的に考えたらね

「それ、承諾したの?」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの?」

「姫路以外はな」

「あ、そっか」

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。とにかく消ゴムやペンの手配は任せろ」

「オツケー!」

「大変だ!吉井いい!!」

「どうしたの?須川君」

確か、島田さんも向こうに残っているけど、何だろう?この嫌な予感……

「島田が人質にとられた!!」

「えっ!?・・・どうするの?明久」

「とりあえず状況が見たい。須川君、案内頼める?」

「任せてくれ!こっちだ!」

のび太は雄二の方に振り向き、確認の意味で見ると

「こっちは大丈夫だ。そっちは頼むぞ!」

「了解!明久、行くよ!」

「うん!」

にしても人質ねえ…卑怯ってクラスに伝染すのかな?

「島田さん!」

「よ、吉井!」

明久と島田が呼び合う。あの・・・僕もいるのだけど?そう思うとBクラスの一人が止めたのだ

「そこで生まれ!それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ!」

ただでさえ少ない女子を人質にとって戦死ではなく補習室送りをちらつかせ、こっちの士気を挫く作戦か・・・!

下手に動けば補習室送り。すると明久はどうするのか?と見ていたら

「総員突撃用意いーっ!」

「何で!?!」

島田さんを見捨てる気かー!?!

「待て!?!待ってくれ!吉井!」

敵もまさかそんな指示出すと思わなかったのか慌てていたのだ

「こいつがなぜ捕まったかわかるか!?!」

「・・・馬鹿だからだ!」

「コロスワヨ」

怖っ!?!島田さんが人質の筈なのに黒いオーラが見えるのだけど!?!

「コイツ、お前が怪我したって偽情報流したら、部隊を離れて保健室に

向かったんだよ」

やっぱり、島田さんは明久の為にわざわざ保健室にいったのか……

「島田さん……」

「な、なによ」

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてあんたは鬼か！」

「違うわよ！」

まさかの解釈だ!? 日頃、島田さんをどんなふうに使ってるんだ!? 心配して保健室に行った決まってるじゃない!?

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての!? これでも心配したんだからね！」

「島田さん。それ本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぷいっと顔を背ける島田さん。これで少しは明久も理解して……

「へっ! やつとわかったか。それじゃ、おとなしく」

「総員突撃いっつー!」

「どうしたらそうなる(のよ!)!?」

「あの島田さんは偽物だ! 変装している敵だぞ！」

何をどう考えてそうなった

「おい待ってって! コイツ本当に本物の島田だって!」

ゴメンBクラスの人たち……本気で彼は馬鹿なのだから

「黙れ! 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ!」

英語W

Bクラス 鈴木二郎 33点

吉田卓夫 18点

VS

Fクラス 田中明 65点

須川亮 59点

…死にかけだったのか

「ぎやあああー……！」

「たすけてえ……！」

こうして悪党は滅んだのだ！めでたし、めでたし！さて、島田さんの方にいかないとね

「皆、気をつけろ！変装を解いて襲いかかってくるぞ！」

何せ、このまま明久が生きて帰れるかどうか心配だからだね

「島田さん大丈夫？」

「野比いい……ウチ、本当に吉井を心配したのにいい……」

そんなに ショックだったのか……。明久、君のことは忘れない

からね？フオローは今回できないよ……

「のび太！危ないよ！」

「明久、島田さんは本物だよ？」

「へ？だって……」

すると島田さんはむきになりながら明久に言ったのだ

「ウチは『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「これ本物の島田さんだ!!」

「落ち着こう？島田さん（明久の脳内本当にみたいよ？これで理解するの？）」

「島田さん、僕は雄二の方に戻って大丈夫？」

「……（コクツ）」

僕は早々とここを立ち去った……大惨事になるの目に見えているから。僕と入れ替わりで明久が島田さんの方に言ったのだ

「島田さん、大丈夫だった？」

「……」

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れてるでしょう？」

「……」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」
「……」

「あー、島田さん。実はね」
「……何よ……」

「僕、本物の島田さんだつて最初から気付いていたんだよ？」

次の瞬間、その場は別の意味で戦場となったのだ。その後明久を見
たものはいない……

「死んでないからね!? つて痛い痛い」

ある廊下の会話

「それじゃあ頼むぞ？」

「……」

「約束は守るさ」

「分かったわ……」

一組の男女がそう話していたのだ

波乱はまだまだ続く……

協定

あの後、時刻は16時となり、Bクラス戦は一時休戦となった。そして異形と化していた明久はどういう原理かは知らないが無事に回復していた。すると土屋ことムツツリーニがどこからともなく現れ坂本に耳打ちした

「なに？Cクラスが試召戦争の用意を始めているだと？相手はAクラスか？いや、それはないだろうから。漁夫の利を狙うつもりだな…いやらしい連中め…」

確かにFクラスと戦った後すぐにBクラスとなると消費した点数のまま戦うことになる。弱ったところを攻めるのは闘いにおいての常道手段だろう。

「雄二どうするの？」

「そうだな…Cクラスと協定を結ぶか、Dクラスを攻め込ませるぞと脅せば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

「よし、それじゃ今から行って来るか。秀吉は念のためここに残ってくれ」

「なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見られると万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

そんな感じで秀吉以外の主要メンバーでCクラスに向かうことになった

「あれ？吉井に坂本？どこか行くの？」

廊下に出ると島田さんと須川、近藤に会った

「島田と須川、近藤。ちようど良いところに来た。Cクラスまで付き合ってくれないか？」

「んー、別にいいけど？」

「ああ、俺も大丈夫だ」

「俺もいいぜ」

こうして3人加わった合計7人でCクラスに乗り込むことにした
「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。Cクラスにはまだかなりの人数が残っており、ムツリーニの情報通り漁夫の利を狙って試召戦争の用意を始めているのだろ。しかし、何か引つ掛かるな・・・何でこのタイミングに？

「私だけど、何かようかしら？」

僕たちの前に出てきたのはベリーショート黒髪をした女性、Cクラスの代表の小山さんだった

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・どうしようかしらね、根本君？」

小山は振り返り、教室の奥にいる人たちに声をかけた。するとそこには短く刈りそろえた黒髪と無精ひげをはやした男。おそらく根本が立っていた

「当然却下。だって必要ないだろ？それに酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて・・・試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？先に協定を破ったのはソツチだからな？これはお互い様、だよな！」

根本がそう言って手を挙げると同時にその取り巻きが動き出す。その後ろには先ほどまで戦場にいた長谷川先生の姿があった。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を——」

「させるか！Fクラス須川（近藤）が受けて立つ！試獣召喚（サモン）！」

Bクラスが雄二に攻撃を仕掛ける前に、須川と近藤が俺達の盾となった。

「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスの——」

「無駄だ明久！あいつらは条文の『試召戦争に関する行為』を盾にしらを切るに決まっている！だからここは逃げるぞ！」

「まあそんなとこだね」

雄二がそういうと根本が勝ち誇ったように言ったのだが、なんかム

カつく

「くっ……ただでは済まさないぞ！逃げるぞ！皆！」

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

根本たちはそう言いながら坂本たちを追いかけるようにB・Cクラスに指示した

長谷川先生を呼んだのはさっきの戦争で姫路さんが戦った教科が数学で点数を費した状態だから、弱った主戦力をここでつぶすことで勝算を確実に潰す算段なのだろう

「はあ、はあ、ふう……」

姫路さんが俺達より一足早く息を切らし始めた

「姫路さん大丈夫？」

体が弱い姫路さん全力疾走しているのだ。その負担はかなりのものだ

「あ、あの、さ、先に……行って、ください……」

すると明久が足止めて、向かってくるBの方に向いていたのだ

「雄二！のび太！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！雄二とのび太は姫路さんたちを連れて逃げてくれ!!」

明久はその場に立ち止まり振り向いて雄二に向かって親指を立てた

「よ、吉井君、私の事は、気に、しないで。」

「……わかった。ここはお前に任せる。」

「足止めはしっかりね！」

「……(ピタッ)」

俺も残ろうか？といわんばかりに聞いてたいたが、明久が止めたのだ

「いや、ムツツリーニも逃げてほしい。明日はムツツリーニが戦争の鍵を握るから！それに島田さんが残ってるのだからこれ以上は人員避けられない！」

「……………(グツ)」

ムツリーニは明久に親指を立てて走り去って行った。

「よし、俺達も行くぞ。のび太は姫路を抱えてでもいいから連れて行け！」

「吉井君!!」

「行こう姫路さん！」

あのあと教室に戻り、姫路がのび太達に聞いていた

「心配ないよ。明久は確かに勉強はできないけども」

「あいつは伊達に観察処分じゃないさ。心配するな」

そう、伊達に明久の友達じゃないさ、きつと無事に帰ってくるさ
確かな信頼を置いて、のび太は二人が帰ってくるのを待っていた
暫くして明久と島田さんが戻ってきたのだ

「あー、疲れたー!!」

「よ、吉井君!無事だったんですね!」

教室の戸を開けると姫路さんが明久の所に駆け寄ってきた

「このくらいなんとも…いだあつ!」

明久が姫路さんに話しける直前で島田さんが踵で明久のつま先を
踏んでいたのだ。あれは痛いなー

「ふんっ!」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも…」

「(キツ!)」

「あ。い、いや。美波」

島田さん改め美波は射殺するような眼光で僕を睨んだ。

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事じゃったようじゃな」

「あつそうだ!せっかくだからのび太も私の名前読んでよ?野比って
言いにくいし、同級生だから呼び捨てしていいよ」

「あつ!それでしたら私もです!」

「そう?それなら僕の下の名前で読んでくれる?その代わり島田と姫

路ってよんでいい？」

「はい！（ええ！）」

「さてと！こうなったらC組も敵だ！ただこのままいけばこっちが連戦でしんどいが、作戦はすでに出来上がってる！」

「なら、実行は明日だね」

「そうだな。ただでさえ疲れてるのだからな」

とにかく今は休むことだけ頭いれよう

仕掛け

「昨日いつていた作戦を実行する！」

朝登校したら、雄二がいきなり、そんなことを言ったのだ

「作戦？でもまだ開始時刻ではないよ？」

「明久、Bクラスじゃなく、Cクラスの方にだよ」

「なるほど！でもどうやるの？」

「こいつを秀吉に着て貰おう」

雄二が出したのは・・・女子が着る制服である。何処から手に入れたのか知らないけど雄二もしかってそっちに走りかけてる？

「いや、のび太！俺はそんな癖ない！とにかく秀吉頼みたいがいいか？」

「ワシは構わんぞ」

そういうと秀吉は着替えようとしていた

「そうか！秀吉のお姉さんに変装だよね？」

「そうだ。それでCクラスを仕掛ける」

僕がわかったが、明久は何か考えてるね・・・ムツツリーニもカシヤカシヤとカメラを必死に吹いている

「よし、着替え終わったぞい。ン？みんなどうした？」

クラスの男子（僕と坂本以外）は悔しそうに床を叩いている人やその場で複雑な表情をしている

あえて言おう・・・男の着替えで悔しがるのはどうなの？

「さあな？じゃあCクラスに行くぞ！」

そういつて坂本と秀吉、そして明久がCクラスに向かった。Aクラスを装うことが重要なため、多人数ではいけないからだ

Cクラス前につき、のび太達は遠くから隠れていて見ていたらのだが、秀吉の演技は凄いと聞いているから気になる

「静かになさい！この薄汚い豚ども！」

「な、何よアンタ！」

「話し掛けないで！豚臭いわ！」

「アンタAクラスの木下ね？ちよつと点数良いからっていい気になつてるんじゃないわよ！」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならぬいの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合 いですつて!？」

嫌々、小山さん！一言もFクラスとは言ってないよ？それが君のFクラスの見方なのね？

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今 回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちよつと試召戦争の準備もしているようだし覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！」

そして、優子（女装した秀吉）は満足そうに戻り、Cクラスは：「きいいいい!!Fクラスなんて相手してられないわ！Aクラスの戦闘用意よ!!」

見事に作戦嵌まってくれた！これでBクラス優先できる！

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させる でないぞ！」

廊下に秀吉の声が響く

その後Bクラス戦が開始され、Bクラス前で膠着状 態になつてい

る
雄二が僕達に課した作戦はただ一つ
『敵を教室内に閉じ込めろ』

その作戦に従い、教室前を包囲しているのだが…

「……………っ！（オロオロ）」

姫路の様子がおかしい

「右側出口、押し込んだ！」

「ホウキを使って完全に封鎖しろ！三、四人掛けて もいいから絶対に開けないで!!」

しかし、あの慌てっぷりは気になるが…とにかく今日の前の敵を撃退する！

「「「サモン!!」」」

来るなら来い！返り討ちにしてやる！

結果的には仕掛けてきた連中は壊滅したが、敵はやはり強いのか状況は一変しかけた

「左側出入り口押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

そう聞こえ左側を見てみると少しづつ押し戻されている。Bクラスは文系が多い。ここで防壁を崩されれば一気に突破されてしまう！！

「姫路さん、左側に援護を！」

「あ、そ、そのっ…！」

明久の指示に対して姫路が動くこうとするがすぐに立ち止まってしまい、オロオロとしてる

「明久！そっちに代わりに頼む！」

「了解！」

明久は返事すると共に古典の竹中先生に近づいていき耳元で

「…．．．ヅラ、ずれてますよ（ボソツ）」

「ッ!？」

頭を押さえて周囲を見渡す竹中先生。いざと言う時の為の脅迫ネタの1つらしい。しかしかつらをつけている人は他人から見て、一目でわかるのになぜ本人は気が付かないんだろう？

「少々席をはずします！」

そして竹中先生がその場を離れ古典のフィールドが解除される

「関川先生、物理のフィールドお願いするのじゃ！」

そこで古典から物理へとフィールドが変わった

「古典の消耗が激しいものは回復してくるんじゃないや!!それ以外のものは続けえ！」

これで戦線は確保できたのだ

「姫路さん。どうかしたの？」

明久が姫路のもとに駆け寄ってきた。確かに今日の様子から見て体調に問題があるわけでもないのだが？

「そ、その、何でもありません。」

姫路は大きく首を振ってこたえた。首を振ると同時に長い桃色の髪が左右に広がる。

「そうは見えないよ。もし何かあったら遠慮なくいつて。」

「ほ、本当に何でもありません。」

姫路さんは泣きそうな顔になってこたえた。この顔をして何もな
いとは到底思えない。そう考えているとさらに悪い知らせが届いた
「くそ！そっちに侵入されそうになっている！」

「なら私がいけます！」

そういつて姫路さんはBクラス内の戦線に入ろうとしたが、急に止
まってうつむいてしまった

しかし、なぜ姫路が前線に出ないんだ。僕は姫路がうつむく前に見
た方向に目を向けるとBクラス代表の根本恭二が窓の前で腕を組ん
でほくそ笑んでいた

さらに根本の様子を見てみるとあることに気付いた。根本の手に
封筒があることを・・・

あの封筒の中身が何なのかはわからないが姫路の様子からしてと
ても大事なものが見られたくないものであることはわかる

「姫路さん」

「は、はい・・・？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争は
これで終わりじゃないんだから 体調管理には気を付けてもらわな
いと」

明久が姫路に諭すように話した。おそらく明久も姫路の異変の原
因がわかったみたいだ

「明久・・・」

「ごめん、僕は用があるから行くね。のび太は指揮をお願い！」

そういつて明久はFクラスの教室に向かって走り出した

明久に任せられ暫くは保っていたが・・・

「隊長！このままでは右翼が突破されそうです！」

「残りの部隊、援護に回るんだ！」

そういつて左翼はが立ち、前線を維持し始めた。そして状況が不利になったというところで雄二がこちらに出向いてきた

「雄二！Bクラス行くなら、この場は任せていつてくれ！」

「いや、出来ればお前も来て欲しい。用心に越したことない」

「確かにそうだが・・・」

「残念ながら貴方達はBクラスにいけないわ」

聞きなれない声がして僕らは回りを見たらそこにいたのはBクラスの子かと思つたが違つたのだ

「！誰?!」

「Eクラスの代表、中村よ！」

「Eクラスだと!?まさか！」

「お察しの通り、Bクラスと手を組んでるのよ！」

不味い！根本の奴！ここまで手を組んでいたのは予想外だ！しかしこのままでは時間も関係する！ならば・・・

「雄二！行くんだ！ここは僕がやるよ！」

「だが・・・」

「目的はBクラスを倒すことですよ!?なら、今この場の最善は?!僕が食い止めたらいいのさ！」

「・・・すまん！他のメンバーは俺と共に来い！のび太はこの場で頼むぞ！」

「任せなよ！」

雄二がいくのを見届けると、のび太は目の前にいる三人を見ていた
「と言うわけで申し訳ないけど・・・ここからは僕が相手さ！雄二の首を討ち取りたかつたら・・・僕を倒してから行け！」

「そういうの嫌いじゃないよ？仲間のことを思うのは・・・だけどここは通してもらおうわよ！Eクラスの中村宏美」

「同じく、三上美子！」

「同じく、山田哲夫が！」

「Fクラスの野比のび太に英語を申し込みます！試獣召喚っ（サモン）！・・・」

「受けてたつさ!!試獣召喚っ！（サモン）」

Eクラス三人対野比のび太・・・激突

Bクラス戦 終戦

英語

Fクラス

野比のび太 120点

vs

Eクラス

中村 130点

三上 125点

山田 哲夫 110点

「悪いけど、貴方を倒すわ！」

「・・・勝ったら訳を聞かしてね？」

「勝てたらね！いくわよ！」

負けるわけにいかない！雄二に任された以上はね！それに・・・

「最初から諦めていたら勝てるものも勝てなくなるさ！」

「貴方を倒せば・・・だから邪魔はしないで！」

？今三上さんが気になることをいつていたね？だけど、勝ったら教えてくれる約束はしてくれたんだ！それに・・・彼女・・・三上さんは何かに苦しんでるみたいだ。だったら答えはひとつ！戦って聞くん
だ！

「雄二！」

「明久！既に話は通している！平賀と共に行動しろ！」

「分かった！のび太は?！」

「Eクラスが攻撃仕掛けてきた！のび太が食い止めてくれている！」

「ちよっ!?何でよ!？」

島田は何故このタイミングにEクラスが仕掛けてきたのか納得していないかったのだ

「根本のやろうが、Eクラスと手を組んでいたんだ！」

「そんな!？」

「いや、だが考えるのは後だ！明久は作戦通り頼むぞ！島田も念のためめに！」

「了解!!」

「(本当に頼むぞ！のび太が体張って止めてくれた時間は無駄にできないんだぞ！それに・根本の事だ。恐らくEクラスの誰かに脅迫している可能性もある・頼んだぞ！のび太!)」

今はここにいない親友のために坂本は急いで決着をと思っていたのだ

「よし!!Eクラスの山田哲夫討ち取ったぞおおお！」

「おおお!!」

「くそ・・・って！俺の台詞はこれだけ!?悔しいいいいい」

『戦死者は補習うう!!』

『ぎやああああ!!』

何とか一人は減らせたけど西村先生目の前の山田哲夫と秀吉達が倒してくれたBクラス5人をどうやって運んだのですか?さてと、気にしたらあれだから・山田哲夫はスルーして問題は残っているこの二人だ！Eクラスの代表の中村さんと三上さんだ

英語

Fクラス 野比のび太 70点

vs

Eクラス 中村 80点

三上 60点

山田哲夫 0点

一方Fクラスが攻めていたBクラスを倒したのだ。その際の監視の目がなくなったのを感じたのび太は・・・

「(さつきから不愉快だった監視の目が消えた・・・)三上さんと中村さん、もう監視の目ががないよ?これ以上は戦う理由はないでしょ?」

「悪いけどそれはできない!貴方を倒してFクラスの代表を討ち取らないといけないの!!だから、貴方が戦う理由はなくっても私はある!」

三上が必死で攻めながらのび太に向かって言ったのだ。そこでのび太は気づいたのだ

「……根本に脅されてるね?」

ピクツ!

微かに三上の肩が揺れていたのを見逃さなかったが、中村が必死に反論したのだ

「あんたには関係ないでしょ!?!とつとつとそこをのきなさい!!」

「確かに関係ないかもね……だけどね!困っている人を見捨てるほど僕できないのさ!!」

そういうと、のび太の召喚獣は中村の召喚獣を回避して速打ちの三連打の弾丸打ち込んだのだ

「うそお!?!」

「召喚獣は確かに操作は難しい……だけどね、気持ちと動きをリンクすれば操作は難しくくない!」

中村がまさか自分が討ち取られると、思わなかったのかショックだった

「戦死者は補習ううう!!」

負けがわかると鉄人……もとい西村先生が来たのだ

「ん?のび太?鉄人と言わなかったか?」

「まさか?僕が口も出してませんし、明久じゃないのですから」

「……まあいい」

西村先生はため息しながら、中村さんの方に向かっていったのだ。本当に鋭いよ……

「ねえ……あいつならきつと……あいつに頼んでみたら?」

「うん……ごめんね?」

「良いのよ。親友のためならね」

中村と三上が何かやり取りしているのをのび太は気になったがこの場はまず確認しないといけないのを

「あっ、西村先生」

「なんだ?野比?」

「中村さんはEクラスの代表だけど、三上さんはこのまま補習行きに

なるのですか？」

「うむー・・・いや、代表が討ち取られた以上はこの場の召喚獣は終わりだな。三上は補習行きじゃないぞ」

「わかりました」

そういうと西村先生は中村さんをつれて補習室につれていったのだ

「さてと・・・三上さん？」

「・・・何？」

「教えて欲しい・・・根本に何を脅されてるのか・・・君から見たら赤の他人だと思うけど・・・困ってる君をほっておけないんだ」

「・・・他の人には言わないでね？」

三上は降参したかのように手をあげて泣きそうな顔になりながら説明したのだ

「少し前にバイトしていたの。欲しい服があつてね・・・それが根本にバレて従わないとばらすと言われたの」

「(多分他にも理由はあると思うけど、ここはバイトが禁止だったもんね・・・)なるほど、なら根本を倒してその写真を奪い取れば解決かな??」

「無理よ?相手はBクラス。貴方たちでは倒せないわ」

「心配しないで?僕らは必ず勝つよ・・・確かに他のクラスから見たら最底辺・・・だけど信頼できる仲間がいるのさ!だからここで待つといてくれない?」

「・・・分かったわ。貴方の言葉は信用してみるわ。少なくともよく考えたらあの根本が隠してくれると思えないもの」

「それじゃあ行くね!」

そう言うとのび太は雄二のいるところへ走っていったのだ

「・・・お願いね・・・のび太君」

いなくなった彼の下の名前を三上は呟いていたのだ。彼女は一体のび太の事を知ってるのか?それは今はわからないのだ

のび太は明久のいるところへ走りながらきょうしつにはいったのだ

「明久！」

「のび太！無事だったんだね？」

「そんなことよりも、ここに近づこうとしていたBクラスの敵は散らしたよ！思う存分やって！」

「OK！サモン!!」

「美波たちも召喚しといて！僕は既に召喚してるから！」

「OK！サモン!!」

頼むぞ！明久！あの根本を潰すのに協力するよ!!

一方Bクラスは・・・

「お前らしい加減あきらめろよな。教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないっての」

「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギブアップか？」

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな。」

ドンドン

「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ。」

「けっ！お前は相変わらず口だけは達者だな負け組み代表様よお。」

「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな。」

ドンドン

「おい？……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやってい
るのか？」

「さあな。人望の無いお前への嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ
！」

「……態勢を立て直す！いったん下がるぞ！」

「どうした？散々ふかしておいて逃げるのか？」

「だああーっしやあーっし！」

何かか叫ぶ声がすると共に・・・

ドゴオツ

もの凄い音と共にBクラスとDクラスとの間の壁がぶち破られた

「ンなツ!？」

歯を食いしばり、涙をうかべ、手から血を流している明久。不敵の笑いを浮かべている島田とのび太にあきれ果てている遠藤先生

「くたばれ根本恭二いっつ!」

「壁をぶっ壊すとかどういう神経してんだ!？」

明久に島田それにのび太は壊した壁を通りBクラスへと入っていった。

「遠藤先生、Fクラス島田美波が——」

「Bクラス山本が受けます!試験召喚獣召喚!」

「くっ!近衛部隊か!」

「は、ははっ!驚かせやがって!残念だったな!お前らの奇襲は失敗だ!」

根本までの距離は約20m・・・

明久の周りには近衛部隊。しかし、ここまでは想定内だ

「確かに僕らの奇襲は失敗したよ?僕らはね?」

「あ?何をいってるんだ?」

さて、話が変わるが教科の特性の説明しよう

各教科の点数は担当教師によってテスト結果にも特徴が現れるらしい。例えば、数学の木内先生は採点するスピードが早い。例えば、世界史の田中先生は点数のつけ方が甘い

例えば、今明久たちと一緒にいる英語の遠藤先生は、多少のことは寛容で見逃してくれるなど(明久談)

では、保健体育は?

保健体育は採点は早くも遅くもないし、召喚可能範囲が広くも狭く

もない

保健体育という教科の特性。それは、教科担当が体育教師であるが為の――

ダン、ダンツ！

出入り口を人で埋め尽くされ四月とは思えないほど熱気がこもった教室。そこに突如現れた生徒と教師、二人分の着地音が響き渡る。エアコンが停止したので涼を得る為に開けられた窓。そこから屋上よりロープを使って二人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った

そう。保健体育の特性。それは、教科担当が体育教師であるが為の――並外れた行動力！

「……Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムツリーニと保健体育の大西先生だ

「ぎ、キサマは！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育で勝負を申し込む。」

「ムツツリーニー！」

根本が叫び声を上げる

「これで王手だ・・・お前の負けだ！根本！行け！ムツツリーニ！」

「……試獣召喚（サモン）」

保健体育

Fクラス

土屋康太 441点

V S

Bクラス

根本恭二 203点

ムツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。今ここに、Bクラス戦は終了した。

「敗因はお前の慢心と・・・汚い手しか使えないのが敗因だ・・・」
のび太はそう締め括ったのだ

Bクラス 終戦交渉

「随分と思い切った行動じゃったのう」

「うう・・・痛いよう痛いよう・・・」

今は無事終戦という形となり、明久はとりあえず赤くはれ上がった右手の治療を受けている。いくら何割程度のフィードバックでも素手で鉄筋コンクリートを砕いたのだから素人にその痛みは計り知れない

「なんとも・・・お主らしい作戦じゃったな」

「でしょ？もつと褒めてー！」

明久は目を輝かせて秀吉の顔を見た

「後先考えず自分を追い詰める男気あふれる素晴らしい作戦じゃな」

「・・・遠まわしに馬鹿って言ってるじゃない？」

「明久がバカなのは今さらでしょ？」

「だから君に言われたくないよー！」

「いや、何回も言うけど、僕は君にバカ扱いされるのは心外だよ!!なんだったら苦手な科目で決着つけようよー！」

「望むところだ！絶対に勝ってやる！」

そう二人で火花蹴散らしていたら、雄二が根本の方について話していたのだ

「さてと、それじゃ嬉し恥ずかしの戦後対談といくか？な、負け組代表？」

そういつて雄二は悪い笑みを浮かべながら根本のほうに顔を向けた。当の本人は正座で床に座り込んでおり、さっきまでの強気が嘘のようだ

「本来なら設備を明け渡してもらいお前らに素敵な卓袱台を プレゼントするところだが特別に免除してやらんでもない」

雄二がそう言いだすとBクラスとFクラスのメンバーはざわつき始めた

「落ち着け。みんな。前にも言ったが俺たちの最終目標はAクラスだ

「ここがゴールじゃない」

「うむ。そうじゃな」

雄二たちのこともあり、Fクラスのざわめきは落ち着き始めた

「・・・条件はなんだ。」

「条件？それはお前だよ。負け組代表」

「お、俺だと？」

「ああ、お前らには散々好き勝手やってもらったし 正直去年から目障りだったんだよな」

「・・・」

雄二の言葉に反論しない根本。やはり噂は本当な部分もあったのだろう・・・それに三上さんはこいつに脅されていたのだしもはや事実しかない

「そこでお前らBクラスに特別チャンスだ！Aクラスに試召戦争の準備ができていると宣言して来い！そうすれば今回の設備の件は見逃してやる!!ただし宣戦布告ではなく戦争の意志と準備があるだけ伝えるんだ！」

「・・・それだけでいいのか？」

「ああ、Bクラス代表がこの格好でさっきの言ったとおりになってくれたら見逃そう」

そういつて雄二は紙袋からさつきまで秀吉が着ていたこの学校の女子制服を取り出した

「なんだと?!?!」

今日までさんざん煮え湯を飲まされるは下劣な手段は用いるこいつに対しては、慈悲というものは微塵もない。むしろそれじゃ生ぬるい気がするが、これならもしかしたら脅されてるのが中から取り出せる！

「ばっ馬鹿なことを言うな!!この俺がそんなふざけた事を・・・ッ！」

「二「Bクラス全員で必ず実行しよう!」二」

「任せて必ずやらせるから!」

「それだけで教室を守れるならやらなくては無いな!!」

根本の奴がどれだけ人望ないのかこの態度でわかる・・・やはり、あれだけの事をしたんだから、納得だけどね

「んじや。決定だなそれじゃあ! さっそく誰得な吐き気がするサービスタイムと行くか!」

「頼むよ! Bクラスの皆さん!」

「二「サー! イエツサ!」二」

Bクラスの人たちはノリがいいね! さあ! お仕置きタイム!

「よ、寄るな! 変態ぐふうっ!」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう・・・」

躊躇なく代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。目の前で突然行われたため、さすがの雄二もこの反応に驚いている。でも、これはこれだけ奴がBクラスに嫌われているかがうかがえる

「さて、着付けに入るか。明久、任せたぞ!」

「了解!」

そう言う明久は女子の制服を根本にあてがっている

「私がやってあげる」

Bクラスの女子が提案する

「悪いね。それじゃ折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理だわ。だって、土台が腐ってるから」

明久は苦笑いをしながら根本が着ていた制服を持って、教室を飛び出していくついでに僕も明久の後についていこう

「明久!」

「のび太? どうしたの?」

「ついでに根本の服の中に探しておきたいのあるから手伝って?」

「いいよ! とは言うても、あるかな?」

うーん、と考えていたらフツとしたところに落ちたのをみたのでちらっと見たら、笑顔で接客をしている三上さんが写っていた。おまけに可愛いな・・・と思いつつも他に驚かしているネタはないのか確認したら髪留めがでてきたのだ。恐らくこれも三上さんのだろう

「明久も目的のはあった?」

「うん!じゃあ根本くんの服は教室においとこう?」

「流石にこれ以上は・・・ね?そろそろいった方がいいよ?」

「ありがとう!それじゃ僕は先に行ってくるね!」

そういつて明久は姫路がいるであろうFクラスに向かって走り出した。さて僕も三上さんのところにいつて写真と恐らくこの髪留めも渡さないと

その後、根本は女子の制服姿という大変不名誉な格好で宣戦布告の意図を伝えた後、撮影会を開いた。誰もほしがらないものだが根本の心の傷をえぐりつけるにはちょうどいい機会だろう

明久 side

大体のメンバーが帰宅した後、帰る準備をしていると、姫路さんが教室に入ってきた

「あ、姫路さん」

「・・・」

「え?どうしたの?そんな顔して!」

今、姫路さんの様子は目がうるんでおり、泣き顔になっている。

これはこれでどこか艶めかしく感じてしまうとは僕はなんてひどい人間なんだろうって思えちゃう

「・・・吉井君」

「は、はい!!」

すると急に姫路さんが僕に抱き付いてきた。そして僕の体に柔らかい感触が・・・

「え・・・ええ!?!ひ、姫路さん。いったいどうしたの?」

「あ、ありがとうございます・・・!わ、私、ずっと、どうしていいか分からなくなつて・・・」

「と、とにかく落ち着いて!なんで泣いているのか教えて!」

そういいながら僕は姫路さんから体を離す

「あ、あの・・・手紙のことで吉井君にお礼が言いたくて・・・ありがとうございます」

「ございます私のために…」

ああ、そのことか。あの根本のことだ。手紙の中身だけ破いたとかそんなことがあって泣いているのかと思ってしまった。もし、そんなことをしたのなら次会った時にはこれ以上にない苦痛を与えてやったけどね!! うん! 絶対にしていた!

「それと…吉井君。今日はありがとうございました!!」
「へ?」

「坂本君から聞きました。この戦争は私のためにしてくれたって」

「あ、いやそんなことは…別に」

雄二のやつ。余計なことを。そんなこと姫路さんに行っちゃうとまるで好かれないがためにこんな馬鹿な真似したように見えちゃうじゃないか! … 実際好かれないけどさ…
「すぐくうれしかったです」

何だろうこの空気。ものすごい甘い雰囲気を感じる。 僕の気持ちがこのままだと制御できない。何か変えないと

「あ、あの…手紙、うまくいくといいね?」

「あ…。。はいっ! 頑張りますっ!」

「そ…それじゃ僕は帰るね。また明日。」

こうしてぼくは逃げるように帰ったけど、この時なんで僕は逃げたんだろう。帰り道で僕は少し後悔した

因みにのび太は屋上から明久が外に出ていくのを見ていたのだ

「どうやら、無事に終わったみたいだね? さてと、三上さんのところに行かないと」

「その心配はないわ…野比くん」

「あれ? 三上さん? よくここが分かったね?」

「偶々よ? それよりも驚いたわ… 貴方達がBクラスを倒したのは」
「まあね…と忘れるところだった! はい! これ三上の写真でしょ? 他に証拠はないか調べたらなかったから心配はないよ」

「! ありがとう…」

「あ! 後…」

「？」

「これって三上さんの？根本の服からあったのだけど？」

「!!ありがとう・・・!!本当にありがとう!!それは私にとっては大切な物なの・・・!良かった・・・!本当に良かった・・・!」

涙流しながら大事そうに胸を抱え込んだのだ。のび太はそれが大事なものだとわかり、取り返せて良かったと思ったのだ

「ぐすつ・・・貴方達がAクラスと戦って勝てばいいわね・・・応援してるわ!」

「うん!」

「あつ!そうだわ!野比くん・・・いえ、下の名前の、のび太君って読んでいいかしら?後、もしよかったら連絡交換しない?」

「僕は全然いいよ」

そう言うと、二人は連絡を交換したのだ。三上は嬉しそうに笑いながら帰ろうとしていたのだ

「じゃあ!またね!!のび太くん!!!」

そういつて走って帰ったのだ

「そういえば・・・三上さんが僕の事をのび太っていつたとき・・・何で知っている感じで呼んでいたのだろうか?まっいいか」

頭の中に感じた疑問だったが、さっと忘れたのだ

交渉

点数補給のテストを終えた二日目の朝

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのとだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ？らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
「確かに、ここまでいくまで過酷だったね……」

「ああ、そうだな。だが！ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝りたい！勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を……教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃねえんだーっ！」

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている!!」

前の昼食を食べた時のメンバー以外はかなり驚いたらしく、教室にざわめきが広がった

「どういうことだ？」

「誰と誰が一騎打ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

確かにはじめに聞いたなら誰でもそうなるかな？でも今から説明してくれるはずだ

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二が机をバンバンと叩いて皆を静まらせたのだ
「やるのは当然、俺と翔子だ」

「馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ!!」

「次は耳だ」

明久に向かってカッターが飛んだ

「まあ、明久の言うとおりに翔子は強い。まともにもやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「いや？だつたら明久にカッターナイフ投げないでよ？」

僕は雄二にそういったがスルーされたのだ。あれ？何でスルーするの??

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろう？まともにもやりあえば俺達に勝ち目はなかった。だから今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない！」

雄二の無理なことに思える話を否定するヤツはもうこのクラスには居ない

「俺を信じて任せてくれ!!過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる!!」

『おおおーっ!!』

確認するまでもない。僕を含めた全員が雄二を信じている

「さて、具体的なやり方だが・・・一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりなんじゃ??」

「日本史だ！」

日本史が、Aクラスの代表が苦手な科目なのか？

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする！」

「でも同点だつたら、きつと延長戦だよ？そうなつたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりにじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか？」

「??それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

確かに明久の言う通りだ・・・それで勝算あるのかな?と思つたら雄二が否定したのだ

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「雄二もつたいぶらずにそろそろタネ明かしをしてよ?」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

僕がそういうと雄二が謝罪していた。そして、かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出ればアイツは確実に間違えると知っているからだ。その問題は——大化の改新!!」

「大化の改新?誰が何をしたのか説明しろ、とか?そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな?」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

「ああ!わかった!何年に起きたかだよね?」

「おつ。ビンゴだのび太。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「大化の改新は645年、こんな問題なんか明久でも間違わないよね??」

「・・・うん」

「・・・目をそらさないで?明久」

まさか・・・これも間違えるのだとしたら、本当に勉強しよう?

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

「あの・・・坂本君」

「ん?どうしたんだ?姫路」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか?」

「ああ。俺はアイツと幼なじみだ」

え?確か、雄二と僕は同じ小学校だったけど、霧島さんもいたのかな?・・・よく考えたら雄二が同じ小学校だと知ったのは最近だから僕が知らないのも当然か

僕がそんなことを考えていると・・・

「総員、狙ええつ！」

「なっ!?!なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!?!」

「黙れ、男の敵! Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺がいつたい何をしたらっと言うのだ!?!」

「明久達何してるのさ!?!」

「遺言はそれだけか!?!…待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「この無駄な一体感恐ろしいよ!?!本当に明久も何をしてルのさ!?!」

そう突っ込み入れていたらは姫路が明久に質問していたのだ

「あの…吉井君? 吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「え? そりゃ、まあ。美人だし」

「……」

「え?なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの!?!それと美波、どうして君は教卓なんて危険なものを投げつけようとしているの!?!」

「地雷踏んだかのような気がするね…島田も姫路も落ち着こう?」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

僕と秀吉がさすがに不味いと思ひみんなを宥めたのだ

「む。秀吉は雄二が憎くないの?のび太も」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ? 男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

そういえば、霧島翔子は男からの告白をかわしまくっており、同性愛主義者ではないか? という噂が流れてるっていつてたね…本当なのな?

「とにかくだ! 俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

だが、今回はそれが仇になるって訳か…だけど、なんだろう? この不安…まあ雄二を信じよう!

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は——」
『システムデスクだ!』

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表である雄二を筆頭に僕や明久、秀吉、ムツリーニ、姫路、島田、というFクラス首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた

「何が狙いなの?」

現在、僕達の交渉の席に立っているのが秀吉の姉である木下優子。確かに噂通り、秀吉と瓜二つな容姿、体格、声までも一緒ときたもんだ。確かにこれだとこの前のCクラスの連中も気づかないわけだけど・・・なにも起こってないよね?

「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

まあ木下さんが警戒するのも無理は無い。底辺に位置するFクラスが学年トップの霧島さんに一騎打ちで挑む事自体が不自然なのだから当然何か策があると考えるだろう

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事ができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざ リスクを犯す必要もないかな?」

「賢明だな。ところでCクラスの連中との試召戦争はどうだった?」

「時間は取られたけど、それだけだったよ?何の問題もなしだったわ」

木下優子さんに扮した秀吉の挑発に乗り昨日Aクラスに乗り込んだCクラスはぼこぼこにやられたみたいだ・・・

「Bクラスとはやりあう気があるか?」

「Bクラスって・・・昨日来ていた『あの』・・・」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまださかれていないようだが、さして。どうなることやらう?」

「でも、BクラスはFクラスと戦争して負けたのだから試召戦争はできなはずよね」

「知っているだろ？事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』って事になっていることを。だから規約にはなんの問題も無い」

試召戦争の決まりごとの一つ

―準備期間―

戦争に負けたクラスは準備期間を経ない限り戦争を申し込む事ができないのである。これは負けたら即再戦になるといった戦争の泥沼化を防ぐための措置だそう。そしてこれは設備を入れ替えなかつたからこそできる方法らしい。設備を入れ替えるということがいわば勝者と敗者を決定づけるシステムなら入れ替えなければ決着はついていないということである！

それを聞いて

「……それって脅迫？」

「人間が悪い。ただのお願いだよ。」

なんだか雄二が悪役に見えるけど今は気にして火いけな。

「うーん……わかつたよ。何を企んでいるか知らないけど、

代表が負けるなんてありえないからね、その提案受けるわ」

「え、いいの？」

明久は驚いていたが、木下さんは疲れた顔で言ったのだ

「それにあんな格好した代表のいるクラスと 戦争なんて嫌だもん……」

「ああ……」

そういえばあの時、根本が宣戦布告させに行つたときは女子の制服だったよね。そりゃあんな気持ち悪いもの見られたら関わりたくないのも頷ける

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、お互いに5人ずつ選んで、一騎討ち5回で3回勝つた方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ？」

「う……」

当然とすべきか、しっかりと警戒している。やはり姫路が出てくる可能性を考えているのだろうか

「なるほど。姫路が出るってことを警戒しているのか？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないしね」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよそれにこれは競争じゃなくて戦争だからね？」

その通りだ。負ければ失う。なら相手の勝ちの可能性はできるだけ減らすのは当然だ

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「ホント？嬉しいな♪」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあつてもいいはずだが？」

「え？うーん……」

またしても悩み始める木下さん。なんせクラスを代表しての交渉だ。この会話で仲間全員の立場が変わる可能性もある。慎重になりすぎるのが普通だろう

「……受けてもいい」

優子の後ろからAクラス代表の霧島翔子があらわれた。

「あれ？代表いいの？」

「……その代わり条件がある」

「条件ですか？」

「……うん」

そういつて霧島さんは一度雄二を見た後に姫路をまじまじと見て坂本に言い放った

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「……(カチャカチャ)」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！」

「負ける気満々で準備しないで!? 明久もまだむって負ける気満々じゃない!？」

「じゃ、こうしよう？勝負内容は5つの内3つをそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて？」

さすがに全ては駄目だったが、木下さんからの妥協案が得られたんだから結果オーライ！

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「明久、選択権をもらえたんだ。これはこれで悪くない提案だよ？向こうなりに譲歩してくれたんだから」

「でも・・・」

「のび太の言うとおりで。心配すんな。絶対に姫路には迷惑をかけない」

「・・・勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「・・・わかった」

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。クラスの皆にも報告しないといけないから」

交渉を終了し、Aクラスを後にする。試召戦争の終結はすでにそこまで迫っていた

Aクラス開幕戦

「両クラスとも、準備は宜しいですか？」

今回の立会いの教師は高橋先生だ。お互いに指定する科目で戦う事になるので、全科目の承認権限を持つ高橋先生なのはいいと思う

「問題ない」

「……いつでも行けます」

「それでは、第1回戦を始めます。両クラスの1人目は前に出てきて下さい」

「秀吉！頼むぞ！」

「うむ、全力を尽くすのじゃ!!」

「こちらからは秀吉がいくことに。で、相手は……」

「それじゃ、私が行くわ」

「それでは、科目を指定して……すみません、ちよつとだけ時間を取らせて下さい」……? 良いですよ」

「秀吉。聞きたいことがあるのだけど?」

「なんじゃ? 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる?」

「はて誰じゃ?」

ん? Cクラスの小山さんって、Bクラス戦の時秀吉が変装で仕掛けた時に……あ……これは、まずいような気が……

「じゃいいわ。その代わり、ちよつとこつちに来てくれる?」

「うん? ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上?」

「いいから、こつちに来てくれる?」

秀吉は手を掴まれ、グイグイと引っ張られて、廊下につれていかれた

そして、扉がピシッと閉まった

『姉上、勝負は……ん? どうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなあ?』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して……』

あ、姉上っ！ちがつ・・・その関節はそっちには曲がらな・・・ぎやあああつ?!」

秀吉のから笑いが聞こえた次には断末魔がとどろく。ああ、秀吉・・・良い奴だった。そして、ガラガラガラっと、扉を開けて秀吉のお姉さんが戻ってくる。にこやか笑ってるその顔は返り血があつたのだがそこは触れてはいけないと思つたのか皆はなにも言わなかつたのだ

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。大事な勝負なのにどうしたんだらうね？」

笑顔の裏には真つ黒なオーラを感じる。そして、僕の第六感が危険信号をさつきから鳴らし始めている。今の彼女は機嫌が悪い!!つと本能的に感じたのだ

「木下秀吉君が退場しましたので、Fクラスは交代要員を出してください」

「それなら、僕がいくよ！いいよね？雄二」

「ええ!?!のび太がいくの?!」

「いや?どのみちいくしかないでしょ?」

「まあそうだな・・・のび太頼むぞ」

「了解!」

僕は前にいくと高橋先生が科目はどうするのか聞いてきたが、当然・・・

「今は使いたくないので、木下さんがどうぞ」

「そう?なら科目は数学で!あとさ、木下って秀吉もいるから優子でいいわ」

「分かった」

僕がそう返事すると高橋先生が機械を操作したのだ。それを見た優子さんは目の色を変えたのだ

「ならいくわよ!!試獣召喚(サモン)!!」

木下さん・・・いや、優子さんは召喚獣を出す

優子さんの召喚獣は武器は槍、防具は鎧だ

「相手にとって不足なし・・・!試獣召喚(サモン)!!」

僕はいつものように召喚獣を呼び出すだけだ・・・遠距離が強いか槍を使う優子さんが強いのか？だけど数学・・・負けるわけにはいかな
い！

数学

Aクラス

木下優子 376点

VS

Fクラス

野比のび太 340点

「あら？Fクラスなのに意外と高いのね？驚いたわ」

「数学は化学の次に得意なのでね・・・点数はそちらが上だけど負けな
いよー！」

「そう・・・だけど悪いけど勝つのは私よ！」

そういつてランスをのび太の召喚獣の方に突撃していたが、のび太
は冷静に・・・

銃を連発していたのだ

「くっ！私より点数が低くても攻撃力はあるわね！」

「それはどうも！（不味いな・・・近づかせないように攻撃しているけど
接近されたらきついな）」

しかし、のび太の淡い希望は打ち砕かれたのだ

「はあー！」

「!?くそー！」

必死で攻撃しながら避けるも双方は削れる一方だ

数学

Aクラス

木下優子 130点

VS

Fクラス

野比のび太 120点

「はあはあ・・・全く！ここまで手こずるなんて!!（嘗めていたわ！こ
こまで削られると思わなかったわ!!もし、これが化学とか物理なら今

頃私は……ってまだ勝負は終わってないわ!!」

予想外の善戦に優子は苛立っていたのと同時に開始前に言われた科学得意とか聞いたので、これがもし科学ならどうなってるのかと思いい背筋が凍るように感じたが集中し直したのだ

「くっ……!やはり、縮めてもきついか!!」

弾丸をありたて撃つたのだがやはり向こうの方が攻撃力は上か……!

悔しそうに攻めながら考えていたのだ

「Fクラスが……Aクラスを……木下優子を嘗めないでよ!!はあ!!」

「負けない!!でりゃあ!!」

のび太は足元に弾丸を撃って削っていったのだが辺りに土煙が漂ったのだ

「前が見えない……!!(どう来る?!考えろ!僕ならどう動く!?)」

その土煙に警戒をしてゆっくりと近づくと煙の中、優子はこのび太の体を突き刺そうとしたが、かろうじてよけ、飛び出した方向に向かって二丁の弾丸で撃ち抜いたのだ

「避けられたか……!!」

「危なかった……今の警戒しといて良かった」

数学

Aクラス

木下優子 50点

VS

Fクラス

野比のび太 50点

「ならとる策は一つ!はあ!」

「銃を上投げたっ!?ハッ!しまった!」

銃を上投げられて、思わず見てしまったがそれがフェイクだとわかり慌ててのび太の方を見ると……

「これで僕の勝利だ!」

「くっ！只では負けないわ!!食らいなさい！」
そういうとランスをのび太の方に投げたのだ。対するのび太も弾丸を放ったのだ

結果は……

Aクラス

木下優子

0点

Dead

V S

Fクラス

野比のび太

0点

Dead

「第一開戦、両者同時に戦死で引き分けです」

高橋先生の発表により、Fクラスはまず1分けとなったのだ
決着まで残り四戦……

Aクラス戦 第2試合と第3試合

「では、次の方どうぞ」

「私が行きます。科目は物理でお願いします」

高橋先生が黙々と言うとうとうはメガネのかけている女の子が出てきたのだ。対するFクラスからは……

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?!僕!?!」

「明久でいいの?引き分けになった僕が言うのもあれだけど?」

「大丈夫だ。俺は明久を信じている」

雄二のやつ、自身たっぷりだね?まあ、明久は操作は優れているけど勝てるの?」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

本気?まさか今までは手を抜いていたのかな?そうだとしたら、かなりの戦力になるね?」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員にお前の本気を見せてやれ!」

「吉井君、でしたか?あなた、まさか……」

対戦相手は明久を見て何かに気づいたかの驚いていたのだ

「あれ、気づいた?ご明答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない!」

「それじゃ、あなたは……!」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――」

そう言って、明久は告げた

「――左利きなんだ」

物理

Aクラス

佐藤美穂 389点

VS

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

フィードバックの痛みで転げまわっている明久に心配して駆け寄る姫路と追い討ちをかける島田

「よし。勝負はここからだ」

「ちよつと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

「島田、明久が死ぬよ？そして、明久？格好つけた意味は??」

「特にない！」

「島田、明久をお仕置きして？止めないから」

「OK！のび太！」

「ごめんなさいいいい！」

「冗談だ（よ）！」

「美波とのび太！酷いよ!?!」

「ん？とりあえず、三戦目どうするのだろ？」

僕がそう考えてると高橋先生が僕らとのやり取りをスルーしながら次の指示出した

「それでは、次の方どうぞ」

「……（スクツ）」

ムツツリーニが立ち上がった

「じゃ、ボクが行こうかな」

まあ誰が来てもムツツリーニには勝てないだろうね。彼は異常なほどすごいから

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

「土屋くんだっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技でね♪」

「問題発言だよ？ムツツリーニ！血が出てるよ!？」

僕は流石に我慢できずツツコミ入れたのだ。可笑しいな？僕はそこまでツツコミキヤラではなかったのに……

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保険体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……」

「島田に姫路、明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだけど？」

「優子と引き分けた野比君だつて？君も実技教えようか？」

「慎んでお断りさせていただきます！」

ええ！なんか本能的にダメだと思いましたよ！何だか恐ろしく感じましたよ！

「そろそろ召喚を開始して下さい」

流石におしやべりすぎたのか高橋先生に注意促された

「はい。試獣召喚（サモン）つと」

「……試獣召喚（サモン）」

ムツツリーニの召喚獣は忍装束に小太刀の二刀流。一方工藤愛子は……

「なんだあの巨大な斧!？」

明久が驚くのも無理ない……武器は破壊力のありそうな巨大な斧。加えて腕輪までしている。うわー、いやだな？あれはフィードバックあるとかなりの痛みが来そう

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ！」

腕輪を光らせて巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードでムツツリーニの召喚獣に詰め寄る！あの輝きは腕輪の力か！

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

「ムツツリーニっ！」

斧が召喚獣を両断する――

「……加速」

直後、ムツツリーニの腕輪が輝いて召喚獣の姿がブレた

「……え？」

「……加速、終了」

ボソリと、ムツツリーニがつぶやく

一呼吸置いて、工藤愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた
保健体育

Aクラス

工藤愛子 446点

VS

Fクラス

土屋康太 572点

本当に保健体育は異常だね？というか二人とも異常だけどね？

「そ、そんな……！この、ボクが……！」

そんな工藤は床に膝をつく。相当ショックみたいだけど、相手が悪すぎたね……これで1勝1敗1分け……僕らがAクラス勝つ条件としてはここで2連勝して勝たねばならない！勝負は終盤へ……

決意と決着

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

「こちらからは姫路が出る」

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

雄二が心配そうに呟くのもわかる・・・何せ相手が相手だ

久保利光・・・姫路に次ぐ学年三位の実力の持ち主で、振り分け試験を姫路がりタイアした今、二年で次席の座にいる男だね

「ここが一番の心配どころだね」

久保君と姫路の実力はほぼ互角・・・勝負の分かれ目といっても過言ではないけど、何だろう？姫路はいつも以上に落ち着いてる・・・

「科目はどうしますか」

「総合科目でお願いします」

はっ？久保くん？今勝手に頼んだ？

「少し待って？約束ではこちらはまだ一科目しか使ってないよ!？」

「そうだよ！なに勝手にー」

僕は流石に抗議をいれたのだ。明久も納得いかずすぐに抗議をいれたのだが・・・

「構いません」

「姫路さん？」

明久が不思議そうに姫路を見ていたのだ

「姫路を・・・信じよう？明久」

「そうよ？アキ？瑞希が負けれると思う？」

「二人とも・・・そうだね！」

僕ら二人の言葉で明久も腹を括つてみたのだ

「それでは・・・」

高橋先生が前と同じように操作を行う

すると勝負は一瞬だった・・・参考得点見たら僕は驚いたのだ

Aクラス

久保利光 3609点

VS

Fクラス

姫路瑞希 4009点

『マ、マジかつ!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!?!』

教室の至る所から驚きの声が上がります。勿論Aクラスも驚いていたのだ

点差400点オーバー。さすがにここまで差が開いてると思わなかったが、やっぱり姫路は凄い……影でもかなりの努力もしてるかもしれないけど、それでもこれは凄すぎるよ

「ぐっ……姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ?」

悔しそうに姫路に尋ねる久保君。つい最近まで拮抗していた実力がここまで離されれば、気になるのも当然だよ

「私はこのクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるこのFクラスが大好きなんです!」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです!」

姫路の言葉に、Fクラスの皆は感動しています。僕もその言葉を聞いて、温かい気持ちで胸がいっぱいになったのだ……

「これで2対1です」

これで王手!後は雄二が勝てば、晴れてAクラスの設備になる!だけど負けたり引き分けだど僕らの負けなのだ

「皆!わかってるね?雄二が勝てば、僕らはAクラスの設備になるよ!だけど他のみんなはわかってる?引き分けたり負けたりしたら……」

「Aクラスの設備がなしになるね?」

明久の言葉に僕が頷いて説明したのだ

「明久の言う通り、最終戦は雄二が勝てばいいのだから。つまり事実

上代表が勝てばOKってことだよ！」

「「おお!!」」

僕の説明に皆は納得したのだ。そう、これはAクラス前に確認したことだ

僕らが帰ろうとしたら、僕は気になることがあったので、木下さんに確認したのだ

『あつ！まって！ひとつ確認したいのだけど』

『なにかしら?』

『万が一引き分けがひとつ発生していたら、代表決定戦で勝敗決めるのどうかな?』

『?どう言うこと?』

『5回勝負するでしょ?普通なら勝ちか負けかしないけど、稀に相討ちて一回なった場合はどっちかの代表が勝利委ねられるってどうかな?それで白黒はつきりすると思うけど』

『・・・いいわ?代表が負けることはあり得ないけど、その条件は飲んであげるわ。ただし、あり得ないけど、貴方達が勝ち越している場合でいいかしら?代表もいい?』

『・・・構わない』

あの話がいなかったら、ややこしかったかもしれないけどどちらにしても危なかった・・・ここまで仕上げたのだから頼むよ!雄二!

「それでは最後の一人お願いします」

「・・・はい」

Aクラスからは霧島さん。そして僕らのクラスからは当然、

「俺の出番だな!」

当然、雄二だ!

「教科はどうしますか?」

霧島が負けるわけないかと思ってんだらう。Aクラスのヤツらは特に騒いだりしない

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

「ぎわ……………」

雄二の発言にAクラスがぎわめき始める。

「上限ありだつて?」

「しかも小学生レベル。満点確實じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……………」

「こちらに勝利の可能性があることがわかったんだろう。Aクラス連中がぎわついている」

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じた高橋先生が教室を出て行く。それを見送り、僕と明久は雄二に近づく

「雄二!後は任せたまよ!」

「勝つてよ?ここまで頑張つて繋げたのだから」

僕らが拳の前になると有事も拳を当ててくれたのだ

「ああ!任せろ!」

「……………(ビツ)!」

「お前の力には随時助けられた。感謝している」

「……………(フツ)」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ!」

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

「……………はい」

短く返事をした霧島が教室を出て行った。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

姫路に送り出された雄二も戦場に向かう。これでいよいよ決着だ。どんな結果でも、これで試召戦争が幕を閉じる

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

「これで、あの問題が出なかったら坂本は・・・」

「負けるだろうね。だけど！」

「もし出たならば・・・」

「うん」

上から島田、僕、秀吉、明久と喋っていた

もし出たなら勝てるはずだけど・・・不安が拭いきれない

そして試験が開始された。誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が表示される。

さて問題が出ているか・・・

問題：次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「「あ?」」

出た。大化の改新が出た!!

「よ、吉井君っ！」

「うん！」

「やったわね！」

「これで、ワシらは・・・」

「ああ。僕らの卓袱台がシステムデスクになる！」

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

「「うおおっ！」」

そして、モニターに結果が出てきたのだ

勝ったはずだ! さあ! 早く

〈日本史勝負 限定テスト 100点満点〉

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

.....えっ？

負けた.....？

この瞬間に僕らFクラスの卓袱台がみかん箱になった

召喚獣戦争終戦

「二対二で条約に基づき、代表戦で霧島さんが勝ったことにより、Aクラスの勝利です」

僕は教室になだれ込み高橋先生が最終戦の報告をしたのだ．．．もちろん確認の意味も込めていったのだが無情にも事実を言われたのだ

「．．．雄二、私の勝ち」

地面に膝をついた雄二を見て理解したのだ．．．ああ負けんだな．．．だけど．．．ひとついいかな？

「．．．殺せ」

「よおし!!いい覚悟だ!」

「言い残しはないよね?ないよね?」

「明久君!のび太君!落ち着いてください!!」

「二人とも落ち着きなさい!」

姫路と島田が僕らを押さえていたのだ

「だいたい、53点ってなんだよ!0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと——」

「いかにも俺の全力だ!」

「この阿呆があーっ!」

「アキ、落ち着きなさい!のび太なら、まだしくも!アンタだったら30点も取れないでしょうが!」

「それについて否定はしない!」

明久、それは否定してよ!聞いているこっちが悲しくなるよ!

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ!」

「くっ!どうして止めるんだ2人とも!この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに!」

「同じく!銃で体撃ちまくる!!」

「明久君、それは体罰じゃなくて処刑です!!そしてのび太君それは犯罪になりますから!!」

ようやく、明久と僕が落ち着いたのだ

「…でも危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ・・・」

「やはり裁こうかな？」

「だから駄目ですう！」

僕が雄二の言葉を聞きそう言うと、姫路が止めたのだ

暑くなりすぎた・・・反省しよう・・・

「・・・ところで約束」

「・・・！（カチャカチャカチャカチャ！）」

僕の横で、ムツツリーニがもの凄い勢いで撮影の準備をしていた

「わかっている。何でも言え」

潔い雄二の返事。これだけを見れば恰好いいんだが、本当に大丈夫なんだよね？

「・・・それじゃ——」

霧島さんが姫路に一度視線を送って、再び雄二に戻します。そして、小さく息を吸って、

「・・・雄二、私と付き合って」

言い放ちました

・・・はっ？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「・・・私は諦めない。ずっと、雄二が好き」

「その話は何度も断ったろ？他の男と付き合う気は無いのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「・・・ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあー！放せー！やっぱこの約束は無かったことに——」

AクラスもFクラスも放心状態の中、霧島さんは雄二を連れて教室を出て行く。霧島さんと雄二が出て行ったあとすぐに鉄人がやって来た

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスの補習についての説明をしようと思つてな」

我がFクラス？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうさ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!?!』

あのむき苦しい鉄人が、Fクラスの担任になるのだと!?

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

うわあ、全て正論だから何も言い返せないな。これは・・・

「特に吉井、坂本は念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と、要注意人物だからな。」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐつて今まで通り楽しい学園生活を過ぎしてみせる！」

「お前に悔いを改めるといふのはないのか！」

「ないです！」

「明久ですよ？そんなのしていたら既に変わつてるはずですよ」

「・・・それもそうだな」

きつぱりと言う明久に鉄人はに溜息をついて、続きをいったのだ

「とりあえず明日・明後日は休日だから仕方ないとして来週からは授業とは別に補習の時間と特別テストの時間を設けてやろう。まあ休日はゆつくり休むといい。点数が悪い奴は更に特別補習だ」

「「「なにいいいいいい!?!」」」

Fクラス全員の声と共に叫んでいたのだ

すると、島田が笑顔で明久に近づいていた

「さあして、アキ。補習は来週からみたいだし、今日は約束通りクレ―プでも食べに行きましようか?」

「え? 美波、それは週末って話じゃ・・・」

「ダメです! 吉井君は私と映画を観に行くんです!」

「ええっ!? 姫路さん、それは話題にすら上がってないよ!?!」

「に、西村先生! 明日からと言わず、補習は今日からやりましよう! 思い立ったが仏滅です!」

『吉日』だ、バカ」

「そんなことどうでもいいですから!」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが――」

言葉を区切って、 明久と島田と姫路を見る鉄人

「無理することはない。今日だけは存分に遊ぶといい!」

西村先生は笑顔で言い放った

「おのれ鉄人! 僕が苦境にいると知った上での狼藉だな! こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バツを持って貴様を待つうう!!!」

「斬新な告白だな、おい!」

「アキ! こんな時だけやる気を見せて逃げようだったって、そうはいかないからね!」

「ち、違うよ! 本当にやる気が出ているんだってば!」

「吉井君! その前に私と映画ですつ!」

「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの!?!」

「アキ! いいから来なさい!」

「あがあつ! 美波、首は致命傷になるから優しく――」

反論むなしく連れていかれたのだ・・・

T O r r r

「ん? メール? (三上さんからだ)」

《多分、決着着いてると思っただけで連絡しました! のび太くんが良ければだけどね・・・見たい映画あるのだけど、友達が今日休んでしまったの。よかつたら一緒にきてくれない?》

「了解つと。とりあえず、門の前で待ち合わせしよう? つと・・・返信

早いね？了解って」

さて！僕も帰ろう!!

負けたのは悔しいけど、また勉強頑張ろう！・・・三上さんはなぜ僕を誘ったのだろう？

戦後の放課後

のび太はよく考えたらFFF団がいることを思い出したので、申し訳ないが一時間半後に駅の前で待ち合わせしてもらったのだ

「三上さんはいるかな？一応、待ち合わせの十分前に着いたけど・・・あついた！」

あそこに可愛らしい服をして待ってくれてる三上さんがいた！待たせてしまったのだろうか？申し訳ない・・・

「お待たせ！三上さん！ごめんね？待たせてしまつて」

「あつ！のび太君！ううん、召喚戦争のあとだものね？時間は大丈夫だけど、来てくれてありがとうね？」

三上さんは優しいげに微笑んでくれたのだ。何か本当に心優しいと再確認したのだけど、気になる映画はなんだろう？

「あつ、そういうえば映画のチケットは向こうで渡すわ？それまで、Aクラスのはどうなったのか聞きたいわ」

彼女の質問に僕は包み隠さず全て話したのだ。優子さんとの引き分けた事や雄二のミスしたことも話したのだ。一通りAクラスの事を話したら聞いた三上さんの感想は・・・

「えつと・・・こう本人のいるクラスの前で言うのもあれだけど・・・坂本君はバカなの？普通なら勝てたのをミスしたつてことは本人の勉強不足でしょ？」

「否定できないね・・・確かに今回の敗因は本人のミスだけどね、僕も勝てなかつたからおあいこ様かな？」

そう話ながら映画館に入って何を見ようかと思つて話していたら・・・

「僕の食費がああああ!!」

この聞きなれた声は明久だよね？

「ごめん、三上さん。知り合いがいるみたいだから一緒に行つていい？」

「構わないわ。行きましょ？」

三上さんの了承得て僕は明久に声かけたのだ

「何してるのさ？明久」

「あれ？のび太に・・・誰？」

ああそうか、明久は知らないんだった。ついでに姫路と島田も知らないみたいだしね

「ああそうか、紹介するよ」

「初めまして、Eクラスの三上です。貴方の事はのび太君から聞いてるわ。そしてそこにいる二人が・・・」

「ウチはFクラスの島田美波よ」

「私は姫路瑞希です！よろしくお願いします」

「姫路さんに島田さんね・・・私の事は下の名前で呼んでくれるかしら？さん付けもいいわ」

「あつそれなら私たちもそうしてくれる？」

「そう？わかったわ。瑞希、美波」

「ええ！美子（ちゃん）！」

女性同士の交流が始まったのだが、僕は明久と話していたのだ

「のび太は何で三上さんと？」

「何でもお友だちが休んでしまっ行って行けるのが今日までだったから僕を呼んでくれたみたい」

「羨ましい・・・憎しみで人を殺せたら良いのにイイイ」

「明久？自分の発言をもう一回考えて言おう？」

そんな話をしていたら雄二の声がしたので振り向いた

「お前らはいいいよな・・・」

「ん？雄・・・二？」

「ちようどいい所・・・に・・・？」

振り返ると、霧島と大昔の手錠をかけられた雄二がいた

「雄二いいいいっ!?何やってんのおお おおお!？」

「男とは・・・無力だ・・・!!」

雄二は虚ろな目で宙を見ながら悟りきった表情でそう言った

「ちよっ!?雄二、何で霧島さんに繋がれてるのさ!？」

「あまりにもヤバイよ！それ!？」

「男とは・・・無力だ!!」

「精神的にきてるね・・・」

今の雄二は、さすがに心配だ・・・と思っていたら、霧島さんが雄二に質問していたのだ。流石に意見は聞くよね？

「・・・雄二は何みたい？」

「俺の希望は叶えられるのか・・・？」

「・・・じゃあ、『愛の黙示録―完全版―』」

「おい、それ4時間もするやつだろ！」

「2回見る」

「1日の半分も座ってられるか！」

「・・・嫌なら、寝てても良い」

「それは気絶って言うー」

「・・・ずっと一緒にいるのは同じだから、大丈夫」

そういうと霧島さんは雄二にスタンガンを押し当て気絶させると

「・・・学生2枚2回分」

「はい。学生1枚気を失った学生1枚、無駄に2回分ですね」

「・・・」

霧島さんの雄二に対する愛が重い・・・

「仲の良いカップルですね・・・」

「ホントね・・・」

「いや、流石に重いような気が・・・あれ？私がおかしいのかな？」

いや、三上さんは正論です！島田と姫路！正気に戻って!?!流石におかしいと思わないと！

その後は5人で映画を見ていたのだが、雄二が心配であんまり頭入ってこなかったのだ。だけど、僕らのみた映画は泣ける映画だった・・・

「久しぶりに泣ける映画だったわね・・・」

「うん、そういえば明久たちはこのあとどうするの？」

「特に用事はないわね」

「私もないです」

明久は？と思ったら明久は必死に財布を見ていたのだ・・・仕方ない

「近くの学生でも食べれるところで行こう」

「おすすめの店はあるけど・・・今日はやめときましょ。のび太はおすすめの店ある？」

「それなら〇〇って店で人気の店なんだよ？何かすごい美味しいらしいので、この時間なら空いているよ」

「その店でそこで軽く食べながら談笑して帰るってことなのね??私はいいよ？美波も瑞希もいいよね？」

「ええ！」

「(明久、幾らかは出すからきちんと返してね?)」

「(今ほどのび太が救世主と思っただけではない・・・!) 決まりだね！行こうよ！」

明久たちとしばらく店で談笑していたのだが、スマホがなったのでちらつと見たら・・・

雄二：タスケテクレ

生命の危機とも見れるぐらい雄二の送られた文章にリアルさを感じたけどごめん・・・僕では助けられない・・・

のび太：ごめんね？僕では助けられない・・・

雄二：男は・・・無力だああああ・・・！！

本当にごめんね！無事を祈るよ・・・雄二！

そんなことしていたら三上さんが話切り出したのだ

「そういえば、Aクラス戦残念だったわね・・・」

「うん？もう知ってるんだね？」

「のび太君から聞いたのよ？リベンジするには3ヶ月後になるのよ？今よりも強くなれるの？」

「うーん、強くなれるかと聞かれたらわからないけど・・・」

「けど？」

「勝負はやってみないと分からないからね」

明久の言葉に三上さんは呆気にとられていたが暫くして、クスク

スッと笑っていたのだ

「何だか納得したわ？吉井明久という人柄に私は気に入ったわ（まあもうひとつ気になるとしたら、隣の二人に恋心も届くのかしら？）」

「??」

「ああ気にしなくたっていいわ」

明久は不思議そうだったが三上さんが気にしなくたってもいいと答えただの。どうやら、三上さんは明久の人柄のよさも気づいてくれたみたいだ・・・

あの後、僕らは店を出てまた食べに行こうと話したのだが、島田が今度はおすすめの店連れていくと約束してくれたのだ。そして僕らはそれぞれの家へ帰るために別れていったのだが、僕は三上さんに途中で送ろうとしたが、「大丈夫よ」と断れたのだ

「ならまたね？のび太君」

「うん。またね？三上さん」

彼女も途中で別れたのだ。喋っていてとても楽しい一日だったなーと思つて帰つたのだが、本当になんでだろう？三上さんの笑顔見て僕は何か引つ掛かるのだけどそれが思い出せない。いつかはわかるかな？

ラブレター事件

「ヤバイ！ヤバイ！遅刻なんて久しぶりで焦るううう!!」

とある朝に全力疾走しているのがこの世界のもう一人の主人公の、野比のび太は遅刻したのだ。理由は簡単だ・・・寝過ごしたのだ

「くう！間に合わないいい！廊下にたたされるのは嫌だああああ!!!」

しかし、希望は儂く散ったのだ・・・

「残念ながら遅刻だ。野比よ」

「うう、遅れてすいません・・・」

出席を確認したのだが、僕は一步遅く着いたのだ。ああ、拳骨がくるのかな？

「まあいい、次は気を付けろよ」

「はいー!」

「それでは、続きをするぞ」

「手塚」

「吉井コロス」

「藤堂」

「吉井コロス」

「戸沢」

「吉井コロス」

んんん!?!なんでこんな返事になってるの!?!おかしくない?!

「に、西村先生、このままだとFクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ!」

明久の抗議もむなしく、西村先生はスルーして続きを言ったのだ

「布田」

「吉井マジ殺す」

「根岸」

「吉井ブチ殺す」

スルーしたく!?!

「よし！今日も欠席は無しだな！勉強しっかり励むように!!」

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」
保身の為に、明久は必死に鉄人を呼び止める。

「吉井、間違えるな」

西村先生が扉に手をかけたまま告げる。間違い？何がだろ？

「お前は不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように！」

「待つて！先生行かないでえええ」

明久の叫びもむなしく、西村先生は教室を出たのだ

「アキ〜？ちよつと話聞かせてくれないかしら〜？」

「あ、あはは……美波、顔が怖いよ？」

島田の殺意が僕の方まで来ているよ……何をしたのさ？明久

「手紙誰から貰ったの？どんな手紙なの？」

明久が手紙貰ったの??確かに気になるけど、殺気が異常に恐ろしいほど研ぎ澄まされているね

「いいからおとなく指の骨を一一じゃなくて、手紙を見せなさい」

断ったら明久の指がどうなるの!?

「あの……吉井君……私もその……手紙を見せてください」

「ごめん……いくら、姫路さんの頼みでもこればかりは」

珍しく姫路が明久に頼み事していたのだが明久はダメだと言ったのだ。それでも姫路が食い下がっていたのだ

「でも……でも……でも!!私は吉井くんにひどいことしたくないのです!!!」

「ちよつと待つて！姫路さんまで僕に暴行を加えることが前提なの!?!」

すっかり姫路もFクラスに馴染んだようだが、それも悪い方向にも染まっていたのだ……

「ねえ、明久達はなんの話しているの？」

「ああ、のび太は遅刻したから聞いてないのか。実は明久がラブレットを貰ったのらしい」

雄二の説明に僕は納得したのだ。そういえば僕も朝ロッカーのな

かに手紙入っていたな・・・

「皆、ちよつと落ち着け」

そんな中、雄二が手を叩く。皆の注意が雄二に向いてる間に、僕は嫌な予感したので鞆を確保しドアの近くに移動する

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない・・・問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ。ついでにのび太もだ!」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生!」

明久は荷物を持って、教室からダッシュで逃走

「何で僕までだよおお!?くそお!!」

窓から下の方に急いで飛び降りたのだ

「人間死ぬ気になれば行けるううう!逃げさせてもらおうよおお!!」

「逃がすなあああ!!」

・・・なんだろう?この時々Fクラスが見せる嫌な団結力の行動起こす見て情けないよ・・・

Fクラスの追手から逃げ、空き教室に（窓から）入って待機していると・・・

『いたぞ!吉井だ!空き教室に向かったぞ!』

『了解だ!見逃さないように追ってくれ!こっちは全部隊に連絡を取る!』

『オーケー!B部隊は正面から、C部隊は側面から回って挟み撃ちにするんだ!』

『おう!!』

廊下からこんな会話が聞こえてきた。まさかこんな短時間で部隊編成を終えるなんて、どこまで無駄にスペックの高いクラスなんだ

「いたぞおお!吉井だああ!」

「手紙をよこせえ!!てめえだけ幸せになるのはなつとくいかねええ!」

そして足音が近付いてきて、空き教室の扉から明久が入ってくる。後ろには10人くらいのクラスメイトが追ってきている。教室に

入ってくる瞬間、入り口が限られてる為に向こうは一カ所に固まらざるを得ない。その行動は追われている僕たちにとってチャンス以外の何物でもない

「飛んで夏の火には虫が入る・・・ぽちつとね」

ボタンを押すと同時に仕掛けていたのが落ちてきたのだ

「な、なんだ!？」

「落ち着け!ただのネットだ!端に近いヤツから抜け出して吉井と野比を確保しろ!」

「くっ!このネット、びしょびしょに濡れているから身体に張り付いて!」

一瞬戸惑うが、すぐに次の行動に移ろうとする判断は大したものだが、残念ながら手遅れだ!

「保健室のベッドでゆっくりしてくるんだね」

明久がそういいながら取り出した危険物を見て、皆が目を剥く

「なっ!?吉井、それは・・・!」

「離れる!全員ネットから離れる!」

「おやすみ、皆」

明久がびしょびしょに濡れたネットの隅に、電源を入れっぱなしにしたスタンガンを投げつける

「「ぎゃああああっ!!」」

そいつらをほったらかして次に移ろうと行動したのだ

『どこだ?確かにこっちに来たはずだが』

『気をつけろ。きつと近くに潜んでいるぞ』

『F部隊とG部隊もやられたらしい。向こうは二人だが、油断はするなよ』

旧校舎の古書保管庫

その中で緊張した様子の子のクラスメイトが囁き合っている。かなりのクラスメイトを撃破したためか、随分と警戒している。本棚の陰か

ら様子を窺うと、互いに背中を合わせて死角を潰している姿が見えた
「一カ所に集まっていると身動きが取りにくいになあ……いくよ
!のび太!」

「うん!」

僕が返事をする、明久は僕たちが潜む場所とは対角の方向に本を
放り投げる

『なんだ!』

『アイツらか!』

音に反応して全員が同じ方向を見る。これで死角ができた

「せえーのっ!!」

『なっ……!』

『しまった……!!』

倒れてくる本棚とは逆の方向に注意が逸れていたので反応は鈍い。
結果、全員が本棚の下敷きとなった

「ハッハー!人の恋路を邪魔しようとするからそんな目に遭うのさ
!」

明久は高笑いしながら出ようとする

『おのれ!裏切り者め!』

『覚えている!お前らの幸せは必ずブチ壊す!』

「……何て歪んだクラスメイトだ……」

僕は時々このクラスの歪みが心配です……明久と一旦道を別れて、
他に異変があったらすぐに連絡するように約束したのだとどめに外
からモップで出入り口を封鎖する。これで追っ手はほとんど始末で
きたはずだ

「さてさて、残っている連中は一一つとおおっ!」

明久が跳び退ると、さっきまで明久の立っていた場所には文房具が
突き立っていた

「ムツツリーニか!!」

「……裏切り者には、死を」

手に各種文房具を構えているのは、クラスメイトのムッツリーニと土屋康太だった。

「ムッツリーニ、覚悟！」

明久は躊躇いもなく康太に殴りかかる

「・・・次はカッターを投げる」

「よし。まずは話し合いをしようじゃないか」

「わかった」

が、康太の取り出したカッターを見て、作戦を交渉に変更する

「そちらの要求は？」

「・・・こちらの要求は」

ムッツリーニはカッターナイフをちらつかせながら答えたのだ

「ーグロテスク」

まって！そんな交渉の要求は知らないよ!!今までにない難問だよ

!

「・・・交渉決裂・・・大丈夫。目は狙わない」

「ムッツリーニ。それだけで安心できるほど僕はバカじゃないからね？」

「つーかカッターは何処に当たっても致命傷だからね？」

「・・・そう」

ヒュッ

風切り音をあげて二本のカッターが飛んでくる。その目標は俺たちの目

「う、嘘つきいいっ!!」

ヤバイ!本当にヤバイ!

「ムッツリーニ!姫路さんの胸のサイズを知ってる!？」

とつさに明久は自分の身を守るため、ムッツリーニの好むような話題を振る

「・・・そんなものは、常識・・・!」

しかし、康太の注意は逸らせない。というか、常識だったのか!?さすがムッツリーニと呼ばれるだけはある

「じゃあじゃあ、もしも僕に彼女ができたなら、秘蔵のコレクションを贈

呈するから!」

「……(ピタッ)」

「……いつ?」

「コレクシヨンの内容、量を確認せずにいきなり引き渡し日時の交渉に入るとは……明久!君は恐ろしい!」

「えーっと、今度の週末にでも」

「……交渉成立」

ムツツリーニが敵にまわったら、この交渉でいこう!!僕らが行こうとしていたら、明久に護身用を渡したのだ

「明久!僕はさつきに上がるね!後で会おう!」

「うん!」

つい先、屋上に向かった僕はゴツゴツと島田が目笑ってないで明久の方に向かったのだ……明久!頑張れ

しばらく屋上の前で待っていると疲れた明久が来たのでどうしたのか?と思つて聞くと島田に追いかけられたらしい……お疲れ様だね。しかも別のルートで須川君たちと遭遇したのだから……

「待っていたぞ?明久!!」

「雄二!」

明久達は驚いていたのだ。まさか、そこにいると思わないのだから「雄二!何で邪魔するの!?!メリット何てないのに!!」

明久の質問に、雄二は真剣な表情で答える

「確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない」

「だったら、どうして……?」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粹に……」

雄二はゆっくりと瞳を開く

「お前の幸せがムカつくんだよ!!」

まさに外道!!本当にこの二人は友達かなと思つてしまう……

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねえ。本気でかかってこい!!」

雄二は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイを外す。彼の身体はしなやかで理想的な筋肉の付き方をしているのがわかる

「じゃあ、僕は静かに観戦させてもらおうとしよう」

僕は壁に背を預け、事の成り行きを見守る

「姫路。上着を持っていてくれるか?」

「あ、はい。あの・・・吉井君、やめておいた方が・・・」

姫路が心配するのも無理はない。雄二は確実に喧嘩慣れしている。体格でも経験でも雄二に分があるのだ。明久の勝率は微々たるものだろう

「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから」

しかし、明久にも男としての意地があるのだ。彼の表情には不安も躊躇もない。真正面から雄二に立ち向かい、そして勝とうとする意志が顔に表れていた

「わかりました。気を付けてください!」

・・・あつ（察した）。明久、雄二の狙い気づいてないみたいだ
すると雄二が姫路に中身を見ろつと指示出したのだ

「だ、ダメだよツ! 戦わないでそれを見るのは反則だよ!」

「お前がバカなだけだろうが! やれ、姫路! その手紙を始末するんだ!」

姫路のところへ向かおうとする明久を羽交い絞めにしつつ雄二が言う。二人の体格差では振りほどくのは不可能だろう

「姫路! 手紙を細切れにするんだ」

「違うっ! そうじゃない! 雄二、卑怯だぞ! そうやって僕の台詞みただいにつなぐのは反則だ!」

「はいっ! わかりました!」

「いや、『はいっ!』じゃないよ姫路さんってああああっ! そんなに丁寧に手紙を裂かなくても! それじゃあもう絶対読めないよね!? 返してっ! 僕の幸せな未来と大切なラブレターを返してえっ!」

明久のラブレターが細切れにされていた。それはもう原形を全く

留めずに、紙クズという名前で廊下中に散らばっていた

「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった。すまん、明久」

雄二が驚いた様子で姫路を見て、その後明久に謝った。しかし、まさか姫路がこんなことをするなんて僕も思わなかった・・・

「せめてものわびだ」

雄二は廊下中に散らばった紙クズを集めて明久の元に持っていく

「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせる」

「一一未練を断つてやる」

シユボツ、メラメラメラ……

あ、雄二が紙クズを燃やした

「つてうそおつ!!?ここままでやった挙句、容赦なく燃やすの!?!もうこれ100パー読めないよね?!僕の幸せな未来はどこへいったの!?!」

「明久。お前は知らなかっただろうが」

「なに!?!なんでもいいから早く水を持ってきて!」

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ!!」

「知ってるよバカ!ちくしょー!」

明久の必死の消火活動も空しく、手紙をは綺麗サツパリ灰になってしまった

その後姫路が手紙の出した相手気にならないのか?つて聞かれたが、気になるけどそれはそれでその人の思っかけていたのだから今回は知らない方がいいと決めたのだ

「まあ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな」

雄二の示した方向を見ると……

『アゝキゝゝ!アンタよくもやつてくれたわねゝゝ!』

『吉井いつ!絶対殺すううっ!』

『ガンホー!ガンホー!』

うわあ、凄い殺気だあ・・・明久が取り囲まれてボコられる。可哀

想だけどばれないように隠れよう

約三十分後、授業をサボったことに激怒した鉄人の介入によりこの出来事は終結した

オマケ

「僕の手紙はなんだろう??」

家帰ったのび太は手紙を開けると固まったのだ

「なんで・・・なんで・・・」

紙を持ちながら震えていたのび太は空に向かって叫んだのだ

「なんでライザツ〇うろうろ!?!」

広告には、これであなともムキムキになるよ!始めよう!とかかかっていたのだ。ちなみにこれの犯人は坂本だった・・・

清涼祭 準備期間

「……雄二」

「なんだ？」

「……『如月ハイランド』って知ってる？」

ある朝の男女の会話で、女性・・もとい霧島が雄二に質問していたのだ

「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンっていう話の」

「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだな」

「…日本一の観覧車とか」

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだ」

「……世界で三番目に速いジェットコースターも」

「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ってヤツか。どんなモンなのかわからんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

「…他にも面白いものが沢山ある」

「それは凄いな。きつと楽しいぞ」

「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」

いい終える前に雄二がさえじったのだ

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら
一一」

「…うん」

「今度友達と行ってこいよ」

「……握力には自信がある」

「ぐあああっ！アイアンクローはよせっ！」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「オープン直後は混み合ってるから嫌ぐぎやあっ！」

「……それなら、プレオープンチケットがあつたら行ってくれる?」
「プ、プレオープンチケット? ケホツ、あれは相当入手が困難らしいぞ?」

「…行ってくれる?」

「んー、そうだなー、手に入つたらなー」

「…本当?」

「あーあー。本当本当」

「……それなら、約束。もし破つたらー」

「大丈夫だったの。この俺が約束を破るようなヤツ、ーに見えるか?」

「一一この婚姻届けに判を押してもらおう」

「命に代えても約束を守ろう」

ここに（雄二にとっては悪魔の）契約を交わしたのだ

今通っているここ文月学園の学年最初の行事として「清涼祭」が行われている。この行事は「試験召喚システム」を展示するために行う行事らしい。そのため、今別のクラスは模擬店の準備に忙しく活気にあふれている。そしてわれらFクラスは……

「勝負だ! 須川くん」

「お前の球なんか場外まで飛ばしてやる!」

「言つたな! 絶対に打たせるものか!!」

準備をサボって野球をしていた

え? 僕? 屋上で昼寝してるよ。だって日溜まりポカポカなんだからさ昼寝しないと損だよ!

ん? 西村先生が怒気のある顔で明久たちに叫んでいたのだ

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか!」

「ヤバい! 鉄人だ!」

「吉井! 貴様がサボりの主犯か!」

「ち、違います! どうしていつも僕を目の仇にする んですか!?!」

日頃の行いだと思うよ? まあ、僕は屋上に寝ているから、ばれないか

トントン

ん？だれだろ？

「野比くん？何でここでお昼寝してるのかしら？」

そこにはAクラスの担任の高橋先生がいたのだ。・・・よし！

「ごめんなさい！すぐに戻ります！」

「反省しているなら、西村先生には報告しませんが・・・きちんとしてくださいね？」

うう・・・反省だ・・・こうして僕の昼寝タイムは。見つかったので、あえなく終了となったのだ

「さて、そろそろ春の学園祭、決めなくちゃいけない時期が来たんだが・・・とりあえず、実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので後は任せた」

雄二のあの顔は心の底からやる気ないよね・・・僕も今回はモチベーション上がらない・・・

「じゃあ実行委員は島田でいいか？」

僕がだらけている間に島田が推薦されたらしい

「え？ウチが出るの：うくん。ウチは召喚大会に出るからちよつと困るかな」

「ねえ雄二。実行委員だったら美波よりも姫路さんやのび太にやってみらったほうがよくない？」

「え？私ですか？」

姫路が話に出たのでちよつと驚いている。確かにそうだけど姫路さんには荷が重い気もするが。それと僕の名前を何であげたのかそこは激しく問いたい

「姫路には無理だな。一人一人の意見を聞いているうちにタイムアップだ。それにのび太は優柔不断なところがあるから、ダメだな」

さすがはクラス代表でかつて『神童』と言われただけはある。クラスの特徴をしっかりと把握している

「それにね。アキ。瑞樹も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「学校の宣伝みたいな行事なのに二人とも物好きだなあ」

ちなみに召喚大会とはいつもの試験召喚戦争とは異なり、2対2のタッグマッチで戦う召喚獣を使う大会のこと。これは学校の目玉である「試験召喚システム」を世間一般公開するために行っているんだとか

「うちも瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってばお父さんを見返してやりたいって言うてきかないから」

「お父さんって？」

明久の疑問に島田が頷いて答えてくれたのだ

「うん、家でいろいろ言われたんだって」

「あらら、姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって皆さんのこと何もわかっていないのに Fクラスって理由だけでバカにされたんですよ。許せません！」

……ごめんなさい。姫路のお父さんが正論過ぎて仕方ないのは事実。なにせ、このFクラスは馬鹿なのだから

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

そう話していたら雄二から注意してきた

「三人とも、こつちの話を続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言うてるのに……」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それならいいだろう？」

「んくそうね、その副実行委員次第でやってもいいけど？」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決戦投票をしたらいいだろう」

教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「のび太に任せよう」

「姫路さんと結婚したい」

このままでは決まりそうにないね。仕方ない。提案を出そうと思
うけど、その前に姫路のアプローチしているのだけ？そろそろ判明し
たいのだけど？

「うーん、ひとつ提案あるのだけどさ？」

「ん？なんだのび太？」

雄二が珍しいものでも見たような顔をしたのだが失礼だなく！明
久よりは考えてるよ！

「このままじゃあ決まりそうにないから島田に決めてもらおう？」

雄二もそれには賛成で島田に頼むと島田は少し考えてボロボロの
黒板に書いたのだ

島田は少し考えると、ボロボロの黒板に候補の名前を書き始めた

『候補①……吉井』

お、明久だ

『候補②……明久』

あれ？二人目も明久だ

雄二がクラスに意見を聞いてみると……

「どうする？どっちが良いと思う？」

「そうだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……」

「こらあ！悩むふりして人にクズと言う君たちがクズだああ！」

明久は我慢せず突っ込みをいれたのだ。君も大概だと思うよ？明
久

そのあと島田が明久に説得して作業していたのだが……

「はい、土屋」

「……(スクツ)」

島田が指名すると、ムツツリーニこと土屋康太が立ち上がった

「……写真館」

「土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど……アキ、
一応意見だから黒板に書いてもらえん？」

「あいよ」

【候補① 写真館『秘密の覗き部屋』】

んん？何でそういう風に書いているのかな？

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶——と言いたいけど、流石に使い古されてると思うので、ここはウエディング喫茶を提案します」

その言葉ににクラスの皆の反応は

「斬新ではあるな」

「憧れる女子も多そうだ」

「でも、ウエディングドレスって動きにくくないか？」

「調達するのも大変だぞ？」

「それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、とか言うくらいだしな」

・・・である

「ほら、アキ。今の意見を黒板に書いて？」

「あ、うん」

【候補② ウエディング喫茶『人生の墓場』】

後ろの方にツツコミたいが、インパクトはあるな。耐えろ！

「さて、他に意見は——はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好して稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからもわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは——」

詳しいと思うけど話が長い!!

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

だが明久の手が止まる。

「どうしたの？早く書いてよ」

「りよ、了解」

【候補③ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

……明久は辞任させるべきじゃないのかな？任したこつちも悪いけどもさ……

すると、西村先生が教室に入ってきたのだ

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田が言うと、西村先生の視線がゆっくりと黒板に向いた

【候補① 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補② ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補③ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

「……やはり補習は増やすべきかもしれないな……」

否定できません……明久のバカああああ！

「吉井が書いたのです！」

「俺達はバカじゃないです！」

みんな補習増やされたくないのか必死に反論していたのだ
すると……

「馬鹿者!!みつともない言い訳をするな！」

西村先生の鶴の一声で静まったのだ

「先生はバカな吉井を選んだのがそもそも間違いなのだ！」

「まったくお前等は少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

それを聞いて、クラスの連中の目が急に動き出した

「そうか、その手があったか！」

「なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！」

「いい加減この設備にも我慢の限界だ！」

一気に活気づく教室内。元々設備に不満を感じて試召戦争を始めたのだから。当時より更に低い設備では我慢なんてできない

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

姫路は立ち上がって胸の前で手を握りやる気を見せている。少し驚いた。お父さんを見返したいって言ってけどクラスの出し物とあまり関係がないような気がする

業を煮やした島田が無理矢理話をまとめた。これは姫路にはできないなあ。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げる事いいわね！」

反論を眼力で押さえ、決を採りにかかる島田

「それじゃ、写真館に賛成の人！——はい、次はウェディング喫茶！——最後、中華喫茶！」

教室に島田の声が響くが、それでも喧騒は収まらない。騒がしい中、島田が挙げられた手の本数をカウントし始めた

島田が幼稚園の先生に思えてきた。・・・
結果、僅差で中華喫茶が勝利となった。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！それじゃあ、厨房班とホール班に分かれてねもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところを集まって！」

何故か明久をホール班のトップにする島田。何故だ？

「それじゃ、私は厨房班にー！」

真っ先にいくと決めたのは姫路だった

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

ナイス！！明久！！姫路の手料理はあの男と同レベルかこれ以上かも知れないからなんとしても防ぎたい！

「え？吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

「ごめん！姫路の料理は必殺と呼べる料理なの！明久本当に頼むよ！上手いこと言って！」

「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様さんに接したほうがお店として利益が痛あつ！み、美波！僕の背中ではサンドバツクじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて／＼／吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

頼むから、一生のお願い、ホールだけで頑張って!!

「アキ、ウチは厨房にしようかな〜？」

「うん。適任だと思う。みぎやああっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

島田がなにか気にくわなかったのか明久に攻撃したのだ

「ウチもホールにするわ・・・いいね？」

「そ、そうですね・・・それが、いいと、思います・・・」

「なら、僕は？」

「うーん、のび太なら厨房班だね！」

「え？のび太（君）料理できるの？」

明久の言葉に島田と姫路がビツクリした顔で見てきたのだが泣いていい？

「多分、普通の腕前だと思うよ？それより、これでいい？島田？」

「そうね。これで決定しましょ！アキと坂本は可能なら厨房班にお願い」

こうして、学園祭への準備が進み始めた

隠し事

「アキ、のび太、ちよつといい?」

帰りのHRも終わって放課後。明久と帰ろうと思っていると、島田に呼び止められた

「何か用?」

「用って言うか、相談なんだけど」

島田の顔は真剣なので、良い話ではなさそうみただ

「相談? 僕らで良ければ聞かせてもらおうけど」

「帰っても暇だしね」

「うん。ありがと。多分、アキに言うのが一番だと思うんだけど——その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな?」

確かに……このクラスを纏めることが出来るほどの統率力を持つのは雄二しか居ないからね

「うくん、それは難しいなあ……雄二は興味が無いと動かないから」

たぶん、寝てたから出し物も知らないだろう

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね?」

島田が期待したような眼差しで明久を見る

「え? 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きつとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって——」

「そりや確かに、よくつるんではいるけど、だからと言って別に……」

「だってアンタ達、愛し合っているんでしょ?」

「もう僕お嫁にいけないっ!」

島田、どうして真顔でそんな台詞がでるの?!

「明久!! 君は男だろ!? お婿じゃ無いの?!」

「違うよ! 誰が雄二なんかと! だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ

！」

「あ、明久？」

偶然その場にいた秀吉の動きが止まる。あれ？なんだか妙な雰囲気になっただけ？

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなこと言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか・・・」

はい！アウトオオ！！

「ひ、秀吉！違うんだ！もの凄い誤解だよ！さっきのは言葉のアヤで！」

「秀吉！君は男なら可笑しいでしょ!?その台詞は可笑しいでしょ!」

秀吉は顔を赤くして俯いている。本当に男か時々考えたくなるよ・・・

「つと、話逸れたから戻すけど、雄二は呼来てくれないみたいだね」

「そんな。このままだと喫茶店が失敗しそうなのに」

島田は目を伏せ、うつむいてしまった。しかし彼女がなんでここまでこだわるのか？

「でも美波がそこまで設備交換に熱を入れるなんて。やっぱりここじゃ不満——」

「そうじゃないのよ。本当に深刻な問題なの」

いつになく真剣な顔で明久に詰め寄る島田。確かに彼女自身この設備に大きな不満を持っているという印象はない。ここまで気負うことはないと思うのだが・・・

「本人には内緒にしておいて言われているけど事情が事情だし・・・」
「けど一応秘密の話だからね」

「う・・・うん」

俺たちは島田の話に耳を傾けた。

「実は、瑞希なんだけど。もしかしたら転校するかもしれないの」
「ほえ」

「どういうことだ？それに姫路の転校と喫茶店の成功にどう関係——
——って!?明久!!」

「む。まずい。明久が処理落ちしかけてるぞ」

さっきの一言でショック受けたんだね。もう意識が別次元に飛んで行ってしまっている

「このバカ。不測の事態に弱いんだから!!」

「明久。目を覚ますのじゃ!」

「はっ!? 秀吉・・・モヒカンの僕でも好きでいてくれるかい?」

やはり、明久は一回病院つれていこうかな・・・?

「どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら」

「ある意味すごい才能だね・・・」

「・・・ハッ! 美波。姫路さんが転校ってどういうこと。」

慌てている明久に宥めないと・・・

「もしかしたらっていうあたりまだ確定ではないんでしょ?」

「うん。瑞希、体が弱いでしょ。それにこんなクラスだから 両親が心配して転校するように促しているみたいなんだけど・・・」

確かにこんな劣悪な環境とバカばかりのクラスじゃ両親も心配するよね。それに本来、姫路はこんなクラスに入る人間じゃない。本来ならAクラスに入るべき 人 Nonetheless 試験当日の体調不良だけでこんな結果になったんだしね

「ねえ、アキは・・・瑞希が転校したら・・・嫌だよね」

「もちろん嫌に決まっている。姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても」

「そうだよね。明久の性格だとそういうよね。それを聞いて安心した

「そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ!」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「僕も協力する!」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

明久が雄二に連絡してくれたから待つところかな・・・

「あ、雄二。ちよつと話が——え? 雄二。今何してるの?——雄二!? もしもし! もしもし!」

何? 今の会話・・・もしかつて・・・

「坂本はなんて言ってた?」

「えつと、『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「・・・なにそれ?」

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじやろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

あの時の映画のことを考えたら、雄二からしてみれば生か死の境目にいるのだよね・・・

「となると雄二との連絡は取れないということか」

「いや。これは逆にチャンスだ」

「???」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すちようどいい状況なんだよ。悪いけ

どみんな手を貸してくれる?」

「いいけど。坂本の居場所なんてわかるの?」

「大丈夫。何も相手の考えを読めるのは雄二だけじゃない」

「対策は万全といった感じか?」

「まあね」

そういつて明久は教室から出ていった

明久と共に行動したら、雄二発見した!

「やあ雄二、奇遇だね」

「・・・という偶然があれば女子更衣室で鉢合わせになるのか教えてくれ」

「やだな雄二、ただの偶然だよ」

「嘘つけ。こんな場所で会うわけ・・・!!誰か来る!」

雄二の言葉に僕達は息を飲む

そしてドアが開いた

雄二と明久は別のロッカーで隠れていて僕は窓から逃げようとしたが・・・

「のび太君?」

ああ、どうやら僕の運命はここまでだ。恐る恐る手をあげながら後ろを向くと、三上さんがそこにいたのだ

「お好きにどうぞ・・・先生に差し出しても良いです」

僕が観念すると三上さんはいきなり・・・

「!ロッカーの中に隠れていて!!後、絶対に見ないで!」

僕をロッカーに閉じ込めたら、木下さんが来たのだ

「あなた、たしか・・・三上さんだよね?」

「う・・・うん（のび太くんがいるのとおりあえずごまかさないと!）」

三上さんがどうしようと考えていたら、隣のロッカーに暴れている音が聞こえたのだ:雄二と明久だ!頼む!耐えてくれ!

ガタン!

ああ:神様は無情だ:明久達は木下さん達に見られて:

「「あ・・・」」

・・・木下さんと目が合ったみたいだ。そして綺麗な白い肌はだんだん赤く染まっていき・・・っ

「きゃああああああ!!!」

「に、逃げるぞ!」

木下さんは悲鳴をあげ、明久達は慌てて更衣室を後にした

「木下さん・・・大丈夫?」

「うう、あの変態ども・・・この憂さ晴らしは秀吉に（物理的に）お話ね!それじゃあいくわ!」

「え?・・・行っちゃった」

三上さんが不思議そうに木下さんを見送ってロッカーの外に誰もいないの確認すると僕をロッカーから出してくれたのだ

「ありがとう!三上さんのお陰で助かった!」

「えっと、まあ気にしなくて良いわ。それより早く出ましょ?」

僕は三上さんと外に出ていくと・・・

「・・・ついさつき、ここに叫び声聞こえたのだけど何かあったの?」

霧島さんが目の前にいたのだ:詰んだ:。どうしようかと考えていたら、あることを思い浮かんだのだ

「雄二が明久と女子更衣室で覗きしていたから、捕まえようとしたら

逃げられたんだけど・・・ひい!？」

「ご・・・ごわい」

僕と三上さんが目の前にいる霧島さんが黒いオーラ出しているの
怯えたのだ

「・・・どつちにいった?」

その質問に指差していくと、霧島さんが黒いオーラ出して走り去っ
たのだ

「ご・・・怖かった・・・」

「うん・・・(ごめん!雄二!頑張つて逃げて!)」

ここにいない友人に心配して、三上さんと話していたのだ

「ねえ・・・のび太君は今度清涼祭で時間あったら一緒に行動しよう?」

「いいけど、僕のシフト次第になるかもしれないよ??」

「構わないわ。また当日に、会いましょう?」

僕は三上さんと別れて教室に戻ろうとしたら、西村先生の叫び聞こ
えたのだ

逃げ切れたみたいだね?さて!教室に戻ろう

交渉

「姫路の転校か・・・」

そう呟くのは頭の上にトリプルアイスクリーム（タンコブ）を作った雄二

「そうなんだよ。なんとかしないと・・・」

雄二の言葉に明久が返す

なぜ雄二がたんこぶできているのか・・・答えは簡単。霧島さんにお仕置きされたのだ・・・

「そうになると、喫茶店だけでは厳しいな」

雄二はボロイ教室を見ていったのだ

「厳しい？なんで？」

「姫路の父親が転校進めた理由は3つだ」

雄二の説明はこうだ。

- ① 学校設備が悪く、学業に専念できない。
- ② 教育環境が悪く、体調を悪くする恐れがあること。
- ③ レベルの低いクラスメイトのせいで姫路さんの成長を促せない。

「1つ目はさつき西村先生が言ったように学園祭で得たお金で設備を買うことが出来、3つ目は召喚大会で優勝かできなくてもよい成績で勝ち残れたら学年トップにも 渡り合える生徒がFクラスにいるってことになるため解決はできるね」

僕がそう説明すると雄二は頷いていた

「ああ、そこまではいいが、2つ目に関しては生徒だけの力ではどうすることもできないからな。そのため、俺と明久で学園長に環境の改善を直訴しに行くぞ」

「なら、ついでに僕もいくよ？嫌な予感もするし」

明久が何で？って顔してるから教えるか

「明久は、馬鹿だから目上の人に対してとんでもないことを言うでしょう？」

「そ・・・そんなわけないでしょ・・・？」

目をそらさずこつちを見て？明久
時間もないから急いで校長室に向かった僕ら

明久 s i d e

『賞品の・・・として隠し・・・』

『・・・こそ・・・勝手に・・・如月ハイランドに・・・』

新校舎の一角にある学園長室の前までくると、扉の向こうから誰かが言い争ってる声が聞こえて来た

賞品？如月ハイランド？何の話をしているのだろう

「どうした、明久」

「いや、中で何か話しているみたいなんだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけなんだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

「つちよ!?明久に雄二！ノックして返事待ってから・・・」

取り込み中かどうかは向こうが判断するってことか。雄二の言うことももつともだ。ひとまずは折角来たんだし、用件だけは伝えてみようか

「失礼しまーす！」

学園長室の立派なドアをノックして、僕と雄二はずんずん入っていった。のび太は頭抱えていたけど何かあったかな？

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

その室内で僕らを迎えたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。試験召喚システム開発の中心人物でもある。研究をしていた人間だからか、ずいぶん規格外なところが多い人らしい

第一声でガキども、とか言ってるし

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは

話を続けることも出来ません。……まさか、貴方の差し金ですか？」
眼鏡を弄りながら学園町を睨み付けたのは教頭の竹原先生だ。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒には人気が高い。僕個人としてはあまり好きになれない先生だけど珍しく、のび太もなんか嫌そうな顔していた

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

僕らにはよくわからないやり取りが行われている。学園長と教頭の話し合いということは学園の経営についてだろうか。それなら僕らがいる前で話を続けることはできない。出直した方が良いのかな？

「さつきから言ってるように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにおきましよう」

そう告げると、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送り、

「それでは、この場は失礼させていただきます」

踵を返して学園長室を出て行った。さつき何かを確認していたように見えたけど、なんだろう？この部屋に何かあるのかな？

「んで、ガキども。あんたらは何の用だい？」

と竹原先生との会話を中断されたことを気にする様子も無く、僕らに話を振る学園長

「今日は学園長にお話があつてきました」

学園長の前に立ち、雄二が話を切り出す。意外だ。敬語を知っていたのか

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原にいいな。それとまずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてもんだ。覚えておきな」

こんな横柄な婆さんに礼儀を説かれるなんて、世も末だ

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこつちが――」

雄二が僕を示し、紹介する

「――二年生を代表するバカです」

どうしてコイツは普通に名前を言えないのだろう

「ほう……。そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井かい。そして、その横が野比かい？」

「ちよつとまって学園長！僕はまだ名前を言ってますんよね!？」

さっきの紹介で名前を連想されたという事実には涙がでそうだ

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

悪役のように口の端を吊り上げる学園長。これで人を教育しようというのだから不思議だ

「ありがとうございます」

「礼なんかいう暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

それにしても驚かされる。こんなにも口汚く罵倒されているのに、雄二の態度や言動は落ち着いたままだなんて。コイツがここまで大人なヤツだとは思わなかった

「この有様では学園長のように縦穴式住居で生活を送ってるような原始的な老いぼれならともかく、現代の一般的な生徒が体調を崩す恐れがあります」

僕にはここまで相手を罵倒するスキルは無いよ流石は雄二だ！

「要するに、体調を崩す生徒が出てくるからとつとと教室を直せクソババア・・・という訳です」

しっかしよっぽど怒ってたんだな。その気になれば普通に敬語で通せただろうに・・・まあ、あの言葉遣いじゃ無理も無いか

「・・・なるほど、言いたい事は良く分かった」

「それじゃあ、教室を改修してくれるんですね？」

「却下さね！」

「雄二、このババアコンクリに詰めて東京湾に捨てよう」

「落ち着け明久。環境汚染になるだろう」

はっ！つい本音が!?

僕がそう思ってるとのび太が前出て聞いてきた

「理由をお聞かせ願えますでしょうか？学園長」

「理由も何も、設備に差を付けるのはうちのルールさ。今更ガタガタ抜かすんじゃないよ！」

ぐっ！さつきから言いたいこといって!!!

「……と、本来なら言ってる所なんだがね」

「？」

「可愛い生徒の頼みだ。こっちの頼みも聞いてくれるなら、教室くらい改修しても良いさね」

え？どういうこと？

のび太 side

「条件はなんですか？」

明久が黙っている雄二の代わりに聞いてきたのだ

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

えっと、確か、うん！思い出した！

「確か・・・学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド プレオーブンプレミアムペアチケット』が用意してあるのですよね？」

「おや？よく知ってるじゃないか？そうさ、条件ってのは、この副賞のペアチケットなんだけど、ちよつと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

明久の意見は最もだ。何故こうなったのか？

「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めた話とはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけには行かないんだよ」

そういえば前に噂で『学園長は召喚システムの開発に手一杯で、経営に関しては教頭に一任している』なんて聞いたことがある。どうやらあれは本当のことみたいだ

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

「うるさいガキだねえ。白銀の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

明久の言葉に学園長が眉をしかめる。口調とは裏腹に、若干責任を感じているみたいだ

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

つまらない内容なんだけどね。と前置きして学園長は口を開いた
「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』って言うジnkクスをね」

「？そののどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使って来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

明久と学園長都のやり取りの最中に突然雄二が大声を上げた。
ビツクリしたあゝ

「どうしたのさ雄二。そんなに慌てて・・・」

「慌てるに決まっているだろう！今ババアが言ったことは『プレオー
ンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループ
の力で強引に結婚させる』ってことだぞ!?!それにうちの学園は何故か
美女揃いだし・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる・・・行
けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚・・・俺の、将

来は・・・！」

：大方霧島さん関係で何かあったね？ここまで慌てている雄二は斬新だけど、明久に任して話続けよう

「無論優勝者から強奪はダメさ。やるなら学力で結果示しな」

すると、明久が口挟んできたのだ

「僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ。ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」

すると復活した雄二が学園長に提案したのだ

「召喚大会は2対2の召喚獣バトル、トーナメント形式だと聞いている。その科目は一回戦が数学、二回戦が英語・・・というように毎回変わると聞いているが対戦表ができたらその科目の指定を俺にやらせてくれないか？」

「ふむ、点数の水増しとかなら一蹴してたが、そのくらいなら構わないよ」

「ありがとうございます」

「ここまで協力するんだ。当然大会で優勝出来るんだろうね？」

学園長が念を押してくる。そこまで如月グループの計画を阻止したいのだろうか？今は余計なこと考えないでおこう

「無論だ。俺達を誰だと思ってる？」

雄二の不適な笑み・・・これは試召戦争の時にも見た、やる気全開の表情だ

「絶対に優勝します。そっちこそ約束を忘れないように！」

もちろん僕だつてやる気は全開だ。問題解決の手段がはつきりしたんだ。あとはやるべきことをやるだけなんだから

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おうー」」

こうして、文月学園最低コンビが誕生することになった・・・

清涼祭開始

清涼祭の開始前の時間・・・Fクラスはいそいそと準備を進めていた

「本当、昨日とは打って変わってすごい統率力ね。坂本は」
「ホント。いつもはただのバカなのにね。」

いつもの小汚い教室を少しでも良くするためにクラス全員で掃除を強制させ、装飾は女子が行うことでそこそこ見栄えはよくなった
「秀吉、こつちのテーブルは終わった？」

「こつちも終了じゃ、これなら外から見たらまずわからないじゃろう」
「しかし本当にすごいですね二人とも。どこからかきれいなクロスで手際よくてきぱきとやってくれるなんて」

予算の都合上テーブルがどうしても確保しきれなかったため、仕方なく僕らが使っているミカン箱を積み重ねて演劇部で使っているクロスをかけるという形でテーブルを使うことになった

「ま、見かけはそれなりのものになったがその分クロスをめくるとこの通りじゃ」

「これを見たら店の評判はがた落ちね」

クロスをめくるとそこには見慣れた小汚い箱が見える。確かに飲食店でこんな汚いものがあるとすると衛生面上問題がないとは言い切れないからね

「大丈夫だつて。こんなところまで見る人なんていないし、言いふらすような人なんていないって」

「そうですね、わざわざクロスをはがしてアピールするような人は来ませんよね。きつと」

明久の言葉に姫路も同意していた

「EクラスとDクラスの人達には感謝しなくちゃね」

「Eクラスは条件付きでだけどね」

Dクラスは清水を交渉のテーブルに出して美波をダシにしたらすぐカタがついたんだが・・・Eクラスには少し条件付けられた

「ここまで装飾が完璧なら後は出し物ね！」

「・・・飲茶も完ぺき」

「うわ!!」

背後からいきなりムツツリーニが現れた。しかもその手にはメニューの一つを持ってきたのだ

「・・・味見用」

そういつてお盆におかれた胡麻団子と陶器のティーセットが置かれた。これだけでも高い完成度だ

「え、いいの？私達が食べても」

「・・・(コク)」

「それじゃいただくとするかの。」

そういうと僕と明久と雄二以外のメンバーはお茶と胡麻団子をお願いした

「お、おいしいです」

「本当。表面はカリカリで中はモチモチで食感がいいし」

「甘すぎないのがいいの」

女子には大好評だし、このまま見てるのももったいないから僕も食べよう

「僕らもいただくね？」

「・・・(コクツ)」

皿に乗った胡麻団子を一つ掴み、女子達と同じように勢いよく頬張る

・・・ふむ

「表面はゴリゴリ、中はネバナネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいと妙な刺激が何とも——グゲパツ!!」

同じような感想を言って僕と明久がぶっ倒れる

——ああ、意識が...

「・・・っろー!・・・きろー!」

「っは?!・・・リアルに意識失っていた」

明久の声で僕は目が覚めた・・・ふっ、これで検証された・・・姫

路とあの男が手を組んだら・・・命はない・・・

「良かった・・・！本当に良かった！」

「・・・驚異の生命力・・・」

「ありがとう。本当にありがとう・・・！」

三人で生きる喜びを噛みしめる。因みにに女子達はまだトリップしてる

明久の話聞けば、2分意識失っていたらしい・・・

「うーっす。戻ってきたぞー・・・ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

「「「あ」」」

雄二が突然戻って来て止める間もなく、皿の上の食べ物を口にする

「：：たいした男じゃ」

「雄二。キミは今最高に輝いてるよ」

「男らしい行動だね」

「？お前らが何を言っているのかわからんが、ふむふむ、外はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘　すぎず、辛すぎる味わいがとっても

——んゴパツ！」

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

明久が雄二に目で合図を送っている。

「ふっ。何の問題も無い」

雄二は床に突っ伏したまま言う。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

「それはダメだ！Come back！」

「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

「あ、ほんとだ。坂本、大丈夫？」

先程までトリップ状態だった二人が元に戻ったようだ。胡麻団子は問題ないね！

「大丈夫だよ、ちよつと足が攣っただけみたいだから」

「おーい、起きろー」

おどけた口調だが、明久の手は必死に心臓マッサージをしている

「六万だと？バカ言え。普通渡し賃は六文と相場が決まって——はっ
!?!」

蘇生完了！脈もある！いい救命措置だ！明久！

「雄二？足つったんだよね？」

「つった？足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の—
—」

「……もう一つ食べる？」

「足が攣ったんだ運動不足だからな」

素晴らしい判断力だ

(明久、いつかキサマを殺す)

(上等だ。殺られる前に殺ってやる)

なんでこいつら、仲良くなつたんだろう？

「ふーん。坂本って足を攣りやすいのね」

マズい。島田が怪しんでいる

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういうから
だつて、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐ
べあつー！」

「俺が手を下すまでも無かつたな」

明久がこういう目にあうのは、Fクラスの日常になつてゐるね

「そういうえば雄二はどこ行つていたのじゃ？」

秀吉の質問に雄二は歯切れ悪そうに答えたのだ

「あちよつとな」

科目を指定してきたなんてことは言えないから雄二は適当に茶を
濁す

「それよりも喫茶店の準備はいいか？」

「バッチリさ!!」

「……飲茶も問題なし」

「よし、それじゃ厨房はムツツリーニ、ホールは秀吉に任せる。のび太
は俺がいない間お前が臨時でここの代表だ。問題が起きたら臨機応
変に対処しろ。俺がいるときは厨房の方で頼む！」

「了解！」

責任重大だね

「あれ？なんか用事でもあるの？」

「うん。僕たちも大会に出ようと思って。」

「もしかして賞品が目的とか？誰と行くつもりなの？」

島田から攻撃的なオーラが立ち込めた。おそらくそのチケツトが欲しいと思った明久が誰と行くか気になるんだろう

しかし雄二がほしいという事を考えないのか？まあ雄二の性格を考えればそんな面倒くさいものはほしいとは思わないだろうけどね

「吉井君。私も誰と行きたいのか気になります」

文章だけではわからないが姫路もものすごいオーラを発している。答え方次第では明久が殺されかねない

「だ・・・誰と行きたいって言われても」

「明久は俺と行くつもりなんだ」

ここで雄二がとんでもない爆弾を投下した。さっきの説明を聞くとまるで明久と雄二が疑似的に結婚体験をするって言っているようなものじゃないか。誰がそんな見ても得にならないことを・・・

「俺は何度も断っているんだがな」

「やっぱりあんた、木下よりも坂本のほうが・・・」

「ちよつと待って!!その「やっぱり」って言葉がすごく引かかる!それと秀吉、少し寂しそうな顔をしないで!!」

「明久君。男の子なんですから女の子に興味を持ったほうが・・・」

「それが出来れば明久だって苦労しないさ・・・」

「雄二、もつともらしいこと言わないで!全然フォローになつていないから!」

もう明久が同性愛者の疑いが晴れることは当分ないのかもしれない

「つとそろそろ時間だな。行くぞ明久」

「・・・くっ!と、とにかく、誤解だからね!」

そういつて明久たちは試合会場に向かっていった。まあ誤解は解かれないだろ。暫くはね

「さて、それじゃ僕たちは与えられた役目をこなしていくよ。いいね

！ムツツリーニ、秀吉！」

「・・・(ビシツ)!!」

「了解じゃ！」

「皆！準備はいい!?必ず成功させるよ！」

「「「おおおおおおお!!!」」」

清涼祭・・・開始

営業妨害とお仕置き

「いらっしやいませ。中華喫茶『ヨーロッパ』へようこそ」

かくして清涼祭がスタートした。我らFクラスの出し物の喫茶店は男子の何人かに遊ばせるといふ条件でPRのための広告をさせるよう命じた結果、旧校舎の隅の教室の割にはそれなりに客は入ってきた

「序盤でこれなら順調かな？」

「すまないが、3番テーブルにエビシユーマイと烏龍茶の追加じゃ」「了解。」

「1番テーブルのお客さんに胡麻団子とプーアル茶お願い」

「・・・了解」

厨房もホールもそれなりに忙しく動いている。因みに僕は今、厨房の手伝いに入っている、

「・・・胡麻団子とプーアル茶」

「あ・・・わかった」

僕はムツツリーニが作った飲茶をもってホールに運んだ時、ある声が聞こえた

「おいおい、まさかFクラスのくせして随分小奇麗にしてんじやないか?」

「そうだな。仮にも最低クラスで設備最悪のFクラスがここまでやるとはな」

声のほうを見るとそこにはうちの制服を着た二人組が周りに聞こえるような大きな声を出しながら入ってきた。

「なんだ?あの人達は」

見た感じ顔を知ってる連中じゃない。なのに随分と敵対心を持つたような行動だね。何が目的なのかは興味ないけど、少し苛つくな

「見たところ3年生じゃな?しかしなんでこんなところにな」

「というより明らか営業妨害目的で入ってきているよな。たかが清涼祭でなにやってんだか」

こうは言ったがそれは一般的な考え方で俺らからすれば大事な仲間一人の命運がかかっているから内心は穏やかではない

「とりあえずオーダーを取ってくるのじゃ」

そういつて秀吉はすぐさまそのチンピラみたいな上級生に駆け寄った

そして数分経って戻ってきた

「ウーロン茶と胡麻団子2つずつだそうじゃ」

「わかった。ムツツリーニに報告してくれ。僕はあの先輩たちがなんかしでかさないか見ておく」

「了解じゃ」

そういつて秀吉は厨房に入ってしまった

さて：例の先輩たちの様子としては周りをとりあえず見回しているって状態かな

「しっかしここFクラスはカビが入るぐらい汚い教室なのに飲食店をやっているなんて何考えてんだか」

「そうだな。後・・・おいおいこんなぼろい箱をテーブルにしてんのかよ。衛生面最悪なんじゃないか？」

まずい、今最も見られたくないところを見てしまった。それだけならまだいいが、それを周りのお客さんにもわかるように大きな声で話している

「本当だ・・・大丈夫かよ。」

「いくら学園祭でも衛生面ぐらいはね・・・」

この声を聞き流石に危機感しかないな・・・

「迷惑な連中だな」

「どうするのじゃ？このままだと客足が遠のくぞ？」

「うーん・・・そうだね・・・」

いきなりきついな。原因がああぼろい箱ならそれを変えるしかない。だがそれをどこから？食堂？いや、あそこも確か使われている。もっと個人として使われているところと言えば・・・

「秀吉。確か演劇部には劇に使うテーブルとかおいているよな」

「あるにはあるが形も大きさもバラバラなのが2つか3つぐらいしか

ないぞ」

「この際何でもいい。厨房の連中以外の男子総出で運ばせてくれ。こっちは先輩たちの対処をしてくる」

「わかった。それじゃわしは明久たちを呼び戻してくるのじゃ」

秀吉は駆け足でそれぞれの持ち場に移っていった

「・・・さて」

平静な顔で例の先輩たちの所に駆け寄った

「お？誰だあんた？」

「私はこのクラスの代理で代表しています野比というものです。いかがなさいましたか？」

「どうしたって？こんなテーブルで食事できるかよって言いたいんだよ。」

「すいません。テーブルはこちら側の手違いで到着が遅れておりまして・・・こちらで代用しました。不快な思いをさせて申し訳ございません」

そういつて僕は頭を下げた

「代用しただ？それでもし食中毒起こしたらどうするんだ？」

「そうだぞ。どうするんだ？謝って済む問題じゃないぞ」

ここで怒っては信頼を失う。ムカつく言動についてここは我慢だ・・・うん我慢だ

「申し訳ございません。テーブルが届き次第すぐに入れ替えますので少々お待ちを」

「おいおい、そんな悠長に待つてられないっての。時間は限られてんだしき。まあFクラスにしちや上出来だろうがな」

「お客様？御発言にはお気を付けてくださいませ？他のお客様もいらしゃいますので？」

「いいからFクラスは早く行動しろよ？」

・・・そろそろ見下してきた発言に怒っていいかな？

「お客様はこの学生ですよね？このFクラスは今日までどれだけの努力をしてくきましたか？ご存じですか？申し訳ありませんが、当店はあなた方をお客様と認めることができません。あなた方はここへ食

事をしに来たのではないんですか？」

さらに追い打ちを掛けよう。言葉と言う武器でね

「勝手にテーブルのクロスを剥がして、拳句には理不尽なクレームをつける。当然の事ですが、当店で使用している全ての備品はきちんと消毒してありますので衛生面の問題はございませんよ？」

「だから？」

「お分かりでないのですか？このお客様の先ほどの発言ですが、この机にはEクラスにDクラスの方々に協力していただいて、借りているのですが？あなた方は他のクラスも侮辱したのですよ？」

「さつきから言いたいこと言いやがって・・・！」

一人の男が苛立つて胸ぐらを掴んできた。さて、言いたいこといったけどあと、どうしようかなー？

「ゴペツ!!」

すると先輩の一人が思いつきり吹っ飛ばされた

「私が代表の坂本雄二と言います。何かご不満な点でもございますでしょうか？」

後ろのほうを振り向くと雄二が右手をハンカチで拭きながら笑顔で駆け寄ってきた

心の中であえて言おう・・・ナイス！雄二！

「不満も何も今連れが殴り飛ばされたんだが・・・」

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇ですか？」

そんな交渉は（物理）だね？納得

「ふぎけんなよこの野郎！何が交渉術ふぎやあつ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後に『プロレス技で締める交渉術』が控えておりますか？」

「わ、わかった。こちらの夏川を出そう！おれは何もしないから交渉は不要だぞ」

「ちよーちよつと待てや常村！お前、俺を売ろうとしているのか!？」

とりあえず先輩1のモヒカンを常村。坊主頭の夏川の二人だな。また妨害が入りそうだし覚えておこう

出禁できるならしたいけどね・・・

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるか？」

今雄二の仮面がはがれたな。やっぱりこういうことは苦手そうだな。

それと山田くん！常夏コンビとは上手い事言ったので、座布団一枚出してあげなさい！

それか一本としてとって上げてください！

「いや。もう十分だ・・・退散させてもらうよ！」

そういつて常村は退散するが・・・

「そうか。それなら・・・」

大きくうなずいた後、雄二は夏川の腰を抱え込む。

「のび太。お前はモヒカン野郎を頼む」

「わかった。さて、当店の特別サービスとしてお客様をごく丁寧に可愛がってあげます。っはー！」

僕は逃げようとした常村っていう男の首に手をまわし、高々と待ちあげて逆さ吊りにした

「おい！おれもう何もしていないよな!?!どうしてそんな大技をげぶるあつー！」

「俺はもういいって言っているだろう。だからそんな技はぐぼうあつー!!」

「これにて交渉は終了だ」

雄二がバックドロップ、僕はブレインバスターを決めて雄二直伝の交渉術を行使した。できればこの交渉術は門外不出にすべきだが・・・因みにこの技ができるのは昔、友人に技試された時期があつた・・・あれ？思い出したら体が痛くなった・・・

「痛っ・・・お、覚えてろよ!!」

技を受けてすぐに立ち上がり常村を抱えて先輩たちは出ていった
「皆様、お騒がせしてしまい大変失礼いたしました。深くお詫び申し上げます」

「代表として私も謝罪致します。できることなら、ご利用中のお客様はこの後もごゆつくりとおくつろぎ下さい」

僕と雄二、2人してお客様に謝罪します

行かれても困るがひとまず先に食事の場を荒らしたので謝らないと

「気にしなくていい。君達は何も悪くなかったぞ」

「そうよ。このままゆつくりさせてもらおうわ」

「そのかわり、美味いもんを出してくれよ?」

「流石にあのクレームは酷すぎだもんな!美味しいの食べさせてくれ!」

お客様が心広くつて本当にありがたかった・・・

「はい!それと、手違いでこのようなものを使いましたが、たった今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください。御不憫かけまして申し訳ございません」

すると後ろからテーブルが届いてきた。どうやら持ち込めたみたいだね。これなら衛生面に問題ないだろう

「あれ?テーブルを入れ替えているの?」

すると後ろから島田の声が聞こえた。どうやら終わったみたいだな

「あ、お帰り。美波に姫路さん。一回戦はどうだった」

「はいっ。何とか勝てました」

姫路は笑顔でVサインを出した。本来勝負にこだわらない姫路も今回の状況ともなればこだわるのも当然だね

「そんなことより、テーブル入れ替えてもいいの?演劇部になんてそこまで多くはないはずでしょ」

確かに秀吉の話で2つから3つぐらいしかない。少なくともあと2つか3つは欲しい

「残りのテーブルも届き次第順次入れ替えますのでご利用のお客様はこちらのテーブルでおくつろぎください」

一通り説明した後雄二が一息ついて戻ってきた
「ふう・・・のび太。いったい何があった?」

「ごめん。雄二、あの二人が教室に入るなり営業妨害まがいのことをしてそれで対処していたんだけど・・・流石に酷かったからきつい対応

してしまつた」

「そうか・・・」

一通り説明すると雄二は考え込んでしまつた。何か心当たりでもあるのか？

「それより、喫茶店は大丈夫なの？」

「ああ、このまま何も妨害がなければ問題ないな」

まるでこれからの何かあるみたいなものいいだな。でも、あの先輩たちが何もしてこないってことのほうが不思議と考えるべきか

「あの、持つてくるテーブルは足りるんですか？」

「ああそうか。明久。次の試合まであとどれくらいある？」

「・・・あと小一時間つてところかな？」

明久が腕時計で確認したのを聞いた後、少し考え込んで明久に向かって指をクイクイと動かして一緒に行くように促した

「うちらは手伝わなくてもいいの？」

「お前らは喫茶店でウェイトレスをやつていてくれ。落ちた評判を取り戻すために、笑顔で愛想よく、な。のび太は引き続き代表として臨機応変に頼むぞ！」

「はいっ！頑張ります」

「わかつた。名誉挽回してみせる」

「頼んだぞ。おい明久、行くぞ。」

「お客様の呼び出しだね？任せて！」

そういいながら二人は教室を出ていった。雄二がそんなの考え
てると思えないけど、とりあえず！

「よしっ！女子2人と秀吉はホールを頼むね！」

「二はいっ！」

妹登場

あのあと、頑張ってお客様に美味しい料理も提供して後堪能してくれて良かったが、姫路と島田もトーナメント出ているから途中で抜けて僕らはよりいつそう大変だったけど……

「あー、暇だね」

「うむ、あれ以降可笑しい客来てないんだがのう……、客も伸び悩むしのう」

トラブルは無事に解決しても、客が中々来ないこの状況をお互い唸ってながらも、時間をみて今いない四人の話をした

「明久たちは今頃対戦終わったんじゃない？」

「確かにのう。そろそろ戻ってくるはずじゃあ」

そろそろ戻ってくるのではないかと話していたそのタイミングに、がらがらとドアが空く音来たので振り向くと、Eクラスの三上さんが入ってきた

「三上さん？どうしたの？」

「うん、私の仕事はもう今日は早く終わったから、Fクラスの店で今何してるのかな？って思ったのだけど、お客さん今中々来てないのね？」

「うん」

「……折角だから、お店のお薦めで食べていいかしら？」

「わかった！少し待ってくださいね」

僕らはお薦めのを三上さんに食べてもらおうとしてムツリーニに以前美味しいと好評だった胡麻団子と陶器のティーセットを頼もうとしたら……

「……出来た。運んでくれ（ビシッ）」

サムズアップするように僕に向けてそうした。つまりムツリーニにとってもこれはかなりの自信作だと判断した僕は提供した

「お待たせしました。こちらの当店のお薦めの商品でございます。どうぞ後堪能してくださいませ」

「美味しそう……ありがとうございます、頂くわね？」

三上さんはそれを食べると、おいしさに食べていた

「お、おいしい！表面はカリカリで中はモチモチで食感がいいし。甘すぎないのがいい！そしてこのお茶も染み渡る感じがする！凄いわ！」

三上さんが夢中に食べていてくれて、僕は満足だ。すると、タイムングいいの悪いのか、明久が帰ってきたのだ

「あれ？お客さんは三上さんだけ？」

「お帰り、明久。雄二は？」

「雄二ならトイレいってから戻るってさ」

そう話していると廊下から雄二の声が聞こえた

「お兄さん、すいませんです」

「気にするなチビツ子」

「チビツ子ではなく葉月です！」

ガラツと音を立てて扉が開き、雄二が入ってくる。話し相手は小柄なのか雄二の影になって見えない

『んで？どんなやつを探してるんだ？』

雄二が聞いているとうちのクラスが群がって言ったのだ

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だなあ。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたい』

大変だ！うちのクラスから犯罪者が出る前に警察に通報ー！お巡りさんー！ここに一步危ない男がいます！

三上さんも今の会話聞こえたのか、物凄い引いていた顔だった。・・・うん、カバーできないね

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？』

名前がわからない相手でも探してあげようとする雄二。雄二はなんだかんだ言っただけで面倒見がいいからね

『うーんと、えつと……バカなお兄ちゃんでした!』

驚きの特徴?!こんな斬新な聞き方あるんだね……

『バカなお兄ちゃんなら……沢山いるんだが?』

残念ながらこのクラスにたいしてはたくさんいるため、否定できない

『あ、あの、そうじゃなくて、その……』

『うん?ほかに何か特徴があるのか?』

『すつごくバカなお兄ちゃんだったんです!』

はつきりと大きな声で言ったのだ。この特徴からすると……

『『吉井だな』』

『皆、何を言ってるのさ!僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ!絶対に人違い——』

『あつ!バカなお兄ちゃんだ!』

葉月ちゃんが走ってきて明久に抱きつきいたのだ

『絶対に人違い、がどうしたって?』

『……人違いだと、いいなあ……』

明久にとつては人違いであつてほしかったが、どうやら残念ながら、現実はその甘くはないのだった

『つて、キミは誰?見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ?』

あつ、この言い方は不味い。下手すると……

『え?お兄ちゃん……知らないなんて、ひどい……』

あつ泣くパターンだ

『バカなお兄ちゃんのバカあつ!バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃん知りませんか?』つて聞きながらここまで来たのに!』

あれ?なんか急に明久が不憫に感じるな……

『明久——じゃなくて、バカなおにいちちゃんがバカでごめんな?』

『そうじゃなバカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう?』

「バカなお兄ちゃんが、思い出せなくてごめんね」

「ほら、バカなお兄さんが悪かったのだから、まずは泣き止もう？」

僕も三上さんも女の子を泣き止ましていたのだが・・・

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに——」

「え？」

思わず、僕と三上さんは固まってしまい、もう一回聞こうとする
と・・・

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「ぐっふっ?!」

直後、明久の首筋に姫路と島田の攻撃がクリーンヒットした。う
わー、あれは痛いなー・・・

「島田に姫路か。試合は勝ったみたいだな」

落ち着いて雄二は言っていた

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるか
ら」

「こ、こうですか？」

あれは死ぬんじゃないかな・・・いや、明久じゃなくても普通に痛そう
だけど・・・

「ちよつと待って！結婚の約束なんて僕は全然——」

「ふえええんっ！酷いです！ファーストキスもあげたのにーっ！」

ああ泣かせてしまった・・・僕と三上さんは、よしよしとしながら
明久の方を見ていると島田が包丁を要求してて、姫路も明久の口を、
使ってお説教していたのだ

姫路もFクラス馴染んでしまったね・・・悪い意味で

「お・お願い・・・話だけでも聞いて」

「仕方ないわね。2本で勘弁してあげるわ」

「いや、美波？それは犯罪になってしまうからね？」

三上さんが慌てて島田を止めたのだ！よしーこれで収まるはず
「あ。お姉ちゃん。遊びに来たよ」

すると男どもの群集の中からひとときわ小さな女の子が出てきた

「思い出した。あの時のぬいぐるみの子か」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」

明久は何かを思い出したかのように答えた。三上さんが島田に質問したのだ

「そういえば美波も葉月ちゃんの知り合い？」

「あ！美子！知り合いもなにも、ウチの妹だもの」

そういえば所々似ているところはある。勝気な目とか、元気なところとか・・・ あつ、先お姉ちゃんて言っていたね

「吉井君はズルいです。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ両親にも会ってもらっていないのに。もしかして義兄ちゃんになつていたり・・・」

姫路が最近壊れ始めている気がする。原因がこの教室とバカなメンバーでなければいいのだけど

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

そういつて周りを見渡す雄二。確かに客なんていない。まさに閑古鳥が鳴きそうな状態だ。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々話を聞いたよ」

「どんな話なの？」

明久は葉月ちゃんの目線に合わせるように屈みこんで聞いてきた

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいいって」

「それは私も聞いたわ。でも実際に食べていて美味しかったわ」

三上さんもきいていたみたいだ。それでもおいしいと言ってくれて嬉しい！

「・・・さつき来た連中が悪評を流しているのかもしれないのう」

「どうだかな。ひとまず様子見も兼ねて見に行くか」

「そのほうがいいじゃろう」

「お兄ちゃん達、葉月と遊びに行こう」

葉月ちゃんは明久の手を握る・・・時計で時間を確認するとちようどお昼時だ

「ごめんね葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を 成功させ

なきやいけないんだ。」

明久の言い分はもつともだが子供にそう言い聞かせても説得できないと思うけど。だが姫路さんの転校がかかってんだ。必死にはなるよな。

「むく。せっかく来たのに…」

「それなら葉月ちゃんも連れていけばいいと思うよ？ほかの飲食店の偵察をする必要性もあるしね」

僕の言葉にみんなは満足して秀吉が残ってくれるみたいだ

「じゃあ僕達と一緒に飯食べに行く？」

「はいっ！」

さっきの悲しそうな顔から一転して笑顔に戻った。うんうん子供はやっぱこの顔でなくちゃね！僕はその噂はどこに聞いたのか？と葉月ちゃんに聞いたのだ

「えつとですね。短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いる店で」

「よし！雄二。すぐに向かうぞ！」

「そうだな明久、すぐに向かうぞ！我がクラスの成功のために（特に低いアングルから）綿密に調査しないと！」

「アキ最低……！」

「……吉井君酷いです」

「お兄ちゃんのバカ！」

彼女らの罵倒を背に二人はその教室を求め、かなり早足で駆け抜けていった

「頭いたい……」

「のび太君私もついていくわ……あとお疲れ様」

ああ、三上さんの言葉が物凄い癒される……

僕らは葉月ちゃんのいったところに向かっていったのだけど……この嫌な予感なんだろう？まあいいや！行こう

敗者は一人でいい

「明久……やはり、ここに入るのはやめとこう」

「なにいつてるのさ！雄二！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

目的の桃源郷は、我が宿敵のAクラスに「メイド喫茶『ご主人様とお呼びなさい！』』という名前で存在していた

「A組はなんでこの名前にしていたんだろ？」

「うん……」

僕の言葉に三上さんは同意していた。おかしいよね、普通はこんな名前を思い浮かばないと思うのだけど……

「いくら霧島さんがいるからって渋るなよ。僕らからすれば大事なことなんでしょ？なら行かないと？」

「坂本君。女の子から逃げ回るなんてダメですよ」

「でもな……」

後ろから女子たちも追いついてきた。それでもなお渋っているあたり、自分の身の危険を感じているんだろう

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃ……」

「……（パシヤパシヤパシヤ）」

隣で指が擦り切れんばかりにムツツリーニがシャッターを押している

「何をしているんだい？ムツツリーニ」

「……人違い」

当の本人はカメラ片手に否定のポーズをとるが、三上さんは引いていた。うんごめんね？うちのクラスが迷惑かけた……

「どう見ても土屋でしょうが。ここで何しているの？」

「……敵情視察」

最近の敵情視察はカメラでローアングルからとることを指すのか？そんなわけないだろうけど。

「ダメじゃないかムツツリーニ。盗撮なんてしたら。撮られている女の子達が——」……一枚百円」・2ダース買おう——可哀想だと

思わない」

「ちやつかり買つてんじやないか!？」

「ハッ!!」

「……撮り終えたので教室に戻る」

そういつて明久に写真を渡して教室に戻っていった……ムツツリー
ニーはいつか捕まりそうで怖いな……

「やだなく。もちろん処分するに決まっているじやないか。それより
そろそろお店に入ろうよ」

「あ、そうですね。入りましょうか」

「そうそう、はやくいこうつて……これ男の足しかないじやないか!
チクシヨー!」

「吉井君。ちよつといいですか?」

「アキ、ちよつといいかしら?」

さっきの話を聞いていたせいで姫路と島田からどす黒いオーラが
立ち始めた

「三上さん、行こうか」

「そうね。行きましょ?」

「お帰りなさいませ。お嬢様」

「うわ……凄く綺麗だわ……」

確かに霧島さんは綺麗だった。長い黒髪にエプロンドレスの白が
よく映え、黒のストッキングが彼女の美脚を更に際立たせている。同
姓が羨んでも仕方のない麗しさだ

「それじゃ僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ〜!」

「本当ね……」

明久は姫路と島田と葉月ちゃんを連れて中に入る。すると、霧島さ
んは僕と三上さんと同じもうに……

「おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と出迎えてくれた

「お帰りなさいませ。ご主人様。お嬢様」
「ちっ」

雄二もようやく観念したのか渋々と入っていった。そんな雄二に霧島さんはいつものように対応し……

「おかえりなさいませ。今夜は寝かせません、ダーリン」

ちよつとアレンジして出迎えた

「霧島さん、大胆です」

「ウチも見習わないとね」

「あのお姉さん、寝ないで遊ぶのかな？」

「いや、見習うところがおかしいわよ？美波。葉月ちゃん、あと十年は待ちなさい」

島田はどこを見習おうとしていたの？三上さん！葉月ちゃんのナイスカバー！

「ね、お兄ちゃん、お客さん一杯だね〜」

葉月ちゃんの言う通り、この教室はほかのクラスと比べ、席が埋め尽くされていた。意外にも男性客だけじゃなく女性客も結構多いな

「では、メニューをどうぞ」

「ウチはふわふわシフォンケーキを」

「あ、私もそれでいいです」

「葉月もー！」

「それじゃ僕は水で、付け合わせに塩があればうれしいかな」

「僕はアイスコーヒーで」

「私もアイスコーヒーでお願いします」

次々に注文していく中、雄二は……

「じゃあ俺は……」

「……御注文を繰り返します。」

霧島さんが遮るように声を出す。

「……シフォンケーキが三つ、アイスコーヒーが二つ、水一つメイドとの婚姻届が一つ。以上でよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞ！」

「では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください。」

素晴らしいながらつかつかと厨房のほうに戻っていった

「明久！俺はどうしても召喚大会で優勝しなくちゃいけないんだ！」

「ま、まあそうだね」

雄二から並々ならぬ気合が見られるが明久たちとは目的は異なっているだろう。雄二からすれば結婚＝死と思っているだろうし

「ところで葉月ちゃん。ここで噂を聞いたって言ってたけどどんな感じだった？」

「えくとね、葉月ここで嫌な感じの二人がおっきな声で話してたよ」

葉月ちゃんが元気よく言うのと外からドアが開いた音が聞こえた

「おかえりなさいませ、御主人さま」

「おう二人だ。中央の席空いてるか？」

「はい。席にご案内いたします」

「あの人達だよ。さつき大きな声で「中華喫茶は汚い」って言っていたの」

そういつて指さした方向を見ると予想通り例の常夏コンビが入ってきた。やっぱり原因はあの二人だったか・・・すると、三上さんはあの二人を見て嫌そうな顔していたので聞いてみたら・・・

「あの丸坊主の人が私のお尻さわっていたわ・・・」
ピシッ！

「の・・・のび太？」

明久が引いているが関係ない・・・三上さんのお尻をさわった？なんだろ？このイライラ感は・・・落ち着こう

「それにしても、ここの喫茶店は綺麗だな！」

「そうだな。さつきいった2―Fの教室なんて酷かったもんなあ！」

「テーブルが腐った箱だし、虫が湧いていたもんな」

中央の席で大きな声を叫びあう二人。完全に営業妨害だ！これ以上悪評を広められたらFクラスの評判は落ちる。それだけじゃなく、もしこれが姫路の両親の耳に入ろうもんなら即転校につながる。す

ると明久が常夏コンビを止めようと立ち上がったところを雄二に止められた

「落ち着け！今お前がキレたらどうにかなる話ではないだろ？」

「でもここでただ指をくわえてみているだけなんて」

「とりあえず頭を使おう。ただやみくもに突っかかったら危険だ。まずはどうやってあいつらに気づかれずに近づくかだよ」

「そうだな・・・おい翔子」

「・・・何？」

霧島さんが急に現れた上に注文とってまだ数分しかたっていない。時々彼女が忍者の血を引いているのではないかと疑いたくなるような出現の仕方だ

「あいつらここに来たのは初めてか？」

「・・・さつき出て行ってまたはいつてきた。話している内容もずっと変わらない」

霧島さんがその質問には嫌そうな顔しているからAクラスにかなり迷惑かけているみたい

「そうか・・・すまないがメイド服を貸してくれないか？」

「わかった」

雄二の当たり前のように申し込みに彼女はそれに承諾してくれた。しかしこのやり取りを見るとこの二人本当におにゃ...

すっ・・・ぬぎぬぎ・・・

「霧島さん!?!ここで脱いじやダメです！」

「そうよ！ここはケダモノがたくさんいるのよ！」

「わく。お姉さん。胸おつきいです」

「葉月ちゃん、そういう事をここで言っちゃダメよ」

あろうことかその場でメイド服を脱ぎ始めた霧島さんを女子全員（葉月ちゃんを除く）が止めにかかったのだ

「・・・雄二がほしって言ったから」

霧島さんが顔を赤らめて話した。言葉の内容が飛躍しすぎです

「お、おれがほしいのはメイド服のほうで予備があったら貸してくれって意味だ。」

「今持つてくる」

霧島さんは残念そうな顔で厨房に戻っていったのだそんな中、常夏コンビはあいかわらずでかい声で喋っていたのだ

「あの店、出している食べ物も相当やばいんじゃないか？」

「言えてるな。食中毒を起ささなければいいけどな」

「2―Fには気を付けろってことだよな」

そしてそんなことをしている間にも悪評が伝わり始めている

「雄二。なんでもいいから早く連中を」

「いいから少し待つてろ。姫路に島田、後は三上だな。櫛とか化粧道具持つてないか？」

「は、はあ。持つていますけど。」

「すまないが貸してくれないか？」

雄二がそう言うのと姫路さんはポケットから小さなポーチを取り出して雄二に渡した。なんとなくすることはわかったぞ。でもいったい誰がするんだ？

「すまねえな。後で返す」

「・・・雄二、これ」

霧島さんも更衣室からメイド服を持つてきてくれた

「ああ済まない。」

「・・・これで貸し一つ。」

「だ・・・そうだ」

そういつて僕のほうを見る。何を求めているんだ？まあ、明久に目のアイコンタクト取ったら決まった

「分かった。今度一日雄二を好きにしていよいよ？ただしやり過ぎないようによね？」

「分かった・・・野比は良い人・・・」

雄二が叫んでるけど気にしない。うん、この間の仕返しなんて思ってもないよ？うん釘も指したし問題ないはず

「ところで雄二。メイド服と化粧道具で何するの？」

「・・・着るんだ」

そりゃあメイド服は着るものだからそれ以外の用途はないけ

ど……。主語がないぞ

「だつてき。姫路さん」

「え？わ、私ができるんですか？」

「馬鹿言うな。姫路が行っても攻撃できないだろうが」

確かに姫路が行ったところで注意できないよな。行っても何も言えずに戻つてきそうだし

「それじゃ美波？でもその服だと胸がぶべらあつ!!」

「ツギハ・・ホンキデ・・ウツ」

明久の一言で島田から並々ならぬ殺意が芽生えている。その姿は阿修羅も泣いて逃げだしそうな迫力だ

「島田もだめだ。顔が割れてしまುದろ。三上もだめだ」

「まさか・・・」

明久が恐る恐る聞くと・・・

「おまえが着るんだよ、明久」

「いやあああああ!!」

「僕は絶対嫌だよ!!雄二かのび太が着ればいいじゃない!」

「こんなガタイした女子がいるか？」

「それに僕達は一回こいつらに関わつたしね」

僕らは彼らに交渉（物理）をしたため、幾ら女装をしてもばれる可能性が高い。それなら唯一関わっていない明久にやってもらうのが適任だ

「僕は絶対に嫌だ!!」

「それだったらあつち向いてホイで決めよう。そしてその勝負では絶対言い訳しない」

「いいだろう。受けてやる!!」

「最初はグーじゃんけん」

明久：パー

野比：グー

僕の負けか

「あつち向いて!!」

そういうと明久は僕の顔めがけて人差し指を突き出してきた。お

そらくよけたときに向いた方向を誘うっていう魂胆だね？ だけど甘い!!

「ホイー！」

バシヤツ

「ぐわっ！」

野比：左

明久：上

「何!？」

僕はさつき届いた水を明久にかけて視界をつぶしたところで向けた指と異なる方向に首を向いた。卑怯だって？ 僕だって女装されるのは嫌なんだよ？ それに先仕掛けたのは向こうだから正当防衛！

「己。なんと卑怯な!!」

「先に明久がしたことは何？ それを棚にあげる気？」

「……よしっもう一回!!」

先に姑息な手を使っておいて何もなかったことにする気か？

「最初はグーじゃんけん」

明久：チヨキ

のび太：グー

よし、さつきの仕返しだ!!

「あっち向いて!!」

「あ、彼処に凄く可愛い人がいるよ」

そういつて僕は明久に向けて指を出した瞬間、外の方に目を向けた

「ふっいくら僕がバカでもそんな小細工は……」

チリーン

「へっ?」

「ホイー！」

のび太：下

明久：下

「僕の勝ちだね?」

そういつて僕は落とした小銭を拾った。実はわざと小銭を落として明久の気をそらしたのだ。でもただそれだけだと気は逸れない。

一度、明久の気が緩んだところでやらないといけないため、あんな嘘をついた

「そんな手はあるか！これは無効試合だ！」

「最初に仕掛けたのはそっちでしょ？敗けは敗け！」

僕がそういうと明久がおとなしく項垂れるように落ち込んでいた

Fクラスの報復

「こ……この上ない屈辱だ」

「明久。存外似合っておるぞ」

僕達は今男子トイレで明久にメイド服の着付けとメイクを施していた。僕と秀吉で明久の着替えをさせていたのだ。万が一逃げ込まないように見張らないとね？

しかし……

「これだったらすぐに誰だか見当はつかないよね？」

「うむ！それじゃわしは喫茶店に戻るぞ。存分に悪者をのしてくるとよい」

そういつて秀吉は一足先に戻っていった。わざわざ忙しいのに来てくれてありがたかった

「それじゃこつちも行動に移すか！行こう！」

「で……できれば行きたくない」

「大丈夫だつて。これだと明久だつてすぐにばれないしき。……勝負に敗けたのだから行こうか？」

「ヴっ……わかりました」

僕は明久と一緒にAクラス前まで一緒に向かうと三上さんが教室の前で待つてくれたのだ

「あつきたきた。のび太君に吉井く……」

三上さんは明久の姿を見て固まったのだ。そして、その姿を見た第一声は……

「意外と似合ってるわね……」

「出来れば、見ないでください……あと誉められても嬉しくない……」

そんなやり取りをしながら、A組の人が明久を呼び出して、連れていったのだ……僕と三上さんは元の席に戻って雄二に聞かれた

「どうだった、明久は？」

「あれだとすぐに誰かなんてわからないわ」

「うん！後は明久がうまくいつてくれることを祈ろうか。女子たちには平静を装うようにいつているから問題ないけど、明久だからね……」

「ああ、納得・・・」

僕らは今、姫路さんたちは葉月ちゃんたちと一緒に到着したシフォ
ンケーキを食べているところだ。これなら僕らが関与しているとは思
うまい。そうこうしているうちに明久が店内に入ってきた。そ
してその手には箒とちりとりが握られている。本当に失敗しないで
よ？

「すみません（裏声）」

「なんだ？へえ、こんな子もいたのか」

「結構かわいいな」

例の常夏コンビが明久に話しかける。相手の表情や動作から見て
気づいていないね

「お客様。足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？（裏声）」

「掃除？さっさと済ませてくれよ」

そういつて夏川は足元をどける。完全に気付いておらず気を許し
ているね？後は明久次第だ

「ありがとうございますー！それでは・・・」

明久は箒と塵取りを置いて夏川の腰に手をまわした。あれ？これ
どっかで見たような・・・

「お？どうしたんだ。もしかして俺に惚れてー」

「くたばれーっ!!」

「ごばああっ!!」

渾身のバックドロップが決まった。これで夏川は二度目の脳天直
撃となる。 ストライカー！

「お、お前はFクラスの吉井!?まさか女装趣味とは・・・」

常村が明久に気付いたようだ。ここでFクラスの悪評を広められ
ては困るから・・・

「キヤーこの人、私の胸を触りました。（裏声）」

「ちよつと待て、バックドロップするために当ててきたのはそつちだ

し、そして何よりお前は男だとーぐぼおあっ!!」

明久がフオローしたことでこちらが駆け寄る理由が生まれ、痴漢撃退という大義名分の下で俺たちが乱入してきた

「群衆の面前で破廉恥行為とは・・・恥を知れ、お前ら!!」

「どこ見てんだ!? どう見ても被害者はこつちだろ!」

そんな彼らはそう言うが三上さんは丸坊主の男に指を指して先ほどのクラスでの痴漢を声だしたのだ

「皆さん! この丸坊主の人は私のお尻も触っていました!! このモヒカの人もです!」

「げっ!? お前はーぐぼら!」

「いやー、まさか、女性に痴漢もやっていたなんて・・・否定もしていませんでしたから、確実に黒ですわねー?」

これだけいえば非は相手に移るはず。周りも何事かと思いつてくる。これならこつちに分がある・・・三上さんは先ほどのお尻触られていたのが怒りにたまっていたのかビンタをしたのだ。うん! ビンタは痛いね・・・

「とりあえずちよつと説明してもらえますか。ウエイトレスは倒れている人をちよつと裏に運んどいてー」

僕は明久に夏川を捕まえるよう指示した。明久は夏川に何かしているように見えるが何してるんだ?

「くそつ。行くぞ夏川!」

「くそつ、これ取れねえぞ!? 覚えてろよ変態め!!」

僕も追いかけてしようとしたが雄二が明久と追いかけるから、店の方に戻ってくれと言われたのだ

変態に変態と言われた・・・何か変な光景だな・・・そろそろお会計頼もう

「すみません! お会計お願いします!」

「・・・夏目漱石2枚か坂本雄二一名どちらがいいですか?」

あれ? この選択は・・・ごめん、雄二。みんなのためにささやかなプレゼントになってくれ

「坂本雄二一名で・・・」

「・・・またのお越しをお待ちしています」

霧島さんに見送られ僕らは教室の外に出たのだが・・・

「雄二の方でお支払してしまっただけ・・・」

「まあまあ・・・のび太君。戻りましょう？」

自己嫌悪に落ちている僕に三上さんは慰めてくれたのだ。うう、癒される・・・

遠くの方では明久の叫び声が聞こえたけど何しているのかな？

まあ、とりあえずお客様を満足させにいかないと！

チャイナ服の交渉

「へえ、葉月ちゃん。お父さんは遠いところで働いているのか」

「はい！年に2、3回ぐらいしか帰ってきませんがその時にお土産とかいろいろなものを持ってきてくれるんです」

「そうなんだ。でも寂しくない？」

「ちよつと寂しいですけどいいんです。それにおねえちゃんがいますし・・・」

僕たちは今教室で葉月ちゃんと話をしている。というか客が全く来ないためか仕事がないため話すしかやることがないからだ

「ういーす。今帰ったぞ」

「どうだった？」

「うん。特に問題なかったよ」

「しかしあれを残しておいて正解だったな」

あれ？あれって何のことだろう？

「何があつたのじゃ？」

「実は・・・」

簡単にまとめると3回戦の相手はBクラスの根本とCクラスの山さんの二人で以前、撮影した根元の女装写真集を盾に明久たちは不戦勝をとつたらしい。あのおぞましいものが映つたのを持っていたとは・・・三上さんには見せれない！

「こつちもいい加減建て直さないと本気でまずいね」

このままだと客は絶対に来ない。何かインパクトのあることをしないと寄ってこない。ましてやここは旧校舎で奥ばつたところにあるため、人もそんなに来ないのが現状である

「雄二は何かいいアイデアない？」

「あるにはある。少し安直すぎるかもしれないが、効果は抜群だ」

そういうと雄二はバックから一着のチャイナドレスを取り出した

「なるほど。これならすごいインパクトだし、客が集まるかもしれないね」

本当に彼はこういう時は用意周到で無駄がない。だが用意したも

のが用意したものだから変な疑念を持たれるのは仕方ないが・
「でもこれなら絶対成功するよ。これを――」

「明久。お前が着ろ」

雄二は当たり前のように明久を見ていった。これ以上明久をさらし者にする気か？

「お願い。メイドの次はチャイナとなると僕の女装趣味疑惑が確実なものになっちゃうから」

「あれ？そうじゃないの？」

「三上さん！僕は健全な男子高校生です。決して女装好きの変態じゃありません!!」

最近、明久が間違った方向にみられ始めている気がするが明久、お前のいう事は何度も女装をさせられている秀吉がド変態だといっているようなものだぞ

「冗談だ。これを秀吉と女子全員に着てもらおう」

「わしがきるのは冗談じゃないのかのう」

「たつだいまゝ。あれ？アキ、メイド服もう脱いじやつたんだ」

「あ・・・残念です・・・結構かわいかったのに」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいなゝ」

女子の面々が揃いにそろって何言っている。例え似合っていたとしても健全な男が女装するというのはこの上ない苦痛だぞ。本当にそういう趣味がある人はまた別だが明久がかわいそうだ。

「ははは。残念ながらタダで人のコスプレを見せるほど世の中甘くないよ」

目が笑ってないね・・・まあ気持ちわかるけど、とりあえず、明久はチャイナ服を片手に出入り口をふさいだ。僕は反対側の出入り口をふさぐ。こうもしないと逃げるから
「な、なんだか皆さん。目が怖いですよ？」

「すごく邪悪な気配を感じるんだけど・・・？」

二人が若干引き気味に俺達を見る。

「やれ、明久」

「オーケー。へっへっへ。おとなしくこのチャイナ服に着替え・・・」

次の瞬間・・・島田は明久に顔面パンチ↓明久のふくらはぎにロキック↓明久はよろめいたのを逃さずには鳩尾にパンチ↓明久は倒れてしまった

「マジすんませんした！自分が調子くれてました！」

「弱いなお前・・・」

「でもどうしてそうなったのよ。確か須川の話じゃチャイナ服は着ないって話になっていたじゃない？」

「店の宣伝のためと、明久の趣味だ。明久はチャイナ服が大好きだったよな？」

雄二がニヤつきながら明久を見る。店の宣伝はまあ正論。でも明久の趣味ってのはどうなんだといたいのが彼女たちを動かすためには彼の協力は必須か。

「大好・・・愛してる」

「なんでわざわざ言い直したんだ？」

「しょ。しょうがないわね。店の売り上げのためにしかたなく着てあげるわ」

「そ、そうですね。お店のためですしね」

さつきまで渋っていたにもかかわらず急な変わりよう。本当にわかりやすく助かるよ

「ねえお兄ちゃん。葉月の分は？」

「ん？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い・・・？あ、うん。手伝うから葉月にもあの服ちようだいー！」

葉月ちゃんは島田のチャイナ服を指さして言った。手伝ってくれるのはうれしいけど労働法に引つかからないかな？まあ、学園祭だし問題ないか

「ごめんね。お兄ちゃんたちもうれしいんだけど葉月ちゃんの分が今・・・」

「・・・！！（チクチクチクチク）」

明久が断ろうとしたら、隣にムツツリーニーがすごい勢いで裁縫し

ていた・・・はやっ!?

「ム！ムツツリーニ・・・どうしてそんなすごい勢いで裁縫をして!?!それにさっきまでいなかったよね」

「・・・俺の嗅覚をなめるな」

セリフだけ聞けば十分かつこいいんだが、今その状況で言ってもただの変態発言にしか聞こえない不思議だよー

「それじゃ大会が終わった後に着替えてきますね」

「いや、今着替えてくれ」

「へ？」

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」

確かに店で着替えても客のいないこの状況じゃわからない。だったら公衆の面前で行っている召喚大会で彼女の姿を見せれば客は来るだろうな

「これを着て出場しろっていうの・・・？」

「さすがに恥ずかしいです・・・」

二人が渋るの無理ないよな。大勢の前でチャイナ服を着るのは恥ずかしいだろうし、なによりそのチャイナ服、スリットがかなり深いため、生足がかなり見えてしまう

「二人とも。お願いだ」

「明久・・・お前本当にチャイナドレス好きなんだな」

「もしかして二人とも。私の事情を知って・・・」

「し、仕方ないわね。クラス設備のためだし協力してあげるわ。ね、瑞希？」

姫路の言葉を遮って島田が姫路さんに聞いてきた。今ここであればたら姫路が変に考え込んで負担をかけかねないし、ナイスフオローだ。

「あ、はい。これくらいお安いご用です」

「それじゃそれを着て大会に出てくれ。そしてその時Fクラスであることを強調するんだぞ」

大会に出てFクラスを強調すれば店の宣伝とFクラスにもこれだけの猛者がいるという証明になって一石二鳥だ

「オツケー。任せといて。行くよ。瑞希」

「はいっ!!」

「折角だし、私も着替えるわ」

「いいの?他のクラスなのに」

「大丈夫よ。代表もクラスの皆も許可もらってるから手伝うわ」

「ならお願いね。三上さん」

そういうと3人は教室から出ていった。三上さんが手伝ってくれるのはありがたい

「・・・できた」

「わ、このお兄さんすごいです!!」

そしてこうしている間にムツツリーニが葉月ちゃん用のチャイナ服を完成させた。彼はエロの要素が絡むとここまでの力を発揮するのか?末恐ろしい・・・

「それではわしも着替えるとするかの」

そういつて秀吉が服を脱ぎ始めると明久が止めに入った

「ちよつと秀吉!!ここで着替えるの!?!きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ!」

「・・・最近。明久がわしのことを女としてみているような気がするんじゃないが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉は性別が「秀吉」でいいと思う。男とか女とかじゃないさー」

「俺がいったのはそういう意味ではないんだが・・・」

「あれ?違う?」

うん。明久の間違いだよ・・・

そんなこと話していると・・・

「んしよ、んしよ・・・!」

「・・・! (ボタボタボタ)」

葉月ちゃんも秀吉同様にその場で着替えたところをムツツリーニが見た途端、膝をつき、ものすごい勢いで鼻血を出し始めた。小学生の裸を見て鼻血を出す

「は、葉月ちゃん！君もこんなところで着替えちゃダメだよ。ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

「とりあえずいったん着替えておねえちゃんたちのところに行つて。案内するし」

「え？はい。わかりましたー」

そういうと葉月ちゃんは脱いでいた服をもう一度着替えてチャイナ服を持った。子供というのはこういうのがあるから心底驚かされる。僕もそんなことを考えている時点でムッツリーニと同等なんだから・・・何か昔のこと思い出して泣きたくなつた・・・

「とりあえず僕は葉月ちゃん連れていくし、明久はムッツリーニの治療にあたつてくれない？」

「オツケー。ムッツリーニ！しっかりするんだ!!今輸血をするから！」

「・・・き・・・キャラプリ・・・」

「ムッツリーニ!!」

あの二人の会話に突っ込み入れるの疲れるから逃げたところだけの話だ・・・

襲撃と死刑執行直前

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

姫路さんと島田の声が聞こえる。この様子を見ると召喚大会には勝ったみたいだ

「おかえり、丁度よかったよ。二人とも疲れているところ悪いけどホールに回ってくれる?」

あの後、明久がチャイナドレスに着替えた秀吉と葉月ちゃんを連れて校内を歩きまらせるように頼んだ。そのおかげ最初はまばらに来ていたお客さんも今は満員状態になっている。宣伝の効果は抜群だ
「へえ、凄いお客さん。最初の頃よりずっと多いわね」

「良かったですー」

「女性客も結増えているんだ。味の噂も流れ始めたんだろうね」

最初はチャイナ目的の男ばかりだったが、次第に女性客が増え始めている。うちの店の味も伝わってきているといってもいいだろう

「二人とも、来たばかりで悪いけどウェイトレスお願いしてもいい?」

「はい!」

「オツケー!」

チャイナドレスの裾を翻して注文票やペンを取りに行った。これで更に客が増えること間違いなし!!

三上 side

私は今、のび太君達のお手伝いをしている。詳しい事情はわからないけど、成功させないといけないのなら、私は手伝うって言うとのび太君が心配そうに聞いてきたが、クラスの許可もらってるから心配ないと引いてくれた

「君、ちょっと注文していいか?」

「はい!お待ちください!」

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

あつ、この先生は竹原教頭先生だ。うちのクラスの何人かはこの先

生の評価高いけど、私は何かこの先生苦手だ

「はい！本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？かしこまりました」

メモを取り、注文の確認の為にお客様に笑顔を向ける

「では、少々お待ちください」

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

クラスのこと聞かれたら嫌だな。つて思いながらも笑顔で振り向いて聞こうとし

「はい！構いませんよ？」

「このクラスに吉井明久という生徒が居ると聞いたのだが、どの子かな？」

「吉井君はあそこのウェイターですよ」

「ああ、そうかい。彼が——吉井君（笑）か」

「竹原先生。人の名前に（笑）はおかしいと思いますよ」

吉井君・・・職員室で何て呼ばれてるのか分かつちゃった・・・

「美子！厨房の土屋から伝言。茶葉が無くなったから持ってきて欲しい、だって」

良いタイミングよ！美波！

「竹原先生、失礼します」

「ああ、特に用はなかったからね」

「ならなんで明久君が誰かを聞いてきたんだろう？まあ明久君有名な人だから？」

「三上さん、ムツツリーニが急いで欲しいって言ってるよ」

「うん。ところで・・・吉井君、また何かしたの？」

「？何が？」

「まあいいや、明久君も一緒に行かない？てか手伝って」

「あ、うん。いいよ」

本人も心当たりないみたいだから、とりあえず、頼まれたことをやりに行こう

私と吉井君は目的の場所につくも、どれくらい持っていたら良いのか?と考えていると・・・

「おい」

「うん?」

呼ばれた二人は振り向くと吉井君とは年が変わらない男が三人いたのだ

「そうはいかねえ。吉井明久に用があるんでな」

「そう言いながら一人が後ろ手でドアを閉める

「え?僕?」

「お前に恨みはねえけど、ちよつとおとなしくしてくれや!」

「そういいながら吉井君に殴りかかってきたのだ

「ちよつと待った!人違いじゃないの!?!」

「いやっ!」

「げふうっ!!」

吉井君は屈んで拳をかわし、立ち位置を入れ換える。私は空振りした男の腹に蹴りを入れ、倒れた上を踏み付けて扉側に行く。誰か助けに来てくれたらしいんだけど・・・

「嘗めた真似しやがって・・・」

「逃げんなこらっ!」

倒れた男も立ち上がる。どうしよう。扉側にいるから逃げるのは簡単だけど、それだと喫茶店にこの連中が来てしまう・・・どうしよう?」

その時、ガラツと音をたてて扉が開いた

「三上さん!明久!大丈夫!?!」

「のび太(君)!!」

登場したのは、エプロン姿でフライパンとおたまを持ったのび太君・・・助けに来てくれたんだ・・・

「あ?おい、コイツどうする?」

「面倒だから一緒にやっちまおうぜ」

「そう言つて、三人がのび太君に襲い掛かる。危ない!!

「はあ・・・はっ!!」

ガンツゴンツガンツ!

けど、のび太君にフライパンとおたまで返り討ちにされる。おたまでの確に相手の頭にクリーンヒットって・・・凄いい

「ふっ・・・またつまらないものを撃ち抜いた・・・」

倒れている三人のを一瞥して言うところのび太君が凄く格好良かった・・・

のび太side

さて、状況把握だね。僕はさっきまで、厨房にいたが、見慣れない三人組が向かっているって、ムツリーニーから連絡くれたのだ

「おい!のび太、こいつらはなんだ?」

後から来た雄二が倒れてる三人組をみて聞いてきたのだ

「ムツツリーニから不審者情報もらったから駆けつけたの。それと、こいつらは明久と三上さんに攻撃しようとしていたの」

「なるほどな・・・」

「でも、何で僕は狙われたのだろ?」

「大方、売れ行きがよくなったFクラスの妨害でもしに来たんだろ」

「さすがに、そんなバカな人いないよ」

明久が雄二の答えに否定したが、確かにその可能性はあるけど、とりあえず、ムツリーニーが

待つてるから急がないとね

「どうだかな。とりあえず急いで戻るぞ。ムツツリーニが待っている」

雄二も同じこと考えていたみたいだ

僕らは教室に戻り、いつも通り作業をしていたのだが、2時間ほどたったころ雄二が時計を見て持っていた伝票を置いた

「明久、そろそろ4回戦だ。」

「え?もうそんな時間。」

時間は午後2時、召喚大会は2時30分開始となっているためそろそろ準備しておかないと間に合わない。

「あれ、アキたちもそろそろなの?」

島田がそう言いながら持っていたトレイを置いた。そういえば対戦表を見た限りそろそろ・・・

「お兄ちゃん。葉月を置いてどこかに行っちゃうの?」

葉月ちゃんが寂しそうな顔をして明久のズボンの裾を掴んで立っていた

「葉月ちゃん。今アキ・・・バカなお兄ちゃんは大事な用事があるから、ちよつとまっててね。」

「うう。でも・・・」

「のび太? さつきなんで僕の名前を言いかけてそつちを言ったの?」

明久が寂しそうな顔をして尋ねる。だって葉月ちゃん、さつきまでの言動を見て明久の名前知らなそうだし。そして今の葉月ちゃんはまだまだ納得しなさそうにうつむいた

どうすべきかと思っていたところに雄二が葉月ちゃんと同じ目線に立って

「その代わり、いい子にして待っていたらバカなお兄ちゃんが大人のデートを教えて

くれるからな。」

「葉月。お手伝いしてくるです!!」

雄二の言葉で一気に表情が明るくなり、トレイをもって走り出した「ち、違うんだよ葉月ちゃん。僕は君が期待するような財力はないんだ。ねえ、聞いている?」

ガシツ!

「アキ、ちよつと校舎裏まで来て。」

葉月ちゃんの姉である島田がいつもより二回り低い声で明久の肩を掴んだ。あの雰囲気からして妹を守るためだけの行動ではないだろう

「待ってください。美波ちゃん」

ここで姫路さんが二人を止めた。でもこのパターンだと・・・

「次の対戦相手は吉井君たちのようですから召喚獣でお仕置きした方が遠慮なくできますよ?」

えげつないこと言ってきたよ・・・この人は。しかも目がなんか怖い。輝きの無いどす黒いものが見えてきそうだ。それに相手はたかが小学生だろ。高校生がそこまでムキになることはないと思うのだが・・・

「ちよつと待って。僕の召喚獣はダメージのフィードバック付きなんだよ姫路さんの召喚獣で攻撃されたらただじゃ——」

「フン。望むところだ」

「・・・雄二。お前は明久の味方じゃないのか?」

「悪いが俺はあんな馬鹿をメンバーに入れたのは俺の生存確率を上げるためのただの駒であり、壁役だ」

「雄二! 僕を入れたのは召喚獣の操作で勝っているから入れたんじゃない?」

「アホか、それならのび太が入れた方がまだ、勝率上がる。だがお前みたいなバカだと扱いやすいからお前を選んだんだよ」

「おのれ!! 雄二!!」

「上等よ。アキがどんな声で啼くのか楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら明久にどこまで大きな悲鳴を上げさせられるのかじっくり見せてもらおうじゃないか」

本当に、雄二と明久が仲が良いのか? って聞かれたら即答で答えられない・・・

「ねえ、のび太・・・」

「・・・何? 明久」

「先に遺書を書いておいた方がいいのかな?」

「書いた後、意地でも生き残れ! 僕からはそれしか言えない・・・」

「無理だって、相手はあの姫路さんと美波だよ。勝てっこないつて・・・」

「こういう時は頭を使おう。テストの結果が強さだけじゃないでしょ

？」

僕らがそう話していると雄二が明久を呼んでいた

「ほら、明久。さっさと行くぞ」

「そうよ。アキ。今からあんたの死刑の執行をするんだから」

「……はい」

この時、僕はただ見送ることしかできなかったがその時の明久の背中はどこか悲しげで哀愁すら漂わせるものだ

僕が考え事していると……

「ねえ、のび太君……助けてくれてありがとうね」

「ううん。三上さんが無事で良かった……困ったら必ず助けるからね

？」

「うん……」

明久が去った後に僕らがそんな会話していたのは誰も知らない……

準決勝Aクラス

午後二時過ぎ、僕と三上さんは中華喫茶の窓際の席で休憩していた
「ここから試合が見えるよ」

三上さんは窓から双眼鏡で試合会場を眺めている。たしか、次の試合は姫路達とだったね

「のび太君も見る?」

三上さんが（康太の）双眼鏡を渡してきた

「ありがとう!三上さん!」

双眼鏡で試合会場を眺めると・・・

なんだろう、島田と姫路の後ろに黒く、まがましいオーラが見える。うわつ、雄二が明久ごと姫路を吹き飛ばした。明久はフィードバックがあるのに。あ、島田が一瞬でやられた。まあ古典だから仕方ないか、6点って表示されて・・・やっぱり雄二たちの勝ちだった・・・さて、飲み物買いにいくか

「卑怯者・・・」

「二人とも酷いです・・・」

「あ、いや。あれも勝負だったからさ・・・ね?」

僕が三上さんと自販機で飲み物を買った帰り、試合を終えた明久達に会った。今、明久は島田と姫路にじっと見られている

「二人ともそう言うな。お前らの代わりにしつかりと俺たちが優勝してやるから」

「あの、絶対に優勝してくださいね・・・?」

姫路が明久の顔を上目遣いで覗きこんでいるけど、あれは凄い威力だろうね・・・明久が顔真っ赤だもの

「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部うまくやってみせるさ!」

「やれやれ。それならこの後の対戦は気合いを入れておけよ?」つと。ほう。なかなか盛況じゃないか」

「でしよう?三上さんと葉月ちゃんも頑張ってくれたからね。姫路達

も頑張ってくれたし、ありがたかった」

「良かった。宣伝の効果があつたみたいですね」

坂本が感嘆すると僕が二人が頑張ってくれたお陰というと姫路が嬉しそうに笑っていたのだ。島田も笑いながら答えた

「そうでなきや、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

Fクラスには更に客が入っていた明久たちの試合前の宣伝が効果を発揮したしね。雄二もよく考えてる

「あーバカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

店の中からと葉月ちゃんが駆け寄ってくる

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

明久が葉月ちゃんの頭撫でると嬉しそうに猫なで声をだしていたのだ

『お、あの子たちだ！』

『近くで見ると一層可愛いな！』

『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

ふと客の中からそんな声が聞こえた。やはりチャイナドレスの効果は絶大だな。

「明久、戻ってきたようじゃな。どちらが勝つたのじゃ？」

秀吉がトレイ片手に寄ってきた

「雄二、かな？」

「そうね。坂本の一人勝ちね」

「ですね」

「？明久は同じチームなのに負けじゃつたのか？」

秀吉の疑問はもつともだが、ある意味負けたのは明久一人だ。見ていたから分かる

「そんなことよりも、ウエイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

客の視線がこちらに集中しているけど、綺麗どころが固まっているのだから無理もない

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないとイケませんよね！」

「そうね。ちよつと視線が気になるけど、売り上げの為にも頑張りますか!」

「はいっ。葉月も頑張りますっ!」

「ワシは一応男なのじゃが・・・」

「秀吉君。絶対に性別をバラしちゃダメだからね?」

三上さんの言う通り客の夢の為にも売り上げの為にも、秀吉には完璧な女子でいてもらわないと困る

「やれやれ、仕方ないのう……あ、いらっしやいませー!中華喫茶ヨーロピアンへようこそー!」

客が来た瞬間に秀吉の口調が変わった。本人の気持ちとは裏腹に演劇魂が勝手に反応しているみたいだ

数時間たつて・・・

「さて、こつちもそろそろ準決勝か。明久。それと秀吉とのび太。そしてムツツリーニ。ちよつと一緒に来てくれ」

「どうしたの?雄二」

「次の相手は俺の予想だとまともにやっても勝ち目なんてほぼない。だからお前らの連携が必要なんだ」

なんだかんだでもう準決勝だ。ここまで来れば正攻法ではまず無理だろう。雄二も何か対策を持つていくだろうが今回は僕らも使うみたいだね

「何考えているかわからんが重要な話じやろうし協力するぞ」

「すまないな。秀吉。お前は特に重要な役割だ。頼んだぞ」

そして僕達は姫路さん達に店を任せて準決勝の会場に向かうことにした。だがこれが後にとんでもないことになるとは僕達は思いもしなかった

あの後、雄二が手伝って欲しいと言われて僕は今、二人と共に行動していた。店の方を手伝うっていったのだけど、三上さんが「私が手伝うから大丈夫よ。のび太君は休みなさい」って言われたのだ・・・さつき休んだような気がするけど・・・お言葉に甘えよう

「お待ちせしました！これよりタッグマッチ戦準決勝を開始したいと思います！」「

僕らが到着すると、審判を務める地理・世界史担当の先生のアナウンスが流れた

「それでは出場選手の入場です！」

まるで格闘技の入場みたいだと思いつながらお客さん達の前に立つ。因みに僕とムツリーニはセコンドということで明久たちの後方に立っている。明久たちの向かい側からは対戦相手の霧島さんと優子さんがやってきた。Aクラスのエースなら確かに普通に戦って勝てる相手じゃない。そう、普通の相手なら……

「雄二、作戦は？」

「任せておけ。抜かりはない——頼むぞ秀吉っ！」

雄二が目の前の優子さんに向かって秀吉と呼びかける

雄二の作戦は同じ兄弟の木下優子に秀吉が入れ替わることで1対3にもつれこまず作戦……しかも見た目だけでは教員でも同じAクラスの霧島さんでも容易に特定できない！考えたね？雄二！

「ああ、秀吉なら……」

と、優子さんがステージ脇の一角を指差す

「ひ、秀吉!?! どうしてそんな姿に！」

そこには手足を縛られた秀吉がいた。

「バ、バカな！」

「……雄二、邪魔しないで」

「そうは行くか。俺はまだやりたい事がたくさんあるんだ！」

雄二のセリフを聞くとどこか死亡フラグのように感じてしまう……

「雄二の考えてる事くらい、私にはお見通し」

「ま、秀吉が私に向かって嵌めようとするのはまだまだ甘いわね」

「くっ……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」

「……!! (パシャパシャパシャ)」

捕まっている秀吉の様子を見てムツリーニがお得意の高速連射

で写真を撮っている。しかもチャイナドレスで縛られているため、生足が露出してかなり扇情的というか艶めかしいというかどこか色っぽく見える。何度も言うが彼は男なんだが……

「撮影なんかしてないで、早く秀吉の縄をほどいてあげてよ！（その秀吉の写真、後で売って欲しい）」

「明久、建前と本音が混ざってるよ?!」

その間にムツツリーニと僕で秀吉の縄を解いた

「すまぬ。おぬしら。わしがもう少ししっかりしていれば……」

「気に病むことじゃないさ。でもこの状況をどうするかだね……」

「……良いブツもそろえられたし文句は言わない」

あえてスルーしよう

圧倒的に不利になってしまうことは明白だ。すると明久は雄二のもとにささやき始めた。すると雄二は先生からマイクをもらい、霧島さんに語り掛ける

（翔子、俺の話を聞いてくれ）

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

（お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ）

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

「……雄二の考え？」

（俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張って

お前と幸せになりたいんだ！）

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたい……って、ちよつと待て！」

「……雄二」

おそらく霧島さんを雄二に押し付けて勝負を避けて勝利しようという算段か

だが雄二からしてみればそれは手足を縛られた状態で地獄行きの船に乗せられているのと同じようなことであるため、必死に抵抗する。だが明久はそうはさせないと強引に雄二の頭を押しさえつける。一方、霧島さんは雄二の台詞に、うっとりとした表情を浮かべ始めた。好きな人に言われてんだ。うっとりするのも当然だろう

(だから、ここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう!)
「だつ、誰がそんな事言うかボケえツ!!」

あ、やっぱり抵抗したか。仕方ない。明久に雄二の首筋(頸動脈)を
押さえつけるよう指示した。勝つためなんだ!許せ!雄二!!

「くたばれ」

「くペっ!?!」

「.....雄二?」

続きの台詞を待ち望む霧島さん。すると秀吉からメールが届いた。
内容は雄二の声真似を頼むと書かれ、下に内容が記載されていた

(それじゃあ秀吉、頼んだよ)

(うむ、了解じゃ)

僕の指示に従い、秀吉がゆっくりと深呼吸し...

「だからここは譲ってくれ。そして優勝したら結婚しよう。愛してい
る翔子」

本人と区別がつかない秀吉の声真似で、最後の台詞が紡がれた。し
かしすごい能力持っているよな秀吉つて。優子さんの物真似は姉弟
だからできたと思っていたが、まさか他の声までできるとは思わなん
だ。指示していないセリフまで追加されていたが、この際気にしない
でおこう

「.....雄二、私も愛している」

「待って代表。これは罠よ。彼に結婚の意思なんてないわ。こんな口
約束なんていくらでも無効にできるから所詮ただの言い逃れよ。秀
吉、そんな真似しないで観念なさい」

ここで優子さんが止めに入る。流石秀吉の姉。種がばれたか。仕
方ない.....とどめと行くか

「秀吉、ちよつと今言う言葉を雄二の声で言ってくれないかな?」

そしてその内容を秀吉に伝えた。

「うむ、分かったぞ。それじゃ頼んだぞ!」

そして僕は明久のもとにかけより、雄二の肩を組んだ

「どうしたの?」

「雄二には悪いが言い逃れできない状況を作る。ささやかな犠牲に

なってもらおう・・・！」

そして僕が抱きかかえたと同時に秀吉が雄二の声で話を続けた

「翔子。何なら今婚約届けに判を押す。そしてペアチケットで正式に結婚式を挙げ、正式な夫婦になろう。約束する。お前を幸せにする。愛してる。翔子！」

秀吉がそういうと雄二が意識取り戻したのだ！不味い！

「ま、待て・・・俺は、愛してなど・・・」

ゴキーンッ！

「こっぺっ!？」

雄二の首をひねりそのまま黙らせる。ここで話すと面倒くさくなるから少し黙ってくれ

「雄二・・・うん。今渡す」

そういうと霧島さんは雄二のもとに駆け寄り、婚約届けを雄二の前に差し出した。もしかして常に常備しているのか？そんなこと考えなくても仕方ない。確かズボンのポケットに……。お、入っていたな。僕は雄二のポケットから実印を取り出し、雄二に持たせ、婚約届けに判を押した

これで正式に決まったわけだ。悪く思うなよ。そしてそのまま霧島さんに雄二を引き渡しそのまま雄二の亡骸に抱きつき戦意喪失だが肝心の雄二の方も力なく項垂れており、とても戦える状態になかった

「ふはははははー！これで最強の敵は封じ込めた！残るは優子さんだけだよ！」

「ひ、卑怯な・・・！」

なんか悪役みたいだな。まあ正義の味方ってわけでもないが……。でもいざ考えてみれば明久だけで優子さんに勝てない気がする。どうする気だ？

「でも、あなた一人代表がいなくなっただって戦えるわ。」

「フッフ、確かに今までの僕ならそうだね。でも戦う教科が保健体育であったことを恨むんだね。」

「それじゃ長い茶番から・・・承認」

先生がフィールドを展開する。この清涼祭の時、どの先生がどの教科でも出せるように調節しているらしい。

「試験召喚（サモン）!!」

「荒巻鮭（サーモン）（サモン）！」

二人の呼び声で呼び出されたのは方や西洋鎧に大きなランスをもった木下優子の召喚獣、一方出てきたのは忍者装束に二本の小太刀をもった明久の召喚獣でなく、土屋康太の召喚獣、明久の隠し玉の最終兵器、「代理召喚」というやつだ。 実際ルール上戦うメンバーは決められているため、反則であるが、明久が言うには 「バレない反則は高等技術」だそうだ……

「え……それって土屋の……」

「それでは勝負開始!!」

「先生。これはルールい h……きやあ!!」

【保健体育】

Aクラス 木下優子 321点

VS

Fクラス 吉井明久（土屋康太） 511点

結果は見るまでもなく、明久（ムツツリーニ）が勝利した。

「よし！僕たちの勝利だ。」

「あ……今の勝負は……」

まあばれてないわけじゃないよな。すると明久が雄二を無理やり立たせ、秀吉に合図を送る

「愛してる。翔子く!!」

「霧島さん。僕たちの勝ちでいいよね。」

「……私たちの負け。」

「……まあいいか。面倒くさいし。以上の結果から吉井、坂本ペアの勝利く!!」

雄二を使い、無理矢理勝利をもぎ取った。その後、会場がブーイングの声で包まれたが俺達はそうなる前に早々に退散した

「明久、なかなかの機転であったな。」

「……作戦勝ち」

「ありがとう、秀吉とムツツリーニ、それにのび太！みんなの協力があつたこそだよ」

「そういえば雄二は？さつきから見てないけど？」

「別にいいじゃない？どうせ霧島さんと一緒にいるよきつと。」

「そうか・・・さつき霧島が雄二に一服盛って持ち帰ろうとしておつたのじゃが」

秀吉の指差したほうを見ると雄二が霧島さんに何か薬か何か飲まそうとしている光景が見えた。

「ちよ！霧島さんストップ！！まだ雄二はこの後も必要だから薬は止めてあげて！！」

僕らは薬で本当に黄泉の国送りにされそうだった雄二を霧島さんから引きはがし、薬を飲ませる事を止めさせた。霧島さん。まさかと思っていたがヤンデレだったとは・・・恐ろしい

誘拐事件

「のび太、明久・・・今日のうちに貴様らを殺す・・・」

「あははは、いやだなー雄二の顔怖いよー」

「いや、だつてさ、霧島さんは雄二の幼馴染みだからこうなることも予測されていたでしょ？だつてさ、霧島さんだよ?」

「ぐう、それを言うかと反論できない・・・!」

あの後明久が雄二に腹パンして薬を吐かせ、冷水を飲ませて安静にさせていた。誰も霧島さんがあそこまでやるとは思わなかったから僕たちは焦っていたが特に体調の変化もなく無事で安心した。ちなみに秀吉とムツツリー二には先に喫茶店に戻って店の手伝いをさせている

「だがそれで婚姻届けに判を押すやつがどこにいる!!裁判起こしたら結婚詐欺で確実に勝てるぞ!」

「これは雄二が起こした不始末だ。雄二が責任をとれ」

「俺が言いたいのはそのままでさせる必要はないだろうって言いたいんだ!!」

雄二はもう言っても無駄だろうと思ったのかため息をついて話をつづけた

「ところで姫路や島田達は教室にいるか?」

「えっ?確認してないけどいるんじゃないの?」

いきなりの話題に明久は少々戸惑う。一応シフトでは残りは全員で働こうと決めていたんだが・・・何だろうこの嫌な予感は何?

「多分、そろそろ仕掛けて来る筈だと思うんだが・・・」

「・・・雄二」

教室の前に行くと、ドアの前に立っていたムツツリー二が僕達のもとに駆け寄る

「ムツツリー二か。何かあったのか?」

「・・・ウエイトレスが連れて行かれた」

「何!?犯人は誰!」

「そうだよ!?なんで姫路さんたちが!!」

「お前ら落ち着け。流石に直接やりあつても勝てないと考えたか……当然といえば当然か」

雄二はさも当然といったようにつぶやいている。もしかして例の常夏コンビが……

「あの常夏コンビか？」

僕がそういうと、雄二は考えながらムツツリーニーに問いかけていたのだ

「ムツツリーニー、さらわれたのはウエイトレス全員か？」

「……手伝いしてくれたE組の三上美子も連れ去られた」

「何!?それは本当!?!ムツツリーニー!」

「……ウエイトレスを連れ去ろうとしたチンピラに注意したところ騒がれてはマズイと考えたのか一緒に連れ去ってしまったということだ。彼女は厨房で作業してくれていたが、様子見たときに……」

くっ!まさか、三上さんも巻き込まれていたなんて……!!

「そうか……となると例の常夏コンビではないな。たぶんさつき絡んだチンピラどもだろう」

「なんでそうだといえるの?」

「常夏コンビにしては事がデカすぎる。もしばれたりしたら停学や受験取り消し。最悪退学する危険性がある。あいつらにはそれだけの根性はない。ましてやさらった人数からして常夏コンビだけでできる人数じゃないほかの連中集めたとしても3年でそんなバカなことをする奴らなんていないだろう」

確かに同じ学校だと足が付きやすい。彼らにそんな危険までして妨害をするとは考えにくい

「つてそんな事より、姫路さんたちは大丈夫なの!?!どこに連れて行かれたの!?!相手はどんな連中!?!」

「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」

「えっ?そうなの?」

「ああ。もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよっかい出してくるか、そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくると予想できたからな」

「だけど、これは予想していなかったと、雄二はため息ついていた
「……行き先はわかる」

「と言って、ムッツリーニが取り出したのはラジオの様な機械
「何それ？ ラジオみたいに見えるけど？」

「……盗聴の受信機」

「ムッツリーニー、いまそれがあるのはあえて触れないでおくからね
？ 明久もいいね？」

「うん」

「普通なら警察に突き出されても文句は言えないが、今はこれのおか
げで救われているからグツジョブと言っておこう。」

「さて、場所が分かるなら簡単だ。かるくお姫様達を助け出すとす
るか」

「雄二がそういつて、僕らは行こうとしていたのだ

「ちよつと待った。その話俺も参加していいか？」

「!? この懐かしい声は……」

「ジャイアンにスネ夫!?!」

「よう! のび太!」

「さつき、学園祭で遊びにいらしたらのび太を見かけてね。まあ、話
は聞かせてもらった! 僕ちゃんも協力する!」

「彼らは僕の小学校の時の友人だ。僕が驚いていると、雄二もおどろ
ていた

「なっ!?! お前剛田か!?! 確か、隣にるのが……骨!」

「おお!?! お前はやっぱり坂本かー!」

「違う! 骨川だよ!」

「あの……だれ?」

「明久は面識無いのは仕方ないけど……何でここにいるの?」

「実はよ、スネ夫とさつき、変なチンピラが女の子達を連れていくの見
てよ。そこで、のび太の通っていた学校の子だと思ひ出してな」

「のび太を探していたらすぐにそこにいたから聞こうと思つたら、い
まの話聞いていたわけさ!」

「……ジャイアン。悪いけど協力してくれない? スネ夫はFクラスの

場所渡しとくから、この紙を渡してくれない？僕らが戻るまでの間に、客来たときの対応だから」

「二分かった!!」

スネ夫とは別れて僕らは姫路たちが捕えられているカラオケ店に向かった。因みにジャイアンと明久はお互いに自己紹介していると、思い出したように明久を指差しながら・・・

「バカな男だ!」

「バカじゃない!明久だよ!」

つて会話していた・・・

他校にも噂で聞かれる明久のバカって最早どうしたらいいのか？と考えてしまう・・・

「いらつしやいませー」

そしてカラオケ店「ビツクゲコー」についた。レーダーの反応から見て姫路たちはおそらくこの店に入ったんだろう

「すいません。少し前の時間に大勢の男性と女性が来ませんでしたか？」

「はい。少々お待ちください。」

そういつて機械で店員が確認して数分後店員は営業スマイルでこたえた。

「そのお客様でしたら今パーティールームをご利用していますがいかがなさいましたか?」

「その人たちが今連れ・・・すいません。その人たちと一緒に来るはずだったんですけど遅れちゃって、すいませんけど同じ部屋で登録できませんか?」

「ええつと・・・ちよつとお待ちください」

そういうと店員が席をはずした。

「バカ!さらわれたなんて店員に言ってみろ。それこそ本当に警察沙汰だろ!」

「でも姫路さんたちがさらわれたのは事実でしょ!」

「頭を使おうよ!そんなの店員にいつて警察呼んでしまったら、姫路

はどうなる？ 転校してしまうでしょ？」

明久はその言葉に聞き、顔真つ青になっていた

「そうだ。だからここは黙っておくんだ」

「すいません。そうなるのと別の部屋でのご利用になるのですが……」

そうこうしているうちに店員が戻ってきた。別に俺らは彼女たちを助けるために来たから、そんなことは気にしないのだが……

「ああいいです。あいつらにちよつと用事があるだけなので……」

そういつて僕達は例のパーティールームに進んでいき、部屋の前で待機して盗聴器で様子を確認していた

『さて、どうする？ 坂本と吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にしてよびますか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。

坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいな』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……』

『気持ちは分かるがそうもいかないだろう？ 依頼はその二人を動けなくする事なんだから』

『お、お姉ちゃん……』

『アンタ達！ いい加減葉月を離しなさいよ!!』

盗聴器から泣きそうな葉月ちゃんの声と、島田の怒鳴り声が耳に響いてきた。しかしさらった奴らもそうだが俺達もやっていることはよそから見たら犯罪なんじゃないかって思えてくる。

『お姉ちゃん、だつてさー！ かわいー!!』

チンピラの苛立つ声に明久が今にも部屋に入りそうな勢いになる。

(待て明久、勝手に行動するな！)

(今重要なのは人質の救助だろ？ 怒る気持ちは今は抑えておけ！)

(……わかったよ)

二人に諭され、明久が座る。 ジャイアンと雄二ナイス！ 正直僕も今すぐにでもチンピラをぶん殴りたい気持ちだ。 明久の気持ちは痛いほどわかるけどまず落ちつかないと。

『……灰皿をお取り換えいたします。』

そして今店員に変装しているムッツリーニが状況確認のために部屋に入っていった

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていい？』

『だったら俺は、コツチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ、ズリー！それなら俺、2番目ね！』

『だったら俺は短い髪の毛の黒髪の嬢ちゃんがいいな。なんか気が強いのは俺の好みだな！』

聞いていて苛つく・・・ムッツリーニーから密かに貰った武器を懐に確認してジャイアンの方を見ると、拳をポキポキ鳴らしていたのだ。表情は爆発寸前の顔だ

『せめてあの子には手を出さないでください！』

『そうです。葉月ちゃんには乱暴なことはしないでください』

!?!三上さん！姫路も！

『それはお前たちの頑張り次第つてところだな』

『ちよつと！いい加減にしなさいよ!!』

『そうよ！さつきから貴方達は・・・』

『あーもう、うっせエ女共だな！』

ドンッ！

『『キャツ!!』』

突き飛ばした音と、三上さんと島田の悲鳴が聞こえたと同時にまる

で何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音が聞こえた

プツンッ

僕の中の何かが切れ、僕と明久が同時に立ち上がり、部屋のドアを開けた

覚悟してね・・・？僕は優しく終わらすつもりは・・・ない

激怒とお仕置き

「おじやましまーす」

僕はその掛け声と共にドアを開けたのだ

「アキ……」

「吉井君……」

「吉井君に……のび太君」

島田に姫路、三上さんは突然の出来事で把握できてないみたい……僕はちらつと三上さんを見たが、良かった……服が少し破れた程度か……

「はあ？お前ら誰だよ？」

「明久」

「うん。それでは失礼して……」

僕たちは一呼吸おいて……

「死にくされやああ!!!」

「クソどもがああつ!!」

「ほごあああああつ!」

「ぎやああああつ!」

明久はドアの近くにいた奴の股間をけり上げ、僕はその反対側にいた男を殴り倒した

「てつ、てめえ!ヤスオとヒロシに何しやがる!」

「イイツシヤアアー!!」

「ごぶあつ!!」

その近くにいたチンピラが明久の顔面を殴り、そのあと明久がハイキックを顔面に叩き込んで反撃した

「つら!!」

「痛っ!っ……!!?」

僕は倒れている男にある物を見せたのだ。その男は、顔真っ青になっっていたがそんなの知らない……

ドサツ

「てめえらー!よくも美波達を手をあげたな!」

「三上さんも手を上げた罪・・・重いぞ!」

僕は懐にある武器を確認しながら、人数を数えていた。数はさっきの含めたら二桁か

「コイツ、吉井って野郎だ!」

「それともう一人は誰だ?」

「どうしてここが!?!」

「とにかく、来ているならちようど良い!ぶち殺せ!!」

そういうと残りの男9人が僕達に群がってきた

「明久は自分の身を守れ。僕が殲滅する」

「潰すぞ!」

今度は別の男が僕にクリスタルの灰皿で殴ろうとしたが、俺は難なく回避し、その腕をつかみ足を転がして相手が転んだのを確認すると、僕は銃を出したのだ

「なっ!?!おい!?!冗談だろ!」

「・・・お前らの罪はこれで捌く・・・」

「やめ・・・」

最後まで言わず、銃でお腹を打ち込んだのだ。すると相手は嘘のように倒れたのだ

「さあて、手を出す相手が悪かったね?やられたい人からこい!!」

「うるせえ!」

男が後ろから襲いかかってきたが、僕はそんなの予想済みで速撃ちで相手の方を撃った

「これで、三人目・・・まだまだいるね・・・逃げれると思うなよ!」

「お前ら全員、必ず絶対ぶっ飛ばす!」

僕と明久がそう意気込むと・・・

「おいおい・・・このアホウ共が、少しは頭を使って行動しろってーのっ!!」

「げぶっ!」

雄二は後ろから飛び蹴りで、不良を吹っ飛ばしたのだ

「雄二!」

明久の声に不良は慌てていた

「で、出たぞ！ 坂本だ！」

「坂本まで来ていたのか！」

「くそ！眼鏡もあぶない武器あるし怖いわ!!くそお!!」

雄二を見てチンピラが浮足立つ。面白いや雄二のことを「悪鬼羅刹」とか聞いたことあるが、これは有名な話だ。僕も昔聞いたことがあった

「坂本よお、このガキがどうなってもいいのかあ？」

向こうの1人が葉月ちゃんを羽交い絞めにしていて。こいつら、どこまで畜生の道に落ちれば気が済むんだ

「良いか？ 大人しくしているよ？ さもないと、ヒデエ傷を・・・」

「おっと。それはしちやあいけねえな！ おらあ!!」

「へぶしっ!!」

葉月ちゃんを羽交い絞めしていた男の腕をジャイアンは掴んで思い切り背負い投げしたのだ

「ナイスタイミング。ジャイアン」

「おう！ お前の喧嘩は俺の喧嘩！ 俺の喧嘩は俺の喧嘩だ！」

「なんだ!?!このでかい男は!?!」

「畜生!?!さっきまでの楽しい気分台無しだ!!」

不良らは予想外の続いていて慌てているが逃がさない！

「吉井君っ！」

ある程度チンピラを撃退したことで姫路が解放され、明久目掛けて腕を広げて駆け寄っていく

「姫路さん！」

そして明久も姫路を受け止めようと両腕を広げて待機をした

「吉井い！ ヤスオをよくも！」

だが、明久が腕を広げて構えた所に来たのは、チンピラのパンチであつた

「あ・・・」

「な、何だこいつ？ 血の涙流してるぞ・・・？」

鬼気迫る雰囲気、そのチンピラにまたがり、ぼこぼこに殴る明久。そりゃいい雰囲気をぶち壊したんだ。殺したくもなる気持ちもわか

る

「姫路さんちよつと待ってて！こいつをシバき倒した後でもう一度……」

「姫路に島田、三上！先に教室に戻っている！」

「雄二！キサマまで僕の邪魔をするのか！」

しかし、雄二の判断は正しい

僕は三上さんの方にすぐに駆け寄り、怪我ないか確認したのだ

「三上さん！大丈夫？」

「うん……ありがとう。のび太君」

「良かった……つと！」

すると三上さんが僕を抱き締めたのだ。彼女は怖かったに違いない……今は落ち着くまで抱き締めてあげる。すると一人の不良がゆつくりと僕に近づいてきたが……

「おい。そこから先は行かせると思ったか？」

「え？ぐぼおおお！」

「俺の心の友に手を出そうとするんじゃないやねえ！」

ジャイアンが止めてくれたのだ。そして、倒れている男にジャイアンは胸ぐら掴みながら怒っていたのだ

「よく、覚えておけ……あいつの物は俺の物！俺の物も俺の物！つまり、あいつの喧嘩は俺の喧嘩でもあるんだよ！おらあ!!!」

「それって、横暴じゃ……ぐぼらあ!!」

ジャイアンは背負い投げで相手を叩きのめしたのだ……相変わらぬジャイアンは心強い！

「くはははは！それにしても丁度良いストレス発散の相手が出来たな！生まれてきたことを後悔させてやるぜええっ！」

「こ、これが坂本か……！」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか……」

「もう一人のかいやつもヤバイぞ!!」

霧島に追い詰められているこのタイミングで雄二と喧嘩することになるとは、こいつらも運がないね

「ところで秀吉。なんで縛られているんだ？」

「……とてもよく似合っている」

「姉上に縛られた時の縄が残っておつての：それと、何故かワシだけ随分と尻を撫でられたのじゃが……」

秀吉がとても悲しそうに呟く。さて、スネ夫に頼んでいたのはもう少しで来るはず……

「のび太！ジャイアン！Fクラスの対応も大丈夫だったし、車を呼んどいたよ！これで逃げれるよ！」

カラオケで暴れている部屋にスネ夫が走りながら入ってきたのだ。いいタイミング！

「明久！スネ夫と共に三上さんや秀吉！島田姉妹、姫路を連れていけ！ジャイアンはボディガードでお願い！」

「任せろ！心の友よ！」

「OK！」

「のび太も邪魔するのかあ!!」

「言ってる場合じゃないでしょ!?!ほらー！」

三上さんを後ろに庇いながら、銃を撃ちまくっていたのだ。これで四人目……

「のび太君……殺してないよね……？」

「安心して？これはムツツリーニーの作ってくれた麻醉銃！撃った四人は今昼寝しているから」

「良かった……のび太君。やっぱり昔から困った私を助けてくれるの変わってない……」

「？それどういうこと？」

「無事かえったら話すわ。助けてくれてありがとう！」

「どういたしましたして。三上さんが無事で何よりさ。明久！三上さん達を頼むよ！明久にしか出来ないから！」

「分かった！また学校であおう!!」

やっと納得してくれたみたいだね。ああ言えば、明久は動く。よし！ジャイアン達が去ったのを確認して僕と雄二は暴れていたのだ。止めには銃で撃ち抜いたけどね……

数十分後、僕と雄二で9人近くのチンピラをぼこぼこにし、再起不能にしてやった。雄二も日頃のストレスが解消できてどこかすつきりした面持ちである

「ふう・・・とんずらしましょうか。雄二」

「おう！スッキリしたぜ・・・しかし、お前もえげつねえぞ？倒れている男を銃で撃つわ。顔面叩きのめすわ。こんな怖いやつだったか？お前」

「うーん、何か頭が妙に冴えていてね。殴るタイミングとか分かっていたし、起き上がる前に潰しといたら、反抗しないでしょ？他のクラスの上上さんにも被害遭わした時点で許さないけどね」

「今、俺の心の中ではお前を怒らしてはいけないと決めたぞ」

「雄二・・・今回の件、協力してくれたジャイアンとスネ夫にお礼いってかないとね」

「ああ。にしても・・・お前もあいつもあんなに仲良かったんだな？」

「いつか、昔話するよ・・・僕らの話を・・・ね」

「珍しいな？お前が過去の事を話すなんて」

「まあ、たまにはいいでしょ？とりあえず帰ろう？三上さん達がまつてるから」

「ああ。（こいつ気づいてないが、三上の事を最初に考えている事自体気づいてないか・・・まあいいか）」

僕らは不良を叩きのめした部屋から出ていったのだ。弾も回収したし、ムツツリーニーが後処理してくれたからこの件は出ることはない・・・

三上さんに聞きたいこともあるけど、先ずは帰ろう

僕らはぼこぼこにされた不良をほったらかしたのだ。

隠されていた真実

無事初日が終わり僕らは校長室に行こうと思ったが、姫路たちも今回は巻き込まれていたので流石にこれは心配だからスネ夫に彼女達の家まで送っていくことにしたのだ。それと、三上さんはどうしても帰る前に話したいと言っていたが、今日は危ないので二日目の終わつたあとに会うことを約束してた

「ジャイアンはどうするの?」

「おう!俺様はお前と話したいことがあるからな!つてか、Fクラスで待っていた方がいいのか?」

「まあ今回はお前も協力してくれたからババアの話聞いてほしい」
「うんうん」

僕と雄二がそう話すと、明久が戻ってきてジャイアンは明久の方に指差していた

「坂本も相変わらず口悪いな。まあいいけど、そこのバカそうなのが、明久だったな。明久って呼んでいいか?」

「うん!僕の名前そう呼んでくれたらいいよ!えーと、君の名は?」

「俺様か?俺の本名は剛田武って名前だが、気兼ねなくジャイアンって呼んでくれたら嬉しい」

明久は頭に???出しながら何でジャイアンって呼ばれてるのか?

マークだね……

「にしても遅い。そろそろ来るはずだが……」

「来るって誰が?」

「ババアだ。さつき廊下すれ違つて『話聞かせろ』とな」

「話ねえ……ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと」

「用事もクソも……この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因が——えええつ!?!」

雄二が当然のように告げた台詞は、明久には驚きの内容だった。つてか、明久！きつきの言うているのと矛盾しているよ！

ガラガラ

「おやおや、ずいぶんと騒がしいねえ。折角こちらから来たのに」

教室の扉を開けると共に、学園長はそう言ったのだ。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

学園長は私は被害者ですといった風に肩を竦める

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

「ふむ・・・やれやれ。賢しい奴等だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ。その部外者は何故いるんだい？」

「今回の事件に協力してくれた者なんで、彼にも聞く権利はあります」
僕がそういうと、学園長はため息をつきながら了承をしてくれたのだ。雄二が話続けるぞといったのだ

「学園長が最初に取り引を持ちかけられた時からおかしいとは思っていったんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を叩き出すことのできる優勝候補を使えばいいからな」

「あ、そういうえばそうだよ。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎだ」

「話を引き受けてきた教頭の手前おっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら、教室の補修に関して渋ったりしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要だからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってこと？」

可能性としては高いね：明久も珍しく頭使い込んでも思うけど。それに、雄二の言うことは一理ある。学園長としての立場上、反対す

るのは今思えば可笑しいね

「そういうことになるな。あの時、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか?」

「科目を決めさせろってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

提案を呑んだってことは、他の人ではなく僕らが優勝しないと学園長は困るってことか。得点の高い人たちじゃなくて、敢えて僕らに依頼したことには何か理由がありそうだ。

「他にも学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、俺たちの対戦相手に情報を流す密告者いたりと色々あったしな。それに何より、俺たちの邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したのが決定的だった。ただの嫌がらせならここまでではない」

アレは本当に危なかった。ムツツリーニが盗聴器を仕掛けていなかったらどうなっていたかわからない。下手すると警察沙汰だ。それに・他のクラスの三上さんが危険な目に遭ったと言う事実もある「そうかい・・・そこまで手段選ばなかったのかい・・・すまなかったね」

すると学園長が頭下げたのだ。あの学園長が頭下げること事態とんでもないよ!?

「ここまで話したんだ・・・次はそつちが話す番だぞ?」

「はあ・・・アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね・・・その部外者も黙って聞いてほしい」

だから誰にも公言しないで欲しい。と前置きをして、学園長は僕達に真相を明かし始める

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

「ペアチケットじゃない!? どういうことですか!?!」

「アタシにとつちやあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品の方なのさ」

「もしかって・・・《白金の腕輪》ですか?」

「なんだ? その白金の腕輪ってのは?」

「簡単に言うとは特殊能力がある腕輪っことかな？」

「なるほど」

「ジャイアンも納得してくれたから、続きを聞こう。回収するなら依頼する必要はないはずだ。すると、雄二も同じことを明久にいつていたのだ」

「ホントにあんた達は頭回るねえ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使ってみせてナンボのものだからね。デモンストラーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われることになるからね」

「明久が何故回収を？って聞くと学園長が苦々しげに顔しかめたのだ。技術者としてはの欠陥は耐え難い恥はずだ。それを生徒である僕らに明かすんだから無理もない」

「つまり、高得点高いものは使えないものって訳か・・・確かにその通りですね」

「僕も苦笑いしかない。明久が分かってないのか学園長が教えていたので」

「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められているってことでいいのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババア！」

「説明されないとわからない時点で否定できないと思うんだが・・・」
雄二はわかっているみたいだし、僕ももジャイアンもわかっているし明久だけがバカみたいじゃないか！って顔してるね・・・理解していない時点でバカなのかもしれない・・・

「二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねえ……。もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「雄二、これは褒められていると取ってもいいんだよね？」

「いや、バカにされている。物凄い勢いで」

「なんだとババア！」

「二いい加減自分で気づけ！」

僕は学園長除く三人が明久に突っ込みを入れたのだ。本当に君はバカだなーという昔の親友の声が頭に響いた。うん。本当のバカは今日の前にいるよ……

「俺たちの邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止されたら困るってことだろ？そんな学園の醜聞をよしとするヤツなんて、うちに生徒を取られた他校の経営者しかいないだろうが」

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかなからね。おそらく一連の手引きは教頭の竹原先生によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはないさね」

あの教頭か……くつ、思い出ただけで苛つく！

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは……」

「教頭の差し金だろうな。協力している理由はわからんが」

明久も領いていてジャイアンが真つ先に口開いたのだ

「コレって——かなりマズい話じゃないのか??坂本よ？」

「そうだな。文月学園の存続が懸かっている話になるな」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているものだ。そんな状態で暴走なんて問題が起きたら、学園そのものの存在意義も問われることにな

「あ、でもいざとなったら優勝者に事情を話して回収したら——」

「残念ながらそうもいかない。決勝の対戦相手を知っているか？」

雄二がズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表を追っていくと、対戦相手は……

「常夏コンビ!？」

「そうだ。やつらは教頭側の人間だ。嬉々として観客の前で暴走を起すだろう」

これじゃあ回収の交渉は成立しない

「悪いが、アンタたちにはなんと少しでも優勝してもらえないんだよ」

学園長の表情も硬い。事態はかなり深刻なところまで来ているみたいだ

「まさかこんなことになっているとはな」

すると、明久が手を挙げたのだ。何を聞くんのだ？

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかなければ起こらないんですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

ん？どういうことだ？明久のあの質問は？

「雄二。聞きたいことは聞けたし、今日はもう帰ろう」

「そうだな。家に帰ってやることもあるし——明日も早いしな」

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね。4人とも、明日は頼んだよ」

「「はい」」」

こうして学園祭初日は幕を閉じた

オマケ

「そういうえば、ジャイアンは僕と話して何？」

明久達と別れて僕はジャイアンと二人きりで歩いていったのだ

「のび太よお・・・あの学園は楽しいか？」

「うん。楽しいよ！・・・Fクラスはいるときは時々昔のことを思い出

すよ……」

「ああ、お前らを見てると確かに昔のことを思い出すな……5人でのあの日々を……」

「うん……」

僕ははゆつくりと歩いて昔のことを喋っていたのだ

「のび太……俺にとってはお前は心の友だ。あいつも……スネ夫もな」

「……」

「明日も学園祭あるならいくからな」

「うん。ならまた明日だね？」

「おう。また明日だな」

僕らはゆつくりと帰路に帰っていたのだ……今日は懐かしい夢見
そうだ……

決勝戦

「おはよう」

僕は学校のいつものFクラスに入っているとみんなはすでに2日目の準備を進めていた

「あ、のび太と・・・ジャイアン。おはよう。」

まず最初に気が付いたのは明久である。昨日の傷はなくなって人前に出ても問題ないほど

傷が回復していた。

「ああ、おはよう。顔はまあ大丈夫だよな？」

「大丈夫だよ。僕こう見えても体は丈夫だし」

いつもの光景を見ていれば彼の体が丈夫だというのはわかるが心配はする。

「そっか、良かった。これ以上明久がバカになったら困るからね」

「さりと悪口言わないで？なくよ？後なんでジャイアンが？」

「どうせ、明久とか雄二はあの後何かしていたと思うからね・・・それと、もうひとつ皆にサプライズがあるからジャイアンも協力して来てくれたの」

「？サプライズ？」

明久が怪訝な顔した。すると、教室のドアが空いた方を見ると、スネ夫が来ていたのだ。いいタイミングだ

「のび太く頼まれてきたのここで運ぶように指示していいか？」

「うん！お願い！」

すると、マツチヨな人たちが教室に物を運んできたのだ。うんうん！スネ夫も協力してくれて助かる

「え!？」

「つちよっと待って!？」

姫路も島田も驚いていてたが明久が一番驚いていた。まあ、それもそうだろう

「な、なに!?!そのいい机は!?!しかも椅子も沢山持つてきて!？」

「スネ夫の家は大金持ちでね・・・机が足りないことも考えて、頼んだ

「このいい机がいっぱい有ったのさ。数は4つあるから十分かな？」
「いや、助かる。ありがとうな。骨川」

「まあねー。僕はこれから学校あるから今日は参加できないけど、ジャイアンがいれば十分でしょ？」

雄二のお礼にスネ夫は鼻高くしていたのだ。相変わらずだなー。

「確かにね・・・Fクラスのボディガードとしても最高の戦力だからね」

「任せろ！雄二！お前達は決勝のことだけ考えろよ！」

「剛田がいるなら妨害の心配もない。さて、俺達は眠たいから少し席はずすな」

「うん、こここのところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

「なら屋上で寝たら？そんな状態では集中力がもたないでしょう？」

僕がそう薦めると、秀吉もうなずいていた

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「……………（コクコク）」

「仕方ないわね。起きられそうになかったら起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃ、十一時までに起きてこなかったら起こしてもらえろ？」

その言葉に島田は？となつて聞き返していたのだ

「十一時？試合は一時からじゃなかった？」

「一番混み合うお昼どきくらいは手伝うよ」

「んじゃ、その時には俺も一緒に起こしてくれ。屋上で寝ているから。ほわあ…………」

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

明久は頭を押さえ、ふらつきながら立ち上がった。因みに島田と姫路の会話は聞かなかつたことにしている…………

「いらっしやいませー。中華喫茶『ヨーロッパピアン』へようこそ！」

そして二日目の清涼祭が開始となり、客も姫路さんたちの宣伝もあつてかなりの客が込み合っていた。当の僕厨房で飲茶を作つて

いる。すると見回りから戻ってきたムッツリーニが俺の肩を叩いてきた。ジャイアンは折角なのでもっと回してきたら？という嬉んで学園の方を回っていたのだ

「……のび太」

「ん？どうした。ムッツリーニ」

「……お前に会いたいという人がいる」

「誰？」

「……いけばわかる。それと明久が戻ってきた」

「わかった」

僕はとりあえず作ったエビシユーマイを一度おいてムッツリーニについていくとそこに姫路と一緒に楽しげに話しているのは……三上さん!?

「あつ……こんにちは。のび太君」

「三上さん！昨日はあのあと大丈夫だった？」

「うん！のび太君達のお陰でね」

良かった……あれ？

「クラスの出し物は？手伝わなくていいの？」

「あははは、私は元々午前だけお手伝いだったからね」

「そうなんだ。姫路とムッツリーニは……あれ？」

さつきまでいた二人はいなかった……ん？ポケットになにか入ってる？

「(のび太は午前中の勤務は終わり。午後は遊べBYMムッツリーニ)……要らん気遣いされた……」

「さ！行きましょ！決勝戦見る席は確保しているから！」

僕は三上さんに引っ張られて、席を確保していた所に行くと……ジャイアンと隣にいる人は？

「おう！のび太！来たのか？」

「うん。隣にいる人は誰なの？」

すると、よく見ると三年生の人だ

「初めまして。小暮葵と申します。武さんとは昔の知り合いです……」

「ジャイアンの知り合いだった何て知らなかった・・・」

すると、ジャイアンは珍しく照れていて答えてくれたのだ

「まあ色々とな・・・俺も小暮先輩がここに通ってるのは知らなかった」

そう話していると、アナウンスの声が聞こえたのだ

『さて皆様。長楽お待たせいたしました！これより試験召喚システムによる召喚大会を行います！』

聞こえてくるアナウンスは今まで聞いたことのない声だった。もしかするとプロを雇っているのかもしれない。世間の注目を集めている大会だし、十分考えられることだ

『出場選手の入場です！』

出てきたのは明久と雄二が最初に出てきたのだ

『何と、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスのコンビです！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

「(あの司会・・・嬉しいこと言ってくれるなー姫路のお父さんにも好印象になるよね)」

ぼくが内心そう思っていると続きを聞いていたのだ

『試験召喚システムのおかげで、最低クラスの生徒もやる気を上げているのです！』

「まあ確かに、のび太君のクラスは凄いわね」

「私も驚きました。今年の二年生のFクラスは凄いですね」

三上さんと小暮先輩がそう言ったのだ。二人ともFクラスの事を認めてくれて嬉しい！

『そして対する選手は、三年Aクラス所属夏川俊平君と同じくAクラス所属常村勇作君です！皆様こちらも拍手でお迎え下さい！』

拍手を受けながら入場。コールを受けて僕らの前に姿を現したのは、昨日散々迷惑をかけてくれた例の常夏コンビだ

『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

同じように拍手を受けながら、二人はゆっくりと明久達の前にやつ

てきた

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した——』

アナウンスでルール説明が入る

「《よう先輩方。もうセコい小細工はネタ切れか?》」

腕を組んで小馬鹿にしたような雄二の態度。こういった仕草が様になる男だ。因みにムツリーニーから隠しイヤホンをくれたので僕と三上さんとジャイアンと小暮先輩が耳で聞いていた

「《お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがなFクラス程度のオツムじゃ理解できなかったか?》」

答える坊主先輩も負けてはいない。顎を手でこすり、挑発して来た「《残念ながらあんたらの言葉なんてAクラス所属でも理解できないだろうな。まずは日本語を覚えてくるんだな。サル山の坊主大将》」

「《て、テメエ、先輩に向かって……!》」

観客には聞こえない程度の小声で挑発合戦が行われている・・・聞いている僕ら以外はね

「《先輩。1つ聞きたいことがあります。教頭先生に協力している理由はなんですか?》」

そう聞くと、先輩たちは一瞬驚いた顔をした。僕らの隣の小暮先輩はしかめ面で聞いていた

「《そうか。事情は理解してるってコトか》」

「《進学だよ。上手くやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ》」

「《そういう事だ》」

「《……そうですか》」

小さく頷いて会話を打ち切る。明久が聞きたいことは終わったみたいだ

明久 s i d e

「本当は小細工なんて要らなかつたんだよな。Aクラスの俺たちとFクラスのお前らじゃ、そもそもの実力が違い過ぎる」

「そうか。それなのにわざわざご苦労なことだな。そんなに俺と明久が怖かつたのか？」

「ハッ！言つてろ！お前らの勝ち方なんて相手の性格や弱味につけこんだ騙し討ちだろうが。俺たち相手じゃ何もできないだろ！」

それは確かにそうかもしれない。僕らが今まで勝つてこられたのは相手の事を知っていたからだ

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

説明も終わり、審判役の先生が僕らの間に立つ

「試獣召喚（サモン）」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。

Aクラス・常村勇作 209点

&

Aクラス・夏川俊平 197点

向こうの装備はオーソドックスな剣と鎧。高得点者の召喚獣らしく、質はかなり良さそうなものに見える。確かにAクラスに所属してるだけのことはある。この二人、見た目によらず本当に勉強はできるみたいだね

「どうした？俺達の点数見て腰が引けたか？」

「無理もない。Fクラスじゃお目にかかれない点数だからな」

「いや、試召戦争ごとに目にしてるけど？」

「ええっ!?!」

主に姫路さんとか、姫路さんとか……けど。こんな点数が取れるなら実力で受験すればいいじゃないかそれなのに……この人達は僕達の二年目の、たった一度の学園祭を壊そうとした……何より僕達の大切な人達に取り返しつかない事をしようとした

「ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前の貧相な点数をよ！」

「…前に」

「あん？」

「前にクラスの子が言っていた」

「なんだ？晒し者にされた時の逃げ方か？」

「そう言っただ笑いだ常夏コンビ……どこまで僕らをバカにすれば気が済むんだ！」

「……『好きな人の為なら頑張れる』って」

僕も最近、心からそう思った

日本史

2―F 坂本雄二 215点

2―F 吉井明久 190点

「なっ!？」

覚悟しろよ！僕はもう怒った！

『おお!!これはすごい展開だ。最低クラスとうたわれたFクラスがAクラスと同等の点数だ。これは接戦は免れないぞ!!』

アナウンスの声と共に会場は盛り上がっていた

のび太side

「「ええ!？」」

僕を除く三人は驚いていた……まあ僕も驚いたよ

「の……のび太!?!あいつ賢かったのか!?!」

「ううん。ジャイアン……明久はバカだよ？正真正銘の」

「では……何故あの点取れたのですか」

小暮先輩は疑問に思ったことを聞いてきたのだ。答えは簡単

「明久は確かにバカです。しかし、彼は人のためなら努力は惜しまないのです」

「のび太君……」

「頼んだよ？明久!!雄二!!」

僕らは彼らの決勝を見届けるためにしっかりと見ようとしたのだ
最後の決勝……幕開けたのだ

決勝戦2

「(明久は、やるときは本当にやるやつなんだ……。きっとこの勝負も勝つ!)」

そう思っているとステージの方で坂本の召喚獣が動き出した。装備が軽いから動きが速い

『夏川……っちは俺が引き受ける!』

モヒカン先輩が慌てて雄二の正面に立つが動きが鈍い

「おそらく明久達の点数に驚いたから動きが鈍いんだろう」

「2人を見下し過ぎたからそうなったのかもしれないね」

三上さんの言う通りだ。人は基本的に予想外の事態に陥ると動きが鈍くなる。ましてやあれだけ見下していた人間が予想外の展開を生み出したら……。ね。

雄二の召喚獣はモヒカンの召喚獣に対してかなりの接近を許している。どうやらタッグマッチというより、明久と坊主先輩。雄二とモヒカン先輩のタイムマンを2試合って試合になるだろう

『それじゃ、僕の相手は先輩ですね』

『上等じゃねえか! 多少ヤマが当たったくらいでいい気になるなよ!』

坊主先輩の召喚獣が剣を構えて明久の召喚獣に突進する。動きは早いが……

『先輩、取り乱し過ぎですよ? ただの突撃じゃ避けてくれと言ってるようなもんです』

明久の召喚獣は半身を右にずらし、小さな動きで相手の身体を避けていた

あんな真っ直ぐな攻撃ならそこまで召喚獣の扱いに慣れてない僕や三上さんでも回避出来る。観察処分者として召喚獣を使いまくり操作能力に長けている明久なら言うまでもないだろう。

冷静さを欠けてバカみみたいな突撃をする。どうやらあの坊主先輩は成績以外は性格そのものみたいだね

『つと、この……!』

坊主の召喚獣が後ろに振り向きざまに明久の召喚獣に横薙ぎの一撃をやったが・・・

『ふっ！』

明久の召喚獣はその一撃を小さく屈んでかわし、一呼吸の間に三度木刀を振るった。回避してからすぐに三度の反撃、やはり明久の操作能力は桁違いに高い

「あの子・・・いくらなんでも操作上手すぎます」

「確かに・・・素人から見てもすげえ」

「私も彼の召喚獣見るのははじめてだけど・・・凄い」

三人とも明久の操作がここまでうまいの驚いていた。彼は伊達に観察処分じゃないさ！

『くうっ・・・』

Aクラス 夏川俊平

日本史 197点↓193点↓190点↓186点

僅かに点数が削られる。いつもと違って今の明久の召喚獣はかなりの攻撃力を持っている為か剣で防いでも若干のダメージを受けている

明久の召喚獣からの攻撃を剣で防御した後は、坊主の召喚獣仕切りなおすように大きく一歩下がった。

『ダメエ、試召戦争じゃ60点程度だったくせに・・・！』

坊主先輩は語気を荒くしながら明久を睨んでいる。台詞から察するに、ある程度は明久達の情報を集めていたようだ。しかし甘く見すぎだ！

『今でもそんなもんですよ。この教科以外は、ね？』

『野郎！最初からこの勝負だけに絞ってやがったな・・・！』

『その通り。よくわかりましたね、先輩』

（雄二は初めから優勝する気で日本史を選択したのだろう

一方・・・

『どうした？顔色が悪いぜ？』

『お前等、Fクラスのくせに!!』

雄二の方もモヒカン相手に優勢だ。身軽な雄二の召喚獣は素早く

動き回る事で互角に渡り合っている。このまま行けば明久が坊主を倒せる。雄二は勝てるかわからないが吉井が加われば問題ないだろう

すると・・・

『仕方ねえ。二年相手に大人げないが、経験の差ってやつを教えてやるよ!』

坊主がそう告げると坊主の召喚獣は大きく跳び退る。しかも明久だけじゃなく坊主本人からも距離を取った

坊主がそう告げると坊主の召喚獣は大きく跳び退る。しかも吉井だけじゃなく坊主本人からも距離を取った

「おのお方・・・何をやる気ですか?」

小暮先輩は訝しげな表情を浮かべるが同感だ。召喚獣を使役する本人から距離を取って一体何をやるつもりだ? 操作能力に長けている吉井相手にそんな事するのは愚行とした思えない

『お前の知らない戦い方があるんだよ』

坊主の言葉と同時に、坊主の召喚獣は剣を腰だめに構え、まるで力を溜めているような感じだ

「何だ? まさかとは思うが能力とやらを?」

「それはないでしょ? 点数が足りてないし」

僕はジャイアンの言葉を否定したのだ。普通に考えればあり得ない・・・

「どういうことだ? のび太」

「400点以上点数を取っていると召喚獣は特殊能力を使えるんだよ?」

「なるほど。つまり、その可能性は低いんだな?」

「ええ、能力を使える腕輪もないと思うけど・・・何かたくらんでるみたい」

三上さんのいう通り、油断は出来ない。あんな風にわざわざ戦い難くする以上、相応の切札があるのだろう。現に明久も目を鋭くして警戒しているし

『おとおおおっ!』

考えている最中に坊主が更に力を込めるように声をあげる。腕輪はないし……

すると、ジャイアンが小さい声で指示だしたのだ

「のび太！あの先輩の懐に砂があるぞ!？」

「え!？」

ポケットから何かを取り出して吉井に投げつけようとしていた。

それを認識した瞬間……

『行け!』

「間に合え!」

隠していた音が鳴らない銃で撃ち抜いたのだ

『え?!』

「ええ?!」

坊主と明久の驚きの声が耳に入る。そして明久は唐突に髪を弄り始め……

『これは……砂利?!』

そんな声が聞こえてくる。やはり坊主が投げたのは砂利だったか。

「どういうこと?のび太君」

「今あなたがあれを撃ち落としたのでですか?」

三上さんと小暮先輩が驚いたように言ってきたのだ。ジャイアンが気づいてくれなかったら、危なかった……

「あんの先輩やろう!!ふざけた真似しやがって!!」

「ジャイアン落ち着こう?簡単な話です。明久に目潰ししようとしていたのです」

その言葉を聞き小暮先輩はため息ついていた

「あの方々は真剣にやっている後輩に卑怯な手を使うなんて……貴方達に申し訳ありませんわ」

「小暮先輩が謝ることないですよ!それに目論見が失敗したからこの勝負……僕らの仲間が勝ちます。思う存分暴れる!明久!」

僕は小暮先輩の謝罪に謝る必要はないと言い、僕らが勝つと言った

ら三人ともキョトンとしていたのだが、構わず僕は明久にそう言ったのだ

「ありがとーのび太！今なら・・・!!」

明久は言うなり自身の召喚獣を雄二と戦っているモヒカンの方に向かわせる

『し、しまった!』

坊主先輩は焦った表情を浮かべながら、明久の召喚獣の元に向かわせる。しかし、坊主の召喚獣は砂利を投げる為に吉井の召喚獣から遠ざけていたので・・・

『はあっ!』

吉井の召喚獣がモヒカン先輩の召喚獣を攻撃する方が早い。坂本の攻撃を凌いでいたモヒカンに吉井の一撃を対処する方法などなく・・・

『ぐっ・・・!』

Fクラス 坂本雄二&吉井明久

日本史 172点&166点

VS

Aクラス 常村勇作

日本史 168点↓86点

明久の一撃を頭にモロに食らったモヒカン先輩の召喚獣は大量に点が削れる。そしてそんな隙を雄二が逃す筈もなく・・・

「吹き飛ばやああっ!」

メリケンサックがモヒカン先輩の鳩尾に叩き込まれる。雄二の雄叫びと会場の歓声が重なる

Fクラス 坂本雄二&吉井明久

日本史 172点&166点

VS

Aクラス 常村勇作

日本史 86点↓DEAD

ディスプレイにそう表示される。同時にモヒカンの召喚獣は点数を失い消える。これで残りは坊主先輩1人だ

『後はお前だけだぜ。サル山の坊主大将。何だか卑怯な手を明久に使ったみたいだが、見事に失敗したな』

雄二はニヤニヤした笑みを坊主に向ける。あの顔は勝ちを確信した笑みだ。まあ当然だろうね。現在の状況は・・・

Fクラス 坂本雄二&吉井明久

日本史 172点&166点

VS

Aクラス 夏川俊平

日本史 186点

圧倒的な差なのだから。加えて目潰しは失敗したので今後吉井は坊主本人の動きにも注意するだろう。そうなれば他の小細工に引つかかる事もないだろう

これなら2人が居眠りしない限り負けはないだろうけどね

『クソツ!!お前ら屑に俺達が・・・っ!』

盗聴器の受信機からは坊主のそんな声が聞こえてくるが・・・

「卑怯な手を使っている方がそれをいっても説得力ないですわ」

「小暮先輩のいう通りです。あの人達は説得力ないです」

「うんうん!」

小暮先輩と三上さんの言葉に僕らは頷いたのだ。だってさ、営業妨害、汚い手など様々な事をしている人達がそんなこと言っても説得力ない!

呆れながらステージを見ると坊主は悔しそうに歯軋りしながら召喚獣を操る。狙いは明久にだ。明久の召喚獣目掛けて袈裟斬りを放つも・・・

『甘い!』

袈裟斬りを紙一重で回避してから木刀を坊主の召喚獣の手に叩きつけて、得物を手から引き離れた

そして……

『これで最後だあ!』

徒手空拳の坊主の召喚獣の顔面にメリケンサックの一撃が叩き込まれる。170点近い雄二の一撃を顔面に食らったんだ。当然……

『クソがあああああっ!』

Fクラス 坂本雄二&吉井明久

日本史 172点&166点

VS

Aクラス 夏川俊平

日本史 186点↓DEAD

坊主先輩の怒号と共に召喚獣が消える。同時に……

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

そんなアナウンスが流れて観客席からは爆発的な歓声が上がってくる。勝者を褒め称える歓声がステージにいる2年屈指のバカ2人に送られる

「あの御方達はとても凄いですわ」

「そうですね。そういうえばのび太君はどうやって気づいたの?」

小暮先輩が笑顔で拍手して、三上さんも拍手しながらどうやって気づいたのか?って聞くと……

「ジャイアンのお陰ですよ。ジャイアンが気づいてくれたから撃ち抜いたのです」

「嫌々、お前が対策してくれたじゃねえか?寧ろお前のお手柄だろ?」

過程はともかく最下位クラスの2人が優勝したのは紛れもない偉業だしね

「まあこれで目的は果たしたんだからつと、坊主の醜態でも写真に撮って新聞部に売ってやるか」

そう言いながらジャイアンはステージで呆然としている常夏コンピの写真を撮る。今回の砂利を投げた事については新聞部に売って

やる。

「容赦ないですわね・・・まあ、私も止めませんが」

「心の友達に迷惑かけたのだからこれぐらいいいじゃないですか」

ジャイアンがそういうと小暮先輩はそれもそうですわね。つと言
い僕らは会場をあとにしたのだ。小暮先輩は先に失礼しますと言い、
去ったのだ

「お兄ちゃん！すつつつごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！は、葉月ちゃん・・・今日も来てくれたんだ。どうもありが
とう」

表彰式と簡単なデモンストレーションを終えて、教室に戻る途中凄
い勢いで葉月ちゃんが飛び付いて来た

わざわざ迎えに来てくれたみたいだ。身長差で頭がみぞおちに直
撃したけど、ココはお兄さんのプライドでぐつと我慢だって顔だね

「二人とも、お疲れ様。凄かったわね」

「あはは。そうでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いですっ！」

「葉月ってば、アキが困ってるわよ？」

島田さんが明久にグリグリと頭を押し付けている葉月ちゃんを見
て苦笑をしている。これ以上鳩尾を圧迫されると致命傷になりかね
ないので、やんわりと彼女の身体を遠ざける。葉月ちゃんは不満げな
表情を浮かべながらも大人しく従ってくれた

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた？」

「はいっ！とつても素敵でした。今度土屋君にビデオをコピーしても
らおうと思うくらい！」

目がキラキラと輝いている。こんなに嬉しい反応をしてくれるな
んて頑張ったかいがあると言うもんだらうね

「ビデオねえ・・・。ムツツリーニ、撮影なんかしていたの？」

「はい。ずつと熱心に撮っていましたよ。ね？」

「・・・(プイッ)」

目を逸らすムツツリーニ。この男、さては試合そっちのけでミニスカートの観客とかを撮影していたね？

「ってか、僕らも店のお手伝いするよ」

「おう！俺様も外部だけど手伝うぞ」

僕とジャイアンがそういうと、皆もお店モードに切り替わったのだ

「三上さんも手伝ってくれるってさ」

「それは俺らには助かるが・・・Eクラスはいいのか？」

「平気。午前中だけだったし、表に出るのは不味いから厨房で手伝うわね」

「ありがとう！」

雄二が珍妙な顔で聞くと三上さんは笑顔で答えたのだ。僕は感謝の言葉をいうと、三上さんがどういたしましてと言った

さあ！お祭りラストスパート!!しっかりやるよ！

最後の決戦

『ただいまの時刻をもって、清涼際の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

アナウンスの放送が流れていたが、僕らFクラスの方はというと……

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「……(コクコク)」

明久がそういうと、秀吉もムツリーニーも疲れたみたいだ……

「私もこのFクラスでも良い経験になったけど……疲れたわ」

「そうだね。僕もいい経験だったかな……疲れたけど」

ホールでは怒涛の勢いでやってくる客を案内してさばき、厨房では材料が足りなくなったり。とても楽しかった

「俺様も疲れたぜ……」

「ジャイアンも手伝ってくれてありがとう。三上さんも」

僕は手伝ってくれた二人にお礼をいうと、二人とも笑顔でどういたしましてといったのだ。スネ夫にもお礼の連絡をしたら、夏休み遊ぶことを条件！って返信あった

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

「ん？お義父さんが気になるのか？」

なんか、雄二の言葉に悪意が……それもからかってるかのようない気がする

「なっ!?べ、べつにそういうわけじゃなくて!」

「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じゃない」

まあ大丈夫だとおもうけどね？あれだけの結果を残したのだから

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「ええっ!?どうして!」

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるわ。(のび太君なら別に……って!じゃなくって!)

「すみません。すぐ戻りますので」

「待つて！三人とも考え直すんだ！カムバアーツク！」

明久の必死の説得も虚しく、姫路たちは着替えに行つた。ちなみに葉月ちゃんはそのままの格好で帰つた。末恐ろしい子だ

「ふむ。ならばワシも——」

「させるかつ！せめて秀吉だけは着替えさせない！」

「なっ!?何をするのじゃ明久！」

「……(フルフル)」

着替えようとする秀吉を明久と康太が必死になつて止めにかかる。往生際悪いなく

「雄二、そろそろ行かないとダメじゃないかな？」

「そうだな。おい、明久！遊んでないで学園長室に行くぞ」

「学園長室じゃと？3人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちよつとした取引の精算だ。喫茶店が忙しくて行けなかつたからな。遅くなつたが今から行こうと思う」

「ならばその間にワシは着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「……(クイクイ)」

「あ、ムッツリーニも来る？」

「……(コクコク)」

秀吉の着替えをさせない為に一緒に行かせるつもりか？どうせ最後には着替えるんだし諦めなよ……

「困つたのう。雄二、なんとか言つてやつてくれんか？」

「ま、いいだろ。秀吉とムッツリーニも行こうぜ。明久を説得するのも面倒だし」

確かに雄二の言うとおりで。説得するとなると時間と体力を浪費するだけだし連れて行つたほうが良いかもしれない

「雄二まで……。やれやれ、仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

「よし。ほら明久にムッツリーニ。足を放してやれ」

「うん」

「……(コクリ)」

「やれやれ。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじやろうに……」

いや、少なくとも明久とムツツリーニーにとっては違うと思うよ？「のび太く、俺も学園長に話あるからいくぞ〜」

？ジヤイアンは確かに昨日話聞いていたから違和感はないけど……学園長に話つてなんだろう？こうして、僕も含めて6人でいくことになったのだ

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

明久と雄二はノックと挨拶をしながら学園長室の扉を開ける

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「そう？きちんとノックをして挨拶したけど？」

いや、普通は返事あつてからはいるものだよ？

「全く……あんた達は本当に礼儀知らずだねえ」

当の明久と雄二は素知らぬ顔をしている

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかつているよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

相変わらず口が悪いな。これは本当に学園の長なのかな？

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

学園長はムツリーニーと秀吉とジヤイアンを見て咎めるように言い捨てる

「コイツ等もババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい押んでも罰ばちはあたらないはずだ」

「ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

学園長はつまらなそうに鼻を鳴らす、雰囲気から察するに負い目はあるようだ

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

白金の腕輪は所有者本人が装備する物で召喚獣に装備する物ではないからね

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」
「む？明久よ、不具合とはなんじゃ？」

「あ、そっか。秀吉は知らなかったんだね」

「これにはー」

明久が秀吉に説明していたのだ。ん？待てよ？

取引を知ってるのは僕、明久、雄二、学園長、そしてジャイアンだけだ。そういうや教頭は僕達が初めて学園長室に来る前に学園長と何か話していて、出て行く際に隅っこを……っ！瞬間、僕は何故奴等がこつちの事情を知っている事を理解した

「腕輪には暴走する危険があるから、教室の改修と交換条件で僕達がこれをゲットするって言う取引を学園長と——むぐっ?!」

「どうした!?!のび太!?!」

「明久！それ以上喋るな！」

僕は即座に明久の口を塞ぐ。ジャイアンが驚いていたがあとで説明する

「のび太の言うとおりで！その話はマズい！」

どうやら雄二も事情を理解したようだ。真剣な表情で明久に怒鳴る

「……………盗聴の気配」

ムツツリーニーがそう言うと同時にジャイアン察してくれて、踵を返して学園長室のドアを蹴り開ける。すると見覚えのある髪型の2人が走り去っていた

「くそ！遅かった！恐らく聞かれたぞ！坂本！のび太！」

「やられたか！」

雄二が悔しそうな表情をしながら舌打ちをするが、僕も同じような気分だ。今僕達の状況は本当に最悪の状態になっている。

「追うぞお前ら！」

「ちよっ……………どういう事!?!」

「盗聴だ！竹原に加担してた連中は、学園長室に盗聴器を仕掛けていたんだ！」

「なんだって!?!」

「今の一連の会話も聞かれていたはずだ。もしも録音なんてされていたら、相当マズいことになる!」

「録音!? 冗談じゃない!」

雄二が明久に走りながら説明していたのだ。明久も事の事態を理解してくれたのだ

「急げ!」

「わかった! 2人も協力して!」

「うむ!」

「……………(コクリ)」

明久の言葉に二人もすぐに動いてくれた

「雄二! 向こうは例の常夏コンビでしょ!」

「そうだ! ちらつと例の髪形が見えたから間違いない!」

「つてコトは二人組だよ! こっちも二人ずつに分かれよう!」

確かに明久の言うとおり、三手に分かれて探した方が効率が良いだろう

「ならばワシ等にもそやつらの特徴を教えてください!」

「坊主頭と小さなモヒカンだよ! 見たらすぐにわかる!」

「了解じゃ! ワシとムッツリーニは外を探す!」

成程。家に帰ってコピーでもされたら面倒だから、まずは学校の出
口から潰すつて事か

「のび太と剛田は3、4階を探せ! 俺と明久は1、2階を探す!」

僕らは先ずは3-Aに行くべきだろう。帰ろうとしていたら即座
に捕まえる!

「…………明久、のび太」

「ん?」

「何だ?」

走りながらムッツリーニが明久と僕に何かを手渡した

「ムッツリーニ愛用の双眼鏡?」

「…………予備」

これ絶対に覗きの為のヤツだよな?? しかし今は常夏コンビを見つ
ける事に最適な物だから敢えて口にしない

「サンキュ、ムッツリーニ！」

「助かる！」

「……この学校は気に入っている」

それは間違いなく女子と制服が可愛いからと言う理由だろう。まあ何にせよ学園が潰れて欲しくないと思う気持ちは一緒みたいだな。

「目標を見つけたら携帯に連絡を入れてくれ！」

「うむ！」

屋内組に僕はジャイアンと吉井は雄二とで、屋外組に土屋と木下つて感じに別れた。

「明久！先ずは放送室を押しやるぞ！」

「オーケー！」

そんな声を聞きながら僕らも3年の教室がある4階に向かって走り出した

「すみません」

3年の教室がある4階に着いた僕らはは3ーAの豪華なドアを叩く。

するとドアが開き出てきたのは

「あら？貴方達は……」

小暮先輩!?そうか、小暮先輩はAクラスだったんだ

「あの、すみませんが夏川先輩と常村先輩はいますか？」

小暮先輩が周りを見て確認すると首振ったのだ

「いませんわ。何かあったのですか？」

「すみません！時間がないので失礼します！」

「失礼します！」

「そうですか。気をつけて下さい」

ジャイアンと頭を下げてそのまま教室を後にする。自分らの教室が有力と思ったんだが……

「……じゃないとしたら、他にどこにいると思う!？」

「放送室には雄二達がいったが連絡ないからいなかったと思う!と

なったら・・・屋上に行ってみよう！」

「わかった！行くぞ！」

僕とジャイアンが全力で走っていったのだ。学園崩壊とかそんなのごめんだ！

「いたぞ！」

ジャイアンが叫ぶと向こうは苦虫を潰した顔をしていた

「ゲツ！来やがったぞ！」

予想通りそこには常夏コンビがいて放送機器をいじっていた。そして坊主の手には再生機械がある。アレを破壊すれば僕達の勝ちだ。見る限りじゃ放送の準備はまだ終えてないようだし、ここで目論見を潰す

「のび太！おまえは坂本に連絡を！俺様は今機嫌が悪いんだ！覚悟しやがれえ!!」

言うなりジャイアンは常夏コンビに向かって突っ込む。するとモヒカンの方が立ち上がり坊主に話しかける

「夏川、俺が時間を稼ぐから放送の準備をしろ！」

「頼む。10秒ちよいで良い！」

後10秒ちよいか。だとしたらモヒカンを急いで潰さないといけない！そう判断したジャイアンは更に速度を上げてモヒカンに突っ込む

「邪魔すんじゃねえよ！」

そしてモヒカンはそう叫びながら拳を放ってくる。しかしジャイアンからしてみればシヨボいので、モヒカンの一撃を避けてモヒカンの足に全力の蹴りを叩き込む

「ぐっ・・・！」

モヒカンは苦痛に顔を歪めるも、何とか耐えて右手を伸ばしてくるので、ジャイアンその右腕を掴み、思いきり投げたのだ

「言ったはずだ！俺は今機嫌が悪いっつと！」

「がああああっ！」

それによつてモヒカンは地面に崩れ落ちるのでジャイアンは坊主の元に駆け出す。今ので7秒。これなら5メートル先にいる坊主が放送するよりジャイアンが坊主を潰す方が速・・・っ！

すると突然足を掴まれた感触がしたので振り向くと・・・

「行かせて……たまるか……！」

モヒカン先輩が左腕でジャイアンの右足を掴んでいたのだ

「(何っ！執念だよ！てかそんな執念があるなら受験も受かるだろ?! 本当に苛立つ！)」

ジャイアンは内心舌打ちをしながら左足でモヒカンの右腕に蹴りを放ち、再度走り出す。後ろからは絶叫が聞こえてくるが今は気にしないしないで走っていたのだ

「よし！準備完了だ！」

坊主の声が聞こえる。どうやらモヒカンの時間稼ぎは成功したようだ。

「させるか！」

ジャイアンが全力疾走をするも向こうの方が早い。再生機械をセットして再生ボタンを押そうとする。間に合わないか?! くっ！銃を出して撃てば間に合うはず！

「残念だったな！これで俺達の逆転しよ・・・おおおっ?!」

撃とうとした瞬間、驚愕の表情に変わり何故か放送機器から距離を取る。いきなりどうしたんだ？

そう思っていると・・・

ドオン！パラパラパラ

いきなり目の前で爆発が生じた。爆風によつて生まれた屋上の床にあるコンクリートの破片が辺りに飛び散る

「な、何だいきなり?!」

「わからない！」

思わず周りを見渡すと・・・

「はあああぁっ?!」

右側から何かが飛んできたので慌てて後ろに跳ぶと・・・

ドオン！

再度爆発が起こり、今度はスピーカーカーが破壊される。

何だ何だ?!何が起こつてんだ?!

そう思いながら謎の物体が飛んできた方向を見ると……

「何をやってるんだあいつらは……?」

ジャイアンがそういうと僕も振り向くと……

グラウンドの隅に雄二と明久がいた。しかも周囲に立会人の教師
がいないにもかかわらず明久の召喚獣がいる……

そうか!雄二の白金の腕輪を使ったのだろう。白金の腕輪は先生
の代わりに立会人になる事が出来る能力を持っている

それを使つて召喚フィールドを作り、物に触る事が出来る明久の召
喚獣を生み出して花火を投げたのだろう。

僕らが呆気に坊主も同じように呆気に取られた表情をしながら雄
二と明久を見ていることに気が付いた。

右手には再生機械を持ちながら

それに気付いた瞬間、僕は……

ダンッ!

「なっ?!」

銃で手の方を撃つと、ジャイアンが瞬時に坊主先輩との距離を詰め
る。坊主先輩は驚愕の表情を浮かべるが一步遅い。

「反省しろおおお!!」

「がはっ!!」

言うなり坊主先輩の鳩尾に全力の拳を叩き込む。それによつて坊
主先輩は驚愕の表情から苦悶の表情に変わり、両手で腹を押さえる。

それによつて再生機械が坊主先輩
の手から零れ落ちたので……

「ふんっ!」

グシヤ

ドオン!

再生機械を踏みつけて破壊する。同時に花火が飛んできて放送機

器が木っ端微塵に吹き飛んだ

「僕たちの勝ちですね？先輩」

笑いながらそう口にする。すると坊主は腹を押さえながらも顔を上げて憎悪に染まった眼差しを向けてくる

「ふざけんじゃなねえよ……！散々俺達の邪魔をしゃがって！Fクラスの屑が調子に「煩い！」がつ！」

ジャイアンが最後にもう一度鳩尾に拳を叩き込むと坊主を地面に崩れ落ちる

「いい加減にしろ！人に屑とか言う権利はねえ！頑張っているやつらもいるのに一括りしゃがって……!!」

倒れてる先輩に胸ぐら掴みながら怒っていたのだ

「そもそも受験勉強を楽にしたいが為にこんなことを起こしたんだろ？ふざけるな！そんな楽なことをしても今後の人生はもつと辛いこともあるんだ！受験と言う苦しさから逃げるな！」

ジャイアンが倒れてる先輩にぶちギレていたのだ。そんな僕は雄二に電話をかける。すると直ぐに繋がった

「坊主が持ってた再生機械は破壊した。これで僕らの勝ちだ」

『よし良くやった。じゃあお前らは今直ぐ屋上から離れる。常夏コンビに火花をブチ込む』

え?!モヒカンが投げられて体痛めているし、坊主は鳩尾に2発拳を受けてゲロを吐いてるんだよ？流石にそれはやり過ぎだ、そう言うおうとしたが……

『点火いきまーす』

電話から明久のそんな声が聞こえてくる……どうやら手遅れのうちだ

そう判断した僕は雄二の指示に従いジャイアンと一緒に屋上から離れようとした時だった

『貴様らあつ！何をやっているかあつ！』

『うわあつ！』

電話越しにドスの利いた怒鳴り声が聞こえてくる。この声は……

そう思うと同時に・・・

ヒュ〜……ドオン!

そんな音が聞こえて足元から地響きが聞こえてきて、同時に煙が上
がってくる。どうやら屋上ではなく校舎に当たったようだ。

そして……

『吉井に坂本おっ! 貴様ら無事に帰る事が出来ると思うなよおお
!』

電話越しにお馴染みの低い声が聞こえてくる。あー、僕ら知らない
く何も知らないく

『違うんですよ先生! 僕等は学園の存続のために!』

『存続だ?! バカを言え! たった今お前らが破壊したばかりだろうが
!!』

西村先生の怒号の中、明久たちが旧校舎に逃げ始めていったと思
いきや雄二はそのまま学校外へと逃げ出した。明久を餌に自分だけ助
かろうとしたね

『誰か! 誰か助けてえ!! 変態教師が服をはがしてどこかに連れ込
もうとする!!』

『貴様はよりにもよって、何という悲鳴を上げるんだ!!』

僕らは知らないふりして、学園長の方に行ったのだ。がんばれ明久

祭りのあとの打ち上げ

「準備はいいか？野郎共おお!!」

『おおー!!』

「今日はハメを外して盛り上がるよー!!」

『おおー!!』

「それでは、中華喫茶『ヨーロッパピアン』の成功を祝して、乾杯だあ!」
『カンパーイー!!』

僕とジャイアンの号令で缶と缶がぶつかり合う音が響く。集合場所である近所の公園は、既にFクラスで一杯だ。特に店も取らずに、お菓子とジュースを用意して公園で打ち上げ。これはこれで良いよねー

「むっ? やつと来たようじゃのう」

「お、遅かったな。2人共」

「……先に始めておいた」

「ああ、ゴメンゴメン。ちよつと鉄人がしつこくてさ」

鉄人の鉄拳を受けていた明久と雄二は顔が面積が倍になるほど腫れ上がっている

うわー、雄二も捕まったのか。まあ、逃げ切れると思えなかったけどね

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「……(コクコク)」

秀吉の言葉にムツリーニーも頷いていた

「……コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ……」

今、明久と雄二は学園で一番の有名人なのは確定だね。あれだけの大騒ぎをしたのだから……

「あれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ? ウチだって気になるし」

あー、この件を知ってるのは僕とジャイアンと後の二人だもんね。

後は学園長が動いたのだろうか

「そういえば、お店の売り上げってどうだったの？」

このままでは不味いと思い、僕は話を変えた

「そうね。凄いつて程じゃなかったけど、たった二日間の稼ぎとしては結構な額になったんじゃないかしら？」

島田が収支の書かれたノートを見せてくれる

「ふむ、どれどれ・・・」

島田の後ろから雄二が覗き込んでいる

「この額だと、畳と卓袱台がせいぜいだな」

「うくん・・・。やっぱり出だしの妨害が痛かったよね」

だよねえ。喫茶店ともなると、どんなに人気が出ても客の回転に限界が出てくる。短期間ではこれが限界だろうが、これでもいい方だと思うけどね

「まあ、それでもいい方なんだろう？坂本」

「まあな・・・。って待て！お前いつの間にいるんだ!?!剛田！」

「本当だ！馴染んでいて気づかなかった」

ジャイアンの言葉に返事した雄二が慌ててジャイアンの方に振り向いてツツコミ入れたのだ。明久も今気づいたみたいだけど、他の面子も同じ顔していた

「いや、最初の時点で気付こうよ？ジャイアンと僕が合図だしていたでしょ？」

「言われてみれば・・・」

最初のいた面子もそういえばそうだと言っていた。まあそれだけ馴染んでいたんだろうけどね？

すると・・・

「すいません遅くなりました！」

姫路が走ってきてこちらによって来てのだ

「あつ、瑞希！どうだった？」

「はい！お父さんも話して分かってくれました！美波ちゃんが協力してくれたお陰です！」

ああ、良かった。無事に阻止したみたいだ。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

と、一瞬姫路が微妙な顔をした、すぐに元に戻ったがどうしたのだろう？

「すみません。私も飲み物を貰っていいですか？ 沢山お話したののでどが渴いちゃって」

「あつ、うんどうぞ！」

「ありがとうございます」

受け取って、一気に飲み干す姫路

「あつ……！」

と、島田がその様子を見て声をあげる。なんか問題でもあるのかな？

「あれ？もしかして、美波ちゃんのだったんですか？」

いや、島田のものじゃないはず。どうしたんだろう？

「そ、そういうわけじゃないけど、その……」

「美波も飲みたかったとか？」

明久がそういうと島田が顔あげた

「飲みたかった……？そ、そうね！瑞希、悪いけどウチも一口貰っていい？」

「あ、ごめんなさい。全部飲んじゃったんです。新しいの貰ってきますから、ちよつと待って下さいね」

と姫路がジュースが置いてあるところに行く。あれ？姫路はあんなにフットワークがよかったかな？

「……新しいのじゃ意味ないじゃない……」

と島田は随分と不満そうだ。なにが気に入らないんだろう？よく分からない

「そういえば、明久……」

「ん？どうしたの？」

「昨日変な連中から助けてくれた時、その……」

島田が恥ずかしそうに俯く。ああ、あの時の礼を言いたいってことか？

「その・・・『よくも美波に手をあげてくれたな!』って怒ってくれたの、凄く嬉しかった・・・」

「えっ!? あ、いや、あれは、その!!」

「言いたかったのはそれだけっ!じゃあねっ!」

と島田は走り去っていた。お礼言うだけであそこまで顔真っ赤になるなんて・・・

しかし・・・これは・・・

「うん・・・お酒だよね?」

そう! 僕らが飲んでいたのはお酒だったのだ。ばれないかな・・・?

そう考えていると、僕は待ち合わせの時間が来たのだ。そろそろ失礼しないと

「ジャイアン、雄二! 僕はそろそろ動かないといけないから失礼するね?」

「おう! わかった! 雄二! まだ飲めるな?」

「ああ、この飲み物美味しいな。又な。のび太」

そういう雄二は顔が赤いのは酒の飲み過ぎだね。ジャイアンは

さして、僕は待ち合わせの場所に行こうかな

『うぎやあああ!』

明久の悲鳴を後にして動いたのだ。何をしたのだろうか? 明久は

公園の少し離れた時計台で僕はある人を待っていたのだ。

「あつ来たね? 三上さん」

「あつ、ごめんなさい。待たせてしまったかしら?」

三上さんが申し訳なさそうに言ってきたのだ。僕は慌てて、首を横に振りながら大丈夫と言うと向こうも安心したのだ

「そういえば、清涼祭お疲れ様。手伝ってくれてありがとうね?」

「ううん。私がそうしたいからそうしたの」

「そっか・・・ねえ、三上さん。話したいことって何?」

すると三上さんがいきなり頭下げてきたのだ。

ええ!? なんでえ!?

「まずは2つお礼言いたくって・・・」

お礼？何の事だろう？

「1つは昨日の事・・・不良から助けしてくれたこと。そしてもう1つはBクラス戦の時の根本が奪った髪留めを取り返してくれてた事・・・それらを含めてありがとうね！」

「え？僕は当たり前前の事をしただけだけど・・・」

すると三上さんがクスツと笑ったのだ

「やっぱり昔から変わらないね・・・のび太君は・・・あのときも」

「昔から？ごめん！昔あったことあったかな？」

すると、三上さんが根本に奪われていた髪留めを自身の方をさしたのだ。はて？その髪留めと三上さん・・・どこかで・・・

「・・・あー！もしかって！小学校の時の会った子!？」

「うん！そうだよ？のび太君」

思い出した！昔、小学校の時の帰りの時に泣いている女の子がいたんだ！その時に親友に頼んで探し出す道具で見つけて嬉しそうに抱え込んでいた子だ！

「驚いた・・・だから僕の下の名前知っていたのか」

「ええ、あの時のび太君が見つけてくれた髪留めは今も大切にしているの」

そうか、これで僕のモヤモヤしていたのが一つ消えたのだ。

「ねえ、これから僕らは友達だね？」

「ええ（・・・未だに気づいてくれてないのね・・・私があなたにもう一つ話したいことが・・・でも時が来たら話したい）」

三上さんが何か考え込んでるがどうしたのだろうか？

「三上さん？」

「あつーごめんなさい！」

？何を考えていたのだろうか？

「今日はもう遅いから帰るわね？話したかったのはそれよ？私の事を思い出してもらおうって思っ」

「そっか・・・またね？三上さん」

「ええ、またね？のび太君」

僕らはそれぞれの帰路へ帰ったのだ。すると、メールが届いたので僕はそれを開けてみると驚くべきメールが

件名：思い出した！

ジャイアン：俺様も来週からお前の学校通うこと決まったからなく！
因みにFクラスだー

「・・・ええ!!!!!!」

思わず連絡に僕は驚いたのだ・・・でも同時に嬉しかった。またジャイアンと馬鹿なこと出来るのに嬉しかった。早く来週にならないかな・・・？明日は休日だし・・・あー、またジャイアンと同じ学校通えるのは楽しみだなー！

胸を弾ませながら帰宅したのだ。明日からも波乱の生活が待ってる！

如月パーク編 事始め

とある休日の朝。俺が目を覚ますと――

「…………雄二、おはよう。」

目の前に翔子がいた

「…………今日はいい天気」

「ん？ああ、そうみたいだな」

カーテンを開けると強い光に目を細める。そして再びと幼なじみの姿を見る……

今日は休日だからか、さすがにいつもの制服姿ではなかった。寝ぼけているのかもしれない。眠気を振り払うように頭を大きく振って、翔子に向き直る

「あらためて、おはよう。翔子」

「…………うん。おはよう雄二」

「よいしょ、っと……」

そういえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ？

今日はコイツと何かの約束をしていたっけ？

寝起きのためか本調子ではないが頭で記憶をさかのぼる。ダメだ。全く覚えがない。なら約束ではないだろう。だとすると……………

ほかの理由を考えて、1つの結論にたどり着く。

そうか、そういうことか。

「悪い翔子。俺の携帯とってくれ。」

「…………電話でもするの？」

「ああ、そうだ。」

翔子が渡してくれた携帯を操作し番号を押す。コイツがここに
いること。それは……

「もしもし？警察ですか？」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ガチャツ！

「おふくろっ！どっ！どういふことだっ！」

「あら雄二。おはよう。」

キッチンに駆け込むと、おふくろは洗い物をしながら朝の挨拶をしてきた

「おはようじゃねえっ！どうして翔子が俺の部屋にいたんだ！おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちゃっただろうが！」

幼なじみが無断で俺を起こしに部屋に入ってきたと告げたときの相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。寝ぼけていたとはいえ、一生の不覚だ

「・・・え？翔子ちゃんが・・・？？」

おふくろが頬に手を当てて困ったような顔をしている。この態度だと、もしかや翔子単独の行動か？おふくろの手引きじゃなかったのか？もしそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは早計かもしれない「ああ、いや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に上げたものだ——」

「もう、翔子ちゃんってば奥手ねえ。折角お膳立してあげたのに何もしないでいるなんて勿体な——あら雄二、どうしてお母さんの顔を鷲掴みにするのかしら？」

「やっぱり、アンタのせいか・・・！」

この母親には一度きつちり常識を教えてやるべきだろう

「・・・雄二。お義母さんを虐めちゃダメ」

「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないとイケないんだ」

遅れて現れた翔子が俺の腕を掴んで邪魔してくる。なんとなく、翔子の言う『お義母さん』の発言が普通と違うような気がするが

「・・・言うことを聞かないとこの本をお義母さんと一緒に読む」

翔子を取り出したのはA4サイズの冊子

ん……まさか!?

「ま、待てっ！それは女子の読むものじゃない！早くこっちに寄越せー!!」

ムツツリーニですら唸らせた至高の1冊が見つかるなんて最悪の事態だ！

一緒に暮らしているおふくろでさえわからないような場所に隠したはずだぞ?!

「あら翔子ちゃん。それは雄二が日本史の資料集の表紙をかぶせて机の2番目の引き出しの2重底の下に隠してある秘密の本じゃない?」

「わ、わかった。おふくろは開放しよう」

言われた通りアイアンクローを取りやめる。なんて汚い脅迫なんだ。

てかおふくろにもバレていたのか……

「……そう。それなら、この本はー」

取り返したら今度こそ絶対に見つからないように隠してやる。机の引き出しに鍵でもつけて嚴重に――

「燃やすだけで許してあげる」

「すまん翔子。どう考えてもそれは許された時の対応じゃない」

普通は許してくれたらその本を返してくれるはずだ!

「……じゃあ、この本を燃やしても許さない」

「燃やさないという選択肢はないのか!?!」

小学校からの付き合うになるが、たまにコイツの考えについていけなくなる。そして、お袋はお袋で特に慌てた様子もなく、最後の洗い物を終えてエプロンで手を吹いていた。

なんともマイペースな母親だ

「俺にはこれが仲の良い光景とは全然思えないんだが……」

「あら、そうかしら?」

お袋にこれ以上入っても無駄だ・・・

「やれやれ・・・。んで、どうして翔子が来てるんだ?」

「・・・約束」

「約束? 今日俺となにか約束をしていたか?」

そんなもの俺はした覚えがないんだが

「・・・うん」

いつもの調子で頷いてポケットから小さな紙切れを取り出す翔子

「あら。如月グランドパークのオープンチケット? しかもプレミア
ムって書いてあるから特別なチケットなんじゃないの? 凄いわ翔子
ちゃん、よくこんなもの手に入ったわね」

「・・・優しい人がくれた」

「そう。良かったわね。あら、雄二? どこに電話してるの?」

「ちよつと最低のゲス野郎に用ができたんだ」

携帯電話の番号通知をOFFにして俺のよく知るあいつの番号を
呼び出す。呼び出し音の後、あいつは軽快な声で電話に出た

『はいもしもし? どちらさまですか?』

「・・・キサマヲコロス」

『えっ!? なになに!? 本当に誰!? メチャクチャ怖—————』

電話の向こうで狼狽する声を聞きながら通話を切ると、少しだけ気
分が晴れた

あの野郎に渡したのが間違いだった!! 俺の人生をなんだと思いや
がる

「・・・雄二、行こう?」

「絶対に嫌だ」

「あら。どうしてそんなに嫌がるの? 翔子ちゃんと一緒に行ってきた
らしいじゃない」

ここで説明したら翔子が是が非でも結婚させようとあらゆる手を
尽くすに決まっている・・・翔子はそんな女だ

「・・・私は、雄二と一緒にいきたい」

とはいえ、いい加減ビシツと断っておかないといけないな。今日こそはつきりと言つてやろう。

俺は大きく息を吸い……

「翔子「イヤ」俺のこと……」

早い！早すぎる！まだ名前の部分しか言っていないというのに！

「だ、だがな、翔子」

「……どうしても行きたくないなら……」

俺の言葉を遮り、翔子はバックから何かの冊子を取り出した

それは――

「選んで」

――結婚式場案内のパンフだった

「すまん。話の流れがさっぱりわからない」

「……約束を破ったら即挙式って誓ってくれた」

「俺、そんな約束したか?!」

なんか契約の内容が変わっていないか？

「お母さんはハワイとかの海外がいいな」

「おふくろ。アンタはどうしてそんなにマイペースなんだ」

「……雄二。早く選んで、予約するから」

「あつ！ヨーロッパもいいわね。雄二、どこがいいかしら？」

「くっ！」

どちらを選んでも結婚の話がチラつくという恐ろしいこの状況。

だが、この程度の困難に屈する俺ではない！なんとかして脱出をし

てやる――！

そんな決意をしている一方……

とある朝に一人の男が目が覚めたのだ。男は眼鏡をかけるとゆつくりと階段降りて、用意されている朝御飯の方に向かったのだ

「ふわく、おはよう。お母さん、お父さん」

「あら、のびちゃん。おはよう」

「今日は休みなのに起きるの早いな」

そう、階段から降りてきたのが、野比のび太だったのだ。彼は朝御

飯を食べながら今日の事を説明していたのだ

「うん。今日はジャイアンと遊びに行くんだ」

「あら？武さんと？夕飯はどうする？」

「うーん、無しでいいよ。たまには二人も晩御飯食べに行ったら？」

「あらそう？お言葉に甘えてそうしましょうかしら？あなた」

「そうだな・・・のび太お小遣い渡さなくなっついていいか？」

「うん！大丈夫だよ！この間貰ったお金がまだあるから！いってきますー！」

そういつて、のび太は朝御飯を食べ終えて出ていったのだ

「早いものだな・・・もう高校二年生・・・」

「そうね・・・きつとーも喜んでくれるでしょうね」

そういうと写真の方を見ていたのだ。今より幼いときの家族とのび太の友人らが揃ったの写真を見ていたのだ・・・

のび太は外に待っていた友人に声をかけたのだ

「おはよう！ジャイアン！」

「おう！のび太！わるいなー」

「うんいいよ！ってあれ？スネ夫は？」

ここに來てない友人にジャイアンに質問するとジャイアンは苦笑いしていた

「久しぶりに俺様の手作りの試食してくれたらその日夜食あたりしてしまっって倒れたんだとよ」

「え?!」

「まあ、あいつが美味しすぎて倒れたっていつているから俺様の原因じゃないみたいだな！」

「そ・・・そう」

ここに來てないスネ夫にのび太は瞑目したのだ。そして、ジャイアンがスネ夫からプレミアムチケットを貰ってるがあと一人誰呼ぶようになったら三上さんを呼ぶことに決めたのだ。明久達が何故か連絡しても繋がらなかったのだから・・・

「メールしたらすぐに返信あつて、十分で向かうつて」

「そうかー、にしてもプレミアムチケットって企業の企みにならない

「らしいぞ?」

「え? そうなの?」

「ああ、スネ夫曰く『ウエディングコースは無いよ。純粹に丸一日遊べる無料券だよ』ってさ」

「それなら良かった」

そう話していると三上さんがきたのだ。

あれ? なんか・・・三上さんの服装・・・凄く可愛い・・・

「お待たせ! あら、剛田君、のび太君はどうして固まってるの?」

「え? おおい? のび太?」

「はっ!?! ごめん!」

僕は慌てて謝罪したのだ。普段の服装とは違い、可愛らしいワンピースでより三上さんの可愛らしさ出している

「なら、いこうぜー」

「そうね。いきましょ! 剛田君! のび太君!」

「うん!」

僕ら三人は一緒に歩いていったのだ

この時・・・遊園地がとんでもない事になるなんて思わなかった・・・

オマケ

ダウンしたスネ夫は・・・

「ぐう・・・ジャイアンの料理・・・恐るべし・・・ガクツ」

ベットで苦しんでいた・・・

時には諦めは肝心

「俺は……無力だ……!!」

電車とバスで2時間ほどかけ、俺と翔子は如月グランドパークの前にいた。明久の野郎次会った時はただじゃ済まさないぞ!!

「……やっかついた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子。ふむ・そんな姿を見ると連れてきた甲斐もあるかもしれないな。うん、そういうことにしよう

「よし。それじゃ、翔子」

「……うん」

「帰ろう」

ミシッ……

「……ダメ。絶対に入る」

「はっはっは。翔子、俺の肘関節はそっち側に曲がらないぞ?」

肘をしっかりと固めて極めてくる翔子に俺はとりあえず笑って言うが、やばい。感覚がなくなってきた

「……恋人同士は皆こうしてる」

「待て翔子!お前は腕を組むという仲睦まじい行為とサブミッションを同様に考えてないか!」

「……??」

翔子は不思議そうに首をかしげている。恐らくこいつは世の恋人同士は彼氏を逃がさないために肘関節を取り合っって見えるのだろう。こういうところに関しては本当に常識から欠如している……一応こいつ学年首席だからな?

「……とにかく入る。」

「ぐわあっ!せめて関節技を解いてから歩いてくれ!本当に肘関節が逆方向に向いてしまううう!」

俺はそのまま肘関節を人質にされゲートに連行された。周りを見るとプレオープンということか遊園地という割には人は結構まばらだな。これだとアトラクションの待ち時間で時間をつぶすというこ

とが出来ない。そしてそのまま俺たちはゲートの前に立っていた係員の青年の前に連行された

「いらっしやいマセー！如月グランドパークへようこそ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔振りまいた。顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが・・・

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「・・・はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった。翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる

「・・・そのチケット、使えないの・・・？」

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくださいー
イ」

係員はポケットからトランシーバーを取り出し、俺たちに背を向けてどこかに電話をし始めた

「——こちらブラボー1。例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始めろ。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

この係員、急に目の色が変わりやがったぞ。まさか例のジnkスを作るための作業員か？しかもさっきのコードネームを聞く限り一人だけじゃないみたいだな？

「・・・ウエディングシフト？」

翔子が首をかしげている。如月グランドパークの企みを知らないコイツにはよくわからない単語だろうな。つか知らないでいて欲しい。知ってしまったらこいつは絶対成し遂げようと奔走する

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

「アンタ、さつき流暢に日本語話してなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカりませーん」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。あからさまに怪しい：「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ？入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで、向こうのやろうとしていることはよくわかった。だが、そんなものに乗る気はない！そうしないと、俺の人生がっ……！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおテモナシさせていただきマース」

「不要だ。それとそれをいうなら「おもてなし」だ！」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ！」

「この通りデース」

「却下だ！」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろう。なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め……

！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……(ポツ)／／／」

翔子は似非外国人の言葉に頬を赤らめていた

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。うん？なんだか見覚えのあるヤツだな。帽子で顔を隠しているのが怪しいが……

「アナタが持つてきてクレだのデスカ。わざわざありがとうございマース。助かりマース」

似非外国人が礼を言いながらカメラを受け取る。やはり妙だな。そこらのコンビニならともかく、こういった場所のスタッフが客の前で同僚に丁寧な礼を言うだろうか？——ふむ。少し試してみるか？

「翔子。すまないちよつと電話をさせてくれ」

「……誰にするの？」

「なに、すぐに終わる」

携帯電話を取り出し、ある奴に電話をする

P r r r r r r r r r r r r r r r r

「あ、すみません。僕の携帯ですね」

するとさつきカメラを持ってきたスタッフが携帯電話をかける

ビンゴだな……

「……よう明久。てめえ、面白いことしてるじゃ無ねえか……??」

「人違いですつ!!」

ダツ!!

すると明久は脱兎のごとくその場から逃げだした。逃がさねえ!!

「待て明久!!」

ガシイ!!

「……雄二。どこに行くの？」

俺が明久を追いかけようとした時、翔子に腕を掴まれた

「待て翔子。俺はここで奴を倒さないといけないんだ！」

「……デートなんだから今は私を見て」

ミシツ……

「ぐああ！わかった。わかったからまた肘関節を極めるな！」

翔子が止めたせいで明久の野郎は消えちまった。いや、もしここで無理やり行った日には俺の右手は使い物にならなくなりそうだからあきらめるしかなからう……!」

「スイマセーン。彼はココのスタッフのエリザベート・花子（35歳）通称ステイブでース。決して吉井なんとかさんではありませんー

ン。」

「黙れ！人種性別年齢氏名全てにおいて堂々と嘘をつくな！しかもどう考えてもその名前で通称スティーヴはないだろ!! ついでに俺は吉井なんて苗字は一言も言っていない！」

あの野郎、絶対に俺をはめる気だ……！俺の人生をなんだと思つてやがる！さてはいつもの仕返しか?! 己え！明久ー! ……しかしこここのスタツフに成りすますなんて結構大がかりなことしやがったな!

「(となると……奴以外にもいる可能性はあるな) 翔子、すまんが我慢してくれ」

「???

きよとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった

「……!! (ギラッ!)」

遠くから懐に手を伸ばすキツネのぬいぐるみの姿が見えた

「やっぱりいやがったか。とつきにデジカメを取り出そうとするあの動きからしてムツツリーニだろう」

これではつきりした。おそらく明久が他の連中に頼み込んでクラスの中を連れてきたんだろう。いやもしかしたらほかのクラスの連中にも声をかけているかもしれん

「……雄二、えっち」

翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた

「なっ!? ち、違うぞ翔子! 俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ!」

「……それはそれで、困る」

ガシッ! メキメキメキ……

「ぐあああああつ! 理不尽だああつ!」

翔子の握力で俺の頭蓋が軋む音が聞こえてきた

「……でハ、写真を撮りマース」

「……ちよつと待つて。」

すると翔子は一度手を離して俺の腕に抱き付いてきた。これで痛みは免れ――

ミシイ

「がああ!!だから肘関節を極めるな!普通に組めばいいだろうが!!」

「はい、チーズ」

近くでフラッシュが焚かれ、ピピツという電子音が聞こえてきた

「スグに印刷しマース。そのまま待つていてくだサイ」

「……わかった。このまま待つてる」

「ま……待つて!!このままだと俺の右手が動かなくなる!」

まずい。また右手の感覚がなくなってきた。

「――はい、どうぞ」

ほどなくして似非野郎が写真を持ってきた。それと同時に開放される俺。辛うじて俺の右手は生存したな。そしてそれをよそに翔子は嬉しそうに写真を受け取った

「……ありがとう。……雄二、見て。私たちの思い出」

翔子が俺に写真を見せてくれる

「……なんだ、この写真は?」

写つているのは脂汗をかいている俺に肘関節を極めて笑顔で写っている翔子

「サービスで加工も入れておきまシター」

その2人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。未来を祝福する天使が飛び回っている。しかし余人がこれを見ればどういった経緯で結婚に至ったのかが気になるだろう

……どう見てもこの二人の幸せは訪れそうにない

「コレをパークの写真館に飾つても良いデスか?」

「キサマ正気か!?コレを飾つたところでここに何のメリットがある!」

「……雄二、照れてる?」

「すまないが俺はこれを見て照れる要素は微塵も感じない」

印刷された写真を見てると・・・

『ああつ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおうよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

いかにもチンピラのようなカップルがやってきた

「すいません。こちらは特別企画ですの・・・」

似非野郎が断ろうとする。どうやらあの写真撮影は例のウエディングシフトとやらの一環で、俺たちだけが対象なのだろう

『ああつ?!いいじゃねーか！オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

『きやーっ。リョータ、かつこいーっ！』

男が下から睨みつけるように似非野郎を威嚇し始める。絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もどうかと思うが？

『だいたいよお、あんなダツセエジャリどもよりもオレたちを写した方がココの評判的にも良くねえ？』

『そうよっ！あんなアタマの悪そうなオトコよりもリョータの方が100倍カツコイイんだからあ！』

とりあえずチンピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げるとするか

「つておい翔子。どこに行くんだ」

急に勢いよく歩きだした翔子の腕を掴んで引き止める

「・・・あの2人、雄二のことを悪く言ったから」

「あのなあ・・・その程度のことではイチイチ目くじら立てていたらキリがないぞ?」

正直あんな連中に何を言われても気にならないし、こんなことで問題を起こしたくもないからな

「行くぞ、翔子」

「・・・雄二がそう言うのなら」

翔子はどうやらその光景は嫌だったようで、促すと渋々ついてきた。

はあ・・・なんだかこの数分で体がボロボロなんだが・・・

別の場所では・・・

「やっとなりて入場できたけど・・・なんだ？あれ？」

僕らの目の前には係員にいちやもんをつけているチンピラカッブル見えたのだが、なんか狐のカメラマンが係員になにか指示して関節技を女性の方に指示したら男性苦しんでいた

「どうしたの？のび太君？」

「ん？いや、あの狐のぬいぐるみが見覚えあるなーって思っただけ・・・」

「俺からしたら何も問題ないが？ってか見覚えあるって何でだ？」

ああ、ジャイアン、そういうことじゃないけど・・・まあいいか

「行きましよう？下手に関わりたくないカップルだわ」

「それもそうだな。いこうぜー」

「うん。ならさー」

少なくとも、僕らは僕らで楽しむばいと思っただが・・・何故だろう？この良い予感しないのは？気のせいだよ？

この予感が打ち砕かれるのはそう遠くなかった・・・

恐怖は常に身近に

俺は適当に時間をつぶすためにアトラクションを探している。出来ることなら変な雰囲気にならないようなものを選んでおかないとこの計画関係なしに結婚する既成事実を作らされる確率があるから出来ることなら俺が決めたい。

「(そうじゃないと、俺の人生が・・・!!) うん?」

そんなことを考えていると俺たちにヒョコヒョコと着ぐるみが近寄ってきた

『お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ?』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。

ボイスチェンジャーなどを搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。・・・というか聞き覚えのある声だな。どこか優等生の声が聞こえるのだが・・・

「(カマをかけてみるか) そういえば、さつき明久が女子大生に映画館に誘われていたな」

『ええっ、明久君が!? それはどこで見たんですか!?!』

本当にこいつらは、揃いも揃って・・・

「おい姫路。アルバイトか?」

『あ・・・っ!ち、違います。わたっ!フィーは姫路って人じゃないよ? 見ての通りキツネの女の子だよっ♪』

ここで必死に取り繕う姫路は真面目だと思う。さつきのやつらはもはや開き直っていた感じだったからな。しかし、これだったらまだ御しやすいし適当にあしらうか

「じゃあ、フィーとやら。お前のオススメを教えてくださいませんか?」

『あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

フィーとかいうキツネの手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。廃病院を改造したとかいう例のアレか

「そうか、ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

さてと……

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中をおして歩き出す。すると慌てたように俺の腕をつかんできた

『ままま待って下さいっ！どうしてオススメ以外のところに行くんですか!?!』

「どうしてもクソもあるか！お前もあの似非外国人の仲間だろう？だったら、お化け屋敷には余計な仕掛けが施されているのは明白だわざわざそんなところに行く気はない!!」

『そ、そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってくださいー！』

「断るっ！」

そのお願いとやらの為に残りの人生を捧げる気はない！何が何でも自由を謳歌するんだ!!

『お願いですっ！お化け屋敷はきつと楽しいですからっ！』

「い・や・だ!!」

ずるずると引きずってついてくる姫路に若干いらいらしながらも離れようとする。いつそのこと振り払ってしまおうかとそう思っている。

『待て！そこまでだ雄二……じゃなかった！そこの不細工な男っ！』

「……その頭の悪そうなしぐさ。明久か」

『なっ！この僕ーじゃなかった。このノインのどこが頭が悪いって言っているんだ。』

「黙れ！頭部を前後逆につけたまま歩いている奴をバカと言って何が悪い!!」

本来ならかわいらしいであろう着ぐるみも頭部を逆につけている

せいでかなりシユールな光景が映っている

「雄二。ノインちゃんはうっかりさんだから」

「翔子。うっかりで頭部が前後逆になる生物は即座に淘汰されると思うぞ。そもそも頭部が逆になっていたら絶対生きていけないだろう？」

「そもそも、そんなの自然の摂理に逆らうようなものだ！いたら怖いわ！」

『あ、明久君。頭が逆です！ああっ！今小さな子供が明久君を見て泣き出しましたよ!?!』

『うわっしまった！道理で前が見えないと思った!』

『早く直さないと坂本君たちにばれちゃいます!!』

「お前ら・・・ばれてないと思ってるの？特に明久・・・お前は紛れもないバカだ！」

「ハイ、すいまセーン。お待たせしまシタ。撮影してたら遅れてしまいました。」

「そうこうしていると、さらに面倒なヤツが現れた。さっきの似非野郎だ。もう追いついてきたのか？」

「坂本雄二サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「だからイヤだと言っているだろうが」

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース。」

「やめろっ！そんなことされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

「あのおふくろは全ての梱包材を潰し終わるまで他のことは何もしないだろう!!なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ・・・」

「!」
『ところで明久君。さつき女子大生に声を掛けられていたと聞きましたけど?まさかこの大事な作戦の最中にはかの女の人手?』

『え?何のこと?僕は別に何も——あれ?急に通信開いてどうしたの?誰に送って・・・??』

『もしもし、美波ちゃんですか。・・・はい、分かりました。』

『え?え?なにになに?どういうこと?』

『美波ちゃんが今すぐ来てくれるみたいです。二人でゆっくり聞かせてくださいね?』

『こらくアキー!!これは一体どういうことなのよ!!』

『ダ、ダメだよ!オープン初日で人傷沙汰になったらここの評判に――』

そして、世にも奇妙な狐の痴話喧嘩を見たとか見なかったとかの都市伝説になったそうだ

「こちらにサインして下サーイ」

似非野郎が取り出したのは何かの書類とボールペン。なんだコレは??

「ただの誓約書デース」

誓約書が必要なお化け屋敷ってなんだ。そんなに危険なのか?

「そんだけ危ないのか?それはそれで面白そうではあるな」

誓約書が必要ということはスリルに満ちているということもあるだろう。少し楽しみになってたので、ボールペンを受け取って書類に手をかける

【誓約書】

1. 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います

2. 婚礼の式場には如月グランドパークを利用することを誓います

3. どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います

「……はい雄二。実印」

「……朱肉はこちら」

「つちよつと待て!」

「俺だけか?!俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか!?!」

こいつらは全員正気じゃない。しかもムツツリーニ。いつの間にかここにいてさっきまで心配すら感じなかったぞ!」

「冗談です。誓約書はいいので中に入って下サーイ」

「……うん。冗談。」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言いつ張るのか」

色々といつてやりたいことはあるが、この連中に常識を求めるのも酷というものだろう

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりしマース」

「……お願い。」

翔子が似非野郎にバックを渡す。そういえばヤケに荷物が大きくな

「……こぼれちゃうから、横にしないで欲しい」

「このカバンをですカ？わかりまシタ。気をつけマース」

こぼれる？あの鞆に入っているんだ？

「デハ、行つてらつシャイマセ。」

「……雄二、行こう」

ミシイ……

「がああああ。普通に行くから腕を極めるなっ！肘がねじ切れる!!」

抵抗空しく、お化け屋敷の扉の前に立たされる。演出なのかその扉は横開きの自動ドアでありながら電気が入っていないようで手動で開けるようになっていた

『こちらブラボー！。お化け屋敷にターゲットが入った。吉井さん考案の作戦を実行しろ！』

扉が閉まる寸前、似非野郎のそんなセリフが聞こえた。明久考案の作戦か。いったいどんなものになっているかわからんが策に引つかかってたまるか！

のび太 side

「おい？のび太、三上さん！見ろよ！狐のぬいぐるみ同士が喧嘩してるぞ」

「あら？本当だわ」

何故だろう？あの狐のぬいぐるみの片方が一方的にやられている

けど・・・もしかってあれは明久？な訳ないよね？

『覚悟しなさい！アキ！』

『ちよっ！いだだだ！』

『明久君？まだお話は終わりませんよ？』

「つて！明久たちだった!?ジャイアンと三上さん！止めるの手伝って！」

「ええ!?」

僕は慌てて走りながら、喧嘩している狐達の方に止めに行ったのだ
「ちよっと！何でそんなことしてるのか知らないけど、ここは如月
パーク！子供達の夢の場所だよ！」

『のび太!?良いタイミングで・・・』

『のび太？悪いけど止めないで！このバカにはお仕置きがあるから』
『そうです！』

あーもう！今はそれどころじゃない！子供たちもいるのだから！

「お仕置きするのは構わないけど！ここは学校じゃないんだから！子供達の夢を壊すことになるんだよ!?仕事頼まれているならしつかりしてー!」

『あれ？止めてくれないの!?!』

『そうね・・・確かに子供達の夢の場所だものね。アキ、のび太に感謝しなさい！後でお仕置きしてあげるから!』

『そうですね。すみません。のび太君』

「全く・・・」

「のび太君！あら？その声は美波と瑞希？」

「おい。のび太。三上さん。そろそろ他のいこうぜーって、この声は聞いたことあるな?」

ジャイアンと三上さんも来てくれた。姫路が小さい声で三上さんに何か行つてから島田が明久を連れてどこかに消えた・・・姫路もあとに続いて言ったのだ

「・・・なんだったんだ?」

「さあ?」

僕とジャイアンがそう会話していると、三上さんが姫路からのおす

すめのところを聞くと、廃病院のお化け屋敷に向かったのだ・・・

お化け屋敷内

薄暗い廊下を翔子と二人で歩く。カツン、カツンと廊下は足音を必要以上に大きく鳴らしているような気がした

「さすがに廃病院を改造しただけのことはあるな。雰囲気満点だ」

「・・・ちよつと怖い。」

「こういうのにあまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな。」

「・・・そうかも。」

時折、壁に貼られている《順路》というポスターに従って進んでいく。

しかし薄暗いだけでなにも驚かす様子はない。なんだ、暗いだけで何m：

バン！

「・・・(ビクツ！)」

壁に赤い手形が見えた。

ふむ、ずいぶんと古典的な驚かし方だな。

しかし翔子はその音に対して驚いたのか握っている手が強くなつた。

「翔子。大丈夫か？」

「・・・うん。ちよつとびっくりしただけ」

「そうか」

まあ確かに翔子はこういうことで怖がることはあまりないからな。幽霊とか信じないだろうし

「それじゃあ次行くか。」

「・・・(コク)」

そしてそのまま二階に上がり、

少し進んだ廊下で何かの演出が顔を出した。

「——じの方が——よりも——」

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。ふむ。怨嗟の声の演出か？

「・・・この声、雄二・・・？」

「ん？そうなのか？」

これは俺の声そっくりだな。秀吉に声真似でもさせたのだろうか。確かに自分の声が聞こえてくるなんて怖いといえば怖いだが、あいつらにしては普通の演出だと――

【姫路の方が翔子より好みだな。胸も大きいし】

「……雄二。覚悟、できてる？」

「怖えっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だ！」

なんて恐ろしいことを考えてるんだあいつら！！まさか俺を生かしてここから出さないつもりか？

なんてビビっていると、バンツと背中では何かの仕掛けが作動する音が聞こえた。よっしゃ！ナイス演出！助かったぜ！

「翔子！何か出てきたぞ！」

音のしたほうに首を向けるとそこにはさつきまで何もなかったはずなのに、突如あるものが現れていた。

それは――

「……気がきいてる。」

「……釘バットにボール？……まさか!？」

「畜生っ！よりにもよって処刑道具まで容姿してくるとは！全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！」

「……雄二。逃がさない」

釘バットとボールの二刀流で迫る幼なじみに追いかけるという斬新なアトラクションを1時間あまり楽しむ羽目になった。しかし、明久はコレで俺と翔子がくつつくと思っているのか……？

誰か助けてくれええく!!

追いかけてられている雄二とは別でのび太達は……

「……怖いな……？なあ？のび太？」

あの怖い物知らずのジャイアンも驚くほどの怖さだ。僕も昔よりは少しだけましになった……少しだけ……

「ね……ねえ？何か聞こえない……？」

「ほ……本当だね？ジャイアンも聞こえる？」

仕掛けるのは常に身近に

あの恐怖の鬼ごっここの後に、俺はあの声は秀吉の声真似という事を説明し、なんとか落ち着いた翔子を連れて俺はお化け屋敷を出た

「お疲れサマでシタ。どうでシた力？結婚したくなりまシタか？」

「アレで結婚を結びつけて考えることが出来るのはお前と明久ぐらいだろうな・・・」

絆どころか溝が深まった気分だ。最悪生存していることすら怪しかったぞ!?

「オカしいデスね？危機的状況に陥つた二人の男女ハ、強い絆デ結ばレルという話なのデスが・・・」

「襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなるかもしれないが・・・」

「この似非野郎、きつと前の明久となら同レベルのアレなヤツだろう・・・そろそろ、お昼」

翔子が噴水の上の時計を見ながら呟いた。そこにある大時計は午後1時過ぎを示していた。そろそろ昼飯か

「・・・あの、私のバッグ・・・」

「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、こちらにいらして下サイ」

似非野郎がスタスタと歩き出す。昼飯も用意してあるのか。さすがはプレミアムチケットだな

「翔子、どうした？」

「・・・なんでも、ない。」

「??？」

一瞬寂しげな顔をしていたような・・・???

「・・・雄二。急がないとはくれる」

「お、おう」

俺たちがついてくるといふ自信があるのか、似非野郎の姿が随分と遠くに見える。まあ、豪華な昼飯と聞いたからにはご馳走になるつも

りではあるが・・・嫌な予感するのは何故？

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた

「コチラでランチをお楽しみ下サイ」

そう言つて似非野郎が案内したのはパーティー会場のような広間だった。そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというより――

「・・・クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、TVでよく観るクイズ会場のような雰囲気になつていた

「いらつしやいませ。坂本雄二様、翔子様」

スタッフが現れ、俺たちを席に案内するが・・・コイツも見覚えのある面だな、オイ

「秀吉。スタッフの真似事か？」

「秀吉？はて、なんのことでしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。こいつ、役者モードになつてやがるな。こうなるとそう簡単に化けの皮は剥がせない。それならば、明久の時とおなじように道具を使うとしよう

「違うと言うなら、確認させてもらうぞ」

携帯電話を取り出し、アドレス帳から『木下秀吉』を呼び出す。着信音は・・・鳴らなかつた。俺は間違いと思ひもう一度かけなおすが・・・まったく反応が見られなかつた

「なっ!?!?!どうしたことだ!?!」

なぜ連絡が繋がらないのか・・・

それは少し遡る・・・

「見事に屍になつてるのう・・・明久・・・」

明久は姫路と島田にお話と言う名の元のお仕置き（制裁）を加えられてうつ伏せで倒れていたのだ。そんな明久を見て、秀吉は引いてい

ると、島田が思い出したように秀吉に指示したのだ

「そういえば、このバカは坂本に携帯電話かけられてバレたのよ？木下。あんた。念のために携帯を置いていった方が私は良いと思うけど？」

その通りだと思つた秀吉は携帯を出して係員に預けたのだ

「それもそうじゃが・・・明久はいつになったら復活するのかのう・・・」

「さあ？とりあえず秀吉、頼むわよ？」

島田の頼みに秀吉は頷いて行動を起こしたのだ・・・

「くそーまさか、読まれていると思わなかった!!」

俺は悔しそうに下を向くが、すぐに切り替えてお昼ご飯の方に意識を向けたのだ・・・兎に角難しいの考えるのは後だ

しかし料理は豪華な、という前置きは間違いないようで、慣れない料理に苦笑しながらナイフとフォークを手に取ることになった。しかし翔子はこういつた席には慣れてるかもしれないが。そしてデザートも食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのかと安堵しかけたその時・・・

「さあ!!皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます」

会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。声からして明久だという事がすぐにわかった。さすがに何もないまま帰すわけねえよな。逃げる算段を考えながら水を口に含んだ瞬間――

「なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めるようとしている高校生のカップルがいらっしやっていますのです!」

飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。あの野郎!?!何てことを言いやがる!?!

「《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させていただきました。題して【如月グランドパークウエディング体

【プレゼントクイズ〜!】

どこまで俺を追い詰める気だ!?

「《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答え
て頂き、見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプ
ランを体験して頂けるというものです!もちろん、ご本人様の希望に
よってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが…》」

大問題だバカ野郎!

《それでは、坂本雄二さん&霧島翔子さん!前方のステージへとお進
み下さい!!》

「ご丁寧にも司会が俺たちの席を示してくれたおかげで、レストラン
にいる観客が一齐にこちらへと目を向けた

「…………ウエディング体験…………頑張る…………!」

「落ち着け翔子。そういったものはだな、きちんと双方の合意の下に
痛だだだだっ!耳が千切れるっ!行く!行くから放してくれっ!」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上に上がる

のび太 side

雄二が上っている間のその片隅では…………

「へえー?あいつら結婚を前提に付き合ってるのか?」

「そうね。私も驚いたわ」

「ジャイアンと三上さんがそんなことを言っているが僕には今の雄
二がどうしても地獄にいくような顔をしているから心配だな…………
「何だか心配になってきた…………なんも起こらなかつたら良いんだけど
ね…………」

「僕がそういうと二人は??となっていたのだ。僕には分かる…………明
久の声を聞いた時点でまともな気がしない…………だって明久だよ?」

「僕の心配のよそについてクイズが始まろうとしていたのだ。大丈
夫かな…………??」

《それでは【如月グランドパークウエディング】 プレゼントクイズを
始めます!》

俺と翔子の上に大きなボタンが1つ設置されている。 これをお
してから解答するというオーソドックスなシステムのようなのだ。 正解
したらプレゼント、ということは、間違え続けたら無効になるのだろ
う。それなら俺が間違え続けるとするか・・・

「《では、第一問!》」

ボタンに手を伸ばす用意をし、問題を待つ。 さて、どんな問題が来
るんだ?

俺はこれでもかつては神童と呼ばれていた。 間違えることなんて
わけない・・・

「《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかつ?》」

・・・ おかしい。 問題文の意味がわからない!

——ピンポン!

し、しまった。 油断しているうちに翔子が勝手にボタンを!だが、
いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて——

「《はいっ! 答えをどうぞっ!》」

「・・・ 毎日が記念日。」

「やめてくれ翔子! 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ!」

「《お見事! 正解です!》」

しかも正解!? さては・・・ 出来レースかつ! そこまでして俺た
ちにウエディング体験とやらをさせたいのか?!

いいだろう。 お前がそうなら俺は必ず間違えて見せよう!

「《第二問! お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうかつ?》
」

——ピンポン!

「《はいっ! 答えをどうぞっ!》」

「鯖の味噌煮!」

「《正解っ!》」

「なにいつ!?!」

「《お2人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【紗馬野美蘇仁（さばのみそに）】で行われる予定です!》」

「待て!絶対その別名は!この場で命名しただろ!しかもなんだその適当すぎる当て字は。強引にも程があるぞ!」

「《第三問!お2人の出会いはどこでしょうか?》」

ダメだ、聞いてねえ……。!だが、向こうのやり口はわかった。今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押し、間違った解答を――

「……させない」

ブスツ

「ぎゃああああ!?!目が、目があつ!」

――ピンポーン!

《はい、解答をどうぞ!》

「……小学校。」

《正解つ!お2人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚までに至るといふ、なんとも仲睦まじいカップルなのです!》

今、俺が目を突かれたのは見えてないのか?どこをどう見たら仲睦まじいという言葉が出てくるんだ!この野郎。今ここでぶちのめしてめちやくちやにしてもいいんだぞ。

しかしこのままだとまずい。問題を聞いてから動き出すようでは遅すぎるようだから翔子の妨害が間に合わないタイミグで解答する必要がある

「《それでは第四問に参りますー》」

ピンポーン!

「わかりません!」

これで不正解になるはず!

「《正解!》」

何?!あの野郎!?!どこまで俺を追い詰めるんだ!?!くそ……。次最終問題のはずだ!必ず間違えてやる!

「ちよつとおかしくなくい?アタシらも結婚する予定なのに、どうし

てコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜?」

ん? 不愉快な口調が聞こえたのでその場の全員が声の主を探る。すると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた

《あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか——》

『ああっ!? グダグダうるせーんだよ! オレたちやオキヤクサマだぞコルア!』

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど〜?』
《ですからー》

司会者がなお注意しようとしてもそいつらは聞く耳持たずしまいには男が逆切れしたのだ

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア! オレたちもクイズに参加してやるって言っただボケがっ!』

『うんうんっ! じゃあ、こうしよーよ! アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで!』

慌てるスタッフ達をよそに、そのカップルはズカズカと壇上に入り、設置してあるマイクの一つをひったくる。これはチャンスだ。この連中が相手なら間違えられることができる。あとは翔子の妨害を邪魔しておけば……!』

『じゃあ、問題だっ!』

チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う

『《ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ!》』

「……………」

言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか?』

確かにわからないと言えはわからない。俺の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。その首都を答えるなんて不可能だ

すると……

「ポチつとな」

ガゴン

『『え?』』

そのチンピラバカカップルのいたところには穴が開いたのだ。そして、そのカップルは状況わからず落ちていったのだ

俺はすぐに回りを見ると・・・

「……………」

無表情でボタンを押していたのび太と三上と剛田がいた・・・つか、あいつらは、ぐるなの

か!?ぐるじゃないのか!?どっちなんだ!?

『……………坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします』

俺の人生のピリオドが打つ瞬間が近づいた・・・俺は無力だ・・・

!!

『おい待てよ!こいつら答えられなかっただろ!?オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』

『マジありえない!?この司会バカなんじゃないの!?!』

おお?あんな深い穴から上ってきたのか?頑丈だな。

「あのねー。よろろつぱは、くにじゃないから、しゅとはないんだよ」
いつの間にかステージに上がって来ていた男の子(小3くらい)が、バカ男達が落としたマイクを使って会場中に聞こえるように言う

会場中からクスクスと笑い声が聞こえる。因果応報とはいえ、流石にいたたまれない。この空気に耐えられなかったのか、バカ二人は急いでステージから降りていった

遠くにはムツリーニー達のがび太達に何か話しているが・・・あいつらなんか驚いてるぞ?もしかって・・・今の今まであいつらは知らなくって普通に遊びに来ていたのか?

それにしても・・・明久以上、またはFクラス以上のバカがいるとは世界って広いもんだな・・・

オマケ

雄二達がそう騒いでる片隅では・・・

「まさかスタッフにこのボタンを押してと指示されると思わなかったなー」

「確かにそうね・・・」

ジャイアンと三上さんのいう通り、スタッフに渡されて、押すタイミングは任せると言われたのだが、あんなアホな問題出されたら押しなくなるに決まっている！にしても・・・

「あのチンピラカップルは何か嫌な予感するから・・・」ジャイアン、お願いがある。あとそこにいる姫路にもお願いしたいのだけど・・・」するとムツリーニーと姫路が出てきてたのだ。

「ジャイアンと姫路は料理をお願いしたい。それも二人で一つの商品を・・・ね?」

「ん?何で俺様も頼むのだ?というかなぜ料理?」

「ジャイアンと姫路の手料理で味わいたいひとがいるのだけどいいかな?」

「もちろん良いが・・・誰なんだ?」

今は言えない!とにかく、うまいことお願いしないと!!

「まあ、ほら?僕の知り合いに渡したいからね?いいかな?」

「・・・(ピラッ)」

するとムツリーニーが姫路に写真を見せると納得したのだ。ジャイアンは僕の言葉に嬉しそうに笑いながら納得していたのだ・・・そしてムツリーニーとスタッフに案内されるジャイアンと姫路を見届けると・・・

「ねえ?のび太君はなんで、あんなこといったの?」

「うーん、何となく必要な気がするんだけど駄目かな?そんな理由で」

「うーん、私は別に良いけどね?さ、行きましょ?」

「うん!行こうか!」

僕は三上さんと共に結婚式の場所に向かったのだ・・・なんも起こらなかったら良いけどね・・・

目標としていた夢

「おメデとうございマス。ウエディング体験が当たるなんて、ラッキーでスね」

「………凄く嬉しい。」

レストランを出ると例の似非野郎が翔子のカバンを持って近づいてきた。まったく、何がラッキーだ。ハナから計画に入っていたくせに

「そういえば翔子。お前の持ってきた鞆は何が入っているんだ？随分と大きいが。」

「………別に、なんでも………」

翔子が少し困ったように答える。何かあるのだろうか？普段実印を持ち歩いているんだ。何持っていて不思議じゃないが。

「翔子サン、ウエディング体験の準備があるノデ、このスタッフについていってもらえマスか？」

いきなり似非野郎の後ろから女性のスタッフが歩み出て頭を下げる。いかにも業界人といった風貌の人だ

「初めまして。貴方のドレスのコーディネートを担当させて頂きます。一生の思い出になるようなイベントにする為、お手伝いをさせていただきます」

そう言つてスタッフは翔子に笑顔を向けた。おいおい、随分と本格的だな。となると、如月ハイランドの狙いはアトラクションじゃなくて最初から このウエディング体験だったつてことか。どうやら今からの時間を目一杯使つて結婚式の擬似体験をさせてくるようだ。

「つてことは、俺は長い時間待たされるのか？」

ドレスを着てメイクをするつてことは数時間もかかるような大作業になるだろう。その間俺は何していればいいんだ？

「ご安心下さい。メイクはちゃんと得意な方に頼んであります。メイク等にアマリ時間は掛かりませーん。それに………」

得意つてこういつた計画ならプロぐらい雇つてんだろ？

しかしなんだ!?嫌な予感がする。

「坂本雄二サンは逃亡を考えるだろうカラ、コレで気絶させてカラ、着替えさせるようにとある方らの指示ブース」

そういつて野郎が取り出したのは、スタンガン

「お・・・己え!!!明久ああああ!!」

「少しガマンして下サーイ」

首の後ろでバチンツと大きな音が響き、俺は意識を失った

のび太side

さて、僕は今明久達に頼まれて、近くの席で座っていたのだ・・・面倒事防ぐためだ。因みに三上さんは僕のそばにいてる。ジャイアンは・・・姫路と先程楽しそうに手料理していたのを見ていたが・・・見た目は大丈夫だったが味は・・・未知数だろうか？

「あら？坂本くんじゃないかしら？」

「あつ、本当だ」

雄二がステージに上がってきた。アイツのことだ、途中で大げさな仮病でも使えば、式を断念せざるを得ない。とか考えてるハズだけど・・・まあ大丈夫かな？多分だけどね？

《それでは新郎のプロフィールの紹介を———》

ん？考え事しているうちに、雄二のプロフィール紹介かー。まるで本物の結婚式みたいだな。目的のシーン以外の部分もきちんとしているようだ。さっきのクイズもそうだが、きっと明久にでも聞いて細かく下調べを———

《———省略します》

していなかった・・・手を抜きすぎ!!

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に使えるかどうか問題だからな』

『だよね』

うるさいな・・・そんなにおしゃべりしたいなら外に喋ってよ・・・

《……他のお客様の迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってるの？』

『違えだろ。オレらはなんたってオキヤクサマだぜ？』

『うんうん！リョータ、イイコト言うね！』

調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響きわたる。……あのチンピラカップルは常識無さすぎる。……人に迷惑かけている時点でお客様じゃないでしょ？

「ねえ？私あの人達に注意していつていいかしら？」

「それはダメだよ？我慢しようか？三上さん」

「のび太君が言うなら……」

三上さんは本当に優しい……。だけどね、こんなやつらのために三上さんが怒って欲しくない……

《———それでは、いよいよ新婦のご登場です！》

心なしか音量が上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。スモークが足元に立ちこめ、否応なしに雰囲気盛り上がる

《本イベントの主演、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す

そこに佇んでいたのは純白のドレスをきた霧島さんだ。

雄二は啞然としている……。あの顔は予想してなかった顔だね……

静まり返った会場から洩れ出た、誰のものともわからない台詞。

僕も今の霧島さんは綺麗だな……。と思う

「……雄二……」

「翔子、か……？」

「……うん。……どう……。？私、お嫁さんに見える？」

「ああ、大丈夫だ。少なくとも婿には見えない」

雄二らしい台詞だな……。でもそれだけ見惚れているみたいだ

「……雄二……」

「お、おい。翔子・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・嬉しい・・・・・・・・」

目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。

そして、それ以上は言葉を発することなく静かに震え出した

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが・・・・・・・・・・？》

司会者も仕事を思い出して慌てて問いかけたのだ

「お、おい。どうした・・・・・・・・・・？」

会場から静寂が消え、観客の間に少しずつざわめきが生まれ出す。

そんな中、彼女は小さな、だがはつきりと聞き取れる声で呟いた。

「・・・・・・・・・・ずっと夢だったから。」

涙混じりのかすれた声。

《夢、ですか？》

「・・・・・・・・小さな頃からずっと・・・・・・・・・・夢だったから・・・・・・・・・・。私と雄二、2人で結婚式を挙げること・・・・・・・・・・私が雄二のお嫁さんになること・・・・・・・・・・私1人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢・・・・・・・・」

そんな夢が・・・・・・・・

「・・・・・・・・だから・・・・・・・・・・本当に嬉しい・・・・・・・・・・。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが・・・・・・・・」

会場のどこかでも鼻をすする音が聞こえる。観客のもらい泣きだろう・・・・・・・・こんな一途な人はなかなか巡り会わないよ・・・・・・・・ねえ？雄二？

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようにです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか？》

「翔子。俺は―――」

『あーあ、つまんなーい！』

雄二がなにか言おうとしたら常識の無い声が聞こえたのだ・・・

『マジつまんないこのイベントお。人のノロケなんてどうでもいい

「からあ、早く演出とか見せてくれなくい?」

『だよなく。お前らのことなんてどうでもいいっての』

「……は?今なんて言った?」

会場が静まり返っていたおかげで発言者がはっきりとわかる。

『つてか、お嫁さんが夢ですつて。オマエいくつだよ?なに?キャラ作り?ここのスタッフの脚本?バカみてえ。ぶつちやけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの?そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない?ギャグにしか思えないんだケドお』

『そっか!コレってコントじゃねえ?あんなキモい夢、ずっと持っているヤツなんていねえもんな!』

『えくっ!?コレってコントなのお?だとしたら、超ウケるんだケドおく!』

ガタツ
!!

「おいっ!てめえら!もういつペン行ってみやがれ!!」

「あ、明久君!落ちついてっ!ステージが台無しになっちゃいます!」

明久もチンピラの発言に腹を立てていたようだ。

「人の夢を何だと思ってるの……!!」

「落ち着いて、三上さん」

「でも……!」

隣の三上さんがキレていたのだ……宥めていると……

《は、花嫁さん?代表はどこに行ったの?》

チンピラどもと明久達が暴れている席から翔子の方に目を向ける。

だが、この短い時間の間に霧島さんは壇上から姿を消していた

《霧島さん?霧島翔子さーんっ!皆さん、花嫁を捜して下さい!》

スタッフがドタバタと駆け出す。どうやらこのイベントは中止のようだ

雄二はスタッフに何か話していたが直ぐに動いて消えた……あれはキレているね……

さてと……

「三上さん・・・少し悪いけど席はずしていいかな？」

「何処にいくの？」

「少し・・・お話してくる」

「この言葉で三上さんは何か分かったみたいだ・・・」

「そう？なら・・・お話終わったら連絡お願いね？いつてらしゃい」

「うん・・・いつてくるね」

僕は三上さんとそうやり取りして外に出ていき・・・

「ムツツリーニ」

「・・・(スタツ)」

「例のものを・・・」

「・・・ここにある(スツ)」

ゆつくりとケースを僕の方に向けて出すと、僕はそれを掴んだのだ

「もうひとつのものは・・・？」

「これを・・・」

ムツツリーニは少し震えながら渡してくれた・・・ごめんね？だけ

ど用意頼んでよかった・・・

「ムツツリーニ・・・ジャイアンに伝えといて？少しお話してくるから

三上さんを頼むって」

「・・・承知」

そういうとムツツリーニは忍者のように消えていったのだ・・・

ささと・・・少し・・・

お話しないとね・・・？

避けられない運命

俺はある目的のためにゆっくりと歩くとそいつらを見つけたのだ……

『しっかし、あれはマジでウケたな。』

『うんうん！私…結婚が夢なんです…どう？似てる？かわいい？』

『ああ、似てる！けど——キモイに決まってるだろ』

『だよね〜！』

それじゃ、とつと用を済ませるか。ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける

「なあ、アンタら。」

『ああ？あんだよ？』

2人組が真っ茶色な顔をこちらに向けてくる。きちんと礼をしておかないとな。

『リョータ。コイツ、さっきのオトコじゃない？』

『みてえだな。お前もさっきのガキどものお友達か？……んで、その新郎サマがオレたちになんか用か、あア!』

男の方が一歩前に出て、威嚇するような仕草を見せた

「いや。大したようじゃないんだが——」

借り物上着を脱ぎ、タイを緩める。不思議なことに、身体は準備運動を必要としないほどに温まっていた

「——ちよつとそこまでツラあ貸しな!!」

『ああ？てめえ、ふざけんのもいい加減にしろよ。こつちは見たくもないもん見せられてよお』

「ああそうだろうな。だが俺はお前らの態度が気に入らねえんだよ。客だからって傍若無人な振る舞いしやがって…ちつたあ遠慮しろつうの!!」

俺は2，3歩歩み寄った後その勢いで男の顔面を殴った

『ぐふあーてめえ、ガキが粹がってんじゃねえぞっ!!』

チンピラは反撃するつもりか腕を大きく振りかぶって殴りにかかろうとする。だがそんな見え見えの攻撃が当たるはずもなく、軽くい

なし、今度は胸に膝を一発蹴りを入れる。

『くそつ、ムカつく野郎だ!』

「奇遇だな。俺もおめえのことはいけすかねえなと思ってるぜ」

『だったらここにくたばっちまいな!』

そういつてまたチンピラが殴りかかる。だから何度も同じことは効かんつっの。同じように横によけて反撃しようとしたその時

バチイ!!

「っ!!」

俺は全身のしびれにガクンと崩れる。この感覚はスタンガンか!?

『リュ、リユータ?!』

『馬鹿が、俺が何度も同じ手に引つかかると思ったのか?ええ?』

クソツ、完全に油断した。

『せつかくだ。ここで死んじまえよ』

『リユータ。それはさすがに...』

『うるせえ!こいつはココでやらないと気が済まねえんだよっ!』

そういつて男はスタンガンからナイフに持ち替え 逆手に持って掲げる。逃げようにも体のしびれが残って思うように動けない。俺は反撃しようと構えた

その時...

一つの銃声が聞こえたのだ

『あががが...!』

男の持っていたナイフは銃によって落とされたのだ...

これは...

「雄二の喧嘩終わるまで出さないつもりだったけど...流石にナイフで攻撃した時点で見過ごせない...」

ゆっくりと後ろから歩いてくる音が聞こえたのだ...

『ああ!?なんだ!?てめえは?』

「なんでここにいるんだ?のび太?」

どうしてここだと分かったんだ?

「悪いね?雄二の喧嘩出すつもりなかったけど...僕も今虫の居所が悪いのだよ?」

・・・キレてやがる・・・それもかなり

『ちよっ!?何で銃もってるの!?違法でしょ!』

バカ女が騒いでいたが、のび太は銃をちらつかせたら黙った・・・
お前らのほうも違法だがな・・・

「君たち二人とも動くな・・・動いたら・・・撃つよ?」

『ふ・・・ふぎけるな!クソが!死にさらせえ!!』

男はやけくそ気味に落としたナイフ拾ってを前に出しのび太に刺そうとした

キーンツ!!

「動くな・・・そういったはずだが?それと・・・先に武器を使ったのは君達だ・・・」

のび太は銃でナイフを弾いたのだ・・・

そして銃で男の頭をいつでももうけるように当てていた

『あ・・・あああ・・・』

「僕はね・・・非常に頭ぎているのだよ?その女性も動かないことを勧める・・・一歩でも動いたら・・・二人とも撃つ」

『ひ・・・ひいいい』

今のび太は・・・逆らったらいけない状態のやつだ・・・あいつがあそこまでキレてるのはここまで恐ろしいのか・・・

「ねえ?人の夢をバカにする権利・・・君たちがあると思う?そんなに偉い立場なの?ねえ・・・?答えろ!!」

『ひいいい・・・』

「人の夢をバカにする権利は誰にもない・・・夢つてのは叶えるための物だ・・・願うものではなくね・・・それをバカにした君達は・・・何様なんだ!?!」

銃のセーフティーを外そうとしていたのび太を見て流石にダメだ
と思い俺は止めようとした

「おい!流石にやりすぎだ!」

「・・・それもそうだね・・・」

のび太は俺の意見に聞き銃はしっかりと頭に当てたまま、懐にある
ものを出したのだ

あれは・・・唐揚げ？

「これを食べたら解放するよ・・・？食べる？」

『た・・・食べる！食べるから！』

・・・何故だろう？のび太の方が今犯罪者に見えてしまったのは・・・

「なら、食べなよ？」

チンピラカップルは慌ててそれを食べると・・・

『?!?!』

声にならない叫び声をあげて倒れたのだ・・・

俺は気になり、のび太に聞くと・・・

「これ？この唐揚げの料理をしたのはね・・・姫路とジャイアンの手作りさ。」

ゾワッ?!

「お前?!あれを食べさせたのか?!」

姫路の料理は知ってるからあれだが、剛田のは姫路程じゃないが、かなりヤバイと聞いていた!!

「うん。安心して？この料理食べて死ぬことはない・・・せいぜいトラウマを植え付けさせたらいいのさ」

「・・・何もこれ以上触れない・・・」

「鮮明だよ・・・さ、この処理は任して雄二は行きなよ」

俺はのび太の言葉に甘えて・・・翔子の方を探したのだ

のび太が笑顔でチンピラカップルに残りの唐揚げを食べさせたのは見なかった事にしよう・・・

「よっ。随分と待たせてくれたな。」

「・・・雄二。」

如月グランドパークの中にあるホテルの前で待つことしばし。玄関から翔子がトボトボと俯きがちに出てきた

「さて。それじゃ、帰るとすっか。」

「・・・」

翔子はなにも言わず、静かに俺の少し後ろをついてきた。夕暮れ

の中、黙々と駅に続く道を歩く。どのくらいそうしていたのだろうか。

如月グラウンドパークを出てあえて人気のない道を歩いていると、翔子が聞き取れるからどうかギリギリの小さな声で呟いた

「……雄二。」

「ん、なんだ？」

「……私の夢、変なの……?」

例の馬鹿カップルに笑われたことをずっと気にしているのだろう。

翔子は足を止めていた。俯いているから表情は見えないが、長い付き合いだ。どんな顔をしてるかぐらい見なくてもわかる

「まあ、あまり一般的ではないかもしれないな」

俺は少し言葉を選んでからそう答えた。

「……」

再び黙り込む翔子。だがこの際はつきりと言わないとな……

「翔子、この際だから言っておく。お前が俺に対する気持ちは過去に対する責任感を勘違いしたもんだ」

「!!……ゆう、じ……」

翔子が息をのむ、俺に面と向かってこんなことを言われて傷ついたかもしれない

「けれども——」

おかしいのはコイツの勘違いだけで、1人の人間を長い間想い続けるという行為は胸を張れる誇らしいことのはずだ。だから、これくらいは伝えてやりたい

「けどな、俺は……俺はお前の夢を絶対に笑わない!」

「!!」

全てが間違いなのではなく、彼女の気持ちを抱く対象を勘違いしてただけで夢自体はおかしなものではないということ

「お前の夢は、大きく胸をはれる、誰にも負けない立派なものだ」

俺は素晴らしいながら翔子の下に駆け寄り、鞆からある物を取り出した

「——まあ、相手を間違えていなければの話だけだな?」

「っ！……これ……さっきのヴェール……」

会場で拾っておいた物を俯く翔子に被せてやる。折角の体験だったんだ、これくらいの思い出は残しておいてやりたいよな。おつとそうだった、もう一つ――

「それと、翔子……弁当、旨かったぞ」

俺が食べた弁当見せると翔子は驚いていた

「……私のお弁当……気付いて……くれたんだ……」

「当たり前だ。さて。さっさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

「……雄二」

「特におふくろの奴は、いくら言っても――」

「雄二っ！」

ここ最近では記憶にない翔子の大きな声を聞いて、思わず立ち止まってしまふ。

「なんだ？」

俺は平静にいつも通りの態度と声で言葉を返す。そして振り返ると赤い光の中、自らの手でヴェールを持ち上げ、

「――私、やっぱり何も間違っていないかった！」

太陽の光をバックに満面の笑みを浮かべる幼馴染がそこにいた

オマケ

僕はあの後スタッフに後処理任したのだ……ゆつくりと三上さん達が居るばしよに向かつていったのだ

「おう！のび太！……お話は終わったのか？」

「うん。少し遅くなったけどね……」

「大丈夫だった？」

三上さんが心配そうに聞いてきたのだ……

「うん！大丈夫だよ？」

僕は汚れてもいい……だけど、三上さんがあんなやつらに怒る必要はない……そんな役目は……僕だけで十分

「そろそろ帰ろう?」

「そうね・・・」

「おう! そうだ! のび太も折角だから、これ帰ったら食べるよ」

僕らが帰ろうとしたらジャイアンが懐から何かを出したのだ・・・

そ・・・それは!!

「俺様の手料理久しぶりに食べるよ? 後、姫路さんの分もあるから渡すぞ。手伝ってくれたお礼だよ」

「う・・・うん」

・・・ああ・・・僕の命日は今日なのか・・・

僕は心の中で嘆きながら、ジャイアンと三上さんと喋って帰ったのだ

そして・・・

その日の夜は記憶がなくなって・・・川の向こうには好きだったお婆ちゃんと生まれる前になくなったおじいちゃんがいいたのだが・・・おじいちゃんが強く僕に向かって「こつちに来るな! お前にはまだ早い!」といわれて帰らされたのだ・・・

ああ生きているって・・・素晴らしい・・・

如月パーク後日

あの如月パークでの出来事も終わり、その日の朝の登校の事だ……僕はいつもより早く家出たのだ……

「おはよう、のび太君」

「あつ、おはよう。三上さん」

そう、三上さんと朝早く登校する約束していたのだ。もうひとつは僕にとつては特別な日だから……

「にしても、いまだに信じられないわ」

三上さんがいきなりそれを言ってきたので、僕は何が？って思っただけで聞き返すと、三上さんが笑いながらおしえてくれたのだ

「のび太君って、昔は隣の学校でも噂聞いていたわ。」

あれ……ものすごい嫌な予感……その噂って……

「小学校のテストはいつも0点で遅刻多い子だって聞いていたわ。あれ本当なの？」

「うう……本当です」

うう……まさか黒歴史の話がここで出てくるとは……そんな三上さんが大慌てで慰めてきたのだ

「あ、ごめんなさい！別に馬鹿にしていた訳じゃないの！だけど、今ののび太君からしたら想像できないわ……」

まあ、小学校の生活は僕は其が多かったからな……だけど……「うん。僕が小学校の時も今もだけどね……何をしても駄目だったんだ。ジャイアン見たいに腕つぶし強くもなかったし……スネ夫みたいに自慢できるものなんて多くなかったし……何を頑張っても駄目だったんだ」

三上さんは黙って聞いてくれていた……

「でもね、その二人ともう一人の女の子と……僕らのかけがえのない親友がいたんだ」

「？その、女の子とかかけがえのない親友の人は会えないの？」

「会えないよ……その子はね海外に行ったのさ……家の都合でね」

その子の事もいずれば教える……

そして・・・

「僕らのかけがえのない親友は・・・遠い遠い世界へと・・・行つてしまつたんだ・・・」

今でも忘れられない・・・あの二つの別れは・・・

「のび太君・・・」

三上さんが何か言いたそうにしていたが、僕は少し笑いながら三上さんに謝つたのだ

「ああ、ごめんね？辛気くさい話してしまつて」

「ううん・・・ねえ？いつか、また小学校の話聞かせて？」

「ん？どうして？」

「あなたの小学校の時の事・・・なんだか知りたくなつたの」

・・・いつか話せる日がしたら・・・僕はいったい何を思うんだろう？

「うん」

こうして、僕と三上さんは教室が別なので別れて誰もいない教室に外を眺めていた

「・・・もう言っている間に・・・夏が来そうだな・・・」

朝の風に吹かれて緑がゆらゆらとなつているのを見ながらそう呟いたのだ・・・

しばらく来るとFクラスの皆が来ていて、そして雄二が来て早々、明久にチケツト渡したら、島田と姫路が明久をめぐつての掴み合いになつていた・・・

暫くして鉄人・・・西村先生が来たのだ。騒いでいた生徒が静まつたのだ

「HRをする前に・・・転校生を紹介する」

その言葉に皆は騒いでいたが、西村先生の一睨みで静まつたのだ

「よし・・・はいれ！」

ガラガラ

「え!?!」

「何じゃと!?!」

「……(驚き)」

「あれ？あの人は……」

「確か……」

明久と秀吉、ムツリーニーが固まっついていて、姫路と島田も少なからず驚いてたのだ。勿論Fクラスの仲間も驚いてた

「皆驚いてるな……」

「雄二は驚いてないね？」

「アホ抜かせ。これでも驚いてるんだぞ？お前は寧ろ何で冷静なんだ？」

「事前にメールもらったからね？」

「納得……」

僕と雄二がそんな会話しているよそで転校生はゆっくりと口開いたのだ

「知ってるやつもおおると思うが、俺は剛田武！まあ、呼びやすい方ので呼んでくれよ？」

「席は……どこにする？」

「のび太の隣でお願いします」

「？野比と知り合いなのか？それなら確かにそこの方がいいな」

ジャイアンは西村先生の質問に答えて、指示出されたら僕の席の隣に座ったのだ

「よう！のび太！」

「うん……ジャイアン」

僕らの挨拶は、はたからみたら普通かもしれない……だけど、僕もジャイアンも口に出さなくつてもお互いの気持ちは分かる……

「(また一緒に学校通えるな／ね)」

こうして……

僕らFクラスは新たな仲間……ジャイアンが同じクラスに入ったのだ……

料理

いくつかのスポットライトに・・・

男はゆっくりと歩きながらマイクを持っていたのだ・・・

その男は・・・

「皆!!今日はリクエストがあったからこの俺、ジャイアン様が材料の説明するぞー!」

まずはこれ!と材料の説明をのせたのだ

鶏もも肉 1枚 (300〜400g)

生姜 ひとかけ (約10g)

片栗粉 大きじ3〜4

レモン 適宜

A 濃口醤油 大きじ2

A 酒 大きじ1

「次は私が説明します!」

すると、姫路が前に出てきて、料理の説明をしていた。ジャイアンが料理を振るっていた

「まず、鶏もも肉は食べやすい大きさ(3〜4cm四方くらい)にカットし、生姜は皮ごとすりおろします」

カットしたのをボウルに入れる姫路

「切った鶏肉をボウルに入れ、Aの調味料を加えます(完全に鶏肉が浸からなくてもOKです)そこにおろし生姜をぎゅつとしぼって、生姜のしぼり汁だけを加えます。漬け込み時間は15〜20分です。途中2〜3度上下を入れ替えるように混ぜてあげます」

しっかりと作業しながら説明をする姫路

「この少し残った漬け汁に片栗粉をしっかりと混ぜ合わせることで、衣にも醤油味がついてくれるというわけです。片栗粉大きじ3〜4を加えてよく混ぜ、手にしっかりと絡みつくくらいねっとりすれば準備完了です」

姫路がそう宣伝するとジャイアンがゆっくりと前に出てきて話を

続けたのだ

「ここまでは定番だろうな！しかし、それでは普通にただのうまいだけに止まってしまおうから!!」

そこで!!と大きな筒を見せた

「姫路さんと考案した調味料が・・・このハバネロ!!それと！姫路さんの秘密の調味料！」

それを引き継ぐように姫路が説明したのだ

「はい！この二つに隠し味として入れました!!」

「さあ！続き頼むぞ！俺様はそのまま料理を続けるからな！」

「はい！準備できたのを置いて、まずは揚げ油を160℃に熱します。はじめに低めの温度から鶏肉を入れていくのですが、入れるときに鶏肉の皮を広げ、きれいに身にまとわせてから入れると、仕上がりの食べた時のバランスもよくなります!!」

「160℃くらいで3〜4分ほど揚げます。取り出した鶏肉はそのまま4〜5分休めます。この間に鶏肉にはじんわり火が通ってくれます。鍋は火を強め、190〜200℃くらいに上げておきます。休ませた後、油に鶏肉をすべて戻し入れ、高温の油でカリッと1〜2分揚げます。好みでレモンを1〜2切そえて、器に盛り付けて完成です!!」

姫路がお皿を用意してくれたのをジャイアンが乗せたのだ

「おおー完成した！二人分って頼まれていたが、姫路さんが気を使つてのび太用のデザートも作ってくれたみたいだな！俺様の揚げた唐揚げと姫路さんのデザート！完成だな！」

ジャイアンが言うのと姫路が嬉しそうに笑っていた

「はい！折角ですから、吉井君に食べてもらいます！失礼します！ついでに土屋君にも！私にいきます！」

ジャイアンに一礼してから姫路が走っていったのだ・・・

「さあて！のび太には久しぶりの俺様の手料理を食べてもらうかー。そういえば、姫路さんの秘密の調味料教えてもらってないなー？まあいいか」

嬉々と部屋に出ていくジャイアン・・・

オマケ

ガシヤン!!!

「……………」

屍のように倒れていた明久がいたとかいなかったとか……………

終わり

プール編

時には逃げるのも大事

とある週末の夜、僕とジャイアンと雄二で明久の家に泊まりで遊びに来ていた

「あれ？雄二、何か買って来たの？」

「食いものだ。お前の家にはろくなものがないからな」

「俺もそれをのび太から聞いたとき耳を疑ったぞ」

僕たちは買って来た物をテーブルに置き、用意した物を準備し始める。僕は……

・おにぎり

・カップヌードル

「へえ〜っ。差し入れなんて、随分気がきくね」

「俺とのび太は自分で買ったからな。雄二がお前のを選んだ」

続いてジャイアンが袋からあける

・ウーロン茶

・超大盛焼きそば

・スープパーカップ みそ味

・カツサンド

そして雄二が取り出したのは、以下のメニュー

・コーラ

・サイダー

・カップラーメン

・カップ焼きそば

それを見て、明久は子供のように喜ぶ。普段の食生活がいかに貧困しているかがうかがえる

「それで、雄二はどっちにするの？」

「俺か？俺はコーラとサイダーとラーメンと焼きそばだ。」

持ってきたもん全部だね……

「雄二キサマー！僕に割り箸しか食べさせない気だな!？」

「待て！割り箸だけでも食おうとするお前の思考に一瞬引いたぞ！」

「まあ食えなくもないが…」

「じゃあ剛田君は？」

「悪いが全部、俺が食うぞ？後、ジャイアンとかよべばいいぞ？」

「あの量を!？」

「言っておくけど、ジャイアンはかなりの大食いだよ。雄二なんかかわいいもんだよ？」

「というか、それだと俺が素手で食べないと行けないハメになるだろ？心配するな。お前の分も買ってるぞ」

1つ目の下敷きになっている、2つめのビニール袋に明久は気がついた

「なんだ、やっぱり僕の分も買って来てくれてたんじゃないか」

「まあな。先週末は世話になったからな、感謝の気持ちだ」

「え？僕は何もしてないんだけどな。でもありがたく頂くよ。」

下敷きになっていた袋を受け取り、明久はその中にある物を喜々として取り出す

・こんにやくゼリー

・ダイエツトコーラ

・ところてん

「僕の貴重な栄養源があーっ！」

「見事なまでのゼロカロリー食品のオンパレード」

「気にするな。俺の感謝の気持ちだ。」

「くそっ！全然感謝していないな!？」

明久がダイエツトコーラを取り出し、構える

「うるせえ!!」

対する雄二は普通のコーラとサイダーを構える

「…………やる気、雄二？」

「ああ。お前とは決着を付ける必要があると思っていた所だ」

「僕もだ。日頃の恨み晴らさせてもらう」

「あつ、明久。お湯借りるね？」

雄二と明久は互いに相手を睨みつけ、牽制し合っている。ここで下手な動きを見せれば命取りになる、まさに一色即発の空気。僕達はそんなことはお構いなしにと台所に向かい、夕飯の準備を始めていた

……ピチヨン

「っ!!」

静から動へ、にらみ合いから闘いへと動く。

シャカシャカシャカシャカ（2人がペットボトルを振る音）

「あれ？火が出ないな？」カチツカチツ

ブシャアアアアアア（お互いに向けて炭酸飲料を射出する音）

「電気のやつがあるしそれでいいんじゃないか？」

バタバタバタバタ（2人が目を抑えてのた打ち回る音）

「そっか！」

「目が、目があああああつ！」

2人して、炭酸が目にしみるのか、苦しみにのたうちまわり始めた。

僕達はそんなことはお構いなしに電気ポットの電源を入れる

「やってくれるじゃねえか、明久！」

「雄二こそ、流石は僕がライバルと認めた男だ！」

そして雄二はやきそば、明久はとろてんを武器にして闘いへと身をゆだねていく

「……雄二、一時休戦にしない？」

「……そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」

「もう終わったか？」

2人とも、互いの食べ物でべたべたになり、床も食べ物の残骸が散乱している。ジャイアンの言葉に二人は無言でうなずいていた

「食べ物を粗末にしないでよ。もったいない」

2人とも、互いの食べ物でべたべたになり、床も食べ物の残骸が散乱している

「明久、シャワー借りるぞ?」

「うん。タオルは適当なの使つていいよ」

「言われなくてもそうする」

そう言うのと、気持ち悪そうにきているシャツをつまみながら雄二が脱衣所へと消えていく

続いて、バサバサと景気良く衣服が脱ぎ捨てる音が聞こえてきた

「そういうえば明久、さつきコンロつかかなかったけどガスは大丈夫なの?」

「あつ、払うの忘れてた」

『ほわあぁーっ!!』

明久が思い出したとともに風呂場から奇声が聞こえた

ガチャッ!

ズカズカズカ

「……………もつと早く思い出せやコラ」

腰にタオルを巻いた雄二は、寒さで全身に鳥肌を立てていた

「ごめんごめん。えつとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると体に悪いから、まずは手や足の先にかけてから徐々に心臓へと……………」

「誰が冷水シャワーの浴び方を説明しろって言った!?!」

「何熱くなってるのさ雄二。そうだ、冷たいシャワーでも浴びて冷静に」

「浴びたから熱くなってるんだポケ!くそつ、このままじゃ風邪ひいちまう!!」

「けどよ?でないのも事実だしな」

ジャイアンの言う通りだ。明久が雄二の家に行くの?と聞くと、雄二はそれでもいいけどって前置きしたのだ

「どうせならシャワーだけじゃなくてプールもある所に行こうぜ」

近くにそんな場所なんてあったかな?

「ああ。シャワーもプールもあつて、ここから近くて尚且つ金もかからないところがあるだろう?」

「ん?そんな好条件が……ああつ、あそこか」

言われて思い出した。明久も乗り気で雄二に聞いていた

「オツケー、すぐに用意するよ。水着はどうするの？」

「トランク스에서泳ぐさ。水着と大して変わらないだろ」

「僕らもいききたいけど・・・」

「僕らはここを掃除してから行くよ。帰ってきたとき」

「そうだな。雄二達は先にいけよ」

雄二達は納得すると手早く準備を済ませ、そして目的地へと駆けだして行った

数十分後・・・

「よし、そろそろだな。明久に連絡いれていこうぜ」

ジャイアンと僕が掃除終わりのころとする前に明久に連絡いれてからいくという約束だった。

僕は携帯を開くと・・・

明久：鉄人に補習されているから来て・・・

「・・・」

なにも見なかった事にしよう・・・

その日は僕とジャイアンは明久の家で寝過ごしたのだ・・・許せ。流石に鉄人相手は・・・逃げる!!

呼ぶメンバーは？

「てな事があって、おかげで散々な週末だったよ」

週明けの教室、朝のHRが始まるまでの時間にいつものメンバーで卓袱台を囲い、昨夜の降りかかった不幸についての説明をしているのだ。「そうじゃったか。それは災難じゃったのう……」

気遣うように柔らかな表情を浮かべる秀吉

「……重労働」

ムツツリーニが明久の隣で、ボソリと呟いた

「だよね。あんな広い所を掃除なんて、何か褒美が欲しい位だよ」

「褒美という程じゃないが『掃除をするのならプールを自由に使っても良い』と鉄人に言われたぞ?」

「え? そうなの?」

「ああ。だから秀吉とムツツリーニも、今週末にプールに来ないか?」

折角の貸し切りなら、と早速雄二が2人を誘い始める。

まず最初にムツツリーニが領こうとして……

「ただし掃除を手伝ってもらおうけどな」

「……」

さっきの雄二の一言で動きが止まった。重労働な仕事をしてまでしたいかという少し悩むところだよな

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

雄二の言葉に動きを止めたが、この一言で交渉にあっさりと言った「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなど、こんな時でなければ中々体験できんじやろうし、相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え? 結構大変だと思うけど、いいの?」

「うむ、お安いご用じゃ」

と、快諾する秀吉

「なら、俺らも手伝うぞ。なあ? のび太」

「うん！」

僕らがそういうと明久が思い出したように不満を言ったのだ

「そうだ！ジャイアンものび太も何で昨日プール来てくれなかったの！」

「・・・逆の立場なら助けてくれるの？鉄人の補習を？あの鬼の補習を助けてくれるの?？」

「・・・ごめん」

いいんだ・・・分かってくれれば・・・

「なら、女子も呼ばないと！おーい、島田と姫路」

「なに？坂本」

「呼びました？坂本君」

変な空気を振り払うように雄二が姫路たちを呼んだのだ。助かる・・・

「2人とも今週末は暇か？学校のプールを貸し切りで使えるんだけど良かったらどうだ?？」

「え・・・?？」

「プール」という単語で島田と姫路が一瞬ビクンと反応する

「あ、もしかして2人とも予定があつたりする?？」

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな・・・？プールって言うと、やっぱり水着だし・・・」

「そ、そうですね。水着ですよ・・・その、えっと・・・」

島田は自らの胸部へ、姫路は腹部へとそれぞれ視線を送った。女の子特有の悩みだな。自分の体に自信がないのだろう

雄二「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが・・・一つ

言っておくと秀吉は来るぞ。明久に水着を見せに・・・な」

「ずるいわよ秀吉。自分は自信があるかって!」

「そ・・・そうですねっ!木下君はずるいです!」

「??おぬしらは何を言っておるのじゃ」

二人とも、秀吉は男だよ

「で、どうするの?行く?」

「い、行くわ！その、イロイロと準備をして・・・」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

複雑そうな顔をしつつ、2人は一応肯定の意を示したようだ

「ところで使うのはFクラスだけか？」

「いや、翔子を呼ぼうと思う」

ジャイアンの質問に珍しく雄二が霧島さんを呼ぶみたいだ・・・

「あれ？あっさり霧島さんのこと誘うんだね？てっきり拒否すると思ってたけど」

「明久・・・呼ばなかったら雄二の身がどうなると思う？」

「・・・なるほどね」

流石に理解してくれたか・・・

「とにかく、全員オツケーなようだな。んじゃ、土曜の朝10時に校門前で待ち合わせだ、水着とタオルを忘れるなよ。Aクラスには俺から話しておく」

雄二のシメの台詞と同時に、鉄人が教室のドアを開ける音が響いた

「あつ、三上さんも呼ぼうかな？折角だし・・・」

「他の人も呼ぼうか??」

「うーん、三上さんだけ呼ぶよ。あつ、でもスネ夫も呼ぼうか？この間のお礼もかねてね」

「おおーそれいいなー！」

すると、ジャイアンも納得してくれて授業を励んだのだ・・・さ！勉強も頑張らないと！

言葉は大事

そしてその週末、約束のプール掃除&貸しきりの日がやって来た

「おはよー。絶好のプール日和だね」

雲一つない快晴の青空の下、明久は校門に立つ僕や姫路とジャイアンと秀吉と三上さんが待っていた。

「オツス明久。今日は目いっぱい楽しもうぜ？」

「おはようじや明久、良い天気じやな」

「おはようございます明久君、今日は良い1日になりそうですね」

「私も来ちゃった」

「僕も呼ばれてきたよ」

「あれ？なんで三上さんと・・・学園祭のときに来ていた・・・」

「彼は骨川スネ夫。僕とジャイアンの親友だよ！三上さんはこの間のお礼もかねてね？」

「宜しくー」

「なんか結構人が来たね。じゃあ折角だし、目いっぱい楽しまないとね。」

そして、ある人影に気がつく。

「ムツツリーニ、おは・・・」

「・・・!!(カチャカチャカチャ)」

鬼気迫る表情で、カメラの手入れをしているムツツリーニ。彼にしてみれば、ここは絶好の撮影チャンスでもある。周りの人間に構う暇などないと言わんばかりに、カメラに集中していた

「ムツツリーニ、準備は良いけど無駄になるんじゃないの？」

「・・・なぜ？」

「いや。だってムツツリーニはどうせ鼻血で倒れるじゃん？俺も何度か見ていたし」

「そうだよね。チャイナドレスどころか、葉月ちゃんの着替えですら鼻血の海に沈む位だもん」

明久の正論の言葉に、ムツツリーニは肩をすくめて見せた。ムツツリーニ免疫力の低さは類を見ないものだが、ムツツリーニは大きなス

ポーツバッグを手に取り、僕ら3人の前に突きつける

「甘く見て貰っちゃ困る輸血の準備は万全」

「どこでどうやって手に入れたかは聞かないぞ」

「違う意味で準備いいね」

「うん、最初から鼻血の予防を諦めてる当たりが男らしいよね」

鞆いっぱいに入っていた携行用の血液パックをみて、とりあえず救急車は必要ないと思う一同だった。まあ、ムツツリーニの行為はスネ夫と三上さんだけ戸惑っていた

「あれ？　そういえば・・・そういえば、秀吉は新しいのもかったの？」

「うむ。よくぞ聞いてくれた！　新しい水着買ったのじゃ！　ちなみに買って来た水着じゃが・・・」

「・・・!!（くわっ!）」

秀吉の言葉にムツツリーニと明久が目をむく。

「・・・トランクスタイプじゃ!」

「バカなああああつ!!」

秀吉の一言で二人は手に床をついて崩れ落ちる。そこまで落ち込むというくらい二人とも落ち込んでいた

「ひどいよ秀吉!　君は僕のことを嫌いなのかい!？」

「・・・見損なつた」

二人のあまりの言いぐさとその様子にジャイアンとスネ夫は・・・

「なぜ水着一つでここまでのしられなきやならないんだ？」

「ねえ?　ジャイアン・・・あそこの二人は・・・バカなの？」

「まあ、否定しないな・・・とくに明久はな」

「・・・タタタタッ!」

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ!」

「わわっ!？」

「もう葉月つてば、アキがビツクリしてるでしょ?」

明久の背中に、葉月ちゃんが飛び付いた

「あれ?　葉月ちゃんか、久しぶりだな」

天真爛漫を体現してるように笑う少女、島田葉月ちゃん。ある出来事から明久を好いており、婚約者を自称する少女である

「バカなお兄ちゃんは冷たいですつ。酷いですつ。どうして葉月は呼んでくれないんですか?」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって…どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから…」

と、島田がため息交じりに呟く…

「別にいいと思うけど?飛び入りがあつて困る理由もないし」

「それもそうだけど…あれ?坂本はまだ来てないの?ウチが最後だと思つたのに」

「いや、もう来てるよ?雄二と一緒に職員室にカギを取りに行つてるよ」

すると雄二が来たのだ。霧島さんと一緒に来たのだ

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「…皆おはよう」

「でっかいお兄さん、おはようです」

雄二の粗野な外見に物怖じもせず、元気よく挨拶をする葉月ちゃん

「ん??骨川も三上也きたのか」

「ちびっ子じゃないですつ、葉月ですつ!」

「ジャイアンとのび太に誘われたから来たのさ」

スネ夫と雄二と葉月ちゃんがそう会話していた…

そういえば雄二は前も葉月ちゃんの面倒みていたね…

「坂本君って…ロリコン?」

「グフツ?!」

三上さん!?なんていうことを言うんだ…

雄二が凄く悲しそうな顔して指示し始めたのだ

「…んじや、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。三上さんと姫

路と島田は霧島さんに。僕と明久とムツツリーニと秀吉とスネ夫と
ジャイアンと葉月ちゃんは雄二に……ん？

「……ん？こらこら、葉月ちゃんと秀吉は霧島さんについて行かない
とダメだよ」

「えへへ。冗談ですつ」

「ワシは冗談じゃないのじやが……？」

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、秀吉」

「ワシは男じやと云うているじやろ!？」

「あの……それなら、木下君は1人でどこか別の場所で着替えるつ
ていうのはどうですか？」

と、おずおずと手を挙げて提案する姫路。まあこうでもしないと不
毛な争いしか生まれかないしね

「ぬ、ぬう……納得いかぬが、この際我慢じや。水着姿さえ見せれば
きつとわしを男としてみてくれるはずじや」

秀吉が何かぶつぶつ言っている。こういう時は……そつとして
おこう

「よし、決まったならさっさと行こうぜ？時間がもつたいない」

「そうだね。じゃあまた後で」

そこで皆と別れ着替えに向かった

少なくとも……このときはまだ楽しみにしていた……この時
は

時には疑いを持つとう

プールサイドにて

「やっぱり女子はまだ着替え終わっていないみたいだね？」

「そうだね」

「……（コクリ）」

「ま、女性が準備に時間がかかるってのは、当然だからな」

「そっぴいや秀吉は？」

僕達より少し遅れてスネ夫が出てくる。僕達と変わらない緑色のトランクスタイプの水着である

「まだ着替えてる。俺が着替えている時もまだ落ち込んでいたからな。俺が着替え終わった時に何とか気を取り戻したみたいだからな」

雄二の説明にスネ夫がジャイアンに秀吉って誰？って言う質問にジャイアンが答えると……

「……その秀吉って人……大変だね」

スネ夫の言うとおりに、大変なんだろうね……

「ムツツリーニ、心の準備は良いかい？」

「……まかせろ。すでにイメージトレーニング365パターン済ましてある。」

その言葉に僕と明久が、目を見開いて驚愕する。一年分のパターンってどんなのだ

「……そして365パターンの出血を確認した」

「……致死率100%だね」

「というかそれ意味あったの？」

力強いムツツリーニの言葉に、明久の目が虚ろになる

「ん？おーい、誰か来たみたいだぞ？」

不意にジャイアンが眩き全員が顔を向けると小さな人影が駆け寄ってくるのが見えた。その姿は紺色の水着を着た少女、葉月ちゃん。がスクール水着でこちらにきた……不自然に胸がデカく見えること以外は違和感はないそして、炭酸飲料の蓋を開けたような音と共に、

ムツツリーニの鼻下に、赤く細い線が刻まれる。

「……弁護士を呼んで欲しい」

鼻血を垂らしながら呟くムツツリーニ。それを聞いて周りが苦笑いする

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

息を弾ませ駆け寄ってきた葉月の姿を見て、明久が微笑む。まあ年齢相応にスクール水着だね。一部を除いたら

「懲役は2年で済みそうだね、ムツツリーニ」

「……実刑はやむをえない（ポタポタポタ）」

「というか、何で小学生相手に鼻血垂らすの？」

スネ夫はムツツリーニにツツコみ、それを聞いて明久が苦笑い。すると、さらなる人影が更衣室から飛び出してくる

「こらああつ！お姉ちゃんソレ勝手に持って行っちゃダメでしょっ?!返しなさい葉月っ!」

「ソレ?……何のことだろ?」

「あうっ、ズレちゃいました」

現れたのは、胸元を手で覆い隠している島田。返せって言ってるのは、葉月ちゃんが胸に詰めてるものだろうね

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……!」

明久に向かってものすごい怒りで歩いてきたのだ

「だ、ダメだよ美波!その一撃は僕の記憶どころか存在まで消し去りかねないから!」

「落ち着きなよ、それだと、流石に危ないよ?」

流石にヤバイと思っただのでそういうと島田も踏みとどまってくれた……

「ううう……折角用意してきたのに……葉月のバカ……」

「美波」

「なによ」

あれ?珍しく明久が何か言おうとしてる

「そ、その言いにくいんだけど」

「やっぱりこの格好、どこか変なの……?」

「うん。その・・・」

「・・・」

「ちゃんと水着着た方が良いよ」

「・・・・・・・・カアアアアつと完熟トマトのように島田は真っ赤になり
り

「いやああああ!!」

「ぎやああああ!!」

バキ、ゴキ、ガツシユ、ドシユ

「おくい、そのへんで辞めとかんといくら明久でも死ぬぞ〜」

ボロボロになった明久はその場に崩れ落ち島田は更衣室に走って戻っていく。ジャイアン、良いタイミングで止めたね

「黙つときやいいものも・・・」

「そういうわけにはいかなさいさ・・・」

「ジャイアン・・・のび太・・・輸血しているやつや今殴られたやつみて
さ・・・」

「うん」

「どうした?」

「ごこつて色々怖いな?」

ふつ、そんなことか・・・スネ夫・・・

「慣れれば怖いと言うより普通になってしまう」

「そだねー。僕ちゃん・・・今の状況にビツクリー」

「そだねー。皆見慣れているからだろうね／＼」

そう話していると・・・

「の・・・のび太君、いったい何があったの?」

「あつ、三上さん。実は・・・」

そこで僕はふりかえると固まったのだ。三上さんの水着はホルターネックみたいなタイプの水着に着ていた。色は青色・・・可愛い・・・

「のび太君?」

「あつ、ご・・・ごめん!その、三上さんの水着が似合っていたから!!」

「え?」

「あ……」

「……………」

僕の言葉で変な空気になっていた……どうしたらいいだろう?とおもっている……

「ぐあああああつ!目が、目があつ!!」

突然、雄二の悲鳴が響き渡った。僕達が何かと思い見てみるとそこには目を潰されたた打ち回る雄二の姿。そして手をチョキにしている大人しめな白のビキニに水着用のミニスカートを組み合わせた格好の霧島さんが立っていた。見た目通りの配色と彼女の色の白さが際立ってすごく美しい

「すごいわ……坂本の目を潰す仕草まで綺麗だなんて。」

「うん……あの姿を見られるのなら、雄二の目なんて惜しくないね。」

「そりやお前らに実害がないからな!」

その光景に僕ら四人は……

「……霧島さん相変わらずだね……」

「あれは痛いよ……」

三上の言葉にのび太も同意しながらあれは痛いとは平然に言っていた

「容赦なく攻撃……こ……怖い(ガタガタ)」

「やっぱり耐性がなかったらこうなるか……すっかりしろ。スネ夫……」

そして、この見慣れてない光景にスネ夫は震えていた。それを見かねたジャイアンが渴を入れたのだ

「翔子……」

「……うん」

「ティッシュをくれ。涙が止まらない」

「このバカ雄二。もつという事あるんじゃないか!」

「視界を奪われて何を言えと!?!」

『『お前がほしい』の一言ぐらい言ってみせろよ?』

「剛田!?!なに誤解を招くようなことを言わせる気だ!!」

「雄二……」

「ジャイアンの一言で顔を赤らめる霧島さん。」

「誤解だつて言ってるだろ!!俺はお前の水着に興味なんて……」
「……それはそれで困る」

ガシイ!!

「ぐああああ!!なんかこれ前にもあつたような……なかつたような……」

雄二の一言で怒つたのか霧島さんは雄二にアイアンクローを極めた。そこへ……

「すみません!背中 of 紐を結ぶのに、時間がかかっちゃって……!」

駆け足でこちらに来る姫路の姿があつた。それを見て、大量の出血をして倒れるムツツリーと、それと同様に出血多量で倒れた明久

「Worauf für einem Standard hat
Gott jene unter schieden, die ha
den, und jene. Die nicht haben!?
Was war für mich ungenugend! (神様
は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの!?!ウチに何が足
りないっていうのよ!)」

「お姉ちゃん時々混乱するとあんなふう to ドイツ語になるんです」

「何となくだけど、神様に対する文句みたい……」

「スネ夫、ドイツ語わかるんだ。でも納得だね」

「ああ、姫路のは凄いからね……」

「うんうん。女の子の私でもすごいスタイルだと思うよ」

姫路はビキニからはちきれんばかりの胸が際立っている。姫路は
普段とは想像がつかないくらい of 露出度が高いピンクのビキニにパ
レオ

「あ……あの、どうかしましたか?私、何か変ですか?」

変ではない。変ではないが一緒にいると理性を破壊しかねんほど
の破壊力に僕達は圧倒されている

「へ、変じゃないよっ!すごく似合っているよ」

「そ、そうですか？」

「うんうん。僕も思わず息をのんだよ。ね？ジャイアン」

「お・・・おう」

「二ハハハ・・・」

僕達4人は笑いながら鼻血を出さないように体を反らして顔を上に向けている

「何だ・・・？一体、何が起こってるんだ？」

「雄二」

ガシイ！

「があっ！なっ、何だ!?・・・って翔子!?お前、何してやがる!？」

「目隠し」

メキ・・・メキ・・・メキッ！

「それはわかるが力が!!これ以上やられると目がへこむ!!」

雄二は雄二で霧島さんに目をふさがれているが力の入れ方がすさまじいのか、手足をばたつかせて悶えている。そして忘れた時に秀吉が入ってきた・・・

「遅れてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、落ち込んでいた時間が長くての」

「☆●◆▽□♪◎×（ううん、そんなに待つてないよ秀吉）」

「明久、ここでは日本語で話そう！」

秀吉の格好は、確かにトランクスである。

ただし、構成は美波と同じようなスポーツタイプであり、上は肌張り付く様なショートタンクトップ。下は飾り気のない普通のパンツの上に、ショートパンツのようなズボンが一番上のボタンを外した状態で重ねている

・・・つまりは、女物のトランクスタイプ。どうしてこうなった？

「秀吉、見ただけで男物かどうかぐらい区別できるはずでしょ？」

「やっぱりそっちの趣味があるのか？」

「ち、違うのじゃ！ワシは本当に男物を買った筈なのじゃ！きちんと店員にも『普通のトランクスタイプが欲しい』と言ったのじゃぞ!？」

「というか男物に上がある時点でおかしいと認識しない方にも問題があるでしょ!？」

「ムムム、確かにそこで店員を信じ切ってしまったことは反省じゃ」

スネ夫の指摘に秀吉も反省してた……この秀吉を見て彼もやはりFクラスなのだと実感した

時には慎重に考えよう

「あの、明久君にのび太君」

僕達が休憩をしているとき、梯子を使ってゆつくりと姫路さんがプールに入ってきた。

「ん？なに、姫路さん？」

「2人は水泳は得意ですか？」

「あ、うん。僕はそれなりに泳げるよ？のび太は？」

「……泳げない」

ふっ……昔よりはましになったけど……昔よりはね……

「のび太君もですか!?実は私、全然泳げないんです」

「あ、そうなの？というか、のび太泳げないなんて意外だね」

「まあ体弱みたいだし仕方ないと思うけど……あと明久、僕も不得意なことはあるの!」

もし姫路さんがすごい速さで泳ぐを見たらそれはそれで怖い

「ん？瑞希って水泳苦手なの？」

「はい、恥ずかしいんですけど、水に浮く位しかできなくて……せめてバタ足くらいはできたらと思いますして」

「そう言う事なら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、ウチが瑞樹に泳ぎを教えてあげよっか？」

ちよつと得意気に島田が胸を張る。常日頃より教わってばかりの為、意趣返しが嬉しいのだろう

「だったら私も手伝うよ。これでも結構得意だし」

三上さんが姫路さん達の会話に入ってきた。

「は、はいっ! よろしくお願いします!」

そのやり取りを聞いて、僕達はほほ笑んだ。

勉強ではAクラスの姫路さんがFクラスの島田にいつも教えてあげている立場

「という事だし、二人に任せていいかな？」

「あつ、もののび太君を指導するわ。どうせならもう少し泳げるようになるの損ないと思うけど」

「「え？」」

予想外の言葉に皆は固まったのだ。何故に？

「折角だからのび太君も思っただよ……迷惑だった？」

三上さん！その顔反則だよ！！上目遣いでの水着姿……うう、直視できない……

「？のび太君？」

「あつ、な……何でもないよ!!」

「そう？はじめましょう？」

僕らが動くこうとすると……

「寄せてB位はあるわよ!!!」

バキツ!!

振り替えると、明久は島田に顔面にパンチを思い切りされて吹っ飛ばされていた

「……雄二、ちなみに私はCクラス」

「？何を言っているんだおまえは？」

その遠くでは、雄二と霧島は不思議な会話をしていた。ちなみにムツツリーニは目を輝かせている。その間、秀吉、ジャイアンとスネ夫は葉月ちゃんと一緒に仲良くボール遊びをしていた

「さつ、私達は私達で泳ぎましょ？」

「うん」

僕たちは何も見なかったことにしたのだ……

ジャイアン side

おう！この作品で俺様からの視点でやるのは初めてだな！皆！宜しくな！

「ジャイアン……どうしたの？突然変な顔して」

「あつ、すまん、すまん！」

いけねえ、いけねえ。さて、現在の状況だが……、他の皆はそれぞれと遊んでいて、のび太は三上さんに泳ぎ方を教えてもらっている「のび太のやつ、少しは泳げるようになっていたけど、未だに泳げないのかよ？」

「うーん、でもかなり努力してやっているのは知ってるからかなり進歩した方じゃないかな?」

「まあな。しかし、のび太の学力には驚かされるぜ」

「なんで?」

「あいつ、化学がこの学校のAクラス並みの学力あるってこの間知ったんだよ。あののび太がだぜ?」

「え?! Aクラスって言えば、学年で賢いクラスなんでしょ? あの、のび太が!」

スネ夫も予想通りの反応で返ってきてくれた。まつ、そうだよな? 昔のあいつを知ってる俺らからしたら驚くよな・・・

「・・・あいつも今ののび太見たら驚くだろうな」

「うん・・・時々だけど、会いたくなるのよねー」

「ああ。俺様もだ」

世間一般からしたら普通の高校生が何をいつてるのだ? っていうかもしれないが・・・ここにいない者も含めて俺達5人はかけがえない仲間だ・・・なあ、お前は今も見てくれるのか? のび太の事を・・・俺達の事を・・・

明久 side

「バカなお兄ちゃんっ」

「わぷっ!? あっ、葉月ちゃん」

そこへ僕の背に葉月ちゃんが乗ってきて、こらえきれず沈んでしま
う

「どうしたの? 一緒に遊ぶ?」

「はい! 『水中鬼』をします」

「水中鬼?・・・水中でやる鬼? っこかな?」

聞いたことない遊びに、明久は首を傾げる。

最近の子供はいろんな遊びを考えるな

「違うですっ。水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追い掛けるです。それで鬼が他の人を水の中に引きずり込んで、溺れさせたら勝ちです」

「鬼だ！それは確かに鬼だ！」というか、溺れさせちやダメだよ！危険だから」

「あう……ダメですか？」

ちよつと不満そうに、葉月ちゃんが頬を膨らませる。　どれだけ危険かを教えてあげる必要があるなど考えていると……

「じゃあ見ててね？霧島さんー！」

「……何？」

明久が呼ぶと、すぐに来てくれる霧島さん。彼女は以外にも運動もできるため、泳ぎも上手い。文武両道とはこのことかなー。とりあえず葉月ちゃんの水中鬼の説明をしないと

「雄二と水中鬼つて遊びをやって見せてほしいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせた後で人工呼吸したら霧島さんの勝ち」

「……行ってくる。」

小さくうなづくくと、翔子は魚雷のように静かに、そして速く雄二に水中から接近していく。とりあえず、雄二に向けて合掌した

「お？何だ？いきなり足が……おわあっ！だ、誰だ！誰が俺を水中につ！」ガボガボガボ

「……雄二、早くおぼれて」

「ぶはあっ！　しよ、翔子！　何をトチ狂つて……！」

ガボガボガボ

それを見ていた明久は頷いて、葉月に一言

「ね？　危ないでしょ？」

「はいです……葉月、水中鬼は諦めるです……」

「ねえ？雄二がものすごい勢いで消えたのだけどなにか知ってる？」

のび太が三上さんと共にこちらに来たのだ。くつ、女子に教えてもらって泳ぐなんてけしからん！

「……今よからぬこと考えた？」

「なんのことかな？」

「目を見て話そうよ？明久」

くつ、このままではバレてしまう！！

すると・・・僕達が会話をしている中で水中から何かが湧いて出てきた

「明久、！テメエの差し金だな!?」

「うわっ！ダメだよ霧島さん！きちんと捕まえておいてくれないと！あとのび太も協力していたよ！」

「僕は何も言ってない!!言ったのは明久だ!」

「うるせえ!!てめえら!今にぶちのめすから覚悟しろ!」

「早くして!僕達がおぼれさせられて雄二に人工呼吸させられる!!」

「・・・ごめん。雄二、浮気は許さない」

「わっ、お兄ちゃん達、泳ぐの取つても速いですっ」

「のび太君!頑張つて逃げて!」

のび太と僕と雄二と霧島さんの水中鬼、スタートされた・・・のび太 side

「あれ?プールを使っているのが誰かと思ったら代表達だったの?」

雄二が命がけの水中鬼をやっていると、聞き慣れない声が響いで声のした方向へ振り向く

「・・・愛子?」

霧島さんが動きを止める。その手には雄二が水中に沈められている。本当に雄二を殺しかねないから僕は雄二を引っ張り出す

「誰だ?」

「あつそうか、ジャイアンは工藤さん見るのは初めてだったよね?工藤愛子さんAクラスだよ」

そこには制服を着たボーイッシュな女の子、工藤愛子さんの姿があった。最後に会ったのは確か清涼祭の時だったけどジャイアンとスネ夫は初対面になるのか

「あ、君が剛田武君か。初めまして、工藤愛子です」

「おう!俺様は剛田武で、ジャイアンって呼ばれてる。で、こいつは別の学校だが、俺とのび太の親友の」

「骨川スネ夫です」

「……愛子はなんで今日来たの？」

「僕水泳部でね、今日はオフなのすっかりその事を忘れていて学校に来てやっと思いだしたんだけど、人の声がしたから寄ってみたんだ。良かったらボクも混ぜてもいい？」

「良いと思うわ。皆の使う場所なのだから」

三上さんの言葉に皆は頷くと……

気配のした方向を見るとそこにはDクラスの清水さんが美波を追いかけていた

「お姉様！プールに行くならどうして美春に一声かけてくれなかつたんですか！美春はこんなにもお姉様の事を愛しているのに！」

「み、美春!? アンタどうしてここにいるのよ!? プールで遊ぶなんて一言も言っていないはずだけど！」

「お姉様がそこにいるなら、私はどこにでも現れます!!」

……. ストーカー疑惑が出てしまいそうなんだけど……

「じゃあ、僕は着替えてくるね」

そう言つて更衣室へと向かう工藤さん。最初見た時も思ったけど、活発な子だから仲良くやれそうだな。そう思っていると急にこつちに振り向いた。どうしたんだらう？

「あ、そうそう。覗くならバレないようにね♪」

この一言に男子一同に電流が走る。つまり本人公認の覗き。しても問題はないのだが……

「……雄二、今動いたら捻り潰すから」

「明久君。余計な動きを見せたら大変なことになりますよ？」

「生きて帰りたくないの？」

背後にいる女子からのものすごいプレッシャーである。直勘で「動けば殺される」と感じたのか、明久と雄二は大人しかった。因みに、僕は三上さんとか他の女性にはさすがに失礼なのでしない……

「そういえばさつきから土屋を見かけないがどうかしたか？」

「あれ本当だ。三上さんもみた？」

「ううん。見てないわ」

「・・・あれじゃないかな・・・」

スネ夫が指さした方向を見るとカメラを構える余裕もなく、必死に血液パックを付け替えしているムツツリーニの姿が映った

何かこのあとの合流した面子でどうなるのか心配になってきた・・・

勝負は真剣にしよう

「さて、これからどうする？」

僕らはある程度遊び終えて、一回休憩していたのだ……

「そうだね。少しお腹すいてきたし、何か食べない？」

「おお、賛成だぞ！なあ？坂本」

「ああ、剛田の言う通りだ。じゃあ誰か何か買いに……」

「あ、それなら……」

そこで姫路さんが、何かを思い出したかのようにポンッと手を打つ。そして嬉しそうに、あるバスケットを取り出した

「っ！……姫路、そのバスケットには何が入ってるんだ？」

姫路さんの一言でジャイアンを除くFクラスの僕達に戦慄が走った

「実は、今朝作ったワッフルが6つほど。」

「ほう、うまそうだな。俺も頂いていいか？姫路さん」

「僕ももらっていい？」

「はい。いいですよ」

待つんだ!!二人とも早まるな！止めようとした時、雄二が手を横に出して制止する

「あいつらは俺たちの犠牲になるんだ」

「あいつらはいいい奴だったよ……」

そういうとみんなは一斉に二人に合掌を始めた。こうして二人はそのまま口に入れる

「あ、あそこの雲きれいだね」

明久の一言でみんなは一斉に上を見上げる

「ガフウ!!」

「ゴフあ!!」

みんなが上を向いた最中。二人からえもいわれぬ声が飛び出た

「え？」

「こ、これって……？」

「え？どうしたんですか？何か間違ったものを……」

だがすぐに二人は息を吹き返し、よろよると立ち上がる。なんとい
う回復力、僕や秀吉はそこそこの時間がかかったというのに

「あつ……すまん……美味しくって倒れたんだ……なっ？スネ夫……」
「う……うん」

「あつそうですか。ビックリしました」

「そうね。少し慌てたじゃない」

「……うん」

三上さんはなにか言いたそうな顔だったが、僕はすぐに震えている
二人にアイコンタクト取ったのだ

「(ジャイアン！スネ夫！姫路さんにナイスカバー！)」

「(……まさか、ここまで独特な味だと思わなかったぜ……俺様も
まだまだだ！)」

「(流石に意識吹っ飛んだ……のび太。お前も食べたの?)」

「(うん)」

「(……強くいきよう)」

僕とジャイアンとスネ夫は数秒間そんな会話していたのだ。する
と……

「第1回っ！」

「最速王者決定戦っ！」

「……ガチンコっ！」

「水泳対決っ!!」

「イエーツ!!」

明久立の開催宣言にみんなは首をかしげる。

……気持ちわからないことないけど……

「明久、ルール説明だ」

「オツケー。ルールはとっても簡単、このプールを往復して最初の
ゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負だよ。」

「参加者は男子全員だ！いいな!!」

「え!？」

「おいやめろ!!こんな状態で勝てるわけが!？」

「男に二言は許さん!!とにかく始めるぞ！」

「へえ、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

男子は7人、つまり1位から3位の人だけが殺人ワツフルを食べる事を逃れるという事になっている

そこで、考える。ムツツリーニは出血で弱っており、体格から秀吉に体力で負ける事はない。食べた二人はダメージがまだ残っている。

ならぎりぎり3位以内に入れる、普通に行けば大丈夫だけど・・・泳げれるかな

「よいい、スタートっ！」

「く・た・ば・れええっ!!!」

ゲシイ!!

「うわ!?!」

明久は僕に一方的にとび蹴りを放った。僕は対応することが出来ず、そのまま吹き飛ばされ、プールに落とされた

「剛田、テメエ卑怯な真似してくれるじゃねえか!この恥知らずが!!」

「黙れ!あの料理の説明をしなかったお前こそ卑怯だろ!今ここでぶちのめしてやる!!」

「明久!なにしてくれる!!」

「黙れ!!僕はどうしても生き残りたいんだ!!」

「勝負で勝てばいいでしょ!?!」

俺達は一斉に組み合い、勝負内容がすでに変わろうとしていた

「あのさ4人とも、取っ組み合いも良いけど、他のみんなはそろそろ折り返しだよ?」

ふと見てみると、スネ夫、秀吉、ムツツリーニの順ですでに折り返しが行われていた

「チャンス!!」

明久の制止を振り切り、そのまま泳いで逃げ切った。デイスアドバンテージはでかいがまだ巻き返せられるはず

「あ、逃がすか!!」

「くそっ!俺はムツツリーニを止める、剛田は骨川を。明久は秀吉

をやれ!!」

「了解!」

2人はプールに飛び込み、雄二はムツツリーニに、ジャイアンはスネ夫に明久は秀吉を止めるべく立ちふさがる

「なんでこうなるのよ」

「やはり豚どもの争いは醜いですね」

「でも……うん。大変だね。男の子は……」

その様子を見ていた女子はすでに呆れた空気が漂っている

「な、何じゃ明久!?!お主は隣じゃろう!?!」

「ダメだよ秀吉!ここは通さない!」

脇を抜けて先に進もうとする秀吉にしがみつくと明久。水中だとうまく捕まえられず、難儀している。

「くっ!明久、離すのじゃ!」

「逃がすもんかあああつ!!」

ズルツ!

「……? なんだろう?」

明久その場に足をつけて、手に残った物を確認し始める

「あ、明久君! 何をしているんですか!?!」

「え?……もしかしてこれって、秀吉の……?」

「んむ? そう言えば胸元が涼しいのう」

ゆっくりと振り向いた先には、上に来ていた秀吉の水着が無くなっていた。それもそのはず、その上の水着は明久の手にある

「……死してなお、一片の悔いなし……!!」

上の水着が無くなった秀吉とムツツリーニを中心に朱に染まっていく水面

「つちよ!?!それマジでヤバイだろ!?!」

「そうだよ!この出血量はヤバイよ!?!」

「……構わない。むしろ本望……!」

くっ!泳ぐのは中止だ!

「ジャイアン!スネ夫!ムツツリーニをプールから脱出させるの手

伝って！」

「おう！スネ夫！」

「了解!!」

僕ら三人は沈むムツリーニの方に慌てて向かったのだ

「きやあつ！土屋君が大変な事に!?血がものすごい勢いで出てるわ!?」

「とっ……とにかく、俺は輸血パックを持つてくるから、明久は早く秀吉に水着を返してやれ!!」

「わ、わかつたよ！」

「き、木下っ！早く胸を隠しなさい！土屋の血が止まらないから！」

「イヤじゃっ！ワシは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじゃ！」

「木下君、わがままを言っちゃダメです！土屋君が死んじやいます！」

「嫌じゃあ!!!ワシは男なのじゃ〜〜!!」

結局、ムツツリーニは何度も峠を迎えているが、雄二たちの応急処置のおかげで安静になった。あとは救急隊員が来るのを待つだけだ……

どつと疲れたが出た……

そして……

その週明けの朝

「……吉井、坂本、ちょっと聞きたいことがある」

現れるなり朝の挨拶もせず、鉄人が低い声で呼びとめた

「黙秘します」

「言う事なんて何一つない」

2人はそれに対し、拒否の姿勢を取る。すると、鉄人はプルプルと震え始めた

「……どうして……どうして掃除を命じた筈なのにプールが血で汚れるんだ!?鉄拳をくれてやるから、生活指導室で詳しい話を聞かせろ!!」

響くは、教室中を揺るがすような大音響。それに対し、苦勞した2人は心外と言わんばかりに抗議をする

「説教なんて冗談じゃねえ！むしろ死人を出さなかったことを褒めてもらいたい位だ！」

「そうですよ！本当に危ないところだったんですからね！」

「黙れ！お前達の日本語はさっぱりわからん!!」

「この暴力教師め！逃げるぞ明久！」

「了解！」

「貴様ら、今度は反省文とプール掃除では済まさんぞっ!!」

必死に逃げ出す2人。しかし、鉄人に担がれ生活指導室へと連行される殴りながら2人から事情を聴いた鉄人は一言

「・・・今度の強化合宿の風呂は、木下を別にする必要がある様だな」

等と呟いた。

オマケ

「しかし、姫路さんの料理の味は独特だったぜ・・・俺様も負けられないぞー！」

「え?!」

「・・・ジャイアンの言葉にのび太は悟ったのだ。これはもう逃げられないと・・・のび太は止めるのを諦めたのだ」

強化合宿編

時には隠したいこともある

雄二 side

「翔子」

「・・・隠し事なんてしていない」

「まだ何も言っていないぞ?」

「・・・誘導尋問は卑怯」

「今度誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。」

「んで、今背中に隠した物はなんだ?」

「・・・別に何も」

「怪しいな・・・よし、それなら・・・」

「翔子、手をつなごう」

「うん」

「よつと・・・ふむ、MP3プレーヤーか」

「・・・雄二、酷い・・・」

「機械オンチのお前がどうしてこんなものを・・・何が入ってるんだ?」

「・・・普通の音楽」

「・・・まさかと思うが・・・」

「俺は恐る恐る、スイッチを押すと・・・」

——ピッ

《優勝したら結婚しよう。愛している。翔子》

「・・・」

「・・・普通の音楽」

「これは削除して明日返すからな」

「・・・まだお父さんに聞かせてないのに酷い・・・」

「お父さんってキサマ——これをネタに俺を脅迫する気か?」

「・・・そうじゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらうだけ」

「翔子、病院に行こう。今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

「……子供はまだできてないと思う」

何故そうなる!?俺がいたいのはそっちじゃねえ!

「行くのは精神科だ!——ん?ポケットにも何か隠してないか?」

「……これは大したものじゃない」

「え、なにになに:『私と雄二の子供の名前リスト』か。って、ちよつと待てやコラー!」

「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」

『『しようこ』と『ゆうじ』で『しようゆ』か……なぜそこを組み合わせるんだ?』

「……きつと味のある子に育つと思う」

「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

『『しようゆ』って女の名前だったのか……』

やはりこいつは色々な意味で病院つれていった方がいいのか……

と俺は真剣に考えてしまったのだ……

オマケに名前のセンスもないじゃねえか……

のび太 side

あのムツリーニ鼻血事件で怒られた、雄二と明久をほっておけず、

ジャイアンと僕も手伝ってどうにかきれいに戻った翌日

「ふあああ……ねむたい」

「俺も何か眠たいぜ……」

僕はいつも通りの朝にジャイアンと三上さんとで3人で登校して
いたのだ

「二人とも眠たそうね……大丈夫?」

「まあ、プール掃除終わってから疲れが異常だったからね」

「まっ、これぐらいは日常に影響はないから大丈夫だぜ」

「良かった……」

三上さんは僕らの言葉に笑いながら安心したのだ。心配かけたな……

「そういえば、もう少しで強化合宿だね？」

「合宿？なんの？」

「あつ、そうか。ジャイアンは知らなかったもんね。二年生になったらある学校のひとつの行事だよ？」

「へえー楽しみだぜ。なら三人で教えあえたらいいな？」

ジャイアンの言葉に僕は笑っていたのだ。確かにそれは刺激になるしね

『最悪だー！！！！』

「……」

今日も明久は明久だった……

「おはよう！」

教室の扉を開けると、いつものように島田が明久殺気を向け近くでは秀吉がそれを見ていた本当、朝から元気だね

「あつ、のび太にジャイアン。おはよう」

「おはよう。二人とも」

「おはようなのじゃ」

うん、挨拶返してくれてるのはいつも通りだけど……島田、何してるの？

「ちよつとした質問よ」

へえー、でもそんなに殺気を向けたらもはや脅迫だよ？

「もう一度聞いわ。アキ。何を隠しているのかしら？まさかと思うけど……」

島田の目が吊り上がる。攻撃態勢まであと一歩の状態だ

「まさか、またラブレターを貰ったなんて言わないわよね？」

「美波、言葉に気をつけるんだ。ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

男子全員は「ラブレター」の一言で殺意が一気に渦巻いた。クラスメイトを殺すことにためらいがないのかな？まあ普段の行動を見て

この光景に慣れてしまった自分が恐ろしいけど・・・

「で、アキ。何があったの？」

「じ、実は、今朝僕宛てにk・・・」

ここで明久が途中で口をつむぐ。表情からしてなんか思いつめているようにも見える

「なに？なにがあったの・・・」

いつにない明久の真剣な表情に美波も急に不安な表情を見せる。そして明久がしばらく黙った後で詰まりながら言葉を発した

「き、きよ・・・競泳水着愛好会の勧誘文」

「「え？」」

明久の答えに周りの皆は驚愕した。なにそれ？

「ほ、ほんとなの？」

「いや、どう考えてもウソだろ」

ジャイアンの言う通りだ。いくらなんでも盛りすぎ

「え？あまりにリアルな嘘でおどろいたわ」

「ねえ・・・泣いていい？」

「でもその解答はちよつとびっくりよ。いくらウソでも」

「して、その手に持っている手紙にはなんて書いてあったんのじゃ？」

明久が泣いているところで怪訝に思っている秀吉が明久に尋ねる。ふむ、確かに気になるね。

「分かったよ・・・実は・・・」

「実は・・・？」

「脅迫状が届いていたんだ」

「「え?!」」

「あつ、何だ。良かった」

「いや、島田。明久が脅迫されてるの良かったと思うのはおかしいよ？」

「あつー(づ)・・・ごめん!」

僕の指摘に島田が謝ったのだ。それにしても・・・

「脅迫状は何書かれていたんだ？俺にも見せてくれよ?」

「僕も力になるなら手伝うよ？」

「あつ、うん。これが脅迫状だよ」

どれどれ？

『あなたの秘密を握っています。バラされたくなければ、あなたの傍にいた異性にこれ以上近付かないこと』・・・これって」

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおる異性に対してなんらかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが。つまり——」

そう！つまり・・・

「うん。手紙の主はこのクラスのたった2人の異性、つまり姫路さんか秀吉かに好意を寄せているヤツだってことがわかるね」

「明久。金属バットを取りに行つた島田が戻つてこないうちに逃げるのじゃ」

「地雷にあつさりと踏みにいくね・・・明久は」

「まつ、それが明久だろ？」

確かにそうだよね・・・

「ところで何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」

「あ、そういえばまだ知らないや」

「えつと・・・『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か。この封筒かな？確認しなよ？」

丁度写真が入るようなサイズの封筒が同封されてたので、それを渡すと明久は封筒に入っていた三枚の写真の内、一枚目を手にとって確認する

その写真に写っていたのは——メイド服姿の明久

「この前の学園祭の服装じゃな」

「い、いつのまに撮影なんて・・・」

「無駄に似合ってるな！良かったな！明久！」

「それ、全然喜べることじゃないよ！」

溜息をついた明久は俺たちに見えないように隠しながら二枚目を確認する

すると明久は急に固まったのだ

「どうしたんだろ？明久ー？」

「……トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだから……」

明久が壊れた!?

「な、なんじゃ?!自我が崩壊するほどのものが写っておったのか!？」

少しすると明久が再起動し、三枚目を確認する。僕とジャイアンは後ろから確認すると……

写っていたのは——ブラを持って立ち尽くす明久(着替え中メイド服着崩れバージョン)

「もういやあああつっ!」

「どうしたのじゃあ!？」

「おい!?!明久ー?!」

「許して!明久!写真を見た僕を許して!」

「とにかく落ち着くんじゃ!周りが見えているぞ!」

言われてみると周囲の冷めた視線が明久に痛く突き刺さる

「はあ、はあ、はあ恐ろしい威力だった……。これは俺を死に追い詰めるための卑劣な計略と言っても過言じゃない……」

「考えすぎではないかのう。メイド服ぐらい、人間一度は着るものじゃ」

男がそんなものを着ることは一生のうちにあってほしくないんだけど……秀吉、演劇部とはいえ感性が毒されている気がするけど……

「みなさんおはようございます」

後ろから姫路の声が聞こえてきた

「この声は——やっぱり姫路さんか。おはよう」

「おはよう!!」

「おはよう姫路」

「おはよう。今朝は遅かったんじゃない」

「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

「そうじゃ。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路に証明してもらおうとしようかの。姫路、少々良いか？」

秀吉が急にそんな事を言いだした

「はい、何でしようか？」

「うむ。姫路に質問なのじゃが、明久のメイド服の写真があつたらどう思うかのう？」

正直、その切り込み方はどうかと思うが・・・かなりストレートだね

「うくん、そうですねえ……」

姫路がもしここで嫌悪感を現すようなら、あの写真の公表は何としても避けないといけな。それで残すなんてあまりにも可哀想すぎるから

「もしそんな写真があつたら——とりあえず、スキャナーを買います。」

意気込む明久をよそに、姫路の口から漏れた答えは予想の斜め上の物だった

「へ？スキャナー？何で？」

「だって・・・そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBで発信できないうじゃないですか」

バタン!!

「明久、落ち着け！飛び降りなんて早まった真似をするな！」

「そうだよ！命は投げ捨てるもんじゃないよ！」

「放して2人共！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

僕とジャイアンは必死で明久を押さえていたのだ

「シナセテエエ!!」

外から明久の悲痛な叫びが校庭に響き渡った。

「そ、そうじゃ！ムツツリーニじゃ！ムツツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して——」

「ムツツリーニに笑われる？」

「違う！事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらおうのじゃ！」

「おおっ！なるほど！」

確かに情報収集や盗撮のエキスパートとも呼ばれるムッツリーニなら脅迫犯を突き止められるかもしれない。今の彼にはそれぐらいにしか頼れそうにない

「ナイスアドバイスだよ秀吉!!」

明久は、早速相談しようかとムッツリーニに駆け出した

「僕とジャイアンもついていくよ」

「だな。明久の暴走が心配だからな」

僕らも明久に追いかけて行ったのだ・・・変なことにならないならいいけど・・・

扱いの悪さに涙

「ムツツリーニ！僕を助けてくれない！」

ムツツリーニのいる屋上に倒れこむように駆け寄る。すると、明久の行く手を遮るように雄二が大きな身体が邪魔をしてきた。「後にしろ。今は俺が先約だ」

目的地に先に陣取っていたのは雄二だった。いつものツンツン頭が少し萎れているように見えるが何かあつたんだろうか？

「ムツツリーニ、何の話？」

「……………雄二の結婚が近いらしい。」

「雄二と霧島さんの結婚？僕はてっきり結婚宣伝したもんだからもう子供ができた事にされているのかと」

「子供まで行かなくても両親と話してもしてるのかなとは思った」

「あー、俺は婚約の話までいっていたと思っていた」

「……………お前ら。笑えない冗談はよせ」

僕らの冗談に対し雄二は浮かない表情のまま淡々と話す。そりやあ彼からすれば彼女との結婚は素直に喜べるものじゃないからね

「僕達の方も大変だけど、一応雄二の方が先だからね。雄二に何があつたの？」

「……………実は今朝、翔子がMP3プレーヤーを隠し持っていたんだ。」

「MP3プレーヤー？それくらい問題ないだろ？多分、英文とか入ってるんじゃないのか？」

確かにジャイアンの言う通りだ。その可能性はないの？

「いや、アイツは結構な機械オンチだからな。そんな物を持っていて、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ」

霧島さんは機械オンチなのか。なんでもできそうなのだが……

「そこで怪しく思って没収してみたんだが、そこには捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ。それに婚約の証拠として父親に聞かせるつもりようだ」

「へえ、それは災難だったね」

明久は何事もなさそうに言っていたが、僕は以前の清涼祭での「あれ」を思い出した。ジャイアンは分かかってないからすぐに教えるとも言えない顔だったのだ……

「MP3プレーヤーは没収したが、中身は恐らくコピーだろうし、オリジナルを消さない事には……」

霧島さんの計画は思った以上に壮大かつ綿密に進められている。なんか聞いて雄二に悲哀が漂ってるの見たのだ

「そんなわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さつきも言ったようにアイツは機械オンチだから、きつと機械に長けた実行犯がいるはずなんだ」

「……明久は？」

と、ムッツリーニが明久の方を向いてきた。今度は明久の事情を聞いてくれるみたいだ

「実は、僕のメイド服パンチラ写真の姿の写真が全世界にWEB配信されそうなんだ」

「……なにがあつた？」

「それだけだと意味が分からないよ。こっちが説明するよ」

僕が代わりに説明した

説明中

「そんなわけで、その写真を作った犯人を突き止めて欲しいんだ」

「何だ。お前も俺と同じような境遇か」

「……脅迫の被害者同士」

「こんな事で仲間ができてもな……」

そうやってそれぞれの説明を終えたところで、ガラガラと教室の扉が開く音が響いた。どうやら西村先生がやってきたみたいだ

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

そう告げると西村先生は手に大きな箱を抱えていた。きつと今言っていた強化合宿のしおりが入っているのだろう

「……とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近、仕入れた秘蔵の写真を十枚持つてくるよ」

「……………必ず調べ上げておく。」

報酬のおかげでムッツリーニの目がぎらついた。まあ、ムッツリーニも快く引き受けてくれたので、鉄人に睨まれないうちに素早く席に戻る。プール事件以降、明久と雄二は特に目をつけられているので、こういった時くらいは目立たないようにしないと何をされるかわかったもんじやないだろうね

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回されてきた

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

西村先生のドスのきいた声が響き渡る。確かに集合時間と場所を間違えたらシャレにならない学力強化が目的とはいえ皆で泊まり込みのイベントに参加できないなんて寂し過ぎる

パラパラと冊子を捲つて調べておく

今回向かうのは卯月高原という少し洒落た避暑地で、この街からは車だとだいたい4時間くらい、電車とバスの乗り継ぎで行くから5時間くらいかかるところだね

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからね」

そこまで差別化するかー。Aクラスはきつとりムジンバスとかで快適に向かうんだろなあ。そうなると僕らはやっぱり狭い通常のバスだろうか。いやもしかしたら教員と相席という可能性もありうる

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは現地集合だぞ」

『『『案内すらないのかよっ!?!』』』

あまりの扱いに全級友が涙した

時には犠牲もやむ得ない

電車に乗ってから大体2時間くらいで見慣れない景色になってきた。

「あと2時間くらいこのままですね」

姫路が携帯電話を閉じてあとどれくらいで目的地につくかを教えてもらった

僕は学校からの案内がないため、今電車に揺られ目的地に向かっている。2時間も揺られると自然と景色も様変わりしてきた

「2時間か。眠くもないし、何してようかな。」

「ん？のび太は何しているの？」

「漫画を読んでいる」

持って来たのがばれば確実に西村先生に没収されるだろうけどね。まあとられてもいいようにトランプやUNOも持ってきている

「・・・まあみんながいるのに読むのも無粋だね」

「ある意味のび太も怖いもの知らずだね。鉄人の恐怖は思い知らされたと思っただけ・・・」

「いや、もっと前から知ってるよ」

普段の明久との絡みを見て恐怖を感じないわけがないでしょ？あの人が無駄なくらい真面目なのはよく知っている。念のために今電車の席を图示すると

のび太 明久 通 雄二 康太

路

姫路 美波 ジャアイン 秀吉

という風になっている。そして康太ことムッツリーニは乗り物酔いのせいで隅でそっとしている

「あれ美波？何読んでいるの？」

島田が何かの本を読んでいることに気が付いた明久が声をかける
「ん、これ？これは心理テストの本。100円均一で売ってたから
買ってみたんだけど、意外と面白いの」

「へえ〜面白そうだね。美波、僕にその問題出してよ。」

僕は一応気にせず聞いている。

「うん。いいわよ」

美波はそう答え、適当にページを捲る

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい。
緑 オレンジ 青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる
？」

「えつとつて美波。そんな怖い顔で睨み付けられてると答えにくい
だけど」

明久の言うとおりで島田は質問をしながら明久に詰め寄っている。
心理テストなんだしそこまで真剣にすることもないような気がする
けど……？

「べ、別にそんなわけじゃ……！ いいから早く答えなさい！」

島田に迫られながらも明久は少し考え、次のように答えた

「……順番に『緑↓美波 オレンジ↓秀吉 青↓姫路さん』って感じ
かな」

ちなみに僕は『緑↓島田 オレンジ↓姫路 青↓三上さん』だった

ビリイッ！

島田の手元から凄惨な音がしました

「み、美波……？どうして本を真ん中から引き裂いているのですか？」

「どうしてウチが緑で瑞希が青なのか、説明してもらえない？」

「ど、どうしてと仰られましても……」

島田はなんか知らないけど怒りが周りににじみ出ている。何を聞
いているかわからんから意図を読み取れない

ちなみに僕がそう思ったのは、島田は目の色かなー。姫路は何となく皆の元気の源だと思ってオレンジ。三上さんは・・・自然と青だと思っただのだ

「怒らないから正直に言ってみて？」

「前に下着がライトグリーンだったから」

「のび太、窓開けて」

「捨てる気!? 僕を窓から捨てる気!？」

「島田。窓からゴミを捨てるもんじゃないよ」

「ジャイアン、美波を止めてくれてありがとう。でも、今サラツと僕をゴミ扱いしたよね？」

「いいのよ。ゴミじゃなくてクズだから」

「どうしよう。僕、ここまで酷い扱いを受けるのは久しぶりだよ」

「ここまでにしてあげなよ。このままだと明久がミジンコ以下になるよ」

「のび太も最近人としてどうかと思うことがあるよ……」

パンツの色で人を判断するお前もどうかと思うよ。そして突然、雄二が島田から本を奪いとる

「どれどれ？ 緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はーなるほどなあ」

「か、返しなさいよ！」

島田が雄二から本を奪い返す。はて、青は何だろう？

「せっかくだしもう一つ問題出してくれよ。俺たちも参加できるようにな」

「それもそうですが青はなんなのですか？」

ジャイアンの言葉に姫路も同意していたが、やはり気になるのか質問していた

「絶対に教えない……第2問目行くわよ。『一から十の数字で、今あなたが思い浮かべた数字順番に二つ挙げて下さい』だって。どう？」

「俺は5・6だな」

「僕は6・1」

「ワシは2・7じゃな」

「僕は1・4かな」

「俺は1・8かな?」

「私は3・9です」

上から雄二、僕、秀吉、明久、ジャイアン、姫路と答えたのだ

「『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ——」

島田が順番に指を差しながら

雄二↓「クールでシニカル」

のび太↓「公平で優しい人」

秀吉↓「落ち着いた常識人」

明久↓「死になさい」

ジャイアン↓「好奇心旺盛」

姫路↓「温厚で慎重」

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「僕って優しいかな?」

「俺って好奇心あるのか」

「温厚で慎重ですか」

「何で僕だけ罵倒されてるのさ!?!」

とそれぞれ感想いつていたのだ

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ——」

さつきと同じように島田が順番に指を差して

雄二↓「公平で優しい人」

のび太↓「好奇心旺盛」

秀吉↓「色香の強い人」

明久↓「惨たらしく死になさい」

ジャイアン↓「努力家」

姫路↓「意志の強い人」

「秀吉は色っぽいのか？」

「雄二は公平なの？結構理不尽だよ」

「・・・どういう意味だ？」

雄二が秀吉にそういうと僕も雄二の評価に疑問を言うと少し凄んで言ったのだ。だって・・・ねえ？

「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「のび太は好奇心があるのじゃな」

「そうみたいだな」

「剛田君は努力家ですか」

そんな感じでその後も何問か心理テストをやっていると、

「・・・(トントン)」

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

「・・・空腹で起きた」

「ん？もうそんな時間か？」

ムツツリーニに言われて携帯電話で時間を確認する。時刻は1時40分。いつの間にか昼は過ぎてしまってたようだ

「確かに良い頃合じゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうですね。あまり遅くなると夕飯が入らなくなりますしね」

「そんじゃあ適当に食うか」

「あ、それなら——」

そういうながら姫路が傍らに置いてある鞆から何かを取り出そうとする。何だろう？この嫌な予感・・・

「——実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら・・・」

「姫路。悪いが自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまつての。」

「・・・調達済み」

「すまない。俺様も持つてる」

「ごめんね？僕も持つてきたんだ」

みんな被害にあいたくないから必死になってアピールする。

明久は多分食費がないからなんm：

「実は僕もこうして惣菜パンを……」

「二!!二」

(ジッ!)

(……コク)

僕と雄二とムツリーニは無言のアイコンタクト取ったのだ

「あぁっと手が滑った。(ぼしっ)」

「さらに滑った!(ぼしっ)」

「……アタック!!(バシン!!)」

「あぁ!!僕のパンが!!」

明久のパンは3人の連携により、車窓から飛び出し、消えていった。

「……というわけで明久の飯がないから姫路、明久に全部あげてくれ」

「そうですね」

「だったら皆で弁当をわけない? 私のも食べてもらいたいんだけどなあ」

島田の一言で僕らは震える。『あれ』の被害はできれば避けたいのだが……

「そうだよ! せっかくみんなあるんだしちよつとずつ摘まもうよ」

明久の追い打ちでさらに加速する。このままじゃ……

「すまぬがわしは隣じゃから遠慮させてもらうのじゃ」

「悪いが俺も遠慮する。席で回してあげてやれよ?」

「……そういうわけで」

そういうとみんなはそそくさと席に戻っていった。このままだと僕と明久が被害にあってしまう。ジャイアンはトラウマらしいの見当たらないみたいだが……?」

「それじゃ俺m……」

「雄二も一緒に食べなよ。」

「じゃあ僕は彼らのところにいき……」

「のび太の席はここじゃないか?一緒に食べようじゃないか。ね。姫路さん」

僕と雄二も秀吉たちにあやかり逃げようとしたが明久に制止される

「え？そ、そうですね。それじゃあ」

そういいながら姫路さんはみんなに分ける前提かやや大きめの弁当箱を開ける。この前で結構トラウマなんだよ!?本当に軽く死を体験したあれをも一回やれというのは体以前に精神的に無理だよ!

「あ、アキ。まず私のを…」

「え？うん。それじゃあいただくよ。」

明久はとりあえず姫路から逃れるため適当にシューマイをほおばった

「あのね、その・・・勇気を出して言うけどね・・・そのシューマイなんだけど、実はアキに食べてもらおうと思ってね」

明久に食べてもらいたかったってことは相当気合い入れたんだなあ。見た感じ手作りっぽいし

「ん？なに？（もぐもぐ）」

「・・・二つに一つはからしだけを入れてみたの」

「君はバカかいっ!？」

すると、明久が苦しんでいた!これはチャンス!

「のび太、これはチャンスだ」

「オツケー」

僕が弁当を持って明久に向かって構えだした

「二人とも、足元に虫がいるぞ」

「きやあ!!」

二人は悲鳴を上げて足元に集中する。これでは僕らの様子には気づかない。

「くたばれ!!」

「ごはあ!!」

!?!?!とつさに姫路の弁当を奪い、明久にねじ込んだ

「?!?!」

明久は何度も抵抗するが時間がたち、どんどん入れることで抵抗が

弱まり最後はピクリとも動かなくなった

「よくやった……のび太」

「はあはあ……」

「あれ？アキはどうしたの？なんか顔色悪いみたいだけど」

「……一気に食べて疲れたんだろう。そつとしておいてあげなよ」

「そうですか。あれ？全部食べたのですか？」

「うん。明久が美味しく食べていたよ。ねっ？雄二？」

「ああ、ものすごい勢いだっただぞ」

「そうですかー、良かったですー」

うん……反省はするけど後悔はしない！明久よ。君の犠牲は無駄にしないよ。その後は持ってきたトランプで遊びながら目的地まで座っていた

亀裂

S i d e 明久

「明久、起きたか！良かった・・・電気ショックが効いた様だな。」

雄二は心底安心しきった顔で、アイロンみたいな道具をしまい始める。

「ところで雄二、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。全く贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

8人位寝れそうな広い部屋だが、この部屋にはいつものメンバー6人なのでより気楽に使える

「明久、無事じゃったか！よかった・・・お主がうわごとで前世の罪を懺悔し始めた時には正直もうダメじゃと・・・」

「あれは確かに焦った。」

秀吉が胸をなでおろし、雄二がそれに同意を示す。僕は死にかけている間に何があったんだ

「あれ、のび太とジャイアンは？」

「ジャイアンならお前を心配して飲み物を買に行ったぞい。のび太はトイレで席を外している」

「そうなんだ」

「まああの状態だったからな」

あれ？あの状態を作ったのは紛れもないのび太だったような・・・

「そうなんだ。でムッツリーニはどこに言ったの？覗き？盗撮？」

「友人に対してそんなセリフがサラツと出て来るのはどうかと思うのじゃが……」

ガチャツ

「・・・ただいま」

そこへ、ムッツリーニが戻ってきた

「・・・情報が手に入った」

「ムッツリーニ、お前も随分早いな」

「・・・昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

「へえつ、流石だな。それで、犯人はわかったのか？」

「……(フルフル)」

雄二が尋ねると、ムッツリーニは申し訳なきように首を振った。この様子だとまだ見つかって無い状態かな

「……すまない」

「気にするな。協力してくれるだけでも感謝している。」

「……犯人は女生徒で、お尻に火傷の痕がある」という事しかわからなかった。」

「お前は一体何を調べたんだ？」

「……校内に網を張った。」

「網？ 盗聴器でも仕掛けたのか？」

「……(コク)」

それから、ムッツリーニが用意した小型録音機が取り出され、そこに収められた会話が流れ始める。

「……らっしやい」

「雄二のプロポーズを、もう一つお願い」

「毎度。2度目だから安くするよ」

「……値段はどうでも良いから、早く」

「流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日……と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で」

「……わかった。我慢する」

「片方は、霧島で間違いないじやろうな。」

「だよ。口調からして女子なのはわかったね。」

「もう動いていたのかって事も驚きだが、強化合宿があつて助かった……」

ムッツリーニが機械を操作し、続いて録音機から声が。

「相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら、酷い目に遭うんじゃないですか？」

「ここだけの話、前に一度母親にバレてね」

「大丈夫だったんですか？」

「文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか」

〈それはまた……〉

〈おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対してひどいと思わないかい?〉

「成程ね、それで尻に火傷のあとか」

「……わかったのはこれだけ」

確かに、特定できる情報である事は間違いない……だが

「でも、有力でもないぞ?場所が場所だけに確かめようとしたら間違いなく犯罪だ。」

「だよね。スカートを捲くってまわったとしても、その上にパンツがあるし」

「……赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らない」

「おぬしらいったい何の会話をしているのじゃ?」

「あ、秀吉は事情を詳しく知らないんだっけ?」

「あ、じつはね。」

僕は秀吉に事情を説明した

「なるほどな。しかし尻にやけどの跡とは……」

「そうだ! もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえば良いじゃないか!」

「明久。何故にワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ?」

「それは無理だ明久」

雄二がしおりを放り投げ、明久に寄越した。

「どうして無理なのさ?」

「見てみる」

く 合宿所での入浴について く

- ・ 男子ABCクラス…20 : 00 く 21 : 00 大浴場 (男)
- ・ 男子DEFクラス…21 : 00 く 22 : 00 大浴場 (男)
- ・ 女子ABCクラス…20 : 00 く 21 : 00 大浴場 (女)
- ・ 女子DEFクラス…21 : 00 く 22 : 00 大浴場 (女)
- ・ Fクラス木下秀吉…22 : 00 く 23 : 00 大浴場 (男)

「クソツ！・・・コレじゃ秀吉に見て来て貰う事は出来ない。」
「そう言う事だ。」

「どうしてワシだけが扱いが違うのじゃ!？」

「どうしたものかと思うと・・・」

ドバン！

「全員手を後ろに組んで伏せなさい！」

僕たちが犯人を特定する方法を考えているとすごい勢いで扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきた

「な、何事じゃ!？」

「木下はこつちへ！そっちのバカ3人は抵抗をやめなさい！」

「逃げられると思わないで！外はもう包囲しているよ！」

先頭に立つ美波とEクラスの三上が、とっさに窓から脱出しようとした僕達の行き先を制した

「何故お主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ・・・?？」

「しかしなんだ。仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ?？」

雄二は観念したのかけだるそうに頭をかきながら座る

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。 貴方達が犯人だつてこれくらい、すぐわかるというのに」

そこへ出て来て高圧的に言い放ったのは・・・確かCクラスの代表だ。その後ろでは、大勢の女子たちも腕を組んでうんうんと頷いている

「確か、Cクラス代表の小山さんだっけ?どうしたの?」

「それより犯人って何の事だ?俺達は今さっきここに到着してからずっと部屋にいたが。」

「そんな嘘が通用するとも思ってるの!?!コレの事よ!」

小山が僕らの前に何かを突き付けて来た。

「・・・何これ?」

「・・・CCDカメラと小型集音マイク。」

ムツツリーニが答えた。

「女子風呂場に設置されていたの。」

ふむふむ。コレが女子風呂の脱衣所に――

「え!? それって盗撮じゃないか! 一体誰がそんなことを!?」
「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの?」

この台詞を聞いて、秀吉が小山さんの前に歩み出た

「違う! ワシらはそんな事をしておらん! 覗きや盗撮なんてそんな真似は——」

「そうだよ! 僕らはそんな事はしないよ!」

「……!! (コクコク)」

秀吉の反論に合わせて前に出た僕とムツツリー二を冷ややかに見る小山さん

「そんな真似は?」

「……否定………できん………っ!」

「ええっ!? 信頼足りなくない!」

僕とムツツリー二が同じ扱いだという事実になんて涙が出た

「………俺達はそんな事やっていない。それにこんな安物は使わない」

「まさか、本当に明久君達がこんなことをしていたなんて……」

殺気立つ女子の中から1人悲しそうな声をあげたのは姫路さんだった。そうやって言われると信頼を裏切ったみたいで辛い。でも、本当に身に覚えがないんだ!

「アキ………信じていたのに、どうしてこんな事を……」

「美波。信じていたなら拷問器具は用意してこないよね?」

ちなみに彼女から信頼のかけらも感じられない……

「姫路さん、違うんだ! 本当に僕らは——」

「もう怒りました! よりにもよってお夕飯を欲張って食べちゃった時に覗きをしようなんて! い、いつもはもう少しそのスリムなんですからねっ!」

「う、ウチだっていつももう少し胸が大きいんだからね!」

「それはウソ」

「みんな………やっておしまい!」

しまった。つい本音が!! ここは雄二に……

「し、翔子、俺を信じてくれ！俺はやっていない！」

「………浮気は許さない」

「がああああ!!」

「さて。真実を認めるまでたつぷりと可愛がつてあげるからね?」

美波のS気質が全開だ。このままでは……

「あのね。僕、今まで美波ほどの巨乳をみたことがぎやあああつ！」

「まずは一枚目ね」

「明久君。まさか、美波ちゃんの胸、見たんですか……?」

「あははっ。やだなあ。優しい姫路さんはそんな重そうな物を僕の膝の上に乗せたりなんてふぬおおっ!!」

「質問にはきちんと答えてくださいね?」

最近、姫路さんの笑顔は綺麗なだけじゃなくなってきた。

ダメだ……誰か……助けてください

「オーイ戻ってきたぞ……ってなんだ?この状況は?」

「どうしたの?ジャイアン……ってなにこの状況?」

部屋に入ったジャイアンとのび太は今の状況を見て一瞬動きが止まった

「来たわね。あんたらもFクラスで容疑者だし拘束させてもらうわ」

「………はい?」

小山さんがそう指示すると二人は固まっていたがすぐに切り替えたのだ

「少し待て?俺やのび太が容疑者だったのはどういうことだ?」

「そうだよ?三上さん説明してくれない?」

小山さんがなにか言う前に三上さんが説明したのだ

——説明中——

「というわけなの。悪いけど、二人とも拘束一応させてもらうね？」
「ちよつと待って？三上さんたちはきちんと彼らの言葉も聞いたの？」

「いいえ。しかし、この盗撮はどう考えても、彼らの可能性しかありません」

「だから、おかしいと思わない？何で明久たちがそうなるのさ？」

「三上さんの言う通りだわ。どう考えてもこいつらしいもの」

小山さんの言葉に後ろの女子は頷いていた

「島田たちも・・・そう思ってるのか？」

さつきまで黙って聞いていたジャイアンが姫路さんと美波にも聞いたのだ

「そうよ！こいつらしいんだから！」

「・・・雄二は浮気した」

「だから、お仕置きの邪魔しないでください!!」

他の女子も同意していた。三上さんも頷いていた。このままでは・・・

すると・・・

バゴン!!!

「「「「「「「「「」」」」」」」」」

さつきまで騒いでいた女子皆が黙ったのだ。それもそうだろう・・・なにせのび太が思い切り近くの扉を叩いて黙らせたのだから。ジャイアンもいつになく目付き鋭く周りを見ていて皆大人しくなったのだ

「少し黙ってくれない・・・？あのさ？さつきから黙って聞けばさ、どうして明久たちが犯人だと思うの？それがお仕置きして良い理由になるの？納得いく理由説明してくれない？」

「「「「「「「「「」」」」」」」」

のび太が彼処までキレるなんて・・・ジャイアンは黙って聞いているけど・・・

「黙ってないで答えろ!!!」

「!!!(ビクッ!!!)!!!」

「……三上さんも黙ってないで答えてくれない……?」

「……」

のび太の問いに三上さんは黙っていた……

ブチッ!

何かがキレた音がした

「本当に……いい加減にしろ!!!そんな理由でしてる時点で駄目でしょ

!姫路!島田!

「は……はい!」

「誰がああとき身を呈して二人を助けてくれた!」

「……」

「信じてたのに……?信じていたら人の話聞くのが普通でしょ!?!聞かないでお仕置きしてる……何が信じてたのに、だ!そんな台詞言うぐらいならお仕置きするな!」

「……っ!」

言われた二人は顔を下に向いたのだ。すると。次に霧島さんにも向けていったのだ

「雄二が覗いた証拠あるの?」

「……雄二が、浮気したから」

「それと覗き繋がるのおかしいと思わないの?妻だって言うなら、信じるのが普通でしょ!結局、雄二のこと信じてないでしょ!」

「違っ……」

「違わない!それをしてる時点で否定しても無意味!何が妻だ?!信頼してない時点でそんなのおかしい!」

「……」

霧島さんも言われて顔を下に向いたのだ。そして……

「三上さん……そんなに僕らを信頼してないならもう……話しかけないで……」

「っ!」

「じゃあね……」

のび太は部屋から出ていったのだ・・・三上さんは言われたのがショックだったのか呆然としていたが、ゆつくりと外に出ていったのだ

「お前ら出ていけ・・・」

「なっ!?まだ・・・!」

さつきまで黙っていたジャイアンが女子全員そうだったのだが、小山さんが言おうとすると

「俺は二度も同じことを言いたくない・・・出ていけ!!!」

「!!!」

ジャイアンの怒声に女子は大慌てで出ていったのだ。美波と姫路さんと霧島さんはまだなにか言おうとしたら、ジャイアンが肩を掴んで無理やり外に追い出したのだ

「出ていけといたはずだ・・・」

「待っ・・・」

ボタン!!!

姫路さんたちがなにか言おうとする前に、ジャイアンは扉強く閉めて鍵を閉めたのだ

部屋に残ったのは、僕らとジャイアンだけだった・・・

のび太 side

やってしまった・・・。いくら頭にきていたとはいえ、女子に怒ってしまった・・・。三上さんの辛そうな顔していたの見て胸が痛かったが・・・それでも・・・

「明久たちが困っていたら助ける方がいい・・・。たとえば、皆に嫌われなくても・・・」

僕は右の拳から出ている血を洗い流していたのだ・・・物に強く殴ったのは反省だな・・・

「君ならどうしていた・・・?ドラえもん・・・」

遠くにいつてしまった親友を思い出して呟いた・・・

時には反省

明久 side

静かになった部屋で僕らはやっと解放された体にストレッチして
いていたらジャイアンがいきなり頭を下げてきたのだ

「ど、どうしたのじゃ!?!いきなり頭を下げて!?!」

「そ、そうだよ!?!いきなりどうしたのさ!?!」

「済まなかった．．．もっと早く戻っていればお前らはそこまでの被害
受けなかったのに」

「お、おい!?!剛田!?!頭あげろよ!?!」

僕らが慌てているが、ジャイアンは頭を下げてまんまだったが一回
顔あげたのだ

「それと．．．のび太を悪く思わないでくれ．．．あいつがキレるの
は滅多にないんだが今回は切れてしまって彼処まで酷いことをいっ
てしまっただけなんだ!」

だから、あいつを許してやってくれ!とジャイアンは再び頭を下げ
たのだ。なんだそんなことか．．．

「ジャイアン、それぐらい僕らはわかってるよ。ねっ?雄二?」

「ああ。確かに言い過ぎな部分はあったが、俺らはそんなので怒らな
いさ」

「そうじゃな」

「．．．(コクコク)」

すると、ジャイアンが「ありがとう．．．!」っと小さくそれでも
力強くはつきりと言ったのだ

「しかし、災難じやのう」

「うん。何だか何時もより生命の危険があつたよ．．．」

「酷い濡れ衣じやったのう．．．。なぜだかワシは被害者扱いじやつた
のも解せぬが」

「ホント、酷い誤解だったよ」

「．．．見つかるとかのようなへまはしないのに」

ムツリーニー．．．ギリギリその発言アウトだよ

そういえば、雄二はさつきからなにか考えて目をつぶっているがどうしたのだろうか？少し目を開けると・・・雄二は何かを決心したようにその場に立ち上がった

「・・・上等じゃねえか」

少し怒りを孕んだ低い声が響く

「お・・・おい？まさかだと思うが・・・坂本？」

「そのまさかだ・・・ここまで手酷くされたんだ・・・本当にしてやる!!」

「雄二。そんなに霧島の裸が見たいのなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」

「ば・・・馬鹿言うな！誰があいつの裸なんて見たいと言った!」

もしかって・・・犯人を探すため？と僕が言うと雄二が頷いていた「そうだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思って遠慮していたが・・・向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか」

「・・・さつきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「なんじゃと？それは本当かの、ムツツリーニ？」

「・・・間違いない」

秀吉の問いにムツツリーニは力強く頷いていた。どう言うことだろう？

「そうか。それは嬉しい事実だな」

「そうじゃな」

「・・・(コクリ)」

三人が頷き合っているが。やっぱりわからない。するとジャイアンが教えてくれた

「雄二と明久を脅してる犯人はおなじで、覗き犯のカメラとマイクがその犯人と同じだったんだ。ということは、同じ犯人の手によるものだということだから・・・？」

はっ！わかった!!

「火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ」

すると、ジャイアンは頷いたのだ。よかった！間違えていなかった

!!

「よし！疑う余地はないな！」

「うん。それにしても・・・何でこんなにやる気だしてるの？霧島さん関係に雄二がすぐく気合い入ってるのはなぜ？」

すると、雄二は儂い顔になっていたのだ

「ふっ・実はこの前、いつものように翔子にクスリをかがされて気を失ったんだが」

「ごめん・・・その前置きから色々と分かりにくい」

「目が覚めたらヤツの家に拉致されていたんだ」

「で、そこで霧島の両親と挨拶をしたの？」

「いや、そうじゃない。ただ、ヤツの家に――」

まさか、両親だけじゃなくて祖父母もいたのかな？

「俺の部屋が用意されていたんだ」

そろそろ雄二も潮時だね

「あんな台詞を聞かれたら、間違いなく俺は、俺の未来は・・・！」

最近では雄二の壊れた姿も見慣れてきたな。

「そ、そうとなれば、すぐにでも向かわねば風呂の時間が終わってしま
うぞー！」

「・・・(コクコク)」

え？二人も協力してくれるの？

「うむ！友人の危機なのじゃ！当然手助けする」

「・・・(コクコク)」

良かった！これで向かうメンバーは・・・

「悪いが今は俺は無理だ。当然のび太もだ」

え!?何で!?

「女子の前で一回男がきついことを言ったんだ。俺は戒めの意味も込
めてここでのび太と共に待つ」

「・・・わかった」

え?雄二!?

「時間がないからいくぞ!!」

OK!確かに時間がないから走ろう!!

僕らはジャイアンを置いて向かったが……

結果は惨敗……

ジャイアン side

明久たちが行ったのを見届けた俺は……のび太を待っていたのだ。
あいつが女子にキレるのは本当に珍しい……

コンコン♪

ガチャ

「あれ？明久たちは？」

「覗きにいった」

「……なんてこった……」

頭を抱え込むのび太をみて、俺はさすがに同情した。しかし……
「お前が怒るのは本当に珍しい……だけど、今自己嫌悪だろ？女子
に怒ってしまったのが、情けないと思ってるだろ？」

「よくわかったね……」

「何年の付き合いだと思ってるやがる。これぐらい親友ならわかるさ。
時間があれば謝ればいいだろ？」

「そうだね……うん。そうする」

「よし！あいつらを待とうぜ」

「うん！」

俺達は、明久らが戻るまで起きるつもりだったが眠たくなったので
寝た

あいつら大丈夫かな……？

怒らせていけない奴は身近にいる

明久 side

「雄二・・・一緒に勉強できて嬉しい」

「待て、翔子。当然のよう俺の隣で座って勉強するな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「っちー運のいいやつめ!・・・ああ説明しないと」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同学習となってる。学習内容は基本的に自由。質問があれば周囲や教師に聞いてもOK。要するに自習。その為、机の並びも生徒同士が向かい合うような形になっている。

「でも、何故自習なんだろう? 授業はやらないのかな?」

「授業? そんなもんやるわけないだろ」

明久の会話を聞き付けて、雄二が霧島さんを置いて僕の隣にやって来た

「やらない? どうして?」

「明久、お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか?」

「失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ」

「それはどちらも理解してないじゃないか?」

「うっ・・・それを言われると・・・」

「・・・合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

雄二を追って、霧島さんもやってきた。ポジションはきっちり雄二君の隣だ。

モチベーションの向上?

「翔子、それだけじゃコイツにはわからんだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういうったメンタル面の強化を目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

霧島さんの言葉の続きを雄二が説明してくれる。やっぱり息も

会ってるし、この二人はお似合いだと思う……。僕がそんなことを考えていると……

「代表？私もここで勉強して良い？」

「あれ？確か……。工藤さんだつて？」

前のクラスでの戦争やプールでも会ったけど、そんなに話していなかったな

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

ニツと歯を見せて笑う工藤さん。ボーイッシュな雰囲気と相まって、その仕草はとても爽やかに見える。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよー」

え、特技聞いてドキドキして止まらないいい！

「あれ？どうしたのかな？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、その……」

「あつ、さては疑ってるね？なら、ここで披露してあげようか？」

本当に!?

近くでは雄二が霧島さんに目隠しされていた。あれ？何時もだつたらもつと違う方法でやっていたのに？

「……。明久。工藤愛子に騙されないように」

「あれ？ムツツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

「……。やつはスパッツ穿いている……。!!」

え!?

「ええ!?!そんな!?!工藤さん、僕を騙したね!?!」

「あはは。バレちゃった。さすがはムツツリーニ君だね。まあ、特技ってわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな？」

笑いながら工藤さんが取り出したのは小さな機械だった。なにこれ?!

「……小型録音機」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば——」

すると、工藤さんがなにか操作していた。何するんだろう？

——ピツ《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしているんだ》《やらない?》

「うわああああ!僕はこんなこと言ってないよ!?変なものを再生しないですよー!」

「ねっ?面白いでしょ?」

「ええ。最つつ高に面白いわ」

「……本当に、面白い台詞ですね」

「瑞希。ちよつとアレを取りに行くの手伝ってもらえる?」

「わかりました。アレですね?喜んでお手伝いします」

二人が学習室に出ていこうとすると……

「おーい、島田と姫路」

「!?」

ジャイアンが二人を呼び止めたのだ。どうしたのだろうか?

「(録音機でいちいち腹立てるな。あいつがまたキレたら昨日よりも怖いぞ?)」

「!」

「(お前らは小学生じゃないんだから落ち着け。だけど、あいつが流石にとんでもない発言したら止めないけど……今は抑えろ)」

「そ……そうね!瑞希、勉強しましょう!」

「そ、そうですね!美波ちゃん!剛田君、教えていただいてありがとうございますー!」

「おう!」

二人はジャイアンに何か言われて席に戻ったのだ

あれ?そういえば、ジャイアンが昨日無理矢理外に追い出したの忘れてるのかな?でも、何か焦った声で動いていたけど……?

「おい、工藤。それは合成できるやつなのか?」

「うん。そうだよ!」

「(雄二、どうしたの?)」

「(今の手際を見ただろう。もしかすると、工藤が例の犯人かもしれないと思っただろ)」

「そうか、雄二はプロポーズを録音されていたんだっけ。さっきの行動を見る限り、彼女はこういったことに慣れてるようだ。有力な犯人候補と言えるだろう」

「(よし。明久、ヤツが犯人か確かめてくれ)」

「(うん。了解)」

工藤さんを正面に見据えて、

「工藤さん。君が……」

と、途中まで口にしてふと思う。『君が脅迫状を出した犯人なの?』と聞いてバカ正直に答えてくれる人はいるだろうか?。もしも工藤さんが犯人だとしたら、逆に警戒されてしまうだけだろう。それでは何の意味もない。

危ない危ない。これは質問の仕方を変えないと!。
なら……

のび太 side

僕とジャイアンは今皆と距離とって勉強している……何せ、昨日女子に怒ったから、昨日の今日で謝るのは何か嫌だなって思っただけとってると

ん? 明久が工藤さんと何か話してるな? どうしたんだろ?

「ん? なに、吉井君?」

「あく、えくと、その、君が——」

何を聞こうとしてるのだろうか? ジャイアンも不思議そうに見ていた

「ボクが?」

「キミが——僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ!」

変態だ!!! 僕の友人が変態になっちゃった!!

「……ぷつ。あははは。吉井君はお尻が好きなの? それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな?」

明久のセクハラ発言を笑って流すなんて、器が大きい

「ご、誤解だよ！別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて！」

「流石だな明久。録音機を目の前にそこまで言うとは」

「へ？」

すると工藤さんが謝りながら、録音機を操作した。

ピ、と電子音を上げて再生される明久の声

《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》

・・・フォローできない・・・

「吉井君って、からかい甲斐があつて面白いなあ。ついつい苛めたくなっちゃうよ」

あれ？何かSスイッチみたいなのが入ったのかな？

明久が何か謝ってるが、片隅で姫路と島田がノロノロと動こうとしていたので、やりすぎのお仕置きは目をつぶらないが・・・

「ジャイアン、これを渡して？姫路と島田に」

「ハリゾン？」

「ハリセンだよ。これを二人に渡してあげて？ただし、一撃だけ許可ってね」

「いいのか？止めなくって」

「さっきのはフォローできないよ？」

「・・・それもそうだな」

ジャイアンは納得して、ハリセンを持っていつてくれた・・・悪いけど、僕から女子に頭下げに行くことは今はない・・・

「ただ、三上さんには言い過ぎたかもしれない・・・彼女に謝りたいけど・・・ダメダメ！とにかく勉強しないと！」

明久 side

今僕は生命の危機です・・・石畳が目のあることに恐怖です・・・あのあと、ムツリーニーがフォローしてくれると思つたらとんでもない事になった・・・

「アキ・・・。そんなに坂本のお尻がいいの・・・？ウチじゃダメなの・・・？」

「前からわかってたことですけど、そうはつきり言われるとショックです……」

「2人ともどうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの!?僕にそんな趣味は——」

言い切る前に学習室のドアが開き、見覚えのある女の子がつかつかと教室の中に入ってきた。そしてを険しい目付きで睥睨して、声高に告げる

「同性愛者をバカにしないで下さいっ!」

あ、思い出した。清水さんだ

「み、美春?なんでここに?」

「お姉さまっ!美春はお姉さまに逢いたくて、Dクラスをこっそり抜け出してきちやいましたっ」

ドリルのようにロールした髪を左右に垂らしている清水さんは美波の姿を見るなり勢いよく飛びつく。熱烈抱擁の構えだ

「須川バリアー!!」

「け、汚らわしいです!腐った豚にも劣る抱き心地ですっ!」

盾にされた拳句口汚く罵倒された須川君は涙を堪えて上を向いていた

「お姉さまは酷いです……。美春はこんなにもお姉さまを愛しているというのに、こんな豚野郎をませるなんてあんまりです……。」

端から見たら凄い告白だ……
すると……

「おい、うるさいぞ?」

あれ?ジャイアン?どうしたの?

「少しうるさいからな。俺らはいいけど、周りは勉強しているからな?」

「あつ、そうだった……。ん?ジャイアン、その手元にもってるのはハリセン?」

「ん?ああ、島田と姫路に、一撃だけ明久に頭叩くの見逃すってさ。それ以降は静かに勉強しようだっさ」

誰がいったのか察したよ……

「君たち、少し静かにしてくれないかな？」

凜とした声が響き渡った。眼鏡を押し上げるクールな声の主は学年次席である久保利光のものだった

「あつ、ごめん」

「吉井君か。Fクラスは危険人物が多くて困る。それと、同性愛者を馬鹿にする発言はどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的思考が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人たちなのだから」

「え？あ、うん。そうだね」

「ほら美春。くだらないことで騒いでないで自分の学習室に戻りなさい」

「くだらなくなんかありません！美春はお姉さまを愛しているんです！性別なんて関係ありません！お姉さま、美春はお姉さまのことが本当に——」

「はいはい。ウチにその趣味はないからね？」

美波が追い出そうとすると、清水さんが抵抗していたのだ。すると、清水さんの足に美波の筆箱が直撃して飛んだのだ。

すると……

ゴツ

あつ……

当たったのはのび太だ。しかも後頭部に辺り机にひれ伏していた……

すると、ゆっくりと立ち上がったのだ

「……」

何故だろう……ゆっくりと歩いているだけなのに……のび太が怖く見えるのは何故だろう？美波と姫路さんが抱き合いながら震えていたし、霧島さんも若干震えていた。あつ、これ怒ってるパターンだ

「ねえ？」

「「「「（ビクッ！）」」」」」

「この筆箱……頭に当たったけど……誰がやったのかな？」

すると、僕らは清水さんに指差したのだ。紛れもなく、清水さんが暴れたから……

「そっか……清水さん？少し外出ようか？」

「何故で私が豚の言うこと聞かないといけないのですか!？」

「外……出ようか？」

今ののび太は笑っているけど……目が笑ってない……!？」

「は……はい」

ようやく、清水さんものび太が怒ってるの気づいたが……もう遅い。引きずられながら、外につれていれて……

『イヤアアアアア!!』

「「「「(ガタガタ)「「「「」

清水さんの悲鳴を聞き、昨日怒られていた女子全員が震えていた……あの清水さんが……悲鳴をあげた?!

「ふう……さっ?勉強しようか？」

「「「「は……はい「「「」

この場にいた全員が改めて再確認したのだ。穏やかなのび太を怒らせるなっとな……

謝罪

そんなこんなで勉強時間と夕食時間が終わり、明久たちは第二回、女子風呂突入作戦の話し合いをしていた

「今のところ怪しいのは・・・工藤さんが怪しいかな？」

「いや、確かに怪しいが・・・あそこまで、見せるか？」

「・・・どちらにしても、候補としては拳がってる。他にもいるかもしれないが」

「どちらにしても・・・このままでは昨日の二の舞になってしまうので仲間を増やすことにした」

ん？仲間を増やす？？どういう事？そんな疑問が出ていると？

コンコン♪

誰か来た？

「なんだ？坂本？俺らを呼んで？」

須川を先頭にFクラスの全男子がぞろぞろと入ってきた

「よく来てくれた。実はみんなに提案がある」

部屋に入りきらず、廊下にいるメンバーにも聞こえるように、雄二はよく通る声で告げた。因みに僕とジャイアンは隅っこで聞いてた

『提案？』

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえなく』

全員がダルそうにしている。今日一日勉強漬けで疲れているのだろう

そうやってぎわめく皆を見ても雄二は焦って話を切り出すような真似はせず、静かになるのを待ってから続きを口にした

「――皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『詳しく聞かせろ』』

僕はこのクラスが嫌いになりそうです・・・

「昨夜、のび太と剛田を除く俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せしていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで？』

何故誰も雄二の台詞にツツコミを入れないんだ？

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷（アガルタ）の光景だ。どうだ？」

『『乗った！』』』

やつぱり嫌いになりそうです！

「……現在の時刻は20時10分。時間はまだ間に合う」

「よし!!今から隊を四つに分けるぞ! A班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニにそれぞれ従ってくれ!」

『『了解っ!』』』

「いいか、俺たちの目的は一つ!理想郷（アガルタ）への到達だ!途中に何があるうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め!神魔必滅・見敵必殺!ここが我らが行く末の分水嶺と思え!」

『『おおおっっ!』』』

「全員気合を入れろ! Fクラス、出陣るぞ!」

『『おっしやあぁーっ!』』』

叫び声と共に雄二達は出ていったのだ……残されたのは僕とジャイアンの二人……

うん……

「やつぱり、Fクラスはバカなの否定できなくなった……」

悲しい気持ち一杯です……

コンコン♪

「ん?誰だろ?」

「さあな?俺が出るぞ」

「うん。お願い」

ジャイアンがドアを開けると、驚いていたのだ。どうしたのだろうか? ジャイアンは少し悩んでから、来客を部屋にいれたのだ。誰だろうか?

そう思っていると……

「……」

「……え？」

目の前に三上さんが来ていたのだ……

ジャイアンは部屋でて行き、二人しかいないが……

「……(き、気まずい)」

何を話したらいいのか悩んでいたのだ。だって、昨日あんなことをいったのに今更謝るのは……すごく難しい……

「あ……あの!!」

ハモってしまった……

「そちらからどうぞ……」

「いや、そちらからどうぞ」

「……なら私から言うわ……ごめんなさい」

え……? どうしていきなり?

僕が顔出していたのか、三上さんが苦笑して説明したのだ

「昨日のあなたに言われたとき……すごくショックだったの……初めて、もう話しかけないで? って言われたわ」

「うっ……」

「あっ、ごめんなさい。勘違いしないでほしいのは、責めている訳じゃないの……。むしろ気づかされたわ」

「……どういう事?」

「あのあと、考えたの。のび太君の言う通りに吉井君達が嘘をいってると思えなかったの……でも、現在進行形で覗こうとしているでしょ?」

「……」

それを言われたら、のび太も頭を抱えたのだ。それを見た三上が少しクスツと笑いながらも直ぐに切り替えたのだ

「でも、これだけは言いたい……。のび太君……ごめんなさい! 許してくれると思えないけど……私は……」

「三上さん……」

「私は……! あなたに嫌われるのがすごくショックだったの……!ごめんなさい……!ごめんなさい……!ごめんなさい……!」

ただひたすらに泣きながらのび太に謝る三上へのび太は……
ギョッ

「三上さんが謝ることないよ……」
「え……?」

のび太は強く三上を抱き締めたのだ。抱き締められた三上は戸惑っていた

「僕も言い過ぎたよ……ごめんね?三上さん」
僕がそういうと三上さんは……

「の……のび太君……う……う……うあああん!!!」
ひたすら泣きながら、のび太に強くすがりつく三上へのび太は優しく背中にトントンとしながら、「大丈夫……大丈夫だからね?」と優しく抱き締めていたのだ

部屋の外では……

「良かったな……のび太と三上……」

部屋のドアにもたれながら笑っていたのだ

「しかし……入りにくいな」

部屋のなかでは抱き締めてるのを見てどのタイミングで入ろうか悩んでいたのだ

「俺たちの親友のあいつがないなら……俺があいつを助けたらならないな」

ジャイアンは昔の友人を思い出しながら、これからののび太をサポートしようと決めつつ、三上さんとの仲も戻って良かったと思った

因みに明久達は、今回もボロボロになってるのは三人は知らない……

仲直りのあとは・・・

あの後三上さんは泣き止み、ジャイアンもタイミング見ていたのか部屋に入ってきたのだ。もしかって・・・見られた？

「みていたの？」

「いや、見てない」

「あつ、剛田君もごめんなさい」

「俺はなんもされてないから、いいぞ？それよりも話さないと駄目なことがある」

あつ、そうだ。話さないといけないの忘れていた。三上さんは不思議そうな顔になり、どうしたの？と首を傾げていた。可愛い・・・つて違う！説明しないと

「実はね、三上さん。明久と雄二が脅迫されていたんだ」

「・・・ええ!？」

「まっ、それが普通の反応だな」

確かに・・・Fクラスに染まりすぎたのか、この反応が正常で良かったと思う僕らもどうかと思うけど・・・

「そ、それ大丈夫なの!?!命の危険はないでしょうね？」

「落ち着いて？勿論、命の危険はないから。脅迫内容はまた別だけど・・・」

「何なの？」

「まっ、要するに雄二は自分の人生に関わるらしい。明久は・・・本人の名誉のために詳しくは言わないけど、ある意味悲しい脅迫の方法だね・・・」

「・・・」

三上さんは呆然としていた。確かにFクラスのは知らなくて当然だけど・・・

「そこで、坂本達が調査していた矢先に疑われてしまったって訳だ」

「なるほどね・・・」

「雄二達は恐らく、女子風呂に隠しカメラがあるから自分の脅迫した犯人も関与してると思って動いてる」

「だからと言って何故、覗くって発想に……」

三上さんは頭抱えていた。確かにそうだね……

「さてと、僕らは今度はいつらに協力して行動しようかな？ っ考えるの」

「流石にほっておけないからな」

僕らがそういうと、三上さんはなにか考えていた。三上さん？

「ねえ？ 私も協力していいかな？」

「え?! でも、三上さん……」

「ううん。私は女子だから、着替えるとき探せれるよ？ 裏で動いたらいいかな？ っって思ってるの」

「なるほど……なら、僕は裏で動く方がいいかもね」

「そうだな。最悪の事も想定して、最終日迄は大人しくしとこうぜ。その代わり裏で動こう」

「でも、のび太君……霧島さん達に話さなくっていいの？」

「覗くって事実さはさつきできてしまったからね……でも、彼女達に今回の事は話しとかないと」

「その方が俺はいいと思う。何せ、事情が事情だしな」

僕は三上さんの言葉に、確かに謝っておきたいと思ったのだ。だけど、きつかけが……

「それなら、私に任せてくれない？ 美波と瑞希は私からよぶし、霧島さんもよぶよ……」

「うーん、明日の午後に話したいかな？」

「？ 何で今日じゃないの？」

三上さんは気になって質問したのだ。勿論これには訳がある

「明日の調査で少しでも解れば良いけど、今は昨日あれだけ怒ったのだから、今日は大人しくするつもりだよ」

僕がそういうも三上さんはクスクスと笑っていたのだ。何となく気づかれたかもしれないけど……

「わかったわ。なら、今日は帰るわね？」

「うん。明日は一緒に勉強しようね？」

「そうだな。約束だしな」

「そうね！また明日」

僕らの言葉に三上さんは嬉しそうに笑いながら、部屋を出ていったのだ。良かった・・・仲直りできて・・・

「良かったな！のび太！」

「うん！ジャイアンもありがとうね！」

「おう！それよりもあいつら遅いな？」

確かに・・・遅いね・・・そう思っていると

《――放送連絡です。Fクラスの吉井明久君。至急臨時指導室に来るように》

・・・負けたんだね？そして、思い切り特定されてる・・・

「はあ・・・」

僕らは頭を抱えつつも、密かな仲間が手に入ったのは大きいと思っただのだ

人の暴走は恐ろしい

合宿三日目……

「眠たい……」

「ふああ……同感だ。あいつらを待つもんじやねえな」

僕とジャイアンは目が覚めて、周りを見ると目を疑う光景があったのだ……

僕らは起こさないように声を小さくして喋った

「(おい……どういう光景だ?これは)」

「(分からないよ……だけど……)」

「(何で明久の寝ているところに雄二がいるんだ?!)」

「(……あいつたぶん、怒るぞ?)」

「(多分、明久のことだから、秀吉だと思ったら雄二だと言う目の前にあいつキレるよね?)」

すると、明久が目を覚まして目をあけると、目の前に雄二がいるの気づき……

「返せ!!僕の儂い希望を返せ!!」

「やっぱりいい!!」

「あつのび太達おはよう。とにかく雄二、起きろコラア!」

予想通りの反応に僕が声あげると、明久が一回挨拶してその後雄二を攻撃し始めた……やめなよ……

明久の布団から雄二が蹴り出された。

うわっ、絶対に痛い奴だよ……

「んむ?なんじゃ?雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか?」

「秀吉、またってどういうことだ?」

ジャイアンのいうとおりだ。どう言うことだろ?

「いや、別に大したことではないのじゃが……雄二は大層寝相が悪いようでのう。明け方はワシの布団に入ってきておつて——やめるのじゃ明久!花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ!」

「殴る!コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける!」

「やめなよ！って、嘘お!!」

「殺人未遂起こす気か!?このバカ!って、力強い!?俺が押さえきれない!?」

僕らが必死で押さええてるが、明久後からが予想以上に強くこのままでは大変だ!

「おいお前ら!起床時間だ——ぞ・・・?」

「死ぬ雄二!死んで詫びるんだ!あるいは法廷に出頭するんだ!」

「なんだ!?朝からいきなり明久がキまつているぞ!?持病か!」

「ええい落ち着くのじゃ明久!西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい!」

「・・・!(コクコク)」

「・・・お前らは朝から何をやっているんだ」

明久の暴走ですよ!!見たらわかりませんか!!?って、本当に力強い!!どこにそんな力が・・・!!?

僕らは今、朝御飯を食べていたのだ。あのあと鉄人のげんこつで明久は収まったけど・・・目の前の明久はタンコブが凄い・・・あれ?なんか昔自分も経験があったような・・・

「雄二。そういえば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん?なんだ?」

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つかったくないカメラが一台残っている』って言われたよ」

「・・・なんだと?」

忙しなく動いていた雄二の箸の動きが止まる

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな?」

「いや、それはない。普通はわざわざ教えるか?」

「それに、犯人ならメリットがないだろ?なぜわざわざ、教えるんだ?」

僕とジャイアンがそういうと、明久は考えていた。どうせ、彼の頭の中には覗くしかないだろうね・・・

「だが、工藤の情報はありがたいぞ？普通なら、そんな情報入らないからな」

「ああ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

ジャイアンが言うと、

「……隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

流石、ムツリーニー……経験者は語るってやつか……

「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ？」

「いや。そもそも最初にカメラが脱衣所に見つかった方がおかしいんだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなるよ——」

「……二段構え」

周到な計画で行動してるね……

「しかし、昨日Aクラスにも邪魔されたから、慎重に策を練らないとな……のび太達は今日参加しないのか？」

「うん。参加しないよ？」

「即答だね?! 少しでも協力してくれていいじゃない!」

「今まだ動けないからね。今は」

「今は……か。わかった」

僕の言葉に雄二は何か気づいたのか文句言わず理解してくれた

「そんなことよりも、朝御飯早く食べとかないと、ばれるぞ」

「それもそうだな。よし! 剛田! どっちがよく食べるか勝負しないか?」

「おお! いいぞ!」

二人は生き生きと大量のご飯を取りに行ったのだ。尚、明久は久しぶりの豪華な(本人にとつて)食事でたくさん食べていたことを伝えよう……

あのあと、僕とジャイアンは三上さんと呼んで三人で勉強していたのだ。勿論、Fクラスが何か行動起こそうとすると……

「……………(ボキボキ)」

「……………(ピクツピクツ)」

「ジャイアンが全部返り討ちしていたのだ……。嫉妬は醜いよ……す、凄いな……」

「あ、あはははは……ジャイアンだからね……」

三上さんの問いに苦笑いしかないよ……。これがFクラスだからね……

すると、はしつこのほうで明久達何か話してるが僕らは今は関係ないのだから勉強に集中していたが、島田が明久達に何か話していた。何を話してるのかな?と思うと雄二から連絡が来たのだ

雄二: 気をそらすために利用さしてもらおうぞ?

……大体わかったけど、何を使うんだろ?
すると……

『島田。そんなに血相を変えてどうした?』

『西村先生。ちよつとのび太に用事があるんです。スグに終わりますから』

『そうか。だが、その剣幕だとお前が野比を血の海に沈めないかと心配なんだが』

……あいつらー!!!何を言ったの!?!

三上さんは何かを思い付いたのか、少し席をはずして、姫路を呼んだのだ。どう言うこと?

「のび太? 大事な話って何?」

「のび太君? 何ですか? 大事な話って」

……どうしよう? とりあえず、座ってもらおうかな? いや……その前に

「大事な話ってのは……この間は怒ってゴメン!!」

僕は土下座の体勢に入って謝ったのだ。だって……きついことを言っただよ? 反省しないと……

罵倒される覚悟で土下座していると……

「あ、あの・・・大丈夫ですよ？のび太君の言う通り、あのときはきちんと話を聞くべきでしたので、こちらの方こそごめんなさい」

「そうね。むしろ謝るなら私たちの方だね。ごめんなさい」

「・・・許してくれるの・・・？あんな酷いことを言ったのに・・・」
「許すも何も、のび太の方が言い分合ってるわ。あのあと、霧島さんと三人で話して反省したの」

「ありがとう・・・！」

僕が感謝の気持ちも込めて頭を下げたのだ。本当にありがたい・・・
「大事な話ってそれなのね」

「あつ、うん。折角だから五人で勉強しない？」

「はい！私は構いません！美波ちゃんと美子ちゃんは？」

「私達も勿論OKよ」

三人とも了承得て、五人で勉強したのだ。とても有意義な時間で苦手な科目を克服するべく、それぞれの得意な科目の人は苦手な科目に教え合うことで、有意義な時間になった

「そういえば、のび太は覗き行かないのね・・・」

「確かに参加していませんね？剛田君も」

「俺とのび太は女子にあれだけきついことを言ったんだぞ？戒めの意味も込めて、協力してないんだぞ？」

「でも、もしかしたら参加しざるえないことになっていたら覗きはしないけど協力はするかもね」

「のび太君？怒ってる訳じゃないけど・・・彼らを止めた方がいいんじゃない？」

三上さんは事情知ってるから敢えて防いで言ってきたので、僕は本音も紛れていったのだ

「止めて止まるなら、初めからそんなことをしないよ？でも、引き金になったのは初日が確かだと思うよ？」

「「うっ・・・！」」

あつ、三上さんも刺してしまっただけどとりあえず言おう

「だってさ？人の話を聞かないから彼らは暴走したわけだよ？もっとあのとき話し合っていたらこんなことになってないと僕は思うよ？」

「「うう．．．」」

この際だから、一応言つとかないとね？特に、島田と姫路に

「覗きの行為を防ぐのは結構だけど、石畳？あれ下手したら明久の体に何かあつたら責任とれるの??どんなバカでも一人の人間だよ？」

「そ、それは．．．」

「勿論、彼が言葉足らずなのもあるかもしれないけど、まずは聞いてあげよう？話す前に手を出したらだめだよ？」

「うう．．．」

「だけど、お仕置きするならこれの方がいいよ？」

「「え？」」

ジャイアンも含めて全員が驚いていた。まさかのお仕置きを進めると思わなかったのだろうね。取り出したのはハリセン

「これで頭叩いたらいいと思うよ？」

「そんなので反省すると思えません？．．．？言葉で話したら」

「何いつてるのかな？今まで、拷問器具使つてやっていたのだから今更そんなこと言うの？」

「あう．．」

「とりあえず、言葉で言えるようになるまでは、お仕置きはこれを使つてね？」

「「わかった．．．」」

「さっ、勉強しましょう？」

「そうだな。やろうぜ」

二人がいつてくれたから、直ぐに勉強始めたのだ．．．これで、お仕置きは優しくなればいいけど．．．え？何でお仕置きやめさせないの？って？だって．．．明久は特にお仕置きは無くならないような気がするから、ハリセンで被害減少するためでもある．．．

廊下で明久の声が聞こえたが何もきこえなーい

午前中は．．．本当に楽しかった．．．

メールは最後まで確認して送ろう

午後になり、雄二達はいつものように覗きと言う名の目的のためにD・Eクラスの協力のもとに教師陣達相手に攻撃を仕掛けに行っただが、僕らは事前に先に動いていたのだが・・・

「あなた達も覗きですか？野比君に剛田君・・・」

「違います!!」

学年主任の高橋女史に捕まったのだ・・・そういえば、この人の声聞くとは何故かあの子を思い出す・・・

「あの・・・のび太君らは私と行動していたので覗きではありませんよ？」

「・・・本当ですか？」

「本当です！本当です！」

「だから・・・この女子囲むのやめてください!!」

そう、僕とジャイアンは女子にじっと見られながら震えていたのだ。そんな僕らを三上さんはフォローして言ってくれたのだ・・・ありがたい・・・

「確かに貴方達は合宿始まってから今日までは問題も起こしてませんから、シロですね。疑ってしまい申し訳ございません」

「いえいえ！」

高橋女史の謝罪に慌てて大丈夫だと伝えたと、三上さんが他の女子に説明してくれて納得してくれた・・・助かった・・・

「では、なぜ？こんな時間にうろついていたのですか？」

「お風呂に入りたいのですがダメですか？」

「西村先生にご相談してください。本来であればダメだと思いますが・・・」

「分かりました。失礼します」

僕らは高橋女史の指示のもと、3人はお風呂に向かっていったのだ。すると、鉄人・・・もとい、西村先生がいたのだ

「ん？覗きか？」

「違います!!」

何故に最初の第一声がそれなんですか?!

「いや、すまん。お前達が協力してないのは分かってるが条件反射だ。許せ」

「そんな疑われる条件反射は明久だけでいいですよ・・・」

「そうです!」

「・・・お前らあいつの友人だろ? 何気に友達を売ってるぞ?」

え? なにいつてるんですか・・・

「あいつらが勝手に暴走してくれたお陰で、ここ二日間待っても帰ってこないし、寝不足になります・・・待ってる身からしたらイライラしますよ?」

「のび太に同感です。と言うわけで、特例でお風呂入れさせてください」

西村先生が少し唸って考えていたのだが、やがて、顔あげたのだ

「よし・・・仕方ない。今回だけだぞ? 三上も今回限定だが、予定より早く入っていいぞ」

「二ありがとうございます!!」

僕とジャイアンが頭下げてお風呂いこうとすると、三上さんは先に女子風呂入ったのを確認すると僕らも男子風呂の更衣室に入ったのだ。すぐに入ると見せかけて、男子更衣室にカメラないのか確認するためだ

「ここにはないな? のび太のほうは?」

「ここもない。ん? 三上さんから連絡今入った」

「おつ? どうだった?」

「・・・それらしき証拠が見当たらなかったって・・・」

「そうか・・・とにかく入って戻ろうぜ」

「そうだね」

ズバーーン

《ぎゃああああ!!! 痛い痛い》

「・・・また負けたんだ」

はあ・・・部屋戻ったら報告するか・・・モヤモヤした気持ちと共に僕らは誰もいないお風呂に入ったのだ・・・

僕らは三上さんと別れてとりあえず、部屋に戻ると……

「安心しろ。秀吉だけじゃない。姫路と島田と三上にも着てもらう」

「いや、ワシ一人で着るのが不満だとかそういうワケではないのじやが」

「……だからどういう状況？」

「雄二？どういう状況？何故に浴衣？」

「あれ？お前ら帰ってきたのか？ちようど良かった。頼みがあるんだ
がいいか？その流れで説明するから」

「ん？どうしたんだろ？」

「三上を呼んできてくれないか？」

「……とりあえず、呼べば良いんだね？わかった」

「それじゃ、明久は姫路と島田に、のび太は三上に連絡を取ってくれ。
ムツツリーニはカメラの準備を」

「大切な話があるから部屋に来てくれない？」

送信つと……

少し待つと……

P i P i P i P i P i

三上さんから返信があつた。あつOKみたい……。明久の方はど
うかな？と思つてみると……

「バカあつ！僕のバカあつ！ある意味自分の才能にビックリだよ畜生
！」

？急に何言つてるんだ？

「なんだ、いきなり悲鳴をあげて」

「ジャイアンも疑問そうにいうと、雄二も怪訝に明久の方に行ったの
だ」

「どうした明久？さつき何か悲鳴が聞こえたが」

「色々大変なことになつちやっただ！今は僕の邪魔をしないで――
」

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタツ（雄二が明久を巻き込んで倒れる音）

バキツ（雄二が明久の携帯電話を踏み潰す音）

「明久？大変な状況とはなんだ？」

「たった今貴様の作り上げた状況だ・・・!!」

うわ、明久の携帯電話は、今や電子パーツへと分解されて見るも無残な状態になっている・・・

「ん？これはお前の携帯か。すまん。今度修理して返す」

「いや、今はそんなことどうでもいいから、とりあえず雄二の携帯電話を貸して！」

「あ、ああ。別に構わんが」

いかにも雄二が好みそうなシンプル形状の携帯電話を受け取り、明久はすぐに雄二の携帯を操作し始めた。僕とジャイアンと雄二はそれを後ろから覗き込むと、雄二の携帯には霧島さんのしかなかったのだ。話を聞くと、霧島さんは機械音痴だから、こういうのは多々あるらしい・・・

「明久。そんなに深刻そうな顔をしてどうしたんだ？まるで間違えて島田に告白とも取れるようなメールを送ってしまったって弁明しようとしたところで俺に携帯電話を壊されてなにもできなくなってしまった、なんて顔をしているぞ？」

「おいおい、なんだ、その漫画みたいな状況は？」

「あははっ。何を言っているのさ雄二。そんなことあるわけないじゃないか」

「そうだよな。そんなことになっていたら流石に携帯電話を壊した俺が極悪人みたいだもんな」

「まったくだよ。あはははははっ」

・・・まさか、本当にそういうのが起きていたのか!?だって・・・目が笑ってない・・・

? 雄二の携帯で何をカチカチと――

【To: 霧島翔子 From: 坂本雄二

もう一度きちんとプロポーズをしたい。今夜浴衣を着て俺の部屋まで来てくれ】

「うん? 明久、俺の携帯で誰に何を送信し――ゴふつ。な…な、な、なんてことをしてくれるんだ!? キサマー!」

「黙れ! キサマも僕と同じように色々なものを失え! どりやああーつ!」

「おわあつ! 俺の携帯をお茶の中に突っ込みやがったな!? これじゃ壊れて弁明もできないだろうがこのクズ野郎!」

「そう! その気持ち! それが今僕が雄二に抱いている気持ちだよ!」

「なんだよ!? その気持ちは!」

急にワケわからないこと言わないで!?

「何をわけのわからんことを! と、とにかく今は翔子の部屋に行って誤解を解いてこないと大変なことに――」

雄二が部屋を出ようとすると…

ガラツ (雄二が廊下へと続くドアを開ける音)

ドゴツ (廊下にいた鉄人が雄二に拳を叩き込む音)

グシャベキグチャツ (雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音)

「部屋を出るな」

「二はい!!」

見事に吹っ飛ばされた雄二を見て敬礼した僕らは悪くないはずだ…

「のび太! 携帯貸して!」

「ごめん…今切れたの…」

「そんな…そうだ! 秀吉とムツツリー二はまだ携帯は買ってないの?」

「うむ。特に必要ないからの」

「……いざというとき鳴り出すと困る」

最近の高校生にしては珍しい。片方の理由は特に……僕らは撮影できるように片付けていると……ガラスが雄二に刺さって叫び声あげるも明久の冷たい対応に腹立てて、仕返して攻撃したのだ

「お前もこの痛み味わえ！」

「それなら浴衣着れば秀吉とペアルックだ！」

「……羨ましい」

「お主らワシの性別を完全に忘れておらんか？」

さあ？とりあえず、騒いでる二人をほっておいて準備を進めたのだ……

夜はいつでも油断できない

そんなこんなで時間が過ぎ、

——コンコン

控えめなノックの音が扉から聞こえてきた

「あ、いらっしやい、姫路さんに三上さん」

「三上さんも一緒に来たんだ。廊下で西村先生に絡まれなかったよ？」

「西村先生なら、瑞希のお菓子をあげたら通してくれたの」

え!?

そう言つて手作りと思われるお菓子を見せてくる姫路。なるほど
そういうことか、なら——

「二」「さらば、鉄人・・・安らかに眠れ・・・」「三」

西村先生の冥福を心から祈ろう・・・

「じゃあ、二人ともお願いして良いかな？」

「はい！」

「うん！」

僕の言葉に二人はオツケーしてくれて助かる・・・その後はやはり
というか、ムツリーニーは血を出しまくり、時間はかかったのだ：。
そして、写真を撮り終えて二人が自分の部屋に戻ると、昨夜は遅くま
で鉄人の補習フルコースを受けていたせいか、明久たちはすぐに寝
入ってしまった

僕とジャイアンは寝れなかったので、すこし、夜の満月を窓を見て
いた。・・・こうみると、懐かしい思い出がたくさん出てくる・・・
そう思っていると布団の方に振り向いたら、僕らは固まったのだ
なぜなら・・・

・ 島田に襲われている明久

・ 可愛らしい秀吉の寝顔

・ カメラを構えている康太

・浴衣姿で雄二の布団に侵入しようとしている霧島

「んん？」

僕らはもう一度見たのだ

・顔を赤らめて明久に迫る島田

・あどけない秀吉の寝顔

・静かにシャツターを切る康太

・慌てふためく雄二をよそに浴衣の帯を緩めようとする霧島

結論・

「なんだ・・・何時ものことか」

「俺たちを助ける気はないのか!？」

僕とジャイアンからしたらいつもの事で流すよ!悪い!?
すると・・・

「お姉さま無事ですか!?美春が助けに来ましたよ!」

あ、やっぱりこの流れか・・・もういろいろと定番になってきた

「み、美春!?どうしてアンタがここにくるのよ!」

「さっきお姉さまのお布団に入ったら誰もいなかったから、もしやと思ったら・・・!やっぱりここに探しに来て正解です!」

「あ、危なかったわ・・・。昨日で懲りたと思って完全に油断していたもの」

毎日仕掛けているの!?恐ろしい・・・

「お姉さま!男の部屋に来るなんて不潔です!おとなしく美春と一緒に裸で寝ましょう!いえ、勿論イロイロするので寝かせませんが!」

清水さんも島田との攻防を始める。発言的にはあれだけど・・・
「やめるんだ清水さん!それ以上の会話はムツツリーニの命に関わる!」

「・・・!! (ボタボタボタボタ)」

「・・・雄二、とにかく続き」

「お前はなんでマイペースなんだ!？」

「な、なんじゃ!?目が覚めたら女子が四名もおる上に雄二は押し倒されてムツツリーニが布団を血で染めておるぞ!？」

「ああああっ!皆してそんなに騒いじやダメだよっ!このままじゃ鉄人に気づかれて——」

あっ!バカ!そんなこと言ったら・・・

『なにごとだっ!今吉井の声が聞こえたぞっ!』

「え?なに?なんで全員が『吉井が声を出したせいで見つかったじゃないか』みたいな目で僕を見るの?」

いや、実際に君のせいだろう。西村先生は明久の声にだけ凄く敏感になつてるんだから・・・さて、不味いぞ・・・

「くそっ!明久のせいで面倒なことになった!とにかくお前らは見つからないようにここから逃げろ!」

「なんだか納得いかない物言いだけど雄二の言う通りだ!とりあえずここは僕らに任せて!」

『吉井に坂本お!お前らだとわかつてるんだ!そこを動くなあ!』

ドスの低い声で近くまで来ている・・・色々と話した結果、二人が引き付けるみたいだ。まっ、あの二人なら逃げられるかもね?・・・多分

「雄二、行くよっ!」

「仕方ない、付き合つてやる!」

明久がドアの取っ手に手をかけ、一気に押した。

バン!ガスツ!

「ふぬおおっ!よ、吉井、キサマあああ!」

「げっ!鉄人が扉で頭を痛打したみたいなんだけど!？」

「それはフラインプレーだ!行くぞ!!」

しかし、ここでこれらの計算は違ったのか、西村先生が倒れてしまったから部屋のなかを見ようとするのが明久は気づいたのか・・・

咄嗟に別の行動を起こした

体勢を崩した隙に明久が鉄人の頭に脱いだ浴衣を巻きつけた

「ご、ごらっ！何を」

「おまけっ！」

さらにその上から帯で縛り付けたからこれで時間が稼げる。

すかさず島田たちに指示を出す。三人は頷いた後、全速力で廊下を駆け抜けて行った

よし。これで無事に終わる筈――

「貴様らはずくづく俺の指導を受けたいようだな……！覚悟はできてるな?!」

「していません!!」

ですよねー!?

そして、明久と雄二対西村先生の恐怖の鬼ごっこが始まったのだ……

部屋にいた僕らは……

「さらば、明久と雄二……安らかに眠るんだ」

「いや!?あやつらは死んでないぞー!」

いや、西村先生∥鉄人だから逃げれないよ……頑張れ

結局捕まってフルコースでの補習されたみたいでした……哀れ……

興奮しすぎるのはダメ!

最終日……

「ふわああ……」

「流石に眠いぞ……こらっ」

昨夜この二人は結局鉄人に捕まったようで、三日連続で鉄人に朝まで教育について(拳で)語られていたらしい

「災難だったな。二人とも」

ジャイアンが心底同情した声で言っていた。まあ、元々は何事もなく寝ていた筈なのに、ああなるとは思わなかっただろうね……

「災難と言えば災難だったかも——ふわああああ——」

明久の欠伸は止まらない。今日は彼らにとって覗きの最終日だから、自習時間にきっちり点数補充をしなければいけないのに、大丈夫かな?

「弱ったのう。お主らがそんな様子では、今夜はとて……」

「別にまったく寝てないわけじゃないから、気合さえ入れれば目が覚めると思うけど——ふわあ——」

こりやダメだ。口を開くたびに欠伸が出ている。かなりの重症だね。どのくらい重症かと言うと、あの明久が目の前にある飯よりも睡眠を優先しようとしているくらいだよ……

「俺もダメだ……。全然気合が入ら——ふおおおっ!」

「どうしたんだ雄二!」

ダルそうにしていた雄二が、何かを見た瞬間一気に覚醒した。何だ!?! 一体何を見たんだ!?! 僕とジャイアンが動揺していると……

「……効果は抜群」

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

僕達の後ろの出入り口から康太がやってきた。手に何か持っているけど……ああ、そういうことね?

「ムツツリーニ。今しがた雄二に見せたのは何じゃ? えらく興奮しておるように見えるのじゃが?」

「……魔法の写真」

ムツツリーニーにしては珍しく、誇らしげに胸を張っている

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの？」

「俺も見してくれ」

「僕も」

手にしている写真を俺たちに手渡してくる。僕の前に写真を置き、明久と秀吉が僕の左右から覗き込んでいる。ジャイアンはその後ろから覗いていた

「魔法の写真だつて？何を言ってるんだか僕らはもう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合なんか入るわけがふおおおっ！」

「ほう、これは・・・」

「すごいな・・・」

「うん・・・」

見せてくれた写真の一枚目は、昨夜撮影した姫路と秀吉のツーショット写真だった。二人が恥ずかしそうに上目遣いで浴衣姿で色っぽい。少し胸元も開いている。流石、明久が覚醒するわけだ・・・姫路のは流石に焦ったけど・・・

「二枚目はなんだ？」

「えっと・・・二枚目はー」

すると今度は浴衣姿で迫る翔子とハーフパンツ姿の島田のツーショットが出てきた

「す、凄いっ！これも凄いよムツツリーニー！今僕はキミを心から尊敬しているー！」

「確かにすごいものう……うまく明久と雄二が写らんような角度で撮つてあるし、もはやプロの業じゃな」

「康太は神の技術を持っていると言っても過言じゃないな」

「たしかにそうだね・・・」

まるでグラビア写真のようにうまく写してある。全員が浴衣姿じゃないのは残念だが、これはこれで凄い写真だ

「三枚目は何が写っておるのじゃ？」

「三枚目は——」

照れくさそうにしている、浴衣姿の三上さん。姫路と同じく、少し

胸元が覗いていて……こ、これはっ!!

「ぐふっ?!」

「のび太が血を吐いた!」

「ええー?!」

「どうしたのじゃ!?!のび太!」

こ、これは……後で買おう……三上さん可愛すぎる……他の人に見せたくない……

「して、四枚目は……?」

「あれ?本当だ」

更に写真を捲る。そこに写っていたのは——セーラー服姿の明久

「……綺麗に撮れたので印刷してみた」

「落ち着くんじゃ!明久」

「離して!このバカに頭かち割ってやるう!!」

明久を羽交い絞めにして止める秀吉。ってかこの写真いつ撮ったんだろ?

「驚いたぞ。まさかここまで凄い写真を撮るとは」

目に輝きを取り戻した雄二がムツツリーニを労っていた。あまり女子に興味を示さない雄二ですらこの反応だ。普通の男子が見たら興奮は間違いない

「これで増援も期待できるといわけじゃな。」

「……これ、他の皆にも見せないとダメかな?」

明久は一枚目と二枚目の写真を持って手放すのを惜しむような顔を して雄二に聞いた。

「明久。俺たちの目的を忘れるな。大局を見誤る人間に成功はないぞ」

「そうだね。ここはあきらめて作戦を実行しよう」

「ごめん。確かに間違えていた。この写真は目的の為の手段だし、そんな未練は断ち切る。後でムツツリーニに1グロスほど焼き増ししてもらっただけで我慢するよ」

「1グロスは多すぎだろ」

「未練タラタラじゃな」

「ある意味バカだな」

そんなやりとりをしつつ、僕はムッツリーニーに三上さんの写真をパクられないように1000円払ったのだ……

「よし、早速だが……」

雄二がどこからかペンを取り出し、写真の裏に荒々しく何かを書き殴った

その内容には……

『この写真を全男子に回すこと。女子及び教師に見つからないよう注意！尚、パクったヤツは坂本雄二の名の下に私刑を執行する』

一種の警告文だった。

成程。確かにそうやって警告しておかないと

明久みたいに盗みそうな奴がいるからな。

「おい須川。コレを男子に順番に回してくれ」

近くで食事をしていた須川に写真を渡す。須川は疑問符を浮かべながらも受け取って……

「ふおおおおおお——っ！」

明久以上のすごい声を出しながら覚醒していた

「む、ムッツリーニー。お主、他にも写真を持っておったのか？」

秀吉が話題を変えたかったのか、ムッツリーニーの手にあるもう一枚の写真に目を留めていた

「どれどれ、何が写っておるのじゃ？」

「あ、僕にも見せてよ」

「俺も見せてくれ。」

僕もというと、秀吉がムッツリーニーから受け取った写真を隣から覗き込む。そこに写っていたのは——浴衣が着崩れて上半身裸に近い状態になっている明久だった。おまけにトランクスがチラツと見え
ている

「……思わず撮ってしまった」

「放して秀吉！自分で見ても気持ち悪い写真を撮ったコイツの脳髓を引きずり出してやるんだ！」

「見ておらん！ワシは何も見っておらんから落ち着くのじゃ！」

まったく、ちよつと前まで眠いといって気持ち入ってなかったのに今はすごい元気だな……

少し早く食べ終えて、三上さんとジャイアンと3人で会話していたのだ。三上さんがゆっくりと聞こえるように語りかけてきた

「昨日から少し引つ掛かっていたことがあつたの？」

「何だ？その引つ掛かっていたのは？」

「実はね、霧島さんと瑞希と美波に聞いてみたのよ？脅迫みたいなのとしてない？って」

うわ、ストレートにきいたね……

「で、のび太君達の話聞いていたら辻褃が合わないところが見つかったの」

なるほど……僕も今の話で気づいたことがある

「……となれば俺らも今夜動いた方がいいな？」

「どういう風に動くか……」

そこで僕はひとつ思い付いたのだ……

「僕が遠い距離から明久達を援護するよ。ジャイアンと三上さんは……西村先生に協力するといつて、ギリギリまでお風呂の所を張つてくれない？」

「なんで？」

「ひよつとしたら……黒幕が西村先生の倒された場合に出てくるかもしれない」

「でも、援護するって……？どうやって教師がいないと召喚獣出来ないだろ??」

「方法はひとつだけあるよ……いや、とりあえず援護の件は任せて？」

「……また無茶しない？」

三上さんが心配そうに見ていたが……

「大丈夫！」

「どうかなー？のび太だしなー」

「酷いよ!?明久よりましなのに！」

「それはたしかにそうだな／ね」

今この瞬間に明久がいなくてよかった・・・さて、夜までに仕掛けるか・・・リスクは高いけどこんなのはました！
そんな決意と共に僕らは行動を起こしていた

時にはお話が必要

カチツ　カチツ

時計の音だけがこの部屋に鳴り響く。緊張しているからか、今になってその音が気になり始めた。

「明久。今更ジタバタするな。補充テストも全て受けたし、写真も回した。やるべきことは全てやったのだから、あとは何も考えずに戦うだけだ」

部屋の隅で目を瞑っていた雄二が言う。本当に神経図太いなー

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

今日の点数補充の為のテストせいで殆ど根回しに行けなかったから、写真を回した結果がどうなったかわからない。結果は作戦開始後になってからわかることになるだろうけど……

「……………今日こそ借りを返す」

秘かに闘志を燃やすムツリーニー。あの写真は撮った本人にも会心の出来だったみたいでムツリーニーは昼間の補充テストで凄い勢いで問題を解いていた……それを見ていたジャイアンと僕は引いていたけどね……

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ」

瞑っていた目を開き、雄二が僕たちの前にやってきた。最初は僕もジャイアンも出て行って行動起こすつもりだったが……今このタイミングで動けば疑われるから黙って部屋からでなくて聞いていた

「いいか？俺たちがいるのは三階だから、三階・二階・一階・女子風呂前の四カ所を突破しないと目的地には辿りつけない」

「三階の敵はE・Fクラスの仲間が抑えて、二階の敵はDクラスが抑える手筈になっているんだが、Dクラスだけだと少々厳しいじやろう

な」

教師側も各クラスの生徒の強さに応じて戦力は配置している。Cクラス抜きでの突破は難しいだろうね

「でも、ここまできたらやるしかないよ」

「もちろんそのつもりだ。それで、二階を突破すると——」

「……高橋先生」

「そうだ。学年主任の高橋女史が率いる一階教師陣だ。恐らくここには翔子や姫路、工藤愛子もいるだろう」

今回の作戦の大きな課題の一つが、この高橋先生だ。ここをどうするかで作戦の成否が大きく変わる

「じゃが、足止めできねば……」

「ああ。明久とムツツリーニは前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになる」

「いや、俺は作戦が失敗しても大して現状と変わらん気がするが……??」

確かに……雄二の結婚が早まるかどうかの差だし……明久に關しては……ね？

「とにかく、高橋先生は根性でなんとかするしかない。A・Bクラスが協力してくれたら勝機は充分にあるんだが」

ここでジャイアンがめずらしく口を挟んだのだ

「Aクラスはともかく、Bクラスは大丈夫だろ。特に代表格が女に興味を持っているからな。あの写真が効くはずだろ？」

「あははっ。ジャイアンの言い方だとAクラスの男子代表格は女の子に興味がないみたいじゃないだよ？」

「「「「……」」」」

いきなり、核心をついてきたね。僕とジャイアンは雄二からその話

を聞いたとき鳥肌がたったのだ・・・まさか!?と思ったけど・・・
そんな雰囲気振り払うように雄二が明久とムツリーニと秀吉
に確認したのだ

「そこまで行ったらあとはお前たちの仕事だ。わかっているな?」

「・・・大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね?」

正直、今回の戦いはかなり厳しい。不確定要素が多すぎる。だが、
この四人はなにか成し遂げそうだ・・・見届けよう・・・

——ピピッ

どこかで電子音が聞こえた。これは八時を告げる時報。戦闘開始
の合図だ

「よし。てめえら、気合は入っているか!」

「「おうっ!」」

「「女子も教師も、AクラスもFクラスも関係ねえ!男の底力、とくと
見せてやろうじゃねえか!」

「「おうっ!」」

「これがラストチャンスだ!俺たち4人から始まったこの騒ぎ、勝利
で幕を閉じる以外の結果はありえねえ!」

「「当然だっ!」」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣るぞっ!」

「「よっしやあーっ!!」」

強化合宿四日目二〇〇〇時。今、覗きを巡る最後の勝負が始まろう
としていた

・・・さて彼らが出ていたのを見送った僕らは・・・

「「こ全体に召喚獣召喚できるみたいだね・・・ジャイアン?作戦通り
三上さんと協力して行ってくれる?」

「おう！」

僕らは先に遠回りして西村先生のいるところに行き、女子風呂前に二人を配属させてもらう許可を求めたら・・・

「お前は どうするだ？野比？」

「戦場の方に様子見てから参加するか考えます・・・余程バカな発言がなかったら参加しませんけど・・・」

「そうか・・・それなら俺が許可だそう。ただ・・・くれぐれもふざけた真似するなよ？」

西村先生は僕に思いきり睨んでいたが・・・あれ？僕疑われてる？泣きたいですけど・・・

「わ、わかりました！」

今は逆らわないでおこう!!

高橋先生のいるところに向かおうとすると・・・明久達がちようど来ていたのだ。さて、予定通りに後ろから・・・

『三上さんのおっぱいみたいー!!』

・・・よし、予定変更で雄二達には妨害しないであいつを狙う・・・

「高橋先生」

「なっ、のび太さん!?まさか!あなたも覗きですか!？」

ガクッ!

何故か、下の名前ではれたとき躓いたのだが・・・やっぱり高橋先生の声、あの子にそっくり・・・。気を取り直して・・・

「いたた、違いますよ・・・。少し別行動で散歩していたら、とんでもない発言したやつがいたのだ制裁しに来たのですよ・・・?」

「そ、そうですか・・・私としてはあなたが制裁する子にとんでもない事するのでは?と心配ですが・・・」

「いえいえ・・・ソクナコトシマセンヨ」

「「ひいひい!?!」」

男女関係なく今の僕の発言に怯えていた・・・失礼だな・・・さて「のび太・・・!裏切ったのか!？」

「安心して？雄二達の邪魔しに来た訳じゃないの」

「ならなんでここにいる？」

確かに普通は部屋にいるやつがここに居るのは可笑しいよね？本当は裏で援護するつもりだったけど・・・

「すーし、お話したいやつが出てきたの・・・ね？そこに居る密かに混ざれていつEクラスの山田哲夫？」

「ひい!?何でわかったの!？」

「面白い発言してくれたね・・・？少しお話しようか？」

「くそお!?この間のリベンジだー!!」

僕と山田哲夫がそんな会話してるなか・・・他の男子も女子も戦い止めていた・・・否、今動けば巻き添えになるの確信していたのだろう

さて、少しお仕置きだね？主に言葉に

お仕置き時間

ふっふふふふ、三上さんの裸みたい・・・？面白い冗談言ってくれたね……。僕はゆっくりと、Eクラスの山田哲夫の方に歩いていた。なぜ名前覚えてるのだ？って？決まってるじゃない・・・。「三人で僕を襲いかかって、台詞少なく負けた面白い男だって記憶していたから」

「そんな覚えられ方は嫌だー！絶対にオイラお前に勝って三上さんの裸見るんだー！だって・・・今の今まで、見当たらないなら入ってる可能性があるからー！」

・・・こいつが盗撮犯とかじゃないの祈りたいけど・・・

「三上さんの裸を見るなんて、僕は許せない！」

「お前は三上さんと恋人関係じゃないのになんでムキになってるく！」

それを言われたら言い返せないけど話している時間はない・・・。「意地でも通さしてもらおう！そして裸を見るんだー！このメガネ猿ー！！」

プチーン

ふっふふふ、よーし、今のけんか言葉買った。ふふ、覚悟しろ・・・

「絶対に君には負けたくないー！！」

「ぐぬぬぬぬ！！サモン！！」

化学

Fクラス 野比のび太 450点

vs

Eクラス 山田哲夫 150点

「「・・・はっはっはっ」」

僕の点数に皆は固まったのだ。そんな僕は内心、よく考えたらなんで出たのだろうか？と後悔していた。三上さんお風呂入ってないのに・・・まっ、それでも三上さんの裸をみたいというの願望・・・消してやる！！

得意な科目を高くとれてよかった。この合宿はかなり伸びたとおもうよ……

「くっ！だがオイラにはまだ負けるつもりはない！」

「あつ、それは無理だよ？」

「へっ？」

雄二曰く、そのときののび太はその笑顔は目が笑ってなくって本当に怖いと後に言われたが……

「今回はこれで勘弁してあげる……」

「あ、あの……それは……？」

恐る恐ると山田哲夫が僕の召喚したものに疑問を持っていったのだ。まっ、見たことないから当然か。僕はジャンボ・ガンを召喚したのだがこいつは破壊力はあるが点数の消耗はかなりするから難点だ……「安心して？勝負は一瞬だから？」

「いやいや！それはさすがにないだろ！」

「[[うんうん]]」

男女関係なく頷いていたけど……それはどうかな？

「くっ！軌道さえ読めば行けるはずううう！」

哀れ……

動いた瞬間に僕は一瞬で銃を発砲させたのだ……

ドゴオオオン……

「[[……]]」

化学

Fクラス 野比のび太 250点

v s

Eクラス 山田哲夫 0点

「へ……えええええ！」

「さっ僕の勝ちだよ？三上さんの裸覗くのは無しだよ」

「ま、負けた〜~~~~!!」

僕は山田哲夫が膝から崩れるの見届けるとくるりと来た場所に戻るが、一つ思い出したので雄二に小さい声言ったのだ

「あつそうそう。明久らはこの騒動に紛れて先にいったから大丈夫だ

よ？時間稼ぎ成功したし」

「!?・・・そうか」

「僕らは一切彼の決闘には手を出さないからね」

「・・・ありがとうよ」

雄二のお礼を聞き、僕は先にお風呂場のいく道を遠回りに走っている、西村先生のところに合流したのだ。明久には悪いけど、今は形上は西村先生に報告しないとダメだからね

「西村先生!!」

「野比？遅かったな？」

「少しバカな発言した男を制裁したら明久がその階を突破してまもなく、こちらに来る思います！」

「ほう・・・それはいいこと聞いた（ボキボキ）。いずれはあのバカにはこの俺が引導渡してやるつもりだった・・・貴様は剛田と三上とであそこを見張ってる」

「かしこまりました！」

僕は思わず敬礼したのは悪くないはず・・・

「お帰りなさい。ここ待機してる間は犯人はいなかったわ」

「そっか。なら僕らは明久と鉄・・・西村先生の決闘を見届けないとね。それとジャイアン、どうしたの？さつきから遠い目になって・・・」

「・・・訳はあとで教える・・・」

「そ、そう・・・」

あんなジャイアン珍しいかもしれない・・・そう思っていると・・・

『来たか！吉井!!』

どうやら明久が来たみたいだ・・・大丈夫かな

・・・それと明久が無事にこここれたってことはムツリーニは大島先生と戦ってるのか・・・

明久 side

くっ！まさか、のび太が裏切って僕らの男子の方に攻撃するなんて思わなかった!!!女子を覗くという男の喜びをなぜわからない!!!あつでも、犯人を見つげるために行動してるのは忘れてないよ・・・？

そう考えると・・・

「来たか！吉井!!」

目の前にゴリラ・・・いや鉄人がいた。くそ！ばれたか！

「今、悪口な事考えていたかったか？」

「いやですねー、ゴリラとか鉄人て思ってたませんよ？」

その瞬間鉄人が怒りのオーラを出していた。あれ？なんで??

「貴様はよほど俺を怒らせたいうようだな・・・！覚悟はいいか!？」

「できてません！サモン!!」

鉄人は試験を受けていないから生身でいくのは前回の戦いで学習済み!!やることは、相手が只の生身の男と思うな！

「覚悟ー!!」

僕は木刀を巧みに操りながら鉄人の腕や頭等を狙って攻撃していたがやはり筋肉の固まりの体だからビクリともしない！

「甘い!!吉井!!貴様はバカだが行動力はある!!なのに何故覗きに走る!?!何故犯罪に走る!?!停学が怖くないのか!?!」

停学?何言ってるですか？

「全員で覗けば特定なんて不可能ですよ!!」

「確かにな。だが、貴様を捕まえて調べればいいだけの話だ!」

くっ!ならば!腕輪の能力発動すれば・・・そうか!その手段があった!!

「白金の腕輪を発動!!」

発動すると僕の召喚獣が分裂したのだ。これを発動するのは初めてかな・・・?それを気づいた鉄人が悔しそうだった

「白金の腕輪・・・!!しかも分裂だと?」

そう!僕のは召喚獣をもう一体喚ぶことができるという効果を持つ。うまく使えば鉄人を打倒することだってできるはずだ!

「先生、勝負はこれからですよ!!」

「必ず貴様を倒す!!」

鉄人の言葉に僕は再決意したのだ!ここまで導いてくれた仲間のために・・・絶対に負けるものか!!!

お人好しはやはりお人好し

「いくぞ鉄人！勝負はこれからだ!!」

二対の召喚獣に構えを取らせ、挟み込むように移動させる。主獣は右から、副獣は左からそれぞれ刀を取り出した。

「ぬっ、くう・・・!」

逆方向から繰り出される攻撃に対処ができず、鉄人の体制が崩れる。すかさず2体同時にローキックを放つが、鉄人の太い丸太のような足で受け止められた。しかし2体同時での攻撃のおかげで反撃はされていないが・・・

「全然ダメージを与えられない・・・!!」

おかしい。鳩尾や頭部といった最低限の急所を打ち込んだはずなのに全然解さらないなんて。召喚獣の力はゴリラ並だということになったこの化け物は?!

「どうした吉井？焦りが顔に出ているぞ。」

僕の表情を見て鉄人が唇を吊り上げる。一見僕が優勢だがかなり厳しい。その理由は主獣と副獣の2体をいつぺんに操作をするとなると2人分の動きを一気に考えなくてはならない。一つの脳でそれを一気に処理するなんていつまでも続けられない!

「動きが鈍っているぞ吉井!」

「しまっ・・・くうっ!」

右腕に鈍い衝撃。これは主獣か副獣か？鉄人からか!?まずい攻撃の手を緩めると追撃が来る! だったらどうする？召喚獣を止めるか？いや鉄人を——やばい!? フェイクだ!!

「ぐ、ふう・・・っ!」

鳩尾に鈍い痛みが走り、それに合わせて脇腹に刺さるような痛みが追いかけるようにおきた。両方から来たのか。僕は廊下に背中から倒れ込んでしまった。

「・・・ここまでだな、吉井。所詮、下心のための集中力なんてそんなもんだ」

決着と言わんばかりに余裕を見せる鉄人。ゆつくりと大きく歩い

てきたのだ。考えろ！鉄人の言う通り僕に足りないのは集中力だ。どうすれば・・・ん？集中力？——集中。集中——？

「閃いたー!!!」

「ぬう？まだ立てるのか？根性だけは一人前だな」

「鉄人がヒント与えてくれたお陰さ・・・」

すると鉄人はしかめていたが関係ない・・・そう！何故なら!!!

「決めたんだ!!これから全ての攻撃を!」

どんなに固い筋肉の鎧でも必ず弱い部分がある。そこを集中して何度もたたく。そして今から放つすべての攻撃を——!!

日頃の恨みを込めて・・・!!

「——鉄人。あんたの股間に、集中させる!」

どんなに体を鍛えていようと股間なんて鍛えようがない。一番薄手な部分だ

「なんて恐ろしいことを考えるんだ貴様は!」

そう!どんだけ体鍛えてもそこは男にとっては辛い場所なんだから!!

「覚悟しろ!悶絶しろ!鉄人!」

今まで以上のスピードで、召喚獣を使い、急所に狙いをつける。股間目掛けて振り上げられる木刀を、必死に当てまいとして鉄人は両手でかばい、召喚獣も迎撃しようと正面に構える。

しかし—

「なんて、ウソですよー」

ゴッ!

鉄人の注意が下に向いたとき、僕の陰に隠れていたもう一匹の召喚獣が鉄人の太い首筋をたたいた

「グウ・・・っ!よ、吉井、貴様・・・!」

どさりと重い音を立て鉄人はゆっくりと床に倒れ伏した。その後はピクリとも動かず倒したの確認して・・・

「ふ、ふはははは!!勝ったぞー!これで・・・裸を見れる!」

桃源郷が目の前に・・・楽しみで仕方が——はっ!殺気!?

ビュオン!

本能で屈み攻撃をよけるとそこからバチバチと音を立てながら通過するものを目で確認できた。

「お姉さまの操は渡しません・・・!」

「清水さんか!」

そこにいたのはスタンガンを構えている清水さんが僕に向き直る

「お姉さまの神聖なペツタンコを覗き見しようとするような輩は、神が許してもこの美春が許しませんわッ!」

そして憎々しげに僕をにらむ清水さん

「昨夜からお姉さまが元気が無いのも美春に振り向いてくれないのも全てあなたのせいです!死んで美春に詫びてください!」

そういうと清水さんがスタンガンを振り回す。しかし鉄人の動きに比べる清水さんの攻撃はぬるい。よけることなんて造作もない

「くっ!という事を聞かないとあなたの汚らわしいあの写真を全世界に公表します!」

清水さんがそう言いながら取り出したのは…僕のメイド写真!?

「あの写真は!?まさか清水さんは僕のが好きだとか?」

「吐き気がします!!」

ちよつと涙が出た・・・

「でもなんでそんなものを持っているのさ?」

「本来はお姉さまのチャイナ服姿をとろうと思っただらちようどいい脅迫ネタが出来たから撮影したまでです。男なんかに興味ありません!持ちたくもありません!!!」

くっどうしたものか!?!と思つてると一つの仮定が思い浮かんだ・・・

「もしかして清水さん。お尻にやけどの跡があつたりする?」

「な、なんでそんなこと知っているんですか!?!まさか盗聴や覗きをやっていますね!」

間違いない。清水さんが例の脅迫犯であり、今回の黒幕か。ということは何言うのか!?!

「もしかして美波の私物に変なものはないよね?」

「何言うのですか!?!美春はお姉さまの行動を観察するために盗聴器を

仕込んで・・・ハッ！」

やはり、犯人は清水さんか・・・

「あぁっ！返してください！」

清水さんからスタンガンを取り上げる。こんな危ないものは女子が持つもんじゃないよね？とりあえず出力を最低限にして・・・

バチイッ

「ひぐう…っ！」

清水さんはあっけなくその場に崩れ落ちた。

「これで・・・終わったんだな。」

「明久!!」

すると、1階で手伝っていてくれたA，Bクラス、2回にいたC，Dクラス、3階のEクラスまでもが喜んでくれている。そして須川君や横溝君や雄二にムツツリー二も迎えてくれた。僕は浴場のドアに手をかける。これですべてが報われる!!

「さあ、みんな行くよ！」

僕が浴場への扉を開ける。騒がしかった皆はいつせいに静まり返り、目の前の楽園にむけて、足を踏み出した！

夢の一步まであと少し！

のび太side

・・・行つたか・・・僕らは元々通すつもりだったから近くに隠れていた・・・

「ふう、まさか明久が西村先生倒すと思わなかったよ」

「そうね・・・でも止めなくっていいのかしら？」

「確かに・・・あれを見たらあいつらかわいそうだぞ？」

まあ・・・普通は止めたいけど・・・

「もう止めれないなら地獄味わって真っ白になったらいいじゃないかな？」

「・・・昔のお前はそんなきっぱりと切り捨てなかったのにFクラスいってからよくも悪く成長したな」

「さて、ジャイアンはこの録音機を西村先生達に渡して？僕は三上さ

んと共に清水さんとお話ししたいから手伝って?」

「おうよ!任された!」

「なら、女性同士として私が運ぶわ」

三上さんは倒れている清水さんをおんぶして近くの離れたロビー
運び座らせると目を覚ましたのだ

清水 side

「うう・・・ん・・・はっ!?!あの豚野郎は?!・・・ここは?」

私は確か豚野郎に気絶させられた筈ですが・・・ここはロビー?

「目覚めた?清水さん?」

「!あなたは・・・Eクラスの三上さんと・・・ひい!?!の、野比のび太!」

あのとときに私の恐怖を与えた男が何故目の前に!?!

「ぶ、三上さんを除くの豚野郎どもに話すことはないです!」

すると三上さんが何か録音機を取り出し・・・ながされたのは私と
豚野郎の時の会話を・・・き、聞かれていたのですか!?

「・・・はつきりいつていいかしら?失望したわ。いくらやっていいこ
とと悪いことはあるわよ?美波にもこの件は報告させてもらうわ」

「ぐっ・・・そ、それだけはお許しを!御姉様に嫌われれば私は!!」

すると、メガネ猿が私に向かっていいに来たのだ

「駄目だよ。やっていいことと悪いことあるでしょ?つて先言われた
でしょ?今回は反省してもらわないとね?」

「ぐっ」

「でもね?清水さん」

するとメガネ猿が私におんなじ目線を合てきたのだ。どうせ私を
罵倒するのでしょうかね・・・

「今回反省してくれるならきちんと僕も三上さんも島田に話して仲良
くお願いするよ?」

「・・・!?!」

「罵倒しないのですか・・・?豚野郎を嵌めたのに?」

「そんなことしないよ・・・確かに許されなかったのは事実だけ
ど、覗きを決めたのは最終的に彼らが決めたことだし・・・何より」

するとメガネ猿は今までにないくらい寂しげに笑っていたのだ

「友達つてのは本当に大切なものなんだよ？失つてからはじめて気づくものもあるし、いなくなつてからはじめて気づくものもある．．．僕は君にそんな思いをしてほしくないんだ」

．．．この人の目は嘘をいっていない．．．

「わかりました、のび太様」

「うん．．．ん??」

「私は貴方ほど誠実な男は見たことありません！しかし！先生のところに行く前にどうぞ！この私めに罰を与えてください！」

「ええ?!」

私はどんな罰でも受け入れるの決めました！

「うーん．．．命に関わるかもしれないけどいいの？その罰ゲーム．．．構いません！寧ろ！耐えて見せます！」

「．．．わかった！ならこれをイヤホンしてね？君の覚悟を免じて音は最小限するからね?．．．頑張つて．．．」

!?!?!?どう言うことでしょう?と思ひながらもイヤホンすると．．．?!!!」

「私は耐えきれず意識落としました．．．のび太様ではなく．．．お姉様に近づくあの豚野郎にいずれ仕返しするの決めたのだ」

のび太 side

やっぱり耐えきれなかったか．．．

僕と三上さんは清水さんに冷やしタオルを頭に当てながらさつきの話をしていたのだ

「のび太君．．．?清水さんに何を流したの?」

「とある強烈な歌を聞かしたのさ．．．昔の恐怖の曲．．．未だに怯えてるぐらい」

「そんなのがあるの!?!なんで、それデータにあるの!?!」

「三上さん．．．さすがにこれ以上はそれ踏み込んだら戻れないからやめようか?主に精神的に．．．」

「そ、そう．．．」

うん・・・言えないよ・・・ジャイアンの昔歌っていた歌だなんて・・・
あれは今聞いても恐怖だよ・・・

「さて、そろそろ明久たちの悲鳴が聞こえるはずだ・・・」

『『『割りに合わねえ!!!』』』

・・・見てしまわ! たんだね・・・南無・・・

「御愁傷様・・・」

三上さんもなんとも言えない顔で遠い目になっていた・・・

哀れ・・・明久達・・・

暴走の翌日・・・

強化合宿が終わった翌日・・・

「美波ちゃん、おはようございます」

「おはよう。美波」

「あ、瑞希、美子。おはよう・・・」

声かけてきたのは、姫路と三上だったのだ。声かけられた島田は若干元気がなかった・・・

「どうしたんですか？元気がないみたいですけど、何か悩みでも？」

「う、ううん！そんなことないわ！ちよつと疲れてるだけ！」

「そうだね。昨日までの強化合宿は大変だったから、疲れが残っちゃても仕方がないよね」

「あ、うん。確かに色々大変だったわね。・・・あれ？のび太とジャ

イアンは??二人は覗きしてないはずだけど・・・?」

覗きで思い出した姫路はある疑問を呟いた

「そういうえば、最後は男子が皆真っ白になっていましたけど、何があったんでしょうか？」

「ああ、そのこと？さあね。よっぽどショックなものでも見たんじゃない？」

「ショックなもの、ですか・・・?」

「ええ、美波の言う通りね。様子を見に来た学園長もビックリしたでしょうね。学力強化合宿があんなことになっていて」

姫路の疑問に三上は苦笑いしながら、答えたのだ。それを聞き姫路も苦笑いして話していた

「あははは・・・初めはのび太君と剛田君を除く明久達が覗きを始めたのに気がついたら学年全体でしたね・・・」

「そうね・・・。ところで覗きと言えば、例の初日に脱衣所にカメラを設置した真犯人なんだけど」

「え？真犯人が見つかったんですか？」

「うん。それが、美春が本当の犯人だったみたいの」

姫路は自身の記憶を探りながら、清水を思い出したら少しビックリ

していた

「美春というと清水美春さんですか？」

「ええ、何でも本人いわく『お姉様の裸を押さえたかったです』と盗撮を認めたわ」

「ええ?!では明久くん達は……」

「無罪ってことね……のび太の言う通り初日にきちんと話を聞いていたらこんなことにならなかったかもしれない……」

「そう……ですね」

そんな二人に三上は……

「落ち込んでも仕方ないじゃないかな?確かに反省することは大事だけど、またきちんとして謝れば良いじゃない?それに最終的に覗きを走ったのは事実だから……お互いさまかな?」

それを聞き、二人は苦笑いだったが三上はもうひとつ釘を指していた

「でも、普通の子なら初日で真つ先に聞く耳持たずあの行動されたら嫌われてもおかしくないと私は思うわ……。あのときにのび太君に『話しかけないで』と言われてすごくショックだったわ……」

「確かにそうね……」

「はう……反省ですう……」

三上の言葉に歩きながら自身の言われたショックなことに二人もよくよく考えてみれば、その可能性もあると分かるとかなり落ち込んでいたのだ……

「そういえば、美春が珍しく男を認めていたし、のび太のことを『お兄様とも仲良くなりたい!』って私に聞いてきたの。で思わず、恋愛的な意味で好きなの?と聞くと……」

『違います!!お兄様は私の尊敬する人になりました!恋愛的な意味ですか?それはいいです!美春はいつか、お兄様の恋愛助けられる妹分を目指します!!あっ、お姉様のは諦めてませんから♪。私はお兄様の恋愛を応援する側です!』

「って……いったい何があったのかしら?美春があんな心変わりしているのは驚いたわ……」

「そうですね・・・」

「あははは・・・(実を言うと、私も美春に美子お姉様！って呼ばれるようになったのは内緒にしましょう)」

そんな話をしていたら、島田が最初に話していたことを思い出した
「そういえば、さつきもいったと思うけど、のび太と剛田は？あいつら覗きしてないのに・・・」

「その答えだけど・・・二人は自己申告で処分受けたの」
「ええ!？」

三上の言葉に二人は驚いていた。それもそうだろう。覗きをしてないのに何故？と考えていた

「二人の理由は、同じ部屋でありながら吉井君達の覗きをやめさせれなかったから責任があると自らいったの」

「え？でも、覗きはしてないじゃないですか？なのになんで？」
「そうね？ってことは二人も停学なの？」

その問いに三上は苦笑いだったが少し震えながら答えた

「二人の処分は西村先生との1対2の補習の授業だつて・・・。期限は吉井君達は一週間だけど、のび太君達は3日間の補習と決まったわ」

「み、3日間・・・!？」

「だ、大丈夫ですよね？」

「・・・本人しかわからない」

「・・・」

なんとも言えない雰囲気になったのだ・・・。すると、島田が切り替えるように、明るくいったのだ

「私と瑞希が三日間二人だけなのは寂しいけど、確か空いてる時間に各クラスの女子など同じ授業も受けれるのはいいわ。よろしくね？美子に瑞希」

「はい！よろしくお願いしますー!」

「ええ。よろしくね」

そんな三人は楽しく学校に向かっていったのだ・・・

【処分通知】

文月学園第二学年

全男子生徒（野比のび太と剛田武を除く）及び清水美春
総勢149名

上記のものたち全員を一週間の停学処分とする

【処分通知】

野比のび太・剛田武

自己申告により、西村先生との補習授業を処分とする

ついムラつときてやった。

今は心の底から後悔している。

くとある生徒の反省文より抜粋く

補習のその後・・・

強化合宿終わったあとに僕とジャイアンは自己申告で西村先生直々の補習でした。

この三日間・・・僕とジャイアンはとても辛い辛いもう、言葉に言い表せないぐらい追い込まれました。家のほうには許可出され学校も補習室を寝泊まりとさせる二日間過ごして三日目には試験の点数を納得させる点数になるまで追い込まれた・・・それで合格したときはジャイアンと泣きながら抱擁したのは誰にも言えない・・・

そして久しぶりの普通の登校にぼくらは太陽が眩しく感じました・・・

「ああ・・・補習がない残りの二日間が凄く・・・凄く幸せに感じる」
「過去の冒険で遅しく生きているとはいえ、勉強は全く別の話だ・・・
太陽が眩しく感じるぜ・・・」

僕とジャイアンは朝の登校しながらこの三日間を思い返すと遠い目になったのは仕方ないと思う・・・

「おはよう。のび太君と剛田君」

「おはよう、二人とも」

「おはようございます。のび太君と剛田君」

上から三上さんと島田に姫路が、朝の登校に僕らを声かけてきたのだ。三日間会ってなかったから久しぶりな感覚が強い・・・

「おう！おはよう！」

「おはよう！」

僕らも元気よく挨拶したのだ・・・。ああ本当に生きててよかった・・・

朝のHRにて・・・

「今日は四人でこの教室に授業を受けてもらうからしっかり勉強するように！・・・とは言うても、お前達は問題ないな。はあ、あいつらにもそれぐらい真面目にしてくれたらいいのに・・・特にあいつも。」
「（主に明久のことを言っているけど、多分反省しないと思います・・・

だって、明久だよ？反省しないと僕は断言する・・・多分雄二も大人しく家にいると思えない」

ここにいない友人のことを内心僕がそう思っている傍ら・・・噂の本人は・・・

「ヘックシユン!!・・・風邪引いたのかな？あー！雄二！ズルいぞ!!」
「うるせえ！ゲームでもお前にだけは負けたくない！この必殺技でも食らえ!!」

「なにを!!この赤毛ゴリラに負けるか!!!」

「よし！表でろ！バカ久！」

・・・勉強してるはずもなく、ゲームをして遊んでいた・・・
この二人はマイペースだった

説明していた西村先生が突然窓の方を見たのだ。どうしたのだろうか？

「ム？今、あいつら遊んでいるような気がしたが・・・放課後家に訪問するか」

軽く殺気だしているの見たのは気のせいだろうか・・・？明久達また問題起こしてないよね・・・？

「どうしました？西村先生？」

「ああ、すまん。HRは以上だ。では俺は出るからな」

西村先生は出ていくと、学年主任の高橋女史が入れ違いで入ってきたのだ

「今日から私が二日間に渡ってFクラスの授業を行います。まともな二人もいますので、今回はかなり捗りますね」

・・・oh. どうやら神様は甘くなく、二日間学年主任の高橋女史に教えてもらうことに・・・。しんどいというより、頭がかなり使うことが目に見えて、僕らは冷や汗が止まらなかった・・・

そして・・・

「・・・・・・・・(シーン)」

「ふ、二人とも真っ白に燃えている・・・いったい何があったの？美

波、瑞希」

「あ、あははは……」

「高橋先生の授業を受けていて、苦手な科目のときにかかなり無表情できつく言われて落ち込んでいたの」

「うわ……それはたしかにきついわね……」

昼休みになり、僕らは屋上で昼御飯を食べることにしていたのだ。三上さんはぼくらの様子を見て驚くが、姫路達の説明により心底同情していた……。まあ、僕とジャイアンは若干苦手な科目を点数あげることになったが、頭が使いすぎたことにより真っ白になった……。にしても……のび太君に聞きたいのだけど、あのととき清水さんにいった台詞はどういうこと?」

「ん? どういうこと?」

「あのととき清水さんにむかってこう言っていたの……『友達つてのは本当に大切なものなんだよ? 失ってからではじめて気づくものもあるし、いなくなってからではじめて気づくものもある……僕は君にそんな思いをしてほしくないんだ』つて、あの台詞はどういうことなの?」

……あ、そういえば三上さんもあのとときの台詞聞いていたんだ……「……いつかは話すけど……生きているから明日も会えるとは限らないし、時間は限られているものだよ。『あ、あのとときこうしたら良かった!』とか『何でもつと素直になれなかったのだ』とか……『明日もまた会えるよね?』つて普通に思っていたら駄目だった……。後悔して……寂しい思いはしてほしくないんだ」

「!のび太……お前」

「わかってるよ、ジャイアン」

ジャイアンは僕が何にたいして話してるのか気づいたが、大丈夫……今はまだ話さない……もう少しである季節が来るときに……語ろう

「……よくわからないけど、のび太とジャイアンの言葉に時々重みが感じるのはよね」

「そうね……。のび太君は何を考えてそういったのかは私達は知らないけど……」

「はい。いつか話してくださいね！待ってます」

ありがたい……。だけど、今いない彼ら含めて、話したい……
僕らのあの時間を……。そして得たものを……

「あつ！そろそろ昼休み終わるわね……」

「そうね！また午後からも頑張らましょ！」

「はい！」

「ふう……。頑張るか！」

「だね……」

あつ、そういえば西村先生は外に出ていったけど、どうしたのだろう？何か鬼の形相で出ていったけど……？

こうして僕らはこの二日間も少ないFクラスで勉強をたくさんして、学力は伸びたと思う……

オマケ

明久side

僕と雄二は明久の家でゲームをしていたときに……

ピンポン♪

「ん？誰だろ？この時間に……」

「さあな？とりあえず出た方がいいんじゃないか？」

「そうするよ」

僕のの疑問に雄二は（本人いわく嫌な予感していたから）課題を持ってきたのを机の上に置いていた。対する僕は何となく玄関でると……

「課題はしつかりやっているか……？吉井と坂本？」

「げっ!？」

「何が、げっ!？だ。坂本もそこにいるのはわかっている！出てこないか！」

指名された雄二は観念して出ていき、なぜか課題を持ってきたのだ
「何でいるのわかるんだよ……明久の家で課題をしていたんだよ？ほ
ら」

「ほう……。？ふむ……。なら……」

ゆっくりと指をボキボキとならしていた。あれ？嫌な予感が・・・
「貴様らは・・・自宅謹慎だといったのになぜ遊んでるうう!!」ここで補
習だああ!!」

ちよつ!?!いやああ!!

・・・結局僕らは鉄人の見張りでその日は勉強をしました・・・

恋路と修羅場

始まりはいつも突然に・・・

明久side

停学明け・・・僕はいつともより早く起きて登校をしたのだ

「やれやれ。なんだか随分と久しぶりに学校に来た気がするよ」

強化合宿の期間も含めると二週間ぶりか。こうなると春休みよりも長い。こんな時期に長期の休みをもらえるなんて、ある意味ラッキー——なんて思えるわけがない。山ほど課題が出された上に自宅謹慎を義務付けられたのだから。それに・・・それに!!!

「鉄人の補習を家でされると思わなかった・・・!」

思い出すだけ苦痛だ・・・!!己!鉄人——!

「あつ。明久君」

不意に後ろからタタタツと誰かが駆けてくる音が聞こえてきた

「お久しぶりです、元気でしたか?」

「姫路さん!久しぶりだね」

一週間と言っても、最近ほぼ毎日顔を合わせていたのだから充分に久しぶりだ

「実は、その、明久君に謝らないといけないことがあるんです」

「え?どうしたの急に?」

僕が謝るならともかく、姫路さんに謝れることなんて何かあっただらうか?

「強化合宿の初日なんですけど——覗き魔扱いしてごめんなさいっ」

「ほえ?」

姫路さんが腰を折って深々と僕に頭を下げた。いやいや!?

「いや、覗き魔扱いも何も、僕らは覗き魔そのものなんだけど?」

「あ、いえ。そうじゃなくて、一番最初は誤解だったじゃないですか。その時、明久君を疑っちゃったから、申し訳なくて・・・。のび太君に言われてすごく反省しました」

「ぶ、あははっ。結局覗きをやったのに謝れるなんて、なんか変な感じ

だよっ。」

「そ、そうですか？」

そもそも覗いた僕に謝るなんて姫路さんなんだが変な感じだよ……

「でも、あの……」

「ん？なに？」

どうしたんだろう？

「そ、その……そこまでして、見てみたいものなんですか」

「うん！」

うん！じゃないだろ僕!? 必死に言い直そうとすると、姫路さんの方を見たら軽蔑されてないみたいだ

「ふふ、よかったです。きちんと女子の興味あって……」

「ぐふっ！」

まさかの言葉にダメージを負った僕は、これは仕返しをしてやらないと！と思いい姫路さんに……

「も、勿論興味津々だよ！特に、姫路さんにはね！」

「え——えええっ!?!」

姫路さんが耳まで真っ赤になった。仕返しの効果は抜群だ!!

「あははっ。冗談だよ。姫路さんが僕をからかうから仕返しを——」

すると姫路さんが小さい声でなにかいったのだ。それを聞いた僕は……

え？イマナンテ??

「だから、その……覗いても、いいですよ？」

一瞬意識が飛びそうになった……え？

「……えええっ!?!何を言ってるの姫路さん!? 大丈夫!?!」

信じられない言葉に我が耳を疑ってしまふ。そんなことがあっていいのか!? 夢じゃないよね?!

「覗いてもいいですけど、その代わり——」

「そ、その代わり!?!」

何が来る!?!何が来る!?!

「わ、私を明久君のお嫁さんにして下さいね？」

ちよつと待てなんだこの展開は!? 一体どうなっているんだ!? とにかく落ち着こう。まず僕が考えるべきは新婚旅行の行き先だ。やっぱり海外旅行の方がいいだろうか?!

でも、そうなると学校を休んで行く必要が——うわー!!!

「ふふふ・・・」

「ん?」

笑い声が聞こえたので顔を上げてみる。すると、姫路さんが楽しそうに笑っているのが見えた

え?もしかして、今のは——冗談だったの?

「あははっ。明久君、顔が真っ赤ですよ?」

「そ、そう言う姫路さんだって慣れないことを言うから真っ赤だよ!」
お互いに顔を見て笑い声をあげる。こういう会話はなんだか凄く新鮮な感じがした

すると・・・

「アキ!!」

振り返ると、美波が来たのだが、いつもより様子がおかしい。こうなんか言い表せないけどなんだか妙に真剣な表情をしている。何かあったのだろうか?

「美波ちゃん?どうしたのです?」

姫路さんも美波の様子がおかしいと気づいたのだ

「アキ!目をつぶりなさい!」

「え、はい!!」

目の前にやってくると、美波はいきなりそんなことを言ってきた。

さてはこの前の覗きの落とし前をつける気だな? 仕方ない。諦めて一発貫うとしよう。言われた通り目を瞑り、来るべき衝撃に備えた
「・・・ごめんね瑞希」

「え?どういう・・・」

?なんだろう。殴られる雰囲気じゃないけど……。恐る恐る目を開けてみる。すると、すぐ目の前には頬を染めた美波の顔があった
て・・・

「——っ!」

気がつけば僕の唇には美波の唇が重ねられていた。
強い風が吹いてきた・・・この風は何かの合図だと僕は感じたの
だ・・・

嵐の前の始まり

明久たちが今とんでもない状況になっていたのを知らない僕とジャイアンと三上さんと三人でいつもの登校していた

「久しぶりに明久たちと会えるね？」

「そうね。まさかと思うけど復帰早々にとんでもない問題にやらかしたりしてるのかしら？」

「まさか？そんなことあるわけないだろ？あれだけ怒られたんだから」

「あははは、確かにね」

僕らは笑い合いながらそれぞれの教室に別れたのだ。僕とジャイアンはFクラスの教室に向かう。すると教室前で秀吉を見つける

「おはよー秀吉」

「よう。秀吉」

「うむ。おはようじや、のび太とジャイアン」

秀吉がそう言った直後……

『吉井！抵抗するな！往生際が悪いぞ！』

『くそっ！誰か、助け——』

「……」

気のせいかな？と思いつつも……

「……中で何が起こってるのじゃ？」

「多分明久が何かしたんだろう？」

とりあえず、秀吉は意を決意して開けると……教室の中は暗幕が引かれ、覆面姿で鞭、蠟燭、鎌などをもったクラスメートたちが明久と雄二を取り囲んでいた。ってか雄二も捕まったんだ……じゃない！

「何してるんだ／＼の／＼じゃあ？！」

朝の三上さんの言葉訂正するよ……今現在進行形でバカなことしていたよ……

「良かった……!!のび太とジャイアンと秀吉今日休みかと思っ
たよ……!!」

「今朝は少々支度に手間取ってしまったゆえに遅くなったのじやが……明久、お主らは何をしておるのじや？」

「のび太と剛田と木下、邪魔してくるな……！今我々は異端者である吉井明久と坂本雄二の処刑を行うところなんだ」

覆面姿の男（たぶん須川）が答える

「まて!?!のび太とか三上とつるんでいるから異端者じゃないのか!?!」

「野比のび太は手をだしたら殺されますので手を出しません!!後、剛田も手を出せません!!」

「よしー!」

僕とジャイアンはガッツポーズしていると明久達は……

「この裏切り者!!」

力の限りさけんで

「しかし、雄二はわからんでもないが、明久は何をしたのじや？」

「よく聞いてくれた木下、異端者・吉井明久はよりによって我らが聖域である文月学園敷地内で朝っぱらから島田美波と接吻などという不埒な行為を……」

ガラッ

須川の口上の途中に僕らと秀吉が入ってきたのとは別の扉が開いた。そして、耳まで真っ赤になった顔を俯けて早足に自分の席に向かう女子高生が現れた……

入ってきたのは丁度名前を呼ばれた島田美波。その人だったいつもと違う妙な雰囲気、Fクラスの誰もが言葉を発せずに行った

「皆さん。おはようございます。今日は諸事情により布施先生の代わりに私が授業を——どうしたんですか皆さん？」

一時限目の授業の代理教師、高橋先生がその様子を見て目を丸くしていた

僕は内心、ああなんかいつもよりかなり嫌な予感が……そんな始まりの朝だった……

嵐は徐々に近づく

何？この妙な雰囲気は……？教室の中は今までにないくらい静まり返っている。いつもの騒がしいFクラスが嘘のようだ。そして、一言も無駄口を叩かないクラスメイト達なのだが、クラス中から殺気を感ずる……

原因は間違いなく……

「……ん？」

「……！」

あの二人だ。明久と目が合い、慌てて赤い顔を伏せる島田と同じように顔を赤くする明久。見ていて初々しいけど……このクラスはFクラスだ……ただですむと思えない

『では須川君、この場合3moolのアンモニアを得る為に必要な薬品はなんですか？』

『塩酸を吉井の目に流し込みます！』

『違います、それでは、朝倉君』

『塩酸を吉井の鼻に流します！』

『流し込む場所が違うという意味ではありません、それでは有働君！』

『濃硫酸を吉井の目と鼻に流し込みます』

『『それだ!!』』

『それだ、ではありません。それと答えるときは吉井君の方ではなく先生の方を見るように』

高橋先生、大変だね……

そんないつもと違う空気の中、一時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響く。

「……今日の授業はここまでにします」

高橋先生少しいじけて、溜め息について教室から出ていった。申し訳ない……

そして、休み時間になり……

殺意の籠められた視線が飛び交う中、島田が明久のところに行き、明久の隣に座って二人で話し出す。今日は授業にならないし……よし！久しぶりに寝よう！

「お姉さまっ！何をしているんですか!?そんな豚野郎に密着して!」
薄れていく意識の中、美春の音が響く。関係ない……関係ない……
zzz

「——だって、ウチはアキと付き合っているんだから」
「うそ?!」

薄れていた意識が一気に覚醒したのだ。それと同時に……
「畳返しっ!!」

シユカカカカッ

「——チッ」

後ろからは衝撃的な告白と同時に大量のカッターが畳に刺さる音、そして教室中からの舌打ちが聞こえた

思わず衝撃で目が覚めた……

ガラッ

そんな騒動のなかに入ってきたのは……

「さあ、授業を始めるぞ、今日は遠藤先生が別件で外しているので俺がビシビシ——ん?……また清水か?授業が始まるから自分の教室に戻るように」

西村先生が入ってきたのだ。ってか清水さん来ていたんだ

「きよ、今日は先週までとは違って特に大事な用なんです!西村先生、今だけは美春を見逃して下さい!」

「特に大事な用?それはどんな用だ?まさか先週みたいに『邪魔者のいない教室でお姉さまと一緒に授業を受けたいんです』とかじゃないだろうな?」

あー、僕らが西村先生の元での補習の時にそういうのあったのかな
いとか聞いていたが……

「いいえっ！今日は『この教室の男子全員を殲滅する』という大事な――」

「今後この教室への立ち入りを禁じる」

ピシヤン

『お、お姉さまっ！まだお話が！せめてその豚野郎から席を離して貞操を――』

ドンドンドンと教室の扉を叩く清水さん。休み時間なら留めないけど……

「清水さん、今は引いた方がいいと思うよ？じゃないと西村先生の生徒指導受けないとダメになるよ？」

僕がそう言うと、扉を叩く音がパタリと止んだ。

『くう……お兄様に免じて、今は引きます……！ですが！豚野郎!! 覚えておきなさい!!そして、お姉様がその気なら私も考えがあります……!』

覗き窓越しに明久を睨みつけながら不穏な言葉を残すと、それ以上は抗うこともなく、清水さんは僕らの教室を後にした。

「行ったか……さっ、授業を始める！今日は教科書のP86から始めるぞ？」

授業が始まり西村先生が説明しながら黒板に文法と説明を書いていく。しかし、誰も黒板を向いていない

”I wish I were a bird”これは仮定法過去という特殊な過去形で――」

皆の視線の先には明久と島田の姿があり、二人は互いの髪を弄りあっていた。

『『……』』

あれ？なんだか嫌な予感が……

殺気が徐々に強まり……

そして……

『『もう我慢ならねえ!!!』』

やっぱり爆発したー!!

『さつきから見たりやあ、これ見よがしにイチヤイチャしやがって!』

『殺す。マジ殺す。絶対的に殺す。魂まで殺す』

『・・・お姉さまの髪に触るなんて・・・八つ裂きにしても尚、赦されません・・・!』

『入口を固めろ!ここで確実にしとめるぞ!』

全員が一斉に投擲モーシヨンに入る。・・・ん?清水さん?!何でいるの!?

そんな動揺をよそに清水さんは指示だしていた

「お姉さま!早くこちらに避難してください!そんな豚野郎と一緒にいると危険です!」

「清水さん!いつの間にも!?しかも皆どうして清水さんの言うことを聞いてちゃぶ台まで構えてるの!?クラスメイトを大事にしようよ!」

明久?普段の君の行いに大事にしているのか疑問だけど・・・?

「美春、まだウチのことを諦めてくれないの?こんなことを続けても、お互い辛いだけなのに・・・」

「お姉さまはそこの豚野郎に騙されているだけなんです!お姉さまのことを本当に想っているのはこの美春以外——」

あつちはあつちで重たい話しているし・・・収束つかないぞ?このままでは・・・

すると・・・

「うるさいぞ!貴様ら!」

西村先生の一喝で全員が静まったのだ。さすがだ・・・

「清水。授業はどうした?」

「そ、それどころじゃありません・・・!お姉さまが」

「清水」

低い声で西村先生が静かに名前を呼ぶと、清水さんはそれだけで押し黙った

「二度目の警告だ。おとなしく自分の教室に戻れ。それと、もう一度言うがこの教室への出入りを禁止する。わかったな?」

「・・・わかりました」

不承不承といった体で美春が教室から出て行く。その時、明久を親の敵のように睨みつけていった

「お前らも授業中に遊ぶんじゃない。そういう事は休み時間にやれ」
こうして、この場は鉄人のおかげで収まった——かのように思えた。清水さん……まさかと思うけど……

「ジャイアン……」

「ん？今考えること多分同じかもな」

うん……

「絶対に嫌な予感しかない……はあ……」

僕らのため息とはよそに授業は進められたのだ……

明久の事情説明

あのあと二時間目が終わりチャイムと共に明久は教室の外に出るとFFF団に追いかけていた・・・

「あいつら普通に授業受けたらいいのになー」

「・・・彼らにそれを通用するとおもう？ジャイアンは」

「・・・ないな」

「はあ・・・」

そんな会話をしていると、雄二と秀吉、ムツリーニの三人がこちらに来たがなにか深刻な顔で来たので大事な話だと直ぐにわかったのだ

「何かあったのか？雄二？」

「ああ、剛田、それものび太もきちんと聞いてほしい・・・」

雄二の説明を聞き僕らは絶句と頭を抱え込むことに・・・明久・・・！！

すると、その本人がボロボロになりながら戻ってきたのだ

「し、死ぬかと思った・・・ってあれ？なにかあったの？」

「ああ、DクラスがFクラスに戦闘しかけるかもしれない」

「ええ!?なんで?!」

ジャイアンの言葉に明久は驚いて聞いてきたのだ。なんでだって？そりゃあ・・・

「清水さんが暴走してしまってるし、試獣戦争しかけられるかもしれないって話」

「そ、そんな!?なにか対策ないの？」

「だから今話してるんだ。とはいっても俺はのび太達と違って戦争したくないからよくわかってないからのび太達に任してるんだ」

「な、なるほど・・・ってダメじゃん?!対策は!？」

はあ・・・慌てすぎだよ。きちんと話してるんだから

「もちろん対策はしてる。というか作戦は思い付いた」

「そう・・・さすが雄二」

そういえば・・・二人見当たらないな

「おい、明久？姫路と島田は？」

「え？姫路さんと美波は二人でどっかいたっていたよ？」

何?!二人きりだって……!!?

「修羅場じゃな」

「修羅場だな」

「……修羅場」

「修羅場だ……」

「修羅場だよ……」

上から秀吉、雄二、ムツリーニ、ジャイアンで僕と言う順番で台詞を言う……

「え？二人は喧嘩してるの？」

この鈍感!!

はあ……それはおいといて！

「明久。ひとつ確認したいが君は島田と付き合ってるの？」

「うーん、僕の記憶が正しければ付き合っていない……と思う」

僕の質問にそんな答えがかえってきたのだ。だけど……

「付き合っていたら、その台詞は最低だぞ？」

「だよ……」

「じゃが、明らかに島田のあの態度は付き合ってるものの態度じゃぞ？」

秀吉の疑問に明久はなにか思い出したように

「それは多分、僕の送った間違いメールが原因で——！」

明久から強化合宿中に起こった出来事を説明される。告白とも取れるようなメールを送ってしまったが、それは誤解で弁解しようとしたところを雄二に携帯電話を壊されたという話だ。

「あー、あの時か。明久が慌てていたのはそのわけか」

「確かに……」

「明久も明久じゃが……雄二、お主も素晴らしいタイミングでやらかしたものじゃな……」

「全くだよ雄二、腹を切って詫びるべきだよ」

「う……。まあ、確かに悪かった。すまん明久」

ボコッ

「いたっ!?!なにをするのさ! ジャイアン」

「メールをきちん確認していたら、そうならなかったのに偉そうなこと言うな」

「う・・確かにそうだ」

「だけど、雄二はなにか思い付いたみたいだ。いや、なにか気づいたみたいだ」

「だが誤解なら話は早い」

「ん?何が?」

「Dクラスとの試召戦争の話だ、島田の誤解を解いてお前らがいつもの姿に戻れば清水もおとなくなるだろう、そうすればDクラスは俺たちに不満はあっても開戦するほどの意気込みのある核がいなくなつて、試召戦争の話は流れる、俺たちはいつもの日常を取り戻して万事解決というわけだ」

確かに話の筋は通つてるよ・・・

雄二が解決策を説明しといると、誰かが教室に駆け込んできた

「あ、あの、明久君っ!聞きたいことがありますっ!」

息を切らしてやってきたのは姫路だった

「そ、その・・・、あ、明久君は・・・美波ちゃんに告白したんですか・・・!?!」

「え、えつと・・・」

明久が言葉につまる。仕方ない・・・

「姫路?一回落ち着こう?この話は島田も一緒の方が早いから」

「で、でも!」

「落ち着こう?島田はいまどこに?」

「わかりました・・・。美波ちゃんさつきまで一緒に屋上にいましたけど・・・?」

「よし。それなら俺たちも屋上に行くか、ここで話すのもなんだしな」

「だね・・・姫路さんには往復することになって申し訳ないけど・・・」

「あ、いえ!全然気にしないでください」

そんな会話をしながら屋上に向かう僕達。その途中、雄二がムッ

リーニに話しかけていた。

「ムツツリーニ。屋上にヤツの盗聴器があるか、確認できるか？」

「・・・多分、ある。Fクラスにも仕掛けてあった」

ヤツというのはたぶん清水さんのことだろう。あの子いい子なんだけど、少しいきすぎてるからな・・・

「Fクラスにあったものはどうした？」

「・・・さっきの授業中に外しておいた」

ジャイアンの質問に自信満々に答えるムツツリーニ。相変わらず仕事事が早いなー。

「そうか。だとすると、清水はさっきの俺たちの会話は知らないってことだな」

だね・・・。そうなると別の方法を考えないと・・・さらに少し歩いていると屋上に到着した。

先頭の雄二が扉を押し開ける。すると、その向こうには晴れ渡る青空と、その下に静かに佇む島田の姿があった

「あ、瑞希——とアンタたちも？皆揃ってどうしたのよ？」

驚いた様子で島田がこちらを見ている

「ムツツリーニ」

「・・・(コクリ)」

鋭い目つきで周囲を見回してから小さな機械を片手に歩き回る康太。恐らく設置されている盗聴器を探しているんだろう

「・・・OK」

さすがムツツリーニ・・・

「どうしたのアキ・・・？」

「えっと・・・」

明久が言いよどむ。『告白メールが嘘だった』なんていう、最悪レベルの行為について話すんだからな。たぶん、自分の惨殺死体となった姿でも脳裏に浮かんだんじゃないかな。

「神よー(´)加護を・・・！」

「アキ・・・？」

果たして明久の運命はどのような！

明久の隠していた事実

僕らは今屋上で明久と島田の会話を黙って聞こうと沈黙していたが明久はなにか神頼みしたのだ

そんな様子を見て……

「(明久大丈夫な?)」

「(場合によっては姫路を目隠ししないと悲惨な状態になるかも……)」

僕とジャイアンは耳打ちしながら最悪のケースも考えながら緊張してみていた

「ねえ?アキ何してるの?」

島田が明久の行動に疑問そうに見てたが観念して明久は……

「美波に話したいことがあるのだけど……実は……メールのことなんだけど」

「め、メール／／／もしかかってあのメール／／?」

「うん。強化合宿の時に送ったあれだけど……」

あっ顔真っ赤になってる……嫌な予感がするのだけど……?大丈夫だよな?

「実は……」

「実は……?」

明久は今すぐく汗かいてるが安心して?命までとられないはずだよ?……多分

「実は……誤解なんだ!」

「……え?」

島田は顔真っ赤になりながら固まった

「いや、誤解と言うより送る相手を間違えたの!」

「……誰に送るつもりだったの?」

島田は少し冷静に聞いてくれたが目の瞳は動揺していた。まあ無理もない……

「須川君……かな」

「「ええ!?!」」

「じゃ、じゃあ、アキはウチじゃなくて須川に告白したつもりだったの!?!」

「そ、そんな! 明久君はなんだかんだ言っても女の子が好きなんだと思っていたのに、やっぱり男の子を、しかも坂本君でも木下君でも久保君でもなくて、須川君が好きだなんて……!」

いや、明久はきちんと女の子好きだよ? ただ、言葉足らずな所があるから……

「いや、そうじゃなくてね? 確か須川君から『お前は本当に女子に興味があるのか? 坂本や木下の方がいいんじゃないか?』っていう感じのメールが来たから、その返事をしたら宛先を間違えて美波になっちゃって」

……須川君は誤解されたまま最後まで終わりそうだ。すると島田がポケットから携帯を取り出して操作を始めた。明久が送ったメールを確認しているんだろう

「え? あれ? なんだか今見てみると、このメール、告白にしては少しおかしいみたいなんだけど」

「そうなんですか? 美波ちゃん、私も見ていいですか?」

「う、うん……」

姫路も見ている間、僕は明久に疑問をいつたのだ

「明久は島田になんて送ったの?」

「えーと細かいところまでは覚えてないけど……」

「アキが送ったのはこんなメールよ?」

そういわれて僕も見せてくれたのだが……

「何々? えーと、【勿論好きだからに決まってるじゃないか! 雄二なんかよりもずつと!】……島田? この文章今冷静に見たらどう思う?」

「受けたときはそんなところまで気が回らなかつたけど……。でも、冷静になつて見直すとちよつと変かもしれないわね……」

「それに最初から気づいていれば話は早かつたんだがな」

「島田は帰国子女じゃからな。仕方あるまいて」

そんなよそにジャイアンは僕に聞いてきた

「島田は海外にいたのか?」

「うん。確かドイツにすんでいたんだよね？」

僕の確認に島田は頷いていた

「ええ、ドイツに高校入るまではいたわ。でも坂本より好きって普通は誤解になるでしょ!？」

「うーん、明久はバカだけど普通に女の子好きな奴だよ？」

「そうそう・・・って！然り気無く馬鹿にしないで!？」

「「「え？違うの?」「」」」

「お前らの血の色は何色だ!？」

「「「なにいつてるんだよ?赤色に決まってるだろ?」「」」」

「そういう意味じゃない!!」

僕ら男子が口揃えて言うのと明久は拗ねた。久しぶりに明久弄ったような気がするけど、なんか面白い

「え?では明久くんのメールは誤解ってことですか?」

「う、うん。そういう訳なんだ」

「そっか。誤解だったのね。ウチもちよっとおかしいな、とは思っていたんだけど、やっと納得がいったわ」

「あはは。美波はそそっかしいなあ」

「もうっ。送り先を間違えるアキには言われたくないわよ」

姫路の疑問に明久は頷いて、島田に確認すると島田はにこやかに笑っていた。あっ・・・大丈夫かな?

「どうしてくれるのよー!!!うちのファーストキス!!!」

「ごごご、ごめんなさい!!!悪気はなかったのです!!」

「ごめんなさいですむ問題じゃないでしょ!？」

島田は明久の胸ぐらを掴みながらものすごい勢いで揺さぶっていた

「あの、美波・・・」

「何よ!?!」

「えっと僕も初めてだったから、おあいこってことじゃ、ダメかな?」

「ダメに決まってるんだろ」

雄二の鋭いツツコミ。すると・・・

「えっと、そ、そうなんだ・・・。それは、その・・・ご馳走様?」

「いや良いのかい!?!」

僕と雄二とジャイアンは思わずツツコミ入れた。島田・・・それでもいいの?」

「あの・・・美波怒らないで聞きたいんだけどいいかな?」

「なに? アキ?」

「僕と美波が付き合っているって話なんだけど、あれつてもしかして、美波が僕のことを・・・その、す、好き、とか・・・?」

「え、いやその!?! えつと・・・あ、あれはね、ほらっ。美春があまりにもしつこいから、彼氏でもいたら諦めてくれるかと思つて、それで夕イミングよくアキが告白してきたもんだから・・・!」

「ああそうなんだ・・・」

明久は誰が見てもわかるように悔しそうな顔になっていた。まあ、そりゃあね?

「素直じゃないな」

「そうだな」

「一人以外バレバレだぞ?」

「全くじゃ。誤解のあとにそれを言うのは気まずいのわかるが」

「・・・素直じゃない」

まあ本人がそう言うなら、そういうことにはしておこう

「まったく、それならそうと先に言つてよ。美波が僕のことを好きなのかと思つちやうじゃないか」

「そ、そんなワケないでしょ!」

「だよ。僕もおかしいとは思つていたんだよ。美波が僕を好きになるとは思えないし、それに――」

「そ、それに、何よ」

「それに、美波があんなにしおらしいなんておかしいもんね」

あつ、そんなこと言つと・・・!

「・・・そうね。全く、本当に、アンタの言う通りよね・・・!!」

「み、美波!? なんか僕の肩が嫌な音を立てているような気がするんだけど!?!」

今のは明久が悪い・・・何にしても・・・

「とにかく、誤解は解けたようじゃな。あとはこの話を清水に伝えれば問題は全て解決ということの良いのか？」

「それなら僕が清水さんに連絡してみるよ」

「なんで清水の連絡知ってるんだ？」

「・・・何故か連絡交換してくださいって合宿終わった直後に交換した。三上さんも清水さんと連絡交換してるよ」

「まあなにしても一件落着だな！」

確かにジャイアンの言う通りだね・・・

「え？どういうこと？瑞希、なにかあったの？」

「いえ、私も知りませんが・・・何かあったんですか？」

「ああそうか。お前らはDクラスの話を知らないんだったな。実はな——」

雄二が説明してる他所では明久は思案顔になって空見ていた。

はあ、多分回避できたと思うけど・・・

そんな気持ちと共に次の時間を集中し始めたのだ

島田への説得

あの後に明久と島田の交際疑惑が誤解だという事実を伝え、Dクラスは試召戦争の準備を取りやめたらしい。

誤解だと伝えた後の島田は明久から離れて姫路と相席になったし、件の清水さんの怒りも収まっているはずが、今度は違うヤツが怒り心頭みたいで問題が山積みになっ……

「瑞希？お昼御飯と一緒に食べない？」

昼休みのチャイムが鳴るや否や、島田のそんな声がした

「あ、美波」

明久が立ち上がり、島田に声をかけた

「何よアキ。ウチに何か用？」

「えつとき、今朝言ってたお弁当なんだけど……」

「なあに、アキ？ウチにあそこまで恥をかかせておいて、まさかお弁当をたかろうつて言うの？」

そんな島田の後ろにはあるものが見えてジャイアンは僕に聞いてきた

「おい？島田の後ろに修羅見えるのは気のせいかな？」

「気のせいじゃないね……」

そんな明久も島田が機嫌悪いとわかると直ぐに土下座体勢とった

「ごめんなさい！心の底からごめんなさい！」

「全く……アキは無神経なんだから。瑞希、こんなバカのない気持ちいいところでお昼しましょ？今日は天気もいいしね」

「あつ、美波ちゃん待ってください！あ、明久君、失礼します……」

姫路は島田を追いかけるべく、小走りに去った。そんな様子に雄二は呟いていた

「なんだ？島田にお弁当もらえなかったのか？」

「まあ、あのあとだからね……あつ、僕は屋上で三上さんとお昼御飯食べるね？ジャイアンもいくからー」

「何!?!」

僕がそういうと須川君が叫び立ち上がったのだ。そして、覆面姿に

なったのだ

「おや？このパターンは・・・」

「諸君！我々FFF団は！」

「「哀に生きて哀で裁く!!」」

「野比のび太は・・・」

「「我々の敵だ!!」」

「そう言いながら、武器を持って突っ込みに来てるが・・・」

パンパン!!

「あ・・・が・・・」

須川くんは見事に僕の撃った射撃がHITしたのだ。因みに麻醉だよ？ムツリーニからあのとき以降に貰ったから日に日に使いこなせている

「じ、銃刀法違反だろ!?!」

「何いつてるだ？横溝君？何も見てないよね？ね？」

「「「心の底から刃向かってごめんさい！どうぞ！お弁当タイム楽しんでください」」」

僕が銃見せると全員土下座したのだ。明久も含めて全員・・・

「じゃ、行くね？」

「お前らもお昼ご飯は早くたべろよ？」

僕とジャイアンはそういつて去ったのだ・・・

屋上

僕と三上さんとジャイアンと三人でお昼御飯を食べていたのだ。

「モグモグ・・・ぷはー、うめえ！」

「相変わらず、すごい食べぶりね。剛田君は」

「昔からだね。ジャイアンは」

「おう！俺様はもつともつと食べて大きくなってやる！所で三上？その手料理は三上が？」

「そういえば、美味しそうだね？」

そう、三上さんはもうひとつの弁当に美味しそうな卵焼きとかハンバーグが目の前にあったのだ。恥ずかしそうに見せてきたのだ

「あつ。そ、その・・・はじめて作ったの。のび太君や剛田君に食べてほしいなと思って作ったの・・・あ、味見はしたよ!？」

「いや、なんで慌てているんだ?」

「そうだよ? 疑ってないのに・・・」

「だって・・・恥ずかしいんだもの／＼／」

「ぐふっ!？」

ジャイアンも僕も上目使いされると弱いです・・・あまりの予想外の行動に僕は血を吐きそうになりました

「つちよ?! 大丈夫なの!?! 二人とも」

「ビックリしたぜ・・・(女の子にそれをされるとびっくりする・・・)」

「うん。(あまりのかわいさに血をはいたのは内緒・・・)」

「じゃあ食べてみて・・・お、美味しくなかつたらはつきり言っていないから」

「じゃあ、いただきます」

僕は三上さんの手作りの卵焼きを食べたのだ。すると・・・

「!!」

こ、これは!!

「お、美味しい!!」

「なんだこれ?! うめえ!!」

僕とジャイアンは三上さんの食べてほしいのを無我夢中で美味しく食べていた。これは旨い! 旨い!

「本当!? よかった・・・」

「三上さん! またよければ作ってくれない?」

「そうだな! 頼みたいぐらいだ!」

「二人がそういうならまた必ず作るわ!」

三上さんは嬉しそうに笑っていたのをみて僕らも嬉しかった。こうして楽しいお昼ご飯は終わったのだ・・・

教室に戻る前に三上さんと別れると姫路と島田が歩いていたのを見て声かけたのだ

「おーい! 姫路と島田ー!」

「あれ？剛田とのび太？珍しいわね？あんた達二人なのは」
「そういえばそうですね。食堂でもいつていたのですか？」

ジャイアンは二人を呼ぶと、島田は驚いていて姫路はキョトンとしながら疑問を言っていた

「ううん、三上さんと三人でお昼御飯を食べていた」

「美子と？私たちもいけばよかったかなー」

「そうですね」

「え？でも、今僕らと関わりにくいんじゃないの？」

僕は純粹に疑問を聞くと島田はキョトンとしながら答えてくれた

「え？私はあのバカには怒っていたけどあんたらには怒ってないわよ？そんなに気を使わなくてもいいのに」

「そ、そう（いや。あの修羅見たら流石に声かけにくいよ）」

「とりあえず教室いきましよう！」

僕らは教室に戻ると何故か雄二達が大事な話があると聞くとDクラスに攻撃しかけられる状況にしたいから協力してくれと言われたのだが・・・

それを聞いた島田は・・・

「ウチにどうしろと？」

「明久と付き合っている演技をしてもらいたい。それも周りで見ているヤツがムカついて血管が切れそうになるくらいベタベタな感じだな」

そんな島田の態度も全く気にせず、雄二はこちらの要求を島田に告げた

「絶対に嫌!!なんでこのバカと?！」

「落ち着いて?島田」

今朝の事もあるから明久を睨みながら拒否していたのだ。参ったな・・・

「そこを曲げてなんとか協力してほしいんじや。のび太にも頼みたいことがある」

「え?なんで僕?」

「実は姫路に嫉妬役をやってもらおうとしたが、恐らくこのバカは失

敗することも考えたらお前のほうが良いと話したんだ」

確かに・・・姫路にその役をやらしてもこの子は純粹だから万が一の事を考えたらね

「ウチはなんと言われてもイヤ。こんなバカと恋人同士だなんて、冗談じゃないもの」

島田は頑として拒否の姿勢。

「島田よ。冷静になって考えるのじゃ。確かに色々と思うところはあ
るじやろうが、これはお主にしかできないことなのじゃぞ」

「うーん、静観してしまつた場合さ、あとになつて後悔しないか？例え
ば、姫路が転校したとき島田は自分をせめてしまわないか？『あのと
きこうしたらよかつた』ってなつてしまえば取り返しはつかないぞ
？」

秀吉とジャイアンの言葉に島田は「うっ」と呻いていた。クラスの
設備が今より酷いことになれば、また前みたいに姫路の転校話が浮上
してしまうかもしれない。そんなことは誰も望んではない

とは言え、島田が嫌がるのも仕方ないよね・・・

「あのさ、それなら相手が僕じゃなければいいんじゃないかな？」

「何をいつてるのさ？明久？それに他の人つて誰に？」

「例えば雄二とか？」

「おい？お前は俺に死ぬといつてるのか？」

「え？ならムツリーニ」

「・・・操作がある」

「明久よ。ワシの名前が飛ばされた気がするのじやが、他意はないの
じやろっ？」

はあ・・・

「明久？よく考えて？朝の公共の場で島田があれをしたのだから多
分、他の男の子付き合つてる何て誰も信じないよ？これは二人しかで
きなんだ」

「あ、あの！お二人は気が乗らないのかもしれませんがお願いします
！」

姫路が急に頭下げたのだ

「凄く個人的な理由で申し訳ないんですけど、私やっぱり転校なんてしたくないです。だから、協力して下さい!」

「え、あ、いや。僕は勿論協力するけど」

島田の方を見ると、今にも頭を掻きむしらんばかりの様子で明久を見ていた

「わ、わかったわよ!とりあえず形だけでもやればいいんでしょ!けど、演技の内容次第じゃ、どうするかは知らないからね!」

「お二人とも・・・ありがとうございます!」

「ま、まあ、確かに畳や卓袱台もこの前買ったばかりだから結構使い易いし・・・瑞希の為だけじゃないんだから、そこまで気にすることも・・・」

色んな意味で素直じゃないなあ

「なら早速三人に台本を渡すぞ?つとその前にのび太には確認したいが、銃はあるのじゃな?」

「?あるけど・・・」

「明久とのび太と島田のために台本から引用したのじゃ。頼むぞ?」

僕はパラパラと演技の資料を見ていたが・・・え?僕がこんな役やるの?」

「よし!明久と島田はそれをもって屋上でしてくれ!のび太は多分少ないから頭はいつてるだろう?」

・・・確かに短いけど・・・これやるの?

「明久、遠慮なく思い切り頼むよ?島田も・・・」

「ええ、ちらりと見えた資料を見たら・・・ね」

「とにかくやるしかないよ!屋上のカメラに死角あるから大丈夫だけど・・・」

・・・秀吉?こんなので本当に仲良いのに見えることできるかな・・・?

そんな不安と共に屋上へと上がったのだ

演技と亀裂

僕らは今屋上にいるが僕は屋上の手前の所で待機してる。何故かと言うと、嫉妬役ではなく、明久に喧嘩売る役を頼まれた。しかも台本を見たら武器を使えと……

「(本当にこんなので仲良いカップルに見えるようにできるのかな……不安だ)はあ……」

一抹の不安ともに明久と島田が演技始めた

『ねえ……アキ?』

『ん?なに、美波?』

『今更なんだけど……アキに気持ちを伝えようと思うの』

『え、今更言わなくて別にいいのに……』

おお、いい感じだ!このまま上手いこと進めば!!

『ううん、それでも聞いて欲しいの。こういうことは、ハッキリさせておきたいから!』

『う、うん。わかった。それなら聞かせて欲しい。美波の、本当の気持ち』

おお、このまま上手いこといけば……!

『わ、わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ……あのね、ウチは、アキのことが……アキのことが……嫌いな!』

何でそうなるのー!!!? 明久は嫌いな告白されるために屋上で言われるって辛いよ!?

仕方ないと思い屋上を引き上げた僕らは秀吉のいるところの教室に戻った

「全く……お主達は何て事をしてくれたんじや」

秀吉が頭を抱えながらため息をついていた。まあ、せつかくいい感じだったのね……

あれでは清水さんは付き合ってると思ってくれないね……

「し、仕方ないじゃない!? あ、あ、あんな恥ずかしい台詞言うの恥ずかしいじゃない!?!」

明久が余計な台詞を言いそうになる前にジヤイアンはなにか思い

付いたのか秀吉に提案した

「なあ？それならさ、秀吉に見本を見せてくれたらいいんじゃないか？」

「なるほど・・・確かにありだね。頼める？」

「ん、別にいいが？」

秀吉は台本をとりじつと見てから・・・本を置いて明久の手を握る「え？え？」

「わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ・・・あのね、ウチは・・・アキのことが好きなの！」

あつ、明久が固まった

すごいな・・・さすが秀吉の演技だ

「初めて在った時からずつとアキのことが好き！あれからただの友達として傍にいるだけなのがずつと辛かった！本当はただの友達でいるなんて、我慢できなかったのに！」

演技と思えない迫真な秀吉・・・

「アキ・・・あんなことしちゃった後で今更だけど、改めて、貴方のことが好きです。ウチと、付き合ってください」

「母さん・・・今僕は、初めて貴女に心から感謝します!!僕を産んでくれて、本当にありがとう・・・!!」

「——とまあ、こんな具合じゃ」

スツと秀吉の手が明久から離れる。すごいと同時に明久、親は常に感謝しないとダメだよ!?

「す、すごいわね・・・」

「は、はい・・・告白されたわけではないのに、胸がどきどきしてます」「すげえな」

「そこまで褒められると照れ臭いのじゃが・・・まあワシは勉強もせんでコレばかりやっているような人間じゃからな。これくらいは当然じゃな」

謙虚していたが、もっと自信もったらいいのになーと僕は思う。あのあと、明久がぎめぎめと泣いていたが時間はない

「序盤の台詞は台本通りじゃから、向こうも真偽に訝しんでおるとこ

ろじやろう。まだ取り返せる範囲じゃ。ここからはきつちりと恋人
同士を演じてもらうぞい」

「うっ……」

「それとのび太にはすまぬが、その台本に書かれた役を頼むぞ？」

「……きちんとフォロー宜しくね？万が一の時は」

「安心しろ。それはないだろ」

雄二が自信満々に言っていたが、台本を見てないからそんなこと言
えるのさ……

「はあ、とりあえず授業は午後も自習だから時間の心配はないね」

「確かにな……頼むぞ？三人とも」

仕方ない……任された以上は仕事をしないと！

「さて！今度は明久と島田は腕を組んで歩くと言う設定じゃ。屋上で
たのむぞ？」

「あ、あの……二人が腕組む必要はないと思いますが……？」

まあ、姫路にとってはなんか嫌なんだろうけど……

「先程の失敗もあるから視覚的な効果で挽回させた方がいいかもしれ
ないしね。姫路には不満があるのはわかってるけど我慢してくれな
い？」

「わかりました……」

姫路は不満がありながらも引いてくれたのだ。さて……僕はどう
したもんかな……

「とりあえず屋上いこうか？美波」

「仕方ないわね……変なところをさわったらただじゃすまさないから
ね……!!」

「り、了解です」

そして明久達はギスギスした雰囲気のまま廊下に出て、屋上にむ
かった。僕もあとで追いかけないと……

再び屋上について、僕は屋上のドアの前で待機していた。頼むよ!
今度こそは頼むよ!

そんな僕の思いとは裏腹に二人の演技が始まった

『あはは。美波つてば、そんなに腕をギョツてされたら歩きにくいよ

？』

『ふふっ。別にいいでしょ？ウチらは付き合っているんだから、これくらい』

今明久たちは屋上に向かいながら演技を始めて島田は今、明久の腕に抱き付きその様はまるで恋人同士 と思われても遜色ない

『あはは、美波は本当にいい笑顔だねっ？そんなにくついたら恥ずかしいな』

『うふふふ。アキつてば、冗談が好きなんだから。本当にかわいいわね』

さらに強く抱き締めているのを僕は見えていた

『あはは、やだなあ美波、さつきよりも更にくつつくなんて』

『いいじゃない。思いつきり強く抱きしめていたいんだもの』

『まったく美波は甘えん坊だなあ』

『こっちの方が涼しいでしょ？』

『たしかにそうだね・・・背中がゾクゾクするね』

いや、それ涼しいの？

『寒いのか？ならもつとくつきましょ？』

『いやいや、もう充分だよ』

『何言ってるの。照れることなんてないでしょ？』

よし！そろそろだな！

『二人とも！授業中になに抜け出してるのさ!?!』

『の、のび太・・・』

『そ、そんなにくつついて・・・！まるで付き合ってるかのように行爲してるが付き合ってるの!?!』

よし！島田が上手いこと演技続けてくれてるから、このまま続けな
いと！

『の、のび太・・・こ、これはその！』

『そうよ。私とアキは付き合ってるのよ！』

よしよし！二人ともいい演技だ！・・・この後の台詞が心配だ
けど・・・

「明久！君は彼女の何に魅力感じたのさ!?!言い方は悪いけど、君は島

田と釣り合わないよ?」

「ぐっ・・・た、たしかにそうだね・・・」

頼むよ?みすらないでね?

「でも!美波は僕の彼女だ!お前が何を言おうと僕の彼女だ!」

「どこがいいのさ?君がいくらそういっても周りは認めてくれないかもね?」

すると明久はゆっくりと僕の方に歩いてきた。よしよし!そこからわかつてるね?

「(ごめん!)っは!!」

バキッ!

明久が僕の顔面に思い切り殴ったのだ。痛い!?手加減しろって書いていたでしょ!?

「たしかに周りは認めてくれないかもね・・・それでも!美波は僕の彼女だ!!」

おお・・・見事に島田も演技とは言え少し恥ずかしげに顔真っ赤になってる。よし・・・

「そうか・・・ならば」

僕は懐の銃を取り出したのだ。因みにこれも演技に書かれていた

「僕が今ここで君の人生をピリオドしてあげるよ・・・明久」

カチャ

「悲しき友よ・・・僕がこの手で君を殴ってでも止める!」

明久も拳を構えていた。後は僕が発砲する前に明久が僕の顔を思い切り殴って、「美波は僕の彼女だ!二度と手を出すな!」で終わるはず・・・

すると・・・

バンッ!

「!!」

突然後ろからドアを思い切り開けた音がしたので振り返ると・・・

「美子?」

三上さんが来たのだ。島田の問い答えずにツカツカと早歩きでこちらに来て・・・

パチン!!!

「……………え?」

今僕の身に何が起きたのか分からないのだ。ただ少し経ってゆっくりと三上さんの方を見ると……………

涙を流しながら僕の方をにらんでいた

「……………あなたのあの優しさは……………嘘だったの……………!!」
っ!

「誰にでも銃を向ける人なの……………?吉井君に銃を向けて……………!!」
……………いま下手なこと言えない。演技だといえれば二人の努力が無駄になる……………

「そんな最低な人だと思わなかった……………!!さようなら!!」

三上さんは涙こぼしながら走り去ったのだ……………。僕はショックのあまり……………ただ立ち尽くしたのだ……………

亀裂のあとには……

明久 side

僕と島田は落ち込んで立ち尽くすのび太を無理やり教室につれて戻っていき、直ぐに雄二に結果を聞かないと！

「雄二、演技どうだった？」

「失敗もいいところだ！この馬鹿！」

あれ？まさかの罵倒?!疑問に思ったのか美波も雄二に聞いた

「坂本、失敗てどう言うこと？」

「このバカがのび太に思い切り殴っただら？その弾みで盗聴器が壊れた。恐らく肝心の台詞とかが聞けていないはずだ」

「そ、そんな……」

「第一手加減して殴れって書いていたのに、お前は強く殴りやがって……恐らく清水はこれだけで動くと思えないぞ？」

「唯一の救いはお前が島田の彼女といった台詞がギリギリで言ったのが良かったがこれだけで動く確証はない」

雄二とジャイアンはそういうと姫路さんが恐る恐ると手を挙げた

「あ、あの……の、のび太君は何があったのですか？」

あつ?!姫路さん今触れたら……僕は慌ててフオローしようと止めた

「だ、だめだよ!今触れたら!のび太は今(三上さんに)殴られて落ち込んでるんだから」

グサツ!

なにかがのび太に突き刺さったけど気のせいだよな?

すると美波が僕に関節技を締めて……

「い、痛いいい!?!あらぬ方向に曲がってない!?!なんか感覚が!?!」

「この馬鹿!?!考えて発言しなさい!?!のび太は今、傷心なんだから!」

グササツ!

またのび太が刺さった音が聞こえたけど気のせいだよな?

「傷心……?まるでフラれた言い方だな?」

「確かにそうだな」

ジャイアンの言葉に雄二は頷いていた。ごめん、事実その出来事があつたのだよ……

グサササ!!

「ふ、ふふふふ。どうせ僕なんて……どうせ僕なんて」

止めを刺されたからなのかのび太は真っ白になり感情がなくなつて地面にうつ伏せで倒れた

「の、のび太ー!?!?!」

「何があつた!?!のび太ー!?!」

止めを指してしまつたの知らない二人は大慌てでのび太の方に声かけていた。姫路さんはオロオロとしていて、美波はのび太に同情(なのかな?)をしていた。ムツリー二と秀吉は突然のことで固まつているし……

「はあ……みんな考えて発言してよ?」

「二お前(アキ)が言つても説得力ない!!」

僕の発言に雄二とジャイアンと美波が口揃えて言つた。あれ?すごく泣きたい……

ジャイアン side

俺は、いや俺達は今明久と島田からなぜのび太がこんなに落ち込んでるのか訳を聞いたら俺は頭を抱えた

「三上と喧嘩したのか……しかも、喧嘩別れ。今回は別の問題が出てきたか……」

「参つたのじゃ……まさかこうなるなんて思わなかつたのじゃ」
「……(コクコク)」

俺たち男子はのび太をそつとして次の打開策を考えていた。

島田と姫路は……

「美子に私達がきちんと話すから!」

「そうです!だから元気出してください!」

必死で落ち込んでるのび太を励ましていたが、のび太の反応は相槌しかなかった。

「どうだった？島田と姫路？」

俺が戻ってきた二人に聞いても首を横に振ったのだ。そうか・・・今ののび太はそつとしないと無理な状態だな

「駄目よ・・・何を言っても同じ反応しかないわ」

「あんなのび太君初めてみます・・・。美子ちゃんの方には私達がなんとか話してみます。誤解だと言うことを」

「今ののび太は見られないし、三上の説得は頼む。可能なら俺も手伝うからな？最終的にこの作戦をオツケーした責任もあるしな・・・」

坂本がそう言ったあとにすぐに切り替えたのだ

「とにかく俺らから仕掛けないとDクラスは恐らく動かないだろう・・・。ムツリーニ、Bクラスの様子はどうだ？」

「・・・現在七割程度の補充を完了。一部では開戦の用意を始めている」

「そうか。予想よりも早いな。向こうも本気ってことか」

「となると、このままでは時間の問題だな。補充試験もしていたわけだし」

すると坂本はすぐに島田とムツリーニに頼み事をした

「島田とムツリーニには悪いが須川たちと協力してBクラスに偽情報を流してくれ」

「・・・内容は？」

「Dクラスが試召戦争の準備を始めているって感じで頼む。その狙

いがBクラスだということも。ムツリーニには嘘の情報流し終えたら後は須川に一任してお前にはやってもらうことがあるから戻ってきてくれよ？」

「・・・了解」

「良いわよ。それとこのバカには私はまだ許してないってのを肝に命じといてっ！」

おお?!島田のやつまた明久を睨むと修羅が見えたぞ?!怖すぎだろ

!?

「り、了解です」

島田はムツリーニと向かっていくと、雄二は次の作戦を伝えたの

だ。その前に明久に狙いを説明してくれてどうにか理解してくれたみたいだ・・・

「秀吉、清水を交渉のテーブルに引っ張り出してもらいたいんだが、頼めるか？」

「それは構わんが・・・交渉と言ってもどうするつもりじゃ？」

「どうするつもりも何も、こちらの目的は一つだ。清水を挑発して敵意を煽る。向こうが乗ってきたら成功だ」

「じゃが、それだと島田に協力求めないが無理じゃないのかのう？」

「ああ、島田には申し訳ないがその方が確実に挑発できるからな。まあ後のことは俺が上手くやる」

「心得た！交渉の場は空き教室、時刻は放課後直ぐで良いか？」

「ああ。たのむぞ？」

秀吉は頷いて教室を出て行った。まずはDクラスに向かってから時間を置いて島田の説得にあたるつもりなんだろう

残ったのは俺と雄二と姫路と明久、そしてのび太だが今ののび太は遠い目していて多分話聞いてないと思う・・・

「所で明久」

「うん？」

「今日は何を食べた？」

「雄二、そんな話をしている暇はあるの？」

「いいから答えろ。これはこれで大事なことなんだ」

「いつも通り水を飲んだくらい」

「はっ？今なんて言ったのだ？こいつ、今いつも通りっていったよな？ええ？冗談だろ？」

「たったそれだけ？それはいけないな明久！お前は今回の作戦の要だ。しっかり食べて力をつけてもらわないと！なあ姫路？」

「え？そうですね。確かに明久君はいつもきちんとして食べていないので心配です」

「いつもなのか!?明久の普段の私生活どうなのかすごく気になるのだが・・・」

「そこで、だ。姫路」

「はい！」

「何か食べ物——」

「いやー！ごめん！今僕はお腹満腹で食べきれないよ！」

明久がそういうが、坂本は悪魔の微笑みをしているのを俺は見逃さなかった

「いやいや！姫路に迷惑かけまいと我慢しなくていいぞ。なあ、姫路？」

「はい！あつ、でも……お昼はもう過ぎちゃったので何も残っていないです……」

姫路の一言で明久は安堵の表情を浮かべるが……
「安心してくれ。調理室の鍵を借りてきた。材料もある」

だがそんな思いもむなしくポケットから小さな鍵を取り出す坂本。それを見て明久の顔がどんどん青ざめていく

「明久くんは何を食べたいですか？」

「そうだね……た「ゼリーがいいぞ？」!？」

明久がなにか言う前に坂本が答えて言ったら姫路は「頑張つて作ります！」と気合いいれて出ていったのだ

姫路が外に出ていき……

「どういうつもりだ……雄二！」

明久は怒りの形相で雄二をにらんでいたが、なんでそんなに怒つてるのか俺にはわからないな

「別にお前に恨みがあつてのことじゃない。姫路の料理が必要なだけだ」

「え？姫路（さん）の料理が？」

「そうだ」

「なんだ。それならそうと言ってくれたら良かったのに」

「でも、ああ言った以上、姫路はお前に食べさせようとするよな。まあ気絶するほど美味しいけどな」

俺がそういうと、二人はかなり驚愕していたがなんだ？そして明久は顔色悪くしながら慌てて立った

「こ、こうしちゃいられないっ！」

そして明久が急に立ち上がった

「明久、どこに行くんだ？」

「姫路さんの後を追うんだよ！せめてどんな物を作っているのかだけでも確認しないと！」

「俺も行こうかな？」

「おお、面白そうだな。俺も参加するぞ」

一度は姫路の料理はみたいし、気になる。今後の参考になるかもしれないからな

「あははは、姫路さんの手料理食べていいんだよ？・・・まじで」

「御免こうむる。俺はまだ死にたかないからな・・・まじで」

二人ともめっちゃ探りあってるな。仕方ない

「おーい？のび太？」

「・・・」

あー、やっぱり反応はないかー。仕方ないが今の状態を考慮したら、のび太は教室に待機してもらおうほうがいいな

「のび太、俺と明久は坂本と共にうごくから待機してくれよ？」

するとのび太は無言で頷いていた。こりや、少しヤバイかもしれないな

俺の懸念と共に明久らと姫路のいる調理室に歩いた。いったいどんな料理なのか楽しみだな

手料理の偵察とゲーム

明久 side

僕は今、雄二とジャイアンと3人で姫路さんの手料理が気になり行動を起こしていた。本当ならのび太も気分転換で連れていこうとしたけど、今ののび太は何を言っても同じ返事しかないからそつとしている・・・大丈夫かなー

「それじゃ、開けるよ?」

僕の言葉にジャイアンと雄二も無言で頷く。姫路さんに気付かれないようにこっそり扉を開けて中の様子を窺う。調理室の中からは姫路さんが動き回る音が聞こえてきた。

「まだ始まったばかりだな?」

「(そのようだね・・・)」

ジャイアンの言葉に僕は頷いていた。良かった・・・まだ調理を始めたばかりのようで、特におかしな点は見当たらない。姫路が棚からボウルを二つ取り出して何かを入れているのが見える

「(この状態だと問題なさそうだな)」

「(そうだね。ゼリーくらいなら大丈夫かもしれないね)」

「(大丈夫だと逆に困るんだがな)」

くっ! 僕も食べるかもしれないのに、雄二は食べないからそんなこと言えるんだ!! でも何に困るのか気になるから聞こうとすると姫路さんの声が聞こえた

『えーつと・・・まずは、ココアの粉末をコーンポタージュで溶いてー』

ん? 姫路さん。君は一体何を作っているんだ?

「(か、彼女は何を作ろうとしているの? いきなりゼリーから遠く離れた何かになっているような気がするんだけど!?)」

「(静かにしろ明久。姫路に見つかるぞ!)」

いや、この状況を見て落ち着いていられないだよ!! ジャイアンも彼女の行動に混乱している。そしておもむろにオレンジとねぎを取り出しー

『オレンジと長ネギ、どっちを入れると明久君は喜んでくれるでしょうか・・・?』

「(迷わない! その二つの選択肢は迷わないよ姫路さん!)」

「(おそらく貧弱な食生活を送るお前の為に栄養価に重点を置いた特別料理を作ろうとしてるんだろうな・・・味を度外視して)」

「(そんな!?! 気を遣わないで普通でいいのに!)」

「(彼女にとって普通がこれなんだろう。彼女の優先順位で味は栄養より下なんだろうな)」

「そ、そんな!?!」

『あとは、隠し味にタバコ——』

「(これ以上は聞くな明久! 食べなくなる)」

「(待って! せめて最後に入れてくれたのが 『タバコ』なのか『タバスコ』なのかだけでも確認させてよ!)」

「そうじゃないと僕の命に関わる!!! 頼む! 確認させてくれ!」

「(ほらいくぞ明久!)」

「(い・・・イヤだあ!)」

僕は雄二に首根っこを掴まえてズルズルと引きずられ、僕達は調理室を後にした。誰か姫路さんの手料理教えてー!!

ジャイアン side

調理室を後にして俺達は新校舎の三階にやって来た

「よし。それじゃあ、このまま新校舎三階をうろつくぞ。暇そうにな

坂本の提案に俺は正直驚いた。時間がないのに何故? 俺の思ったことは明久も同じ気持ちなのか坂本に質問していた

「え? 時間がないって言ってるのに目的もなくうろつくの?」

「BクラスとDクラスに俺たちが何も知らないというアピールをするためだ」

なるほど・・・つまり

「俺達が作戦を立てているって悟らせないためか?」

「そうだ。それに、DクラスがBクラスに対して敵意を抱いているという。ムツツリー二の偽情報が伝われば、BクラスはDクラス戦も想定する必要がある。そこで俺達が動きに気づいて黙って点数補充に勤しむべきだろうさ」

「……」

「あ・・明久？」

話がついていけず明久は処理落ちのしたパソコンのようにフリーズしてしまった

「仕方ないから今回は俺は俺が説明するぞ。よーく聞け」

俺は順を追うようにゆっくりと説明した

① Bクラスは俺達Fクラスに宣戦布告する気である。現在は点数補充を行っていて、俺たちが気づけば即、試召戦争をするつもり

② 次にDクラスはFクラスに対して開戦するかしないかで内部争いをしている。今のところ開戦派のトップの清水が戦意を失っているため非開戦派の平賀に分がある状況

③ 今のFクラスはBクラスに宣戦布告されればまず勝ち目はない。だから、Dクラスに宣戦布告される必要がある。目的は戦後に用意される回復試験を受けるために時間だ。

④ 最後に、現状とこれからどうするか。現状はBクラスからFクラスへの宣戦布告を遅らせるために、『DクラスがBクラスを狙っている』という偽情報を流した

「ここまででは理解できたか？明久」

「う、うん。ジャイアンつてそんな賢かった？」

「……正直坂本の説明のを聞いてもギリギリでしか理解できなかったから思い付いて喋った」

俺が苦笑いで言うのと坂本がまとめを言ってくれた

「まっ、分かりやすく言えばBクラスに対してはFクラスに戦意が向けられていることを気づいていないことをアピールし、Dクラスには

Fクラスとの試召戦争の判断材料にしてみらうということ」

分かったか？と確認するように明久に問いかける坂本

「うん。それで、のんきに廊下を歩くってただフラフラ歩き回っていればいいの？」

「まあ、そうだな」

やっと理解してくれて助かる・・・

しかし・・・

「仮に始まってものび太は全く機能しないと俺は思うぞ？」

「だろうな・・・。のび太に関することは女子の二人にどうか三上を説得させてくれたらいいんだが・・・多分、今、のび太があれな以上は三上はもつと機嫌悪いだろうな・・・」

「え？そんなに？」

「下手したらのび太抜きでしないとダメだからな。とりあえずおいとこう」

明久の疑問に坂本が答えてくれたようにのび太抜きで作戦たてることになるだろうな・・・

「そうか。ねえ、なんかゲームしない？」

何を突然・・・いや、待てよ？好機か。敵を油断させるためにはいいな！坂本も領いていたし明久が何をするのか？って聞くと・・・

「んじや、英単語クイズでもやるか。英単語を言うからその意味を答えるんだ。語問のうち一問でも答えられなかったら負けだ」

・・・英語はダメだろ・・・自信ねえ

「この際勝ち負けは関係ないが、少しの勉強と思えばいいだろう？」

まっそうだな。俺が領くと坂本は待っていたと言わんばかりの顔になった

「よし、それじゃ、罰ゲームは『負けの方が勝った方のいう事を何でも聞く』だ。それじゃあ、行くぞ！」

「え!？」

「ちよ・・・ちよつと待ってくれ!ふざけるな!」

しかし、雄二は聞く耳を持たずに問題を出した

「まず明久から聞くぞ。」April」

エ、エイプリル? やばい・・・全然わかんないが、えーとあれかな? いや、なんだって?

「ふっ、こんなの簡単だよ!」

何?! 明久が・・・あの明久が分かっただど!?

「じゃあ、言ってみろ」

「道路に使われているアレだよね」

ごめん、いくらわからない俺でもそれは違うってわかる。明久が言いたいのはおそらくアスファルトだろう

「俺の勝ちだな」

「どうして最後まで聞かずにそんなことが言えるのさ! 勝負は最後までわからないはずだよ!」

「いや、お前が言いたいののはアスファルトだろ? 発音からしてエイプリルだから多分違うと思う」

「なら、剛田? お前は?」

ふっ、答えはあれだろ?

俺は自信満々に答えたのだ

「解雇!」

「聞きたい答えとは違う! 答えは4月だ!」

俺の答えに坂本はつつこみを入れてきた。ほー、答えはそれなんだな。メモメモ・・・と・・・

「嘘だ!!」

「いや、坂本のが答えあってるだろ?」

「・・・吉井、雄二と剛田の言っていることは本当。答えは4月で正解」

背後から音もなく霧島さんが現れた

「おお?!」

「ぶっ!?! しょ、翔子!?!」

「霧島さんがそう言うなら僕の負けでいいよ」

いや、どうあがいてもお前の間違いなんだから素直に認めろよ。そ

して素直に間違いを認めないと人としてどうかと思うぞ？

「それじゃあ、次は霧島さんの番だね？」

「……頑張る」

雄二の後ろに立っていた霧島さんが小さくコクンと頷く

「ちよつと待て、いつの間に来たんだ!？」

霧島さんを見て慌てふためく坂本。なんか斬新だな？俺からしたら

「問題を出し始めたあたりからずつといたじゃないか」

「……雄二が『何でも言うことを聞く』って言ったのが聞こえたから」

すごい局所的なところを聞いていたんだな。そして坂本への愛が深いんだな……

「それじゃ、霧島さんが出題者で雄二が解答者だね」

「……わかった」

その動きに坂本は慌てて言った

「ま、待て！翔子が参加するなんて聞いていないぞ!？」

「まさか、あの雄二がまさか逃げるだなんてことしないよねえ？」

「く……っ！じよ、上等じゃねえか！きつちり答えてやらあ!」

明久のわかりやすい挑発に乗り、坂本がやる気を出した。なんか普段とは真逆で見てて面白い

「というわけで霧島さん、一問目をどうぞ」

「……うん。えつと——」

何かを思い出すように霧島が顎に手を当てる

「——”bet roth ed”」

ダツ（身を翻す雄二）

ガツ（その肩を掴む俺と明久）

「雄二、どこに行こうとしているのかな？」

「答えれるだろ？それに……敵前逃亡者は……ダメだろ？」

「キ……キサマラ……!」

俺達を恨めしそうに睨みつける雄二。今までにないほど殺意が込

められている

「ねえ？霧島さん。いきなりトドメっていうのも可哀想だから、問題を変えてあげてよ」

「……わかった」

小さく頷いて霧島さんは明久の提案を呑む。そしてそのことで胸をなでおろしている坂本。まあ本来の目的が時間稼ぎなんだしこ
うもあっさり終わっては意味がないだろうな……

「……じゃあ、”prize”」

「prize……【賞品】か？」

霧島さんは正解と小声で告げてから更に問題を出す

「……”as”」

【として】

「……”engagement ring”」

【婚約指輪】

「……”get”」

【手に入れる】

「……”betrotthed”」

ダツ（身を翻す雄二）

ガツ（その肩を掴む俺と明久）

「放せお前等！後生だから放してくれ！」

雄二の悲痛な叫びがこだました。こんな坂本見てて面白い……！
「頼む、本当に頼む。今の一連の単語を聞いたなら俺の恐怖がわかる
だろ!？」

「えっと、つなげると【賞品】【として】【婚約指輪】を【手に入れる】
だね。霧島さんは勝ったら雄二に婚約指輪を買ってもらうつもりな
の？」

明久の問いに霧島さんは頷いていたが俺は疑問におもったことを
聞いた

「しかし、俺らは学生だろ？。指輪なんて買えるわけないだろ」

「……あっ!？」

霧島さんが何かを落とした。これは……宝石店のパンフレット……

「……冗談」

そう呟いて、霧島さんは顔を赤らめ、恥ずかしそうにパンフレットを拾う。その様子に坂本が怯えていたのをみて明久が笑っていた

「あはは。雄二つてば、そんな僕らにしか聞こえないような小さな声で『ヤバイ、ヤバイ』なんて連呼されても困っちゃうよ?」

そして勝者は霧島さんと言うと坂本は抗議しようとしたが答えられてないと言ったらおとなしくなった

「……翔子、さつき冗談って言ったよな?」

「……うん。婚約指輪は冗談」

指輪は冗談なのか。まあ学生なんだしそんな高価なもの買えるわけないしな—

「じゃあ、本気の方はなんだ?」

「……それは——」

再び頬を染めて俯きながら霧島さんが呟く

「——人前じゃ、恥ずかしくて言えない……」

「なんだ!?俺は何をさせられるんだ!」

人前だと恥ずかしくて言えないこと……なんだ?

「……こんなところで言わせるなんて、雄二はいやらしい」

……判決、坂本雄二の罪は明久に裁いてもらおう

「死ぬ雄二いいーっ!」

「うおおい!なぜ俺が狙われるんだ!?俺は何も言っていないだろ!」

「黙れ!今朝聞いた『寝ている霧島さんに無理矢理キスをしたって話も含めて納得のいく説明をしてもらおう!」

「マジで!?即警察に通報だな!」

「違う!話の内容が変わっているぞ!?本当は——」

「……キスだけじゃ終わらなかった」

「おい雄二。いくら籍を置いているからってこれ以上のことは……よし!Fクラスで記者会見だ!霧島さんとやり過ぎたことを報告だ!」

「誤解だ！というかお前は何でそんなことを真に受ける！そして、お前たちの思うことはしてない！ってか発言がアウト！」

「知るか！反省はするが後悔はしない！」

「嫉妬と怒りが可能にした、殺戮行為の極致を思い知れ・・・っ！」

「明久がもの凄い勢いで坂本に襲い掛かる。」

「うおっ!? 明久の動きがマジで見えねえ！」

「・・・キスの後、一緒に寝た。」

「明久の動きがさらに加速される。こいつは水と調味料だけでなんでもこんな機敏な動きが出来るんだ!? 俺でも捉えきれないぞ!?」

「ごっつ！バ、バカな・・・！明久に力で負けるなんて・・・！」

「・・・とても気持ち良かった」

「霧島さんの言葉で嫉妬心を煽り明久はさらに加速する」

「更に分身——いや、残像か!? もうお前人間じゃないだろ!」

「『殺したいほど羨ましい』という嫉妬心は、不可能を可能にする・・・」

「！」

「それを勉強に活かせよ!」

「嫌だね!そして雄二! くたばれ!!」

「上等だ! こうなりやこつちも本気で相手してやらあ!」

「こうして西村先生（鉄人）が来るまで二人の死闘を俺と霧島さんは黙って眺めていた。見てて面白い・・・」

必殺仕事人は身近にいる

ジャイアン side

俺たちはあの後、鉄人こと西村先生の登場により全力で逃げた。つてか俺は何もしてないのに追いかけられるなんて・・・理不尽だ

「はあはあ、ま、まさか鉄人が出てくると思わなかったぞ・・・」

「た、確かに・・・あ、危なかった・・・」

「お、お前らあの先生からひごろにげてるのか・・・そ、尊敬するぞ」
俺達はぐったりとしながらもどうやらBクラスの監視の目から逃れたのが何となく分かったのだ。そして今俺達はFクラスでぐったりしていたが、のび太は相変わらずボーとしていた

「余分な時間をとってしまったから予定は問題ないが、ムツリーニは戻ってきてるのか?」

「えーと」

「それなら今戻ってきたぞ?」

教室を見渡すと、タイミング良くムツツリーニが帰ってきたところだった

「お?戻ってきたか。偽情報はどうだ?」

「・・・首尾は上々」

誇るわけでもなく、淡々と答えるムツツリーニはまるでプロだな

「・・・次の仕事は?」

「姫路がもう少しで戻るはずだからその時に実行する」

「ちよつとして、姫路の何か次の作戦の要となるのか?」

「ああ。暗殺用としてな?」

本人が聞いたなら泣くな。まあ、美味しすぎて苦しむのかもな?

「根本君に食べさせるの?恐らく彼食べないと思うよ?」

「いや、あいつはターゲットではない」

「?なら誰に?」

「狙いはBクラスからDクラスへの使者だ。ムツツリーニの偽情報で

Dクラスに狙われていると知ったら、Bクラスの連中はその対応をする必要があるその場合、考えられるとしたら何だ明久？」

「うくん・・・僕らがCクラスにしたことするんじゃないかな？」

「まあ、正解だ。同盟を結ぶことだな。使者を出すだけで戦いを避けられるなら、それに越したことは無いからな」

なるほどな。そう言うことをお前たちは前の戦いをしていたのか・・・それをする事で戦いは避けられるしメリットはある。しかし、敵に何故か同情してしまうのは何故だ？

「けど、暗殺だったらスタンガンでもいいんじゃない？ わざわざ姫路さんの料理で毒殺なんかしなくても。」

「・・・スタンガンだと悲鳴をあげられる」

「口を手で押えればいいじゃないか？」

「アホかお前は？んなことしたら自分も感電するだろうが」
「でも・・・」

「気にするな。姫路の料理を選んだのは俺の趣味だ」
すると・・・

「え？坂本君、私の料理が好きなんですか？」

すると、教室に姫路が戻ってきた。その手には5・6個くらいのドリンクゼリーの容器が見える

「ひ、ひめ、じ・・・？」

姫路の声を聴いて血の気が引いたように顔色が悪くなる。そしてギギギ、とブリキの玩具のように首を動かす

「良かった。そう言ってもらえると嬉しいです。けど、霧島さんに聞かれたら怒られちゃいますよ？」

しかし、坂本にとっては有りがたくないな。

『ウエルカム(グッ)』

「テメエ、そのムカつくほど爽やかな笑顔はなんだ・・・！」

仲間が出来たことで嬉しいんだろう。顔から喜びがにじみ出ている

「坂本君の分もありますので、良かったらどうぞ。」

姫路は笑顔のまま明久と坂本にパック入りのゼリーを渡す。それ

を出来る限りの作り笑顔で受け取る明久と雄二。この二人だけなのか

「そ、そうか。すまないな。後で腹が減った時にでももらおうとしよう」

「ぼ、ぼくもそうさせてもらおうよ」

「あつわかりました。あとのび太君の方に少しいつてから、私は調理室の鍵を返しに行ってきますので。」

ペコリとお辞儀をして姫路はのび太に何かを渡して教室から出ていった。何を渡したのだ？

姫路がいなくなり俺たちは再びAとDクラスのある新校舎へと向かい、階段の近くで隠れながらBクラスの様子を見ている

少し待っていると教室から男子生徒が一人出てくるのが見えた。おそらくBクラスの生徒だろう

「相手が一人っていうのも予想通りか？いや、わかっていたのか？」
「まあな。Bクラスは点数補充に忙しくて使者に人数を割けるわけがないからな。立場の無さも考慮すると男子が一人で向かうのは予想通りだ」

なるほどな。そこまで計算するとは本当にすごいな。Bクラスの男子はDクラスへ向かって歩き始めている。周囲には大勢というわけじゃないけど人影が少し見える

「(だけど、うまくいくの?)」

「(ムツリーニを信じろ!)」

BクラスとDクラスの間、短い道のりを使者が歩く。

あと三十秒もしないうちにDクラスの扉を叩くことになる。

どんだん距離が近づき、使者がDクラスにつくまであと五メートル。

「(行けるのかよ?)」

後三メートル

「(大丈夫だ。ムツツリーニを信じろ)」

後二メートル

「(けど、もう距離が・・・!)」

後一メートルというところで何かが視界を横切った。すると・・・

カッ

何かの音が使者から少し離れた場所の廊下の壁から響く。目を凝らすと壁に何かが刺さっているのが見える。

『なんだ、アレ・・・?』

『先に何か貼ってあるな。』

『何かの写真、か・・・?』

壁に刺さったものを見ようと集まりに居た人たちが集まり出すと使者もそれを見ようと、集まった人たちの最後尾についた

そうか! ってことは・・・

『・・・(ススッ)』

音も無くその背後に迫るムツツリーニ。今は周囲の視線は全てカッターと写真に集まっている。誰もその様子には気付いていない

『・・・(ガッ!)』

『——っつっ?!?!』

暢気に写真を見ようと背伸びをしていた使者をムツツリーニが後ろから羽交い絞めにして口を押さえる。使者は目を白黒させて突然の事態に驚いている。そして、ムツツリーニの手に例の暗殺道具が見えた

明久たち曰くの物体X (ゼリーVer) か・・・

『・・・グッ!』

『——っ!——っ!』

指の隙間からパツクの先を押し込み、ムツツリーニが中身を出し出す。相手はそれを必死になって阻止しようとしていた。他の生徒たちが写真に注目している背後で命を懸けた攻防が繰り広げられる。

そして俺らが息を呑んで見守る中、その戦いはついに決着を迎えた
ゴクリッ

遂に飲み込んでしまった。これを見て俺達は一斉に手を合わせる。

『カ・・・バ・・・! キサ・・・マ・・・! ムツリ・・・リーニ・・・』

末期の寸前に憎しみのこもった視線を向けてくる使者に対して、ムツツリーニは情け容赦なく更にパツクの中身を押し込んだ。使者の手が一瞬ビクンツと跳ね上がる

そしてそのまま男は動かなくなつた・・・

「逝つたか・・・」

美味しさのあまり天にのぼつたに違いない!

使者をBクラスの方におき、Dクラスには見えない場所におき、満足そうにムツツリーニは戻つてきた

「・・・任務完了」

「よし!ここを脱出するか。もう目的果たした今、ここには用はねえからな」

坂本の指示通りに俺たちはすぐに動いたのだ。明久は聞こえてないか気づいてないがあの写真・・・いや、俺はなにも見てなかった

嵌めると挑発

明久 side

無事に戻り時間は六時間目の終盤くらいか。ムツツリーニの情報によるとBクラスはこちらに思惑通りに疑心暗鬼に陥っているらしいという情報がつて入ってきた。

「これで時間稼ぎは成功したかな？」

姫路さんと美波以外は雄二の席に集まったのだ。因みにのび太は今日は午後は自習だから良かったが全く反応はなかった。正直、困ったな……

「のび太の奴あれ以降全くしゃべってないな……参ったな……」

「まあ明日には少しは立ち直ってるはずだが……秀吉、例のDクラスとの交渉は大丈夫か？」

「うむ。清水を引つ張り出す事には成功した。放課後に旧校舎2階の空き教室で待ち合わせという手はずになっておる」

「ここまででは全て思惑通り、あとはDクラスを挑発すれば万事解決か」

ジャイアンの言う通りだ。だけど、どうやって挑発？

「それについてはとっておきの作戦がある」

口の両端を上げる雄二。その顔から見てよほどの自信があるのだろう

「但し、明久は余計な口を挟むなよ。一応お前と島田がいないと挑発にならないから連れて行くが、下手なことを言われると取り返しのつかないことになるからな」

「了解。その辺は全部雄二に任せるよ」

「……一つ気になることがある」

何かの機械を操作していたムツツリーニが口を開く。どうしたんだらう？

「どうしたムツツリーニ、何かあったのか？」

「……根本がAクラスに何かの情報を流していた」

え？何故Aクラスに？

「怪しいな・・・坂本はどう思う?」

「俺も同意見だ。ムツツリーニ、その情報の――」

――バンツ!

大きな音を立てて教室の扉が開け放たれた

「霧島さん?」

ジャイアンが戸惑いながら言うが気にしないで霧島さんは雄二に向かっていった

「・・・・・・雄二・・・っ!」

その向こうから現れたのはAクラス代表の霧島さん。いつものクールで落ち着いた様子とは異なり、今は焦っているように見える
「何かあったの?」

「そんなに慌ててどうした?」

雄二が戸惑いながら聞くと・・・

「・・・・・・どうした、じゃない。雄二こそどうしてまだ学校にいるの・・・!」

「?お前は何を言っているんだ?」

「・・・・・・お義母さんが倒れたっていうのにどうして様子を見に行かないの・・・!!」

え?!そ、それ本当なの?でも雄二は納得いかない顔で反論した

「はあ?あのおふくろが?風邪すら引かない全身健康体だぞ?」

雄二が信じられないように言う。

「・・・・・・とにかく、早く家に・・・!」

業を煮やしたように霧島さんは雄二の手を取って強引に連れ出そうとする。

「お、おいっ!ちよつと待て!俺は今から大事な作戦が――」

「今はそんなこと言っている場合じゃない!」

聞いたことのない霧島さんの怒声にここにいる皆がその様子に唾然としてしまう

「だから待て翔子!何かおかしい!どうして俺より先にお前が・・・」

「いいからっ!」

「翔子、落ち着——」

抵抗虚しく、雄二は霧島さんにあつという間に連れ去られてしまった。

「……」

えーとどうしよう？

そんな雰囲気の中ムツリーニが口開いた

「……今の話はおかしい」

「え？おかしいって……どういうこと？」

「身内になにかあつた時って普通、家族の雄二から連絡がつかはずだろう」

確かにジャイアンの言う通りだ。いくら霧島さんが雄二のお嫁さん候補だとしてもこういう時に雄二より先に連絡が来ることはあり得ない

「雄二に連絡がつかんかったのじゃろうか？」

「いや、それも変だよ。ずっと校内に居たんだから」

「じゃが雄二の携帯は壊れたのじゃろう？じゃから霧島に連絡を入れたという可能性も……」

するとジャイアンは苦虫を潰したように言ったのだ

「嵌められたと思う……あの情報事態が偽物だ」

「なんじゃと!？」

ガタンツと卓袱台に勢いよく手を突く秀吉

「これはかなりマズいよ！清水さんを挑発する為の作戦は、全部雄二任せだったっていうのに……」

そう、雄二に任せつきりだったし肝心の、のび太も今は機能停止かのように止まっていたのだ

「交渉時間を遅らすことは……？」

「無理じゃ。取り合ってもらおうのも一苦労したからのう……」

そ、そんな……

「……そろそろ時間」

「え!？」

ムツツリーニの言葉で時計を確認すると、六時間目終了時刻を表し

ていた

「……どうする?」

「どうするも何も、雄二がいない以上僕達で何とかする他ないよ。」

そうはいっているけど僕は今生懸命考えているが何も浮かばない

「そうじゃな。ここに来た以上もう後には退けん」

「うん。そうだね。それじゃあ、僕らと美波くらいかな?」

「いや、ムツリーニには残ってもらわないとな? 何らかの交渉してもらえるようにしたはずだろ?」

「うむ。謝罪としてっていったからのう。ムツリーニは残ってもらおう」

「……承知」

「それじゃあ、僕と美波、秀吉で行こう。そして向うで清水さんを怒らせればいいわけだね」

「うむ」

すると美波がやって来た。その眼はいつものつり上がった目がさらにつり上がっている。やっぱりまだ機嫌は治っていない……

僕らの方に行く前にのび太の方に向かっていったのだ。そういえば三上さんに話すると言ってくれたんだったね? もしかかっていなかったのはそういう訳? すると姫路さんも来たのだ

「三上さんのところに?」

「はい……今の美子ちゃんは怒っていて聞いてくれません……」

そっか……

のび太の方を見ると、やはり落ち込んでいたのかふらふらして荷物もって動こうとしていた

「明久たちにあと頼んでいいか?」

ジャイアンは突然立ち上がってそういったのだ。どうしたのだろ?

「あいつを一人で帰らす方が怖い。事故あったら困るからな」

「……確かに」

「なら、お前らは先に交渉頼むな? こいつを連れて帰るから」

ジャイアンはいそいそと荷物を持ちのび太と歩いて帰ったのだ。こういうのはのび太と長い付き合いのジャイアンに、任そうすると……

「行くんでしょ？」

そう言つて教室を出ていく美波にそれに合わせて僕たちも急いでついていく。何が何でも成功させないと……!!

僕らは交渉する場所につくと・中ではDクラス代表の平賀君と清水さんがそれぞれ椅子に座つて僕らを待っていた
「待たせたね」

大して悪びれた様子もないように、口だけの謝罪を述べてみせる。あくまでも謝罪というのは名目で僕らの目的は挑発だから怒らせないと意味がない!

出来る限りの無礼を――

「お姉さま――美春はお待ちしておりましたー!!」

来て早々に清水さんは美波に抱きついてきたのだ。あれ？

「美春!? ちょっと、暑苦しいからひつつかないでよっ!」

目標は完全に僕らを無視して美波に飛びついていていた。というか、美波以外眼中にない雰囲気だ

清水さんが美波にいろいろと言っていたが、清水さんは構わずそのペースで続けていた。主導権向こうが握つてるような気が……

「清水よ、そこまでしておくのじゃ。島田は明久の恋人、むやみやたらと手を出すでない」

秀吉が清水さんに切り込んでくれた。清水さんは初めて美波以外の面子がいることに気がついたかのような態度で答えた

「何を寝ぼけたことを言っているのです? お姉さまとその豚野郎の間にはなんの関係もないことくらい、お姉さまのお顔を見れば一目瞭然です」

いかにも全て知っていますと言った口ぶり。まあ実際に情報収集で僕と美波が付き合っているという話が嘘だということは知ってい

るんだらうけど・・・

「・・・それは・・・」

美波は清水さんの言葉にリアクションを取りあぐねていた。僕に対しては怒っているから付き合っていることを否定したいけど、クラスのことを想えば付き合っていることを肯定しないといけない。

二つの考えが美波の頭を悩ませているのだろう・・・

「それに私は勉強や部活がしてないから腹立つとかそういう話ではありません」

え？どういうこと？

「美春は前から二人の関係を見てきましたが、その豚野郎の態度は最低です」

僕の態度が最低だって？

・・・思い当たるフシがたくさんある

「同じクラスの姫路さんに接する態度とお姉さまへの態度があまりに違い過ぎます。」

言われた瞬間、美波がピクンと反応した

「姫路さんには優しく気を遣い、まるでお姫様を相手にするかのような態度。それに対してお姉さまへの態度はどうです？全く気遣いも無ければ、異性に対する最低限の優しさすら見られないじゃないですか？」

「・・・」

僕はなにも言い返せなかった。確かにその態度に心当たりはあるかもしれない・・・

「はつきり言えば、その豚野郎はお姉さまの魅力に気付いていないどころか何の気も遣わずに男友達に接するような態度でお姉さまに接している大馬鹿野郎です。そんな男がお姉さまに相応しいかどうかなんて、容姿や学力以前の問題です。それに——」

すると清水さんは今まで見たことない怒りの形相になって怒ったのだ

「お兄様と美子お姉さまの仲違いをさせた豚野郎に何一つお姉様の隣に立つ資格はありません!!そして、お兄様を思いきり殴った貴方はお

姉様の魅力も気づいてない最低な奴です!!」

!!・・・確かに言われたらそうだ。すると、美波は耐えきれずに外へ出たのだ。僕が追いかけてようとすると清水さんは厳しい言葉で僕に批判していた。秀吉は美波を追いかけてくれて平賀君は外へ出ていき残ったのは二人だけ・・・

「はつきりもう一度いいいます・・・私はお兄様は立派な男性と認めてます・・・!美子お姉様との仲も見てて微笑ましいのです。それなのに・・・それなのに・・・お前が二人の関係を最悪にさせたのです!」

僕はなにも言えず下に向いていた

「この話し合いに何の目的があったのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて時間の無駄ですから・・・お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです!お兄様の件も許しません・・・!」

清水さんが席を立つ。この話し合いは失敗だ。Dクラスは僕たちに宣戦布告をしてくるようなことはないだろう

「ちよつと待って、清水さん」

「・・・なんです?美春に何か言いたいことでもあるのですか?」

清水さんを引き留め、僕は今思っている全部をぶつける。せめてこれだけは言わないと!!

オマケ

明久たちがいないときのことだ

・・・三上さんと仲違いしてしまっただし、正直目の前が真っ暗だ・・・
「ん?」

姫路さんの手書きが書かれていた、何々・・・
(必ず美子ちゃんを説得しますからこれ食べて元氣だしてください!とかかかれています目の前に美味しそうなゼリーがあったのだ。よし食べよう!)

しかし、僕は忘れていた。姫路さんの手料理はジャイアンの料理より上だったことを――

「あつ、おいし・・・グフツ?!」

あ、れ?なんか川が見える・・・あー、なんか気持ち良さそう・・・

この吹っ飛んだ意識が戻ったのは家帰ってからだった・・・

準備と開幕

ジャイアン side

『我々DクラスはFクラスに試獣戦争を申し込む!!』

翌日の朝のHR終了直後にDクラス男子がやって来て高らかにそう告げていった。ん?おかしいな?昨日聞いた話では、作戦は失敗したと聞いていたが・・・?

「なんじやと?」

「昨日聞いた話だと清水の挑発は失敗のはずだが?ムツツリーニ。昨日何かあったか?」

「・・・昨日何があったかはわからない。ただ、今日は朝から清水が興奮していた」

「清水が?それなら昨日の挑発は成功していたってことか?」

「いや、そんな事はないはずなんじやが・・・。明久。お主、あの後に何か話しておったのか?」

「い、いや、別に。それよりも試召戦争だよ! Bクラスじゃないとはいえ、今の僕らには厳しい相手なんだから早く準備を始めないと!」

秀吉の確かめる言葉に明久は目を泳ぎながら答えたのだ。・・・こいつが何かしたのかもしれない

「おい、お前ら真実はどうであれ、まずは試召戦争だ。ここまでやってDクラスに負けたら意味がない。後から問い詰めればポロリとこぼすだろ」

「うむ。確かにそうじゃな。今ワシらの中でまともに戦える者は少ない。この戦力で凌ぎ切るのは至難の業じゃ。余計な事を考えている暇はあるまい」

確かにな・・・

「防衛が優先だが作戦はどうする?」

「その前に今回は一つだけ俺らにとつては最悪なことがある・・・」

坂本が深刻そうな顔である奴を見ていたが、明久たちは分かっているでもないもんな・・・

「?どうどう?」

「のび太を見てみる？」

言われたとおりに男子は全員見ると固まっていた。いや、俺は今日あいつと登校できなかつたし、三上とも会えてないから知らないけど……

「二」何で、教室に布団があつて横になつてるの！」

「あの通り、のび太は戦力にならない……おまけに事前に俺が個人で確認したが……」

紙を見せてくれると、俺はある意味久しぶりにあいつのこの点数を見たような気がする

「化学以外は0点……!?!」

「それだけじゃないのう……」

「……化学なんて10点しかない」

最悪だ……クラスの戦力なる奴が前線にも立てない程の点数を出すなんて……

離れた場所でも……

「あんなのび太君見たことありません……」

「そうね……」

「美波ちゃん？えっと……」

姫路は少しだけ気まずい感じがしたが島田は姫路には怒ってないといったのだ。

「私が怒ってるのは、あの馬鹿ぐらいよ……」

「そうですか……」

すると島田は話しかけるように姫路に昨日の三上の話をしていた
「美子は完全にのび太に怒ってるし、下手したら私より酷いぐらい怒ってるわ」

「はい……。いくらこちらが言っても美子ちゃんのはのび太君を許すつもりもないし聞いてくれません……」

「参ったわね……それと瑞希？気づいてない？」

「？何がですか？」

「何だかのび太何時もより顔赤いような気が？」

「？言われてみれば……でも今は何を言っても、のび太君はたぶん聞

こえてません」

のび太の顔色も気になるが、恐らく聞いても反応は鈍いだろうと思
いそつとした

「美波ちゃん」

「?なに瑞希」

「私は転校もしたくありませんけど、今回はもう一つだけあります」

「・・・のび太の事ね?」

「はい!のび太君が自分を責めないように今回は私達が頑張りましよ
う!いつも助けられてるお礼として!!」

「ええ、そうね!（でもやっぱり、アキは許さない・・・）」

こんな会話してるのは明久たちは知らない・・・

明久 side

僕らは雄二に作戦を聞こうとしたが、雄二は突如立ち上がってみんなに聞こえるように喋った

「全員注目!いいか!?これから俺たちFクラスはDクラスと試召戦争
を突入する!まずは戦力の確認だ!各自、自分の持ち点を紙に書いて
持ってくるように!」

ざわついた教室が静まりかえり、クラスの皆がペンを取って紙に自
分の持ち点を書き込んでいく

「そう言えば、ワシはそこまで点数は消費しておらん」

「え?そうなの?」

「うむ。総合科目勝負を挑まれたらワシらが率先して参加しよう」

心強い話を聞きながら、僕も自分の点数の書き終えた紙を雄二に渡
す。雄二はそれをまとめ、簡単にばらばらめくりまたみんなに聞こえ
るように演説した

「注目!最初に下位十名に点数の補充をしてもらおう。補充組は教室に
残ってくれ。尚、科目は数学を受けるのが七人、世界史と化学と保健
体育を受けるのが一人ずつとする。各自の配点は点数確認を終えて
から発表する」

雄二の指示が終わると皆はそれぞれ動いていたが、僕はどうしても

気になったのがあった

「ねえ雄二」

「なんだ？」

「どうして点数補充を細かく分けるの？ 僕らは早く点数を補充しないといけないんだから、まずは採点の早い数学からそろえるべきなんじゃないの？」

そう、この学校の数学の先生は採点早いのが有名なのだ。戦力を早く固めるなら数学がいいのに何故？

「今回は極力時間を稼ぐのが目的だからな。戦術云々というより心理戦によるにらみ合いが必要になる」

「うん。それは何となくわかるんだけど」

「もしそれで数学だけ補充したと相手に知られてみる。こっちは何も考えていないと言っているようなもんだぞ」

「だが点数補充をしていないっていうのは相手にもう知られているはずだ。今更隠す理由もないと思うんだが？」

ジャイアンの言うとおりで。どうするのさ？

「そこを警戒させるのが作戦だ。まあいいから見てろ」

そういつて暫くするとFクラスの生徒の点数を確認してその中で数人を丸で囲んで仕分けたところで雄二が教壇に立ちあがった

「いいかお前ら！ 前回勝ったからと言って相手を舐めるなよ！ この状況の上に相手は俺達より二つもクラスが上だ！ 下手に欲をかくと逆に手痛い目を見るハメになるからな！」

出撃前ブリーフィングとして、雄二が皆に説明を始める

「どんなに有利な状況でも決して深追いはするな！ 決められた場所でひたすら防衛に徹しろ！」

「向こうは圧倒的に有利な女子の総合科目をメインに攻めてくる！ 島田と秀吉、剛田、そして明久を主軸にうまく立ち回れ！ 限界まで粘ったら状況によっては教室前まで退いてもいい！ 以上だ！ 健闘を祈る！」

丁度チャイムがなると皆は叫んで出ていった。僕は美波の方に直ぐに寄った

今回は向こうもこちらに何かされる前に勝負をつけようと電撃作戦でくるはずなので、最初はスピード勝負だ。僕も渡り廊下に向かうとしてみると美波も同じように向かっていて姿が見えた。・・・一晩たったけど、まだ怒っているのだろうか？

「美波、おはよう」

「・・・」

僕は意を決して話しかけてみる。気まずいのは確かだけどさ！

「Dクラスが宣戦布告してくれてよかったね」

「・・・」

「こちらにもむいてくれない。」

「あとはこの戦いを乗り切るだけだね」

「・・・」

全然相手にしてもらえない。負けるもんか！諦めずに頑張つて話しかけてやる！きつと一方的に話しているから悪いんだ。質問に変えてみよう

「今回はのび太がダメだから僕らが頑張ろう！」

「・・・そうね。のび太に関しては流石に負担かけすぎてあんな事を招いたしね。うちのメールの確認不足もあるけど、もと言えばあんなの責任よ」

うっ・・・確かに元と言えば僕のメールからあんなことに発展して三上さんの仲違い作ったきっかけだ

「それとあんたはどうせ一晩たったらウチが忘れると思ったの？この際はつきり言うわ！もう話しかけないで！ウチの事なんてほつてよ!!」

美波がダッシュで先に渡り廊下に向かって行った。そんなつもりは無かったのに・・・失敗したなあ・・・廊下を軽く走りながら旧校舎と新校舎をつなぐ渡り廊下を目指す

雄二 side

明久らが出ていった後に俺はのび太の方を見たが、布団をもって横

でふて寝してやがる

「はあ．．．のび太。今回はお前はわかっているとと思うが教室待機だ。無理に出なくたっていい」

「．．．うん」

「(ここまで重症とは．．．この戦争終わっても日常に影響では困るしな．．．) はあ、考えるか」

とにかく、今は目の前の事を集中するか！

過去の悪夢とデビュー

ジャイアン side

俺にとっては今回が初めての試召戦争だが、道に少し迷って慌てて廊下を軽く走りながら旧校舎と新校舎をつなぐ渡り廊下にたどり着くともうすでに戦争は始まっており、辺りでFとDクラスが戦っていた

「Fクラス、覚悟しなさい！」

「高橋先生、Dクラス玉野美紀が召喚を行います！」

渡り廊下にさしかかると、Dクラス女子の声が聞こえてきた。向こうは学年主任の高橋先生を連れている

因みにこの場のDクラスは10人いることだけは教えよう

「上等だ！Fクラスの力を見せてやるぜ！」

「行けるのか、福村！」

「任せておけ！目に物見せてやる！」

「サモン！」

Dクラス女子とFクラス男子の喚び声が重なる。そして毎度お馴染みの魔法陣から現れるのは自身の姿をデフォルメ姿を持つ召喚獣。

【総合科目】

Fクラス 福村幸平 130点

VS

Dクラス 玉野美紀 1540点

・・・戦力差は圧倒的だった。どうする？福村?!

「くらいなさいっ！」

Dクラスの玉野さんの召喚獣が刀を振りかぶった

「く・・・っ！こうなったら！」

その動きに合わせて、福村の召喚獣が武器を捨てて構えを取る・・・まさかあいつがやるのは!?

「い、一体何を・・・!?!」

「Fクラスを舐めるなよ！」

戸惑う玉野さんをよそに、福村君の召喚獣が迫り来る刀に対して手をかざす。誰もが固唾を飲んで見守る中……
パンツ!!!

福村の召喚獣が手を鳴らす音が響き渡った

「へ、へへへ……。白刃取り、成功だぜ……」

得意げに告げる福村。彼がとった行動は真剣白刃取りだった

しかし結果は……

残念ながら彼の召喚獣は玉野さんの攻撃できれいに両断された

「……失敗してるじゃねえか！／じゃない!」「……」

FクラスもDクラスも敵味方関係なく大きく福村の白刃取りにつっこみを入れていた

「ば……。っ！ち、違えよ！コレは右脳と左脳を使った白刃取りだったんだ。」

普通にそれだと死んでるぞ!?

「福村幸平、戦死！」

福村の弁明も虚しく、戦死報告が入った。

仕方ない……

「おい！明久と島田たちは下がれ」

「そういえば、あんたの戦いは知らないから見てみるのもありだわ。危なくなったら助けるわ」

「皆！下がるんだ!!」

俺はFクラスの全員に聞こえるように叫んだのだ。Fクラスの周りは戸惑いながらも明久の指示に従い下がってくれたのだ。ありがたい……

「高橋先生！Fクラス！剛田武がこの場にいる十人のDクラスに召喚を行います！」

「承認しました」

よし！総合科目ならあれも使える!!

「行くぜ！サモン!!」

俺様が召喚した姿は……。おお!?野球のバットを持っているの帽子

姿か！暴れてやる！

総合科目

Fクラス 剛田 武 4200点

v s

Dクラス 玉野美紀 1540点

残りの女子9名 1500点

「「「え？」」」

敵味方関係なく驚いていたが、そんなに驚くことなのか？俺はよく知らないけど・・・さっ！始めるか！

ゆっくりと行こうとしたら・・・

「「「つてちよつと待ちなさい！」」」

相手の女子全員が急に抗議したのだ。なんだよ？もう戦いは始まってるのに・・・

「私たちの名前は?！」

「そうよ！あのEクラスの山田哲夫も名前つけられていたのに！」

そんな抗議に・・・

「皆様、早く始めましょう」

高橋先生が抗議をスルーして戦いを早く始めるようにと促していた。不満ありつつもこちらに集中してくれた。ありがたい

「来るならこい！」

「・・・はあ!!」

敵の攻撃に対し俺は刀ではじき上げ、胴ががら空きになったところをバットで横に風ぎ払って倒す。まず一人

「よしよし・・・あと九人・・・来るならもつと大勢に来た方がいいぞ?」

俺はそのままDクラスの連中を睨む。それに対してDクラス女子は一步下がる

しかし

「「このエリアに来る人数が少ない・・・！」」

本来、Fクラスを倒す為にはこの渡り廊下を突破しないといけないのだがDクラスの戦力が俺達と同じぐらいしか投入していない。

『・・・やっぱり姫路さんが居ないわ・・・』

『向うの方にもいなかったみたい』

『時間稼ぎが目的みたいだな戦い方だし、間違いないよね・・・』

Dクラスの女子から俺達に対して疑心が生まれている。戦線の後方で待機していたDクラスの人たちが居なくなっていく

「明久達に告ぐ！ここは俺一人で十分だから、お前らは侵入されないように構えてろ！」

「了解！」

俺は指示だしたあと、直ぐに残ってる九人に決着をつけるためにあ
ることをした

「行くぞ！準備はいいか?! Dクラス！敵前逃亡は補習行きなんだから?!」

「くっ！」

「特殊能力発動!!」

「何ですって!?!」

女子全員驚いていたが、関係ない！

「坂本が教えてくれた話だと、特殊能力の発動は400点。総合科目なら俺は行ける！」叫ぶぞ!!」

「な、何を?!」

歌え！俺様の召喚獣!!

(ボゲ〜♪!)

「うっ、嘘!? 私達の点数が徐々に!?!」

「な? なんですか!?! その特殊能力は!?!」

目の前の女の子が驚いたように言うが、おれの召喚獣の歌をきけー
!!

別の場所では・・・

Fクラスでふて寝していたのび太が突然震えていた

「!? (ブルツ)」

「うお?! の、のび太? ね、寝ているはずなのになぜ震えている?」

さらに別の場所では・・・

「?!い、今、あの忌々しいジャイアンリサイタルの時の事を思い出してしまつて・・・体に震えが止まらない・・・!?!」

スネ夫も何故か寒気と震えが止まらず、この感じは過去に（本人いないから思うが）恐怖のリサイタルだったのを思い出していた

無意識に過去のトラウマは出てくるものだった・・・

そして・・・

総合科目

Fクラス 剛田 武 3800点

v s

Dクラス 玉野美紀 0点

残りの女子9名 0点

スッキリした。あつやべ。俺も歌いたくなくなつてきたが、我慢我慢・・・今度歌う計画作ろうかな?そんなことは今は置いて・・・「おーし!明久!ここは俺に任してくれよー!島田と秀吉は通さないように頼むぞ?」

「了解!」

俺の言葉に秀吉と島田は承諾してくれたので、暴れるか!!あ、明久に指示だしてないが、まあいいか!

「ど・・・どうしよう。僕はこういう動きをしたらいいの?!」

「明久。おぬしはこのことを雄二に報告するのじゃ」

「そ・・・そうだね。雄二ならきつといい方法があるかもしれない」

そう言い残し明久の戦線から離脱したが俺はそのまま前線に残りながら残っている敵を倒すために進撃していた。のび太の代わりに戦えるのは俺しかいない!暴れるぞ!

明久 s i d e

「雄二!!」

僕がFクラスのドアを開けると教室内に居るのは雄二をはじめ、姫路さんに点数補充の為の生徒10人、防衛線を突破されたための呼び戦力が何人かいた。・・・のび太は相変わらずふて寝だった

「あ、明久君。お帰りなさい」

「あ、うん、ただいま」

姫路さんがトトトツと駆け寄ってきた。これはうれしい光景だけど・・・なんで姫路さんがここにいるんだろう？

「あのさ、姫路さんはどんな指示が出ているの？」

「それがよくわかんないんですけど、坂本君には『Fクラスの教室から出ないように』って言われているんです」

「え？それだけ？」

「はい。それだけです」

むう：ますますわからない。姫路さんの力があればこんな苦戦することないと思うんだけどなあ

「おう、明久戻ってきたか。戦況は？」

「あつ、雄二！実は・・・」

僕は直ぐに今の状況教えたら、雄二は満足そうに頷いていた

「よしよし！言われた通りにしてくれたか。次の作戦をー」

「ちよつと待って。姫路さんを何故投入しないの？姫路さんがいたらもつと戦況は楽になるのに」

「あの・・・私も教えてくれませんか？」

僕は雄二が作戦を伝える前に疑問をどうにか解消したかったから聞いたが、姫路さんも同じことを思ったのか質問していた

そんな雄二はしてやっつたりの顔をしていた

「確かにそうだが、敵も同じことを考えているだろうな」

雄二が何か含みのある言い方をする。いつもながら直球に答えを出してくれないところは嫌味な奴だなあ

「向こうは『Fクラスはこれだけの戦力を投入してきたのになぜ姫路やのび太が出てこない？廊下や階段を制したいんじゃないのか？』って感じに」

「でも実際守りたいんでしょ？」

「だからって戦力を注ぎ込んでどうする。俺たちの目的は時間稼ぎだ」

「そうか！わかったぞ！」

「姿の見えない姫路さんやのび太を警戒させて防衛に戦力を割かせるってことだね？」

「そういう事だ。相手は俺たちのジョーカーを知っている。ならすぐに出さないで手札に持ってちらつかせるのも一つの戦法さ。まあ……のび太に関しては本当に今はダメな状態だからな」

「ああ……確かにそうだね」

今ののび太はふて寝の状態だし、何を聞いても相槌しかない。こんな状態で闘えると思えない

「とにかく、それだけでは足りないから更に駄目押しをした」

「え？」

「わかりました！坂本君のことですから情報操作ですね？」

「そうだ。ムツツリーニ『FクラスはDクラスとの開戦を望んでいた』って情報をDクラスにリークさせている。昨日のこともあるだろうから簡単に信じてくれるだろう」

「そうか！確かにその話が伝われば、Dクラスは更に僕達を警戒するね。『勝ち目のない勝負で開戦を望んでいたとは思えない。Fクラスは何か秘策があるんじゃないか』って」

さすが雄二だ！雄二の将来は詐欺師かインチキ占い師が妥当かもしれない！！ん、待てよ？

「それじゃあ、昨日の僕と雄二とジャイアンでぶらついていたアレも？」

「いや、あの時は単純にBクラスに対して、点数補充をしていないっていうアピールが目的だったんだ。しかし、今となつては意味合いが変わってくる」

「どういう事だ？僕の疑問を雄二は教えてくれた」

「向こうにしてみれば『校舎も違って用が無いはずの俺達がいたなんておかしい。アレはDクラスを開戦に踏み切らせる為の芝居だった」

んじゃないか?』なんていう疑問の種になる。偶然が二つ三つと重なるとは考えないのが人間だからな。その向こうに何か目的があるんじゃないか、と疑問に思うのは当然だろう」

そして、雄二はこの流れで休戦を応じるために誰かを討とうという話に僕が真つ先に思い浮かんだのは平賀君だったが・・・

「平賀だけではDクラスは止まらないだろう。となると他に止めるのはだれだとおもう?」

「わかりました!清水さんですね?」

「ご名答。清水を落とせばDクラスの開戦派はおとなくなる。休戦協定を結ぶ為のきっかけ作りにおあつらえ向きの状況が出来上がるだろうさ。それに向こうは清水が中心に動いているからな」

確かに今回に限って代表は平賀君だけじゃない。清水さんが休戦を要請する。もしくは倒しさえすればこの動乱も落ち着くだろう

「そこで明久!お前に特別任務だ!お前には隣の空き教室で清水と一騎討ちをしてみよう」

「え?僕がやるの?もつと強い人の方が良いんじゃないの?」

「いや、それは無理な話だ。俺は指示を出さないといけないし、ムツツリーニも仕事があるから無理だ。姫路は姿を見せるわけにはいかなしいし、いざとなったら防衛に加わってもらってからな。おまけにのび太に関しては理解してると思うが今回は戦えない」

確かにそうだ。今ののび太も駄目だし、他の皆は動けないとなると僕しか動けない

「それに清水を引つ張り出すにはお前が好都合なんだ。清水が興奮しているところを見るに、昨日の挑発は成功したんだろ?」

「う・・・。そ、それは、えっと・・・。ど、どうなんだろうね?」

挑発の成功失敗はともかく、僕は清水さんのターゲットになる可能性はある

「あつ!だからこの配置なんですか?」

「さすが姫路だ。察しがいい」

「えーと・・・よく理解してないから僕にも教えてくれない?」

「そうだな。例えば、この位置に須川が配置されていたでしょう。も

しもお前が戦っている相手だとしたら、そこに須川がいる事についてどう思う?」

「どう思うも何も・・・意味のないものにしか思えないけど」

空き教室を地理的に抑えておかないといけないわけでもないし一人でポツンと抑えても警戒なんてしないし

「まあ、普通はそう考えるな。それなら、そこに更に条件を付け加えよう」

「条件?」

「ああ。そのタイミングで、須川とお前が姫路を巡って争っていたでしょう。そうすると、どう見える?」

「はう／＼／わ、私をめぐってですか?」

姫路さんはなぜか顔赤くしていたが、僕は頭の中で必死で回転して導いた答えは・・・

「須川君が僕を待っているように見えるかな。姫路さんを巡っての話に決着をつけるために」

「ああその通りだ」

よくできましたとでも言った感じで頷く雄二。なんか小バカにされた気分だ

「つまり、だ。この配置は他の連中には首を取る必要も無い明久が意味も無く空き教室にいるだけに見える。しかし、清水にとってはそうじゃない。明久が決着をつける為に清水を待っているように見えるってことだ」

なるほど、僕を前線に出した理由はそれか

「じゃあ、さつき坂本君が言っていた『教室前まで退いてもいい』っていうのも・・・」

「ああ、明久がここで待っているということに気付いてもらうためだ。休戦の交渉に足るだけの点数補充を終えたら、階段を開放して空き教室の様子を教えてやる必要がある。最もこちらが劣勢だと思われるわけにもいかないから、今回は剛田の初デビューで暴れてもらうと頼んだのさ」

「そんなになうまくいくのかなあ・・・?」

清水さんが本当に来てくれるんだろうか？それに対して雄二は唇の両端を持ち上げて、悪意のある顔で笑っていた

「それは結果を見てのお楽しみだ」

「まあ、雄二がそこまで言うならいいけど・・・」

「よし。それならとりあえず、明久は隣の空き教室に移動してくれ。いつ防衛線が突破されるかも分からないからな」

「わかった。今すぐ移動するよ」

やろうとしていることは一応わかったし、僕は清水さんを待つとするか

対話と戦闘へ

明久が去った後の教室では雄二は次の動きを姫路と話していた
「さて、これで俺たちは清水が来るまで待機だな」

「そうですね。・・・フフフ」

「いきなりどうしたんだ？人の顔を見て笑うとは失礼なヤツだな」

「あ、ごめんなさい。そういうつもりじゃないんです」

「なら、どういうつもりだ？」

「いえ、なんだかんだ言っても、やっぱり坂本君は明久君のことを理解しているんだなって思ってた」

その言葉に雄二は鳥肌がたったように震えていた

「はっ!?いきなりなに気持ち悪いことをいつてやがる?!」

「だって、明久君のことを本気で理解していないと、さっき言っていた作戦を実行なんてできませんよね？」

「・・・まあ、理解云々はともかく、だ。アイツの性格を考えると、昨日の話し合いで秀吉たちがいなくなった後、アイツが清水にどんなことを言ったのかはなんとなく想像がつくからな。それが清水にとつては放っておけない内容だったってこともな」

「私もなんとなく、ですけど、明久君がどんなことを言ったのか想像できると今までふて寝していたのび太が発言したのだ」

「明久は考えていることが分かりやすいからね・・・」

「のび太君!?寝ていたのではないのですか？」

姫路は驚きながらものび太はふて寝の体制で雄二達を見てないで発言していた

「少しだけ目が覚めたの。・・・姫路はよかったの？明久のあの島田の件・・・」

「確かに、いい話ではありませんけど・・・」

「けど?なんだ？」

雄二は疑問そうにきくと姫路は

「けど、私はそういう明久君に、惹かれているんですから・・・」

小さい声でいつてたのを雄二は聞き返していた

「ん？すまん。聞こえなかったんだが」

「あ、いいえ。なんでもありません」

「そうか。まあ、とりあえず・・・」

「ご馳走さんつと」

「きちんと聞こえてるじゃないですか!?の、のび太君も!」

「ごめん、ごめん・・・まだ眠たいから寝るね?・・・zzzz」

するとのび太はそういうと直ぐに寝た。その様子に二人は――

「はやつ!?!」

驚いていた。そして同時にまだのび太が元気ないのも二人には分かっていた・・・

ジャイアン side

俺は今Dクラスの敵を次々と倒していたが、倒しても倒してもきりがなかった

「ツチー!この数じゃあいずれ突破されるぞ!?!」

「剛田!援護はいる!?!」

島田が俺に確認していたが、まだ早い!

「ここ突破されたら終わりなんだから、俺がある程度前線で耐えるからお前らは最後の盾だ!?!」

「しかし!」

「ギリギリで必ず引くから!それまで我慢してくれ!」

俺の言葉に二人は渋々だが、引いてくれた。ありがたい・・・

さて・・・

「まだまだ暴れるぞ!!」

時間稼ぎ成功しないと!俺が事前に頼まれているのはそれだ!来るなら来い!迫り来る敵に俺は前へ再び出た

明久 side

皆に送り出されて空き教室にやって来たけど・・・特に何をするわけでもなく、ぼんやりと考え事をしていた

脳裏をよぎるのは、美波、のび太のことだ。美波に接する態度は間違っていたんだろうか？あの態度に美波は怒っていたのか？僕はもう徹底的に嫌われてしまったんだろうか？

そして、のび太・・・もしも、あの時に僕が合宿できちんとメール確認したらこんなことにもならなかったし、三上さんとの仲違いも起きなかったのかもしれない。のび太があそこまで落ち込まなかったかもしれない・・・この戦争終わったら必ずのび太と三上さんの仲を取り戻さないといけない

自分の頭の弱さに辟易しながらも必死に考える。どのくらい時間が過ぎたかわからなくなった頃、気が付けば廊下での喧騒がこちらに近づいて来た

「そろそろ、かな・・・？」

さっきまでの考えを一旦やめて、目の前の試召戦争に思考を切り替える。そのまま待つことしばらくして・・・

「こんなところに一人でいてくれて良かったです。貴方には話がありましたから」

さて・・・きちんこの戦いの決着をつけないと・・・それが僕の役目だ

「話って・・・何かな？」

「そう難しい話ではありません。要するに——白黒はつきりさせましょう。そういうことです」

そう告げる彼女の目は殺意に満ちている。余程僕のことを気に入らないのだろう。そして彼女は誰かを探すかのように周りを見回していた

「やはりお兄様は・・・ここにもいないのですね」

そういえば、清水さんはのび太を募っていたね・・・

僕ら男子のことを豚と言うのにのび太をお兄様って言うのはかなり信頼してるんだとバカな僕でもわかる。そののび太がいないと分かるとしょんぼりと落ち込んでいたが直ぐに顔あげて切り替えた

「お兄様がここにもいないのは残念ですが幸いにも今は試召戦争の最

中です。わかりやすく決着をつけることができます」

後ろには化学の先生がいたのだ

僕には清水さんと試召戦争を受ける以外選択肢はない。何故なら、ここで勝負から逃げれば僕は敵前逃亡で戦死扱いになってしまいが清水さんは僕が断るとは微塵も思っていないなかつたのかもしれない。僕が決着を望んでいるだろうとそしてその考えは、恐らく正しい

「わかったよ。勝負だ、清水さん」

「先生、召喚許可をお願いします」

「承認します！」

そう言うのと科学のフィールドが展開された

「試獣召喚（サモン）!!」

必ず決着をつける！

中林 side

この小説では何気に久しぶりに出番もらったような気がするわ……え？メタ発言していた？気のせいだわ

さて、今私は何してるかと言うと……

「……（ムスツ）」

「そろそろ機嫌直しなさいよ？」

絶賛不機嫌の親友の美子を宥めています。はあ……あの時泣いて帰ってきてみんな驚いていたからねえ……

「怒ってないわよ……」

「はあ……（どうしたらいいのかしら？あの日からずっと怒りっぱなしだし……）」

「代表、報告です」

「?どうしたの?合宿でぼこぼこにされた山田鉄山」

「何でフルネーム!?後、山田哲夫です!鉄山って誰ですか!？」

この反応……少し楽しい♪……っていけない、いけない
「で、報告は何？」

「あつ、はい。実はDクラスがFクラスに試獣戦争を仕掛たみたいで
す」

「!」

まさか、私達の知らない裏でそんなことが起きていたなんて・・・
「そう・・・ここに仕掛けられることは?」

「今のところはないかと・・・」

ありがたいわ。私達の方にも仕掛けられることはないとわかれば、
皆は普段通りに過ごしていた

「・・・」

「のび太君のことになるのかしら?」

「別に・・・野比君なんて何があっても知らないわ」

はあ・・・、いつになったら和解するのかしら。つてか、のび太君
は大丈夫かしら?美子は聞いてないからあれだけど噂では、精神的な
ダメージにより授業もきちんと答えてなくって教師みんなが心配
してるとか・・・

「まあ早めに仲直りできたりいいけど・・・心配ね」

何も起こらなかつたらいいけど・・・そんな杞憂な気持ち抱きなが
ら休み時間を過ごしていた

決着と肅清

明久 side

「……………」

お互いの召喚獣にも動きがなく、無言の状態が続く。睨み合いというわけではなく、清水さんは俯いて召喚獣から目を離している。そうしていたのはほんの数秒程度だっただろうか？ いや、もっとたつてるような気がすると思えていたら不意に、清水さんが震える声で呟いた「…………泣いていました…………」

震える声で、それでも怒りを込めて静かな口調で清水さんは発言した

「きっかけは、美春の言葉です…………でも、原因は、原因は…………つっ!!」

清水さんが俯いていた顔を上げる。僕を睨みつけるその瞳には、烈火の如き怒りが見て取れた

「お前が…………お前のような男がいるから！お姉さまが泣く羽目になるんです!!」

その言葉を合図に清水さんの召喚獣が突っ込んでくる。正面からの真っ直ぐな攻撃に、僕は力を受け流すように動いた

「ぐっ！（なんて威力だ！）」

それなのに、僕の身体に鈍い痛みが訪れる。正面から受けたわけじゃないのにこの威力は余程点数の差があるんだろうか？

化学

Dクラス

清水美春 112点

VS

Fクラス

吉井明久 22点

横目で確認した点数の差は約五倍。こちらが圧倒的に不利だ…………

!!

「お前がいるから！お姉さまは泣いていた！お兄様は美子お姉さまと仲違いしてしまった！どうしてオマエのような下郎がお姉さまの傍にいます！どうして気持ちを弄ぶ下衆がお姉さまと言葉を交わしているのです！」

駄々っ子のように振り回される相手の剣。その一撃一撃全てが、僕の腕を痺れさせるほどに重かった・・・心に重くのし掛かった

美波が泣く羽目になったのは事実・・・

僕らが美波を利用していたのも事実・・・

「どうして、お姉さまを利用する為に平然と嘘をつく外道が友人面をして近くにいられるのです！お前のせいで、お兄様も辛い思いをしてる!!お前のせいで・・・お兄様達のおんな辛い関係になったのに何故平然としてる!!」

確かに・・・元を辿れば僕がすっかりしていたら、のび太も三上さんもギクシヤクはなかったかも知れない・・・

それでも・・・

これだけははつきりと言える・・・!!

「嘘は・・・言っていない・・・!!」

ガッ

相手の剣を木刀で受け止める音が響く。でも、それでも僕は・・・！そのまま力任せに相手の剣を押し返す

「な、にを、言って・・・！」

色々あつて酷いことをした。傷つけたし、泣かせてしまったけど、それでも――

「僕が言った事は、嘘じゃないよ！」

鈍い音をたてながらも、僕の召喚獣は木刀で相手の剣を弾いた
「な・・・!?!」

そう。嘘じゃない

付き合っているとこの話が演技でも、キスをしたということの原因が誤解でも、僕が清水さんに言ったことに嘘はない！

そもそも僕は、あんな場面で嘘をつけるほど器用じゃない！

「僕みたいなバカにだって、言っつていい嘘と悪い嘘くらいわかる！昨日のあれは、紛れもない僕の本心だ！」

剣を正面から受け止めたせいで木刀が折れかかっているのは五倍という力の差がある相手と押し合っただけで消耗している。こんな状態で勝ち目なんてあるわけがないけど！

「逃げるわけにはいかない!!」

元はと言えば全ての原因は僕が作ってしまったこの騒ぎ。迷惑をかけてしまったひとの為にも、僕が責任を取らないでどうする！

これはある意味ありがたい機会だ。この一騎打ちを姫路さんや雄二に任せていたら、僕は騒ぎを起こすだけ起こして逃げ出したロクデナシだ。こうして責任を取る機会をもらえたことを、雄二に感謝――

「試獣召喚（サモン）」

「えっ!？」

ここにいないはずの声が聞こえて振り向くと、そこにいたのは雄二とジャイアンだった。何故ここに？いつの間にジャイアンがここにいるの!？」

「伏兵ですか・・・!卑怯な真似を・・・!!」

清水さんが僕を憎々しげに睨みつけている。伏兵ってことは、まさか――!

「雄二！ジャイアン！いくら大事な勝負だからってそんなやり方は間違えてるよ！」

まさか、一騎打ちに来たはずの清水さんを大勢で騙し討ちにするつもりなのか!？この勝負がいかに大事なものはわかるけど、それはあまりに卑怯すぎる・・・!!

ジャイアン side

「わるいな、明久・・・これは勝負じゃなく戦争だ・・・俺にはクラスを守る義務がある！」

「そういうことだ。悪く思うなよ、明久！特殊能力発動！」

俺と雄二は冷たく言い放ち、召喚獣の特殊能力を発動させる

「やめー」

「歌え！叫べ！」

(ボエ〜!!)

俺は自身の召喚獣を指示したのだ。その攻撃は・・・

明久の召喚獣へと攻撃したのだ

「・・・え？」

明久は想像もしていなかった事態に頭が一瞬思考を放棄している。そして、段々と状況を理解し始めたのか、明久の全身に何かが迸った「うぎやああああああ!!何これ!?苦しいのだけど!?いやあああああ！」

そういえば、坂本から説明もらっていたな・・・まあ俺様の歌で酔いしれてくれ！明久！

「清水、今回は元言えばこのバカが起こしたからこの通り粛清した。今更かもしれないが今回はこれで水を流してくれ」

「あががが・・・」

嬉しいのかピクピクとしていたのを見て密かに満足していたのは内緒だ。そんな明久とは他所に坂本は清水に今回はこれで手を打ってくれと頼んでいた

「そうですね。この豚野郎に対する美春の怒りは収まりませんが・・・」

ザクツと良い音が教室に響いた

「し、清水さん!?もう決着はついたよね!?どうしてさらに追い討ちを——痛だだだっ！刃物の痛みが！刃物の痛みがふくらはぎから段々頭に向かって上がって」

「切り刻んだあと、この豚野郎を放課後まで補習室に軟禁すると言うのなら休戦を受け入れてもいいです」

「神に誓って約束しよう。明久はこれで戦死したから補習室行きだ。あとは放課後になるまでそれぞれの教室で点数補充でもやって時間を過ごせばいい。その間ずっとコイツは鉄人の餌食だ」

俺かそういうと、明久は睨んできた

「ふん！なにを恨めしそうにしているのですか！元とえば、お姉さまをタブラカしたりしてたのですから少しは反省してください」

ザクザクザク、と何度も明久の召喚獣に剣が押し込まれてる。

「は、は、反省してますっ！美波を傷つけたことを、心から反省して痛だだっ！」

その痛みは全て明久に降り掛かっている。

明久じゃなかったらショック死するぞ？

「まあ、あの言葉が嘘だったとしたら、この程度では許しませんでしたが・・・ね！」

とどめに男の大事なところをフルキックで蹴るのを見て俺は一瞬震えた。坂本も若干引いていた

「今回はこれぐらいで許してあげましょう」

よかった・・・交渉成立だ

「この豚野郎はほつといて・・・お兄様は今どの状態ですか？」

清水の質問に俺は最低限教えると、清水は難しい顔になって落ち込んでいた

「お兄様がそんな状態に・・・美春！何とかお姉さまに説得してみます！」

「頼むな・・・」

清水とそう話すと俺と雄二は空き教室を出た

入れ違いに鉄人が入っていき、『ウエルカム』という声が小さく聞こえた

あわれ明久・・・

俺はふつと思ったのは、やはり久しぶりにのび太とスネ夫に俺の歌聞かせようかな？次いでに明久も聞かせようか！うん！それがいい！・・・と言いたいが、まだあくまで考えの段階だ。いつかはしよう
とー

暴露と・・・

放課後・・・俺と坂本と秀吉とムッツリーニは未だに教室残っていた。のび太はついさつき、動いて今どうしてるか分からないが、今はそつとしとこうという判断になった

ガラツ

すると明久が帰ってきた

「あれみんなまだ帰ってなかったの？」

「ああ、少し気になることがあってな」

「気になること？」

坂本が楽しそうな笑みで浮かべると秀吉も続けていった

「うむ、何でもムッツリーニが面白いもの聞かせてくれるらしいのじゃ」

「まっそういうことだ。だから明久を待っていたんだ」

「・・・明久も聞いておくといい」

そういうと卓上の上に録音機を置いたのだ。毎度ながらこいつはよく捕まらないなと感心していたのはここだけの話だ

「ふーん、面白い話ね・・・」

「・・・まだ誰も聞いてないが面白いのは保証する」

珍しくあのムッツリーニが生き生きとしてるな。これは絶対面白！！

「ねえ、中身は何なのさ？」

「俺が聞いた話ではある男女の会話らしいぞ？」

「男女の会話・・・」

「ワシらが気になっていた一件の顛末がよくわかる会話じゃ」

その瞬間明久は顔強張ったのだは恐らく気づいたがもう既に遅い！！

「・・・スタート」

ムッツリーニが録音機を再生したら、聞き覚えある声が聞こえた『この話し合いに何の目的があったのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力

に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて、時間の無駄ですから。……お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

「あれ？この声って……」

「Dクラスの清水さんだな」

さて、昨日は一体どんな会話したんだ？

『なんですか？私に言いたいことあるのですか？』

「って！ちよつと待って！この会話って！」

「ご名答。これは、お前と清水が昨日の放課後に何を話していたか、その一部始終を録音した物だ」

慌てふためく明久をよそに、坂本が明らかに邪悪な笑みを浮かべている

『一つだけ誤解を解いておきたいと思つてね』

『誤解？何をいつてるのですか？お兄様の仲違いさせた男が今更誤解というのですか？お姉さまのお付き合ひのことですか？どちらも演技だというのは知つてます』

「つちよつと待って！！本当に待って！！冗談じゃないよ！止めてー！つて！ジャイアンにするのさ！！」

「悪いな！お前の面白い話し聞きたくつてな！！」

悪いな！！こんな面白い話し聞きたくなるだろ？ついでに坂本に手伝つてもらつて黙つてもらつた。今のあいつは呻き声しかない

『いや、美波の魅力知ってるのは君だけじゃないってことさ……』

『何をいつてるのですか……？お姉さまに悪口をいつてる男が女の子として大切に扱わないのに！！』

『うん、その事に関して是否定しないよ。その通りかもしれない』

『だったらお姉さまの魅力を何が知つてるといふのですか！？』

『確かにお姫様みたいに扱っているわけじゃないし男友達に接するみたいに雑な態度になつているかもしれない。けどね——』

「んーん！！」

悪いな！！明久！呻き声でしかないから言いたいこと分からない！

そうしてる間に話しは進んでいった

『けど……何ですか？』

『けど、僕にとって美波は、ありのままの自分で話ができて、一緒に遊んでいと楽しくて、たまに見せるちよつとした仕草が可愛い、とても魅力的な——女の子だよ』

.....

「.....」

俺達は驚いた表情で明久を見ていた

「いや、意外だった・・・」

「う、うむ。もう少し歪曲してるかともおつたのじやが」

「.....直球勝負」

予想以上の言葉に俺らはそれぞれ言った

「明久・・・お前いうときは言うんだな」

俺がそういうと雄二や秀吉やムツツリーニーもそれぞれのコメントを言っていた

すると突然ムツツリーニーが険しい顔で廊下飛び出していた

まさか・・・

「.....油断した」

「油断したというのはどういうことじゃ？」
すると最悪のことを静かに告げられた

「.....多分張本人」

というと、島田か・・・

「そ、そうか。すまない明久」

「悪いな、明久」

「すまぬ明久」

「.....ごめん」

「まあ、別にいいよ。張本人が相手なら。それより、悪いと思うんなら美波との仲直りに協力してよ。アレ以来ずっと地味に険悪なままなんだから」

ん？いや、あれを聞かれたんだから心配ないと思うが？

「いや、それは多分大丈夫じゃろうな」

「そうだな。仲直りどころか.....」

「……うん」

「恐らく大丈夫だろ」

まっ、明久はわかってないみたいだな……

その張本人はというと……

ガチャ

「あ！お姉ちゃん、お帰りなさいですっ！」

「た、ただいま……」

「？お姉ちゃん？どうかしたですか？お顔が真っ赤ですよ？」

「あのね、葉月」

「はいです」

「お姉ちゃんね……もう、どうしようもないくらい人を好きになっちゃったかも……」

こんな会話をしてるとは明久は知らない……

場面かわって

あのあと、坂本が荷物をもって俺らに声かけた

「さて、帰ろうか？」

「あれ？そういえばのび太は？」

あ……完全にさっきので忘れていた……

「仕方ない。あいつを迎えにいこうか？」

「おっ、なら明久はのび太の荷物を持ってくれよ？」

「分かったよ」

明久が荷物を持つとすると……

ガラガラ!!!

!?

俺達はドアが強く空いた方向を見ると……

そこにいたのは・

「はあはあ……」

今回の事件で起こしていた清水だった

「ど、どうしたの？美波ならもういないよ」

「た、大変です……」

ん？いつもなら豚野郎と明久に罵ってるのに様子がおかしいぞ？

よく見れば、息切れを起こしていた

「お兄様が……お兄様が！救急搬送されました!!」

……え？

俺達はその報告を聞き……固まったのだ

のび太が……救急搬送された？

そんなことを知らない三上は……

「……のび太君……つて！ダメダメ！三上美子！あの人がやったことを許してはいけないわ！」

学校から家へと帰っていたのだ

一体何があったのか……それは誰も知らない……

事故と理由

何故のび太が緊急搬送されたのか、遡ること数分前……

「はぁ……(三上さんと仲違いしてしまったし、今回の戦争にも約立たなかつたし、僕は一体何してるんだろう……)」

僕はゆつくりと階段歩きながら、この数日間の事を考えていた。こんなことになるなんてあの作戦前まではそうなると思わなかつたし……三上さんに言われたあの台詞がたくさんよぎる

『……あなたのあの優しさは……嘘だったの……！誰にでも銃を向ける人なの……？吉井君に銃を向けていて……！そんな最低な人だと思わなかつた……！さようなら!!』

言われたときは心も痛かつたし胸にぽっかりと穴空いた気分だ……「どうしたらいいものか……ここ最近すっかりと寝た記憶もないし……はぁ、ドラえもんがいたら相談できたけど……今はドラえもんもいないし……はぁ……困ったな」

考えれば考えるほど、頭に過るのは三上さんのさよなら！の台詞に心が重くのし掛かる……

「そろそろ戻らないと……」

教室に戻ろうと止めていた歩きを再び再開しようとしたが……

「あ、れ？(何かフラフラする……)」

降りる足取りが悪かつたのか足を滑らしてしまい……

「あつ……(あつこれ落ちるパターン……小学の時はよく転んでいたな……駄目だ。受け身とれない)」

前屈みに体が傾き……

そして……

トガシャン!!!

そこから先は……意識失ってしまった……

優子 side

何気に出番もらうの久しぶりね……つてメタ発言は消される可能

性あるから聞かなかったことにしてちょうだい

「……優子、どうしたの？」

「急に怪訝な顔なって大丈夫？」

「何でもないわ代表。大丈夫よ、愛子」

変な電波感じて睨んでいた何て言えないわ。つてなにか聞こえるわね

「兄……！……かり」

「ん？なにか聞こえるわね」

「あっちの方からみたい」

「……行ってみよう」

代表を先頭として私達は聞こえたところに歩くと……

そこには……

「お兄様！しっかりしてください！」

そこにいたのは確か、Dクラスの清水さんだったかしら？何やら慌ただしく声をかけているわね。私達は気になり降りていくと……

「……！のび太？」

「のび太って……Fクラスの？」

「！誰でもいいですからお兄様を助けてください！美春が見つけた時にはもう倒れていたのです!!」

！倒れていた？……恐らく階段踏み外して頭の打ち所悪かったのかしら？

「……落ち着いて」

「愛子！先生を呼んできて？代表は清水さんを落ち着かして！清水さんは落ち着いたら直ぐにFクラスに誰がいるかもしれないからこの事を教えて！」

「了解！」

「……分かった」

二人は行動を直ぐに起こして、私は野比君の方に駆け寄って状態を確かめた

「意識は……ない！呼吸は……大丈夫！怪我は……頭軽く切れるわね？」

私は直ぐに119番をしたのだ。直ぐに連絡つながると・・・

「あつ、もしもしー!」

とにかく今できることをしないと!!

清水 side

私はお兄様を探していたのだが・・・発見したときには、お兄様は倒れていたのを見て私は頭が真っ白になりました

「お兄様!しつかりしてください!」

反応ない!どうしたら!?

「・・・!のび太?」

私が振り返ると、Aクラスのトップレベル張る三人が目の前にいて、直ぐに行動を起こしてくれました。的確な指示に対応してください、少し落ち着くと、鉄人(西村先生)とか高橋先生が来て事情説明してくださってその間にお兄様は救急車に運ばれていました

こうして入られません!

「三人ともありがとうございます!私は直ぐにFクラスの方にいきます!」

お礼をいって私は走りFクラスに向かい・・・

そして・・・

「はあはあ・・・」

全力で走ったからしんどいです・・・いつもなら憎たらしい豚野郎ですが・・・今はそれどころではありません!!

「ど、どうしたの?美波ならもないよ」

「た、大変です・・・」

今はこちらの事が大事です!!

「お兄様が・・・お兄様が!救急搬送されました!!」

伝えないといけないことを!!

明久 side

僕らは清水さんから衝撃の知らせを聞き誰かが小さな声で言ったのが僕は聞こえた・・・

「え．．．そ、それどういうことだ．．．?の、のび太が?」

「嘘ではありません!今、霧島さん達が対応してくださいます!」

その言葉を聞いてもたつてもいられずに、僕らは動こうとすると廊下の前に誰かが声かけてきた．．．

「秀吉達はどこへいこうとしてるのかしら?」

「あ、姉上!」

「木下姉か、悪いが急いでるから退いてくれ」

「落ち着きなさい」

秀吉は驚き、雄二は退いてくれと言うと、木下さんは落ち着きなさいと僕らを宥めようとしていたがそれどころじゃないんだよ!」

「いや、これを聞いて落ち着けるわけないよ!」

「(コクコク)」

「吉井くんはムツツリーニ君、落ち着かないなら．．．こうだよ? (ピラツ)」

「(ブー!」

工藤さんがパンチラを見せてきて鼻血が出た．．．よかつた。美波や姫路さんがいなくて．．．隣見るといつの間にか雄二は霧島さんに拘束されていた．．．本当にいつの間にしたのだろうか?」

「お三方．．．お兄様は?」

「．．．病院に搬送された。とりあえず、雄二達に病院場所を知らせようと思ってきたの」

「そ、そうか．．．それはありがたいが．．．この手錠を外してくれ!?!いつの間に手錠をしてたんだろう?」

「．．．うつかり」

「話し逸れてるぞ?で、どこの病院なんだ?」

「．．．骨川財閥の直属の病院」

「．．．ん?骨川財閥?どっかで聞いたことがあるような気が．．．スネ夫の關係してる病院じゃねえか!」

「よし!それなら．．．走っていつても時間はかかるから!」

ジャイアンが携帯を取り出して誰かに電話していた

「おう、おれだ。ああ、頼む」

あんなので会話成り立つんだ・・・終わったみたいだし直ぐに聞こう

「お前ら、直ぐに荷物持っていくぞ。メンバーは俺ら5人であつてるだろ？」

え？僕と雄二とムツツリーニーと秀吉の四人とジャイアンで五人か・・・たしかにそうだね。言われた通り僕らは動こうとする前に、清水さんにお礼をいった

「清水さん！ありがとうございます」

「・・・今回だけです。早くお兄様の方に行ってください・・・」

それもそうだ！僕らは急いでのび太の荷物もって走っていったのだ。

「美子御姉様にどう伝えましょう・・・」

清水は誰もいない教室で呟いたあとに考えた結論は、今は伝えない方がいいと決めた・・・そして、木下達も本来の目的を思い出してFクラス出ていった

僕らはジャイアンを先頭に門の前まで行くとそこにいたのは・・・

「おーい！早く乗ってー！」

骨川君がいたのだ。僕らは彼の指示通りに乗るが、はつきり言つて一般人のそれも庶民の僕からしたら、この高級車は一生かけても乗れないような気がする・・・

全員乗つたと確認すると骨川君はドライバーに「頼む」というとドライバーはエンジンかけて目的地まで発車してくれた。暫くはみんな深刻そうに無言だったけど・・・前から気になっていた事を聞きたかった

「あ、あのく？少しいいかな？」

「？どうしたんだ？明久？」

「ジャイアンと骨川君とのび太は・・・友達なんですよ？」

僕の言葉に骨川君は・・・

「うーん、僕らにとってはのび太は・・・いや、ただの友達ではないね？」

「ジャイアン?」

「おう! あいつもスネ夫も...そして、この場にはいない二人も入れて俺にとつては最高の親友であり、友達であり仲間なのさ。だから、ただの友達ではないな」

「? どういうことじゃ?」

「あー、そこから先の詳しい話しはごめんだけど、言えない」

えー? 気になるなうと思つたけど、今はのび太の事が気になるから深く聞かないことにした。因みにスネ夫と呼んでくれと言われたので僕も明久でいいと言つた

そうしてる間に目的地つき病院に着いて走ろうとしたが、マナー悪いとおもい早歩きで看護師さんに聞くと、今は精密検査していると聞いた。そして、少ししたら関係者は来てくださいと言われてそこで聞いた話はー

「入院をしなければなりません。理由はー」

「「「「え?」」」」」

医師からそれを聞き絶句した...

三上さんにどう伝えよう...

そんな思いを抱きながら、僕らはそれぞれの家へ帰った。因みにスネ夫の用意してくれた車で帰りましたとだけ教える...

動揺と決断

三上 side

「う……ん」

もう朝か……。なんか最近心にぽっかり穴空いてるような気がするけど気のせいよね？……のび太くんは今何してるのかしら。って！あんだけきついこと言ったのに私は何をいつてるのかしら!?

「少しだけ様子見に行こうかしら……。よし！まずは起きないと！」

そう決めた私はとりあえず朝御飯食べるために動いたのだが、あの時の私に戻るなら怒りたいと思うぐらい後に後悔するのだった……

明久 side

僕はいつもより足取り重く学校に歩いてた……。まさかの事態に僕らは昨日は何とも言えなかったけど……

「(三上さんにこの件は内緒しといた方がいいのかな？でも、伝えた方がいいのかな)どうしたものだ……。」

「おい、明久」

あ、この声は……

「あつ、雄二。それにジャイアンもいたんだ。おはよう」

「おう」

なんだか二人を見て安心したのは内緒だ。歩きながら雄二は思い出したように、僕らに話しかけた

「なあ、姫路と島田には伝えとく義務があると思うから昼休み屋上で食べないか？」

何をつていうのは僕でもわかる。のび太のことだね……

でもそれなら……

「ねえ三上さんは呼んだ方がいいのかな？」

「……」

僕の質問に二人は考えていた。やっぱり二人も悩んでいるみたいだ

「いや、伝えない方がいいだろう。只でさえ今喧嘩してるのだから、こ

の事を知ったら三上は別の意味でショック受けるだろう」

「それに、のび太の状態お前も知ってるだろう？あの事を考えたら伝えない方がいい」

確かにそうだ。今ののび太の状態を聞いたら・・・言えない

「わかった。あつ、鉄人がいる」

「ゲツ!?この間の追いかけられる続きにならないだろうな?」

「・・・お前らは何を警戒してるんだよ?」

ジャイアンが呆れているが関係ない!!とりあえず、普通通りの挨拶でいこう

「「おはようございますー鉄人」」

「西村先生だ!」

「おはようございます!西村先生」

「鉄人・・・じゃない!剛田は西村先生であつてるぞ」

あれ?なんか鉄人の様子がおかしいぞ?いつもならそんなツツコミもしないのに

「なんか疲れてませんか?」

「ああ、少し疲れてな」

「何かあつたんですか?」

「まあ・・・お前達なら知ってると思うが、のび太の点数だ」

「「あ・・・」」

「あの点数を見たとき、俺もビックリしたぞ?吉井じゃないのにのび太がああの点数をとるのは予想外すぎた・・・何がどうしたらこうなるのか、みんな頭抱えていた」

「「お疲れ様です・・・本当にお疲れ様です」」

うわー、予想外の事を聞いてしまつてあれだけど、本当にお疲れ様ですこうして、僕らは教室に向かつてあるいていった

教室に着いて座ると・・・

「おはようー!アキ!剛田!坂本!」

「おはようございます!明久君!剛田君!坂本君!」

あれ?美波がいつも通りに挨拶してくれた・・・良かった・・・許

してくれたんだ。二人の少女に迎えられて僕は幸せだー！

「おはよう。二人とも」

「おはよう」

僕らも挨拶をして、ムツツリーニーと秀吉も僕らの方に来て挨拶した

「はれ？　そういえば、のび太君は？」

「そういえば、いつもならおる時間なのに・・・」

!!・・・そうか二人は知らないだったんだね？

「昼休み屋上来てくれない？　二人も聞いてほしい大事な話があるんだ」

「ふえ？」

「あれ？」

「このバカ！　反応困ってるだろ？」

「のび太に関係ある話だ」

「え？　ど、どういうこと（ですか）？」

あつ、ぶつちやつけすぎて驚いてるけど、とりあえず了承をもらわないと

「いいかな？」

「わ、わかった（わかりました）」

とりあえず伝えれたからそろそろ鉄人来ると思い急いで座ったのだ。のび太は大丈夫かな・・・

こうしてる間にお昼休み迎えて・・・

「つ、つかれた・・・」

僕とジャイアンは疲れていた。昨日の試験でジャイアンは学年のトップクラスの点数を出していたのビックリして聞いたら・・・

『なんか集中して気合いいれたら取れた・・・』

って聞いてふざけるなく！　僕なんて夢のまたの夢なんだから・・・。本人ももうあの点数は総合では無理だと言っていた

「全くだらしないわね。それはそうと坂本達に聞きたいけどのび太のことってどういうこと？」

「はい、確かに気になることいつてましたね」
あつ、そういえば伝えないとダメだね
「実は……」

三上 side

おかしいわね……私は宏美に付き添ってもらってFクラスの様子
見に行ったのだが、彼とよく絡んでいたFクラスのメンバーがいな
かったのだ。どこにいるかしら？

「ここにいないみたいね。美子、教室以外で思い付く場所はある？」

「うーん……屋上に行ってみましょう（可笑しいわ。いつもならいる
はずなのに……この胸騒ぎはなにかしら？）」

「どうしたの？」

「いえ、何でもないわ。屋上に早く行きましょう？」

「はいはい（美子気づいてないけど、無意識に野比のび太君を探してる
の本人は気づいてないみたいね。まっ本人に言えば否定するの目に
見えてるわ）」

？とりあえず、休み時間は限られてるから急がないと!!

急いで屋上着くと話し声が聞こえたので、ドアを開けないでドアに
耳を開けた

「（美子？何してるの？）」

「（宏美、静かにして？なにか話してるみたい）」

なにか聞こえるわね……

『……っ!?!』

『そ……!?!』

瑞希と美波？なにか可笑しいわね

『のび太……入院!?!』

『ああ……っだ』

『だ、大丈夫なのですか?..』

……ええ?

『安静……』

何か言ってるけど私は聞こえなかった・・・
のび太君が・・・入院・・・？

「・・・子!?!」

私が思い浮かぶのはあの日の最後の事だ・・・

『・・・あなたのあの優しさは・・・嘘だったの・・・!誰にでも銃を
向ける人なの・・・?吉井君に銃を向けていて・・・!そんな最低な
人だと思わなかった・・・!さようなら!!』

もしかって・・・私が知らない間に彼を追い詰めていたとしたら・・・
?もし、それが原因で彼が・・・

「美子!」

「っは・・・宏美・・・」

「はあ・・・今日の午後は休みなさい」

「え、だ、大丈夫よ?」

何を言ってるの?私は大丈夫なのに・・・

「休みなさい。先生からは私が言うわ」

「で、でも」

「代表命令、今から早退して病院向かいなさい」

「え・・・」

「私はあなたの親友よ?あなたがなに考えてるか分かるわ」

「宏美・・・ありがとう!!」

私は急いで教室に向かって走ったのだ。あつ、でも・・・

「あんなことをいった私が・・・会う権利あるのかしら・・・」

「あります!美子お姉様!」

この声は・・・

「清水さん?」

「美子お姉様!お兄様に会ってあげてください!!」

「でも・・・」

「会ってはいけない権利はありません!会いたいから会うに理由は要
りますか!?!」

!確かにそうだわ・・・私は何を勘違いしていたのかしら・・・ま
た間違えるところだった

「清水さん……ありがとうございます！」

「お兄様のいる病院はこの紙に書いてます。そちらに向かえばよろしいかと思えます」

「いつの間に……」

清水さんの手際の良さに正直驚いてるわ……。場所は……骨川財閥の関係の病院○○病院ね！

「早くお兄様に会ってあげてください！そして……いえ！とにかく会いに行ってくださいませ！」

「ええ！わかったわ！」

私は荷物をもって目的地に走ったのだ。待ってて！のび太君!!

のび太はというと……

「……………」

病院で深く眠ってた……。いったいどうなる？果たしてのび太の状態は？

謝罪と対面

三上 s i d e

走る・・・走る・・・

「はっ！はっ!!」

ひたすら目的の病院に走っていた

「の、のび太君・・・!!無事でいてー!」

私が思い浮かぶのは、のび太君の笑顔と優しさが頭によぎっていた『心配しないで？僕らは必ず勝つよ・・・確かに他のクラスから見たら最底辺・・・。だけど信頼できる仲間がいるのさ！だからここで待つといてくれない？』

根本に脅されていた時のこと・・・

『三上さんも手を上げた罪・・・重いぞ』

浚われたときの助けてきてくれたこと・・・

『あつ、ぐっ・・・ごめん！その、三上さんの水着が似合っていたから!!』
プールでの遊びにいったときの照れながら言ってくれたこと

『三上さん・・・そんなに僕らを信頼してないならもう・・・話しかけないで・・・』

強化合宿での冷たい言葉・・・

『僕も言い過ぎたよ・・・ごめんね？三上さん』

その後の仲直りした時のこと

そして・・・

『また会おうね！三上さん!』

『うん！いつか・・・いつかまた会えたらいいね？のび太君!』

幼い頃の約束・・・

色々な事を思い出していて、いつも彼は優しく笑ってくれた

「お願い・・・!」

私の切実な気持ちに裏切られる事ない様に！その気持ちと共に病院が見えた

ウイイーーン

自動ドアが開き、受付の人に聞いた。大声出さないように小さい声で聞いた

「あの、す、すいません」

「どうされました？」

「あ、あの・・・野比のび太君はどここの病室にいますか？」

「少々お待ちください・・・七階の〇〇〇号室にいます。お部屋は個室ですのでご注意ください」

「わかりました」

早く早く!と思いつながら他のお客様に迷惑かけないように早歩きで歩いていった

私は七階に看護師さんに病室を聞くと、向かい側の窓辺り付近に病室があると聞いた。焦る気持ち押さえきれずに病室に着きゆつくとドアを開けたら・・・

「三上さん・・・?」

「はあはあ・・・の、のび太君・・・?のび太君!!」

起き上がっていて窓を眺めていたのび太君に私は嬉しくなり、飛び込んだ。良かった・・・良かった・・・!

のび太 side・・・

夢を見ていた・・・懐かしく悲しい夢・・・

『ごめんなさい・・・のび太さん。気持ちは嬉しいけど・・・』

『うん・・・分かってたよ・・・でも何も言わずに別れたくなかった』

『ううん。のび太さんの事は好きだったのは事実よ・・・でも、私は目指してる夢があるの・・・。でも、これだけは言えるわ。貴方は誰よりも優しくいい人なのは知ってる事を・・・』

『・・・』

『貴方には本当の意味での大切な人が巡り会えるわ・・・。』

でもね・・・』

『?』

『これからも友達としていてくれる？告白断った私が言えたことではないけど……』

『勿論……。ねえ、もうひとつ聞かせて？君は……。出来杉が好きな？』

『出来杉さん？……。好きと言うより尊敬する人だわ。本当の意味での好きな人は……。わからないわ』

あの日の告白……。僕は彼女……。静香ちゃんの告白断られたのだ。でも、分かっていたよ。彼女は恋愛めなのは今はないのは……

『ねえ、のび太さん』

『なに？静香ちゃん……。』

『いつか……。いえ、きつとそう遠くないうちにのび太さんの大切な人が出来るかもしれないわ』

『何でそう思うの……。？』

『だってー』

そこで僕の夢は途切れた……

そして……

『知らない天井だ……。』

僕は目が覚めると、全く知らない天井だった……。ここは……。？
ガラガラ!!

ドアが空いた音がしたから振り向くと……

そこにいたのは……

『はあはあ……。』

『三上さん……。？』

大嫌いといった彼女が目の前にいたのだ。僕はまだ状況が追いつかない頭を振り絞ってなぜ彼女がここにいるのか疑問に思っていた

『はあはあ……。の、のび太君……。？のび太君!!』

泣きながら僕の方に彼女は飛び付いてきた。え？え？ど、どういふこと?!なぜ三上さんが？

『え？え??』

『良かった……。良かった……。』

「み、三上さん……」

ただ一つだけ分かったことがある……

また泣かしてしまった……

「ごめんね……三上さん。また泣かせてしまった……」

「違うの……違うの……悪いのは私よ……貴方を追い詰めてしまつて……ごめんなさい」

今は彼女を泣き止ませるのが先だ……。そこからまた考えればいいか

暫くして三上さんは泣き止んだのだ。あれ？これ前も同じことあったような気が……

「ご、ごめんなさい。取り乱して……」

「う、ううん。大丈夫だよ……(三上さんの涙目での上目遣いが可愛すぎて動揺してしまつた)」

「……ごめんなさい」

「え？」

「私が知らない間に貴方を追い詰めていたなんて恥ずかしくつて……本当に申し訳ないわ」

「ううん。三上さんは悪くないよ……」

「でも！」

「ねえ、今から話すことは本当の事だから聞いてくれるかな？」

「(コクツ)」

と さて……誤解解けるチャンスが来たんだ……きちんと話さない

「まず始めにあの明久の銃を突きつけたのはあれは演技だったの」

「え、演技？なんでそれをしていたの？」

「うーんと明久と島田の事件聞いた？なんか噂になつていなかった？」

「美波の？……あつたわね」

「どんな噂？」

「なんかよくわからないけどディープキスつてのをしてみたみたい。」

「ディープキスってなに?」

「ディープキス?」

「ごめん、僕もそれはよくわからないけどキスをしたって噂は流れていたのだね?」

「ええ、その後美波は吉井くんと付き合ってるのか? って噂になっていた。それが気になり、のび太君を探していたら」

「屋上で僕が明久に銃を突きつけたのを見て、最低な人だと思ったのだね?」

「ええ・・・」

なるほど・・・

「まず、明久と島田は付き合っていないよ」

「え!? で、でもキスをするぐらいだからけつきりそう思ったのだけど違うの!」

「いや、その原因は元を辿れば明久が原因だね」

訳を全て話すと三上さんの反応は・・・

「・・・じゃあ誤解だったって事・・・?」

三上さんが恐る恐る僕に震える声で聞いてきてのだ。僕は無言で頷くと三上さんは・・・

「・・・え?」

「ごめんなさい・・・ビンタ痛かったでしょ・・・?」

涙目で僕の頬に優しく撫でていた。・・・三上さん・・・

ギョッ

「え?」

「三上さん、僕は大丈夫だよ?」

「で、でも! あんな酷い言葉をいったのよ!」

「それをいったら、僕も強化合宿で三上さんに酷い言葉を言ってるじゃない?」

そう、僕はあの時に三上さんに「もう話しかけないで」といったことがある・・・

「だから、今回の件はこれで終わろう? お互い様ということだ」

「の、のびた君・・・のび太君!!」

「うわ！」

三上さんは泣きながら僕の方に抱きついてきたのだ。あれ？本当にこれ前もあつたような気がするけど……

でも……

「大丈夫、大丈夫だよ」

「うん……うん……！」

今は泣き止まするのが優先だね……何か僕も三上さん会っただけで全て吹っ飛んだような気がする……

こうして僕らは仲直りしたのだ……

オマケ……

「そういえば、僕は何故病院にいるのか三上さんは分かる？」

「え？私のはび太君が入院したの聞いたから急いできたのだけど……」

あれ？三上さんも知らないの？どうしたものか……と思うと

「あれ？のび太？それと……三上さんだったって？」

「スネ夫?!何でここに?」

「何でって……ここパパの会社の関係してる病院だよ」

「え?!骨川くんってお金持ちなの?」

三上さんが驚きながら僕に聞くと頷いたらビックリしていた。つてそういえば、何でいるんだ？

「つてそうそう、のび太も三上さんもいるなら早いや。のび太が入院してる理由は階段から落ちて頭打ったのが一つの原因」

あつ……思い出した

「一つってことは……ほかにも原因あるの?」

三上さんがスネ夫に質問すると、スネ夫は苦笑いして答えてくれた「精密検査して帰宅すれば良かったけど、そこは異常なかった。一番の原因はのび太の体調だよ」

「え?」

「のび太さ、体怠くなかった?重くなかった?」

・・・言われてみれば・・・

「自覚してなかったんだね・・・のび太の熱が40℃もあったんだよ？
おまけに睡眠あんまり取れなかったんじゃない？」

「え!？」

ぼ、僕そんなに熱があつたの!？」

「まっそういうわけだからーお邪魔しましたー」

そういつてスネ夫は帰つたのだが・・・三上さんが顔下向けながら
震えるように聞いてきた

「のび太君・・・睡眠どれぐらいとつたの？」

「えっと・・・三時間しか取れませんでした」

「のび太君・・・今すぐ寝ていなさい!」

「は、はい!」

こうして僕は三上さんの言う通り直ぐに寝たのだ・・・

三上 s i d e

「Z z z・・・」

「よく寝てるわね・・・本当にごめんなさい・・・」

きつと彼は私のせいで追い詰められたんだわ・・・はあ・・・

「今はゆっくり寝てね・・・のび太君」

今はのび太君の寝顔を眺めておこう・・・お休み。のび太君・・・

再会と解放

のび太と三上が和解した翌日病院にて・・・

「退屈だ・・・念のために後、一日入院って・・・ああ退屈ー」

そののび太は、後一日入院という猶予与えられていたが余りにも暇すぎて病院内で散歩していた。にしても・・・

「今日って午前中に授業終わる日だね・・・熱もすっかり下がったし、体調も元通りになったし十分回復してるのに・・・早く退院したい!!」

「おや、野比じゃないか？」

??この声は・・・もしかって・・・

「先生!？」

「久しぶりだな。野比」

やっぱり先生だ!小学校の時にお世話になった先生だ!!あれでも、平日のはずなのに・・・何故ここに?」

「先生は健康診断だ。にしても、野比は何故ここにいるのだ?学校はどうした?」

「あははは、実はー」

入院していること、体調管理しっかりしてなかった事を隠すことなく全部話したら・・・

「全く・・・きちんと体調管理はしなさい。それと昔から怪我多いのだから気を付けるんだぞ」

「はい(うわー、懐かしいなー。このお説教は・・・)」

「しかし・・・見違えるほど成長したな」

「え」

「中学なってからは暫く会ってなかったからか、精神的なのはより一層強くなっているし、確りとしていたことに嬉しく思う」

「先生・・・」

余りにも予想外すぎるおほめの言葉に嬉しくって照れてしまう・・・

「つと、いかんいかん。野比」

「はい」

「先生はまだ野比の母校で働いているからまた顔出してくれないか

？」

「っはい！」

こうして先生と別れたのだ。余りにも予想外の出会いに僕は嬉しかったし、高校生なつてから誰かに会うの増えた気がした

こうして病室に戻ると・・・

「あっ！のび太君!!」

「遅いよ、のび太！」

「三上さん・・・それにみんなも来てたんだ！」

病室の前にはいたのは三上さんと明久達が待つてくれている

「もう体調大丈夫なのか？」

「うん。島田も姫路も迷惑かけたね」

「ううん。寧ろこちらがあんたには迷惑かけたね。ごめん」

「い、いえ！のび太君も大変でしたし・・・」

雄二の質問に答えてその後には島田と姫路にも今回の件の事を謝罪したら許してくれた。良かった・・・

「そういえば、ムツツリー二は？」

「・・・誘う前に血の海に沈んだ。秀吉はそれを付き添っている」

ああ・・・それで察した。多分起きたらまた血でそう

「あっ、そうそう。午後に退院だつてさ」

「え？余りにも急だね？」

「まっ、もう大丈夫だと判断されたんだろ？」

ジャイアンは退院と多分理由を言ってくれたんだと思う

「あっそうそう。近々期末試験だから様子見るついでにそれを伝えに来たんだよ」

「ありがとう」

「じゃあ俺達は帰るから三上さんと二人楽しめよ」

？どういうことだろ？と思いつつも、三上さん以外は帰つたのだ「さっ、のび太君帰る用意はじめよう？つとその前に念のために検査をしてからだつてさ」

「大丈夫なのに・・・」

「だーめ。頭を打ったんだから念入りに見てもらった方がいいしね」
「うー、仕方ないか・・・」

嫌々ながらも、午後の検査をして結果を聞き、無事に退院の手続きを終えて漸く帰れることになった・・・

「あー！もう二度と絶対に入院したくない」

「クスクス。退屈だったもんね？」

「うん」

僕らは病院から歩いて家へ帰る途中立った。荷物はジャイアンが先に持って帰ってくれたからそんなに無かった

「即答ね・・・」

「ねえ、三上さんがよければだけど・・・近々勉強一緒にしない？」

「え？いいけど・・・大丈夫なの？」

あれ？何か心配されてる・・・

「大丈夫だよ！それに一人で勉強をするより捗るからね！」

「そう。ならお願いするね」

「うん！」

こうして勉強の約束をして帰っていると・・・

「・・・え？」

「ど、どうしたの？三上さん？」

「ねえ、私の目がおかしいのかな？」

え？どう言うことだと思い、見てみると・・・

「・・・僕も疲れてるのかな？目がおかしいのかな？」

「のび太君も見えたということは可笑しくないわ・・・」

やっぱりか・・・

「バスローブ姿で歩いてるなんて・・・のび太君やっぱり早く帰りましょう」

「うん・・・」

お互いにいそいそと帰ったのだが、ひとつだけあえて言わせてもらう・・・何であんな格好で歩いているの!?!全く知らないけど、あの人の家族はいったいどんな教えをしてるの!?!

密かな寒気と鳥肌が止まらないのは内緒だ・・・ああ、何か明日か
らが又いやな予感がします・・・誰か助けて・・・

期末試験編

仲直りと異変

朝早くに家を出て少し歩くと後ろから肩に優しく叩かれた・・・

「おはよう。のび太君」

「三上さん、おはよう」

三上さんとはあの入院していたときに無事に和解してからの初めての登校だ。なんか彼女の声を聞くとすごく安らぐ・・・

「どうしたの？のび太君」

「うん・・・三上さんと仲直りできてよかったなって思っていたし、なんか三上さんがいると心が落ち着くんだ」

「え？のび太くんも？」

ん？ってことは・・・

「私も・・・そ、その・・・寂しかった。身勝手と思うかもしれないけど・・・」

「ううん。大丈夫だよ！」

「そう。ってあれ？ものすごい早さで走ってるのは吉井君？」

「多分そうだね。どうしたのだろう？」

とりあえず、声かけよう

「おーい、明久」

「うん？のび太！もう大丈夫なの？あ、あと二人ともおはよう」

「おはよう」

「ええ、おはよう」

「もう大丈夫みたいだからここにいるんだよねー。ん？」

「あら？吉井君・・・」

「？な、なに？」

うん・・・やっぱりおかしい

「吉井君(明久)、いつもと違って朝から血色いいように見えるよ？なんかあったの？」

「一句一句ハモっていった!?いや、まあたまには・・・ね？」

・・・怪しい

「それに何で私の顔を逸らすの?」

「い、いや何も・・・」おーい、のび太ー」ご、ごめん!先に行くね!」
「明久!」

「行っちゃった・・・」

「おはよう・・・ってどうしたんだ?」

「あ、ジャイアンおはよう」

「おはよう、剛田君。吉井くんがいつもより顔色もよかったし何か可笑しかったの」

「明久が?・・・怪しいな」

「やっぱり?仕方ない・・・」

「とりあえず、早く学校いきましょ?あつ、のび太君と剛田君久しぶりに屋上で食べない?」

「いいね!」

「おお!それ楽しみだな!」

「なら約束ね?」

そういいながら靴をはきかえて教室は違うので別れた

教室に入る前に明久に追い付き、とりあえず教室で話そうと思いだアを開けると・・・

「おはよーって雄二、どうしたの?なんで今日はズボンが体育用のハーフパンツになってるの?」

「新しいファッションか何かなの?」

「何があった?」

雄二が見慣れない格好で座布団に座っていたのだ。僕もジャイアンも変なことをいってるのは自覚してるよ・・・

「テメエのせいだ明久!テメエのせいで俺は、下半身超クールビズ仕様で登校する羽目に・・・!死んで償えこのクソ野郎!」

「えええっ!いきなりどうしたの!一体何があったのき!」

「黙れ!死ね!制服をよこせ!」

「うお!?坂本の奴、すげえキレてる!!」

いったい何があったのだろうか?

すると……

『おい、知ってるか？坂本の話』

『ああ。なんでも裸Yシャツで登校してきたらしいな』

『まったく、流石としか言いようがないな……。最近女装は見慣れてきたが、アレには度肝を抜かれたぜ……。』

聞こえてきたのは、クラスメイトの話し声

「……」

えっと、こんなときどう声かけたらいいのだろうか？

「さ、坂本……何か悩んでるのか？」

「その……一人で抱え込まないでね？」

「ち、違う！俺は自分から進んでそんな格好になったわけじゃない！

あと、トランクスは死守したからギリギリでセーフなはずだ！」

そうなるかな……？

僕とジャイアンの言葉に慌てて否定する雄二。そんな雄二に明久は頷いて言った

「うんうん。そうだね。辛いことがあつて、雄二の精神はギリギリのところまでいっちゃったんだよね……」

「だから違うと言ってるだろうが！お前が送ってきたメールを翔子に見られたせいでズボンを奪われたんだボケ！」

また明久のメールで？今度は何なんだろう？

「え、でもいくら霧島さんでもそこまですると思えないけど」

「いや。正直、お前の文章はかなり際どい感じだったと思うぞ……」

「際どいって、どんなメールだったんですか？」

姫路が突然ひよこつと現れた。いつの間に……

「別にただの頼みごとのメールのはずだけど？」

「ほほう。そう思うのなら、俺に送った文面を大きな声で読み上げてみる」

一体どんなメールを送ったんだ？

「えっと、それじゃ……コホンっ」

咳払いをした後に、明久は大きな声で読み上げた

「雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちよつと……帰りたいくな

いんだ!」

ガラッ!

その瞬間、音をたてて教室の扉が開かれた
「……………」

その扉の向こうにいたのは、島田だった。

「ウチにはアキの本心が全然わからない!」

「え!? 登場と共に再び美波がどこかへいった!」

うん……………。なにも聞いてなかったら確かにそうなるね……………
「な、なんてことを言うんですか明久君っ! そういうことはもつと、その……………大人になってからですっ!」

「姫路。少し落ち着こう」

「つてか大人になつたらいいのかよ!」

「相変わらず朝から賑やかじゃな……………。先ほど明久が走り去って行つたと思つたら、今度は島田が教室から飛び出して行くとは。何があつたのじゃ?」

今度は秀吉が教室に入ってきた。

「いや、別に何もないけど」

「なんじゃ。先ほどのことと言ひ、ワシに秘密かの? それはちと、寂しいのう……………」

仕方ない……………

「明久が公序良俗に反する発言をしたんだ」
「ジャイアンと多少捏造して発言した」

「お主、朝っぱらから助平なことを言つておつたのか?」

「ち、違うよ! 僕はそんなムツツリーニみたいな真似はしないよ!」

「……………失礼な」

どこかムツとしたような呟き声が聞こえてくる。振り返ると、いつの間にかムツツリーニが立っていた

「おはようムツツリーニ。随分荷物が多いけど」

その両手には学校の鞆の他に大きな包みやら袋やらを提げていた
「……………ただの枕カバー」

「枕カバー? そのわりには包みが大き過ぎない?」

「……そんなことはない」

ブンブンと首を振って否定するムツツリーニ

「ごめんムツツリーニ。ちよつと中身を見せてね」

「……あ」

明久が康太から包みを奪い取る。僕とジャイアンも気になり中身は何だ?と思ひ覗こうとすると明久が固まった

「どうしたの?……あ」

中から出てきたのは——等身大の明久がプリントされた白い布
(セーラー服着用)

「これ……どう言うこと……?」

「……全て秘書がした」

あれ?前もこのやり取りしていたような気が……
すると……

「失礼。土屋君はいるかな?前に頼んでいた枕カバーを」

まさかのこのタイミングでマニア登場

「あれ?珍しいね久保君。ムツツリーニに何か用?」

「——なんでもない。少々用事を思い出したので失礼するよ」

けれども明久を見るなりそくさと立ち去ってしまった

「ムツツリーニ。久保とも取引をしていたのか?」

「(こくり)……強化合宿以来、お得意様」

色々な意味で彼の噂は本当なのかな?だとしたら、もう手遅れだね……

「はあ……。とにかくムツツリーニ。とりあえずその抱き枕カバーはあとで没収するからね?作った分を全部回収して、写真を秀吉に換えて持ってきてよ」

「明久よ。ドサクサに紛れてワシの抱き枕を作るでない」

「そうですよ明久君。人の物を勝手に取って、しかも改造するなんてダメです。……一つは私の分なんですし……」

……ここにもマニアいた……

すると秀吉が何の話をしていたかと聞いてくると、雄二が答えてくれた

「まあ、要するに明久が送ってきたメールのせいで翔子が何かを勘ぐって、それが原因で俺が酷い目に遭ったって話だ」

「メール？それは今朝の明久の様子がおかしいのと何か関係があるのかの？」

そういえばそうだった

「明久君の様子ですか・・・？そう言われてみれば、今朝はいつもより顔色がいいですね。制服も糊まで利いてパリツとしてますし寝癖もないですし・・・」

「確かにおかしいな。顔色がいいのはまだわからなくてもないが、制服がきちんとしているのは妙だ」

姫路とジャイアンやムッツリーニが疑惑の目で見てみると明久は慌てていた

「た、たまにそういう気分の日もあるんだよ！それより、そろそろチャイムが鳴るよ！鉄人が来る前に席につかないと！んじゃ、そういうことであつ！」

明久は強引に話を打ち切って、そのまま自分の席まで行ってしまった

これは・・・

「怪しい・・・」

結構慌てているが、そんなに隠しておきたいものなのかな？

まっ、気にしても仕方ないし、授業の準備をするか

昼御飯と疑惑

明久の疑惑がやまない中、始まったが……いつもと違うのは……明久が真面目に勉強していることだ。その様子に、先生たちは……「吉井保健室へ行きなさい」

午前中、四つの授業で七回もこの台詞が教室に響いた

そりや、明久が真面目にノートを取っていたら皆が言うだろうね

「全く……みんな失礼だなー！そう思わない？のび太、ジャイアン」

「いや、僕も先生と同じ意見」

「俺ものび太と同じ意見」

何泣きそうになってるの……事実なんだから

「アキ、何かあったの？朝から様子が変みたいけど」

四時間目の授業道具をしまう明久のところに島田がやって来た

「別になんでもないよ。ちよつと真面目に勉強に取り組んでみようと思っただけで」

「アキ。おでこ出しなさい。今熱を測るから」

「だからどうして皆似たようなりアクションを取るんだろう……？」

普段の行いを見たら誰でもそう思うよ……にしても、三上さんが来たら屋上行く段取りなんだけどもまだ来てないな――

「つて、これはダメだっ！」

「ぎゃっ！」

明久が突然飛び退いたせいで驚いた島田が小さく悲鳴をあげた

「こらっ！何よそのリアクションは！折角人が心配して熱を測ってあげようとしたのに！」

「ご、ごめん！色々と事情があるんだ！」

「事情？何よそれ？」

何となくだけど明久はなに隠してるのわかる。そんな明久は島田に寄られて慌てていたが、いったいなぜ慌てる必要があったのだろうか？

「う……。えつと……。そ、それより、まずはお昼にしようよ！昼休みなんて短いんだからさ！」

話を別の方向へ持っていきたかったのか、鞆からお弁当を取り出して卓袱台に広げた

「……んん？」

「珍しいな？お前が弁当持ってくるなんて」

「た、たまにはそういう日があるんだよ。僕だって人間なんだから、たまには栄養を摂らないと死んじゃうし」

「まっそれは正論だね」

すると納得いかないのか姫路と島田が疑いの目で見ていた。気になり、僕は二人に聞いた

「どうしたの？」

「い、いえ。何時もならそんなことしませんのに」

「そうね。アキが食べるとしたら大抵は買ってきたお弁当なのに、今日は手作りに見えるわね」

「そう言って二人はジロジロと卓袱台に置かれたお弁当を見る」

「確かにこの二人が言っていることも最もだ」

「まあまあ、明久もそういう日があるんだと思うよ？でも自分が作ったの？明久」

「うん」

「嘘ね／ですわね」

「信用全くされてないね……」

「ってことは！弁当作ったのは坂本か土屋ね！」

「のび太君とか剛田君は除外になりますからね」

「なあ、のび太なんの会話してるんだ？俺達も含められてるなんて」

「さあ？」

「すると……」

「……やっぱり、雄二の浮気相手は吉井だった」

「あれ、霧島さん？いつの間に……」

「……ついさつき来たところ」

「全く気づかなかった……」

「うん。ジャイアンの言う通り音沙汰もなかったよ……」

「あつ、そうだ。この間ありがとうね？木下さんや工藤さんにもお礼

を言ってくれない?」

「……うん(コクツ)。のび太の体調も良くなって良かった」

「いや、本当にお手数かけました。用事は雄二に?」

「……うん。それとのび太と剛田に伝言」

? 僕に?」

「……美子はもう少しで来るみたい。屋上使えないのさつき分かったから教室で食べようって」

「え? 屋上使えないのか? 残念……」

「わかった。ありがとうね? 雄二はあそこにいるから、目潰しはダメだよ?」

「……分かった」

話していて気づいたけど、スボン持ってるのは雄二のだろうね

あつ、先に雄二がこちらに来た

「ん? 翔子か? そうか。やっと制服を返す気になったんだな」

霧島が持つているスボンを見つけた雄二が平和そうな顔でやってくる

「……お仕置が必要(ボソツ)」

「……! (ガクガク)」

今、背筋が凍るような冷たい囁き声が聞こえた! 僕もジャイアンもその声を聞き震えていた

「やれやれ。これでやっとまともな服装に——ん? なぜズボンを離さないんだ翔子?」

「……雄二」

「なんだ」

「……私は雄二に酷いことをしたくない」

気づいて!? 雄二! 霧島さんの様子がおかしいの気づいて!!

「酷いことをしたくない? よくわからんが、それは良い心がけだな」

「……だから、先に警告する」

「何を?」

「……おとなしく、私にトランクスを頂戴」

その瞬間、脱兎の如く雄二は逃げ出した

「あはは。雄二つてばバカだなあ」

「あの、明久君」

「ん？何、姫路さん？」

「そのお弁当、食べるんですか？」

「うん。そりやまあ、折角用意したんだし」

「そうですか・・・わかりました。それなら、食べ比べてみて下さい
・・・あつ（察した）

「食べ比べ？」

「はい。実は——昨日作った特製クッキーが」

明久も雄二同様脱兎の如く逃げ去った。女子三人はそれぞれの男に追いかけていった

「えつと・・・」

「嵐のように去っていったな・・・」

僕とジャイアンがそう言うといれ違いに三上さんが来た

「お待たせ！ごめんね？二人とも」

「いやいや、大丈夫だよ」

「ああ。にしても、授業が長引いたのか？」

その言葉に三上さんは否定しつつ苦笑いしていた

「えつとね、屋上で先場所とろうと思っただけどダメだつてわかった
じゃない？で、携帯でメールしようと思っただけどできなくて霧島さ
んに伝言頼んでる間に携帯でそちらに向かうつて連絡していたの」

あ、今メール見た・・・きちんと先に見とけば良かった

「さつ！時間は限られてるから食べましょ？」

「うんいいよ！」

「おし！つてか木下もムツツリーニも来いよ？たまにはいいだろ？」

「異論ないわ。本当なら美波達もつて思っただけど今いないのは残念
ね」

「ならお邪魔しますかのう」

「・・・（コクコク）」

「じゃあ・・・」

僕らは手を合わせて・・・

「「「いただきます!!」」」

美味しくお昼ご飯をいただきました・・・。そして、校舎のどこかで明久と雄二の断末の声聞こえたが気のせいだとスルーしたのだ。

—・

疑問

あのお昼ご飯の後、何故かボロボロの明久と雄二が戻ってきて僕とジヤイアンは明久の顔ほこほこに驚いて聞くと……

「西村先生に姫路と島田の三コンボね……」

「うん、お陰で体が痛い」

「坂本は何があつた？」

「……言いたくない……」

顔が子供には見せれないほどのボロボロとスポンは帰ってきたが何故かぐつたりの雄二をみて口元引きつかせていたのはここだけの話……

そんなこんなで放課後になったのだが、やはり午後も明久は先生達に保健室行くようにと指示されていた

僕が教科書を鞆に詰め込んでいるときに明久が僕のところに来た

「雄二、のび太、少し良いかな？」

「何？明久？（朝から変な明久だけど、まさかと思うがここでも彼らしくない変な発言でたりして……なんてーそんな訳……）」

「今日なんだけどき、雄二の家に泊めてくれない？それで、二人に期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ」

「なん……だって……？」

「つちよ!?なんで二人が驚いてるのさ!?酷いよ!」

明久が突つ込む他所では教室は異様な空気になった

「おい!聞いたか……!?!」

「ああ!俺も確かに聞いた……」

「これは恐ろしいことが起こるぞ……」

「何故なら……」

「二」あのバカの吉井が期末の存在を知っていた事に驚いてる」

一句一句ハモるようにはつきりと明久に対して言ったら……

「君たちも人の事言えないでしょ!?!」

明久に正論で言い返されていた

「勉強教えてほしいだと・・・?」

「うん」

「やれやれ……。もしかって、まだ七の段が覚えられないのか?」

「待って!僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ!?分数の掛け算だつてきちんとしてできるからね!?!」

「ああそうか。三角形の面積の求め方に躓いているところだったよな」

雄二の問題に明久の回答は・・・

「(底辺)×(高さ)÷(三角形の面積)!いい加減僕をバカ扱いするのはやめなさい!」

「よくできたな明久。あとは最後に二で割ることを覚えたら三角形の面積が出せるようになるからな?」

すかさず近くにいたジャイアンが口挟んだら・・・

「ふう、やれやれ……。三人は人の揚げ足を取ることにに関してだけは天才的だね」

「なんだ!?その返しは!?!」

「予想を超えた!?!」

「すげえ!流石の俺でも予想外だ!」

この問題期末試験でたら明久は確実に間違えると僕は思う

「あの・・・明久君。九九の段の覚え方にコツはありますか?」

姫路がおずおずと明久にそう言うと言いつつ明久は出来るよ!?!と泣きながら突っ込み入れていた

「しかし、なぜ急にそんなことをいったのだ?」

「そうね・・・確かに気になるわ」

「ほら、雄二から説明あったでしょ?『試験召喚システムのリセットされる』とか『期末テストの結果が悪いと夏期講習がある』って。木刀と学ランなんて装備をそろそろ卒業したいし、夏休みも満喫したいし、頑張ってみようかな、なんて」

ふむ・・・

「・・・明久らしくない」

「そうじゃのう・・・」

「怪しい・・・」

ムツリーニ、秀吉、ジャイアンが明久に疑いの目でじつと見ていた
やはり今の言葉に信用はされていないね・・・

「あの、明久君。私で良かったら……一緒に勉強、しませんか？」

姫路が大胆に攻めた！

「姫路さんの家に泊めてもらうわけにはいかないしなあ・・・」

「え？明久君、私の家に来たいんですか？」

「あ、いやそうじゃなくて」

「そ、それなら、家に電話してお父さんにお酒を飲まないように言っておかないと・・・。その・・・、もし、ですけど、明久君がお父さんに大事なお話があるのなら、酔っ払っちゃつてると困りますし・・・」
・・・テスト勉強の話だよね？なんか流れがおかしいような気が・・・
「まさか転校の話?!だとしたら説得に行くけど!」

こっちはこっちでまったく違うことを考えてるみたいだね

「転向、ですか？明久君のお家って、仏教じゃないんですか？」

「ほえ？何の話？」

「いえ、ですから、お家の宗教が違うことのお話を・・・」

完全に会話が成り立っていない・・・

「たまに姫路の思考回路って明久と同レベルになる時があるよな」

「うん。雄二の言う通りだよ・・・」

「つまり、それだけFクラスの空気に馴染んできたってことか？」

「そうじゃな。朱に交われば赤くなるといったところじゃろうか」

「・・・似たもの同士」

「?????」

ちなみに島田は知らない単語でも入っていたのか、頭にクエスチヨ
ンマークを浮かべていた

それはそうと・・・

「話を元に戻すが、何故俺の家で勉強したいんだ？」

「確かにそうだね。明久の家で何かあったの？」

「えつとその・・・」

「嘘だ!!」

「急に勉強に目覚めて——って、早いよ！まだ何も言っていないのに！」
ふっ、だつてき……

「嘘だと言うこと否定しないんだな？」

「そうだね」

「うっ……そ、それは……」

「まあいい。勉強くらい教えてやらんでもないが……」

「え？ホント？」

「ただし、お前の家で、だ。その方がやり易いだろ」

言った後、雄二はよそを向いて小さな声で「我が家にはあの母親がいるからな……」と呟いた

そう言えば雄二の母親に会ったことないね

「え!?だ、ダメだよ！」

「なにか都合悪いの？明久」

「う、うん！実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。本当なら今日はお前の家でボクシングゲームをやる予定だったろうが。改装業者が来るはずないだろ」

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「マンションなんだから管理人に言えば開けてもらえるだろ」

「でもなくて、家が火事になっちゃって」

「火事に遭ったくせに弁当を用意してYシャツにアイロンをかけてきたのか？お前はどこまで大物なんだよ」

「他にはえつと……えつと！」

はあ……

「明久？いくらなんでも分かりやすい嘘言わないの。ってか嘘言うこと事態駄目だからね？」

「うう……」

「まっ、坂本やのび太じゃなくつてもお前の嘘は分かりやすい」

「そういうことだ。諦めろ」

「わかったよ。今日はおとなしく家に帰るよ……」

鞆を担ぎ帰ろうとして背を向けた明久の肩を秀吉がグツと掴んでいた

「待つのは明久。何をそこまで隠しておるのじゃ？」

「うえっ!?!いや、別に何も！」

「何かあるのかわからんが、このバカがそこまで隠そうとすることか……。面白そうだな」

「そうね。何かアキの新しい一面が見られるかもしれないし」

「私も興味があります」

「……家宅捜査」

「テスト期間で部活もないし、ワシも行ってみようかの」

「え?!そ、そんな!のび太とジャイアンは止めてくれるよね?ね?!」

僕はジャイアンとお互いにじっと見て……。下す判断は……

「面白そうだから行く!」

「そ、そんな!?!」

するとガラガラと後ろからドアが開く音が聞こえた

「のび太君に剛田君、勉強する約束一緒に帰りましょ?」

「あつ三上さん。実はさー」

「?」

一通り説明し終わると三上さんは……

「なるほど……。ねえ皆」

「もしかして止めてくれるの!?!ありがたー」

「私も吉井君の所へ行つていいかしら?元々二人と勉強するつもりだったけど、勉強するなら私も参加するわ」

「(止めてくれないー!?!)ダメだよ!今日は僕の家はダメなんだ!その、凄く散らかっているから!」

「あの、それならお手伝いしますけど?」

「でも、散らかっているのは2000冊以上のエロ本なんだ!」

「……任せておけ(グッ)」

「しまった!更にムツツリーニの興味を煽る結果に!?!もの凄い逆効果だ!」

「よし、それじゃ意見もまとまったことだし、明久の家に行くか」

「「「「おおおお!!」」」」

「やめてーっ!」

全力で抵抗する明久の首根っこを掴み、家まで連行した。
いったい何を隠してるのか楽しみだ・・

対面と爆弾発言？

三上さんも含めて僕らは明久の家へと歩いてきたのだが、何気に明久の家へと久しぶりな気がするのはなぜだろうか？

「何があるんだろうな？」

「ムツツリーニと違って明久は滅多に隠し事をしないからな。何かあるか楽しみだね」

「そうだな！確かに何かがあるのかは俺も気になる」

僕とジャイアンと雄二がそう話すとムツツリーニがしかめ面で否定していた

「・・・隠し事なんて、何も無い」

「女物の下着に興味はあるか、ムツツリーニ」

「・・・あるわけがない」

「流石に隠し事に慣れとるだけあるの。嘘も堂に入ったものじゃ」

「・・・！（ブンブン）」

「いや今さら否定しても皆わかってるぞ？」

「・・・！（ブンブン）」

ジャイアンの言う通りだと思うよ？今さら否定しても・・・

明久は自分の家に向かう間、ずっと落ち込んでいた

「でも、なんででしょうね？明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。強化合宿であんな覗き騒ぎまで起こしておいて、今更いやらしい本なんて隠すとも思えないし」

「そうじゃな・・・。急に手作りの弁当を持ってきたこと、Yシャツにはアイロンがかかっておったことなども合わせて考えると・・・」

「ないと思うけど・・・彼女できたの？吉井くん」

「二・・・！！」

三上さんの言葉に、雄二と僕とジャイアン以外は目を見開いて驚いていた

「あ、アキッ！どういうこと!?説明しなさい！」

「む、む・・・明久に伴侶か・・・。友人としては祝うべきなのじやが、なんだか釈然とせんというか、妬ましいというか・・・」

「・・・裏切り者・・・!」

「僕、何も言っていないんだけど・・・?」

明久の場合は行動が怪しいからそう思われても仕方ないような気がするけど・・・

「大丈夫ですよ。明久君が私たちに隠れてお付き合いなんで、そんなことをするはずがありません。私は明久君を信じています」

「(あれ? 姫路おちついてるね?)」

「(確かに・・・)」

僕とジャイアンは耳打ちしながら姫路が冷静なのを感心していたが・・・

「ね、明久君? 私たちに隠れてそんな人がいたりなんて、しませんよね?」

「(ひいいい!? こ、こわい!?)」

姫路の近くに歩いていたが、あの笑顔とあの言葉になぜか恐怖が覚えてしまった・・・

そうこうしているうちに明久の住むマンションに到着

「と、とりあえず明久。鍵を開けてくれない?」

「嫌だ」

せめてもの抵抗へとするが・・・

「明久。裸Yシャツの苦しみ、味わってみるか?」

「え!? 待つて! 途中のステップがたくさん飛んでない!」

「・・・涙目で上目遣いだとありがたい」

「ムツッリーニ! ポーズの指定を出して何する気!? 売るの!? 抱き枕!? リバーシブルで裏面は秀吉!」

「なぜそこでワシを巻き込むのじゃ!」

「土屋君。できれば、Yシャツのボタンの上二つは開けておいてもらえると・・・」

「姫路さんも美波も最近おかしいからね!? わかったよ! 開けるよ! 開ければいいんでしょ!」

「・・・ボタンを?」

「家の鍵を!」

あの明久がツツコミいれまくってる・・・僕らもボケるべきなのかな？他の皆がいろいろ言っていた

「とりあえず、明久が何を隠してるのか知らないけど・・・」

「入ったらわかるだろうな」

「そうね。彼があそこまで嫌がるなんて・・・気になるわ」

「それじゃ、あがつてよ」

明久に招き入れられて入った部屋の先、俺たちの視界に飛び込んできた一つの物

「「「「「・・・」」」」」

それは、室内に干された――ブラジャーという名の女物の下着だった

「いきなりフオローできない証拠があーっ!?!」

明久の叫び声が響く中、皆は思い思いの感想を言っていた

「・・・もう、これ以上ないくらいの物的証拠ね・・・」

「そ、そうじゃな・・・」

「・・・殺したいほど、妬ましい・・・!!」

「これは・・・フオロー出来ないわね」

「う、うん。残念ながら・・・(ブラジャーから目をそらしてる)」

「弁明の余地はない・・・(ブラジャーから目をそらしてる)」

そしてこの状況で、姫路が笑顔で明久に歩み寄ってこう言った

「ダメじゃないですか、明久君」

「え？何が？」

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていないませんか？」

「「姫路(瑞希) 認めない気だ!!」」

ついに現実逃避を始めたの?!

「姫路さん、これは僕のじゃなくて！」

「あら、これは」

姫路は視線をリビングの卓上に向けている。あれは確か化粧用のコットンパフだと――

「ハンペンですね」

「「「「「ハンペェン!?!」」」」」

とうとう真つ正面から否定した！

「ん？あの上に置かれているのって・・・」

「弁当だね？」

「それも女性向けのヘルシー弁当ね？」

僕とジャイアンと三上さんがそう言うのと姫路が顔に両手を当てて床にへたり込んだ

「・・・」

「えつと・・・姫路さん？」

「も、もう否定しきれません・・・」

「ちよつと待って！女物の下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトになるの!?!」

まあ否定のしようがないのも事実・・・

そう考えていると・・・

「はあ・・・もうこうなったら仕方がないよね・・・正直に言うよ。

実は今、姉さんが帰ってきているんだ」

とうとう明久が白状した。皆がそれぞれ撫で下ろしていたが聞かねばならないことがある!!

「まって？姉がいるのはわかったけど何でそこまで嫌がるの？」

「普通に教えるだけならいいだろ？」

「確かに、あそこまでの拒絶は気になるな」

僕やジャイアン、雄二がそう言うのと皮切りのように皆も言った

「それもそうね」

「確かにそうです・・・」

「・・・(コクコク)」

「そうじゃのう」

「アキ・・・まだ隠してるの？」

僕の言葉で皆が一気に明久にまだ隠しているというお互いを持ちながらじつと見ていた

「明久、もう話した方が楽だよ？」

僕は明久に肩を叩きながらそういうと

「実は・・・僕の姉さんはかなり、その・・・珍妙な人格をしていると

「どうか、常識がないというか……だから、一緒にいると大変で、色々減点とかもされるし、それで家に帰りたくなくて……」

「……これはかなりの人なんだろう。明久が常識ないと言うぐらいいんだから、よほどすごい性格かもしれない」

「あ、アキが非常識って言うなんて、どれだけ……？」

「むう……。恐ろしくはあるが、気になるのう……」

「……是非会ってみたい」

「そうですね。会ってみたいです」

「うーん、まあ気になると言えば気になるが……」

「そうね……」

「この場にいるほとんどが興味を持ち始めた」

「まああんまり勘繰りしない方がいいと思うよ？」

「まあ、誰にだって、隠したい姉とか母親とか、そんなもんがいるモンなんだから」

「ゆ、雄二とのび太……!!フォローありがとう……!!」

「へえ？あの雄二がフォロー入れるなんて……まさかと思うけど雄

二は身内に苦労してるのかな？あはは、まさかね？

すると……

ガチャ

その時、玄関のドアを開く音が聞こえた

『あら……？姉さんが買い物に行っている間に帰って来ていたのですね、アキくん』

「タイミング見計らったかのように帰ってきたね」

「うわわわわっ！か、帰ってきた！皆、早く避難を——」

「明久君のお姉さんですか……？ど、ドキドキします……」

「う、ウチ、きちんと挨拶できるかな……？」

「駄目だ！会う気満々だ!!!」

明久が慌てふためく中、ついに扉が開かれた

「あら？お客様ですか。ようこそいらっしゃいました。狭い家ですが、ゆつくりして下さいね」

「お、お邪魔してます……」

出てきたのは黒髪の短髪に、あ、あの姫路さんよりもあそこがデカイ女性だった

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

あれ？思ったよりも礼儀もしつかりしてるし問題ないような気がするけど……？

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

我に返った雄二が慌てて頭を下げる

「……土屋康太、です」

「はじめまして。雄二くんに康太くん」

笑顔で返す玲さん。意外と普通じゃない？

「木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじやが、ワシは女ではなく……」

「ええ。男の子ですよね？秀吉くん、ようこそいらっしやいました」
「……つつ!!」

あの秀吉を男だと一発でわかった!?

「わ、ワシを一目で男だとわかってくれたのは、主様だけじゃ……!」

秀吉が凄く感動している。そんなに間違われてるのか……いや、多分間違えられるのは仕方ないかもしれない

「もちろんわかりますよ。だって、うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんてできるわけがありませんから」

「「んん？」」

僕とジャイアンと三上さんが今の言葉に疑問を持ったのだ。あれ？なんかおかしいような気が……

「ですから、こちらの六人も男の子ですね？」

と、まだ自己紹介していないメンバー（僕とジャイアンと三上さん含む）を指差して言った

「ちよ、ちよつと姉さん!? 出会い頭になんて失礼なことを言うのさ！ 確かにのび太とジャイアンは男だけど、後の4人はきちんと女の子だ

からね!？」

「ワシは男であつてるぞ!？」

明久は秀吉のツツコミをするしてなにもなかったように振る舞つたのだ

「と、とにかく!失礼だよ!？」

「わかりました。．．．所で、まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか．．．?」

ん?そういう家訓でもあるのかな?

「あ、あの、姉さん。これには深い深い事情があつて——」

「そうですね。女の子でしたか。変な事を言つてごめんなさい」

「実は．．．つてあれ?」

何かを説明しようとする明久を無視して、僕たちに頭を下げる玲さん。いや、僕とジャイアンにも下げる必要はないのだけど．．．

「どうかしましたか、アキくん?」

「あ、いや．．．姉さん、怒つてないのかな、つて思つて」

「?あなたは何を言っているのです?どうして姉さんが怒る必要があるのですか?」

まったくだよ?明久は何を言つてるんだ?

「ところで、アキくん」

「ん?何?」

「お客様も大勢いらつしやるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者さんごっこは明日でもいいですよね?」

．．．本当にナニライツテルノカナ?

「ね、姉さん何言つてんの!?!まるで僕が日常的に実の姉とお医者さんごっこを嗜んでいるかのような物言いはやめてよ!僕は姉さんとそんなことをする気はサラサラないからね!?!」

確かに．．．普通はないのだけど．．．

「あ、明久君．．．お姉さんとお医者さんごっこつて．．．」

「アキ．．．血のつながった、実のお姉さんが相手つて、法律違反なのよ．．．?」

「姉さん!お説教は後からいくらでも受けるから、さっきの台詞を訂

正してよ！」

「何を慌てているのですかアキくん。それより、昨日アキくんに渡した姉さんのナース服はどこにあるか知りませんか？」

「このタイミングでそんなことを聞くなあーっ!!」

「……あの明久がかなり振り回されてる……」

「それと、不純異性交遊の現行犯として減点を150ほど追加します」

「150!?多すぎるよ!まだ何もしてないのに!」

『『まだ』?……200に変更します』

「ふぎやあああつ!姉さんのバカあーっ!」

「……こ、これは……」

「明久……お前苦労してるんだな」

「本当にお疲れだね」

「色々に意味で納得した……」

「あ、ありがとう雄二、のび太とジャイアン……。僕、生まれて初めて3人に癒された気がするよ……」

本当に苦労しているんだね……。なんか涙出てくるよ

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方のお名前を伺っても宜しいでしょうか?」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明久

君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとは——友達です」

意味ありげな視線を明久に向ける島田。向こうは真意に気づいてないだろうけど……

「瑞希さんに美波さんですね。はじめまして」

次は僕と三上さんとジャイアンだね

「野比のび太です。明久の友人です」

「三上美子です。吉井君とは別のクラスですが、知り合いです」

「剛田武です。明久と同じクラスの友人です」

「あら……剛田と野比……ですか?」

ん?僕とジャイアンの名前聞いた途端に、顎に手を当てる玲さん
どうしたんだろ?

「もしかって・・・○○小学校に通っていたあの二人でまちがいないですか？」

「え!? な、何でそれを知ってるのですか!?!」

「やっぱりですか・・・この話はあとで聞きます」

なんで玲さんが僕らの出身知ってるのだろう・・・? ?

余りにも衝撃過ぎて固まっていたとだけ言おう・・・

料理は最後まで見ることに

玲さんが僕らの小学校言い当てて戸惑っているなか明久が話題を変えてくれた

「ところで、姉さんは何をしに出掛けていたの？」

「夕食の買い物に行ってきました」

「そういえば玲さんは結構袋を提げていたけど、そういうことだったのか」

「あれ？でも、随分と量が多いね」

確かに、どう見ても二人分とは思えない。保存用かな？

「いいえ。その量であっています」

本人もこう言ってるから、やっぱり冷蔵庫に入れておく為にまとめ買いをしたのかもしれない

「折角皆さんがいらっしやっただことですし、お夕食を一緒にいかがでしょう？大したおもてなしはできませんが」

玲さんの問いに僕は――

「迷惑でなければ喜んで」

「俺もです」

「私も賛成です。皆と食べるのも楽しそうだと思うしね」

「そうだな。俺もそうさせてもらう」

「・・・御馳走になる」

「迷惑でなければワシも是非相伴させて頂きたい」

「ウチも御馳走になろうかな」

「じゃ、じゃあ、私も・・・」

全員が首を縦に振る。今日は賑やかな夕食になりそうだね

「それは良かったです。ではアキくん、お願いしますね」

「うん。了解」

明久が玲さんから材料が入った袋を受け取る。その事に姫路と島田が疑問の声をあげた

「え？アキが作るの？」

「うん。そうだけど」

「明久君って、お料理ができたんですか!？」

まあ、普段の明久を見たら信じられないのわかるけど・・・

「ほら? 明久がお昼に自分で弁当作ってきたって言うていたから信用してあげなよ?」

「そう不自然なことでもないだろう? 俺だって料理くらい作るしな」

「まあ確かに」

「・・・紳士の嗜み」

「わ、ワシは、その・・・あまり得意では・・・」

今さらりとムツツリー二の言葉をスルーしたね。いや、聞き流したんだらうけど

「ムツツリー二はともかく、雄二はやっぱり家で夕飯作って覚えた夕飯でしょ?」

「おう。その通りだが・・・やっぱりってのはどうしてだ?」

「あはは。だって、雄二は家の中で一番地位が低そうだもん」

「んん? 何をいつてるんだ? お前?」

「え? 何ってジャイアン・・・夕飯って、家の中で一番立場の弱い人が作るもんなんですよ?」

「「「「「「・・・」」」」」」

僕らは明久を可哀想な目でみていた

「母の方針で家ではそうなっています」

「いやなに? そのパワフルお母さんは」

「なんとも言えない・・・」

「普通は立場に関係なく、作れる人が作るもんなのじゃがな」

僕らの言葉に明久は驚いていた

「え!? 普通の家では違うの!? おのれ母さん! よくも今までずっと僕を騙し続けてくれたな!？」

・・・明久が騙されやすいだけだと思っ

「んじや、ちよつと早い我先に夕飯の支度から始めるか。明久、手伝うぞ」

「僕も手伝うよ」

「・・・協力する」

「なら俺も・・・」

「あつ！ジャイアンは切る作業頼んでいいかな!？」

僕は慌ててそう言うのとジャイアンは「何でだ?」と???マークが出ていた

「家の台所詳しいのは明久だから、僕らは切るとかでいいとおもうよ?」

「うーん・・・まっそうだよな!よし!切る作業は任せろ!」

ふう・・・明久達は知らないと思うけどジャイアンの料理は・・・ごめん。これ以上僕の口から言えないし教えれない

そう内心思っていると・・・

「あのっ、それなら私もっ!」

「二!いや、女子は座ってていいから!!」

「は、はあ・・・。そうですか・・・」

そんなこんなで、結局まずは夕飯を食べて、それから皆でテスト勉強をするという運びになった

「明久。何か丁度いいサイズの鍋はないかな?」

「へっへっ。実はそっちの棚の奥に、パエジエーラが入っているんだよね」

「パエジエーラって、パエリア専用の鉄鍋だったか?それはまた、随分と珍しいものを持っているな。うちにはないぞ?」

「・・・うちにもない」

当然僕もジャイアンの家もない

「かなり昔に、母さんが貰ってきたんだよ。それで折角だからってパエリアを作ってみたら結構美味しくてさ。それ以来、僕の好物の一つだよ」

「なるほどな」

「だが、スペイン料理とはな。玲さんはてつきり日本食を御所望かと思っただが」

「一応、姉さんはなんでもいって言ってたけど」

「・・・この材料は、明らかにパエリア」

「だよなー?エビやアサリだけならペスカトーレとかも考えられた

が、サフランがあるからな」

「そうだね。サフランを使う材料なんて、他に知らないし……あれ？ホールトマトなんか何に使うんだろ？」

明久の言う通り、ホールトマトの缶詰が入っていた

「これはたしか……ピーマンとタマネギとニンニクを使ったトマトソースで作るパエリアもあるんだよな？」

「え？トマトソース？」

「(こくり)……イタリアで言うソフリットを使ったトマトソースへえ、何度も作ったことあるけど、それは知らなかったよ」

確かにこれは僕も知らなかった……んん？そういえば1つ可笑しいことがあるよね？

「何度も作っているのに、買ってきた材料が違った？それっておかしいかないかな？」

「そう？たぶん姉さんがうっかりしたただけじゃないかな。いつもは買い出しも調理も僕の仕事だったし」

「まあ、そうかもしれないな」

うーん、どうも腑に落ちない。それならなぜ、ソフリットの材料をきちんと知っていたんだろか？

まあ詮索はやめておこう……

「所で明久、今思ったのだけど？」

「うん？」

「お前はさ、お姉ちゃんがいるから本来の生活態度を隠してるのだから？」

僕とジャイアンが言うと明久が作業しながら悔しそうに言った

「……よく分かったね」

「丸わかりだバカ」

エビを手を取って背わたを取る作業をしながら雄二が言う

「……バレると、説教？」

こっちはムール貝をタワシで洗っているムツツリーニの台詞

「まあ怒られるのはいいんだけど……」

「なんだ？怒られる以外にも何かあるのか？」

僕とジャイアンは話ながらアサリを砂抜きをして、殻を洗う

「うん。あまりにも生活態度が悪かったり、今度の期末試験である程度の点数を取れなかったりすると、姉さんがこつちに居座ることになつちやうんだよ……」

「点数？もしかたってさっきの減点？」

「うん。のび太の言う通りそれだよ……。あの点数分、振り分け試験の時よりも今度の期末試験の成績が上がっていないとダメなんだよね」

なるほど……そう言うことだったのか

「だから、余計なことを言わないで欲しいんだ。学校の成績とか、僕の本当の生活とか、こ、この前の美波とのアレとか……」

「アレって、島田とのキスのこ——むぐっ」

明久が慌てて雄二の口を塞ぐ。雄二の声はよく通るから、玲さんに聞こえるかもしれない。

「(そういうのもマズいんだよっ！姉さんは不純異性交遊は完全アウトっていうお堅い人なんだから！)」

明久の声を聞きながらパエジエーラにオリーブ油を入れ、水分を取った白身魚を皮目から焼き、エビ、イカ、ホタテ、アサリを加えて白ワインを一気に加えて蓋をする

「なるほどな。まあ、お前の一人暮らしは俺にも都合がいいし、黙ってやるか」

「……協力する」

「俺様も協力するぜ」

「僕も力になれるなら」

「ありがとう、4人とも……！」

僕とジャイアンは明久のお礼を聞きながらタマネギとニンニクはみじん切りにして、トマトは種を取って角切りにする

「あのさ、雄二は家で毎日夕飯を作ってるの？」

「ああ、いや、毎日ってわけじゃない。一応、うちの母親も作るには作るんだが……」

「いいなあ。そういう母親」

「ふっ……放っておくと、ヤツは何を作るかわからんからな……」
うわ、遠い目になってる……

「のび太は料理できたの知らなかったよ」

「そういや俺も知る限り、そんなのはしなかったよな？」

「あははは、まあ、昔色々な人を見て僕も料理できるようになった方がいいかなと思つて少しずつしていたけど……」

「……急に遠い目になった」

「料理の概念別の意味で壊されたのがあったね……」

「ええ？な、なにがあったの？」

明久が恐る恐ると僕に聞くと、僕は小さく言った

「姫路の手料理……それも一年の家庭科の授業の時だよ……」

「二……（ガクガク）」

「ん？何でコイツらは震えているんだ？」

「気にしないでジャイアン」

うん……本人も目の前にいるからあんまり言わないけど、ジャイアンも恐ろしいからね？あれ？姫路とジャイアンの協力料理はどんなものになるのかな……

「さ、さて！そろそろ僕はお米炊くよ！ジャイアンも手伝って？」

「なら僕は野菜炒めでもするよ。玉ねぎ残ってるし」

「なら俺とムッツリーニはデザートを作る」

明久とジャイアンにパエリアを任せ、俺は余ったタマネギなどの材料を使い、野菜炒めを作る

そんな作業も終盤にさしかかった時……

「待った姉さん！どうしてお風呂の写真ばっかりなの!?そのアルバムは何の写真を集めてるのさ!？」

んん？突然どうしたんだろ？耳を澄ますとー

『——そして、これが昨晚のアキくんのお風呂の写真です』

『……（ゴクツ）』

『……私がおかしいのかしら？この状況をみて』

『いや、ワシもなんとも言えんのじゃが……』

その様子に明久が暴れて抗議しにいかうとしていたのでジャイアンが止めてくれた

「おいおい、明久。鍋から目を放すなよ。吹きこぼれるだろう?」

「もうそんなことはどうでもいい!それよりもあのバカの頭をフライパンでかち割ってやることの方が大切なんだ!」

「料理をなめるな。いいからおとなしく鍋を見ていろ」

「離せーっ!雄二のバカーっ!ジャイアンも止めないで!!」

はぁ・・・仕方ないな――

「姫路の手料理食べる?それとも・・・ここで撃たれるお仕置きがいい?この間のあの事件からたまってるストレスは誰かに当てるのもありかな?って思ってるよ・・・」

「!!・・・(ピタ)」

「ね?料理は最後までしよう?じゃないと連帯責任で姫路の手料理を食べることにするよ?」

「わ、わかった!やるから!やるから!!」

「その選択は無かったことにしてくれ!!」

「・・・(コクコク)」

わかればよろしい!わかれば・・・

「のび太・・・いい意味で良い性格になったな・・・」

ジャイアンの言葉は何を思ってたのか聞かなかったことにしよう

こうして料理は問題なく完成へと・・・

食事とお仕置き

明久の暴動をなんとか押さえて無事に料理も完成したので僕らは次の行動を起こした

「皆、待たせたな。夕飯ができたよ?」

「ありがとうございます。お客様なのにアキくんのお手伝いまでして頂いて」

「いや、気にしないでくれ。料理は嫌いじゃないしな」

複数のテーブルをくつつけ、その上に夕飯を置く。これは美味しそうだ

「あ、ありがとうございます・・・(ポツ)」

「お、美味しそうね・・・(ポツ)」

「姫路さん、美波。どうして僕の顔を見て顔を赤らめるの?」

それはきつと、明久の写真を見たからだと思う

「それにしても、アキくん。あなたはもうそんなに落ち着きがないのですか。リビングにまであなたの大声が聞こえてきましたよ?」

「それは姉さんの行動が原因なんだからね!」

「ほら。またそうやって大きな声を出して。。。カルシウムが足りていないのではありませんか?」

そう言いながら玲さんは明久の前のパエリアをよけて、代わりに深皿を一つ置く

「それでは皆さん、貝の殻はこのお皿に入れて下さい」

「何それ!?僕の夕飯は貝の殻だけなの!?これってただの苛めだよね!?!」

うう・・・あの明久が可哀想すぎて色々な意味で涙が出そう・・・

「姉さん・・・。もしかして、姉さんは僕のことを嫌いな・・・?」

そんな明久の疑問に、玲さんは「心外です」と前置きしてから答えた

「何を言っているのですかアキくん。姉さんがアキくんを嫌うわけがないでしょう?」

その割には扱いがちよつとアレみたいだけどな

「寧ろ、その逆です」

と、いってっ。

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ……」

「はい。姉さんはアキくんのことを愛しています」

なかなか大胆なお姉さんだな。皆の前で弟のことを『愛しています』なんて……

「——一人の異性として」

……発言がアウト!!

「最後の一言は冗談だよね!? それなら寧ろ嫌いでいてくれた方が嬉しいんだけど!?!」

「日本の諺にはこういうものがありますよね」

「何!? また余計な事を言うの!?!」

「バカなほど可愛いって」

あははは……

「諦める明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」

「この愛は深すぎるぞ?」

「そういう意味ではかなり愛されてるね?」

「そうね……」

「待って! それは僕が世界で一番バカだっと思われていることなの!?!」

「う、ウチだっアキのことを世界で一番バカだと思ってるわ!」

「わ、私だっ! この世界で明久君以上にバカな子はいないと確信しています!」

二人は気づいてないのかな? 明久の心に傷つけているの

「ま、そんなどうでもいいことは置いておくとして」

「ど、どうでもいいんだ……。結構僕の人生を左右しそうな内容の会話みたいだったんだけど……」

普段の行いが悪いからどうでも良いね。ってか、雄二はそういうの言ったら明久にまた嵌められるよ?

「と、とにかく食べようぜ!?! 折角作ったのが冷めては美味しくないの

「は嫌だろ?」

「そうですね・・・皆さん食べましょう?」

「ジャイアンと玲さんのいうとおり、折角作ったのが冷めては勿体ない

「!」「!」「頂きます!!」「!」「!」

手を合わせて目の前の料理に取り掛かる

「ぬう・・・、これはまた、美味しいもんじゃな」

「そうね。すごい美味しいわ」

「そうか。口に合ったようで何よりだ」

「そう言って貰えると作った甲斐があるよ」

「だな」

「うんうん」

「・・・(コクコク)」

うん。明久と雄二の言う通り作った側にはうれしい言葉だよ

秀吉はニコニコと頬張っている。そして、姫路と島田は秀吉とは逆に砂を噛んだような顔をしている

「あれ?二人ともパエリア嫌いだった?」

「う・・・。いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど・・・」

「だからこそ、落ち込むと言いますか・・・」

心中複雑なんだろうね・・・

「ねえ、のび太君」

「ん?どうしたの、三上さん」

「この野菜炒めは誰がしたの?」

「あつ、それ僕だよ?」

「え!?!のび太君が」

「え?も、もしかかって美味しくなかったの?」

「ううん、美味しいし味付けも良いから文句ないわ。凄いわ!!」

「良かった・・・」

僕らがそう会話していると・・・

「ところで、皆さん」

「ここからが本題、と言わんばかりに玲さんが話を切り出す。どうし

たんだろ？

「うちの愚弟の学校生活はどんな感じでしょうか？例えば、成績や異性関係など」

「なんだか後半がやけに強調されていた気がする。・・・まあ今は聞かれたことに答えたら良いね

「えっと、明久君はすごく頑張っていると思います。最近成績も伸びてきたみたいですし」

「そ、そうね。たまにドキッとする時があるわ」

「さすがに二人とも本人やその家族を前にして悪いことは言わないか」

「そうですか。それで、異性関係は？」

「え、えっと、それは、その、よくわかりません……。異性関係は」

「そ、そうね。ウチもあまり知らないわ……。異性関係は」

最後の言葉がやたらと強調されていたが、知らぬが仏ってやつだよ？明久

でも、ここはフォローいれておきたいしね。

「あの、すみません？何で異性関係知りたいたいのですか？」

「姉だから知る権利あるかとおもいますが？」

「本人の名誉のために言いますが、まず明久の人生つてのもあるので、異性関係になにか問題あったらどうするのですか？」

「その時はそのときです」

「まあそこは本人と話して聞いてくださいよ？無理矢理は脅迫とおなじなので」

「なるほど・・・あとでポツキリと聞きましょう」

「どうやら僕の意図は気づいてくれなかった・・・」

「僕は思わず突っ込み入れたのだ」

「いや!?そのポツキリはなんですか!?!」

「冗談だよな？あのポツキリって・・・」

「き、気のせいじゃないかしら」

「?なにか間違えてましたか？」

ああ、やはり姉弟なんだなーと改めて再確認したよ・・・

「そう言えば、言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくても結構ですよ」

「え？そうなの？」

「はい。こちらで済ませておかないといけない仕事があつて、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうなのです」

あれ？明久が凄く嬉しそうなおーラだしてる

「うえ!?いいいや、そんなことはないよつ。折角帰ってきた姉さんがないのは凄く残念だよ!」

「英語でいってください」

「HAPPY」

「・・・」

「あつ！痛つ！姉さつ・・・！食事中にビンタは・・・つ!」

僕は女子の目を隠したのだ。というか姫路とか島田には雄二達が目をつらしてくれたので、僕は三上さんの目を隠した

「？」

「三上さんにはこの光景は見せれません・・・」

この後のデザートは全く感じなかったみたいだ・・・

勉強と苦勞

てきぱきと後片付けを終えてリビングに集まる。いよいよ今日の集まりの本題だ

「そろそろ勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕飯を早めに食べたせいかな、まだ七時ぐらいだ

「ならばワシも一緒に教えてもらおうとするかの」

「・・・同じく」

この光景を西村先生に見せたら涙出そうになるかもね・・・主に明久の事で

「そうだね。テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強を始めようか！」

『いつものように』を強調したのは妙な勘繰りを受けないように玲さんを牽制しておくためだろう

「皆さんで勉強ですか。それなら良い物がありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきましたね」

玲さんはトタトタとリビングを出て行って、すぐに戻って来た

「参考書というのなんですが、役に立つかもしれないので」

玲さんが持ってきた本がテーブルの上に置かれる。何これ？

【女子高生 魅惑の大胆写真集】

・・・明久・・・

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがあーっ!!」

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！こんなもんが参考になるかーっ！あと勝手に僕の部屋に入ったね!? あんなに入らないでって言ったのに！」

「いいえ。昨日、確かにアキくんは部屋に入っって良いと言いました」

「それってもしかして着替えを取りに行く時のこと!? あの会話はこれが目的だったのか！なんて陰湿卑劣迂遠な作戦なんだ！」

「そ、それじゃあ、あくまで勉強の参考書として……」

「そ、そうね。ウチもちよつと勉強しておこうかな……」

「姫路さんに美波？無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ!?というかお願いだから見ないで！」

「アキくん。ベッドの下に置いてあった他の参考書も全て確認しましたが、あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

もう明久の心のライフがボロボロだよ!?あ、三上さんにはこれは見せれないと思い目を隠した。ごめんね？三上さん

「冷静に考察を述べないで！いくら言い方を変えて取り繕ってくれてもそれが僕の趣味傾向だつてことかバレちゃうんだから！」

明久、とうとう自分で認めた!!?

「ポニーテール、ですか……」

「大きなバスト、ね……」

お互いに複雑そうなの見えた。女の子は複雑なんだね

「のび太君？もう良いかしら？」

「あ、ご、ごめん！」

「ん？……／／（パタツ）」

「み、三上さん——!!明久!!それを隠して!!」

「?参考書ですのになぜ倒れたのですか??」

「見せるものじゃないですよ——!後、参考書ではない!!世の中の参考書書いてる人に謝って下さい!!」

三上さんは数分ぐらい気絶していたけど、明久がすぐに直してくれていたから良かった……

代わりに明久がお姉さんにお仕置きされたことだけは教えます……

「ご、ごめんなさい……。とりあえず勉強を始めましょう?」

「そうだな。な?明久」

「そ、そうだね!ジャイアンの言う通り始めよう!!」

明久のその合図を出すと島田たちに異変が見られた

「そ、そうですね。お勉強を始めましょうか。んしょ……つと」

「み、瑞希っ!どうして急に髪をまとめ始めるのよっ!?!」

「べ、別に深い意味はありませんよ？ただ、お勉強の邪魔になるかと思ってる……」

「それならウチがやってあげるわ！お団子でいいわよねっ！」

「い、いえ。ポニーテールにしたいと」

「ダメっ！お団子なの！」

「美波ちゃん、意地悪です……」

あつちはあつちで大変だね……そういえばムツツリーニは大人しいね？

「ムツツリーニがやけに大人しいな？」

「そういえばそうだね……」

僕とジャイアンはムツツリーニをちらっと見ると……

「……明久」

「どうしたの？ムツツリーニ」

「……後1999冊は？」

「本気にしていたのかい!？」

「……エロ本は興味ない」

なら何でそんな肩落としてるのさ……

「明久のエロ本やエロ写真は置いといて、勉強するならさっさと始めようぜ」

「そうだね。時間は限られてるしね」

「そうね」

雄二の言葉に僕と三上さんは同調するとみんながやり始めようとする前に玲さんが提案だしてきたのだ

「お勉強なら、宜しければ私が見て差し上げましょうか？」

「え？玲さんが？」

「ええ。アメリカのボストンにある大学に通ってたから大学の教育課程を昨年修了しました。多少はお力になれるかと思えます」

ん……？アメリカのボストン……？

「ぼ、ボストンの大学だと……!?!それってまさか、世界に名高いハーバード——」

「多分、雄二の考えの通りだと思う」

「ええ、そうです」

僕は一回沈黙して・・・

「「「えええっ!?!」」」

でかい声で叫んでしまったが、仕方ないと思う。何せあの有名な大学に行っていたなんて誰も思わないだろう

「・・・なるほど、出廻らしか」

「その言葉の真意は!?!」

「そのまんまの意味だと思う」

「のび太とジャイアンは真顔でそれを言わないでー!!」

仕方ないじゃない? 事実なんだし

「でもせっかくだし教えてもらおうよ?」

「確かに本場の英語とか、こっちの教師には教えてもらえないことも知ってそうだしな」

「・・・頼もしい」

「わかりました。それでは、まずは英語あたりから始めましょうか」

「「「「お願いします!」」」」」

この後は十時くらいまで玲さんの講義を聞いて、その日は解散となった

・・・僕とジャイアンは別の日にくるようにといわれた

狙い目と休み時間

あの明久の訪問の後の翌日……

僕はいつも通りに三上さんとジャイアンと登校していて、いつも通りに別れると……

「というわけで雄二とのび太とジャイアン！今日も楽しく勉強会をしようー！」

「いきなり入って早々に何!?!」

「狙ったタイミングで言った!?!」

「……明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ?」

「なんとでも言っつてよ。今の僕には体裁を気にしている余裕はないんだから」

んん?この様子だと……

「また減点されたのか?」

「うん……ジャイアンの言う通りだよ。朝起きたら化学の問題を聞かれた」

なるほど……明久に起きたばっかで出来るわけがない……

「そうか。それで、今はどのくらいの減点なんだ?」

「確か、合計で290点。もうかなり厳しいんだよね」

「290ねえ。そうになると、期末の総合科目は1090点くらいだよね?」

「そうなんだよ。今までは絶対好調でも1000点ちよつとだったから、それに更に50点以上アップさせないと……」

「総合1000点以上となると、Eクラスの中堅レベルだからな」

そう……今の明久にとって見たら地獄だね……

でもなにも絶望することはない……

「明久にとって良い方法があるよ?」

「え!?!何々!?!教えて!?!」

「かなり必死だな!?!多分のび太の考えだと……暗記物か?」

「うん。暗記ならしつかりと勉強したらそれなりにとれるよ」

「のび太とジャイアンのいうとおりだ。お前の場合、上がり代が残っ

ている世界史あたりが狙い目だ。確か今までは50〜60点程度だったよな?」

「あれ?よく覚えてるね?」

「これでも一応クラス代表だからな」

あつそういえば、雄二はクラス代表だったね……。忘れていた
「それに振り分け試験と違って、期末の問題を作るのは田中先生らしい。お前にはありがたい話だろ?」

「田中先生か……。それなら確かに点数を取り易いかも」

世界史の田中先生はおつとりとした初老の先生で、あの人の問題は解き易いと評判だ。いつもなら意味はないが、明久にしてみればありがたい話だからね

「まつ、今さら数学なんぞ頭いれても仕方ないしな。……俺もこのと言えないしな」

「いやいや!?!この間の総合点すごかったよね?!しかも半分数学である点でしょ!?!」

「まあ……。そうなんだが……。」

「モチベーションがでないのね?」

「ああ……。まつ俺のことおいといて、勉強するならどこでだ?」

みんながう〜んと考えていると、秀吉と島田と姫路が来た

「おはようございます……。つてどうしたのですか?」

「おはよー……。つてなんかすぐ考えてるわね?」

「あつごめんごめん!おはよう!実はー」

明久が島田と姫路に説明している間、僕らは今日は誰の家でやるかと考えていたのだが……

「なら、僕の家でやる?」

「え?いいのか?」

「うん」

「いや、お前の家って……。いいのか?」

「うん。勉強するわけだしね」

僕ととジャイアンの会話を聞いていた雄二が顔あげたのだ

「きまりだな」

「本当!?良かった。僕の家だと参考書あんまりないからね」

「あんまりじゃなく、ないのでしょ?」

「うぐう!」

まあ落ち込んでる明久はおいといて……

「まあまあ。行くメンバーは昨日のメンバーでか?」

「うん、その方がいいかなと思うし……」

「まあ、今回俺らも少しでも良い点取りたいならチームワークで行くか!」

「だね!あつ、そうだ、昨日玲さんが僕らの出身小学校言っていたよね?」

「あー、そういえばどういうことなんだ?明久、お前は俺たちの小学校に通っていたのか?」

「え、いや。僕は少なくとも二人の通っていた学校とは接点もないし、通っていた覚えはないよ?」

うーん、明久がそういうならそうなんだろうけど……

「つてか、今日久々にキャッチボールするか?」

「いいね。グローブなんか無意識に入れてしまったよ」

「のび太もか?昨日の話でなんか久しぶりにした食っていれてしまったよ」

「ほう?なら俺も参加して良いか?たまにはそんな休み時間もありませんとおもうしな」

「なら僕も参加するよ」

「なら休み時間に外でキャッチボールだね。グローブは体育の倉庫から借りたら良いし、西村先生には許可もらってるしね……」

「用意が良いな?つてかなんでお前はそんなにOKされるんだ?」

「二日頃の行い!」

「……二人がそれを言うと言説力があるな……」

落ち込んでる二人ほっておいて、先生が来たのですぐに座ったのだ。やはり今日も明久は保健室いきなさいと指示されたのだ。

そんなこんなで休み時間になり……

「でも……(パシッ)」

「なんだ?のび太……(パシッ)」

「昔なら考えられないね?僕とジャイアンがキャッチボールなんてね」

「あー、確かにな……(パシッ)」

そんな話ながら明久と雄二がなんかもめていたので僕は仲介して話を聞こうとすると……

「ねえ、ジャイアン。明久がピッチャーするみたいだから、キャッチしてくれだつてさ?」

「明久が?できるのかよ?」

「さあ?審判は僕がするから、雄二はバッターにたつてくれない?はい、バット」

「おう。……ぶつとばしてやる……」

あれ?何かおかしいような気が……?それに少しの間に何があったのさ……

「こい!!明久!お前の玉なんぞ一発でホームランだ!!」

「いったな!打てるものなら打ってみろ!!」

「じゃあ……プレーボール!」

「打てるものなら……打ってみろ!!」

「!(玉が甘い……)そんな球打てるぞ!!(かきーん!!)」

雄二が初球で明久の球を打ったのだが……

「どっ……(チーン!)?!!!」

「二あ……明久!?!」

別の意味で明久の体にホームランとなったのだ……その後の一時間の授業は明久は保健室でダウンしたということだけは書いておこう……

のび太と勉強しよう!

今日も通常の授業が無事に終わり、明久も無事に回復したので何事もなく放課後になったのだ

「うしー! 帰る用意できたぞー! のび太、俺は先に帰るな!」

「うん! またあとで!!」

ジャイアンは少し店の手伝いと言うより重たいものを片付けてから、こつちの家へ向かうと約束したのだ

「さて、行くメンバーは・・・島田と姫路と明久と雄二と三上さんか」

「ムツツリー二と秀吉は用事で無理だし、ジャイアンはあとで来るんだよね?」

「いや、その予定だが無くなったのじゃ」

「・・・(コクコク)」

明久の確認に二人は首をふりながら答えてくれた。となれば昨日と同じメンバーだね

「OK。とりあえず、三上さんも来てから・・・」もう来てるよ? のび太君「・・・三上さん!」

「お待たせ。待った?」

「ううん。そろそろ呼ぶの大丈夫かなって話していたの。とりあえず、これで全員だから行こうか」

僕がそういうと皆は僕の方についていった。そういえば、ジャイアンと良いタイミングで会えたらなーと思っていた

そうしてる内に家へと着く前にジャイアンと合流した

「あれ? なんか行動すごく早いね」

「そんなに時間かかる重さじゃなかったからな!」

とそんな会話をしながら家へと入った

「ただいま〜!」

「お帰り・・・ってあら? お客さんもつれてきたのね?」

「うん。それと・・・」

「お久しぶりです! 剛田武です!」

「あら!? 武さん? 大きくなったわね〜」

「いえいえ、人数多いですが大丈夫ですか？」

「勉強するために僕の家に来てきたのだけど・・・いいかな？」

僕がそういうとママが少し考えてから、「良いわよ？」と許可してくれたのだ。良かった・・・僕の部屋に案内して皆は物を出す用意していた

「今日は何をする？」

「そうだな・・・世界史をこいつは徹底的にさせるとして、のび太は？」

「ジャイアンと三上さんとで得意の化学を教えあうよ」

「なら私は美波ちゃんに国語を教えます！木下君も一緒にしましょう？」

「迷惑じゃなければ・・・頼むのじゃ」

「私もね」

とりあえず、皆はそれぞれの得意な科目の人に教えられることが決まったのだ。ムツツリーニ？保健体育で一人で暗記するらしい・・・そしてその勉強の様子がこちらだ・・・

「明久、ここは違うぞ？」

「え、あつ本当だ！」

「美波ちゃん、ここはこう答えるのです」

「なるほど！」

「納得じゃ！」

「・・・で・・・となるから」

「なるほどね」

「となれば・・・となるのかー」

僕らはそれぞれの科目の弱点を教えていたし、教えていた側も為になる

「くはー！頭入れるの大変だねー」

「まっ、お前は普段から頭使ってないからな」

「うぐっ・・・痛いところ突いてくれるね・・・」

「「「いや、事実を述べただけ」」」」

「皆なんか嫌いだー!!」

いや、事実だよ？明久、目をそらさないで？

「あれ？ムツツリーニは静かだね・・・」

「そういえば、そうだね・・・」

気になりムツツリーニの方を見ると・・・

「・・・(プジャアア)!!」

「二「いや、いきなり何があったんだ!?!」」

ムツツリーニ曰く想像したら血が出たそうだ。創造力豊かすぎる・・・。そんな騒動も収めて、勉強も捗っていたのだ

すると明久がなにかに気づいた・・・

「んん？」

「どうした？明久？」

「ねえ・・・のび太。あの写真・・・」

「写真・・・？あつ・・・」

明久に言われた方向を見ると、僕はその写真を直しとくの忘れていたのを後悔していた

「あ・・・のび太・・・それは・・・」

「ふう・・・。何を聞きたいの？明久」

「あの写真・・・一体なんなのさ・・・？その青いロボットみたいなやつは・・・？」

・・・やはりばれていたか・・・。僕は観念してその写真をみんなに見えるようにしていた。ジャイアンは少し悲しそうな顔していたけどね・・・

「なに？この青いのは？」

「狸さん・・・？それにその写っている人たちは・・・？」

「のび太君と剛田君・・・？もう一人の男の子に・・・その女の子は？」

「確か文化祭の時に来ていたのう・・・」

「・・・金持ちの男だったとおもう」

島田達がじつと見ながらそれぞれの疑問を口に出していた。姫路の言葉には僕とジャイアンは苦笑いしていた・・・

「のび太とジャイアンは確か昔同じ小学校だったんだよね？雄二はなにか知ってるの？」

「・・・」

そういえば雄二は黙って口元に手を当てて考え事をしてた。そして考えが纏まったのか僕の方に問いかけていた

「なあ・・・確か名前間違えていなかったら、その青いのは・・・ドレーモンってやつだよな？」

「うん・・・そうだよ。僕ら一番前に写っている青いロボットは・・・ドレーモン。僕らの・・・親友だよ・・・」

「更に付け加えるなら、のびただけじゃなく俺とスネ夫、そしてもう一人の女の子いるだろ？俺達五人は固い絆で結ばれていた・・・いや、結ばれていたはずだった・・・」

「だった・・・？それって・・・」

「剛田。それってもしかかって何かあったのだな？そいつがここにいない理由と・・・小学校の時に流れていた噂と関係あるのか？」

・・・恐らく雄二の聞いた噂はわからないが、僕の事だろう・・・。そんな会話に島田が疑問の声をあげた

「えっと・・・坂本つてのび太と剛田と同じ学校なの？」

「ああ。更に付け加えるなら、この事を知ったのは割りと最近だ（翔子も同じ学校なのはこいつらは知らんだろが、そこは触れないでおこう）」

「ほへ？では、同じ学校でしたら小学校ののび太君や剛田君とかとお友達ですか？」

「いや、さっきも言っただろ？知ったのは割りと最近だと。それまでは噂でしか知らなかったし、話したこともないからな」

姫路と島田の質問に対して坂本がゆっくりと説明してくれた

「??なら、どうやって知ったのさ？」

「まっ、そこは置いとこう」

「あははは・・・まあ、とりあえず勉強しないとダメだよ？とりあえず休憩はまだしてはダメ」

「ええ!?凄く気になるけど!」

「確かにのう・・・」

「・・・(コクコク)」

三人の反応に僕は・・・

「勉強しようか？……ね？特に明久が一番しないとダメなんだから」

「「サー！イエッサー！」」

軍隊かとおもぐらい見事な敬礼して再び勉強を始めたのだ……。この時、三上さんが心配そうな顔してるのは僕は気づいていなかった……

小さな過去

「つ、つかれた……」

僕の部屋の（用意していた）机で明久が畳の上で倒れていた。まったく……普段から勉強をきちんとしていたら、そこまでしんどくないのになー

「まあ、さすがに少しは休憩いれていいんじゃないか?」

「そうね。美波に瑞希もいかしら?」

「そうですね……少し休憩しましょう」

「ええ……。頭が疲れていてしんどいわ……」

ジャイアンと三上さんの意見に女子二人は休憩に賛成のようだ。他の面子も見ると、疲労が見られるから少しやすんだ方がいいね

「わかった。少し休憩入れる代わりに……のび太、少しだけお前の過去を話してくれないか?」

「……いいよ。でもそんなに細かく喋らないと思うけどいいかな?」

「構わない」

「のび太!」

ジャイアンが心配そうに僕の方を見ていたが大丈夫だよ?もう受け入れているから……

「え?!本当!」

「起き上がりはやつ!」

「……驚異の起き上がりの早さ」

「そうじゃのう……」

明久の起き上がりにジャイアンは思わずつつこみを入れてしまい、それに同意するムツツリーニと秀吉とは別で……

「のび太君……良いの?」

「うん。そんなに多く語ることはないけど……少しぐらい話して良いかなって思ったのさ」

「ならいいけど……」

僕は三上さんに心配されていた。そんなに心配しなくて良いのに……

僕は明久たちに向き合いながら何を話すべきか頭のなかで回転させていた

「ドラえもんの事を話す前にまずは昔の僕の事を話さないとダメだね。昔の僕はね・・・いつも遅刻していて廊下立っていて、テストではいつも0点をとるし泣き虫なダメな少年だった・・・」

「「「「?!」」」」

「のび太君が・・・? (今の彼にはまったく想像つかないぐらいの人だわ・・・そういえば、昔、遅刻記録最高を取った男の子がいるって聞いていたけど・・・それがのび太くんだったなんて・・・考えてみたら彼の過去は初めて聞くわね)」

「話続けるね? そんなダメな少年の元にある人物が来たのさ・・・。そいつはね、22世紀の未来からきた猫型ロボットだったのさ。彼の目的は僕の子孫の事を考えてしつかりとしてもらうために、僕のいる時代にきたのさ」

「それが・・・お前とドラえもんの邂逅か」

「うん。ドラえもんはね、いつも僕がジャイアンとスネ夫に苛められていた時に秘密道具を貸してくれたのさ」

「「「「秘密道具?」」」」

「あー、のび太。その説明は俺がした方がいいか?」

「ううん。僕が言うよ」

さて・・・秘密道具と言えば色々あるけどなにを説明したらいいかな

「んー、そうだね。例えばタケコプターかな? 僕らはよく使っていたね」

「あー! 確かによく使っていたな」

「タケコプター? なんだそれは?」

「ドラえもんの秘密道具の一つで空に飛ぶこともできるのさ。他にはどこでもドアってあって、それでドア開けるとハワイとかそれこそ記録されていたら遠い星も行けるしね」

「まって?! 今さらりと、とんでもない事に聞き流しそうになっただー?!」

「え？あー、僕らってねけっこう冒険していたのさ。宇宙の果てまでいったこともあるし、未知の世界に行くこともあったよ。あれ？今思えば何回か世界の危機起こりかねないのあるよね？」

「あつ、確かに……。今思えば俺達よく生きてるな」

「「「いや!?何か不穏なキーワードあったし、聞き流せないのある(わ)よ!」「」」」

「まあ、話それたけど、たくさんの冒険と共に楽しい日常を過ごしていたの……。僕ら五人はずっとこんな風に続けばいいと思ったのさ……」
「だがな、そんな幸せな時間は長く続かなかつた……。六年のあるときだ」

僕の言葉に引き継ぐようにジヤイアンが重々しく口開いてくれた

「何かあったの？」

「……。ドラえもんが未来に帰ることになったのさ……。元々は一度帰っていたけど、残してくれた道具でその言葉の嘘が本当になるという道具で僕が「もうドラえもんはかえってこない。二度と会えない」といったらドラえもんが帰ってきたのさ」

「……。だったらなぜ？」

「ドラえもんの体に異常が見つかったのさ」

「「「異常が?」「」」

「……。うん。度々のメンテナンスをサボっていた事も原因だけど：一番は体に限界があったのだよ」

「えっ?でも、一回帰ってきたのなら……。まさか!？」

三上さんは言うてからなにかに気づいたみたいだ。そう……

「体に異常が見つかった以上、22世紀に病院で見てもらわないと危険な状態だし、このままほっといたら記憶も失ってしまうだけじゃない、ロボットの生命にも危険が及ぶとわかってしまった……」

「えつと……。?」

「明久に分かりやすく言うなら、生命活動に危険が見られると言うことだ」

雄二の説明に明久も納得してくれた。良かった……。続きを言わないと

「その事を聞いた僕は一週間引きこもっていた。ドラえもんの別れも受け入れる時間もかかっていたのさ・・・」

「俺らはのび太の気持ちも知っているからこそ、ドラえもんのいないときに四人できちんと話あった」

「話し合った結果、ドラえもんを未来に帰ることに説得した。勿論揉めたよ。でも、僕ら五人がきちんとまっすぐとぶつかって意見を出しあって・・・ドラえもんも受け入れてくれた」

「」「」「」「」

「その写真は別れる前の写真さ。みんな笑顔で彼を22世紀に送り帰したのだ」

「ねえ？つまり、治療をきちんと受けたら記憶失うことも心配ないのね？」

「うん。僕らが聞いた話ではね・・・」

「あの・・・その・・・ドラえもん君が未来に帰っても皆さんは仲良しだったのですか？」

「・・・痛いことを聞いてくれる」

「え?!あ、あの!?!」

姫路がてんぱってるのは分かってるよ?だけどさ・・・悪意もなく純粹な質問だから何か心に来るよね・・・?

「ドラえもんがいなくなつてからみんなバラバラになつたのさ。むしろ高校になつて再びこういう繋がりが出来たのは正直嬉しいよ」

「いつもいた親友がいなくなったのは寂しいし・・・俺達五人がいると本当に家族・・・いや、それ以上に言い表す事できないぐらい大切な仲間だった・・・」

「まあ・・・これぐらいかな。今の事で話するのは・・・」

「」「」「」「」

僕とジャイアンの説明に皆は絶句していた。あれ?何で絶句してるのさ・・・

「いや、まあ・・・お前らつて小学校でなんていう人生送ってるんだ・・・」

「ねえ、ドラえもんはどうなったの?何で帰つてこないの?」

「・・・危険な状態な話したよね?メンテナンスサボっていたのもツ

テがあつたのかもしれない。それにもし帰つてこれない可能性もあるかも？つて言われていたけどすでに覚悟していた」

「今あいつがどうなつてるのかは俺達にはわからないが・・・今も見守ってくれてるような気がしてるんだよな」

「さつ、話は終わり！明久！休憩十分にしたから勉強するよ？」

「えー！まだ聞きたいのにー」

「姫路の料理作るように指示出そうか（ボソツ）？」

「やります!!」

「全く・・・明久が頑張らないと意味ないんだから」

「おし！続きがんばろうぜー！」

「」「」「おおー！」「」「」

ジャイアンの掛け声に僕らは気合いいれて再び勉強し始めたのだ。今日の明久は帰りは燃え尽きていたことだけ追記しておきます・・・

オマケ

??? side

「全く・・・すっかり大人になってきて」

「お兄ちゃん、状態はどう？」

「あつ、うん！もう大丈夫だよ」

「良かった・・・。あら？のび太さん・・・？」

「うん。今の彼は高校生だよ？」

「うわー、しっかりしてきたわね。会いに行かないの？」

「もう大丈夫だと思うよ・・・もうのび太くんは子供じゃない。でも・・・22世紀で完治するまで戻つてはいけないうんて退屈だよ」

青いロボット・・・そう。彼こそ話題になつていたロボット・・・ドラえもんだ。お兄ちゃんと読んでいたのはドラえもんの妹・・・ドラミちゃんだった

「仕方ないわよ・・・。お兄ちゃんは無理しすぎていたのもあるからね」

「トホホホ・・・ん？」

ドラえもんの見据えた先には・・・

「チュ？」

「ね、ねねねねねねねねね……ネズミ……?!!」

目の前の（ドラえもんにとって）天敵のネズミが出てきたのだ。今日も22世紀は平和だった……

制裁と予定

チュンチュン・・・

「・・・んぐあ？もう・・・朝？」

朝の小鳥の鳴き声が聞こえて僕は目を覚ましたのだ。起き上がって、すぐに横を見ると・・・三上さんが僕の寝ていた・・・

何で・・・？

「あつ・・・」

思い出した。確か、昨日の明久の勉強の休憩の合間に三上さんが泊まりたいと言っていたんだ。理由を聞いたら・・・「家だと捗らない事もあるし、のび太君の家で勉強するわけだから、遅くなってもあれだし・・・」って言っていた

僕が頭を悩ましていたら、ママやパパが泊まることにOKしたのだ。あれ？僕の意見は？と思いつつも三上さんの気持ちも尊重して、とりあえずは「家に電話したら？」と言うと、三上さんは実家に電話した。すると帰ってきた言葉は・・・

「勿論OKよー！」

って、あれ？僕がおかしいのかな？一応僕も男だよ？三上さんが何かあつたらと思わないの!?まあ、そんなこんなで朝を迎えたのだ

「(まだ朝早いし起こすのも悪いから、ゆっくりと起きよう)」

「・・・っん・・・」

「・・・(ブハッ)!!」

三上さんの寝顔見えてあまりにも可愛すぎて・・・鼻血出ました・・・彼女に血をつかないように僕は廊下に出て押さえていました・・・

「(もしも・・・三上さんと恋人ならどれだけ) って・・・何で三上さんが恋人ならって思ったのだろうか？」

小さな疑問が出てきたがとりあえず、血まみれになった服を洗おうとのび太は階段降りたのだ。朝の母親の小さなお説教あったのは秘密だ・・・

朝の朝食にて……

僕と三上さんは制服に着替えて下に降りて行くとママが朝御飯作ったのを置いていてくれて僕らは座ったのだ

「おはようございます。昨日は泊めていただきありがとうございます」

「あら、三上さん。おはよう」

「やあ、昨日はよく寝れたかい？」

「はい！お陰さまでよく寝れてますので大丈夫です！」

「じゃあ、朝御飯を食べよう？ いただきまーす」

「二いただきまーす！」

僕らは朝御飯を食べながら期末試験の事も話していた

「のび太、今回の期末試験は大変じゃないか？」

「そうね。無理はしないでね？」

「大丈夫だよ！今回は得意な科目が良い点取れそうかもしれないだ
!!」

「そう。あら、そういえば、期末試験終わったら夏休みだけど何処かに行くことあるのかしら？」

僕は二人の問いに自信満々に答えるとママが夏休みどうするのか？という質問に僕は……

「多分、いくつかは補習で学校あるから一週間は学校かもね」

「え？私のクラスは無いわよ？」

「ほら……僕らのクラスの先生が……ね？」

僕が三上さんの問いにそう答えると納得したように遠い目をして
いた……納得してくれて何より……

朝御飯を食べ終えて僕らは学校に行くために家を出て歩いていた

「今日は三上さんは放課後の勉強はどうする？」

「そうね……たまには、宏美と他の科目も勉強するわ。たまには同じ
クラスの子と勉強しないとね」

「そっか。なら今日は別々だね？」

「ええ。吉井君は大丈夫かしら……」

「さあ……？なんとも言えない……」

「ハア・・・」

朝から明久の心配したらなぜかお互いにため息つきたくなつた……。こうしてる間に自分等のクラスへと行くために別れると……いきなりフードと鎌を構えている集団がいた

「いたぞ〜！被告人野比のび太がきたぞー!!!」

「はっ?」

僕が呆然としていると、僕を中心に囲んでいた。因みにまだ磔はされていないよ?

「諸君！我々、FFF団は・・・」

「哀に生きて」

「野比のび太は・・・」

「我々FFF団の敵だ〜!!!」

そういつて僕の方に飛び込んできた・・・バカだなく・・・
パアン!
パアン!!

パアン!!!

「「「あ、がががが・・・」」」

「今日もつまらない者達を撃ち抜いてしまった・・・」

はあ・・・朝からつまらないの本当に撃ち抜いてしまったよ

「で?何で襲つたの?」

FFF団全員を正座させて問い詰めていた

「いえ、その・・・」

「・・・(チャキチャキ)」

「「す、すみません!い、言いますから!!!犯人は吉井です!あいつが指示でしたのです!」」

「ちよ、僕を生け贄にしないで!」

「明久?」

「ちよよ!?!朝三上さんと歩いてるのいったなんて言わないよ!妬ましいと・・・あつ」

「・・・明久?」

「(ダラダラ)・・・お許しを」

「駄・目だよ……(ニコツ)。あつ、FFF団全員にも罰を与えるよ」

「「「えっ、ちよつと……イヤアアアアアア!!!」」」

この日の朝イチの叫び声は校舎全体に響き渡ったのだ……

暫くしてジャイアンが教室にはいると……

「何があった……?この光景は」

「「「……」」」

「磔される人の気持ち味わおうね?明久、ここで問題です。第二次世界大戦で日本が国際に向けて宣言したのはなんていうでしょう?」

「……ポツダム宣言!」

「正解。詳しい年号は?」

「……1945年!」

「正解。明久はこれ以上の罰はしないから磔外すけど……今ぶら下がってるFFF団の代表に問題です。答えたら全員解放だけど……答えれなかったら……どうしようかなー?」

「「「……(ガタガタ)」」」

さて、問題出さないとね

「問題です。なくに簡単な問題だよ?新撰組で一番強い剣豪誰かな?」

「新撰組の沖田!!」

「ぶー!正解は新撰組の二番隊の隊長永倉新八だよ?」

「「「えー?!そうなのか!」」」

まあ、これには色々な説があるけどね……

「一応、新撰組の剣豪は三人いてね。さっき言った永倉、沖田……じゃああと一人は?」

「「「斎藤だー……」」」

うん!正解!僕は彼らの磔を外そうとすると、気配感じて後ろ振り向くと……

「……お前らが真面目に頭を使っているだと……!」

西村先生が驚いた顔で震えていた……。その後の事は西村先生は僕に「……お前と剛田だけはやはりまともに見えてしまう……(女

子は除外として……」と言つてた。本当に苦勞してるんですね……
こうしてる間に放課後になり、昨日のメンバーは今日どこで勉強するの？と話なったのだ

「二日前は明久、昨日はのび太か……今日は俺の家でやるか？」

「雄二の家でやるの？僕は良いけど……大丈夫なの？ほら、家族とか急で困らない？」

「安心しろ。お袋は旅行でいないし、家には俺だけだ。このバカの勉強かなり捗るだろうし、問題はない」

「まつ、坂本が良いならいこうぜー。参加できない人は？」

「三上さんが今日は駄目みたい」

「となれば、Fクラスの私達だけっていうことね？」

「みたいですね」

方向性も無事に決まり、僕らはこの後の勉強を確りとすることを決めた

のび太たちが今日の放課後の事を決めているのは別で……

「宏美、ここの記号はこうらしいの。ほら」

「あっ！本当ね……。良く分かったわね？」

「のび太君が教えてくれたの。彼の説明すごく分かりやすいわ」

「ええ。お陰で勉強も捗るわ。彼には感謝ね（早く、この子と彼付き合えば良いのに……）」

三上と中林が楽しそうに会話をしていたのを、Fクラスにいるのび太は知らない……

天然には勝てない

「んじゃ、入ってくれ」

学校から歩くこと15分程度。住宅街の一角にある雄二の家に到着した。ちなみに三上さんは居ないのでいつものFクラスのメンバ―で雄二の家へ訪れた

「「「お邪魔します」」」

雄二の家は二階建ての一軒家なので、中も結構広いだろうね。

「なあ雄二。家には誰もいないのか？」

「ああ。学校出る前にも言ったように親父は仕事で、おふくろは高校の同級生たちと温泉旅行らしい。だから何の気兼ねせずゆっくりしてくれ」

「そう言えば、前に来た時も雄二の家族は留守だったよね」

「ああ。その方が都合がいいからな。色々」と

「??都合？」

今の言葉に疑問を持ったが、とりあえず雄二の指示を待つかく。そんな彼は、なぜか晴れやかな表情でリビングのドアを開ける
すると……

「……………!!(プチプチプチプチ!!)」

居間には一心不乱にプチプチを潰している女の人の姿があった

「……………」

パタン

何も言わずに戸を閉める雄二

「ゆ、雄二……?今の、山ほどあるプチプチを潰していた人って――」

「……………赤の他人だ」

「さ、坂本の母親なの…………?」

「随分と凄い量を潰していたんだが…………」

「う、うむ。あれほどの量。費やした時間はおそらく一時間や二時間ではきつくない」

「……………凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をしているのでしょうか？」
「一心不乱でやっていたね……」

「恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。なにせ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

これは珍しいなー。雄二がここまで苦しい嘘をつくとは。すると部屋の中から、雄二いわく赤の他人の声が聞こえてきた

『あら……？もうこんな時間。さつき雄二を送り出したと思っただのに？
え？まさか八時間近くもあの作業を続けていたの？』

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

しかもまだ続けるつもり!?何て集中力だ……

「おふくろっ！何やってんだ!?!」

耐え切れず、遂に雄二が踏み込んだ

「あら雄二。おかえりなさい」

「おかえりじゃねえ！なんで家にいるんだ!?!今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ!?!」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月って、パツと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似ているんだ!?!数字の形どころか文字数すら合っていないだろ!?!」

「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「サラツと凶々しい台詞をぬかすな！あんたの黄金期は十年以上前に終わっているはずだ!」

「あら、雄二のお友達かしら?」

「だから人の話を聞けえっ!」

……何このやり取り……

「す、すげえ……」

「うん……」

この怒濤のやり取りの速さに僕らは固まっていた。ど、どう反応したらいいのか？

「皆さんいらつしやい。うちの雄二がいつもお世話になってます。私はこの子の母親の雪乃と言います」

雪乃さんは優しい雰囲気僕達に挨拶する。というか、一つ驚くことがある

「さ、坂本の母親って……若過ぎない!?!」

「とても子を産んでおるとは思えん……」

「……美人」

「まるでお姉さんみたいですわね」

「……(コクコク)」

「み、皆、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ……」

「う、うん。それじゃ、お邪魔します」

頭を下げて、とりあえず雄二の部屋に向かうことにする

『皆さん、後でお茶を持っていきますね』

何て良い母親なんだ……。少し天然だけどね

「ここが俺の部屋だ。入ってくれ」

二階に上がって雄二の部屋に入ってみると、中は意外と綺麗に片付けられていて結構広かった

「そういえば、雄二の部屋にいくのも久しぶりだね」

「え? アキたちはしよっちゆうってないの?」

「それはな、このバカの家だったら色々都合が良いんだよ」

「確かに……。家族用のマンションで一人暮らしですもんね……。贅沢です」

「食生活を除けばね」

「そこは自業自得だよ?」

「そうだな。それに続けられるかもわからないんだろ?」

僕らがそういうと明久は呻いていた。事実を述べたまでなんだけどな

「とりあえずやろうと思ったが、俺の部屋では狭すぎたか……。参ったな……」

この場にいるのは全員で八人。座って雑談するならいざ知らず、道

具を広げて勉強するとなるとちよつと広さが足りないな

「居間とかできないのか？」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

雄二が心底嫌そうな顔をする。確かに目の前であんな面白いやり取りをされたら、勉強に集中できんだろうね・・・

「もうっ。ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いして」

「そうは言うがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんなことが言えるんだ。四六時中一緒にいると、ツツコミどころが多過ぎて——」

P r r r ! P r r r !

？雄二が反論していると、突然部屋に電子音が鳴り響いた。誰かの携帯の着信音？

「あ、ウチの携帯ね。ちよつとゴメン」

島田がスカートのポケットから携帯電話を取り出して耳に当てる。急用でもできたのだろうか？

「もしもし？あ、M u t e — お母さん。どうしたの？・・・うん。・・・うん。そう。わかった」

一分もしないで通話を終え、島田は携帯電話をポケットにしまった。

「美波、何かあったの？」

「うん・・・。今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど・・・ちよつと急な仕事が入って家にいられなくなったみたい」

「あれ？ってことは葉月ちゃん一人だけになってしまっうんじゃ・・・」
「そうね。だから、悪いけど今日はウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」
残念だが仕方がない。まだ小学生の女の子を家に一人にしておくのは可哀想だしね

すると・・・

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

雄二が島田を引き留めた。

「え？ウチの家？」

「確かに、それが良いかもな」

「うん！皆知らない訳じゃないしね」

「丁度雄二の部屋は手狭だったところじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「・・・なんなら、夕飯を作る」

皆がそれぞれの意見を言うのと明久が代表として聞いていた・・・

「美波さえ良かったら、どうかな？」

「そ、そうね・・・」

ん？イマイチ乗り気じゃないみたいだが、何かあるのかな？

「じゃ、じゃあ、ウチの家にしませうか・・・」

少し考えた後、島田から承認が下りる。これで一安心だね！

「ただし！絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

島田は明久の目を見てそう言った。被害は全部あつちに行きそうだから心配ないね

「よしっ！そうと決まれば早速移動だ！チビツ子も一人じゃ寂しいだろうからな！」

雄二が背中を押さんばかりの勢いで玄関においやる。よほどここで勉強したくないのだろう

皆が靴を履いている間、雄二は居間に入って行って雪乃さんに声をかけていた

『おふくろ。ちよつと出掛けてくる。夕飯は昨日の残りが冷蔵庫にあるから、それを温めて食べてくれ』

『あら、もう行っちゃうの？お茶を用意しているところなのに』

『悪い、ちよつと事情が変わったんだ。・・・ところで、その麺つゆのボトルは何に使うんだ？』

『麺つゆ？あらら・・・。てつきり、アイスコーヒーだとばかり・・・』

『おふくろ・・・。色や匂いで気づいてくれとは言わないから、せめてラベルで気づいてくれ・・・』

なぜだろう。雄二は家にいる方が学校にいる時より疲れて見える
気がするんだけど・・・

そんなこんなで、島田の家へむかう事が決まった

勉強と葉月の寝言

目的地的家について僕らはいま何してるかというところ

「ただいまー。葉月、いる？」

玄関の扉を開けて島田が呼びかける。すると・・・

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。お、お帰りなさいですっ」

廊下に面した部屋から、葉月ちゃんが勢いよく飛び出してきた

「？葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

どうやら今葉月ちゃんが飛び出してきた部屋は島田の部屋らしい

「あ、あう……。実はその・・・独りで寂しかったから、お姉ちゃんの部屋に行って・・・」

言い難そうにしながらパーカーの大きなポケットに何かを隠す葉月ちゃん

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？そのくらい、お姉ちゃんには別に怒らないのに」

「そ、そうですか？お姉ちゃん、ありがとうございます」

よしよし、と葉月ちゃんの頭を撫でている島田。

「葉月ちゃん、こんにちは」

「あっ！ バカなお兄ちゃんっ！」

「うぐっ!？」

明久が姿を見せるなり、ドンツと勢いよく腰にしがみつく。そしてそのまま葉月ちゃんは額をぐりぐりと明久のお腹に当てていた

「(流石は島田の妹・・・。おでこが的確に明久の鳩尾に食い込んでいるね) こんにちは、葉月ちゃん」

「(あれは痛いな。明久は一応笑顔だが、あれは見せかけの我慢だな) お邪魔するな？葉月ちゃん」

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わあっ。綺麗なお姉ちゃんにカツコイイお兄ちゃん達まで。今日はお客さんがいっぱいですっ!!」

僕達を見ると、葉月ちゃんは全身で喜びを表現していた。本当に天

真爛漫な子だね

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ？」
「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃんたち、こっちにどうぞっ」
葉月ちゃんが明久の手を引いて歩いていくのでその後ろをついて行く。その時に明久は扉が開いていた部屋を見る

「ちよ、ちよつとアキつつ!？」

「ほへ?」

「あつ、このパターンは・・・」

その瞬間、島田が明久の脳天・鼻先・下顎の三ヶ所に素早い一撃を叩き込み、バランスを崩した明久の両手首の関節を一瞬で外していた
「何見てるのよ!」

「うぎやああああ!!」

「?」

「葉月ちゃんは良い子だから今の光景は見ないでね?」

僕らは葉月ちゃんにこちらの方に意識向けさせて一瞬の惨状を見せないようにした

「いい?この部屋は絶つつつ対に、入ったらダメだからねっ!」

島田は大急ぎで開いていた扉を閉めると、外された両手はジャイア
ンとムツツリーニにはめてもらっているがまあ大丈夫でしょ?その
扉が文字通り地獄の扉だつてことは、明久もよくわかっただろうから
「やれやれ。お前らは何をやっているんだか…。チビツ子、元気だつ
たか?」

「はいですつ。おつきいお兄ちゃん」

「そうかそうか。それは良かった」

「それで葉月ちゃん、リビングはこっちでいいのか?」

「はいですつ。こっちですつ」

僕らは葉月ちゃんに案内してもらっていた。その間に島田が勉強
道具を広げる為のテーブルを取りに行こうとする

「?お姉ちゃん、テーブルなんて何するんです?トランプですか?」

それを見て、葉月ちゃんが首を傾げていた。そういえば葉月ちゃん
には何も話してなかったね

「葉月。今日はお姉ちゃんたちね、うちでテストのお勉強をするの」

島田がそう言うと、葉月ちゃんは少し寂しげに目を伏せた

「あう……。テストのお勉強ですか……。それじゃあ、葉月は自分のお部屋でおとなしくして居るです……」

察しが良いと言うか、気が回ると言うか。葉月ちゃんは俺たちが何かを言う前に、勉強の邪魔になるまいと部屋に行こうとした

「まって？葉月ちゃん。良かったら、僕らと一緒に勉強しよっか？学校の宿題とか予習とかはないかな？」

「えっ？ 葉月も一緒に勉強していいですかっ？」
パツと表情が輝く

「勿論だよ。ね？」

「ああ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないからな」

「雄二。それは僕が小学校五年生レベルだと言っているのかな？」

え？違うの？まあいいや

「葉月ちゃん。一緒にお勉強しましょうね」

「ワシはあまり教えてやれることはないかもしれないが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」

「僕もジャイアンもOKだよ。折角だし皆で勉強しようよ？」

「だな！」

「……。保健体育なら教えてあげられる」

お巡りさんー！一人だけ危ない発言をしていますよー！来てくださーい！

そんな僕の心の叫びとは他所に……

「葉月も一緒に勉強したいですっ！」

「おう。それなら勉強道具を持ってくるといい」

「はいですっ」

葉月ちゃんが自分の勉強道具を取りに行ってる間に僕らは夕飯の事を話し合っていた

「ところで、テーブルはいいとして夕飯はどうするんだ？」

「……。何か作る？」

「だったら手伝うが？」

「僕は別にそれでもいいよ」

現在時刻は午後五時だし、何かを作るんなら買い物に行った方がいいね。

「今日はピザでも取りましょ。作る時間が勿体無いし」

「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作っていちゃダメです」

ん？この二人にしては意外な反応だね？けつきり作るというと思っていた

「なんじや。ワシはてつきり島田が手料理を振る舞うのかと思っておったのじやが」

「ほら・・・つい最近、プライドを打ち砕かれたからちよつと、ね・・・」
「なるほどのう」

あー、女性としてのプライドがズタズタになったんだね・・・

「ほら、いいから皆適当に座ってて。今テーブル持ってくるから」

島田が一旦リビングを退室すると、入れ替わって葉月ちゃんが両手に勉強道具を抱えて戻ってくる

「お待たせしましたですっ」

「葉月ちゃん、やる気いっぱいだな」

「はいですつ。あ、バカなお兄ちゃん、ここへどうぞです」

葉月ちゃんは勉強道具をテーブルに置くと、カーペットの上にクッションを置いた。どうやら明久の席はあそこのようだ

「ありがとう、葉月ちゃん」

「いえいえです！」

明久がクッションの上に座ると、

「葉月の席はここです！」

明久の膝の上に葉月ちゃんに乗った。なるほどね・・・
「お待たせ。このテーブルをそっちに——って、コラ葉月っ。何してるの」

「えへへー。葉月はここで勉強するです！」

「ダメ。アキのお勉強の邪魔になっちゃうでしょ？」

「美波。僕なら別に大丈夫だよ。葉月ちゃんなら小柄だし」
「バカなお兄ちゃん、優しいですっ」
「それならいいけど・・・アキ。変な気は持ってないわよね？」
「明久君。万が一変なことをしたら、大変なことになりますからね？」
「イエス、ママ。下心はございません!!」
そうやって準備を整え、僕は葉月ちゃんを交えてテスト勉強をする
ることになった

二時間ほど勉強してからピザを堪能し、また勉強をしていると
「ん？もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

いつの間にか、時計は九時半を指していた

「なんじゃ。あつと言う間じゃったな」

「早いよなー」

「・・・・・・集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

僕も苦手な科目をより克服するためにしつかりやったからしんど
いね・・・

「あとはまた今度にするとして、今日はもう帰ろうぜ」

「そうだね。島田、今日はありがとう！」

「あ、ううん。こつちこそ色々ありがとう。ほら葉月、お礼を言いなさい

——葉月？」

「Zzzzzz・・・」

「あはは。疲れちゃったみたいだね」

葉月ちゃんはいつの間にか明久の膝の上で眠っていた

「疲れて寝たのか・・・」

「みたいだね。あつ、島田が明久に指示だしているけど離さないね」

どうやら葉月ちゃんは明久のシャツを握りしめたまま寝ているら
しく、明久が苦笑いを浮かべていた

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

美波が葉月ちゃんの肩を叩く

「んう・・・」

すると葉月ちゃんは少しだけ目を開けて・・・

「帰っちゃ、嫌です・・・」

そう言って更に強くシャツを握りしめた

「葉月。あんまり我が儘言うと、お姉ちゃん怒るからね」

島田の口調が少しだけ強くなる。どうやら怒るときはちゃんと怒るようだ

「お姉ちゃんには、わからないです・・・」

「え？何が？」

「・・・お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです・・・。でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです・・・」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

寝惚けているからこそ聞いた、葉月ちゃんの本音に思わず僕らは顔を見合わせる。かなり明久を慕っているようだ

「仕方ない。明久は今ここで残ってもらおう？」

「だな」

「そうじゃのう」

「・・・(コクコク)」

「そ、それじゃあ、悪いけど、もう少し葉月に付き合ってもらえる？」
「うん」

「あ、あのっ、それなら私も・・・っ！」

姫路がおずおずと手を上げたのだ。すると明久が・・・

「え？姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間に出歩いちゃ危ないからね。雄二かのび太かジャイアンにでも送ってもらって早く帰らないと」

「でも、心配なんです。その、イロイロと・・・」

「心配なのはわかるけど」

「いいえっ。明久君は私が何を心配しているのか全然わかってませんっ」

「??？」

それはまあ、明久だからね

「それで、俺とのび太が姫路を送るなら、ムツツリー二と剛田は秀吉を送るってことでいいか？」

「……引き受けた」

「ワシはいまいち釈然とせんが、致し方あるまい」

「あの、やっぱり私も……っ！」

それでも尚、食い下がる姫路。まあ気持ちは分かるが……

「明久の意見は正しいよ。何かあったとき親が心配するからね」「でも!!」

「でも何もないよ。最近は大変な人も多いんだからね？　こういうたことはきちんとしてないと。それに明久が意見曲げることはないよ？」

「うう……そうですけど……」

「それじゃ、島田。今日はありがとうな」

「大勢で押し掛けてすまなかったのう」

「……良い勉強になった」

「ありがとうな！」

「美波ちゃん、ありがとうございました……」

「じゃあ、また明日」

どこか納得いかない姫路も含め、皆でお礼を言って玄関に向かう。

「うん！　また明日だね」

葉月ちゃんがまだ寝ているので明久は座ったままでも挨拶をして……

「待って、外まで送るわ」

島田は立ち上がって僕らについてきてくれた

結果から言うと、明久もあの後すぐに合流したのだ。因みに姫路は明久が合流するまでごねていたのはここだけの話……

あれ？　そういえば何か忘れてるような気が……なんだろう？　まっいいか！

人はどこか似ているものだ

島田の家での勉強会の翌日

「姫路さん、昨日は大丈夫だった？」

昼休みに僕らは皆で卓袱台をくつつけて弁当を食べていたのだ。三上さんはたまにはクラスの子と食べていることになってるので、今はいい

「それが・・・凄く怒られてしまいました・・・」

姫路がしゅんと俯く。それはそうだろう

「おかげで週末までの間学校以外は外出禁止にされてしまいました・・・」

「あらら。そりやまた可哀想に」

女の子って大変だね。でもねこれだけは言っておくよ

「いや、でもね？親の電話をスルーしていたのは流石に心配するよ？」

「それに関しては同感だ。出るだけでも親は安心したのに」

「うう・・・反省します・・・」

「なんじゃ。明久はともかく、雄二らと姫路はあの後すぐに帰ったのではないのか？」

「確かにそうだな？なんでだ？」

「僕が帰るときになってもまだ二人とも美波の家の近くにいたよね？」

「帰るには帰ったんだけど・・・」

「途中で姫路が色々と駄々をこねてくれてな」

僕らが言うくと姫路は肩身狭そうに身を縮めていた

「あつ、そういえば坂本はよく無事だな」

「そうだね。僕もそう思うよ」

「ん？俺の親は何も言わないから大丈夫だぞ？」

ジャイアンと明久の言葉の理解してないね

「いや、そうじゃなくてさ」

「なんだよ？」

「二人が言いたいののは、二日連続で女子と夜遅くまで出かけている上

に、昨日は姫路と夜道を一緒にいたでしょ？霧島さんは怒らないの？」

「……………」

その瞬間、雄二の顔は真っ青になって「やってしまった」という見事な表情は初めて見たよ

「ま、まあ、大丈夫だろ。バレなければなんの問題もー」「…雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」…oh」

あ。霧島さん登場

「まあ待て翔子。お前は勘違いをしているぞ？お前の考えているようなことはなにも起きていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れは無いと」

「……………うん。言い訳は向こうでゆつくりと聞かせてもらう」

雄二&霧島退場

P i P i P i P i !!

その直後、明久の携帯のメール着信音が鳴り響いた。何だろうと思っただけでもらうと……………

【From 坂本雄二】

たすてけ

きつと『助けて』と打ちたかったんだろうと思うと、涙が止まらなかった

「となれば、今回の勉強会はどうする？」

「参考書とかはないが、俺の家ならいいぞ？」

「ジャイアンの家かー。僕はいいよ。明久らは？」

「今日はワシとムッツリーニは遠慮しておこう」

「……………(コクコク)」

「うちも遠慮するわ。葉月の事もあるしね」

「うう……………行けないの申し訳ないです……………」

「となれば、今日行くのは僕とのび太とジャイアンか。三上さんは？」

「うーん、声かけておくよ。姫路さんもないのは正直痛いんじゃない？教えられるメンバーが減ったし……………」

「ご、ごめんなさい。のび太君たちの言う通りにしとけばよかったです」

「ああいや、姫路さんは全然悪くないよ。自分の勉強を置いて僕らに教えてくれてるんだから、感謝してるくらいなのに」

「・・・吉井」

「うわっ！」

不意に背中から声をかけられ、明久が飛び上がった

「き、霧島さんか。びっくりした・・・。どうかしたの？」

「勉強に困ってる？」

「あ、うん。そうなんだよ」

霧島さんのシャツについている赤い液体には目を向けられないようにする。アレはきつと食事の時にこぼしたトマトジュースか、もしくはタバスコだ

うん・・・そうだよね？

「・・・それなら、私も協力する」

「え？協力って？」

「・・・週末に、皆で私の家に泊まりに来るといい」

つまり、学年一の頭脳を誇る霧島さんに教わって夜遅くまで勉強できるとのことか

「皆でと言うのは、この場にいる皆ということぞ？」

「(コクツ)・・・いつか吉井にお礼したかったから。のび太、三上を呼んでね？」

「三上さんもOKなんだ。わかった」

僕と霧島さんが了承すると、他のメンバーも意見を出した

「なら俺も参加するぞ」

「週末ならウチも都合いいわね。瑞希はどう？」

「た、多分大丈夫です。ダメでも、なんとか両親を説得しますっ！」

「・・・参加する」

秀吉、島田、姫路、ムッツリーニも参加することになった。これは週末が楽しみだ。三上さんも必ず呼ぼう！

「ところで、雄二は参加できるの？」

多分大丈夫だろうけど、この場にはいないからよく分からない

「・・・大丈夫」

「え？そうなの？」

「・・・その頃には退院してる」

「そっかー。良かった」

皆でにこやかに頷き合う。とりあえず、全員が参加できるようで何よりだ

ん？退院??

そんな不穏なキーワード聞いて聞き返そうと思ってらもういなかった・・・は、はやい。

こうしてる間に放課後迎えて僕らはジャイアンの家へと向かっていた

家の玄関について僕はインターホンならしたのだ

ピンポン

《はーい？どなただい？》

「あつ、ご無沙汰してきます！のび太です」

《あら!?久しぶりねー。どうぞ上がりなさい》

「ご了承をもらったので僕が代表としてドアを開けてはいったのだ。玄関で靴を脱いで上がろうとすると・・・

「あれ？のび太さん？」

「え・・・ジャイ子ちゃん？」

「うわー、久しぶり〜！あれ？お客さんがいっぱいいるからお兄ちゃんよんだらいいのかな?！」

「ジャイアンは部屋？」

「うん。勉強会するの聞いていたけど、のび太さん達だったなんて・・・

そちらの方は？」

「あつ紹介するね？バカそうなのが吉井明久。で、こちらが三上美子さん」

「お邪魔します」

「ご丁寧に、初めまして。ジャイ子ともうします。漫画家です」

「漫画家？失礼ですが・・・ペンネームは？」

「クリスチーネ剛田・・・って言うてもそこまで有名ではないけどね」

「ええ?!あの少女漫画で今人気の新人さん!？」

「？」

「ああ、明久は知らないんだね？彼女は少女漫画家で今話題の子なんだよ?」

「え?それメディア出るほどの有名人!？」

「私はメディア出るほど有名ではないよ。つてお兄ちゃん待つてるから上がってね?あつ、隣の部屋は覗かない方がいいからね?」

「え?なんで?」

明久は分からないといった顔をしていた。いや人様の家だよ?そんなに気にすることある?」

「隣の部屋は多分みたくないと思うよ?」

「まあ、そういうことだよ。つてジャイ子ちゃんはこれから出掛けるの?」

「ええ。これから編集者ときちんと次の漫画の話をしに行くの。それじゃあ、またね」

「うん。またね」

僕はジャイ子ちゃんと別れてすぐにジャイアンの部屋に行く・・・
ガラガラ

「・・・・(ピクッピクッ)」

「・・・・」

ピシャッ!

「ねえ・・・今ジャイアンが倒れていたけど・・・?」

「気のせいだよ?」

「それに何か食べ物食べて倒れていたわよ?」

「それも・・・き、気の、気のせい!!」

「何かためらっていった?」

うん。気のせい!! ジャイアンが泡吹いて倒れていたのは気のせい!!

「とりあえず、二人はそこで待ってて?」

「え、う、うん」

僕は二人にそこで待ってほしいと指示だしてジャイアンの部屋に入り起こしたのだ

「ジャイアン。おきて?」

「・・・ウゴオ!?! の、のび太か」

「あつ起きたんだ。何で泡吹いていたの?」

「・・・飯食べたら意識失った」

「ジャイアンが作った手料理?」

ジャイアンが力なく首を降っていた

「ジャイ子の手料理だ・・・。見た目が美味しくつても味が独特でな・・・意識がとんだ」

「!?!(あつれー? ジャイ子ちゃんは手料理そんなにダメだったって・・・?)」

「あいつの出された料理全部食べきった後に部屋戻ったら・・・」

「今の状態って訳か・・・明久達を中入れていい?」

「おう・・・」

あのジャイアンが倒れるほどの手料理・・・それって、下手したら姫路さんレベル? そんな冷や汗が出ながらも、明久達を中に招いたのだ。尚、先程の光景は昼寝していたからと言っていたら納得してくれ

た
この後の勉強は確りと捗りました・・・

霧島家へ・・・

週末まで、明久、ジャイアンと三人で勉強をしていた。三上さんとかFクラスの女子はそれぞれの事情で勉強はできなかった。

因みに雄二は不慮(?)の事故により入院していたため、週末まで一回もあつていない

「俺とのび太と三上とで三人で今霧島さんの家歩いているが此方ではないのか?」

「うん。ってかどうしたの?いきなり説明して?」

「いや、なんかしないとダメな気がした」

「!?!」

ジャイアン自身も?!?となっていたので、とりあえずはこの説明に関しては突っ込みはいれないでおこうと決めた

こういう会話してる間にも霧島さんの家に着いてインターホンをならして待っているとき大きなドアを開けて霧島が出迎えてくれた

「「今日はお世話になります!!」」

「・・・いらっしやい。のび太と剛田と美子」

それにしてもデカイ家だ。下手したら住み込みの家政婦でもいるんじゃないかな?

「・・・吉井もさつき来て、もう皆、だいたい揃ってる」

「俺たちが最後か」

「みたいだね?」

「・・・じゃあついてきて」

先導してくれる霧島さんについていくけど、廊下長い……。スネ夫の家よりも広いかもしれない……

「お部屋いっぱい……」

「・・・用途別」

さすがは金持ちだね：目的に応じてそれぞれの部屋があるらしい。

「(冗談抜きで・・・スネ夫の家より広いかも)」

「(あいつ聞いたら拗ねるぞ……)」

ここにいない友人の事を思い浮かんで、僕は苦笑いしていた

「あの本がいっぱい並べてあるお部屋は？」

「・・・書斎」

「あのスクリーンがあるお部屋はなんだ？」

「・・・シアタールーム」

「じゃあ、あの鉄格子のはまつてる部屋は？」

「・・・雄二の部屋」

見なかったことにしよう？うん！なんも見えてない！！聞かなかった

！

「・・・そしてここが、勉強部屋」

しばらく歩いたところで、霧島が立ち止まってドアを開ける。その中ではムツツリーニと工藤さんが言い争いをしていた。どうしたんだろ？

「ムツツリーニ君は頭でものを考え過ぎだよ！《百聞は一見に如かず》って諺を知らないのっ？」

「・・・充分なシミュレーションもなく実戦に挑むのは愚の骨頂」

「そうやって考えてばかりだから、スグに血を噴いて倒れちゃうんだよー！」

「・・・何を言われても信念を曲げる気はない」

「またそんなことばかり言って・・・！このわからずやつ！（チラツ）」

「・・・卑怯な・・・っ!!（ブシャアア）」

工藤さんが襟元を開き、ムツツリーニが鼻血の海に沈んだ

・・・いや何してるの？

「あつ、三上さんにのび太にジャイアンも来たんだ」

「ようやく来おったか」

「なあ、あの二人は何があつたんだ？」

「来て早々に血まみれのムツツリーニに僕らはすぐ戸惑ってるんだけど・・・」

「うむ。それが、『第二次性徴を実感した出来事は何か』という議論が高じてああなったようなのじゃが・・・」

「・・・その原因になった議題からおかしいと思うわ？」

どんな会話の流れでこうなったんだ？

「まあ・・・僕とジャイアンと三上さんに霧島さん、工藤さん。そして明久と姫路と島田、秀吉、ムッツリーニだね？今いるのが」

「合計10人ね。ずいぶん豪華な勉強会だわ」

「あれ？坂本は来てないのか？」

「あれ？確かに雄二が来てないね？」

「そうじゃのう・・・」

「寝坊だとしたら、気が緩んでるなく」

明久が笑いながらそういうと・・・

「・・・雄二をつれてきた」

ドサツ

絨毯の上にロープで縛られた雄二が転がされる

「ん、明久とのび太か・・・どうしてここにいる」

「ああ、うん。霧島さんの好意でね・・・」

雄二こそどうしてロープで拘束されているんだ、なんて聞いたらマズいだろうか？

とりあえずロープを解きながら尋ねてみる

「雄二は霧島さんからなんも聞いてないの？」

「ああ。何も聞いていない。いつものように気を失って、目が覚めたらここにいただけだ」

いつものように、か。なるほどね。週末になると雄二との連絡がつかないと言う話を明久としたが、原因はコレだったのか・・・

「それじゃ、勉強道具は？」

「・・・大丈夫。準備は万全」

霧島さんが雄二の鞆を掲げて見せると着替えも入っているようだし、手抜きりはなしだね

そう思っていると・・・

「それは違うよっ！世論調査では成人女性の68%以上が——」
「違わない。世界保健機関の調査結果では成人男性の72%が賛同している」

工藤さんとムッツリーニはまだ議論していた!?!

「またそうやって屁理屈を……!」

「……屁理屈じゃなくて事実」

「くう……っ！こうなったら、今度のテストでムツツリー二君を抜いてボクの方が正しいって証明してみせるからね！」

「……学年一位の座は揺るがない」

「そうやって憎たらしいこと言って……ムツツリー二君なんてこうだよっ！（ピラッ）」

「卑劣な……！（ブシャアアア）」

あの二人が何か問題を起こす前に、勉強を始めた方が良さそうだとこの勉強会なんだか波乱起きそう

あれ？何か胃が痛くなってきた……大丈夫かな？不安な気持ちと勉強会は始まった

勉強と食事室へ

僕らは今、霧島さんに案内されていた勉強部屋でそれぞれ教えあっていた

「この計算問題がこうなるから答えは $\sqrt{34}$ となると思うよ。」

「あつ！たしかにそうね！じゃあそこも同じような問いかけ?」

「いや、それだとーってなるわけー」

僕と三上さんとジャイアンは数学を教え合っていたが、ジャイアンの方がまだ数学は強いよね・・・

他の面子はというと、明久は姫路と世界史の勉強していたが・・・
「あれ?そういえば、今更だけど姫路さんの髪型今日は違うけど・・・
どうしたの?」

「じ、じつはポニーテールのもりでやったのですが、慣れていないからうまくできなくて・・・へ、変ですか?」

「ううん。とても似合っているよ!可愛い!」

「か、可愛いなんて・・・//////。明久君誉めるの上手ですね//
/」

「あはは。別にお世辞のつもりはないけどね」

「でも明久君の方が、私なんかよりよっぽど可愛いです・・・」

「それは僕にとつては全然嬉しくない台詞だからね!」

明久はとりあえず、男らしい一面を頑張っって見せないといつまでも評価変わらない気が・・・

雄二と島田と秀吉はというと・・・

「おい島田。世界史の方ばかり見てないで集中しろ。お前は国語は明久レベルなんだからな。せめて二桁は取れるようになってもらわないと二学期の試召戦争の時に困る」

「わ、わかってるわよ!でも、その・・・世界史も、ちよつと自信がなくくて」

「大丈夫だ。お前の成績は全体から見れば酷いがFクラスとしては普通だ。それよりも弱点を強化しろ。お前は問題が読めたら即戦力なんだから、暗記ものの世界史よりもこつちの方が効率的なはずだ」

ああ・・・多分理由付けで明久の方で一緒に勉強したかったのだろうね。でも、古典は頑張って一桁は無くした方がいいね

「うう・・・ウチは別に畳と卓袱台も嫌いじゃないのに・・・」

「ワシも同感じゃ・・・。姫路が転校せずに済むレベルの設備さえあれば充分じゃから、もう少し手を抜いても」

「手を抜くのは俺が許さん！今回結果を出して必ずAクラスに、翔子に勝つんだ！そうしないと、いつまで経っても俺の立場が変わらないからな！」

「勝つても変わらないでしょ」

「その通りじゃ。もう籍を入れるべきじゃ」

「て、てめえら・・・!!そこまで言うなら、次の問題解けよ?」「『はべり』の已然形を用いた例文」を答えろ」

「二以前食べたケーキはベリーデリシヤスでした」

「お前らちよつとそこに正座しろ・・・!!ついでにお前達の脳味噌に日本語と古典を叩き教えてやる・・・!!」

何をしてるんたか・・・そういえば、ムツツリーニーと工藤さんは大人しくなったかな?と思ひ、チラツと見ると・・・

「ムツツリー二君。さすがにこの問題はわからないでしょ?」

「・・・中一で70%。中二で87%。中三で99%」

「どうしてこんなことまで知ってるの!?!」

「・・・一般常識」

「うう・・・。正攻法で勝てる気がしなくなってきたよ・・・」

何かの議論をしていたようだが、工藤さんが地面に手をつけて悔しそうにムツツリーニーの方を見ていたしかし、直ぐに何かを企んだ顔でムツツリーニーの耳元に呟くと・・・

「・・・!?(ボタボタボタ)」

「え?何でかというトニーでーしてらるわけだからーなのさ」

「・・・殺す気か?!」

「殺すだなんて人聞きわるいなあ。別にボクは、ムツツリー二君が出血多量でテストで実力が出せなくなるというのには、なんてことも考えてないし」

「・・・この程度のハンデ、どうということはない。お前に負けることはあり得ない」

「ふーん、なら遠慮なく続きをいうねー？」

またムツツリーニーの耳元で何かを呟くとムツツリーニーがまた血を出しまくっていたので顔色が悪かった・・・大丈夫かなー

「・・・そろそろ夕御飯だから別の部屋に来て」

「え？もうそんな時間なの？」

「・・・うん（コクツ）」

僕の問いかけに霧島さんは頷いていた。皆でしていたからなのか時間があつという間に過ぎたんだね

「なら動こうか」

「なら、またこれは復習ね」

「だな」

僕とジャイアンと三上さんがそういう会話してる中、他のメンバーはというと・・・

「よし。島田、秀吉、とりあえず古典はこのくらいでいいだろ。飯にしようぜ」

「うう・・・。活用形ってなんなのよ・・・。知らなくても生活には困らないのに・・・」

「まったくじゃ・・・能や狂言をやるわけでもあるまいし・・・」

二人とも苦手な科目をみっちり勉強されていたからなのか疲労感が出ていた。ムツツリーニーはというと・・・

「・・・生き残った・・・!!」

「ムツツリー二君。また後で、じっくりボクとお勉強しようね」

「・・・断る」

この二人は仲が良いのか悪いのかよくわからないけど相性はいいはず

「案内するから、ついてきて」

「「「「「はーい」」」」」」

僕らは先導する霧島さんについていく。部屋を出てから少し歩くと、段々ご馳走の良い香りがしてきた

「・・・この部屋」

霧島さんが一つの部屋の扉を開けると、良い匂いが一層強くなった
「うわー」

「ス、スゴいわね」

「めっちゃ豪華だぜ・・・」

一般家庭ではあまり見かけないようなサイズのダイニングテーブルに所狭しと並べられた料理に僕は興奮していた。

香ばしい匂いを放つ北京ダックは姿焼で肉汁が滴っているし、チンジャオロースやホイコーロー、八宝菜に麻婆豆腐といった料理も中央の大皿に盛られているし、それぞれの席に置いてある小さな蓋付きの茶碗のようなものもある

「この茶碗の中身はなんだろう？」

「これだけ豪華じゃから中身も豪華ではなからうか？」

「ってか、スネ夫と良い勝負になるのか？」

「いや、多分霧島さんの家の方が上かもしれない」

「・・・少し内緒にしようぜ。のび太」

「うん。どちらが上なんかは触れない方が良いね」

明久の疑問に秀吉が高級なのだろうと答える代わりにジャイアンが僕にどっちの家が上なのかという議論の結果、触れない方がいいと決めた

「アキがこんなの食べたら、慣れない味でお腹壊しちやいそうね」

「あははっ。本当だよ」

「そういえば、翔子の家の人留守なの？」

「・・・うん。私たちだけ」

三上さんの疑問に、霧島さんがゆっくりと頷いて答えてくれた。こ
んだけの料理お手伝いさんがいないとできないと思うけど・・・

「まあ、翔子の家はそれぞれが自由に暮らしてるからな」

「・・・うん。だから気兼ねしないで好きに過ごして欲しいから座って」

言われた通りに手近な席に座り、そしてー

「「「「「いただきまーす！」「」」」」」

皆で手を合わせて、楽しい夕食タイムが始まった

挑発と暴走

僕らは現在、霧島さんの家で用意された夕御飯を食べていたがかなりの豪華だったからか皆は興奮して食べていた

「これはまた、絶品じゃな」

「そ、そうね……。(うう、増えないか心配だわ)」

「お、美味しいです……。うう……。また食べ過ぎちゃいます」

「僕の好物のカロリーがこんなにたくさん……。！」

「……。鉄分補給」

「翔子。なぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ？」

「……。おかしな薬なんて入ってない」

「ボク中華料理大好きなんだよねー」

「うめえ!!なんだ!?この美味しい食べ物は!!」

「本当だね。あつ、三上さん。これ美味しいよ?」

「本当? (モグモグ)……。美味しいわ!」

まるで高級ホテルの食事にいるかのように、皆は楽しく美味しく食べていた

「翔子。なぜ俺のコップに注いだ飲み物だけ毒々しいピンク色をしているんだ」

「……。怪しい薬なんて入ってない」

「ムツツリーニ。これは何じゃ?」

「……。ツバメの巣。美味しい」

「高級レストランにいるみたいだわ」

「そうだね」

「うまいー!!!」

「ス、スゴいわね。剛田」

「はい……。勢いがいっこうに衰えてませんね……。そういうえば、剛田君の《うまいー!!》って声は違うはずなのに、何故か某お笑いタレントさんの事思い浮かびますね」

「瑞希も?……。やめましょ?この会話していたら何か起こりそうだわ」

「そ、そうですね。あつこれは美味しいです」

滅多に食べられない高級食材に舌鼓を打ち、勉強の疲れを癒す僕は最後の締めとなる杏仁豆腐を味わっているところで、霧島さんが雄二に話しかけていた

「・・・雄二」

「なんだ翔子？」

「・・・勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配はいらねえ」

「・・・本当に？」

「ああ！次のテストではお前に勝っちまうかもしれないぞ？」

「・・・そう」

楽しみに笑う雄二を見て、霧島さんの目がスツと細くなった

「・・・そこまで言うなら勝負する？」

「勝負だと？」

「・・・うん。雄二がどこまでできるようになったのかみたい」

「ほほう・・・。ずいぶん上から目線だな・・・？」

「・・・実際に私の方が上だから」

「くつ。上等だ！勝負でもなんでもしてやろうじゃねえか！本当の實力の違いってヤツを見せてやらあ！」

霧島さんは本当に雄二の扱いが上手い・・・

「・・・わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テストで勝負」

「おうよ！今までの俺と思うなよ！」

「・・・それで、私が勝ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「はっ？」

つまり、雄二が負けたら霧島さんと一緒に寝るのか・・・。勿論、この提案に嫉妬を生む馬鹿がいるわけで・・・

「霧島さん。ゴメン。杏仁豆腐を食べたいからナイフを貸してもらえないかな？ 包丁や日本刀でもいいけど」

「・・・わかった」

「さて！今のコイツに刃物を渡すな！俺の命に関わる！」

つてなるわけだ。仕方ない・・・明久に生け贄なってもらうか

「明久？食事中にまさかと思うけど・・・良からぬ事考えていなかった？」

「い、いえ」

「なら食事中にはその邪悪な考え捨てないと・・・僕は、うっかり頭撃ち抜くかも♪」

誰の？とは言わないが、明久は真っ青になって「ごめんなさい！」と反省したのだ。流石に友人の殺人事件とかごめんだからね？

「・・・もしも、私が負けたら、と一緒に寝るのを許してあげる」

「俺に驚くほどメリツトがねえぞ!」

まあ雄二にとってはそうだけど、最早そこはフオローしない

「いいなく。そういうの、面白そうだよ。ボクも何かやりたいなあ」

突然、工藤が楽しげに言った。

「・・・愛子も勝負する？」

「それもいいけど、折角だからー」

わざと一呼吸置いて明久に目線を送る工藤さん。まさかー

「ーそのテスト、皆で受けて、その点数で部屋割りを決めようよ」

「よし！望むとこー」駄目です!!明久くんにはえつと・・・そ、その！まだ早いです!!・・・っへ？」

工藤さんに返事する前に姫路が話割り込み、明久は固まっていた。あれ？話が変な方向に行きそうな気が・・・

「保健体育のお勉強、ボクが吉井君に教えてあげたいな」

「ダメったらダメです！絶対にダメですっ！工藤さんがそんなことをしようとするのなら・・・私が明久君と一緒に寝ますっ!」

「えええええっ!?!姫路さん何言ってるの!?!」

本当に何を話してるんだ!?!どうしたらこうなるの!?!

「み、瑞希！何言ってるのよ！そんなのダメに決まってるでしょ!?!」

「でも、美波ちゃんだって明久君のHな本を見たならわかるはずですよ！明久君だって男の子なんです！Hなことに興味津々なんです！工藤さんと一緒に寝たら大変なんです!?!」

「確かに、アキの持っていた本の四冊目にはショートカットのコも載っていたけど・・・」

明久のトップシークレットが流出されて涙でそうだね．．

「ですから、明久君を守る為に、私が一緒に寝ますっ!」

「そ、そうねっ。アキを守る為に、ウチと一緒に寝てあげないとねっ!」

話が本当におかしい方こうなったよー!?誰か止めてー!!

「いやいや、お主らは慌て過ぎじゃ。別にこの提案に乗らなければ済むだけの話じゃと」

「勝負です工藤さん!私、明久君の為に負けませんっ!」

「そうね!アキの為にウチと一緒に寝るとするわ!」

「あははっ。二人ともやっぱり面白いね。そうこなくっちゃ。三上さんはどうする?」

「え、わ、わたしは・・・」

「参加したら(ゴニヨゴニヨ)だけど?」

「は、はう・・・／／。わ、わかったわ。参加するわ／／」

「三上さんまで?!誰か止めて!」

「諦めろ・・・」

「そ、そんなー!?(今ほど帰ってきてほしい状況はないよ!助けて、ドラえもんー!)」

ほぼ全員の参加が決まり、霧島さんが立ち上がった

「・・・じゃあ、まだ開けていない新品の模擬試験を持ってくる」

「待て翔子!俺はまだ承諾してないぞ!」

「・・・決定事項。さつき雄二は勝負するって言った。反対意見は認めない」

「ぐっ・・・!そ、それはそうだが・・・!」

雄二が目を泳がせて何かを考える。そしてテーブルの上に視線を送ると、霧島さんには見えないような角度で雄二がジュースの入ったコップを傾けるのが見えた

「っと、すまん翔子!服にかからなかったか?」

「・・・大丈夫」

ぱつと見、霧島の服にジュースがかかった様子はない

「いや、大丈夫じゃない。お前には見え辛いかもしれないが、服の裾のそのへんにかかったみたいだ」

なのに、雄二は霧島さんの腰の後ろあたりを指差した

「・・・それは困るかも」

「悪い。俺の不注意で――」

「・・・あの薬は繊維を溶かすから」

「待て。お前は俺の飲み物に何を入れたんだ？」

どうやら雄二のジュースは特別製らしい……絨毯と反応して煙を出す特別製とは珍しいな――

「・・・着替えてくる」

「そうした方がいいだろうが……それなら、ちよつと早いのが先に風呂にしないか？腹ごなしも兼ねてな」

着替えに行こうとする霧島さんに雄二は提案出した

確かに、満腹となった今から勉強を始めるより、風呂に入って一息入れた方がいいかもしれない。食事↓入浴という流れで眠くなるかもしれないけどね！

「・・・わかった。それなら先にお風呂にする」

「んじゃ、模擬試験はその後だな」

「・・・うん」

霧島さんの同意を得て、僕らは着替えの用意の為に男女別々の部屋に分かれた

オマケ

22世紀

「んん？」

「どうしたの？お兄ちゃん？」

どら焼き大盛りを食べていたドラえもんは手を止めて何も無い方面の方向にじつと見ていた事に不審に思ったドラミは声かけた

「いや、今のび太君の声が聞こえたような気がしたけど・・・？」

「え？気のせいじゃないのかな・・・？」

「んー、まっ良いか！食べよう！」

「そうね！」

「目指せ！どら焼き（メロンパン）100個制覇！」

とあるデパートで後に青と黄色のロボットが100個制覇したとかしてないとか・・・

交渉と協力

女子が部屋でて暫くして・・・

「さて、そろそろ時間だな。いくぞ」

部屋で待つこと数分。雄二が立ち上がった

「OK！覗きだね？」

「・・・任せろ」

パンパン！

「……………(ピクピク)」

「全く馬鹿なこと考えないの。思わず、銃を、打ってしまったじゃないか(三上さんの覗きは許さない)」

「今のび太の速打ち見えなかった……………」

「う、うむ。恐ろしいのじゃ……………」

ちなみに秀吉は一人で他の部屋に案内された後に、こっそりと僕らの部屋に来た

「違うぞバカどもが。俺が行こうと言っているのは翔子の部屋だ」

霧島さんの部屋つてことは……………

「まさか、さつき言つてた模擬試験の問題を盗み出す気？」

「そうだ」

考え方が卑劣だよ……………

「けど、別に僕らは問題を盗む必要なんてないんだけど」

「(こくり)……………それより、覗きが大事」

この二人は欲望に忠実だね……………

「本当にそう思うか？」

「何が言いたいのさ」

雄二がもったいぶった口調で確認している。

「いいか明久、よく考えてみる。お前の家に今帰ってきている姉貴は、何を禁止していた？」

「えっと、①『ゲームは一日三十分』、②『不純異性交遊の全面禁止』――

「……ってヤバいつ!!すっかり忘れてたっ!!」

「ああ、女子と寝るとなれば明久は即死だな」

「うん。そうだね」

「あ。でも、バレなければ問題ない!」

「協力しなければ俺がバラす」

「外道っ!この外道っ!」

《明久……雄二の頼みにより協力が確定》

まあ、雄二がやりそうな手だね……

「貴重な戦力入ってよかったね?僕は手伝わないよー」

「のび太、お前も手伝え」

「何で?僕は後ろめたいこともないよ?」

「(手伝えばこの写真をやる)」

「!? (……今、これを渡してくれたら協力する)」

「手伝ってくれるな? (ほらよ)」

「仕方ない。今回だけだよ? (ありがとう)」

《のび太……雄二から三上のかわいい写真により協力確定……》

三上さんの優しい顔……いいなー

「それとムツツリーニ、お前も危険だぞ?」

「……何故?」

「出血多量で死ぬ。それも確実に」

「たしかにそうだね (な)」

「……この俺が、死を恐れるとでも?」

「無駄にかっこいいね (な)!」

「だが、予想される順位を考えろ。上位の人間から相手を選んでいくとなると」

「ふむ、恐らく三上はのび太と、霧島が雄二を姫路や島田となれば明久。となると、工藤は……?」

ジャイアンが女子の名前あげて指名しそうなのを上げていたが、えっ?僕が三上さんと……?と思いつつも、とりあえず話は聞いとこう

「工藤はムツツリーニを選ぶだろうな」

「・・・まさか」

「さつきの言い争いもある。ムッツリーニを失血死させて、保体の王者の座を奪うつもりじゃないか?」

「・・・つくづく卑怯な・・・!!」

よくわからないけど、ムッツリーニと工藤さんの間にはおかしなライバル関係があるらしい

「・・・あんなスパッツごときに、殺されるわけには・・・!!」

死ぬことじゃなくてスパッツで死ぬことが嫌なだけらしいけど、何かトラウマでもあるの!?

「というわけだ。協力してくれるな?」

「わかったよ。協力するよ」

「・・・やむを得ない」

「僕も約束は守るよ」

「ワシも協力しよう」

「俺もだ」

「え?秀吉とジャイアン?どうして?」

「俺は単純に面白いからだ」

まあジャイアンはそうだろうね。秀吉はなぜだろう?

「どうしても、じゃ」

「??」

まあ、秀吉にも色々譲れないものがあるんだろうね

「よし。そうと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するに、テスト問題はアイツの部屋にある。そこに忍び込むぞ」

「「了解!!」」

何の因果か、俺たちは協力して霧島の部屋に侵入することになった
『代表。ところでさ、お風呂ってどうなってるの?』

『・・・大浴場と露天風呂がある』

『本当に豪邸ね・・・。でも温泉にいくの楽しみだわ』

『ボクも楽しみだよ。温泉も、姫ちゃんのコレを直に見るのも、ね』

『きやつ。ど、どこを触ってるんですか工藤さんっ』

『・・・羨ましい』

『瑞希はスタイル良いからね』

『あれを吸いとれる機械ないのかしら・・・?』

『み、美波ちゃん!?冗談ですよね!?顔がとっても怖いですよ!』

女性陣が会話を繰り広げながら、三上さん達は着替えを持ってお風呂と思しき方へ歩いて行った

「あのさ、雄二」

「なんだ」

「僕、もう全てをかなぐり捨てて姫路さんたちについていきたいんだけど」

「・・・同意」

「落ち着けバカども。あの時のことをよく思い出せ」

「今回はもう同じ失敗はしない!停学なんてくらわれないようにうまくやるさー!」

「多分、雄二が言いたいのは違うと思うよ」

「ああ、のび太の言う通りだ。・・・あの時の、ババアの裸をよく思い出せ」

「ゲップ」

「あつ、見事に痙攣した」

「二人の胃袋が痙攣したのが見てて分かるよな」

二人は真っ青に震えながら悲しい顔で呟いた

「覗きって、良いコトなんて一つもないよね・・・。見る方も、見られる方も・・・」

「・・・犯罪行為、良くない」

「二わかつてくれたら何より」

「それでは侵入するかの」

「そうだな。あんまりダラダラしていられんしな」

女子の姿が見えなくなつたのを確認するとは忍び足で廊下を進み、さつき女子が出てきた霧島さんの私室を目指した

「よし、中に入るぞ」

部屋の前に立ち、雄二が扉のノブを掴んで捻る

「あれ?開かないね?」

だが、ガチャガチャという無機質な音を返してくるだけで、その扉は開かれることはなかった

「鍵かいているみたいだね」

「大方大事なものでもあるから鍵してるんだろ？」

「アイツが大事にしまっておくものなんて見当もつかんが……。まあいい。ムツツリーニ、いけるか？」

「……三十秒くれ」

どこからか道具を取り出して鍵穴に張り付くこと三十秒。ムツツリーニは恐ろしい手腕で解錠に成功し、霧島さんの部屋のドアを開けた

大丈夫かな……

そんな一抹の不安感じながら霧島さんの部屋に入った

動揺と血の制裁

霧島さんの部屋に入った僕らは目の前の光景に固まっていた

「これはまた、立派な部屋じゃな・・・」

「ひ、広いね・・・」

「おお・・・」

「呆然としてる暇はないよ。手分けして探した方が早いかもね」

「そうだな。それぞれバラバラに当たろう。模擬試験の問題のよなものがあったら全て封を開けるんだ。それだけで言いがかりをつけられるからな」

早い話、霧島さんは問題を知っていたから不公平だ、といういちやもんをつければいいわけだけど・・・雄二は霧島さんに論破されそんな気がするのなぜだろう？

「わかった。それなら僕は向こうの棚の方から調べるよ」

「一人じゃ無理だろ。俺も行こう」

「なら、僕も明久の方で手伝うよ」

「・・・入り口から」

「ワシは窓の方から行こう」

「じゃあ俺は机のあたりか」

僕と明久とジャイアンは棚の方で、秀吉は窓、ムツツリー二は入り口、雄二は机と言う風に別れたのだ。僕と明久とジャイアンは棚のあたりを探し始める。そこには雑誌やら小説やらちよつとした小物やらが置いてあった

まずは本棚を端から順に見ていく

「えーっと、なになに・・・『良い女になる為の100の条件』、『意中の彼をその気にさせる方法』、『解説・男の心理』

「こっちは『脅迫・非合法を知ろう』、『確実に仕留める本』何を仕留めるの・・・?」

「俺が発見したのは『ストーキングの手口』、『黒魔術入門』・・・雄二に白魔術を薦めておくのも良いかもしれないな」

これだけこちらにはないのかもしれないと思い、首を巡らして入り

口辺りを見る

すると……

「……っ! (ブバアツ)」

「ムツツリー!」

突然、そこを捜していたムツツリーニの顔面に血の花が咲くという、なんとも度し難い光景が飛び込んできた

一体何があつたの!?

「ブービー……トラップ……か……」

血の海に沈むムツツリーニ。その視線の先にあるのは——綺麗に畳まれた女物の下着だった。僕とジャイアンは直ぐに目をそらした
「気を、つける……明久……のび太……ジャイアン……。工藤愛子は……俺たちを、皆殺しに……」

「ああ、いや。それで死ぬのはきつとムツツリーニだけなんだけどさ……」

「うんうん」

鼻血を噴き出して死ぬという死に方をするのはムツツリーニ位だ

「あ、アレは……っ!!」

少し離れた場所から慌てたような雄二の声。今度は何だろう?

「どうしたの? 見つかったの?」

「くっ……! 強化ガラスか!? 何か、何か壊す為の道具はっ……!」
目を向けると、雄二が壁に埋め込まれたガラスの塊にへばりついていた

「いや何してるの? 雄二」

「端から見たら変だぞ」

「問題見つかったの?」

「明久! のび太! 剛田! ちようどいいところに来てくれた! コレを取り出すのに協力してくれ!」

そうやって雄二が示したのは、分厚いガラスでコーティングされた婚姻届だった

「諦めなよ? ね? 明久とジャイアンもそうおもうよね?」

「そうだよ。明らかに無理っぽいよ」

「目的の問題探そうぜ？」

「バカを言うな！俺がどれだけこれを捜していたと……！翔子のヤツ、弁護士に預けただなんて嘘をつきやがって……！これが隠してあるから鍵なんてかけていやがったのか……！」

当初の目的を完璧に見失ってるな。下手に刺激すれば理不尽にキレそうだ

「そこまで追い詰められていたのか……」

「なんか涙出そうになるよ」

「え？雄二と霧島さんが幸せになるなら僕はそれで良いけど」

「明久が考えたくつつける方法は危険だから、あんまり恋愛の考えは信用できない」

「何故だろう。のび太に言われると腹立ってきた」

僕と明久がそう話しているとジャイアンが宥めていた

「まあまあ、のび太。どうする？」

「雄二が冷静じゃないからこちらでやることするか」

「だな」

「うわっ!？」

僕とジャイアンは次の行動移そうとしたら、明久の悲鳴が聞こえたので振り返ったら……

「いけない人だね、吉井君に剛田君に野比君。女の子の部屋に忍び込むなんて」

「く、工藤さん!?!あれ!?!お風呂は!?!」

工藤さんが片目を瞑って楽しげに笑っている

「下着、出したまま持つて行くの忘れちゃったから取りに来たんだよ」

ムツツリーニの死体の前にある着替えを指差して笑う工藤

「マズい！皆、ここは撤退しよう！殺戮部隊が戻ってくる可能性があるー！」

「まっ、こうなる気はしていたよ……」

「巻き添えからさらに巻き添えの予感だな」

女子全員が戻ってくる可能性を危惧して、作戦中断と同時に出口へと走り出す。三上さんから制裁加えられたら覚悟しよう。元々こち

らが悪いから

「くそ！目の前の奴を前にして断念するのは悔しいが……ここは引くか！」

雄二はジャイアンと二人で倒れているムッツリーニを抱えて部屋を脱出した。それに秀吉が続く

「また後でね、6人とも」

工藤さんは怒った様子はなく、走り去る僕らに手を振っていた

「作戦失敗だね……」

僕らは走りながらさっきの事を話していた

「一度見つかつた以上は何もできないな」

「困つたね……ムッツリーニはこのまま寝かせておけばなんとかなるかもしれないけど、僕たちは」

「テストで勝つしかなかったな」

「だよ。雄二が勝つて、一緒に寝る相手に明久を選べば……」

「……その瞬間、お前らは社会的な死を迎えるな」

そうなつた場合、二人の今後は大変なことになるだろうね

「安心するのじゃ明久。テスト問題ならば、それらしきものは軒並みワシが開封しておいたからの」

「え？いつの間？」

「お主らが遊んでおる間に、じゃ」

どうりで秀吉が静かだったわけだ。これは感謝しないとね

「でも、秀吉は何で協力してくれたの？」

「確かにな。メリツトないだろ？」

「ふっ……ワシも色々複雑でのお……」

急に秀吉は哀愁漂いながら遠い目していた

「女子と同衾して、何も無くばワシは完全に女子扱いされるじやろうし、何かあれば問題になる。これほど割に合わん状況はあるまいて……」

「ああ、なるほど……」

そのまま数秒廊下を駆け、霧島の部屋からある程度の距離を取った

ところで足を緩めた

「んじや、僕らも風呂に入るか」

「そうだね。そうしようか」

「俺は風呂どころじゃないんだがな・・・」

雄二の関心は霧島の部屋の婚姻届に全て向いてしまっている。何をやっても無駄だと思っけど・・・

「まあ今は打つ手がないんでしょ？だったらとりあえず風呂に行こうぜ？坂本」

「そうだな。風呂で何か策でも考えるか」

「そうしなよ。それじゃ、秀吉はまた後でね」

秀吉と当たり前のように分かれようとした明久の襟を秀吉が掴んだ

「どうしたのさ？お風呂入らないの？」

「入るつもりじゃ。じゃが何をお主は当たり前のように別行動をとるんじや？」

「だから、僕らは男湯で、秀吉は」

「ワシも男湯じゃ！」

「？時間をずらして入ろうってこと？それなら少し待ってるけど」
「ワシも男湯に入るのじゃ！」

あつだめだ。明久は理解してないみたい

「えええっつ！そんなのダメだよ！」

「何がダメなのじゃ！今日という今日こそは、ワシをきちんと男として見て貰うからの！男同士裸の付き合いじゃ！」

「は、裸・・・」

「顔を赤らめるでないっ！とにかく、お主がなんと言おうともワシは男湯に入るからの！」

ああ、ムキになってるね。こういうときは梃子でも動きそうにないね・・・

でもまあー

「・・・わ、わかったよ秀吉。それなら、一緒にお風呂に入る——」

「ねえ瑞希。突然だけど、アキが水のないプールに飛び込む姿とか、見

てみたくない?」

「奇遇ですね美波ちゃん。実は私も、急に明久君が酸素ボンベなしでスキューバダイビングする姿を見てみたくなっちゃったんです」

——梶子より強力なものが待ってるけどね。

「じゃあ行きましょうかアキ。この家ならプールくらいありそうだし。20メートルクラスの飛び込み台があるといいわね?」

「その後はお風呂に頭の先まで浸かってきちんと1000数えましょうね? 身体の芯まで温まりますよ?」

「あははっ。2人とも、冗談がうまいなあ。そんなことをしたら僕は死んじゃうじゃないか」

その割には凄い力で引きずられている気がするが、気のせいだろう「まったく、戻ってきてみたら、よりによって木下と一緒にお風呂だなんて……」

「工藤さんが忘れ物をしてくれて良かったです。後でお礼を言わないといけませんね」

「あは、あはは……。2人ともさつきから冗談ばかり。本当は僕をからかっているだけでしょ? ねえ、冗談だよね!? どうして2人ともこつちを向いてくれないの!? どうして僕の手を更に嚴重に縛るの!? とにかく話を聞いてよ! 誰か、誰か助けっいやあああーっ!」

「去らば明久……」

引きずられた明久に僕は悲しく見届けた

「さて……三上さんもいるんですよ?」

「うん。よくわかったね? さて、翔子の部屋で何してたの?」

「あはは……。一つだけお願いしたいけどジャイアンは巻き添えだから僕だけお説教とお仕置きして良いよ?」

「え?」

三上さんは僕の提案に戸惑っていた。え? 何で戸惑うの?

「バカ言うな。お前の罪は俺の罪。俺の罪は俺の罪」

「だから」と一息ついてジャイアンは三上さんにいった

「三上! 俺も悪いことはしたんだからお仕置きしてくれ! 反省はしない筋は通らねえ!」

「いやいや！何でお仕置きする前提!?殴らないからね?!

三上さんがあたふたとしていた。・・・あれ?

「私は話聞いただけだからね?お仕置きはしないから!」

「え?でも」

「二人がその行動思い付きでしないから、大方坂本くんの判断でしよう?」

「でも、女子の部屋を勝手に入ったんだよ?」

「うーん、二人の潔さにお仕置きはなしだからね?」

「・・・ありがとうございます!」

僕とジャイアンは三上さんに向かって土下座していた。三上さんが女神様に見えます・・・

他のメンバーはと言うと・・・

『・・・雄二』

『しよ、翔子!?お前いつの間に戻ってきていたんだ!』

『・・・婚姻届を盗もうとするなんて、許せない』

『ま、待て!話を聞け!アレは盗難じゃなくて正当な権利でぎやあああーっ!』

『ムツツリー二君、起きて起きて』

『う・・・うう・・・』

『えいつ(チラツ)』

『ぐぼあっ!(ブババツ)』

霧島の家が広くて助かったな。隣家がすぐ近くにあったら、きつと僕らの悲鳴を聞きつけた人が警察に通報したかもしれんから

「じゃあ、のび太君と剛田君に男湯案内するね?木下君は何故か専用のお風呂あったから一緒に案内するね?」

「・・・結局、ワシは一人で入るのか・・・」

お仕置きされてるメンバーはほっておいて、僕らはお風呂へと向かった・・・

『『ぎやあああああ!!』』

お仕置きされてるメンバーの悲鳴はなにも聞こえてないよ。その後良いお風呂に堪能してました・・・

女子トークは恋話が定番

秀吉の活躍のおかげでテストはなんとか中止になり、また勉強を続けること数時間。日付が変わったあたりでそろそろ寝ようということになった

「木下君。何かあったら大声で呼んで下さいね」

「・・・これ、防犯ブザーとスタンガン。雄二が何かしそうになったら使って」

「むう・・・。もはやワシの性別を正しく認識しておるのは明久の姉上だけだということになるのじゃろうか・・・？」

「アキ。わかっているとは思うけど、万が一にも何かあったら・・・ね？」
「わ、わかっている！何もしないよ！」

秀吉の希望により、部屋割りには男子&秀吉と女子部屋の二つに分けられた

三上 side

私は今、霧島さんの部屋で寝る用意をしていたのだがさつきから瑞希の様子がおかしい・・・

「瑞希、どうしたの？さつきから何かを探してるみたいだけど・・・」

「あつ、美子ちゃん。実は・・・」

聞けば瑞希の髪留めがどこかへ消えてしまったみたい

「・・・探すの手伝う？」

「無くしたのならウチも探すの手伝うわ」

「私も探すわ」

「いえ、また明日の朝にお布団を片付ける時にでも捜すから大丈夫です」

私達がそう提案するが、瑞希は明日になって探してみると言ったのだ。本人がいいなら構わないけど・・・

「そういえば、いつもあの髪留めしてるけど・・・思いつきの品なの？」
「んっふっふっ。ボクの予想だと、好きな人からの贈り物って感じなんだけど？」

「いえ。あれ自体は自分で買ってきた普通の髪留めです」

「そういうと、工藤さんは残念がっていた。自分で言ってるだけど、私も髪留めには思いつきの品ってなるのよね・・・」

「確かに、思いつきはありますけどね」

「え？なにになに？面白そう」

「残念ながら、それはヒミツ、です。そういえば美子ちゃんの髪留めもいつもと同じ色ですが・・・大事なものなんですか？」

「うん。大事なものと言えば大事なもののよ」

「へー？何々？」

別に隠しきないといけないことではないから話していいのかな・・・でも、今は保留ね

「うーん、ごめんね？教えたいけど、今はまだ教えれないわ」

「えー、すぐく気になるけどなー」

「そうね」

「・・・私も気になる」

あはは・・・と、とりあえず話を変えよう！

「まあ、此方の事は置いて・・・私としては工藤さんの話も気になるわ」

「そうね・・・ウチも気になってたわ」

「私もです」

「ふふっ、そんなにボクの話が聞きたいのかな？」

「違うわ。そっちじゃなくて」

「土屋君との関係、の方です」

「ふえっ!?!」

あっ、この反応はもしかして・・・

「・・・私も聞きたい」

「代表まで!?!」

「そうやって否定することが怪しいですね」

「確かにそうね」

工藤さん、御愁傷様。多分、逃げきるの大変だと思うわ・・・

「ち、違うってば！ボクもムツツリー二君もそんな気は全然ないよ」

「それはどうかしらね？意外と男子部屋でも、土屋君が似たようなことを言ってるかもしれないわよ？」

「そうですね。きつと向こうの部屋でもこんな話をしているんじゃないわよ？」

「ほらほら、向こうできつと土屋も尋問されているだろうし、素直に言っちゃいなさい」

「・・・言えば楽になる」

「だから、あんな頭でっかち、ボクは全く興味がないうって言ってるの！そういう皆はいるの!?!」

あつ、反撃してきた。

「・・・私は雄二」

「二」霧島さん（代表）は言わなくても分かっているわ「三」

うん・・・あれだけ坂本くんに対するアプローチもといヤンデレ的なのを聞いていたらね

「・・・そういえば美子は好きな人いるの?」

「ふえ?」

「好きな人といえば、美子ちゃんのはび太君が好きなんですよね?」

「そうね。私もそう思う」

「で、どうなの?」

まさかの私の方に質問が飛んできたのだ。どうって・・・

「うーん、仲の良いお友だちって感じかな?」

「二」はあ・・・「三」

「え?!何でため息つくの!?!工藤さんまで!」

何でため息をつかれたのかわからないわ・・・

「・・・だって」

「ねえ?」

「何回か仲が良いやり取りを見ていたら・・・」

「美子ちゃんはきつと、のび太くんの事が大好きだと思ったのです

が・・・」

「？」

「二(早くこの二人付き合えば良いのに・・・)」

何でだろう、このモヤモヤとした気持ちは??うーん、考えるのは止めましょう!

「私のは答えたから今度は瑞希と美波は・・・？」

その途端に二人はテンパリながら慌てていた

「えっ!?!//い、いや、その//」

「う、うちも別に好きな人は//」

「なら、僕が狙おうかなー？」

「だ、駄目です!!明久君(アキ)はー」

「あれ?僕は狙おうかなーっていっただけで吉井君とは言ってないよ?」

「はっ!」

その言葉に二人は嵌められたとわかり、顔は真っ赤になって今にも倒れそうだった

「はいはい、工藤さんもからかいすぎないの」

「あはははっ!ごめんごめん!二人の反応が面白かったからつい・・・ね?」

「ムウ・・・」

うーん、なにか新しい話題を変えないとまた話が蒸し返しそうね
「あっ!そういうえば、知ってる?」

「?」

工藤さんが突然、思い出したように聞いてきた

「何が?」

「文月学園の噂!」

「噂?」

「うん!実は、男で一番逆らってはいけないランキングがあるんだけど・・・1位は誰だと思う?」

「・・・西村先生!」

「うん!僕も最初はそう思っていたんだけど・・・」

「・・・違う人だったの?」

霧島さんが代表として聞くと工藤さんは苦笑いして答えてくれた

「うん。実はね・・・君達の知ってる男の子だよ」

「えっ??」

「野比のび太君が西村先生を押しさえて逆らってはいけないランキング1位だよ」

・・・・・・・・

「「ええええええええ!!!」」

「・・・驚いた」

「因みに怒らしてはいけないランキングでも1位みただよ。まあ二つのランキングであった理由が・・・《怒らしたときに命いくつあっても足りない》とか《お兄様はある意味、更生させるのに向いてます!》とかね」

「「ああ、納得」」

うん。のび太くんは、あの清水さんをきちんと悪いことは悪いと教えたり堂々と言うよね。本人はこの事知ってるのかしら?」

「・・・まだまだ夜は長い。話しましょう」

「「うん! (はい!) (ええ!)」」

女の友情を深めながらこういう会話するのも良いわね♪折角だし楽しまないと♪!

さっきのとある噂のランキング入ってた本人はというと・・・

「ぶえくしょん!!・・・風邪かな?」

少しトイレから部屋に戻る最中だった。噂されているとは知らずに部屋へと戻っていた・・・

男子のお泊まりの過ごし方

女子が僕らに関する話してても知らずに今何してるかというと……

「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）

「二二イエーツ！」

「古今東西っ」

「二二イエーツ！」

「一部生徒の間で噂になっている明久の恋人の名前」

そう僕らは、六人でゲームをしていた。明久の恋人の噂……ね

パンパン（手拍子）↓雄二の番

「《久保利光》」

「ダウト！それダウト！久保君は男だから！」

パンパン（手拍子）↓ムツツリーニ

「……《坂本雄二》」

「嫌だあつ！それはなんとなく知っていたけど改めて言われると凄く嫌だあつ！」

「俺だって嫌だボケ！」

パンパン（手拍子）↓僕の番

「学園長！」

「……ケプツ」

パンパン（手拍子）↓秀吉の番

「え、えつとえつと……ワ、ワシじゃ！」

「……」

「あ、明久!?そこで黙り込んで頬を染められるとワシも困るのじゃが!?!」

パンパン（手拍子）↓ジャイアン

「《島田の妹》」

「ダウト!!名前だよ!?!あと、僕に小さい子に手を出す事はありません!」

パンパン（手拍子）↓明久

「《島田美波》」

「『「罰ゲーム決定!!」』』』』』」

「どうして!？」

嫌がらせだよ。

「さあ明久。くじを引くのじゃ」

「うう……。なんだか納得いかない……。」

「安心して? 明久以外は皆納得してくれてるよ!」

「渋々といった感じで、明久は雄二が突き付けている袋の中に手を突っ込む。さて、どんな罰ゲームを引くんだろうか?」

『女子部屋に行つて姫路さんの髪留めを戻してくる』って、コレは僕の書いた罰じゃないか」

あれ? なんでそんなの持つてるの?

「なんだ明久。お前は随分とヌルい罰ゲームを書いたもんだな」

「他になかったのか?」

「え? そう? でも、女子部屋に侵入だよ?」

まああのメンツなら、命の保証は全くないだろうね

「ところで、皆はどんな罰ゲームを書いたの?」

「俺は『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だな。当然、盗つてこれるまで何度でもトライしてもらおう」

「ワシは『本気女装写真集の撮影』じゃな。ワシの苦しみを皆も味わうべきじゃ」

「……。『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めている写真はなかなか撮れない」

「罰ゲームというか、頼みみたいなものかな? 『俺様の手料理を味わう』だね」

「(良かった! 明久よかったね!) 僕は『鉄人に勉強を教えてください』だね」

「『「のび太のが一番怖い!」』』』』」

「当たらなかつたらいいのさ。当たらなかつたら」

僕を含めた全員が明らかに個人的な目的で罰ゲームを決めていたね。考えることは皆一緒か

「さて。それじゃあアイツらが寝静まるまで適当にダベるか」

「そうじゃな。疲れておるじやろうし、小一時間もしたら眠っておるじやろ」

「お題は？」

「そうだな。じゃあ、『今までの人生で一番恥ずかしかったこと』からいくか？トランプあるからババ抜きで最後に残った奴が罰ゲームってことで」

「賛成！」

「[[[[OK]]]]」

十分後……

今日の前には、最後の二人、雄二と明久が残って最下位争いしてる（くっ、雄二がジョーカーを持っている……。どちらか引けばジョーカーではないのを引けば、僕が最下位はない！）くっ……

「（ここは馬鹿正直にいく奴だから……）明久、心理戦といこうではないか？」

「いいよ」

雄二の顔にすごく悪いこと企んでますよつてのが見えるよ。明久たぶん負けるかもね

「この2枚にどちらかがジョーカーがあるが……。どちらを選ぶ？俺は右を薦めるがな」

「（嘘をついてる可能性があるから……嘘が下手くそだね！左にジョーカーがないんだろ!?!）」

「ほう？ほんとうにそれでいいのか……?」

「うん！」

「なら引いてみる！」

「ふっ……はあああああ!!!」

明久が引いたカードは——

その一分後……

明久が最後にジョーカーを、持っていたので最下位となったのだ……。まあ、明久に心理戦が向いてるとおもえないけどね

「負けたんだから話すんだぞ？」

「ぐ……わかったよ。えっと、アレは僕が中学一年のころなんだけど――」

「」「ふむふむ」「」

あれから色々なことをしながら、恐らく寝静まつてる筈の時間になり、秀吉が合図だした

「さて。そろそろ良い時間じゃぞ、明久」

「そうはいかないよ！僕は『人生で16番目に恥ずかしかった話』までさせられてるのに、皆は何も話していかないなんて不公平だ！」

「色々なゲームをして勝負したけど……」

「明久が弱すぎるんだよ」

「ゴチャゴチャ言つてないで、いいから行くぞ明久」

「うう……わかったよ――って、雄二も行くの？」

「ああ。俺は俺でやることがあるからな」

大方霧島さん絡みかー。雄二は、ムツツリーニから借りたガラス用のカッターを掲げて見せた。例の婚姻届が目的なんだろうが、あの分厚いをガラスを破るのは無理だろうね

「ならば、ワシとムツツリーニとのび太とジャイアンは廊下から見ておるかの」

「……面白いハプニング、期待してる」

「何故か、雄二が霧島さんにボコボコにされるって思ってしまった」

「のび太もか？坂本生きて帰ってこい」

「そんな面白いハプニング期待しないで!？」

「安心しろ！絶対に捕まらん！」

雄二？知ってるかな？それってプラグなんだよ？

光量を落とした電灯に照らされた廊下は、シンと静まり返っていた。ここに出る前の最終確認をしていた

「二人とも、危険だと思ったらすぐに逃げるんだよ？」

「命いくつあっても足りないからな」

「……期待してる」

「ワシらはここで待つからのう」

「ああ。さて、明久いくぞぞ？」

「OK」

勇み足で二人は部屋から出ていくのだが、何だろう？雄二の背中から死神が見えたのは・・・

数十分後に明久が戻ってきたのだが、雄二が見当たらないことに質問をしたら

「雄二は・・・星になった」

「??」

「それどー」うぎやあああああ!!!」・・・察した」

僕の質問を遮ったのは聞き覚えのある叫び声だった。その時点で僕らは全員察して・・・

「さらば、坂本雄二・・・安らかに眠れ」

「勝手に殺す・・・うぎやあああああ!!!」

「・・・お仕置きはまだ終わらない」

廊下で何か叫んでるの聞こえたが僕らは無視して早く寝たのだ・・・

朝から見てはいけないのもある！

霧島さんの家で朝早くに起きたので片付けをしようと思って起きたのだが・・・

「うわあああああああ!!」

「何!?!...うわあああああ!!」

「... (ガクガクブルブル)!!」

「zzz」

「...これは女子には見せられないな」

明久の叫び声に僕らも振り返ると...そこには誰にも見せれない程の姿の雄二がひれ伏していた

「昨晚、あれから帰ってこないと思って心配していたらこんな状態だなんて・・・」

「皆...なにも見なかったことにしよう? いいね?」

「...「異議なし!!」」

明久の提案に僕ら全員が賛成したのだ。うん。見てない! 血塗れになって息絶え絶えになっている雄二なんて知らないよ...

血塗れになっていた雄二をほっておいて、廊下を歩くと...

「おはよう。姫路さんに美波」

「あつ、おはようございます!」

「おはよー。ってあれ? 坂本は?」

島田の質問に皆は一瞬でアイコンタクトをとり、誤魔化したのだ

「雄二ならまだ寝ているよ」

「雄二の事なんて気にしなくってもいいと思うよー?」

「そうじゃな。朝御飯を食べねば」

「(コクコク)」

僕らが慌ててそう言うのと島田と姫路が「??」と沢山出ていた。まああの光景は見せれないからこそ、誤魔化したい

「おはようーのび太くん! 皆」

「おはよう。三上さん...ってあれ? 霧島さんと工藤さんは?」

「確かに見てないな?どうしたんだ?」

「工藤さんは霧島さんと先に食事する場所へ行つたの。で、霧島さんは何か坂本くんの手料理を食べさせようと今料理してるの」

「そ、そう(雄二・・・どうか死なないでね)」

「ならないこうぜ! (無意味だと思うが、胃薬は今度あいつにあげるか)」
そんな苦笑いと共に僕ら全員が食事をとるために移動したのだ。
なお食事中の時の事だが・・・朝もやはり豪華でした・・・

僕らは帰ろうとすると霧島さんが見送ってくれた。なお雄二はあとで帰ると霧島さんから聞いたのだ

「・・・吉井」

すると、霧島さんが明久を呼び止めたのだ

「?霧島さん?」

「・・・勉強の成果出るといいね。応援してる」

「任せてよ!雄二との仲も進むといいね!」

「・・・ありがとう。吉井はいい人」

・・・雄二、しばらくなら明久だけでお願いね?僕らは関与してないから

こうして一泊二日の勉強合宿は終わったのだが・・・色々な意味で疲れたのはここだけの話だ。尚、雄二は再び入院したらしい

オマケ

僕は三上さんと二人で歩いていたのだ。ジャイアンは先に帰らないと色々和不味いと言つて走つていった

そんな僕らは話ながら帰っていた

「ねえ、のび太くんは夏休みどうするの?」

「うーん夏休みはなんも考えていないなー。多分補習三日間入ってるのは確実だし・・・」

「ああ・・・」

三上さんが同情したように呟いた。うう・・・負けたから仕方ないけどさ・・・

「夏休み皆と海行きたいね？」

「うん！メンバーはいつものメンバーでいたらいいよね」
そんな会話を夕日を背景に楽しげに僕は帰っていた

見直しは必須！

試験当日の朝・・・

僕と三上さんは朝早くに登校してた。ジャイアンはあとで学校いくから先に行つて欲しいと連絡をもらっていた

「今日の試験は世界史があるのかー。明久が勉強していた科目だね」

「そうね。のび太くんは今回は勉強した甲斐がありそう？」

「うん。苦手な科目も三上さんに教えてもらったから以前よりは点数上がるはずだよ。三上さんは？」

「私のはのび太くんの得意科目で勉強を覚えてくれたから今回はその科目が自信あるわー！」

三上さんが可愛らしくガッツポーズしていた。・・・似合うなー

「？のび太くん？」

「あつ、ご、ごめん！ポーとしていた！」

「？変なのび太くん」

クスクスと笑っているけど勘弁してほしいなー。三上さんが可愛かったのは事実だけどね！

「試験で吉井くんの勉強の成果出ればいいけど・・・」

「明久だから最後まで気を抜かなかつたら行けると思うけど・・・」

「はあ・・・」

なんとも言えない心配さが出てきた。本当に大丈夫かなー

「じゃあ頑張りますよ！」

「うん！またね」

僕と三上さんは別れて、僕は自分の教室に向かうと明久が既に来ており、教科書を広げていた

「あれ？明久、顔色も悪いけど大丈夫？」

「そうよ。フラフラしてるけど大丈夫なの？まだ一日目だつていうのに」

「大丈夫だよ・・・。ただ、あまり話しかけないでもらえるかな？昨夜必死で詰め込んだものが出て行っちゃうから」

「そ、そう・・・」

「アキがそう言うならいいけど」

明久の表情からは完全に疲労が見えていた。恐らくだが、昨日の夜からほとんど飲まず食わずで勉強したんだろう

まあ、それだけ気合が入ってるって事だろ僕も少し復習するか！因みにだが今日の科目は現代国語・英語（リーディング）・世界史・数学Ⅱ・化学・保健体育というラインナップで、残りの科目は明日の二日目に行われる

さて、特訓の成果はでるかな・・・？

「よしお前ら、席につけ。今日は期末テスト一日目だが——」

いつもの時間通りに西村先生がやってきて簡単な連絡事項を告げる。と言つても大した話がなかった為に朝のHRは五分もせず終了したのだ

「はい、勉強道具をしまってください。一時間目のテストを始めます」

適当に復習していると、いつの間にか監督の先生がやってきた。どうやら高橋先生のようなのだ。言われた通りに勉強道具をしまつてテストの用紙が回ってくるのを待つ

「毎度のことですが、注意事項です。机の上には筆記用具以外は置かないこと。また、机に何か書かれている場合はカンニングと見なされる場合がありますので、自分で書いた覚えがなくても確認するようにして下さい。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、よほどのことが無い限りは——」

テストでの決まり事を高橋先生は言っていたが、実際にカンニングした人はいるのだろうか？

こうして期末試験は始まった

く現代国語く

『四面楚歌』という言葉の正しい意味を次の選択肢の中から選びなさい。

- ① 孤立して助けがないこと
- ② 歌ばかり歌って何もしないこと
- ③ 楚という国の歌のように、四方に伝播しやすい物事を示す喩えの

こと

④四面のBGMが楚歌であること

のび太：三上さんが教えてくれていたから答えれる！

ジャイアン：皆とやっていたから答えれる！

三上：選択肢だし、きちんと考えたら間違えない！

く英語（リーディング）く

（ ）内の「It」の意味する内容を日本語で書きなさい。

(It) won't take you more than ten minutes to your home.

※警告『それ』と書いた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます

のび太：うん！勉強の成果が出る！

ジャイアン：なんとか答えれたがこれは皮肉なのか？

三上：問題同じだけど、恐らくこの警告はのび太くんたちがいるFクラスに向けていってるのね

そして・・・

「よしお前ら。テストを始めるぞ。筆記用具以外は全部しまうように」

監督は西村先生か、カンニングするバカはいないはずだけど・・・

「一枚ずつとって後ろに回すように。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておくこと。いいな？」

先ほどと同じく、明久から回答用紙と問題用紙が回ってくる。この世界史のテストは明久にとって勝負の分かれ目だから、頑張つてほしい！

さて世界史だが・・・

紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った（ ）による（ ）が始まる

のび太：うん！こんなの常識！

ジャイアン：名前だけが思い出せない!?やべー!

三上：紀元前334年アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス3世を破った(アレクサンドロス大王)による(東方遠征)が始まる。うん！これでいいはずよ？

キーンコーン――

そして、俺がハイになっていると、テスト終了のチャイムが鳴り響く。

「よし。ペンを置け。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」

クラスの皆が大きく息を吐く音が響き、西村先生に言われたとおり、僕はテスト用紙を回収を開始する

『おい朝倉。往生際が悪いぞ。早く渡せよ』

『ま、待ってくれ！こっだけ直してから』

『朝倉！チャイムは鳴ったぞ！諦めてペンを置け！』

チャイムが鳴っている間に間違いを見つけたようで、朝倉が解答用紙を渡さずに粘って鉄人に怒鳴られていた。

実にバカだなー

そんなことを思いながら回収を再開する。

「明久。回収するよ？」

「あ」

明久の手から回答用紙を回収する。そこに書いてあったのは回答を見ると・・・

心の中の涙が止まらないよ・・・

そう思いながら、西村先生に渡したのだ。そんな明久はというと・・・

「.....」

大き過ぎるミスを犯し、明久は為す術もなく、去り行く鉄人の背中

を見送っていた。

「おう明久。勝負の世界史はどうだった？きちんと解けたのか？」

そんな明久のところに席を立て雄二がやってくる

「ああ、うん。ちよつと間違えちゃったけど、今までで一番良くできたよ」

「そうか。それはつまらんな。折角お前が真っ青になって今後の対策を考える姿を笑いに來たつてのに」

「何を言ってるのさ雄二。まったく、洒落にならないよ」

確かに洒落にならない間違いだったね・・・

明久と雄二は朗らかに笑い合う。それを見ながらさつき回収されてしまった明久の解答用紙を思い出した

・・・あのミスは、やつちやつたなあ・・・

クラス：紀元前

学生番号：334年

名前：アレクサンドロス大王

因みにジャイアンはあの問題の答えが「閻魔大王」と答えたらしい

試験後の帰路にて

明久がとんでもないミスをやらかしテストは終了ながらも残念な放課後へ向かえた

「のび太君、剛田君もお疲れさま」

「おう！」

「三上さんもお疲れ様！」

僕ら、いつもの三人で帰路へと歩いていた

「今回と前回の試験比べてみたら良くなってる感じ？」

「うーん、得意科目は伸びてると思うけど苦手な科目は微妙？かな」

「同じくだなー！」

それぞれの試験の手応えを話し合っていた。うん．．中々苦手な科目は伸びないものだね．．

「試験終わっても夏の補講があるんだよなー」

「主に明久らの原因もあるけどね」

「ああ．．言いたいことは分かったわ」

そう、その訳は合宿の時に男子が覗きをした事により授業が思うように進めなかったのだ

「でも、それをきちんと終わったら夏休みよね？」

「だなー！今年は海いくかー！のび太泳げるのかよ？」

「．．昔よりは泳げるようになってるさ．．」

「めっちゃ落ち込んでる!?!」

僕の落ち込みのように二人は慌てて慰めていた子だよ．．

そんな会話しながら僕らは楽しく帰宅していた。そういえば、明久はやはり世界史はダメだったみたいで、玲さんが残るの確定になったそう

三上さんらと別れて家へ帰ると僕はカレンダーを見ていた

「そういえば．．海いくならスネ夫も誘うか」

確か．．別荘あったと思うけどどうなんだろう？

「また聞いてみるか．．今年も夏がもうすぐ来るよ？ドラえもん．．」

数々の冒険の夏を思いだし、今ここにいない友人に向けて呟いた……。だが、彼はひとつ思いだした

「明久らが仮に参加したとして……問題起こさないかなー？」

一番の心配はそこだ。問題ないのが一番だが……明久たちだからな……

ため息をつきながら、僕は勉強を始めたのだ。一日でも早く約束を果たすために……僕は気合い入れ直した

同日にて……

「学園長。コレはなんですか？」

「そう非難がましい目をするんじゃないよ二人とも。ちよつとシステムの調整に失敗しただけじゃないか」

「これのどこが、ちよつとですか」

「ちよつと見てくれが悪いだけさね」

「ほほう。そうですか」

「ああそうさ」

「……」

辺りに沈黙が走り……

「……夏だねえ……」

「学園長、現実から目をそらさないでください」

「はいはい。分かってるよ。それじゃ、復旧作業を進めるから手の空いている教師を全員連れてきな」

「それは構いませんが、コレが生徒に発覚したらどうするつもりです？」

「どうもこうもないさね。さつきも言った通り、問題は見てくれだけだからね。ガキどもが騒ごうが、特に気にする必要はないさ」

「……と言うと？」

「なるようになる、つてだけさ」

「やれやれ……。これだから、この学校は……」

頭をかきながらも、切り替えて作業を始めた鉄人。いったい何があつたのか……

オカルト戦争 脱走とお仕置き

ジャイアン side

諸君、突然だが俺は夏が大好きだ。うだるような暑さも、耳をつんざく虫の自己主張も、校庭から聞こえてくる野球部の喧騒も、全てがこの季節を楽しむためのスパイスだ！

外に出て、この時期ならではの熱気を感じたい。賑やかな喧騒に少しだけ顔をしかめて、焦がすような日差し全身に浴びたい。止まらない汗を拭って、思いつきり体を動かしたいんだ!! それこそが夏という季節での、日中という時間帯の、正しい楽しみ方のハズだ! そう。今は夏という心踊る特別な季節だ!!

だから・・・

「逃げよう雄二、ジャイアン。この魂の牢獄から!」

「よく言っただけ、明久!」

「俺もこの鉄拳補習フルコースには飽き飽きしていたところだ!!」

——だから俺たちは、鉄人の補習からの脱走を決意したのだ!!

「(だいたい、夏休みに入っているのに授業があるってのが間違いないんだよな?)」

「(しかも、このクラスは九割近くが男子だ。勉強どころか息をするのもキツイんだよ)」

「(オマケに授業をやっているのが鉄人だもんね。冬でも暑苦しいくらいなのに、この環境で鉄人のビジュアルは拷問に等しいよ・・・)」
すると、坂本が姫路の方を見ていた

「(よくこんな状況で姫路は真面目にノートを取れるよな。アイツは化け物か?)」

「(のび太なんてきつきからぐったりしてるぞ。それにしても、流石姫路、実力Aクラスの優等生といったところか?)」

「(でも、姫路さん、身体が弱いのに大丈夫かな・・・。最近はず調子が良さそうだけど、やっぱり心配だよ)」

明久の言うこともわかるが、姫路には風通しのよい窓際の、柱の影というベストポジションが進呈されている

「(こまめな水分補給を忘れなければ大丈夫だろう。それにその辺は配慮されているさ)」

「(その辺は鉄人も気を遣っているから大丈夫だろ)」

だから俺たち三人は日当たり良好、風通し最悪の窓際最後尾ポジションなんだろう。差別しすぎじゃないか？

「(それで雄二、どうやって抜け出す。相手はあの鉄人なんだから、見つかつたら最悪の事態になるよ)」

「(なんだ、人を脱走に誘って何にも作戦を考えてないのかよ)」

「(考えてあつたらすぐに一人で実行してるよ)」

「(まあ、それもそうだな。どうしたもんか・・・)」

俺たちは小声で相談しながら鉄人の隙を窺う。もちろん、口が動いていることを気取られるようなミスはしない。腹話術のように口の動きを最小限に抑えているからだ。Fクラスで鉄人に目を付けられている男子生徒には必須の技術らしい

え？何でお前できるんだって？勘だよ！

「(ここで元の高さを h とした時、位置エネルギーが全て運動エネルギーに変換されたとすると、この時の速度 v は重力加速度 g と高さ h にのみ依存する式となり——)」

西村先生は教科書を読み上げながらも俺たちの方を向いている。今は動く時じゃない。下手に動きを見せたら即座に捕まってしまう。どうしたらいいだろうか・・・

「(おい吉井、坂本、剛田。逃げるのか?)」

「(逃げるのなら俺たちも一枚噛ませろ。こんな地獄には付き合いきれねえ)」

「(俺もだ。このままだったら確実に干からびて死んじゃう)」

すると、近くの席のクラスメイトたちが話しかけてきた。もちろん、顔は黒板を向いていて、口は会話をしているとは思えないほどに

小さくしか動かしていない。

このクラスで鉄人に目を付けられていないのは姫路と島田、のび太と俺くらいだ。他のクラスメイトは全員この技術を習得している

え？だからなんでお前はできるんだ?! って？ 何度も言わすな・・・
勘だ！

「(じゃあ、この人数なら全員で一斉に逃げるって作戦でどうかかな)」

「(人海戦術か。単純だが、確実な作戦だな・・・。よし。乗った)」

鬼は先生一人だけだ。俺達全員一斉に四方八方に逃げ出せば、西村先生は最初に明久を狙う習性があるから、明久から離れるように逃げればまず捕まらない！

「(みんなもそれでいいよね？ 誰が捕まっても恨みっこなしってことで。問題がなければ小さく領いてもらえる?)」

明久がそう言うのと、姫路、島田、秀吉、のび太以外の全員が一斉に領いた

あとは機を窺うのみだ

「——つまり、物体の落下速度というものはその物体の質量に依存しないということになる。だが、理論とは違って現実には空気抵抗というものがある。綿毛と鉄球が同様の速度で落下しないのはこの空気抵抗によるものが大きく、式に表すと——」

説明が佳境に至ったのか、鉄人が黒板へと向き直って板書を開始した。俺たちに背を向けたこのタイミング、逃すわけがない！俺たちは脱出の為に腰を浮かせて・・・「全員動くなあ!!」っ!?

その瞬間、先生に機先を制されてしまった。

バカな！読まれていただど!?

「貴様ら・・・。脱走とは良い度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

西村先生がゆつくりとこちらを振り返り、俺たちを睨み付ける

あっ・・・終わった・・・

「貴様ら・・・そうか。お前らがそこまで退屈しているとは気がつかなかった。これはつまらない授業をしてしまった俺の落ち度だな」

・・・あれ？まさかの西村先生が謝罪？

「詫びと言ってはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてやろう。…
姫路、島田、野比、木下は耳を塞げ」

面白い話？まあそれはありがたいが、なぜのび太達には耳を塞ぐように言うんだ？面白いなら全員に聞かせればいいじゃねえか？

「そう…あれは十年前だ」

!!?…今、俺の第六感が危険だといっている!!まさか!?

「俺がブラジルの留学生とレスリングをやっていたときのことだ」

『『ギヤああアあ——つ!!』』

まさかの嫌な予感が的中した!!耐性の低い連中は西村先生の暑苦しい言葉で精神をやられたみたいだ…。この灼熱の環境で鉄人のレスリング談義なんて、処刑と変わらない!

「相手は身長195cm、体重120kgの巨漢、ジヨリジーニョ・グ
ラシエーロ。腕の太さがウエストくらいはありそうな男だった。だ
が、俺とて負けはしない。188cm、97kgの鍛えに鍛えた肉体
でヤツと正面からぶつかり合い——」

『やめろっ!やめてくれえーっ!』

『脳が!脳が痛てえよ!!』

『ママアーツ!』

まるでガラガラと精神が崩壊する音が聞こえてくるかのようだ!
このままでは俺も危ない!!!

「しかし、ヤツはレスリングと柔道を勘違いしていた。腕ひしぎを仕
掛けてきたんだ。だがこの俺の自慢の上腕二頭筋には勝てるわけも
ない。汗にまみれ、血管を浮き上がらせながらも俺は腕を伸ばしきる
ことなく抵抗し続けた。すると向こうはすかさず俺の頭上にまわり、
その分厚い大胸筋で俺の顔を圧迫しつつ上四方固めを——」

『ぐあああああっ!い、嫌だ!目を閉じたくない!最悪のビジュアル
が瞼の裏に張り付いて離れない!』

『起きねえ！福村が起きねえよ！おい、しつかりしろよ！』

『空気を！新鮮で涼しい空気をくれ!!』

落ち着け！阿鼻叫喚の地獄絵図の中、俺は精神攻撃に耐えるために、脳内変換をしていた！

西村先生↓のび太

ジョルジーオ？↓スネ夫

脳内変換したのだが・・・あいつらはガタイも良くないから小さな戦いに感じるな・・・

「そして、制限時間いっぱいまで使った俺達の攻防は続き——ん？なんだお前ら。もうダウンか？」

気づけばクラスメイトは卓袱台に突っ伏して気を失っていた

「やれやれ、仕方がない。十分間だけ休憩を入れるとしよう。脱走なんてくだらないことを考えた自分を反省するように」

俺、剛田武は・・・二度と脱走しません。した場合は永久に補習を・・・

つと心の中でそれを思っていたのは秘密だ・・・耐えた事に今は喜びを噛み締めよう!!!!

鉄人の精神的攻撃のその後

西村先生の謎の話し合いにより、死屍累々の教室で、数少ない生存者たちの元を集まる僕ら

さて、耳防いでいた僕らには何があったのか全くわからないので、姫路が最初に質問した

「あの、明久君。何があったんですか？皆さんとても苦しそうなんですけど・・・」

「えーっと、なんていうか、言葉の体罰と言うか、精神攻撃を受けたというか・・・」

「まったく、どうせまたくだらないことでしょ」

「まあ、脱走したい気持ちは分かるけどね」

「お前なら分かってくれると思っただぞ!!心の友よ!」

ジャイアンが僕に思い切り背中を叩いてきた。あまりの力に背中が痛かった・・・

「そうは言うがな、島田。俺達の席は脱走を考えても仕方ないくらい酷いもんだぞ」

明久らの席は日当たり良好を通り越し過剰と言える。カーテンすらついてないこのクラスでは防ぐ手段もないから、本当につらいしね「そうなの？ウチの席はそこまで暑くないからよくわからないけど」

「私も風が入ってきてくれるので結構大丈夫です」

「俺達の席は日当たり最高で風通し最悪のワーストポジションだしな。本当に酷いぞ?」

ジャイアンがため息つきながら言っていた。ああ、彼らの言葉で例えを分かりやすく言うなら

「どのくらい酷いの?」

「二「明久の成績ぐらい（かな?）」」

「人間の耐えられるレベルじゃないわね」

「でも、確かにこの席は雄二の成績くらい酷いんだよ。さっきペンのアルミの部分に触ったら軽く火傷しちゃったしね」

あれ?然り気無く明久は雄二の成績を悪口言っていたね・・・

「火傷したの？どれどれ？」

「あ、いや。そこまで酷いものじゃないんだけど」

島田が明久の手を取るなんて、火傷の心配をしてやってるみたいだね

「なんじゃ島田。お主、随分と明久に優しいではないか」

「そうです。美波ちゃんは明久君に近すぎます！」

そんな二人の様子を見て、秀吉と姫路が言った。秀吉はからかい半分で、姫路は嫉妬なのかな？

「べ、別に、別にアキに優しいってワケじゃ……！ただ、怪我をしていたらウチが殴るときに手加減をしなくちゃいけないからってだけで……！」

怪我していても殴るのは殴るの!?!もう少し言葉を選べば明久の好感度だって上がっただろうに……

「でも、僕も美波は優しいと思うよ」

「え……？あ、アキまで何を言ってるのよ」

おっ？明久がそう言うのと島田が赤面となった。続きは何を言う!?

「面倒見がいいし、細かいところに気がつくし、妹想いだし。それに、動物に愛情を注ぐことができるし……」（ボソボソ）」

「アンタまだそれ誤解していたの!?!」

？明久がなんて言ったかは聞こえなかったが、島田の反応からしてロクなことじゃないだろうね

「聞きなさいアキーアンタは誤解しているけど、ウチはオラウータンになんか興味はなくて、本当にウチが好きなのは——」

「『好きなのは?』」

何故、島田が急にオラウータンとか言い出したのかはわからんが、とりあえずそれは放置。好きな人というF男子には重要な話題に、倒れていた奴等も含めて、教室中の視線が島田に集まった

「チンパンジーなのよっ!」

島田が衆目の前で大胆な発言をした。

「・・・嘘をつくにしても、もう少しマシな選択肢はなかったんだろうか？」

「そ、そうだったんだ。それは、その・・・誤解してて、ごめんね・・・信じた!?今のあからさまな嘘を信じたのか!?それは人としてどうな――」

「そ、そうよ・・・ウチは別にオラウータンが好きってわけじゃないんだから」

否定しない!?え?まさか本当にチンパンジーが好きなのか?こつちが間違ってたの?

「じゃがまあ、確かにこの席は暑いろう。お主らが脱走を企てるのも無理はないかもしれん」

「そういえば、秀吉はおとなしくしてたよな。脱走の話は聞こえなかったのか?」

「いや、聞こえてはおつたが・・・ワシの席はお主らの席よりも涼しいからの。微睡んでおつたら誘いに乗り遅れたのじゃ」

いくら明久達よりマシだとしてもこの暑さの中でよく居眠りができるな。それに、あの西村先生に居眠りがバレないというところがすごい!起きていると見せかけて眠るっていうのも演技力の賜物なのか?

「なんじゃ。ワシが脱走に乗らんのはまずかつたかの?」

「いや。まずくはないよ。ただ、いつも一緒にいるんでるバカ仲間としては、いないと寂しいなって思っただけで」

確かに、こういうことに関しては、明久、雄二、ムツツリー二、秀吉。この四人のバカ仲間以外は誘いにくい。どこか違う気がするからね――

「そうじゃったか・・・」

「嬉しそうだね?秀吉」

「うむ。正直なことを言えば、バカ仲間と言ってもらえるのは嬉しいぞい。最近のお主らはワシを女と見ておるように思えたからの。外見が姉上に似ておるといふ部分以外はどうでも良いのかと、少々気にしておつたところじゃ」

「秀吉もおかしいなところ気にしてるね」

「いや、最近のワシの扱いを鑑みれば決しておかしくはないと思うのじゃが？」

明久が笑い飛ばすと、秀吉は納得がいつてないようで口をとがらせた

「確かに秀吉は可愛いと思うけど、それだけでこうやって一緒にいるわけじゃないからね。一緒に遊んだり、勉強したりして、秀吉の自身の良いところを一杯知っているから、こうして一緒にいるんだよ」

明久の言う通り、見た目で友人を選ぶなんて、おかしいことだ。んん？でも、明久は秀吉を男扱いしてないよね？

「っ！」

「ん？どうしたの秀吉？」

「こ、こつちを見るでないっ」

そう言うと、何故か秀吉は隠れるようにこちら背を向けた。なんか気に触ること言ったのかな？

「ねえ、瑞希・・・木下ってずるいよね・・・女の子みたいに扱われているクセに、こういう時だけ異性を意識させないであんなこと言ってるんだもの」

「ですよね・・・私、頑張っているのが虚しくなってます」

「瑞希はまだいいわよ。ウチなんて、頑張った結果がチンパンジー好きの女子高生なんだから」

姫路と島田は溜め息混じりに何かを愚痴りあっていた。

あそこの空間が悲哀が満ちていて悲しいんだけど・・・

「んむ？ところで、ワシを女として見ておるといふ部分は否定されなかったような気がするのじゃが？」

「あはは。別にそんなことは口にしなくてもわかるでしょ？」

「何を何故明言を避けるのじゃ!? ええい！お主はワシを異性と思っておるのか、きつちり『はい』か『いいえ』で答えるのじゃ！」

「はエス」

「むう……。二つが混ざってどちらかわからんような返事——ではないぞい!? さてはお主ら、『はい』と『イエス』を混ぜおったな!? やはりワシを女と思っておるじやろー!」

「ところで雄二、ムツツリー二がかなり危険な状態に見えるんだけど」
「答えるまでもないと言わんばかりにスルーされておる!」

いつもなら休み時間には皆と一緒に集まるか、カメラをいじっているムツツリーは、今日はぴくりとも動かずじっとしている

「ムツツリー二の想像力は常人の比じゃないからな。さっきの恐ろしい話を聞いただけで鉄人とブラジル人の暑苦しいレスリングが脳内で鮮明な画像になって浮かび上がったんだろ」

「……それは」

「ひとたまりもないな……」

安らかに寝てね? ……ムツツリー二……

始まりは突然に・・・

ムツツリーニーの状態を聞いた僕らはとりあえず、そつとすることを決めたのだ。許してね？ムツツリーニー・・・

「にしても・・・暑いなー・・・」

「こんな環境だから仕方ないかもしれないけど・・・」

「汗が引かないなー」

「お陰で勉強する気が失せるよ」

「二」「明久のはいつもの事だ！」「二」

「皆酷いね!？」

明久は皆の言葉に涙こぼしていた。いや、いつもと言うのもおかしいのかもね？でもまあ、畳と卓袱台は結構気に入ってるが、今は暑苦しさを増すオプションに見えてしまう。夏が暑いのは当然だが、流石に限度がある

「なによアキ。アンタ、この間の期末試験はずいぶんとやる気があつたみたいなのに、今はもういつも通りに戻っちゃったの？」

「この前のは姉さんを撃退する為だったから例外だよ。元々あまり勉強は好きじゃないからね」

明久のテストの結果は散々だったため、玲さんは日本に住むことになつたらしい。今は引越しの準備のために一旦両親のところへ帰っているそうだ。お土産を買ってきてくれるらしいので楽しみだなー

「それに、この前の試験はもう一つ理由があつたからな」

明久と同じく、勉強する気に翳りを見せている雄二が言う

「もう一つの理由って、試験召喚獣の装備のリセットというお話ですか？」

「うん。僕や雄二の装備はめっちゃくちゃ弱いからね。新しい装備になればもつと強くなると思っただけど・・・」

「テストであんなミスをしたからねえー・・・」

「うう・・・せめて金属の武器が欲しい」

確かに木対金属じゃ圧倒的に不利だ

「そういえば、二人の武器は全科目80点アップで好きな武器を作ってもらえるんだよね?」

「もう武器も頼んできた」

「同じく」

「へえ、よかったじゃねえか。何を頼んできたんだ?」

「ふふ、新しい武器は『ジャンボ砲』って名前さ!」

「『名前からして不吉?!』」

失礼だなー。あつ、特徴能力改造したのは内緒にしよう

「まあ、あの結果では明久の装備は変わらんじやろうが、雄二はどのようなじゃ?おぬしは去年の振り分け試験からかなり点数が向上しておらんかったかの?」

僕の話が終えた後に、秀吉が雄二に聞く

「ん?···そういやそうだな。周りの連中の点数ばかり気にしてあまり自分の点数や装備を気にしてはいなかったな」

「雄二は指揮を取る立場だもんね。あまり自分が直接戦う場面を想定しないよね」

「ああ。俺の装備が向上するよりも周りの連中が強くなる方がよっぽど勝負がやりやすいからな」

自然にそんな考えが浮かぶんだ、雄二は根っからの指揮官肌なんだろうね。それを皮切りに皆も色々と結果報告をして伸びた者のいれば伸びなかったものもいた

「なあ、それならさ一度召喚獣しようぜ?」

「皆のがどう変わってるのか楽しみだし確認もできるじゃない?」

「そうだな。戦力の把握は試召戦争に必要不可欠だ。幸いにも西村先生もいることだし、召喚許可を貰って確認しよう」

「そうだね。すいませーん、西村先生?」

黒板近くのパイプ椅子に座りながら教室の様子を見ていた西村先生を呼ぶ。すると先生は怪訝そうな表情をしつつこちらにやってきた

「どうした吉井。お前が俺を呼ぶなんて珍しいな」

「すいません。ちよつと先生にお願いがあったもので」

「お願いだど？おかしなことじゃないだろうな」

「はい。ちよつと召喚許可を貰いたいただけなんです」

「(あれ？先生明らかに今厄介な事になったって顔していなかった？)」

「あー、いいか吉井。お前は監察処分者だ。人よりもずっと力があり、しかも物や人に触ることのできる召喚獣を持っている。そんな危険なもののみだりに呼び出すことは感心できんぞ。そんな余計なことを考えずに——」

いつもなら堂々と答える先生なのに、今日は歯切れが悪い。何かあるのかな？

「西村教諭。ワシらは別に悪巧みをしておるわけではないぞい」

「ただ、純粋に召喚獣の装備がどうなっているのかが気になるだけですよ？」

秀吉とジャイアンの助け船が入る。明久、雄二が何を言っても信用しないが、秀吉や僕やジャイアン、姫路や島田が言えば無視はできないはずだ

「いや、しかしだな、木下、剛田。試召戦争でもないのに召喚獣を呼び出すというのはあまり良いことではないぞ」

やはりこれは何か隠してるんだね……。先生は隠すのが良くも悪くも下手くそなんだ

「鉄人。何をそこまで隠している。俺たちの召喚獣に何か不具合でもあったのか？」

「いや、何でもないぞ坂本。それよりそろそろ休憩も終わりだ。席について次の授業の準備をするんだ」

鉄人って呼ばれたのに文句を言わないなんて、かなり稀な光景だ。この様子を見て姫路たちも様子がおかしいことに気がついたようだ

「西村先生。私たちの召喚獣に何かあったんですか？」

「ウチらの召喚獣なら物に触れないから呼び出してもいいですよね？」

「さて。授業を始めるぞ」

二人を無視して教壇に戻ろうとする。すると……

「こうなったら許可なんて要らねえよ、起動。明久!!」

雄二の呼び声に反応して白金の腕輪が起動する。白金の腕輪の機能は召喚フィールドの作成。つまり、教師の許可なしで召喚ができるようになる

「OK！試獣召喚《サモン》!!」

学ランに木刀をで身を固めた召喚獣が出てくるのだが――

「あれ？なんだか僕の召喚獣が・・・？」

「おいおい、明久のクセになんだか妙に贅沢な装備になったな。これは甲冑か」

「剣まで持ってるわね。今までとは全然違うじゃない」

「それに、随分と背が高くないですか？」

現れた明久の召喚獣は、白銀の甲冑に身を包み、一振りの大剣を携えた騎士だった

「明久の癖に豪華なんて生意気だ」

「確かに・・・」

「それどう言うこと!？」

「二事実だろ？」

雄二とジャイアンさんが口揃えると明久は落ち込んでいた

「しかし、なんだか明久の召喚獣はかなり強そうに見えるね」

「いやはや、こいつは凄いな。試召喚戦争が本物の戦争みたいになりそうじゃないか」

「そうじゃな。コレならば本物の人間とさして変わらんからの」

今までと違い、今回の召喚獣は俺たち自身が武器を持っているみたいだ

「顔も明久君そっくりですね。今までの可愛い感じと違って、今度のは凛々しいです」

「え？そ、そう？」

「姫路も酔狂なヤツだな。こんなブサイクのどこがいいんだか」

「あ痛っ」

パコン、と雄二が明久の召喚獣の頭を小突く。すると、叩かれた頭は首から離れ、ゆっくりと重力に従って畳の上に落下した

「『』……『』」

絶句する僕らの前を、胴体から離れた召喚獣の首が静かに横切る。生首は何度も畳の上で回転すると、近くの卓袱台の脚にぶつかり、こちらを見た状態で動きを止めた

……え？

「き、きやあああー!!?」

島田と姫路の悲鳴が教室に響いていた……

こ、これは……!?

言葉はきちんと選ばう！

僕らは今日の前の状況に戸惑っていた何故なら……

「ええー?!?! つちよ!?! 僕の首があああ!!?!」

「明久の召喚獣がいきなりお茶の間にはお見せできない姿になってい
るんだけど!?!」

「何てこったー!?! 坂本が明久の首をはねたー!?!」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないか?!?! 軽く叩いたのにこうなると
は……」

そう、雄二が明久の召喚獣の頭を叩くと首が飛んだのだ……

「それはそうと、いくら明久の点数が無いに等しいくらいだからと
言って、登場と同時に戦闘不能にならなくてもいいだろ」

「え? コレってそういうことなの?」

確かに明久は記入ミスで無得点扱いだったが、そのせいでこんなこ
とになってるのか?

総合科目

Fクラス

吉井明久 1053点

点数はしっかりとあるようだし、雄二の説は間違いのようだ

「明久よ。どうやらお主の召喚獣は首は外れるものの、戦闘不能とい
うわけではなさそうじゃぞ」

「うん。そうみたいだね」

秀吉の言う通り、頭が外れてしまっても動くようで、明久の指示に
従い、手を動かしていた首の着脱が可能な召喚獣なの?

「この状態が何でなのか分かるよな? 鉄人」

「……」

雄二がわざとらしく目を背けている先生に問いかける。諦めたよ
うに大きく溜め息をつくとき、西村先生は訥々と説明を始めた

「・・・俺にはよくわからんが、今呼び出される召喚獣は化け物の類いか何かになつていているという話だ」

「お化け、ですか？」

首が外れる化け物つていえば、騎士の格好もしていることだし、明久の召喚獣はデュラハンあたりかな？

「お前らも知つての通り、試験召喚システムは科学技術だけで成り立ってるわけではない。幾ばくかの偶然やオカルト的な要素も含まれているんだ」

「???つまり、どういうことですか？」

明久が理解してないからフオローするか・

「要するにー」「調整が失敗してしまったんだろ？」ー雄二言い過ぎ！」

「身も蓋もない言い方をするな」

雄二の言葉に西村先生が仏頂面で答えた。確かに、前からシステムの調子が悪いとか言っていたが、こんなことになってたのだね

「明久の召喚獣を見る限り、どうやら調整はオカルトの部分が色濃く出たようだな。これはこれで面白いけどね」

「確かに、オカルトは妖怪だよな？」

「けど、僕の召喚獣はどうしてデュラハンなんだろう？お化けなら、海の妖狐みたいなのに、日本の妖怪とかもいっぱいいるはずなのに」

「学園長の話を聞く限りでは、どうも召喚者の特徴や本質から呼び出される妖怪が決定されるらしい」

腕組みしながら先生が説明するなるほど、だから明久の召喚獣はデュラハンなのだね

「特徴や本質ですか？そうになるとデュラハンが選ばれたっていうのは、僕の騎士道精神が召喚獣に影響を与えたからってことですね」

「明久。現実から目を背けるな」

「雄二の言う通りだぞ」

「え？違うの？そうになると他に考えられるのは、甲冑の似合う男らしさとか、大剣を振るう力強さとか・・・」

「明久のは《頭がない》ってことだ（よ）」

「言ったあー！僕が必死に目を逸らしていた事実を三人が包み隠さずに言ったあー！」

「事実だ（よ）」

「鉄人まで同調?!泣きたい!!」

だって、事実だもん

「でも、明久君の召喚獣は以前よりも強そうに見えますね」

「そうね」

「以前とは違い、武器も金属のようじゃし、鎧もつけておる」

見た目はね・・・

「でも問題もあるぞ？明久」

「?どういう事？ジャイアン」

「その取り外しができる頭が問題だろ？考えてみる。戦っている最中に頭が取れたらどうなる？」

「・・・頭を確実に狙われるね」

そう、そうなれば確実に片手で頭を抱えながら戦わなければいけない

僕らがそうやって騒いでると、ようやく鉄人の悪夢から目覚めたクラスメイトが数人こちらにやって来た

「さつきからなんか面白そうなことをやってるな」

「これ召喚獣か？特徴や本質がどうか言ってなかったか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか」

明久も君らには言われたくないと思うよ

「そう言うならそつちも呼び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣がでてくるからさ」

明久がそういうと、三人は揃って口の端を歪めて嫌な笑みを顔に浮かべた

「おいおい吉井。そんなこと言っていないのか？」

「俺たちの召喚獣がバカ日本一のお前に負けるわけないだろ」

「俺の本質はなんといってもジェントルマンだからな。酷い召喚獣なんか出てくる訳がない。いいか、見てろよ——」

「『試獣召喚《サモン》！』」

彼らが召喚して出てきたのはー

……ズズズズ

→

ゾンビ登場（×3）

「やっぱりゾンビか!？」

「はうううう……こ、怖いです!」

「あ、あんた達! その汚いものを早くしまいなさいよっ!」

本質を汚いと言われた三人は互いの肩を抱き合って泣いている

「しかしまあ、これはこれで面白いもんだな。秀吉はどんな召喚獣なんだ?」

「んむ? ワシか? そうじゃな……ワシの特徴と言えばやはり演劇じゃからな。妖怪ではないが、舞台で有名なオペラ座の怪人あたりが妥当じゃろうか? ……試獣召喚《サモン》!」

……ポンツ

→

猫又登場

「猫又か」

「秀吉の本質は」

「可愛いということだね」

「つ、ついにワシは召喚システムにまでそんな扱いを……」

僕、ジャイアン、明久と言う順番で評価すると秀吉は落ち込んでいた

「わ、私だって負けません!! 見ててください! 試獣召喚《サモン》!!」

……ポンツ

→

サキユバス登場

「きゃあああーっ!?! あ、明久君っ! 見ないで下さいっ!」

「くぺっ!?!」

「『明久の首があああ!?!』」

姫路によって明久の首が180度くらい回された。明久、本体の首まで取れるちまうんじゃないかな？

「そこまで露出が多いわけでもないのに、随分と大きさが強調されているもんだな」

「と、とにかく上着を!!あうっ!通り抜けちゃいます・・・」

「・・・倒れてる場合か・・・!立つんだ!明久!」

そしていつの間にか明久の横では康太が顔を鮮血に染めながら必死にカメラを構えつつ、明久に予備のカメラを渡していた

「召喚獣を隠したいなら俺から離れる?フィールドの有効範囲から出たら自然に消えるぞ」

「そうします!!」

そういうと急いで出ていくと姫路の召喚獣は消えた

「はうう、は、恥ずかしかったです・・・」

「姫路の本質がそれに出たんだろうな?」

「わ、私の本質って・・・」

姫路が不安げに表情を曇らせつつ、俺たちを見る。これは・・・答えにくい・・・

「胸がデカいってことだろ」

「うわあああんっ!」

流石雄二!僕らじゃ言えなかったことを平然と言った!

「そ、そんなことないですっ!確かに私は全体的にちよつと太ってますけど、特徴になるほど大きくなると全然ないです!」

「よすんだ姫路さん!それ以上言えば特定のだれかを傷つけることにあれ?急に視界が暗くなったような?」

「アキ、言い残しあるなら今のうちに言いなさい」

「島田!?!明久の命が危ないからそれは駄目!」

「えっ?あ、ごめん!アキ!!」

「うううう・・・翔子ちゃんにいつけますう・・・」

「!?!悪かった!!俺の発言が悪かったから翔子は呼ぶなあああ!!」

なんか状況がおかしくなってきた・・・とりあえず話を戻そう!

「外見の特徴はおいておくとして、あと他に考えられる特徴は『大胆』

とかじやないかな？なんせサキユバスだからね」

「大胆ですか？」

「思い当たる節沢山あるのじゃないか？」

「・・・はう!？」

姫路は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに俯いた。結構仕掛けてるらしいのに姫路の気持ちに気づかないなんて、明久はどこまで鈍いんだろう？

「ふふっ。瑞希ってば、可哀想に。そんな大きな胸をしているからあんな格好の召喚獣が出てきちゃうのよ」

「美波ちゃん酷いですう・・・」

「でもその点、ウチなら何の心配もないから大丈夫よ。きつとそういうエツチなのじゃなくて、妖精とか女神とか戦乙女とか、そういうた可愛いのが出てくるはずだから」

・・・破壊神とかないよね？

「見てなさい——試獣召喚っ！《サモン》」

ゴゴゴゴゴ

→

ぬりかべ登場

「「「「・・・」」」」

「ねえ、アキ」

「な、なにかな美波」

僕らに背を向けたまま話しかけてくる島田が怖い。他の化け物なんて目じやないくらいに・・・

「この召喚獣、ウチに何を言いたいのかしらね？」

「な、なんだろうね？」

明久から助けを求めるような視線が向けられたが、なんて言ったらいいかわからないし、目を逸らす

「そ、そうだっ！きつと、美波とぬりかべは硬いつてところが似ていて・・・」

——明久なら、間違はなく地雷を踏むだろう

「へえ、ウチが硬いって、どこがかしら？」

島田がそう言うのと、明久は決心したような顔になり言った

「うん！きつとね・・・胸が硬いとあがあっ！そ、そうだっ！拳だよ！
美波は拳も硬かったんぎやあああっ！」

こうして明久は星になった・・・

逃げるときはどさくさ紛れにいいこう！

「なあ？ムツツリーニーと俺とのび太はどんなのだろうな？」

明久がこれ以上他の人には見せれない惨状になっていたので、ジャイアンが話題を変えたのだ

「僕やジャイアンのは何が出るんだろう？」

「さあ？ムツツリーニーはなんか想像できる」

「・・・何？」

「血が好きな化け物とか？」

「・・・そんなの絶対じゃない・・・！」

ムツツリーニーが首を横に振りながら否定していた。どうなんだろう？

「まあ、何が出てても驚かないぞ？」

「うん！そうだね」

さてと・・・

「いくよ！ジャイアン！ムツツリーニー！」

「おう!!」

「・・・(グッ!)」

「『試獣召喚《サモン》!』」

スウン・・・

→

見た目は魔導師みたいに黒のローブを見に纏い服装は全体的に黒

スウン・・・

→

ムキムキのゴリラが出てきた

スウン・・・

→

ヴァンパイア登場

「『なんか濃いのが出てきた!!』」

僕らが召喚したのを見ていつの間にか復活していた明久も含む皆

が口揃えて言った

「のび太のは・・・某魔法少女の黒の魔導師の姿ににているな？」

「違うのは武器がないのと服装がマントはためかせている感じ？」

「うむむ？なぜこうなったんじゃ？相違点がわからぬのう・・・」

僕のはなぜか武器が今は出ていなかった。戦いになったら出てくる仕組みなのかな？

「で、ジャイアンのは・・・」

「ゴリラか・・・しかもD○か・・・」

「なんかシユールすぎる。一体何処が似てるんだ？」

ジャイアンの質問に僕は答えれなかった。それに・・・い、言えない！もし、口だしたら確実に島田よりも恐ろしい目が見えてくるから全員しゃべらない・・・

「む、ムツツリーニーのはヴァンパイアか」

「いつも血を欲してるイメージがあるからな」

「若い女が好きという点も酷似しておるしの」

ムツツリーニーにはぴったりだと思ふ

「坂本のは一体なんなの？」

「あつ、そういうや確認していなかったな。それじゃ、このままだと俺の召喚獣は呼べないからフィールドをOFFにして鉄人に許可をもらうか。鉄人も今さら文句を言わないだろう」

雄二が召喚準備をしている間に何が出てくるのか予想をたてることにした

「雄二はワシらとは違い攻撃的な性格じゃからの。きっと戦闘向きの妖怪が出るやもしれんのう」

「野性的な妖怪か？」

「野性的なつて何？」

「・・・さあ？」

そうしてる間に雄二は準備万端になった

「そんじゃいくぞ・・・？試獣召喚《サモン》！」

僕らの勝手な装備予想を受けつつ、雄二の呼び声に応じて召喚された召喚獣

その装備は――

「手ぶらかよっ!」

――鍛え上げられ、筋肉に覆われた肉体。残念ながら武器はない……

「装備がない上に」

「上半身裸か……ついに極めたな?坂本」

「おい!?何を俺は極めたのだ!?!」

「しかも何の特徴もなく雄二そのものが出てきおったな。これでは服装以外雄二と区別がつかん」

「ちよ、ちよつと目のやり場に困りますね……//」

上半身裸なら、女子からしたらそう思うのも無理はないかもしれない

「雄二……取り合えずその見る人全てを不幸にする召喚獣を早くしまつてよ……」

「わかっている。こんなもん、俺だつて見たくもない」

しまうまえに霧島さんに見せてあげたいよ

「じゃが、雄二の召喚獣は結局何の妖怪なのじゃ?」

「これじゃさっぱりだよね……なんだろう?」

「双子?」

「……ドツペルゲンガーとか?」

「4人とも何を言っているのさ。これは最近日本で確認された新種の妖怪「坂本雄二」じゃないか。醜い容姿と汚い性格で美人の幼馴染みを騙すつて話の」

あつ、明久言い過ぎだよ!

「明久。召喚獣を呼び出せ」

「ん?別にいいけど。試獣召喚(サモン)」

「目指せワールドカップ!!頑張れ日本!」

召喚された明久の召喚獣の頭を外すと、ボールよろしくすぐさまゴミ箱に向かって蹴り込んだ

「あがあっ！蹴ったね雄二!?僕の召喚獣の首をサッカーボール見立ててゴミ箱に蹴り込んだね!?なんてことしてくれるのさ!」

「そう怒るな明久。よく言うだろう。友達にボールだ”って」

「それを言うなら『ボールは友達』じゃないの!?前後の順番を入れ替えたらただの苛めの現場だよ!」

「そもそも俺はお前を友達だと認めてはいないがな」

「だったら蹴るな!」

少し恒例の二人の漫才をしたのだ。相変わらずの見事な息の合い
よしの漫才だなー

「んむ?雄二。お主の召喚獣の様子が変わじゃぞ?」

「お?本当だな。何が起きるんだ?」

雄二の召喚獣がブルブルと身震いをし始めた。その瞬間、口が大きく裂け、全身から物凄い勢いで毛が生えてきた

「ええええ!」

「きやあああー!」

「・・・狼男」

僕はすぐに落ち着いて分析した

「坂本の特徴の一つであるたてがみのように逆立っている髪の毛が野生味があるということか?」

「つまり、雄二の特徴は野生ということ?」

「で、でも、満月でもないのに変身なんておかしくないですか?」

雄二の召喚獣を怖がっているのか、明久の袖を掴んでいる

「まあ変身したタイミングからして明久の召喚獣の首がボールに見えるたのかな?」

「恐ろくな。それと、この召喚獣はきちんと次の試召戦争までには直るのか?」

「こんなのでクラス間の勝負なんてやったら妖怪大戦争になっちゃうよ」

「そ、それは困ります……。怖いのも困りますし、私の召喚獣は恥ずかしいですし……」

姫路が呟くように言う。確かにあの召喚獣は恥ずかしいだろう

「召喚システムの調整については俺にもよくわからん。学園長なら何か知ってるかもしれないけれど、現にこのような感じで調整に失敗してるからね。それに先生からの言い方からして教師側にとっても好ましくないみたいだね」

「確かにその辺は鉄人よりもババアに聞いた方が良さそうだな。なんたって召喚システムの開発者だからな」

「そうだね。学園長に聞いてみようか」

雄二と明久が立ち上がり、教室を出ていった。その数十秒後に鉄人が何かを思い出したように教室を飛び出した

「キサマらっ！ドサクサに紛れて脱走か！」

「しまった雄二！気づかれたよ！」

「走れ明久！学園長室に逃げ込めばこっちのもんだ！」

西村先生の怒号と明久たちの叫び声が聞こえた……。逃げ切れるのかな？

先生がいらないから皆でとりあえず怒られたくないから勉強をし始めた……。二人とも失礼のないようにね……

敬語使えるようになるう！

西村先生が明久らを追いかけたいため、教える先生がいらないから皆はだらーとしていた

「暇だ〜」

「暇だねー……」

僕とジャイアンは穏やかな風が吹いてる窓の方に持たれながらぐったりしていた

「明久たちは逃げ切れたと思う？」

「さあなーってか？あいつらがきちんと学園長に敬語使えると思うか？」

「……」

ジャイアンがいった言葉に僕は彼らが敬語使うかと想像してみたのだ。

「絶対にあいつらは敬語使わない。……はあ……」

そう思うときが重くなってきた……。本当に失礼のない対応してほしい

さて……そんな彼らはというと……

明久 side

「んで、どうなんだ学え——ババア」

「教えてください、学え——ババア」

「……どうしてアンタたちはアタシを素直に学園長と呼べないのかねえ……」

僕らの言葉に学園長が呆れたように溜め息をついた。何で？

「すいません。学園長」

「はンツ。今更言い直しても教えてやるもんかい。このクソガキどもが」

「そんな!?酷いですよババア長!」

いくら何でも言つて良いことと悪いことはあるよ!?教えてくださーいよー!

「で、正直なところどうなんです。きちんと復旧するんですか？」

「はあ？復旧？何を言ってるんだいボウズども。それだとまるで召喚システムに欠陥があるみたいじゃないか」

あれ？僕がそういうとバカにされたような目で見られた

「だって、まるで何も、見るからに調整失敗しているじゃないですか？」

「いいや、違うね」

通販番組の外国人のように首を振る学園長。違うってどういうことだろ？

「アレはちよつとした遊び心さ」

「遊び心？どういうことですか？」

「今は夏だからねえ。肝試しにはもってこいの季節だろう？」

「は？ど、どういうことですか？」

「つまり、ババアは肝試しの季節に合わせて召喚獣も妖怪仕様にカスタマイズしたと言いたいのか？」

「そうさ。あれは夏休みでも登校する可愛い生徒たちへの、アタシからのささやかなプレゼントさ」

??と混乱していた僕に見かねた雄二が教えてくれた

「あのな？……ここでババアに『実は調整失敗だった』なんて言わせたところでメリツトはないだろ。それより、学園長のありがたい心遣いに甘えさせてもらおうぜ」

「つまり、さっき言っていた肝試しを召喚獣を使うってこと？」

「そうだ。学園長もそれを考えた上でプレゼントって言ってるんだろ？俺たちに召喚獣の異変が伝わった以上は、世間体を考えると学園側も何もしないわけにはいかないだろうしな」

雄二が学園長に視線を送ると、学園長は小さく嘆息して頷いた

「やれやれ、本当にアンタはこういうことにだけは頭が回るねえ……」
「つまり、試験的なシステムとして運営している以上、学園側は召喚システムの調整を失敗したとは言いたくないってことだ」

「??」

「もつとわかりやすくいえば、隠しきれぬならそれで良かったんだが、

生徒にバレた以上はそうもいかないってことだ」

「なるほどーだから肝試しをやることで『元から計画していた出来事』にしようってわけだね?」

「じゃあ、そういうことで残りの二日の補習期間は肝試しってことでいいんだよな?」

雄二が嬉しそうに学園長に問う。相変わらず悪い性格してるなあ……

「いいや、ただの肝試しなら却下さね。あくまで召喚獣は学習意欲向上の為のツールだからね。見た目だけで楽しむのは授業の一環とは認めないよ」

「それならチェックポイントでも作って、そこで勝負でもさせるか。それなら文句はないだろう?」

「そうさねえ……。ルール次第だけど、それなら認めていいかもしれないね」

「よし。決まりだな」

こうして、学園と試験召喚システムを使った一風変わった肝試しが行われることになった

こういうのって大抵なにか起こりそう……

嫉妬はだめだよ？

翌日、文月学園の校舎3Fは肝試しの為の改装作業で大いに賑わっていた

『おーい！誰かその釘をとってくれー！』

『暗幕足りないぞ！体育館からひっぺがしてこい！』

『ねえ、ここの装飾って涸れ井戸だけでいいのー？』

「これはまた凄い光景じゃのう・・・」

「坂本が西村先生の補習をサボる為に本気で手を回してやがったからなー」

「本当にこういふときの悪知恵がすごいよ・・・」

今いるAクラスの教室も含め、肝試しに使う教室はA～F、二学年全教室だ。折角やるなら、広さがあり涼しさを演出できる教室を、という理由で他クラスも使うことを明久が提案したのだが、まさか本当に教室を使えるとは・・・恐ろしい

「まあ私たちも同じ歳の高校生だし、勉強ばかりでは息が詰まるわ。それに、期末試験も終わったばかりだし、渡りに船って感じよー」

「そりゃそっか。遊びより勉強が好きな高校生なんてそうそういないよね」

「まあ世の中にはいろんなヤツがいるからな。もしかしたらそういうヤツもいるかもしれないぞ」

「確かにそれはあり得そう」

「わ、私はできれば、肝試しよりお勉強の方が・・・」

隣にいる姫路とかそういうパターンだね。すると、ジヤイアンが僕に思い出した様に聞いてきた

「しかし、お前も大丈夫なのか？肝試し駄目だっただろ？」

「え？のび太君はそういうの駄目なの？」

「あつ三上さん。否定はしないけど。今は大丈夫なはず」

「そ、そう？（うう、私も本当は怖いのが苦手だけど、こういうのは楽しまないとー）」

そういえば、僕は様々な冒険していて危ないこともたくさんしてい

たなー。．．．あれ？よく考えたら宇宙で戦ったりもしてるから、宇宙での怖さの感覚だけ麻痺してる？

「きやああああつ！」

「いやああああつ！」

「みぎやあああつ！」

突如、明久、島田、姫路の叫び声が。ビツクリした。目を向けると、島田が明久に抱きついていて。何があつたんだ？

「ご、ごめん美波．．．冗談だから、離れてくれないかな．．．？」

明久がいびつに微笑みながら島田に言う。なんか辛そうだが、島田がまたダメージを与えているんだろう

「う、うそ．．．！だって、ウチには聞こえてくるもの．．．！『呪います、殺します』って．．．！」

ああ、それは．．．

「吉井明久．．．！お姉様と抱き合うなんて、どこまでも憎らしい男です．．．！呪います．．．！殺します．．．！」

清水さんが影で殺気だしながら睨んでいた。明久が島田に抱き着かれているのが呪い殺したいほど妬ましいのだろうね

「はあ．．．美春」

「はい！美子お姉様!!」

三上さんに呼ばれて清水さんが此方に駆け寄ってきた。速い．．．いくら好きな人取られたからってそういうのは駄目よ？」

「で、ですが．．．」

「やりすぎは嫌われるからきちんと気を付けなさい」

「はいです．．．」

三上さんが優しくお説教していると清水さんは反省をしていた。きちんと人の話は聞いてくれるいい子なんだけどな．．．

「あつ、美春？少しだけ私とのび太君と剛田君は席はずすね？」

「？何故ですか？」

「西村先生にこの紙を渡さないといけないんだ」

「何故でお兄様やお姉様が？」

「ふっ・・・明久や坂本が行つてもあいつら学園でマークされてるからな。それに奴らが何かやらかしたりする危険があるから大事な資料を二人に任せて行つてもらうことになった」

「なるほど・・・。あれ？ですが何故あなたも？」

「ふっ・・・俺は反省文の提出だ。はぁ・・・」

「すごく悲哀が出てますね・・・美春も流石に同情します」

そう。この間の脱走たくらんでいたメンバーは全員今週一杯に出すようにと言いつけられている

「美春もやり過ぎないように気を付けてね？」

「作業抜けるけど頼める？」

「勿論です！美春が3人の分までやります!!」

「じゃあ悪いけど抜けるな？」

後の事を清水さん達に任せて僕らは、西村先生に大事な資料とジャイアンの提出も済ませたのだ。尚、ジャイアンは西村先生の軽いお説教プラス拳骨もついでに喰らっていた

「今さらだけど明久達がきちんと提出すると思えない。しても、拳骨食らう未来しか見えない・・・」

「そうね」

「確かに・・・」

「「はぁ・・・」」

ため息つきながら大丈夫かなーと思いつつも、僕らは教室に帰った。彼らは本当に大丈夫かな・・・

なぜ敬語を使う!?

「僕らは西村先生に大事な資料とかジャイアンは反省文の提出もし終えて教室に帰ると・・・」

『パス行くぞー。おらあつ!』

「あがあ」

『ナイスパース。くたばれクソ野郎が・・・!どりやあつ!』

「ふぎやあ」

『オツケー!シュートおつ!』

「うぐあつ」

「明久の召喚獣の頭でゾンビがサッカーをしていた。・・・つていや何してるの!?!」

「作業サボって・・・とめー」『待つんだ。それ以上吉井くんを苛めるなら、僕が相手になろう』代わりに誰かが言ったね」

「僕が止めようとする」と明久の援護に学年次席の久保利光が現れる

「ありがとう久保君!助かるよ!」

『気にしないでいいよ吉井君。君のことは僕が守るよ——いつまでも』

「・・・あの噂はやっぱり本当なのか?」

「・・・」

「ジャイアンの言葉になんとも言えない僕らだった・・・。いつになく鳥肌がたったのはここだけの話だ」

『Aクラスの久保君・・・でしたか?美春たちの邪魔をしないで下さい』
『そうはいかないよ清水さん、Fクラスの皆。君たちが束になってこようとも、僕は一步も譲らない。守るべきものが、ここにあるのだから!』

『上等です!それならその豚野郎と一緒に葬り去ってやります。—

—試獣召喚つ!《サモン》』

『僕は負けない!そう。僕が今まで勉強を頑張ってきたのは、きつとこういう時に吉井君を守るためなんだ——試獣召喚つ!《サモン》』

「何やってるの!?!僕だけじゃなく三上さん達も頭を抱えていた」

そうしてる間に現れたのは藁とボロ布を着ている清水さんと、同じ藁とボロ布を着ている久保君。みすばらしい格好だがあれってなんの妖怪だ？

「二人はあれが何なのかわかるの？」

「迷い神？」

「正確には迷ひ神だったような気がするわ・・・」

えーと、たしか・・・

「人を迷わせる妖怪だったかな？なんか、道に迷って果てた人の魂が道連れを探してるとか、そんなだったはず？」

「人の道に迷った人達で、仲間に引きずり込もうとする人達と言うことね・・・」

「・・・あれをみてなんとも言えねえな・・・」

「「はあ・・・」」

まあ恋愛は個人の自由だから、なんとも言えないけども・・・

『ええい！全員一斉に久保利光にかかるのです！』

『『おおーっ！』』

『来るなら来いっ！僕は絶対に負けない！』

そして、清水さんの指示により、ゾンビ&迷ひ神 VS 迷ひ神の戦いが始まる

生首を抱えているゾンビの群れに迷ひ神が襲いかかり、向こうも対抗して腐った身体で引っ掻きや噛みつきを繰り返して来る。飛び散る腐肉。宙を舞う生首。弾け飛ぶ四肢

「「きやあああああーっ！」」

そのあまりに凄惨な光景に、三上さんや姫路、島田はもとより、クラスにいた他のヤツら（僕やジャイアンは辛うじて冷静だった）も悲鳴を上げていた

『こ、こっちに来ないで！試獣召喚！《サモン》』

『大丈夫かミホ!?畜生、俺の彼女をよくもビビらせてくれたな!?試獣召喚っ！《サモン》』

『彼女だと・・・?今コイツ彼女って言ったぞ！裏切り者だ!』

『『K i l l e r ！』』』

あつという間に広がる混乱の輪。阿鼻叫喚の妖怪大戦場で、眺めていた僕らはというと・・・

・・・ブチッ

「『いい加減に・・・しろー（しなさい）!!』」

「『!!』」

流石にここまでしたら怒って止めるしかないよね・・・

「美春・・・」

「は・・・はいいい。な、何でしょうか・・・美子お姉様?」

「私は言ったよね?後の事を任せるわね?って」

「は、はい・・・(ガタガタ)」

「それなら何でこうなってるのかなあ・・・?」

「そ、それはそのう・・・」

「少し向こうでお話しましょう?」

そっとういながら三上さんは清水さんを引きずって窓の付近に連れていってお説教した

「久保は止める側だったから、向こう行っていいぞ」

「わかった・・・(折角吉井くんに格好いい姿見せれると思ったのに・・・)」

「今、手を空いてる奴は俺と一緒に作業を進めようぜ?・・・西村先生にこの騒ぎで怒られたくなかったら直ぐに手伝ってくれ」

「『了解ですー!』」

ジャイアンは他のクラスの人達と共に遅れている作業を始めたのだ。西村先生の名前出たら皆は慌てて、動いた

さてさて、僕らというと・・・

「『・・・(ガタガタ)』」

「・・・」

「『(ガタガタ)』」

さつきまで騒いでいたFクラスの男子を正座させていた

「ねえ・・・」

「『はっ、はい!!何でしょうか!?!』」

「可笑しいよね?きちんと作業して進めているかと思っただらこうなってるのは何故かな?」

「「「えっと、それはそのうー」」」

「大方明久が何かをしたのかもしれないけど……君達は我慢すること出来ないのかな?」

「「「ボス!異議あり!」」」

「誰がボスなのさ!?!何?」

「「「我々は正義のために吉井を裁こうとしてました!よって、私達は無罪です!」」」

「却下」

「「「即答!」」」

彼らのめちやくちやな言い分はあると思うので、その意見は却下

「この際だからまず、言うけど嫉妬は見苦しいよ?」

「「「何故です!?!フアラオ!」」」

「誰がエジプトの王様さ……。あのね?君達はその過激な行いしすぎたら振り向いてくれないよ?」

「「「!?!ど、どういうことですか!?!閻魔様!」」」

「地獄の閻魔様に謝ってきな。今すぐ!って違う違う……。逆に聞くよ?君たちに恋人がいるとします。その行いで恋人は喜ぶと思う?そんなことで」

「「「!!そ、そうかー!」」」

「限度つてのはあるから気を付けてね?」

「「「わかりました!!野比のび太様!」」」

「いや!?!様は要らないからね?!あとなんでフルネーム!?!」

「「我々はこれからはやり過ぎないようにお仕置きします!（そして、二度と野比のび太に逆らってはいけないブラックリストにいれよう!）」」」

分かってくれたからいいけど……。最後なんか不愉快な事言われた気がするけど……。?後、土下座しなくっていいよ!?!

そう思ってるとー

「「「お前らうるさいんだよ!」」」

なんか、クレームが来たな・・・

暴露と女の怒り

僕らがそれぞれにお説教しているときに――

「お前らうるさいよ!!」

なんかクレームがきた……。あれどつかで見たことがあるよう気が……

「騒がしいと思ったらやっぱりまたお前か!吉井!」

「お前はつくづく目障りなヤツだな……。!」

「変た――変態先輩でしたっけ?」

「おい!?今言い直そうとしたくせに俺たちの顔を確認して言い直すのをやめなかつたか!」

「お前俺たちを心の底から変態だと思ってるだろ!常村と夏川だ!いい加減名前くらい覚えろ!」

それが明久。でも……。あの夏川って人に関してまだ許してないのよね……

「それで常夏先輩。どうしたんですか?」

明久の召喚獣が持っていたロッカーを下ろしながら聞く

「テメェ!?個人を覚えられないからってまとむやがったな!!」

「さすがはあの吉井明久だ。脳の要領が小さすぎるぜ」

「つていうかお前らうるせえんだよ!俺たちへの当てつけかコラ!」

「夏期講習に集中できねえだろうが!」

常夏コンビと一緒にいた他の三年生も「そうだそうだ」と騒ぎ立てる

へえ……。そこまでいちやもんつけるんだ

「すいません。上の階まで響いてるとは――」

「随分とひどい言い方するな?先輩方」

「ジャイアンの意見に同感。ねえ……。先輩方?」

「え?ジャイアンに、のび太。言いがかりってどういうこと?」

「どういうことも何も、俺たちは騒がしかったかもしれないが、これだつてれっきとした試験召喚獣を使った勉強の一つだぞ?学園長の

お墨付きな訳だしな」

これも試験召喚獣を使った催し物だ。これを否定するのは試召戦争も、この学園のシステム自体も否定することになる。第一、学園長のお墨付きがある以上、頭ごなしに否定される謂れはない

「それにここは新校舎だよ？古くてボロい旧校舎ならともかく、新校舎は試召戦争なんて騒ぎを前提として作られた校舎だよ。よって、下の階の騒ぎ声なんかが上の階の扉を閉めた教室の中にまで聞こえるわけがない」

「普通の校舎でも、大抵は鉄筋入りのコンクリート造りで上下の階の音なんてほとんど聞こえない。それが試召戦争という騒ぎを前提として作られたこの校舎なら、騒ぎ声なんか聞こえるわけがない。真面目に授業を受けていたらな」

「センパイ方は勉強に飽きてフラフラしているところで俺たちが何か楽しげなことをしているのに気がついて、八つ当たりをしにきたってワケだ」

僕とジャイアンが説明して、まとめに雄二が言うと他の三年生はバツが悪そうに目を逸らした

「器が小さいのね・・・」

三上さんがあきれて言うところ

「それじゃあ言わせてもらおうがよお！お前らは迷惑極まりないんだよ！学年全体での覗き騒ぎに、挙げ句の果てには二年男子が全員停学だぞ!?この学校の評判が落ちて俺たち三年までバカだと思われたらどうしてくれんだ！内申に響くじゃねえか！」

「夏川先輩？彼らが覗きをしたという事実は確かにあるかもしれませんが、全員ではありません。噂を誇張しないでください」

「はっ？どういうー」

「噂を誇張しないでくださいといいました。それにここにいる二人は覗きをしてないという事実があります。何より・・・」

三上さんは一回深呼吸して先輩方に大きく言ったのだ

「学校の評価が悪いから、受験失敗したなんて言い訳ではありませんか？」

「三上さんのいう通り、最後は自分が結果を出せばいいだけの話です」
「内申点が悪いから、学校の評価が悪いから・・・自分達が勝手に逃げ道を作ってるじゃねえか？それを人のせいにするのは可笑しいだら？」

「・・・」

都合悪くなったら目をそらすとか黙るとか・・・

「はっ！だいたいお前ら二年は出来が悪い連中が多すぎんだよ。バカの代名詞の観察処分者だって二年にしかいねえし、学園祭で校舎を花火で破壊したのだってそのクズコンビだろ？」

「(ブチッ)・・・夏川先輩？クラスメイトの悪口や過去の事をそこまでいうなら此方も黙ってませんよ？」

「(あつ、あの先輩に対してすげえ目が据わってる・・・。何をしたんだ？あの先輩)」

ほほう・・・過去の事を言うなら此方も証拠はきちんとあるよ・・・

「夏川先輩・・・。口は災いの元って知ってますよね？」

「はっ？それぐらい常識だろ？」

「そうですねー？常識ですよね・・・。彼らを屑とか言うのでしたら貴方達は女の敵ですねえ？」

「録音？なんだ？面白いのでもあるのかよ？」

「そもそも俺らがやましいことしてるわけがー」

ポチっと

『あの丸坊主の人が私のお尻さわっていたわ・・・』

『皆さん！この丸坊主の人は私のお尻も触っていました!!このモヒカンの人もです！』

「っつてまでー！？」

僕の流した録音に夏川先輩と常村先輩が慌てて突っ込み入れたのだ

「どうしたんです？やましいことないっていつていたじゃないですか？」

「そうそう。言っていたな？みんなも聞いたな？」

「「うんうん」」

「これは合成だろ!!」

「そ、そうだ！俺たちは無罪だ！」
するとー

「先輩方が私のお尻をさわったのを忘れたなんて言わせないわ」

三上さんが冷たい目で睨んでいた。後ろを見ると女子もとんでもない怒りがこもっていた

「げっ?!」

「いやー、先輩方？私のクラスの美子にお尻さわったのですか？屑はどっちなのですか？」

「最低・・・」

「女の敵」

「その豚ども。聞けば、とあるクラスの来客時で同じこといつていたというのもありますし。Aクラスや他のクラスの営業にも大きく迷惑していたので、名誉毀損及び営業妨害って罪がありますが・・・そこはどうなんですか？」

「あついや・・・そ、それはその・・・」

女子の冷たい目での一斉口攻撃に二人はおろおろとしていた。三上さんのお尻さわったのに関して絶対に許さない

「ええい！そこまで言うなら怒るぞ！試獣召喚《サモン》!!吉井！これもてめえのせいだ！」

「ほんとうに器小さいな・・・。ふっ、僕の強さを見せるさ！試獣召喚《サモン》!!」

居心地悪くなつたのか明久に敵意を剥き出して、召喚すると、明久も相手になるべく対応した。暫くすると二人の召喚獣が出てきた。あの先輩の本質は・・・？

世界史

Aクラス

夏川俊平 163点

大きな槌を持った頭が牛の鬼が現れた。ジャイアンが納得したように手を当てていった

「ああ牛頭か。となると坊主先輩の本質は悪役ってところか」

「なんだ?!?てめえー!」

「武力で攻撃するならもう一回同じ目をあわしますよ?先輩とはいえ、やりすぎは俺は許さんので」

「・・・ツチ」

明らかに二人はジャイアンに文句を言おうとするとジャイアンが以前の事をいったら黙ったのだ。さて、明久は?

334クラス

アレクサンドロス大王 161点

なんてこった・・・あれがあのままでるなんて・・・

「「「「・・・」」」」

「さあ勝負はここからだ!この僕の本当の力を見せて——」

「おうコラ。ちよつと待てそこのバカ」

「え?なんか不都合な点でも?」

「不都合な点しか見当たらねえよ・・・」

常村先輩が頭に手を当てて呆れていた。そりやそうだよね・・・

「誰だよアレクサンドロス大王って!しかも334クラスなんて学校拡張し過ぎだろ?!明らかにこれはお前の点数じゃねえだろうが!」

「ち、違いますよ!ちよつと間違えちゃっただけで、これは真正銘僕の点数です!名前のミスなんて誰もが一度はやることじゃないですか!」

「無記入ならともかく、何を間違えたら名前がアレクサンドロス大王になるんだ!?!」

明久がなにか反論しようとしていたが仕方ない・・・

「あのですね。最近は試験召喚システムの調子が悪いらしいから、もしかすると名前の違いはその影響かもしれないですよ?」

「ん?ああそうか。確かにそうでもなければこんなことはありえないか。確かにそうだな」

とりあえず、誤魔化すか・・・。名前の真実思い出したら涙が出てきそう・・・

「まあ名前の部分は不具合だとしてもだ。坂本と吉井がこの学校の汚点だということに変わりはないし——」

「不具合とは聞き捨てならないねえ」

更に言い募る先輩の言葉を遮り、不機嫌そうな声が聞こえてきた

「「学園長!」」

なぜ学園長が・・・? いったいなぜこのタイミングで来たのだ・・・

?

サボった分、痛い目に会う！」

学園長がため息つきながら教室に入ってきたのだ。何故こちらに？

「まったく・吉井のバカについてシステムが原因なんて言われたらたまったもんじゃないさね。それは正真正銘このジャリ自身のミスさ」

まあ、学園長はシステムの調整失敗を認めるわけにはいかないから、不具合呼ばわりを否定せずにはいられないのだろうね。

「けど、こっちのミスと思われるのも癪だしね。その名前の部分くらいは後で直しておいてやろうかね」

そんな事情も手伝って学園長らしくない優しい提案が出てきた

「お話し中失礼します。学園長はどういったご用件でこちらに？」

「(その礼儀正しい対応あいつらに爪の垢を飲ませたいね)話があつてきたのさ。坂本はいるのかい？」

「ん?どうした?ハバア」

さつきまでニヤニヤと眺めていた雄二が呼ばれて学園長の方に向かってあるいつていったのだ。ババアって・いくら口悪いからってその呼び方は・・・

「この肝試し、学園側が援助してやろうじゃないか。大掛かりな設営も召喚の為の教師も応援する。せいぜい派手にやるこつたね」

スルーした!?何て懐の広い学園長なんだろう?

「そいつはまた、随分と気前がいいな。どういうことだ?」

「その代わり、作ったものはそのままにしておくこと。盆休みあたりに一般公開でもしてやろうかと思ってるんでね」

もしかって・・・

「一般人に見せることで評価を高めるってことですか?」

「そこにいるガキ共がどんどん評判を下げてくれるからねえ。こつちも苦労するさ」

宣伝効果を狙ってその案か・・・。イメージアップするには確かにいいかもしれない

「元々この召喚獣の変更はそれが目的だったからね。それと、折角だ

からね。三年もこの肝試しに参加したらどうだい？こんなところで小競り合いをしているよりはその方が有意義さね」

「冗談じゃねえ。こんなクズどもと仲良く肩を並べて肝試しなんてやってられるか」

「だよな。胸くそ悪い」

その後ろにいる先輩方も声には出さないが同様の意思を態度で示している。

「クズ共って…今回のいざこざはまずそちらの補習をサボっていた事を西村先ー」

「クズ共っていったのは悪かった！だから鉄人にそれをいうのは止めてくれ！」

「おや、受験生でありながら勉強をサボっていたのかい？…よし、決めたよ。明日の夏期講習・補習最終日は全員参加の肝試しにするよ？」

「なっ!?」

西村先生にサボっていたの報告しようとしたら、サボっていた三年生が真っ青になって止めようとしたが、サボっていたと聞いた学園長は涼しい顔で決めたのだ

「異論は認めないねえ。サボっていたと聞けば余計にそうしてやりたしいし、…西村先生の方で勉強したくないなら三年生全員そうしてあげるさ」

「それは遠慮する！」

「さて、これはあくまでも補習と夏期講習の仕上げだからね。補習と講習の参加者は余すことなく全員参加すること。いいね」

そう告げると学園長は満足したかのように颯爽と教室を出ていった。にしても、西村先生の名前をだしたらここまで震えるなんて西村先生の補習はどんななのさ？

「さて、先輩方？話はわかりましたか？」

「ぐっ…って、鉄人に補習されるぐらいなら仕方なくお前らの方を選んでやる!!」

嫌々オーラを出しながら、無理矢理納得していた。でもね？皆は知

らないと思うけど、この二人の先輩方は三上さんに痴漢したり、自分の受験が楽しいたがために学校を崩壊させる危険を招いたりもしてるんだよ？明久らの事をクズという前に自分達の行いも棚をあげないでほしいな。あつ、ヤバイ。怒りそう

「の、のび太・・・？」

「ん？どうしたの？ジャイアンったら、そんなに震えていて」

「い、いや・・・(今ののび太は冗談抜きで怖い！修羅のような・・・絶対に触れてはいけないやつだ!!)」

そうしてる間に話は進んでいて、雄二が先輩方にプリントを見せていた。僕らも一枚見せてくれた

ルールはこうだ

①二人一組での行動が必須。一人だけになった場合のチェックポイント通過は認めない。(※一人になっても失格ではない)

②二人のうちどちらかが悲鳴をあげてしまったら、両者ともに失格とする

③チェックポイントはAとEの各クラスに一つずつ。合計五箇所とする。(※Fクラスは狭すぎる為チェックポイントはなし)

④チェックポイントでは各ポイントを守る代表者二名(クラス代表でなくとも可)と召喚獣で勝負する。撃破でチェックポイント通過扱いとなる

⑤一組でもチェックポイントを全て通過できれば驚かされる側、通過者を一組も出さなければ驚かす側の勝利とする

⑥驚かす側の一般生徒は召喚獣でのバトルは認めない。あくまでも驚かすだけとする

⑦召喚時に必要となる教師は各クラスに一名ずつ配置する

⑧通過の確認用として驚かされる側はカメラを携帯する

⑨驚かされる側にはゲストが1名参加する

「へえ結構凝ったルールだね。面白そうだよ」

「あとはこれに設備への手出しを禁止するって項目を追加する予定だ。学園長がうるさそうだから」

明久が面白いといい、雄二が更にそこに付け加えると云ったのだ。まあ、ねー？

「坂本、この悲鳴の定義はどうなっている？」

常村先輩がプリントを見ながら雄二に尋ねた

「ん？その部分か。そうだな・・・そこは声の大きさと判別するか」「カメラを携帯するんだし、そこから拾う音声が一定値を越えたら失格ってことでどうだ？」

雄二とジャイアンが問題ないと言わんばかりにいうと、ムツツリーニが後ろでグツとしていた

「チェックポイントの勝負科目はどう決める？」

「それは互いに一つずつ科目を指定ってことでどうだ？」

「一つずつ？」

「ああ。もう既に化学と現国、総合科目の教師には話をしちまったからな」

「化学と現国は受験で選択されやすいし、総合科目は言うまでもない。そこまで互いに有利不利もないし問題ないですよね？」

「チェックポイントは合計五箇所。そのうち三箇所は現国、化学、総合科目で決定済みだから、残る二箇所をそれぞれ選ぶことになるがな」

ジャイアンが確認しつつ雄二が理解してない明久のためなのか、説明を付け加えていた

「あと、このゲスト1名ってのは？」

「僕らの友人で、学園長からもきちんと許可貰いました。一応、テストも受けてもらってるので大丈夫です」

「なるほどな。ま、参加は問題ないぞ？」

僕の説明に先輩は納得して許可くれた。よかったー

「坂本よお。それよりさっさと負けた側の罰を聞かせろよ」

「そうだな。負けた側は二学期にある体育祭の準備や片付けを相手の分まで引き受けるってことでどうだ？」

「おいおい坂本。お前にしちや随分ヌルい提案じゃないか。さてはテメエ、勝つ自信がねえな」

先輩の言う通り、雄二にしては簡単すぎる罰ゲームだな。まあそ

りやそうか

「アンタらと勝負するって話自体、皆に知らせてないからな。勝手に決める罰ゲームとしちゃこの程度が妥当だろ？俺たちも、アンタも」
「報連相。まさにそれをしっかりしないとね？こちらが勝手に決めては皆が不満を持ちますよ？それでもいいのですか？」

「二「ホウレンソウ？、」三」

先輩もジャイアンと明久も????となっていた。いや!?わかるでしょ!?

「報連相つてのは、報||報告、連||連絡、相||相談つてことです！社会でたらこれ絶対！」

「二「なるほどな。メモメモ」三」

いや、こういふときだけ仲良くメモするなー！

「まあまあ、勝負がしたいならアンタらはチェックポイントにいてくれたらいい。そうしたら、俺と明久が個人的な勝負をしてやるからさ」

あつ、明久が巻き込まれた。まあ妥当かな？この二人で

「チェックポイントで直接対決か・・・面白れえ。その話、乗ったぜ」
「そんじや、勝負は明日つてことで。楽しみにしてるぜ、センパイ？」
「クズどもが。年上の怖さを思い知らせてやる」

そういつて先輩らが帰ったのだ・・・。さて、みんなにも報告しないと・・・

オマケ

三年の教室に戻った常村と夏川は現在正座されていた・・・

「二・・・」

「・・・お二方・・・」

「は、はい・・・」

「・・・今日は学校に何してるのですか？」

「・・・べ、勉強です。補習があるので来ていたのです」

「そうですよね・・・」

正座されていた二人はガタガタと震えながら、目の前の女性、小暮葵が微笑んでいた。しかし、彼らは気づいていた。

「お、怒ってますか？」

「怒らないとでも思いますか？あなた方がサボったせいで、私達は西村先生の補習をさっきまでして怒らないとでも？」

「す、すみませんでした!!」

彼らの残された選択はただ一つ・・・謝ることしかない

「私のお話はここまでです。」

「(ホッ)」

「では、西村先生。あとはよろしくお願いします」

「・・・へっ?」

小暮の言葉に二人は固まり・・・

「さあ！サボった分の補習するぞ！」

「っちよ！誰か助けて!!!」

西村先生（鉄人）に引^{!!}きずられながら二人は、その日はグロッキーになっ^{!!}ていたのはまた別の話と書いておこう・・・

「あら？そういえば、もうすぐ夏休みですからあの子らが帰ってくるのですよね・・・。ふふ、武さんは覚えてるのかしら？」

そう、誰もいない廊下でそう呟いたのだ。

ゲストは・・・

翌朝になり僕らは目の前の光景に驚いていた

「うわあ、なんか、凄いことになったね？」

「そうじゃな。ここまでやるとなれば、学園側もかなりの投資が必要じゃつたろうに・・・」

翌日、お化け屋敷と化した三階を覗いてみて、驚愕した。薄暗い雰囲気といい、外観からでも伝わってくるほどに複雑そうな構造といい、まさかここまで凝った作りになるなんて・・・

「三年生もこれだけ本気だったというわけか」

「あははは・・・こ、ここまで本格的にすると思わなかった」「すげえな・・・」

「こ、ここまで頑張ってくれなくても良かったんですけど・・・」

「そ、そうよね。頑張りすぎよね」

雰囲気満点な造りになっている装飾を見て、姫路と島田が顔に縦線をいれていた

「のび太はだいじょうぶなのか？」

「辛うじて大丈夫かな？ねえ・・・僕らは旧校舎四階に集合だったよね？」

「ああ。三年は新校舎三階、俺たちは旧校舎四階でそれぞれ準備。開始時刻になったら一組目のメンバーから順次三階に降りて行くって寸法だ」

入口の四階階段近くは防火シャッターが下ろされていて、雰囲気は伝わってくるが中の様子は窥えない

きつと三階ではあの二人の先輩や他の三年が俺たちを驚かそうと準備しているはずだ

「・・・カメラの準備もできている」

ムツツリーニーが大きな鞆を掲げてみせた。あの中には何台かのカメラが入っているようで、僕らはそのカメラを持って中を進んでいく。不正チエックと通過の証拠、そして待っているヤツを退屈させない為に

「俺たちの準備はカメラとモニターの用意と、組み合わせ作りだな」
「あ。そっか。組み合わせをまだ決めてなかったよね」

肝試し（文月学園版）のポイントはこうだ！

・基本二人一組。これはまったくその手のものを怖がらない人がいても肝試しが盛り上がるように、という処置だったのだ

※しかし、状況が変わり三年との勝負になった今、勝つためには全く怖がらない人同士を組み合わせるのがセオリー

「ま、組み合わせは折角だから極力男女のペアになるようにするか。その方が盛り上がるだろ」

「え？雄二、いいの？」

勝負にこだわる雄二らしくない発言だ

「別に良いだろ。俺は地獄の鉄人補習フルコースをサボりたかっただけだからな。肝試しの準備も三年がやってくれたんだ。片付けくらい引き受けてもそう大した問題じゃないだろ」

「先輩達のあの約束はつまり焚き付けるため？」

「ああ。面倒な設営作業を押し付けることに成功した今となつては、そんなもん受けなくても何の問題もない」

確かにそうだね

「ふくん。なるほどねくだから男女ペアってことにしたのかう…で、本音は？」

明久が納得したように頷くと同時に問いかけた

「翔子にペアを組むように脅された腹いせに全員巻き込んでやろうかと思つた」

「「やっぱりうちの代表らしい理由だ」」

そう話してるとー

ガラガラ

「ごめんごめん！遅れたよ」

もう一人の親友がようやく到着したのだ…

「おせえぞ！スネ夫!!」

「学園長と念のために確認手続きをしていたのさ」

「あー、本人確認とテストの結果の確認かー」

「うん。ってこうして話すのは久しぶりだね」

スネ夫が明久達に向き合うと皆は挨拶し始めた

「僕、骨川スネ夫。スネ夫と読んでくれたらいいよ」

「吉井明久だよ。よろしく」

「・・・土屋康太」

「島田美波よ」

「姫路瑞希です！よろしくお願いします！」

「さて、改めて坂本雄二だ。改めてあのときは助かった。仲間を助けてくれてあらためて礼を言う」

雄二は頭を下げたのだ。

「あの雄二が・・・頭下げた!?!」

「明久あとでしばく!」

「頭あげなよ?のび太やジャイアンをこれからもよろしく頼むよ?」

すると三上さんも丁度僕らに用があったのか、入るとビックリしていた

「あなたは、文化祭のときのー」

「骨川スネ夫です」

「三上美子と申します。あのときは、あなたも助けに来てくれてありがとうございます」

三上さんが頭を下げるとスネ夫も慌てていた。まあ頭下げられたねー

「さて・・・ここにいるメンバーに組み合わせを先に決めておきたいやつがいる。それを話してからいくぞ!」

雄二が、悪意ある顔で話し出した。そのメンバー構成聞くとみんな驚いていた。ルール大丈夫かな・・・

脇役はやるときはやる！

僕は他のクラスもいる場所へと向かい、今回のルールを説明したのだ。そして、戦略も念のために確認していた

「いいか？ポイントいくまでには、やはりどういう風になってるのか情報がほしい。となればとる方法は？」

「うーん・・・Fクラスを偵察に使わせるということか？」

「そう。事実、こういうときに使える戦略は俺達のFクラスが最初に言った方がいい。しかし、Fクラスで使いきるのも愚策だから時々高得点の人間を使って送りこむ」

他のクラスが疑問を持ちながらも思ったことを答えると、雄二は満足そうに頷いて答えを言った。雄二の説明に皆は異論は挟んでいなく納得もしていた

「いや、最初はFクラス以外の人間を使ってほしいと俺は思う」

「「「っへ？」」」

ジャイアンの提案に皆がキョトンとしていた

「最初にFクラスを使えば向こうに考えを読まれる可能性があるからな」

「なるほどね。確かに向こうに頭が切れる人がいたね」

そう、小暮葵先輩がいたね。一度話したが対応が本当に大人だったし、頭がよく切れる人だから読まれる可能性がある

「となれば最初に造りの構成上・・・Eクラスからか？」

「となれば、ここは・・・」

「私たちのクラス、Eクラスを使う方がいいわ」

Eクラスの代表、中村宏美さんが提案したのだ。本当にいいのかな？

「それはいいが、誰を行かすんだ？」

「うちのクラス男子一人と女子一人で攻めるわ。他のクラスの女子でもいいけど、それでは失礼だからね」

こうして話終えて肝試しがスタートした。最初にEクラスの、二人が歩いていったのだ。次のペアの事も考えないと・・・

「そろそろ尖兵が到着したようじゃぞ」

「?早いな」

ムツツリーニが設置したモニターから、尖兵として出撃していったBクラスの男女ペアの送ってくる映像と音声が流れてくる

《ね、ねえ……あの角、怪しくない……?》

《そうだな。何か出てきそうで震える……》

まず最初に向かうことになっているのは、造りの関係上Eクラスの教室のチェックポイント。

そこは古めかしい江戸時代当たりの町並みをモチーフとした作りになっている。演出のために光量が絞られていてボヤけた感じのその画は、皆のいる教室で見えていても結構スリルがある

《そ、それじゃ、俺が先に行くからいいね?》

《うん……》

カメラから、怪しい曲がり角を中心にその周囲を映しださしていく。カメラを構えた2人は入念に警戒をしながら、そちらの方へと歩いて行った

「み、美波ちゃん……あの陰、何かいるようなに見えませんか?」

「ききき!気のせいよ瑞希。何も映ってないわ」

姫路と島田はお互い手を取り合って遠目から画面を見ている

《行くぞ……っ!!》

《うん……っ!》

カメラが曲がり角の向こうを側を映し出す。予想される恐怖に身構えをしていると、カメラはその先に続いたただの道を映しただけだった

ぎやあああーっ!?!?!?

「きやあああー!!」

カメラの向こうから大きな悲鳴が聞こえ、それを聞いた姫路と島田が同時に悲鳴を上げ、まだカメラに何も映ってないのに、悲鳴だけで驚いちやうなんて余程怖いものが苦手なんだろうね

「??」

「霧島さんは驚いてないのか。(遅いのか、気にしてないのか、わ

からない。）」

同じ女の子でも、霧島さんは姫路や島田が怖がったのかわからないようで、しきりにモニターと姫路達を見比べては首を傾げていた

二組目も仕掛けたのだが、やはり悲鳴が出てしまい、失格になっていた

「・・・点数高い人がいっても悲鳴でアウトなれば、少しいたいね。それに、このままではここで終わってしまうから手を打たないとね」「となると、使う方法はひとつだな。どうする?」

「私的には任せたいやつがいるの。山田哲夫!来なさい!」

「はい!よびましたか!代表!!」

Eクラスの代表中林宏美さんが、呼ぶと彼は軍隊みたいに敬礼して、指示を待っていた

「いい?作戦はこうよ?あなたともう一人の男でポイントまでいってほしいの。目標はEとDを突破させてほしいの?」

「でも、オイラに任せてもいいのですか?失敗する可能性も・・・」

「任せれるのはあんたしかいないのよ?いいかしら?」

「よしやああ!!オイラに任せろ!」

「おい、山田!首がしまっーくべ!」

「行くしかないでしょ!いざ!ハリーアップ!ハリーアップ!!」

そういうと否や速足でペアの男をつれて出ていった。言った本人、中林さんはというと・・・

「・・・これでよし」

「二・・・計算して頼んだパターン?」

「まさか宏美?」

「美子の考えてる通りよ?」

「???どういうこと?」

「山田はあーやって焚き付けたら、頑張れるの」

だからー付け加えて

「必ず結果は出して戻ってくれるわ」

中林さんは毅然とした態度で仲間を信頼していい放った。ここまですで信頼してるなら、きつと任せられるんだろう

《なあ？山田はこういうの大丈夫なのか？》

《オイラは実を言うと、別の意味で慣れたから怖いとは思わない》

山田哲夫ともう一人の男の名前は夏目

《しかし、夏目もこういうのは？》

《うーん、相当な怖いんじゃないかなければ行けるな》

モニター越しに僕らはEクラスの山田達の会話を聞いていた

「つてか？ポイントもうすぐつくけど大丈夫なの？」

「安心して？野比のび太君。あなたのお陰で山田くんはー」

「あーたしかにそうね・・・」

??? 僕のお陰？どういうことだろ？

そんなことを話しながらモニターを見てると、三年生の男女の先輩が召喚を開始していた。現れたのは、男の先輩が明久と同じくデュラハン。女の先輩が箒をもった魔女だった

「明久と同じ人がいたんだ？」

「驚いたな？」

「まあ確かに驚きだ。だが・・・」

英語

Eクラス

松井 貴 210点

&

Eクラス

鎌田 百合子 220点

「明久とは天と地の差があるけどな」

まあチェックポイントにいるような人が、バカなわけないよね。なんか、明久の気持ち进行うと悲しくなってきた

《試獣召喚（サモン）！》

続けて、山田君の召喚獣はというと・・・

英語

Eクラス

山田哲夫 230点

&

Eクラス

夏目宗田 130点

!?!、あのときよりも点数が延びた!?

「あの後、彼はあなたに2回も敗北したのが悔しかったのか、少しでも点をあげようと頑張っていた」

「まあ、あれでも少しでも伸びてるけど、彼まだまだだっけ。のび太君に勝つことを目的としてね」

そうか・・・んん?

「ねえ・・・」

「言いたいことはわかるわ・・・」

「オカルトなのは百歩譲ってまだいいとして・・・」

「二何故、山田哲夫の召喚したのが、某野球のキャラ!?」

山田哲夫のは、某野球での主人公の親友に出ているキャラなのだ。引っ掛からないかな・・・

夏目君のはサッカーボールになった妖怪。あれはなんで?

「夏目のは・・・わからん。今回なぜそうなってるのかわからないが、山田のは恐らくわかった!」

「あー、もしかって・・・」

ジャイアンが言いたいの何なのかわかったみたいだ。なんだろう?
う?

「それはなー」

《これで》

《オイラらの勝ちだー!》

夏目&山田が知らない間に戦って止めを刺そうとしていた

「しゃべり方というか一人称と脇役なところだ」

「二二「あー、納得・・・」」

イヤアアアー!!

よし・・・!

相手の先輩の撃破と同時に山田哲夫達は勝ったみたいだ。まずは、Eクラス制覇だ。先は長いな・・・
つて!?!? オイラ達のことをもつと書いてください!?!?そして、スルー

は·な·い·よ·！
小·さ·く·僕·ら·に·抗·議·し·て·き·た·の·だ·。 · · · · · 小·さ·く·ご·め·ん·。 · · · · · メ·タ·発·言·禁·止·！

耐性無いものはきつい光景

山田哲夫達の活躍により、Eクラスは制覇して次にDクラスを制覇するために彼らは歩いてきた

『しかしー、夏目ー』

『んー?』

『次制覇したら、念のためにもどらずBクラスへむかおうぜー?少しでも進めておいたら損ないだろ?』

彼らがそういう会話してるのを画面越しから黙っていきいていたたしかにそうだけど・・・

「呼び戻さないでそのまま行くのか?」

「ええ。それに少しでも情報がほしいのは同じはずよ?」

「念のために、Fクラスの二人も行かしたし、他のクラスの子も続々といったが、確かに今早く情報が欲しい」

雄二がEクラスの代表の中林さんに確認をとりつつ、同意を示していた

「しかし、のび太やジャイアンもこの学園で勉強頑張ってるんだね?」「おうよー・・・とは言っても、まだまだ学力悲惨な部分があるから、もう少し頑張らないと母ちゃんにどやされる・・・」

「あははは・・・」

ジャイアンが身震いすると、それを見た僕らは苦笑いしかなかった。ジャイアンのお母さんは未だに強いんだね・・・

「でも、私は怖いわ。少し雰囲気が悪いと言うか・・・」

「まあ、女性に何個か怖いのはあったよね・・・」

「う、うん。でも何であなたは平気なの?」

三上さんが???マークを出しながらなぜ怖くないのか聞いてきた
なんでって?それはね・・・

「別に命の危険があるわけじゃないからね」

「グロいものはFクラスで散々見ているしな」

「・・・あの程度、殺されかけている明久に比べれば大したことはない」「そうじゃな。姉上の折檻に比べれば可愛いもんじゃな」

近くの明久達もそれを聞いて答えていた。秀吉のお姉さんはそんなに怖いのか？

「まあ、僕らはほら……」

「色々やってきたから、多少の耐性はあるのかもしれないな」

「そうそう。昔は何度か命の危険があったから慣れた」

「そうだな！あはははははははははは！！」

「あはははははははは」

「……Fクラスの皆のあの言葉にも突っ込みどころあるけど、のび太くん達のは……ね？」

僕はそれを思い出して大爆笑していると三上さんが、遠い目になりながら苦笑いしていた

そんなことを思っていると、違うモニターからは、須川君と福村君の言い争いが聞こえてきた

『お前だって、朝から20人くらいの子に声をかけて全滅していただろうが』

『ち、違う！あれは別に断られたわけじゃない！向こうには向こうの事情があったんだ！俺がモテないわけじゃない！』

『俺だってそうだ！俺はモテないわけじゃない！タイミングが悪いだけなんだ！』

あ。今の叫びで音声レベルが赤いラインを超えた

「……失格」

「アイツらは何をやってるんだ？」

アトラクションには驚かなかったが、頭の悪い言い争いで失格に。さすがはFクラスだ。

だけどそれを気づいてなかったのか、うっかりなことも彼らにいつてしまった……

『でも、のび太は間違いなくもてないだろ。怒るとき怖いからな』

「(ブチッ!!)……後でお話だね？あんな恥ずかしい失格はないよ……ついでに最後の言葉ははつきりと聞こえたので……ね？」

「……のび太もFクラスの雰囲気染まりすぎて怖いな」

「あんな目を据わって、静かにキレてるのび太は怖っ!？」

「御愁傷様しかいえないわね（でも、のび太くんはいい人だし優しいし……／＼／＼って私は何を考えてるのかしら?!）」

「二「うんうん!」二」

僕がそういうとジャイアンとスネ夫は抱き合いながら引いていた。そして三上さんはこれからの惨事が目に見えたのか、同情の声出すと皆も頷いていた

『イエーイッ! チェックポイント二つ目突破だぜ』

『なので、このままDクラスに向かいますぜー』

二人だけで、Bクラスも突破。いやー、すごいなく。今回は頑張ってるんでは？

二人だけで、Bクラスも突破してくれた。そして、二人はグングン進んでいく

すると……

『ん?なんか首がぬちゃってしたな?』

『?ああ、たぶんコンニャク。召喚獣のような【目に見える物の恐怖】は効果が薄いとみて、コンニャクをぶつけるなどの【身体に触れる物の恐怖】に切り替えたのか?』

……正直、三年生の作戦はかなり良いと思うんだが、まさか、ここまで驚かないとは

『正直お前が冷静にいてくれるから俺も大丈夫なんだが：そんな耐性あつた?』

『ふっ……オイラはある男にボロボロに負けるわ、鉄ー西村先生の補習受けるわ……。あれ以上の恐怖はない』

『あーなるほど……』

まあ西村先生の補習は過酷って聞いていたから、それで遅しくなったのかな?ある男って誰?

『突然だけど、オイラさ、実はあることに悩んでるんだ』

『あること?そして突然だな?』

いきなりどうしたんだろ？

『オイラの夢は宇宙飛行士になりたいんだ』

『初耳だな？お前がそれを目指していたなんて・・・なんで？』

『そこに宇宙があるからだ。目指す理由はそれだけさ』

『いや？なんでそうなる？』

すかさず、ツツコミをいれる夏目君。しかし、彼らがのほほんと会話しているから、こちらの雰囲気もひとまず落ち着いた

すると、他のモニターからはふおおおーっ！たまんねえーっ！
！という謎の叫び声が聞こえてきた

何を見てそうなった？

『ここは？』

『何もないみたいだが・・・？』

山田&夏目の声があったのでモニターを見ると、薄暗く、広い空間に出ている

「しかし、ここに来て何もないのはどうなんだろ？」

「仕掛けもないし」

「ただの広い空間みたいだな？」

「あとは、中央の上部に照明設備らしきものが見えるくらいじゃな」

僕の疑問に答えるようにジャイアン、スネ夫も同意を示して、秀吉が言っていた照明器具のはスポットライトかな？演劇に使う物ならケーブルを見ただけでもそれが何かわかるようだ

『なんかオイラ嫌な予感がするけど・・・』

『奇遇だな・・・。俺もここにきて嫌な予感がするが・・・』

『進むのみ！』

モニターの向こうの二人は警戒した様子もなく歩いていく

「？なんだろう・・・この違和感は」

「のび太もスネ夫も気づいたか？」

「うん」

「二なんか、物凄い嫌な予感がする!!」

僕らはこれから先何が起こるか警戒して見ていた

『ん？誰かいるみたいだ』

『まあとりあえず進みますかー』

特に気にした様子もなく二人は突き進み、空間の中央まであと二、三步というところで、画面に動きがあった

バンツ、と荒々しく照明のスイッチが入る音が響き渡る

『!?!』

二人は眩しそうにして一瞬目を閉じたのだ。
すると・・・

暗闇から一転して光の溢れだした画面の中央には、常夏コンビの片割れである夏川先輩がスポットライトを浴びて静かに佇んでいた

そう・・・

全身フリルだらけの、ゴシッククロリータファッションで

『『ぎゃあああ——っ!!』』

画面の内外問わず、そこら中に響き渡る悲鳴。

僕らは勿論、モニターに映ったら化け物を見て山田君達も悲鳴を上げてしまっていた

「坊主先輩めっ! やってくれやがったな」

「汚いっ! やり方も汚ければ映っている絵面も汚いよ!」

「きゃあああーっ!?! お化け! いや、お化けじゃないですけどお化けより怖いです!」

「うううう・・・っ! 夢に見る・・・! 絶対ウチ今夜は眠れないわ!」

「・・・気持ち悪い」

「あっ・・・(フラフラ)」

「三上さんー!?!」

「グロい・・・あれはグロい!」

「僕ちゃんもあれは・・・ウツプ・・・」

僕はあまりにも酷すぎる光景に失神した三上さんを地面に倒れないように支えていた

「想定外のグロ画像だ。耐性のないヤツは失神や嘔吐の可能性もあるぞ。なんつ危険な攻撃なんだ！」

「雄二！他の皆を呼び戻さないと！」

「だが、既に突入しているやつらはもう助けようがない！」

『ぎゃあああーっ！誰か、誰か助け——』

『嫌だ！嫌だ嫌だ嫌だ！頼むからここから出してくれ！』

『助けてくれ！それができないならせめて殺してくれ！』

「突入部隊・・・Fクラス・・・全滅・・・っ！Eクラスの二人も・・・」

「くそおっ！皆あっ！」

カメラ越しに見ていた僕らですら吐き気をもよおすほどのダメージだ。直接見てしまった者は計り知れないほどのダメージを受けたはず

なら、こちらの打つ手は——

「突入準備していた人は待機!!」

「むこうがそうくるならこっちだって全力だ！突入準備をしている連中を全員下げろ！ムツツリーニ&工藤愛子ペアを投入するぞ！」

『『『おおお——っ!!』』』

僕は回りに制止をだし、雄二は二人の名前を聞き、教室中に雄叫びが響き渡った

『『ムツツリーニ！ムツツリーニ！』』

『『『工藤！工藤！』』』

「だつてさ？よろしくね？ムツツリーニー君」

「・・・(コクン)」

呼ばれた二人は冷静に身構えていた。さすがだ・・・

「坂本」

「？なんだ？剛田」

「あいつらがあの先輩を突破する前提で俺とスネ夫を準備させろ」

「それは構わないが・・・まずはあの先輩を突破しないと無理だ」

「そのあとのチェックポイントはあの二人は温存した方がいいから、

先輩を突破するのを二人に頼むだけだ。いけるか？」

ジャイアンが二人にそう問いかけると――

「勿論」

「・・・仲間の仇は取る。そして・・・」

ムッツリーニは大きく目を開いてはつきりといった

「・・・真の恐怖を教える」

ムッツリーニは工藤さんと共に出ていった。

頼むよ！ムッツリーニ！工藤さん！

やり返すときはきちんとやり返そう

ムツツリーニと工藤さんが教室出た直後に僕は三上さん呼び掛けた

「三上さん、起きて?」

「っん・・・のび太く・・・ん?」

「良かった・・・」

「私は・・・そうだ。あの先輩の何かを見て気を失っていたんだ」

三上は思い出したように言うとのび太は頷いていた

「立てる?」

「ええ・・・」

そう言うのとゆつくりと立ち上がった

「(ねえ、ジャイアン)」

「(なんだよ?スネ夫)」

「(のび太と三上さんって付き合ってるの?)」

「(?付き合っていないが)」

「!?!」

?なんかスネ夫とジャイアンが話していて、スネ夫が驚いていたけど、どうしたのだから?

「(嘘でしょ!?)」

「(何驚いてるんだよ?)」

「(え?!ジャイアンはあの光景見てなんとも思わないの!?)」

「(ほほえましいじゃねえか?)」

「(もう頭が痛くって仕方ないよ・・・)」

スネ夫が人知れずに頭抱えてるのは誰も気づかなかった

「しかし・・・なかなかグロいの見せられたお陰で何人かダウンしてしまっただぞ?・・・ウップ」

「「・・・ウップ」」

雄二がそういうと、思い出してしまったとか吐きそうになつていて、それに感染したかのように明久たちも吐きそうになつていた

ここまで被害が与えられているとは想定外過ぎる・・・

「ここまで被害の爪痕がつよいなんて・・・」

「のび太君は何で平気なの？」

「いや・・・正直平気ではないよ・・・」

そう。思い出さないうように気を付けてる・・・

「おいそろそろだぞ？」

雄二の声で僕らは全員モニターの方を注目していた。ムツツリー
二と工藤さんの持つカメラが例の場所に近づいていく

「皆！もうすぐあの衝撃映像がくるよ！」

「女子は目を閉じとけよ！」

「三上さんも見ないように」

「う、うん」

来るとわかっていても耐えがたい恐怖。モニター越しでも錯乱し
そうなプレッシャーだ

「つ、土屋君たちがダメだったら、あとはこちらも対抗して明久くんが
フリフリの可愛い服を着ていくしかありませんね・・・」

「そ、そうね。それしか手はないものね。仕方ないわよね」

「二人とも。そのおかしな提案は恐怖で気が動転しているせいだよね
？本当に僕にそんな格好をさせようなんて思っていないよね？」

「・・・」

どうやら本気だったそうだ・・・

『ムツツリー二君。あの先だっけ？さっきの面白い人が待ってるのっ
て』

『・・・準備はできている』

『なら行こうか』

恐怖に怯える皆がいる教室とは対照的に、目的地に向かっていく二
人は落ち着いている。カメラを構えているのは工藤。ムツツリー二
は何か別のものを抱えているようだ。ゴスロリ坊主対策だろう

「突然現れる方が効果があるだろうからな」

「タイミングを見計らってスポットライトをいれるだろうね」

カメラは暗闇の中の人影をぼんやりと映す

「そろそろくるぞ」

「うんっ！」

僕たちはグツと下っ腹に力を入れ、衝撃に備える。

頼む！ムツツリーニ!!

バンツ！

(スポットライトのスイッチが入る音)

ドンツ！

(ムツツリーニが大きな鏡を置く音)

ケポケポケポツ

(ゴスロリ坊主が嘔吐する音)

『て、てめえ！なんてものを見せやがる！思わず吐いちゃったじゃねえか！』

『……吐いたことは恥じやない。それは人として当然のこと』

『くそっ。想像を絶する気持ち悪さに自分で驚いたぜ……。どうりで着付けをやった連中が頑なに鏡を見せてくれねえワケだ』

『ムツツリーニ君。この先輩、ちよつと面白いね。来世でなら知り合いになってあげてもいいかなって思っちゃうよ』

『ちよつと待てお前！俺の現世を全面否定してねえか!? っていうか生まれ変わっても知り合い止まりかよ！』

『あ。ごめんなさい。あまり悪気はなかったんですゲロ野郎』

『純粋な悪意しかねえ!?俺の行いそんなに悪いか!?』

『自分の行い……。もとい、前の日の女子の怒りを思い出してみて？それで行いは良かったと言えるのかな?』

『何も言えねえ……。!!』

工藤さんに言われて夏川先輩は明らかに落ち込んでいた

『ん?てめえナ二人のこんな格好を撮ろうとしてやがるんだ!』

『海外のホンモノサイトにUPする』

『じよ、冗談じゃねえ！覚えてろおおっ!!』

「これでDクラス最大の脅威は取り除かれたはずだ

「それにしても、工藤さんって意外と厳しいこと言うんだね」

「ゴスロリ坊主も涙目になってやがったもんな」

「・・・普段愛子はああいふことは言わない」

「となると、誰かの入れ知恵か」

「そう言えば、工藤は突入する前に清水に何かを聞いておったな」

「美春が？」

「となれば、清水さんが罵倒術を教えたんだね」

他のみんなは色々と言っていたがスネ夫は、さっきのあまりにもグロいのを思い出したのか汗まみれだった

「これで脅威は過ぎ去ったはず・・・まだ不安があるけどね・・・
オマケ

画面で工藤が先輩にかなり毒を吐いてるのみた清水はというと・・・
「美子お姉さまに痴漢した豚野郎に情けなど無用・・・。そして、汚い映像で美子お姉さまが気絶させたのは私は許さない!!」
満足そうに笑ってうなずき

「美春は美子お姉さまとお兄様の仲が進展するのが楽しみです!!」

妄想で二人が仲良く何かしてるの想像したのか清水は嬉しそうにクネクネしていた・・・。

清水は清水だった・・・。

保健なら任せろ

ムッツリーニ&工藤さんのお陰で次の作戦を動かすことができる

「さて・・・俺らもそろそろ行く用意はするか」

「うん！ジャイアンとスネ夫は用意出来たなら行つてね？」

「了解」

僕とジャイアンとスネ夫はこの後の話をしていたら、三上さんが疑問を言ってきた

「あれ？何で二人を準備させたの？」

「念のためだよ。明久達は温存で戦力読めない二人が行く方が有利だしね」

「つまり、念には念をつてな」

「なるほどね」

僕らの説明に三上さんが納得してくれているとムッツリーニ達の動きも合ったようだ

「あれ？ムッツリーニ達は戻るはずの予定なのに、何で進んでるんだ？」

「ここまで来たら先に進みたいんだろうね」

「まあ、仕方ないが、とりあえずムッツリーニ達のペア倒したら直ぐに向かおうぜ」

そう思うとムッツリーニが僕らに向けて言ってきた

『・・・先に進む』

『多分チェックポイントまであとちよつとだよね？折角だからここのは攻略するね』

パーティションで作られた通路を少し歩くと、その先では三年が二人待ち構えていた。やっぱさっきの仕掛けに場所を取りすぎたようで、チェックポイントはすぐ傍にあったみたいだね

「てつきりあの人が出てくると思っただが、違うんだね」

「ホントだ。てつきりあの人が出てくるものだと思つてたよ」

「別にそういう決まりは作つてないからな」

スネ夫の疑問に明久も同意すると、雄二がめんどくさそうに言つて

いた

「つてことは・・・」

「後のAクラスかもう一クラスで出てくる可能性はあるね」

「出てこないという可能性はない。なにせ、坂本達が挑発したんだからな」

「そういうことだ」

Aクラスと言っても、今までの点数を見る限りそこまで高い点数ではない。他の先輩を相手にするよりはやり易いだろうね・・・

でも、何が起こるかわからない

「まあ、後のことは後のことじゃ。まずは目先のことじゃな」

「そうだね」

画面に視線を戻すと、チエックポイントで対峙している四人がそれぞれ召喚獣を呼び出すところだった

『『『試獣召喚「サモン」っ!!』』』』

ムツツリーニのはヴァンパイアで工藤さんはのっぺらぼうか

「工藤さんがのっぺらぼうはなんで?」

「さあ?考えられるのは・・・誰にも見せたことがない素顔ってことかな?」

「うーん・・・」

僕の言葉に明久が真剣な表情で考え込む。一体何を考えてるのはは敢えて聞かないけどね

「そう言えば、ワシは前に演劇の題目の候補として怪談話を探しておったのじゃが、その中ののっぺらぼうの尻目というものがあつての」

「尻目?」

「うむ。そののっぺらぼうはなんでも、人に出会おうと全裸になったそうじゃ」

・・・なんとも言えない気持ちになったが、画面の方を見ると先輩らの点数が表示されていた

因みに三年の召喚獣はミイラ男にフランケン。どちらもメジャーな化け物だから一目でわかった

保健体育

Aクラス

市原両次郎 303点

&

Aクラス

名波健一 301点

そして点数は300オーバー。保健体育は受験科目じゃないのに、この点数か

『ムツツリーニ君。先輩たちの召喚獣、なんだか強そうだね。召喚獣の操作だってボクたちより一年も長くやってるし。結構危ないかな？』

『・・・確かに危ないかも』

保健体育

Aクラス

工藤愛子 479点

&

Fクラス

土屋康太 557点

『・・・しかし、俺と工藤の敵じゃない』

『確かに・・・ね』

瞬きすら許さないような刹那の後の、ミイラ男とフランケンには成す術もなく地に臥した。保健体育勝負でなら、この二人は教師すら凌駕するしね・・・

「今の勝負、何があったか見えた？」

「はつきりと見えたわけじゃないがヴァンパイアの方は、一瞬で狼に変身してフランケンを切り裂いて、また人型に戻っていた」

「なららび太はのつぺらのは見えた？」

「はつきりと見えたわけじゃないけど一瞬で全裸になってミイラ男をボコボコにして、また服を着ていたね・・・」

因みにだけど、ムツツリーニは一瞬で出血・止血・輸血を終わらせた。あんな攻防を繰り返しながらも裸にはきつちり反応する。ムツツリーニの二つ名は伊達じゃない

「・・・雄二、浮気の現行犯」

「なっ!? 不可抗力だ!」

「・・・浮気は許さない」

「つちよ! 話をーぎやああああ!!!」

「ああ、なるほど。確かにこれに比べたら化け物の方がマシだね」

「二うんうん」

スネ夫が何故、みんな怖くないのか納得してくれたみたいだ

さてと・・・

「二人とも出番だよ?」

「おう! 任せろ!」

「漸くだね!」

僕の指示にスネ夫とジャイアンが嬉しそうに準備していた

「あれ? 二人はもう行くの?」

「元々、そういうプランだったからな」

「まあ、大丈夫でしょ? のび太はそのつぎだろ?」

明久の疑問に二人は答えてあげてスネ夫がその後はいくだろ? と聞いていた

「予定ではね? とりあえず、ムツツリーニがダウンしなかったら出番ないかもね? ふたりの」

「そりゃ、残念だな。そうなれば」

「じゃあ、行くね?」

そういうと二人は教室出ていったのだ。

さて・・・

「のび太くんは誰と行くの?」

「えっと・・・三上さんと行くのかな? って思ってる・・・」

「え・・・(はう!?!まさかの誘い／＼!?!・・・って何で私は恥ずかしがってるんだろ?)」

「?三上さん?」

「あつ、良いわよ?二人でいきましょ?」

よし!三上さんと一緒に行けるのはきつと楽しいはず!!でも・

「雄二の方を止めてくるね?」

「私は翔子の方を止めに行くわ」

お互いにお友だちの方を止めに行ったのだ・・・

オマケ

数十分前に遡るが・・・

あのゴロスリ格好をしていた夏川先輩は教室に戻ると・・・

「「「「・・・うっぷ」」」」

「貴方は何て恐ろしい格好をしてるのですか?ホラーよりも怖いですよ」

3年生は夏川のあの格好を見て、半分が機能停止になっていた。そして、小暮葵がドン引きしながらお説教をしていた。そのお説教されていた夏川はというと・・・

「・・・殺してくれ・・・」

ここまでのダメーヅ負われるのと女子全員のドン引きされてしまったのに泣きそうになっていた・・・

尚、常村はというと・・・

「うっぷ・・・」

やはり、彼もダメーヅ受けていた……。敵味方関係なく深いダメーヅを与えてしまった夏川だった

歓喜と悲鳴

ジャイアン side

俺は現在スネ夫とクラスを制覇するべく歩いていたのだが

「なんか妖怪出てこねえな？」

「多分、さっきの二人のお陰で向こうに集中がきてるんじゃない？」

「あー確かにな」

先に厄介な二人を仕留めるのは妥当な作戦かもな。そんなことを思っているとき……

「うん？なんか聞こえない？」

「ん……？」

言われてみて静かに耳を澄ますとき……

『『『『眼福じゃああ!!』』』』』

!?なんかすげえ叫び声聞こえたく!?

「ジャイアン、嫌な予感するからはしっこによろうよ」

「奇遇だな。俺も同じことを考えていた」

俺とスネ夫はすぐに壁のはしっこにかくれたら……

ドドドドドドツ!!

後ろから大勢の足音が響いてきて――

『『『『いざ行かん!!新体操!!もとい!我らのパラダイス!!』』』』』

――謎の雄叫びを上げながら、教室にいた大半の男が俺たちの横を駆け抜けていった

「……」

いったい何があった？

「ワケわからないね」

「ああ……」

そして、さらに歩くと……

「……ああ、なるほど」

あの謎の叫びの理由が今になって分かったのだ。状況を説明するところだ

①血塗れで横たわってるムツツリーニ

②先ほどの叫び声をあげていた男達が血塗れで倒れている

③そして、薄明かりの中、レオタード姿の女性が着物を着直して
る……

んん？あれは……

「葵さん?!」

失格にならないように気を付けて声を出したら向こうも気づいた

「あら？武さんと……そちらの方は？のび太さんではありませんね？」

「のび太とジャイ・剛田武の友人の骨川スネ夫と申します」

「あらあら、ご丁寧にどうも。私の名前は小暮葵と申します。どうですか？向こうで畳があるので、お二方はお茶を飲みませんか？」

「ならお誘いに断る理由はありませんので頂きます」

「同じく」

俺とスネ夫は誘いに断る理由もなく、畳に座って世間話をし始めた。肝試しの最中だと三人とも忘れて喋り始めた

その様子を見ていたのび太達はというと……

「……なに？この、ほほんな雰囲気は……？」

面識あるのび太と三上は驚かなかったが、他の皆はそのやり取りに戸惑っていた

「えーと、ジャイアンとのび太はあの人と面識あるの？」

「うん。あのとときの決勝戦で会ったの」

「私も面識はあるわ」

僕らがそう答えると、ジャイアンと葵さんとスネ夫が楽しそうに会話をした

《今回はこちらの三年生が失礼な発言をしまい申し訳ありません》

《いえ……》

《僕らは気にしてませんので》

《ありがとうございます》

《でも、葵さんは何でそんな格好を？》

ジャイアンが疑問を言うと葵さんが微笑みながら着物の肩を少しずらしていった

《うふふ、貴方はこれ効きますか?》

《葵さん、女の人がそう易々としてはいてないですよ?》

《・・・えーと二人は恋人?》

《いえ、知り合いです》

《昔のな?》

《なるほど・・・》

そんな会話をしてる他所では僕らの教室はというと

「・・・・・・・・(ピクツピクツ)」

「・・・・・・・・(ガクガク)」

「うわー、この光景は・・・・・・・・」

「なんとも言えないね・・・・・・・・」

僕と三上さんは今の光景に引いていた。なぜなら、一番最初に明久は島田と姫路のお仕置き+α(映像を見て倒れた)のと雄二が霧島さんに折檻くらった

「しかし、次行くなら秀吉と木下優子さんがいいかもね?」

「え?」

「何となくだけどね?あの二人が今あの状態だからね」

「あーなるほどね」

そういうと、二人は準備して出ていった。行動早いな・・・

あれ?また嫌な予感がするけど大丈夫なのかな?

《しかし、武さんもあいかわず元気で安心しました》

《まあ元気なのが取り柄なので》

《確かに・・・》

《うふふ》

《あの、こんなこととしていいのですか?今さらですが》

《構いません。目的はあその横になってる方を止めることでしたから》

体張りすぎです

うん。二人の言うとおりだよ。もう少し自分の体を大事にして男

に見せない方がいいと思います

《あら？次の方が来ましたか》

あら？もう秀吉も木下さんも着いたんだ。

《おさきにいつてよろしですよ？》

《う、うむ。そうか》

《ならお先にいかせていただきます》

そういうと二人は先いった。ありやあ？まあいいか

秀吉たちも着物先輩のいた場所を通過していくと・・・

「あれ？常村先輩だ」

そう、すぐのところ、常夏コンビの片割れ——常村先輩が立っていた

「なんだろう？秀吉対策かな？」

「先程の先輩と違い変な格好をしているわけではないし、悲鳴を上げる要素は見当たらないけど・・・」

僕と明久が気になり警戒していた。いや、いつの間に復活したんだ？

『来たか、木下。待っていたぞ』

『なんじゃ？ワシを待っていた？どういうことじゃ？』

『よくわからないけど、早く済ませてもらいなさい秀吉。アタシらは先に進まない』

『そうじゃな。何の用か知らんが、手短に頼むぞい』

『ああ。大丈夫だ。時間は取らせねえ。……いいか、木下秀吉』

『なんじゃ』

画面の中、常村先輩が真剣な秀吉に一步近づく。そして、はっきりと、聞き間違えようのない口調で、秀吉に告げた

『俺は——お前のことが好きなんだ』

僕は生まれて初めて、秀吉の本気の悲鳴を耳にした

何年たつても変わらない・・・

秀吉はお姉さんに引きずられて戻ってきたのだが震えていた

「駄目ね・・・。秀吉がこの状態になったら、そつとするのが一番よ」

「まあ・・・男に告白されたら・・・ねえ」

「しかもあんなのは嫌だよね・・・」

「『お前を想って書いたんだ』と言って自作のポエムを朗読されたのが一番苦しかったのじゃ・・・」

確かにあれはきつかった。『お前は俺を照らす太陽だ』なんてフレーズが聞こえた瞬間に僕は意識を放棄してしまっただくらいだ。直接聞かされた秀吉の恐怖は計り知れないものだろう

「できれば姉上の力であのクラスを突破を・・・それがならなくともせめて相手を消耗させるぐらいはしておきたかったのじゃが」

「でも、確かにこれは状況としては厳しいかも——」

「いや、別に大丈夫」

明久の心配に僕はきっぱりと否定した

「え?どうしてさ?」

「私達が失格になったし、着物先輩を突破できる戦力がいないのよ?」

木下さんが疑問を言っていたが安心してほしい

「その心配ないよ?葵さんとは連絡交換していたし、出る情報はない」「そうね。葵さんが『いまからそちらに向かってよろしいですか?』と連絡あったのよ」

「なんでそんなに仲良くなったの?」

え?なんでって?それは・・・

「葵さんとは仲良いから」

それに・・・

「先にいつている二人がいるじゃない?」

「「」・・・忘れていた」「」

そう、ジャイアンとスネ夫が先に歩いていってるのだ

「でも、常夏コンビのコスプレと告白がまた出てきたら・・・」

「いや、常夏コンビについてはもう大丈夫だろ」

「先輩はあそこまでされたら出てこれないでしょうし、告白は秀吉専用
の作戦だとおもう……」

「そっか。あの攻撃は、秀吉だけを狙った本気の一撃だったのか」
本気、という単語に秀吉が一瞬ビクンと身体を震わせる。軽いトラ
ウマになっているみたいだ

そうしてらうちにチエックポイント近づいていたみたいだ

《おいおい、どうやらこんな近くについてきまったぞ?》

《いや、それを言うなら到着だよ? ジャイアン》

《くっ、葵のトラップで引つ掛かってアウトになるばすだったのに!》

《予想外だわ!》

ジャイアン達を見て二人の女の先輩は苦々しく言う

《ご託はいいぞ?》

《そうね……》

《目の前の敵に目をそらすのは失礼だわ》

《負けない……》

お互いに火蓋が走つてるように睨んでいた

《《《試獣召喚(サモン)!!》》》》

ジャイアンはあのD○のようなゴリラで先輩たちがハーピーと雪
女だった。スネ夫は……妖狐?

そして、点数が表示される。

現代国語

Aクラス

棚 瑠璃佐 289点

&

Aクラス

安部みさお 277点

VS

Fクラス

剛田 武 410点

&

骨川 スネ夫 400点

「「「うそお!」「」」」

《いやー、のび太と三上に教えてもらったから点数が伸びたぜ!》

《えーと、とりあえず挑ませていただきます!》

スネ夫は尻尾を巧みに操りながら攻撃すると、二人の召喚獣はあわてて下がり、その隙を逃さないジャイアンは豪快にパンチをすると相手の点数削ると悔しそうにいつていた

《特殊能力を使うぜ!!》
え?

あれ?なんかすごい嫌な予感が...

「みんな念のために耳を塞いどいて!」

「え?な、なんで?」

「はやく!!」

《特殊能力発動!歌え!》

え?

《...え?!》

ぼげ〜♪

頼む!歌わないでくれ!絶対に歌わないで!

そうしてるうちに向こうの点数が削れていき

うつ、嘘!?! 私達の点数が徐々に!?

《頼むから本体は歌わないで!》もらった!》

最後にスネ夫が止めをさしてくれて、向こうは戦死になった

棚 瑠璃佐 0点

&

安部みさお 0点

杞憂で終わりそうだ

《あーすつきりした》

《ホッ・・・》

その一言で僕もスネ夫も安心していた。

でもそれがいけなかった・・・

《でもせつかくだから歌いたい!》

《え!?!》

え!!

「皆!!早く耳塞ぐかここから離れて!!」

「だからなー」

「早く!!!」

僕の言葉がただ事ではないと分かり皆は耳塞いだが、明久は??と
なっていて耳塞がなかった

《っ・・・ぼえーなーー!》

《ぎ!やあああああお!!!》

「ぎよえー!!!」

「・・・失格・・・(ガクツ)」

他の皆は出来る限り聞こえないように離れていてたが、僕と明久と
ムツツリーニが犠牲となった・・・

何年経つても・・・ジャイアンはジャイアンでした・・・ガクツ

オマケ

どら焼きとメロンパンを食べていたドラえもんとドラミちゃん
は・・・

ブルツ!?

「い、いまの寒気・・・お兄ちゃん」

「ジャイアンの・・・歌!?まさか22世紀まで歌声届いていると言うの
か!?!」

「お、恐ろしい」

人知れず、震えていたとか・・・

破壊の後の惨状

現在、僕は三上さんに膝枕をされていた。僕はすぐに立ち直れたけど三上さんが「まだ動かない方がいいよ」と止めたのだ。動けるのに……

他の被害者はどういうと……

「あがががが……」

「……（ピクピク）」

明久とムツツリーニーが被害受けたのだ。まあ、耐性のない人があの曲を聞いてみて見たらどうなると思う？

皆、わかった？昔よりは少しましになってると思ったけど……相変わらず破壊力がとんでもないのだ

「全くあの子は……大丈夫ですか？皆さんは」

「葵さん！」

「たしか三年の……着物していた先輩！あれ？鼻血が……」

「……なに（カツ）？」

僕らが教室来た人の人物を見ると、三上さんと口揃えてその人の名前を呼ぶ。すると、明久とムツツリーニーが目を覚めるが、凄く血が溢れていた

「お前達二人は血を拭け。……ここで手当したら評価上がるかもな？」

「明久くん！こっちに来て！」

「アキ！私が見てあげる！」

「あははは。ムツツリーニ君は相変わらず止血が早いね」

「……修羅場を潜り抜けた早さだ」

雄二が聞こえるか聞こえないかの声でそういうと、姫路と島田がさまざまな速さで明久の方へむかった。工藤さんは……ムツツリーニを弄ってるね

「あらあら……にぎやかですね」

「ようこそ。葵さん」

「ご無沙汰しています。思ったより早かったですね？」

葵さんが上品に口許を押さえながら笑っているときに僕らは挨拶をしたら、葵さんも礼儀正しく挨拶された

「ええご無沙汰してますね。美子さんにのび太さん。今回はついでに伝言も頼まれた」

「伝言？」

「はい。十分ぐらい休憩を与えてほしいと」

ああ……もしかって……

「あのジャイアンの？」

「ええ。私は慣れてるから大丈夫ですし、久しぶりに歌ったからあんな感じになってしまったと思われれます」

「慣れてるの!？」

「ええ。いまの三年生の方は半分ぐらいダウンでもう半分は味方がダウンしてますので少しまってもらおうかと……」

「何故ですか?……ああ納得した」

「あの映像ね？」

「まさかあそこまでとんでもない破壊力があると思いませんでした……」

確かにあの映像見たらねえ……

そう話していると

「よう!戻ってきたぞ……葵さん!？」

「ううう……(死ぬかと思った……)」

ご機嫌よく帰ってきたジャイアンだが、葵さんを見て驚いていたのとどぐつたりして帰ってきたスネ夫を見て、僕は思わずスネ夫に同情した

「お疲れさま……同志」

「うん……わが同志」

「「なんか悲哀漂ってる……」」

「武さん、久しぶりに歌ってどうでした？」

「スッキリしました!」

「そうですね。ですが、あなたが大声で歌ったことで失格になりましたよ……」

「あっ・・・忘れていた」

「少しお話しませんか？（ニコニコ）」

「・・・優しくお願いします」

「（あのジャイアンがこの世の終わりのような顔をしてる!?!）」

「あはははは・・・」

僕とスネ夫は肩を抱き合いながらお互いを労っていた横ではジャイアンが葵さんに笑顔で何処かに連れていかれた。三上さんはそのあまりの光景に苦笑いしかなかったとか・・・

「雄二・・・お仕置き」

「つてまで?!俺はなんも見えてないー」

「見とれていたから」

「誤解だ・・・聞け!翔子!!聞いてくれ・・・つちよ・・・!?!ぎやあああ!!!」

尚、雄二は霧島さんにお仕置きされていた。後に理由を聞けば、葵さんのをずっと見ていたのを霧島さんは嫉妬してお仕置きしたそう
だ

・・・手加減はきちんとかかれていたそうだけど・・・ね

暫くして・・・

「お待たせしました」

「・・・戻ってきたぞ・・・」

妖艶に笑いながら戻ってきた葵さんとぐったりしていた声で戻ってきたジャイアンを見て、僕らは絶句した

「あのジャイアンが・・・」

「物凄く・・・」

「落ち込んでいる!?!」

「俺も人間だ・・・あれは耐えれない・・・」

何があつたの!?!本当に!!

「さて、その間に先にいった組は・・・」

「・・・島田と清水ペアoutになっている」

「え?いつの間にな!?!」

「・・・いつの間にかだ」

明久が確認しようとするのとムツツリーニが何故かどや顔で発言をしていた。いや、何でどや顔？

「仕方ない……のび太、三上。いけるか？」

「勿論よ」

「うん。任せて？」

雄二の指令に僕らは了承すると、皆は盛り上がった

「よしやあ！秘密兵器がついに動いてくれるぞ！」

「止めをさしてこい！」

「頑張れ！」

「魔王いけ！」

等と色々というがあえて言わしてもらおう。誰が魔王？僕そんなに脅迫紛いなこともしてないし、Fクラスで多分まとも？なはずだし優しいよ？

「二いや、多分大概怖いとおもう」

「人の心を読むな〜！」

「の、のび太くん。声出てたわ」

え!?!

「なんてこった……」

「お、落ち込まないで!」

「うん……。明久と雄二達も準備してね？……多分嫌な予感が当たりそう」

「？それはー」

「じゃあいくね？」

「お、おい!」

とりあえずは、二人も気づいてないけど葵さんの胸を見ていたよ？

「……雄二」

「明久くん（アキ）」

「少しお話しようか？」

「え……り、理不尽だー！ー！」

だから……大人しく制裁されたいってね？

三上さんにこの光景見せたくないから、早めに逃げたというのは内

緒だ
・
・

暇なときは怖い話を？

僕は今三上さんと手を繋いで歩いてた。何故、手を繋いでるかというと……

『そ、その……はぐれるのは怖いから手を繋いでほしいの／＼／＼、いいかな？』

『う、うん（そんな照れて言われると……こっちまで顔真っ赤になるよ／＼／＼）』

そう、顔真っ赤にして照れていったのを皆さんは断れますか？僕は……断れませんか！！

「ん？」

「どうしたの？のび太くん」

「いや……何か言われた気がして」

「??疲れてるのかしら？」

「いや、多分大丈夫だよ」

「そう……もうあのときみたいに倒れるのはやめてね？……私が原因とはいえ……心配したのだから」

「三上さん……。大丈夫！もう無茶はしないとしようよ！」

反則にならないように聞こえる感じではつきり言ったら三上さんも嬉しそうに笑っていた

「そっか……よかった」

「でも中々驚かし役出てこないね？」

「そうね」

彼らは知らないのだ……。付き合っていないとはいえ、甘い雰囲気当てられた人達は苦いコーヒと悲しみの涙を明け暮れていたのだから

「あつ、そういうえば昔にあった怖い話をしているかな？」

「別にいいけど……なんで？」

「驚かし役の人が中々出てこないし、見ているみんなにも少しは暑さを取り除こうと思ってね。怖いと思ったら、すぐに止めてね？」

「へえ……いいわよ？」

「おほんーえーと・・・」

これはとある小学生5年生の夏休みの話だ……。その子は友人の家の別荘に招待されて遊びにいった。人数はその子含めて5人で、友人の叔父さんのお寺で泊まりにいった

「ここまでは大丈夫？」

「ええ」

続きをいうね？でも、その叔父さんは隣に用ができて、実質お泊まりは五人で泊まることになった。それぞれの役目をしていた後に、お風呂沸かした人が先入っていいと言われてお風呂で入ってたとき・・・

うらめしやーと聞こえたのだ。その声を聞いた少年はみんなに幽霊の声が聞こえた！というも、誰も信じてくれなかった

「なんで信じてくれなかったの？」

「その日は風がとても強かったのもあるから、風の音だと思ったんだろうね」

「なるほど・・・続けて？」

大分話飛ぶけど、夜寝る時間になると風が強まってきたのだ。でも寝る部屋はみんなバラバラで寝ていた

そんな幽霊の声を聞こえた一人はもう一人の子と同じ部屋で寝ることになった。夜遅く一人の子があわててその子らの寝ている部屋にきた。

なぜなら、来ていた二人が部屋にいなくなった。それを不信に思った三人は別れて探すも・・・探していた二人も消えたのだ!!

「・・・え」

そして・・・最後の一人も・・・その子が見たのは青い人魂の幽霊で・・・

うらめしやー・・・!!

っていったの

「・・・こ、こわいね（声出さないように気を付けた！よかった!!）」

「涼しくなった？ごめんね？突然の怖い話」

「ええ大丈夫よ・・・ってあら？」

僕らがよく見ると、驚かし役の人たちが目を回していた。もしかつてジャイアンの歌声がまだ残っていたのかな???

そんな僕らとは別で待機していた明久たちはというと

「・・・ねえ」

「おう・・・言いたいことはわかってる」

「明らかにこれは俺たちの事だよな？」

小さい声で話し合っていたジャイアンとスネ夫。他の面子は、震えていたり固まったりしてカオスな状況だった

再び視点はのび太達へと・・・

「もう少しで先輩達のところだね？」

「ええ。プランは予定通りに？」

「うん」

目の前のターニングポイントへとついたので。やることは変わらない！

そう決心しながら踏み入れた・・・

屈辱は与えるもの

ターニングポイントに着いて僕らの相手はとうとうと
「やつとききたか？待ちくたびれて寝てしまいそうだけ」
「本当だけ。先輩を待たせやがって」

そうそこにいた先輩方がいた。えーと・・・

「あつ、公然ワイセツ＋変態＋女の敵の先輩方発見しましたー」

「ちがーうー！」

「え？違うんですか？」

「私の体をさわったくせに・・・」

「違う！俺らが触ったのは胸ではなく・・・」

「ではなく・・・(ニコニコ)？」

「私たちはあなた様のワイセツをしました。誠に申し訳ございません」

いや怖いよ!?隣にいる僕でも震えたよ・・・。その殺気に気圧されたのか二人ともきれいな土下座をして謝っていた
うん・・・三上さんを怒らすのはやめどころ

そんな様子を見ていたモニター組は・・・

「おう・・・あの常夏がきれいな土下座してる」

「それだけ、三上さんは怖いんだね」

「雄二？私の胸さわりたいなら」

「まて！翔子発言気を付けろ」

「アキ・・・女の子の価値は胸で決めないよね？」

「・・・」

「ムツツリーニ君・・・見たい？」

「・・・興味ない(ブシヤアアア)」

「お姉さまー！！」

「つちよ!?美春抱きつくなー!!」

そんな様子の木下姉弟とジャイアン達は・・・

「早くまもとな二人が戻ってきてほしい」

割り状況が大変だったとか……

再び視点のはび太らに戻り……

「しかし、おい？てつきりあの層どもが来ると思ったんだがな……」

「ん……(ピクツ)？」

「ああ、Fクラスにいるお前に言っても無駄だな」

「確かにな。ぎやはははは！」

「つちよ!? 貴方達……落ち着きなよ? 三上さん……のび太君?」

「こんなバカどもの先輩達相手にムキなるのもしんどいよ?」

「そうね……」

僕の言葉に癪に触ったのか不機嫌そうに言ってきた

「言うてくれるじゃねえか? Fクラスの癖によ?」

「先輩を敬えって話だぞ?」

「先輩ね……? 少なくとも僕らの知ってる先輩はきちんと後輩によき相談相手になったり、アドバイスしてくれる先輩さ」

「貴方達のは、先輩としてではなく、人として最低な発言が多いです。そんな人に私は敬いたくありません……。先輩らは変態なのは事実のですし」

「それは誤解だく!!! もう許してー!」

三上さんが冷たく言う先輩方は先程の強気とは嘘のように焦って謝っていた。見てて面白いのは内緒だ

「さて、勝負しますか?」

「おお……上等だ」

「こいや……」

「私がいうのもなんですけど大丈夫ですか?」

「……じゃなかったら泣きたいぐらいだ……」

あははは……

でもね……?

「どのみち三上さんのワイセツ行為は許さないの……少しは戦いますよ? サモンー!」

「ええそうね。サモン!!」

「サモン!!」

化学

Aクラス

常村勇作

412点

&

Aクラス

夏川俊平

408点

「どうだ? Fクラスだったら一生とれない点だろ?」

「たっぷりと可愛がつてやるからな?」

先輩達が嘗めたことをいうのを聞いて僕は思わず苦笑いしていたら、気に入らなかつたのか先輩方が睨んでいた

「ああ? なに笑ってるんだ? てめえ?」

「落ち着けよ。どうせ俺らの点が高くって気がおかしくなつたんだろ」

「ああ、それもそうか」

その言い分に僕はもう笑い声こらえそうにないので吹いたら、怒っていた

「てめえ!! さつきからなにがおかしい!」

「可笑しい? ええ、可笑しいですよ・・・」

物理

Fクラス

野比のび太

500点

&

Eクラス

三上美子

260点

「Fクラスの仲間を見下していた貴方達よりも点数が高いのに天狗なっているのを見て笑いたくなりますよ」

「なにー?!!」

「つてか、三上さんは何で女神?」

「さあ？」

「・・・三上さんが天使な理由・・・」

「納得した」

「え??何なの?」

「三上さんが天使な理由はどんなときと優しい慈愛の女神だろうね」

「イチヤイチャするなー!!」

「俺たちの当て付けか?!!」

その言葉を聞いた僕はと言うと・・・

「え?もう戦いは始まってるよ?」

「そうね」

「なに!?!」

彼らが気づくのも遅かったのか弾を撃ち抜いていた

「ぐっ!てめえ!?!」

「ツチ!けずるのが大変だぞ!?!」

「三上さん!」

「ええ!はあ!」

三上さんの女神は弓を取り出して、狙いを定めていた。それに気づいた常村先輩が攻撃すると三上さんも多少は削れるも向こうに点数を削った

向こうは三上さんに任せて僕は目の前の夏川先輩を集中していた

「ぐっ!」

「くっ!」

お互いの攻撃が削り合いながら、攻めていたが・・・次の決め手はどうするか考えていた

「(なら武器を飛ばす!!)そこ!」

「なに!?!」

夏川さんの武器を銃で弾いたら向こうは驚いていた

「(こいつは強すぎる・・・)予想外すぎる」

その様子を見ていた明久たちは・・・

「す、すごい・・・」

「のび太も三上さんもなんてハイレベルな操りを・・・」

「このままなら僕らの出番の可能性は低いのかな？」

「確かにこのまま行けばの話だがな」

「え？なんでさ？」

「・・・点数を見ろ」

「点数・・・？なっ!？」

Fクラス

野比のび太 300点

&

Eクラス

三上美子 30点

対

Aクラス

常村勇作 320点

&

Aクラス

夏川俊平 250点

「このままではのび太たちは負けるぞ？」

「確かに・・・はっ!？でも特殊能力をつかえるなら！」

「普通はそうだが、相手は二人もいる。あいつの確か特殊能力は一人相手になら有効だが・・・」

雄二の言葉を聞いた明久は苦虫を潰したように見っていた

そんなのび太らはというと

のび太と三上は戦いの中、合流して次の打開を決めた

「くそ！こいつらこんな強い知らねえぞ!？」

「不味いな・・・」

「三上さん・・・僕の後ろに下がってね？」

「了解」

特殊能力・・・みててあげる！

「特殊能力発動!!」

「なっ!?!」

僕の召喚したのは銃ではなく・・・砲台のようなのをでていた

「(最強の破壊と無敵砲台を合体した...) ジャンボ砲台! 発射!」

「え?!」

僕の合図と共に砲台は打ち込まれた・・・

そして・・・

Fクラス

野比のび太 100点

&

Eクラス

三上美子 10点

対

Aクラス

常村勇作 20点

&

Aクラス

夏川俊平 50点

目的はここまでだな・・・

「先輩方? 如何ですか? バカにしていたFクラスに追い詰められて?」

「ぐう・・・お前・・・わざと点数を残すようにしたな!」

「ええ。ここで倒して良いのですが・・・三上さん」

「ええ」

「ぐう・・・」

僕らがそういうと二人は覚悟していた。僕らは・・・

パン!!

ザツ!!ザツ!!

「!?!」

お互いの召喚獣に攻撃したのだ。その様子に先輩方は驚いていた

「何故って顔ですね・・・」

「ここで、僕が倒して良いのですがそれでは本来の約束とはずれ込みますよね?」

「止めは明久くんたちに任せますので・・・では失礼しました」

僕らは一礼言々と先輩達は悔しがめる声が聞こえた

「作戦・・・成功♪」

雄二の提案で先輩達の屈辱を与えてやれと言われた。これでいいよね?雄二

僕らは先輩達を後をにして笑顔で皆の元へ戻った

作戦とお茶

僕らが教室に戻るとー

「キシヤアアアア!!!のび太〜ー!!!」

「えっ?うわっ!」

「のび太君?!」

明久がいきなり襲いかかってきたので、反応遅れて思わず吹っ飛ばされてしまった。なんで?

「のび太ー!どうしてあいつらを倒さなかったのさ!!!?」

「落ち着こう?」

「○×▽!!?」

「日本語を喋って!?!」

「騒ぐな、明久」

「ぬふ?!」

バーサーカーモードの明久にジャイアンが頭を思いきり叩いたら、変な声でていた。助かるけど、少し強く叩いた?明久の目がスロットみたいになっているし……

「作戦通りよくやってくれた。のび太と三上」

「!?!?!」

「全くだよ……。もう味方を打つ作戦も嫌だよ?」

「本当よ……」

「あの常夏の情けをかけられて悔しがる姿を見れるなら、俺はいいんだよ」

「さすが雄二。詐欺にも向いてるね?」

「それは明久に言え」

僕らと雄二の話についていけてなかったのか、雄二が悪い顔して皆に説明していた

「いいか?自分達が有利だと思っていたら、そいつの点数がかなり高すぎて予想外になる。まずこれ1つポイント」

「あー、確かにあの人は上から目線が多かったわね」

「でも、化学が出るとは……」

「いいえ、恐らく事前に何の科目がポイントで使えるか話し合っていたので予想はできたと思いますが?」

「なるほど・・・」

「それを利用してのび太をここで使ったわけか」

そういうこと。にしても、葵さん流石の頭の回転ですよ・・・

「続きいいか? 予想外の点数相手に当然テンパるし、苦戦はする。しかし、敢えて、三上ものび太もギリギリに削られるようにしていた」
「そして、のび太の特殊能力で一撃を狙ってもよかったが・・・作戦のため敢えて向こうの点数を残させたってことか」

「とどめに自分達で自分達の点を0にさせるって訳か。相手にはこれ以上ない屈辱だね」

スネ夫の言う通り、これ以上ない情けと屈辱で向こうは明久たちと戦うとき冷静にいられないと思うけど・・・一応向こうは三年生だからすぐに冷静になるはず

「さて、次にいくメンバーは・・・」

「雄二は霧島さんと、明久は姫路さんで行ってね?」

「二え(何!?)」

すると姫路がおおずおすと手を挙げてきた

「あ、あの・・・。私、ああいうのは本当に苦手で・・・」

心の底から申し訳なきそうに姫路が言う

「だから、その・・・。明久君にすぐく迷惑をかけちゃうと思うんですけど・・・」

「いや。そんなに気にしないで大丈夫だよ姫路さん。罰ゲームもたいたしたことないんだし——」

「それでも良かったら・・・明久君と一緒に、参加したいです・・・」

「別に無理に参加しなくても——って、ええっ!? 姫路さん、行ってくれるの!？」

「あ、はい。明久君の迷惑にならないのなら・・・」

「ううん! 全然迷惑なもんか! むしろ大歓迎だよ!」

すごく嬉しそうに笑う明久を見て姫路も安心した顔で笑って

「い、行きましよう明久君！」

「あ、うん。そうだね。急いで行こう！」

「(うう、瑞希ずるい……)」

島田の視線には気付かず、明久は姫路に連れられて再びお化け屋敷に突撃

そして……

「さてと。そんじゃ、俺も出る準備すつか」

雄二が立ち上がり言う。あれ？組み合わせに反論はしないんだね

「……雄二。怖かったら私に抱きついてもいいから」

「断る。そしてお前は怖くても一人でなんとかしろ」

「……無理。私は怖い物がすごく苦手だから、ずっと雄二にくつついて
いる」

「今度、俺を攻撃しているときのお前の顔を見せてやる。本物の鬼が
見られるぞ」

「……きやあ、こわい」

「うぐおおっ!?か、関節が!？」

「……コホン、コホン。きやあ、キヤア……?……いやあ?」

「お前今悲鳴の練習してるだろ!? くそっ！俺は絶対に騙され
な——ぎやあああ——」

「……そつか。ぎやあああ、と……」

またいつものやり取りを繰り返しているが、突入してから関節技で
悲鳴をあげて失格にならないといいな……

注意しとくか

「霧島さん。そんなに強くやり過ぎてら、いくら雄二でも怪我はする

「からもう少し優しくね?」

「・・・わかった」

「つちよ! まで!! 止めてくれ?!」

「ごめんね? さすがにそれは無理だよ」

「己ええええ!! のび太ー!」

雄二は魂の叫びを言うと共に、霧島さんによって引きずられた

モニター室に残った僕らはどうと・・・

「お二方お疲れさまでした。茶道での茶を飲みますか?」

「えーと、作法とか僕ら知らないので教えてほしいですが・・・」

「ご安心を。皆さんも楽な姿勢で飲んでますので」

「なるほどです。のび太くん座りましょう?」

「そうだね。有り難く頂きます」

僕らは葵さんの手作りの茶でのほほんと飲みながら観戦することにしたのだ。尚、ジャイアンとスネ夫も穏やかな顔でモニターを見ていたが、あんな穏やかな二人は見たことない・・・

雄二達、ここまでしたんだから勝ってね? そう思いながら茶を啜った・・・

「」「この茶は美味しいなあ・・・」

みんなが口揃えて同じことを言った。うん! 本当に美味しいよ

物は投げていけない!

現在僕らはモニター越しで明久達の様子をみていたのだが――

《あ、明久君。手を離さないで下さいね》

《う、うん。わかってるよ》

《・・・雄二。怖いから手を握って》

《却下だ》

明久、姫路ペアと雄二、霧島ペアが突入してから数分・・・

二組の男女ペアのイチヤつきっぷりに、クラス中から舌打ちや――

ガガガガガガガッ!

――カッターを床や机に刺す音が聞こえる

バキッ

「二ヨシイ、サカモト、クロス!」

Fクラスメンバーに至っては、片言で喋りながら近くの物を破壊していた

「いやー、いつも通りの光景だ」

「そうね・・・」

「あらあら、とても賑やかですね」

「あいつらはまた・・・はあ」

「ジャイアンとのび太が大人に見える理由が分かった気がする・・・」
この光景をみて、僕らはそれぞれ感想を言うとスネ夫が疲れた顔で
呟いていた

「でも、中々幽霊遭遇していないわね」

「いや、正確には驚かし役だよ!」

三上さんがキョトンとしてそういうと、思わずつつこみ入れてしまった

「でも、確かに出てこないな」

「そうじゃな。もしや、何か不具合でもあったのじやろうか?」

「もしかって・・・」

「ん？どうした？スネ夫」

「仮説だけど・・・」と前置きして説明してきた

「多分迷路を作り替えてペアを入れ替える作戦だと思う。つまり、誘い込みだと思う」

「なるほどね・・・。向こうは、うちの戦力を把握してるわけで霧島さん対策ってことですよね？葵さん」

「ええ、間違いはございません」

となるとタイミングはどこでやるのだろうか？

「あれ？姫路達の方が何か重い雰囲気だぞ？」

「ん？本当ね」

どんな会話をしてるんだろう？

《前から・・・明久君に聞きたかったことがあります・・・》

《な、何かな。何でも聞いてよ》

《・・・明久君は私のこと、どう思っているんですか？》

《ほえ？》

あら?!雲行きが怪しくなってきた・・・

《私、ずっと気になっていたんです。明久君は私のことお姫様みたいに大事に扱ってくれているけど、実はそれって、私との間に距離を取っているからじゃないかな、って・・・》

《姫路さんとの距離？》

あ、これマジで重い話だ！二人とも生中継されてんの忘れてるね・・・

ー(ジャイアンとスネ夫わかってるね?)

ー(了解)

ジャイアンとスネ夫はとっさに行動起こしてくれて音声コードを一回切ってくれた

《ーー》

《ーー》

「よし！これでいいな！」

「ごめんね？」

「・・・仕方がない」

「全くあやつらは・・・」

これで一安心と思つたら・・・

ガゴーン

「」「あつ・・・」「」

ポタポタ・・・

「あわわわわ・・・(ガタガタ)」

「・・・ジ、ジャイアン(ダラダラ)」

何処かの生徒がモニターに向かつて飲みかけのボトルを投げたら
ジャイアンに頭が掛かったのと小さなタンコブできていた

何処と無くジャイアンの様子を見ると

「・・・(ポキポキ)」

あつこれは・・・騒いでいた全員終わったね

「のび太・・・スネ夫・・・」

「は、はひ!!」

「少し悪いが席を外すな・・・」

「Yes, sir!」

ジャイアンのあの微笑みは・・・かなりキレている。僕らは長い付き合いだからわかる。

投げた生徒終わったね・・・

「や、やべ・・・」

「少しいいか?なにすぐ終わるから」

「つちよーゆるー」

最後まで言わせず、モニター室から外へと連れ出され・・・

『よくもやってくれたなー』

『ぎやあああああああー』

ジャイアンの怒気とそのやってしまった生徒の悲鳴を聞こえたが
僕らは敢えて聞かなかったふりして、モニターの動きを見て叫んだ

「モニターが消えたと言うことは・・・作戦実行か!」

「?これが三年側の作戦かの?」

「おそらく次に明かりがついたときには、ペアが明久と雄二、姫路と霧島に入れ替わっているはず。ムツツリーニ、コードを繋いで？」

「・・・わかった」

そういい、てきぱきとコードを繋いでいく。そしてー

《ごめん姫路さん》

再び、突入組の声が聞こえるようになり明久が姫路がいると思いを
を出していた

《怖かったよね。もう大じょう——》

どうやら、明久は姫路の手を掴め——

パツ（照明点灯）

《ーゴリラ？》

《殺すぞ》

——てなかった

哀れ・・・

そう思うと外に声が聞こえた

『まだまだー!!!!』

『ぎやあああああああーーー!!!あかーーーん!!!!誰

かー』

まだジャイアンのお怒りが静まっていなかった。はあ・・・前途多
難・・・

引つ掛かる理由と心配事

《はあ、姫路さんだと思ったら雄二だったなんて不幸だ・・・》

《それは俺に対して喧嘩売ってるんだな？後、いつまで手を握ってやる？・気色悪いわ》

《ああ、ごめんごめん・・・》

雄二に言われて明久は慌てて手を引つ込めた。全く・・・何してるんだか・・・

《雄二は姫路さん見なかった？》

《いや見ていないな》

雄二はシラを切るが、恐らく三年生の作戦は気づいてるはず

「でも、どうやって入れ替わったのかしら？」

「多分、今から雄二が説明してくれるよ」

正確には、何も解っていないであろう、明久に説明してあげるはずだ

《じゃあ雄二、そういうことで。僕は先を急ぐから》

《待て明久》

《なに？僕急いでいるんだけど》

《姫路を捜すのなら、無駄だと思うぞ》

《え？なんで？》

やっぱり気づいてなかったみたい・・・。雄二が仕方なくな感じで説明していた

《やれやれ・・・よくきけよ？簡単に言えばあいつらに嵌められたということだ》

《??》

残念。明久は理解できてないみたい・・・

《今頃、姫路は翔子と合流しているはずだ。そろそろ悲鳴が聞こえてくるかもしれないな》

《姫路さんが霧島さんと合流して悲鳴？どういうことさ》

《向こうの翔子対策だな。滅多なことじゃびびらない。テストの点数もかなり高い。そんなアイツを失格にさせたかったから本人じやな

くてパートナーを狙う。但し、そのパートナーも俺だから悲鳴をあげない。そこで、組み合わせを入れ替えたってワケだ》

《え？じゃあ向こうは霧島さんと姫路さんを組み合わせるのを狙っていたってこと？》

《いや、別に姫路狙いってわけじゃないだろ。悲鳴をあげてくれそうになやつなら誰でも良かったんじゃないか？》

《俺たちが来る前にも何組かは迷路をぐるぐる回っていただろ？あれは恐らく、失格にできなかったんじゃないかって、しなかつたんだろうな》
《それって、霧島さんとペアにさせる為に？》

《ああ。向こうはこっちの数も人員もある程度把握しているからな。俺と翔子が最後に来ると予想して、敢えて入れ替え用のペアを何組か残しておいたんだろ》

モニターでジャイアンとスネ夫も自身の考えができたのか意見を
出していた

「なるほど。途中で雄二と霧島が突入するのなら、迷路で迷わせている間に後から入ってきた方と入れ替えればいい」

「しかし、最後に来るとなったらそうはいかない。だから、敢えて何組かを生き残らせておいた、ということだな？」

そう言うこと・・・

《でもそれだと、不確定な要素多いのでは？組み合わせを替えさせるためにはまず相手を分断しないといけないでしょ？そんなタイミングが都合良く来るかな？》

《その為の迷路だ。突然壁を作って道を造り替えることといい、通路を壊すなっていうルールブックといい、向こうにとって都合の良い状況が成立するまではゴールに至る道が隠されている、なんてことは充分に考えられる》

《うわ、卑怯・・・》

しかしこれでみんなも理解してくれたみたいだ。

「自分たちに都合の良い状況になるまでずっと迷わせておくつもりじゃった、ということかの？」

「吉井君と瑞希が離れているときに照明が消えたのも偶然ではなく、向こうは分断できる時を狙っていたと……」

「まあ、雄二は常に霧島と距離をとっていたから三年側もやりやすかっただろうね」

《でも何でのび太達の時はそれをしなかったんだろう?》

《まあ恐らく情報収集のためだろうが……自分達が強いと見せたかったんだろうな》

モニターで見ていた皆はその三年の作戦に呆れながら評価していた

「本当に意地が汚いな」

「そうね。学園祭の決勝である二人の先輩が負けた理由も分かったわ」

「宏美もみていたんだ」

「でも……」

スネ夫が続きを言う前に明久が軽くここにいない先輩達に対してぼやいていた

《予想よりものび太達に削られて》

《先輩たちは予定を狂わされて、情けもかけられたらそれはかなりの屈辱だろうな。まあ常夏の小物は仕方ないがな》

明久たちの話を聞いて、葵さんまでクスクス笑ってる

《まあ、そんなわけで俺たちはヤツらの思惑に見事はめられたってわけだ》

《そっか……って雄二。なんだからしくないね?》

《ん?そうか?》

《うん。だって、いつもの雄二なら相手の作戦にはまったらすぐに何か対策を練るじゃないか》

《ああ、そーいやそーうだな》

いつもなら、こうやって相手の作戦にはまったことをただ説明しているのはおかしいが、今は状況が違う

《いつもなら対策できていたのにどうしたの?どうして悔しがったり対策を練ったりしないのさ》

《もう目的は果たしたからな》

《目的?》

《ああ。そもそもこの勝負を始めた理由は鉄人の補習から逃れるためだ。勝敗に関わらずこのイベントが成立した時点で俺にしてみりや充分だったってことだ》

《あ、そういうことね》

《まあ、あの連中に負けるのは癪に障るし、片付けなんて面倒なものは出来る限りやりたくなかったからそれなりに頑張ってはみたけどな》
「以下にも雄二らしい考えだな」

「西村先生の嫌がらせからは逃れられたし、バツゲームもたかが体育祭の準備だ。あのFクラスでの真夏の鉄拳補習に比べれば天国だろうな」

「でも、西村先生の事だからどこかに補習を入れそうね」

「・・・勝っても負けても同じ」

「しいて差を挙げるとすれば、明久らの言葉を借りるなら常夏コンビに負けるのが癪に障るくらいってことだね」

《そもそも、これは元々肝試しっていう遊びのイベントだ。ムキになつてやるもんでもないだろう》

ルール決めとか結構本気で考えてるように見えたのは気のせいかな?

《それ負け惜しみじゃない?》

《ぐっ・・・明久の癖に・・・一応、俺とお前でこの状況を打破できる作戦もあるにはあるが・・・》

《え? そうなの?》

《その作戦は重要な部分を全部お前に任せないとならない上に、俺が常夏にいいように言われるから気に入らないんだよな》

《なるほど。僕一人が活躍することが妬ましいわけだね》

《お前がきっちり仕事をこなせるかが不安なんだよ》

雄二がつまらなそうに吐き捨てる

「ねえ・・・もしかって坂本くんはわざと引つ掛かったのかしら?」

「ま、まさかそんなことはありえぬはずじゃ……」

「多分三上さんの考えがあつてるよ」

「じゃなかったらこんな状況になつてない

「しかし距離をとる理由は……」

「あるよ？ 恐らく霧島さん関係」

普段の雄二と霧島さんを見ていたら、雄二がワザと引つ掛かつたのも仕方がない気がしたのだろう。モニターでは明久が同じことを雄二に問い詰めていた

《キサマ……霧島さんから逃れるためにわざと向こうの手に引つ掛かつたな？》

《何を言うんだ明久。流石は三年生。見事な作戦じゃないか。こんな頭脳プレイをされたら、Fクラスの俺たちじゃ太刀打ちできなくても仕方がないだろう？》

《……本音を言おうか？》

《……あいつと二人でお化け屋敷にいるとなぜか釘バットで襲われる恐怖が蘇るんだ》

え……？ いったい何があつたの？

《雄二は実は幽霊が怖いのか？》

《バカいえ、幽霊や妖怪なんざ、ちつとも怖くねえ》

《あ。向こうの角に霧島さんが》

《く?! 間に合え明久バリアー……！》
なるほど。大体は分かつた

《細かいことを気にするなシール——明久》

《キサマ！ 今僕のことをシールドつて言いそうになつただろう……！》
にしてもおかしいな……雄二も気づいたのか考える素振りをして
いた

《可笑しいって雄二の頭と性格？》

《どつくぞ？ 俺が言っているのは、未だに姫路の悲鳴が聞こえてこないのがおかしいってことだ》

《あ。そういえばそうだね》

「言われてみれば、瑞希も霧島さんも……」

「瑞希は怖がりだから心配だけど」

三上さんの言葉に島田が同意していた。．．なんか島田久しぶりに発言したような気が．．．

「どちらにしても霧島さんと瑞希を信じましょう?」

そう．．．僕らは二人を信じるのみ．．．

ただどこの二人は喧嘩してアウトならないか心配だよ．．．

疑念？

雄二と明久はとりあえず、動くことに決めたいので、僕らは姫路と霧島さんのペアをムツツリー二の技術で見れるようにしてもらおうと

「あー、やっぱり怖がっていたか・・・」

「私の場合は、のび太くんが怖い話をしたのもあって、そんなに怖くなかったわ」

「けれど、やっぱり姫路さんも女の子だから、こういうのは怖いだろうね」

「ってか、僕はさっきの坂本の台詞がすごい気になるんだけど・・・」

スネ夫の言葉に僕らは全員沈黙していた。確かに、バットとか襲われたとか不穏なキーワード聞いたら嫌でも気になるよ・・・

すると、姫路達の音声が入ってきた

《・・・瑞希、大丈夫？》

《はい・・・！だ、大丈夫で・・・す！

怖くないです・・・！》

《・・・こんなの、ただの見かけが変わっただけの召喚獣。怖くない》

《はい。そうです。召喚獣だから怖くないんです・・・！》

自己暗示してるかのように姫路が震えてるし、それを慰めるように霧島さんが落ち着いた口調で姫路を安心させていた

「駄目だね。音のアウトラインには引っ掛かりはないけども・・・」

「今、明久が呼び掛けるのも駄目だと思う」

「あつ、呼び掛けたみたいだけど完全に拒絶してる」

「このまま無事にゴールできるのかな・・・？」

明久side

僕は姫路さんに音声が引っ掛からないように呼び掛けてみたが逆効果だった

「今声かけても逆効果だ」

「そうだね。姫路さんが折角頑張ってるのに、今声かけたら可哀想だ

ね」

「そういえば、おまえらは先二人で何を話していた」

「・・・えーと」

説明できずに黙っていると、雄二は近付いてきてカメラが拾えないような小さな声で話しかけてきた

「さつき微かにお前らの会話が聞こえていたんだが、心配がどうか、距離がどうか言っていないなかったか」

そっか。雄二と霧島さんの会話も聞こえていたんだから僕らの会話も少しは向こうに聞こえていたのか

「うん、まあ、色々と姫路さんも悩んでいるみたいで」

「みたいだな。その話なら、俺も前に姫路にそれとなく相談されたことがある」

「え？」

「誤解するなよ？あくまでも友人として、しかも遠回しに相談されただけだ」

やっぱり姫路さん、遠慮されていると思って悩んでいたのか・・・

「つてことは、あれは姫路なりの努力ってことだな」

「努力？」

「距離の近い、助け合える仲間になるために頑張っているってことだ。アイツ、自分が助けられてばかりだと思っっているみたいで、随分気にしていたからな」

そう言えば、前にそんなこと言ってたかも

「そんなに気にすることないのにな」

「お前はそう思っても本人はそう思えないだろ？本人の気持ちの問題だ」

「確かにそうだね・・・」

姫路さんがそれを負い目に感じているのなら僕らが何を言っても意味がない。それは姫路さん自身が納得しないといつまでも心に残る重石のようなものだから

あんまり口が出さない方がいいな

「まあ、姫路が最後までがんばれば勝負はかったものだ」

「確かに・・・」

「これはお互いのためにもなるし・・・頑張れ！姫路さん!!」

『うーうう・・・怖くないです・・・！怖くないです・・・！』

『大丈夫。怖くない。こんなのは作り物』

『は、はい・・・！大丈夫です！頑張ります！』

ちよつと涙声になりながらも懸命に耐えている姫路さんの様子に胸をうたれる。姫路さん頑張れ！

「んじや、俺たちも先に進むか。お前もご執心のようだし、翔子たちと同じ方に向かおうぜ。アイツらより先にチェックポイントに着かないように気をつけながらな」

「うん」

雄二の言うとおりに、だいたい姫路さんたちの進んでいる方向と同じ方へ歩いて行く。教室の間取りから想像すると、姫路さんたちの方が僕たちよりもチェックポイントに近そうだ

彼女があそこまでの我慢を報われて常夏を倒したら僕らを助けたことになるから、頑張れ姫路さん・・・！

「――久。明久」

「頑張れ、頑張れ・・・！」

「聞けつてのボケ」

「――っ！」

あ、足の小指の先を踏み抜かれたような痛みが?!悲鳴のあがらないやり方を選んだのかもしれないけど、この痛みはえぐすぎる・・・！

「な、なに？雄二」

「あそこ、行き止まりじゃないか？」

「ん？どれどれ？」

雄二に指摘されて初めて気がついた。応援に熱中するあまり周りが見えていなかったみたいだ

参ったな・・・

のび太side

「どうやら、あの二組のペアでいくみたい・・・。恐らく雄二の考えはこうだろ」

「姫路と霧島さんとで先輩方を倒す考えか。確かに勝つ確率はあるけど、僕らがあそこまで点数を手ずった意味は？」

「確かにそうね・・・」

「しかし、間違えても三年生だ。あの残った点数を耐える可能性もある」

「・・・」

「？葵さんが険しい目でモニターをみていたけど・・・どうしたのかな？」

「どうしたのですか？葵さん」

「どうやら、私達三年生はここに来て大きな誤算ができました」

「??」

「本来であれば、人手を割くようなプランではありませんでしたが・・・あのお嬢様二人を落とすのに集中しすぎて、殿方二人を疎かにしてしまい、どちらかかポイントにつく可能性が増えましたね」

「確かに言われてみたら・・・」

「でも葵さん、何でポイントはあの二人なんですか？」

「・・・情けない話ですが、あのお二人が貴方達のクラスメイトに目の敵をしていて辱しめようと考えてポイントに任すことになりました」

「あれ？でもあの先輩方よりも賢い人はいるのでは？」

「もちろんいます。それと先に謝っておきます」

「？」

「あのお二人が失礼な発言をしたら、きちんと怒りますので」

「葵さん。大丈夫です」

「？」

「最後には僕らが勝つと思いますから・・・。根拠は仲間を信じてるかです」

「!・・・あの二人が学園祭で何故、負けたのか私は今、少しだけわかりました・・・」

葵さんが穏やかに上品に笑いながら、なにかを納得したみたい・・・
「そろそろチェックポイントつくと思うぞ?」

ジャイアンがモニターを見てそう言うと言われは誰なのか注目してみた

二年生の強さを見せてね? 四人とも!!

姫路の怒り

「姫路達が先についたみたいだね?」

「どうなるんだろうな?この勝負」

僕らがそう話していると、姫路と霧島さんがポイントについていた。

その様子に夏川先輩達は予想外だったのか慌てていた

《お、おい!?予想外のパターンだそ?!》

《ツチ!やるしかないか・・・》

先輩達は嫌そうな顔をしながら二人をみていた。それもそうだろう。

「どうやら、姫路達が着いてくれたから明久達はこっそりと隠れている」

「まあ、さっさとあの先輩達を倒したらいいだけの話だ。紅茶のむか?」

「ありがとう・・・ってジヤイアンが入れたの!?そして美味しい!」

「本当だね」

「ジヤイアンの癖に・・・上手すぎる」

「それは俺様の昔よくいつていた台詞をパクるな!!!」

バキ!ゴン!ガン!

「あぎやああああああああお!」

ジヤイアンの強烈な拳骨を僕とスネ夫がそれぞれ3発喰らった・・・こ、この痛みは何年経っても・・・痛い!

そうコントしてる間に先輩達は姫路達に語りかけた

《まったく・・・吉井と坂本をボコる前にとんだ邪魔が入ったな。誰だよミスったヤツは》

《あのクズ二人よりこっちの方がよっぽどしんどそうだな》

《あーあ、二年なんざバカだから楽勝だつて言つてたのは誰だよ》

《悪かったよ。訂正する。吉井と坂本はクズだが、中にはちよつとはマシなヤツもいるから注意が必要だ。これでいいか?》

《今更遅えよ。やれやれ・・・この二人、掃き溜めに鶴つてやつか?

あんなカスどもとつるんでいるなんて勿体ないな》

「……(カチャ)」

「……(ボキボキ)」

「……(すちや)」

「……(ピポパポ)」

モニター越しの会話に僕は拳銃を用意していて、ジャイアンは骨をならしていた。スネ夫と三上さんはモニターの二人の言葉に冷たい目線で見ている。

勿論、葵さんも含む皆が冷たい目でみている

「女の敵ですね」

「葵さん、拳銃でしばいていいですか?」

「お二人とも落ち着きなさいませ。そんなのであの二人をお仕置きしても意味はありません」

「……はい」

葵さんに感謝することだね!?先輩達!

《雄二。言われてるよ》

《お前がクズなのは認めるが一緒にされるのは心外だな》

《いや、きつと雄二がバカだから僕まで巻き込まれてそんな目で見られてるんだよ。被害者は僕の方だね》

《何言っているんだ明久。お前ほどのカスと張り合えるやつなんていないだろ》

《いやいや雄二。謙遜しなくてもいいんだよ。頭の良い僕なんかと違って、雄二はきつと世界のトップを狙えるクズだから》

《《あ? (胸ぐらの掴み合い)》》

この二人は何をしているんだが……でも、先輩達と比べると明久達の方がまだ常識あるね

《そもそも、あんなクズどもがこの学校にいるから俺たちは——《雄二たちは、クズじゃない》——あ?》

《……雄二たちはクズじゃない》

《そうは言っても、事実は事実だろ。すぐに問題を起こすし、教師には

目えつけられてるし、部活で何か功績をあげているわけでもなければ成績だって底辺だ。あれをクズと呼ばずになんて呼べってんだ》

「絶対にお前らだけは言われたくない!!」

ジャイアンがモニター越しで怒りながら先輩達の言葉に反論していた。まあ、彼らのしでかした事を知ってる面子からしたらね・・・「やはり・・・あのお二人はあの時のもっと怒るべきでしたね・・・」

「え?」

「推薦の話です」

「「あつ」」

そういえば、あの時、葵さんも先輩らの悪行しっているんだ!

《ヤツに言われるのは癪だが、概ね事実だな》

《色々やっちゃってるからね》

まあ・・・色々とね・・・

それでも・・・先輩達の行いを聞いたら・・・ね?
《まったく、アイツらは本当に学校のツラ汚しだ。人に迷惑をかけることしかできないんなら、おとなしくゴミ溜めにでも埋まってるっての》

夏川先輩が二人に恨みあるのか、かなり毒ついていた。そろそろ我慢の限界だ

そう思うと・・・

《どうしてそんなこと言うのですか!!》

姫路・・・?

《んだテメエ?!文句でもあんのか・・・!》

《確かにあなた方の言うように、明久君と坂本君の成績はあまり良くなかったかもしれないし、色々と問題も起こしちゃったかもしれないせん!何も知らないくせに・・・明久君たちが、本当はどれだけ優しくて、どうして問題になるようなことをやっていたのかも知らないく

せに!》

《つせえな!お前こそアイツらがどこまで頭が悪いのか知らねえんじやねえのか!?ちよつとアイツらの点数を調べてみりやわかるだろうが!》

《どうして成績とか、そんな数字の上でしか人を見られないんですか!点数に出てこない部分にだって、大事なことはいっぱいあるのに……!》

姫路が強く訴えていた。それにはかなりの感情が込められていつているのが分かる

《ぎゃんぎゃんわめくな!あんなカス共の事情なんて知ったことかよ!》

《明久君たちはカスなんかじゃありません!》

《いいから出ていけ!なあ常村、コイツら今の大声で失格だよな!》

《あ、ああ。そういうやそうだな。こりやラツキーかもな》

《つてことだ!さっさと失せろ!》

常村先輩が何かいいたそうだったが、同調してラツキーと言っていた

《……言われるまでもない。その顔、いつまでも見ているものじゃない。行こう姫路》

《……はい》

……姫路……

「三年を代表して謝ります……。貴殿方のご友人達に対して無礼なことを申し上げまして申し訳ございません」

葵さんが深々と僕らに頭を下げていた。それを見た僕らは慌てて止めた

「あ、謝らないでください!」

「あいつらはもつとも怒らしてはいけない事をしたので……大丈夫です」

三上さんと僕の言葉に葵さんは??となっていたが、明久らのモニターに動きが見られた

《だつてさ、雄二。僕らつて優しいらしいよ?》

《初耳だな。お前ほどじゃないにしろ、俺も自分は立派なクズだと思っていたんだが》

《そうだよ。僕も雄二ほどじゃないけどちよつとはダメ人間の自覚はあったんだけど》

《まったく、姫路さんも勿体ないことをするよね。あんなに苦労したのに、僕らの為に台無しにしちゃうなんて》

《だな。こんな遊びでムキになることなんかないのにな。勿体ねえ》
《だよ》

《んじや、いくか明久》

《うん。悪いね雄二》

《またお前に貸しが増えたな》

そういう明久たちの声からは――

《ここから先は本気だクソ野郎》

強い感情とともに怒っていた

終わったな……。あの先輩達は僕や雄二よりも恐ろしい奴を怒らせたのだから……。懺悔を用意した方がいいかもしれない

さて……。僕も作戦通り動くか

明久の怒りと決着

僕は今、目の前の先輩達を睨みながら雄二と共にポイント入ったのだ

「待ったか？先輩方？」

「そいつは悪かったな。ちよいとヤボ用があつたんでな。日々忙しいセンパイ方は時間が貴重なんだよな」

「当たり前だろ。お前らみたいなバカどもとは違うんだよ？ところで、昨日お前ら【個人的な勝負をする】って言つてたよな？それって当然、何か賭けるんだろ？」

勝ちを確信しているのか、坊主変態が挑発するように言うのが聞こえた

「やりたくねえってんなら・・・そうだな。この場で土下座でもしてもら——」

「いいですよ。約束ですから。この勝負、罰ゲームありにしましょう」「んあ？」

僕がそう答えると、予想が外れた常夏コンビは間抜けな声をあげる「そ、そうか。お前らがそういうなら乗ってやろうじゃねえか」

「だな。それで、罰ゲームは何にする？」

「そうですね・・・【負けた方は勝った方の云うことをなんでも聞く】っていうのはどうですか？」

「んだと？」

「どうでしょうか？それとも・・・負けるのが怖いのですか？先輩？」

「まあいいだろ。お前らが何を企んでるのか知らねえが、どうせ猿知恵だろうからな。行くぞ《サモン》！」

「ぶちのめしてやる。サモン！」

常夏コンビが召喚獣を呼び出そうとする

しかし——

「ああ？なんだ？でてこねえぞ？」

「なんだこれ？どういうことだ？不調か？」

雄二の作戦通り、召喚獣が現れないようだ。そろそろ来るかな？

「理由はわからないっすけど、仕方がないから、俺が 念の為に 来てもらっていた世界史の先生に頼んで勝負つてことにしましょう?」

「!坂本まさかてめえ!」

「んん?どうかしましたか、センパイ。お忙しいセンパイ方は時間がないんすよね?」

見事な片言で雄二は先輩を煽っていた。それを聞いた坊主先輩は怒っていた

「己・・・!」

「時間がないのですよね?待たすのも勿体ないので僕が田中先生を呼んできました」

「何かしやがったな?!てめえら!」

のび太が先生をつれてくるのを見て、坊主先輩は顔真っ赤にして怒ってきた。そして雄二の煽りにさらに頭が湯気出ているかのように真っ赤になっていた

・・・ゆで卵でもしてみる?

のび太 side

はぁ・・・作戦うまく行ってよかった・・・。明久もうまいこと時間かけてくれたし、雄二のあれも干渉してくれた

「先輩らは時間無いようなので僕が担当の先生を連れてきました」

すごい不満そうな先輩に雄二は悪い顔して説明していた

「安心しろよセンパイ。科目が変わる代わりに、俺は召喚獣を喚べねえ」

「実質、明久はあなた方二人相手となります。それとも・・・屑に負けるのが怖いのですか?明久が仕方なしに先輩らとそれなりに対等の点数を選んだのですから」

フィールドを作っている最中、雄二は召喚できない。つまり、この勝負は明久一人対常夏コンビで行うことになる。要するにここまでやっても点数差は三対一から二対一になっただけ。少しマシになった程度でこちらが不利なのは変わらない

「ここからは明久のステージだから頼むよ?」

「あいつに惨めに負ける先輩達をここから眺めさせてもらおうぞ?」

僕と雄二がそれぞれそう言うと言おうと先輩と明久はにらみ合い・・・

そして・・・

「・・・サモン!!」

三人の火蓋は今切れた

Aクラス

常村勇作 144点

& &

Aクラス

夏川俊平 163点

向こうは前にも見た牛頭と馬頭。モニターで見て違うのは、金の腕輪を装備していないというところだ

吉井明久 161点

ほぼ互角か・・・。夏川先輩は牛頭?そして常村先輩は馬頭か・・・。明久は大丈夫なのかな?彼の召喚獣は右手には重そうな刀に左の方には弱点の頭を抱えてる。やりにくさはあるはず

「そんじゃ・・・俺たちを楽しませろよ?屑のお前らがわざわざ科目を代えたんだから今さら卑怯とか言うなよ?・・・くたばれや!!」

夏川先輩はそう言うと言おうと、召喚獣を明久に突進して攻撃する。しかし明久は読んでいたのか、夏川先輩の突進に対して低く入り、体をぶつ

けた

「なに?」

「っはあ!!」

そのまま、剣を振り落とすが向こうも同じことを考えていたのか武器を振るうとお互いによろけた

「・・・っ!!」

それを常村先輩は仲間がやられないようにカバーをした。やはりそう簡単に首はとらしてくれないみたいだ

「貰った!!」

「くそー」

横槍が牛頭の脇に立つ馬頭から放たれる。明久はすかさずデュラハンを牛頭の体を蹴るように飛び退かせる。その着地を待たずに、牛頭が槌を突き出すように突進を仕掛けてきた

「ぐう!!」

明久は大剣を盾に直撃を避けるが、空中にいたために為す術も無く吹き飛ばされる。デュラハンの首が胴体から離れていく——が、なんと大剣を持たない方の手で抱え込ませた

弱点守れても受け身はとれなかったか・

「吠えた割には随分な動きだな吉井よおー」

その隙に牛頭と馬頭の双方が武器を構えて踏み込んでくる

「っー」

明久が上手く二人の召喚獣の間にデュラハンを飛び込ませると、牛頭と馬頭は互いの長い得物をぶつけ合い、攻撃に移るのが遅れる

「このやろう・・・!」

「夏川、落ち着け。いつもよりは扱いにくいんだからお互いに距離をとった方がいい」

「わかってる!!」

明久は常夏先輩の動きに警戒し背中を取られないように移動しながら睨み合う

「おい、そのメガネサルと坂本よ?今からでも科目を戻して、参加した方がいいんじゃないのか?このままだとつまらない勝負になるぞ」

自分達が優位にたっているからなのか上から目線でそう発言するが、雄二は鼻で笑って言い返した

「なに言ってるんだ?ここで見学させてもらうさ。自分たちがクズと呼んでいたやつに負けるクズの最上級のセンパイたちの惨めな姿を、な」

「それに、先輩達は勝つことはあり得ないです・・・」

「はあ?お前頭バカか?」

「少なくとも見下してひどい発言と痴漢をした人よりはましです」
「っ!?このやろう!?!」

夏川先輩は睨んでいたが、僕らはあえてスルーしていた。怒らしてはいけない男がこのまま終わることなんてないと思う

「二重召喚!!」

明久がキーワードを口にし、白金の腕輪が起動、もう一体の召喚獣が現れ、常村先輩の馬頭に向かって主獣と副獣が二体同時に攻撃を加える。

「つくー!」

馬頭は主獣の大剣を槍の柄で受け流すように受けるが、その脇から副獣が大剣を突き込む

「っちー!させるか!」

しかし、さつきまで俺らにだらだら話していた夏川先輩は慌てて常村先輩をフォローして、明久の分身片方が飛ばされた

「くそ!?!」

「アテが外れたみてえだな。俺たちがその腕輪のこと忘れてるとでも思ったのか?」

「誰がああの召喚大会の決勝戦で勝負をしたと思ってるんだ?」

常村先輩と夏川先輩が勝ち誇った顔で明久と雄二を見る

「俺たちは年上のプライドってのがあるんだよ?」

「坂本よお?早く出てこいよ?このままだと負けるぞ?」

はあ・・・と僕がため息つくとき夏川先輩はキレて僕に怒鳴ってきた
「さつきからてめえはなんだ?メガネサル?!言いたいことあるなら言えよ!?!」

「なら言わせてもらいますが、この戦い貴方達が負けますね。特に夏川先輩は怒らしてはいけない男を怒らしたのですから」

「はあ?」

「それに・・・屑と言っていた男達がその屑に負けたとき・・・貴方達は
どうしようもない屑といわれても反論ないですよね?」

「はっ?好きにいいな!?!俺たちが負けることはありえない!」

「約束ですよ・・・それと、僕と話している場合ではないですよ」

「?うお!？」

夏川先輩の召喚獣はデユラハンの大剣を槌で弾いた。その隣では常村先輩の召喚獣がもう一体のデユラハンの攻撃を横つ飛びでかわす

「やる気じゃねえか吉井。そっちがそうくるのなら相手になつてやるよ!」

「後悔するんじゃないぞ!」

先輩二人の牛頭と馬頭。二体の召喚獣がそれぞれ別の方向からデユラハンに飛びかかつていく

その様子には僕は内心、明久の動きを評価しながら、このあとの展開を考えていた

明久のあの能力果たしかにデメリットもあるけど、恐らく今の明久はとんでもないほどの集中力が出ているはず。

それに・・・

「どういうことだ!?片方はお前らが使つてんじゃないのか坂本!メガネサル!」

どうやら、うまく倒せずイライラしたのか夏川先輩が怒鳴ってきた。この先輩は・・・

「そんな事出来るわけないだろ?」

「そんないいがかりはやめてほしいですね」

「じゃあどうなつてんだ!一人の人間が二つの身体をあんなに上手く使えるわけないだろうが!」

まだ気づいていないのか・・・

「バカつてのは不思議だよな?先輩方」

「サッカーバカとか野球バカとありますけど、そういう人たちは物事がかなり集中してるからそういうられるのですよ」

そう話してる間にも明久に攻められて苦戦をしていた夏川先輩は怒っていた

「何が言いたいんだよ!」

牛頭と馬頭がデユラハン二体に突つ込む。それをデユラハンたち

は横に跳んで回避する

「明久は・・・姫路を泣かされた時からスイッチが入っていたってことだ」

デュラハン二体の間に牛頭と馬頭が構えている。

その間の二体目掛けて、デュラハンたちはそれぞれ獲物を投げつける。最初は（A）。一瞬タイミングがずれて（B）も

「ー!?!」

突然の投擲攻撃に先輩らはかがんでその攻撃をやり過ぎた。そして、投げられた物はそれぞれ対角線上にいるデュラハンが受けとる。一体は武器である大剣を投げ、もう一体が投げたのはー

「頭!?!」

大剣を屈んで避けた二体の上を弱点の頭が通過した。それを走りながら受けとり、両手で弱点をかばうように抱えながら肩から突っ込むデュラハン（A）

「くそ!!」

「はあ!!」

「うそ、だろ・・・」

咄嗟に槍を掲げて一刀目を防ぐ馬頭。だが、横から振るわれた二刀目を避ける手段はない。首なし騎士の一撃で、馬頭の身体は上下に分断された

残りは夏川先輩か

「ふざけるな! どうしてこの状況で俺たちが――!」

馬頭の亡骸を踏みつけるようにして立ち上がる牛頭。しかし、その行動は一手遅い。デュラハン（A）は弱点の頭を見せつけるかのよう
に牛頭の頭上へ放り投げた

「なに!?!」

突然物を投げられたせいで坊主変態の意識が上へと向いている間に、デュラハン（B）は大剣をデュラハン（A）に投げつつ牛頭にスライディングタックルをかました。

「バカな・・・」

デュラハン（B）ともつれるように地面に倒れる牛頭の身体はデュラハン（A）に踏みつけられ、自由を奪われた。これでもう牛頭は動けない。

「止めをさせ。明久」

「やめー」

雄二の言葉とともに明久は止めをさした

「賭けは僕の勝ちです、先輩」

「くそ・・・てめえなんか・・・」

「やめろ、夏川・・・それで俺達に要求はなんだ？」

明久の希望は最初っから決まっているだろう。それをやらせたいが為に、明久は何でも言うことを聞くなんて馬鹿げた賭けを提案したんだから

明久がこの連中にやらせたいこと、それは――

「――姫路さんに謝れ」

混ぜるな！危険！

さて・・・オカルトでの三年生の戦いはこれで無事に終了したのだが、突然ですが今僕とスネ夫はピンチです

「・・・」

「ふんふん♪」

「これをこうして・・・こうで??♪」

「ねえ、スネ夫」

「なに・・・のび太」

「僕らって、何で今、ここにいるのかな？」

「なんていうか・・・ジャイアンと姫路さんが明久頑張ったご褒美に飲み物を作るってなって・・・」

「(で、目の前に楽しそうに姫路とジャイアンは色々なものを混ぜているけど・・・シチューやあれよりもとんでもない飲み物になりそう・・・)」

「(僕らの命は)」

「(ここまでなのかな・・・はあ・・・)」

尚、三上さんや他の皆はそれぞれ片付けを始めたのでいないのだ。何故、二人が飲み物を作り始めたかと言うと、明久の為だと言うのだ。で、乗り気になったジャイアンも料理を付き合うとなった。

そして今・・・

「完成??♪!!」

目の前の二人が、今ほど恐ろしく感じるのは気のせいではないはず「じゃあ、姫路？俺は片付け手伝いにいくから、のび太達に味わしてやれよ?」

「はい♪任せてくださいー!」

ジャイアンの言葉に姫路が可愛らしく返事していた。・・・明久なら喜びそうな光景だね

「じゃあ・・・飲むね?」

「はー♪」

「南無・・・」

「スネ夫と僕が二人の共同作業に作った飲み物を飲むとー」
「?!?!」

声にならない味が身体中に!!

なに!?この道の味の世界は!?飲み物だよね?!なんで、匂いが!?駄目だ!!ジャイアンと姫路の飲み物でこれだと言うなら・・・食べ物作られた日には!!?

「あの・・・どうしました?」

「あつ・・・だ、大丈夫だよ・・・」

「あ、明久も喜ぶんじゃないかな・・・」

姫路の不安そうな顔に僕は必死に耐えながらそういうと姫路が嬉しそうに笑っていた

「よかった♪!明久くんに渡しにいけます!」

そう嬉しそうに飲み物を抱えながら、屋上へと歩いたのだ。・・・まだ残ってる飲み物を使って・・・誰かに仕返しをしとこう・・・!

「スネ夫・・・例のカセットも持ってきてきている・・・?うぐつ」

「も、もちろんだよ・・・。ゲフツ」

僕らだけでこの被害終わらすのは可愛そうだね・・・ふふふ

そうよろけながら、僕とスネ夫は先程二人が作った飲み物を水筒に軽く入れて・・・ある場所に向かった

夏川 side

ツチ!あの屑どもに負けるわ、小暮にお説教されるわ。恥もかいたわ・・・イラついて仕方がない!

「全く・・・踏んだり蹴ったりだな」

「うるせえ!俺達があ屑どもに負けるなんて・・・屈辱以外ない!!」

常村の言葉に俺は苛つきながらそういうと、見たことがないやつが目の前にいた

「だれだ?お前?」

「誰でもいいじゃないですか?そんなことよりも、先輩方はもうひとつの罰ゲームを執行させてもらいます」

「は??」

そう固まると、いきなり後ろからイヤホンを耳に入れられた。いや・・・何をするつもりだ？

「スイッチ・・・ON♪」

そいつがなにかを押すと・・・

ぼげーーーーーーーーーー!

!!?!!!!?

「ぎやあああああああ!!!」

な、なんだ!?このひどい歌は?!?へ、下手くそにもほどがーーーは
はずそうと思うも、後ろにいたやつらがぐつと耳元押さえられて逃
げれない

ー逃がすわけあると思いますか？

ー女の敵なんですから

つちよつとまで!?突然聞こえた声には俺らの大好きなアイドルの
声なんだけど!?

ー常村さんとか夏川さんは・・・大嫌いよ

「ぐっは!?!」

ー人に屑とか言う人がいるなんて・・・大嫌い

ー女の子の胸もさわったなんて変態

「ぐぼお!?!」

ぼげーーーーーーーーーー!

「あああああああああ!?!」

な、なんだ!?この無限のループはー!?許してくれー!!

数分後・・・

すげえ汗が止まらず、声だしすぎて喉も乾いて仕方がない

「いやー、おつかれさまです。そこに飲み物をおいときますので、私達
は撤収します♪」

そういつて、ふざけた連中はここから去っていった

「つ、常村・・・まだ息があるか??」

「な、なんとか・・・」

「の、みものを・・・のもうぜ・・・」

「そうだな・・・」

俺達はお互いに生きているのを確認して、飲み物を飲んだ

そこから俺らの意識はなくなり、走馬灯と川が見えて・・・足を踏み入れようとしていた

のび太side

僕とスネ夫は先輩たちがあの二人の共同作業の飲み物とジャイアの歌を聞かして苦しんで倒れたのを見届けた

「・・・普段は悪党に同情はないとはいえ、さすがに・・・」

「あれを耐えきれないのは予想通りとはいえ・・・」

「白目で泡吹いてるのはグロい」

さて、飲み物もカセットも証拠隠滅して片付けを手伝うか。先輩方が悪いのですよ? 僕らの友人や仲間をバカにしたのだから・・・その罪を償ってもらいますよ

それと同時に明久も姫路と話終えて、飲み物を飲んでから倒れたのはまた別の話だ・・・

夏休み

ちよつとした話

明久と僕と三上さんは現在、買い物をしていて。その理由は・・・
「明久の生命もここまで来たら異常だよ？僕やたまたま三上さんが会えたから良かったものの・・・」

「本当ね。玲さんは一週間も家あけていくからって・・・彼処まではめを外していたなんて・・・家訪れたとき、倒れていてビックリしたわ」
「あつ、う、うん。まあ気を付けるよ」

そう、僕らは今日は明久と共に行動してるのだ。最初は一人で散歩でも・・・と思ったら三土さんと遭遇して、どこかへ行こうとしたら明久からSOSらしきメール届いたから急いできたら、倒れていた「でもまさか、昨日の朝からゲームをやりこんで、食べることも忘れていただけではなく冷蔵庫の中も空っぽなんて予想していなかった」
「心配して損したわ」

「でも、発見したのが僕らで良かったね？明久」
「ほえ？」

何でだ？とすごいアホ面で聞いてきた。気づいてないの？

「・・・(姫路だったら心配するから間違いなく料理するよ?)」
「あつ・・・」

そういうと明久は真っ青になって、いつかの雄二みたいな感じに「ヤバイ・・・命がヤバイ」って繰り返していた。

もう少し頭使おうよ・・・

「でも、ガスとか動いてるから僕の家でごはん食べない？」

「えっ？私はいいけども・・・のび太君は？」

「僕もいいよ？でも、今日の分だけ買おうか？」

そういうと、明久も納得して頭をフル回転させていた。こういうの私生活で頭生かしたら、こうならないのに・・・

「三人だから・・・カルボナーラを作る？」

「カルボナーラ」

なんでそうなったんだろう……。あつ、もしかしてあしたの事も見据えて考えたのか

「となれば、メニュー決まれば早く買わないとね」

「そうね」

「のび太ー、今思ったけど昔の話で聞いていた道具でさ、さつさと料理できるやつあった?」

「あったといえばあったね」

僕がそうさりりというのと、明久は固まっていた。あのあと明久が一体何の道具と聞いてきたが、帰ってから話すと約束した。

買い物が終わり、明久の家にて……

「カルボナーラを作るにても、それだけで明久はたりるの??」

「確かに……」

すると明久がどや顔して、答えた

「三日間はしのげれる!」

「……ついでに茶碗蒸しも作つとくよ(わ)」

僕らがそう答えると明久はなんで??となっていた。どう考えても、足りると思えない

そう作る料理を色々と話し合った結果、明久はカルボナーラを作り、三上さんは茶碗蒸しで僕は……ポテトサラダを作ることにしたのだ。

え?なんでこんな料理になったのか?だって?明久が野菜全然食べないからだよ……

「(ジュワー) そうですね……のび太と三上さんはあした予定ある?」

「うん?僕は大丈夫だよ?」

「私もよ」

どうしたんだろ?

「実は明日、ジャイアンもよんでくれたら嬉しいんだけど……皆で夏休みへ海行かない?」

「海か……確かにいくのも面白そうだね」

「そうね。私達はあした何時にいけばいいの?」

「そこはまた詳細はおくるよ。本当は雄二と連絡できたら呼べるのだけれども・・・繋がらなくて」

・・・多分、今ごろ雄二は霧島さんに連れていかれてるな・・・

「おい!? 翔子!? それはー」

「お仕置き・・・(バチバチ)」

「やめーぎやああああ」

・・・今頭のなかに雄二がお仕置きされてるのが思い浮かんだが、いつも通りだよな？

そう考えてる間にそれぞれの料理が出来たのだ。三人で、準備もしたから出来上がるのも早いね・・・

それぞれの席に座り僕らは手を合わせて

「いただきます!!」

それぞれの作った料理に口を運びました。三上さんのは体に優しく美味しい茶碗蒸しで、頬が緩みそうになりました。明久は相変わらず作るのがうまいなー。

「そういえば・・・のび太ってさつき、なんでも食べ物が出るっていう話してくれたよね?」

「うん? 確かにしたけど・・・」

「どんな道具なの?」

「あつ、私も気になるわ。他にもどんな道具があるのか」

「うーん、まずは明久の質問から答えないと『グルメテーブルかけ』だったかな? その道具は食べたいものを言うと言ってくるのさ」

「ええ!」

「? どうしたの?」

「お金は?」

「いない」

「なんでも出てくるの?」

「うん。僕が知る限り、何でも出ていたね」

「……………」

グルメテーブルかけの話したら固まっていた。まあよく考えてみたら、これが普通の反応だよね……

「他にどんな道具があるのか？っていったら……うーん……【地球破壊爆弾】とか？他には……【タイムマシン】とか……やっぱりよく使っていたのが、【タケコプター】とか【どこでもドア】だね！……っでどうしたの？」

「いや……ねえ？」

「のび太君のお話ししてたドラえもんさんって……いえ、それ以前に未来はそんなの普通に売ってるの？」

「さあ？でも、本気でヤバいのを僕は一度開発してしまったな……。あれは本当に……なんで手を染めたのかわからない」

三上さん達の質問を答えると同時に、今思えば、あれはなんで手を出したのかわからない

「染めた？何を」

「道具名は忘れたけど……クローン人間かな？簡単に言えば」

「……………」

「いやー、本当に今だから笑えるけどね。下手したら日本……いや世界は滅んでいたかも。ドラえもんのお陰で事なき得たけど」

「……………何となく、昔ののび太見てみたいよ……」

「私も……」

そう話ながら、僕らは食べ終えて帰る用意していた。

「今日は色々ありがとう？またあした」

「ええ」

「また明日だね」

そういって僕らは別れて帰ったのだ……

「のび太って……時々同じ人間かなーって考えてしまうのは僕の気のせい？ジャイアンとかスネ夫も……」

そんな失礼なことを言われているのを知らないのび太らは……盛

大なくしやみをしたとか・・・

計画を立てよう！

ある日の休みにて僕の家には姫路と島田と明久と三上さんとジャイアンとで夏休みの計画を立てていた。明久は昨日ので確りと栄養とれていたから顔色はよかったことだけは伝えよう

「結局雄二とは連絡が繋がらなかったから、僕と明久で海のいく日を考えているけど・・・」

「どこの海にいけばいいのかな？僕が昔言った場所でもいいけど・・・うーん」

「でも、海一日だけ行くのももったいない気がするわ」

「でも予算的なことを考えたら大変よ？」

「そうですね・・・。剛田君、そこは間違えてますよ？」

「あつ！本当だ！」

僕らは夏休みの計画を話ながら、夏休みの宿題をしていた。明久は絶対に家帰ってもやらないのは目に見えてるから、僕の家で最低限の宿題をしていた

「とりあえず、メンバーをまず考えよう？まず、今の段階で行くメンバーは・・・」

男子Ⅱ明久と僕とジャイアン、雄二、秀吉、ムッツリーニ

女子Ⅱ姫路と島田、三上さん、霧島さんと工藤さん

となっている。さて、どうしたものか？移動も考えていたら・・・

♪♪♪♪

僕の机の上に携帯がなかったので、断りを入れて電話に出る

「《もしもし？》」

《あつーのび太か？今大丈夫か？》

「《スネ夫？どうしたの？》」

《実は、夏休みで海いこうという誘いだっただが・・・大丈夫か？》

「《奇遇だね？今、明久達に海行く計画していた所なんだ》」

《そうなのか？・・・のび太達が良ければ、近くの旅館で泊まれる手配はできるよ？人数は？》

「《たぶん、僕入れたら・・・11人だけど・・・まだ、二人増える可

能性もあるよ?」

《なるほど……。ねえ?僕も参加したいけどいい?その代わり旅館の手配や車の手配はできるよ?費用も学生に優しいところも知ってるから》

「なるほど……。皆と話してから、連絡入れるけどいいかな?スネ夫は参加していいと思う」

《オツケー!とりあえず、手配は任せてね?そちらの詳細決まったら連絡して?》

「うん。了解」

そういつて電話を切って部屋に戻ろうとすると、明久が部屋を出て相手からの電話を対応していた

どうしたんだろ?と思いつながらも、とりあえず計画の話の続きとさっきの事を話さない

「電話長かったな?どうしたんだ?」

「うん。スネ夫から電話があつてね?スネ夫もこの海の計画参加させていいかな?OKなら宿泊の手配も車の手配もスネ夫のほうがいい」

「私達は構わないけど……。手配とか大変では?」

「その心配はない。あいつの家は豪華だし、軽い買い物感覚があるだろう。それに、お金の心配はない」

「そうですか。すごいですねー」

「しかし、移動はどうするんだ?」

すると……

明久が汗まみれになりながら戻ってきた。どうしたんだ?

「あの皆……。姉さんが車を出しますから移動の心配はしないでくださいという連絡があつた」

「玲さんが車を出してくれるの?うーん……。明久?玲さんとの約束つて大丈夫なの?」

「約束つて?……。しまったー!!」

明久は頭を抱えていた。どうやら忘れていたみたいだ。仕方ない……

「海に行く場所宛あるの?」

「えーと、昔家族で行った所なんだけど泊まる場所も姉さんが手配してくれるみたい」

そうか・・・

「明久、玲さんに電話させてくれない?」

そういつて明久から電話してくれて玲さんと話し合うことに

「《玲さん。ご無沙汰してます。のび太です》」

《あら?どうなさいましたか?》

「《実は、今回海行くメンバーが13人になると思います。玲さんに負担はかかりますが、僕の金持ちの友人が宿泊代と車を手配してくれるみたいなんです》」

《運転は私がいしますから大丈夫です。それと宿泊代はその子に申し訳ありませんが・・・宜しいのですか?》

「《大丈夫です。また詳細は明久から連絡してもらいます》」

《分かりました。それではー》

そういつて電話を切った。とりあえず、宿泊の事と車のことは大丈夫。後は明久にお姉さんをどう説明するか任せる

さて・・・とりあえず、スネ夫にも連絡して皆と話さないとな・・・

何か今回も楽しくハチャメチャな予感が・・・

その予感が当たるとは後に思いたくなかった・・・

興奮しすぎて・・・

翌朝、僕らは明久のマンションの前で今日メンバー達を待っていた。今この場にいるのは、三上さんと僕とジャイアンと明久。玲さんは、スネ夫と共に車を取りに行ったのだ

「ムツツリーニは？」

「輸血の用意してる。工藤さんはそれを見てて笑ってる」

「秀吉はそれを見て見てて呆れている」

明久の質問に僕とジャイアンはそれぞれの状況を見ていた。三上さんは姫路と島田と楽しそうに話していた

しかし・・・

「そろそろ来るはずだが・・・(ププー)・・・来たな」

「本当に良いタイミングだね。えーと、今いるのが・・・」

「今ここにいない雄二と霧島さんを除いたら・・・11人？」

つまり、雄二らを含んだら13人か・・・未だかな？と思うと・・・

「・・・おまたせ」

「・・・よう」

「あ、やっとき・・・た？」

明久が振り向きながら挨拶をしようとしたら、固まっていたので、振り向くと・・・

「・・・遅くなった」

「俺は・・・無力だ」

首輪かけられながら雄二は霧島さんと共にやって来たのだ・・・。昨日来なかった一日に何があったさ・・・

こうして漸く13人揃ってマイクロバス乗れたのだ。そういえば・・・玲さんは中型免許あるのだろうか？

ここで席を説明しよう！

運転席には玲さん。助手席にはムツツリーニが座っている

ムツツリーニー 工藤さん 玲

のび太 三上さん 霧島さん

姫路 美波 秀吉

ジャイアン スネ夫 明久 雄二

うん・・・僕の後ろで三人なのは、くじ引きでそうだったから・・・さすがにこの三人の間に気まずいと言うので、こうなったらしい

「姉さん今さらだけど、免許はあるの？」

「ふふ、アキくん・・・バレなかったら良いですよ」

「つて!?まさか違反してるの!?アホなの!?!」

「冗談です。きちんと中型免許あります」

明久と玲さんが心臓に悪い会話していたのを僕らはスルーしていた。

「三上さん狭くない？」

「大丈夫よ。ところで、のび太くん達の水着は新しいの？」

「うん。この間の水着でもよかったんだけど、折角だからね」

「つてか、のび太泳げるようになったんだねー」

僕と三上さんの会話にスネ夫が思い出したように呟いていた。確かに・・・昔の自分では考えられないぐらいの成長ぶりだ

「え?のび太泳げなかったの?」

「うん。カナヅチだったからね・・・」

「どうやって泳げるようになったんだ?」

「・・・とある昔にある道具で泳げるようになったよ・・・」

「二のび太が遠い目になった・・・」

うん・・・ここは触れてほしくない。色々な意味で悲しいから

「そういえば、坂本と剛田は結構食べてるよね?」

「そうですね・・・。よく太らないですね」

「ん?それはよく運動をしてるからだろ」

「同じく」

そう二人が言うのと姫路たちが暗い顔になって、ぶつぶつと言っていた。はつきりいって怖い!

「でもね・・・夏バテで私痩せたわ」

「ええ!美波ちゃんずるいです!」

「凄いわね。美波」

「ええ・・・本当に・・・胸から痩せたわ・・・」

「」「」「」

島田の重たい雰囲気は僕ら何も言えずに、車内の雰囲気も重くなつた

「お主らは少し気にし過ぎではないかの？」

「二人ともスタイル良いのになんでそんなに気にするの？」

秀吉とスネ夫がフォローいれると、姫路と島田は玲さんの方にあるところにじつと見据えて・・・

「だってあのクビレが・・・」

「だってあの胸が・・・」

「羨ましい・・・」

「ああ確かに異性から見てもスタイルは良さそうだもんね」

「・・・確かに、玲さんは危険」

「ボンツキュツボンツで感じですごいよね。グラビアとかの紐みたいな水着とか似合いそうだよね」

島田と姫路の言葉に同意を示す女性陣達。でも、工藤さんのは明らかに誰かに向けていつてるよね？

「土屋君、鼻血が出てますよ」

「・・・これは日射病のせい」

「ごめんなさい・・・どこからツツコミを入れたらいいのかわからなくなってきた」

「そうそう、ムツツリーニー君」

「・・・なんだ？」

「僕ね・・・実は」

あれ嫌な予感が・・・

「三上さん。はい」

「？タオル？」

「血の雨が降りそうだから」

「??それはー」

三上さんの疑問の前に、工藤さんがムツツリーニーに小さく囁いた

「僕はね・・・女の子のーが・・・大きくなったよ?」

「・・・っ!?(ポタポタ)」

「え?それはなんでだつて?それはねー(ゴニヨゴニヨ)」

「・・・つく(ポタポタ)」

「でも、ムツツリーニ君は：ーに迫られそうだねー。それもーーにつてね(ゴニヨゴニヨ)」

「・・・む、無念(プシャーー!!)」

「やっぱり血が吹いたくー!!?工藤さんもなんでそれをやるのさー!!?そして何をいつたの!?!車の中は血まみれになっていたとここに記録しておきます・・・」

移動中で僕は大きな不安が感じました。このメンバーで何も起きないなんてあり得ないよね?夏と言えば・・・ドラえもんにもそろそろ会いたいな・・・。とりあえず、何もないことを願おう!

ワシは男じゃ!!

やっと着いた……。車のなかには、一時は血の雨のようになっていたが、問題なく目的地についた

「おい、これで海に持っていく道具は下ろし終えたか？」

「うん。あつ、スネ夫はその中にある輸血パックをとって？」

「これね?・・・ねえ、輸血パックって1000本もあるのおかしいと思うのは僕の気のせい?はい、三上さん」

「スネ夫君のは間違えていないわ。ありがとう」

「三上さんは休んでて良いよ?」

僕がそういうと、三上さんは「そう?ならお願いね」と言い、待っていた姫路らと喋り始めた

「しかし、目的地に着いてからムツツリーニーの手当てをするとはね」

「こいつの生命力は本当に感嘆するぞ」

治療しながら僕とジャイアンはあきれていた。尚、明久と雄二は姫路達の荷物を旅館に運んでくれる

「ヤッホー。車の中で水着替えたー!」

すると工藤さんが生き生きと車の中から出てきたのだ。工藤さんの方を見るとあの時に購入した黄色いビキニに大きな麦わら帽子をかぶっていた

「可愛いですね」

「そうね。工藤さんに似合ってるわ」

「土屋もなにかいいなさいよ?」

輸血し終えたムツツリーニーがゆっくりと起き上がりながら、真剣な顔で工藤さんに向かってあるいていた

「勘違いするな。工藤愛子・・・」

「ん?」

「俺はお前の体なんぞ・・・興味は(ポタポタ)」

「興味は・・・?その血だらけはなに?」

「・・・これは日射病だ」

「ふーん」

「つて！工藤さんこっちに向かつてあるいたらー」

その瞬間、ムツツリーニーが思い切り後ろに倒れながら血が吹いていた

「ムツツリーニー（君）!?!」

「ええー!?!」

皆慌てて駆け寄り、工藤さんが抱き抱えながらムツツリーニーを呼び掛けると……

「……生まれ……変わるなら……鳥になって……のぞきをしたい」

「生まれ変わってもたいして変わらねえぞ?!」

生まれ変わってもムツツリーニーはムツツリーニーだった……。止血をするか……

こんなトラブルがありながらも、それぞれ着替えて僕らは砂浜に行き、待っていた。すると……

「お待たせー!」

「待たせましたか?」

「大丈夫だ……よ?」

「ん?どうしたの?明久……なんてこった!?!」

突然明久が姫路達の声を聞き、振り向くと固まったので僕も振り向いたら……

「ぐっ!?!」

「ぐっ!?!」

姫路はピンク系統とかそちらの方の色を選ぶと思ったけど、今回は青系統のビキニ。そして、三上さんは黒系統のビキニを来てコチラに来たのだ。

二人の綺麗さに見とれて血をはいたのは気のせいだからね……?

「だ、大丈夫?のび太くん?」

「だ、大丈夫だよ……。三上さん似合ってるよ!可愛いよ!」

「あ、ありがとう／＼／＼」

うう、三上さんが可愛すぎて……顔真っ赤になってるのばれてな

いかな??

「あ、明久くん・・・どうですか？」

「に、似合ってるよ」

明久・・・きちんと姫路の顔を見てあげなよ・・・恥ずかしい気持ち
ちはわかるけども・・・

「・・・雄二、私の水着どう？」

逆に霧島さんはピンクというか紫に近い系統のビキニか。こっち
もこっちで似合ってる霧島さんは予想通りと言うべきか、いつも通り
雄二の方へ向かっていた

「・・・べつに・・・」

「・・・私なんかより他の女の子のを見て興奮したの？」

「違う！それはちがうぞ!?!」

まったく・・・素直に誉めないからそうなるんだよ・・・

「雄二。霧島さん、スタイル良いし似合ってるじゃないか」

「ありがとう、吉井」

「どうせウチはスタイル悪いですよくだっ」

瑞希、霧島から少し遅れて美波が合流した。あれは拗ねてるね・・・

「そんなことないよ。美波だつてスラッとしてるし、出てるところは
出てるし——」

「はいはい。どうせウチは胸がほっそりしてお腹が出てるわよっ
!」

「あいぎやああ!?!」

美波は怒りに身を任せて明久の顛かみを片手で掴みアイアンク
ローを食らわせる

あれは痛そうだなあ・・・

「島田。明久はそこまでいってないから落ち着こう？」

「のび太が言うなら・・・」

「助かった・・・」

あらあら、うちの弟が美波さんになにか粗相を？」

このような状況の時にようやく玲さんが合流した。色は緑のビキニか……

「……………」

島田と姫路は玲さんを見て呆然としていた

「海って残酷ですね……………」

「そうですね……………」

島田は玲さんの胸を、姫路は玲さんの腰を見て落胆していた。三上さんは落ち込んでないよね……………」

「人によって個性があるからそこは割りきるしかないわ……………」
「すごい達観してらっしやる……………」

「おーい！明久達ー！」

この声は秀吉か……………皆が振り向くと、男物を来てコチラに向かつてー

「女の子が男物を着ちゃダメでしょ！」

「いや、わしは女の子ではなく……………」

「とにかくこっちに来なさい」

「なぜじゃあああー！？」

監視員によって秀吉は連れていかれた……………

「……………」

「何があつた？」

「……………」

あまりの一瞬の出来事で皆は言葉失つてました……………。数分後には落ち込みながら秀吉が合流してきました……………

海と言えば、恒例の……？

僕らは海の遊ぶ道具をそれぞれ準備していると、かなり落ち込んだ様子でこちらに合流してきた秀吉

「ワシは男だと言うとるのに……」

「お疲れ様……木下秀吉って本当に男なの？」

「性別は男だってなってるならしいけど、周りは女だと勘違いしてるらしい」

「何言ってるのさ？秀吉の性別は秀吉さ」

秀吉の苦労を労ったスネ夫は性別は本当に男なのか？って疑問にジャイアンは答える。すると、明久が何を思ったのか性別は秀吉って……それ性別？

「ワシは男じゃあああああ!!!」

秀吉は海に向かって大きく叫び声をあげていた。多分、秀吉は男に見られない理由って……

「演劇とはいえ、女性の格好が多いからでは？」

「それは言えるね……」

「ねえ！スイカ割りをしましょう!!」

「そうですね……。少し遊び心入れませんか？」

僕と三上さんが秀吉が女の子に見られる理由を話していたら、島田がスイカ割りをしようと提案すると、玲さんがただのスイカ割りでは面白くないと言ったのだ。

まさか思うけど……

「これでよし……」

「二つて！なんで、俺（僕）達が砂浜に埋められてるの!?!」

僕とジャイアンと雄二が砂浜に首だけ顔だしていた。なんで!?!

「なんでって……そりゃ、雄二とジャイアンは頑丈だし、のび太も固いと思うから」

明久が寧ろ何でそんな疑問に思うの？って顔していた。な……殴りたい!!

「先に明久がスイカ割ってもらおうか。う。．．」

「．．．面白いハプニング期待してる」

「(明久がジャイアンの頭当てたら．．．ひいひい)」

秀吉とムッツリーニは自分は被害飛ばないように見えていて、スネ夫は恐らくジャイアンの頭を当ててしまった後の結末を考えていたんだろう

「あ．．．あの．．．これっていいのですか？」

「のび太君達が怪我したときの救急箱はある？」

「多分、大丈夫よ？」

「あははは．．．頑張れー」

「．．．お仕置きにはちょうど良いレベル」

「夏はこういう刺激があるのも良いかと思ひまして．．．」

姫路と三上さん、もっと言つてよ!! 島田と工藤さんは根拠ない自信持たないで!?! 霧島さんは、お仕置きに良いレベルってこれは危ないでしょ!?!

そして．．．

「玲さん! こんな刺激は僕らはいらぬよ!?!」

「そうだ! 寧ろ、明久の役目だ!」

「然り気無く、坂本は明久を売りやがった．．．」

「では、始めましょう♪」

「僕らの意見をきいてください!?!」

僕らの意見もむなしく、やる事が決まった。明久が割る役目で目隠しをされていた

明久 side

僕は今日隠しされて、皆の声を聞いていた

「アキー! もっと右ー!」

この声は美波．．．。もっと右か

「明久、そのまままつすぐいくのじゃ」

「．．．そう見せかけて、左」

秀吉とムッツリーニの声が聞こえた。まつすぐ行つて左か

「・・・左四十五度」

「あらあら、アキくん。右に20歩で左に48.5°で割れますよ。」

「二人の指示を聞いてよー!」

霧島さんと姉さんの言葉が聞こえたが、方角がわからないよ! 工藤さんはもつと場所教えて!?

「吉井くん!もつと左にいけばスイカよ!」

「明久くん!そのまま左にいけばあります!」

三上さんと姫路さんが一番答えのような気がする

「明久!頼むからまつすぐ行つて!!」

「そうだぞ?!左だ!」

「まつすぐ行つて!!」

まつすぐ・・・!この声は!!

「そこだー!ー!ー!ー!」

僕は高く飛び、棒を振り落とすと・・・

「あぶねえ!!!」

ギリギリ雄二の頭の横に当たってたのだ

「ツチ、外したか・・・」

「おい!?今外したと言わなかったか!」

「ごめん、雄二とスイカ間違えたよ!」

笑つてごまかせば許してくれるはず!

のび太side

あ・・・危なかった・・・

「い、命拾いした・・・」

「こ、怖かった・・・」

僕とジャイアンが冷や汗流してるそばでは雄二はというと・・・

「ほう・・・そうかそうか・・・」

雄二が怖い顔しながら、埋められていた砂浜を無理矢理脱出したのだ。明久は誤魔化せると思うのかな?

「イヤー本当にごめんね?雄二」

「いやいや、気にするな。今度は俺がやるから」

「あははは。やだな・・・順番守ってよ?」

「いやいや次は俺だつてなつていたからその棒を離そうか?」

「・・・っ!(メキメキ)」

スイカ割る棒をお互いが持ちながらメンチ切っていた・・・

「しかし、俺達はいつまでこの状態にいたら良いんだ?」

「さあ・・・?」

「なあ、のび太?早く脱出しないと嫌な予感が・・・」

「奇遇だね・・・」

僕たちは無理矢理出ようとする、深く埋められていたせいが出るの時間かかっていた

「おーい、ムツツリーニと秀吉、僕だけじゃあ、ジャイアン引き上げるの難しいから手伝ってくれー」

「・・・承知した」

「うむ」

スネ夫としての判断は僕よりも先に体がデカイジャイアンを引き上げて、そのあとに僕を引き上げる考えだと思ふ。判断は正しいよ

「うぬぬぬ、ジャイアン出れそう・・・!?」

「・・・いたくない?」

「お、重いろう・・・」

必死で三人がジャイアンを引き上げていた。早く僕も引き上げて

「そろそろ助けってくれたら嬉しいのだけど・・・」

「いい加減に離してくれたら嬉しいなく?雄二」

「いやいや、お前が離せば良いんだよ」

僕の嘆き声の目の前には明久と雄二が棒を持ちながら睨み合っていた。なんか嫌な予感がするなく

すると・・・

スポンツ!

「あっ」

二人の握っていた棒が……
空のほうに飛んでいき……

ゴーーーーーン!!

「あ……パハハ……（ガクツ）」

「のび太君……!!」

見事に僕の頭に当たり……意識が飛びました……。そういえば、
三上さんが叫び声だしていたような気がする……

小さなご褒美？

明久たちが暴れてたせいで僕は木の棒が頭に直撃して意識失って
3分・

「う．．．ん？僕は．．．」

「あつ、のび太くん？目が覚めたの？」

「三上さん．．．？はっ!? そうだ！僕は意識失っていたんだ！」「キャツ
！．．．．キャツ．．．？」

僕が動こうとすると、なにか柔らかいのを手を握ると、三上さんの
声が聞こえた

一旦整理しよう．．．。今僕は目を覚めました。今の状態は．．．
膝枕されている。

んん？

「膝枕!?もしかって．．．今僕がさわったのは．．．」
／／／／／

三上さんの胸を触ってしまった!?顔真っ赤にして驚いてる三上さ
んが僕の目に写った。僕はすぐに起き上がり、土下座をした

「すみませんでしたー!!!」

「つちよ!?謝らなくっても大丈夫よ?わざとじゃないのは分かってる
し．．．それにのび太くんだから嫌ではなかった／／／」

んん?三上さんが許してくれたのは嬉しいけど、小言で何かを言っ
ていた。とりあえず、申し訳ないことをしてしまった．．．

「僕が意識失ってどれくらい？」

「3分ぐらいだわ。心配したわ」

僕の問いに三上さんが優しく小さい子にあやすように答えてくれ
た。そういえば．．．明久たちは？

「私は今から瑞希達と食べ物を買いにいくから、のび太くんはここで
待っていてくれない?」

「え?でも、僕もついていった方が良いと思うけど．．．」

「でも大丈夫なの?まだ体を休めた方が良いと思うけど．．．」

三上さんが心配そうに言うが、僕も大丈夫だというと一つお願いさ

れた

「代わりと行ってなんだけど・・・坂本くと吉井くんを見といてくれない?」

「?良いけど・・・二人に何があったの?」

「女性陣にこつてりと絞られたみたい。工藤さんとかは参加してなかったけど・・・(私が怒ったのは流石に言わない方がいいわ)」

聞けば、僕がダウンした後二人が失礼な発言したみたい。姫路はオロオロとしていたが、島田は何でも、明久が「まな板」とかうっかり連想してしまう言葉にお仕置きされたみたい。雄二は・・・いつもの事だ

そういえば、三上さんはなんで膝枕してくれたんだろう?いつもより回復もはやかったしなんか体は軽いけど・・・

「とりあえず、二人は任して。姫路達と飲み物とかお願いしていい?危なかったら直ぐに連絡してね?」

「玲さんがいるから大丈夫だよ」

「・・・わかった。三上さんが大丈夫だというなら信用してここで明久達とここで待つよ」

ちなみにジャイアンとスネ夫は昼寝をしていた・・・ムツツリーニは輸血していて、秀吉は倒れてる二人にうちわで仰いでいた

三上さん達が飲み物買いにいったら数分たったら明久たちが目覚めた

「二人とも起きたみたいだね」

「命あるの素晴らしいな・・・明久」

「うん・・・のび太、僕の腕ある?」

「異常なし。意識清明で受けた答えも問題なし。麻痺も見られず、大丈夫と伝えよう」

「??」

「ああ気にしないで。雄二も今日が覚めたみたいだし、のんびりしといたら?」

「それは構わんが・・・翔子達は？」

「飲み物を買いにいったよ」

健康状態と後遺症無いのを確認したら、雄二篋質問が飛んできた。僕はその問いに答えると、雄二はなつとくしてくれた

すると

「お待たせしました！」

姫路が元気に弾みのある声で、僕らの方に戻ってきた

「お帰り。三上さんに姫路を含めた皆さん」

「ただいま。のび太くん」

ん？心なしか、三上さんが疲れてる顔をしていたので心配して声を掛けると島田達が教えてくれた

「いやあ、ちよつとナンパされちゃって」

「うち、ほんとああゆうの苦手」

「・・・私も」

何・・・？まさか・・・と思い恐る恐る三上さんの方を振り向くと苦笑いで頷いていた・・・

「ええ・・・本当よ」

「待つててね？三上さんをナンパした輩は誰か教えてね？分かれればこの距離で撃ち抜いてあげる」

「お、落ち着いて!?私は大丈夫だから！ね？」

「むう・・・。三上さんがそこまで言うなら・・・」

僕と三上さんがそうやり取りしてる片隅では・・・

「それは大変だったねー」

「テキトーにあしらつとけばいいじゃねえか？」

他人事のように、明久と雄二がそういうと女子の逆鱗にふれたのか怒られ始めた

「鈍くて恋愛に縁のないアキにはわかんないでしょうけどね！」

「失礼な！ぼくだってナンパくらい余裕で——」

「余裕でなに（ですか）？」

「・・・雄二は鈍感」

「俺のどこか鈍感だ!？」

それぞれの女子に怒られていた。ああ・・・無関心だから悪いのだよ？ エスカレートしないか心配して見ていた

「のび太はちゃんと美子の事を心配していたのに・・・。それにアキにナンパなんかできるわけじゃないじゃない？」

「そうですね。明久くんにナンパなんて似合いませんし、うまくいくとも思えません」

「・・・雄二も女心がわかってない。だからモテない」

「ひとには向き不向きというものがあります」

さすがに言い過ぎでは・・・と思い止めようとする雄二達はキレた

「上等だ！そこまで言われて黙ってられるか！」

「僕だつて怒るときは怒るよ！」

素晴らしいながら、ふたりはどっか行つた。ああ・・・やっぱりこうなるか・・・

一抹の不安を感じとりながらも、とりあえず三上さんに取り乱したことをまずは謝らなければ・・・

ナンパはみたら止めよう！

明久たちがナンパしにいったから、僕と三上さんと玲さん達と話し合っていた。ジャイアンとスネ夫と秀吉は砂浜で横になって日焼けをしていた。ムツツリー二は写真を撮りにいった

「明久達が怒っていったよね・・・」

「美波達も言い過ぎよ？あれでは逆効果だよ」

「僕らは事の原因の3人+玲さんもお話ししていた

「うう・・・でもでも・・・」

「心配してほしかったし・・・」

「・・・女の子として見てもらえてないかもしれないと思って・・・」

「アキくんは不得意なことをしてほしくないのです」

はつきりと明久達のプライド焼き付けた自覚が無いみたい・・・

「あのね？明久達も男だよ？あそこまで言われたら怒るよ」

「そうね・・・。気持ちはわかるけど、彼処までは言う必要はなかったわ」

「後、玲さんもせめて弟のことをもう少し信用して下さい。いつまでも子供としていられないので、たまには自分も厳しくしてください」

僕らがそれぞれ言うのと反省していた

「確かに言い過ぎたわね」

「このまま戻ってきたら良いですけど・・・」

「・・・お仕置きが良いのかな？」

「ナンパを本当にしたら流石に姉さんは怒ります」

・・・後半不穏な言葉を聞いたが、止めない。なにせ、明久たちも自業自得な部分があるのだから・・・

ってあれ？

「ジャイアンは？」

「え？・・・いつの間になくなって・・・」

仕方ない・・・

「折角だし、今いるメンバーで海を泳いだりしない？」

「それ、いいわね！」

「あ．．．あの．．．私はそんなに泳げないのですが．．．」

「浅瀬まで泳ごう？そんなに深いところで泳ぐのは流石に危ないわ」

「．．．玲さんはどうするのですか？」

「私は、泳ぎたいので参加します」

「ではワシも泳ごうかのう．．．」

「僕も泳ぐよ」

「僕も??」

ジャイアンと明久とムツツリー二と雄二以外は全員参加して、泳ぎにいきました．．．

ジャイアンはどこに行ったのだろうか？

ジャイアン side

やれやれ．．．明久達が心配で後をつけていたのだが．．．あいつらは本当に行動だけは早いよな．．．

「にしても．．．こっそり追いかけていたら、迷ったな．．．」

そんな遠い砂浜にいつていないのだが、人混みは多いせいか迷ったみたいだ

「参ったな．．．「良いから離してくださいませんか？」．．．ん？」

声した方を見ると、気の強そうな女性とそのお友達なのかな？3人が如何にも柄悪いやつらに絡まれていた

とりあえず、俺はゆっくりと近づいてあるいていった

「お嬢様！」

「．．．ど、どうしましょう!?!」

「私は大丈夫ですから二人は無理しないでね？あなた達、いい加減にしないと怒るわ」

「えー？いいじゃん？俺たちと楽しいことをしようぜ」

「そーそ」

ふむ．．．絡まれてるのは明らかだし、女の子は今にも怒りそうだな．．．

「私達は貴方みたいな方とは付き合う筋もありません。いきましよう？二人とも」

先程怒っていた女性が鋭い目付きで男を睨んでいた。すると男は気にさわったのか、手を出そうとしていた

「こんの・・・(ガシツ!)・・・あ?」

「人が嫌がってるのに、無理矢理誘う。挙げ句の果てには暴力か・・・」
「な、なんだ?てめえ? (力強い!?)」

「女に暴力するなど・・・教えられなかったか?」

俺は奴の手首を強く握ると、顔真っ青になりながら謝ってきた

「わ、悪かった!!俺が悪かったから離してくれ!」

「・・・この子達にもうナンパしたりしないよな?」

「し、しないから放してくれ!!たのむ!」

俺は無表情に離すと奴は手首の感触を確かめながら、そばにいたやつらと共に逃げた

「つたく・・・あ、ありがとうございます!」ん?」

俺が振り向くと、黒のポニーテールをしていてスラツとしていた体型で頼れるお姉さん雰囲気俺に近づいて礼を言われた

「いや・・・そちらに被害無く良かったです」

「いえ、本当に助かりました」

んん?・・・なんか、この子見覚えがあるな・・・

「・・・あの」

「は、はい!」

「間違いではなかったら・・・剛田武様ですよね・・・」

「え?」

なんで俺の名前をしってるんだ?そう少し警戒すると、向こうが手をポンとして挨拶したのだ

「久しぶりですから覚えてないのですね・・・。私の名前は氷華真理亜です」

「・・・ほへ?」

ひようかまりあ・・・ひようかまりあ・・・

「あー!?ってことは・・・」

俺が恐る恐る後ろにいる二人を指差すと、向こうは苦笑いしながら挨拶したのだ

「本当に久しぶりですね．．．氷華里緒菜」

「あ．．．あの！氷華 冬花です！」

．．．うん．．．柄ではないけどいいたい．．．
「まじかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！！」

昔の記憶と共に目の前の状況に俺は大きく驚いて声を出した。ゆるせ．．．。それだけ俺は今ビツクリしてる

のび太side

んん？

「どうしたの？のび太くん？」

「いや．．．今ジャイアンの叫び声が聞こえた気が．．．」

「気のせいじゃない？あのジャイアンなんだから大丈夫でしょ？」

「それもそう（だ）ね」

スネ夫の言葉に僕と三上さんも同意していた。ジャイアンなら大抵何かあっても打ち返ししそう．．．

「しかし、三上さん。ごめんね？しんぱいかけてばかりで」

「え？ど、どうしたの？」

「ほら．．．、さっきの気絶の時も三上さんに負担かけたと思うと申し訳なくって．．．」

すると、三上さんが優しく笑いながら「大丈夫」といった

「のび太くんはさ．．．以前、私と喧嘩した時にはきちんと話したらよかったのに、私が一方的に怒鳴ったじゃない？『そんな人だと思わなかった』とか『大嫌い』とか言ったじゃない？」

「うぐっ!？」

「のび太が真っ白になった!？」

「あ、ち．．．ちがうの！のび太くん」

あの時の話を持ち出されたらキツいな．．．。なにせ、過去最大の心折れた瞬間なんだから．．．

「ま．．．まあ．．．とりあえず、のび太と三上さん。そろそろ一回砂浜に戻ろう？」

スネ夫に言われて僕らは、水分とるために戻っていたら．．．

「あついていた。ねえ、三上さん。のび太とスネ夫を少し借りて良い？」

明久と雄二が戻ってきて、僕らを借りて良いと三上さんに聞いてきた。僕は所有物ではないよ？

「・・・もしかって、のび太くんをつれてナンパしにいくつもり??その前にきちんとのび太くんにさっきのことを謝った？」

「ひいひい!? (の、のび太!三上さんの怒りが怖いんだけど!?)」
「(う、うん!)」

三上さんが笑顔だったが、それはもうとても恐ろしかった…。僕とスネ夫は後ろに下がりながら三上さんの怒りをみていた

「三上さんごめんなさい!そして、のび太すまん!」

「あ、うん……。大丈夫だよ……」

その怒りを当てられた二人は真っ青になりながら土下座をしていた。本当に三上さんは何をしたんだ？

「のび太くん。折角だし、ナンパしにいつでも良いよ？」

「ううん。三上さんが心配だし・・・さっきのナンパされたことを聞いたらね」

「あちゃ……。明久と雄二はここから離れた方がいよいよ?もし、霧島さん達に見つかつたら怒られるのじゃない?」

「いつてきます!!!」

スネ夫がそういう!と二人は猛ダッシュでここを走り去った

「本当によかったの?滅多にそういう経験できないのに」

「ううん、いいんだ。でも、このままもう一泳ぎしても良いけど・・・時間はまだまだあるからな」

「それだったら、二人とも貸しボードで何処かに行ったら?」

スネ夫が提案してきたのだ。それは良いけど・・・スネ夫は?

「僕は姫路さん達と色々お話しするよ。滅多に会えない人たちだから」

「そういうえば、スネ夫くんは好きな人はいたの?」

「・・・さあ!いこう!」

三上さんの言葉にスネ夫は一瞬固まったが、何もなかったかのよう

に戻ったのだ。追及するのはやめた方が良さそう……

「明久たち、こればれたらお仕置きが確実だから……きをつけてね」
いまここにいない友人に心配の言葉を良いながら三上さんとスネ夫と楽しく元の場所に戻ったのだ

まさかの爆弾発言！

明久side

僕と雄二は今、あることに頭を抱えていた

「まさか、のび太もムツツリーニもナンパはだめだと思わなかった……！」

「取り敢えず、スネ夫を巻き込もうと最初は思ったが途中で忘れていた」

「でも……僕らだってナンパできるはず!!……ってあれ？」

「どうした？……ほう？」

『武さまは変わらず元気で、私は嬉しくございます』

『いや……俺としてはその三人がここにいるのビックリしてるんだが……』

なんかジャイアンとポニーテールのお姉さんと

そのお友達が楽しそうに話してる……。あんなジャイアンはじめてみる……

まあでも今はそれどころじゃない！

「俺達はナンパをしないとイケないのだからな！」

「うん！あつ！あそこの女性はどうかかな？」

「二人組だからいいな」

そう決心した僕らは勇み足のように砂浜を踏み、女性の方に声をかけた

「あの一ー」

数分後……

「いいこと？ボウヤ達？やたらむやみとナンパするもんじゃないよ」

「じゃーねー」

「はい……」

僕らはお姉さんにこんなナンパは嫌われると言われ、お説教されま

した……うう。中々キツイ言葉を言われました……

「明久……次にいこう……」

「うん……」

僕らはお互いに肩を抱き合いながら次の女性をナンパしようと思ったのだ……。何がなんでも見返したい……

「次はあの人だ！」

「オツケー！」

後に僕は思う……。何故あるとき素直に謝らなかつたんだろう……。なんて愚かなことをしたんだろうと思う

のび太 side

「明久達戻ってこないね……。そりやあ！」

僕は今三上さん達とピーチバレーをしていたのだが、ジャイアンも含めて3人がまだ戻ってきてきてない

「吉井くん達はまだしも……。よつと！」

「ジャイアンが戻ってきてないのは気になるね。島田さん！」

「たしかにそうね……。はあー！」

僕のアタックに三上さんが反応をして、スネ夫がトスを上げたら、島田が走り込みながら高く飛びアタックした

「……とれる」

「ナイスじゃー！たのむぞ、のび太！」

「もらった!!「させない！」え?!」

僕がアタックをしようとするのと三上さんが前でブロックをしたのだ。一瞬の出来事で、三上さんがブロックしたのが勢いよく跳ね返り……

「ぐぼっ?!」

「のび太ー!?!」

僕の顔面におもいきり当たったのだ。最近こう言うの多いな……。「だ、大丈夫？」

三上さんが心配そうに声をかけていたのを聞こえた僕は起き上がり、

笑顔で応えた

「大丈夫だよ」

「そう？良かった」

「のび太って時々頑丈よね・・・」

僕と三上さんのやり取りをみた島田がいきなりそんなことをいい始めた

「そう？」

「ええ。自覚ない？」

「そう言われても・・・」

「でも、美波ちゃんの言う通りです。先程の棒の直撃でも長く寝てませんでしたよ」

「・・・驚異の回復力」

「代表の意見に同感」

「・・・(コクコク)」

皆酷い・・・三上さんの方を見ると苦笑いしていた。神は僕を見捨てた・・・

「おーい、のび太」

「？この声は・・・ジャイアン？」

「オーイのび太。遅くなつて悪い」

「何処にいつてい・・・たの？」

「どうした？のび・・・るえ？」

「二人ともどう・・・え」

僕の様子が可笑しいと思ったのかスネ夫も三上さんも振り向くと固まった。姫路達も不信に思ったのか振り向くと僕らと同じようなリアクション取っていた

「ん？どうしたんだ？お前ら」

「ジャイアン・・・」

「もしかって・・・」

「ナンパしていたの!？」

「そうそう・・・ってちがう!」

「」「」「おお、ノリツツコミした!」「」「」

僕とスネ夫のボケにジャイアンが珍しくノリツツコミしてくれた。
僕だってたまには、ボケたいのよ……

「で、ジャイアン。後ろにいるポニーテールの女性達と歩いていたのは？」

「ん？あー紹介しようと思つて連れてきたんだ」

「初めまして。私は氷華真理亜です。こちらは私の専属のメイド方&妹の……」

「氷華里緒菜です」

「わ、私は……氷華冬花……です。よ、よろしく願います……」
ポニーテールの人が礼儀正しく言うのと、後ろにいた人も挨拶し始めた。この三人の関係とジャイアンの関係は……？

「多分、想像してる通りかと思われませんが私達ら氷華三姉妹です。私が長女で里緒菜が次女で冬花が三女です」

「宜しく願います」

「それで……ジャイアンにナンパされてここにきたの？」

「スネ夫……？」

「ひい!?痛い!?」

氷華三姉妹の挨拶に僕らも会釈すると、スネ夫が気になったのかそう質問した。すると、ジャイアンはスネ夫の言葉に小さく這うような声でいいながら頭に拳骨されて苦しんでいた

「(うわ痛いな……あれは……)で、三人とジャイアンの関係は何なんですか？」

「あら、それは……」

何だろう……?、とんでもない爆弾発言が落ちてきそう……

「私と武さまは……婚約関係ですから♪」

……ん

……婚約?

……誰と?

「ですから……私と武さまは……婚約関係です」

「『……ええええええ!!』
『!!』
『!!』
『!!』
『!!』」

僕らの声が辺りに響いたのだ……。とんでもない爆弾発言から数分たち……。僕らは落ち着いて聞こうとすると、ジャイアンが思い出したように言った

「色々と聞きたいと思うが、その前に……。明久と坂本がナンパしていたぞ？」

その瞬間、姫路と島田と霧島さんと玲さんがあり得ないスピードで消えた。ムツツリーニを連れていき……。明久と雄二……。もう止めないからね？今回は……

さてと……。残ってる工藤さんと秀吉と僕らとジャイアン達で……

「二」「海泳ぐか……」「二」

何事もなかったように泳ぐことを決めたのだ……。許せ、明久達「今回は助けられそうにも無いから……。骨は拾うよ……」

ここにいない友人達に労りの言葉を送ると共に風が吹いた……。頑張って生きて帰ってきなよ……

ナンパはダメ！絶対に！

明久side

僕と雄二は今、岩の海岸の方で山座りして海を眺めていた

「ねえ……雄二？」

「……なんだ？」

「さっきの女性のビンタ……中々痛かったね」

「……たしかにな」

「……はあ」

さっきの女性のビンタ攻撃を思いだし、僕らはため息をついた。遡ること数分前……

『お姉さん！』

『？何』

僕らは雄二よりも身長が大きく、スタイルのいい女性に話しかけたのだ。僕の呼び掛けに振り向いてくれて直ぐに話しかけた

『お姉さん、綺麗ですね！』

『っえ？』

『すごく優しそうですし、なんか大人の女性というか……大人の女性としての貫禄を感じとり声かけました！』

『あらあらっ？』

女性は戸惑いながらも、嬉しそうに聞いていたので僕らは止めの殺し文句を言おうと思い、ゆっくりと発音した

『本当にスタイルがよくて、まるで』

『ああ、まるで』

そう……まるで……

『まるで、エロ本のモデルみたいな！』

『……(プルプル)』

あれ？お姉さんが顔を下に向けてなんか震えていた。どうしたの
だろう？

『お姉さん？どうしました？』

『……ねえ……』

『は、はい!』』

『君達は未成年?』

??なんでそんな質問するんだろう?

『はい。そうですけど・・・?』

『そう・・・』

すると、女性が顔をあげて僕らを見たのだがその顔は優しそうな顔ではなく・・・

『(ポキポキ)』

完全に怒りの表情で目が据わっていた・・・。あれ?これって・・・

『あの?お姉さん?』

『一回・・・』

『え?』

『日本語をもう一度学びなさいー!!』

パァン!!^x2

『いたあああああ!!』

キレのいいビンタが僕らの頬に思い切り殴られました・・・。そして、女性は怒ってどこかに行き・・・話しは今に戻る・・・

「なあ、明久」

「何?雄二?」

僕は海の地平線を見ながら考えていたら、雄二が同じ方向を見ながら呼び掛けてきた

「俺は思ったんだが・・・俺達に問題あるんじゃないか?」

「僕らに?」

「ああ!うまくいかないのは、オレたちが本気じゃないからじゃないか?相手が好みのタイプじゃないから、無意識のうちに自分をセーブしてるんじゃないかってな」

「なるほど。本気が出せなきゃしようがないよね」

言われてみれば、その可能性が高い!!そうか!僕らはもっと自分をさげ出したらいいんだ!

「そうと分かれば、次のナンパがラストチャンスだ!」

「そうだね。だから・・・」

「絶対にクリアするぞ!!」

僕と雄二は拳をお互いに当てて、最後のナンパをクリアしようと思っ
合い入れて歩いた。

「全てはナンパ成功のために!!」

だが、僕ら後にこう思う・・・。何故、あるとき・・・冷静に考
えなかつたのか・・・

僕らが決心して歩くと、ポニーテールの女性と、栗色ロングの女性
かいたので僕らは声かけた

「あ、あの・・・じ、実はおれたち、道に迷ってさ」

「その、か、海水浴場を探してるんだけど、どこにあるか」

「バカ、ここが海水浴場だろ」

僕らがそんなやり取りをしてると、その女性は笑いながら僕らの腕
を引っ張った

「え?!」

「一緒に海を泳ぎましょう!」

「さあはやく!」

僕らは心の中であることが共有した

「(ナンパ成功したーーーー!)」

そう歓喜しながら一緒に海入ると・・・何か可笑しかった。すると、
雄二が驚いた声をしたので振り向くと・・・

「え、髪の色が脱色されて・・・」

「・・・私の髪色は元々黒だから・・・」

!?!!

「しよ、翔子・・・」

「き、霧島さん!?なんで――」

僕が聞こうと思うとガシャンという手錠のかかる音が聞こえた

「……え??」

今度はポニーテールの女性が自分の正体を表すかのようになり、自らウィッグを外した。すると、赤髪の下からは普段よく見る青い髪が現れた

「……すまない。明久」

「え、ムッツリーニ……どうして?」

僕がまだ頭混乱してるなか、ムッツリーニが説明してくれた

「……お前達がナンパしてるときいて俺は無理矢理協力するのを迫られた……」

「そんな……」

「……もし断れば……殺される勢いだった」

「そ……そうなんだ……」

よくよく見れば、ムッツリーニの体が小刻みになっていたのを見て、僕も小刻みになったのだ……

その様子からすると、大体はわかるけど……

「姉さん達怒っていた……?」

「……右腕一本」

右腕一本か……痛いだろうな……戻りたくないな……

「……右腕一本以外折るって……」

すると、タイミング狙ったかのように声が聞こえた

《明久君、早く戻ってきてくださいね》

《アキ、今日はお仕置きのフルコースだからね》

《アキくん、姉さんは哀しいです……1人の弟を失うということが》

「……嫌……!!!」

僕が叫んでるよそでは……

「……雄二、正座」

「嫌、海なんだが」

「……正座」

「こんなところで正座なんかしたら呼吸が……」

「……」

「正座……します」

雄二も命の危険が迫っていた……。ああ、今日は僕らの命日になるのか……

ゆっくりと……ゆっくりと命を刈り取る死神が近づいてきた……。さようなら……。生前の僕……

のび太side

僕とスネ夫とジャイアンは、今ジャイアンの婚約者の真理亜さんとその妹さん達の事に話してました

「ジャイアンに婚約者がいたなんて驚きだよ……」

「ああ。俺もついさつきまで忘れてたんだ」

「え?!」

僕の問いにジャイアンが苦笑いでそういうとスネ夫と僕は驚きの声をあげた。因みに三上さん達は女子トークというので、女子だけで話していた

「にしても……明久達はどこにいったんだらうね？」

「さあ？俺もあれ以降はあつてない」

「まさかと思うけど、命の危険で瀕死になってたりね？」

「まさかーそれはないでしょ……ん？」

すると、放送アナウンスが流れて僕らは静かに聞こうと

《明久君、早く戻ってきてくださいね》

《アキ、今日はお仕置きフルコースだからね》

《アキくん、姉さんは哀しいです……。1人の弟を失うということが》

知り合いの声が聞こえました……

「……」

僕らはお互いに今の声を聞いて固まり、そして僕はゆっくりとたちあがった

「ごめん。三上さん達の護衛たのんでいい？」

「任せろ」

「頼むね……」

僕の頼みに二人にここを任して僕は恐らく、そんなに離れていない友人達の暴走を止めようと動いた

……止めるつもりなかったけど……一回、あの人達に常識を教えとこう……。はあ……。ここまで来たらお人好しなのか苦労人なのか分からないよ……

心の中だけ叫ばしてもらおうね……

このバカあああああ!!!!

今なおお仕置きしてるであろうメンバーに止めるべく僕は歩いたのだ

浴衣は可愛い！

僕は今は、雄二と明久の看病をしていたのだが・・・

「あれ？雄二？」

「すまん明久。少し取り込み中ー何?!橋渡し有料だ?!ばかいえ！それはなー」

二人のうわ言が会話のようになってしまい、ドン引きしている・・・まさか、宿泊場所戻ってきてても目覚めないとはのう・・・」

「だな。いったい何があったんだ？」

「・・・触れてはいけない」

「そうだね・・・触れなかったら幸せなのもあるよ」

「そ、そうか・・・」

僕とムツツリー二の言葉に秀吉とジャイアンは引いていた・・・あれをみたら、嫌でもびっくりするよ・・・

「しかし、こいつらいつ目が覚めるんだ？」

「「さあ・・・？」」

その問いに誰も答えれず、ボーとしていた。

それから数分後、明久達は目覚めて起き上がったのだ。良かった・・・

「僕ら、よく生きていられたね・・・」

「ああ・・・良く覚えていないが、リアルに地獄を見た気がする・・・」

「お主らのうわごとが重なったときは、正直もうダメかと思ったぞい」
「驚異の生命力だね」

「なんか・・・お前ら人間やめた？」

「確かに・・・それは言ってる」

明久と雄二の言葉に僕は労りながら、多分失礼な発言をしてる
「しかし、良くこれだけで済んでるね？」

「確かに・・・確かにそうだね。僕ら結構マズイことをしたのに・・・」

「・・・異性と一緒に出掛けているのにナンパなんて、失礼極まりない」

「うぐっ・・・。まさかムツツリー二に正論言われるとは・・・」

胸刺されたかのように苦しそうな顔で呻いていた。まあ、ムツツ

リーニに言われるのはね……

「しかし、あいつらがこれだけ軽い罰で済ませるというのも気になるな」

「一般的には臨死体験を軽い罰とは言わんのじゃが……」

でも、最近だと最早定番の罰と言っても過言ではないけれど、玲さん加わった今回のお仕置きは中々に酷かった……

「でもこれで軽いなら……坂本と明久はヤバイのでは？」

「……」

2人の顔が少し青くなつたのがわかる。話題を変えないと話が進まない

「たしかこの後、夏祭りだよな？」

「そうそう。にしては、三上さん達遅いな……」

「真理亜達も遅いな……」

「真理亜？」

「だれだ？それ」

あつそつか。二人はいなかったんもね……

「真理亜さんはジャイアンの婚約者だよ」

「……え？」

「あれ？どうしたの？二人とも」

「なあ……俺の耳が可笑しいのかな……。剛田に婚約者がいるなんて聞こえたんだが……？」

「奇遇だね……僕も聞こえたよ」

あつ……現実を認めていない。仕方ない

「だから、真理亜さんはジャイアンの婚約者なの」

「……はあああああ!!!」

僕が再びそういうと耳元で叫んだのだ。うるさいな……

「あ、あのジャイアンに婚約者!」

「ありえん!」

「嫌、事実だよ。僕も驚いたけどさ……」

二人はいまだになつとくいかないのか唸っていると

「……お待たせ」

三上さんをはじめとする声が聞こえたのだ。その声に明久が振り向くと固まった

「みんな遅かったね・・・おお!!!」

「おお、凄いな」

「・・・時間がかかるもの納得」

「なるほど、浴衣じゃったか」

島田と姫路、霧島さん、工藤さんに玲さんが浴衣姿で出てきた。あれ？三上さんや真理亜さん達は？

「ごめんなさい。遅くなりました!」

「二〇待たせました!」

遅れて三上さんや真理亜さん達が出てきたのだが・・・僕とジャイアンは固まりました・・・

何故なら・・・

三上さんは鮮やかな花模様がついてる白の浴衣を着ていた。黒のポニーテールの髪型している長女の真理亜さんは青色の浴衣、次女の里緒菜さんは、紫色のロングとマッチしているかのように星空の模様を書かれている真理亜さんのよりもさらに青い浴衣を着込んでいた。

冬花さんは、おどおどしていたが黄色の浴衣を着ていた。因みに彼女は黒のショートカットである

「のび太くん?」

「二〇武様?」

僕らが固まっているのが可笑しかったのか心配そうに聞いていた。

えーと・・・

「てい!・(ポカ、ポカ)」

「二〇痛っ!」

「ジャイアンものび太も見惚れていたのは分かるけど、感想を言おうよ?」

スネ夫がそういうと三上さん達が顔真っ赤にしていた

「うん・・・。三上さん似合ってるよ!とても三上さんの可愛らしさと優しさがその浴衣に合うよ!」

「ふえ／＼／＼!?」

「真理亜達のは似合っているぞ。優しさとか、上品さが出ていて思わず見惚れていた」

「はう／＼／」

「真理亜さんと冬花さんが顔真っ赤になった・・・」

「そうですね・・・二人とも天然ですかね・・・?」

僕とジャイアンが誉めると三上さんと真理亜さんと冬花さんが顔真っ赤にしていた。その様子にスネ夫と里緒菜さんが苦笑いして話していた。本当に失礼だね・・・

「それではそろそろ行きましょう」

玲さんは車のキーを手にしている。それを疑問に思ったのか明久は怪訝な顔で玲さんに質問していた

「あれ?姉さん、車で行くの?」

「ええ、ここから距離は遠いので・・・それに、着替えもありますので」
着替え?ああ、帰りに浴衣から私服に着替えるのかな?

「でも、乗るメンバー多いぞ?入れるのか?」

「なにいつてるのさ?マイクロバスは18人でも乗れるようになってるから、真理亜さん達も乗れるでしょ?」

「あー確かに・・・」

明久の説明にジャイアンは自分の思った疑問がとけたのかスッキリしていた。ん?でも今疑問に思ったんだけど・・・明久達のナンパのお仕置き本当に終わりなの?・・・嫌な予感がするー。ダレカタスケーター

そんな不安と共に僕らは宿泊場所から祭りの場所へと向かったのだ・・・。どうか嫌な予感外れますように!

夏祭り のび太の場合

近くの小学校で車を止めて、僕らは徒歩五分でお祭りの会場に着いたのだ

「こんな大勢なら、回るの大変だね」

「確かにそうね・・・」

「では、こうしませんか？それぞれ別れて行動すると、集合場所はまた連絡しますが30分後に会いましょう」

大勢のお客さんを見て僕がそういうと三上さんが同意した。すると、玲さんが手を合わせて提案を出してきたのだ。なるほど・・・。それは言いかもしれないね

「じゃあ、三上さんは僕と行動してくれない?」

「いいわよ」

僕は一緒に回る人を考えていたら、真つ先に三上さんを思い浮かんで行くことにした。ジャイアンとかスネ夫は?

「俺は・・・どーするかな」

「嫌、そこは真理亜さんと回りなよ?」

ジャイアンのボケにスネ夫が尽かさずツツコミをいれた。すると・・・

「武さま。私と冬花と一緒に回りませんか?」

「・・・迷惑でなければお願いしたいです」

真理亜さんと冬花さんがジャイアンに誘うとジャイアンも笑いながらOKしていた。スネ夫はどうするのだろうか?

「スネ夫は私と回ってもらいます」

「じゃあ、お願いします。一人寂しかったので」

スネ夫は里緒菜さんと回るようになった。なんだかんだ回る面子が決まった。明久達は?

「アキ(明久)君?一緒にいきませんか?」

「私と回りますよね?」

「いや・・・その・・・」

なんか修羅場になっていたし、雄二はというと・・・

「・・・拒否権ない」

「・・・俺は無力だ・・・」

無条件で連れていかれていた。え？雄二は誰につて？・・・いつものことだから触れてないよ？

「ワシらはワシらで楽しむかのう」

「またあとでねー」

「・・・(コクコク)」

秀吉は工藤さんとムツツリー二と共に歩くみたい・・・。さて僕らも動くか

三上 s i d e

私は今、のび太くんと一緒に歩いているけど・・・内心かなり緊張しています！

「(男の子と夏祭り回るのは・・・あんまり無かったな・・・)ねえ！あそこに金魚すくいがあるわ！」

「あつ、本当だ！いこう！」

私達は金魚すくいを挑戦するために、店員さんにお金を払おうとしたら・・・

「ここは僕にお金を払わして？」

「え？でもそれじゃあ悪いし・・・」

「大丈夫だよ。おじさん！いくら？」

「二人で200円だな！」

そう言われて、のび太くんはお金を払い私にも金魚すくいの道具を渡されました

「さあやろうー！」

「ええ。どっちが多く釣れるか勝負しましょう！」

数分後

「・・・(ドヨン)」

「あはは・・・私の勝ちみたいね・・・」

Orz体勢になっているのび太くと私は落ち込んでるのび太くんを慰めながらどうしようかな?と考えていると・・・

「落ち込んでも仕方ないよね・・・。三上さん、彼処は?」

「射的みたいね・・・」

「射的か・・・。三上さんはなんか欲しいのがある?」

「欲しいもの・・・」

私は無意識に左の上の方に物凄く一発で落とすのは難関な所に置かれていた縫いぐるみを見た。白い猫の縫いぐるみだけど・・・可愛すぎて欲しいのだけど・・・のび太くに任せましょう

「ごめんなさい。考えた末、何でもいいわ」

「そう?なら何を当ててもいいんだね?」

「ええ」

「おじさん。これって一発だけ?」

「ん、ああ。一発で100円だぞ」

射的のおじさんに教えて貰ったのび太くんはお金を払い、ぶつぶつといい始めた

「こういう武器は銃と変わらないし、狙いを修正すれば・・・」

「すごい集中力・・・」

そして、鋭い目付きになり構えたのだ。まるで暗殺するような目付きになり構えた

「この一撃で・・・仕留める」

別人キャラみたいになってるわよ!?でも・・・なんか格好いい・・・

「狙い目は・・・コンー!」

のび太くんがそう言うのと弾丸発射されて・・・

「何!?!」

「え?」

打った弾は私が欲しかった白い猫の縫いぐるみに直撃して落ちたのだ。まるでスロモーションのように落ちていき・・・

ポトツ

白猫の縫いぐるみが落ちた

「す、凄いな・・・」

私が驚いてるとのび太君が苦笑いして、白猫の縫いぐるみを持ってきて渡しにしたのだ

「これで良かったのかな？三上さん」

「ええ・・・のび太君」

「ん？」

「ありがとう!!」

私は飛びつきりの笑顔を彼に向けたのだ。ああ、そっか・・・

「ぐふっ!？」

「?どうしたの?のび太君」

「な、何でもないよ・・・(上目遣い卑怯だよ・・・／／／無意識なのかな?)」

「?変なのび太君」

顔真っ赤にしてどうしたのかしら?でも・・・今はつきり私の気持ちも気づいたわ・・・

「ねえ、のび太君」

「ん・・・?」

「お祭り終わったら夜の散歩いかない?」

のび太君は一回キョトンとしながらも笑いながらオツケーしてくれた。そろそろ時間かもしれない

「そろそろ行こうか?三上さん」

「ええ」

待ち合わせの場所へと私達は歩いたのだが・・・後に待ち合わせの場所がとんでもない引き金となると夢に思わなかったわ・・・

夏祭り ジャイイアンの場合

ジャイイアン side

俺は今、真理亜と冬花と一緒に歩いている。つてかはぐれたら困るから手を握って歩いた

「人が多いですね。冬花は大丈夫ですか？」

「真理亜お姉さまと・・・武さまがそばにいるから・・・大丈夫・・・」

「つたく・・・、はぐれるなよ？無理だったらきちんと言えよ」

「はい・・・」

そういえば、里緒菜とスネ夫と一緒に行動取るのはビックリだな・・・

あの里緒菜がな・・・

「そういえば、武さまは葵お姉さまと同じ学校に通われてるのですね？」

「ん、葵さんに聞いたのか？たしかに同じ学校通ってるぞ」

「葵お姉さまは・・・三年でAクラスなのは聞いてますが・・・」

「ストップ」

「「え？」」

折角お祭りに来てるのに・・・

「あのな、そう堅苦しくしゃべらなくっていいぞ？年も変わらないし」

「私は元々この喋りかたなわけですから・・・」

「私もです・・・」

「なら、せめて様はやめてくれ。真理亜は社交辞令もあつたから余計に癖があるかもしれんが・・・」

「はあ・・・分かりました。武君」

「では・・・その、わたしは武さんと呼ばせて頂きます」

「よし！それでいいぞ！」

うむ！流石に様と使われるのは恥ずかしいし、年もそんなに変わらないのだから・・・

「つてか、何を食べたい？ふたりは」

「私は・・・ポップコーンですね」

「私もです」

ポップコーンあるか?と思いつつ俺は回りを見ると・・・

「あるんかい!」

思わず、関西弁擬きの突っ込みをしてしまった・・・。なにしてるんだ?俺は・・・

「どうしました?武君」

「い、いきなり叫んでビックリしました・・・」

「いや、なんかごめん」

俺は一体何でこんな事をしていたんだ?と思いつつも真理亜と冬花と一緒にならんでポップコーンを買って、食べながら歩いた。「そういや、あいつらに説明してなかったな。真理亜達は小暮葵さんの従姉妹であることと海外で留学していたことを」

「いずれは話す予定ですし、今はお祭りを楽しむ方がよろしいかと思われまます」

「そ、そうですね。一緒に楽しみましょう!」

「おう。そうだな」

二人の言う通りだ。今は夏祭りを楽しまんよ損だな!!

「でも・・・」

「ん?なんだ?」

「あの吉井様・・・いえ、明久様と坂本さまは帰りはあんな状態でしたのによく回復しましたね・・・」

「ああ、奴等は生命だけは俺達よりも強いかもしれないがな。多分だけど、あいつら宇宙にいても宇宙服なしで泳げそう」

「それって、人間ですか?」

俺の予想に真理亜と冬花はキョトンとしながら突っ込みをいれてきた。・・・ドラえもんの道具なら可能じゃないか?いつか帰ってきたら聞いてみよう

「あれ?向こうに何か盛り上がってるのがあるな」

「本当ですね。行ってみます?」

「わ、私も気になります」

俺らは手を繋いで歩くと俺にとっては嬉しいやつがあった

「的当てゲームか。しかも野球ボールで投げて景品をとると言う……ん？」

「……」

真理亜と冬花は何かある一点の方をじっと見ていて俺はそこを見
ると……

青のネックレスと赤のネックレスが景品として飾られていた。も
しかって……

「あれが欲しいのか？二人とも」

「え?!」

「い、いえ!」

「遠慮するな。俺の欲しいものはお前らのもの。お前らの欲しいものはお前らの欲しいものだ。店員さん!この二つのネックレスもらうと
る条件は?」

「そーだな……。パーフェクトとらないとダメだ。ボールは……1
2球だ。やるか?」

「おうよ!見てろよ!真理亜に冬花!」

俺はボールを貰い、指定の場所に向かった。心の中では感慨深く仕
方なかった

「ー野球ボール触るのも久しぶりだな……」

目をつぶり集中力を高めて、構えた。最初が肝心だ!と思いながら
投げると……

バゴン!!

番号の6に最初当たった。つち、真ん中当たった方が後々楽だったん
だがな……

「俺はあいつらのエースだ……。絶対にパーフェクトをとる!」

そう決心しながら、俺は順丈に当てていった。この調子でパーフェ
クトとって、あの二人に笑顔でいらわないとな!

こうして次々と的を当てていき……

「残り一枚ですね……。真理亜お姉様」

「そうですね。(頑張ってください……。武君!)」

俺の後ろでは真理亜と冬花が祈るように心配そうに見ていた……。安心しろよ絶対に当ててやる

「残り一枚……真ん中を当てたらいいだけだ！」俺はジャイアンだ……。絶対に当ててやる!!」

そう言うと共に投げると……

バゴン……

「……よし！」

「「「おおおおお!!」」」

「今めつちや速くなかった!？」

「漢だ！」

周囲からは称賛と好評価を貰い俺はガッツポーズしながら店員の方に駆け寄り、商品二つのネックレスを買った

「ほらよ。真理亜に冬花」

俺は真理亜に赤のネックレス、冬花には青のネックレスをあげた

「あ……ありがとうございます／＼／＼」

ん？なんか顔真つ赤にして礼を言うことあったか？まあいい

「そろそろ、待ち合わせの時間かと思われまますからいきませんか？」

「おおーそうだな」

「で、ではいきましよう」

俺達は待ち合わせの場所へと歩いた。そういえば、スネ夫と里緒菜は一体何してるんだろ？のび太達も。まあ……このあと何が起こるか分からんが楽しもうか！

そう心の中で思いながら俺らは歩き始めた

夏祭り スネ夫の場合

スネ夫 side

さて僕と里緒菜さんは今何してるかと言うと・・・

「……………」

後ろでジャイアンと真理亜さん達の追跡をしています。何でかと言うと…………

ジャイアンと真理亜さん達の進展があるのか気になっていた！

『お姉さま達と武さまの進展が気になります！』

といて、目を爛々として追跡することになった。まあ…………ジャイアンは鈍感だしね…………

「でも、里緒菜さん。これバレたら怒られませんか？」

「…………怒られますね…………確実に」

里緒菜さんは少しだけ震えながら答えていたのを見て、一体何されるのか少し気になりました

「つてか、里緒菜さんも絶対に敬語を使う人なの？」

「私は…………メイドでもありますから…………」

「ならば、こう言うときはメイドの里緒菜さんは敬語を止めて普通の里緒菜さんに戻っていいと思うよ？」

「え？」

「今ここにいるのは僕と里緒菜さんだけ」

僕がそう言うのと里緒菜さんは考える素振りをしていた。もう一押ししとこう！

「たまには肩の力を抜かないとしんどいと思いますが？」

「…………それもそうね。スネ夫さん」

あつ、様も敬語抜けた。でも、今の表情は物凄く穏やかに笑っていた

「所で、里緒菜さんとかは高校生？」

「私は高校一年で冬花は中学生三年ですね」

「ほへー。じゃあさ、真理亜さんは？」

「真理亜お姉さまは…………高校二年生になると思います」

「思います?」

「私達、三姉妹はつい夏前まで海外で留学していたのです。とは言っても、冬花はやっぱりこちらで受験準備するために先に春帰国していたの」

「え?!セレブ!?!」

「?ハイそうですが・・・?」

「じゃあ、真理亜さんと里緒菜さんは高校はどこに?」

「真理亜お姉さまは武さまの通われてる学校に行く予定です。普通は同じ学校を通えばいいのですが、たまには別の学校でかよって学んでみるのもありかと思ひまして試行錯誤してます」

ふむふむ。となれば、里緒菜さんはまだ高校決めていないが真理亜さんは決めたと言うわけか

「里緒菜さん。僕らが話してる間に三人は的当てのゲームをするみたい。あつ、フランクフルトいります?」

「え?!いつのまに!?!あつ、ご丁寧に頂くわ」

僕らはフランクフルトを食べながらジャイアンの事を話していた

「そもそも、なんでジャイアンは婚約者になったの?」

「・・・詳しい話は避けますが、幼い頃の武さまはお姉さまに何かプロポーズに近い言葉を言っていたみたいです」

「るえ?!」

「もちろん幼いときなので、言葉の意味はわかっていなかったと思いますが・・・」

なんかジャイアンらしいと言うかなんと言うか・・・

「にしても、ジャイアンが投げる姿は久しぶりにみるな」

「?武さまと一緒に野球していたのですか?」

「はい。僕とジャイアンと・・・のび太。この三人はいつも野球をしていました。地元のチームでジャイアンが監督でした」

小学校のときの事を思い出しながら、色々と話した。そういえば・・・ドラえもんがいなくなってからのび太は少し変わったな・・・

「あ、あとひとつで当て終わるみたい」

すると、ジャイアンは思い切り腕を振りかぶり・・・勢いよく投げる

と最後の的を当てた。そして、周りが大歓声を起きた

「す、すごい……」

「さすがエース！」

ジャイアンは商品を貰い、真理亜さんと冬花さんにプレゼントしていた。ジャイアンはそう言うところがあるから嫌いになれないのよね……

「スネ夫さん、そろそろ集合の時間ですよ？いきませんか？」

「え？もう!？」

慌てて時間を見ると、待ち合わせの時間が来たのだ。時間がたつのはやいな……

「スネ夫さん」

「何ですか？里緒菜さん」

「私の事はさん付けしなくたっていいですよ？その代わりといってなんですが……せめてちゃん付けか呼び捨てでお願いします。あと敬語もなしで」

里緒菜さん……いや、里緒菜ちゃんが真面目な顔で伝えてくれた。こう言うときは誘いは断っては失礼だから……

「わかったよ。里緒菜ちゃん」

「はーん」

「ご機嫌になった里緒菜ちゃんと一緒に歩きながら、待ち合わせの場所へと向かった。でも、何だろう？長年の経験なのか、このあと面白ー嫌な予感がする

とりあえずいつてみるか！

断れば・・・

僕は待ち合わせの場所へと行くと、雄二達がもう居たのだ。珍しい・・・

「おまたせ。僕らで最後かな?」

「おう、のび太と三上!」

「のび太様達が最後でございます」

僕らで最後か。まさか明久が10分前行動出来ると思わなかった

「今何か失礼なこと考えた?」

「さあ?」

「そういえば、吉井君は瑞希達と回って楽しめたの?」

三上さんが明久にそう質問すると、明久は急に黄昏て答え始めた

「野口英世先生がとんだよ・・・」

「「「ああ・・・」」」

その言葉だけで大体察した。後ろで喜んでいる二人を見て、大分払ったのか・・・。お疲れさん、明久

「あれ?なんかあるよ」

公園の野外ステージの近くで明久が見つけた看板の文字を見ながら鳥の唐揚げを頬張るジャイアンが読み上げた

「ん・・・納涼、ミス浴衣コンテスト」だつとよ? (モグモグ)

「今回のお祭りの目玉イベントかな?」

「ミスコンか。面白そうだな」

ミスコンという名前自体はいろんなところで耳にしたりするけれど、実際やるのを見るのは初めてだ

「このお祭りは町おこしも兼ねているのかもしれないですね。色々と手が込んでいますし」

「凄いわね。浴衣の貸出とかもやってるみたいじゃない」

「・・・撮影チャンス」

「へえ、ボク、ミスコンがあるなんて全然知らなかったよ」

「凄いですわね」

看板を見ているジャイアンと明久のところに続々と皆が集まって

くる。皆も興味があるのかな？

「・・・面白そう」

「みんなが参加するなら参加するわ」

霧島さんが雄二の裾を掴んでそんなことを呟いていた。三上さんは、その光景を見ながら意見を言った

まあみんなが楽しめるならそれでいいけど、問題は皆が出場したからないって可能性は高い

「それはいいですね。頑張って皆で出場してみませんか？きっと良い思い出になると思いますよ」

姫路から意外な返答が帰ってきた

「えええっ!?!姫路さん!?!嫌じゃないの!?!」

「はい。恥ずかしいですけど、それくらいへっっちゃらですっ!」

「ホントにホントに、いいの?ステージに上がるんだよ?」

姫路が何かと勘違いしていないかどうか確かめる為に、明久は再度聞いていた

「はい。大丈夫です。皆と一緒に頑張れますし、良い思い出になると思いますから」

「じゃあ、申し込んでみようか。皆可愛いし、きっと勝てると思うよ」

「じゃあ、俺は真理亜達と観戦しとくか。って唐揚げなくなつたな」

「ジャイアンはこの瞬間でも食べるのやめないの!?!」

「まあ、ジャイアンらしいけど・・・!?!」

そんなやり取りをしている時に、背中から寒気がした。

「はいっ。出てみましょう・・・この場にいるみんなで」

「散!」

「・・・逃がさない!」

その言葉を聞いた瞬間に逃げようとした雄二と明久をそれぞれの隣にいた霧島さんと島田が捕獲した

「アキ。どこへ行くこうとしているのかしら?」

「・・・雄二。コンテストに参加する。この場にいる全員で」

2人とも笑顔が崩れていない・・・。僕らは被害ないからあれだけど・・・同情しかないよ

「ね、ねえ。何を言っているのかな……？僕には全然意味がわからないんだけど……」

「だ、だよな明久。なぜ俺たちが肘関節を極められているのか、全然意味がわからないよな」

諦めなよ……。ここまできたら許してくれてないとわかるはずだよ？

「明久君。坂本君。まさかとは思いますが……」

「……昼間のナンパ……」

「あの程度で許されたなんて、思っていないわよね？」

そんな島田や霧島の様子をみた三上さん達はどういうと……

「全部このための伏線ってわけね……。狙い通り過ぎて怖いわ」

「あらあら……」

「す、凄いです……」

三上さんは呆れていて、氷華三姉妹は驚いて困惑していた

「『罪には罰を、駄犬には鞭を』」

どこの調教師の台詞……!?

「で、でも、いきなり女装なんて無理があるよね？」

「だ、だよなあ。俺たちは見ての通り男だぜ？」

確かにそうだね……。ん？

「あつ……」

「どうした？のび太？」

「あのさ、ここに来る前に玲さんの言葉覚えてる？」

「玲さんの言葉？……あつ」

「『着替えがある』って言っていたから、つまり……」

明久と雄二はそこから先は言わずに、顔真っ青にして震えていた。

答えがわかってしまったってビックリしてるね……

「だ、だが待つてくれ！細身の明久ならともかく、俺のガタイで女装には無理があるはずだ！ここは明久の女装だけで納めてくれ！」

「キサマ雄二！一人だけ助かろうというのかこの裏切り者！」

「……雄二も吉井も、往生際が悪い」

「まったくよ。少しは男らしく覚悟を決めた土屋を見習いなさいよ」

自分までとぼちちりを喰らうのは勘弁して欲しかったのか、この場から逃げ出そうと試みたいだけけど……あつさり工藤さんに捕まっていた

「ダメだよムツツリーニ君。友達を見捨てちゃ、ね？」

「……俺は、無関係」

「知ってるんだよ。キミがこつそりボクたちの水着姿の写真を撮っていたのも、浜辺でお姉さんたちにナンパされたのも、全部」

「なあ!? 工藤もムツツリーニの女装みたいよな!」

「……(ガクガク)」

「勿論!」

雄二が何を思ったのか、突然工藤さんに話を振るとムツツリーニは小さい声で「なしっていつてくれ……!」と言っていたのだがOKされたことにより、絶望の顔色浮かべていた

ドンマイ。ムツツリーニ……む?!

「のび太、ジャイアン、スネ夫も出てくれるよね? ね?」

「く、くるな!」

「来るんだ! 君たちがこつち側に来れば、誰もかも痛み分けだ!! さあ!」

「いまの明久は狂喜になっている!？」

「使いどころ間違えてない!? ジャイアン!」

「ええい! 何を言おうが僕らはナンパしてない! してないんだ! だから関係ない!」

明久の気迫ある言葉にジャイアンとスネ夫がコントをしていたが、僕ははつきりと拒絶をしていた

すると……

「武さま……」

「私達は男気のある武さまを見たいです……」
「ぬっ!？」

真理亜さんと冬花さんが目をうるうるして問いかけるとジャイアンは呻いていた。頑張れ! ジャイアン!

「……仕方ありません……。武さまのこの世で怖いのはー」

「すまん！参加するから言わないでくれ!!」

さて！読者の皆様に問題です！ジャイアンがこの世で一番怖いのは？!

そのあなた正解です！そう！ジャイアンがこの世で怖いのは：

「のび太くん？」

「はい？」

答える前に三上さんに呼び止められました。なぜに？

「いえ、いきなりどこかに遠い目になったから・・・」

「そう？」

「うん。あつ、のび太くん。土屋くんから手紙を渡された。なんでも伝言代わりだつて」

「ムツツリーニから？何々？」

・・・!!

バタン!! (落ち込む)

「三上さん、僕参加するよ・・・」

「えっ!?ど、どうしたの?いきなり落ち込んで!!?」

「うん。簡単に言えば・・・屈した」

「??」

いったい何を読んだのかあえて聞かないでほしい。うん・・・

「つてあれ?スネ夫は参加しないの?」

「参加するよ!拒否権ないんだから!」

理由を聞けば、この場のノリで見る限り断れば危険だと判断したみたいだ・・・

「そもそも、僕らが出場したいなんて言っても受付で弾かれるよ!」

「そうだ!明久の言う通りだ!」

「あ。それじゃあ、こうしましょう。用意して、受付で撥ねられちゃつたら私たちも諦めます。でも、そうでなければ明久君たちはきちんと出場する。そういうことでどうですか?」

まだ議論していた・・・。まあそれがつてり早いね

「諦めなよ……。もうこうなったら止まると思えないよ」

「くっ！まだだ！まだおわってない！」

「……雄二……？」

「明久くん？」

「アキ？」

「『ギリギリのお仕置きとこれ。どっちがいい？』」

「『もうそれをお願いします!!』」

二人はあっさり諦めて土下座した。始めっからそうしたら良かったのに……

あれ？僕らも女装するのよね？……気持ち悪くなってきた……

控え室と悲しみ

「僕らは今控え室にいるのだが……なぜ受付はOKしたのだ!? 神は捨てたのか!? 愛はそこにないのか!」

「はあ……憂鬱だよ……」

「流石に……俺様もこれは恥ずかしいぞ」

「……もう諦めなよ……のび太にジャイアン……」

「僕ら3人はあまりのダメーヅに落ち込んでいたのだ。それとはよそに明久達はどうと……」

「酷い……酷いよ秀吉、こんな全力投球……」

「すまんなお主ら。メイクも立派な演劇の技術の1つが故に手加減ができなくてのう」

「……土屋香美つて」

「僕なんか吉井秋子だよ……」

「お前らなんかまだいいじゃねえかよ。俺なんか洪雄麗だぞ……女装した挙句に中国人設定だぞっ!!」

「四人の会話を聞いて僕らはその言葉を聞いてため息ついていた

「君たちなんてまだましき。僕は野比のび子」

「僕は骨山スネ子……」

「俺様はプロレスラー留学してきた設定で、名前は、王 五里羅だぞ!?!」

「秀吉のメイク技術によって明久、雄二、康太は見事なまでに完璧な女装をさせられた。ちなみに僕もスネ夫もだ。ジャイアンは……想像任すよ」

「まあ……なにかを失った感じはするね」

「僕がそういうとタイミングを計ったかのように姫路達が入ってきた。」

「6人とも、浴衣スゴく似合ってますよ」

「ホント……凄く可愛いわよ」

「皆後で写真撮ろうね」

「……雄二のは丈が少し足りない。あと、色気がない」

「アキくん。キレイに成長してくれて、お姉さん嬉しいです」

「姉さん。それは弟に言う台詞じゃないよ……」

姫路の台詞に島田が同調していて、工藤さんと霧島さんはイキイキと指示だしていた。写真なんてなし！絶対！

「のび太くん、本当にお疲れさま……」

「武君、応援してます！」

「……が、頑張ってください！」

「スネ夫さんは……苦労してるわね」

僕は三上さんに慈愛の目で見られながら、言われた。うう……癒されるけども……なにかを失った気がする

「そろそろ係員がくるね……」

「はあ……やるしかないわよ？」

「それでは予選が始まりママーす！出場者の皆様は特設ステージの裏までお集まりください！」

まるでその声が死刑宣告にしか聞こえないのか、僕を含めて6人が震え上がっている

「どうやら始まるようです。行きましようか、皆さん」

「明久君、坂本君。逃げちゃダメですよ」

この二人は……男の気持ちわからないのかな？って思ったのはなぜだろう？

「……どうしよう？」

「どうもこうも、やることは一つしかないだろ？」

「ああ……そうだな」

「逃げれないなら、予選で敗退するしかないよ」

「何でこうなったんだろう……」

明久の疑問に僕らはそれぞれ答えて、スネ夫は切ない落ち込みで嘆いていた。やれやれ……

でも……

「これで予選でも通過してしまえば、冗談抜きでこの夏の良い思い出になってしまおうよね……」

「そうだね・・・」

「「夏の・・・良い哀しい思い出に・・・」」

全員が口を揃えて悲しげに呟いた。本当に・・・どこで道を間違えたのやら・・・

「んんん？　そういえば、なぜワシも参加してるのじゃ？」

「「今ごろ気づいた!」」

やっぱり秀吉は秀吉だった・・・。普通に考えたら気づくと思うんだけど・・・

《それではいよいよ今年から始まりました新企画! 第1回・納涼ミス浴衣コンテスト》を開催いたします》

スピーカーから割れんばかりに司会者の声が聞こえてくる。いよいよか・・・

《このコンテストは“浴衣の山畑”協賛による浴衣を題材としたコンテストであり、名前の通り浴衣の似合う美女を見つけようというものです》

ふむふむ・・・

「ねえ、のび太」

「何? 明久」

「1つ良かったと思うのがあるんだけど・・・」

「奇遇かもしれないけど、恐らく同じ考えだと思うよ?」

「「水着審査なくってよかった・・・!!」」

水着審査なんてあったら即アウト・・・羞恥を晒す羽目になってしまう。浴衣のみのコンテストで本当に良かったと、心の底から思っている

《審査方法は得点式で、予選は3名の審査員たちによる独断と偏見で、決勝は審査員プラス観客の皆様の投票によって行われます》

成る程・・・となれば対策立てるには僕よりも先に明久とムッツリーニとスネ夫を見て対策立てたらしいのか

《それでは三番目のかたどうぞ!!》

そうして考えてるうちに明久の番号になった。大丈夫かな・・・
《それでは、自己紹介の方からお願いします》

「は、はいっ。吉井、秋子です・・・」

マイクを通してでもギリギリ聞こえる程度の声な上に、裏声で男というのを隠しているのがよくわかる

《特技などはおありですか?》

「え、えっと・・・強いて挙げれば料理です。パエリアとかカルボナーラとか」

・・・大丈夫かな?

《お料理ですか。家庭的で素晴らしいですね。では、ご家庭でも料理はなされるのですか?》

「はい。一応毎日・・・」

《毎日ですか!今時の若いお嬢さんにしてはとても珍しいですね。これはポイントが高そうですね!それでは突っ込んで・・・彼氏さんはいらつしやいますか?》

「「ブツ!?!」」

「い、いません!一度も・・・」

《なんと!会場の男性の皆様には嬉しい情報ですね!審査員の山畑さんどうおもいますか?》

《携帯番号を教えてくださいたら、オジサンがあとでお小遣いをあげよう》

《はい!貴方がスポンサーでなければ、ビンタ一発噛ましましたが、流石にそうはいかないので質問を変えさせていただきます。秋子さん、今日の浴衣を着る上で気をつけたポイントはどこですか?》

「えーと・・・あまり、身体のラインが出ないようにしました・・・」

《先程から真っ赤になって俯いていることからわかるように、秋子さんはかなり恥ずかしがり屋さんなようですね。山畑さんは、秋子さんの着こなしについて何か質問がありますか?》

《下着は付けているかどうかお聞かせ願えませんか?》

もはやセクハラのレベル越えてる。この人は自身がセクハラ発言してるの気づいてるかな・・・?

「下着なんてしていません!!」

！
明久は力強く言う与会場は大盛り上がりだ。まさに明久はバカだ

《あ、秋子さん!?!こんなセクハラな質問に答えなくても大丈夫なんですよ!?!男性客の皆様、ウエーブはおやめください!ここはそういった場ではございません!とにかく吉井秋子さん、いろいろありがとうございます!》
「……こうして明久の予選は終わってしまった」

「もうダメ……死にたい……」
会場の雰囲気と審査員についてある程度わかったものの、袖から見ていると本当に笑える

《——では、5番の土屋さん。自己紹介をどうぞ》

「……名前、土屋香美です」

《ちよつとハスキーな感じの声がたまりませんね。今日はお友達と海水浴ですか?》

「……はい」

《浴衣の着付けは大変だったでしょうが、よく着たりされるのですか?》

「……いいえ」

《ご友人は会場に来ていらつしやいますか?》

「……はい」

《……》

「なるほど」

「え？なにが」

僕の理解したのを明久は気になり質問してきたのだ。

「まあ・・・簡単にな話だけど基本的に “はい” か “いいえ” の答えだけで淡々と話を進めていく気だよ？」

「あっ！つまり」

「あれなら興味をそそることもなく無難に予選落ちが可能となる」

その証拠に、司会者も何を質問したらいいのか困っている

《では、浴衣の他にどのような服がお好きですか？》

「・・・チャイナドレスにレーススクイーンにチアガール看護師にキャビンアテンダント更にはファミレス店員に女性警官制服やレオタードとOLスーツにセーラー服やブレザーや巫女服に加えてメイド服やテニスウェアなども素晴らしいと・・・何でもありません」

趣味丸出しの答えだ!? しかもあの回答のあとの “何でもありません” は手遅れ以外なんでもない・・・

《こ、これには驚きました・・・香美さんはクールな態度と可憐な外見に加えて、コスプレの趣味がごありのようで》

「こつちも別の意味で驚きだよ！」

僕らは司会者やムツツリーニの暴走を見て思わず、突っ込んでしまった・・・。

「・・・忘れてください」

俯いて首を必死に降っている。あの姿はまるで小動物だ

「こっ、う・み！こっ、う・み！」

「・・・こ、困る・・・っ！」

会場からの香美コールに慌てふためいている。残念なことにムツツリーニの予選突破は決まったも同然であろう

《これは凄い手応え！香美さんの決勝進出は決まったも同然でしょう。香美さん、ありがとうございます！》

「・・・本当に・・・困る・・・っ！」

残念・・・ムツツリーニ。さて次のはスネ夫か・・・どうするのかな？

《さあ、次はどんな子が出てくる!?6番目のひとでてください!》

呼ばれたスネ夫は悲壮感漂いながら、ステージへと向かった・・・

《自己紹介をどうぞ!!》

「骨山スネ子です」

《おやおや、先程の人とはまた違ったいい声ですねえ》

「ありがとうございます」

《さあ！スネ子さんに質問ですが、最近楽しかったことはなんですか!?》

「最近ですか？ヨーロッパ旅行したことです。2週間ですが」

《ヨーロッパ旅行ですか!?しかも二週間!?》

なるほど、自慢攻撃でうんざりさせて予選敗退する算段か

《審査員の山畑さんどうおもいますか?》

《おじさんと旅行いらないか?》

《はい。スポンサーではなかったら鮫の餌にでもしていたかもしれませんが、やめておきましょう。となれば、かなりのセレブですかねえ》
「はい。そうです」

《では、少し時間の都合もあるので最後の質問ですが、恋人はいるのか!?》

「・・・いません!」

《おお!会場の皆様も盛り上がりながら、玉の輿を狙うかのように手をあげています!》

・・・このパターンは上がるの?

《さあ!スネ子さん!ありがとうございます!戻ってください!》

司会者の指示通りに戻ったスネ夫の第一声は・・・

「なにか失った感じだ・・・」
落ち込みながらそう言ったのだ・・・。
強く生きよう？スネ夫・・・

夏の黒歴史

明久、ムツツリーニ、スネ夫が終わった……。三人とも燃え尽きてる……

「つてか、のび太がやった後に俺の後に坂本か……」

「僕はまだしも二人は確実に予選はいたいと思うのだけど……それはあくまで『普通の審査員』ならではの話だからね」

「だな……」

そう……普通の審査員なら脱落してもおかしくないのに、質問されたのが時々趣味を丸出しなところがある。それにより、彼らは暴走したのだ

「全く情けないな……」

「次はのび太だろ?というか、眼鏡外しても見えたって……?」

「うん?ああ、コンタクトはしてないし、眼鏡は外して置いてやることにしたよ」

ちなみに眼鏡は三上さんに預かってもらってる。それと目があるまり見えてないからぼやけている感が凄い……

「しかし、のび太……お前何か達観してないか?」

「ふっ……。人間諦めが肝心さ……」

「こいつがいうと説得力があると思うのは俺の気のせいか?」

ふふ、別に命がとられる旅じゃないのだから……代わりに失うものが大きいだけだけどね……

《七番目の方出てきてください!!》

出番か……。腹くくれ!野比のび太!

「はーい。僕の名前は野比のび子です!」

《おう!?まさかの僕っ子ですか!?会場の皆様盛り上がってますか!!》
「皆さん!よろしくね?」

「」「うおおおおお!!よろしくううう!!」「」

《良い状態で盛り上がってますねえ!!さあ、早速質問します!彼氏はいますか!?!》

「いませーん。あつても、好きな人はいるかも?」

《な、なななんとー?!会場の皆様にはショックな情報ですねえ…》
とにかく何がなんでも予選敗退するようにそういえば、審査員の評
価落ちるはず!

《では、山畑さん質問をどうぞ》

《うむ、問おう…おじさんと付き合わないか?》

「お断りします」

《はい、スポンサーではなかったら鮫の餌でもしようかと思いましたが、そこはスルーします。そして、のび子さん。スルーしてもよかったですよ!》

おお、いつもながらこの人はプロだな…。ん?何か最後の質問
嫌な予感する

《では、最後の質問ですが…夢はなんですか!?》

むっ…この質問は…嘘をいうか!

「僕はさ、心清らかな方と伴侶になり、暖かい家庭築きたいです!」

《何とも暖かい夢ですね!そして、皆様は俺が心清らかと叫びながら
手を上げないでください!》

「」のび子!のび子!」

まさかのコール!?うそ!?

《コールは自粛してください!》

《最後に1つ良いですかね?》

《はい、構いませんよ》

《…私と結婚しないか!?》

《はい!スポンサーではなかったら、ビンター発囓ましました。野
比のび子さん!ありがとうございます!》

僕は観客に手を降りながら、退場したのだ。ああ…黒歴史が
確定だ…

退場してから、他の参加者や関係者がいないのを確認してから控え
室に戻った

「……ただいま」

皆の表情を見るとさつきまで笑ってたであろう、頬が若干痙攣しているのが数名いた

「ごめん……。明久達そこ退いてね……」

「あつうん。いいよ……」

バタン!!!

僕は近くにあった机でうつ伏せになり……

「何でこうなる……」

恐らく、人生で確実にベスト10に入るはず……本当に何でこうなるのさ……

「のび太くん……お疲れさま」

「完全に心おれていますね……」

三上さん……。ありがとう。真理亜さん、もうやる前から折れていましたよ……

「ふっ……。俺が失格になる方法は思い付いたぜ！」

「そういつて失敗しそうだね……」

「が、頑張ってください！」

「気を付けてね？武くん」

二人にメール送られたジャイアンは親指をたててステージへあがった

《さあ！お次はなんと！海外から日本にプロレスラーで留学してきた王》

「おう！オネガイシマース！」

《さて、王さんに質問ですが最近覚えた日本語は？》

「月夜ばかりトオモウナ、コノヤローデス」

《所々日本語がうまい発音してますが、そこはスルーします。山畑さん質問は？》

《好きなき飯は何だい？》

「お袋の料理デス！」

《珍しくまともな質問しましたね》

《なら、おじさんとこのあと食べに行かないか？もちろんー》

《はい、発言控えてください。では、王さんはプロレスラー留学ですよ
ね？》

「ハイソウデス！」

《かなりテンション高いですねえ……。山畑さん、質問はありますか
？》

《おじさんとカラオケ行かないか？》

「カラオケ!? oh! good!!」

《はい断ってください！それと、goodではなく、badです！》

一瞬歌う態勢はいたのは気のせいだと思いたい。もし歌えば、僕ら
もただではすまないからだ！

《休みの日は何をしてますか？》

「筋トレーデスネエ」

《なるほど、道理でガタイが良い女性なんですね！》

本当は男だけど、そこは触れてくれなくてよかったね？ジャイア
ン

《山畑さんどうおもいますか？》

《好みのタイプの一人ですねえ！最後には1つだけお願いして良いか
な？》

「ハイなんでしよう？」

《色気を使う感じで日本語でいってくれないか？できれば、流暢に！》
!?まずい！

「ウフ……。そのあなた……。良い男ね……。お姉さんと良いことし
な。い♪。」

うぶっ?!?!吐きそうになる気持ちを押さえながら、どうにか耐えてい
た。因みにスネ夫と僕は顔真つ青通り越して、胃が気持ち悪く感じた
「コレデ依依デスカー？」

《はい！ありがとうございます！そして、うちの審査員が迷惑かけま
した！皆さん暖かい拍手を!!》

「アリガトウゴザイマス！」

ジャイアンは一礼して……。控え室に戻ると……

「殺せ……」

今までに見たことないほどの落ち込みを出していた……。お疲れさん……ジャイアン……

「さて、俺は1人抜けさせてもらうか。所詮お前らは男らしさが足りないってことなんだよ」

「ぐふっ!?!」

僕とスネ夫はなにか突き刺さったかのように心にダメージを負った。それはいつてはいけない……

「そんなことを言ってられるのも今のうちだよ。きつと自分の番になっただらきつと慌てふためくはずだよ」

「確かに……あの審査員、何を飛ばしてくるかわからないもんね」
「何をバカなことを。俺のガタイを見てみるよ。身長だけならまだしも、この骨の太さは完全にマイナス要素でしかないだろ。俺の予選敗退も決まったも同然だろ」

「二」フラグ立てたな（ね）「二」

「うるせえ!……まあそこで俺の隠しきれない男らしさを見てることだな」

これだけ大口を叩いて、通ったら弄ろう。とにかく弄ろう!

《それでは9番。今度か中国からご参加してくれました洪さん、どうぞ!》

「洪雄麗デス。ヨロシクお願いシマス」

《これはまた……背の高い方ですね。安畑さん、どうですか?》

《山畑です!!そうですね……素晴らしいですね。個人的に私、背の高い方は大好きなんですよ》

「っΣ!?!?」

やはり雄二もやられたか……。これで逃げ場はなくなった……

《おおーっ!審査員の高評価が得られました!では小畑さん。洪さんになにか質問をどうぞ》

《私と新婚旅行に行かないか?場所は……シンガポールで!》

《はい!つつこみませんよ!色々言いたいことがあっても堪えて飲み込むのがプロフェッショナルですよ!》

あつ、雄二が固まっている。まあ、あまりのショックに絶句しているのだろうか

「こ、国籍違ウノデ困リマース」

《愛があれば大丈夫です。マイハニー》

「愛ナンテアリマセン」

《私には愛が生まれる自信がある》

「ワタシアナタノコト嫌いデース」

《友達からでも構わない。一生大切にする》

なに……この怒濤のやり取りは……。雄二も怒りそうで肩が震えている。まずいな……

「いい加減にしるよ!? オツサン!」

とうとう我慢できなくなつた雄二は、演技も忘れて審査員の胸ぐらをつかんだ。これは不味いと思つた瞬間……

そんなとき、反対側の袖からバチンという電気の音がした

「……雄二は、渡さない……!」

霧島さんがスタンガンを片手に立っていた。これは……

「のび太くん、逃げましょ?」

「……うん」

巻き込まれると思ひ、僕は三上さんと共にてを繋いでここから離れた

『うぎやあああああ』

審査員の声が聞こえたのは気のせいだと思いたい。コンテストは結果としては、審査員の負傷によりそのまま病院送りで終わってしまった

……ここでミスコンが開かれることは2度とないだろうね

お祭り後の遺恨・・・

僕らは今、何してるかと言うと・・・

「の、のび太君元気だして?ね?」

「武さま、大丈夫ですか?」

「お、お疲れさまです・・・」

「スネ夫さんも・・・ね?」

それぞれの女性に慰められていた。うう・・・何でこんなことに・・・

「もう一思いに焼いてくれ・・・」

「燃え尽きた・・・」

「何で僕ちゃんも参加したんだろう・・・」

僕らは悲哀漂いながら、そう言う日より一層に心が暗くなる・・・

「結局、恥をかけたのは僕らだけじゃないか・・・」

「・・・心の傷を負った・・・」

「色々な意味で一生忘れられない夏になったな・・・」

夜、ペンションの庭に設置されているコンロでバーベキューの準備

をしながら明久達も黄昏ていた

「今回の少しやり過ぎちゃいましたね」

「そうね。今回のことはあれで水に流してあげましょう」

少し・・・?今この二人少しといわなかった?気のせいかな?

「それに冷静になって考えてみると、ウチらもステージに上がらな
きやいけなかったのよね」

「そうですね・・・怒っていたから気になりませんでしたけど、今思
うと危なかったです・・・」

「・・・中止になって良かった」

「私もああいった催し物はあまり得意ではないので助かります」

「ボクはちよつと面白そうだと思っただけだねー」

ほほう・・・そうかそうか・・・

「お、おい?のび太の背中から黒いオーラ出てないか?」

「き、気のせいだよね?」

「・・・残念ながら、俺も見える」

「南無阿弥陀仏」

「いや、ジャイアンそれはどうかと思うよっ」

「触らぬ神に祟りなしじゃのう・・・」

明久達が失礼なことをいうな。あつははは

「の、のび太君。落ち着こうね?」

「落ち着いてるよ?三上さん」

「目が据わってますわ・・・」

「こ、こわい」

「三上様たちの言う通りです(恐ろしいです)」

三上さん達も冷や汗だしながらそんなことを言う。おかしいな? 僕冷静だよ

そんな様子に先程まで話していた島田達も冷や汗だしながら聞いてきた

「あの・・・のび太君?」

「もしかって・・・」

「怒ってますか?」

姫路や島田と工藤さんが恐る恐ると聞いてきた。すると、霧島さんと玲さんが空気読んでいたのか読んでいなかったのか、分からないがさらりといった

「のび太君、そうカリカリしてはいけませんよ。これを飲んでください」

「・・・落ち着こう」

プチーン

「・・・今回の問題騒動の二人と三上さんや真理亜さんの三人姉妹除いて女子は正座してくれませんか?」

「え?何で僕らも!?!」

「そっだぞ!?!」

「正座・・・してくれませんか?」

「・・・します」

明久と雄二は諦めてすぐに正座した。すると、女子で島田達が僕の言い分に反論していた

「何で私たちも?!」

「そうです! あんまりです!」

「あれ? 何で僕も?」

「訴えますよ?」

「・・・」

今回の女装提案に賛成していた女子は、全員不満そうに言っていたけど・・・関係ない

「・・・正座してくれますよね?」

「なんでー」正座してくれますよね?」・・・はい」

「正座します」

女子も正座した。尚、地べたは痛むのでタオル使って正座してもらった

「まずは、女子から先いこう。玲さん? あなた最年長なのでから、こういう盗撮行為はどうかと思いますよ? 後、然り気無く霧島さんも撮っていたよね?」

「・・・心当たりはございません」

「ほほう? では・・・なんでこの動画が撮っているのですか? 流石にこれは怒りますよ?・・・これのデータ完全に削除しなかつたら弾丸でこれを破壊しますよ?」

「ごめんなさい、反省しました」

よし・・・。まず、これでデータは消えるはずだ。次は、工藤さんが先

「工藤さん。面白いからといって、ノリノリでしないでください。僕らは男ですよ?」

「あはは・・・。巻き添えにしてしまったのは流石に問題だよね・・・ごめん!」

工藤さんはすぐに謝ってきた。まあ・・・、止めてほしかったのは割りと本気で思っていたよ?

「次に・・・姫路と島田?」

「な、なんででしょう?」

「確かに明久達の行動も問題あるけど、それをきっかけにそうなった

のはなんでだと思う？勿論、これは今正座してる女子に言えることだよ？」

「・・・えーと」

「答えは簡単だよ。君たちの言い過ぎなのが原因」

「え?!」

「あのね、言葉つてのさ本当に見えない武器なんだよ？自分達が気づいてないのかもしれないけど、心傷つけてしまったのはあるよ？ね？」

「はい・・・」

「僕の言い方がきついのも分かってるし、申し訳ないよ？でもね・・・子供ではないんだから、もう少し冷静に判断しないと取り返しつかないときもあるからね？」

「取り返しつかないこと（ですか）？」

「たったひとつの言葉や嘘でも、人の信頼が無くなることなんてあり得るからね？」

「?」

「っ!」

僕の言葉に姫路と島田はわかっていかなかったが、ジャイアンとスネ夫は昔のことを思い出したのか、しかめ面になっていた

「自分がされて嫌なことを明久達にしていたら、それこそ本当に嫌われていいのなら止めないよ？」

「ごめんなさい！私たちが悪かったです!」

いや、そういうことではなくって・・・まあいいや

「女子全員は、先に食べておいて？正座させてごめんね？」

僕がそう言うと、賛成していた女子は反省したのかちよつと考えていた。言い過ぎたかな・・・

さてと・・・

「三上さん達や姫路達も先食べておいて？ジャイアン達はあとよろしくねー?」

「あれ?のび太君はどうするの?」

「ん?この今回の女装大会に出てしまう切っ掛けの二人に少しだ

け・・・話したいから後で戻るよー」

「(ガクガクブルブル)」

僕と三上さんがそうやり取りしてる横では、明久達は震えながら正座していた。三上さんは??となっていたが、移動してくれた

いなくなつた後、僕は二人の方に振り向きながら問いかけた

「ねえ、二人とも」

「は、はい!!なんででしょうか?のび太さま!!」

「なんで様付け?そして敬語なの?」

「い、いや・・・その」

「お前が今恐ろしく感じるんだが・・・」

失礼だな・・・と思いつつも、僕は手を止めていなかった

「あの・・・つかぬことを聞くけど・・・その右手にあるものは・・・」

「拳銃・・・だよ?僕らの頭を撃ち抜くの?」

「あははは。おかしいこときくなー。拳銃なわけないじゃない?」

「(ホッ)」

「・・・お仕置き用の拳銃さ」

「っ!」

僕がそう言うと、二人は天国から地獄に突き落とされた顔をしていた

「ま、まて!俺達は被害者だぞ!」

「そうだよ!」

「そうだね。確かに女子が言い過ぎてたのはあるね」

「だろ!?」でも、結果ナンパに走つたのはだれ?」・・・俺たちです」

「だよ?そしてそのお仕置きがどうなった?」

「女装してミスコン出るはめになりました・・・」

よくわかつてるじゃない?そう・・・もとは二人が原因でもあるんだよ?僕も巻き添えと言う形でではめになったんだよ?

だから・・・

「お仕置きゴホンゴホン。拳銃で君たちを撃ち抜くね?」

「二言いい直せてないし、怖いわ!!」

「問答・・・無用!!」

「ぎやああああああ!!!」

僕の怒りぶち曲げた攻撃は見事に二人へ攻撃するとともに、魂の叫びが聞こえたが気にしない気にしない!

数分後はボロボロになった二人を引き連れて戻ってきたのを見て、何人が震えていたが気にしない。お仕置きするなら、命奪うほどは危ないからセーブはしてるけどね?

だって自分が逆の立場で軽い臨死体験したくないからね?

夏と言えば・・・？

明久達のお仕置きも終わり、きちんと姫路達は明久達に謝っていた。きちんと僕の言いたいことを理解してくれて何よりだ

「しかし、お前そんなお説教するキャラだったか？」

「多分、あの学園いってからそういうの増えてしまったからだと思う」
「昔ののび太知っている面子からしてみたら、信じられないねー」

バーベキューのセットをし終えて、火を起こす為の炭などを入れながらジャイアン達と話していた

因みに女性全員がお話タイムはいていた。秀吉とムツツリー二は明久達の持ってきたバーベキューセットを炭で入れていた

「スネ夫もバーベキューセットを用意してくれたし、真理亜さん達が豪邸だからなのか材料高級用意してくれたね」

「僕もきちんと材料用意したよ!？」

「わかってるって。しかし・・・もう、あいつが居なくなってから何年だ？のび太？」

ジャイアンは火をおこしながら、寂しそうにある人物を思い出したのか僕に聞いてきた

「六年のときに別れたから・・・4, 5年かな・・・？」

「4, 5年か・・・。あいつが居なくなってから、俺達もバラバラになっ
たもんな・・・」

「そうだね・・・」

「子供のときは、ドラえもんがいた日々は楽しかったね・・・」

「そうだな。数々の冒険もしてきたし・・・」

「普通の少年時代に経験できないことを沢山味わってきたよね・・・」
「そういえば、静香ちゃんも久々に会ってドラえもんとともに冒険過

ごしたあの日々を話したいな・・・」

彼女との初恋には終わったけど・・・ね

「なあ、のび太」

「どうしたの？スネ夫」

「お前・・・三上さんの事」

「うん。僕の気持ちも固まったよ・・・」
「・・・」

スネ夫がなに言いたいのかも分かるし、心配してるのも分かる。けど、もう自分の気持ちに素直にならないとね・・・

「つてか、そろそろ具材も焼かないとね？」

「そうだな！」

「僕ちゃんの華麗な料理捌きに驚くなよ!？」

「いや、それは遠慮する」

「なんでー!？」

暗い雰囲気振り払って、僕らは笑いながら話していた。・・・もう一度あいつに会いたいのには僕らの共通の気持ちだよ・・・君もそうだろ？ドラえもん・・・

三上 side

私達はさつきまで女子トーク弾んでいたのだが、のび太君達の方を見ると私達は心配そうに見ていた

「武さまもそうですが、お二人も何か思い詰めた顔してますわね・・・」

「真理亜お姉様の言う通りです・・・。スネ夫さんも寂しそうになっていきます」

「一体何の話をしてるのでしょうか・・・」

真理亜さんが発言すると、里緒菜さんと冬花さんが同意していた。勿論瑞希達も心配そうに見ていた

「一体何の話をしてるのでしょうか？」

「多分、あの面子から考えたら昔話だと思うけど・・・」

「何か重たいねー」

「・・・少し意外」

「勉強の話でもしてるのでしょうか？」

「いえ、それはないと思います」

玲さんの言葉に私は思わずツツコミをいれてしまった。のび太君達が暗くなるのはもしかして・・・

『ドラえもん』

『冒険』

『五人は深い絆で結ばれていた』

期末試験でのび太君が寂しそうに話していたのを私は思い出した。ドラえもんさんと昔冒険していたから、恐らくそれを思い出したのかしら……

でもそれを本人に聞くのも、こわいわね……。でもあんな寂しそうな顔を見て、ほっとけないから後で話そう……。彼と二人で……。ね

のび太 side

僕らは、先ほどの暗い雰囲気振り払い二つのバーベキューセットを近づけて火を起こした

「明久、具材の方は大丈夫？」

「勿論！……ねえ、のび太に聞きたいけど」

「ん？なに？」

「のび太ってさ……昔話してくれたじゃない？ドラえもんの事を少し」
あー、確かに期末試験の勉強で話していたね。でもいきなりどうしたんだ？

「楽なバーベキューセットって、ドラえもんはもってないの？22世紀からきていたのよね？」

「さあ？確かにドラえもんは22世紀の猫型ロボットだけど、僕の知らない道具は多分まだ沢山あったと思うからもしかしたらあるかもね？」

「そっか。ねえ、賢くなる道具はないの？テスト100点とる方法とか」

「そんなのあるわけ……あったね」

「「あるんかい!!」」

雄二とムツツリー二と秀吉が口揃えて突っ込み入っていた。さすが切れのあるツツコミ

「うん。あるよ」

「あー、たしかにあるね・・・デメリットもあるよ」

「?スネ夫も何か使っていた?」

「うん。ほらあれだよ・・・のび太も覚えてる?」

「あー、確かにおぼえてるよ・・・」

スネ夫と僕はげっそりして言うと、ジャイアンはジャイアンで別の事を思い出していた

「たとえばどんな道具?」

「まあ、これはデメリットもあるが便利と言えば便利な道具」

「そう・・・暗記パン!」

「!!!「暗記パン?」!!!」

僕がその道具の名前を言うと、皆はキョトンとしていた。って!?!いつの間に三上さん達も!?!

「ねえ、のび太?暗記パンはどんな効果が?」

「俺が聞いていたのは、暗記するものをパンに移して食べると頭が入るとかだったよな?」

「うん。ジャイアンの言う通りだよ」

「!!!「はああお?!」!!!」

まあ、恐らく世の中の人々が欲しい道具なのは間違いないと思うけど・・・どうなんだろう?

「って、そろそろ焼き終えそうだよ。皆、自分のお皿ある?」

「よしやあああ!皆!食べるぞく!」

「!!!「おおお!!」!!!」

僕とジャイアンの言葉に皆は先に取ろうと急いで取り合いになっていた

「ハイ。三上さん」

「ありがとう。のび太君」

僕は焼いたお肉とお野菜を三上さんに渡すとお笑顔で礼を言われた。やっぱり優しいな・・・

そろそろ自分の気持ちも素直にならないと・・・

「三上さん。今夜の夜11時半に一緒に海歩かない？」

「? いいわよ?」

三上さんは僕の提案にオツケーしてくれた。さあ・・・野比のび太!
!もう後は腹括らないと!

でもその前に・・・

今は美味しく食べないとね!

夏の夜に……

食事が終わって、片付けしてる最中に三上さんから「お風呂入る前に聞きたい」と耳打ちされたので、僕は了承したのだ。

男部屋で僕は待ち合わせの時間がそろそろだと分かり、動こうとしていたら……

「どこかにいくのか？」

「……少し散歩にね？」

「そうか……」

雄二……こういうときだけ鋭いな……。そう思いながらもドアを開けて出ていき、歩くとバツタリと三上さんと遭遇した

「あれ？」

まさか、遭遇すると思わなかったけど、とりあえず外へ歩くと、三上さんも僕の意図に気づいて着いてきてくれた。その間は無言だったことだけは言おう……

外の砂浜に着き、僕らはお互いに海を見ながら無言だったが、僕が先に話を切り出した

「こんな遅くにごめんね？」

「構わないわ。話はなにかしら……？」

三上さんが若干緊張していたのは僕でもわかった……

「うん……。三上さん、まず君にどうしても確認したいことがあるけどいいかな……？」

「？何？」

「あのときの不良達に拉致寸前されたときに助けた女の子は……。三上さんで間違いない？」

「！……思い出したの？」

「うん。クラス分けの試験で行くときに起きたことだよね……。？間違いない？」

「ええ……。あのときは助かったわ。そして、ごめんなさい……。あの

とき、私が気を付けたらあなたは今ごろ・・・」

「ううん。元々Fクラスいくこと考えていたのだから気にすることないよ」

三上さんが申し訳ない顔をしていたが、気にしてない。それに納得したので

「だから、僕の事を知っていたんだね？小学校の時だけじゃなく、二年生の振り分け試験の起きた出来事も」

「ええ・・・」

「三上さん、僕はその事に責めてきたわけではないんだよ。まず、この話は終わり!!」

「そうね・・・。？この話は？」

「うん。三上さん、もう少し歩きながら話さない？」

「構わないわ」

僕らは月のいい当たり砂浜まで、歩いて座った。波の音を聞きながら、僕は口を開いた

「・・・三上さんと出会ってから何年かな？」

「小学校4、5年の時だから・・・6年間は経っているのかしら？」

「出会って別れて、高校生になりまた会えると思わなかったよ」

「そうね。あなたはFクラスで私はEクラス・・・違うクラスなのに、ここまで仲良くなると思わなかったわ」

確かにそうだよね・・・

「色々なことあったよね？特に合宿や美波の時は私が長い間、あなたに負担かけて倒れてしまったのよね・・・」

「まあ、島田の時は僕健康管理きちんとできてなかったわけだしね」
「でも追い詰めていたのは私でしょ・・・考えてみたら私は失敗ばかりしてるわね」

自嘲気味に言う三上さんに、僕は・・・

・・・ポフン

「え？」

「……」

僕は三上さんを抱き締めたのだ。これ以上落ち込む彼女を見たく
なかったからだ……

「の、のび太君??」

「ごめん。これ以上三上さんの辛そうな顔みたくなかったから……」
「(そっか、やっぱり私はのび太君の事が……)」

「三上さん……、僕は人に誇れるほど賢い訳ではないし、運動もダメ
ダメな人間だけど」

「?のび太君……」

僕は抱き締めるのをやめて、三上さんに向き合っていた。三上さん
に……僕の気持ちも伝えるんだ

「(もう僕の気持ちも嘘つきたくない……。だから……)三上さん……」
「はい」

「僕は……野比のび太は三上美子さんのことが……大好きです!!」
「……っ!!」

「もし、いやなら……ビンタでも構いません!どうか僕と付き合っ
てください!」

「のび太君……目をつぶって」
「?わかった」

僕は三上さんの言う通りに目をつぶると……

「これが私の返事よ……んっ」
「……!?!」

え／／／／ぼ、僕は今……三上さんにキスを……!?

「そ、その……／／／／こ、これが私の返事よ／／／」

「う、うん／／／／。それをしたと言うことは……お、OKというこ
とだよ／／／?」

「はい／＼／＼私、三上美子は……野比のび太さんと付き合います／＼／＼」

三上さんが赤面しながらも笑顔で返事してくれた。よ、よかった！人生ではじめて告白が成功したよ……

「ねえ……のび太君は英語しゃべれる？」

「うん。多分それなりにはできるようになってるよ」

「なら、私が今から言うことも聞いてくれない？」

？三上さんが言いたいこと……？なんだろう？

「わかった」

「じゃあ……いうわね」

「うん」

「I and Yoshiko Mikami, the Nobbi extension thicket, oh, eternal love is promised. I, d like to get married to you and build a happy home. (私、三上美子は野比のび太さんと永遠の愛を誓います。そして、あなたと結婚して幸せな家庭を築きたい)」

そ、それって／＼／＼!?

「When I, d like you, I, d like just not to associate and also to associate now by the marriage premise. (貴方が良ければ、付き合うだけじゃなく結婚前提でこれからも付き合いたい)」

「Of course. I, d like to live with you until this life comes to an end. (勿論。この命尽きるまで……君と共に生きてい)」

僕の答えは決まっていた。そして、この命は君のために……君を守るために捧げる。例え世界中が君を悪く言っても……必ず守る！

「のび太君・・・んっ」

「んっ・・・」

こうして・・・僕と三上さんは月の明かりと砂浜の波の音と共に・・・

一つの影が重なった・・・

絶対に・・・守るからね？三上さん

その帰り道にて……

僕は今、三上さんと手を繋いで旅館へ歩いて帰りながら話していた
「そういえばバーベキューの時、のび太君とか剛田君やスネ夫さんが
寂しそうな顔をしていたのはなんで?」

「あれ?見ていたの?」

「寂しそうな雰囲気漂っていたのみんな感じ取っていたわ」

「ああ、それはね……ドラえもん達と冒険した日々の事を触れて話して
いたのさ。昔の事をね」

「あつ、ごめんなさい……」

「気にしなくたっていいよ。もう昔の事だからね」

昔の楽しかった冒険のことは気にしなくたっていいけど、そういえば
三上さんにたまにはそういう話するのもありかな……

「三上さんが良ければ……昔の話いくらでもしてあげるよ?」

「本当!?!」

「うん本当だけど……。そ、その……」

「のび太君が言いたいことわかるわ。せっかく恋人になったのだから……
そ、その……下の名前でごんてくれない?」

「うつつん／＼。よ、美子さん／＼」

「はう／＼(うう、こ、これは／＼う、嬉しすぎて天国いきそう!!)」
うう／＼／改めて、恋人になったのだと自覚すると恥ずかしいし、

下の名前を呼ぶのは／＼

でも……僕はこの人と一生生きていきたい。それだけは何があつても
守るからね

そう決心しながら、歩くと草の方から何か音がしたので振り向くと……

「暴れるな明久!」

「うるさい!のび太の首を……あつ」

「」「」「あつ……」「」「」

「……え?」

振り向くと明久達がさつきまで隠れていたのか、頭に葉っぱがついていた。うん……色々と言いたいけど……

「どこまで、聞いていた？」

「……えーと……」「……」

「まさかと思うけど……見た？」

「……逃げる!!!」

「逃がすかー!!」

僕はジャイアン、スネ夫、明久、雄二、ムッツリーニ、秀吉の6人を追いかけたのだ。女子のことは美子さんに……任そう

まずは……この覗き軍団を裁いてやるううう!!

美子 side

私は今、美波と瑞希と玲さん、霧島さん、工藤さん、そして、真理亜さん三姉妹と話をしていた。

「さて……皆さんは……そ、その……聞いたのですか？」

「……見てないです」「……」

「私の顔を見て、話してください。そして教えてください」

私は笑顔で話すと……

「……「ごめんなさい。聞いてました」「……」

「どこから聞いていたのですか？」

「……これを」

? ? テープレコーダー?

霧島さんから差し出されたのを私は疑問に思いながらも再生ボタンを押すと……

『I and Yoshiko Mikami, the Nobie extension thickness, oh, better to get married to you and build a happy home. (私、三上美子は野比のび太さんと永遠の愛を誓います。そして、あなたと結婚して幸せな家庭を築きた』

い』

『When I, d like you, I, d like ju
st not to associate and also t
o associate now by the marria g
e premise. (貴方が良ければ、付き合うだけじゃなく結婚
前提でこれからも付き合いたい)』

『Of course. I, d like to live wi
th you until this life comes t
o an end. (勿論。この命尽きるまで・・・君と共に生きて
い)』

!?!

「こ、こ・・・これって／＼／＼!?まさか、録音したの!？」

「いやー、これはその・・・面白かったよ!」

「・・・っ(プルプル)!この・・・」

「あら?もしかってこれは・・・」

「お、怒られるパターンですかね・・・?」

「逃げる?」

「逆に逃げないで大人しく怒られる選択はありますか?」

「・・・お姉さまや冬花の言う通り、それ以外の選択ありませんね」

「・・・というわけで・・・」

彼女たちは笑顔でこちらに見て・・・

「」「」「逃げます!!」「」「」

「逃がさないく／＼／＼／!!」

絶対にあの録音を何があんでも消さないと!!!私は全力で追いかけて、録音を消すことを決意して追いかけた

のび太side

僕は、今彼らを全力で追いかけていた。彼らがいると言うこととムツツリーニがいると言うことは・・・

「まさか聞かれた・・・!?録音された可能性もある・・・!?」

もし、あれがFFF団に聞かれたら・・・

「相手するのが大変だ．．．!!」

僕の今、服の中に拳銃（お仕置き用）が．．．二つある！

「ふふふふふふ．．．、お仕置き．．．楽しみだ！覚悟しろ．．．明久達!!!」

森のなかで逃げたお仕置き対象組を逃さないと決心しながら全力で走っ

フフフ．．．絶対に逃さない!!

ガチャンとセーブポイントをはずした僕はどこにいるのか警戒しながら彼らの逃げた方向へ向かった

ブルツ!!!

「!!!．．．あれ？これつんだパターン？」

突然の悪寒と嫌な予感をした明久たちは果たして逃げ切れるのか!?

悪いことしたらそれなりに仕返しされる

明久side

「はあはあ・・・」

僕は今、全力で森から抜け出して海の方へ逃げていた。僕らは何て愚かなことをしてしまったのだ・・・!!

「くっ！なんとかにげきらないと!!」

「明久!!」

！この声は・・・

「雄二！逃げ切れただね!!」

「なんとかな・・・既に、秀吉、スネ夫が奴によってやられた！残ってるのは俺とお前と剛田!!ムツツリーニはわからん!!」

「そんな!!」

いくら何でも規格外すぎる!!

「俺達は選択を誤ったんだ!!あいつを怒らしてしまった!!」

「くそ!!このままでは僕らも危険だ!」

その瞬間・・・

「うぎやああああ!!」

この声は・・・ジャイアンの声!?

「くそ！剛田も殺られたのか!？」

「雄二！なんか文字おかしいよ!?!?!」

「細かいこと気にするな!!このままでは俺達も殺られるぞ!？」

そうだ！そんなことをしてる場合ではない!!今は・・・バーサー○ー
ならずの、のび太から逃げない!

「落とし穴をつくって、逃げ切る?!」

「そんな時間はないだろ!?!」

「く、なら他に提案はある!?!」

「・・・お前が犠牲なったら俺が助かる!」

まさか!?!

「貴様！自分だけたすかろうとしてるな!?!」

「忘れたか・・・？俺はお前の不幸が大好きなんだよ!」

「この外道!!」

分かってたよーこの畜生!!

「そもそも!なんで僕らがこんな目に!!」

「そりゃ・・興味本意で聞きに行っただからなー」

「よくよく考えたら、なんで録音したんだろう?」

「・・・たしかにな」

ムツツリーニが録音してるし、映像も残ってると思う。それに・・

「殺したいほど妬ましい!!」

「へえ・・・。なら、録画も録音してたわけ?ムツツリーニと共に」

「そうそう。ムツツリーニと・・・っへ?」

「ま・・・まさか・・・(ギツギツギツ・・・)」

僕と雄二はブリギの首のように恐る恐る振り返ると・・

「漸く・・・見つけた♪」

物凄くいい笑顔で笑っているのび太が居ましたが、僕には今の彼

は・・・ヤクザも逃げるのではというぐらい恐ろしい微笑みでした

「面白い話してるね・・・すこーし、詳しい話聞きたいな〜♪」

「お、おう・・・。の、のび太か・・・」

「そ、その拳銃はなんですか?」

僕らは思わず敬語で返事したのは悪くないはず!何せ・・目笑つ

ていないのび太を前にして堂々といえる?!無理だよ!

「ムツツリーニの証拠の物を破壊し終えて、漸く残り二人となった

けど・・・ここにいたのか」

「(拳銃から血まみれの後が見えるのですが!?)ムツツリーニは・・

?」

「さあ・・・?今頃、妄想しすぎて出血してるから輸血してると思うよ

?」

「(さらば・・・ムツツリーニ)」

この場にはいない血塗れで倒れて瀕死状態のムツツリーニに労り

ながら、僕らはどうするか頭を回していた

のび太の武器は拳銃2つ・・いや二丁!セーブポイントがあるか

ら銃をそらせば、当たる心配はない!!

「ここで君達を撃つて・・・、僕の恥ずかしいのを聞かなかつたことにしてやる!! 大人しく撃たれる!!」

「逃げる!!!」

「待て!!」

何がなんでも逃げてやる!!

のび太 side

くそ・・・こう言うときだけは、二人の身体能力が高いよ!特に明久は普段バカだけど、こういうときの脅威の身体能力が発揮するし、雄二も運動神経抜群だとおもうから、一撃で仕留めるのは他の連中より厳しい!

それでも・・・

「僕のプライドにかけて君達を仕留める!!」

「今仕留めるといったぞ!」

「大人しく撃たれる!二人とも!!」

「だけど断る!!」

二人はペースをあげて、木に登ったのだ。くっ!木登りは未だに出来ない!

「やはり、当時の噂と変わらないな!木登りが出来ないと言う噂は本当だったんだな!」

「雄二!然り気無く暴露するな!!」

「うお!アブねえ!」

雄二の頭を狙ったのだが、運が良く交わされたのだ。くそ!一撃で当てるはずが・・・

「ふはははは!!これだと流石のお前も当てるのは慎重にしなければ球が無駄遣いだな!」

「はははは!!!僕たちはついてるよね?雄二!」

「ああ!」

くっ、いわしておけば・・・!!

「あんまり、調子のつたらあとで痛い目を会わすよ・・・!!」

「残念!明久が犠牲になれば(俺達が逃げ切れれば)、問題ない!!」

「本音と建前が逆だよ？雄二」

「己?!雄二!!」

本当にこの二人は友達なのか？と時々考えてしまうのはおかしくないよね？・・・さて、どうしたものか・・・

「木を降りたところで狙いを定めて撃つのがセオリーかもしれないが・・・ここは、普通でいこう。ついでに・・・」
「ねえ、明久は最近隠し事してない？玲さんや島田達にばれないように変な本を読んでいる??」

「失礼な！僕は普通にグラビアを読むよ！変なのはない！」

「(ほうほう。じゃあ次は・・・) 雄二、昼間のお姉さんにナンパしたとき胸を見ていた??」

「・・・いや」

「今のすごい空いた間は何なのか聞きたいところだけど、やめておこう」

「「なんか怪しい・・・」」

ふふ、これを知つときは君たちの最後さ・・・。勿論後でフオローはするかもね・・・

「ねえ二人の後ろ見てみなよ」

「後ろ・・・?!?」

「は、蜂の巣!?!」

「僕ってこの距離で蜂の巣を落とすことも可能なんだよ？落ちたら君たちも被害受けるだろうねー」

「「ぐぐう！己卑怯な！」」

「いや、盗み聞きした君たちに言われるのは心外だよ！」

本当に心外だよ！まさかの盗み聞きした本人達に言われるのは!!

「5秒以内に、降りないと蜂の巣を狙い定めて打つよ？はーい、1ー」

「どうする？雄二！」

「・・・降りるぞ！」

雄二達がいそいそと降りていくのが確認できたが、僕は真の狙いを定めるべく構えた

「よし！2ー」

「よし！地面に降りたから撃つなよ！」

「撃たないでね？」

「勿論・・・」

僕が銃を構えながらも、彼らの言葉を聞いて撃つのはやめた

「撃つのはやめるよ。撃つのはね」

「ホッ・・・」

「向こうに戻ろうか？海の方へ」

僕がそういうと、二人は手を上げながら僕と共に海の方へ歩いた

「こんなところで連れてどうしたんだ？」

「まさか、今から泳げとか言うの？こんな暗いのに」

「まさか・・・僕はそこまで鬼じゃないよ。とりあえず、逃げないことを勧める」

「!?」

まだ僕の言葉に理解してないみたいだね・・・。仕方ない・・・
教えようと思ったとき・・・

「この・・・おばかー!!」

「ぐぼらー!!?!」

明久に向けて飛びながら、キレのいい攻撃が明久に直撃した。やった本人はというと・・・

「ふーふー・・・アキ・・・説明してもらおうわよ!?!」

「美波!?!」

「私もここにいます。アキくん」

「明久君説明してください！」

「うぎやああああ!!」

「・・・雄二・・・お話」

明久は突然の攻撃が島田だと分かり、驚いていた。また、自身の姉と姫路がいることにも驚いていた

雄二はビリビリでお仕置きされていた

「せ、せつめいってなに!?!」

「これよ」

ポチつとボタンを押すと・・・

『ねえ、明久は最近隠し事してない？玲さんや島田達にはれないように変な本を読んでる??』

『失礼な！僕は普通にグラビアを読むよ！変なのはない！』

『雄二、昼間のお姉さんにナンパしたとき胸を見ていた??』

『・・・いや』

先程の会話が流れていた。それを聞いた二人はというと・・・

「ヤバい・・・ヤバい！」

「・・・お話です」

二人は首を引きずられながらどこかへとつれていかれ・・・

そして・・・

「つちよ！ぎやああああああお」

森のなかから恐怖の叫び声が聞こえたのだ……。こうして、彼らの行方は誰も知らないのであった・・・

「勝手に殺すな！」

「まだお話は終わってません！」

「・・・お仕置きっ・・・!!」

「勘弁してくれっ・・・いやああ!!」

彼らはこの日誓ったのだ。二度とのび太の告白の録音はしないで
おこうと・・・命いくつあっても足りない！と心から学んだ・・・

旅行の帰りにて……

のび太君に告白されてから翌朝。私達は車の中で、ある光景を見ていた

「全く、コイツラときたら子供みたいに寝ちやって……」

「こうして見ると、同じ年なのになんだか可愛いですね」

「……男の子は、いつまでも子供だから」

「あははっ。確かに子供みたいに無邪気な寝顔だよね」

美波と瑞希の言葉に同意を示す霧島さんと工藤さん。私はのび太くんを膝枕しながら、後ろの光景を見て、のび太くんを含む7人は安らかに寝ていたのだ。因みに真理亜さん達三姉妹は元々別行動というのもあり、旅館で別れたのだ。また会いたいな……
「のび太君も、楽しかったのかな？ 凄く楽しそうに笑って寝ているわね」

「そういえば、のび太の寝顔も初めて見るわね」

「普段から確りしているところあるから何だか斬新ですね。それに何だかのび太くんも可愛いです」

寝顔が可愛いのは同感だけど、多分本人にそれを言えば落ち込みそうな気がするわ

「そうそう！ 野比君に関する学園の噂知ってる？」

「？ どんな噂なの？」

「色々なあだ名が野比君につけられてるの。勿論、本人の公式なくだけどね」

あだ名……？ いったい何かしら？

「【文月学園の裁き者】とか【文月学園の帝王】とか……後は【ガンファイターN】とかね。あだ名ではないけど、二年の男子らを沈めた【風紀委員N】とかね」

「色々とツツコミどころあるけど、あくまでも噂なのね……」

「ネーミングセンスのなさを疑いそうね」

でも、なんでそうなるのかしらと思って考えると……思い出した「合宿とかかな？」

「あー、確かに」

「?合宿で何かあったのですか?」

玲さんが、合宿の事を聞いてきたのだがここは吉井くんのために隠しておきましょう

「合宿で男子が勉強サボっていたのをのび太くんが止めたのです。これ以上の詳細は言えませんが」

「なるほどです。社会出れば毎日が勉強ですからサボっていたのは感心できませんね・・・後でアキくんとお話ですね」

「ごめんなさい。吉井くんのために完全に防ぐことはできなかったわ・・・」

「まあ、アキくん達は、はしやぎすぎて疲れてしまったんでしょう。楽しんでもらえたようで何よりです」

「はいっ。凄く楽しかったです!」

「ウチも凄く楽しかったわ!」

「・・・私も」

「僕も!」

「ここにいない真理亜さん達も「楽しかったです」といってました!私も楽しかったです」

「それはよかったです。それと三上さんとのび太くんが結ばれたのもよかったです」

「はう／＼／」

改めてそれを人に言われるのは・・・は、恥ずかしいわね／＼／

「私(ウチ)もいつか・・・」

霧島さんと瑞希と美波が赤面しながら何か想像していたけど、大体想像つくわ・・・

「そういえば、朝食で思い出したけどのび太君を含む7人が確り食べていたわね」

「そうだね。朝ご飯を勢いよく食べたと思ったら、すぐ眠そうにしてたよねー」

「全く、ウチらの分も残さず食べちゃって、もうっ!」

私がそういうと回りが同意していた。本当に勢い良く食べていたわね……

「本当に残念ですね、瑞希さん」

「はい。そうですね玲さん。皆がすぐに寝ちやっただおかげで——」

「折角作った朝食の感想が聞けませんでした」

……何故かしら？のび太くんが物凄く心配になってきたわ……

大丈夫だよな？

そう思いながらも、のび太くんを膝枕しながら私は優しく頭を撫でていた。多分気のせいだと思うけど……何だかしんどそうなのは何故だろ？

王様ゲーム I

ある日の夏休みに午前中だけの補講が終わり、Fクラスをはじめとする皆がいない中・・・放課後に残っていた。

僕は・・・、いや僕らは今、何をしてるかというところ、それぞれが向かい合いながら睨んでいた

そして雄二が回りを見ながらゆっくりと話していた

「お前ら準備はいいか・・・?」

雄二は緊張した声で僕らに問いかけてきたのに対して答えるように返事した

「「勿論!」」

「「・・・(グツ)！」」

「無論じゃ!」

「大丈夫(です)！」

「うん!」

それぞれの返事を聞いた雄二は一回溜めながら、周りを見て・・・

「よし。・・・それでは・・・第一回!!王様ゲーム!!始まるぞー!」

「「「「いえー!」」」」

雄二の始まりの合図の言葉に僕らは声揃えて大歓声を上げた。ここでの王様ゲームの参加者をまず説明する

参加者は秀吉、明久、島田、姫路、雄二、僕、ジャイアン、ムッツリーニで8人+霧島さんと工藤さんと・・・。そして美子さん・・・が計11人が参加してる。雄二が目をキラツとさせながら明久に指示だした

「明久!ルールの説明を!」

「OK!ここに1〜10番の紙と王」と書かれたクジがあります。この「王」のクジを引いた人は他の1〜7番の人に命令ができます。例えば1番が王の肩を揉むとか、2番が3番にしつぺをするとか・・・そして王様の命令は——」

「「「絶対!!」」」」

「それじゃあ・・・お前ら覚悟はいいか？」

勿論!!

このはりつめた緊張感の中・・・僕らは気を張っていた

「それじゃあーサーのー!」

『王様はだれーだ!!』

・・・

「よし!!!」

最初の王様は雄二!? いったいどんな命令を・・・!?

「それじゃあ、命令だ! そうだなー、5番と! 6番と! 8番が! 鉄人に『好きです。付き合ってください』と告って来い!」

5番↓明久

6番↓ムツツリーニ

8番↓ジャイアン

「「貴様ー!」」

どうやらあの三人が当たったみたいだ・・・。

「なんて命令するんだ! そんなことしたら完全に誤解されちゃうじゃないか!」

「・・・不名誉なっ!」

「恐ろしい命令だすなよ!」

ジャイアン達は当然、この命令に抗議していたが・・・残念だけど：ダメよ、アキ! さっき自分で説明したばかりでしょ?」

「そうだよ、3人とも。何故ならね・・・」

『『王様の命令は・・・絶対!!』』

「「ぐぐぐ・・・くそー!」」

血の涙を流しながら、教室出ていったのだ。うん・・・

「鬼だね? 雄二」

「ははは! なんとでも言え! 王様の命令は絶対なんだからな!!」

「後でどうなっても知らないよ……」

「「うぎやああああ!!」」

……西村先生に告白して、ボコボコにされたのかな……?

数分後、彼らが教室戻ってくると……【私は教師をからかった事を反省しています】と、いう看板を下げて教室に戻ってきた

彼らはおそらく今果てしなく、雄二に憎んでいるはずだ……。あわれ……

「2回戦!・行くぞおおおっ!」

「いえああああ!!」

明久の掛け声に先程の二人も憎まんばかりに大きく叫び上げた。相当、怒ってるな!

「せーのっ!」

『『王様!だくれだ!』』

……くっ、また外れか!!

「あ。ボクだね」

さてどんな命令を下してくる?と思いきり警戒すると……

「それじゃあ——2番が、4番のホッペにチューを♪」

「ホントですかー!?!」

姫路が4番だけど明久は2番なのかな……。?僕の疑問に姫路がドキドキしながら明久に寄っていった

「あ、明久君・明久君のクジの番号は——2番ですよね……。?」

「姫路さん……」

明久はゆっくりと自分のクジを姫路に見せる。そこに書いてあった番号は——

明久↓3番

「……あちゃ……。どうやら、姫路と明久のは無かったのか……。つてことは誰なんだろう??」

「そう思うと……」

「……え?」

「……」

島田が無表情に姫路に紙を見せたら、姫路は顔真つ青になつていた……。つまり……

「いらつしやい……。瑞希……」

「イ、イヤアアアアアアアアアアッ!」

「こういうことである……」

島田との罰ゲームを終えた姫路はというと……

「わかりました。そういううちよつとHな罰ゲームもありなんですか? それならもう!私だって……。容赦しません……。!」

「普通は女の子はそういう罰ゲームは嫌がるものなんだけど……」

「姫路じゃからのう……」

「まあ、続きをやるう?」

「じゃあいきますよ!せーの!」

『『王様だくれだ!!』』

「……くつ!はずれか!?いったい誰が!!」

「……俺様だぜ!!」

「?!ジャイアン!」

まさかのジャイアン!?つてことは……。嫌な予感が……。!?

「そうだなー2番には……。この俺様の手作りの飲み物を飲め!!」

……。僕2番……

「僕が飲むことになった……」

「おお！心の友が飲むのか!？」

「あははは．．．うん」

もう諦めよう．．．王様の命令は絶対だから．．．

「ジャイアン、廊下で飲んでいいかな？」

「うむー．．．はかなかつたら良いぞ！」

僕はジャイアンにその確認をして、廊下出ていったのだ。尚、皆が何故僕の顔色が真っ青なのかは知らないから不思議そうに見ていた

臭いが．．．あのジャイアンシチューの臭いが感じる!?!もう後戻りできない．．．

さあ．．．

「生きて帰れますようにー」

僕はそう口にしながら飲むと．．．

バタン!!!

数秒間だけ天国にいるおばあちゃんと再会したような気がする．．．。数秒間だけ意識は飛んでいたが、無事に明久達のところに戻れた．．．

尚、皆が不思議そうに見ていたのはここだけの話だ．．．

王様ゲーム Ⅱ

うぷ……やはり年々に破壊力増しってるような気がするけど……耐えよう

「どうだった？のび太」

「うん。独特な味だったよ……さすがジャイアン」

「おうーそうだろー！」

おそらく味見はしてないんだろうな……。そう思いながらも、王様ゲームの方に集中した

「みんな準備はいい？それじゃあー」

『王様はだれーだ!!』

………!

「よし！僕だ!!」

僕は王とかかかっている紙を見てるようにすると皆が落ち込んでいた。そうだね……よし！

「8番と5番と7番は……1番と2番と3番タイキックされる!!」

タイキックするの

1番↓霧島さん

2番↓ジャイアン

3番↓島田

タイキックされるの

5番↓雄二

7番↓ムツツリーニー

8番↓明久

『………まで!?!』

タイキックされる側の3人が慌てて抗議してきた。どうしたの？

「これはいくらなんでもきついぞ!?!」

「僕のライフ0にする気!?!」

「………痛みの理不尽!!」

ふふ……何言ってるのさ……

「王様の命令は絶対だから……受けないとダメさ！」

「この鬼!!」

「……追加で、タイキック2発」

「し、しまった!!!」

そして……

「アキ? 覚悟はいい？」

「雄二……お仕置き」

「気合い入れろよ!」

そして、三人はオモいつきり蹴りを入れた

ガツン!!

「……………!!!」

明久達は声にならない声を出し、悶絶していた……

「くつ……地味にまだ痛む……!!」

「……(ふるふる)」

「もう許さないよ!!次行くよ!次!せーの!」

『『王様はだれーだ!!』』

……

「お、ワシじやな」

「秀吉か」

どんな命令をしてくる? 秀吉はひどい罰はやらなそうだから大丈夫だと思っけど……

「それじゃあ——8番が1番を膝枕するって言うのはどうじゃ? 勿論王様ゲームが終わるまでじゃー!」

「……!?! 僕が1番……は、8番は?」

「わ、私／＼／＼!?!」

美子さん!?!

「ひ、秀吉／＼／＼終わるまで？」

「勿論じゃ」

「そ、そんなー／＼／＼！！」

「の、のび太君どうぞ／＼／＼」

「あっはい／＼／＼」

僕は言われるがままに美子さんの膝枕で横になったが、は・・・恥ずかしい！／＼／＼

「そ、それじゃあいきましようー！」

『『王様はだれーだ!!』』

僕ではない・・・では誰だ？

「わ、私みたい」

どうやら美子さんが当てたみたいだ・・・。どうするのだろうか？

「んー・・・5番と6番が・・・十秒間抱き締められる。7番と9番が、ポツキーをしてもらいます（私も結構恥ずかしいことしてるのだから／＼／＼／＼）」

5番↓雄二

6番↓霧島さん

「・・・チエンジを!」

「ダメですよ坂本君！」

「王様の命令はー」

「二「絶対!!」」

7番↓明久

9番↓島田

「・・・（恥ずかしく緊張してる）」

「・・・やらないとダメ？」

「じゃあ・・・暴力はなしね？スタート！」

有無を言わせず、美子さんは合図をだして始めました。雄二は恥ずかしそうに抱き締めていたが、霧島さんは物凄く嬉しそうだった。明久らは・・・頭がパンクしてるのか終止顔真っ赤になりながら続けて

いた

そして……

「……………」

「♪」

王様の命令で下された四人の反応はそれぞれ異なっていた……。特に霧島さんが満足そうだった。

雄二がボロボロなのは合えてみんな見なかったことにしてるが……何があっただらう？

「それじゃあ……」

『王様はだれーだ!!』

……

「わ、私ですう!!!」

姫路!?! ……何だろう? 物凄く嫌な予感がする

「7番と3番の人は……私の料理食べてください!」

6番だからセーフだけど……ん?

「……………」

3番↓明久

7番↓秀吉

……………南無阿弥陀仏

「食べてくださいね……?」

「……………はい」

そして……数分間彼らが意識飛んでいたのはここだけの話だ。よかった! 他の面子が当たらないで!!

どうにか、数分後に明久達は意識取り戻し、王様ゲームは再開になった……免疫ついたのか量が少なかったからなのか復帰早かつ

た

「次こそ!!皆!それじゃあいくよ!」

『王様はだれーだ!!』

・・・

「やった!!ウチだわ!!」

島田が嬉々と喜んでいゝそばでは明久は震えていた。ああ・・・
どんな命令だされるのかわからないもんね

「そうね・・・。9番が西村先生に思い切り抱き締められるようにおね
だりする!!」

・・・僕ではない・・・ということは・・・?

9番↓明久

「あの・・・死ぬというのですか?美波様」

「驚異の運の無さ・・・」

「明久・・・王様の命令はー」

『絶対!!』

「畜生ー!ー!!!みんななんか嫌いだー!!!」

僕らの言葉に明久は血の涙を流して、鉄人・・・西村先生に抱擁さ
れにいった・・・

「うぎやああああ!!」

さらば・・・明久。君のことは忘れない・・・

どことなくボロボロで戻ってきた明久をみて、僕らは少しだけ・・・
そう。少しだけ同情した

「み・・・みんな・・・やろう」

「あ・・・うん」

「それじゃあー」

『王様はだれーだ!!』』

・・・

「・・・俺だ」

「ムツツリーニー!?!」

「なんだか危険な臭いするわ・・・」

「僕と美子さんが警戒すると、ムツツリーニは・・・」

「・・・1番と9番はメイド服を着てもらおう・・・」

「・・・私!?!」

「へ?美子さん!?!じゃああと一人は?」

「・・・」

真つ青になった雄二がいたのだ。どうやら彼が当たったみたいだ
「仕方ないわね・・・。でも、最後まで膝枕しなさいの命令はどうなる
の?着替えるの大変だと思おうし」

「・・・王様権限で、着替えの時だけ膝枕解除」

「こういうときだけ、ムツツリーニーは頭使うよね・・・」

「まて!?!俺男だぞ!?!」

「・・・雄二、王様の命令は絶対だから諦めて」

「くそおおお!!!」

そして・・・

「ど・・・どうかしら／＼／＼／＼」

「可愛いですよ!」

「似合ってるわ。美子!」

「・・・とても可愛らしい」

女子が美子さんを称賛していて、僕はというと見惚れていた・・・

「ムツツリーニー・・・」

「?」

「・・・宛先は僕で」

「・・・毎度あり」

裏の交渉をしていたことだけは内緒だ。さて・・・雄二のほうの反応はというと

「「「「・・・(ゲロゲロ)」「」」」」

見事にキラキラが出ました。あそこまでいったらもう怖すぎてなんも言えない・・・

いよいよ、終盤へと・・・。あつまた、美子さんから膝枕されたけど・・・お互いに顔をになりながらも嬉しそうだったとだけは書こう

「さて・・・次こそ！王様に!!」

明久が顔あげながら堂々と言っていた。そして・・・

『王様はだれーだ!!』』

「「「「・・・」」」」

流れる沈黙・・・。この空気は・・・まさか!?

王様 霧島

雄二の方は、物凄く汗がかいており・・・彼のとった行動は・・・

「やらば!!」

「「逃がすかあああああつ!」」

最初に雄二にやられた3人が逃がすわけにいかないと言わんばかりに捕まえた

「離せ！頼むから俺の命に関わるから!!」

「諦めろ！坂本！」

「・・・これで観念しろ」

「年貢の納め時！さあ、王様！ご命令を！」

「は、離しやがれええええええつ！」

「じゃあ、雄二は今から私に何をされても抵抗しちやダメ」

「待てお前！俺に何をする気なんだ!?!」

「・・・そんなの・・・恥ずかしくて言えない」

「コイツ変態だあああああつっ！」

雄二が焦りながらそう突っ込みをいれて、ムツツリーニーは何を想像したのか鼻血出していた

「だけど、霧島さん。番号言わないとダメだよ？」

「名指しは禁止なの。きちんと番号で言わないと」

「そ、そう言うことだ!!」

雄二は落ち着いて立ち上がり、強気にいったが・・・

「じゃあ・・・4番」

「!!」

坂本は再び無言で逃げ出すが、明久達から逃れられるはずが無く御用となり、別室で霧島とゆっくりと時間を過ごすことになった

「一体何があつたのじやろうか？」

「まるで拷問の痕みたいよね」

島田、痕みたいじゃなくて拷問の痕なんだよ？

雄二は亀甲縛りに猿轡、全身に鞭の痕があつた・・・

「それじゃ、ラスト！」

『王様はだれーだ!!』

・・・最後の王様は・・・

「やったー！ー！僕だー！ー！」

どうやら明久か・・・最後にどんな命令を？

「んじや、王様以外の全員は——隠し持つてる僕らの女装写真を焼き捨てる〜♪」

「そ、そんなあー！」

「それは名案じゃな！」

姫路と島田が抗議の声を上げ、秀吉が明久の提案を称えた

「そんなの酷いです！ あんまりですうううっ！」

「そうよ、アキ！ しかもそれだと木下の写真まで燃やすことになるのよ!」

「大丈夫。僕が持つて無い秀吉の写真なんて存在しないから」

うん？なんか問題発言聞こえたけど・・・

「さあ、大人しく写真を渡すんだ！」

「いやああああああああつー！」

明久の命令により、彼女らは泣く泣く写真が燃やされたのだ・・・

さて、今の状況を簡潔に説明しよう!!

・ 亀甲縛りで動きを封じられた坂本の膝枕で眠る霧島さん

・ 鼻血の海に沈むムツツリーニ

・ 悲しみのあまり涙が枯れてしまった姫路と美波

・ 教室で火を起こし女装写真を処理する明久と秀吉

・ それを傍観しながら美子さんに膝枕されている僕と工藤さんと

ジャイアン

「あはは・・・なんか凄い光景だねえ・・・」

「確かにな。まさかここまで混沌とした光景が広がるとは思ってもみなかった・・・」

「人に見られたら誤解されそうね・・・」

「そうだね」

ガラッ!!

「」「あつ・・・」

「・・・」

木下さんが絶妙なタイミングで教室に入ってきた。そして眉を引き攣らせて無言で教室のドアを閉めた・・・

『解散！』

そして王様ゲームは幕を閉じた。それぞれの心に深い爪痕を残し

て・・・

ちなみに僕と美子さんはどっちかというと恥ずかしかったが楽しかったとだけ言おう・・・

始まりは……

ある日僕は学園長に学校をよびだされたのだ。メンバーはいつものメンバーと霧島さんと美子さんがFクラスで座っていた

「どうして学園長は僕らを呼んだのだろうか？待たすの失礼だなー」

「明久がバカだからだろ？問題行動もあるからなー」

「いや、そんな理由で呼び出されたくないし、雄二も同罪でしょ？立派な屑だから」

「知るか。お前の方が屑だろ？」

「……やんのか!？」

「……今すぐやめないと鉄人のお仕置き来ると思うよ？」

「……不毛な争いはやめよう」

西村先生の名前を出したらすぐに喧嘩を辞めたのだ。やれやれ……五分くらい待ちなよ……

「待たせたな。クソガキ共」

悪びれもなく、学園長は入ってきたのだ。普段は忙しいから仕方ないんだよねー

「いいかい、用件だけ済みますよ。新しい召喚獣を試してもらおうよ！操作性の向上のためだから」

「そのためにも、ここにいる全員が呼び出されたわけですね」

「そうさ。あとは頼んだよ」

言うだけいって、学園長は出ていったのだ。やれや……相変わらず教育者として発言がおかしいところあるけどなー

「新しい召喚システムの試運転をするなら高得点者は避けた方がいいね」

「それなりの点数あるなら……秀吉と島田とムツツリー二で試運転してみるか？」

「そうね。それが妥当ね」

「頼めるか？三人とも」

「無論じゃー!」

「……任せろ」

雄二の確認に指名された3人は頷いた。島田がゆつくりと立ち上がると、2人とも、ゆつくり立ち上がった

「それじゃ、早速始めましょうか」

「二試獣召喚（サモン）」

いつもの掛け声とともに3体の召喚獣が現れた。現れたスタイルは、試運転な為かいつもの装備ではなく皆と同じ制服姿だった

《へえ〜試運転だけあって制服なのね》

《・・・武器も防具もない》

《これはこれで可愛いのう》

「まるで1年生の時みたいで色々と思ひ出しますね・・・あれ？」

「二」「ええーっ!!」「二」

「しゃ・・・喋った?!?!」

「どうということだろ？」

「これが新しい召喚システムということかしら？」

「つまり会話ができる召喚獣とか、そういうシステムに変更したかな？」

「でも、会話をするならそれなりのプログラムが必要だし、出来ても簡単な会話程度だろうけれど・・・？」

「確かにそうだな・・・」

「ババアの話では操作性の向上という話だったはずだが・・・何だかものすげえ嫌な予感するのだが？」

確かにそうだね・・・

「面白いハプニングになりそうだなー」

「なんで君はそこまで生き生きしてるのさ？ジャイアン」

「だって面白いだろ？こういうの」

「まあ否定しないけど・・・下手したら僕らも被害飛ぶよ？」

「・・・嫌な予感外れてほしいなー」

「・・・はあ・・・」

僕らの思いとは果たして外れるのか気になる・・・頼むからまじなシステムであるように！

暴露は本音と共に

しかし、学園長はどうしてこの召喚システムの新たな仕組みを入れたのだろうか……？

「でも普通にしゃべれるのはなんか変な気分ね」

「そうですね……」

「とりあえず、今の段階で分かっているのは召喚獣も喋ることだけ」

「メモメモ……」

ジャイアンが僕のいった言葉にメモをしてくれた。一応、任されるわけだから報告はしっかりとしないとね……

《それにしても今朝のことはどうしたら良いものか……》

「秀吉なんかいった?」

「うむ?何も言っておらんのかな?」

「もしかって……秀吉君の召喚獣ではないかしら?」

喋ったと言うより独り言に近い感じだったなあ。いったい何を言うんだ?この召喚獣は

《まさか、近所の男子中学生に告白されるとは……》

「……へっ?」

今なんていった?

「ええっつ!!木下君、ついに学校外の男子にまで告白されたんですか!!」

「そんなことあるわけなからう。男のワシが近所の男子中学生に告白されるなぞ——」

《今月で三人目じゃ》

その瞬間、みんなは固まりなんとも言えない雰囲気になった。すると、霧島さんが僕と同じ考え至ったのか口開いた

「……本音を喋っちゃう子供みたい」

「ってことは、勝手に本音を喋るってことか」

これはそう簡単に召喚獣を出さないほうがいいかもしれない

「でも、秀吉の本音を聞けるのは貴重だな」

「ポーカーフェイスだもんね」

「いや、そんなことは——《演技を褒められたのじゃ。嬉しいのじゃ》——こっちに來るのじゃ!!」

雄二と明久の言葉を否定するも、召喚獣が本音を言つて秀吉は召喚獣と共に慌てて離れた

他のメンバーはというと・・・

《アキ、抱っこ》

美波の召喚獣が明久に近づくと、そのまま明久の膝の上に座つた

「・・・あれ?美波の召喚獣に触れる」

「もう、なんでもアリだね・・・」

「こら、離れなさい」

《やつ!ウチはアキと一緒にいるのっ!》

「召喚獣が逆らう光景がみられたのと人に触れることが可能である・・・と」

「こういうときでもメモするのね・・・。付け加えるなら、本人の意思とは関係なく動くみたい」

「それもメモだな」

島田達がそんなやりとりして他所では僕らはメモをしていた。この行いもシステムに關与してるのかな・・・

《あのね、アキ》

「どうしたの?」

まるで小さい子に話をかけるような対応をしている

《ウチね、いつもは酷いことをしているけれど、本当はアキのことが—

——

「きゃあああああーっ!」

「ぎゃああああー!」

2つの絶叫が教室に響く。聞かれてはならないと思つたのだろうか、明久の腕関節を極めている

《アキ、大丈夫？痛くない？ごめんね》

「コラ、ウチの話を聞きなさいっ！」

まるで自由奔放な子供とそれを叱っている親を見ている気分だ

《あのね、実は昨日・・・下級生の女の子に告白されて——》

「いやあああああつ!!ダメエエエツ!!」

ここで新たな試運転の暴露犠牲者が出てしまったか・・・

「ムツツリーニ君はスカートの中に興味はあるかなあ？」

「・・・そんなものに興味は——《スカートの中には夢やロマンがあり興味は尽きない。ロング、ミニ、タイト、フレア、ブリーツなど様々なスカートがあり、そのどれにも異なった魅力があるが、キュロットだけはスカートを名乗るべきではないと思う》——ない」

向こうも向こうで地味な被害が起きているな。しかし・・・このままでは二次災害起きそうだなー

「ムツツリーニ・・・まさかと思うけど、美子さんの写真は撮ってないよね？」

「・・・そんなの《撮ってる》ーない」

・・・よし。とるべき選択は・・・これしかない

「500円出すから美子さんの写真をこんどくれない？」

「・・・毎度《毎度》」

・・・くっ、本能的に買ってしまった!!だけど・・・美子さんの可愛い写真はいくらなんでも他の人に見せたくない!

そんなやりとりがあつたのを美子さんは知らない・・・

本音の被害は続く

僕とムツリーニーがそんなやりとりしてる他所では……

「ひ、卑怯よアキ！そうやってうちの恥ずかしい秘密を聞き出すなんて！／＼／＼／＼」

「いや、さつきから美波が勝手に自爆しているような……」

近くの僕でも聞こえる会話をした。島田は隠し事とかが下手なのかな？いや、上手なのも怖いけど……

「問答無用よ！いいからアンタも召喚獣を出して本音をしゃべりなさいよっ！」

《本音？本音って、好きな人のこと？ウチの好きな人はね——》
「アンタは黙ってなさいっ！」

大変だなー召喚獣を出すように強要したり、自分の召喚獣に説教をしたりと……疲れたまるよ？

「あれ？のび太君、瑞希が何かしてるわ」

「？紙とペン？」

「何をするんだ？」

「さあ??」

美子さんに言われて、僕もみると姫路がなにか書いていた。それを見て、ジャイアンも疑問にいつていた

……何するんだ？

「あの、明久君」

「ん、どうしたの姫路さん？」

「これ、なんて読むかわかりますか？」

紙に書いたのは4文字の感じだった。ふむ……これは明久でも読めるでしょ？

「えーと……格“差問”題」

「んん？」

「はい。正解です」

明久が無事に答えると、瑞希が嬉しそうに微笑んだ。まさか・・・
「これはどういうー（ポンツ!!）・・・しまったあああーっ!!」

その瞬間、明久は召喚してしまい、真っ青になり頭を抱えた。どうやら姫路に見事にはめられたみたいだ・・・

「はっ、相変わらずバカだな。明久」

「・・・夏休みの宿題は雄二は終わったの?」

「〃問〃 題ないぞ? そんなのとづくに終わらせたぞ?」

あっ・・・と思った瞬間、雄二の召喚獣が出てきた。そして彼も気づいた瞬間・・・

「———しまったあああーっ!!」

明久がバカなのは否定しないけれど、結果だけ見ると2人とも大して変わらないと思う。それを見た島田たちはぐいぐい聞くが・・・

その召喚獣が今どうなっているかという・・・

《バカ明久! お前の名前のせいで召喚しちゃったじゃねえか!》

《アホ雄二! 人の不幸を笑うからこうなるんだ!》

・・・ 召喚獣同士、取っ組み合いの喧嘩をしていた

「明久! テメエの名前のせいで召喚されちゃったじゃねえか!」

「何を言っているのさ! 雄二が勝手に召喚したのが悪いんじゃないかっ!」

たいして変わらないなあ・・・ 寧ろ似たような感じで安心したよ

「あの、明久君。坂本君のことじゃなくて、好きな人について考えてみて下さい」

「そうよアキ! 人のだけ聞いておいて自分だけ逃げようなんて許さないんだから!」

「・・・雄二。本当の気持ち、知りたい」

《むきー! 雄二のアホー!》

《うぐー! 明久のボケー!》

「くたばれ雄二! 責任取れ!」

「死ぬのはお前だ明久！地獄に落ちろ！」

「……なに？このめんどくさい問題は……。もう止めるのやめとくか」

「吉井君達は本当に楽しいことを起こすよね」

「それに関しては、僕も同感だよ」

「まっ、俺様が召喚することないな！」

「……」

僕らがそんな会話してる他所では、明久達が僕とジャイアンに向けて睨んでいた

「なに？」

「君達も召喚獣を出しなよ！」

「俺たち仲間だよな？」

なるほどね。自分達だけでは不満だから、巻き込みたいと言いたいんだね？

「うん、はっきり言うね。絶対嫌だよ！何が悲しくてこんな本音暴露大会に参加しなきゃいけないのさ!？」

「そうだぞ!？それに俺やのび太の召喚獣を出してほしいならさせてみるよー!」

僕とジャイアンがはっきり言うと、姫路が自分の頬を当てながら「あらあら」と言わんばかりに、考えていた

「確かにのび太君は、出さすのは難しいですね」

「のび太だけじゃなく、剛田も出さすの厳しいね」

「でも二人とも、そこまで警戒するとなんでもないような簡単なミスとかするんじゃないの?」

ふっ、何を言うのさ……

「大丈夫！明久問題ないよ(ぞ)！」

「あっ……」

……ポンッ!

「あっ!？」

……なんてこった……

僕らの気持ちは表すかのように、態度も出ていて落ち込んでいた。

《……バカだな》

《……バカだね》

君たちに言われたくない。このヘタレ野郎

僕らはお互いに睨みながら、さっきの取っ組み合いまではいかないけれど雰囲気は取っ組み合いの寸前……

「やれやれ……しばいたら良いのかなー？」

《だなー》

ジャイアンと召喚獣が不穏な言葉をいつてるのを僕は聞こえただ、あえて触れないでおこう……

「質問だけどのび太、美子の事大好きなの？」

「美波ちゃんの言う通り、のび太君は美子ちゃんの事大好きなのですか？」

ふっ……何を当たり前の事を……

「《美子さんの事は、誰よりも愛してるよ！はっ……しまった！》」

思わず本音が出てしまった!!なんてこったああ!!

「のび太君可愛い／＼／＼／！」

僕と召喚獣で美子さんに思い切り後ろから抱き締められたら……

「《はう／＼／＼／！》」

「「二二《……甘い！苦いコーヒーをくれ!!》」」

僕は抱き締められた事により、赤面すると男子チームは耐えきれず、ジャイアンの召喚獣もそんなことをいっていたがまず飲めるの？
因みに女性陣は大歓声で、霧島さんが怪しい顔になっていたのだ。
うう……結構僕も恥ずかしいなー

第3者の犠牲者は僕であった……

被害は止まらない……

美子さんは僕と僕の召喚獣を抱き締めながら、話しかけた

「現在出ているのはのび太君と剛田君、坂本君、吉井君、土屋君で女子は美波だけね？」

「あと付け加えるなら秀吉だけ……かなり無になっているね……」
「しかも座禅体勢だぞ？ダブル秀吉」

僕らがそう話していると……

《そういえば、真理亜達と近々あつてお茶会だな。あの三姉妹は優しい子だし、真理亜は俺には勿体ない婚約者だな》

「……俺は何も言つてナイヨ」

「……ごめん、聞いてしまった」

うん、ジャイアンの惚気を聞く日が来ると思わなかった。しかも、召喚獣で……

「ジャイアンに聞きたいけどさ、真理亜さん達はジャイアンにとってはどうな人たち？」

「んー？そうだな……召喚獣が答えてくれるぞ」

君が答えーいや、どちらも本体だからセーフ？どうなんだろう？

《真理亜さんは先程も言つたように、俺には勿体ない婚約者だ。スタイルもいいし、気も強いが、女の子らしいところを知ってるのは少ないだろうな》

「里緒菜は、真面目に見えてシスコンだ。だけど、最近気になる人ができたから応援してる」

《冬花はかわいい小動物だ。そういや、あの子からもバレンタインももらったことがあるが義理だよな？あつ、因みに三人とも空手黒帯だぞ？》

……え？今なんていった？

「えっ……真理亜さん達は黒帯なの!？」

《おう!》

少し目眩してきたけど……黒帯かー。あの優しそうな人たちが黒帯って世の中分らないよね。しかも、召喚獣と同時に喋るからどっ

ちが話してるのか分からないよー

《そういえば、冬花も真理亜も俺と別れるときはいつも寂しがるよな？》

「何で寂しがるんだらうな？」

《さあ？》

何か、シユール・・・ジャイアン同士が喋っていて・・・違和感が溢れるよ・・・

ん？何か、霧島さんの動きがおかしい??

「・・・雄二」

「ん、なんだ？」

「・・・えい」

「んおっ!?!/!/!/」

霧島さんが雄二を手招きで呼ぶと、雄二の頭を自分の胸の中に抱きかかえた

「《雄二》・・・!!」

《明久が般若な顔してるな―》

《羨ましいんじゃない?》

「アホだね？」

「かなりの般若な顔をしてるな―」

本音を言うから二人とも隠せないと思うよ・・・さて雄二は何を言うかな？

「・・・嬉しい?」

「ば、バカを言え!こんなのが嬉しいわけ――《イイヤツホオオオーツ!》――あるかあああーっ!!/!/!/」

「《ダメだ面白い・・・!!》」

「《同じく・・・!!》」

笑いそうな声に我慢できず、本音と共に呟いていた。すると、島田が思い出したように問題を取り出して美子さんや姫路に質問していた

「瑞希、美子。この歴史の問題わかる?どうしてもわからないの」

「これの答えは徳川家光をさしてるのかな?(サモンにはならないわ

ね)」

「そうですね。それで良いと思います（サモンといわなければ大丈夫です）」

「なるほど！ありがとうございます！二人とも」

「大丈夫（です）！」ぎ、問題を取り組みましょう」

ポンッ!!

「……あれ？」

「予想通り♪」

《私だけ恥ずかしい思いしたくないから引つ掛かってくれてありがとう！》

島田と召喚獣の島田が喜んでいると、美子さんたちは……

「あちや……やってしまったわね」

「はうう……美波ちゃん酷いですう！」

《油断したわ……》

《やってしまったですう……》

まさかの二人もこうなるとは……参ったなと思うと島田は嬉々としていた

《さあ……》

「いらつしやい……二人とも」

いつぞやの王様ゲームの時みたいな状況に感じるのは何故だろう……？あつ、ムツツリーニーの召喚獣も鼻血出ているの見えた……

「って!?!今で鼻血出す要素あったか!?!」

「いつの間に血まみれ!!!」

《こえよー?!》

《もはや、病気のレベル……》

「生まれ変わったら」

んん？僕は駆け寄りムツツリーニーが何か言おうとしてるのが分かったので耳を傾けると……

「生まれ変わったら……鳥になりたい……」

《覗きが……し放題だから……》

「来世での死因がそれでいいのか？？そして、どこまでもムツツリー

「ニーかー!?」

「あはははは．．．や、やりすぎたかなー?」

《あはははは．．．》

やりすぎだよ．．．って!

「《いつの間にか召喚してらうう!?》」

「．．．ムツツリーニーが嵌めると思えないから．．．まさか!」

《自分で!?わざと!》

僕が突っ込みを入れて、ジャイアンが推測とかをいうと工藤さんは「にひひひつ」と笑っていた

「うん!とはいっても、召喚獣をしたあとにこの状態になったから」

《出し損かなー》

いやいや、それでだしていたら世話しないよ

本当に世話しないよ．．．ムツツリーニー．．．鼻血が多量により、輸血措置をとり救命．．．

ムツツリーニーも少しだけ耐えられるようになろう．．．命いくつあってもきりがいいよ．．．

あれ?このあともものすごく嫌な予感しますのはなぜですか!?!無事に終わるかな．．．

現在の被害受けたものは・・・

僕は現在・・・いや、僕と僕の召喚獣はすごく戸惑っています・・・。
それは・・・

《・・・(ギュツ)》

《嬉しいけど・・・その／＼》

《のび太君だからいいの／＼！》

召喚獣ごと僕らを抱きしめていたのだ。その／＼女の子特有の
が当たって／＼

「と、とりあえずこれで霧島さん除く全員だね」

《抱きしめられるのは嬉しいけどね！言わないけど》

「余計なこと言わないの！僕！いつているから無意味だよ!？」

「まあまあ・・・」

《私も嬉しかったけどね。・・・本音隠さないと》

「それをいつてしまつてら隠す意味ないのよ!？」

僕と三上さんが自身の召喚獣に突つ込みをいれてる他所では・・・

「雄二・・・嬉しい?」

「だからそんなわけ・・・《ひゃほほおおお!!》ないだろー!!」

「あははは、坂本くんは代表に上手いこともてあそばれてるね。ね?

ムツツリーニ君は抱きしめられたい?」

「・・・興味ない《抱きしめられたい》・・・興味ない・・・!」

「へえ・・・僕のパンツみたくないの?」

「・・・興味ない!《・・・本当は興味ある!》・・・!？」

「あははは、召喚獣のムツツリーニ君は本音たくさん言うねー。おも
しろいよー!」

「《・・・しまった!本音だしすぎた!》

雄二は霧島さんに抱きしめていて、本音を隠そうにも暴露されて顔
真っ赤になっている。ムツツリーニは嘘を言おうにも、本音が召喚獣
が言うので悔しそうに反省していた。彼ももてあそばれてるよね?

「そーいや」

《ジャイアンと秀吉は?》

僕と召喚獣の疑問に美子さんは無言で指差していたのでその方向を見るとなにか話していた・・・

「《ふむふむ・・・ようし!!俺様らは歌おうかな!声をはもりあつたらどれくらいでるか!》」

「《即刻で今はやめて!?!》」

「《のび太くんの行動がいつになく早かった・・・》」

あんな地獄をここで出されるなら止めた方がまし!!ましてや召喚獣がいるなかで歌われたら危険だ!

「《・・・》」

「《木下君は両方とも瞑想してるけど・・・なんかシユールね・・・》」

美子さんは秀吉の様子見てくれたけど、瞑想していたのだ。これではかれの本音は分かりにくいね

「そういうえば明久は?」

《拷問されているのかな?》

「まさか・・・」

《さすがにそれは無いと思うわ。いくら物体さわれてもそこまで過激にされることは・・・》

僕らはちらつと見ると・・・お仕置きされたあとのW明久がいた
「二つて・・・既にお仕置きされてる!?!」

「《・・・誰か・・・助けて・・・ガクツ》」

《アキごめん!やり過ぎたわ!》

《ごめんなさい!明久くん!》

「アキのせいよ!」

「そうです!女の子にそういうの・・・その・・・
本音とやっていたことにあべこべが感じるよ!。それに姫路と島

田もやり過ぎて恋遠ざかっているよ?」

「やれやれ・・・」

《これじゃあどこまで突っ込めばいいのかわからないよ》

「吉井くんはボロボロね。美波達やり過ぎよ?」

《いくら嫉妬しても、やり過ぎよ。女の子なら引くときも時には覚えなさい》

「うう・・・またやってしまった」
反省ですう・・・

まさかの召喚獣も本体も反省してる!?感情もたくさん出すのね・・・
行動もしつかり示すし、やりにくいねー

「一応これもレポートまとめとかないとね」

《他のメモもしてるわ。召喚獣は人に触れるみたいだしね》

「召喚のキーワードを言えば出るわけね」

《これはなんも言えないわね。他に感情も、共有するわ》

たしかにそうだね。ムツツリー二のが一番例えで使いやすいしね

「となれば・・・他にメモしながら報告の種類増えるか確認ね」

「そうね」

僕らがそう話してる横では・・・

「明久くん、ごめんさい！」

「やり過ぎたわね」

「あははは、いいよ。問題ないよ」

《なれてるからね》

いや・・・数々のことを考えたら慣れていいものか!?それはそれで

不味いよ・・・

他に被害になかったらいいけど・・・僕ら以外に学生いるのかな

?いたら、あのキーワード繋がれば大変だ!

「でも学園全体に広がってるから把握できないわね」

「ムツツリーニー!」

「・・・よんだか?」

《・・・命令を》

ムツツリーニーが何故か忍者に見えるのはなぜだ?

「今把握してるだけで僕ら以外の生徒は?」

《・・・3人》

「・・・むしろ、何故いるのかはわからないが・・・どうする?」

「よし」

《スルーしておこう!》

「・・・了解」

なにも起きなかつたらいいけど・・・というか僕らの方が色々大丈夫なのかな？

心配だ・・・

その嫌な予感が当たるとおもわなった・・・

いい意味でも、悪い意味でもね！

被害はここにも???

宏美 side

私は今・・・Eクラスで一人待っている。元々は学校来る予定ではなかったのだけど、ある手紙に呼び出されてこの教室にいた「いったい誰が呼んだのかしら？まつ、Bクラスの根本ではないのは確かかもね。・・・あいつははつきりいって嫌いよ・・・」

そう・・・あいつは以前、美子を脅迫していた過去がある。その脅迫された私は美子の相談のつてあげて、Fクラスの坂本君を討ち取れば写真もデータも消すと約束されたから協力した・・・

でも・・・一人の男が美子の苦しんでいた心を解放させた

『貴方を倒せば・・・だから邪魔はしないで！』

『三上さんと中村さん、もう監視の目がないよ？これ以上は戦う理由はないでしょ？』

『あなたには関係ないでしょ!?!とつとつとそこをのきなさい!!』

『確かに関係ないかもね・・・だけどね！困っている人を見捨てるほど僕できないのさ!!』

私と美子が野比君を討ち取ろうと必死になりながら、攻撃するものの野比君は私たちに呼び掛けてくれたのだ

合宿、期末試験は一時期酷かったのは覚えてるわ。特に期末試験は美子も野比君もあんまり話さずすれ違っていたのよねー

「でも、あのお二人本当にお似合いね・・・もうそろそろ来るかな?」
「失礼します」

ガラガラとドアを開ける音と共に入ってきたのは・・・

山田哲夫だった。すると彼はなにか空に向かって叫んだ

「はい、そこ!!誰って顔しないで!?!Eクラスの山田哲夫ですよ!?!初登場はBクラスの時に出ているから!?!」

「何をいつてるの?あんだ」

「はっ!?!いえなんか言わないといけない気がして・・・」

「・・・? あんた大丈夫なの?」

私の質問に山田哲夫は・・・

「大丈夫です!・ところで、なんかここ最近、召喚獣でサモンってあんまりいってないような気がする」

こいつは何が言いたいのかよくわからないけど、なにか報告的なのかな? って思うと・・・

ポンツ!!と山田哲夫の召喚獣が出てきたのに私達は驚いた

「へっ?」

な、なんで!? 先生もないのに!?

「えー?! なんで!?!」

「山田君! 落ち着きなさい!・・・どうやら学園全体に召喚獣出せるようになってきているみたい」

「いつの間に!?!」

《なんで!?!》

本当にいつの間だね・・・ってあら?

「山田君、なにかいった? それともだれかいるの?」

「えっ? 代表とふたりだけです?」

《俺がいる!》

「・・・へっ?」

《おれだよ! おれ!》

「・・・ 召喚獣がしゃべってるうううううううう!!?!?!?!」

のび太 side

んん? なんか聞こえたような気が・・・

「隣の部屋からだ」

《いってみる? 美子さん》

「そうね」

《何があるのか分かったものではないからね》

「俺も暇だし見に行くか」

《ってか俺ら出れるのか?》

確かにそうだね・・・。とりあえず、出てみようかと思いと・・・

《あれ出れる?》

「学園全体に召喚できるようにしてるのかな?」

「恐らく保険としてな」

「とりあえずいきましょ?」

美子さんの言う通り、とりあえず出て動くことにしたのだ。何だか
でていいのかな? って思いがあるのだけど・・・

山田 side

な、何で召喚獣が??

《と、とにかく中林さんにあれを》

「つて!?なんでそれをいうー?!?!」

俺はなんもしやべってないのに!!

「わ、私に話?なんなの?」

《実はね、俺はー代表・・・中林さんのー》

「うわー!」

俺よりしゃべるなよ?! って・・・

「触れる!?なんで?!」

「何でもありなのね・・・」

俺らは驚きながらも、気を取り直した。こいつより先に言われたくない!

「あの、代表・・・いえ!中林さん!!」

「は、はい!」

「返事は今しなくっていいから・・・俺と」

いえ!言うんだ!!!

「《中林宏美さんのことが大好きです。そちらがよろしければ俺と付き合ってください!》」

「へっ・・・(ポンッ／＼／!!)」

《先もいったように返事はすぐしやなくっていい!だから・・・》

「もし嫌なら嫌ってはつきりいつてください!それじゃあ!!」

《アディオス!!!》

俺は急いで外に出ると・・・

「「「あつ……」」」

「《Oh……》」

見覚えのある三人がEクラスの付近にいました。も、もしかつて……

「聞いていた……？」

「き、聞いてないぞ？」

《聞いてしまった！》

剛田が本音を隠さずに、言うのを聞いた俺は……

「《剛田ああああ!!!》」

「《逃げるが勝ち!!!》」

全力でやつを潰す!!!まちやがれええええ!!

宏美side

ど、どうしましょう……同じクラスの奴が告白してくるなんて……

「それも山田哲夫から……ここ、告白されるなんて／＼／＼」

うう、まさか告白されるなんて思わなかった!!

「ひ、宏美??入っっていい??」

「よ、美子!!それに野比君??」

「どうもお邪魔します」

何でこの二人が???

「まさか聞いていたの／＼／!?」

「《うん／＼／》」

「《ごめんなさい……》」

美子は赤面しながら頷き、野比君は謝っていた。まあ……この二人ならいいか。根本に聞かれたらまったものではないわ

「相談していいかしら……?二人に」

「僕／私達でいいなら!」

とりあえず、まずは相談ね……

オマケ

召喚獣と共に正座していた二人の男がいた

「……あのー？これはなんですか？」

その男は吉井と坂本だ。何故正座してるかと言うと……

「吉井くん達の本音を聞くためです」

《お願いします》

「アキ、坂本！白状しなさいよ？」

《たつぷり本音をきくわ！》

「……覚悟はいい？」

《……祈りもいい？》

ただならぬオーラを出しながら正座してる明久らによっていた。

そんな明久達は……

「つちよ!?まつ!!」

なんかこわいんですけどおおおお!?!!

「《大丈夫！一瞬だから》」

「いやああああ!?」

Fクラスでは暴走止める役が居なくなっただことにより……カオス
になっていた

本音とは時に・・・

・・・なんでもこうなった。と僕は内心そう思っていた。僕と美子さんは今、目の前で中林さんの恋愛相談をした。僕はあんまりそういうの口挟めないから、黙って二人の会話を聞いていた。ってか、僕と僕の召喚獣は黙って待機していた。下手に言ったらこわいじゃない？

「気まずいねー」

《下手に言ったら怖いからねー》

「ってか、美子さんは中林さんと話盛り上がりつつあるし・・・」

《ジャイアンは山田君に追いかけてらるし・・・》

「暇だなー》

いまだに恋愛の相談が終わりそうになく、暑く語ってる二人を見て、僕は今ここに意味あるのかなー？って考えていた

美子 side

私は今、同じクラスで代表の宏美の恋愛相談に乗っていた。まさか山田君が宏美のことが好きだったなんて・・・驚いたわ

「ーって訳なの。どうしたらいい？美子」

「うーん・・・でも、山田君は何て言っていたの？」

「・・・返事はすぐじゃなくっていいって言われた。でも・・・」

「いきなり言われて戸惑っているって訳ね・・・」

まあ・・・今までクラスやった仲間から告白されるなんて誰も思わないわね・・・それに、山田君か・・・

「彼はまあ、悪い印象は無いですよ？」

「ええ。でも・・・どう答えたらいいのか分からないの。もし場合によつては・・・ギクシヤクしかねないし、気持ちはまだ整理できてないの」

「そっか・・・」

もしも、私も逆の立場なら・・・どんな気持ちだったのだろうか？私が宏美の立場ならきつと同じ気持ちだと思う

「宏美・・・多分知ってるかどうかはわからないと思うけど・・・」
「ん？」

「私はね・・・この夏休みにのび太くんと付き合い始めたの」
「え?!?!初耳なんだけど!?!」

私はのび太くんと付き合い始めたのを宏美に言うと、宏美は当然驚いていた。そういえば、やっぱりまだ言っていなかったわね・・・
「いつ!?!」

「のび太くん達と海や夏祭りの時にね」
「海？」

「ええ、Fクラスの彼らとのび太くんの関係者のお友だちとね」

「あー、そういえば誘われたけど試合があつて行けなかったときか」

そう。宏美も誘ったのだけど、試合があつてその都合で断念になった。いけなかったのは残念だったけど・・・

《で、夏祭りのあとにのび太くんに砂浜を歩いていたときに告白されたの》

「つて、私が話したいのに先言われた!?!・・・まあそういうことよ・・・」

「なるほどね・・・。ねえ、美子・・・のび太くんも聞きたいのだけ
どいいかしら?」

「何?」

宏美が何か決めたかのように私たちの方へ見たのだ。もう覚悟決めたの!?

「いえ、まだ正直気持ちは悩んでるわ。でもね・・・はつきりと彼の告白を答えるわ」

「なんか安心したわ。顔つきはいつもの宏美ね!」

「悪いわね。でも美子・・・後でどんな風に告白されたのか聞きたいわね♪」

「うっ・・・おてやらかにね・・・」

「その時によるわ♪。・・・ありがとうね?そして、おめでとう。二人とも」

《ええ》

「《うん》」

その時の宏美は・・・いつもよりも凛々しく鮮やかに笑っていたわ。お礼をいった宏美は、携帯を取り出して恐らく山田君に連絡してると思う

「それじゃあ・・・ありがとうね?」

宏美は覚悟を決めた顔で教室を出ていたのだ。その表情は・・・代表としてではなく、一人の女性として覚悟を決めて出ていたのだ

そういえば、山田君は剛田君を追いかけていたわね・・・大丈夫かしら?」

山田 side

はあはあ・・・今俺はあいつを追い詰めて・・・屋上

「はあはあ・・・何て執念だよ・・・撒いたと思ったたら追跡やめないとか・・・」

《お馬鹿なのか?》

「おまえにいわれたくない!ってか、人をばかというな!このバカ!!」
《吉井よりましでも!バカなところはあるだろ!!》

Fクラスだからとかそういうのではなく、嘘をつくのが下手なやつにバカと言われるのは心外だ!ってか、本当に体力あるな!?

「さて・・・そろそろ、ここら辺でいいか。山田!!」

「ん???」

《いきなりなんだ??》

急に走りやめて俺の方に振り向いたのだ。何だ?いきなり

「山田!!お前は一人の女を大切にできるのか??お前はけしてねじ曲げないと誓えるか?」

「・・・いきなりなんでそんなことを聞くんだ?」

「まあ・・・簡単に言えば、中林宏美の愛は偽りないのか?と聞きたいんだよ」

《それ聞きたいんだよ》

愛だと・・・そんなもん・・・

「当たり前前だ!!俺は・・・あの人を・・・中林さんを!!誰よりも愛してる!!」

《例え振られてるの分かってても・・・己の気持ちに嘘を・・・》

「《つきたくないんだよ!!》」

俺がそういうと・・・ドアが空く音聞こえたので振り向くとそこにいたのは・・・俺が告白した中林さんがいた

何故!?!と思うと剛田がニヤニヤとしていた。は、嵌められた!?

「あとはー」

《お二人でー》

「《お楽しみなく》」

・・・このなんとも言えない雰囲気はどうしたらいいの?おしえてー!鉄人ゴリラー!

「ねえ・・・山田」

「は、はい!なんででしょうか?!!?」

「あなたの告白の事だけど・・・きちんと答えるわ」

「えっ・・・」

まさかの告白の返事?!!ど、どうしよう!?!フラれないのもフラれる用意もしてないのにー!

「山田・・・あんたは時々、行きすぎると言うか、バカなところはあるわ。合宿のときも堂々と美子の裸をみたいといったじゃない?」

「うぐ!?!そ、それは・・・」

「まあ、そういうところあるのは良いけどね」

えっ?ど、どういうこと?

「私って時々感情的になるときあるかもしれないし、あなたに迷惑かけることもあるかもしれない」

「中林さん・・・」

「でもね、そういうあんたの生き方は嫌いじゃないわ。あなたのまっすぐな生き方に私は・・・好きよ」

!?!?ってことは・・・

「私、中林宏美は山田哲夫の告白を・・・喜んで受け止めるわ」

「つう……よかつた……!!」

俺の告白が……中林さんの心に届いたのだと思うと安心して涙が……

「嬉しくって涙がとまらねえ……!」

「ほら泣かないの……。これからもよろしくね? 哲夫?」

「はい……。宏美さん……!」

俺は必ずこの人に愛を注いで守れる男になりたい!!

オマケ……

屋上付近の扉にて……

「良かつたね。山田君、宏美」

「ジャイアンお疲れ様」

「し、死にかけて……」

三人の影が二人の幸せを祝うかのように優しく見守っていた

さらにオマケ……

報告書

2—F野比のび太

今回の実験結果では本音が出てくる召喚獣で、隠していても、頭をそれを思い浮かべば召喚獣は喋る。また、人体に触れることできることからもう少し改善の余地もあるかと思われる。

実験結果の報告をここにする。

「……次はどんな実験をしようかねえ……」

のび太の報告をみた学園長は、怪しげに笑いながらまたなにかを起

こすことを考えていたのだ・・・

巻き込むの決意！

拝見、ドラえもん様・・・

お元気ですか？いま僕とスネ夫と雄二は・・・とてつもない絶望を感じています……。願わくば、ドラえもんも今ほど戻ってきてほしいと思いませんでした

何故なら・・・

「おしやああ！準備はいいか!？」

「うんうん！のび太もテンション上げなよ!？」

「うむ。ムツツリーニもワシもテンション高いのだからお主らもテンション高くあげたらいいのでは・・・？何か低くないかのう?」

「(おいおい、このアホどもは剛田の歌がどれだけ知らないんだ!?) おいおい、これでもテンション高いぞ?」

「(明久は被害あつてはるはずなのに・・・覚えてないみたい) あははは：そうだよ」

「(遺書書いとけばよかった・・・) これでも楽しみにしてるんだよ?」

何も僕らの気持ち知らない明久達に苦笑いしながら、本音を隠して言うと言うと彼らも笑っていた。知らぬが仏・・・

何故なら・・・

「それじゃあ・・・俺様のオリジナル歌を聞いてくれー!」

「「「いえー!」」」

「「「・・・(共に生き延びよう!友よ)」」」

地獄のリサイタルが始まるのだから・・・

事の始まりはお昼・・・

「zzzz」

僕はその時はお昼寝をしていたのだ。やる勉強もなく、三上さんは

バイトで今日は無理みたいだし・・・そう考えたら久しぶりに昼寝をして見たくなったのだ。

日だまりポカポカに浴びながら昼寝をしてると・・・

♪♪♪♪

「・・・んっ?」

マナーモードを解除していたから携帯の着信音に反応して目を覚めると・・・

「電話?はい、のび太です」

「《お!今大丈夫か?のび太》」

「ジャイアン?うん。今昼寝していたから大丈夫」

「《相変わらず昼寝はするのかよ・・・。三十分後にスネ夫の場所といえはわかるか?あそこで待ち合わせして遊びにいこうぜ?スネ夫がオープンした店つれていってくれるみたいだ》」

オープンした店?はて?

「僕とスネ夫とジャイアンだけ?遊びに行くのは」

「《いや、坂本とか明久、秀吉も参加するぞ。ムツツリー二は・・・鼻血出して今回は断念するとよ》」

「・・・大体察した」

大方輸血し過ぎてダウンしたのかな・・・。まあいいや

「わかったよ。三十分後にスネ夫のお家に着くようにするね?雄二達は直接いくのかな?」

「《一応、場所は伝えたから大丈夫だろう?なら後でな》」

「うん。・・・オープンした店ってなんだろう?何かすごく嫌な予感が・・・あれ?詰んでる予感が・・・」

この嫌な予感が後に当たったのだ。戻れるなら思い切り殴りたいぐらいにだ・・・

僕は予定通り三十分後にスネ夫のお家に着いて、徒歩から行ける距離だから三人で久しぶりに歩きながら話していた

「でも、スネ夫。一体どこなの?オープンした店ってのは」

「あっうん。そこはパパの知り合いの人がここに娯楽を作ろうとして

できた店なんだ。学生にも優しい店だよ」

「あれ？でも、それなら俺らも知ってるはずだろ？」

「あー、そこはまだ完成ではないからね？でも無料券一杯もらったから、夏休みに行ってみようとおもったのさ？まっ、簡単な話、試運転な部分があるからね」

つまり試運転ということはまだ完成ではないと？？

「まあいいや。で、スネ夫？約束の企画本当にいいんだな？」

「うん」

??スネ夫がジャイアンの問いを答えたあとに何か申し訳なさそうな顔で僕を見ていた。その瞬間僕と彼は目で意思伝達した

――まさかと思うけど・・・あれがあるの？

――・・・welcome、のび太。地獄の・・・あれがあるよ

――・・・君の腹いせに僕は巻き込まれたってこと？

――・・・今度良いのあげるから・・・共に逝こう？

――漢字！漢字がー！！

「？何してるんだ？お前ら」

「あつ、嫌々なんでもないよ・・・あはははは（何としても明久たちも巻き込んでやる!!）」

僕らの決意は明久もあの苦しみを味わってもらおうと決めたのだ。君だけは・・・まきこんでやる！

やはり……

僕らは目の前に待っている明久らをそばに駆け寄った

「やあ！のび太にスネ夫！それにジャイアン！」

「遅かったな？」

「とは言うても、こちらはそんなに待っておらぬがのう。」

いつもの三人がいたのだ。本当はムツツリーニも居てほしかったけど、来れないなら仕方がない……

「これで全員だね！じゃあ中に入ろうか！」

「娯楽の為に作られた店って……金高くとるの？」

「いや、俺がスネ夫から聞いたのは無料券が今回あるのとお試しだから金は問題ないみたい」

「？つまり当選した人だけお試し入れると？」

「まあそういうことだね。今回はとある場所を僕らは使うのさ」

「とある場所？」

「ふふふふ、聞いて驚くなよ？」

ジャイアンが何か言う前に遮らないと！

「と、とりあえず入ろうよ！折角の時間がもったいないからね」

「そ、そうだよ！」

「？そうだね。はいろいろか」

「うむ、折角の時間を楽しまねばのう！」

「(なんかいやな予感がするが……まあ問題ないだろう) そうだな。いこうか」

多分、雄二は気づくかもしれないけど……ここまで来たのだから巻き込むよ。君だけ逃げれると思わないでね！

僕らは中に入り、目的の受け付け前につくと明久が驚いていた。

「か、カラオケ!?本当にここであってるの?」

「うん、今日はこの場所が無料券貰ったからね。さあはいろいろ！」

「(カラオケ……剛田……なんか引つ掛かるな) まあいいか」

「?どうしたのじゃ?雄二よ」

「いや、なんでもない」

「おしー入ろうぜー!」

ジャイアンがドアを開けて入ったのだ。他のみんなも楽しそうに部屋に入っていたのだが、このときの僕とスネ夫はというと・・・

「スネ夫、耳栓はある!？」

「ごめん!ない!!」

「くっ、恐らくこの数時間以内にとんでもない被害が・・・!」

「女子を誘わなかったのはそれが理由だよ!被害受けるのは僕とのびただけでは不公平だから、明久を巻き込んだのに!!坂本や秀吉を誘ったのは明久だ!」

「もう、諦めるしかないのか・・・ジャイアンのあの

「恐怖の歌に!!」

「同志よ!!」

僕とスネ夫はアイコンタクトとっていたが、この間のやり取りは数秒だ。僕らは心のなかで涙を流しながら、絶対に生き延びると心に誓ったのだ

カラオケ室に入った僕らの体制はこうだ・・・

テレビ

明久

僕

スネ夫

雄二

ジャイアン

秀吉

となっていた。音がでかく出る付近が僕と明久がいる。トップバッターを決めるのはくじで決めたのだが・・・

「おお!俺様がトップバッターか!!」

「おお!」

「!？」

「(おもいだした!!学校で俺の聞いていた話は剛田の歌は本当にやばいと!!)」

ジャイアンがトップバッターだと知ると、僕とスネ夫は絶望を感じ、雄二は思い出した顔をしていたがもう遅い!!

――待て！骨川、のび太！お前ら嵌めたな!?

――人聞きの悪いこと言わないで!?!僕もスネ夫にギリギリまで教えてくれなかったの!

――ごめん！でも、僕ちゃんだけの被害は受けなくなかったの!!

――なら、明久だけで良いだろ!?

――明久が雄二もさそおうとなつたからこうなつてるのさ!!

――お・おのれ!!明久ああああああああ!!

――どごぞの預言者だよ!?

――とにかく、なんとか生き延びることだけ考えよう!

――――――全ては生きて帰るために!!

今度は僕とスネ夫と雄二でアイコンタクトをとつたのだ。因みにジャイアンに音痴とか絶対に言わないようにしなければと、アイコンタクトとると二人とも了解と頷いていた

なんとしても無事に帰るんだ!

そう思うと・・・

「おしやああ！準備はいいか!?!」

「うんうん！のび太もテンション上げなよ!?!」

「うむ。ワシもテンション高いのだからお主らもテンション高くあげたらいいのでは・・・?何か低くないかのう?」

「(おいおい、このアホどもは剛田の歌がどれだけ知らないんだ!?!) おいおい、これでもテンション高いぞ?」

「(明久は被害あつてるはずなのに・・・覚えてないみたい) あははは・・・そうだよ」

「(遺書書いとけばよかった・・・) これでも楽しみにしてるんだよ?」
すでに後の祭りでもうスタンバイしていた。ああ・・・美子さん・・・ごめんね?生きて帰れたらいいけど・・・多分厳しい

「それじゃあ！俺様のオリジナル歌を・・・きけー!!」

「いえー!!!」

「(さようなら・・・そしてこんには地獄のリサイタル)」

「♪~~~~~!!」

「!!!」

!!!

その日・・・僕を含むジャイアンの歌を聞いたメンバーは記憶が飛んだみたいだ……。ジャイアン本人はケロツとしてスッキリしていた。ガラスは・・・ね

オマケ

22世紀のある場所にて・・・

!!!まただ・・・

「またジャイアンの歌が頭に響いた・・・!?」

「お兄ちゃんだけじゃなく私もよ・・・」

「恐るべしジャイアンの歌・・・」

時を越えていまだに彼の歌は恐怖として残っていた……。恐るべし剛田武・・・

今度は……

ジャイアンの地獄のカラオケから数日……僕らは再び学園長に呼ばれたのだ。まさかと思うけど……

「始まるまえから嫌な予感がするよ……。うう、数日前の恐怖が思い出すよ」

「本当に麻からお疲れね……。おはよう。のび太くん」

「この声は……。おはよう。三上さん」

僕の彼女の三上美子さんが僕に声かけてきた。ああ……。彼女の笑顔を見て元気であるし、今日も頑張ろうとなるよ

「どうしたの？そんな朝から疲れていて……。体調悪いの？」

「あつ、だ、大丈夫だよ。只ね……。恐怖の歌を聞いたせいだから、気にしないでね？」

「恐怖の歌……。？良く分からないけど、お疲れ様」

うう……。この優しさが身に染みるよ……。心の疲れが一気にとれたよ……

「そういえばのび太くんも呼ばれたの?？」

「うん。そういう三上さんも呼ばれたんだ」

「ええ、学園長直々に生徒達を呼ぶなんて……。この間と同じことをするのかしら？それとも……。嫌な予感はあるわ……」

そこは激しく同意するよ……

学園長の呼び出しとなれば……。また何かする可能性があるから……。とりあえず、いこう?？」

僕は三上さんの手を握りながら歩くと三上さんが戸惑った声を出していた

「つ……。の、のび太くん?？」

「(し、しまった!!) あつ、その……。ほら……。僕らってカップルになったけど……。その／＼／＼」

「いいわよ／＼／＼。けれどそれなら／＼／＼」

三上さんは僕の腕を抱きつくようにしてきたのだ。つちよ!!? あそこ……。む、胸が当たっているー! あつ三上さんからいい

匂いが／＼／＼

「ごめん／＼／＼でも、のび太くんなら／＼」

「うう／＼／＼と、とりあえず学校にいこう？（り、理性が飛ぶ前にいこう!!）」

「そ、そうね！（はう、つ．．．つい、抱きついてしまったわ!!でも、のび太くんは私を一人の女としてみてくれるのは．．．嬉しいわ）」

うう．．．三上さんの髪の毛いい匂いだった．．．って！僕はなにをかながえてるんだ!!振り払え！邪念よ！振り払え！

「（とにかく、意識そらさないと．．．）学園長は僕ら以外に誰をよんでそうだろう？ジャイアンとスネ夫はジャイアンの婚約者達と共に何処かへいったよ」

「そうなの？となれば．．．吉井君と坂本くんは確定ね。前のメンバーをほぼ呼ぶと思うわ」

となれば．．．霧島さんも自ずと参加しそうだね。姫路や島田も．．．あれ？一混乱の予感が．．．

「もう腹括るしかないね．．．」

「確かにね．．．」

「はあ．．．」

僕らはため息をつきながら教室を入ると．．．

「「「「．．．」」」」

「来たかい．．．これで全員ね．．．」

学園長をはじめとする．．．明久たちがきていたのだ。あれー？なんか嫌な予感が．．．止まらないのですけど．．．？

「あんだ達には．．．合体をしてもらうさ」

「「「「．．．はい!」」」」

学園長の突然の変な発言に僕らは固まったのだ．．．。合体．．．？一体どう言うことだろ．．．

合体とは・・・

学園長の突然の変な発言に皆は固まり、女性陣らは何を想像したのか顔真っ赤にしている人がいた

一体どうしたのだろうかと思いつつも、皆はまだ固まっていたので僕が質問した

「学園長、今の発言ではわかりませんので、分かりやすくいつて下さい」

「やれやれ・・・今度の召喚獣は、二人で召喚するものだよ。まあ、見てみた方が早いだろうし、アンタらもアタシも、酷い目に遭うことはないから安心しな」

「それで合体とかいったのですか？」

「そうさ。召喚獣が暴れたりすることはないし、それはアタシが保証してやるよ。それに、召喚獣に何か問題があればフィールドもすぐに取り消そうじゃないか。それでどうだい？」

「なるほどです・・・。皆は今の話を聞いてどう思う？」

「うーん・・・雄二はどう思うの？僕はわかってないから決めてよ」

いや、結構分かりやすく言われたよ？明久

「・・・正直悩み所だな」

あれ、珍しいというべきなのかな？何時もなら即断るorするの二つなのに、今回は慎重に考えているね？

・・・この間の本音の召喚獣で大分ひどい目にあったのは事実だけどね・・・

「おや？何故だい？」

「正直ババアの言うことはいまいち信用できない。しかし、他のクラスの中に話を持って行かれても困るから悩みどころだ」

「確かにね・・・」

「なら、吉井と坂本二人が前に出な。拒否権はないからね」

「まっいいか。ババアの考えもあるしね（学園長は純粹に召喚獣の実験を見たいと思うしね）」

「やれやれ・・・ババアの実験に付き合ってるか」

「・・・あんたたちは本当に口の聞き方が問題あるね・・・直そうと思わないのかい？」

「いや全く直そうと思えない」

「吉井でも坂本でもいい。相手の身体に触れて召喚獣を呼び出さな。それで出てくるようにしてある」

「へえ。それじゃあ・・・」

「その通りに・・・」

お互いの頭に手を伸ばす明久と雄二は・・・

「いくかつ・・・ぐああああああ!!」

お互いに思いつきりその顔面を鷲掴みにしたことにより、ミリミリと頭蓋骨から嫌な音がした気がした

うん・・・

「二人ともバカね」

「バカじゃな」

「・・・いつもの事」

「あ、あの・・・止めなくっていいのですか？」

「瑞希、そこはスルーしときましよう?」

「本当に何してるのさ・・・」

僕らは呆れていたら学園長がため息つきながら次の手順を明久達に伝えたのだ

「はあ・・・坂本でも吉井でもいいから、普通に呼び出しな」

「ぬぬぬぬ・・・!!試獣召喚っ!」

お馴染みの召喚の合図をすると無事に作動していたのだ。そんな掴み合いしていた二人もアイアンクローを止めて見守っていると、いつもより少し長い待ち時間の後に、召喚獣がゆっくりと姿を現した

「・・・子供・・・?」

「か、可愛い・・・!!」

僕は召喚されて出てきた正体に驚き、美子さんは母性本能が働いたのか目をキラキラとして子供を見ていた

「明久と雄二の間を元にされた感じじやのう」

「・・・よく見れば二人にそっくりな部分がある」

「あれ、本当だね。目つきが雄二みたいに鋭い感じがするし明久とそっくりな部分がある」

「えっそう??」

うん。自覚してないと思うけど、似ている部分があるよ?でもなんだろう?この嫌な予感は・・・

「んで、これはどうやって操作するんだ?」

外見なんかより大事なのはそっちだ、と言わんばかりに学園長に尋ねる雄二

確かに外見なんて二の次だけど・・・

「操作はない」

「はっ・・・?」

「操作はないと言ったのさ。日本語が理解できないかい?」

「いやいや、冗談でしょ?」

「いや冗談じゃないみたい。明久と雄二も見てみよ?」

「えっ??ええ!?!」

僕が指差した方向を見ると驚いていたのだ。彼らが驚いた理由は・・・

《うう?キャツ♪キャツ♪》

「自立で動いてる?!?!」

「よく気づいたねー!。そうさ、あんたたちの性格のもとで自律で動くような仕組みになってるのさ」

「何!?!」

先から雄二と明久はハモリ連続だね。でもこの自律はなんか感情豊かだね・・・

《わー、きやつきやつ♪》

前から卓袱台が気に入ったのか、そのままご機嫌でその下に潜り込んでんだり始めた

「なんか、本当に子供みたいだね」

「そうだな」

そんな召喚獣を見て、明久と雄二は眩く。見た感じ、召喚獣という

よりはその辺にいる幼児そのものだ
すると……

「よく気づいたね。バカジャリのくせに」

「「うん？」」

よく気づいたって、何が？

「アンタらの言う通り、これは子供だよ」

「いや、それは見たら分かりますけど」

「もしかって……!？」

「のび太君?！」

僕が頭の中で思い浮かんだ仮定に美子さんは心配そうに見ていた。
すると、学園長が意地の悪い顔にならながら説明したのだ

「おやおや、勘の鋭い子がいるもんだね……なにか解ったのか説明し
な」

「はい。二人とも落ち着いて聞いてね?まず、二人とも召喚獣したよ
ね?で、子供が出てきた……ここまでの理解はOK?」

「「うん／ああ」」

「子供は子供でも——君ら二人の子供なんだ……」

「「「……はあああああ?!?!」」」

ぼくの説明に、皆が叫んだのだ。僕も信じたくないよ……
この実験も一混乱ありそう……

二人を混ぜると・・・

僕が仮定を前提にした説明に雄二と明久、島田と姫路と秀吉が固まっていた。まあ・・・男同士の子供となれば固まるよね・・・
「えつと・・・どうなんですか？学园长として今の説明は事実なんですか？」

「ああ、そうさ。野比の説明通りにこの子供は坂本と吉井の間から出来た子供さ」

「イヤアアアアアオ!!!」

明久と雄二が絶望してる側では、美子さんとムツツリーニが二人の間の子供をじつと眺めて納得していた
「なるほどね。似ている部分はあるわ」

「・・・恐らく、二人の特徴しつかりと出ていると思う」

「ふぎけるな——!!!」

その瞬間、雄二と明久が互いに胸ぐらをつかみ合いながら罵りあっていた

「僕と雄二で子供っておかしいから！」

「まったくだ！気色悪い！バカ」

「気色悪いのはこっちだよ！ブサゴリラ！」

「・・・やんのか!?!こらっ!?!」

《ケンカダメっ!!》

二人の間に来た子供召喚獣が割り込み、二人に脛を思いきり蹴つたのだ

「ぐおおお・・・」

「本音のときと同様に触れるのじゃな」

「確かにそうね。中々痛いと思うわ」

「・・・弁慶の泣き所」

「まあ使い道間違えていない・・・よね？」

脛に思いきり蹴られて苦しんでいたふたりが立ち上がりながら胸ぐらをつかみ合っていた

「明久テメエ！子供にどういう教育してやがる！喧嘩止めるのに暴力

振るってどうすんだ！」

「それは雄二の性格のせいだろ！僕のせいにするな！」

「いや、この頭の悪さと喧嘩っ早さはお前のだ！」

「絶対雄二だね！」

二人の罵倒の仕合に学園長があきれながら宥めたのだ

「落ち着きなジャリども。子供の教育は夫婦の責任さ」

「誰が夫婦だ!!こらあ!!」

「これが本物のゲイ・・・引くわ（よ）・・・」

「引かないでくれ!!頼むから!!俺らノーマルだから!!」

僕と美子さんが冗談で引くと、二人は僕らに本気で嘆願していたのだ。そこまで強く否定しなくていいのに・・・

「とりあえずババア！フィールド消してくれ！俺たちにまた危害加えられたらきつい！」

「やれやれ・・・仕方ないね」

学園長は肩を竦めつつ、召喚フィールドを消す。すると、召喚獣の姿も一緒に消えていった。まだ脛が痛いのか、苦虫を噛み潰したような顔つきの二人だったが・・・この流れはもしかかって??

「吉井と坂本でそうなったのなら・・・今いるメンバーで実験してもらおう!!」

「・・・本気ですか?!」

「本気さ。後ろ見な」

「「後ろ??」」

僕と明久と雄二は後ろを振り向くと・・・目をキラキラした姫路と赤面しながらもしたそうな雰囲気的美子さんに腕を組んでどうでもいい体を取りながらも目だけはギラギラと光らせている島田の姿があった

「やりたいんだろ?あんた達」

「はい！是非とも子供の顔を見せ——じゃなくて、協力させてくださいー！」

「う、ウチも協力しようかな。ほら、生徒として、先生のお願いは極力応えといけないしね！」

「私もしたいです／＼／＼」

それを聞いた学園長は深々と頷きながら、ニヤニヤとしていた
「なら、データのほとりたいから頼むよ？」

「はい!!!」

「とりあえず、後は任せるさ」

．．．．．最後まで引けない状況になった．．．美子さんとはしたい
けど．．．

うん．．．

たすけてーーーーー!!ドラえもーーーーーん!!!

お前のものは……

さて……まずは今いるメンバーを整理だね。僕と明久、雄二、ムツツリー二と秀吉で女子は美子さんに島田に姫路……。恐らく勝手に参加しそうな霧島さんに工藤さんがくる筈

そう考えてると……

がらがらつと、ドアが空いたので振り向くと、今日は婚約者達とどっかにいっていた筈のジャイアンと真理亜さん達が居たのだ。あれ？スネ夫もいる？

「よう。なんか面白い予感がして俺とスネ夫達はこっちに來たんだ」

「あれ？でも五人とも予定があつたのでは……？」

「それが……今日からいく筈の予定だつたところが明日に変更になつたんだ」

「それで、武君の提案で私と冬花と里緒菜もこちらに來たのです。ご迷惑でしたか？」

「ううん。大丈夫よ？ね？皆」

美子さんの言葉に皆は頷いていた。断る理由何てないしね？

「そうですか……。失礼します」

「と、ところで……。何をしていたのですか？」

「何かの実験ですか？」

里緒菜さん達の疑問に、僕は1から説明するとジャイアンが冷や汗出しながら聞いてきた

「おいおい……。それ前回とは違うとはいえ、大丈夫なんかよ？」

「多分……」

「まっ、何しても僕らでもよかつたら協力するよ？」

「そうですわね」

「待ちな。協力するのはありがたいが、あんたら四人は部外者だろ？」

学園長がストツプすると、スネ夫と真理亜さんが懐から名刺を取り出して、学園長に見せてた

あれ?!学園長が固まつたけど!?

「はじめまして、氷川真理亜と申します。こちらの二人は私の妹達で

す」

「以前お会いしたと思いますが、改めまして骨川スネ夫です」

「骨川・・・氷川・・・なるほどね、あんた達はスポンサー契約を結んでくれるのかい？」

「はい」

「勝手な判断しているのかい？こう言っってはなんだが」

「問題ありません。既に私達はお父様やお母様にお話は通しています」

「僕もです」

二人がそういうと学園長は暫く考え込み・・・

「・・・分かった。後日に面会して

お話ししたいからこちらから電話すると伝えておくれ」

「分かりました」

「と言うわけで、アタシは少し席を外すが吉井！問題起こすんじゃないよー」

「何で僕だけ!？」

「色々つぶつ飛んでるからだろ？」

「黙れ!!雄二!!」

その喧嘩を見てため息つく学園長

「はあ・・・、野比!」

「はい」

「このバカ達がやり過ぎていたら、学園でも流れてる死の噂の制裁？は学園長の権力をもとに許可する」

「はい・・・え？」

「」「え?」「」

「野比が仕切りな、アタシは少し席を外すがすぐに戻る」

そう言いながら学園長はいそいそと出てていったのだ。えつと・・・あれ?何で僕に任せられたのかは知らないけど・・・

とりあえず・・・

「じゃあ、学園長の許可出されたので僕がしきることになりましたが良いですか？」

「「「異論ないです」」」

「じゃあ、最初は・・・ジャイアンと雄二でお願いしていいかな？」

「俺と剛田か？別にいいけど何でだ？」

「ガキ大将だったジャイアンと元悪鬼とか異名つけられていた雄二が組み合わせたらどうなるのか知りたい」

「なるほど。それは面白いな」

「確かに。コンピュータがこの性格ならどう混ぜるのか知りたいな」

僕の提案に二人はノリノリだった。さて・・・どうなるのかな？と思ってるのは他の皆もおなじで気になり、待ち構えていた

「試獣召喚!!」

ジャイアンと雄二が肩を組んだまま、召喚獣を呼び出すと出てきたのは・・・

見た目はショート黒髪で鋭い目付きに、ムキムキの体だった

「うわ、あの鋭い目付きは雄二にそっくりだ！」

「確かに二人にている部分もある」

「なんか凄く鍛えてるのう・・・」

うん・・・そこは同感だけど・・・

「なんでボクシングポーズ？」

「確かに・・・」

僕と明久がそんな疑問をいっていると・・・

『おーい、誰か俺の技の実験になってくれないか？親父達』

「・・・あそこにいるバカっぽいやつを実験にしろ」

『ん？了解!!』

雄二が召喚獣にそう指示出すと・・・全速力で明久の方に向かってきた

「ってなんで僕!？」

「「バカだからだろ?」」

「ハモるな!ゴフツ!」

おお・・・見事な正拳で明久鳩尾に入ったが・・・大丈夫かな？

『おし！悪は滅びたく！ハツハハハ！それとよく覚えておけ！お前のものは俺のもの！俺のものは俺のものだから・・・お前を暴力していないのは俺だけだ！』

「なんか最低な発言聞こえたけど!？」

「なるほど、性格はガキ大将精神が強いわけか」

「いや、その前に吉井君はよく耐えたわね？召喚獣の攻撃はとんでもない筈よ?」

「そこは明久だからね？美子さん」

うん。明久ならなんでも耐えれそうな気がする・・・

暫くすると学園長が戻ってきたので一旦フィールド消してもらったのだが・・・戻ってくるまで明久はあの二人の間でできた召喚獣に追いかけられていたことはここだけの話だ・・・

血は似るもの

さて、ジャイアンと雄二の実験が終わったら次は誰にしよう。とりあえず、次は申し訳ないけど……

「男子同士であれなら女子同士はどうなるんだろう？」

「確かに……」

「でしたら、次をやるのは私が手を上げます」

真理亜さんが手を挙げて立候補してくれた。じゃあ、真理亜さんのパートナーは……

「なら、ウチが協力するわ」

「む？島田が立候補するとは意外じゃ」

「こういうのは色々実験した方がいいと思うの。それに、召喚獣慣れている人がいいとなればウチか瑞季か美子よ？」

「わかりました。お願いします」

「オツケー！……サモン!!」

島田がいつもの召喚するときの合図を出して行くと二人の間に出てきたのは……

髪の毛の色は真理亜さんの黒い色で髪型はどちらでもなくショートカットで目付きは島田よりの目付きだった

「おお、なんか分からないが強いぞ？」

「それもそうだろ？真理亜さんは黒帯だからな」

「いやそれで強いって理由になるのはおかしいのじゃ……？」

『お母様達、こんにちは！』

「あらかちんと挨拶できるようになってるのね？」

「はい。よく挨拶できましたね？では、あそこのお兄さん達に挨拶してあげてください」

『わかりました！』

真理亜さんがそういうと僕ら男子陣に挨拶し始めた

『初めまして、真理亜お母様の子です。えーと』

「僕はのび太。こっちがジャイアンにスネ夫」

『のびーた？ジャイアン？えーとナルシスト？』

「!?」

「ぶっははは!!スネ夫!お前名前覚えてないぞ!しかもナルシストとか・・・面白すぎてわらえるぞ!!」

「あははー・・・僕は名前を伸ばされたけどね・・・」

すると今度は雄二が明久を紹介し始めた

「あそこにいるのがバカなお兄ちゃんだ」

「つちよ!?そんな紹介はないのじゃない!?」

『バカなお兄ちゃんと・・・突撃!』

「ぐぼお!」

「・・・!」

「なんで!?!」

明久は本日2度目の召喚獣から攻撃食らう。しかし、なんでムッツリーニも?!

『なんか危険な臭いがしたから。バカなお兄ちゃんに関しては・・・なんか本能的に』

「そんな本能的なのは嫌だよ!?!」

「・・・(ピクッピクッ)」

明久は耐えれたみたいだが、ムッツリーニにはきつかったみたい・・・仕方ない。とりあえず、この子を抱いてでもらったら消えた

「ムッツリーニ大丈夫か?」

「ものすごいいい音だったよね・・・」

「・・・紳士たるもの耐えるのが当たり前・・・」

「すごい男らしいことをいってるけど足元が震えてるよ」

「さすがにあれは痛いからのう」

僕ら男はムッツリーニの心配をしていたら、美子さんが声かけてくれた

「はいはい。今の段階で実験してた人は吉井君×坂本君、真理亜×美波ね。次は男×女で普通にいきましよう」

「そうね。となれば・・・里緒菜さんと骨川の二人にしてもらおうかし

「ら？」

「うん……」

「わ、私ですか!？」

あれ、でも試験もうけていないからできないのでは？

「そこは問題ないよ。そのとんがりのガキには名前と少しした点を記入してもらっているから召喚できる」

なるほど……

「えーと……何ていうでした？」

「たしか……サモン！」

そういうと二人の間に召喚獣が出てきた。あれ……まさかの女の子??

「かつ、かわいい!!!」

《くすぐすたいですうー。あ、パパに抱かれるのは嫌です》
「?!」

里緒菜さんは女の子を見るなり俊足で抱き抱えていた。み、見えなかった……そして、まさかのスネ夫には拒否宣言……

《だって……これは私とママだけの特権です。パパがそれをできるスペースがないので》

「?!?、そんな!？」

《悪いね?。パパ。これは私たちだけしかできないことなんだよ?》

見た目は里緒菜さんみたいにロングヘアーだけど言葉というか……仲間はずれの間的なのは間違いなくスネ夫が昔僕に仲間はずれをしたときについていた言葉だ……

まさか、実験している召喚獣とはいえ……娘にそれを言われたらダメージでかいよね……

「ごめんよ……パパが悪かったからごめんよ……自慢するのも控ええるから、仲間はずれしたのも反省しますから許してください」

《嫌だ》

「こら、許してあげなさい?」

《……少しだけ許します。でもパパはヘタレな部分があるからやつぱり嫌》

「……(ドサツ)」

「スネ夫……?!!!!」

娘の最後のヘタレ呼ばれた瞬間にスネ夫は真っ白に燃え尽きて倒れた。その様子に僕とジャイアンはスネ夫の名前叫びながら駆け寄った

「……学園長、フィールド消してあげてください」

「あなたの判断は正しいねえ……」

スネ夫は暫くは燃えてきていて僕とジャイアンとで必死に説得していた

二人の娘……なんか里緒菜さんの方が血が濃いのかな……
僕のがすごく怖くなったよ……

親バカありがとうございませす!!!

さて・・・真っ白に燃え尽きてるスネ夫を見て僕とジャイアンはどう慰めるか考えていた。うーん、まさかスネ夫がここまで真っ白に燃え尽きると思わなかった・・・

「どうする? ジャイアン・・・」

「まさか、スネ夫がここまで精神的にボロボロにされると思わなかった・・・。このケースははじめてだな・・・」

「こういうときはドラえもんが居たらいいんだけど・・・いいアイデアないかなー」

「! いいアイデア思い付いたぞ!!」

「え?」

僕はものすごい冷や汗が出て止まらなくなりました。この嫌な予感・・・彼らにはわからないだろうがジャイアンの二つのある出来事で僕ら死にかけていたのだから・・・

頼むからその最悪なことが二つのキーワードがでないように!

そう内心願いを込めると・・・

「スネ夫だけのためのジャイアンリサイタルするか料理するかだなぁ!!!」

「なりました!!」

「いいよー! スネ夫治ったみたいだからもう大丈夫だよ!!」

その言葉を聞いて慌てて真っ白になっていたスネ夫は立ち直ったのと僕も止めた

だって、スネ夫もあの恐怖の料理を経験してるのだから・・・それを思ったらね?・・・いつか明久にもジャイアンの料理を食べたら知るだろう・・・。

僕らが何故、未だに料理のキーワードで震えてるのは知らないだろうが・・・

あれ? 姫路とジャイアンの料理がコラボしたら・・・

やめよう・・・想像しただけで辛い

「なんだ、もう元気出たのか？」

心底残念そうな顔してるジャイアンだが、僕とスネ夫は肩を抱き合って震えていた。何故なら今後ろに真理亜さんが笑って立っているのだが・・・その笑顔の目の奥には笑っていなかった・・・何故?!

「武さん、私はあなたに暫く歌と料理は禁止と言いましたか？」

「・・・あつ・・・」

「少しお話しましょう。冬花も手伝ってください」

「・・・うん」

「つちよ・・・ちよつとまって?!許してくれ！」

「駄目」

そう有無を言わずに真理亜さんらにより、ジャイアンは教室の外に連れていった。少ししてから・・・

「ごめんなさーいーい!!!」

「(いったい何があった?!)」

ジャイアンの叫び声を聞いた僕らは何があったのかとても気になったが気にしないでおこうと決めた・・・

ごめんね?ジャイアン・・・

僕らは気を取り直して、まだやっていない面子をどうするのか考えていた

「さて、次は・・・」

「・・・雄二とする」

「つちよ!?まで、翔子!?その腕は曲がらんぞ!？」

「・・・問答無用・・・早くやろう」

「止めてくれ!頼む!!」

いつの間にか雄二の関節を締めていたが、あれは痛いよ・・・。そんな雄二が必死に僕らにお願いしてきたが・・・

「霧島さん、雄二も嬉しそうだからしてあげたら?僕らは後でいいから」

「・・・ありがとう。吉井はいい人」

「明久、キサマアアアアアア!!!アアアアアア!!!」

「ほら、早くしてあげなよ」

明久がそう促すと、霧島さんは試獣召喚の合図を出した……

「……試獣召喚」

雄二の顔面に霧島さんの指がめり込んでいるがああ二人の間では、普通らしく霧島さんはそれをそのままにして召喚を開始した

「あ……。すごく綺麗な子ですね」

「ホントね。それに、頭も運動神経もよさそう。文武両道って感じ」

「二人のいいところをそのままにした感じですね」

出て来たのは女の子だった。その光景に姫路と美子さん、島田が出てきた子にそういう評価していた

「まあ、雄二と霧島の子じゃからな。おそらく勉強も運動も優秀な子になるじやろう」

「……背も高くなりそう」

「けっ。知るかつ」

「しかし、外見とかは霧島さん似だが、目はちよつと違うよね？」

「言われてみたらそうだね……」

「……うん。目元とか、小さな頃の雄二にそっくり」

「えええっ!? 雄二って小さな頃こんな可愛い顔してたの!？」

「……うん。ほら」

霧島さんがポケットから写真を撮り出した。そこに写っていたのは……誰?!

「……小さな頃の、雄二」

「」「」「ええええええええ!?!」「」「」

その写真を見た全員が驚いた。確かに、雄二を思わせる子供だが、目が今とは全然違うし、そう例えるなら……

「今の雄二が野生の狼だとすれば、この写真の雄二は懐いた小型犬だ!!」

明久の気持ちはわかるけど、口に出すのは失礼だよ……

「明久、アトデオボエテロ……」

「あれ、何で雄二はそんなに怒ってるのさ? 可笑しいな?」

おかしいのは君の頭だと思つた自分は悪くないはずだ。なにせ、恋

する乙女二人の恋心を気づいていないのだから・・・

あれ？なんだか僕も人の事言えない気がしたら涙が・・・

「どうしたの？のび太君？」

「いや、なんか自己嫌悪に・・・」

「そ、そう・・・」

「もしも子供が生まれたら名前はどうするんですか？」

「・・・しょうゆ」

「「「「・・・はい？」」」」」

んん、なんか聞き間違えたのかな・・・??今、明らかに醤油の平
仮名のしょうゆを思い浮かんだのだけど・・・

周りを見ると本当に・・・言ったんだ

「いや、霧島よ。その名前はもう一度考え直した方が・・・」

「・・・それだと調味料を連想させる」

「じゃあ、こしょう」

「それも調味料ですよね?!」

「二人の名前を会わしたいのはわかったけど、さすがにその名前は・・・」

「・・・難しい」

「いや、霧島さんの感覚がおかしいんだよ!!」

本当に霧島さんは感覚がずれているよ・・・。するとその端には先
ほど霧島さんに驚掴みされていた雄二が機嫌悪く反論していた

「くそ・・・!こんなもんで勝手に色々言いやがって・・・!」

『おとーさん、おとーさん、遊んでよー』

「俺はしんどいから嫌だ」

『うー。おとーさん・・・おとーさん、遊んでよう・・・』

雄二は拒否してきたが、しょうゆちゃん（仮名）の必死の嘆願に雄
二は心おれた

「・・・はあ、少しだけだぞ?」

《うんっ》

「おらっ。これでどうだ」

『きゃーっ。たかーい♪』

混ぜても隠せないもの

これで半分はできたけど・・・真っ白に燃え尽きてる雄二と少しだけ疲れて戻ってきたジャイアンはお互いに抱き締めながら「友よ！」と言つて泣いていた

あーうん・・・お疲れ様・・・二人とも

「しかし、残りは誰がしていないんだろ??男女で」

「えーと、里緒菜さん、真理亜さんは剛田君と骨川君としたわね。で、坂本さんと霧島さんだわ」

「うん、男女はこれで三組はできたね。冬花さんは今回は遠慮するっていつていたからね」

僕と美子さんはそう話していると学園長がまとめるようにいつてきた

「あとはあんたらと吉井達だね・・・。どうするんだい?」

「あつ、確かに・・・」

ーサモン!!

「「え?!」」

僕らは突然の合図に振り返えると鼻血を出しまくっていたためか輸血をしていたムツツリーニとその隣には・・・

「工藤さん!」

「ヤッホー。なんだか面白い気配したから来てみたら本当に面白いこととしていたね♪」

「ま、まさか・・・ムツツリーニと工藤さんが出てくる子供は・・・」

ものすごく嫌な予感して振り返ると・・・そこには、召喚された子供がいて髪型と顔立ちは基本的に工藤さんで、目つきがムツツリーニそっくりの男の子だった

「外見は普通だね・・・」

僕と美子さんの言葉に他の周りも頷いていた

「だが、問題は――」

「性格、じゃな」

「絶対に、エロい方に行くよなあ」

この二人の子供だからどんな性格なのか、楽しみ半分怖さ半分だ……

「まあ、二人のエロをコンピューターが処理しきれなくて、一周回って生真面目な子供になるって感じだな」

「行くかもしれないね」

「いやいや、ジャイアンものび太も何いつてるのさ？僕はさすがにそう思えないよ」

「うむ。いくらなんでも無理があるじゃろ」

「だよな。俺も言ってみただけだ」

僕は笑い合いながらそう話していると二人の間の子供は腕を組んでなにかいい始めた

《……子曰く、命を知らざれば以て君子と為るなし》

「「ん……?!」」

《……礼を知らざれば以て立つなし》

……

「「ちよつとまでー！！！！」」

僕とスネ夫とジャイアンはあまりの事について大きな声を出して突っ込み入れた。

だって……だって……

「「ホントに一周して真面目になってるじゃねえか!!どんだけエロいんだよ!?!君達は!!」」

「……なんの事か分からない」

「あははは、誉めてくれてありがとう」

「「誉めてないし、ムツツリーニは今さら否定できないだろー!?!」」

はあはあ……久しぶりに大きな声で突っ込み入れてしまった……

《……言を知らざれば以て人を知るなし》

「ところでこれはどういう意味？」

「えっと、命と礼を知ることの大切さを説いた一文ですね」

「……『人生とは、為すべきことを為し、人の心について思い、天寿を全うすることである』という意味」

意味を問う明久に、姫路と霧島さんが答えた。死ぬまでに自分のや

るべきことを見つけて成し遂げろって意味……

まさか、こんな小さな子供から教わるとは……

「あの二人の間だからどんな子かと思ったけど……」

「ものすごく真面目な方ですね」

「えーと……」

「……人生達観？」

美子さん、真理亜さん、里緒菜さん、冬花さんは少し苦笑しながら話していた

「なんか安心したね？」

「うん」

《……すなわち、我が天命は究極の性行為の追及にある（ポタポタボタ）》

「……つて、更にもう一周していたー?!?! やっぱりエロだし、正真正銘二人の子供だ!!!!」

「……俺には全く似ていない」

いや、君にかなりかなりそっくりだから!!!! もう無かった事はできないよ!!!

《……夢は儚く散るものだが、夢を叶えてはいけない決まりはない（ポタポタ）》

「……この二人の教育はいつたい何をしたらこうなる!!!! そして子供がそんなの知ってはいけないのに!!!!」

《……我、天命に全うする。究極の性行為を……（ブジャアアアア）》
「（ブジャアアアア）」

「……何処に鼻血出す要素あった!? ムツツリーニも何を想像した!!!!」

もう嫌だこの二人は……人知れず僕は疲れ涙出そうになったのは秘密だ……

人の黒歴史はいくつもある

そろそろ時間も迫っているから・・・さて、どうしよう・・・
うん！決めた！

「先に僕と美子さんをやるね？その後に明久は二人を相手にしてもら
うから」

「え?! (どうしよう・・・逃げようかな・・・)」

「もし逃げたら・・・お姉さんに明久が勉強での合宿で覗きしていた
ことを話すよ?」

「なっ!?!この悪魔!?!鬼!人でなし!!」

「仕方ないでしょ?君が逃げることを対策するにはこれぐらいの事を
しないと・・・。それに君だけはまだ何もしてないでしょ?」

「そうだぞ、明久」

僕が言うのと雄二も頷いていた。あれ?雄二のあれは被害と言うよ
り・・・うん、やめておこう

「雄二・・・助けてくれるよね?」

「フツ・・・明久・・・忘れたか?」

「何を?」

「俺はお前の不幸が大好きなんだよ!!!」

「最低だ!!こいつ最低だ!!!」

本当にこの二人は親友なのかな・・・?時々このやり取り見ている
ら考えてしまうよ・・・

「はいはい、そんなことよりのび太と美子の子供が気になるわ」

「私もです」

「のび太の性格とか考えたら・・・優し過ぎる子ではなからうか?」

「・・・あり得そう」

「・・・二人の子供興味ある」

明久と雄二がそんなやり取りしてるなか、皆はそれぞれの評価を
いった。うん、とりあえずやらないと分からないよ

「とにかく、やってみないと分からないよ」

「そうね」

「そういえば、のび太って昔はどんな子だったの?」

僕は召喚しようとする、明久の何気ない一言で僕は固まった……いや、僕だけではなくジャイアンもスネ夫も固まった

「えーと……わ、私は興味あります!!」

「そうね、坂本のを見たら……気になるわね」

「……雄二はかわいい」

「まて、話がずれているぞ!?翔子!」

「私も気になるわね。武様らの反応見る限りどんなのだったのか」

「うんうん」

「「えっと……」」

その問いかけに僕ら三人は目でアイコンタクト取り合った

「……どうする!?このままだと僕ら二人が昔仲間はずれしていたこともばれるよ!!」

「……くそ!!確実にお説教コース確実になるぞ!」

「……泣き虫だったのばれたくないし……あつもしかったらばれるかも」

「……諦めるな!!俺たちにまだ望みはある!!ならば……明久にター

ゲット向けよう!

「……おう!!」

このやり取りがわずか数秒での会話だ。言葉を発することもなくできるのは……僕らだからできるんだ!!

「あ、ああ、僕の昔はたぶん知ってる通りの話だからあれでいいはずだよ!そんなことよりいいだしの明久がいいなよ?!」

「えっ!?ば、僕!?!」

「そうそう!昔の明久ならきつと……」

「そうきつと……」

「……とてもバカな事をしまくっていたと思う……ってあれ?今もあまり変わらないような気が……」

僕らが一句一句ハモってという明久が慌てて反論していた

「失礼な!!僕は昔より賢いぞ!!」

「……江戸幕府を開いた人は?」

「ふつ、そんなの常識だよ・・・徳川秀忠!!」

「・・・え?」

「え?」

明久今なんていった?前から賢くはないと思っただけだよ・・・

「「ここまでバカなのか・・・」」

「つちよ?!違うの!?!」

「えーと確か・・・徳川・・・瑞希!!教えて?!」

「美波ちゃんはドイツで育っていましたからね。徳川家康が江戸幕府開いたのです」

まあ確かに、島田はドイツにいたから出来ないのは仕方ないにしても・・・

「明久はこれ出来るでしょ!?!」

「まあ、これは・・・な」

「ちなみに徳川秀忠は二代目の將軍だけど、開いたのは家康になるから明久の答えは間違えてる」

「畜生ー!ー!ー!」

「うるさい!!!」

「ごぼっ?!」

僕らが回答を教えると明久は悲しみの叫びをするも島田に拳で黙らされた

あわれ親友・・・

さて・・・

「時間も迫ってるし、やらないとね」

「そうね・・・」

「ん／＼／＼」

「／＼／＼!?!」

僕はギュッ!!と美子さんの手を握った。美子さんも顔真っ赤にしながらも握り返してくれた。ちなみに僕も顔真っ赤です・・・

「じゃあ・・・」

「ええ・・・」

「「サモン!!!」」

お互いに声揃えてハモって言うと、召喚されたのだが……
「え……」

僕と美子さんは固まった。何故なら……
出てたのは……

男の子でも女の子でもなく……
そう……

「双子?!」

男の子と女の子の双子だった!!

こ、これは……ど、どういう事?!?!

僕と美子さんはこれまでになく動揺して固まっていた……
一体何故……??

バカにバカと言われたくない！

僕は今日の前の状況に困ってます……

元々、今回の実験では男の子か女の子かそれぞれ一人は出ていたのだが……

「「ふ、双子!?」」

「これはどういう事じゃ……?!」

「……驚異……」

「こ、こんなことあるのですか!?!」

「し、信じられない……」

「……びつくりした」

それぞれが僕らの召喚したのを見てびつくりしていた。尚、ジャイアン達はというと……

「「……」」

「スネ夫も含めて四人とも固まってるぞ……まさかの双子は予想してなかったからな……」

「あー、うん……そうだろね……」

「おやおや、これは予想してなかったわね……」

学園長も予想してなかったのか少し頭を抱えていたが一番頭抱えたいのは僕だよ? 何故なら一番予想してなかったことなんだから!!

そんな僕とはよそにみんなは感想を言っていた

「髪の色と目元は美子譲りね」

「顔立ちと髪先の癖はのび太譲りじゃな」

「……双子だが将来が期待できる」

「すげえのが出て来たな……」

「……私と雄二の子にも負けてない」

「この子ら、天使じゃないか?」

「うん、その例えでも間違いないね」

「なんか……こう」

「母性本能が出るわね……」

「・・・うんうん」

各々が感想を言うが結論を言えば可愛いが多かった
パパ、ママ

その子供らは、僕らのところへトコトコと歩いてきた。僕らはしやがみ、目線を合わせる

「近くで見ると、美子さん寄りだね？二人とも」

「うん。のび太くんにも似ているわ」

あははは、くすぐりたいよー

僕らはそれぞれの子供に頭を撫でると嬉しそうに反応した

「僕らと何をしたい？」

《のび助はパパと昼寝したい》

《瑠璃はママと運動したい》

「そっか・・・え?!」

「はいっ?!」

「どうしたんだ??」

僕らが動揺していると、他の皆は???となっていた。分かっているみたいだ・・・

「よく考えてみて?」

「これまでの召喚獣されたときにはなく、今の召喚獣はあるものは何?」

「先程までなく、今あるもの・・・はっ!!」

「!!」・・・あああああ!!!」

「そ、そんなばかな?!」

と、とにかく落ち着こう・・・

「のび助、瑠璃」

はいー!

「後ろの皆さんは私たちの友達なの。自己紹介できる?」

《うん!!》

《分かりました!》

僕らの声に頷くとのび助と瑠璃はみんなの方を見て一礼して笑顔

を見せる

《野比瑠璃です。好きなことはパパとママと体を動かすことです!!》

《野比のび助です!好きな事は昼寝!射撃!》

「これは驚いたねえ。名前が付くなんてプログラム、組んでないんだけどねえ。しかも双子なのは予想外」

「えっ!?!バグですか!?!」

「可能性は高いね。けど、坂本と霧島でやっても問題はなかったから、大丈夫だと思うんだけどねえ」

確かに……

《パパ?何の話ですか?》

《難しい話?》

「あつ、うん」

《頭撫でますか?》

《撫でます?》

「え?」

《パパ、いつも言ってます。頭を撫でると自分が賢くなった気がするのでそれにより難しい考えが無くなったと言います》

《いつも言ってるよねー。人生のんびり生きようと言ってるもんね》

あーうん。間違いなく僕らの子で同時にある考えが出てきた

「その顔だとなにか気づいたの?のび太君」

「あ、うん……このシステム、未来予知ができるんじゃないかな?」

「「「ええ!?!」」」

「何をバカなこといつてるのさ!?!」

「君にバカと言われたくないよ!?!」

徳川秀忠と家康を間違えたぐらいの君に言われたくない!!

「それで野比、何か根拠はあるのかい?」

「根拠は……のび助と瑠璃の言葉です。他のペアでもできたら、ちゃんと分かるんですけど……今のところはそれしかわかりません」

「まあ、今は追及しないでおくよ。でもいいデータにはなるねえ」

「役に立ったようなら何よりですけど……」

「そうね……」

パパとママ！難しい話は終わり？

子供らがキラキラしながら僕らの方に聞いてきた。僕らはそれぞれ頭を撫でながら答えた

「うん、ありがと」

「助かったわ」

わっ、気持ちいい

でもお別れはそろそろしないと・・・

「美子さん・・・寂しいけど、そろそろ次に行かないと・・・」

「そう、ね・・・」

美子さんも寂しげに頷いていた。うん・・・今回の実験とはいえ・・・まさか自分達の子供の名前が言われるとおもわかったけど・・・

寂しき気持ちは同じだ

パパとママ！！

「ん？」

「どうしたの??」

ギュッとしてください

「・・・いいよ！」

僕らは笑顔で優しく僕らの子供を抱き締めた・・・この抱き締めた時にもものすごく優しい気持ちになった

いつか、美子さんと結婚して・・・二人のような子供が欲しいな・・・

言葉はきちんと気を付けよう

僕と美子さんは未だに寂しい気持ちを内心抱えながらも、お互いに手を握りしめて次の実験を進めた

「中々いい家族だったじゃないかい」

「ありがとうございます」

「学園長にとつてもいいデータとれたのでは？」

「そうねえ・・・後は男はそのバカだけかい？」

「そうです」

僕がうなずくと、学園長からバカと言われた男は不服そうに反論した

「つちよ!?僕バカじゃないよ!？」

「あれ、バカと言われただけなのに自分だと自覚していたのかい？」

「なんだと!?このババア!!（つちよ・・・ひどいですよ!?!）」

「本音と建前が逆だよ!？」

僕がそういうと明久はハッ!とした顔で驚いていた。時々明久の脳の構造はどうなってるのか見たいよ・・・

「明久・・・逃げたらお仕置きね?」

「あはは、何いつてるのさ・・・?」

「目を反らしてるといふことはその気マンマだったのね」

美子さんが苦笑いしながら指摘していた通り、彼はこう言うときは言い訳はして逃げるからね・・・

「とりあえず、明久。動くな!」

「のび太様・・・それは?」

「もし逃げたら・・・この拳銃で君を撃ち抜く」

「鬼だ!?夏休みの恐怖思い出したよ!？」

「二二二・・・(ガタガタ)二二二」

「わかったら逃げないの」

「ひよつとしたらあのび太は魔王?わかったよ」

「だから本音が思いきり出ているってば・・・思わず一瞬撃ちそうになったよ。それか玲さんに報告して監視してもらおうかなって考え

たよ」

「最低だ!?!バカの癖に最低だ!?!僕の生活の自由をうばうつもりだな!」

「!?!」お前が言うな!?!このバカ代表!?!」

流星に今の言葉は聞き捨てにできないよ!?!君の方が遥かに最低な部分出てるよね?!それに生活面に関しては君の自業自得な部分があるよ!?!

「やれやれ・・・(ガチャ)・・・え??」

「良いタイミングだね。ムツツリーニと雄二」

「・・・自分だけ不幸から逃れようとするな」

「つちよ!?!ムツツリーニ放してよ!?!雄二も止めてくれよ!?!」

すると、雄二は一回大きいため息ついていたのだ。あれ、これはまさか・・・

「忘れたか? 明久・・・」

「何がだよ!?!この手錠ほどこいてくれよ!?!」

「俺はな・・・お前の不幸が大好きなんだよ!?!」

「分かっていたよ!?!こん畜生!?!」

落ち込む明久にジャイアンがそばに寄り肩を叩いた

「明久、元気出せ! 何だったら、今度は二人でカラオケ行って元気だすか!?!」

「それはそれで良いかもしれないよ」

「(流星にダメだよ!?!何回も経験してるはずだよ!?!あの恐怖を!!)」と、

とりあえず時間が押してるから・・・島田!Geh!」

「Ich habe es verstanden・・・Bestraf mich, renne weg (わかった。にげたらお仕置きよ?)」

昔ドイツでドラえもんに遊びにいったときに覚えた言葉の一つ・・・とはいっても、何となく言いたくなつたからわかる言葉をいった

そのドイツ育ちの島田はノリノリで良い笑顔で明久の方に歩いていったのに対して明久は震えていた

もう逃げることは無理だよ・・・諦めなよ

「な、何をいつてるのかわからないけど・・・とりあえず、のび太!!! 覚えてろー!!」

「Beschw・rung (サモン)!!」

あつ、そういえば他の語学だと召喚できるのかな？島田はノリノリで言っていたけど日本語で言うの忘れてしまったのでは・・・本人も言ってからあつ！という顔になった・・・

果たして結果は・・・

暫くしてから明久と島田の召喚獣が姿を現した。外見や髪の色は明久だが、髪型と目は島田のものだった

「いけた!?まさかの日本語ではなくってもいけた!?!」

「これはいいデータとれるねえ・・・」

僕と学園長が驚いてるよそでは・・・

「珍しいな。ポニーテールの男の子か・・・」

「え、雄二。この子は女の子じゃないの?」

「確かに一目見れば女の子と間違えるだろうが・・・男だ」

雄二が指差していた方向をみると・・・

《おとーさん、ぼくとあそんでーっ》

「ホントだわ。自分のこと、『ぼく』って言ってる」

「おそらく、明久が女装をしてかなり似合うような感じで、少々女寄りになったんだろう」

「それ、僕が元々女寄りってことかなあ?」

「.....」

「目をそらさず答えろ!! そのバカな男達!!」

「.....」
「まあ・・・強くいきろ。バカのお兄ちゃん」

「一句一句ハモった!?! そして君らなんか嫌いだー!!!」

こういうときだけは明久察するのうまいな・・・。これを勉強で頭の回転回してくれたら嬉しかったのに・・・残念

《ねーねー、おとーさんっ》

「あ、ごめんごめん。遊んでほしいんだよね。ほーらっ!」

《たかーい! おとーさんたかーい♪!》

「ねえ、ウチにも抱かせてよ」

「うん。はい」

「わー。肌柔らかーい」

《おかーさん、くすぐったいよー》

「もく。可愛いく」

子供の可愛さに、抱く力を強くする島田。あれ？嫌な予感がするのはなぜだろう……

《おかーさん、かたくていたいー》

あつ……その発言は……

「どこが固いですってえー！」

「なんで矛先が僕に向いて背中の骨があああああああああああつ
!!」

「うるさい!!子供に暴力するのは大人としても人として最低でしょ!?
だから、子供に手を出せるわけがないでしょうがー!」

《わー。おかーさんつよーい♪》

明久の背中の関節を極める島田を、子供が嬉しそうに見ている。いつ見ても綺麗に決まってるけど……今回は止めれないよ……なんか止めたらいけない気がした

「学園長。フィールド消してあげてください」

「あんたらはいいい夫婦になるわね……」

「早く消してつて……ぎやああああ!!!」

あつ綺麗に止めが決まった……それと同時にフィールドが消えたが……明久の亡骸を見つめていた

あわれ明久

「いや!?死んでないから!!!」

そんな突っ込みはおいとこう……

メはやはり・・・

さて、これで島田もできたのはよかったから・・・残りは・・・
僕はちらつと倒れてる男を見ていた。まだ動けそうにないな
ら・・・

「あがが・・・まだ体痛いよ・・・」

「姫路さんや、チャンスだよ」

「！はい！！いきまます！！」

「！はっあー！」

姫路さんが明久を捕まえようとするのと明久は本能的から来たのか
起き上がって回避した。手錠は先程はずしていたけどやはりもう一
度出番なのね・・・

「逃がさない！！スネ夫！」

「OKー！」

僕はスネ夫に向かって手錠を渡すと立ち上がってキヤツチャーが
盗塁する選手を刺すように、明久を逃がさないために手錠を投げても
らった

「(ガチャン!!) え!?!」

「脱走罪で逮捕ー！」

「逃がすかよー！」

案の定明久は手錠が投げってくるのは予想してなかったのかあつさ
りと手錠がはまり、ジャイアンと雄二がその隙を逃さず明久を捉えた
「はなせ!!逃がさしてくれ!雄二!!ジャイアン！」

「もう忘れたか?明久・・・」

「何が!?後生だから離してくれ!」

「俺はお前の不幸が大好きなんだよ!!」

「やっぱり、こいつ最低だー!!!」

「捕まえてる俺が言うのもあれだが・・・お前らほんまに親友か?」

「親友?ナニソレ?」

「ジャイアン、この二人に聞くの間違えてるよ・・・」

「だな・・・」

「……………はあ……………」

二人は一句一句はもって同じ答えで返事してきたのを聞いた僕ははとてため息ついた

親友ってなんだろう……………？この二人を見ていたら時々考えるよ……………

「つて！とにかく離して！」

「明久……………(逃げたら姉にあることないことを言う。嫌なら協力しろ)」
「ワカリマシタ」

「これでもう大丈夫だぞ」

「キサマフイツカクロス」

「はん。お前が俺を殺せると思うなよ？」

……………本当に友達ってなんだろう？この二人のやり取り見てて思うよ。とりあえず……………

「明久が動かないなら……………姫路」

「はい！逃げないでください」

「うん、もう逃げないよ……………」

明久はもはや達観したように観念していた。そんな明久に姫路は手を握って目をつぶっていた

目をつぶる意味はなんだろう？そう思ったのはわるくないはず

「……………サモン！」

姫路が目をつぶりながら大きな声をあげて召喚したのだ。

「さて……………どんな子が出るかな？」

「瑞希と吉井くんでしょ？とても優しい子じゃないかしら？」

僕と美子さんがそう話してる間に召喚獣が姿を現す。外見は姫路だが、顔は明久を幼くした感じだ

「また、可愛いのが出て来たな」

「姫路と明久、両方の特徴をとらえておるのう」

「将来が楽しみだな」

「うん」

雄二、秀吉、ジャイアン、スネ夫が感想を述べると召喚獣は明久と姫路の方を見る

《おとうさん、おかあさんどうしたの？》

「えっ？あ、ああうん。姫路さん、目を開けてよ」

「え・・・っ！」

自分の召喚獣を見た姫路は、そのまま召喚獣を抱きしめた

《お、おかあさん？》

「よかったです・・・！ちゃんと、生まれてくれて・・・！」

《おかあさん、ちよつと、くるしい》

「あつ。ご、ごめんなさい」

召喚獣を解放した姫路は、そのままその頬を撫でる。ただ、その微笑んだ顔には、一筋の涙があった

「ふふ。明久君にそっくりです」

「そ、そうかな？姫路さんに似てると思うよ？」

「そうでしょうか？」

《おかあさん？》

「はい？」

《どうして、わらってるのになみだがでてるの？》

「え？そ、そんなことは・・・」

「ホントだ。どうしたの、姫路さん？」

どうやら言われるまでは気づいてなかったみたいだ。うーん・・・僕らみたいにビックリな事は起きていないみたいだね

「い、いえ、大丈夫です」

「何かあったら、遠慮しないで言つてよ？」

《そうだよ。おとうさん、いつもいつてるもん。たいせつなひとにはやさしくしなさいって。だから、おかあさんとわたしにやさしいもん》

「えっ？？」

「なっ、何言ってるのかなあこの子は！」

《わーっ。おとうさんたかーい♪》

「ん？？」

いつも・・・？明久が子供召喚に高い高いをしてくるときに僕と美子さんは引っ掛かったが今はやめておこう・・・

「さて、流石に終わりたいがもういいかい？」

「学園長がこう言っているけど二人はどうなの？」

「え？あ、はい。私はいいです。明久君は？」

「うん。僕もいよいよ」

そう二人にも確認してから召喚フィールドを消してもらった。そして、学園長が僕らに確認してきた

「これで全員のデータとれたわね。助かったよ」

「お役にたてて何よりです。あつ、学園長にまた後で確認したいことがあるのでいいですか？」

「別に構わない。後で学園長室に来な」

「はいー！」

こうして僕らは解散することになったのだ……。そして僕はこの後の学園長との話で驚くことを聞いた……

可能性・・・

昨日の召喚実験を終えた翌日・・・僕はある三人に「今日予定大丈夫なら僕の家に来てくれない？昨日の事でどうしても話さないといけないことがある」ってメールを送った。

現在、自分は今何してるかと言うと、部屋の片付けもしていた。彼らが来る時間までにとりあえず掃除はしとこうと思っていた。あの程度終わると、写真たてていたのを僕はじっと見ていた

「(ドラえもん・・・君は今何してるの?) 夏休みももうあとどのくらいで終わるんだろう・・・」

ーのびちャーん。お友だちが来たわよーそのまま二階に上がってもらわね?

「(つと考えすぎていた!) はい。お願いー!」

とりあえず、今は昨日の事を話さないとダメだ。やっぱり、自分の考えが間違えてないならあれは・・・

「「お邪魔しまーす」」

「うん。どうぞー、あと明久お邪魔するならかえってー」

「うん、失礼しましたー・・・ってダメだから!?そのネタわかる人は少ないと思うよ!?!」

「おお・・・ノリツツコミのキレはまだただけど、明久のせいで普段はボケたくってもボケれないんだからいいでしょう?」

「・・・なんかごめんなさい!」

僕の言葉に明久は見事な土下座してきた。土下座までは求めてないのだけど・・・

「はいはい、とりあえず3人も座ってね?」

「「はい／ええ／うん」」

僕の呼び掛けに三人も座ってもらい、僕は紙を取り出した。分かりやすく説明するなら紙を使ってやろうと思ったからね

「さて、昨日の事だけどまずは整理しよう?まずは男子同士でやったらどうなった?」

「剛田君と坂本君がしたときは性格面が強く出ていたわね。女性同士

でするのは余り無かったような気がしたけど・・・？」

「あ、うん。言われてみれば・・・」

「そこに関してはごめん！僕もその頭がなかったよ・・・」

そう、思えば男女の組み合わせで考えていたが女性同士での組み合わせは考えなかった

だけど・・・

「なんか、ほら・・・女性同士でするとムツツリーニが・・・」

「ああ・・・最後まで持たない可能性がある・・・」

「まつ、恐らく予想だけど男性同士でなら性格が強くなる。女性同士でなら癖みたいなものかなー」

「なるほどね。そこはまた次回あれば研究するのもありだわね」

さて・・・同姓同士の話はここまでにしとかなないと次の話に進めない

「さて本題に入るけどいいかな？」

「うん」

「はいー」

「ここまででは同姓同士の話だったけど、今度は昨日起きたイレギュラーな事だよ。明久は分かるかな？」

「えっと・・・他のみんなが召喚したのとは違い、のび太と三上さんの子供が名前あったと言うことだよね？」

「確かに皆さんと違って二人のは名前がありましたよね」

「しかも双子出てきたと言うこともイレギュラー」

「そう・・・まずは僕と美子さんの出てきた召喚獣に①双子が出てきたこと②名前があったこと。この二件だけでも既に異常だよ・・・」

「「確かに・・・」」

そう、僕らの時は名前が出てきたと言うおかしい現象になったのだ。

「ここから話すのはあくまでも仮説だけど・・・明久と姫路、僕と美子さん。この二つが起きたことは実は未来の可能性が考えられる」

「「え!?!」」

僕が昨日気になったことを思い出して、考えた結論がこれだと話す

と皆ビツクリしていた

「どういうこと?!双子以外にそうなる判断はなんで!？」

「・・・私とのび太君の子供だったら、『のび助』『瑠璃』って名前があったことね?」

「でも、私と明久君の子供に、名前はありませんでしたよ?」

「確かに。・・・僕ら子供となのにのび助君と瑠璃ちゃんと同じって、どういうこと?」

「僕らと二人の子供が、この言葉を使ったのは覚えてる?」

僕は三人に見えるように大きく紙で分かりやすく『いつも』と書いた

「はい。しっかりと《いつもいつてるもん》って」

「私たちの子供も言ってたわね」

「明久、カフェ店とで『いつも通りの物』という言葉にはどう感じる?」

「いつもとなると・・・いつもの物が出てくるよね?・・・まさか!？」

僕の言葉に明久も気づいたみたいだ。珍しく今日は頭が回ってるみたいだ

「毎日のように通っているから向こうもわかるんだ」

「そう。・・・じゃあなぜ、初対面の僕らに、子供は『いつも』って言葉を使ったんだ?毎日会っているはずのない、初対面な僕らに。おかしいとは思わない?」

「そうね・・・言われてみたら矛盾してるわね」

「学園長がそういう風に設定したからでは?」

「そう思ってた聞いたのだけど・・・『そんな設定は一切やっていな。やっているのは、性格や性癖、外見の調整。親二人の認識だけ』ってさ」

「ここまでではなせばわかるはずだ・・・僕が何を言いたいか

「えーと、どうこと・・・?」

「わからなかったの・・・!僕の口から言うのも恥ずかしいのに・・・!」

「の、のび太君?」

「はぁ……よく聞いてね?このペアは将来……結婚している可能性がある／／／」

「二ヶ、けっけ、結婚っ!?!?!?!」

僕の言葉に皆も動揺していた

「落ち着いてね?あくまで可能性だから……このシステムは、軽い未来予知をしたんだ」

「ま、待ってよ!それだったら、雄二と霧島さんだって可能性は高いはずじゃないか!」

「……子供ができる前に、霧島さんのヤンデレで、雄二が殺されなければ可能性はあるけどね……」

「あー……」

「でも骨川君や剛田君のもどうなるの?」

「それに関しては何んとも言えないけど、少なくとも僕らはあくまで軽い予知みたいだね」

僕がそう話すと姫路が「そうですよね……可能性ですよね……」って話していた

「でも、未来はいくらでも変わるからその時にならないとわからないよ」

「確かにそうだね」

僕と明久が話すと姫路がなにか決意したように明久を見た

「あ、あの……明久君」

「ひ、姫路さん?」

「昨日の女の子……名前はどうしましょうか?」

「待って!?!何でそうなるの!?!」

「じゃ、じゃあ……男の子だった時の名前を……」

「考えるのはその時でいいんじゃないかなあ!?!」

明久が迫られていたように美子さんも僕の方に迫っていた

「子供早く作りたいね」

「まって!?!何でいきなりそうなるの!?!」

「のび助には何をやらそうかしら?瑠璃はのび太君か親バカになりそうなのわ」

「美子さん!?!姫路の雰囲気当てられた!?!」

必死に冷静になつてもらおうと呼び掛けていたのだが美子さんも姫路も目をキラキラしていた

「明久君!」

「のび太君!!」

「子供を作りましょう!!」

「召喚システム以外ではいけません!!!」

結局こうなるなんて・・・

でもいつか美子さんと結婚したいな・・・

夏のある日の休み・・・

夏休みももうあと二週間で終わりだ……。この夏休みは色々なことがあったな。そう思いながら部屋の片付けをジャイアンとしていた

「おーい、のび太。これはここでいいのか？」

「あつ、うんー。そこでいいよ！」

「よつと・・・全く・・・。スネ夫は学校の登校日で今日はこれないし、真理亜さんや冬花、里緒菜の三姉妹は家族水入らずの海外に行ったから自然と暇になるんだよな」

「明久達と誘ってどっか行くのかもよかったし、美子さんとその・・・デートとかもそろそろしないとなーって考えていたんだけどね」

僕がそういうとジャイアンも納得した顔になっていた。告白してからカップルらしいこととしてあげれてないような気がする・・・

「全く・・・それなら三上とデートしてきても良かったんじゃないか？」

「それが・・・今日は美子さんも予定あつて無理だった」

「なるほどな。坂本はいつもの事だから連絡しても繋がらんだろう」

「だねー」

たまにはこういう時間もいいかもしれないけどね・・・ちなみにジャイアンの家族が旅行で行くことになっていたのだが、本人は登校日があったため今回本人は断念するはめになった

僕の家族はパパやママは夫婦水入らずの一週間の旅行だ

「しかし、大分整理していたんだが・・・ここまで増えてると思わなかったぞ？」

「あははは・・・自分も驚いたよ・・・。アルバムの整理しているけど、ずいぶん増えたね」

「だな」

そう話ながらも、掃除する作業は止めなかった。僕らの冒険には僕、ジャイアン、スネ夫・・・そして、今は遠くに離れている静香ちゃんと僕らの親友でもあり・・・未来に帰ったドラえもん・・・この五人が過去、世界、宇宙・・・幾度も救ってきたんだ

「けどそれも遠い昔・・・もうあの頃の5人揃うことはないだろう・・・」

「叶うなら・・・また五人で会いたいね」

「だな・・・」

さて、片付けは終わりー!!

「なあ、のび太。久しぶりに裏山へ散歩いかないか？」

「あつ、いいね!・・・っとその前に、今日はせっかくだから夜にお風呂いこうよ」

「おつ、いいな!つてか、今何時だ？」

「今は・・・11時半だし、裏山行く前にどっかで飯いく？」

「おつ、いいな!」

「僕は片付けも終えて外に出る用意をしていた。お金も大丈夫・・・戸締まりオツケー・・・よし!」

「いこうか!ジャイアン!」

「おう!・・・明久達は何してるんだろうな？」

「さあ・・・?今ごろどこかで、遊びまくってるんじゃない?まつ、さすがに今日は大きい問題起こさないじゃない」

「それもそうだな。案外島田達と何かしてるかもな。」

「あははは。まつ、スネ夫はいないけど二人でのんびりしよう」

「僕はそう話ながら外へ出ていった。今日ぐらいは大きいトラブルはなかったらしいのに・・・」

そう願いたい・・・

探索しながら昔話するのもあり

今、僕はジャイアンと散歩しながら昔話をしていた

「昔はよくジャイアンとスネ夫に苛められたなー」

「あー、あのときは済まなかったな……。子供だからとして許される範囲越えていたかもな」

「もう昔の事だからいいよ」

そう笑いながらジャイアンの謝罪を受け止めて歩いてきた。でも、ジャイアンは昔と比べると丸くなったなー……。歌と料理は相変わらず酷いけど……

「なにか失礼なこと考えてないか？」

「考えていないよ」

勘も鋭くなってるけどね

「にしてもどこで食べに行く？」

「そうだな……。散歩しながら決めるか？」

「だね」

そういえば前から気になっていたことがあるからこの際に聞こう……

「……。ジャイアンはもう野球しないの？」

「……。昔はプロになるために頑張ってきたんだが中三の時に最後の夏の大会で引退したあとに肩が痛めてしまった」

「えっ!？」

「高校野球は俺の夢の一つだったが……。肩の怪我で今は高校野球をやるの断念した」

「今は……。？つまり将来的には復帰を？」

「ああ、大学でまた野球をするつもりだ。今は三年間のリハビリとトレーニングと思って頑張るしかないんだよ」

ジャイアン……。本当は野球したくってたまらないのに……。この間のキャッチボールはできたから野球は本格的なのできるはずなのに……。まだ肩が痛むのかな……

「そんなことより！のび太！近々に草野球でもするか」

「えっ！でも怪我って・・・」

「安心しろ！中三のときからもう2年は経過してるから野球は大丈夫だろー！」

「まあジャイアンが良いなら・・・」

となつたらまた面子を集めないかね

「その時にあいつらも誘おうぜ！」

「明久達を？」

「おう！あいつら四人と俺ら三人含めて七人。うーん・・・まあそのときはそのときでいいかー！」

「もし実現したら楽しそうだね」

野球か・・・昔はジャイアンにバットで殴られたときもあったなー。

正直・・・少しだけ・・・少しだけ同じ目を目を遇わしてやろう！って思っても返り討ち食らうからしなかった・・・

「ジャイアンってさ、家族の仕事つくの？」

「あー、将来的にはそれも有りだしな。ただ、真理亜さんの親父さんは大きな会社の社長だから・・・許してくれるなら母ちゃんの跡継ぎしときたい。あの店は俺にとっても大切だからな」

「なら、大人になったらジャイアンの店で買い物したり顔出しにいくよ」

「おー、こいこい！・・・明久はきちんとその時は食べてるのか気になるけどな」

「確かに・・・彼の生命力は僕よりすごいよ・・・」

「坂本もすごいよな・・・。ほら、霧島さんのあれは俺はびびるぞ」

「あー、うん。あの二人の生命は驚くだね。其を言うならムツツリー二もギリギリだね」

そう。よく考えてほしい・・・

普通の高校生であそこまで鼻血出しすぎて輸血するのもおかしいし、一人の女性からのお仕置きに死にかける友人や色々な意味で精神的に強い友人・・・普通の高校生活はこれではないよね?!

「おつ、あそこなんか人気な店みたいだから入ろうぜー」

「まあ、いいけど・・・」

とりあえず、店入って昼御飯を食べないと……そう思いながら店入ったのだ

「いらっしやいませ、何名様でしょう……か……」

「……え？」

向こうの店員の挨拶が急に止まったから僕らも不振に思い目の前
向く……と

「の……のび太君……／＼／＼／!?」

僕の大切な恋人の三上美子さんが……僕らの入った店に働いて
いた……

怒ると怖いのは……

僕とジャイアンはお昼御飯を食べるために近くの店入ったのだが、目の前のいる女性に僕は固まった

「の……のび太君……／＼／＼／＼!?」

「よ……美子さん……／＼／＼／＼!?」

「え、えつと／＼／」

美子さんは来たお客さんが僕らだとわかるとテンパっていた。なんか……うん……

「とりあえず席案内してくれ。他のお客様も待つことになるし、仕事もあるだろ」

「はっ、そ、そ、そうね／＼／」

見かねたジャイアンがそういうと美子さんは動揺しながらも僕らを席案内してくれたのだ。「うん／＼／……か、可愛い……」なっ
ておもう

「ふえ!?／＼／」

「声出てるぞ?のび太?」

「えう?!うそお!」

どうやら僕もテンパってるようだ……僕の言葉を聞いた美子さんも先程よりもさらに真っ赤になっていた……

「と、とりあえずメニューはこちらです／＼／ま、またあとでね／／」

そういうながらいそいそと美子さんは顔真っ赤にしながら奥のホールにいったのだ。可愛いな／＼／／

「おい、今ののび太かなりあれだぞ……。かってドラえもんがミーちゃんに恋したときの顔になっているぞ?」

「はっ、ご、ごめん!」

「いや、大丈夫だ。(なんか昔を知ってる身からしたらのび太がここま
でデレメレになるのは……初めて見たような気がする……)」

「と、とりあえずメニューを決めよう!」

僕は指摘されて恥ずかしさもあるが、とりあえず気分転換でメ

ニューの方を意識向けた

・・・・・・・・・・・・・・・・メイド服の美子さんは可愛いなー／／／／／／

美子 side

私はいつも通りバイトを励んでいたのだが、心のなかでは少し寂しい気持ちがあった

「(のび太くんの誘い・・・嬉しかったけど今日はバイトだったからな・・・) 会いたいなー・・・」

お客様が先程までいた机を拭き終わった時にお客様が来店来てきた音が聞こえたので近くにいた私が出迎えた

これで知り合いとかならビックリだけどね・・・
「いらっしやいませ、何名様でしょうか・・・」

え・・・

なんで・・・

「・・・え？」

なんでここにいるの・・・?

「のび太君・・・／／／!?」

私の大切な恋人の野比のび太君が・・・私が働いている店に来店してきたのだ・・・

知り合い来たらビックリといったけどのび太君が来るなんてもつとビックリしたわ!!!

と、とりあえず席を案内しないと・・・!!落ち着きなさい!だから、三上美子!!

そう思い切り替えたのだが・・・

「うん／／／・・・か、可愛い・・・」

「ふえ!?!／／／」

「声出てるぞ?のび太?」

「えう?!うそお!?!」

ど、どうやらのび太くんは考えていたことが口に出てしまったみた

いだ……

か……可愛い……なんて／＼／＼

とりあえず二人に席に座ってもらい私は……

「と、とりあえずメニューはこちらです／＼／＼ま、またあとでね／＼」

終始真つ赤にしながら二人の前でメニューを見せて去ったのだ

もう……のび太くん不意打ち反則よ……ますます、今以上に好きになるじゃない……

とりあえずこの顔真つ赤な気分を押さえましょう!!

同僚達が暖かい目でこちらを見ていたのは気づかなかった……

のび太side

僕は先までテンパっていた気持ちをどうにか押さえることができた

「まさか美子さんが居たなんて……驚いたよ……」

「まあな。(物凄いデレデレだったから、本当にこいつのび太?!って思ったのは内緒だ)」

「?なにか失礼なこと考えなかった?」

「気のせいだろ?」

「そう?」

なんか、一瞬すごい失礼なこと言われた気がしたけど……まあいいや

「ジャイアンは何を頼む?」

「俺か?うーん……フレンチトーストかな?」

「なら僕はホットケーキだね。……よく考えたら喫茶店になぜメイド服なんだろう?」

「さあ??」

そんな疑問が沸き上がるも、美子さんがスマイル顔でこちらに来た

「メニューは決まった？二人とも」

「良いのか？そんな口調で？」

「いいのよ。貴方達が相手ならね」

「なら、僕はホットケーキでジャイアンはフレンチトーストをお願い」
「畏まりました。．．．ごめんね？今日はバイトで」

「ううん。美子さんも忙しいけど無理はしないでね？」

「ありがとう！」

美子さんの笑顔を見てもう僕は天国いつていい．．．!!

「とりあえず、今日はここで食べ終えたら俺らは裏山とか遊びに行くよ。三上も今度時間あったら三人でどこか遊びにいこうぜ！」

「いいわね。じゃあ、仕事続けるわね」

「うん」

美子さんはメニューを聞いてからホールの方に向かった。うん．．．ん？

「お客様、やめてください」

「いいでしょー？僕と付き合わない？」

美子さんがホールに戻ろうとするとチャライ男が美子さんをナンパしていた

「どうした？のび．．．太．．．」

「ん、何？」

「いや、あの．．．怒ってますか．．．？」

「あははは．．．可笑しいこと聞くね．．．」

可笑しいこと聞くね．．．

「ジャイアン．．．」

「は、はい!!」

「少し席外すから．．．頼んできたのが来たら教えてね？」

「りよ、りようかい!!」

僕は其を聞いて目の前に美子さんをナンパしているやつの方へ向かった

「やめてください。仕事ですから!．．．え？」

「いいんじゃないか?．．．あ？」

僕は美子さんの腕をつかんでいる奴に思い切り掴むと向こうは不振な顔でこちらを見ていた

「なにお前？俺ナンパしてるのに邪魔するの？・・・っ！」

「その手を離しな・・・。」

美子さんの繋がれた腕が払い除けられたの確認すると僕は美子さんに指示出した

「ホールの方にいった？」

「あつ、うん」

「あつ・・・てめえ！せつかくのナンパ邪魔しやがって・・・」

「少し人目つかないところにいかない・・・？ツブスヨ」

「上等だ!!」

男は僕の方を思い切りやらんでいたがそんなの怖くない・・・
人の彼女に手を出して・・・タダデスマトオモウナヨ？

数分後・・・

後に男は一生のトラウマになるほどの出来事になったのは本人たち以外誰も知らない・・・

しかし、ジャイアンは見てしまった・・・のび太が出ていくときに目がかかり据わっていて分かりやすく例えるなら・・・無表情で触れてはいけない線を踏んだ怒りだ・・・

そして・・・

ーーぎやあああああああああ!!!

男の悲鳴が聞こえたのは気のせいだと信じたい・・・

そして店は三上美子の彼氏を怒らせるな！命にかかかわると思え！
という暗黙の了解ができた

時は過ぎても・・・

あのあと美子さんに二度とナンパしないと誓った男は泣きべそをかきながら逃げた。あれでも少し手加減したんだけどね・・・

因みにホットケーキは美味しくいただきました

「じゃあ、私は仕事あるから・・・また今度デートしましょうね／＼」
「うん／＼」

そういいながら別れたのだけど・・・美子さんのメイド服・・・可愛かったな／＼／＼

「おしーそれじゃあ、今度はどこ行く?」

「昼御飯食べたしね・・・店に入る前と同じく裏山に向かいながら散歩するしかないな」

「だよな」

そう話ながらもすでに僕らは歩き始めていた。裏山とか行くといいなながらもあそこに向かいたいな・・・

「ジャイアン、どうせ裏山いく前にあそこ行く?」

「ん?あー、確かにいいな!」

僕の意図を察したジャイアンは笑いながらオツケーしてくれた。裏山いくならあそこも寄ろう。・・・きちんと約束果たさないとね。でも夏休みだからいるかな???

そう思いながらも目的地について僕らはその中に入った・・・

「ここに入るのはいつぶりだろう・・・」

「そうだな。おっ!」

僕らは目的の人があるいてるの見たから走りながら声かけた

「先生ー!!!」

「ん、その声は・・・野比と剛田か!」

僕らの呼び声に聞こえた先生は振り返るとおどろいて声あげていた

「先生!お久しぶりです!!」

「お元気ですか!」

「ああ。元気だぞ……ところで二人はどうしてここに来たんだ？」
「ジャイアンと散歩していたのですけど、どうせなら学校によつてみよう？つて言う話になって……先生が以前ここでまだ働いてると聞いていたから」

僕がそういうと先生は嬉しそうに笑っていた。この間は先生にあつてビックリしたけど……よく見たら先生の髪の毛に白髪も見られる……

「ん？ああ……もう君たちが卒業してから5年はたっているからな……そりゃあ年もとるし白髪も増えるぞ」

「あういえ……」

「あつそうだ！先生！俺さー！」

ジャイアンがなにか言おうとすると先生は手を制して優しい顔で僕らに言った

「色々話したいと思うだろうが、折角だ。中に入って話さないか？」

「えっ？いいのですか!？」

僕らがおどろいて聞き返すと先生は頷いてこたえた

「卒業生なら構わないだろう……折角だ。かつての教室で話さないか？」

「僕らはいいですが先生仕事は……」

「特に終わったから大丈夫だ。何なら今から小学校のテスト受けるか？」

「遠慮します!!」

「はっはは。冗談だ……にしても二人ともいい面構えするようになったな」

「?」

先生は懐かしそうに遠い昔を思い馳せるように僕らを見て話していた

「野比も剛田も1年生から知ってるが、気がつけば卒業して五年経ち、高校二年生……今や立派な大人……とまではいかないがな」

「あれ、誉められると思つたらまだ納得いくレベルまで見られていなかった？」

「だが君たちが今がどれだけ楽しいのか顔見たらよくわかる。特に野比の成長ぶりには嬉しいぞ」

「あはは・・・」

「そりゃ、昔ののび太を知ってる面子は驚くよな。だってあののび太が今や高校生だと言われるとみんな驚くよ・・・」

「テストでは100点とることはあったが、結局は0点が多かったな」

「その節は申し訳ございません・・・」

「嫌々、気にするな。だが野比、剛田」

僕の謝罪を聞いた先生は気にしなくって良いと伝えると同時に僕とジャイアンに真剣な顔で話しかけた

「これから君たちが大人になるとき、時にはうまくいかなく悔しい思いもたくさんすると思う。下を向きたくなくなる気持ちもあると思う」

「・・・」

「だが、そういうときは自分がどうしたいかを必ず決めることだ。そしてその先をどういう風に繋げるのかを先々考えていくんだ」

「考える・・・」

「それと人とは残酷なことについてかは死ぬ事は誰でも共通点だ・・・。だが、死ぬで背一杯生きることが大切だ。人生は長いようで短い・・・決して後悔するような生き方はしてはいけないぞ」

「・・・はい!!!」

先生のありがたいお言葉に僕らはしっかりと返事した。後悔ないように・・・その言葉を胸にしっかり刻まないと!!

「ところで、野比と剛田は高校生活はどうなんだ？二人がいいなら教えてほしいんだが・・・」

「わかりました!!! たっぷり話しますよ・・・僕らのバカの友人達と共に送ってる日々を」

その日の先生との話は二時間もしゃべった・・・笑えること、あきれること、そして自分に大切な人がいることを話すと先生は驚きながらも嬉しそうに笑っていた

そんな楽しい時間も終わりが迎えて僕とジャイアンは先生と門の

前で別れの挨拶をしていた

「今日はありがとう。二人のことを聞けて楽しかったぞ」

「こちらこそです」

「先生もお体大事にしてください！」

僕らがそういうと先生は一回咳をして・・・

「野比!!剛田!!」

「っはい!!」

「・・・二人とも一生、親友としてそばにたつてやれ・・・」

「っ・・・はい!!先生、さようなら!!」

「ああ。さようなら（年は取りたくないものだ・・・二人の成長を見ると・・・涙が出そうになる・・・二人とも頑張れよ・・・）」

僕らは先生に手を振ると先生も優しくふり返してくれた・・・僕らの先生は・・・きつと今も生徒に厳しく怒りながらも優しくアドバイスしてくれてるだろう・・・

懐かしい叱責と激励を聞いた僕らはあの頃の学校に行った時の気分に戻った

また会いましょう・・・僕らの先生・・・

少しした時間

懐かしい……ここに踏み入れるのもいつぶりだろう。そう思い馳せながら懐かしい気持ちを抱えて裏山を歩いた

「懐かしいなー。昔は嫌なことあればいつも裏山に逃げていたんだって」

「へえ?どんなときにも?」

「学校のテストとか、親に怒られて家出したことこともあるよ」

「親に怒られて家出したことか……そういえばのび太おぼえてるか?」

「うん?」

「七万年前の日本に家出したこと」

僕もそれを言われて思い出した。冒険時代は忘れていないけど……どうしたんだろ?

「七万年前の日本でさ、ほらギガゾンビ?だったって……あそこに冒険していたときに、のび太は雪の中で行方不明になっていただろ?」

「あー……今思えばよく生きてるよね……」

「そうそう。お前どうやって助かったんだ?」

「えーと……ペガ達が僕を助けてくれたのさ。体を冷えないように助けてくれた」

「ペガか……あいつらもどうなったんだろうな……」

「未来で保護されているからね……きつと元気にやっているさ」

「だな!」

僕とジャイアンはこの裏山で過去の冒険で涙流したこと楽しかったこと辛かった事……沢山話がつきなかった……

「後はキー坊だなー。この裏山見て思い出すのは」

「うん。今頃は立派になってるかな……」

「少なくともものび太より賢いんじゃないか?」

「ひどっ!」

「ははは!!そういえば、今日は夜どうする?近くの温泉いくか?」

「あっいいいね!そういえば……」

僕はジャイアンに聞きたいことあったので、話題を変えた

「ん？なんだ」

「いやー、明久って本当にどちら選ぶんだろ？」

「あー、確かに・・・島田も姫路も明久のことが好きだからなー」

「そうそう。もしかしたら別のだれかが明久を恋していた場合はどうなるんだろ・・・」

「んー・・・・・・・・血を見ることになるな・・・・・・・・。主に明久が」

「だよね・・・」

「早く決めたらいいのに・・・あの鈍感と恋患いしてる二人・・・はあ・・・・・・・・」

「後は坂本が霧島さんにどう思ってるかだな」

「雄二って素直じゃないからねー・・・・・・・・霧島さんの恋が報われるといけれど・・・それまでに雄二が生きていたらの話」

「生きていたらってって思ったが・・・・・・・・すまん。納得してしまっただ・・・・・・・・」

僕らの友人二人は一体だれに恋するのか気になって仕方ない。

ー・・・・・・・・カーカーカー

「もう時間か」

「だね。そろそろ帰ろう？ジャイアン」

「おう！ならいまから温泉いこうぜー！」

「おおー！！」

僕らはこのときまでは会話も楽しかったし、今日は平穏な日で終わるだろうと思った・・・・・・・・

そう・・・・・・・・このときまでは・・・・・・・・

もしも時が戻れるならその日は諦めたらよかった・・・・・・・・と今でも思う・・・・・・・・

怒りたまると

僕らは家帰って温泉の入る用意ができて、家を出た。

その最中に、温泉に向かって歩いてる最中に出会ったのは――

「あつ、のび太」

「あれ、明久とムツツリーニ？二人で行動は珍しいね」

「お前ら今からどこ行くんだ？」

「えっ？僕とムツツリーニは温泉に行くよ」

「明久ならまだしもムツツリーニも？」

僕が驚いて言うのとムツツリーニは深々と頷いていた。ムツツリー

ニがお風呂……

「頼むから覗きは止めておきなよ」

「……！！(ブンブン!!)」

「激しく横降っているがする気は満々だろ？」

僕らがあきれて指摘すると……

「あれ？アキ??」

「明久君??」

「この声は……美波と姫路さん？」

「ハロハロー」

「こんばんは！皆さんは今からどこに??」

「あつ、今から温泉に行くんだけど姫路さん達は??」

「私達も今からいくのです」

あら？姫路達も??

「夏休みなのに会う確率高いな俺らは……」

「確かに……」

「……驚異の遭遇率」

「なら一緒にいこうよ」

「いいですね!」

「うん、いきましよう!」

あれ……そういえば気になったのだけど……

「島田、葉月ちゃんはいいの?」

「お、お前・・・大丈夫か??」

「明久・・・剛田・・・」

「うん?何?」

「生きているって・・・素晴らしいな」

「二」「雄二に一体何があつたんだ!?!」「二」

「ゆ、雄二・・・とりあえず温泉に入りにはいかない?」

「温泉に・・・付き合おう」

僕の提案に雄二は僅かに光が取り戻され、気持ちを切り替えたが・・・明久が触れてはいけない話題を触れた

「あれ?霧島さんはいないの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

うがあああああああ!!!」

「二雄二が壊れた!?!この人でなしの明久!!」二」

「つちよ!!雄二?!」

急にご乱心状態になった雄二をみて僕らはどうしたらいいかわからなかった

「つちよ、雄二落ち着こう!!ぐべえ!!」

「坂本落ち着け!ごふっ?!」

「のび太とジャイアンが一撃でぶっ飛ばされた!?!」

「・・・恐ろしい」

「どいつもこいつも俺にストレスためさすなー!!!!!!」

「兎に角雄二を落ち着かそう!」

「・・・・・・・・(コクコク)」

「●●●ー!!!!!!」

「もはやバーサーカーだよ!?!」

明久の突っ込みが聞こえたけど僕とジャイアンは答える気力なくうつ伏せになっていた

・・・多分霧島さん関係でストレス貯まったのだろう・・・

そう結論付けながら明久と雄二のぶつかり合いを見ていた

それからしばらくして落ち着いたときは雄二はまた震えていた

一体何があったのさ・
・
・
・
・
・

怒りがたまりすぎた原因は・・・

しばらくしてから僕らは起き上がり雄二も落ち着いていたのでゆっくりと話していた

「雄二は何あんなに怒り溜まっていたの?」

「そうだな。明らかにヤバかったぞ?」

「ふっ・・・翔子に何時ものように拉致されるわ・・・お袋はお袋で料理にハバネロをたくさん仕込んでいたからお蔭で舌が火傷するわ・・・また、翔子に拉致されるわ・・・それがずっと繰り返されていた」

「うわ・・・明らかに疲れているのが見ててわかるよ・・・」
「しかも・・・しかも・・・ある日にあいつはあるうことか俺を夜這いしようとしてやがった!!危うく俺の初めてを奪われそうになったんだぞ?!」

「・・・(ブグゴオ)」

「ムツツリーニ!!血は浅いからしつかりして!」

雄二の言葉に怒りがたまっていた状態の吐くわ吐くわの言葉だらけだった・・・苦勞してるんだね・・・そして、ムツツリーニは夜這いの言葉に強烈に血が吹き出て明久が介護していた

「あははは・・・」

「嫌なにこれ・・・?」

「やっぱりこいつらといると・・・面白くって仕方がないな」

「だね!」

「二「だね!・・・じゃないでしょ!」」

「ええ!?なんで僕の時だけは罵倒!」

元と辿れば明久から始まったことなんだよ?おまけに暴走した雄二を止めたと思ったら一撃で沈められるなんて・・・痛すぎて立ち上がるにはきつかったとだけ記載しておこう

「はいはい、そろそろいきましよう?」

「そうですね」

「とりあえず、温泉でスッキリしなよ?雄二」

「そ、そうだな・・・今は翔子の監視もないからのんびりできるぞ!!」
そういつた雄二はすぐくスッキリした顔で僕らと同行することを
決めた。あれ? 考えてみたら・・・

「Fクラス集合ってやつだね?」

「確かにな」

「夏休みはなかなか遭遇しないはずんだけど・・・ここまですごい
確率で遭遇してるね・・・」

「ひよつとしたら坂本と明久は(悪い意味での)赤い糸が繋がってるの
ではないか?」

「坂本(君)とアキ(明久君)が赤い糸・・・」

「ジャイアンの言葉を聞いた明久と雄二は想像してみたら・・・」

「・・・おえー!!!!」

互いに壁の方で思いきりキラキラだしていた・・・ちなみに女性
二人には見せれない光景なのであえてこちらに注目して話していた

「? 何吐いているんだ? お前ら」

「お前の言葉のせいだろ!」

「そうだよ?! 思わず不細工なやつので余計に気持ち悪くなったよ
!」

「・・・おいおい、こいつ何いつてるんだ? 不細工はお前だろ? 明久」

「じゃあ、男はあつちだから・・・ウチ達はあつち行くね」

そんな男子のやり取りを呆れていながら、島田は指差して言った

「アキ、わかっているとと思うけど・・・」

「坂本くんらと如何わしいことしないでくださいね?」

「!!「しないよ(ぞ)!!」!!」

姫路の言葉に思わず僕らは突っ込み入れた。姫路はFクラスに染
まったのかそれとも・・・天然だからなのかな?

どちらにしてもわからないから置いてこう

「まっ、ゆっくり入ろうー」

「!!「だな! (ええ!!)」!!」

僕がそういうと皆は頷いて動いた。とりあえず、温泉を堪能しない
とね!!

僕ら男子は更衣室で服を脱いでいたときに僕は隣にいた雄二の体をみて感嘆していた

「おお、雄二鍛えてるね?」

「ん、まあ鍛えているからな」

「雄二だけじゃなくジャイアンもすごい」

「・・・確かに」

「まあ俺も鍛えてるからな!鍛えてる目的は特にない」

「ないのにそこまでムキムキになるの!?!」

「そういいながらもものび太も細マツチヨじやねえか?」

雄二が僕の体をみて指差して指摘してきた

「え、そう?」

「ああ、確かに小学校の時と比べると割れているな」

「うーん・・・自然と冒険たくさんしていたから自然に割れたのかな?」

「あーわかるかも!」

「二・・・いやいやそれはない!そしてジャイアンは納得するな!!」

やれやれ・・・とりあえず、風呂入ろうと思いい行動を起こすと中

は・・・

「二!」
「二!」
「二!」
「二!」

貸しきりの状態ともいえるぐらい広がった。人がいないとこんな
に広いんだ!!

「よし!頭あらおうぜー」

「だね。ん・・・?」

「・・・・・・・・(ピタピタ)」

「何してるの?ムツツリー二・・・」

「・・・・・・・・気のせいだ」

「いや気のせいではないだろ」

「・・・・・・・・仕方ない」

ムツツリー二は諦めたかのように体を洗い始めた。いや、覗こうと
言うオーラが明らかにわかるよ・・・

「坂本、折角だから背中洗おうか?」

「おつ、いいな。どうせならじゃんけんで負けたやつが背中洗うつて

のはどうだ?」

「五人だから平等にならんたら」

「ならさ、じゃんけんて負けたやつが一人で四人の背中を洗うのどう?」

「おっいいいな! 他も異論ないな?」

「うん!」

「(ぐっ!)」

明久の提案に僕らはOKを出すと雄二が構えていた

「後出しもなしだぞ・・・セーラーの!!」

「!!」最初はグー!!じゃんけんほい!!」!!」!!」!!」

ジャイアン↓チヨキ

のび太↓チヨキ

雄二↓チヨキ

ムッツリーニ↓チヨキ

明久↓パー

「!!はい! 明久の負けくー!」!!」

「そ、そんなばかな?!?!」

「・・・公平な判定のもと明久の負け・・・」

「くっ、も、もう一回だ!! 5回勝負だ!! 次こそ確実に勝てる!!」

「!!」・・・(あっ、これ明久の負けフラグだ)!!」!!」

そう思いながらも5回じゃんけんをしたが・・・

「・・・・・・・・」

「!!」・・・驚異の連敗だな!!」

明久は結局一人負けが5回も続き、落ち込んでいた。こんなに明久が弱すぎるのはなんか・・・涙でるよ・・・

「ふっ、負けは負けだ。雄二背中洗うよ」

「?」(嫌に素直だね・・・まあいいや)「

「おっ頼むぞ? 明久」

僕は明久の態度に不振に思いながらも自分達の体を洗うことを決めた

「つぶお!?」

「?!?!」

「雄二ー!?」

雄二が変な声を出したら背中がブスブスとやられたかのように赤くなっついて沈んでいた

「あれ?なんでたおれた?」

「たわしで背中を拭いたのか?!」

「それは背中いたくなるよ!?!雄二!大丈夫!」

「し、しー．．．死ぬかと思った．．．」

よろよろと雄二は起き上がった。あーよかった．．．

「るぼお!」

「雄二ー!?!?!」

「あれ?なんで?」

「色ちがいのたわしでも結果は同じだよ!?ってかなんで同じことしたの!?!」

「雄二!血は浅いぞ?!しっかりしろ!!」

「．．．浅いぞ」

「こ、剛田．．．ムツツリーニ．．．」

「しっかりしろ!!」

「たわしで間違えるあいつは．．．想像以上の．．．馬鹿だった(ガクツ)」

燃え尽きたように雄二は倒れると僕とジャイアンは思わず．．．

「雄二が死んだー!?!」

叫んでしまった。ちなみに雄二は生きています!!

ガラガラつとドアが開く音したので僕は振り向くと．．．

「Oh．．．no．．．」

思わず神様を恨みました．．．

何故なら目の前にいるのは．．．ある意味逆らえない人がいるのだから．．．

美子さんの癒しがほしい・・・

出会ったのは……

僕は今お風呂に入ってきた人達をみて冷や汗が出ました……
何でこのタイミングで……何で……

「ん、お前らも来ていたのか?」

「……鉄人?!」

「西村先生!」

裸一貫でお風呂場に入ってきたのは西村先生だったのだ。マ、マズ
イ!!明久達が馬鹿なことをしてしまえば確実に巻き添えの補習だ!!!

「宗一、どうした?急に止まって」

「ああ、俺の働いているところの生徒がここの温泉に来ていたから
ビックリしたんだ」

「宗つちの?へー」

……ちよつと待って?!!!

「せ、先生……その後ろの二人は……?」

「ああ、こいつらは俺の昔の知り合った二人だ」

「……(筋肉留学……なんだそれ?)」

「おう、宗つちの教え子なんだろう?初めまして、俺は……ジヨリジ
ニョ・グラシエーロ!!」

「そして俺が……ペドロ!!」

「そして、三人揃って!!」

「我ら筋肉仲間だ!!!」

ムキムキをアピールするように僕らに向けてポーズしたのだ

こ、これは……

「雄……皆、生きて帰れるかな?」

「……」

明久の問いに僕は答えることができなかった。だって……
ねえ?

「お前らは何していたんだ?」

「じゃんけんで負けたやつが勝った奴の背中を洗う遊びしていまし
た」

「因みに先程は坂本が背中を洗ってもらおう側で洗ったのが明久です」
「(つちよつと待つて!?今その流れでその話をしたら・・・)」
「ふむ、面白そうだな・・・。折角だからお前らも背中洗ってもらおうか?」

「おいおい、宗一よ。八人でじゃんけんするには無理があるだろ?」

「宗つちの生徒が5人で俺ら3人だからな」

「むむ・・・うーん・・・よし!吉井!坂本!お前らは強制的にじゃんけん参加だ!!」

「なんだ・・・と?!!」

西村先生の言葉に二人は絶望した顔で逃げようとしていたが・・・
「逃げたら・・・分かってるな?」

「sir, yes!!」

「おお、軍隊顔負けの敬礼だな!!」

「宗一の生徒はかなり鍛えられているんだろうね」

「(普通はないよ!?)」

「(どうする?後一人は誰がいく?)」

「(・・・)」

強制的に名指しされなかった僕ら3人は耳打ちで小さい声で話していた。

「(なら俺がいく!)」

「(ジヤイアン!?)」

「(お前の痛みは俺の痛み・・・だから俺の痛みは俺の痛み・・・ここはこのジヤイアンこと剛田武様に任せろ!)」

「(でも・・・)」

「(安心しろ!方法はある!!)」

「(方法はある?)」

僕らはジヤイアンの言葉に???となったがジヤイアンの言葉を信用して眺めていた

「先生!一つ提案があります!!」

「ん、なんだ?」

「俺は先生とじゃんけんしたいです!」

「……ほう？まあいいだろ。坂本や吉井に負けて背中洗うのは屈辱だからな」

「本音出てるぞく宗一」

「なら俺らはこの二人のどちらかにしよう」

「ひい!?!(裏切ったな!?!ジャイアン!!)」

ジャイアンの言葉に納得した先生はジャイアンとじゃんけんすること決まった。尚、雄二はペドロさんで明久はジョリジーニョ・グラシエーロさん……

「……明久はたぶん精神的に死ぬ」

「(?どういうこと?)」

「……少し前の補習の話でー」

「なるほど……南無阿弥陀仏明久」

「(コクコク)」

僕とムツツリーニは巻き込まれないように離れたところで眺めているとムツツリーニが明久の精神的に死ぬ意味を聞くと納得した……

どうか三人とも死なないでね……

「じゃあ始めますよ……負けた方が背中洗うルールですからね」

「……」

「せーの!!」

「最初はグー!!」

「じゃんけんでほい!!」

結果は……

1. ジャイアン対西村先生(鉄人) ↓×対○

2. 雄二対ペドロさん ↓○対×

3. 明久対ジョリジーニョ・グラシエーロ ↓○対×

つまり……

背中洗う側↓ジャイアン・ジョリジーニョ・グラシエーロ・ペドロさん

背中洗ってもらう側↓西村先生・雄二・明久

うん……なんだろ?雄二と明久が死にかける未来が見えたよ……

「よし！剛田!!思いきり俺の背中を洗えよ！手加減はいらん!!」

「は、はい!!おりやあ!!」

「まだだ!!まだだ!!」

「ぬう・・・はああ!!!」

「む!!そうだ！その力で来い!!」

「はい!!!」

「はっはははは!!」

西村先生が嬉しそうに笑うとジャイアンは必死で背中を洗っていた。とりあえず、背一杯洗ってるんだね・・・

さて、問題の二人は・・・?

「・・・」

「HEY、boy。おちつきな」

「きちんと手加減するからな」

「は、はい」

「お、お手やらかに・・・」

「任せな!!」

二人の言葉にムキムキのポーズをしていた。いや、ムキムキに構える必要あった?

そう思いながらも口に出すことはせず・・・

「(どうか背中焼けないように!!)」

「さあ、いくぞ！せー」

「のーー!!」

「ブシュッ!!」

「!!!」

「む??強すぎたか」

「おかしいな」

「おかしいのはそっち!!なんでたわし!!」

「?何か間違えてるのか?」

僕の突っ込みに二人の外国人は???となっていた。明久と雄二が顔色悪い！特に雄二は先程明久によって被害うけているから余計に痛いはず!!

「とにかくこれをつかってください!!」

「?・わかった」

「(助かる……のび太……)」

「それじゃあ……」

「せーのの!!で!!」

ブシ! ヲアア!!

「○▼!?!?!」

「……?!?! 致命傷……!?!」

「おや?」

「強すぎた?!」

明久と雄二が心配でそばによると……

「生まれ変わったら……」

「生まれ変わったら……」

「殺される人生ではないことを祈りたい……ガクツ」

そんなメツセージを残して二人は逝った……

雄二と明久が……背中の洗いでダウンした……

南無阿弥陀仏……

「俺(僕)はまだ生きてる……」

そんな力なき言葉が聞こえたがスルーしておこう……

一方……

男子がお風呂で死にかけているのとはまた別のとなりの女子風呂では……

島田 side

私は今日の前にある谷二つの山——もとい私にはないものをもっている友達を眺めていた

「瑞希の胸……いつみてもでかいわね」

「み、美波ちゃん……目が怖いですよ……？」

「どうしたらそんなに胸が大きくなるのかしら……（Monは胸でかいし……瑞希も胸でかい……A組の霧島さんも胸でかい……敗北感が半端ないわ……）」

「美波ちゃん……大丈夫ですか？」

「大丈夫よ……ええ、大丈夫よ」

将来必ず胸が大きくなると信じて……そう口に出さないも、悲哀じみた雰囲気を出す私に瑞希は少し怯えていた

ガラガラつとドアが開く音したので振り向くと……

「あら……瑞希に美波？きていたの？」

「美子（ちゃん）？」

タオルを胸に巻いて入ってきた私達の友達でもあり、この夏のび太の彼女になった美子が温泉に来たのだ

「学校以外で会うのは珍しいわね」

「確かに……」

「今日はすごい偶然ですね」

美子の言う通り学校以外で会うのも珍しいわよ……

「でも、美子は何で温泉に？」

「今日は元々バイトの帰りに温泉による予定だったのよ。そしたら貴方達二人が入っていたのは驚いたわ」

「そうね。（美子の胸は……私よりあるのよね……C？D？瑞

希はEからFなのよね……）」

神様は本当に不公平……。胸は時には武器になるのよ……

主に私みたいに涙飲むほどね・・・

「み、美波・・・?」

「す、すごいオーラ出ていますよ・・・」

「何でもないわ・・・ええ、何でもないわ・・・」

「そ、そう・・・」

「そ、それより、美子ちゃん!せっかく三人ですからお風呂でお話ししましょう!!」

「そ、そうね!」

「何から話す?」

私達が嬉々とその話を始めようとすると・・・

「○×▼!!」

「「きゃっ!?!」」

私たちは突然の叫びにビクツとなり抱き合った。この声はどこから・・・??

「び、ビククリしましたね」

「そうね・・・いったいどこから?」

「・・・男子の方からね」

「何故だろう・・・あまり触れてはいけない気がするわ。とにかく話しましょう」

本当に触れてはいけない気がするわ。主に本能的に触れてはいけないと警告だったわ・・・

とにかく恋ばなしましょう!主にのび太関係のを聞きたいわ!!

のび太side

ブルツと今寒気が感じたけど・・・気のせいだよね???・・・ってそんなことはどうでもいい!!

「・・・」

「あれ?反応ないぞ??」

「どーします?」

雄二と明久が少しだけ魂抜けたの見たのは気のせいだと思う・・・ってそれより!!

「(ムツツリーニは明久と雄二をお願い!!僕はあの二人の背中を洗うから!!)」

「(・・・死に行くつもりか・・・?!)」

「(今二人の代わりに背中洗えるのはボクだけだ!!任せて!)」

「(・・・健闘祈る)！」

僕とムツツリーニは目のアイコンタクト取って、ムツツリーニは二人の介護を任した

「あの・・・今度は僕が二人の背中を洗いましょうか？」

「ん・・・俺らは大丈夫だよ。とりあえず、早くおふろはいろいろぜー」

「だなー」

「(よかった!とりあえず被害はこれ以上拡大はない・・・)」

そうひと安心していると・・・

「おい!坂本と吉井も起きているな?」

「は、はい・・・」

「?えらい疲れていないか?しかも敬語使っているが・・・」

「先生、気にしないであげてください」

「(ナイス!!ジャイアン!)そ、そうですよ!とりあえず、どうしたのですか?」

「なーに・・・折角だからサウナを入らないか?おれら三人だけではあれだからな」

「おー!!!いいな!」

「二・・・(泣きたい・・・)」

「助けて・・・」

「ごめん・・・助けられないしたぶん僕らも巻き添え確定だよ・・・」

「さあ・・・(ガシッ)」

「少年達よ・・・(ガシッ)」

「共にサウナはいるぞ!!!特に坂本と吉井は腐った根性を叩き直す機会だ!!」

「たすけて!!!」

「・・・(ズルズル)」

「(美子さん・・・) help・・・me!!!!」

こうして僕らはサウナにつれていかれた……誰か助けて……

オマケ

恋ばなしていた女子風呂だったが突然美子が……

「はっ!？」

「?どうしたの?美子」

「急に男子の方の風呂みて」

「いや……なんか……のび太君が、私に助けを求めた気がしたの……
気のせいよね?」

美子が二人に同意を求めると二人も頷いていた

「のび太なら大丈夫でしょ」

「そうですね。のび太くんなら大きい問題も解決しそうですね」

「そうよね。(なんだったのかしら?あの助けを感じたのは)」

美子達は知らなかった……

男性陣が(精神的に)死にかけていることに……いくら世界を救った男達でも勝てないものはたくさんあるのだと……

思い出すのは・・・

さて、僕らは今どういう状況下と言うと・・・説明するところのようになる

ー入りロー

ーテレビー

鉄人

ジャイアン

雄二

のび太くん

ジョリジーニョ

明久

ペドロ

ムッツリーニ

・・・である。脱走しようにも西村先生もとい通称鉄人がいる・・・つまりもう分かるだろが・・・現段階でこの状況は・・・脱走するのは詰んでいる・・・ということだ。

「(どうする・・・!?ジャイアン!!)」

「(恐らく西村先生がいる以上、脱走は無理だ!!)」

「(・・・逃げるの今は諦める?)」

「(だな・・・。というか逃げたら・・・嫌な予感がする)」

うん・・・。たぶん逃げたらとんでもない気がするから・・・とりあえず・・・

「(タイミングを伺うしかない!!)」

「いやー・・・いいサウナだな！なあ、宗つちにペドロ」

「確かにな。ジョリジーニョはまた筋肉ついたな」

「おう、まだまだ筋肉に限界はないはずだから鍛えるのみ！しかし・・・」

ジョリジーニョさんは僕らの体をじっと見ていた。嫌な予感がするよ・・・

「おい、少年・・・名前は何？」

「(少年・・・僕のことだよな？指差しておるのは明らかに僕だし)の、野比のび太です！」

「のび太か・・・。お前いい体してるな・・・」

「?!」

「ふむふむ。是非一戦交えたいところ。．．．しかし、ここはサウナだし、まだまだ鍛えないと勝負にならないな」

「(ジヨリジーニヨさんとの戦いは遠慮します!!!) あははは．．．」

まさか僕が目をつけられると思わなかった．．．。しかも、そんなに体鍛えていないのに．．．

それにこの人と戦えば僕は骨はあっさり砕けるよ．．．

「まあまあ、ジヨリよ。それなら、このとりにいる少年もいい体して
るではないか？」

「む？ふむ．．その少年の名前と俺のとなりにテレビの近くに座って
る方の少年の名前教えてくれ」

「それなら俺が紹介する。あそこにいるバカは吉井明久、テレビの近
くが坂本雄二。二人とも俺の学園の生徒だが．．．どちらもとんで
もないバカだ」

「バカ??」

西村先生の言葉に二人は大きく疑問を持っていた。それに対する
西村先生は力強く頷いていた

嫌な予感がするよ．．．

「ああ、この二人は兎も角、片方はバカも大バカだ。なにせ．．．」
「なにせ．．．?」

「何せ．．．こいつもそうだがその学年の女子風呂の覗きをしたん
だぞ」

「なに?!覗きだと?!」

「あつ、のび太となりの剛田はしてないがな」

すかさず西村先生が僕ら二人は介入してないと伝えた後にそれを
聞いた二人は下を向いていた

「．．．．．」

「あ、あの．．．大丈夫ですか？」

「う．．．」

「「「「う?」」」」

「ウラヤマシイマネしたなー!!」

「「「……はっ?」「」」」

予想外の叫びに僕らだけではなく西村先生も固まっていた。いや、いきなり何をいつてるの?!

「宗っち……こいつらはバカなことをしたかもしれないが漢だぞ?!? 只の男ではなく最高の漢だ!!」

「おう!! 誰もできないことをやろうとしたのはまさに……」

「漢だ!!!」

「「「……」」」

僕らだけではなく、西村先生も固まっていた。いや、まって……何で同意するのですか……

「おい、お前らはいったい何をいつてるのかわかっているのか?!」

「まあまあ、ここは男しかないのだから……」

「お前らは裸見れたのか?!? きれいな女性達の見れたのか?!」

「……おまえらな……はあ……」

ペドロさん達のノリノリ雰囲気、西村先生は頭抱えながらため息をついていた。

……学校外でもお疲れ様です……心中お擦します

「で?!? どんな子を覗いたのだ?!」

「(どうする……?)」

「(……よし! いろいろ!)」

「(雄二!?)」

「(……耐えるしかないのか? なら、話した方がましだ!!) ええ、俺とそこのバカとその気配消そうとしてるやつは覗きをしましたよ」

「ほう、認めたのか。漢だな」

感心したように雄二の方を見つめていた。対する明久とムッツリーニは何か思い出したくないような顔で苦しんでいた

「あのとき君たちが戻ってきたとき……正直ビックリしたよ」

「目が死んでいたもんな……」

「雄二……!!」

「ああ、分かっている、分かっているさ……だがここまで来た以上隠すわけにはいかん!!」

雄二が悲哀じみた雰囲気と共に決意をすると明久たちも覚悟した顔で先生達の方に見た

嫌な予感がするから外へ出たいけど……出れないんだよねー……諦めて聞こう

「俺らは……俺らの学年の同士達は果敢にも覗きを決行した」

「ふむふむ、それで?」

「俺達は様々な試練を乗り越えれたから覗きを……楽園を見れたと思っただけ……!!」

「思っただけ……?」

「いったい何を見たんだ?」

「……俺らの学園長の裸を見たんだ……」

「……何だっけ……?」

「……念のために学園長は実際の年齢は知らないが恐らく……●

●歳だ」

雄二の言葉に西村先生も僕らも黙っていたが、明久らとペドロさん達の反応は……

「「うっふ……」」

吐きそうな顔になっていた……そして、雄二も吐きそうな顔になっていたことはここだけの話

因みに僕らは精神統一して聞かないようにしていた……被害受けたくないからね……

なお鉄人こと西村先生は……

「(想像するな!想像するな!!耐えろ!!)」

必死に耐えていたことだけ記載しておこう

その後の惨事……

あの後、ペドロさん達は鉄人に抱えられて温泉出ていったのだ。尚、明久、ムツツリーニ、雄二もダウンしたのでジャイアンが三人の面倒見るため出ていったので……

「……はあ……いい湯だな……」

一人で温泉堪能していた……先程の光景を僕は思い出した

それは数分前……

『宗っち……わるい、お風呂もうは入れないから……出る……うつぶ』

『同じく……うつぶ……』

『わかった、わかった。野比、こいつらの面倒みるから俺はもう上がる。次会うのは夏休み終わってからだな』

『はい（マッチョな二人を挟みながら抱え込む先生……うん、汗が止まらない）』

そう思いながらも、口に出さないように黙秘していたら、明久達の様子がおかしかったので声かけた

『大丈夫？明久たち』

『……うつぶ……』

『……のび太、こいつらをつれて出るわ。後は温泉ゆっくり楽しむ』

『あつ、うん。おねがいね？雄二は……？』

『……話すんじゃないかった……うつぶ……』

『雄二も出ていった方がいいよ』

『ああ……そうさせてもらおう……』

そう足取りが重く更衣室に向かう雄二を見届けたはあとは一人になった

そして冒頭の現在に至る……

ここのお風呂も全部入ったから……ん???

「外の露天風呂かな? まあいいや、折角だし入ろうー♪」

そう決心して僕は外の温泉に浸かったのだ・・・

「ああ・・・いいお湯だなー・・・明久達の方は大丈夫かな?」
そう心配していたが温泉を堪能していた

一方明久たちはというと・・・

「二・・・うつぶ」

「見事にダウンしてるな・・・」

「うつぶ・・・反省はしてるが・・・うつぶ・・・後悔もしてる・・・」

「いや、ならしなかった方がいいじゃねえか!? たく・・・水を飲め」

「おおう・・・うつぶ・・・」

ジャイアンが甲斐甲斐しく三人の世話をしていた・・・。明久とムツツリーニはしゃべる気力はなく、苦しんでいた・・・

そんな状況知らない僕は外の温泉で堪能していたら人影が見えた

「あの入ってもいいですか?」

「? いいです・・・よ・・・ほへ?」

「ありがとうございます・・・す・・・ふえ／／?」

僕は男だっと思って左に振り返ると・・・

「の、のび太君・・・／／／／?」

「よ、美子さん・・・!? はっ」

今の美子さんはタオルを前に巻いてるが・・・ここは外の露天風呂・・・だけど美子さんがいまここにいる。そして、そのタオルが隠していても女性特有の胸が見えた・・・

つまりこの状況でとる判断は・・・

「ツツツ／／／／／!!!」

「ご、ごめんなさ・・・ぶべえ／／／!!」

パチンといい気味の音が当たりに響いた・・・小学で静香

ちゃんのお風靨いでしまった時以来の・・・ビンタだ・・・な

そう意識が吹っ飛ぶと同時にそう思った・・・

美子 side

や、やってしまった・・・その一言につきる・・・

プカプカと浮かぶのび太君を見て私はそう反省した・・・でも・・・
なんで・・・?

「つてー考えるの後!!のび太くんをほっておいたら沈むわ!!」

私は考えるのを後にしてまずのび太くんが沈まないように近くの
ほうまで頑張った運んだ・・・

うう・・・のび太くんのはだかを見ないで運ぶのは大変・・・

／／

「のび太くんの体・・・改めてみるとかつこいいわ・・・／／／／」
そう思っていると・・・

「うっ・・・ん」

のび太くんが目を覚まそうとしていたので私は慌てて自分の体を
しっかりとタオル巻いていた

殴ったのはきちんと謝らないと・・・

のび太 side

ーのび太さんのエッチ!!!!

「ごめんなさい!!!!・・・つてあれ??」

僕は謝りながら目を覚ますと目の前には夜の青空が広がって
た・・・

「ここは・・・?つてそうだ!!」

僕は美子さんの裸を見てしまったからビンタ食らったんだ!そし
て気絶したんだっただ・・・

「あつ、目を覚ましたのね」

「よ、美子さん・・・」

「良かった・・・あつ今こちらに見ても大丈夫だよ」

「そういわれると美子さんの方に降り無為くといつも結んでいたのが下ろされていてこちらの方に見ていた

「ごめんなさいね？いきなりビンタして・・・」

「あー、大丈夫だよ。でも今落ち着いて考えたらわかったのだけど・・・」

「ええ、私もよ・・・。なんで・・・」

「なんで、混合風呂?!」

「そう、よく考えたらそれしか思い浮かばない・・・唯一救いなのは明久が島田と姫路遭遇しなかったことだ
遭遇していたら・・・」

「確実に血を見ることになるよね・・・」

「ど、どうしたの？遠い目になって・・・」

「いや・・・明久とかがここにいたら悪い意味でひどい目に遭ってるな
—って思った」

「・・・納得したわ。ねえ・・・」

「美子さんは僕の方に近づいて肩に頭をのせてきた。」

「のび太君は私にとって大切な恋人だから・・・その・・・時々でいいからデートしましょう／＼／＼／＼」

「・・・うん／＼／＼」

「でも、吉井くんは大丈夫かしら？」

「ん？」

「ほら、夏休み明けの課題テストがもう少しで始まるでしょ？」

「・・・あつ・・・」

「完全に忘れていた・・・」

「その顔は完全に忘れていたわけね・・・」

「はい・・・」

「二週間一緒に勉強しない？」

「え？でもバイトはいいの？」

「大丈夫よ。その……恋人としてもあなたと勉強したいから」
「っ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

顔真つ赤に上目遣いしてきた美子さんに僕は多分だけど、誰でもわかるぐらい顔真つ赤になっていた／＼／＼／

ああもう……／＼／＼／

「触っていい／＼／＼／？」

「う、うん／＼／＼／いいよ／＼／／」

「じゃあ……」

僕が美子さんの同意を得たのでそうしようとしたら……

「「流石にそれは駄目だよ（よ）（です）！」」

「っ／＼／＼／＼／!?」

ちらと見ると明久と島田と姫路が隠れてみている

み、見ていた!?!そして聞いていた!?!

「の、のび太!流石にそれは駄目よ!?!」

「そうです!」一応ここは公共の場なので／＼／

公共の場ではなかったらしていいの!?!そして冷静に考えたら僕は今恥ずかしいことしようとしていたね……／＼／＼／／

「／＼／＼／」

「危うくその場の勢いで任しそうになった／＼／／反省」

「全くだよ……。全く羨ましい……。じゃなくって遅いから見えてきたら何してるのさ」

「ごめん……」

「（じゃあ戻ろうか）姫路さんは胸でかいなー。そして美波も「おーい、本音と建前が逆だよ」……はっ!?!」

僕が注意すると明久は気づいた顔になった……

「美子さん、先にながるときだよ」

「ええ、のび太君は?!」

「とりあえず死体回収の準備しておくからね。あつ、湖の後みんな食べに行こう」

「いいわね」

僕らがそう話してる横では……

「アキ（明久君）の……」

「あついや、その……」

「バカー……」

「ほぎやあああああああああ!!!」

明久は二人に顔真つ赤にしながら男の大事な所をフルキックで蹴りこんで女湯の方に戻っていった。尚、美子さんは二人を追いかけていった

そして僕は……

「あががが……」

「やれやれ……回収回収……」

いまだに苦しんでる明久を回収したのだ……危うく美子さんを襲いそうになった……反省反省……

そして、その日の晩御飯はみんなで食べて美味しかったのと課題テストがあるの伝えると皆顔真つ青にして夏休みの残り二週間は死ぬ気で勉強したことを記載しておこう……

召喚野球大会

夏休み明けに・・・

夏休みが終わった翌日に早速課題テストが実施されたが、きちんと勉強したから問題はないだろう・・・

約4名を除けば・・・

「……」

「全く……だから勉強きちんとしなつていったのに……」

「「ベンキョウ？ ナニソレオイシイノ??」」

そう一言一言ハモつていうのは、島田と秀吉とムツツリーニ……
そして言わずも学年一のお馬鹿の明久が燃え尽きたようにいった

「やれやれ……（きちんと勉強して良かった……）」

ジャイアンは冷や汗をかいてるのを僕は見逃さなかった……あれ？
？ そういえばなんか忘れていような気が……

「お前ら、全員いるな？」

そう考えていると西村先生が入ってきた。試験は午前中に終わったからあれだけど何だろう？

「とりあえず、お前らに一つ言わなければならないことがある」

「何だなんだ？」

「また、吉井が何かしたのか？」

「違う。学年を代表するバカだからな」

「……!! さりげなく僕が何かした前提で話すな！」

明久がFクラスの仲間にそう言うが、クラスの仲間は一方的に騒ぎが止まらない

すると……

「うるさいぞ!! 補習されたいのか!？」

「「すいませんでした!!」」

Fクラスの大半が土下座していた……君たちにプライドはないの……

「あー、ごほんごほん。とりあえず転校生二人がFクラスに入ってく

ることになった。本人達の希望でな」

「」「」「ナニ?!?!」

「うるさいぞ!!!」

ガタガタつと音をたてて立ち上がる明久を含めるFクラスの仲間
だったが西村先生が一喝いれて黙らした

「アー、ゴホン、入ってこい」

ガラガラとドア開けて入ってきたのを見て僕らは驚いた

「え!?!」

「うそ?!」

「・・・?!」

「なんと・・・?!」

「マジか・・・」

「えー?!?!」

姫路達が驚いてるが僕とジャイアンがもっと驚いていた

何故なら・・・

「初めまして、Fクラスの皆様。私の名前は氷華真理亜と申します。
よろしく願います」

「知っている人もいるけど僕は骨川スネ夫です。よろしく願いま
す」

ジャイアンの婚約者の真理亜さんと僕らの親友のスネ夫がこのF
クラスに転入してきたのだ!!!

「改めてこの二人はこのFクラスに転入してきたから本日から正式に
だ」

「まあ今日からよろしく、のび太にジャイアン」

「宜しく願います。武君にのび太様」

「・・・・ええええええええええええええええええええええええ!!!!!!!」

僕とジャイアンがこれまでにないくらい大絶叫したのだ.....

「たまには転校生の質問タイム作るから俺は出ていくぞ」

そういうと共に西村先生が出ていった.....

あの.....正直現実はわかないけどとりあえず.....

「なんでこうなるの?!?!」
「とりあえず、突っ込みは入れさせてください!!!」

転校生と言えば・・・

転校生のためだけの質問タイムとなり、Fクラスは飢えた獣のように主に真理亜さんにしか興味ないのかむろがっていた

「真理亜さん！俺と付き合ってくれ!!」

「前世から愛しました!」

「FOR LOVE YOU!!」

「あいしてるからだー」「言わせねえよ!!どさくさ紛れになにいつてやがる!」「っち!バレたか」

やれやれ・・・見ててあきれれるよ・・・そろそろ止めないと西村先生が怒りで乱入しそうな気がする

すると真理亜さんがー

「あの、告白してくださった方すいません!!私にはもう婚約者がいますので・・・皆さんの告白には答えられません!」

「何?!」

「あつ嫌な予感・・・」

「・・・因みに・・・誰ですか・・・!」

Fクラスの須川がわなわなと震えながら質問してきた。真理亜さんのことだから・・・答えるかも

「はい。その方は・・・私の未来の旦那様の剛田武様です♪」

「者共立ち上がれ!!!」

「諸君!我々FFF団は・・・」

「哀に生きて哀に生きる!!」

「我らの敵は・・・」

「剛田武とついでに吉井明久と坂本雄二だ!!!!立ち上がれ!!哀に生きるFFFの同士よー!!!」

武器を持ち立ち上がるFFF団・・・。そして、そのターゲットにされてしまった3人は

「くそ!真理亜と後でゆっくり話すつもりだったが逃げるしかない!!」

「くそ!なんで僕まで!こういうときは雄二だけでいいのに!!」

「本当にお前はバカだな！お前のそのひねくれた性格直せ!!」

「それはこちらの台詞だ!!ヘタレ赤毛ゴリラ!!」

「うるせえ!!学年一残念お馬鹿野郎!!」

「お前ら喧嘩しながら逃げるな!!ああもう!!!助けてくれー!!母
ちゃーん!!」

「異端者を逃がすな!!」

「「おう!!!」」

出ていくジャイアン達を逃さずに追いかけるFFF団……余り
の早い行動に真理亜さんとスネ夫は――

「……ええ……」

ドン引きしていた……。気持ちはわかるよ……懲りない
んだよね……

彼らは掘つといて残ってる僕らで質問するか

「真理亜さんとスネ夫は転校生してきたけど、なんでFクラスに？」

「そうね。少なくとも二人はFクラスよりは学力があると思うけ
ど……」

「僕は単純にこっちのクラスの方が楽しいと思っただからねー」

「真理亜ちゃんは？」

「私もスネ夫さんと似た理由ですね。それに……」

「それに……?」

「武君と同じ学校で同じクラスを過ごしたからです／＼／＼／
／

「(ポウ)／／／／」

「……!(クワツ!!)」

カシャ!カシャ!とシャッター音を鳴らしながらひたすら夢中に
写真をとるムッツリーニを見たスネ夫は……

「何してるのさ……」

「あれはいつもの事じゃから気にすることない」

「いつもの事なの!?!」

「……(ブジャー!!)」

「血が出てるううう!?!」

「うん、因みに血が吹き出るのもいつものこと」

「可笑しいよね!? 血が吹き出るのがいつもなら死んでもおかしくないよね!」

「もうこれは慣れるしかないよ」

「慣れの問題!」

「よく考えたらワシらにとっては普通でも外からしたら異常なんじやのう……」

確かに……慣れてしまったから今はどうしたことないけど……
ねえ

「武君戻ってくるの遅いですわね……」

「確かに……のび太、ジャイアン大丈夫?」

「大丈夫でしょ?……ある人物相手以外なら大丈夫だと思う」

「ああ、納得したよ……。あの人なら確かにジャイアンでも勝てないよね」

「うん。下手したら片手でジャイアンを倒しそう」

「それはない……といえないのが辛い……」

「ああ、察しました。確かに私もあのお方には頭が上がりませんわ」

「どうやら真理亜さんも知ってるみたいだ……」

「あの……その人はどんな方なんですか?」

「うちも気になるわ」

「そう僕らに質問していると……」

ガラガラ

「「「「あつ」」」」」

「はあはあ……つ、疲れた……」

「武君!! お疲れ様ですわ」

汗まみれになったジャイアンが教室に戻ってきたのだ。それを見た真理亜さんがいつの間にかタオルを取り出してジャイアンに渡していた

「はあはあ……ありがとうよ……」

「いえ……」

「ねえ、剛田」

「ん、なんだ？」

「あんたが怖い人っているの？」

「・・・いない」

「今間が空きましたけど・・・？」

「いないから気にするな！いいな？」

「は、はい!!!（剛田君／剛田が珍しく目が据わっている（ます）！）」

ああ、やっぱりいまだに強いんだ・・・

「あれ、ジャイアン。明久たちは??」

「ん、ああ・・・あいつらなら・・・」

『貴様ら何勝手に教室から出ているー!!!一人も残さん!!全員補習だー!!!』

!!!

『ゲツ!?鉄人!?いやああああ!!!』

『『つぎやあああああああああああ』』

「あいつらを犠牲にして逃げたから今頃先生に怒られてるだろ。FF

F団も・・・俺は危険を察したからここに無事逃げれた」

「「「ああ・・・なるほど」」」

哀れ・・・明久達・・・

そして彼らが戻ってきたとき全員の顔がズタボロな姿で戻ってきたのはここだけの話・・・

やつぱり……

ボロボロに包帯巻かれて戻ってきたFFF団とズタボロになった明久達はそつとしておいて僕らは西村先生に説明を聞いていた

「さて……突然だが、来週に二年生の球技大会があることはしってるな？それを放課後お前らが誰をどう入れるのか話し合え」

「先生に質問です！」

「なんだ？吉井」

「それは普通の球技大会ですか？」

「ん？ああ、そうかお前らは……いや、おまえは知らなかったのだな？」

「あれ？さりげなく酷いこと言ってるような気が……」

「そんなことはどうでもいい」

「いやどうでもよくないよ!？」

「そもそもうちのクラスは女子三人だぞ？そもそも姫路のからだのこともあるぞ?。」

明久の言葉をスルーして雄二が懸念している事を言った。まあ、雄二の言う通り姫路は体が弱いから球技大会は厳しいような気がする
「安心しろ。お前らが運動するわけではない」

「どう言うことですか？」

「骨川と氷華は学園長からこの学校の仕組みは説明してなかったか？」

「えーと……召喚戦争とかその学校の教育もきいています」

「今の流れから聞きますと……この学校ならではの事をするのですか？」

スネ夫は自分の聞いていた話の事を質問に答えて真理亜さんは自身の考えから予想されることを答えると西村先生は大いに満足そうに頷いていた

「そうだ。このクラスの一部より察してくれて助かる」

「おいおい、言われてるぞ？吉井」

「まあ、察する能力に関しては俺らは大丈夫だな！」

「だな」

「こら!!君達は何で問題ない雰囲気をだすー!そして僕は君達より察する能力はある!!」

このクラスで一番察するのに優れてるのは主に自分の命の危険だね・・・それを言うなら雄二もそうだね。但し、君達に恋してる人の気持ちを察する能力は皆無だけどね・・・

「あれ?なんか泣きたい気分だけど・・・」

要らないところで察するのもまた彼らの凄いところ・・・いや、残念なところかな???

「そんなことはどうでもいい」

「そ、そんなことって鉄人・・・」

「西村先生だ!」

明久はクラスで色々言われたのを反論していたが、西村先生はそんなことと一瞬すると明久は落ち込んでいた。

それにしても先生も珍しくツッコミ入れたね・・・

「つと、思わず話それたな。とりあえず、話を続けるから黙って聞け。特に・・・わかつてるな?」

「・・・」

先生は咳を一払いして殺気を出しながら一部の生徒を睨んで続きをいった。尚、一部の生徒は先程まで騒いでいたFFF団と明久は縮んでいた

「まず球技大会だが、今回の種目は・・・野球だ!」

「「野球?」」

「「(ピクツ)!!」」

「そうだ。この種目に男女関係なく出してもらおう」

「球技大会は構わんが・・・姫路の体が弱いからそこは不安だぞ?」

西村先生の言葉にずっと沈黙していた雄二が気だるげに質問していた

「安心しろ。この学校ならではの球技大会だ・・・」

「「?」」

「(この学校ならではの・・・)まさか!」

「どうやら野比は気づいたみたいだな？そう、球技大会ならず・・・学年召喚野球大会だ!!」

「「「なんじゃそりゃああ!!?」」」

「それと・・・」

西村先生が突然と目を光らしていた

「今から貴様らに荷物の検査を検査する・・・!!」

「「「・・・(ガタツ)!!?」」」

「うごくくな!!全員の荷物を確認するから・・・わかったな」

「「「s i r イエツサー!!!」」」

軍隊顔負けの敬礼をしていた・・・

そして僕は感じたのは・・・

ああ・・・どうやら一波乱ありそうだ・・・この球技大会も・・・

そう思ったのはここだけの話だ・・・

突然の後には……

学年野球召喚大会……か。すごく気になるけどまずいま聞いている段階でわかるのだが……現在はそれどころではない

何故なら……

「「「「……」」」」

「……」

「見事に魂抜かれた人達ばかりですわね……。瑞希さんも美波さんもなんだか落ち込んでいますが……」

「まっ、学校に必要なものではないのを持ってきたから没収されるのは仕方ないと言えば仕方ないかな……。正直こんなに落ち込むのは予想外だけだな……」

「おまけに明久と雄二は何だか解らないけど、『学園長の方に行く!!』って血眼になって出ていったね……」

そう、二人は抗議しに行ったのだ。にしても……僕は大丈夫だったし、ジャイアンはジャイアンでセーフだったからいいけど……流石にね……

(※尚、原作では体育祭と球技大会は同じ日に行っていたがここでは別々の行事とさしていただく)

「のび太は大丈夫だったのか?」

「うん。拳銃とかうまいこと隠したからね。(写真も……ね)」

「今不穏なこと場聞こえてしまったが気のせいと信じてスルーしよう。因みに俺も大丈夫だった」

「そっか。しかし……うーん……何か嫌な予感がするんだよね……」

「?なんでだ??」

「いや、二人のことだから……ね」

「……納得した!」

僕の言葉にジャイアンも納得してくれた……

「ただいま——」

噂すればなにやらだ……さてどうなったんだろう?

「どうなったんだ?!俺達の返してくれるのか!?!」

「あの血も涙もない教師たちに何か交渉できたのか?！」

「教えてくれ!!」

「ハイハイ落ち着こうね。」

「ああ、お前らのことだから何らかの話はつけれたんだろ?」

僕とジャイアンが皆を宥めつつ、雄二達に問いかけると、雄二は重々しく頷いていた

「ああ。これはトーナメント表とルールだ」

「んー、何々・・・?」

雄二から見せられた紙は大まかに記載されているのはこうだ

・試合は5回の攻防までとし、同点である場合は7回まで延長。それでも決着がつかない場合は引き分け

・事前に出場メンバー表を提出すること。ここに記載されていない者の試合への介入は一切認めない。尚、これにはベンチ入りの人員および立ち会いの教師も含む(※人数構成は基本ポジション各1名とベンチ入り2名の計11名とする)

・各イニングでは、必ず授業科目の中から一つを用いて勝負すること(※各試合に同じ科目を別イニングで再び用いる事は認めない)

ーととなっていた・・・

「そして、没収されたのを返される条件はこうだ。決勝戦で教師チームに勝利すれば返されるらしいぞ?」

「なるほどね・・・。とりあえず、メンバーはどうする?」

「そうだな・・・。とりあえず、骨川達は科目の持ち点あるのか?」

「あるよ。真理亜さんもね」

「ええ」

そうか・・・ならメンバーは決まったね。でもひとつだけ言わして・・・

何でなら・・・

「まさかの一回戦が美子さんや中林さんの率いる2―Eとだなんて・・・なんかやりづらいよ・・・」

「ああ・・・まあ頑張れ・・・」

ジャイアンのお疲れさま目線を感じたのは気のせいではないはず・・・

うん、とりあえず召喚野球大会に向けてメンバー決めよう!!それを優先だ!!

そういえば美子さんは荷物検査は大丈夫だったのかな・・・?

一方Eクラスにいる美子は・・・

「没収されるのはなかったけど・・・危なかったわ。(写真が家に忘れていったのは幸だったわ)」

美子は無事に回避できたそうだ・・・

開幕前に盛り上げるのは……

さてさて、あの球技大会のルールの話から少ししたち当日を迎えた……。

雄二はEクラスの中林さんと先程挨拶しにいったので、今席外して
るのだが……

「……（アセアセ）」

「……」

「……」

現在僕は正座しています……。その理由はなにかと言うと……

「のび太君……わかってると思うけど」

「はい……」

「勝負に情けは不要……。この意味はわかるよね？」

「はい」

「そう。いい？ 私達も本気で貴方達を倒すのだから、覚悟しなさい。……もし私相手だから手加減とか考えた日には……。わかってるね？」

「はい!!誠心誠意に勝負挑みます!!」

美子さんは今、体育会系のスイッチに入ってるから完全に勝負師の顔になっている……

明久が余計なことを言わなかったらこんなことにならなかったのに……

事の数分前

僕は美子さんと普通にしゃべっていたら明久が会話に入ってきた。ここまではまだ良かったのだけど……『案外のび太が三上さん相手だと手加減しそうで怖い』なんて冗談抜かした瞬間、美子さんは雰囲気変えて僕にお説教してきた。当の本人明久は全力で逃げたので彼は正座していない

明久は一言余計な事残して逃げたの恨んでやる……

……そして、誰か助けてください。実は話しかける前から美子さんの目は燃えていたのだけど……。何か取られたのかな……。？

暫くしてから雄二が戻ってきて解放されましたが、とりあえず明久は覚えておいてね……

「とりあえず、打順とか守備はどうなってるの？」

「あー、とりあえずこんな感じにした」

「ん、どれどれ？」

1 番ショート 土屋康太

2 番ファースト 木下秀吉

3 番ピッチャー 吉井明久

4 番キャッチャー 坂本雄二

5 番サード 剛田武

6 番ライト 姫路瑞希

7 番セカンド 島田美波

8 番センター 骨川スネ夫

9 番レフト 野比のび太

ベンチ

氷華真理亜

須川亮

ふむふむ、打順は置いといて守備はいくつか疑問がある

「ピッチャーが明久なのはなんで？」

「そうだね。正直、雄二やのび太、ジャイアンとかでもよかったのでは??」

「出来るなら初めからしていたのだが……な」

「なんか問題あるのか？」

ジャイアンが苦笑した雄二に問いかけると雄二は頷いていた

「ああ、姫路は野球がやったことないんだ」

「す、すいません。私、野球とかは全然わからなくて……実際にやったこともないですし……」

「なるほどね。つまり、ルールを把握するのにもかねて明久がピッチャーなんだね？」

「そうだ。まあ、召喚獣に扱いが慣れているこのバカが先発に行くの

が一番いいと考えたのもあるしな」

「まっ、確かに。明久は観察処分で扱いが慣れてるのは確かだね」

僕と雄二がそう話すと、ジャイアンがスネ夫と真理亜さんに観察処分の説明していた。まあ、こういう処分されるのは余程だけどねー

「……なあ、のび太」

「ん、どうしたの？スネ夫」

ジャイアンの説明を聞いたスネ夫が僕のところに来たのだ。真理亜さんもジャイアンも僕の方に来た

「ねえ、吉井様は観察処分となれば、フィードバックがあるのですよね？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ……明久ヤバイんじゃない？」

「??なにが??」

「フィードバックがあるなら……デッドボールなるときリアルと変わらない痛みが来るわけだよね？」

「……あつ」

二人の言いたいことはわかった……。確かに言われてみれば明久だけはデッドボールなるときは一番いたい目に遭うよね……

「先行は向こうが先みたいだね」

「だな。代表として仲間に声かけなくっていいのか？」

ジャイアンの言葉に雄二が一瞬考えるも頷いてFクラスのみみんなに声かけた

「全員よく聞け!!」

「!!」

「俺達の目標は教師チームが待つ決勝だ……!!こんな所で敗けは許されない……わかってるな!」

「!!おう!!」

「よし!!なら……いくぞ!!Fクラスよ!!」

「!!おーおーおー!!」

雄二の言葉に答えるようにFクラスは声を張り上げた……

さて……美子さん……約束通り手加減しないで勝ちにいくから

ね!!

一方Eクラスは・・・

中林は腕を組んでいて目の前にいる仲間に鼓舞させていた

「いい!? 相手はFクラスといっても嘗めてはいけないわ! やるからには最後まで全力でやっていくのが私たちのクラスよ!」

「!!「おお!!」!!」

すると、美子も前出て皆を鼓舞させた

「宏美の言う通りよ! 勝てると思つて手を抜くのは一番失礼なのだから・・・絶対に最後までやって勝ちましょう!」

「!!「おおおー!!」!!」

「私達はEクラスでも体育会系のクラス! 敵はFクラス、相手に不足はなし! 絶対に勝ちましょう!! 勝つのは・・・」

「!!「俺達のEクラスだ!!! いくぞおおおおおー!!」!!」

迎えうつEクラスも声を張り上げて勝ちにいく姿勢を見せた。

Eクラス対Fクラス・・・ここに開幕・・・

開幕戦！

さて、まずは後攻の僕らのスターティングメンバーはこれだ
Fクラス

- 1 番ショート 土屋康太
- 2 番ファースト 木下秀吉
- 3 番ピッチャー 吉井明久
- 4 番キャッチャー 坂本雄二
- 5 番サード 剛田武
- 6 番ライト 姫路瑞希
- 7 番セカンド 島田美波
- 8 番センター 骨川スネ夫
- 9 番レフト 野比のび太

となっている。そして、先攻のEクラスのスターティングメンバーは……

- 1 番ライト 園村俊哉
- 2 番ショート 丸 悠生
- 3 番セカンド 三上美子さん
- 4 番ピッチャー 中林宏美
- 5 番キャッチャー 山田哲夫
- 6 番ファースト 長島峻
- 7 番サード 大山唯
- 8 番センター 長野 奈々
- 9 番レフト 金本鉄矢

となっているがなんだか、激しい試合になりそうだ……たぶんね

先行はEクラスなので僕らFクラスは各自のポジションについていたのだが姫路はポジションがわからないのかオタオタしていた

「姫路、今僕のいる方がレフトだから姫路は右だよ」

「ありがとうございますー！」

僕がポジションというと姫路はお礼をいってそのポジションについたのだ。そんな様子にスネ夫は・・・

「・・・大丈夫かな？」

「まあ、いざとなれば僕らがカバーしてあげたらいいさ」

「だね」

そう結論ついて僕らもポジションについた。頼むよ？明久と雄二・・・

そう考えてると・・・

「プレイボール!!」

主審を務める寺井先生の声がグラウンドに鳴り響く

さあ!!集中だ!!

明久 side

「しゃーす!!サモン!!」

先頭打者が礼をいってから召喚した。この試合の科目は、1回から古典、数学、化学、英語、保健体育となっている

古典

Eクラス

園村俊哉 117点

対

Fクラス

吉井明久 89点

えーと、確か雄二から聞いた話だと変化球は投げれないんだっよね？必要なのはコースと直球だから雄二がどこにサインを出すか
「・・・明久、とりあえず最初は色々と試したいからここだ」
「・・・え？そこでいいの？雄二」

「問題ない。向こうも慣れない召喚獣を使つての初球だ。それに、こつちとしては明久の召喚獣の球筋をする意味でいい機会じゃない

か?)」

「(なるほど……。わかったよ!)」

「よし、っ(ー!)」

雄二のサインに僕はうなずいた後に先頭打者があらためて構えた

「(じゃあ行くよ!雄二)」

「(OK明久!こい!)」

僕は雄二の構えたミット目掛けて投げ込んできた

キンツ

「……え?」

「……ホームラン

僕が放った初球は球速が遅いスローボールを投げたのだから……。白球は甲高い音と共に青空へと消えていった

「……ちよつとまてー!!!!」

僕と雄二とのび太があまりのことでお互いに怒った

「明久はなんでスローボール投げるのさ!?しかもど真ん中に!!」

「雄二がそうサインしてきたんだよ!?ど真ん中に投げろつて!」

「確かに、コースを指示したのは俺だが、スローボールを投げるなんて指示出してないぞつ!!」

「確かに球速の指示は出してないけど、ど真ん中なんて考えがなさすぎなんじゃないのさ!」

「判決……。二人がわるい。」

「なんでだよ!?!」

のび太の無情の判決に僕と雄二が抗議すると……

「いや、お前らが明らかに悪いだろ!?向こうは運動部を中心のメンバーだからな?!」

「ぐっ……。たしかに」

「はあ……。兎に角頼むよ?幸いまだ一点だからいいけど」

そういつてジャイアンとのび太は、もとのポジションに着いた。やれやれ……。次はきちんと押さえよう

「(次はしつかり投げろよ。次ダメだったらその頭をバットで打つからな)」

「(そつちこそ、次はしつかり指示を出してよね。ダメだったら自慢の右足をバットで思いっきり叩くからね)」

サインと確認し、2番バッターに対して第1球を投げてくる

そして……

キンツ!!!

ーホームラン

「バットを寄越せー!!!」

互いにベンチに向かい金属バットを要求する

「落ち着け! 明久と雄二!!」

「そうだよ!!」

「ええい! 離せ! この馬鹿に頭をカッチ割る!!」

「その台詞そつくりそのまま返す! このバカ!!」

「いいからさつさと落ち着け!!」

くそお……あとで雄二をぼごぼごにしてやる……さて次のバツ

ターは……

「お願いします。サモン!!!」

「(三上か……。実力は未知数だからとりあえず低めだ)」

「(オツケー)」

僕は一球目低いボールを投げると……

ーーストライク!!

ほつとした。とりあえず、最初は様子見みたいだけど……ここで

おさえないと!

「(明久、次は高めだ)」

「(オツケー)」

僕は2球目は高めを投げると……

「! 貰ったわ!!」

カキーン!!

「ええ!?!」

どうか入らないでつと思ってボールの行方をおうとのび太が必死

に走っていた

頼む！とつてくれ!!と思っただが・・・

ーホームラン

三者連続のホームランを僕は浴びたのだ・・・

「悪いわね・・・。私も負けるわけにはいかないの!!（そう、私はこの大会を優勝してのび太くんを誘うために!!没収された物はないけど・・・やるからには勝つ!!例え愛してる人でも!）」

な、なんかすごい気迫・・・のび太に至っては何故か汗かいてる。のび太何か怒らすことしたのかな？

兎に角、今はタイムをとらして作戦とっている

「このあとはどうするのさ？」

「どうもこうも・・・切り替えて4番と勝負しかないだろ?（にしても今思えば、1番はフォアボールで良いから明久に投球慣れをさせておけばよかったと正直後悔している）」

「とにかくここ押さえよう!リード頼むね!」

「お前こそしっかり投げろよ」

雄二がもとの場所に戻るとき僕は中林さんの方をみたのだ

とてつもない気迫を・・・

「(ここは4番だし、全力投球。コースは内角高め一度仰け反らせよう)」

「(オツケー・・・いくよ!)」

僕は雄二のサインに首を縦に振ってから、一度深呼吸をする。それで気持ちを落ち着かせてから投球モーションに入った

その結果・・・

ゴツ!!

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

「あつ・・・」

ーデットボール

審判のコールと共に中林さんがものすごい気迫でこちらに詰め寄ろうとした

「殴らせて!あの男を一度でいいから殴らせてよ!」

「宏美さん！落ち着いて!!」

「そうよ、宏美！折角勝ってる試合で乱闘はダメよ！」

中林さんの怒りにEクラスの山田くんとのび太の恋人（己許すまじき）の三上さんが必死に宥めていた

「・・・なんかごめん。バカの中山さん」

「中山さんって誰よ!? 私は中林よ!? それとあんたに馬鹿言われたくないー!!!」

「落ち着いて!!」

「ごめんなさい!うちの明久がごめんなさい!」

「美子の彼氏が謝るのじゃなくて、あいつを殴らして!!」

「落ち着いてー!!!」

あれ?のび太がいつの間にか中林さんを止めに入っていた・・・
とりあえず、本当にごめんね?中林さん・・・

やっぱり頼れる男

結局あのは明久が慣れたのかしつかりと三人ともアウトしてくれたのだ。山田哲夫は明久にデッドボール当てられたが、本人に痛みがないため大きい影響はなかったも、凹んでいたのはここだけの話だ。さて・・・今度は後攻の僕らが攻撃する番だ。とりあえず、ムッツリーニに指示を出さないと

「ムッツリーニ、いい？ホームランとか打てなくっていいからとりあえず、当てただけね」

「・・・任せろ（ぐっ！）」

サムズアップをしてバッターボックスに立ったムッツリーニは：「・・・サモン」

お馴染みの召喚の合図を出したのだ。さて、ピッチャーはムッツリーニをどう押さえる？

その前に点数は？

古典

Eクラス

中林宏美 120点

対

Fクラス

土屋康太 22点

・・・点数の差が激しいよ・・・

「つてか、中林さんの点数高いな」

「そうですね」

「のび太が案外教えて高くなったとか？」

「あー、確か課題テストに向けて中林さんと美子さんと山田君とでテスト勉強した日もあったな。でもそうとはかぎらないでしょ？」

「二いや、ありそうでこわい（ですわ）」

「なにげに酷いね・・・」

そう話しているとムッツリーニは中林さんの投げた球を打つもピッチャーゴロでアウトになった

次は秀吉か……

「秀吉、少しいいか？」

「む、なんじゃ？ ジャイアンよ」

「……ってしたらどうだ？ いけるか？」

「……わかったのじゃ。任せるんじゃ」

そういつて秀吉はバッターボックスに立ったのだ。ジャイアンは秀吉に何をいったんだろ??

「二人目も押さえてあげるわ……木下!!」

「負けるわけにはいかないのじゃ……」

闘志剥き出しにして、そう宣言する中林さんをみた秀吉もまた落ち着いてバッターボックスの入った。

秀吉がバッターボックスに入っていたのを確認してから初球が放たれる。秀吉はそのボールの球筋を見極めるかのように、じつくりと見極めた

——ボール

第2球目

——ボール!

1, 2球ともにストライクゾーンを捉えられないでいる。慎重になりながら振りかぶった3球目

——ストライク!

ようやくストライクが入ったものの、どこかやりにくそうな表情をしている。そのまま投球は続き、2ストライク2ボール

5球目、ここで初めて秀吉が動いた

キンツ!

「なっ!?!」

「ぬ?!」

ローファール

「(あまりに力ないスイング・・・そういうことね・・・)」

中林さんがなにか気づいたように僕も気づいた

「そういうことか・・・」

「なにかわかったの?のび太」

「僕もわかったよ」

「スネ夫も!?いったい何がわかったのさ」

「ジャイアンが指示出したのはフォアボール狙いさ」

「やっぱりね。僕もそう思っていたよ」

「嘘をつけ。このバカ」

「みんな酷いね・・・」

そうしてる間にカウントが3―2になっていた。いいよ!そのままフォアボールになればチャンス増える!

「思いきり振れよ?木下」

山田君が秀吉に囁き戦法をしてきたのだが、秀吉は相手せずにスルーした

「(やっぱり、冷静ね) 思いきり勝負しないのかしら?木下秀吉!」

「すまぬが、それはできん。なにせ、0対3という状況じゃ。5回までしかない以上ワシらは確実に点を取り返さないといけないのじゃ」

時間の都合上5回までしかなく、チャンスが少ない。言い方を変えれば、5回までにきたチャンスも如何に生かせるか相手のチャンスを如何に潰すかがこの試合の鍵となる

「残念ね・・・男らしく挑んでくれたら嬉しかったのに・・・残念だわ」

「!!男らしく・・・じゃと・・・?!」

「二」あつ・・・終わってしまった感じが・・・」

ローストライクツ!バッターアウトツ!

参ったな・・・あとで少しでランナー出したのに・・・残念だ

「とりあえず3番はだれだ?」

「明久だよ。ジャイアン」

「どちらにしてもこれで2アウトか・・・で、次の打順は僕か」

「明久、アウトになったら帰ってこなくていいから」

「そんな……これから打席に向かう人に言うセリフじゃないでしょ。しかもジャイアンにスネ夫、のび太三人とも口揃えてハモるなんて酷いよ……」

「二割冗談」

「あとの九割は本気!?!」

そんな会話といつもの反応をみせてくれた明久を見送った

「召喚獣の扱いに最も長けているであろう明久ならなんとかなるだろう」

「だな」

「とにかく、雄二とジャイアンは準備しなよ」

スネ夫がそういつた瞬間に……

ゴスツ

ーデットボール

「痛みがっ！顔が陥没したような痛みがっ！」

初球から顔面へのデットボール。よりもよってフィードバック機能のついている明久に対して……

「ここから先、あんたの打席は全部デットボールよ……!! 覚悟しなさい……!!」

「ひい!? (宏美さん激怒してる……!!)」

山田君が震えてるのは僕は見逃さなかった。相当さっきの明久のピッチングに怒りがたまっていたんだね……

「兎に角、次は雄二だ！頼むよ!」

「任せろ。この馬鹿の犠牲は無駄にしない」

「僕は生きてるよ!?!」

そんな明久をほっておいて、雄二は召喚した

「うっ……(こいつは怖いけど……ここで押さえておきたいわね)」

「(敬遠を使うてもあるよ? 宏美さん)」

「(いいえ、ここは勝負するわ!) いくわよ!」

2 アウトランナー1 塁でセットポジションからボールを投げる

そんな球に雄二は・・・

「よつと」

金属の甲高い音と共に、雄二が思いつきり引つ張った打球は3塁線
を通過していく。これで2アウトランナー1、2塁か・・・

「坂本に続きなさいよ?」

「武君大丈夫か心配です」

「そうですね。剛田君」

女性陣が心配していたがそんなの杞憂だよ・・・

「心配ないよ。皆」

「なんでじゃ?」

秀吉が疑問を言っていたがそんなのは決まってるじゃないか

「(ここはおさえる!!) いくわよ!!」

中林さんが低めのためを投げるが・・・

「!(もらった!!)」

「えっ・・・」

そんな様子を見た僕は続きを言った

「だって・・・ジャイアンは僕やスネ夫と共に野球をしていた仲間で・・・

このFクラスでは頼れる主砲さ」

打球は山なりでもなければゴロでもない。まるで弾丸のように一
直線に飛んでいき、遙か彼方へと消えていった

——ホームラン

Eクラス 3

対

Fクラス 3

明久、雄二、ジャイアンがホームへ還り、これで同点。試合は振り
出しに戻った

「ナイスバツティング!」

「おう!みたか!のび太にスネ夫!そして真理亜!」

「うん!流石・・・ジャイアン!!」

「流石武君ですわ!」

僕らは喜んでハイタッチしていたのだ。なお真理亜さんはジャイ

アンにハグしていたのだが・・・

「(真理亜さん!?胸があたつてるううう!!)」

顔真っ赤にしていたのはここだけの話だ。とりあえず試合は振り出しにこれで戻った・・・!

同点の後には

同点後、姫路は敬遠されてフオアボールになってそのあとの島田は古典があまりにも泣ける点だったためかピッチャーゴロでチェンジになった

「向こうは九番からか。とにかくしっかり押さえておこうぜ」

「だな。次は数学だから・・・島田で投げて押さえるのが得策だな」

「ああ、島田たのむぞ?」

「そうね・・・」

「?・・・ああなるほど」

雄二とジャイアンに島田がそう話してるのは僕は知らないが、島田が上の空な理由がわかった

なにせ隣に明久と姫路がハイタッチしていたのだからね・・・それに気づいた雄二が弄っていた

「明久とハイタッチしたいのか?」

「べ、別にアキとしたいとかそういうのじゃなくて——／／／／／」

「なら、ハイタッチがしたいだけとかではないのか?」

「ち、ちがうわよ／／／!アキがセカンドだと心配で／／／」

「ああ、なるほど・・・」

島田がなにか顔真つ赤にして否定していたが、大方明久がらみだろうと僕は予想してる

「まっ、さっさとおさえるぞ!」

「わかったわ。坂本リードしっかりしなさいよ」

「わかってる」

三人の方向性が決まったのか守備につくとこの二人の得点が表示された

数学

Eクラス

金本鉄矢 65点

VS

Fクラス

島田美波 193点

こちらとしては予想通りの点数差・・・頼むよ？島田！

二回表はしっかりと島田が三人仕留めてくれたから点数に動きはない・・・

さて・・・この回の先頭バッターは・・・

「サモン！」

数学

Eクラス

中林宏美 110点

対

Fクラス

骨川スネ夫 380点

「「「「・・・はっ？」」」」

「さあこい!!」

「ちよ、ちよつと待ちなさい!」

「ん、何か問題あったか？のび太にジャイアン」

「いや、なんもないぞ？」

「うん。どうしたのさ？みんな」

「「「「いや、点数が異常だから!」」」」

「「へっ？そう？」」

だって、スネ夫は昔から数学は僕らよりも点数高かったのは覚えてるよ・・・。小学校の試験で100点とることも多々あったのだし、本人は後を継ぐならそれなりの勉強したと思うし、点数も高いのは不思議じゃないよ

「くっ・・・骨川くんのは点数のデータがないし、やりにくいわ・・・」
「とにかく打つ・・・!」

そんな二人とはよそに僕は次のバッターを控えるサークルに待機していた

「甘い球はホームランに繋がる・・・敬遠すればのび太くんがいるか

「やらられる可能性はある・・・なら!」

「(点数は高いとわかったらかなり警戒してくるはず・・・。敬遠するにはここでその選択をするのは避けるはず・・・なら!)」

「(仕留めるのは／狙うのは低めの球で攻める!!)」

二人の気迫がすごい・・・

「いくわよ・・・はああ!!」

「必ず・・・うつ!!」

キーン!

「!?しまっ・・・」

「よしぬけ・・・」

パシッ!!

「!?!」

ーアウト!!

「なっ・・・!?!」

スネ夫の鋭い打球はショートof丸にダイビングキャッチャーでとられた

その様子に中林さんはよろこんでサムズアップした

「ナイスよ!丸!」

「これくらいとれるさ。安心して勝負しろ!」

中林さんのサムズアップに答えるように向こうもサムズアップした

さて次は僕か・・・

「野比君か・・・」

「数学は今回あまりよくなかったからね・・・それでも打たせてもらおうよ!サモン!」

「あなたがすごいのは私は知ってるけど・・・ここで負けるわけにはいかないから勝たせてもらおうわね!」

僕はバッターボックスに立って色々なことを考えていた。とりあえず、初球は流そう

ーボール!

初球は高めの球か・・・。次は低めかな?

キイン!

アーファール!

これで1―1・・・中林さんは三球目に内角の方に攻める傾向があるから・・・

「! (予想通り!)」

「うそ!? (読まれてた!?)」

キイン!!

僕は中林さんの内角に投げてきた球を引つ張るように打った球はセカンドとショートの間に向かった

これは抜けるはず!!

アーアーパシツ!!

「?!」

「なっ!」

僕は目を見開いてダイビングキャッチャーした人を見たのだが、その人は・・・

アーアウト!!

「よし、ツーアウトよ! 宏美」

セカンドの美子さんが僕の打球をキャッチしたのだ・・・。完全に抜けたと思ったのに・・・

呆然としていた僕の顔を見た美子さんは勝負師の顔になってこちらに小さい声でいっているかもしれないが僕には聞こえる

「ごめんなさいね、のび太君・・・。私達もスポーツでは負けたくないの。だからこの勝負は勝たせてもらおうわ」

「流石美子さん・・・。簡単にはいかないか・・・」

そんな美子さんのプレーで僕はヒットでなかった悔しさよりも真剣な勝負に楽しんでいきたいという気持ちが勝っていた

結局、スネ夫と僕がヒット出ずに一番に回ったのだがこれもアウトになってチェンジになった・・・。なんとか一点取りたかったな・・・

三回の表のEクラスの先頭バッターは美子さんからか。この回はまた明久がピッチャー行つて貰うけど・・・

「明久」

「ん、どうしたのさ？のび太」

「ないと思うけど、初球でまた打たれるのは勘弁してよね？」

「なにいつてるのさ、僕が本気出せば初球で打たれることはないよ」

「……何かフラグに見えたけど敢えて言わないでおいた。いつてしまったらそうなりそうだからね……」

僕は外野に守備位置を構えたが、明久のことだから心配だな……

「(とりあえず、内角の外側で攻めるぞ?)」

「(OK)」

明久は一回頷いてから投球モーションに入って球を投げたのだが……まずい！投げるのミスったな!?

「(ど真ん中……!) 貫ったわ!」

美子さんは甘い球を逃さずにしっかりと足を踏み込んで腰を振ると……

キーン!!

辺りに金属音が聞こえた。僕の召喚獣は必死に追いかけるも間に合わず……

ーホームラン

無情の判定を下された……

「やった!!」

美子さんの嬉しそうな声が聞こえた。ああ……どうやら、打たれたのは現実みたいだね……

明久……

「あ、あの……のび太くん？」

「ん、なに？姫路さん」

「い、いえ!!! (さん付けしてるのは明らかに怒ってますうう)」

「少し席はずすね」

「はい!!」

僕はスネ夫と姫路にそういつて明久の方に向かった。明久は雄二

にお説教されていたが、そんなことはどうでもいい

「ん、のび太……げっ!？」

「どうしたの……さ……」

「審判少しタイムとります」

「早めにしてくださいね」

審判の言葉に僕は頷いて二人にそれはもう思いきりいい笑顔で僕は二人に言った

「明久、雄二……」

「は、はい」

「もしも次にホームランとか甘い球を投げた瞬間は……わかってるね？」

「分かりました!!!次はきっちり押さえます!!」

二人は震えながら敬礼していた。失礼だな…….と思いつつながら守備位置にもどった。尚、その後は明久の気迫のピッチングで点をとられることはなかった…….

時には真剣勝負に！

結局三回の方では秀吉から始まるも雄二で攻撃が終わった。尚、明久は他の子にもデッドボール当てられたのはここだけの話だ

そして四回の裏は6番姫路からなのだが敬遠されて、7番の島田がショートとセカンドのコンビプレーでダブルプレーになり、最後の八番のスネ夫でアウトになり、5回の裏は僕から先頭打者になるのはわかった

そんな中、五回の表の科目は・・・保健体育なのだが・・・

「じゃあムツツリーニ、保健体育だからよろしくね」

「・・・任せる(グツ)」

「二」「いやいや、なにいつてる！このバカ！」「二」

明久は最初に言ったことが忘れているみたいだ。

「あのね、明久。ムツツリーニがピッチャーをやってもそれを取れるキャッチャーがいないんだよ？」

「そうだぞ、仮に取れたとしても当たり所が悪ければ消し飛ばしな」

「えっ、そうなの？でも・・・上手く取れば大丈夫だよ。きちんとミットに収めたらダメージはないわけだし」

「解決になってない上に一回でも取り損ねたら消滅だからね。・・・

明久がキャッチャーいくなら別だけど」

「遠慮します!!」

「まあ、そういうことだから・・・ピッチャーは雄二でキャッチャーはスネ夫で頼むね」

「おうー！」

僕がそういうと二人は力強く返事してくれた

「兎に角、ここで無失点に押さえよう。そして」

「二裏で逆転だ!!」

明久がキャッチャー出はないのは単純に指示が適当になりそうだからスネ夫にそこ行ってもらった。とりあえず、それぞれの意見は共通でこの回は無失点で押さえたいこうと共通の意味だった。何がな

んでも勝とう

まずは守備をしっかりとしないと思ってる。相手の点が表示された

保健体育

Eクラス

山田哲夫52点

V S

Fクラス

坂本雄二 176点

・・・まあ大丈夫か

あつという間に3アウトチェンジになり、僕らはハイタッチしていたのだ。さて、今点数は・・・

Eクラス 4

対

Fクラス 3

Eクラスに一点リードされている・・・。とりあえず、まずは同点にしないと!!

「サモン!!・・・さあこい!!」

「(この回は野比君からね・・・。どうしましょう?)」

「宏美、お願いがあるの。皆を呼んでくれないかしら?」

「美子・・・?Eクラスの皆!集合!!」

僕は頭のなかに???がたくさん出ていた。このタイミングで敬遠の指示でも出さかな?づて思っていると・・・

ーピッチャー交代です

「え?」

このタイミングで誰を??と思ってる。マウンドに立ったのは・・・美子さんだった

・・・あれー

「この打者限定で私が投げるわよ……。のび太君」

「あっちゃー……。まさかの美子さんがピッチャーでキャッチャーに宏美さんが回ってきたか……。点数は？」

保健体育

Eクラス

三上美子185点

対

Fクラス

野比のび太160点

……。普通に僕より点数上だ……。凹むよ……

「(落ち込んでなんかいられない!!美子さん) 打たせてもらいます!!」

「(のび太君ならホームラン打つ確率もあるけど……。) 打たせない……!!」

それぞれの思いを胸にしつかりと相手を見据えて構えた……

「行くわよ……!」

美子さんが初球は内角の際どいボールを投げて来たのを僕は見送った

ーストライク!!

続く二球目はボール球だったので見送った。続く三球目も同じだった

そして四球目は当てるもファールになり、続く五球目はボールになった

「(これでカウントは3―2……。) 次は必ず打つ!」

「(流石のび太君……。次は外角の高めの球で振ってもらいましょう)」
それぞれの思いが重なりしつかりと睨んでいると……

「のび太! 頑張れ!」

「たのむぞ!!」

「ああおまえしかいなんだ!!」

クラスの声援が聞こえた。なんとしても打たないと!!
そう思っていると美子さんが投げてきた! 必ず打つ!

「「俺たちのエロ本のために!!」」

「……」

「ーストライクバッターアウト!!」

あの声援で僕の強く打つ気持ちが悪えたよ……すると、中林さんと美子さんが僕に近づき肩を叩いた

「貴方……苦労してるのね……」

「のび太君……今度一緒に癒されにいきましょう?」

「ありがとう……中林さんに美子さん……」

二人に心底心配そうな同情されて僕は力なく返事した
ベンチに戻ると明久が怒っていた

「どうしたのさのび太! スイングに力がなかったよ!」

「あの声援で力が奪われたのだよ……」

「……お疲れ様。のび太」

明久の問いに僕はそういうとジャイアンとスネ夫が肩を叩いて同情していた

あんな応援では気合いも奪われるよ……

美子さんは投手を降板して別の人が投手になった。さて、次は一番だ……

「……行ってくる」

一番のムツッリーニが打席にはいると向こうのピッチャーは……

「……ボール、フォアボール!!」

敬遠でムツッリーニを一塁に歩かせた。まあ当然だろうね……。なにせ、ムツッリーニの保健体育の点数は589点だから、バットの芯に当たらなくとも場外まで運ぶことができるだろう……

続く2番の秀吉なのだが……雄二が秀吉に「初球は手を出すな」というと向こうは意図を感じたのかうなずいていた

なるほどね……そういうことか

「ムツッリーニが出塁してその指示ということとは……まさか?」

「うん。ジャイアンの考えてる通りだよ」

「僕もわかったよ。でもできるの？」

「ほう、お前らはわかったのか？それと骨川の質問だが・・・可能だ」
「「??」」

まあ見ていたらわかるよ・・・見ていたらね

次の瞬間Eクラスの人が叫んだ

「盗塁だ!!!中林！セカンドに！」

「ええ!!」

が球を受けてから即座に2塁へと送球しようとするこのタイムミングではどう見てもギリギリ・・・

そう、普通の野球ならね・・・

「・・・かかった」

ー加速

ボールの位置を確認してから、ムツツリーニの召喚獣が一気に加速していく。目にも止まらない速度で2塁ベースを踏み、止まることなく3塁へと向かうムツツリーニの召喚獣が3塁へ向かったところのようにやくボールは2塁へと到達した

「美子！サードに！」

「くっ、サードに投げないと!!」

中林さんの指示を受けた美子さんがサード目掛けてボールを投げたとき、ムツツリーニの口からそのキーワードが出てきた

「・・・加速」

ムツツリーニの召喚獣が霞むほどの速度で3塁を蹴ってホームへ未だにボールは3塁へ到達していない

「嘗めるな!!」

サードの選手がボールを取ってホームに向かって勢いよく投げたが・・・

「・・・加速、終了」

ホームベースの上を駆け抜けて生還した。つまり・・・

「「同点だー！ー！」」

これであとはこちらが一点とればさよならだ。でも、今ワンアウトだからまだ向こうは焦るだろうね

ノーストライクワンボールでバッターは秀吉か・・・がんばれ!

「秀吉、がんばれ!」

「お前なら打てる!」

「落ち着いてな!!」

僕、ジャイアン、スネ夫がそういうと他の皆もベンチから声だした
「秀吉ならできるよ。頑張つて」

明久も声だすと他の皆も続いた

「木下、石にかじりついてでも打つんだ!」

「気合を入れてくれ木下!お前にかかっているんだ!」

「そうだ、頑張つてくれ!そして、なんとしてでも打つてくれ!そう・・・すべては・・・」

「俺たちの、エロ本の為に!」

「・・・」

ノーストライク、バッターアウト!

「どうしたのさ秀吉ものび太と同じようにスイングに力がなかったよ!?!」

「あの激励で力が奪われてしまったの・・・」

・・・気持ちはわからなくもない。僕も奪われたのだから・・・

ここで決めないと……!!

現在、5回の裏Eクラス対Fクラスの点数は4ー4の同点で2番の秀吉も三振になったで3番には……

「ついに僕が出番……!」

気合いはいった明久が目の前にいたのだが、僕は明久に警告した

「気合い入りすぎるのもだめだよ?とりあえず、ランナー出せばいいから」

「任せてよ!……所でのび太」

「うん?」

「別に……ホームラン打てるなら打って構わないでしょ?」

「二」それフラグ……ってか、明久にその台詞言えるほどの実力はない!」

明久の言葉は明らかに実力伴っていないのにその台詞は似合わない!!

「失礼な!見てろ!!必ず結果だしてくるよ!!ランナー出すこともできるのだから!!」

そう息巻いてバッターボックスへと向かったのを見た僕らは……

「さーて、雄二と俺は準備しとくな?真理亜さんは召喚獣のやり方わかる?」

「一応は……。私の出番とかがありますのででしょうか?吉井様は自信満々にいきましたので出番はないと思われませんが……」

「まあ安心しなよ。必ず出番は来るよ。なにせ……」

僕がそこまでいうと……

「……デッドボール!!」

「明久が必ずそうなるから、必然とランナー出るのさ」

「なるほどですわ……」

そんな明久はフィードバックがあるため苦しんでいた

「だから……っ!どうして僕にはデッドボールばかり……っ!」

「言ったでしょ……。ここから先は全部そうするって言ったでしょ……」

中林さんは明久に怒りながらそういつていた。有言実行ならず、まさに明久の仕受けがこれはまあ、かわいそうだね……

あれ？確か明久の点数は……

保健体育

Eクラス

中林宏美 105点

VS

Fクラス

吉井明久 0点

「「「あつ……」」」

僕らFクラスはその点数で気づいた。0点ということは……つまり明久は……

――吉井明久、戦死!!

そんな明久の代走にはいるのは……

「審判、氷華が代走で入ります」

ジャイアンが審判に申告していた。明久はいまだにフィードバックがあるのか痛そうな顔をしていた

そんなこんなで、戦死してしまった明久の代走を真理亜さん投入して試合再開した。尚、このあとの打順は4番の雄二、5番のジャイアン、6番の姫路と繋がる

「ここで決めたいな……」

「だね。ここで雄二が三振してしまえば、次の回は苦しいから理想的にはこの回できめたいところだね」

僕とスネ夫がそう話していると……

キーン!!

「!!」

どうやら雄二は初球に手を出したみたいだ。打球は1、2塁間を鋭く裂いていき、ランナーは……1、2塁でバッターは……

ジャイアンだ!!

「ここで決めないとプロ目指す男が廃るってもんだ……」

「ジャイアン・・・頼むよ!」

「ジャイアンなら、きめれるよ!」

「おう!このジャイアン様が華麗に決めてやるぜ!!」

そういつてジャイアンはバッターボックスへと向かった

大丈夫だよ・・・ジャイアンは必ず結果を出すのだから僕らはここで座って待てばいい

ジャイアン side

「おし・・・サモン!!!」

俺は気合い入れると共に掛け声を出して召喚した

保健体育

Eクラス

中林宏美 105点

対

Fクラス

剛田武 110点

点数はそんなに離れていないのか・・・。敬遠の可能性は低いな

「(剛田君にはさつきホームラン打たれたけど・・・ここで敬遠したら姫路さんが出てくるわけだし・・・)ここで押さえにいきましょう!」

「(なんだか気合い入ってるが、こちらも気合いいれているんだぞ・・・)負けるかよ・・・!」

そう構えると向こうもなげるフォームに入っていた

向こうの初球はバットの届かない外角へと投げ込んできた

ーボール!

続く2球目も同じ球、同じコースで投げってきたがこれも俺は流した

「(フォアボールにしたくないはずだから・・・次は内角にくるはず!)」

そう思って構えて次の球投げた瞬間俺は構えて思いきり振ったが・・・

ーファール!

打った球は後ろに飛んでしまった。今のは決めないとダメだった・・・

「くそー！（つぎはどうくる?）」

「ふう・・・（やっぱり剛田君は要注意ね・・・次は・・・ここー!）」

「!」

キーン!!

ーファール!!

くっ・・・またファールかよ!?どうしたものか・・・

「落ち着いて!ジャイアン!!」

「ジャイアンなら決めれるから冷静に!!」

「のび太・・・スネ夫・・・」

俺は二人の方を見ると笑顔で俺の方にサムズアップしていた。・・・あいつらのためにも・・・

「ここで打たせてもらうぞ!!」

「(目の色が違う・・・) 負ける・・・もんですか!!!」

中林が思いきり振りかぶる瞬間、俺は不思議なことにボールがゆっくり見えた・・・

「(ゾーンか・・・?いや、ゾーンにしてはもつとゆつくりなはず・・・だが・・・もらった!!!!!!!」

ーキーイン!!!!!!

ボールをミットした感触は良好!!向こうは焦った顔になった

「やばい!」

「頼む・・・入ってくれ!!」

俺は必死にホームランになることを願っていたなか、向こうは必死に走っていた

頼む入ってくれ!

そして辺りが沈黙して審判のコールを待っていると・・・

ーホームラン!!

審判は大きく腕を回していた・・・つまり・・・

「「「俺たちの勝ちだー!!!!!!」」」

Fクラスの大半の人間がガッツポーズしていたが俺はそれ以上に

両手を大きく広げて拳上げた

「つやっただぞ!!!」

Eクラス対Fの試合結果は・・・7-4で俺らFクラスのさよなら勝ちで決まった・・・

Eクラスの人らは悔しがっていたが、三上さんのはのび太がきちんとフォローするだろ・・・

とにかく一回戦突破だ!!

一回戦の試合のあと・・・

さて、僕らの試合は終わったけど他のクラスはどうなったんだろう??そう気になりつつも、時間があるので美子さんの方に僕は駆け寄った

「美子さん!」

「のび太くん・・・参ったわ。やっぱりあなたたちは強いわね」

駆け寄った僕を見て美子さんは苦笑いしながら返事した。そんな僕は・・・

「ううん、美子さんたちの率いるEクラスの方が正直、強かったよ・・・何回かこちらは負けるのか!?って思ったけど・・・」

「でも貴方達が結果的に勝ったのよ?ああ、勝ちたかったな・・・。吉井くんはどうなったの?」

「ああ、明久は回復試験を受けるためにそのまま職員室に行ったよ?」

「あれ・・・?今たしか職員室には・・・「いやああああ!!」・・・。西村先生がいたみたいね」

そのようだ・・・明久・・・頑張れ!

「次の試合予定が大体一時間後か・・・。次の対戦相手はどうなっているんだろう?他のところとか」

「あつ、それならさつき他ののクラスの結果はもうでていたわ。えーと・・・これね」

そういって、美子さんは僕にトーナメント表を見せてくれた。何々・・・

「2ーCと2ーDは引き分けとなった。2ーAはBクラスに圧倒的な点数で勝利か。実質、2年生は僕らのクラスとAクラスだけ進出か」

「ええ、3年の方は細かいことはわからないけど2ーAと当たるのは3ーAよ。のび太くん達が当たる予定のクラスは・・・まだ試合してるけど・・・このままいけばのび太くんたちのところ是不戦勝になるわね」

「そうなったら、3年のAクラスがくるのか2年のAクラスがくるのかどちらがしても苦しい試合になりそう」

どちらにしても苦戦は避けられないか……参ったな……

「あつ、ねえ……のび太君」

「どうしたの？美子さん」

「そ、その……今度の休み予定空いてるかな？」

「今度の休み……少し待ってね？」

僕は今度の休みの予定を思い出してみると、何もなかった

「大丈夫だよ」

「本当に!?良かった……」

「どうしたの？」

「その……デートしましょう／＼／＼」

「ぶごっ?!?!」

上目遣いで真つ赤にしながらこちらを見た美子さんは僕にとつては破壊力抜群だった。美子さんは本当に僕にとつて天使で守りたい人だ……

「の、のび太君大丈夫？」

「あつ、うん。大丈夫だよ。デートもオツケーだよ」

「嬉しい!のび太くとデートできるの嬉しい!」

そこまで喜んでくれると僕も嬉しいよ……。まだ試合時間まであるな……

「のび太君……よかつたら私の膝枕でねる？」

「っえ?いいの……?」

「ええ、のび太君だからいいのよ。十五分後に起こせばいいのかな？」

そう聞かれて僕はうなずいた。

「あつ、そういえば拳銃はどこに隠したの？」

「……美子さんなら口固いから話すけど……下」

「下?……まさかFクラスの？」

「うん。Fクラスの教室は畳だから……そこで密かに隠しているの」

「……バレない?それ」

「大丈夫だよ（因みに、畳の下にどうやって隠したかは内緒だよ）」

「……のび太君もFクラスの部分染まってるわね」

うん。たぶん否定できるほどの材料がないからその可能性は高い

ね……

「とにかくのび太くん寝なさい。私がきちんと起こすから」

「ありがとう……じゃあ……ねる……ねzz」

僕はそうお礼を言って意識落とした。美子さんが、なにか突っ込み
いれていたような気がするけど気のせいだよね……

美子 side

「早!?!のび太くん寝るの早すぎよ!?!」

私は目の前の最愛の彼氏でもあるのび太君が一瞬で寝たことに驚
いて突っ込み入れたけど本人はスヤスヤと穏やかに寝ていた

「はあ……楽しかったな……」

のび太くと真剣な試合できたのは私は嬉しかったな……。彼と
の真剣な勝負は心が踊って仕方なかった

「……」

ただ私はひとつの不安がここ最近出てきたのがあった……。それ
はのび太君や剛田君、骨川君の三人があまりに遠い存在にならないの
か心配になってきた

「まあ……幼い頃の冒険を聞いていたらね……きつと、規格外と言
われたらどこまでが規格外なのかしら」

でも……

「私は必ずのび太君の味方だからね……。世界が貴方を消しても……
私が必ず貴方を見つけるからね」

私は寝ているのび太くに頬をキスしたのだそういえば、この後の
試合のび太君のクラスは大丈夫かしら……。主に吉井くんがまた問題
起こさないことが心配ね……

今はゆっくりお休みなさい。のび太くん♪

次の相手は・・・

現在の時刻は10時25分で、僕は明久たちのいるところへ歩いていった。美子さんが顔真つ赤にして起こしてくれたときは僕も顔真つ赤だったのはここだけの話だ

さて、僕らの対戦相手は2年生か3年かどっちかな・・・？

「おう、のび太昼寝タイムは終わったか？」

「うん。ってか、ジャイアンはさつきどうしていたの？」

「真理亜さんと真理亜さんらにとってお姉さんに当たる三年生の小暮先輩と喋っていた」

「小暮先輩って着物着ていた人だよな？」

「おう。そういえば、さつきスネ夫から連絡くれてな、相手は3年のAクラスだ」

3年のAクラスか・・・なんかとんでもないことにならなかつたらいいけど・・・

「戻ったぞく明久」

「あつ、ジャイアンにのび太どこ行っていたのさ!？」

「昼寝していた」

「真理亜さんらとお話ししていた」

「諸君、あとでこの二人を殺そう」

「「おう。ついでにのび太も」」

僕らの返事に明久は殺意こもった顔で宣言すると回りも同意していた。後で振り返り討ちしてあげるよ・・・

「次の相手はきいているな？」

「うん、スネ夫からね。でもビックリしたよ」

「まさか、二年生のほうのAクラスが負けると思わなかったぞ」

「それにたしか霧島さんつてのび太とジャイアンから聞いた話では姫路さんですら勝てないの成績を誇るって聞いていたけど・・・」

「僕らの結論としてはやっぱり向こうにも霧島クラスの成績の持ち主がいたのかもしれない」

僕らがそういうも雄二が否定していた

「まあ、確かにあいつは姫路よりも成績が凄いが・・・野球はそこまで詳しくないからな。その辺が原因で負けたんじゃないか?」

「ああ・・・確かに姫路の例もあるからね。それに霧島さんは機械弱かったようなきが・・・」

そう、霧島さんは機械弱いのは雄二からも聞いていたけど・・・それと関係あるのかな?

「まあ、どちらにしても試合内容がさっぱりわからないとはいえ、2―Aに勝ったくらいなんだしそれなりの作戦を立てて挑む必要があるよ」

「だな。とりあえず、作戦をたてるか。でも策はあるのか?」

ジャイアンがそういうと雄二も頷いていた

「そうだな・・・正直、3―Aが来るとは思ってたからな。作戦らしい作戦なんてないんだが・・・」

きっと何かあるんだろうと思ってるし、期待もそれなりにして聞こうと思うと・・・

「・・・奴等の召喚獣を殺そうと思う」

「確かに作戦らしい作戦ではないね。でも、わかりやすいよ」

雄二の言葉に明久が納得していた。この二人は・・・

「既にスポーツマンシップという概念は消え失せておるようじゃな・・・」

「最低の作戦ね・・・」

「殺す?・・・アウトにするってことですか?」

「はいはい、姫路はこの作戦聞いてはいけないよ。真理亜さんとお話ししてきて?」

「?はい」

僕はとりあえず、姫路に悪影響及ぶ可能性があるから真理亜さんのほうに向かつてもらった

とりあえず、姫路に悪影響は避けられた

「つまり、タックルをしたりデットボールを狙ったりして良いってことだよな」

「・・・振り切ったバットを相手に投げつけても問題ない」

「そうだな。理解が早くてなによりだ」

「「お前ら、本当に最悪だな!?!」」

そんな言葉にジャイアンとスネ夫はもつともな突っ込みをいれてくれた……

「アンタらねえ……そんなことをして相手に『卑怯』って文句言われても知らないわよ」

「卑怯?ふっ、美波……」

「……島田よ……いいこと教えてやる」

「……卑怯とは」

「「卑怯汚いとは敗者の戯言!!そして敵と書いて相手を潰せって意味だ!!」」

「君ら最低だね!?!そして、訴えられたら僕ら負けだよ!?!」

「アンタら最低過ぎるわっ!」

とりあえず……あの三人はほつといて僕らで結論つけよう。……

僕も本音はあの先輩いたら心潰したいけどさ……

「作戦云々抜きに勝ちにいこう!」

「だな。勝負で負けるのは嫌だしな」

「まあ……乱闘になってしまえば、それはそれであとが大変だよ」

「そうね……。まずは勝ちましょう」

「うむ」

今から倒すべき相手は三年のAクラス!相手に不足はない!!

いざいざいざ!!

ある意味言葉は気を付けよう

教師陣を倒しにくくするためには、この試合三年のAクラスを撃破しなければならぬ。僕個人としても少なからず因縁がある三年生がいると雄二から聞いた

「・・・雄二、あの三年生がいるって本当?？」

「あ・・・ああ・・・(ガタガタ)」

「そっか・・・あの夏川先輩と常村先輩が出ていたんだ・・・そっかそっか・・・」

「ね、ねえ・・・の、のび太・・・だ、大丈夫ですか・・・?？」

「んっ、何が? 島田さん・・・」

「だ・・・だって・・・の、のび太君がいま目がとてつもなく・・・据わっていますよ・・・?？」

「あの先輩方を必ず潰してやる(ん、ああ怖がらせてごめんね・・・)」
「二ひいひい!!?」

「本音と建前が逆だよ!？」

僕は明久に言われて本音と建前が逆やったことにうっかり! っと思ってしまった・・・。因みに姫路と島田と真理亜さんは僕があまりにも雰囲気悪くさせていたのか怯えていた・・・

「あいつに全く怖いぞ・・・?？」

「ねえねえ、ジャイアン・・・何かあったの? のび太が三年Aクラスの二人の先輩が聞いてからかなり怒っていたけど・・・」

「ああ・・・いつかの時だったかな・・・。あの人達が三上に対してセクハラをしていたからな」

「・・・オツケー。事情はわかった」

僕がその雰囲気出ている理由をスネ夫がジャイアンに聞くとその理由を聞いて納得してくれた

「のび太・・・今回は俺らもあいつらの心を潰すの手伝うぞ」

「同じく!」

「二なら、潰すのを手伝って!」

「二断る!! こちらの手段はしあいで心を潰す」

「「そちらがおそろしいよ!?最低だな!?!」」

「「君らが言うなー!」」

あくまでも試合で相手の心をへし折るのがぼくらのやり方だよ!?
乱闘ではない!!

「いえ……どちらも物騒な言葉をだしてますからお互い様かと……」

「「同じ意見（です）」」

女性三人は喧嘩両成敗ならずどちらも同じと言った……泣きた
い……

そんなこんなで試合開始も近づいてきた……

僕らFクラスは3―Aとの試合の先発メンバーはこんな感じに
なった

3―Aとの試合の先発メンバーはこんな感じになった

1番 サード 須川亮

2番 キャッチャー 骨川スネ夫

3番 ピッチャー 吉井明久

4番 ファースト 坂本雄二

5番 センター野比のび太

6番 セカンド 土屋康太

7番 ショート 木下秀吉

8番 ライト 島田美波

9番 レフト 氷華真理亜

ベンチ 姫路瑞希

ベンチ 剛田武

なぜジャイアンを出さないんだって?教師陣に勝つためにもここ
で温存しときたい選択とつた

さて先攻は此方からか……。どう攻めようかな……

そう考えてると……

ーットライク!バッターアウト!!

一番の須川が三振で倒れて戻ってきた。点数は……?

科学

Aクラス

夏川俊平 244点

VS

Fクラス

須川亮 59点

ふむふむ……

「スネ夫ー」

「ん？なに？」

「……頼むよ？」

「……任せろ！」

僕の意図がわかったスネ夫は頷いた。さて……頼むよ？

「スネ夫は科学すごいのか？」

「ん、多分ね」

「偉いはつきりしないな……」

「安心しなよ……スネ夫なら……」

科学

Aクラス

夏川俊平 244点

VS

Fクラス

骨川スネ夫280点

キーン!!

「なっ?!」

スネ夫は初球でボールを見事にミットしたのだ。その打球は……

「あいつは……」

「スネ夫は……」

「ジャイアנטスのメンバーの一人だからストレートど真ん中の玉なんて絶対ボールだ」

——ホームラン！

「嘘だろ……」

ホームランを打たれた常村先輩と夏川先輩は驚いていたが……あんな球はスネ夫にとつては絶好ボールだよ……

ホームをしつかりふんでベンチに戻ってきたスネ夫に皆はハイタッチしていた

「流石だね。スネ夫」

「当たり前だよ！ねえ？ジャイアン」

「おお！この程度お前なら打てるだろう！」

僕ら三人はそう声かけてハイタッチした。さて……次は明久か……大丈夫かな……？

点数を見てみると……

化学

Aクラス

夏川俊平 244点

VS

Fクラス

吉井明久 57点

……わかっていただけけれど、この点数差は苦しいな……

1球目、2球目は美波や須川同様にど真ん中の真っ直ぐ。カウントは2ストライク0ボール

……なんか雄二のことだから明久になにか仕込んでそう……

そう考えているといつの間にか追い込まれていた

「そんじゃあ、コイツで止めだ」

投手から放たれた第3球目……

速球に合わせてなのか、放たれたとほぼ同時に明久の召喚獣はバットを全力で振った。ボールは明久の召喚獣の頭に放たれ、バットは召喚獣の手から離れ投手目掛けて放たれた

「危な―」

向こうが投げたボールは明久の召喚獣のこめかみに、明久が投げたバットは向こうの鼻先を掠めて飛んでいった

「己！卑怯な!!」

どっちもどっちだろ!?!と僕ら四人は言いたかったがあえて我慢して言わなかった・・・

―ストライク!!バッターアウト!!

明久のバット投擲行為がスイングと判断され、三振となった・・・ベンチに戻ってきた明久の開口一番は・・・

「ごめん。これで向こうに警戒させちやつたかもしれない」

「・・・バット投擲のラフプレーが失敗して警戒されたことを謝っているのだからけれど・・・」

「謝罪するところが違う気がする・・・!!」

「本当に実行すると思わなかった・・・」

そんな僕らとは別に雄二達は明久にかけてた言葉は・・・

「気にするな。今の失敗はピッチングで取り返せばいい」

「・・・皆でフォローするから心配ない」

「一見普通の会話に聞こえるのじゃが、会話の中身が最悪じゃな・・・」

「コイツら、スポーツマンシップって言葉を知らないのかしら・・・」

「警戒とか、敬遠とか、野球っているんな用語があるんですね」

「姫路さん、それは違うと思いますわ」

この三人のせいで姫路には要らない知識つけてしまいそうで怖いよ・・・

とりあえず・・・アウトか・・・さてここからどうするかな・・・

そう考えて集中し直した。必ずAクラスを倒さないと・・・

嫉妬は・・・

次のバッターは雄二だったのだが・・・向こうは何を思ったのか雄二を敬遠したのだ。点数はそんなに離れていないはずだけど・・・何をたくらんでるんだ?？」

「さて・・・何を企んでるんですか?先輩らは」
「・・・別に」

僕の問いに目をそらしていたが、返事に間合いがあつたのは気のせいではない・・・それに、何か企んでるのは確かだ

「まあ、いいですよ。こちらは勝つだけなので」

「一丁前口だけは達者だな。先輩らの威厳を教えてやる・・・!」

「たしか化学で244点でしたか?すごいですね」

「ふん。どうせFクラスだから貧弱だろ?」

お互いに皮肉に言い合いながら、僕は集中し始めた

「確かに244点はすごいですね・・・でもね先輩・・・サモン」
「なっ!?!」

「勉強していれば僕もかなり点はとれるものですよ・・・」

化学

Aクラス

夏川俊平244点

対

Fクラス

野比のび太450点

その点数は200点も離れている。尚、先輩方は動揺していたのを僕は見逃さなかった

「(どうする?!とりあえず点数は向こうが高いぞ?!)」

「(点数をとりあえず削ろう!あれを実行する!)」

「(さて・・・とりあえず、初球ホームランを打たないと)んっ?」

僕はバッターボックスを立つてサモンして集中しようとおもうと
「のび太君ー!頑張って〜!」

「美子さん・・・うん！」

「いいな・・・野比のやつずるいよな」

「二年生でも美女トップ10に入ってる子に応援してもらえるなんてずるいぞおお!!」

「アイツテキダ！俺らモテナイオトコノテキダ!!」

「三上さんに踏まれたい！はあはあ・・・!!」

僕と美子さんのやり取りにFクラスから嫉妬の言葉がたくさん出ていた。最後のやつは誰？正直に出てくれたら後で撃ちまくってあげよ

っと・・・とりあえず集中しないと！

向こうの方に見ると殺意わいてる夏川先輩がいた。さて・・・美子さんの前では恥ずかしい格好見せられない！

「(くたばれ!) つらあ!」

「! (この球は・・・!)」

ゴオン!とボールが当たった音がした・・・

美子 side

私はのび太君が打席に入ったとき、応援すると約束したので声援を送った。すると、向こうの痴漢先輩が嫉妬の炎だしてるの見えた嫌な予感して初球見ると・・・

ゴオン!とのび太君の召喚獣が頭に当たったのだ。投げた本人の顔見ると・・・

「ああー悪い悪い」

全く悪びれていない顔で謝罪していた・・・あの顔・・・明らかに狙っていたでしょう!!

「あの人たちは・・・!!」

私は怒り露にして向こうに文句をいおうとおもうと・・・

「別に構いませんよ・・・この程度なんてどうしたことないですよ・・・」
顔は笑顔だけど冷たい声で一塁に向かうのび太君の声を聞き、私は

踏みとどまった・・・

のび太君・・・怒ってる・・・先輩らは気づいてないけどもうこの試合はのび太君をおこらした以上・・・只ではすまないはずよ・・・

のび太 side

まさか頭を狙うのは予想してなかった・・・まあ、先輩達の器の小さいのが明らかになった以上・・・この試合只では終わらさないよ 次のバッターだったムツツリーニは三振で終わってベンチを戻ったのだが・・・なんか明久達が引いている

「どうしたの？明久」

「いや・・・のび太なんか目がすごく怖いんだけど」

「ええ、いまにも相手を潰す感じよね」

「気のせいだよ・・・所で雄二・・・」

「な、何だ？」

「この回さ・・・僕がキャッチャー行くよ」

「二「はあ?!」」

「のび太キャッチャーできるの!?!」

したことないけどね・・・

「でも操作するだけだからどうにかなるよ。明久は思い切り僕に向かって投げなよ」

「まちなよ、のびた」

僕の提案にスネ夫が挟んで止めてきた。なんだろう？

「僕に任せなよ? どうせなら屈辱を教えるのが一番だよ」

「うむむ・・・スネ夫がそこまでいうなら・・・頼む」

「任せなよ。明久、こっちに来なよ・・・」

スネ夫は明久を連れて打合せしていた・・・あの顔はイタズラするときの顔だ・・・

まあ。お陰でこちらが冷静なったけど・・・どうするんだろう? そう疑問に思いながら、スネ夫の策に期待して僕は守備に着いた
絶対に負けたくない・・・

スネ夫の仕返し

スネ夫 side

それぞれの守備に定位置つくと考えていた。先行の僕らが結局取れたのは1点だけだったのは痛いなー。そういえば、のび太相手に敬遠ならまだしも死球はあれはわざとだよーね……

まあ、あの二人の顔は覚えておいたよ……やるなら徹底的に……だよ

そう考えると向こうの最初のバッターが打席にたった。うん……明久にすごい敵意を持ちながらね……

「まあ、何で敵意を持つてるのか勝負にそんなのはどうでもいいや。明久、最初は内角低めの早いストレートで」

「(え?でも、僕の点数だと……)」

「(向こうの敵意は何故か殺意わいているの感じるけど、とりあえず最初はここでいいよ)」

「(わかった)」

明久の召喚獣が投げたボールはさつき見た反則先輩と比べると格段に遅いが……

ーットライク!!

向こうは初球だったからなのかそれとも球威と球速を確認したいのから、初球はじっくり見た可能性がある

「(ねえスネ夫。今のバッターは初球は様子見となると……2球目は用心しないといけないよね)」

「(うん。なにせ、明久の召喚獣の投げる球の球威なんてたかが知れているわけだし……そうだったら2球目は外角の少し高めね。ボールだでも良いよ)」

「(わかった!)」

明久は僕のサインに理解して頷いてから安定した投球動作に入る。明久の召喚獣は注文通りのコースに投げ込んでくるも、相手はバットを振ってきた

カキンッ

金属音を立ててボールは上へと上がっていく。明久は一瞬驚いていたが僕はたいして驚かなかった

なぜなら高く上がったボールは伸びることなく、センターほぼ定位置で落下してセンターはそのままキャッチした

「(Eクラスとの時を考えると、ある程度芯に当たっていないと飛ばないのかもしれないな・・・)」

「よし、次は俺の番だな。サモン」

聞き覚えがある声聞こえたのでみるとトサカ頭している先輩・・・とりあえず僕は思い出してみると・・・

「ああ、次は変態先輩一号ですか」

この先輩がしたことを思い出して言う先輩は驚いてこちらに文句いってきた

「まて!?!その不名誉な呼び方はなんだ!?!」

「え、違うのですか?」

「ちげえよ!?!」

「まあいいや。とりあえず、ここもアウトとるよ!」

「聞けよ!?!」

変態先輩のしたことに慈悲はない。とりあえず囁き作戦で向こうを怒らせて、三振だ

とりあえず点数は?

化学

Aクラス

常村勇作 223点

V S

Fクラス

吉井明久 57点

「(さすがAクラスなだけあって大したものだなー)」

1度召喚獣を後方に下げてから座り直し、ミットを構える。さつきより点数が高いし、この変態先輩一号が何をしてくるかかわかったものじゃない

そう思つてバットが届かないくらいの外角の位置に構える

「(とりあえず最初はここね)」

「(オツケー!)」

明久の召喚獣は構えたところから少し外角に離れたところに投げ
てきた

「(・・・ん?)」

あきらかなボールにも関わらず、わざとらしい大振りをしてきた。
取り敢えずこれで1ストライクか――

「つと、手が滑った!」

――なんて考えていたら、変態先輩が振り切ったバットを止めな
いでそのまま回転させ、キャッチャーをやっている自分目掛けてバッ
トを放り投げてきた

「(・・・肝が小さいな)へタレなてをつかうね」

放り投げてきたバットをキャッチャーミットで弾き落とす

「つち」

そして明らかな舌打ちが聞こえたが、この先輩の器の小さいのがよ
くわかったよ

「わるいな。わざとじゃないんだが・・・直撃しなくてなによりだ」

「いやいや、大丈夫ですよ。変態先輩一号のは大したことなかったの
で」

「ああ、そうか・・・(だから俺は変態じゃない!このやろう・・・)」
頭の側面に青筋が浮かんしたのは気のせいではないだろう。こうい
う人は熱くなりすぎて終わるんだよね

「ん?」

僕はちらつと雄二のサインが見えた。・・・正直気が進まないけど
ね・・・

「(明久、焦った声だして投げてね?狙うなら頭・・・仕留めな!)」

「(OK!)いくぞ!」

「来い、吉井!!」

トサカ先輩の構えを見る限り、マウンドに向けて身体が開いてい
る。ふむ・・・構えを見る限り、投手と捕手を両方バットで狙える構

えに見えて仕方がないね

念のために下がろう・・・

明久の召喚獣が振りかぶったのと同時に、自分の召喚獣を構えたまま更に後ろへ下げた。後ろに下がり終わると明久がこつちに向かつてボールを投げていた

「あああ!!」

こつちといつても、実際は打者の頭目掛けて放たれている。打者である変態先輩1号は捕手である僕に目掛けてバットを振ってきた

ーデッドボール!!!

審判のコールと共にボールが落ち、地面に転がる

化学

Aクラス

常村勇作 209点

「明久、すっかりキャッチャーの方向を見て投げなよ? たまたま頭に当たったじゃない?」

「ごめんごめん」

「おい!! 今のは明らかにわざとだろ! 先輩に向かっていい度胸じゃねえか!」

「何言ってやがる! 先に仕掛けてきたのはアンタらの方だろっ! 肝試しでの負けを根に持ちやがって! 器が小せえぞ変態先輩1号!」

「てめえまで俺を変態先輩1号とかいうなあ!! 上等だああ! こういうなりや野球なんて面倒なことやってねえで、直接――」

「望むところだ。元々3年は気に入らなかつたんだよ!」

この2人だけでなく、ベンチや他の選手たちからも声上がる。元々お互いに良い感情を抱いてなかったし、これで敵意が強まるのは仕方がない

乱闘になれば雄二の目論見通りになるかもしれない

しかしこのままでは不味いよね

すると・・・

「はいはい、落ち着きなよ。雄二」

のび太が変態先輩一号と雄二の間にはいつてきた

「のび太お前!」

「学園長がこちらに来るよ」

「っ!!」

のび太の言葉に二人は固まった。そして僕もそちらにみると半キレでこちらに向かってきている学園長がみえた

「まあ、そちらが良い感情持っていないのはしつていますよ?こちらが良い感情持っていなかったのも知ってますしね……。正直、僕は先輩二人には良い感情はありませんよ」

「はあっ!」

あっ……。のび太怒ってるよね……。あれは・・・

「そもそもここはグラウンド。決着をつけるなら乱闘じゃなくて野球で。乱闘するならグラウンドから出て行っていいから」

「っすまん」

雄二も今ののび太が怒ってるの分かったのか素直に引いたが、先輩はご立腹にのび太に怒っていた

「それと先輩も、ラフプレーをするのは結構ですけどやるならやられる覚悟くらい持ってください。その覚悟がないならラフプレーやめたほうがいいですよ?先に仕掛けたのはそちらですしね」

「はあ?ふざけるな!お前らが先に仕掛けてるだろ!」

「そうだそうだ!!お前らが先しているだろ」

変態先輩一号の言葉に変態先輩二号もクレームつけていたが、この人達バカだ……。今ののび太怒ってるのに……

「……うるさいな」

底冷えする低い声でのび太が発するとクレームつけていた先輩二人が固まった

「さっきからラフプレーしてはつきりいって怒らないと思ってました?ん?」

「つてめえ……」

「本当の野球ならデッドボールは痛いのですよ?・・・なんならこの試合限定でフィールドバックありの試合にしませんか?」

「「はあ?!」」

「ふざけるな!?!」

「いやいや、別に先のデッドボール頭に当てられたのが怒ってるわけではないですよ?ええ、怒ってないですよ?ただね、先程から変態先輩のやり方にはフィールドバックありでも別にしても良いかと思いますが?だってそれぐらいの覚悟でラフプレーしてるのですからね?」

「「「いや、怒ってるよ!?!のび太!」」」

「どうですか?学園長?」

のび太がそういってその方向に言うとき雄二も変態先輩一号もその方向に向くと・・・

「良い案だね。そういう風に変えておくから、全員真面目にしっかりと野球をやりな」

それだけ言って校舎の方へと歩き去っていく

さして・・・

「審判、タイムお願いします」

とりあえずタイムとって作戦を練り直そう

空気を変えるのは・・・

僕らは明久を中心に皆集まって話し合いをしていた

「さて、雄二の目論見は外れてしまったがどうするのじゃ？」

「まあ、坂本の目論見は云々としてあいつらも同じ企みだったのかラフプレーしていたのは確かだからな」

「結論としてはもう汚い手をなして正面に行く？」

「そうね、のび太の言う通りね。ラフプレーあんたらも止めたら？」

「次のバッターはだれだったかな??」

「坊主先輩だけど、どうかしたの？」

「明久、あの人は坊主ではないよ。変態先輩二号だよ」

「・・・スネ夫も大概だが、のび太あの二人の先輩にはきつい当たりしてるな？」

「だって、美子さんを痴漢したやつらでしょ？中々許せることではないからね？」

そう許せることではないよ・・・ん。いいことおもいついた♪

1番 サード 須川亮

2番 キャッチャー 骨川スネ夫

3番 ピッチャー 吉井明久

4番 ファースト 坂本雄二

5番 センター野比のび太

6番 セカンド 土屋康太

7番 ショート 木下秀吉

8番 ライト 島田美波

9番 レフト 氷華真理亜

ベンチ 姫路瑞希

ベンチ 剛田武

今こうなってるから・・・

「ファーストの雄二はサードの須川君と交代。で、ピッチャーは明久から姫路に交代。島田はベンチに下がって島田のポジションに明久が代わりにはいってね」

「「ええ!?!」」

僕の提案に皆は驚いていた。特に姫路が驚いていた

「姫路お願いね?」

「ええ!?!でも・・・私は野球をやったことないですし、運動も苦手ですし・・・」

そんな姫路に僕は微笑んだ

「大丈夫だよ。キャッチャーは野球経験者のスネ夫だよ?それに僕やいざとなればジャイアンが待ち構えてるからさ」

「でも・・・のび太くん達運動神経が良いからできるんですよ。私よりも坂本君にピッチャーを任せたほうがいいです」

「いや、僕は運動神経悪いよ?ってそんなのはおいといて・・・雄二に任せたいのは山々だけど、今の空気を変える為には姫路の力が必要なんだよ」

「私ですか・・・?」

そういうとスネ夫も笑いながら声をかけた

「のび太の言う通り!姫路さんは僕の構えたところに思いつきり投げてくれれば良いんだよ。僕は姫路さんを信じて構えて、来たボールをしっかり受け止めるから・・・姫路さんも僕を信じて思いきり投げなよ」

「・・・わかりました!!私投げます!!」

さっきの不安そうな表情とは打って変わり、自信に満ち溢れた表情になっていた

さて、メンバーは以下の通りに変わった

1番 ファースト 須川亮

2番 キャッチャー 骨川スネ夫

3番 ライト 吉井明久

4番 サード 坂本雄二

5番 センター野比のび太

6番 セカンド 土屋康太

7番 ショート 木下秀吉

8番 ピッチャー 姫路瑞希

9番 レフト 氷華真理亜

ベンチ 島田美波

ベンチ 剛田武

頼むよ？ 姫路……

スネ夫 side

とりあえず姫路さんにこの回をどうしたいか説明した

「とりあえず、幸い此方が一点リードしてるから思いきり投げなよ？
僕のことは気にしなくて投げたら良いよ」

「は、はい！」

僕がキャッチャーの方に戻り構え直すと姫路がマウンドで召喚獣
を呼び出し、打者と投手の点数がそれぞれ表示された

化学

Aクラス

夏川俊平 244点

VS

Fクラス

姫路瑞希 437点

「げっ！ そういや、あの女はかなりの点数があつたんだよな……！」
「じゃ、じゃあ、よろしくお願いします」

変態先輩二号のリアクションを全く気にせず構えに入ろうとして
いた

「(あつ、そういうえば細かいの教えていなかったな……) 姫路、ストツ
プ」

「はい？」

1度投げようとする姫路を止めた。点数差は置いといて姫路の点
数から放たれるボールを捕球ミスなんてしたら確実に灰になってし
まうだろうから……

「1球だけ1塁に投げよう。盗塁されないように牽制球入れておこう

？」

「牽制・・・、わかりました。ボールを1塁に投げれば良いんですよね？」

「うん。一塁になげてね？」

「わかりました。それじゃ——」

姫路の召喚獣が腕を振り上げ、投球の構えを取った

「やあーっ！」

「・・・へっ？」

化学

Fクラス

須川亮 DEAD

VS

Fクラス

姫路瑞希 化学 437点

化学

Aクラス

常村勇作 DEAD

VS

Fクラス

姫路瑞希 437点

変態先輩一号・・・今は常村先輩とあえて言おう。その、ランナーとしていた常村先輩とファーストを守っていた須川に瑞希の放ったボールが直撃して、二人の召喚獣の上半身が綺麗に消し飛び、下半身だけが残った

さて諸君、ここでよく考えてほしい。フィードバックがあると言うことはダメージ喰らうとかなり痛いよね

つまりその被害を受けた二人は・・・

「ぎいやあああーっ！身体がああああーっ！」

そこから遅れて2人の断末魔が上がり、フィードバックの痛みにのたうち回っていた

「あ……！ご、ごめんなさいっ！私、どれくらいの力加減で投げた
ら良いのか全然わからなくて！」

姫路が慌てながら頭を下げているけれど、被害を食らった本人たち
はそれぞれではないだろう

「負傷退場者の交代要員を出してください」

何事もなかったかのように審判役の先生が交代を促す

……のび太が密かに先輩がダメージ負って悪い顔になっていた
のは気のせいなはず……気のせいだよね??

とりあえずアワアワしてる姫路を落ち着かせようと決めた僕はマ
ウンドに向かった

……ごめん。僕も変態先輩一号が苦しむのに喜ぶ自分がいる……

マウン드의最強の狩人

苦しんでいる須川と変態先輩一号が搬送されるのを横目でみて、僕はとりあえず御愁傷様としか思って仕方がなかった。3―Aは代走の先輩を1人だし、2―Fは負傷退場した須川に代わりジャイアンがはいることになった

審判にはタイムの許可を貰って姫路に駆け寄った

「うう……失敗しちゃいました……」

あの断末魔とのたうち回り具合から見ても失敗とかそういう単語で済むような出来事ではないだろうけど……それに1撃で2人も葬るなって本人も僕らも想像していなかったのだからね

「(とりあえずフォローしよう) 今のは気にしなくて良いよ」

「でも……」

「初めてなんだから失敗して当然さ。だから、今の失敗を修正してもう1度挑戦しよう」

「でもこのままだと骨川君にも迷惑が……」

「僕はキャッチャー経験してるから大丈夫さ。別に迷惑なんてかけて良いんだよ。姫路が何をしようが、僕がフォローするよ。それでも信用してない?」

「いえ、そんなことはないですっ!」

「じゃあ、できるね?」

「はいっ!」

良い返事が返ってきたところで自分の持ち場に戻る……気合いいれて取ろう!!

僕が戻ると試合は再開した

「行きます、骨川君!」

「さあ来い!」

先ほどと同じように腕を思いっきり振り上げ――

「え、えいっ!」

――可愛らしい掛け声でボールを力一杯放った

「……え？」

ボールの行方を視線を動かして追った

可愛らしい掛け声から放たれた全く可愛らしくないボールは目にも止まらぬ速さでミットに収まることはなく、ネクストサークルで待機していた3―Aの4番打者に直撃した

「イギャアアアアアアアアアア!!」

苦しむ断末の叫びを僕らは聞いた。その先輩の初期の点数も不明なまま、4番打者は葬られてしまった

「し、審判っ！あれは危険球なんじゃないのかっ!?退場モノだろうっ!」
バッテリーボックスにいる変態先輩二号が血相を変えて主審に抗議をする

「変態先輩二号さん。スポーツに事故やアクシデントは付き物ですよ。でも、瑞希のあの姿を見てわざとだと言えますか？」

「ほ、本当にぐめんなさいっ！私、ピッチャーとか初めてで緊張しちゃって……」

「き、きにするな……がぶっ」

瑞希は3―Aのベンチまで駆け寄り、深々と頭を下げている。普通にあれを見てわざとだと思うのはよっほどのひねくれ者だと思う

「ふざけるな!?故意じゃないとしても許されないことつてもんがあるだろうがっ!」

「許されないこと……ね……」

僕は胸ぐら掴んでいらんでくる先輩に対して

「ついてえ……!?!」

「許されないことはそちらが先にしていたではないですか？」

「こいつ……!」

「そもそも、のび太が怒っていて僕らが怒ってないでも……?変態先輩Wは明久達にひどいことをいったことも聞いているし……人様の知り合いに痴漢していたことも知ってる」

「ぐぐ……」

「何より……僕の親友にデッドボール当てたときのヘラヘラした二人

がそんな言葉をいっても説得力はないんですよ．．．？」

それだけを言ってからパツと手を離す

「で、先生。苦手でも努力して一生懸命クラス行事に参加する女子生徒と、このどうしようもない禿げた男子生徒。先生ならどっちを応援しますか？」

「プレイツ！」

「審判っ!？」

審判を任されている先生は、即決で試合続行の合図を出した

「うう．．．難しいです。もっと力を込めたら上手くいくんでしょうか．．．？」

マウンドから姫路の落ち込んだ声が聞こえた。制球力はないのは仕方がない

「今度こそ骨川君のところへっ!」

「ひいいーっ!」

バットを放り投げて頭を抱えてうずくまるハゲ先輩に対して、こちら動じずにキャッチャーミットを構える

「よつと」

ーボール!

その剛速球は変態先輩二号の頭上を通過。そのボールに飛びついてキャッチャーミットに収めた

「おい!?! あんなピッチャー交代させろ!？」

「いやいや、なにいつてるのですか? きちんとキャッチャーミットに収まっているでしょう?」

「そういう問題じゃねえだろっ! 坂本っ!」

僕では話にならないと判断したのか、クラス代表の坂本に交渉相手を変更したが．．．坂本はあくどい顔で笑っていた

「何を言うんだ先輩。徐々に狙いがシャープになってきてるだろ。その証拠がキャッチャーミットに収まっているボールだろ」

「確かにキャッチャーミットに収まっているけれど、狙いがキャッチャーミットだとは思えないだろっ!」

そんなやり取りを無視して姫路にボールを返す

「ボール事態は良いよ?でも、ちゃんとミットを狙おうね。こっちの獲物を狙ってもいいけど、本命の狙いはミットだからね」

「おい!?獲物ってなんだ?!今、何の躊躇いもなく人のことを獲物って言っただろっ!?!」

「言っていないですよ。獲物は大人しくそこで突っ立ててください」

「今まさに言ってるからなっ!明らかに俺だよな!?!」

「獲物はおとなしく立ってください。そしてうるさいです。変態獲物先輩二号」

「お前さらりと毒吐くなよ!?!最初から狙っていたな!?!」

「僕が狙っていたわけではないけどね・・・」

「そんなことよりきますよ?」

「!?!」

「行きます!」

「思いきり投げなよ!」

大きく腕を振りかぶり、視線をミットから離さない。根拠はないのだけれど、どこかいけそうな予感はある

そのまま腕を思いつきり振り切ろうとした・・・時だった

「へくち」

「・・・え?」

姫路の可愛らしいくしゃみが聞こえたと共に召喚獣はさつきまでまともだったフォームを急に崩した

そこから放たれたボールは、全力で、大威力のありそうな剛速球は・・・

ゴオオン!!

そんな剛速球が変態先輩二号の頭部に直撃した

「あががが・・・」

化学

Aクラス

夏川俊平 DEAD

VS

Fクラス

姫路瑞希 437点

まあそうなるよね……

さて今回の召喚獣野球大会のルールに「登録メンバー以外の介入は一切認めない」というのがあった。つまり現在の3―Aには交代要員がない

審判は、交代要員がないのなら補充試験を受けてから試合に加わることを許可したけれど、それはただ単に瑞希のデットボールを喰らうためだけに試験を受けて来いと言っているようなものだ

つまり……

「3―A、ギブアップします!!!」

こうなるのよね……まあ、因果応報だから変態先輩Wは同情しないけどね

まあ姫路の今回はきつと「マウンドの天然狩人」として伝説になるだろうね……

ランチタイムと・・・

教師との試合の前にお昼ごはんタイムで僕は現在、グラウンドから近い場所でジャイアンとスネ夫と僕の三人で話していた

「いよいよ、次の試合は西村先生をはじめとする最強の先生方が登場か・・・」

「ある意味今までで苦戦しそうだね・・・」

「だな。とにかく、どう戦っていかかが重要だな」

「しかし、ここまで勝てたのはある意味奇跡だよな？解くに先ほどの試合はね・・・」

僕は先ほどの3ーAの試合の事を思い出した。もしも次の試合フールドバックあつたら・・・

「はあ・・・」

確実にたまったものではないよね・・・

「のび太くんー！」

「この声は・・・美子さん！」

僕らがため息ついていると美子さんが来たのだ。

「お待たせ。剛田君と骨川君はあちらの方に待っているから読んできてと言われたの」

「おー、ありがとう。のび太、あとでな！」

「助かるよー！じゃあ二人の時間を楽しみなよ」

「あっうん！ありがとう！」

僕と美子さんの時間をくれて二人は別の場所に移動した。本当にありがたい友人だよ・・・

「さて、のび太君食べましょう♪」

「うん♪・・・ところで、美子さん。昨日連絡された通りに弁当は持ってきていないけど何を作ってくれたの？」

「あ、うんー！とりあえず座りましょう？」

僕は座って美子さんが積み重なっていた弁当箱を出してくれた

「今回の初めて作ったのあるから美味しくないかもしれないけど・・・食べてみない？」

「ほんと!?今回は何を作ってくれたの?」

「えーとね・・・お握りとか、卵焼きとかポテトサラダとか・・・あつ、味見はしたからね?」

「大丈夫だよ!美子さんの作ってくれたの美味しいはず!」

真つ赤にしながらいふ美子さんが可愛い・・・そして作ってくれたのはおいしいはず!!そう思つて口いれると・・・
「っ!」

「の、のび太くん!?お、美味しくなかったの?!」

「お・・・」

「お?」

「美味しいiiiiiiii!!なにこれえええ!!」

「喜んでくれて良かった・・・」

僕は美子さんの作ってくれたのを夢中に食べていた。時には美子さんからあーんとしてくれて食べたりもした・・・

美味しいな・・・

「次の相手は鉄人・・・西村先生をはじめとする先生達が相手ですよ?勝てるの?」

「うーん・・・はつきり言えば厳しいね・・・今の戦力は・・・ね、」

「そうね・・・」

そう、合宿の時の教師との戦いでも点数は高かったのは覚えてる

「とにかくこの美子さんの弁当を食べた今!!絶対に勝てるよ!」

「もう煽てもなにもないよ／／／／」

こうしてたくさん話ながら食べていると時間が迫ってきた。楽しい時間はあつという間だな・・・

「あ、そろそろ会場にいかないと・・・美子さんは?」

「私は時間があるから応援にいくわ。一緒に歩きましょう?」
「うん」

「で、そ、その・・・手を繋がない／／／／/?」

「え／／／／・・・いいよ／／／」

僕は美子さんが手を握りたいという要求に答えて手を握って歩い

たが・・・お互いに顔真っ赤だったのはここだけの話だ・・・

「あ！のび太と三上さん・・・？」

「明久達はこんなところにいたんだ」

「どうも。それと宏美には確りとこちらが宥めておいたからもう報復はないわよ」

「そ、そっか・・・よかった・・・」

「おーい、のび太達もいたのか」

僕と美子さんがそう話すと今度はジャイアンと真理亜さん、スネ夫が合流してきたがスネ夫がぐったりしていたので小さい声でどうしたのか？って聞くと・・・

「・・・イチャイチャにげっそりだよ。苦いコーヒーも甘く感じそうだよ・・・」

「そ、そっか・・・」

ぼくらが離れたあとにいったい何があったのだろ・・・

「あれ？霧島さん？」

「ん？本当だ・・・」

これまた偶然にも霧島さんがフラツと現れた。珍しく雄二たちとはいなかったんだ・・・

なんかあったのかな？

「お、本当だな。おい翔子、どうかしたのか？」

「あっ、雄二・・・」

「？いつもと様子がおかしい・・・」

美子さんのいう通り、霧島さんはいつもならもっとう・・・確りと反応するのにどうしたんだろう・・・？

「・・・野球、負けちゃった」

「ああ、そうらしいな。代わりに俺たちが勝ったから安心しろ。仇は討ってやったからな」

「(・・・あれを勝ったと言えるのかは怪しいけどね・・・)」

「でも、私の没収品、返してもらえない・・・」

そう、悲しそうに呟いた。なにか大事なものであったのかな・・・

？

「没収品っておまえな・・・」

「・・・結婚式まで、大事に保管しておくつもりだったのに・・・」
「バカ言うな。あんなもん、没収されなくても、見つけたら俺が代わりに捨ててやる」

まあ、いつもの感じに雄二が答えた。すると霧島さんの反応は・・・
「・・・え？」

霧島さんは驚いた表情で雄二を見るも、雄二はそんな霧島さんの様子を気にも止めていない

「いや、＼・・・え？」じゃないだろ。あんな物を没収された程度でそこまでショックを受けるなよ」

「・・・あんなものって・・・」

「(今の霧島さんの反応おかしかったよね?)」

「(そうね・・・)」

「そうやってつまらない物の没収で凹むくらいなら、常夏コンビ如きに負けたことをだな——」

雄二が続きをなにか言おうとしていたその瞬間・・・

パシツツ!!

乾いた平手打ちの音が響いた

「・・・はっ？」

「つまらない物なんかじゃ、ない・・・」

霧島さんは涙を溜めて唇を噛んでいた

「雄二だけには、そんなことを言っただけじゃ欲しくなかった！」

「あつ、翔子ちゃん！」

「のび太君！追いかけていくわね」

「試合までに私達も戻りますからー」

珍しいくらいの大声を出し、そのまま背中を向けて走り去ってしまった。それを見た姫路や美子さん、真理亜さんが霧島さんの後を追うようにして走り出した

「・・・」

叩かれた雄二は呆然としていたが、直ぐに不機嫌な顔になった・・・

これは・・・一番最悪なケースかもしれない・・・
霧島さんが没収されたものは一体なんだろう・・・？

ランチタイムのあと・・・

昼食の時間も終わり、召喚野球大会の決勝が始まるうとしていたが・・・

「・・・ツチ」

不機嫌さ全開をさらけ出す雄二がいた。美子さんが霧島さんの相手をしてくれるため姫路達に戻ってきたが、どうやらあまりよくなかったみたいだ

そんな雄二を見て、明久は呆れていた

「まったく・・・雄二が怒るのは仕方がないけど、それとこれとは話が別だからね?」

「うるせえ・・・黙ってろ」

かなり目付き悪く明久を睨んでいたが明久は呆れながらこちらに戻って話していた

「全く・・・頑固なんだから・・・」

「・・・とりあえず、どうするんだ?」

「・・・雄二、とりあえず打順は決めて良いかな?」

「・・・勝手にしろ」

はあ・・・ここまで不機嫌になるとは・・・はつきり言つてここまで引きずるとは思わなかったよ・・・

「とりあえず、ジャイアン。ポジションを決めよう?」

「おう、そうだな」

とりあえず話した結果の打順はというと・・・

1番 須川サード

2番 スネ夫レフト

3番 木下 ファースト

4番 島田 セカンド

5番 のび太センター

6番 真理亜さん ショート

7番 吉井 ピッチャー

8番 坂本 キャッチャー

となった。でも、召喚獣の点数での先生方はきつと化物クラスなはず・・・今の雄二の状態での采配は大丈夫かな・・・

「とにかくやるしかないな！」

「だね！」

「それと・・・多分だけど、霧島さんの明久や雄二が考えてるものが没収されてしまったと思えないな」

僕の言葉に明久が??となって質問してきた

「それどういうことさ?のび太」

「乙女心わかっていない明久が言ってもわからないも思うよ?」

「そうかそうか・・・はあ!?そのび太に言われたくないよ!」

「なんで?」

「のび太はきつと何人も女たぶらかしてそうから!!しかも鈍感そう!!」

僕のどこか鈍感なのさ・・・?そう思いながらも口挟むのはやめた

「明久・・・結論いうよ」

「?」

「二明久と雄二は乙女心がわかっていない!」

「それ絶対に君らに言われたくない!!!」

僕らの力強い言葉に明久は無言を言わずに突っ込みをいれてきた。いや、君は本当に天然たらしなのだから・・・雄二は雄二であれだけどね

《これより、生徒・教師交流野球大会 決勝戦を始めます。皆さん、整列してください》

「あれ?そんなタイトルだった?」

「さあ?どちらにしても、いこうぜいこうぜ?」

「おうー!」

明久の話を聞いていると時間がかかりそうだった為、仕方がなく話を切ってグラウンドの中央に向かうことにした。少し遠くを見ると、教師陣も三塁側から歩いてきた

……いろんな意味で緊張してきたなあ。特に西村先生が怖いんだけど……

教師陣と向かい合わせになるように並んだ

あとは、審判からのコールを待つのみ

「プレイボー——」「あつ、すいません。少し良いですか?」……?

「どうした?野比」

審判が合図だすまえに僕はひとつ確認したいことかあった

「いえ、可能ならお願いなのですが……」

「……まさか手加減しろとでもいうのではないだろうか?」

「いえ、それは勝負では失礼なので……。ではなくって、ひとつ提案でして」

僕の提案の言葉に他の先生も怪訝な顔になっていた。もちろんFクラスも……

「決勝戦ぐらい……召喚獣での野球なしで……。普通の人との試合しませんか?」

「……はあああああ?!」

僕の提案にみんなが驚いてた。ジャイアンとスネ夫はなにか気づいたみたいだけどね……

さて、この提案が通るかどうかだ……。……ってかこの提案実はだしたのは雄二なんだけど……。今の雄二には期待できないな……。どちらにしても……。この試合終わったら存分に霧島さんに謝ってもらえるようにしておこう……

決勝戦開始

様々な思いが交えながらも決勝戦が始まろうとしていたが・・・

「決勝戦ぐらい・・・召喚獣ではなく人対人で試合しませんか？」

「「「はあああああ?!」」」

僕の言葉にジャイアンとスネ夫以外は皆は大声挙げていた

「・・・それはどういうことだ？野比よ・・・」

「(めつちや睨んでる・・・)この大会で召喚獣を使つての野球・・・これは確かに楽しいですよ。ですが、この大会の決勝戦ぐらい人対人でやりたいですよ」

「・・・何故だ？」

「1つは先生たちの方が明らかに僕らよりも召喚獣の点数が高い。何せ先生達は生徒より点数が高いのですから」

「・・・続ける」

「そうなれば生徒同士の試合よりも明らかに不利ですから、どうせなら人対人で本気の勝負したいのですよ」

僕の提案に先生達何人かは考えていたが、西村先生は・・・

「・・・ふむ。確かにそうだな。俺としてはそれでもいいが・・・」

「が？」

「学園長がお許しになると思われぬ」

「その通りさね」

西村先生が苦渋の顔で考えているとそれをうなづくように答えてきたのは・・・

「学園長・・・」

「野比の提案だが残念だけど破棄にさせてもらう」

「そうですか・・・」

「そもそも召喚獣なしで純粹にぶつかった場合決勝まで来たクラスもあるだろう。それを考えたら緊急事態を除いてルールを曲げることはしないよ」

「(緊急事態ね・・・)わかりました。こちらの勝手な提案に申し訳ございませんでした」

僕は謝罪すると学園長は戻っていった。そして審判が・・・
「それでは改めて・・・教師対2ーFの決勝戦始めます。・・・プレイボール!!!」

決勝戦の開幕の合図をしたのだ。仕方がない・・・目論見が外れたのは仕方がない

「で、結局召喚獣で試合をすることになったの？」

「残念ながらね・・・」

「お主らしくない考えじゃのう」

「いやー元々この提案出したのは雄二なんだけどね・・・今の雄二は期待できないよ」

「なるほどね・・・けっきりのび太が気狂ったのかと思ったよ」

「・・・君に言われたくないよ」

とにかく、この戦力でどうやって先生達相手に勝つかだね・・・グラウンドを見ると、すでに教師陣の先頭打者が打席にスタンバイしていた

「さて、勝ちに行くしかないぞ！明久と雄二・・・頼むぞ！」

「任せなよ！」

「・・・ああ」

雄二の反応はやはり不機嫌さを出していたが、とにかくなんとか二人で頼むよ・・・

雄二side

ツチ！なんで俺が殴られないといけないんだよ・・・！ああもう、イライラする!!もうアイツの事を考えるのは辞めよう!!

兎に角、試合に集中するか！

「さて遅れてすいませんね・・・」

「いいですよ。お話終わったのでしたら」

「・・・先生は野球やるのは初めてですか？」

「いえいえ・・・やるの久しぶりでしてね・・・。大体20年ぶりに野球しますね」

「そうですか・・・」

さて、先生方の点数とやらは？

化学

布施文博501点

V S

Fクラス

吉井明久57点

ツチ、点数はいつみてもチートだな。だが、向こうが初の召喚獣での野球となる訳だから・・・さて、どう動くのか気になるな、

「(とりあえず、明久。外角低めの遅い球だ)」

「(オツケー)」

教師から離れた場所にミットを構える。明久の召喚獣は小さく頷いてから、1球目を振りかぶる

ー ストライク!

最初は様子見か・・・

慎重になつているのか・・・このまま簡単にストライクを取りにいても良いのだけれど、まだこつちも慎重にいくか

「内角で胸元を挟る感じのボール・・・遅い球)」

今度はストライクゾーンから少し外した場所に構えた

ー ボール!!

挟るまではいかなかったけれど、それでも注文通り内角に来た。先生の方は少し動いた。少し召喚獣が仰け反った・・・のかな？

これで1ストライク1ボール・・・

「(内角低めの速球で)！」

「オツケー」

明久が投げた球は・・・

「おい!? (すっぱ抜けかよ!?)」

力みすぎたのか、ボールはど真ん中の棒球・・・あのやろう!?

「っ!?!とと、と・・・」

思いの外絶好球・・・絶好球過ぎてビックリしたのか、フォーム

を崩してボールの下にバットが当たった

ーアアウトッ！

ボールは勢いよく宙に上がるも、伸びることなくレフトフライとなる

「ラッキーだな・・・」

とりあえずワンアウトだが・・・心臓に悪すぎる

ー雄二にだけは言っただけはほしくなかった!!

ツチ！なんでアイツの泣き顔が思い浮かぶんだよ・・・ああもう！
知るかよ！

俺は意識を試合に向けた・・・

ルールを知らないにも……

センターで僕は大きいため息つきながら安心していた。とりあえず何とか一人目は押さええたのは良かったよ……。明久のすっぱぬけは驚いたけど、次はだれだろう？そう思っている……

「次は僕ですね。サモン！」

「あの先生は1回戦で審判してくれた先生だ）点数は……？」

化学

現国

寺井伸介 217点

V S

Fクラス

吉井明久 57点

……相変わらず明久の点数と教師の点数比べると酷いね。しかし……現国の先生だったよね？寺井先生はなんで点数高いのさ……（なのにAクラスと大差無い点数か……）スネ夫、ライトの場合は僕がカバーいくけどレフトは要らないでしょ？」

「まあね。いや、可能なら僕がのび太をカバーするよ。守備下手くそだからね」

「……それは言わない約束だよ。スネ夫」

僕らがそう話していると明久が雄二の出した場所に思いきり投げた。球の脅威はそんなにないけどコントロールはいいよねー

カン！

鈍く響いた打球は低い軌道で地面を抉る勢いで1, 2塁間を抜けていった

「初球にうつんだ……」

シングルで済んだから良かったものの、もう少し警戒して投げても良かったのでは……？

次は誰だ？と思つてると……教師陣の3番は学年主任の高橋

先生が登場した

「……確か、高橋先生の点数はとんでもなかったよね？ほら合宿の」

「……そうですね。高橋先生は凄すぎましたよね。下手したら……」
「いくらなんでもそんなにとんでもない点数な訳ないでしょ？」

スネ夫がそういった瞬間、点数が表示されたが……

化学

学年主任

高橋洋子 801点

V S

Fクラス

吉井明久 57点

「「……ええ……」」

「「ぶほおー」」

あまりの点数の高さにうちの守備陣が一斉に吹き出した総合科目で7000後半を叩きだしてくるような人だ。それを前提で予想はしていたけれど……これは反則以外なんでもない

んん？高橋先生のバットの持ち方逆な気が……

「高橋先生、バットの持ち方が逆ですよ」

ベンチにいた先生が声かけると高橋先生は納得した顔で持ち直していた

「……下手なボール球はダメだよ？明久」

明久がセツトポジションに入った時だった

「ええと、こうでしたか」

高橋先生がバントの構えを取ったが……

ーストライク！

ボールはストライクゾーンから外れていたため、バットに当たるところなくミットへと入った

「……外野陣全員集中しておこう？明久だから打れたときのこともかんがえないと」

「・・・了解です」

僕らが構えた瞬間・・・

ゴン！と硬い音が響く

「プッシュバント・・・!?」

「サード！須川君取れるよ！」

「おおうよ！もらっー」

きっちり捌けばアウトは確実なはず！そう思っていると・・・

「ぐほお!!」

「「「なあああにいいい!!」」」

ボールと一緒に召喚獣が吹っ飛んだ。たかがプッシュバントなのにスイングと同等の威力が出るのはおかしい

「スネ夫！カバーを!!」

「任せて！」

「高橋先生。あれなら2塁まで行けます！」

教師陣のベンチから指示が飛んできた。ボールはレフト前まで転がっているが、これだと2、3塁。最悪寺井先生がホームまで戻ってきてしまう！

「2塁ですか。わかりました」

冷静に領いた直後・・・高橋先生は1直線で2塁まで召喚獣を走らせた

「「「・・・へ?」」」

1、2塁の間にいるランナーの寺井先生含めて、全員目が点になった

「「「・・・審判。アウトコールを」

「「「・・・バッター、アウト」

「・・・ルールを知らないにも程があるよ

「スネ夫、セカンドに中継」

「うん」

レフトからボールはセカンドにいた島田にボールが渡る

「島田、ランナータッチ」

「えつと・・・タツチ?」

「・・・え?」

呆気を取られて1、2墨間にいた寺井先生をタツチアウトにし、これ
れで3アウト

・・・須川君は戦死したとだけ伝えておこう・・・
何でこんなに盛り上がらないのだろう・・・?

鉄人の教育

1回の裏、Fクラスの攻撃は変わって入ったジャイアンを含め3者3振であつという間に終了した。・・・攻撃があつさり終わっても引き摺らないで2回も頑張ろう

次の科目は世界史であり、そのまま明久がいつでも良かったが点数差が激しいのでポジション変更した。ピッチャーを雄二に変更してキャッチャーをジャイアンにした。明久だとリード下手くそだからね

「ねえ、ジャイアン」

「?なんだのび太」

「今の雄二は冷静ではないから、うまいことリードしていてね?」

「任せろ!と言いたいが・・・」

僕とジャイアンはそれぞれの守備をつく前にバッターボックス前に気合いいれた人がいた・・・

この学園の生徒の恐らく99%はその人を最も恐れている先生であろう人・・・鍛えられた肉体と鬼と恐れられて、別名「鉄人」と言われてる男。名を・・・西村宗二先生だ・・・

「・・・(ゴゴゴツ)」

殺気を漂いながら待ち構えているのは最早恐ろしいとしか言えない・・・

「はあ・・・」

前途多難と言うのはこう言うことだろう・・・

「とにかく頼むね?」

「おう、まかせろ!」

こうして僕らはそれぞれの守備についた・・・西村先生の打席ならホームランもあり得るから・・・守備は下がり目に指示だしておこう

ジャイアン side

俺はキャッチャーとして、この回は守備に着いたが・・・

「(いきなり西村先生はきついな・・・) 4番が西村先生なのは・・・

パワーがあるから4番なんですかね?」

「・・・それは俺が鍛えすぎてるからか?」

「さあ・・・?」

そう軽いいながらも点数を見ると・・・

世界史

補習教師

西村宗一 741点

V S

Fクラス

坂本雄二 205点

・・・これは厳しいな。どうする?という意味も込めて雄二に視線を送った

「勝負して打たれるのがオチだから敬遠だ!」

「だな・・・」

考えることは同じで、そもそも今は2回でこっちはまだ0点。それを考えればこんな怪物と勝負をするなんてまだ早い・・・

そう判断が合意した俺は敬遠するためにはしつこに立った。すると、坂本は頷きもせず、ミットの位置を見てから投げ込んでくる・・・

ボールはストライクゾーンから僅か1個分ほどしか離れていない場所に来たので俺は慌ててとった

ーボール!

「あいつ俺がたっているのしつかり見て投げているのか?」

西村先生はピクリとも動かない。ボールとわかっているからなのかな?それでも、バットを動かさないのは少し怖い

「・・・これは、坂本の指示か?それとも剛田の指示か?」

「・・・俺達は先生相手にむやみに勝負するのはよくないと判断して敬遠の選択しました」

坂本にそつと返球してからさつきと同じ位置にミットを構える。今度はしつかりと投げろよ?

「そうか・・・」

「なんだ・・・この嫌な胸騒ぎは・・・」

「お前や野比、骨川、氷華等はともかく、あいつらは勉強が苦手でもこういったことはわかっていると思っていたが……まだまだ教育が必要ということか」

嫌な胸騒ぎは収まらず、警戒していた。そんな会話をよそに、坂本の投げたボールはミットに向かってきていたと思いきや……

「お前達に教師として一つ言っておく……やるなら何事も徹底的にやれ!!!」

「なっ!? (抜け球!?しかもど真ん中に!)」

ガキン!という豪快な音と共にボールは遥か彼方へと消えていつてしまった

「……ホームラン!!!」

「……」

やられた……そして、もつとこの嫌な予感を察してあいつに厳しく言えばよかった……

「くそおおお! (ダントツ!!)」

鉄人の召喚獣が淡々と各ベースを回るのをみて俺は悔しくって地面に思いきり叩いた

徹底的……

普段の坂本ならばつきりとボールにしてくるはず。手を抜いているのかどうか知らないけれど、どこかおかしい……。とにかくあの球は先生が見逃すはずもなく打つたのは流石としか言いようがない……

「とにかく切り替えるぞ!!いいな!」

何としても抑えないと!!その気持ち一心で挑んだ。そのあとの大島先生や6番をアウトに取ったが7、8番に連打を浴びた。しかし、9番をファーストゴロに抑えて2回の裏へといった

最悪の展開だ……リードされるのは……

知らないものは仕方がない・・・

さて、この回は結局は島田と僕と真理亜さんは鉄人の前では成す術もなく三者連続三振だった・・・。因みに須川は高橋先生の時のプッシュバントで戦死した為ジャイアンが入ったことを伝えておこう
「現在一点差だけど・・・まずはここできっちり押さえよう？」

「「「おお・・・」」」

「ダメですわね。西村先生達の前では何一つ打つこともランナー？を出すこともできなかつたので士気が低いですわね・・・」

「寧ろ今の段階ではよく一点で押さえれると思うけどな・・・」

デットボールやフォアボールでの出塁すらない・・・もう、ほぼサンドバック状態と言っても過言ではない。3回から世界史から物理へと切り替わった。教師陣は打者1巡し、この回の先頭打者は布施先生からとなった

「「ここできっちり押さえておこうよ」

そう話したのだが・・・

キーン！

コオン！

「「・・・」」

1番の布施先生がシングルヒットで出塁。2番の寺井先生にはセーフティバントを決められ、現在ノーアウト、ランナーは1、2塁
そしてノーアウトで・・・

「宜しくお願いします」

ここで敬遠したら西村先生が出てくる・・・。ジャイアンと雄二・・・
どうするのさ？

「（ここは押さえろぞ！坂本!!）」

「（当然だ）」

「今度はうまくやります」

雄二とジャイアンがアイコンタクトとっている間に高橋先生の召喚獣はバットを短く持つて、スイングとバントの中間の構えを取る

「・・・あれはなんですか？」

「・・・侍打法かな・・・？」

「高橋先生にあの打法を教えたのは誰だろ？のび太、姫路さんはもう少しだけ前いこう」

スネ夫の指示に僕と姫路はゆっくりと前へ歩いた。とにかくここは失点をおさえないと!!

そう思っていると雄二が外角のほうにきつちりと投げたが・・・

「まあ、予想通りですね」

「「え？」」

高橋先生の召喚獣が腕を思いっきり伸ばして打ってきた
キーン!!

野球に関しては完全に素人だから油断していた。低めを要求したから打球は上がらず、低い軌道でセンター前まで飛んでいく

「高橋先生！今度はきちんと1塁から順に回ってください」

「わかっています。同じミスは2度と犯しません」

先生の召喚獣が得点に比例した速さで1塁を回り、2塁、3塁と回っていく・・・回っていく

「「・・・」」

「ほいっと・・・主審。アウトコールお願いします」

「高橋先生・・・アウト、です・・・」

僕はジャイアンの方に投げるとジャイアンは審判にコールを促した

「なぜですか」

「「・・・」」

見ている全員が言葉を失っている

野球のルールの一つでは、後位の走者がアウトになっていない前位の走者に先んじた場合、後位の走者がアウトになる”

このルールはあんまり知らなくても仕方がないのだろう。何せ、普通に考えて後ろを走っている走者が前を走る走者を抜くなんてでき

ないのだろうかし……だけど今現に目の前でそれをした人がいるよ……

「真理亜さんと島田。連携で」

「了解ですわ。はいつと島田さん」

「え？」

「オツケー。それじゃ、こつちもアウトです」

「あ」

「……3アウト。チェンジ」

再び高橋先生の奇行で呆然と立ち尽くしていたランナー2人を
タッチアウトにして3回表が終わった

なんかスッキリしない……

喧嘩と理由

三回の裏になり、僕らはそれぞれの意見言い合いながらはなしていた

「ここで何とかして1点返したいね」

「そうだね。この回の打順ならできそうだし」

「この回って確かアキ、坂本、瑞希の順番よね？」

「傍から見たら下位にはなく完全にクリーンナップの打順じゃな」

明久はともかく、雄二は本来の調子ではないし姫路は野球をしたことがないから厳しいよね・・・

「とにかく明久たちは頑張って一番のジャイアンに繋げてね！」

「うん！」

「はい！」

「・・・」

相変わらず雄二の反応はひどい・・・というよりもイライラしているのが明らかに伝わるよ・・・

化学

化学教師

布施文博 269点

VS

Fクラス

吉井明久 77点

相手投手は布施先生か・・・。明久とにかくなんでもいいから出塁してね!!そう思っていると・・・

「ぐぼお?!」

「「おおおお?」」

先生の投げた球が運悪く明久の体に当たった・・・消滅してないよね?!

化学

化学教師

布施文博 269点

V S

Fクラス

吉井明久 47点

耐えていた……でも本人は体を丸めていた。まあいたいよね……
とりあえず……完全試合はなくなったのとノーアウト、ランナー
1塁……。これであとは雄二が打ってくれば1点返せる

「……よし……いくか」

「雄二!!」

「あ……?なんだ……」

「うるさいと思わんばかりの目付き……やっぱいい」

「ケツ……」

雄二がバッターボックスをはいるの見送った僕は今の雄二は明らかに試合に影響及ぼしてる……

「(明久、先生が投げるモーションに入ったら二塁に走ってね?)」

「(え?でも……)」

「(そこまで本格的にできると思えないからね。わかった?)」

「(……OK!)」

さて、アドバイス雄二の点数と運動能力、身体能力なら打ち返してくれるだろうし、こっちはチャンスを広げるだけだ。布施先生の召喚獣が投球姿勢に入るその瞬間!

「なっ!? (走った!?)」

走った姿を見て驚いたのか、放たれたボールはど真ん中の絶好球

「(よし!雄二ならうてる!!) つえ?」

「……っ」

雄二はその球を見てピクツと動き……そのまま見送った

ーストライク!

でも……どうしてさっきの絶好球を見逃したのだろうか?

そう考えてると先生は投げるモーションに入り明久が三塁に走った

「つちよ!?まだ指示だしてないの!?!」

「こ、の……っ!」

一瞬だけ身体を震わせてから雄二はバットを動かした。でも、打つかどうか判断が遅れたため中途半端なスイングになり、ボールの下に当たったのでピッチャーフライとなり、布施先生はボールを素早く2塁に送球した

しかもボールは高く飛んでいないのと明久が走っていた為2塁に戻る時間がなかった

ツーアウトでノーランか・・・最悪だな

「くそっ！」

ベンチに戻る時に雄二が悔しそうに吠えた。そんならしくない雄二を見て・・・

「坂本・・・」

「なんだ・・・剛田」

「はつきりいって試合でそんなのは迷惑だ。勝つ気がないなら下がれ・・・そして霧島さんに謝ってこい」

「なんだと・・・！」

ジャイアンの言葉にイラついた雄二は胸ぐらをつかんでジャイアンに怒鳴った

「今のもう一回いってみろ！剛田！」

「ああ・・・何度でもいってやるよ。勝つ気がないなら下がれって言ってるんだよ！そんで謝ってこいと言ってるんだよ！」

「何で俺が謝らないといけないんだよ！だいたい、どうして俺が、本人の同意もない紙切れ1枚没収された程度であそこまで怒られなきゃいけないんだ！ああ?！」

「本当にそう思ってるのか・・・お前！」

ジャイアンと雄二がそれぞれ胸ぐらをつかんで睨んでると・・・
「紙切れ、ですか？」

打席に向かっていた姫路だがアウトになり戻って首をかしげている。
た。

「なんだ姫路。人の大事なものを紙切れ扱いするなどでも言いたいの

か？」

「何お前人に八つ当たりしてるんだよ！坂本!!」

「黙れ！」

ああもうーこの二人は……！止めようと思つてると……

「いえ、そうじゃなくて……私の聞いた話とは違うと思つたので」「っ!？」

姫路の言葉に雄二は驚いていた。もしかつて……やつぱり明久や雄二が何を思つていたのかは大体検討ついたけど……鈍感だな……

「姫路さん、それつてどういうこと？」

「えつと……私は、翔子ちゃんが没収されたのは如月ハイランドで坂本君から貰つたヴェールだつて聞いたんですけど」

「……は？」

「……そつちかー」

聞き返す2人を見てとても残念に感じてしまった

「そつちかーつて……のび太知つていたの？」

「ううん。何となく婚約届けとかではないと思つたのさ。そんなのとられてもまた新しいの追加しそうと思うしね。でも、まさかヴェールとはね……」

本来持ち歩くものではないよ……

「前に、翔子ちゃんが嬉しそうにお話してくれました。翔子ちゃんが大勢の前で夢を笑われたあとに、坂本君が『俺はお前の夢を笑わない』つて言いながらプレゼントをしてくれた大切な思い出のヴェールだつて」

「あ、それはウチも聞いたわ。お泊まり会をやつた時に幸せそうに言つてたのは凄く印象的だったもの。そつか……あれ、没収されちやつたんだ……それはショックよね……」

「……」

2人は今の話で完全に言葉を失っている様子だ

「ですから、その思い出のヴェールつまらないものと言えば起こるのも当然かと思われまますね。……坂本さんはご存じなかつたのですよね」

「……ああ。知らなかった」

今回はどちらが悪いかなんて言えないだろう。雄二は没収品を勘違いしていたんだし、霧島さんは雄二がヴェールを没収されていた事実を知らなかったんだし……

まあどちらにしてもあとで雄二にはきつちり謝ってもらおう

「坂本……どうするんだ？」

「どうもこうも……きつちり守って、点数を取って勝つだけだ」

そういった雄二はいつもの顔つきに戻っていたのを見た僕らは安心した……

なら……もうここからが僕らの試合だ!!

流れを変えるために・・・

この回はしつかりと失点を押さえたい……。そのためにはまず西村先生を押さえないとね

「雄二、次の科目はなに？」

「次の科目はたしか・・・英語だったな」

「英語か・・・どうしたものか・・・」

「押さえる方法はひとつだけあるよ」

僕らが考えているとスネ夫が案を出してきた。スネ夫が提案出すのは珍しいな・・・

「なんだ？骨川」

「この回の英語Wの科目での西村先生相手は・・・僕に考えがあるから任せてよ」

「お前が考えあるなら、その考えでいくか。・・・剛田、お前からは何か考えはないか？」

「うむー・・・考えはないぞ」

「ないの!？」

「明久うるさい。だが・・・この回は西村先生を三振にして流れをこちらに引き寄せるぞ！いいな?!」

「「っおお!!」」

ジャイアンの気合い入った声にみんなも自然と気合いはいつて返事していた。どうにか最悪の士気は抜け出せそうだ……。そう思いながら主審にメンバー交代のコールをいった

スネ夫 side

さて、真理亜さんをキャッチャーに変更して雄二はピッチャーからレフトへと配属された。ジャイアンは真理亜さんのいたポジションに

つまりピッチャーは・・・

「まさかお前がピッチャーをやるとは予想外だな……。驚いたぞ、骨

川

「・・・やる予定ではなかったんですけどね（里緒菜さんから聞いていた話では真理亜さんは英語がかなり凄いと聞いていたよね・・・）」
そう答えながら真理亜さんから出るサインを待つ

「（インコースに速い球。なるべく低めに放ってください）」

「OK・・・（きちんとジャイアンが時間の合間に真理亜さんに野球のルールやサインをを教えていたから、分かりやすい）」

真理亜さんのサインに頷き、構える。呼吸を整え、小さいテイクバックからサイドスロー気味でボールを投げるとー

「むっ!？」

「「・・・え?」」

「・・・あつ、やつちやった・・・」

放たれたボールは自分も予想外の速度で西村先生の召喚獣の胸元を抉って真理亜さんの構えるミットに収まった

「つちよ!?真理亜さんは大丈夫なの!？」

「安心しろのび太・・・真理亜さんはな・・・」

ジャイアンがのび太の慌てた声に落ち着いた口調で答えをいった

「真理亜さんはな・・・大きな家の財閥の長女で令嬢であるが・・・英語は凄いぞ」

英語

Fクラス

氷華真理亜 360点

骨川スネ夫 365点

「「・・・えええ?!?!」」

「まあスネ夫は数学と言うよりも英語が話せないと大変だとぼやいていたから点数高いのは納得だな」

「・・・さつきからジャイアンは誰に説明をしてるんだろう・・・?」

「ナイスコースですわ♪」

真理亜さんは褒める言葉をかけながらボールを返球してくる

「（次のコースはどうするのですか?）」

「（もう一度インコースに速い球。今度は高めに）」

「(高め? 駄目ですよ)」

「(ここは強気にいきましよう)」

強気にか・・・とにかくここは流れを引き寄せたいからね

そう決意して要求されたコースに思いきり投げると・・・

キーン!!

「!」

「・・・ぬう・・・!」

打球は真理亜さんの真後ろのフェンスに当たった。あれを当てるのはさすがだね・・・

「(タイミングぴったりですわね)」

「(そうだね。次はコースを変えよう。できればボール球とかにしたほうがいいね)」

「(でしたら・・・アウトコースでー)」

僕はそのサインを見て驚いた。でも4球でアウト取るための布陣としてはありかもしれない・・・

コースのサインにうなずいて今度はさつきよりも腕を早く振る。

西村先生の召喚獣は先ほどと同じタイミングでスイングを始動させたが・・・

「よし・・・」

「なに!?!」

西村先生の召喚獣がスイングを完全に終わってもまだボールが真理亜さんのミットに到達していなかった

ポスツ

西村先生の召喚獣がスイングを終えてコンマ数秒後、ボールはミットに到達した

「ス・・・スローボールだと・・・!?!」

「ーストライク! バッターアウト!

主審のコールが響いた瞬間・・・

「!」

Fクラスの大抵がビックリしたように大声をあげていた。これで一つ山を越えた・・・

「・・・助かったぞ。骨川、氷華」

「礼はいいですわ。あとは頼みますよ」

「ああ、ここからは俺がきっちり押さえる。お前達が引き出してくれた流れをものにしてやる」

「――主審、ポジション交代します」

雄二の決意の顔を見て、ひと安心した僕は審判にポジション交代を言った。ここ三人のポジションをもとのポジションに交代して僕は雄二とバッテリー組んで残り二人を挑んだ

さっきのジャイアンたちとのやり取りで吹っ切れたのか、前の回は比べ物にならない球威と球速で5、6番を打ち取った

この流れは大きいよ・・・絶対に勝つぞ！Fクラス！

突然の出来事

四回の裏から僕らの攻撃ジャイアン、スネ夫、秀吉という打順から始まるのでとりあえずベンチに戻ったのだが……

「おつしやテメエら！こつちの攻撃はあと2回！きっちり点数もぎ取って、俺らのお宝を奪い返すぞ！」

「二おうっ!!」

「お宝って……僕やジャイアン、スネ夫は奪われたものは無いよね？」

「僕はないよ。ジャイアンは？」

「あー、俺は実はあるんだよな」

「二あるの!?!」

あれ？ジャイアンは没収されたのではないと聞いていたのだけど？

「いや、荷物検査は問題なかったんだ。まあ、そのあとに取られたんだよ。返してくれる条件はこの試合を優勝したら返してくれると聞いていたからな」

「ちなみに何を取られたの……？」

「そいつは内緒だ。まあ……とりあえず勝つぞ」

「だな」

僕らがそう話していると、雄二が皆に高らかに声あげた

「ここから先、俺は全力を出す！だから、お前らも協力してくれ！没収された大事な物を取り戻すために！いいか!!合言葉は——」

「二取り戻せ！我らのエロブツク!!」

「やるぞおおおお！野郎共おお!!」

「おおおお!!」

……何かまだやってるな……

「とりあえず、ジャイアン、スネ夫。二人に託すよ！」

「二任せろ!!」

とにかく、一番、二番、三番が頑張ってくれないと……頼むよ

「エロ本、エロ本、エロ本……」

「抱き枕、水着写真、シャワーカーテン……」

僕の傍らではFクラスの仲間が呪文のように言っていたが、正

直……こんなクラスはイヤだな……

結論からいうとジャイアンとスネ夫も西村先生の前では粘ってもヒットは出ずにアウトになった。現在は三番秀吉だが、僕は雄二と話をしていた

「……雄二、仕込みをしたの？」

「おう。……まあなんとかなるだろう」

すると……

「フール！」

話をしている間にも、3番の秀吉が短くバットを持ちコンパクトなスイングで教師陣の剛速球に食らいついていた

「向こうもフォアボールくらい出してくれたらいいのに……」

「相当慎重に投げてるみたいだからフォアボールは期待できそうにな
いよ」

この回の投手は英語の山田先生。因みに、二番のスネ夫は粘って粘っていたのだが……最後には三振取られたのだ

「それにな、こつちが反応できないような剛速球は放つてこないものの、コントロールが良いみたいでフォアボールは期待しようにも期待できない」

「コントロールがいいからお陰で際どいたまに手を出せず三振したしね……それにセカンドもショートも異常だよ」

「だよね。大島先生、寺井先生があそこに守っているから厳しいよね」

その会話をした後、3球連続でフールとなり、カウントは2ストライク1ボール

「む……？」

「雄二……何か異変感じない？」

「何？仕掛けにはまだ早いはずだが……？」

雄二が怪訝した顔になったが、秀吉は三振に倒れた。すると……

「「は？」」

召喚獣が突然消えたのだ。これは……僕らが仕掛けていないのになんで……？

「先生、これは・・・?」

「あー・・・すまん、学園長に確認してみる」

西村先生はすぐに学園長の方に走っていき、すぐ戻ってきた

「速っ!?!」

「あー・・・学園長曰く緊急事態だからこの回・・・つまり、最終回は野比、お前の提案していた召喚獣なしの純粋な試合となった」

「え・・・ってことは・・・」

「そういうことだ・・・」

つまりこの回は実技・・・本気の対戦と言うことか

「「おしゃあああ!!」」

後ろで喜んでる仲間を僕はスルーしながら、西村先生に質問した

「試合球とか道具は用意するの手伝いしましょうか?」

「試合球は問題ない。それと走って帰ったついでにバッドは用意したから問題ない。グローブはそれぞれ選べ」

「「用意よすぎ!?!」」

余りの用意がいいのに僕らは突っ込みを入れた。まあいいや・・・

「勝たせてもらいます・・・先生」

「・・・受けてたとう・・・野比!」

僕は先生に宣言すると西村先生も強気に笑いながら腕組んでいた

このチャンスは大きいよ・・・勝つぞ! Fクラス!!

復活の・・・

緊急事態なため最終回だけは特別に召喚獣から実技へと変更になった……。しかし、なんで、召喚獣が消えたのか分からないけど：今はそれどころではない！

タイムとっていた僕らはポジション変更の話し合いをしていた

「さて、実技になったがどうするんだ？ポジションは」

「僕と雄二のバッテリーでいくよね？」

「はあ・・・だからお前はバカなんだよ。明久」

「なんだと!?!雄二!!」

「いいか、ひとまず整理のためにいうぞ？現在のポジションはー」

雄二は皆に現在のポジションの説明をしていた。最初の先発メンバーが・・・

1番 須川サード

2番 スネ夫レフト

3番 木下 ファースト

4番 島田 セカンド

5番 のび太センター

6番 真理亜さん ショート

7番 吉井 ピッチャー

8番 坂本 キャッチャー

9番 姫路 ライト

だったが、高橋先生の打席の時に須川君がまさかの戦死になった……。そのため、須川君のポジションにジャイアンが入っていた

1番 ジャイアン サード

2番 スネ夫 レフト

3番 木下 ファースト

4番 島田 セカンド

5番 のび太 センター

6番 真理亜さん ショート

7番 吉井 ピッチャー

8番 坂本 キャッチャー

9番 姫路 ライト

「ーとなったっているが、姫路のカバーをできるだけのび太がしてくれ。それと氷華はムッツリーニとポジション交代してくれ」

「わかった」

「はい。土屋さんお願いします」

「・・・(グツ)！」

恐らく真理亜さんの運動神経はいいと思うけど、ここでムッツリーニを交代で入れたのは彼もまた驚異な身体能力が潜んでいるのを見んなは知ってる

「それと木下はセカンドに入ってくれ。島田はサードに、俺はファーストにいく」

「え？雄二がキャッチャー行かないの？」

「それもいいが・・・ここは本当の野球経験者達に任せようぜ」

「えーもしかって・・・」

「さて!!改めてメンバー交代したのを分かりやすくいぞ！」

1番 ジャイアン ピッチャー

2番 スネ夫 キャッチャー

3番 木下 セカンド

4番 島田 サード

5番 のび太センター

6番 ムッツリーニ ショート

7番 吉井 レフト

8番 坂本 ファースト

9番 姫路 ライト

「ーでいくからな!!」

雄二がちんぷんかんぷんな明久に分かりやすく伝えるために今、メンバーをもう一度はつきり言った

そんなジャイアンと僕とスネ夫はー

「本格的な野球でのバッテリーコンビは復活だな。スネ夫」

「うん。のび太もあの頃とは違うと見ててくれよ?またキャッチをし

損ねたらジャイアンが「のびたー!」って怒鳴ってくるからね」

「う……嫌なこと言わないでよ……」

本当に嫌なこと言わないでよ……

「さあ!!野郎共!勝つぞお!!全ては……」

「愛のエロブツクのためにー!!!」

はあ……とにかくここはしっかりと押さえたいから……

「真理亜さんも含めて全員集合!」

「!?」

「全員手を前に出して」

僕がそういうとみんなも意図をわかったのか円陣になり手を前に出した

「俺の言葉に皆ははつきり返事してくれよ」

「……」

「ー勝つのはFクラスだ!!絶対に勝つぞ!!」

「!!」

「いくぞおおお!Fクラス!」

「!!」

ジャイアンの気合いいれた声にみんなも感化されたかのようにはつきりと返事した。そして、ジャイアンが手を高く挙げるとみんなも手を高くあげて応えてくれた

気合いはバツチリ!そして何年ぶりのジャイアンの本気で投げる姿が見れるんだろ……頼むよ!ジャイアン、スネ夫!!

ジャイアン side

スネ夫がいつでも投げているように構えてくれた。……投球練習も本気で投げるわけにはいかなから最初の三球だけは軽く投げた。うん、肩もバツチリだし、温もってる……

「えーと名前出てこないけど……まあいいや」

「嫌だめでしょ!?教師の名前を忘れるのは!」

「先生……今は試合でそれも本格的な野球ですので……手加減なしで本気で押さええます」

「む……」

俺の言葉に先生はムツとしてバットを構えた。スネ夫……あの頃よりも球が早くなってるからしつかりとれよ……

俺は投げるモーションに入りながらも懐かしい気持ちになった。そうだ……あの頃の俺は楽しそうに野球を投げていたんだっただ……なら俺は笑顔で——

「(力強く投げる!!) っらああ!!」

「!?」

バシン!!!

「!!!」

「っ……審判……コールは?」

——ツ……ストライク!!!

「ナイスボール」

「おう。痛くなかったか?」

「(ジャイアンの歌の拷問と比べたら取ることなんて痛くないさ) 大丈夫だよ」

俺とスネ夫がそうやり取りしていると先生方のベンチがぎざざわしっていて大島先生がどこから取り出したのかスピードガンを用意していた

「(そーいや、今の俺は何キロ出せるのか図ってなかったが……) 今は……関係ない!!」

俺は2球目も三球目もストレートでしつかり投げー

——ストレート! バッターアウト!!

「剛田の投げた速度が1……:144キロ……だと……!?」

「!!!はっ?!」

「……ナイスボール」

スネ夫は苦笑しながらボールを返球してきた。うむ……夢の165キロ出すまではやはりもつと鍛えないとダメだな……

「あと二人もきつちりアウトとらしてもらおうぞ……!」

そう決意して俺は再び思い切り投げたのだ……。本格的な野球でのピッチャーなら……負けることは許さん!!

のび太side

相変わらずジャイアンのピッチャーとしての腕は凄いよ……。幼い頃はエラーしたくなかったから来ないように来ないようにと祈りながら守備していたんだって……。？懐かしいな……

ーッツシャア!!

「す、凄いよ！ジャイアンってあんなにすごいんだ！」

「はい！あんな剛田君は初めてです。しかも闘志が溢れて投げているすね」

「まあ、ジャイアンは僕らのエースだったからね。でも球があそこまですごくなってるのは予想してなかったよ……」

僕は苦笑いしながら生き生きとマウンドに投げているジャイアンをみて僕は自然と構えていた

「明久と姫路もしっかり構えてね」

「はい！／うん！」

そう警告した瞬間ー

キーン！

「！」「！」

ジャイアンの球を当てたのは体育の先生だった。あれを当てるなんて!!

「センター!!」

「のび太!!」

「わかっている……よー！」

僕は全力で走って間に合うと判断し、予想落下地点まで駆けていく
「！（こんなときここ!?）」

予想落下地点まで残り僅かな時……。ここに来て躓きそうになり前屈みになった

「（このままではエラーに……。いや、まだ行けるっ！僕も成長してるということを一見させてやる！）おおお!!!」

前のめりのままトップスピードでヘッドスライディングで左手を伸ばす。ヘッドスライディングの衝撃で胸を強く打ち、そのまま滑ったせいで周囲に砂埃が舞う

僕はグローブを審判に見えるように高くあげた。コールは……
「オーアウトオオ！」

打球は伸ばしたグローブの先端に収まった。良かった……アウト取れた……。立ち上がり、胸や太ももについた砂を叩き落しながらベンチに戻ろうとするトー

「ナイス!!のび太！」

「のび太の癖にかっこよくとりすぎだ！」

ジャイアンとスネ夫が笑いながら僕にハイタッチするために手を高くしていたので

「……僕もジャイアンスだったメンバーだから少しは活躍しないと怒られるでしょ？」

笑いながらハイタッチした

あの頃の気持ちに戻ったかのように僕らはジャイアンが嬉しそうに僕らを肩に抱き寄せて三人で戻った

活躍をするのは……

「この裏……なんとしても同点でいくには厳しいから逆転をしたいが……」

「延長戦は問題ないと言いたいところだが……」

「いつ召喚獣が復活するかわからないし、復活すれば今の僕らでは厳しい」

「だから……」

「！！！！この回で決めよう！！！！」

僕らFクラスの攻撃は4番からとなる。本来なら最終回到4番からの攻撃という逆転可能な打順で嬉しい。嬉しいのだけれど……召喚獣でのシフトを組んでいたため、4番は島田からののだ……「召喚獣なら良いのだけれど、島田本人となると体力的にも経験的にも男子と差があるよね……」

「骨川のいう通りだ。島田でもさすがに厳しいだろ。それに……」
「ピッチャーが大島先生で、キャッチャーが鉄人、ねえ……あれなんか狡くない?」

雄二の言葉に明久が頷いてため息はくように言った

「確かに……西村先生相手となるとね」

「クロスプレー対策なのだろうけど……鉄人と正面から激突なんて、原付が4トントラックに真正面からぶつかって行く様なものだよ」

「まあね。どう考えてもクロスプレーは勝ち目がない」

とにかく……

「島田でできるだけ粘ってね?」

「うう……ウチ自信ないわよ」

「兎に角どうにか打線を繋げて逆転するよ。頑張って粘ってね?」

それに……

「6番にムッツリーニ、7番に明久がいるのは心強いし、ムッツリーニか明久が出塁すれば雄二と繋がっているから……チャンスはここしかない」

「なら5番ののび太が出塁してくれたらいいんじゃない?」

「……………かつての三振王をなめないでね。明久」

「え？それってどういうー」「自信ない……………けど、少し粘ってみるわね」ーあ、頑張ってるね？美波」

島田はヘルメットを被り、金属バットを片手にバッターボックスに向かった

僕はネクストバッターボックスにしゃがみこんでピッチャーの観察をしていた

ープレイ!!

大島先生は振りかぶり、思いつきり腕を振り下ろした。速いな……そう思っていると振りかぶり、2球目が投じられた。球速としては先ほどのストレートと大差がない

ーストレイク!

ストレートと大差のない球速で横へスライドし、島田の振ったバットからボールが逃げていった

あれは……………

「今のは……………スライダー?」

「うわ……………大人気ない」

カウントは2ストレイク0ボール……………後がなくなった。大島先生は西村先生からのサインに首を縦に振り、振りかぶってから3球目を投げる

さつきよりも少し遅いボールは下に沈み、島田の振ったバットは空を切った

ーストレイク!バッターアウト!

「遊び玉がないな……………」

「……………今のはフォーク?シンカー?」

「ムツツリー……………いつの間に……………多分だけどあれは……………カーブだよ」

「……………打てるのか?」

ムツツリーニが試すように僕に聞いてきた。僕はゆっくりと立ち上がりー

「打てる打てないんじゃない……………打つんだ……………!!」

「・・・頑張れ(ぐっ)！」

「うん」

僕はムツツリーニの言葉に頷いて返事した。恐らく大島先生はストリートにカーブ、そしてスライダーとスローボール・・・

他にもあるのかもしれないけどね・・・

「次のバッターは貴様か。野比」

僕はバッターボックスにたつと西村先生が声かけてきた

「ええ・・・敬遠ですのですか？先生」

「フツ・・・教師をあまり誉めるなよ。いいか、我ら教師はお前たちの模範を示すべき存在だ。それなのに、向かってくる生徒を正面から受け止めもせず何を教えられるというんだ？」

「確かにそうですね」

「教師は常に生徒と真剣に向き合わなければならん・・・お前をここで三振にして勝ちにいこう！」

僕は軽くバットをふって打席に入った

「(初球はまず見ておこう)」

セットポジションから大島先生が第1球目を投じたが、球は並みでコースは真ん中低め

コーストライク!!

続く2球目は高めだったので手を出さなくつてもボールとカウントされた。続く三球目もだ

「これで2-1・・・さあどうする？野比」

「確かにいまの状況は良くないですね・・・けれど・・・」

大島先生が三球目に外角を投げてきたが

キーン!!

ーフアール!

「なっ！」

「くっ・・・(何て重たい球なんだ・・・腕がしびれる・・・)」

僕は未だに腕しびれるので軽くぷらぷらさせた。このままでは三振してしまう・・・このままでは・・・!!

するとー

「がんばれ!!のび太くん!!」

「!・・・美子さん・・・うん!」

美子さんの応援に決意した僕はもう一度軽くバットを振りながら深呼吸した

ありがとう・・・美子さん・・・

「(雰囲気が変わった・・・ここで三振とるぞ)」

「(コクンツ)」

大島先生が西村先生のサインに頷いて投げるモーションに入った

「必ず・・・打つ!!!」

スイングするとほぼ同時に短く持っていたバットの手の位置をスライドさせて長く持ち直した

「カキンツ!!」

「なっ!!」

「?!」

打った打球は高く飛んでいた

確かに・・・あの頃の僕は三振王といったよ・・・でもね、もう僕はあの頃の僕から止まっていたわけではないよ・・・
だって・・・

「頑張ると約束したんだから・・・」

僕の声とともにボールは転がり・・・

そして・・・

審判が大きく振っていた・・・つまり・・・

「や・・・やりやがった・・・の、のび太のやつ・・・」

「ホ、ホームランを・・・ホームランを打ったよ!!!」

「つてことは・・・」

「!!!」

「!!!」
クラスの仲間の声とともに僕はベースをしっかり踏みながら走った・・・約束は最後まで守るよ・・・。

ベンチに戻るとモミクチャされたのはここだけの話だ・・・

男を見せる!!

僕がホームランを打った後にそのままいい勢いがこちらに流れるかと思いきやー

ーストライク!バッターアウト!!

6番のムツツリーニが成す術なく三振となったのだ……。先生たちがもうこれ以上やられないと決めたのか先程よりも気合い入った投球している

7番は明久……。今は同点だが、ツーアウトでノーランだ……。ここで頑張ってほしいところだが……

「うう……。あんな球を投げられたら打てる気がしないな……」

ネガティブモードに明久は入っていた。まあ、あんな気合い入ったピッチングされたら嫌だよな……

仕方ないとおもい僕は明久に肩を叩いた

「のび太……?」

「気持ちわかるよ……。あんな球投げられたら怖いよね」

「うん……。よくのび太はホームランを打ったね」

「自分でも驚きさ。でも……。もうあんなホームランは難しいと思う」

うん……。本当によく打ったと思うよ。何せ、あれを打つには素人だけじゃなく野球経験でも厳しいよ……

「だけどね、ここでびびっていたらダメだよ。僕は明久ならできると信じてるよ」

「のび太……。うん!」

「だけど明久が三振する落ちにならないか心配だな」

僕の後ろにいた雄二が明久に茶々いれていた

「む、失礼だな!この試合途中まで全く役立っていなかったバカな雄二にいわれたくない!」

「ほう……。明久。賭けをしないか?」

「賭け?いいよ。僕がホームランを打ったら僕が雄二を罰ゲームするね?」

「いいぞ。その代わり……」

雄二は指をパキパキならしながら不敵の顔して明久に言った

「お前がホームラン打たなかつたらと三振したら命はないと思え」

「必ずヒット打ちます!!」

雄二の言葉を聞いた明久は全力で打席の方に向かった。うん．．．
「たち悪いね。わざと気合い入れさせるために言ったのでしょ?」

「当たり前だ。あのバカの頭では延長戦でも良いと考えてるが、今のうちの实技に役立つのは剛田と骨川とお前だ。俺らはいくら身体能力がよくつても限界がある」

「だから明久の甘い考えを消すためにああ言ったんだね」

「そうだーまあ、罰ゲームは本気でもするかもな」

最後の言葉は聞かなかつたことにしとこう．．．。じゃないとあとが怖い．．．。

僕はベンチに戻り、ジャイアン達と一緒に座ってみていたが．．．

ーボール!

「大島先生が明久に投じた初球、外角を少し外してきたな。先程のび太にホームラン打たれたこともあるからストライクが入らなかつたのか、警戒しているのかどっちなんだ?」

「恐らく、甘い球を投げるとホームランは明久でも多分打てるはずと考えたからとりあえず初球はそういう形で言ったのだろうね」

明久は軽く足元を均し、バットを構える。サインを頷いてから投げた大島先生のボールは、速球で低めの位置に投じられた

ーストライク!

明久はバットを振らずに黙って見送った。三球目は初球と同じコースで投げるも明久はバットを振るうことなくボールとカウントされた

「これで2ー1．．．バッターとしては有利な状況だね」

「普通に考えたら、ここはストライクをとりたいたいから敢えてストライクゾーンを投げるのが一番だけど．．．」

ーボール!

「これでスリーボールだが、明久は一回もバットを打っていないよな

「まさかと思うがあいつ・・・びびっているのか？」

「いや、もしかしたらビビってるのではなくこれは打って良いのか迷ってる可能性があるよね」

「時には心理戦だけど、そんなの明久には厳しいと思う・・・」

「だな・・・」

そう話していると今度はカウントはストライクをとられた。明久：何してるのさ!!

僕が明久に激をいれようと思って立ち上がろうとしたら

「しつかりしろ、明久！」

「雄二？」

「いいか、明久！クサイところはカットしていけ！」

雄二の言葉に明久はヘルメットの錨を掴んで答え、バットを短く握り直した

続く6球目を大島先生が投げるとー

ーファール！

打球は1塁線の脇を転がっていった。ここに来てはじめて明久はバットを振った。そして続く7球目もファールとなり打球はキャッチャーの後ろに飛んでいった。

スイングはさつきと同じような当てるだけのスイングだった

「明久君・・・」

「アキ・・・」

姫路と島田が祈るように握っていた。頑張れ・・・明久！

8球目、9球目も同じようなスイングでファールとした10球目ー

ーボール！ファール！

10球目にして大島先生の集中力が切れ、コントロールの乱れたボールは鉄人の手前でワンバウンドした

「我慢比べ・・・明久が勝ったんだ・・・」

「雄二!!打てよ！」

「ああ・・・」

雄二は小さく答えてバッターボックスにたった。何でかな・・・さっきまでの雄二と比べると安心感があるね・・・

君が決めるよ、雄二!!

雄二 side

俺はのび太の声に答えてバッターボックスに向かって軽くバットを振った

「ふう・・・」

何でだろうな：不思議と今の俺はどんな球でも打てる気がする・・・

ープレイツ!

俺は大島と鉄人のバッテリーを見て最初は打てるのか!? って不安はあったしそれ以前に急遽の最終回に召喚獣なしの試合になったときはどうしたものか頭が回らなかった・・・

ーストライク!

「速いな・・・」

俺は今の球を打たないで見ていたが速いし、しっかり打たないと厳しいと感じた

だけどな・・・

『ああ・・・何度でもいつてやるよ。勝つ気がないなら下がれって言うてるんだよ!そんで謝ってこいと言ってるんだよ!』

あのやろうに・・・剛田に喝入れられたときに俺は本当に何してるんだと思った。自分の勘違いであいつを泣かしたのは正直口出すのは恥ずかしいが知らなかったとは言え申し訳なかった・・・

大島が続く二球目を投げた瞬間ー今日一速い球が目掛けて放られた。俺は軸足の方へ体重移動をし、身体全体でバットを振る

「(これは芯が当たってる・・・!) っらああ!!!」

ここで打たなかったらいつ打つんだよ!坂本雄二!!

ーキインツ!

快音がグラウンドに響き、低い軌道を描いたボールはセンター前で

バウンドした

明久 side

僕は雄二がきちんと打つのか心配だった。だつてさつきまで全く役たつていなかった雄二なんだよ？大丈夫かなーって思ってるよ……大島先生が今日一番の速い球を投げた瞬間、僕は走つたのだ。僕が盗塁するなんて向こうは考えていないはず!!!

そう思ってるよー

ーキインツ!!

「つちよ!?(何で打つのさ!?!いや、打つていいけどこれアウトになつたら恨むよ!?)」

うった打球を見ながら走ると低い軌道を描いたボールはセンター前でバウンドした

センターの寺井先生がボールを拾うが僕はすでに三塁に向かってすでに走っていた。

「明久、ストップじゃ!」

3塁コーチャーの秀吉から何かの合図と声の指示が出た。手を下げているけど……走れととらえたらいいのかな?

「明久くん!」

「アキ!!」

姫路さんと美波の声が聞こえた。これは……

「走れって言うことだね!!」

「なっ!?!」

3塁を蹴り、そこから一気に加速したホームまであともう少し!!

ボールはセンターの寺井先生から大島先生へ中継が入り、大島先生は素早くキャッチャーの鉄人に送球した

「終わりだ!!吉井!!」

送球は鉄人の手前でワンバウンドし、グローブに収まる。このままではアウトになる!!鉄人をクロスプレーで潰す?いや返り討ちにさ

れるに決まってる!!

そう考えながらも鉄人がしゃがみながらタッチアウトしようとしていた

「(もうだめだ・・・!)」

「根性見せろ! 明久ああ」

「っ・・・ああああ!!」

雄二の言葉が聞こえた僕は――

「なっ?!」

鉄人の体を飛び越えたのだ

「ぬ・・・させるかあああ!!」

「あああああ!!」

鉄人は無理やり体を捻り僕をタッチしようとするのと僕は無理やり手をホームに伸ばした。僕らのぶつかり合いは土煙が舞い判決を待った・・・

ほんの数秒で土煙が上がり、全員が息を呑む。そして、審判はこの結果を大きな声でこう告げた

判決は・・・

「セーフツ!!!」

鉄人はブロックの体勢を少し崩し、倒れていた。対する僕もぐったりして倒れていた

「二いいよっしやあああーっ!!」

Fクラスベンチから歓喜の声が聞こえてきた

「ああ・・・怖かった」

「恐れ入ったぞ・・・まさか俺の頭を飛び越えようとしたとは――やはりバカはなに考えて仕掛けるのかはわかったものではないな」

「その方法しかなかったので・・・」

何にしても・・・

僕らが勝ったんだ!!! 鉄人たちのいる教師に!!!

僕は嬉しくなりFクラスの方へ走った。皆にわちやめちやされたのはここだけの話だ・・・

閉会式

あのあと大会の閉会式で各クラスに並んでいたのだ。その中でも自分達のクラスFクラスがご機嫌だった・・・

まあ、彼らが没収された物はよく考えてみたら何でこれのために頑張ったんだろう・・・？あれ、でも島田も姫路も没収されたのを聞いていたからなんとも言えないけど・・・うーんなんだろう？このモヤモヤはー

ー続きまして、今大会のMVPを発表します。呼ばれた選手は前に出てください

「あれ、そんなのあったって？」

「さあ？明久がMVPならおかしいけどね」

「えー、ならのび太がMVPとでもいうの？」

「まさかー、僕じゃないでしょ？」

ーMVPは2年Fクラス剛田武君です

「はい!!!」

呼ばれたジャイアンは前に出たけど明久は固まっていた。どうしたんだろ？

「なんでジャイアンが・・・？」

「さあ・・・？」

「可笑しいな・・・僕も頑張ったのに・・・」

「いや、頑張ったかもしれないけど先生たちが話あって決めた可能性もあるから仕方がないかもね」

「はあ・・・」

ジャイアンがMVP賞を受け取ったあとに、この大会の優勝名が2ーFと名前あげられたとき彼らは嬉しそうに興奮していた・・・。まあ没収されたのを取り返すのはおいて・・・久しぶりの野球楽しかったなー

ーそれでは、これにて文月学園体育祭を終了します

こうして体育祭が終了となった。・・・昔なら「帰るまでが体育

祭だからな！」と教師に言われたことあるような気がする・・・

そんなことを考えながら、他のクラスが帰宅の途に付く中、僕は担任教師である西村先生のところへ集まった

「鉄人！俺たちの聖品を返してくれ！」

「そうだそうだ！約束だろ！」

「返せ、返せ！」

西村先生はそんなバカな生徒たちを見てため息を吐いた

「はあ・・・まあ、約束は約束だ。没収品は返還しよう」

「「よっしやああああ!!」」

西村先生は仕方がなさそうにいうのと喜ぶFクラスの仲間達・・・

「では、この紙に没収された品と名前を書いて提出しろ。一両日中には返還する」

「「はい」」

なんでこういう時だけ良い返事をするんだろう・・・

全員が書き終わると西村先生に書いたのを提出した

「さて。それでは、ここに書かれた没収品は、後日きちんと『郵送』する」

「「へっ?」」

僕もだけど、皆も鉄人の言葉を聞いてポカンとした表情をした

「宛名はお前たちの保護者になる。全員、到着を楽しみにしているんだな」

「「はああああつ!」」

「良かったなお前ら。海外からのゲストも大満足だったようで、学園長は機嫌良く返還を快諾してくれたぞ」

いや、学園長は機嫌よくっても悪くってもそのような対応しそうでけどなー

「それと学園長からの伝言だ。『学園として返還してやるけど、子供として持っていて良いものかどうかの判断は、あんたらの保護者に一任する』とのことだ」

「「ぐもつとも・・・」」

「じゃあ解散！」

西村先生の言葉に全員渋々で戻ろうとしていた。西村先生が職員室に帰ったが・・・

「二」やっぱり力付くで取り返すぞおお!!」二」

無謀にも西村先生がいるところへ明久と雄二が先導して襲撃しにいった

「さあて僕は美子さんと帰るね。みんなも一緒に帰ろう？」

「だな。返り討ちになるのが落ちだしな」

「私も一緒に帰ります」

「やれやれ・・・」

僕の言葉にジャイアン達だけではなく島田も一緒にねー

「二」うぎやあああ」二」

彼らの叫び聞いたのはきつと気のせいのはず・・・

学園長side

ー学園長室ー

やれやれ・・・ガキどものおかげでゲスト達も大喜びだった・・・にしてもあの決勝戦であの回だけシステムに問題あったのは気になるねえ・・・

気になりパソコンを見ると

「ー!？」

これは・・・!!

「・・・暫くは召喚獣戦争全面禁止だね。それと召喚することもね」

この件は最悪だねえ・・・さて・・・どうしたものか・・・

アタシは痛くなる頭を押さえながらどうするか考えた・・・

バカとテスト召喚獣のび太とく奪われた召喚システムを取り戻せ！とある日の日常

それはもう何年前のことになるだろう・・・？かつての自分達でいうのもあれだけど数えきれないほどの冒険と世界を救ってきた・・・幸せだった・・・あの頃は永遠に続けば良いのに・・・永遠に仲間達と冒険したい！そう思っていた・・・

しかし・・・

あいつが・・・僕らの大切な友達で・・・親友だったあいつが未来にかえってしまった。そして、僕らのアイドルでもあり、僕が好きだった「しずかちゃん」に告白したのだが・・・フラれてしまった・・・あの日ほど泣いた夜はない。あの日ほど辛かった夜はない・・・だけど、何処と無く割りきり・・・僕は最新の学校でもある文月学園に受験して新たな出会いと恋が実った・・・そんな僕らは・・・いや、僕は心のどこかで気づいていたのかもしれない・・・

なにかが起こるなんて・・・感じていたのかもしれない・・・

召喚獣野球の大会も終わり、僕らは通常の授業に戻ったのだ・・・

そう・・・いつも通りだった・・・

ついさつきまでは・・・

「まてー!!!吉井いいいい!!坂本おおお!!そしてのび太!!!」

「いやあああああ!!」

時は三時間目に終わった後の休み時間のことだ・・・

明久と雄二はいつものことなのだが、今回は流れ弾で僕らも追いか
けられることになったのだ・・・

そう・・・

「諸君！我々FFF団は・・・！」

「！！哀に生きていく！！！！」

「我らの敵は・・・」

「！！目の前にいる！！そして、のび太あああ！積年の恨みじやあああ
！！！！」

FFF団が鎌や危険なものをたくさん抱え込みながら僕らを追
かけてきたのだ！！

くそおお！なんでこんなことに！！

「のび太！なんでいつもみたいに射撃で撃退しないのさ！！」

「しばらく整備していなかったからだよ！」

「肝心なときに役立たないね！？雄二どうする！？のび太もアイデアある
！？」

「うるさい！今必死にどうするか考えてる！」

「つてか走りながら考えて逃げるなんて・・・余裕なの？！」

「うるせえ！！」

本当に走りながら考えれるなんて余裕なの！？

「ええい！こうなったら・・・お前ら！俺にいい考えと方法はあるぞ！！」

「いい考えあるの！？早く教えてよ！？」

「よーくきけ！おまえら！！」

「早く言え！」

「簡単だ・・・明久とのび太が犠牲になればいいんだよ！」

「なに恐ろしいこと考えてる！？」

「！！捕まえろ！！！！」

ええい！この肝心の代表は何を考えてるのさ！？

「雄二は最低だね！」

「明久よ忘れたか・・・？俺はお前の不幸が大好きなんだよ！！」

「最低だ！！」

こうなったら・・・僕は窓を開けて飛び移る体制になった

「「なっ!?!」」

「君達がもし一歩でもこちらに来たら・・・僕は飛び降りる!あと、明久も!」

「つちよ!?!の、のび太!?!」

「は、早まるな!?!」

「ええい!君達がしつこく追いかけるからこうなったら窓に降りた方が早いと決めたんだよ!」

「「お、落ち着け!?!早まるな!?!」」

「いいよ・・・もう少しだ・・・」

「あつ!後ろに西村先生が!?!」

「「全員戦略撤退!?!」」

僕が後ろに西村先生がいると言うとFFF団は全力で逃げたので残ったのは僕と明久と雄二だけだった

「・・・お前嘘ついただろ?」

「あつ?ばれた」

「え?鉄人が後ろにいるのは嘘だったの!?!つてか雄二はわかっていたの!?!」

「当たり前だ。そもそもび太が窓に飛び移るのは敢えて一定に集中させるためだろ?しかもあいつらなら鉄人のキーワードだけでも慌てて逃げるだろ」

「流石だね。まあ・・・あそこまで全力で逃げると思わなかったけどね」

「そう安心してると・・・」

「あつ、ムツツリーニから連絡が・・・銃の改造の手続きは終わったから取りに来いと」

「・・・元々ムツツリーニが作っていたんだ」

「まあね。じゃあ先に教室に戻るね?」

「そういつて僕は全力で逃げた。明久たちは気づいてないけど・・・後ろに姫路と島田と霧島さんが近づいてる気配を感じるよ・・・」

「「ぎゃああああ!?!」」

「あつ・・・どうやらお仕置きされたみたいだ・・・。しかし、何で三人はあんなに殺気だしていたのだろうか?」

そんなこんなで昼休みになったので屋上に着くとボロボロになった雄二と明久とその様子を見て呆れていた僕と美子さん

「本当に二人は何で霧島さんや姫路達にぼこぼこにされたのさ？」

「・・・よくわからない」

「わからない??なんで？」

「・・・俺はいつも通り奴のお仕置きという名の殺されかけた」

「いや、待ちなさいよ?いつも通りに死にかけるのは可笑しいわよ!」

うん・・・よく考えたらおかしいんだよね・・・

「つてか、雄二と明久と僕と美子さんの四人は珍しいよね？」

「ああ、すまんすまん。どうしても姫路たちとなると俺達は死にかけるから今日だけ匿わさせてくれ」

「まあいいけど・・・」

僕は苦笑いしながら雄二の提案を了承した。すると美子さんが思い出したようにここ最近のニュースを切り出した

「そういえば、三人とも知ってる？」

「なにが？」

「ここ最近のニュースかなり物騒なことよ」

「ああ、確かにここ最近はこの町が多く被害出てるよな？」

そう・・・ここ最近は謎の出火や怪我人が多みたいだ

「ん？」

「どうしたの?のび太くん」

「あつ、いや・・・僕の家は親が今海外旅行に行ってるんだ。なんでもパパが勤めていた会社の上司が海外旅行のチケット当選したから今家一人なのさ」

「「海外!」」

僕の言葉に明久と美子さんは驚いていた

「おい、のび太。さつきから怖い顔してるがどうした？」

「ううん、なんでもないよ。ムツツリーニが直してくれた銃の調整も

うまいことできたからいかに明久がバカな回答しないかによって銃を強めようかなーって考えていたのさ」

「なにげに恐ろしいこといったね!」

「あははははー!」

一通り笑ったら、僕は美子さんをお願いした

「・・・美子さんは今日は早く帰ってね?最近物騒だから」

「え、ええ。のび太くんは今日は一緒に帰らないの?」

「うん。ごめんね?その代わり、霧島さんや姫路、島田が美子さんと一緒に帰ってくれるからね」

「わかったわ。のび太くんも気を付けてね」

「うん」

僕らがお互いに見つめていると・・・

「おほん!仲良いのは結構だが忘れてもらっては困る!」

「あ・・・ごめん」

完全に忘れていたよ・・・そんなこんなで色々と昼休みも放課後の帰りは別というのに決まった・・・

放課後になり・・・

皆が帰ったあとに僕はFクラスでジャイアンとスネ夫とはなして
いた

「・・・のび太、ジャイアン。今日はどんな夢を見て目を覚ました?」

「・・・昔の冒険の数々だ。のび太は?」

「・・・僕も同じだよ」

「やっぱりか・・・悪い予感がするんだよね・・・主に昔の冒険の時みたいな・・・」

「・・・なにもなかったらいいけどね・・・」
そうはなしていた僕らだが心のそこにある悪い予感は消えない・・・

この胸騒ぎは・・・なんだ???僕は己の銃を整備しながらこの嫌な予感が外れることを祈っていた・・・

依頼と懸念

あのあと僕とジャイアンとスネ夫は色々話してとりあえず、何事も大きいことが起きないことを祈りながらぼくらは帰路へと着こうとしていたが……

「あ、そういえば学園長が暫くは召喚戦争は中止だつてさ」

「え!?それ本当か?!」

「うん、なんでも召喚獣のシステム調子が悪いからどんな以下な理由であれ無理なものは無理とさ」

「まじかー。まあ残念だけどあいつらの学力延びたときに仕掛けられたら大きいな」

「?なんで?」

「Fクラスの戦略の幅広がるからなのとふたんがへるからだ!」

それを聞いたぼくらは納得した。確かに今の戦力になるのはほぼ両手あれば足りるかどうかだ……

「まっ、何しても明日は学校頑張ったら三連休だもんな」

「西村先生とかは珍しく、補習なしにするけど次の三連休前時には補習実施する予定だつてさ。多分だけどね」

「……勉強しつかりしよう」

スネ夫の言葉に僕とジャイアンは震えながら勉強することを決意した。皆が鬼の補習という理由が僕はわかった気がした……

だって……威圧感がとてつもなく怖いんだよ!?数々の冒険を越えてもあれは……

「(そういえば召喚獣が調子悪いつて言っていたよね……この間の野球で決勝戦の時にもしかつて?)」なんか嫌な予感するな……」

「?どうした、のびた」

「何でもないよ。銃の改造も終わったからしばらく使うことなければいいな〜って思ったのさ」

「のび太もいい意味でFクラスに染まりつつ……いや、もう既に染まってるのかな?」

——ピンポンパンポン♪

《2年Fクラスの野比のび太と剛田武と骨川スネ夫、2年Fクラス野比のび太と剛田武と骨川スネ夫今すぐ学園長に来な》

「「なんで?!?!」」

いきなりの放送にいきなりの名指しにぼくらは声揃えて驚いた。文句いつても仕方がない……

「とりあえず、学園長がお呼びだからいこうよ」

「おう……。もしかっつてばれたのかな?」

「何が?」

「ジャイアンリサイタル復活記念祭り」

「(ぼれていたら止めてほしい。頼むから命だけは失いたくない!!)」

しかし……

「放課後皆帰ってるのになぜ僕らだけ?」

「さあな」

そう話ながらも学園長室にいる部屋にぼくらは着いたのでノックした

《……入りな》

いつもより重苦しい雰囲気の中で学園長が入る合図を促していた

「失礼します。お呼びにかかりこちらに来ました」

「……Fクラスでもまともだね……。あんたらがまだ残っていたの聞いていたから呼んだのさ」

「明久たちを呼ばなくていいのですか?」

「……今回はあのガキどもに話せる内容ではないからね。口固いあんたらを呼び出したのさ」

「それはどういうこと——」それは俺が説明しよう——西村先生と高橋先生!？」

学園長の後ろから西村先生と高橋先生がいつの間にかいたが心なしか疲れた顔していた

「お前たちと俺達の試合を覚えてるか?」

「確か、5回の時に緊急事態で召喚獣ではなく実技に変わったのですよね?それがなにか」

「実は――その召喚獣システムが何者かにハッキングされたのです。学園の最高のセキュリティが」

「[!:]」

西村先生と高橋先生から聞いた情報に僕ら3人は驚いた。いくらこの学園のシステムをハッキングできるなんておかしい・

「ぬ、盗まれたってですか!？」

「いや、正確には・・・奪われたといってもおかしくないな」

「・・・生徒の情報は？」

「それは大丈夫だが・・・召喚獣システムの不調は何者かの干渉なのは確かだ。お前たち三人に今回この件を伝えたのは、もしもハッキングした人物が判明した場合・・・容赦なく捕まえろ。場合によっては召喚の許可をとる」

西村先生が難しい顔しながら苦渋の決断というところかそんな顔で僕らに話した

「・・・わかりました。この件は受けます」

「のび太!？」

「ですが、ハッキングされたのにひとつ疑問があります。先生たちでは捕まえられないのですか？」

「勿論俺達も探してるが・・・现阶段で一番動きやすそうなのはお前たち三人と判断した。吉井ではフィードバックがあるから最悪のことも起こりかねんな」

フィードバックがあるから・・・もしもそいつが召喚システムのをハッキングした場合によってはフィードバック可能にする恐れがある・・・

「そういうこさね・・・今頼れるのはあんたら3人だ。危険だと思ったら直ぐに引きな!」

「了解です!!」

そう話した僕らは学園長の室から出ていき、僕らは帰宅するために今度こそ歩いて帰っていた

「・・・今の話どう思う? ジャイアンとスネ夫」

「え、ハッキングしたことか? 内部の人間じゃないのか?」

「それならいいけど……ここ最近の事件と何か絡んでるのではないかな？」

「もしかって……襲われた時の記憶がない的なの？」

「まあそれが関与してるかはわからないけどね。……この時代の人間がハッキングしたならいいけどね」

「それどういうことだ？のび太」

「……悪い予感がするんだ……それも最悪なことだね」

僕がそう言うとジャイアンもスネ夫も何かを感じとだたのか歩くのやめた

「……冒険の始まりってやつか？流石にドラえもんもいないんだぞ？それが起きると思えないしな」

「それに今はあの頃と違ってメンバーも3人しかいないんだよ？」

「分かってるよ。……スネ夫はこの件最後の砦としてむやみに出ないでね」

「え!?!なんで」

「ここは僕かジャイアンが先にあたるよ。僕らが何かあれば……スネ夫は学園長か……明久たちに伝えてくれない？」

「だな。万が一三人とも何かあってあいつらが知ってからでは遅いし、それにシステムがハッキングされてるなら俺らの能力も見られてる可能性はあるしな。……格闘ならぼこぼこにできるがな」

「あはは……とにかく、この件は三連休以内にけりをつけるよ。僕の家族は今いないから一人だし問題ない。ジャイアンは？」

「母ちゃんと父ちゃんは夫婦水いらずの旅行……ジャイ子がもて夫と2泊3日の旅行でいい。妹の幸せを願いたいんだが……大丈夫なのか……大丈夫なのか……俺はあ……」

ジャイアンの妹はどうやら知らない間にそこまで進んでいたんだ……ものすごい落ち込みようだ

「店番は頼まれたわかってこと？」

「誠に勝手ながら俺が店番することになったからこの件はなかなか動けん。だがのび太、何かあったら俺達に頼れ」

「分かってるよ。……本当に自分が思ってる最悪なことにはいかなけれ

ばいいけどね」

自身の銃を見て最悪なことが起きないように祈っていた……
こういうのって必ず冒険の合図になりそうなのは気のせいかな……

夜遅くの出来事

ここ最近の街の被害を聞いていたらどうしても引つ掛かるのがある……。実は学園長から聞いていた情報とスネ夫の情報をきいていたらやっぱりひっかかる

「鎧とかわけわからない武器って……これ明らかに召喚システムが盗んだ奴が暗躍してるのかな……それに……」

被害受けた場所を僕は紙でちらつと見ていた。裏山付近や昔遊んでいた空き地付近が被害受けている

「偶然ですむ話と思えないよね……。とりあえず捜査いくか……(力チャ)」

僕は銃を取り出して大丈夫か確認した。念には念を入れよ……。もしも、僕が何かあった場合の手紙も書いたし問題はない……。さして……

「いつてきます」

僕は夜遅くに家を出て行った……。

不可解な現象と召喚システムがハッキングされたのは明らかに時期がおかしいのだから……。そして、僕は全力で裏山付近とかに走りに行った……。この件を早期に解決しないと!!

ジャイアン side

本当なら俺も手伝いたかった……。しかし、昔みたいに事情が違ふ……。

「母ちゃんたちに店番を任せられた以上勝手にサボったら……。どやされえしまう……。!!」

もしもサボった……

『たくけくしいい?』

『ひいひい!?か、母ちゃん!?』

『店番をサボるとはいい度胸ね……。 (ポキポキ)』

『か、堪忍してくれ!』

『武いいいい!!』

『ぎやああああ!!』

ぼこぼこにされてしまう!!そんなのはごめんだ!!

そう思いながらも外の景色見ていると犬の鳴き声が聞こえた。ムクの事も思い出したな・・・懐かしいな

それにしても・・・

「頼むからのび太無茶するなよ・・・。俺も手伝うから・・・」

ドラえもんがいなくなってから一時のあいつは正直見ている俺らでも辛かった・・・。気丈に振る舞っているが、誰よりもドラえもんと関わっていたあいつが辛くないはずがないのはしっていただから・・・

「無茶するなよ・・・心のともよ・・・!」

俺は今も調査してる親友を思い浮かびながら空を見上げた・・・

美子 side

大丈夫かな・・・のび太君。何か今日は怖い顔していたけど・・・

「なんだか嫌な予感がする・・・のび太くん・・・大丈夫だよね・・・?」

あの夢が現実になること無いことを祈りたい・・・。のび太君が・・・剛田君が・・・二人が遠い世界にいつてしまうことが無いことを祈りたい・・・

そう不安に思っていると開けていた窓に風が強く吹いた

「キャツ・・・」

風が強く吹くと止めに私は髪の毛を整えながら大切な人を思い馳せながら名前をつぶやいた

「のび太君・・・」

愛する人が最近起きている物騒なことに巻き込まれていないのか心配になった・・・大丈夫だよね・・・?

不安な気持ちを抱えながら私はお風呂に入った・・・

のび太side

ビンゴ……

そう思いながら僕はゆつくりとそいつに近づいた

「……最近の物騒な事件を起こしてるのは君か？いやそれよりも……僕らの学校のあれをハッキングしたのが君だよね？」

黒ずくめの長身の人物が僕から背を向けながら黙っていた。答える気はなさそうだな

「なんの目的で僕らの学校のあれをハッキングしたのかは知らないけど……(カチャ)」

僕はゆつくりと引き金のセーフティーを引いた。こいつが僕らの学校のあれを奪ったとなれば悪用しかねない……

「今……で君をとらえさせてもらうよ。不用意な抵抗しないなら今のうちにそれを返してくれたらいいよ」

出来れば事が大きいのは避けたい……たのむ

「……(チャキ)」

向こうも何か武器を用意していた。あれは銃……？

いや、銃にはおかし……ん……あ

あれは……なんで……

「なんで君がそれを持つてる……！それを!!」

「……」

「答える気はないんだね……。まあいいや、たった今はつきりわかったことはひとつだけある。それは……」

僕はゆつくりと引き金を……

「君が危険だと言うことだ」

……引いた

……パアアアアン!!

静かな夜の出来事

信じられない・・・

今にもそういわんばかりに発しそうな感じがした・・・。まあ、僕がそいつの持っていた武器を的確に狙って打ちおとしたのだからね
「信じられないって言う顔だよな？自慢に聞こえるかもしれないけどこの程度の距離で外す僕ではないよ・・・」

そう、この程度の距離で外す僕ではないし数々の冒険を経験したから尚更ね・・・

「降参するなら今のうちだよ。僕らの学校のあれを盗んだものを返してもらおうのと、なぜ君がこの時代にならないものを持っているのか答えてもらおうよ・・・。まっ、事と次第によっては覚悟してもらおうかもね」

「ふっ・・・」

「・・・何がおかしい？」

「いや・・・見事に罠にはまってくれたな」

「(声がおかしい・・・変声機か?)・・・それよりも罠って・・・!」

僕は直ぐに回りを見渡すと結界が張られていた

これはいつの間にも・・・!?

「まさか、初めからここに嵌められたということなの・・・!?!」

「起動・・・」

「っ!」

僕は直ぐに結界を張った本人の方を見るとサモンの合図を出そうとしてるのか雰囲気が変わっていた

「サモンをしたのか・・・?(サモンしていたのなら普通は出てくるはずだが・・・認識してないのか?それとも、点数がないから出てないのか?)」

「・・・」

「なっ!?消え・・・が・・・っ!」

僕はなにかを言おうとすると目の前のそいつは僕の視界から消えたのに驚き、気がついたら僕の目の前に現れ、腹を思いきり殴った

メキメキと僕の腹の音がなるの聞こえると共に木の方に吹っ飛ばされた

ばごごおん!!

「っあ・・・(背中がいたい・・・!明らかに普通のパンチであそこまで飛ぶのはおかしい・・・!)」

「仕留め損なつたか・・・」

「くっ!!(ダンドンっ!)」

僕はこのままではやられると思い、持ってきた銃を打ちまくったが・・・

「ふん」

「銃をはじいた!」

「っは!」

「く!」

僕は犯人が再び接近してきたので慌てて回避行動を取ったが・・・そいつの攻撃した地面は亀裂走っていた

「普通の人ではあんなことできないし、たしかにうちの学校のがハツキングされたのは聞いていた・・・)まさか・・・!」

「はっ!!」

「(試す価値はある・・・!自分の仮説が間違えなければ!!)サモン!!!」

僕が考えられる可能性が結び付いたときに、犯人は再びこちらに攻撃しようとしていた。このままやられるわけにもいかないのです、僕らの学校ではお馴染みの合図の言葉を言った瞬間、敵は僕のまわりに吹いていた風に吹っ飛ばされた

そんな僕はというと・・・

「まさか僕の予想が当たるなんて・・・」

自分の体を眺めていた。腰には銃が納められており、背中には青いマントを羽織ながらの姿だった

うん・・・召喚獣の姿だね。しかも、点数アップしたときのパージョンド

「ぐ……」

「さて……反撃開始といきますか！」

「っあ!!」

僕は目の前の敵がナイフみたいなのを投げてきたので……

「ふっ!!」

「?!」

それを冷静に打ち落としたのに対する敵は驚いた感じになっていたが僕はその前にそいつの姿に疑問に持っていた

「やめた方がいいよ……。僕を相手に飛び道具で仕留めるのは無理だよ」

「……」

「さて……君が弄ったのかそれとも元々こういうイベントを考えていたのかはわからないけど……今言えるのはひとつだけだ」

「!?」

「君が召喚獣を纏ったように……僕自身の体が召喚獣と同じ力を持ったということだ……ね!」

「……パアアアアン!!!!」

明久 side

僕は今、珍しく料理していた。なぜ料理しているかというところ……

「明久、これ捌き終えたからここに置いとくぞ」

「あ、ありがとう。雄二」

「……こちらも出来た(グッ!)」

「ムツツリー二早いね」

僕の家でムツツリー二と雄二と秀吉とで料理していた。何でも、二人の両親は家居ないから僕の家遊びに来たのと秀吉のお姉さんは霧島さん達とお泊まり会のため家いないので家に来たと……

「にしても、雄二この魚はどうしたのさ?」

「親父が魚釣りが趣味でな。今は单身赴任でこっちはいないが……

「釣りすぎたので送った♪よろしくー!」なんて手紙見たときいい年したおっさんが手紙で♪見たとき殺意わいたぞ・・・!」

「・・・因みに秀吉は?」

「ワシは姉上がいらないから今日は家で食べるよりもお主達と食べるのがいいと判断したのじゃ」

念のために僕の家泊まるのは、この僕をいれてこの4人である・・・

にしても・・・

「のび太達は用事があるからお泊まり会は今回参加できないと聞いたときは残念だったね」

「まあな」

「そういえば、明久よ。姫路達は誘わなかったのか?」

「・・・確かに明久なら誘いそうだと思った」

「・・・実はもう誘ったのだけど・・・姫路さんは美波とのび太の彼女の三上さんと真理亜さん三姉妹とでお泊まり会をするから行けな行ってさ」

「なんじゃ、もう誘っておったのか。しかし、お泊まり会のメンバーはある意味よく関わっている面子じゃのう・・・居ないのび太たちを除けばのう」

「そういえば秀吉のいう通り、今この場に居ないのび太たちを除けばいつも通りだよね・・・」

「そういえば、召喚戦争しばらくできないんだっけ?」

「ああ、ババアのいう通りなら暫くは出来ないわけだ。く・・・!早く翔子に勝って俺の方が上だとハッキリさせないと・・・!」

「勝っても負けてもあまり変わらない気がするがのう・・・」

「・・・奥さんの霧島翔子に尻しかれる夫の坂本雄二」

「正解だよ。ムツツリーニ」

「正解だよ・・・じゃねえよ!!おまえらなにさらと俺を人生の墓場に送る!」

「「え?違うの?」」

「てめえら・・・!」

雄二がムツツリー二と秀吉に怒ろうとしているとニュースが流れた

「ーただいま入ってきた速報によると〇〇〇で火事が起きた為、道は閉鎖されております。死者は現在確認されていません」

「また?」

僕は聞こえたニュースにそうばやくと他のみんなも微妙そうな顔していた

「ここ最近多いのう。姉上には危険だから今日は帰らないでおこうとお互いに話しておつたがここまで増えてると不安になるのう・・・」

「・・・ここ最近物騒」

「まあ、俺らが巻き込まれることはないだろうな。そんなことよりも貴様ら・・・よくもまあ色々といってくれるなあ(ポキポキ)」

雄二が秀吉とムツツリー二に何か言ってる気がするけど僕はそれをスルーしていた

「よつと・・・(でもなんか案外身近な人間が巻き込まれてそんな気がするけどなあ・・・気のせいだよね)」

そう思った僕はマイペースに料理していた。雄二にはハバネロ入れておこう

のび太 side

「はあはあ・・・」

「お前の負けだ・・・英雄野比のび太・・・」

「まさか・・・ここまでとは・・・ね」

僕は痛むからだを押さええながら呻くように目の前の敵を睨んだ・・・

「これで終わりだ・・・」

「それは・・・!?!」

目の前の敵は腕に纏い・・・そして・・・

「去らば・・・英雄野比のび太」

それは僕の方に向けて思い切り放った・・・

「このまま・・・やられるものかああ!!」

僕は最後の抵抗として銃をうつも……目の前のそれには無意味だつ
た

ごめん……皆……目の前の最悪な敵を……止めれなかつ
た……

その日のその夜……その街では軽い地震が起きた……

そして……事態は最悪な方へと進み始めた……

夜の報告会

最悪だ・・・

その一言につきる・・・。呻くように僕は無理やり痛む体を起こした

「くっ・・・」

「まだ無理に動かない方が懸命だと思う・・・。英雄野比のび太」

「つるさい・・・はあはあ・・・」

「ここで俺は失礼させてもらおう。去らば・・・」

そいつは僕から背を向けて暗闇へと逃げた・・・。体が痛むせいで止めることができなかった・・・

「畜生・・・止めることができなかった・・・。っ・・・体が痛むなんて・・・フィードバックなのかな・・・？」

「のび太!!」

「スネ夫・・・なんでここに・・・」

僕はここにいないはずのスネ夫がいることに驚いたが、今は体が痛むせいか動くのもしんどい・・・

「のび太大丈夫か!？」

「大丈夫に・・・見えると思う・・・？」

「いや・・・みえないよ。兎に角一緒に帰るかそれとも・・・病院いくか?..」

「とりあえず・・・僕の家の方まで・・・お願い・・・。この件は・・・明久たちにも知られたくないからね・・・」

「分かってるよ。それにしても・・・いったい何があつたのき・・・そんなボロボロになるのは冒険以来じゃないか・・・」

肩を組んで僕はスネ夫と一緒に帰りながら質問してきた。確かに・・・冒険以来だね・・・

「犯人は・・・何1つわからなかったけど・・・1つだけ確信できたところがあるよ」

「本当か、のび太!」

「可能なら・・・ジャイアンにも話さないで・・・それと・・・ごめん」

犯人には逃げられた・・・」

「なっ・・・そうか・・・お疲れ様、のび太」

スネ夫が何言いたいのかは大体わかる・・・。兎に角話さないと・・・何が起こったのかを・・・

暫くして僕の家につき、スネ夫は僕の部屋まで着いてきてくれた。そして、わざわざジャイアンも夜遅くなのに僕が負傷したと連絡してくれていたのか急いで来てくれた

「のび太、生きてるか!?!」

「いや、連絡したときに負傷したって連絡したから生きてるでしょ・・・」

「あははは・・・」

ジャイアンの言葉にスネ夫は呆れながら突っ込みをしていた。それを聞いたのび太は苦笑していた

ジャイアンはほっとした顔で安心したように座り込んだ

「ふう・・・良かった。しかし、何があった?のび太・・・俺が知る限りお前もそこまで弱くないはずだが・・・」

「それに犯人に何となく目星着いたみたいなこと聞いたけど・・・それ本当?」

「・・・まずひとつ覚悟して聞いてほしいけど犯人は・・・恐らく未来人。それも時空犯罪の可能性がある」

「!?!」

僕の言葉にジャイアンもスネ夫も驚いていた。当然だろう・・・。明久たちは馴染みがなくっても僕らには聞いたことがある言葉なのだからこの二人にしか話せない

「そいつは・・・確かに最悪だな。しかし、時空犯罪の証拠はあるのか?」

「奴が取り出したのはショックガンだった・・・」

「はっ?ま、まってよ!?!ショックガンってドラえもんの道具のあれだよね?!それがそいつ持っていたの!?!」

「うん。・・・証拠はこれだよ・・・」

そういつてみせると二人も驚いていた

「確かに・・・」

「いつの間に回収していたの!？」

「戦いの最中にね・・・」

「これを見たら現代の技術では不可能だから時空犯罪の可能性が高いよね?」

「むむ。・・・明日は俺が動いて調べようか」

「僕はジャイアンの言葉に驚いていた。何で驚いていたのかジャイアンも分かっているのか苦笑していた

「実は母ちゃんから連絡もらってよ・・・。この三連休営業は休みにすることにしたのと最近事件が多いから営業成り立たないというので3日間しなくなつていいことになった」

「なるほどね。・・・のび太、ドラえもんに連絡とる方法はないのか?」

「今はない・・・。あつても難しいと思う」

「なんかまるで連絡とれる手段があるに聞こえるんだけど・・・まあいいや。もうひとつこちらが聞きたいのはあるけど・・・」

「・・・その前にジャイアン・・・これを渡す」

「む、これは・・・?」

「学園長が特別に作ってくれたんだ。スネ夫も密かに関わっていたんでしょ?」

「うん。とりあえずジャイアン・・・サモンっていつて?」

「?まあいい・・・サモン!!」

ジャイアンが学園でのお馴染みの召喚の合図を言うトー

「うお!?!俺の体が召喚獣と変わらん感じになつてる!?!嫌、なんかおかしいぞ!?!」

「しかも、なんかバージオンアップしてない!?武器がおかしいよ!?!」

「衣装に至つては青いタイツ!?なんで!?!」

あつ、そういえば僕もなぜか青色のになつていたな・・・。システムのエラーなのかな・・・それとも学園長が趣味走っているのかな? 「バットがめちゃくちや軽い・・・。戦うなら槍の方がいいけどなあ・・・」

「なんで？」

「バッドで人を殴るのはのび太だけときめているからな。召喚獣ならまだしもなあ……」

「あれ？さりと僕限定と言わなかった？それも武器で殴るって……」
「まあまあ、ジャイアン。その腕輪のは完成してる訳じゃないんだよ」

「んっ、どういうことだ？」

「元々これは今回の件だけのために作ったのだけど、なんもない場所での召喚は回数に限られてる。つまり結界みたいなのがなくってもその姿で保つことはできるがー」

「まあ早い話だが、町中でそれを召喚したまま保つことができるって言うことでもいいんだな？」

「おお、きちんと理解してる……。まあもつと言えばイベントのために考えていたとスネ夫がジャイアンにくるまえにおしえてくれた」

「しかし……のび太がやられたほどの敵か……。これは気を絞めないな」

「のび太、戦っていて犯人のやり方とかは気づかなかった？」

「……腕輪をあいっは持っていたよ。恐らく時空犯人なら未来の道具で作り上げることもハッキングすることも簡単だったと思う」

「腕輪か……。他に気を付けておくことは？」

「……召喚獣が自分達の体に纏ってるからかそいつがそう弄ったのかは知らないけどフィードバックが存在してるよ」

「だからのび太もボロボロだったわけか……。兎に角、俺が明日捜査向かうからのび太は安静してろ」

「じゃあ僕は帰るね。のび太何かあったら連絡をして、ジャイアンも」
「うん。ありがとう」

「またな！」

スネ夫は僕らにそう言って帰った。ジャイアンも帰ろうとしていたが部屋から出ようとしてなかったので疑問におもっていたのか僕にきいた

「のび太・・・この件は俺らだけの秘密にしてるが・・・本音を言えばドラえもんがいてくれたらいろいろな方法はあったよな」

「・・・うん」

「のび太よ・・・お前の痛みは俺らの痛みだ。つまりお前の戦いは俺達の戦いだ。俺達の戦いは俺達の戦いだ」

「ジャイアン・・・」

ジャイアンは笑いながら僕の方に振り向いた

「安心しろ！このジャイアン様は負けない！お前の仇はしつかり討つてそいつになぜショックガンを持っていたのか問い詰めてやる！」

「・・・相手は手強いから気を付けてね」

「おう！またな！」

そういつたジャイアンは自分の家へ帰った・・・。願わくば美子さんや明久らに知られることなくこの件を早期に解決しないと・・・

そう思った僕は回復するべく横になり寝ようとおもったがスネ夫がそういえば僕の枕元に食べ物をおいたからっていつていたね？たべようか

「いただきまーす」

このとききちん確認すれば良かった・・・。久しぶりに戦ったからなのかきちん見てなかったことに後悔した・・・

ジャイアン side

俺はのび太と別れて帰ったが・・・正直今の俺様は怒り心頭だ・・・。親友がボロボロになった姿を見たとき自分の怒りもあつたが一番は・・・

「よくも俺様の大切な心のともを傷つけてくれたな・・・！絶対にギタギタのメッタメッタにしてやるう・・・！」

俺はのび太を倒した敵に必ずぼこぼこにすると誓ったのだ・・・。覚えておけよ・・・!!

只ですむと思うなよ・・・！

「あつ、そういえばスネ夫に俺様の手作りをのび太に渡してくれたのかな？あいつ今日家で一人と聞いていたから折角だし作ったけど」

まあ、きちんと食べてくれてるだろう。ジャイアンスペシャル料理の一つだからな。今頃のび太は喜んで食べてるだろうな！

・・・今度姫路と料理してみるか。あの独特の味はなかなかよかつたからな！そう思ったら俺は早くこの事件を解決しようときめた・・・

翌朝の出来事・・・

謎の犯人との死闘から一日たった・・・

体は大分ましになったけど、昨日の夜ジャイアン達が帰った後に僕は一体何を食べたって・・・？なんか記憶も飛んでるけど・・・まあいいや。さてここまでの話はもういいでしょう・・・

何故なら・・・

「……………(ニコニコ)」

「……………(ガタガタツ)」

現在僕は恋人の美子さんが僕の家に来たのだが、僕がボロボロな姿を見て何があったのか聞きたいため笑顔で無言の問い詰めてをしています……

「……………ねえ、のび太君……………」

「は、はい……………」

「なんでそんなに……………ボロボロだったのかな……………？」

「いえ、そ、その……………」

まずい……………美子さん達に今回の件に関してはバレてはいけない!!もし真実を話したら美子さん達は止める可能性がある!!考えろ!!

「(下手に事を転がせない……………転がせない……………つ?!これならいけるかな!!)あ、あのボロボロだったのは階段から落ちて転んだりしたんだよ……………」

「(本当なのか怪しいけど……………たしかのび太くんは昔からどじっ子だったって骨川くんがいつていたわね……………)まあ、のび太くんが嘘を言うと思えないから信じるわ。所で朝御飯は食べたの?」

「(あつ、これ疑われているパターンかも……………でも一先ず信用してもらえている感じ?)まだ食べていないけど……………あれ、今更だけど美子さんに鍵僕渡したかな?」

僕の記憶が正しければ鍵は渡してなかったはず……………

「え、なんか鍵開いていたわよう?」

「え?!」

「あ、でも安心してね。物はとられていなかったわ」

スネ夫め・・・いや、この場合は昨日の僕か・・・きちんと閉めてから寝とくべきだった・・・

「それを聞いて安心したよ」

「あ、後・・・のび太くん朝御飯を作ったの／＼」

「美子さん、ありがとう！」

僕はお礼を言うとりビングの方へと僕は美子さんと共に向かって朝御飯を食べた

「ねえ、のび太くん」

「ん、なに？」

「最近のニュース見てて物騒よね？この街で今までそんなの起きていなかったのに・・・なんか怖いよね・・・」

「・・・そうだね」

一瞬その話題を出されたとき、僕は密かに表情を出さないように必死に耐えた。なにがなんでも美子さんにこの事件を巻き込ますわけにはいかないからね・・・

「そういえばのび太君、今度の連休の時に皆で温泉いかない？吉井くん達が今その旅行の計画しているけど」

「旅行か・・・きつと楽しいだろうね」

「ええ、楽しいと思うし必ず皆でいきましょうね！」

「あれ？でも次の連休の前は確か・・・」

「？どうしたの？」

僕はなにか引つ掛かると思い記憶を探ると・・・思い出して手を打った

「西村先生の抜き打ちテストだった」

「え?! 私そんなの聞いてないよ!?!」

僕の言葉に美子さんは驚いていたが知らなくって当然だと思ふ・・・
「美子さんが知らなくって当然だと思ふよ。だって・・・『お前達の球技大会は確かに結果出した・・・そこは認めよう。しかし・・・勉強はべつだ!!今度の連休の前に試験をする!!試験に合格できなかったやつは・・・補習だ!!』って目を燃やしながら腕を組んで高らかに言っ

ていたよ・・・」

「うわ・・・想像つくわね・・・。しかも、西村先生ならいいそうね」
僕の言葉に美子さんは苦笑していた

そもそも、西村先生の異名は様々だけど一番聞いているのは「鉄人」・・・あの言葉がぴったりの人は西村先生以外いないような気がする・・・

「そういえば、美子さんはなんで僕のおうちに？いつもなら連絡するのに」

「あはは・・・なんかのび太くんの身に何か起きたのじゃないかな？つて思い不安になって急いできたのだけど杞憂でよかったわ」

「そ、そう・・・（あれ？これ・・・いつかばれるパターン・・・？）」
そう冷や汗を流しながらもきちんと答えたと思う・・・内心は冷や冷やだけどね・・・

そういえば・・・昨日の夜の相手・・・
あいつはいつたい何者だったんだろ・・・？未来の道具といい、まるで僕の事を知ってる風な言い方だった・・・でも・・・

「（なんか知っている気がする・・・それも身近な奴がいたような気がするけど・・・）まさかね」

「んっ、何かいった？」

「ううん。明久が全くこの件が忘れていなかったらいいけどなあーつて思ったのさ」

「（やっぱり何か隠してる？）そうね。言い出した吉井くんが忘れてるのはないと思いたいね」

よし!!とにかく、美子さんにはばれていないよね・・・？・・・大丈夫だよな？そんな不安をおもいながらもう一人の心配していた・・・

因みに美子さんの家まで無事に送りました・・・

ジャイアン side

夜遅くになり、俺はゆつくりと裏山へ歩いていた。散歩・・・いや・・・

俺の本能が疼いてしかたがなかった・・・

そいつは俺から背を向けて街を眺めていたが、俺は敢えて声かけた
「なあ・・・ここ最近のこの街で大騒ぎを起こしてるのはお前か？」

「・・・貴様は・・・」

「ま、答える気はないと思うからそれは置いておくとして・・・(ポキ
ポキツ)」

俺は指をならしながら目の前の敵をにらんだ

「文月学園の召喚獣のデータをパッキングしたのはお前だろ？」

「・・・」

「答えないということは・・・完全に黒ということだな？」

「起動・・・」

奴が結界を張ろうとしていたので止めに行ってもよかったが、俺は
あえて奴が召喚するのをまっていた

「どうやら親友をボロボロにしたのもお前か・・・間違いないで安心し
たぜ・・・」

「・・・」

「親友のお礼をたっぷり返してやるぜ・・・!!サモン!!」

俺は怒りと共に己の体に纏うように召喚獣の時に使う武器が出て
きて、服装は青いアンダーシャツみたいなピッチリと俺の体に着こん
だ

「・・・」

「覚悟しとけよ・・・!」

俺は目の前にぶっ倒すことを宣言すると共に武器を構えた・・・

あいつのお礼をたっぷりしてやる・・・!!

ガキ大将出る・・・

今回の真犯人は俺から逃れるために全力で下っていたが・・・

「逃がさねえ・・・！」

「っ！」

俺は真犯人に対してバッドを思い切り横に振るとそいつは慌ててしゃがんだが・・・

「っらあああ!!」

「ぐっ！」

しゃがむのは予想していたから右に思い切り振ったのを左手でも持ち思い切り下に叩きつけるとそいつは苦痛な声を漏らしていた

「おい、お前は変声器をつかつてるのか？声は何処と無く可笑しいんだが・・・それとも変声器を使わないといけないほどバレたくないのか？」

「さてな・・・」

「まあいい・・・。どのみちお前をギタギタにするのは決めていたことだからその変声器は大して興味ないが・・・」

「！」

「・・・そのふざけた真似をしてくれたお礼はたっぷりさせてやる！」
俺は右足を思い切り前に踏み込み、バットをゆつくりと上げて・・・
相手が固まってるのを見逃さない俺は左足を右よりも大きく踏み込みバットを下に振り下ろした

oooooooooo!!!

風を切る音が聞こえたが・・・

「むっ!? (止めただと・・・?)」

「っは！」

「つととと・・・へへっ、まだ楽しめそうだな・・・」

俺は奴に何で防がれたのか分からないが、バックステップで後ろに下がりながら喋った。さつきまでは武器はなかったとなると・・・
「(隠しナイフ的なので隠していたのか？それとも未来の道具か?)どこちらにしても・・・木刀か？」

「暗闇なのによく見えた・・・な！」

「(こいつ・・・急にスピードあげやがった・・・。さつきまで遊んでいたと言うことか) ぐぐ・・・！」

「ああー！」

「おわっ！」

俺がバッドで防ぐと奴は木刀で対抗していた。たしか、のび太の話だと召喚獣を纏ったら召喚獣と同じ力を出せると聞いていたな・・・。なら、この程度で・・・。

「この俺様が・・・負けるかよ・・・!!」

「!? (馬鹿な!? 力は完全に此方が押ししてる筈なのに!?)」

「俺はジャイアンだ・・・あいつらの・・・ガキ大将なんだよ!!! っらあああ!!」

「がっ!? (木刀が!?!?!?)」

奴が驚いてるが俺は反撃の隙を与えさせずに左足を地面に置き、右足で蹴り攻撃をいれると奴は近くの木までぶっ飛んだ・・・。

木の近くまで吹っ飛ばされていたそいつは呻いていて動けなさそうになっているので俺は軽くバットを振りながら近づいた

「本来的な召喚獣のシステムは点数が0になれば戦死で補習行きとなっているが・・・この戦いやのび太の時も点数は表示されていなかったと聞く」

「ぐぐ・・・」

「点数を表示されていなかったと聞いたときはお前が弄ったのかそれとも、その腕輪が特殊なのか分からないが・・・終わりだ・・・」

俺は奴にめがけて気分は悪いが、バッドで軽く気絶させるために振ろうとすると・・・。

「な!?! (バッドが折れた!?!どこからの攻撃だ!?!)」

上に高くあげたときにバッドが折れた・・・。動揺した俺は目の前のこいつが何かしたのかと思ひ、見ようとするところ―

「がっ!!!」

横から攻撃されて俺は吹っ飛ばされた。痛っつ・・・。

「どこのどいつだ!!俺に攻撃したのは!!」

俺に攻撃したのは真犯人のやつだった。どう言うことだ?!まさか・・・

「分身とかの腕輪の能力か・・・?そういう腕輪能力は俺は知ってるやつか・・・?ら」

「さあな。それと・・・」

「何だ? (警戒緩めるな!何をしてくるか分からないんだから!!)」

「それと・・・ここは日本だぞ?ドイツではないぞ」

俺はその言葉に思わずつこけたのは悪くない・・・

「そういうこといつてるんじゃない!!ああもうバカなのか?!?!」

「貴様にバカと言われたくはないな・・・野性動物」

「(ピクツ)・・・野性動物といったな?お前」

「野性動物だろ?暴れっぷりといい、戦いかたも」

そうか、そうか・・・俺にそういうことを言うか・・・

ならば・・・

「今の言葉をはいたことを後悔しろ・・・」

俺はしゃがんで走る体制になった

あいつの聞いていた話の通りなら召喚獣と同じ力なら本来の人間
の力では出せない力も出せると言うことだな・・・

「何をする?まさか土下座でもするのか?」

「まあ見てな・・・(分身していたと思われるのが知らない間に一人になった。向こうは油断してるしこれはチャンスだな)」

「何をするつもりだ・・・?」

「まあ今から・・・覚悟しとき・・・な! (ダツ!)」

「速い!?!」

俺は全速力で目の前に迫り・・・

「!?!」

「俺様の大サービスだからお釣りはいらん!喜んで吹っ飛ばされな!

ジャイアンスペシャル技の1つ!!「ウルトラロケットスーパーパン

チ」

「がっ?!?!」

俺は思い切り奴の腹に抉るようにしつかりと腰を回して・・・腕を勢いよく振った

「召喚獣と同じ力ならかなりの力があるはずだ！おらああああお!!」
「があああ!!」

そいつは俺のパンチに耐えきれず木のほうにぶっ飛んだ・・・
「俺様のパンチを食らっては流石にもう立てないだろ・・・。さて、そろそろ連絡を・・・その前にショックガンがなぜ持っていたのか聞かないとな」

俺は倒れてるそいつに近づこうと思い、歩くと・・・

「あれ、ジャイアン？」

「な!!」（何でこんなところにいるんだよ・・・明久!!）」

俺に声かけてきたのはバカの代表の吉井明久だった。この時俺は明久に集中してしまったから一瞬やつをとどめ刺すのも忘れてしまった

「ああああ!!!」

「!しまった!!」

「え?ジャイアンなにその格好?コスプレ?」

「今はそれどころではないんだよ!!くそ!」

俺は今状況判断のみ込めていない明久に叱責を言うと共に奴は起き上がり・・・

「この代償は高くつく・・・!!」

「まさか・・・明久!!すぐにここから離れろ!!」

「え?ど、どういうこと!？」

「いいから!!」

「わ、わかったよ!後で説明きかせてもうよ!」

明久が離れたのを確認した俺は目の前に怒気をこもった声で喋っていた

「お前は危険だ・・・!ここで止めてやる!!」

俺はもう一度奴にもう一度同じ技で倒そうとしてしゃがんだ!体が多分痛めるだろうけど・・・さつきよりも強く!!速く!!

「英雄野比のび太も最後はこの技で負けた・・・。貴様もこれでおしま

いだ」

「腕に赤いのが・・・？どこがで見たことが・・・」

「食らえばただではすまんぞ・・・【熱閃】！」

「それは姫路のー!?」

俺がやつのだそうとしてる技に驚き、一瞬気を抜いてしまったのがいけなかった。奴は其を見逃す筈もなく攻撃を放った

俺はこの瞬間、のび太が何故やられたのかわかった気がした・・・。それともう一つわかった事がある・・・あれは姫路の召喚獣の技とそっくりだが・・・速さと重さが違う・・・

このジャイアンと呼ばれてる剛田武が・・・負けるなんて・・・いつ以来だ・・・

ーードゴオオオン

明久side

僕は夜寝れず何となく散歩していたら山の方に結界みたいなのが張られていたから気になり見に行くとジャイアンとフードつきの男が闘っていた・・・

最初はコスプレ?って思ったがジャイアンの叱責でただ事ではないと思ひ離れて逃げていたが上のほうに慌てて戻るとー

「・・・ジャイアン・・・!?!」

僕は近くの木でぐったりしてるジャイアンを見て驚いた

「ぐっ・・・くそ・・・」

「まだ立てる気力があるのか・・・とどめを刺そうと思ったが・・・やめておこう」

「っ待て!!」

フードつきの男が暗闇の中に混ぜられてどこかに行こうとしてるのを気づいた僕は思わず声をあげるとそいつは歩くのを止めた

「状況はよくわからないけど・・・今わかることは一つ!お前は危ない

やつだということだ!!」

「・・・力なきものが・・・そういつても説得力はない。俺は許さない・・・
力がないことに・・・!」

「っ!!」

「さらば・・・」

そういつて男は暗闇に今度こそ消えた。僕は明らかに可笑しいから追いかけてようと走ろうと・・・

「いくな!!明久!!」

ジャイアンが怒号で僕が追いかけるのを止めるため叫んだ。

「なら警察にでもー」

「それもダメだ!」

「何でーっ!?!」

僕は納得いかずに叫ぼうとジャイアンが今まで見たことない表情で僕を睨んでいた

「いいから聞け・・・!今回の・・・つく・・・とにかく明久、警察は絶対に呼ぶな」

「・・・わかったよ」

「とにかく・・・のび太のところまで行くからそこで話す・・・」

のび太のところまで?のび太もこの件に絡んでいると言うこと??

そう不思議で仕方がなかった・・・

僕らの知らない裏でいったい何があったのさ・・・

ひとつの報告

僕は家で横になっていると、インターホンがなっていたのでこの夜のインターホンは大方ジャイアンが捜査の結果が出たのだと思い直ぐに出ると……

「や、やあ……のび太……」

「明久……？って、ジャイアン!?」

「すまん……とりあえずお前の部屋でこの夜に出歩いていたバカに事情を説明しないといけなくなった……」

え……それって……ばれたと言うこと……?」

その確認の意味も込めてジャイアンを見ると、本当のようだった……

「あちやー……バレてしまったのか……となると今回の件全部話さないといけないじゃない……」

「本当にすまん。俺もまさかこのバカにばれると思わなかった。この夜遅くに歩くバカとは思わなかった」

「ねえ何で二回ともバカというのさ!? しかも力強く!!僕はバカではない!!」

「キング・オフ・ザ・バカとは吉井明久のことである。故に、バカとは明久のことを指す!」

僕とジャイアンが口揃えていうと明久は落ち込んだようにぎめぎめと泣いていたが事実だから仕方ないでしょ……

いつまでも玄関にいるのはあれだから、とりあえず僕の部屋にジャイアンと明久が部屋に入ってきた

「さて……どこから話せばいいやら……」

「あの……その前にいいかな?」

「ん、何?」

「この件……雄二達とかに力を借りるのはどうかかな?」

「ダメ」

明久の提案に僕とジャイアンは即答で否定したのに対して即答された明久は驚いて立ち上がった

「なんで!?!雄二達の力を借りればー」

「もし借りてどうなる?それに今日ここで話せないよ」

「ーどう言うこと?」

「この件を話すにはある人の許可をもらわないといけない。それと・・・」

「それと・・・?何?」

「今回の件は・・・可能なら見なかったことにしろ」

「・・・え・・・?」

ジャイアンの言葉に明久は理解不能なのか固まっていたが、僕にはジャイアンの考えは分かる・・・

「・・・一つだけ教えられることがある」

「!のび太!?!」

「全部話す訳じゃないからいいと思うよ・・・。明久、最近のニュースは見てる?」

「ニュース?えーと・・・トライアスロンに鉄人が出るという話とか?」

「そんな話聞いていない!!?つてか、それニュースにはなっていないよ!?!」

「あとはーヤンデレ彼女にお仕置きされる残念な彼氏とか?」

「・・・君はなんのニュースを見てるのさ・・・」

「つてか、ヤンデレ彼女にお仕置きされる残念な彼氏つて身近にいそうな気がしてるんだが・・・気のせいかな?」

本当に明久はニュースを見てるのか怪しいけど・・・仕方ない

「最近の物騒な事件あるでしょ?死者は出てないものも負傷者が多いって感じの」

「あ、それなら知ってるよ!!全員その時の記憶がないって聞いている!!」

「まあ、俺らはそれと在ることに何らかの関係がないのか捜査していったんだよ・・・」

「あること・・・」

「捜査していくとあることでの真犯人と遭遇した結果がこれだ。俺とのび太もそいつに負けたというわけだ」

「説明が大雑把すぎてわからないよ・・・。要するにのび太もジャイア

ンもそいつに負けたということだよね？」

「そういうことだ」

ジャイアンの説明が大雑把すぎてなのは否定できないけど……
まあ、負けたという事実は本当だもんね

そう思ってるとー

「つ明久、しゃがめ!!」

「え、うわ!!」

ジャイアンが明久の頭を無理矢理下げると僕は銃を撃った

ーパアアアン!

撃たれた相手は……

「流石だな……ここに居るのを気づいたのは」

「どうやって侵入してきた……!?!」

「ふむ……。これを見たら分かると思うがね……。しかし、どうやって気づいたのかね?」

侵入してきたそいつは僕とジャイアンを倒した敵がいたのだ。対するそいつはそれを見せながら何故気づいたのか聞いてきた

「足音さ。それとその道具を使うなら普通はゆっくりと歩くものだけどー」

「足音だと……。?なるほど確かにそれは意識していなかったな」

「ジャイアンは明久を守ってね」

「わかってる」

僕はジャイアンに明久を見守ってくれと指示だすとジャイアンは頷いていた

「君がそれを持っているのは【透明マント】だよね……」

「ほう……。やはり知ってるのか?その道具を」

「……。これで確信したよ。君は未来から来たんだよね……。?現代の技術ではその道具を作り上げるのは不可能だし、尚且つ……。僕とジャイアンの事も知ってるとなると未来から知ることが可能だ」

「……」

「そのふざけたボロボロのフードと仮面は何なのかは知らないけど……。ね。少なくとも未来から来たのは確かでしょ?」

「ふむ。確かにその仮説は半分は合っている……。ここで君らと事を構えるのはよそう」

するとそいつは後ろから黒い穴があいた。そいつが未来からきたとなれば……。!?

「おい、あれは……」

「まさか……。！未来に逃げる気か!？」

「逃げる……。？ふむ、まあ本来の目的は果たしたことだし一つだけ教えておこう」

そいつは気のせいかな明久を見ていた

「ーありえた別世界つてのも存在するのは君らならよく知ってるはずだ。最も今の君らではそこまで関与はできる力は失ったがねー」

「??」

「!」

「では失礼する……」

「まて!!」

僕は弾丸を放すも一歩遅く消えた……

つまり……

「完全にこの世界から逃げられた……。！」

召喚システムを盗まれて尚且つ、完全にこの世界から逃げられた……

そいつが逃げた先を悔しそうににらむジャイアンと僕。そして、明久は事情がわからず困惑していた……

謝罪と報告

翌朝になり、僕は事前に学園長に話して良いか許可を求めたら：：『あんたらで手が負えないと判断したのなら任せるよ。ガキどものメンバーも任せるがあくまでもシステムを取り戻すことを最優先だよ！』

と言うことで、とりあえずジャイアンとスネ夫と明久に僕の家に来てもらうことになったのだがー

「なぜこうなった・・・」

「のび太君・・・まだ私の質問にきちんと答えていないよ？何で私達には内緒にしていたの？」

「・・・えーと・・・」

「・・・答えなさい」

「はい・・・」

僕は正座しながら美子さんに今回の件を話すことになった・・・美子さんを連れてきた明久め：後で絶対になにか仕返ししてやる：今のうちに大笑いしとくんだね！

「聞いているの!？」

「ごめんなさい！きちんと聞いてますから答えますか!!」

まずは美子さんに納得させる説明をしないと!!

明久 side

僕らは影で隠れて聞いていたが僕は聞いていてあきれて仕方なかった

「のび太もバカだなー。彼女さんの三上さんに隠し事をしていたらそりゃあ、三上さんも怒るよね？」

「いや、のび太が聞いていたら『明久にだけには絶対に言われたくない!』と思うが?」

「いや寧ろお主らがいつても説得力ないぞ」

「・・・隠し事がへ々な二人（カチャカチャ）」

ムツツリーニが必死に隠れてカメラをとって苦言を言うけど・・・
「つて、おまえが言うな!!ムツツリーニ!!」

「・・・何故に」

「大体ムツツリーニは俺らよりたくさん隠しているでしょ?!

「・・・そんなことない(ブンブン!)」

ムツツリーニが必死に横ふるが絶対に僕よりムツツリーニの方が
多く隠してそう!!

「アキは隠し事をしてないとも?」

「当然だよ!」

僕は隠し事なんてないよ!!

「当然俺もな!」

隣にいた雄二が胸を張って答えていたがー

「なら、雄二の本棚の下から三番目に霧島さんから隠してるものは伝えてもいいんだな? 明久はベッドの下にポニテール巨乳のグラビア雑誌隠してることをはなしていいんだな?」

「・・・え?」

僕は声を来た方に振り向くとジャイアンが悪い顔で立っていた・・・

「いやあのー」

「隠し事なんてないんだろ? なら伝えても問題ないんだな?」

「すいません。伝えるのだけはやめてください」

僕はジャイアンに慌てて土下座した。プライド? なにそれ? 美味しいの? そんなのとつくの昔に捨てたよ!!

「つたく・・・明久」

「ん、なに?」

「俺とのび太とスネ夫は確かに事情を話すといつたが・・・なんで・・・なんで!! なんで、坂本たちもいるんだあ!」

ジャイアンが怒りながら雄二達の方に指差していた

「え、なんでつて・・・いいっていつていたでしょ? それに大事な話ならみんなもいた方がいいじゃない?」

「お前は・・・はあ・・・もう怒るのつかれた・・・」

「?変なジャイアン・・・スネ夫は?」

「スネ夫は真理亜さんに連絡していて、電話越しに今回の話をしてる。・・・おまえが真理亜に伝えてしまったお陰で俺は真理亜に怒られたぞ・・・」

物凄い疲れた顔をしていたジャイアンを見て、まあジャイアンもひどい怪我だったからね

そう思ってるとー

「アキ?」

「明久くん」

「あれ?可笑しいな・・・僕の両肩がメキメキとなっているけど・・・」

「今の話・・・少し向こうでお話しましょう?」

「あははは、姫路さんと美波ったら肩が痛いよ。・・・ってあれどこにつれていかれるの!?!」

ちちよつと待って!僕どこにつれていかれるの!?

「私たちとO☆H A☆N A☆S I (です)よ!」

「ちちよ!?!まつーいやああああ!!」

僕はどこかに二人に連れていかれた・・・

意識戻ったのは数分後だけど僕っていったい何されたのか誰か教えてくれない?

のび太side

あの後ようやく僕は美子さんにきちんと説明をすることができた
が・・・

「そう・・・」

説明し終わると終始沈痛な顔をしていた。本当に申し訳ない・・・
大切な恋人にこれを隠して戦っていたのは・・・

「全く・・・のび太くんだったらとんでもない無茶をするのね・・・ま
だ体もそんなに回復していないでしょ?」

「・・・うん」

ーのび太、入っていいか?

「のび太君、私は入っていいと思うけどどうかな?」

「もうここまで来たら明久も事の説明を話すよ……起きた最悪の事をね」

「じゃあはいるね? さ、話して?」

「……さ、話して? じゃないでしょうがああああ!!! (スパーーーーン!）」

「いったあああいい!!」

僕らはもうオツケーと言う前に明久がさらっと入ってきて座り込んだ。オツケーを言う前になに入ってきてるのさ!!!

「つたく……来たメンバーは?」

「俺と坂本とムツツリー二と秀吉と島田と姫路だ。そしてそこにボロボロになったBのつくもの」

「……(ピクピク)」

「そっか、スネ夫は?」

「真理亜に今回の説明をしてる。このバカが伝えたお陰で俺は真理亜に怒られたよ……。それにアイツらはスポンサーだからそれも話し合っていたんだろう」

するとドタドタと急いではしって僕の部屋に入ってくるものがあった

「のび太、遅くなった!」

「やあ、スネ夫。……ごめんね、バレて」

「いや仕方ないよ。今回は……」

「真理亜は?」

「今は海外で仕事もしてるからすぐに日本に帰るのは難しいのでジャイアン達で事件を解決することにしたよ」

スネ夫がさっきまでいなかったこと、この状況を全部話した後に僕らはこの件を黙っていたメンバーに事の重大な話をしていた。尚、美子さんは先に僕が話したので驚いていなかったが、知らなかったメンバーは怯えるものもいた

「……なるほどな、それであるときの野球で突然召喚獣が消えたのか」「じゃが、召喚システムを盗まれたのなら何故学園長はワシらに頼らなかったのじゃ?」

「考えられるのは、その時にのび太らがいたから？」

「でもそれだと後で連絡くれるはずですが・・・」

「・・・ねえ、質問があるのだけど」

事の重大な話をしてそれぞれが意見を出してる中、明久が難しい顔をして質問してきた

「何だ？」

「昨日のその男？に対して未来の道具っていつていたよね？それどう言うこと？」

「・・・」

「後黒い穴の事も聞きたいのだけど・・・」

「少し待って明久」

僕は明久に色々質問するであろうからまずは制止をかけた

「色々質問に答えたいところだけど・・・その前にこれはジャイアンもスネ夫も知らない事なんだ」

「俺らも知らないこと・・・？」

「もしかって・・・!？」

僕はゆっくりと立ち上がりながら・・・かってそこで寝る場所として寝ていたアイツのドアを僕は開けた

「襖から開けてどうするんだ？」

「待ってね・・・えーと・・・あつたあつた！」

「「「「??」」」」」

僕は襖からあるものを取り出したらジャイアンもスネ夫も知らないと思われるあるものを取り出した。美子さんがみんなを代表として質問をして来た

「のび太君・・・それは？」

「・・・こいつはね、ある親友が道具を残して帰った物なんだ」

僕は立てていた写真を見ながらそいつを握りながら皆に説明した

「本当ならこの時代に残してはいけないものってなんだけど・・・これはアイツと僕が繋いでくれる唯一の最後の手段なんだ」

「最後の・・・」

「・・・手段？」

「まさか・・・のび太、その道具は!!」

その質問に僕はゆっくりと頷いていた

「うん。ジャイアンもスネ夫もわかると思うけど・・・アイツを呼ぶための道具さ」

「でも呼べるのか?」

「そうだよ!もう何年もたっているんだよ?通信が繋がらない可能性だって」

「大丈夫だよ。それに・・・僕が本当に困ったときにいつも助けてくれたじゃない」

「・・・」

「あのー、のび太君。その道具はなんですか?」

「こいつは・・・現在と未来へ繋げるための唯一の連絡手段・・・22世紀の道具さ!!!」

「「「・・・22世紀の道具?」」」

僕の力強い言葉にみんなが???となっていた・・・もう迷ってる暇なんてないんだ・・・繋がってくれよ!!

約束を果たすとき……

思い出すのはあの日のアイツが帰ってこなくなった日の事だ……。今思えばあれが最後だったんだね

『のび太君、僕は今未来に一回帰るけど念のためにこいつを置いていくね?』

『……うん』

『僕がこちらに帰れなくなった場合のためにこいつをおくけど、たった一回しか使えない』

一回しか……。そう復唱しているとアイツは心配そうに言っていた

『やっぱり僕は帰らないでー』『ううん大丈夫だよ』のび太君』

『約束するよ……。きつと一人でも立ち上がれることをね』

『……』

『本当に困ったときには使うかもしれないけど……。でもね、そのときが来たときは頼むよ?』

『わかったよ……。必ずまた会おうね?』のび太君』

アイツは僕に手をさしのべてきたので僕も手を出して力強く握り約束した

『約束するよ……。ドラえもん!!』

そしてアイツは未来に帰り……。僕はアイツの約束を破ることなく頑張ってきた……

そして……。今……

あのときの本当に困ったときが来たのだから頼るよ……

ドラえもん……

「のー太」

君は……。この約束を覚えてるかな?

「おーー」

本当に約束をしていたこと今の君の届くかな?

「のび太君！」

「っうわ?!」

「僕は気がつくとも美子さんの顔が目の前に迫っていたのに慌ててしまった」

「急に遠い目になってどうしたの？」

「あ、ごめんごめん」

「で、それが22世紀の道具って言うけど・・・何て言う名前なの？」
「タイム電話って言ってねこれで電話を繋げることをできる手段だよ」

「「はっ?!」」

「そんな手段あるの?!」

明久は驚いて声を高く上げていた。他のみんなもビツクリしていた

「・・・言ったでしょ? 現在と未来へ繋げるための唯一の連絡手段とはこれさ」

「なら何で今までそれで連絡しなかったのさ？」

「しなかったんじゃない・・・出来なかったんだ」

「「出来なかった?!」」

みんなが疑問を言っていたので僕はゆっくりと大切な親友との別れ間際の話をした。たった一回しか連絡できない事も

「じゃあ・・・」

「そう。たった一回だけしか連絡しかなければけど今しかない・・・」

「なんで?? 犯人を追いかければそれを使わないで済むでしょ？」

「「・・・(ズウウン)」」

「ちよっ?! 二人ともどうしたの？」

「美波はバカだなー。だからFクラスにーって美波様? 私の間接はそこまで曲がりませんが・・・?」

「だ・れ・が・・・バカよおおお!!」

「あんぎやああああ!!!」

「さそり固め!? 女性がやる技じゃないよ!」

「いつもの事だからスルーしよう? スネ夫」

「・・・それもそっか」

「タスケテー!!」

明久の悲鳴があるが知らないふりにしておこう。自業自得だから

「さて・・・コントはおいといて」

「コントとか言うな!!」

雄二の言葉に明久がそういうのが明らかに見慣れたコントしている
としか思えない・・・

「まあまあ、時間もないからとにかく連絡いれてみたら?」

「確かにそうですよね」

「ま、話を聞く限り事を急いだ方がいいみたいね」

美子さんと姫路、島田が冷静なコメントでごもつともな意見を出していた。ムツツリーニは何を想像したのか血まみれになっていたし、
そのとなりには秀吉がケアしていた

「この数分で何があったの!?!」

「・・・想像は偉大(ピクピク)」

「お主は何を想像したのじゃ・・・」

ムツツリーニの言葉に秀吉はごもつともな突っ込みいれていた。

確かにその通りだけど正直問い詰めたいがまっいいか

「まあいいよ・・・。とにかく電話するから黙ってね?」

「やり方わかるの?」

「まあ・・・何となくね」

僕はタイム電話をいじろうと思っていたが・・・怖くって震えてい
た

「のび太・・・」

「ごめん・・・何か電話繋がるか不安になって・・・あははは、なに
弱気になってるんだらうね。情けない・・・」

「大丈夫よ・・・」

「美子さん・・・?」

「きつと繋がるよ」

「・・・うん!」

僕は美子さんの言葉に不思議と心が落ち着いていた。やっぱり僕は彼

女がいないとダメだなーと本当に思うよ・・・

「じゃあ・・・連絡するね」

「！！・・・(ゴクン)！！」

ピロリン♪ピロリン♪ピロリ

「！！！！！！！！」

《・・・まさか、君から連絡してくる日があるなんてね・・・驚いたよ》

「！！」

通信が繋がりが懐かしい声が聞こえた。その声にジヤイアンとスネ夫は目を見開き、僕はにやけそうな気持ちを押しさえながらもしっかりと返事した

「うん、こういう日が来るなんて僕も思わなかったよ。・・・久しぶりだね、ドラえもん」

画面の向こうでは僕以上に嬉しそうに笑っている大切な親友・・・あの別れた日以来の会話・・・ドラえもんが嬉しそうに笑っていた・・・

再会と衝撃

色々と話をしたいが今は本当にこちらは大変なことになっているんだ。だから、昔話はおいというて今は出来るかできないかを聞かないと

『本当に久しぶりだね。画面越しだけどあの頃よりしつかりするようになったね・・・』

「うん・・・。ねえ、ドラえもん」

『わかってる。・・・もう僕の体も問題ないし、そちらにいくよ』
「いけるの?」

あのとときは点検のあとに帰ってこなくなったんだね・・・。もう帰ってこないと思ったのだけど・・・こちらに来てくれるなんて・・・助かるよ

『うん。・・・そちらに向かう前にひとつだけ確認したいけどいいかな?』

「何・・・?」

『助けようか?のび太君』

「うん、僕らを助けて?ドラえもん」

『了解!すこしまつてね!必ずそちらにいくからね』

「タイムマシンは問題ないの?あと法律とかそんなの変わってないの!?!」

『バッチリだよ!タイムパトロールの法律は昔のまんまだし、大きい問題はないよ!じゃあいくね!』

そういつてドラえもんはスイッチを切ってこちらに向かうことになった

「・・・相変わらずそこそこしいな」

「いや、お前もたまに昔の癖出てるぞ」

「そうだよ。この間だつてーじゃないか?」

「なっ、そういうスネ夫だつてこの間ーでしよ!?!」

「まあまあ、お前ら落ち着け」

「うるさい!!シスコナー!」

バキ！ボギ！

「落ち着いたか」

「……はい（プスプス）」

うう……久しぶりのドラえもん絡みで熱くなりすぎてたんこぶんが痛い……

「あ、あのー……」

姫路がおずおずと手をあげていたので、僕ら三人はそちらの方に見ていた

「ん、どうした？」

「ドラえもんさんは本当にこちらにこれるのですか？」

「あ、うん。これるよ」

「タイムパトロールってのは何なの？」

「そうだね……島田達で分かりやすく言うなら警察みたいなものさ」

「「警察?」」

「つまり、犯罪者を取り締まるためのものか？」

「うん。雄二の答えが正解だよ」

「タイムパトロールの役目って何じゃ？犯罪者を取り締まるためのとはいえよくわからん」

「まあ簡単にいえば、歴史を改変すること事態が犯罪ってわけだ」

ドラえもんが来るまでにスネ夫、ジャイアン、僕が相手になって答えていた。まあ、タイムパトロールとかタイムマシンとかのキーワード出たら気になるよね

「でも、どこから出てくるのさ？」

「あそこの机あるでしょ？机の引き出しにドラえもんが出てくるよ」

「あははは、のび太も面白い冗談言うねー。まさかここから出てくるわけないじゃー」 「がしやんー」 「ー」 「がぼお!!」

「「明久（アキ）（君）!?!」」

「「おー、見事に吹っ飛ばされたね」」

明久は引き出しの方に寄っていた為、引き出しが勢いよく開いた瞬間に吹っ飛ばされた。その光景に見慣れない面子は驚き、僕ら三人は冷静だった

「いたたた・・・」

引き出しから声が聞こえたので僕とジャイアンとスネ夫はゆつくりと立ったのと同時に引き出しから見慣れた手が出てきた

「あははは・・・久しぶりだね・・・」

「・・・おう、全くずいぶん遅い帰宅じゃねえか？」

「そうだよ。お陰で僕らは高校生になったじゃないか？」

「ドラえもん」

僕ら三人声揃えるとゆつくりと出てきた

「いやー、僕の体の点検も長かった訳だし時が経っているのは当たり前だけど君達はあの頃と見違えるほど立派になつてもう高校生とは驚いたな。・・・3人とも見違えたよ。・・・ただいま。のび太君、ジャイアン、スネ夫」

「「っ・・・お帰りー！ー！ドラえもん!!!」」

「っうわー!?!」

僕らはドラえもんに思いきり飛び込むようにダイビングするとドラえもんも思いきり驚いていた

何年ぶりだろう・・・こうやって抱き締めるのは！何年ぶりだろう・・・こうして会話できるのは・・・

また・・・また・・・

また話すことができたね・・・ドラえもん!!

感動の再会は終わり、僕らは改めて自己紹介をすることにした

「初めまして皆さん。僕は未来の猫型ロボットのドラえもんです」

「ドラえもんは22世紀から来た猫型ロボットなんだ」

「あの・・・ごめんなさい。猫型には見えませんでした・・・」

「ごめんなさい。私も」

「ウチも・・・」

女性が先に謝られたのでドラえもんはやりようのない怒りがあつたが耐えていた

「なら今度はこちらから挨拶するのが礼儀だな。俺は坂本雄二だ」

衝撃は止まらない!?

ドラえもんの絶叫を聞いて数分たって落ち着いた。僕と美子さんはまだ顔が真っ赤で熱くって仕方がなかったがなんとかばれないように落ち着こうとしていた

「あのノロマでナマケモノののび太君が彼女できたなんて驚いたよ。しかも相手はしずかちゃんではなく、三上さんなんて・・・」

「今さらつと毒吐いてなかった? ねえ、のび太」

「まあ、僕も驚いたよ。自分がこんなきれいな人と付き合うなんてね」
「き、綺麗だなんて／＼／＼」

「あれ、僕の言葉スルーなの? ねえ、スルーなの?」

「諦めろ。俺達では5人だったときはいつも通りの会話なんだ」

「いつも通りなの!?!」

「つと話それてしまってるよ。ことの説明をしないとダメだろ?」

僕らのやり取りに明久が突っ込み入れるが、僕とドラえもんのやり取りにあれば正常のやり取りだというジャイアンの言葉に驚き突っ込みを入れていた

スネ夫に言われて今回読んだ経緯を話すとドラえもんは腕を組ながら難しい顔をして考えていた

「ーというわけなんだ。明らかに時空犯罪の可能性が考えられるのだけどう思う?」

「未来からきた人物と証拠となる道具か・・・少し見てて?」

「あ、うん」

「これは・・・確かに22世紀の道具と変わらないけど・・・可笑しいな」

「」「可笑しい?」「」

ドラえもんの言葉に皆は疑問に持ったのだ。どうみても22世紀の道具だと思うけど・・・

「あ、うん。確かに22世紀のとそっくりなんだけどこれは・・・明らかに僕らの時代よりも構造が悪いし何だか危険な感じはあるんだよね」

「なら、考えられるのは3つか?」

「ジャイアンもきづいた?」

「「3つ?」」

「うん。まず1つはあの盗んだ犯人が未来人。つまりドラえもんみたいに22世紀からきたのかそれ以降の人間がきたのかだね」

ギガゾンビみたいな可能性も考えられる。何せ僕の名前を知ってるのは明らかに可笑しいんだね・・・

「二つめは?」

「これこそ一番あり得ないけど・・・別世界からきたパターンかな。しかし、それだと納得できる点あるけどね」

「でも、ククルみたいに時空乱流でこの時代に来るにしても変えるのはどうやって」

「それこそ未来のタイムマシンでのつて時空乱流に飲み込まれた可能性があるよ。そして運良くこの時代に着いたことも考えられる」

なるほどね。あくまでも可能性としては捨てきれないし・・・いや、でも別世界となるとまた難しいような気がする

「3つ目は?」

「・・・あくまでも予想だけどまだこの町に潜んでいる可能性も考えられるよ」

「「!!」」

ドラえもんの言葉に皆は驚いていた。3つ目の言葉は予想をしていなかったからなおさらね・・・

「3つ目の可能性は際どいとおもうよ」

「だな」

僕とジャイアンは3つ目の可能性を否定していた

「なんで?」

「明久も見たと思うけど、あの黒い穴はね恐らく僕らの記憶が間違えていなかったらタイムマシンの出入口だよ」

「タイムマシン!?!」

「だけど、今の僕らじゃあれがなにかもわからないしね」

「うーん・・・のび太君。その人と対面したのは何時ぐらい?」

「えーと、昨日の夜○時かな？」

そういうとドラえもんは四次元ポケットをあさり始めた。その光景に僕ら三人以外は目を見開いて驚いていた

「あつた、あつた！【タイムテレビ】??！」

「うわ、懐かしいな??」

「何か昔より更に見た目良くなっていない？」

「ふふん♪22世紀で伊達に長く帰省していた訳じゃないからね！」

そう言いながらもドラえもんはタイムテレビで先程いつていた時刻を合わしていた

「これだよね？」

ドラえもんが皆に見えやすいように見せてくれた。明久達は驚いてかたまっていた

『流石だな・・・其を気づいたのは』

『どうやって侵入してきた・・・!』

『ふむ・・・。これを見たら分かると思うがね・・・しかし、どうやって気づいたのかね?』

『君がそれを持っているのは【透明マント】だよね・・・』

『ほう・・・やはり知ってるのか?その道具を』

「ここまでのやり取りに姫路がおずおずと聞いてきたので映像は少し止めた

『透明マントって・・・』

「まあ、簡単に言えば透明人間になるもんだな」

「そんなのあるのですか!？」

そう話してる間にも映像は再開した。

『ふむ。確かにその仮説は半分は会っている・・・。ここで君らと事を構えるのはよそう』

するとそいつは後ろから黒い穴があいた。そいつが未来からきたとなれば・・・!？」

『まさか・・・!未来に逃げる気か!』

『逃げる・・・?ふむ、まあ本来の目的は果たしたことだし一つだけ教えておこうーありえた別世界つても存在するのは君らならよく

知ってるはずだ。最も今の君らではそこまで関与はできる力は失ったがねー』

そのときの僕は逃すわけにはいかず弾丸を放すも一步遅く消えた・・・

映像はそこで終わった・・・

「「「・・・なにこれ?」「」」」

昨日その場にいなかったメンバーは映像をみてビックリしていた

「ふむふむ、こういうことか・・・」

「で、ドラえもんの道具でこいつはどの時代かわかるかな?」

僕はドラえもんの道具でなにかわかる方法はないか?とときくと

「七万年前にククルの時に探索した道具でもいいけどあれは時空乱流を調べるためだったし・・・うーん・・・」

「時空犯罪の可能性は高いと思うけど・・・」

「いや、それだとすでにタイムパトロールが動いてるはずだろ?」

「でも、このショックガンで年代測定できたらどの時代から来たのかわかるのではないかな?」

「「「「・・・(プスプス)」」」」

「明久たちがオーバーヒートしてる!」

僕らがドラえもんの道具でなにかわかる方法ないのか話していたら明久たちが頭から煙出ていて理解不能と言う感じになっていた

「ってあれ?美子さんは大丈夫なの?」

「ええ、なんとなくドラえもんさんが未来から来ている時点で犯人を捕まえる方法は沢山あると言うことね」

「まあ、大まかに言えばね」

「ってか、あの黒い穴本当にタイムマシンなのかな?わからない・・・とにかく少し時間がほしいから調べてみるよ」

「お願いするね。どのくらいの時間必要?」

「うーん・・・今すぐに追いかけたいのだけど闇雲すぎるのは怖いな」
「まあ、なにしても急いで追跡できるようにするけどまずは準備しておくけどいくメンバーを決めたい方がよいと思うよ」

ドラえもんの言葉に僕は納得していた。確かに人数が多いし、少なくとも僕とジャイアンとスネ夫とドラえもんは確定だ。メンバー決めとかないとな……

ピンポーン♪

「あれ、誰か来たのかな？」

「ドラえもんは皆に色々と言明しててね？」

「了解ー」

僕はドラえもんにとりあえずいま言った道具の説明をしている間に僕は玄関に出ていったのだ

「はいはいどちらさ……」

僕は出ていて相手の顔を見たときに見て驚いたのだ。何故ならその子はいま日本にいない筈なのに……

「久しぶり……のび太さん」

「し……しずかちゃん……」

僕の初恋の人で僕らの仲間であった人……そして僕らのアイドルであったしずかちゃんが僕の家に来たのだ……

本当にここ数日でなんて日だ……

修羅場？

僕はいま目の前の状況に困惑して仕方ない。何故なら・・・

「久しぶり・・・のび太さん・・・」

「し・・・しずかちゃん・・・」

僕の初恋の人で僕らの仲間であった人・・・そして僕らのアイドルであったしずかちゃんが僕の家に来たのだ・・・

「な、なぜここに・・・？海外いつていたのじゃあ・・・？」

「今日こっちに帰国してきたの・・・本当はあなたに会うのは気まずかったけど・・・なんだか今日の内に会つとかないといけない気がしたの」

「そ、そっか・・・」

「・・・」

お互いに気まずくなり喋られ無くなった。どうしよう・・・あのときに告白して別れたのだから・・・

「しずかちゃん・・・折角だから僕の部屋にきて？・・・会わしたい人物がいるんだ」

「・・・え？」

「時間は・・・ある？」

僕の問いにしずかちゃんは・・・

「・・・ええ、お邪魔します」

静かにそしてゆっくりと頷いた・・・しずかちゃんは靴を脱ぎ、僕と一緒に二階に上がったのだが、その間はなにもしゃべらなかつた・・・

僕はゆっくりとドアを開けた

ーガチャ

「あ、遅かったなのび太・・・え・・・」

「のび太が戻るまで少し大変だったの・・・だ・・・か・・・え？」

「もうのび太君、おそ・・・え？」

「・・・え・・・」

僕が入ると同時にジャイアンとスネ夫が僕に苦言を漏らそうとし

て振り向いたら固まり、ドラえもんも僕の方角に見ると固まっていたが……一番驚いていたのはしずかちゃんだった……

「……やっぱりこうなるか……」

「のび太君……その子は……?」

「美子さん……僕が昔告白して……僕の恋報われることなかった相手だよ」

「……この人が……」

「それと美子さん……」

「?何?」

僕は静かに明久の方を指差すと美子さんは納得したように頷き、説明してくれた

「吉井くんが不用意な発言で美波と瑞希にお仕置きされたの。土屋くんはいつも通りで秀吉くんは傍観していて、坂本くんは……」

「すまん!翔子!すまん!だからお仕置きはやめてくれ!」

——「だめ……絶対に許さない……」

「畜生!」

「——納得したよ」

僕はいまの状況に納得して美子さんの言いたいことが分かったので納得したよ。……悲しいかな……人間なれてしまうとある程度スルーするんだよね……

「……さて皆取り敢えず、正気に戻ってね」

「「「はっ!」」」」

「だから翔子、ゆるしてくれえええ!!!」

「……絶対に許さない」

未だに必死に謝っている雄二をスルーして僕は皆に呼び掛けたら皆は慌てたようにはつとしていた

「ジャイアンとスネ夫とドラえもんは知ってるけど、取り敢えず自己紹介をしてね?初対面の皆もしてね」

「え……ええ……」

「やっぱり戸惑うよね」

気を取り直してしずかちゃんは自己紹介をし始めた

「皆さん私の名前は源静香です。武さん、スネ夫さん、のび太さんの友達です」

「あれ？しずかちゃん久しぶり〜」

「つてドラちゃん!? 未来に帰っていたのじゃあ・・・」

「色々と訳あつてね。取り敢えず訳を話す前に彼らも自己紹介するか
ら」

「初めましてです。私は姫路瑞希です」

「ウチは島田美波よ」

「・・・土屋康太」

「木下秀吉じゃ」

「俺は坂本雄二だ。久しぶり・・・とはいっても同じ小学校だったのは覚えてないか」

「そして僕は吉井明久だよ」

取り敢えず一通りのFクラスのメンバーを紹介し終えたので最後には――

「えっと・・・初めまして。私の名前は三上美子です」

「そういえば、のび太と美子さんはつきあっているんだったよね？それ言わなくていいの?」

「二二(このバカ!?!いま言うときじゃないでしょ!?)二二」

「空気読みなさあああああい!」

明久の言葉に皆がやってしまったと言う顔と島田が明久に制裁を加えていたが僕はなんも見えていない

そんな話にしずかちゃんは・・・

「・・・そつか、のび太さん。漸く新しい恋人見つけたのね。本当に守りたい人を」

「・・・うん」

「あのときの告白の返事は偽りはないわ。でも・・・正直心配だった」
「・・・」

「あんな振り方で良かったのかなって言う気持ちがあったのだけ
ど・・・前へ進んでいてよかったわ」

「うん。ちゃんと前へ進めているから安心してね」

「良かった・・・」

僕としずかちゃんはお互いに安心した笑顔で何だか小さなわだかまりが溶けた気がした

「でもなんでドラちゃんが？」

「まあ、少しトラブルでこの時代に戻ってきたのさ。しずかちゃんは？」

「三日前に海外から帰国してきたのだけど今日の午後にまた海外帰る予定なの」

「え？時間は大丈夫なの？」

「大丈夫よ。とはいってもすぐに動く前に、せつかくこっちに帰っていたからのび太さんたちに会いたかったの」

「そっか。わざわざ来てくれてありがとう」

「何かトラブルとなっているのなら助けたいのだけど・・・家に家族待っているからここで失礼するね」

「そっか」

しずかちゃんは忙しいなかにこちらに来てくれたのは嬉しかった。本音を言えばもつと話したかったけど・・・

「私は皆と共に手伝えないけど・・・三上さん」

「はい」

「のび太さんのことをお願いね・・・。ほつといたらのび太さんは無茶する人だから」

「わかりました」

「あ、あと・・・ドラちゃんがいるならもしかしたらどこかでゆつくり話せる機会あると思うから今すんでいる場所だけ伝えておいとくね？」

「うん。そういえばしずかちゃんはいまなにしてるの？」

「あ、私は・・・今は海外の音楽高校で通ってるの」

「おおマジか!?なら今度俺とコラボでリサイタルしないか!？」

「か、考えておくわ・・・」

「「「「・・・(ガタガタ)」」」」

音楽学校通っているというけどジャイアンのリサイタルでさえき

ついのにしずかちゃんのも何てきついでしょ?!?!?

「じゃあそろそろ行くわね。・・・のび太さんたち気を付けてね?」

「うん、頑張つてね?しずかちゃん」

「ええ、・・・きをつけてね?」

「「うん」」

かつて冒険仲間だった僕らはそれぞれを信頼してるからこそこれ以上の言葉はいらなかった。こうしてしずかちゃんは海外に帰るために僕の家を出た

またね・・・しずかちゃん

メンバーは・・・

さて、しずかちゃんはいなくなったけど・・・取り敢えず、ドラえもんからある程度説明きいたと思うけどだいじょうぶかな

「さて・・・今すぐ犯人を探索して追いかけるぞ！といたいところだけど・・・調べるまで時間がかかるからわかり次第に翌朝に行動うつすよ」

「「「了解！」」」」

「いやまちなよ?!行くメンバーを決めとかないの!?!」

明久の言葉に・・・

「ああ、それなら行くメンバー取り敢えず少数は決まっている」

「「「えっ・・・?!」」」」

僕がそういうと明久たちは固まっていた

「行くのは僕とジャイアンとスネ夫とドラえもん。この四人は確定なんだ」

「まさか四人だけ行くつもりなの!?!」

「そうよ!?!私たちにこれだけ話しておいて!?!」

「お前ら落ち着け・・・。お前のことだからなんか訳あるのか?」

さすが雄二。冷静に聞いてくれてありがたい

「うん、まずこの四人が確定してるのは過去の冒険や危険なことを経験してるから大丈夫なんだ」

「それなら僕らだっついていてるよ!?!」

「話を最後まできいてね?取り敢えず、他のメンバーも全員つれていきたいけど流石に厳しいと思うから分けるんだ」

「え?どういうこと?」

「まず行くメンバーを選ぶ理由のひとつは時空犯罪者がまだこの町に潜んでいる可能性があるから僕らと同行しないメンバーはここの時代で待機してもらいたい」

「つまりこの場にいる何人かがこの時代に残っておけばいざというときに対応できると?」

「うん。それともうひとつは・・・」

「もうひとつは・・・?」

「人数的なもんだいもあるんだ。大勢に乗れば危険だからね」

ドラえもんの言葉に島田がゆつくりと疑問に思いながら質問した
「どう危険なの?」

「・・・落ちた場合永遠にこの時代に帰れない可能性もあるからかな」
「納得です!」

まあ、人数的なものは確かだと思うよ?なにせ、この人数でいけば
その可能性もあるからね

「あと何人ならオツケー?」

「そうだね・・・3人かな」

「なら、このくじできちんと赤い丸が出ていたら僕らと一緒に行動で
きるけどそれ以外の人はとどまってもらおうね?」

僕はドラえもんに何人ならオツケーなのか聞くとドラえもんは多
くって三人と言っていた。それをきいたスネ夫が公平に正すために
くじ引きという措置にとった

「僕が今持つているからみんなはいつせーので!で引いてね?」

「OK!」

「怨みはなしだよ?準備はオツケー?」

スネ夫はこれから引くメンバーに確認の意味も込めて見渡してい
ると全員覚悟決めた顔になっていた

「(翔子からのお仕置き逃げれるチャンスだし、それにこいつらの冒険
はきになるからついていきたい)おう」

「(・・・未知の世界。エロイのも見れる可能性がある)・・・(コクツ)」

「(今いちぴんとこないがやるからには付き合うのじゃ!) OKじゃ」

「(ウチはよくわからないけど、事の重大なのは確かだね) いいわよ」

「(皆さんの力になれるなら・・・!) 私もいいですよ!」

「(のび太君と一緒に冒険したい。危険なのはわかってるけど・・・そ
れでもいいきたいの!) いいわよ」

「(やっぱりきになるからこそ・・・参加したい!) うん!!」

「じゃあ・・・」

「いつせーの、で!」

皆がくじを引いた瞬間それぞれが確認すると・・・

「よし!!」

「やった!!」

「当たったわ・・・」

当たったのは雄二と明久と美子さんとなった。当たらなかつたメンバーはというと・・・

「……………(ズウウウン)」

「うむー、わしらはこの時代に残る面子となるのか」

島田と姫路とムツツリーニが体育座りになり落ち込んでいたが秀吉は仕方ないと諦めていた

「しかし、元々はババアの命令で秘密だったのに何故きようはなしてくれたんだ?」

「実は昨日明久に見なかつたことにしろといったのだけど・・・」

『見て見ぬふりできないよ!!友達が困ってるのにほっておけるんけないじゃないか!!』

「つて言っていたから仕方なく学園長に報告と許可をもらつたから話したのさ。本音を言えば僕らで決着を着けたかつたけどね」

「逃げられたからな・・・」

「で、明久には特別にはなそうとなつたのだけど・・・」

「あ、あの・・・ジャイアン・・・?先から僕の体にめきめきと痛むのですが……………」

「この馬鹿が今いるメンバーに広めたお陰で行くメンバーをきめなおしたんだよおお!!」

「いたああああああああああ!!」

「さそり固め!」

「・・・なるほどね。ああして絞めたらいいのね」

「剛田君すごいですう」

「いや変なところに目をキラキラしないの!」

僕は島田と姫路に変な世界いかないように釘を刺すのと同時に皆に話しておいた

「取り敢えず、これで行くメンバーは僕、スネ夫、ジャイアンとドラえ

もんと雄二と明久と美子さん」

「明日の朝七時半には行動開始するから、僕とのび太君は今回君たちの学園の召喚システムを盗んだ犯人のどの時代に来たのか調べるよ」

「他の皆は家族のもとに帰っておいてね。ジャイアンとスネ夫は？」

「俺は一回帰って戸締まりしてから明日そちらに行く」

「僕ちゃんは帰ったら明日は友達の家で泊まりに行くよつたえておくよ」

「分かった。他の皆はきをつけてね？じゃあ今日のところは解散!!」

僕がそういうと姫路たちはゆつくりと帰った。明久が姫路と島田を送って帰ることになり、ジャイアンとスネ夫とムッツリー二と秀吉はそれぞれ帰った

「のび太、たのむ！翔子にお仕置きされるから今日は匿わしてくれ！」

「でも、さっさと家に帰っていたらいいじゃない？」

「お前はあいつの恐ろしさを知らんから言えるんだよ!？」

すると雄二のポケットから電話がなり、雄二は恐る恐る出ると・・・

「・・・ニゲタラ・・・ツブス(ガチャン)」

「二二二二二」

今の声霧島さんだよね・・・？みんな固まってしまった・・・

「・・・逝くわ・・・明日必ずそちらに行けるように頑張るわ・・・」

「あ、うん・・・」

雄二はフラフラしながら僕の家に出た直後に雄二の叫び声が聞こえたのは気のせいはず・・・

「じゃあ、美子さんは僕がー」

「あの・・・その事なんだけどのび太君の家に泊めさせてくれない・・・

／／／／?」

「え／／／／」

「私の家族は今家にいないからその／／／／」

／／／／／ドラえもん、いいかな？」

「ん、いいと思うよー」

ドラえもんは普通にオツケーを出していた。なら美子さんも泊まりたいといっているだから僕が断る理由はないよ

「いいよ、美子さん」

「本当!!ありがとう／＼／!!」

「ぐふっ!（美子さんの笑顔見れるなら天に登っていいよ／＼／）」

その日の夜はドラえもんもいるから沢山の冒険や下らない話を美子さんと交えて話していた。勿論調査も進んだが・・・

「嘘でしょ・・・」

僕らにとっては驚くべき結果が出てきたのだ・・・

判明したのは・・・

翌朝、集合の三十分前にめずらしく明久も含めて全員来ていたがこの場に居るのは犯人を追うメンバーだけいる

「今この場に居る皆に伝えないといけないことがある」

「なんだ？出発する前に大事な話って？」

「これを見てほしい」

「【シヨックガン】がどうしたのさ？」

「まあみてなよ・・・【年代測定器】」。これを【シヨックガン】に指すと・・・」

ーピロリン♪

「これを見なよ」

「ん、2000?ずいぶん未来な感じがするけど？」

「この数字は22世紀の未来の道具だと判明したんだ」

「!?!?!」

ドラえもん言葉に明久たちは驚いていたのだ。だがおどろくのはそこではないんだ・・・

「次にこれを見て」

ドラえもんはある紙を見せたのだ。これは僕とドラえもんと美子さんの三人で調べたときに驚くべき結果がでていた

「はっ?」

雄二が呆然とした声をだしたがそれは他のみんなも同じ顔だった。

まあ、僕も信じられなかったよ

「ど、どうということだよ・・・!?この数字は!?!」

「僕らもそれを見たときに驚いたよ・・・一致してないんだからね」

「当たり前だ!犯人が未来から来たのならわかったのは大きいが・・・この数字は・・・俺たちのいる時代の数字とと大して変わらないぞ・・・!?!」

「!?!?!」

雄二の言葉に調べた僕ら以外は驚いていた

「どうということだ!?!」

「・・・犯人は別世界から来たのさ」

「別世界!?!そんなSFみたいな・・・」

「ドラえもんさんがいる時点でSFとは言いがたいわ。実際に現実に出てきたのだから・・・」

「だがこれで納得した。俺やのび太のことを知っているとすれば別世界でもおかしくはない」

「それにしても・・・召喚システムを盗んだ理由はなんだろう?」

「・・・わからないけど取り敢えず、犯人がいる年代はわかったから追いかけるよ。それと・・・」

僕は明久と雄二とスネ夫にあるものを渡した

「これは?」

「スネ夫ならわかってるけども召喚する腕輪。つまり、サモンをできる体維持するわけ」

「はっ?」

「美子さんにも言ったけどあいつは召喚システムをいじってる可能性もあるしおそらく向こうの世界でも召喚獣を纏って戦うからフィードバックが存在する可能性がある」

「なに?!」

「いずれにしてもまず別世界に逃げた犯人を追いかけないとね」

「でもどうやって追いかけるのさ?だってパラレルワールドに逃げられたんでしょ?」

明久がどうやって犯人を追いかけるんだ?という疑問に僕とドラえもんと美子さんは小さく笑った

「安心して、吉井くん」

「ふふふ、吉井君。僕は22世紀の猫型ロボットだよ?」

「え、もしかって・・・」

「そう、そいつを追いかけるための行く方法ができたのさ!!」
「何?!」

「行く方法はどんな感じでしたんだ?」

「んーと、【何でも操縦機】をタイムマシンに着けることと【万能改造自動ドライバー】と【ハツメイカー】でパラレルワールドに行くため

の方法を作ったのさ」

「・・・」

「さすがドラえもん！」

「こういうときは頼りになるぜ！」

ドラえもんの説明に明久と雄二は唾然としていて慣れているジヤイアンとスネ夫はドラえもんを誉めていた。因みに美子さんも手伝ってくれたので割りと早く出来上がったのはここだけの話だ

「秘密道具の点検もバツチリだよ！」

「後はそれぞれの家は大丈夫かな？」

「うん。姉さんもないから大丈夫だよ」

「ああ・・・雄二は？」

「・・・来るな、来るな、来るな、来るな（ガタガタ）」

「雄二?!」

「彼はどうしたんだろ？」

「そつとしてあげなよ。色々と苦労してるんだよ」

その言葉にドラえもんも納得したように頷いていた。さて、そろそろ動く時間だ

「皆行く用意はいい？」

「」「」「おう！（ええ）」「」「」

「じゃあー」

「」「行こう！奪われた召喚システムを取り返すために!!」「」

僕はそれぞれの思いをのせてタイムマシンに乗ったのだ・・・

ー ー 時間空間ー ー

ドラえもんのタイムマシンは過去の反省もいかして、全員が座れるようにしてるのとスペースを広くして万が一のための鉄を囲んでいた

「一夜でここまで改造していたなんて・・・」

「時空間が乱れたときのことも考えてこうしたのさ。とはいっても、一時的なものだから耐性はあまりききたいしないでね？」

スネ夫の言葉に僕はこのタイムマシンの話していた

「これが未来の道具・・・タイムマシンにのれる日が来るなんて・・・」

「ああ、俺もだ」

「よくよく考えてみたらタイムマシンに乗ること事態信じられないわね」

「ま、そもそもこのタイムマシンの持論は難しいからな。仮に実現してもそれなりの時間と金をつかうことになるんじゃないかね？」

「え、そうなの？」

「ああ俺はなんかできいたが実際のところはどうなんだ？」

雄二はドラえもんに聞くがドラえもんは笑いながら雄二の問いに答えていた

「タイムマシンの持論は僕もよくわからないよ。そもそもこのタイムマシンができた人や僕ら猫型ロボットができたきっかけもよくはしらないんだ」

「言われてみれば僕も知らないな・・・」

「でもさすがに未来の技術を教えるのは歴史改変になるから聞くのはやめたほうがいいんじゃない？」

「ま、そりゃあそうだな」

するとタイムマシンから警告音が聞こえたのだ。この警告音は・・・皆、ここから空間が荒れるから注意ね！」

「美子さんは僕のそばにいて！」

「わかったわー！」

ただならぬ雰囲気には皆はダメージを負わないように頭を下げていた

ーグラグラ

「くっ!!こんなの初めてだ！」

「時空乱流ではないの!?!」

「それにしておかしいだろ！」

僕とスネ夫とジャイアンは悲鳴に近い声で何が起きてるのかわからずそういうとドラえもんが皆に聞こえるように話していた

「恐らくだけど別次元の世界に向かってるから乱流が起きてるんだ

!!」

「まだ抜けきれない!？」

「タイムマシンに乗るならそれなりのリスクを背負うてことか! 明久! あれを静めてみろ!」

「貴様! 僕に死ねと言っているのか!？」

「こんなときに二人ともコントしないで!？」

「コントいな!」

「皆!! もう少しで出口だから踏ん張ってくれ!!」

明久と雄二がこういうときにコントを始めていたので美子さんが突っ込み入れると二人の返事が同じだった。そしてドラえもんの声が聞こえるのと同時に光が見えた!!

そして……目的の世界についた……

到着と疑問

その世界についた僕らは驚いていた……。こ、これは……。!?
「なんなの……。?この荒れた後は……。!?」

「町のあちらこちらが崩壊している……。これは……。」
「本当に僕らのいた別世界なのか……。!?」

見渡す限り、黒く焼けた辺り……。人がいる気配が感じない……。
「この時代は……。どこなの?!」

「酷いな……。これが本当に俺らのいた時代と変わらない場所なのか……?
?」

僕はゆっくり歩くとおかしい感じがしたのでドラえもんにある
指示を出した

「ドラえもんと僕が前に歩くから美子さんは僕らの後ろにいてね?
ジャイアンとスネ夫は一番後ろで明久と雄二はその前に」

「念のために僕の道具を渡すよ。いざとなったらときだね」
「とりあえずいこうぜ。まずは情報招集だな」

僕らはとりあえず、荒れたこの街をゆっくりと歩いていた。なんだ
ろう……。この嫌な予感……

「――侵入者発見、侵入者発見これより駆除します
「「「!」」」」

突如聞こえたアラームに僕らは上を見ると……。なにかロボットみ
たいなのがレーザーを撃ってきた

「まずい!」
「【ひらりマント】――!!」

「――バゴオオオン!
ドラえもんが咄嗟にひらりマントを出してくれたお陰で突然の攻
撃は撃った方に直撃して爆発が起きた

「あ、危なかった……」

「色々と便利だな……。22世紀の道具は……」
「今の攻撃はなにかしら……」

「とにかく逃げよう!」

突然の攻撃に皆驚いていたがはスネ夫の言葉に皆は逃げていた。
すると――

――此方よ!!

女性の声が聞こえたので僕らはその声にしたがって急いで走った。
その言葉にしたがい急いで隠れて身を潜めた

「あのお・・・」

「ごめんなさい。まだ静かに黙ってて」

この声どこかで聞いたことがあるような気がする・・・暫くしても
う大丈夫なのかその人は僕らの方を見た

「ふう、危機一髪ね・・・」

「あのお君は・・・?」

「あれ・・・?」

光が見えた瞬間、僕らは驚いたのだ。その女性のポニテール姿は
間違いなく僕らの知り合いににている

「初めまして私の名前は島田葉波よ」

「・・・美波・・・?」

当の一番の本人・・・言わば質問した明久が驚いていた・・・

僕らは葉波さんの案内のもと、地下に降りていき一通り落ち着くと
改めて僕らの自己紹介をした

「初めまして、僕はドラえもんです」

「僕の名前はのび太」

「俺はジャイアンとよんでくれ」

「僕はスネ夫」

「坂本雄二だ」

「僕は吉井明久」

「初めまして、三上美子と申します」

「ええ、よろしくね。あなたたちなんでここにいるの?」

葉波さんは一人一人に握手し終えたあとになぜこの場にいるのか

聞いてきたのでドラえもんが説明してくれた。最初は信じられなさそうだったが、色々と見せると納得してくれた……

「なるほどね。ならこの世界の事を話さないかね」

「このまちはなぜこうなったの？」

「この街を滅ぼした人間がいる……名前は〔G〕と名乗るものなの……。幸い死者はいなかったけど……皆この街によることはなくなっただの……」

「〔G〕って……仮面被っていてフードなやつか？」

「あなたたちなんでしってるの!?!」

「俺たちの時代にそいつが現れたんだよ。のび太と剛田がそいつと交戦していたから知ってるんだよ。もつとも俺達はそいつを知らんがな」

ジャイアンがその名前はこういう特徴のやつではないか?ときくと、葉波さんは驚いていたが雄二の説明に納得してくれた

「そう……そいつはある日この平穏な街にいきなり総攻撃をしかけたの……。そして、とんでもない力を前にこの街は崩壊した」

「……そいつのアジトはわかるのか？」

「あそこの山奥にいるのだけど……誰も近づきたがらないの」

「そっか……なら僕らはあそこに乗り込みに行くよ」

「正気!?!あいつの力とはんでもないのよ!?!」

明久の言葉に葉波さんは驚いて立ち上がり「いくつもりなのか!?!」
と叫んでいたが――

「関係ないよ。僕らはただ取り返しに行くだけさ」

「奪われたものをね」

「それに……俺個人としてもやられたらやり返さないと気がすまんでな」

「それに僕らは別世界から来たといっても負けることはない。なにせ、それなりに修羅場潜り抜けているからね!」

僕ら四人の言葉に葉波さんは少し啞然としていたけど、すぐに気を取り直してあるものを見せてくれた

「……これを見て」

「これは・・・はあ?!」

「つてちよつと待つて?!この新聞は・・・」

「ババアが亡くなつてゐる?!」

「どういうことだ?別世界とはいへ、文月学園の学園長がなくなつてゐるなんて・・・」

「この方はとても優秀な研究員でした・・・。しかし、ある不幸な事故により爆発が起こりこの街は今に至るわけなの・・・」

「なんの研究かわからないの?」

「たしか・・・学力向上させるためのシステムをつくつていたと」

「「もしかつて召喚システム!」「」」

文月学園に通つていた僕らは考えられる答えを言うが向こうは???となつていた

「となれば、召喚システムを盗んだのは亡くなつた学園長の為に・・・?」

「だが、それならこの世界にできるはずでは?」

「でも、この世界の学園長が事故でなくなつたとすれば研究も出来ないわね。私たちの時代に来て盗んだのはそのため?」

「だけど、どうやってのび太くんの時代に?」

疑問が溢れてしかたがないが、恐らくこれでひとつわかつたことはある。あの犯人は召喚システムを盗んだのは研究を完成させるための可能性がある

「だけどよくわからないな。あいつは何で姫路の特殊能力をもつていたんだ?」

「・・・え?それ本当?」

明久は今の言葉に驚いて聞き返していたが、僕とジャイアンはそれなりにダメージ負つたこともあれの影響だ

「えーと島田波並さん」

「島田葉波よ!名前をまちがえるのは失礼よ!!」

「ぐぎやああお!!う、腕があああ?」

「「(ああ、別世界でもやっぱり島田は島田だった)」「」」

「・・・で?なにかしら?」

「いたたたた．．．うん、「G」以外になにか情報はない？」

「G」．．．確かにそれ以外に情報ないんだよね。期待の意味も込めてみると．．．

「ないわ。ただ言えるのは、彼は強いから気を受けてねえ」

「そっか、ありがとう」

僕は落胆していたが直ぐにこのあとの行動を話していた

「悪いわね．．．貴方達ならきつとー」

「二」「ん．．．？」

「もう時間か．．．私そろそろ帰らないとダメだからここで別れるわね。じゃあね！」

「あーちよっ．．．」

葉波さんは急いで走って角の方に消えたのだから明久は何を思ったのか追いかけるが．．．

「．．．いない．．．？」

「二」「へ．．．？」

そこは行き止まりで葉波さんはいなかった．．．あれ．．．なにこれ．．．

いざ！侵入！

島田葉波が消えた……。つまり、僕らが先程喋っていた島田葉波は幽霊だったと言うこと……。？

「いや、怖すぎない!？」

「そんな不可解な事起こり得るの?!」

「……………」

「のび太君と剛田君が立ったまま気絶しているわ!？」

「おいふたりともしつかりしろおお!？」

「のび太君まだそういうのだから……。それとも幽霊とは思わず固まっていたのかな」

僕ら7人は凄いかオスな状況になっていた……。本当に幽霊と喋っていたなんて……。恐ろしい……。

暫くしてから僕ら全員気を取り直して、とりあえずもらった情報整理していた

「とりあえず、せつかくもらった情報だから今話し合おう。とりあえず、現段階で君たちの通ってる召喚システムを盗んだのは亡くなった学園長の後を継ぐためにやっている可能性があるということ」

「説得が上手いこといけば返してくれるかもね」

「……はじめから聞いていたらそうならんがまあ可能ならそうなるほしいもんだな」

「ま、何が起きても不思議じゃないがな」

「で敵の本部はあの山奥か」

「なら、皆にそれぞれの道具を渡すよね」

そういってドラえもんは「タケコプター」と「空気砲」と「シヨックガン」等を取り出して皆にそれぞれ渡したのだ。因みに僕は「タケコプター」と「シヨックガン」を貰った

「後、吉井君にはこれをわたすよ」

「これは何……?」

「この使い方は中にかかれているから、本当にどうしようもなくなっただけに使ってね?」

「分かったよ」

「じゃあ、とりあえず・・・行くか」

僕はとりあえず道具の使い方を美子さんに説明していた。まあ、彼女に危険な目をあつてほしくないけどそんなに弱くないし心は強いのは分かっているけど・・・やっぱり心配だ

「とにかく、ばれないように侵入する？早めに奪って解決しないとダメだとおもう」

「ん・・・多分読まれている可能性もあるから念のために約束ごとを決めよう?」

「二「決め事?」」

ドラえもんの言葉に皆は??となっていたが確かに約束ごとは決めた方がいいかもね

「僕から言えるのは何があつても振り返らないこと」

「なら僕からは・・・無事に帰るよ!」

「僕ものび太と同じ意見かな」

「おし、俺から言えるのは・・・お前ら死ぬなよ!!」

数々の冒険で生き延びてきた僕らは明久達にアドバイスした

「のび太くん・・・」

「大丈夫だよ・・・。皆がいるからね」

「ええ・・・ありがとう」

僕は不安そうな美子さんの手を握ると美子さんは不安がなくなつたように笑顔を見せてくれた・・・

「さあ!!いくよ!」

「二「おう（ええ）!!」」

僕らは言われた本部へ向かった・・・

さあ!返してもらおうよ!僕らの召喚システムを!!

「???」

その薄暗い場所にてフードで仮面を被っていた男はある画面を見ていた

「やっぱりこの世界に来たか・・・」

忌々しげにその画面を見て苦虫を潰した顔になっていた

「だが、この召喚システムはもうこちらのものだ……！この力があれば……もう一度……！」

その先には召喚システムのデータを解析していた……

「貴様らに邪魔をされるわけにはいかない……すべてのシステムオール作動だ……！侵入者は……排除せよ!!」

男はあるスイッチを押した……すると、そのある場所には様々に作動をし始めた

「さあ……来るならこい!!!」

そう力強く叫んだ声は辺りに響いた……

トラップは基本だ

僕らは今敵の本陣の扉の前にいる。22世紀の道具を持つたのだから、気づいてる可能性もあるけど【透明マント】でレーザーに引つ掛からないように歩いていた。尚、美子さんとは手を握りながら走っていたのではぐれる心配はなかった

「【通り抜けフープ】」

ドラえもんは【通り抜けフープ】を取り出してでかい壁に張り付けて侵入したが、中は薄暗い……

ここからは【透明マント】は恐らく役立たないだろうと思いついて歩きながら話していた

「ここに侵入できたからまず確認だね。恐らく君たちの学園のシステムを盗んだ犯人は屋上だ」

「階段が結構あるね……」

「とりあえず歩こうか」

そういつて歩くと……

ポチツ……

「」「へっ?」「」

「……あ……」

明久が歩いた足元に人を陥れるスイッチ……もとい罠を踏んでしまった……これは……まさか……

ロロロン……

「な、なんか聞こえないかな……?」

「ま……さか……」

僕の言葉にドラえもんが冷や汗をかきながら聞こえた音に振り向くところ

ゴロロロ……

「」「でかい岩が転がってきたああお!!逃げろおお」

僕らは転がってきた岩から避けるように全力で逃げた。何でこうなるのさあああ!!

「このままでは全員下敷きになるよおお!!」

「仕方ない、背に腹をかえられない！こうなったら・・・サモンして弾きかえるしかない」

「ならサモンをしたら・・・!!」

「だめよ！もしも起動しなかったら3人とも危ないのよ!？」

明久の言葉にジャイアンと僕はそれぞれの提案を出すのが美子さんが最悪のケースも考えられると言ったのでサモンするのはやめて逃げることにした

「そうだ!!のび太とスネ夫とジャイアンの、三人は【空気砲】であれを打ち砕いて?!」

「僕は【空気砲】ではなく、【ショックガン】をもってるよ!？」

「なら、ドラえもんが【空気砲】あるよね?!」

「いいけど、三人で仮に打っても効かなかったらどうするの!？」

「そのときに考える！」

「二二「要するにノープランでしょ!？」二二」

明久の言葉に僕は全員突っ込みをいれてるがこのままでは体力の無駄になる！

「仕方ねえ！ドラえもん和剛田と骨川の三人で【空気砲】をうつなら、たしか【ひらりマント】あるはずだろ!？三上は自分に当たらないようにそれで回避しろ！俺とのび太は明久を盾にしてなんとかする！」

「きさまああ?!」

「二二「了解!」二二」

「四人とも了解じゃないよ!？何でドラえもんものび太もOKにしたのや!？」

「のび太くんはこっちに！」

僕は美子さんのそばにより、万が一彼女が危なかったら盾になるつもりで側にいた。そうしてる間にドラえもん達が空気砲を構えていたので雄二が合図を出した

「なら・・・うてー！」

「二二「よし・・・いっせのーで・・・ドカーーーン!!」二二」

「ーバゴオオオン!!!」

3人が声揃えて打った空気砲はきれいに岩を打ち砕いた・・・

「た、助かった……」

「「「はあああ……」」」

それぞれが安心して座り込んだ。何で、侵入できたあとにこんな苦
労するのさ

「もう……明久君。とんでもないことしないでよ」

「そっだよー!」

「(ポチっ)……へ?」

ガコン!

「へ?」

「「「え?」」」」

「あー……ごめんね☆」

「ごめんね☆……じゃないでしょうがああ!!明久あああああ?!!!」

明久が押ししてしまったボタンは僕の下に穴が開き落ちてしまった

「くっ!」【タケコプター】!!」

このままでは落ちたら洒落にならないのでタケコプターでなんと
か落下は免れて雄二達の方に合流できた

「はあああ……何で僕がこんな目に……」

「「のび太君大丈夫!」」

「な、なんとかく……」

割りと本気で死ぬ覚悟していたよ……もしも姫路とか連れていつ
ていたら彼女がむしろ危ない気がする……

「全くもう勘弁してくれよな」

「もう!明久ー!」

「あははは……ごめんごめん!さっ気を取り直して……(ガチッ)……
え」

「「「ガチッ……?」」」」

「明久あ……」

「ごめん!!」

僕の本気で恨めしい声でいうと明久は真っ青になって謝ってきた。
もう次は何が起きるのか覚悟していたが……なんも起きない……
?

気になってみるとー隠し扉が開いていた

「隠し扉の仕掛けだったのか！」

「でかしたぞ！明久!!」

「喜べばいいのか泣けばいいのか複雑すぎて解らない・・・」

「ジャイアンと雄二の言葉に明久はなんとも言えない顔になっていたが気にすることは無い!!」

「兎に角、このあいた扉には何かあるのかわからんが進むぞ！」

「みんないざとなったら、使ってね！」

「にしても親玉がいるオチなら面白い」

「そう簡単に決着はつかないでしょ？」

「まあまあ、明久開けてね？」

「わかったよ・・・」

ーガシャン

スネ夫の頼みに明久はドアをあけると、部屋は暗かった・・・

可笑しいな・・・そう思った瞬間にライトが落ちた

「「「「「！」「」」」」」

あまりの眩しさにみんなは一瞬目を伏せたが、すぐに慣れてきたので目を開けると・・・

「・・・(ゴゴゴゴゴゴ)」

「「「「ラスボスより怖いのが来たあああ!?!」「」」」」

目の前には、何故か・・・そう何故かこの世界にはいないはずの人が・・・

「オマエラ・・・ホシユウダ・・・!!」

「いったいどう言うこと!?!」

出てきたのは鬼!?

一体なんで西村先生がここにいるんだ!? 皆は混乱してるし明久に至っては震えてるよ!

「皆どうしたの!?!」

このメンバーで唯一西村先生を知らないドラえもんは異常な雰囲気
気に声あげて聞いてきた

「あれは僕らのいる学校の先生で鬼の補習と言われた人だよ!」

「そう、のび太のいう通り!そして、引き継ぐなら筋肉を鍛えまくりすぎた脳みそも筋肉の男!名を!」

「二鉄人といわれている男だ!!」

「少し待って!?!明久君の説明があまりにも可笑しいのだけど!?!」

ドラえもんの突っ込みを見かけた美子さんがドラえもんに分かりやすく説明してくれた

「簡単にいうと、私たちの学校の生徒指導の先生で熱心な先生なのだけど・・・趣味が趣味なためと鬼の補習な先生だから」

「なるほどね。だから、鉄人といわれているわけか・・・」

「どうやら鉄人の後ろにドアがあるみたいだが・・・突破できそうにないな・・・」

「ん?おかしいな・・・」

「どうしたの?明久」

明久が急に怪訝な顔をしていたので僕は質問すると明久はなにか引っ掛かるような顔で西村先生を見ていた

「いや、鉄人の割には喋り方おかしかった気がするのだけど・・・ほら?構え方とか」

「構え方はどうかかわからないけど確かに喋り方はおかしかったね・・・」
「片言だったな・・・」

僕らは気になり、よく見ると確かに西村先生にして声も低かったし
おかしかったような気がする

すると・・・

《ワザワザコチラノセカイニクルトオモワナカッタ》

「「「「「！」「」」「」」「」」「」」

この声は・・・

「どこにいやがる!?盗人!!」

《コタエルトデモ・・・?トイイタイトコロダガココマデキタンダゲ
ムヲハジメヨウデハナイカ?》

「「ゲーム?」」

《ココニシレンガイクツモアル・・・》

「試練だど・・・?そんなこと聞く必要はない!きつさとスルーして
くぞー!」

「待て、坂本・・・あいつが簡単にいかせてくれるはずがない・・・」

《ソノトオリ・・・ハナシハサイゴマデキクモノダ》

「ならさつさと勿体ぶらずいってよ!」

明久が不機嫌になりながらそいつに質問するとそいつは笑いなが
らルールを説明した

《3ツノシレンヲコエテモラウ：ソコヲコエルトワタシガイル。ソシ
テ、召喚獣ノルールトオナジダ》

3つの試練・・・つまり、そこを相手していかない突破できない
ということ?どちらにしても召喚獣と同じルールと言うのか引つ掛
かるけど・・・

《キサマラの相手スルモノハ本物でナイ・・・》

「!?待て!それはどういうことだ!」

ープチツ

向こうは言うだけいつて切った・・・

「3つの試練ってなに!」

「落ち着け。どうやら敵はご丁寧に俺達の事バレているみたいだ
が・・・まずはあれをどう突破する?」

「西村先生を突破するのはとてもじゃないけど厳しいわよ。いくらあ
れが本物ではないとしても、力は本物と変わらない気がするわ」

「・・・どうする?全員で空気砲をうって走っていく?」

とるべき選択・・・今僕らのとるべき選択は・・・

「明久達はいけ・・・ここは俺に任せろ」

「!?」

「ジャイアン・・・?」

突然のジャイアンの提案に明久や雄二は驚いていた。しかしそんな二人とは別に僕は・・・

「勝てるの?」

「はっ、何言ってるやがる・・・俺を誰だと思ってる?」

「だね・・・」

「でも剛田君、相手は本人ではないとはいえ西村先生と実力は変わらないはずよ。いくら一人でも・・・」

「ま、たしかにな・・・だが負けて挑むやつは初めからいないだろ」

するとジャイアンは気合い入れるように指をならし始めた。多分

今のジャイアンは・・・

「わかったよ。ここは君に任せるから後で追いかけてね?」

「二のび太(君)!!」

「西村先生に似た敵はジャイアンに任せよう?ここはジャイアンに任しても試練はあと二つあるはずだから・・・ここで立ち止まるわけにはいかないよ」

「だね。のび太の言う通り!ここは僕らが先にいかないよ!」

「じゃあ、ジャイアン頼むね!みんないくよ!」

「おう!後でいくからさっさといけ!サモン!」

ジャイアンの言葉と共に僕らは走ると西村先生(偽)が僕らに向かって走ってきたが・・・

バゴオオン!

ジャイアンが不意打ちで西村先生(偽)を殴り飛ばした・・・その隙に僕らはドアを開けて急いで階段を上がりながら心のなかでは僕はジャイアンにー

頼んだよ!ジャイアン!!

と信頼とともに走った・・・

試練はあと二つなら・・・僕らのとるべき選択は・・・決まってる・・・

鬼と喧嘩

ジャイアン side

さて・・・あいつらが行ったのを確認した俺は改めて目の前に西村先生（偽）をにらんだ。さつきほど殴ったとき何て言うか・・・固かったな・・・あの感触は何処かで・・・

「キサマハホシユウダ」

「悪いが西村先生の姿で偽つても説得力ないんだよ。さつきとお前を倒してあいつらと合流する！」

「キサマハホシユウダ!!!（ガシツ!!!）」

「うお、いきなり突撃かよ!!!（ガシツ!!!）」

俺は西村先生（偽）が突撃したのを驚きながらもしつかりとつかみ合い、お互いに睨みあっていた。

「こいつ、本当に西村先生の偽物かよ!?本物と変わらないぐらいの力あるんじゃないか・・・!?」

「ホシユウダー!!!」

「力は確かに本物と変わらないが・・・あんまりこの剛田武・・・ジャイアンさまを嘗めるなあ!!!」

俺とやつの掴み合いは続きながらも力は落とさず徐々にパワーをあげていたがガキ大将の誇りを見せてやる!!!

のび太 side

僕らは必死に上の階に上がっていると明久が先程の事を僕に質問してきたのだが、今は上がることを優先してほしい

「のび太！何でジャイアンを置いていったのさ!?いくらなんでもジャイアンだけはー」

「お前はあいつを見くびりすぎた。明久」

「え!?雄二は反対じゃなかったの!?ジャイアンを置いていくのは」

「反対かどうかは云々抜いて、俺としてはいい判断だったと個人的に思う」

「なんで？」

走りながら雄二は明久にジャイアンの力を甘く見るなど警告だしていた。対する明久は疑問に思いながら聞き返すのでこれはよく知ってる僕らが答えた

「ジャイアンはそう簡単に負けないよ・・・」

「のび太くんの言う通り、明久君はジャイアンの本当の凄さを知らないからそこまで心配するんだよ」

「どうしてそこまで言えるの？のび太、ドラえもんは」

「まあ僕も二人の言う通り、ジャイアンの事は心配してないよ。あのわがまま乱暴ゴリラが負けると思わない」

「スネ夫・・・」

だつてジャイアンは・・・僕らの知っているガキ大将は・・・

「僕らのガキ大将は一度負けたぐらいで落ち込む男じゃない！必ず勝って帰ってくる!!!」

「・・・そうね（剛田君・婚約者の真理亜さんはきつと今も心配してるはずよ。だから・・・負けないで!!）」

「・・・なら、俺（僕）達も目の前に進まないと・・・だから、いちいちハモるな!!」

明久達がコントしてるが僕はスルーして先程のやつ言葉が気になった・・・。召喚獣のルール・・・まさか!?!

「ドラえもん・・・スネ夫・・・少しいいかな？」

「?」

僕は今わかった考えを小言で二人に呼び掛けると二人は??となりながら聞きに来た

「・・・召喚獣のルールとなれば戦い方も恐らくは・・・」

「そういうえば、気になったけどそれはどういう事？」

「のび太の言いたいことはわかった。・・・って言うことだよね？」

「・・・それが本当ならますます大変だ・・・」

僕の考えを理解したスネ夫はドラえもんに説明するとドラえもんもしかめ面だった。恐らく可能性としては高い・・・。だから、僕は二人に頼み事をした

喚獣を纏った力だから俺にフィードバックは当然存在はするだろうがそんなの怖くって闘ってられるか！

「しかし、歯応えねえな……。本物の鉄人ならこの程度で吹っ飛ばされねえはずだし、耐えきれはるはずだが……。やはり、本物ではないから動きは一定なのか？」

そう疑問に思っていると……

「ドウヤラキサマハ地獄ノホシユウヲウケタイミタイダナ……」

「流石にあれで終わるわけでないが頑丈さは西村先生と変わらないか……。参ったな……」

「ホシユウヲスルゾ!!」

その瞬間、西村先生（偽）は俺の視界から一瞬目の前から消えた

「なっ!?!きえー（バキッ）っ……!?!」

「フン!!」

消えたと思われた西村先生（偽）は俺の目の前に知らない間に迫っており、反応が遅れたのを見逃さず俺の腹を抉るように殴った……

ーードゴオオン!

「ガハッ……。けほけほ」

「ホシユウヲシテヤル」

「フー……。やっぱりそう簡単にいかねえのか……。おもしれえ……!」

俺はゆっくりと立ち上がりながら体についたもんを払いのけて構え直した

悪いな……。そちらに合流するのは少し遅くなりそうだ……

さあ!!俺と喧嘩をしようぜ!!

身をもつて感じた痛み

真理亜side

私は今、妹達とともに海外の仕事を終えて大切な人の故郷に帰ろうとしていました。全て彼らから事情は聞きましたが・・・まさか文月学園の大切なものでもあります召喚システムを盗む人がいるとは思いませんでしたわ

「お姉様・・・スネ夫とも連絡取れません」

「そうですか・・・」

私は次女の里緒菜からスネ夫様とも連絡とれないと聞き、恐らくはあの人とともに犯人を追いかけているのでしょう・・・。冬花はお仕事の疲れもあつて今は寝ています

「お姉様・・・なにか私とてつもなく嫌な予感するのだけど気のせいですかね・・・」

「ええ、私もです・・・心配ですがすぐにかえられる距離ではないですし・・・」

私たちの悪い予感が当たらないことを願うばかりです・・・気を付けてください・・・武君

ジャイアンside

俺は西村先生(偽)に顔を殴られたことにより軽く血が出ていたが、腕で無理矢理拭いた

「中々良いパンチだったじゃねえか・・・今のは驚いたぜ・・・」

「・・・フン!!」

「おつと!!あぶねえ・・・」

俺が話すと西村先生(偽)は俺に攻撃を仕掛けてきたので俺は紙一重で交わしながら冷静に対応していた。西村先生本人ではないなら敬語も使う必要はない・・・

だから・・・

「思い切り殴る!おらあ!!」

「(パシッ)」

「受け止めた!? つぐお?!」

「ホシユウヲスルゾ」

「先から同じことをしゃべりやがって・・・もう我慢ならん!!」

俺はさつさと決着をつけることを決めていたので、あのときと同じ体制で体を低くしてしつかりと相手を見据えた。それを見た西村先生(偽)は全速力でこちらに走ってきた

「さつさと決着をつけてのび太達を追いかけているんだ：だから邪魔をするな!!」

「ホシユウヲスル!!」

「一撃で沈めてやる!!」

俺はからだ全身に力を込めて越えたからかに宣言した
「!」

「偽物とはいえ、俺様の技を食らうんだから大サービスだ! お釣りはいらん! 喜んで吹っ飛ばされな! ジャイアンスペシャル技の1つ!!」
「ウルトラロケットスーパーパンチ!!」

俺は思い切り西村先生(偽)の腹に抉るようにしつかりと腰を回して腕を勢いよく振った。遠慮なく喰らえよ! 俺のスペシャル技のひとつなんだからな!!

「グウウウ!!」

「やっと、別の言葉をしゃべる気になったか。とりあえず・・・吹っ飛ばえええ!!」

「グウオオオ!!?」

俺はお叫びをあげながら力を最大限に出しながら相手を殴ると壁の方に直撃して辺りに亀裂が走っていた

「もうあのときみたいに止めを指すのは迷わない・・・」

俺は倒れている西村先生(偽)の体を持ち上げてのー

「グググ・・・本物ではないとはいえ重すぎる・・・!!」

「ナニヲスル!?!」

「へへ、ホシユウヲスルゾ以外にようやく別の言葉も覚えたか・・・いくぞ! ジャイアンスペシャル技の一つ!! 召喚獣の力と技を融合の・・・」

「グレートジャイアンスペシャル上手投げ」!!!」

俺は西村先生（偽）に対して笑いながらも声高く技の宣言をしながら投げ飛ばした。流石にこれだけダメージを与えておけば限界だろ・・・

そう思っていると・・・

ガシツ!

「ぐお（なっ!?!いつの間になっ!?!）」

「タダノホシユウデハスマサナイ・・・」

「!!っ（何だ・・・!?!この力は・・・）」

「!!っ（何だ・・・!?!この力は・・・）」
「あまりにもとんでもない力で俺の顔を片手で掴みながら先程とは見違うように強かった。そんな動揺してる俺を他所に西村先生（偽）は俺を地面に思い切り叩きつけた

!!っ!!」

「!!っ!!」

「暴走してやがるのかよ!?!それとも特殊能力的なのか!?!抜けきれねえ!?!」ぐああ!?!」

余りの痛さに俺は叫ぶもまだ俺の顔を離す様子が見られない・・・
ならば・・・

「あんまり・・・調子に乗るなああああ!」

「!!」

「ぐぐ・・・ジャイアンスペシャル技の一つ・・・」
「ジャイアンメガト
ンキック」!!」

「!!」
俺の蹴りが西村先生（偽）に綺麗に入ったので向こうはよろけていた。向こうは流石に限界なはずだ!

「!!」
「そろそろ決着をつけてやる!」

「!!」

「!!」
西村先生（偽）は俺に思い切り拳を振るったが、俺はそれよりも早

くある技を出した

「偽物がこの俺に勝とうとするなんて百年速い!!いくぞおお!」

「!?」

「母ちゃん直伝!!!俺も食らってきた涙目の技!!実際にこの身をもって痛みを知った技

「無限ビンタ」!!!」

「??」

「こちらの両手で連続でビンタを繰り返す技に向こうはかなり効いておりダメージも度々重ねていた為、防御体制が遅れていた為攻撃がはいっていた

そして・・・

「・・・(ボタン)」

西村先生(偽)は叫ぶこともなく倒れた・・・俺の勝ちだぜ・・・

やったぜ・・・母ちゃん!

ーーよくやった!武!!

母ちゃんの叫びが聞こえたのは気のせいはず・・・

次に立ちふさがるものは

僕らは次の試練を突破するために走っていたのだが、僕は一回足止めて後ろを見た。何となくだけど、ジャイアンのところは決着ついたように感じた。そんな僕が足止めたの不信に思ったのか明久が呼び止めた

「のび太？」

「・・・今一つの決着がついたような気がする」

「え？」

「何でもないよ。明久、向こうは待つてくれないから急ごうか！」

「うん！」

僕の言葉に明久は一回考えるもすぐに気を取り直して明久とともに走った。たしかあの声を聞く限りで考えられるのはあと試練は二つあると言うこと？

「そもそも試練ってなにかしら？」

「さあね。でも、立ち塞がる敵がいるのはたしかみたいだね」

「少なくともあと二つは突破しないとダメだと言うことか。最初に力ある剛田がいらないのは痛いな・・・のび太と剛田は間違はなく、最高の戦力だからな」

「その事で雄二達に伝えておこうと思うけど・・・走りながら聞いてね？」

「なんだ？」

僕は走りながらこれから起きる最悪の事も頭入れてほしいと思いつ話していた

「最悪の事態も覚悟してほしい・・・全員で上がれないと言う可能性をね」

「えっ、なんで？」

「事態は一刻も争う可能性があるからね。もし、万が一ドラえもんが帯同できないときになった場合は雄二が指揮を執ってね」

「わかった」

一応今のうちになにか伝えておけるものは伝えておかないとね。

ここは敵の本拠地なんだから・・・最悪のことも・・・そう、召喚システムのルールを基づいてとなったら最悪のケースも覚悟しとないとね。そう話している間にも、僕らは目的の扉がついた

「確か、敵のボスの言うことが正しければここも試練と言っていたから、ここにも敵が立ち塞がるということか」

「だね。とにかく開けるよ」

「美子さんは僕のそばに」

「ええ」

雄二が扉を開けると同時に僕らは気を締めてなかに入った。中は僕らが入った瞬間に明るくなると声が聞こえた

「あらあら、どうやら次の敵が来たのね」

「全く・・・誰だ?」

女性の声と男性の声が聞こえたので僕はそちらを見ると・・・僕とドラえもんは固まった

何故なら・・・

「うふふ、元気な男の子もいる見たいわね・・・」

「悪いけど、ここは通すわけにはいかないから君達はここで負けてもらうよ」

スネ夫は分からなくっても仕方がないと思う。何せ、僕とドラえもんがパラレルワールド・・・それもとんでもないトラウマが出来た切っ掛けなんだから

「あああ・・・ああ」

「のび太君!?!大丈夫?!」

「ドラえもんもすごい震えてる!?!どうしたのさ!?!二人とも!」

「こんなのび太・・・初めて見るな」

「うん。女性の顔を見た瞬間に顔色が変わったよね・・・」

明久達が僕たちに何か言ってるのは聞こえたけど僕らはそれどころではなかった。頭がパンクし追い付かない・・・

なんで・・・なんで・・・

「何で・・・美代子さんのママが・・・?」

僕とドラえもんは声ハモって答えるのと同時にに内心は動揺して

いた

どういふ事だ……!?美代子さんのママにそして、男の方は……
仮面を被っていたがあいつではない……何者だ？

覚悟決めるものはいつだって

色々と動揺して頭が追い付かないが・・・今の目の前の敵は二人と
いうのは確かだ。だから僕のとるべき選択は・・・

「明久達は先に行つて!!ドラえもんも美子さん達を連れていつてここ
は僕に任して!!」

僕は明久達より前に出ていき、指示を出したすと美子さんをはじめ
としてみんなは驚きの声をあげていた

「え・・・のび太君・・・?」

「なにいつてるのさ!?!今ののび太では一人にさせられないでしょ!?!」

「そうだよ!僕も状況は把握できないけど今ののび太は明らかに様子
おかしいし顔色も悪いよ!?!」

「二人の言い分もわかるけど・・・けど!こうしてる間に召喚システム
を取り返すのが遅くなるんだよ!なら、ジャイアンの時と同じように
ここは僕が残った方がいい!」

「なら、俺も・・・」

「いや、雄二はいつてほしい!」

「何だと!」

僕は参戦しようとしていた雄二を制止しかけると当然向こうも
ビックリしていた。しかし、約束したはずだ・・・

「ここに来る前にも言ったけど雄二は指揮を執るためにも重要でしょ
?それに明久も今回のキーマンだと僕は思うから先にいつてほしい」

「・・・わかった。ただし、二つだけ俺の指揮を聞け。のび太」

「雄二!?!」

「明久は黙ってる。・・・俺が指示出すのは2つ。一つはのび太がここ
で敵二人を相手してほしいと言いたいが・・・三上!三上はこいつと
共にここで戦ってくれ!」

「!!」「雄二!?!」「!!」

「良いわよ」

「!・・・美子さん・・・」

僕は美子さんの方に振り向くと美子さんは優しく笑いながら僕の

砲に話しかけてきた

「今のあなたをほつとけるわけないでしょ？それに・・・貴方やドラえもんさんがあの女性を見て表情変わったのは気になるしね・・・」

「っ・・・」

あの人は・・・僕もドラえもんも覚えているから余計に昔の事を思い出す。あの悲しい出来事を・・・そして、別の意味でのトラウマも・・・

「わかった。なら美子さんは女性の方をお願いするね」

「ええ、のび太君はあの仮面の男のほうね？」

「うん。あと、ドラえもん・・・美代子さんのママがいるのは恐らく誰かの記憶が読み取られている可能性があるから存在していると思うし、次の過去に関係する敵が出る場合も考えられるから気を付けてね」

「・・・つまり、何者かがこれを干渉しているからあの二人がっつてこと？」

「うん」

僕とドラえもんの話に明久が気になり聞いてきた

「それどういう事？」

「恐らく敵は僕らの過去をどういうわけかかなり調べていたみたいだね。あの人も本来は実際の世界で起きたのはまた別の話だし、相手は僕らの過去を知り尽くしてるから彼女がいるかもしれない」

「だから何者かが干渉してると？」

「そういうこと。じゃなかったら・・・今日の前にいる二人がああいう声の言う通りなら偽物って言う可能性が高いと思う」

「どちらにしてもやるしかないわね」

美子さんはやる気になり、目の前を敵見ていたが僕は心配で仕方なかった

「美子さん・・・」

「大丈夫よ。いぎとなつたらきちんと下がるから今はあなたの側で戦わせて・・・お願い」

「・・・ひとつだけ約束して。危険だと思ったら僕を捨てても生きてよ？・・・君に何かあつては僕は耐えれない。そして、必ず一緒に帰

ろう」

「・・・ええ!」

僕の言葉に美子さんは嬉しそうに笑い、そして誰よりもきれいな笑顔を見せてくれた。もう覚悟は決めた・・・

「ここは僕と美子さんが引き受ける!!」

「ドラえもんさん達は先に行ってください!」

「サモン!!」

僕と美子さんは学校では馴染みのある言葉で召喚すると僕らの体に召喚獣を纏った。僕は腰に拳銃があり、ハット帽子も被っていて、美子さんは本を持っており構えていた

「そういえば、美子さんは本でどう戦うの?」

「ん? ああ、それならこの本を見て戦ったりするの違うかな? 呪文を唱えたりするのもかも?」

「そっか。明久達は先にいってね!」

僕と美子さんはお互いの姿を確認したあとに明久達がまだそこにいったので彼らは頷いて話していた

「のび太! 必ずこちらに行くんだよ!」

「待ってるからね! のび太君に美子ちゃん!」

「あまりにも遅いと俺らが先に解決するからね!」

「あと! あまりいちゃいちゃしすぎていたらFFF団を呼ぶからね!!」

「ふふん。なら吉井君がしっかりと戦わなかったら美波や瑞希に色々報告するね♪」

「じゃあ! 必ず後で!!」

僕らは別れてドラえもん達は扉の方に向かおうと走るとー

「逃がさない・・・」

目の前の男がドラえもん達の方まで飛んで攻撃の体制にはいていたがー

「させない!!」

「!? ぐつう! 貴様・・・」

「君の相手は・・・この僕だ!!」

「・・・面白い」

僕が男の攻撃に妨害にして、拳で殴り飛ばすと向こうは慌てて回避行動を取った。ドラえもん達の道を邪魔しないように僕はあえて立ちふさがった

「なら私は貴方が相手となるのかしら」

「コンピュータが普通に私とも会話を成り立つのは召喚システムの影響かしら・・・はい。私が相手ですよ」

「そう・・・なら、覚悟して戦いなさい！」

「姿が変わった・・・!?あれは・・・」

「フフ、メデューサーって知ってるかしら・・・。あなたの相手の姿はこのメデューサーよ・・・」

「なるほどね。のび太君やドラえもんさんが怯えていたのはその姿を知っていたからか、または過去に何かがあつてそう震えてるのか知らないけど・・・私の大切な人を震えさせた貴方は私が倒します！」

お互いの敵を見ながらも確かな決意をしていた。それは・・・

「絶対に生きて帰る！」

さあ、いよいよ僕らの戦いが始まろうとしていた・・・

勝つために・・・

美子さんはあの人に相手してもらおうことにして、僕は今、目の前の敵を警戒して睨みながら腰に隠している銃をいつでも引き抜けるような体勢になっていた

「……………」

お互いに息を呑みながらも一歩一歩近づいて行くと向こうから話しかけた

「・・・なるほど。そちらも銃使いか」

「そちらも・・・ね」

「中々良い面構えをしている・・・存分に戦いを楽しめそうだ」

「それはどうも・・・ね!」

ーパアン!

僕は言い終わると同時に向こうも銃を引き抜いて発砲したがお互いに体に当たることなく逸れた

「くっ、速打ちは自信あつただけだな・・・ん?」

「油断していたな!はあ!」

僕は発砲したのが、向こうに当たらず悔しがると相手はその隙を逃さず、拳を僕の顔面の方に迫ったが僕は慌てて回避した

「うわっと!」

「ほう。今のを避けるか」

「なる!はあ!」

「このような攻撃他愛ない(パシッ)」

僕もやられるわけにはいかず、拳で対応すると向こうは冷静に掴んでー

「はあ!!」

「(背負い投げ!?) くっ!」

相手により背負い投げされた僕は慌てて受け身を取り、すぐに起き上がってバックステップを取った

「危ない、危ない・・・」

「きれいな受け身だな・・・まるで、投げられるのがなれているかのよ

うにな」

「(中学の武道でジャイアンに背負い投げされまくっていたから自然と出来た受け身・・・ここで約立つなんてね) ふん!!」

「パーパン! パアン!」

僕は立ち尽くしている男の隙を逃さず僕は速打ちで発砲すると向こうは一瞬固まっていたためか反動が遅れていた。しかし、なんとか動くと言面が外れて・・・

「な・・・君は・・・」

「・・・バレたか。召喚システムで自我を持つのは中々ないがこういう機会じゃないと戦えないからな」

「まさかと思ったけどね・・・速打ちのスピードは絶対的な自信があった。だけど、君も同時だったのと、君は僕しか狙わなかった・・・」

「・・・早い話気づいていたのだから?」

「薄々とね・・・まさか、自分と戦う日が来ると思わなかったな」

そう苦笑いしながらも僕は目の前の敵・・・もとい僕(偽)をしつかりと見ていた。どうやら簡単にはいかないか

「ま、相手が誰であれやることは変わらない。そう・・・」

「二例え同じ自分でも倒すべき敵として戦う」

僕らがそういうと近くの方で爆発が起きたのを聞こえた僕は目の前の敵を集中しながらも美子さんの心配をしていた

必ず決着つけるから!!

美子 side

私はメデューサーになった人をしつかり見ながら構えていた。初の実践・・・負けられない!

「はああ!」

私とメデューサーは接近して、メデューサーは足で私を攻撃してきたのを見て私は回避した

「(本の使い方は・・・?)」

「はああ!!」

メデューサーは雷を起こして私を攻撃してきた。って雷!?

「つきやあ!!」

直撃しそうな私は慌てて走って逃げた。雷はずるいよ!!

「なら、のび太君達から借りた【空気砲】で・・・ドカーーン!!」

私は教えてもらった合図でしっかりと相手を狙うもメデューサーは私の攻撃をあつさり之交わしていた

「どこを狙っている!」

「くっ、まだよ!ドカーーン!!ドカーーン!!」

「甘い甘い!狙いをしっかりと定めていないではないか!」

「このままではじり貧・・・本にはなにか書いてないかしら・・・!?!」

私は慌てて本を開くと何か書かれていたのでそれを読み上げた

「?手を前あげて・・・吹き飛ば」

私は読み上げてその通りにしようとすると、メデューサーは迫ってきたので手を前あげて唱えた

「あわわわ、吹き飛ば!チンカラホイ!」

「ぬうう?!」

「つてえええ!?!」

呪文した私が言えたことではないけど本を開いて言う通りに唱えたら本当にメデューサーが吹っ飛ばされた!?私の召喚獣の時はそんなの出来なかったのに・・・

「この世界のご都合主義?なんてね」

「己ええ・・・!」

どちらにしてもこの本で直接攻撃ではなく、呪文をいって戦えばいいのね!

「小娘がああああ!」

「我を失ってる・・・?なら好都合!!石の破片よ、向こうに攻撃せよ!チンカラホイ!」

「こんな攻撃に効く私ではない!!」

メデューサーはそこら辺に落ちていた石の攻撃をあつかりと交わしていた。それは当然よ

でも・・・なにも考えなしで攻める私じゃないの!すぐに書かれていた呪文を唱えた

「風よ吹き荒れて！チンカラホイ！」

「ぬあああああ！」

私は手を前にすると先ほど吹き飛ばしたのよりも強く風が渦巻くのが一直線でメデューサーに直撃した

「うう・・・集中しながらやるから結構負担があるわね・・・」

「中々良い攻撃だったわ・・・これで終わり？」

「うそお!?まだ立てるの!?!」

「先程よりも強い雷で回避不可能にしてあげるわ・・・はああ!!」

「あわわわ、回避するには間に合わないわ!ど、どうしましょ!?!」

メデューサーが両手で雷を強く起こすのをみて私は慌てていた。本で防ぐ方法考えても時間がかかる!!

「はっ!そうだわ!」

私は慌ててポケットから赤い風呂敷を取り出した瞬間にメデューサーは雷を振り下ろした

「これでおわりだー!」

「ひらりマント!!」

「な!?!軌道が逸れただと・・・!?!ならば、奥の手を使うしかあるまい!」

「奥の手を・・・メデューサーといえば確か・・・まずいわ!」

メデューサーといえば、目を見たら石化にされるのだったわ!このままでは私が石にされてしまう・・・

なら・・・

本当はのび太君達といつか戦うときにとつていたかったけどそれもいってられない!

「特殊能力発動!」

すると、私の空中の回りには赤い物か沢山出てきた。私はこれが無数に出てきたのを確認できたので手を前にだしていった

「私だつて負けるわけにはいかないの・・・大切な彼を置いていかれたくないから!!終わりよ!メデューサー!」

「石になるが良い!!オロロオオオン!」

「はう!?(ビクッ!?)」

なんかのび太君の声が聞こえた気がしたけど、私は気にすることな

く手を前にして集中した

「(のび太君の技名も少し借りるね?) いくわよ! 破壊力はジャンボット・ガンと同じで速さはビームのように撃ち抜く!」

私は手を両手で前に出すと砲撃のように丸くなってきたので技を叫んだ

受け止めなさい!

ー 「ジャンボット・ビーム」!!

私はその技を叫ぶと共にその技はメデューサーに直撃したのと同じ時に辺りが震えた……

友の技は偉大なり

美子 side

私は特殊能力を発動し終えたあとに疲労から来たのか地面に手を置いて深呼吸整えていた。さすがにあの威力はそう連発したら脳に負担かかるわね……

「メデューサーは……?」

私は直撃したであろうメデューサーの方を見ると元の女性に戻っていた

「やれやれ、負けたかー。あなた強いわね」

「い、いえ……」

「でも、楽しかったわ。亡霊とはいえ、ここまで楽しませてくれたお礼に教えてあげるわ。耳を貸して?」

「?は、はい」

私は言われた通りに耳を貸すと……

「ええ!」

「驚いた?それが目的なのよ……」

「だとしたら……辻褄は合いますね。って、メデューサーさん体が……」

私はメデューサーさんから聞いた情報に驚いた同時にメデューサーさんの体が消滅し始めていた

「あら、もう時間かしら。敗者はこうして消滅するものよ」

「メデューサーさん……」

「とても楽しかったわ……大好きな彼をしつかり支えないよ♪」

「はい!!」

「うん!良い返事♪じゃあ……さようなら」

メデューサーさんは消滅する直前に優しい笑顔と共に別れの挨拶をしてくれた

「情報ありがとうございます……メデューサーさん」

私はここに消えたメデューサーさんに心のなかでお礼をいったのと同時にのび太君の方の戦闘が激しくなっていた

負けないでね……のび太君

のび太side

ードコオオオン!!

辺りが黒い煙で包まれるなか僕は駆け抜けて飛びけりを放すと向こうも蹴りで対応していた

「ぬ!」

力は互角・・・なら!

「はあああ!!」

お互いに拳を前に殴ると顔面に直撃した。まさか、考えることも同じなんて・・・本当に同じ自分と喧嘩している気分だよ・・・

「ふん!! (パアン!パアン!)」

「つと考え込む時間はそんなにないか! (パアン!パアン!)」

お互いに牽制しあいながら時には銃を打ち、時には拳を交えてるが同じタイミングで攻撃になるから腹立つ

「本当に同じ自分だなーとあらためて再確認したよ」

「やれやれ、君の攻めかたは大体は同じだからたいして焦らないよー。

ノロマだから」

「僕よりも口が悪っ!?そして、偽物の癖にそれをいうな!」

「乱れ撃ちか!ならこちらも乱れ撃ちで返す!」

僕は向こうも同じ考えをするなら、兎に角乱れ撃ちで何とか気をそらすことにした。すると、向こうも同じことを考えていたのか同じことをしていた

「これも同じことに考えるか・・・このままだと僕がきついな」

「もう攻撃は終わるか?なら、次は僕がいくよ!」

「つとと!!うわお!」

のび太(偽)は僕が攻撃やめたのを伺い、目の色を変えて早い速度でパンチを繰り出していた。

そのパンチに僕は必死に避けながらも向こうは笑顔で攻撃を繰り返してた

「アハハはは、どうしたのさ!?!攻撃しないと負けるよ!」

「くう・・・僕と似ているようで似ていない凶暴さだね!」

「何言ってるのかな!？」

「(このままではじり貧だ・・・)なら、こいつはどうだ!」

「ん?がぼお!」

僕はいつまでも攻撃する偽物に回し蹴りであればらを狙うと、向こうは予想してなかったのかまともに食らった

効いた?先まで同じ攻撃していたのに・・・

「もしかって・・・」

「己・・・二度はないと思え!」

「冷静な仮面が剥がれたね。偽物の僕」

僕は冷静でなくなった男を見据えて冷静に考えた。さつきまでは僕と同じ攻撃していたのになぜ効いた?そもそも彼は僕の偽物・・・そうかわかったよ!

「(勝利の法則は見えた!)ここからが僕の本当の戦いだ!偽物のぼくには悪いけど勝たせてもらうよ!」

「一撃当てたぐらいで調子乗るなあ!」

「・・・ふう、ジャイアン直伝・・・」

僕は体を反転してゆつくりと腰を落として構えた。これはジャイアンが教えてくれたコンボだから・・・失敗は許されない!

「うおおおお!」

「(今だ!)見よう見まね!ジャイアンの母ちゃん往復ビンタ!!!」

「なあ!?!かぼおー?!!!」

「ハイハイハイハイハイハイハーイー!」

「そんなの・・・召喚獣システムにないのに・・・」

「臨機応変さ」

「納得・・・するかあああ!?!いつ教えてもらったのさ!?!」

偽物ののび太が僕に突っ込みいれているが僕は冷静に・・・

「昔からジャイアンがジャイアンのママにやられるの見てきたから自然と覚えた」

「そ、そんな理由で・・・」

「そろそろ決着つけさせてもらうよ(チャキ)」

「ええい!こんなふざけた技に負けてたまるか!(チャキ)」

僕も偽のび太も銃を相手の方に目の前に構えながら、深呼吸していた

「(一瞬でも油断したらこちらがやられる・・・ならば！特殊能力で・・・)」

恐らく向こうも同じことを考えてる・・・。偽物とはいえ同じ僕だからね・・・

「ここまでの戦いは楽しかったよ・・・そろそろ決着をつけないとね」「だね・・・」

体は温もった・・・ここで決着をつけさせてもらおう！

「特殊能力発動!!!」

お互いの武器が青いオーラに纏い・・・そして・・・

「撃ち抜け！」「ジャンボット・ガン!!!」

僕らはお互いの誇りをかけた最高の一撃を向けて放すと辺りに爆風が起きた。だけど・・・

「ぐう!!」

「このままではこちらが負ける・・・」

今の僕は向こうとは違い痛みも感じるから、このジャンボット・ガンはかなり負担来る！負けるのか・・・？

「大丈夫よ・・・」

僕の手を優しく握って声かけてくれる人がいた。この声は・・・？

「あなたなら大丈夫よ・・・のび太君・・・」

「美子さん・・・うん！」

「いきましよう！あなたの力を・・・本当の強さを見せてあげなさい!!」

「ありがとう・・・」

「な!?力が上がっているだ?!」

僕の手を美子さんが握ってくれたことにより力が更に加わった気がしたのだ。その現象に向こうは驚いていた

「はあああああ!!」

「(もはやここまでか・・・)・・・見事だ・・・二人とも」

僕らが叫んではなった砲撃は偽物が包み込まれる直前にそう聞こえた・・・

次の試練は・・・

辺りが煙に舞うなか僕は息が乱れながらもゆっくりと銃をおろした

「はあはあはあ・・・なんとか・・・終わった・・・ぐっ」

「のび太君?!」

「大丈夫・・・多分特殊能力のフィードバック的なのだとおもう」

「そう・・・」

美子さんが心配そうな顔をして僕を見ていたが僕は恐らくは特殊能力のフィードバックだから腕が多少痛む感じだと答えた

「なかなかいい攻撃だった」

「!」

「安心しろ・・・もう戦う力は僕にはない」

その言葉通りに偽物のび太の体は消滅し始めた。どうやら、もう戦闘の意思はないみたい

「もう此方の体が消滅するのは明白だかは本物のび太に伝えておく・・・闇はいつまでも闇なんだよ」

「闇?」

「いずれ貴様は・・・闇に飲み込まれる」

そう意味深い言葉を残して偽物のび太は消滅した・・・

「ふう・・・早くドラえもんを追いかけないと」

「待ちなさい。のび太君の体はまだ回復してないでしょ?1〜2分はまだ休みなさい」

「でも追いかけないと・・・」

「のび太君の体はきちんと回復してないかはまだ休みなさい。・・・いい・わ・ね?」

美子さんかとてもとてもいい笑顔で言っているがその笑顔は有無を言わさないと物語っていた

「ーつまり僕のとるべき選択はというと・・・」

「はい」

「宜しく」

素直に言うこと従うことだ

ドラえもん side

僕は走りながらここに入るときに試練の事を言われた時の事を思い出した

『《3ツノシレンヲコエテモラウ・ソコヲコエルトワタシガイル。ソシテ、召喚獣ノルールトオナジダ》』

ー3つの試練を越えてもらう。そこを越えると私がいる。そして召喚獣のルールと同じだ

って言っていたあれの言葉の意味はもしかって・・・

「わかったぞ!!この試練の意味が!!」

「え?どうしたの?」

「三人とも走りながら聞いてね?!この試練の意味がわかったかもしれない!」

「「え?」」

僕は走りながら自分の考えられることを話した

「まずジャイアンが戦ってくれている敵は君達の先生なんだね?!」

「ああ」

「なら、ジャイアンの試練はおそらく力技の試練!つまり、3拍子のつもりで向こうは本物ではないのを配属させたのだよ!」

「なら、のび太のは?」

スネ夫君が気になり聞いてきたので僕はあくまでも予想だけどと前置きして話を続けた

「あくまでも予想だけど、のび太君のは心の試練!・・・そもそも、あれが配属された時点で心おれていたのは僕もだけどね・・・」

「そういえば、のび太もだけどドラえもんもさつき何で震えていたのさ?」

「話せば長くなるけど・・・一言で言えば、僕とのび太君はトラウマなんだよ!」

「良く分からないが・・・まあ、そこは触れないでおこう。となつてしまえば、残りは体の試練?」

「普通に考えればね・・・心技体のつもりで向こうは配属してるね」

僕らは走りながらも次の試練も考えていた。最初に残ったジャイアンはもうのび太君達と合流できたのかな・・・？とにかく心配だ!!
「次の扉が見えた!!」

「明久!!頭から扉にタツクルしろ!」

「なんで!?それだと僕が痛むでしょ!?!」

「敵に奇襲かけれる!お前が苦しむ姿見れる!まさに一石二鳥だ!」

「二君は最低だ!!」

本当に雄二君と明久君は僕と知り合つてそんなにたつてないけど、これは信頼関係があるからいつているのかな?それとも本気でいつているのかな?

「とにかく開けるよ!」

「明久がつつこんでくれるのか?」

「普通にだよ!!」

もうこのままでは時間がないと思い明久君が扉を開けると共に最後の試練の部屋が明かりついた

「ここが最後の試練だ!!」

明久君が扉を開けてそう声大きく言うトー

ー 侵入者排除、侵入者排除!

無数のロボットがいた。こ、これは!?!

「ロボットがたくさん!」

「最後の最後でこんな数々のロボットがいるなんて聞いてないよ!」

「いや、ロボットだけどロボットじゃない!」

あれは見覚えがある!!

「どういうこと?」

「あれは昔僕らの冒険で苦戦した敵の一つだよ!名前はたしかー」

「ギクガク!!」

「!ふせて!!」

僕が言うト明久くん達もとりあえず伏せると辺りに衝撃が走った!

「あれは・・・ツチダマだ!!」

「ツチダマ?」

「「「ギくガく」」」」

「うわ、最悪だね・・・」

「うん」

僕とスネ夫君は嫌な顔をするのと対象に無数のツチダマは叫んでいた。つまりこの試練は・・・体力の試練!?

ここから先は・・・

最悪だ・・・こんな数では明久君達を先にいかせられないし、か
とってこのままではじり貧・・・

「数が多いからどうしたものか・・・」

「なら、ドカーーン！」

僕が考えていると誰かがツチダマに向けて思い切り空気砲で発砲
した・・・

・・・って!? ツチダマに発砲した!?

「明久(君) 何勝手にうつのさ!」

「え、このままじゃあ時間が足りないんでしょ!? ならさっさと倒して
進んだ方がいいじゃない!」

「このバカ!? 相手の数を考えろよ!」

「何勝手に発砲してるの!」

「の・・・のび太君より何も考えない子は初めて見た・・・」

雄二君とスネ夫は明久君の何も考えていない事で怒っていて僕は
痛む頭を抱え込みながら呆れていた

「ギクガク!!」

「って! 何かまた攻撃しかけてきたああ!」

「ああもう! 【ひらりマント】ー!」

明久君はツチダマが目から光線放してきたのに驚き、僕は呆れなが
らも咄嗟に【ひらりマント】を出して攻撃の軌道を反らしたが辺りに
は爆風が飛び散っていた

「うわ!!」

あまりの爆風の強さに全員が声をあげていた

「このままではじり貧だぞ! のび太達にみたいに残る選択してもこの
数では厳しいぞー!」

「でも、召喚システムを取り返したら収まるのだから早くいって止め
たらいいじゃない?」

「方法はどう頑張っても二つしかない・・・どちらでもデメリットは存
在するがな・・・」

「確かに・・・」

①誰かが殿をして戦う。

②みんなで戦って突破する

正直、どちらでもデメリットはある・・・なら、こいつの相手をするのには経験したことある者・・・

つまり・・・

「こいつの相手なら、僕が残るよ!」

「ドラえもんが!?!でもー!」

「明久君、僕らはそれなりに大きい戦いも経験しているから大丈夫だよ・・・」

「なら僕も残ー!」いや、明久と雄二はいつてくれ!」スネ夫!?!」

明久君が自分も残ろうと言おうと思うとスネ夫がそれを止めた。僕もスネ夫が残るのは予想してなかったから見ると、彼は小さく決意していた

「のび太もジャイアンも三上さんも頑張つて戦っているんだ・・・。ならドラえもんをここで残して行くよりも僕ちゃんも頑張らないとね」
「(一人称が昔に戻っているけど心はしっかりしてる・・・スネ夫のメンタルは心配ないね)そうだね。スネ夫とも連携はとれるから心配ないし、ここは明久君達が先にいつてもらった方がいいね」

「・・・だな。確かに俺じゃないとこのバカは扱えないし、ゆつくりする時間はないからこれが最善の策だな」

僕らの提案に雄二君は苦渋の決断を下してくれた。もうこんなにゆつくりは時間をかけられない! ツチダマを相手するのは過去に闘ったことがある僕らがした方がいい!

「っ・・・わかったけど・・・必ず僕らが決着つけていくからね! だから二人とも気を付けてね!」

「明久こそ肝心なところでトラップとか引つ掛かるなよ!」

「明久君達ならできる! 必ず僕らもあとで追いかける!」

「なら決まりだな。骨川とドラえもんはここを頼む! 俺と明久は・・・この召喚システムを盗んだふざけた奴を殴るからな」

雄二君はものすごく悪い顔しながら指をならしていた。これなら、

明久君達の心配はないね

「なら、あとは頼むぞ！二人とも」

「必ず君たちのシステムを取り返すんだよ！」

「おう」

僕らがそういうと明久君達は扉の方に全速力で振り返ることなく走っていった。しかし、それを逃さないツチダマ達は明久君達に攻撃しかけた

「「ギクガク！」」

「させない！【ひらりマント】!!」

「「ギガ!?!」」

僕は明久君達に向かって放った雷は飛びついてひらりマントで攻撃を跳ね返したら向こうは驚いていた

「初めての召喚がこの実践なんて・・・まあいいや!!サモン!!」

するとスネ夫君は光に包まれて姿が少しだけ変わっていた。緑色のマントに包まれていて背中には刀があった

「これが僕の召喚獣のまとした姿・・・」

「ギガー!!」

「スネ夫！」

衝撃波がスネ夫くんに迫り明久君が悲鳴をあげるが・・・

「【ひらりマント】くからのく！」

「てりああ!!」

「ギガー?!」

僕がスネ夫の前に立ち攻撃がそれるとスネ夫は全力でツチダマに近づき・・・切り裂いた。切られたツチダマは予想外だったのか叫んでいた

「・・・へ?」

「今の見ての通り、ここは僕に任せてね・・・(チンッ!)」

「だから、僕らの事は気にしないでですすめ！」

「「・・・おう!!」」

明久くん達が扉の前を開けようとすると再生したツチダマが追いかけてようとしたがそれを見逃す僕らではない

「イカセナイ!!・・・ギガ?!」

追いかけてようとしたツチダマにスネ夫が刀で振り下ろすと向こうは慌てて下がっていた

「おっと、ここからは・・・僕ちゃんと遊んでもらうよ?なーに、あいつらは定員オーバーだからこここの部屋から出てもらっただけさ」

「さあ・・・」

「僕らと遊ぶ時間だよ・・・ツチダマ!!」

あとは頼んだよ!明久君と雄二君!!

――???

一人の男が影から見ていた

「ふむ・・・いよいよこの戦いの物語は終盤となってきたか。君はどんな結果をもたらしてくれる?吉井明久・・・」

興味深そうにそして、試すようにその先を楽しみにしていた・・・それは何を意味するのか・・・わからない

任す理由と冷や汗

明久 side

「雄二！本当にいいの!？」

「何がだ？」

「スネ夫達の事だよ！いくらなんでもあの化け物を倒すのは難しくない!？」

僕は一緒に走っていた雄二にこの判断は正しかったのか聞きたかった。状況的には仕方がなかったとはいえ、あんなとんでもない化け物を相手しているドラえもんやスネ夫がただではすまないと思う

「ああ、なんだそんなことか」

ところが雄二は走りながらあつけらかなに返事していた。え、そんなことっていま言わなかった？

「君は血も涙もないのか!？だから霧島さんに怒られるんだよ！」

「いきなり何をワケわからんことをいう!？そして、なんで翔子の名前が出る！」

「ええい！そもそもなんで心配しないの!？」

「全く・・・心配しない理由なんてそんなの小学生でも分かる答えだぞ？明久」

小学生でも分かる答え・・・？

「その様子だと分かってないみたいだな・・・だからバカなお兄ちゃんと言われるんだよ」

雄二は呆れた顔になりながら僕に苦言を言っていた。何でそんなに呆れるのさ!？

「いいか？そもそも、俺が心配しない理由は簡単だ」

「早くいってよ」

「答えは簡単だ。・・・信じてるからだ」

「あ・・・」

「やっとわかったか。召喚獣の戦争でも俺がお前達を信じたように・・・今回もあいつらを信じてるからだ。そもそも、三上除くあの四人は俺たちより経験が上だから心配する事はない」

「そっか・・・そうだよね!のび太達を心配することはないよね!」
僕がそういうと雄二は頷いていた。そうだ、のび太達ならきつと・・・

なら・・・

「俺たちの仕事は召喚システムを盗んだ犯人を捕まえないとな!」
「うん!」

僕もみんなを信頼して戦わないとダメだ!!

ドラえもん side

僕とスネ夫くんはお互いの武器を構えながら目の前の敵の人数を数えていた

「えーと、ツチダマが4体か。1体でも十分きついのに・・・」

「うへー・・・絶対にこれしんどいよ?けどまあ・・・」

「それは初めてやる場合だからね」

そういうとスネ夫君は刀をゆつくりと引き抜いて構えて、僕は空気砲を取り出した

「どうせ再生するなら、こちらと同じことを繰り返すまで!!」

「じゃあ・・・ドカーーン!」

「ギガ!」

「避けたね?貰ったああ!!」

僕の空気砲に慌てて避けるとスネ夫はその隙を逃さずに体を切り裂いた。当然再生するのはわかっている・・・

「ドカーーン!!」

追い討ちをかけるように空気砲を放すと一体のツチダマがバラバラになった。その様子にツチダマ達は動揺していた

「・・・まずは」

「1体!!残り3体!!」

「さあこい!!」

僕らはお互いの武器を構えていると、ツチダマ達は目を光らせて集まっていた

「何をするつもり??」

「ひとつになつて衝撃とかをだすつもりか?」

僕とスネ夫は警戒をしながらゆっくりと見てみるとツチダマが語りかけてきた

「キサマラニマケルノハシヤクダカラオウギヲツカウ」

「いや、早くない?普通はゆっくりと行ってからいくもんじゃないの?」

「コノオウギヲツカウシユンカン、キサマラノハイボクダ」

「いやスルーしないでよ・・・」

「「ミヨ!!ワレラノアラタナシンカヲ!!」」

「だからスルーしないで!?!」

僕らの突っ込みとよそにツチダマはバラバラになり何かに変わろうとしていた

「いったいなにを小としてるか知らないけども・・・手裏剣であててる!!」

「ドカーーン!!」

僕とスネ夫はなにかになる前に全力で攻撃しかけると辺りは煙に包まれていた・・・

「やったか?!」

「いや・・・どうやらその逆みたいだね・・・」

「ガツタイカンリョウ・・・」

煙が収まっていくと共に合体していたツチダマの声がしたので僕はそこを見ると・・・

「で・・・でかい・・・!?!」

僕らの体が小さく見えるぐらいのデカさのツチダマがたっていた・・・。3体でここまで大きくなる!?

「ハカイ、ハカイ」

「!」

「くっ!」【ひらりマント】ー!!」

目からのビームに僕は一瞬動きが鈍ってしまったのだが、なんとかひらりマントで防ぎ跳ね返そうとしたが・・・!?

「ななな!? 押されている!?!」

「ドラえもん!」

「ぬぬぬ!!」

「ムダダ! サツキノタンジュンナコウゲキカラカ三倍二ナツテイ
ル・・・タエキレルハズガナイ!」

「うわー!」

「ドラえもん!? つうわああ!!」

「僕らはとんでもない威力に吹っ飛ばされてしまった・・・僕らはひよつとしたら・・・とんでもない敵を相手しているのではないか・・・?」

「ハイジョサセテモラウ・・・」

「・・・ドラえもん・・・大丈夫・・・?」

「な、なんとか・・・あれを破壊するのは一苦労しそうだね・・・」

「・・・僕も覚悟を決めて戦うしかないか・・・」

「スネ夫くんがなにかを決意したように巨大ツチダマを見ていたがそれは僕も覚悟をして攻めることを決めた・・・」

「必ず明久くん達のためにもここで倒す!!」

友と信頼されるもの

僕とスネ夫は武器を構えながら巨大なツチダマを睨んでいた。あいつは空を飛べるのは変わらないのなら……

「空を飛ぶのはお前の特権ではないよ!!」

「そうだ!」

僕とスネ夫は「タケコプター」で空を高くとびツチダマを相手していた。何も僕らは空を飛べない訳じゃないからね!

「ギガッ!」

「衝撃波がくる!!」【ひらりマントー!!】

「僕の攻撃は【空気砲】だ!ドカーン!!」

僕らは反撃をするとツチダマは学習をしたのかあつさりと回避行動をとり、僕らの攻撃は当たることなく近くの壁に直撃した

「オマエタチノコウゲキハケシテアタルコトハナイ……」

ツチダマは一部の人にとっては最悪の宣告だろうが……僕らは数々の大きい冒険してきたのだから今さら……

「怖いなんて言う感情はない……!!」

僕は空気砲を構えながらどうしたものかと考えていた……

スネ夫 side

参ったな……本当に参ったな……。僕ちゃん本当に大ピンチじゃないかなー……

「どうする?ドラえもん」

「参ったね……あれをどうするのか本当に策が思い浮かばないよ……」
「暫く冒険も離れていたから勘が鈍っているんじゃないの?」

「あはは……それならどれだけ良かっただろうね」

ドラえもんの台詞に僕も同じ感想だった。いくらなんでも一体でも恐ろしいのに……あれを三倍もあるなんて恐ろしい……

どうすれば……

『明久達はいけ……ここは俺に任せろ』

『こうしてる間に召喚システムを取り返すのが遅くなる!なら、ジャイアンの時と同じようにここは僕が残った方がいい!』

『ドラえもんさん達は先に行ってください!』

ここにくるまでジャイアン、のび太、三上さんが僕達を先に進まんでいってもらうために、僕らの代わりに戦ってくれていたんだ

のび太もジャイアンもあの頃から何も変わっていない。昔から乱暴者だけど仲間思いのジャイアン・・・誰よりも優しいのろまののび太が戦っていたんだ・・・

だから・・・

「僕もあの三人に負けないように戦うんだ!!ドラえもん!!」

僕は決意と共にドラえもんを呼び掛けた。するとドラえもんは僕の方に来た

「何!?!」

「特殊能力を使うからこいつから距離をとるよ!!」

「わかった!!」

僕はドラえもんにそういうとドラえもんも僕を信じて巨大なツチダマから距離をとった

「頼む力貸してくれ・・・」

「コレデオシマイダー!!」

「特殊能力発動!!」

ーバゴオオオン!!

「コレデオワリダ・・・ナニ!?!」

ツチダマが驚いた声が聞こえた。なぜ驚いたのかというと・・・

「僕ちゃんの特殊能力・・・しかと見ろ!!【無敵砲台】!!」

「ええええええ!!」

「防御も不可能!!回避不可能!一発おまじないしてやる!!」

「サセルカ!!ギーがー!!」

【ひらりマント】!!!

ツチダマが衝撃波を放してきたがドラえもんが飛び出してきて、ひらりマントで対抗してくれた

「ぐぬぬぬ・・・」

「ギガがが・・・」

「僕だって・・・僕だって意地がある!!】【ひらりマント】ー!!!」

「ギガーーーー!!?!」

ドラえもののひらりマントがツチダマの衝撃波を押し返した。返されると思わなかったツチダマは近くの壁に吹っ飛ばされた

「オノレ……」

「お前の敗けだ……【無敵砲台】……」

「や……ヤメロ!?!」

「再生するまもなく……攻撃尽くしてやる……発射アアアアアア!!」

「ギガーーーー!!」

僕の合図ともに巨大なツチダマに無数のミサイルが飛んでいき、回避することも許さず、バリア張ることも許さずただひたすら打ち尽くしていた……

しばらくしてから収まり……

そして……

「ギガ……ガツ……」

ツチダマは消滅した……偽物だからよかつたけどこれが本物なら再生してまだ襲っていたんだらうね……

「はあ……おつかれさん!ドラえもん!」

「スネ夫君……君もお疲れさま!」

僕らの戦いは終わり寝そべりながらグータッチを交わした……あとは明久達を合流しないとね……頼んだよ……明久!!

立ちふさがる親玉は・・・

僕らはここに来るまで数々の試練があった……。ジャイアンが鉄人と戦うために僕らを逃してくれた。そのつぎの試験にはのび太と三上さんが謎の二人を相手して残った

「正直、のび太の心配はあるけどね」

「どうした？突然？」

「いや、のび太があんなに様子おかしいのは初めてだったよね」

「確かにな・・・」

僕がそういうと雄二も神秘的な顔で考えていた。僕の知るかぎり、あののび太が震えていたのは異常だった

「だがらまあ、あいつの恋人がいるから大丈夫だろう。それにあいつが負けるイメージがないな」

「確かにね。のび太なら、負けるイメージはないね」

「それに・・・最後の試練のドラえもんや骨川がいるがまあ22世紀の猫型ロボットがいる時点で大丈夫だろう」

そういえば22世紀の世界はどんなのかこれが終わったらドラえもんに聞きたいな。賢くなる道具があるなら聞きたいな・・・

「さて！俺達は・・・わかつているな？」

「うん。僕たちの役目は・・・」

「親玉を潰すことだ!!」

僕と雄二が声を揃えて言うと、目の前に最後の扉が見えた。うん・・・皆のお陰でここまでたどり着けたんだ・・・

だから・・・

「死ねやああああ!!盗人おおおお!!」

ーバゴオオオン!!

扉を足で思いきり蹴りあげるとドアが開いた。すると、目の前にたくさんのデータが表示されていた。な、何?!この難しいのは!?

「ヨウコソ・・・トイエバイイノカナ？」

「!」

「ヨクココマデタドリツイタネ・・・」

ゆつくりとその声は近づいていたが暗すぎて顔は見えないけど・・・
なんだろう？この感覚は・・・

「お前が親玉でいいんだな？盗人野郎」

「盗人・・・ナンノコトカナ」

「わからないふりするならそれでもいいが・・・(ポキポキ)」

「だけどね・・・(スツ)」

「お前を倒して召喚システムを返してもらおう!!サモン!!」

僕らは召喚獣でいつも合図する言葉を言うのと体に包まれて・・・

「おお。確かに俺の召喚獣と同じ服装だな。しかもご丁寧にメリケン
サックもあるのか」

「僕は・・・木刀だけ?!あれ?学ランは?!僕の召喚獣には学ランがある
はずなのに!?!」

「召喚システムにバカにされているのじゃないか?」

僕が召喚システムにバカにされているのじゃないか?・・・うん、
もしそうなら立ち直れないよ・・・

「・・・ジュンビハイイカ?マツテイルノダガ」

「ご丁寧に待っていてくれていたみたいだぞ?」

「(何て心優しいんだ!!)あ、はい」

「ナラ・・・召喚獣システムヲカエシテホシケラバワタシヲオシテミ
ナ!!」

すると、盗人は消えて・・・

「明久!!目の前だ!!」

「え・・・」

「オソイ!!」

盗人は僕の顔を思いきり頬に殴り、殴られた僕は壁にぶつとばされ
た。一体何があった・・・?

「く!おらあ!」

「アマイ!キサマノコウドウハヨメテイル!」

「(うそだろ!?!後ろからの攻撃だぞ!?)ぐお!?!」

「オイウチダ!ム!?!」

「てあああ!(シユツ)」

このままでは雄二が危ないと思い、僕は木刀を横振りで攻撃するも
そいつはあつさり回避した

「キサマノタチスジハメヲツブツテモワカル」

「く！なんか腹立つ!!」

「落ち着け明久」

「雄二、大丈夫だった？」

「まあな。．．しかし、後ろからの攻撃やお前の攻撃がこんなにもあつ
さり交わされるのは驚いたな．．．」

「うん。はつきりと言えば強いよね．．．」

「だな。なら明久．．（ガシツ）」

「ゆ、雄二？」

雄二は何か決めたように僕の首元を持ち．．

「いつてこい！いい！明久あ!!」

「ナカマヲナゲタ!!」

「（雄二、あとで覚えてろ!!）くらえ!!明久突進しまーす!!」

「コンナモノヨケルヒツヨウハナイ．．フン！」

僕が勢いよく木刀を先に向けて攻撃しかけるとソイツは拳で反撃
した。すると、そいつは足で攻撃しかけて木刀と均衡していた

「コノテイドデオレヲ攻撃シカケルトハ．．ナメテイルノカ？」

「．．．いや、それは予想範囲内だと思うよ」

「ナニ?．．．!!」

「明久ばかりに集中しすぎたな。おらあ!!」

「グオ!!!」

雄二の拳が盗人の顔に思いきり殴るとヒビが入った音が聞こえて、
そのまま近くにまで吹っ飛ばされていった

「ナイス明久」

「まあね。いきなり投げたときはさすがに殺意わいたけど．．．」

「ははは。一割悪いと思ってる」

「それほど悪いといっているよね!？」

僕がそう突っ込みいれると雄二は悪い顔で全く反省してない顔で
答えていた

「さすがに今のは効いただろ」

「うん」

「・・・確かに今のは効いたな」

すると、僕の言葉に答えるように敵がさつきとうって変わった声だった

「!?!」

「変声機が壊れてしまったのは予想外だが・・・まあいい。どのみちバテてしまうの時間の問題だな」

「君は・・・!!」

「まさかこうして話すとはね・・・初めまして俺よ・・・」

「おいおい・・・そんなのあり得るのかよ・・・」

雄二の言いたい事も分かる・・・なぜなら目の前の男は仮面を破れたその素顔は・・・

「僕・・・?」

「初めまして俺よ。俺の名は・・・島田明久だ・・・そして、Gを名乗るものだ」

その男は・・・目が凶器でそして・・・顔はまさしく別世界の僕だった・・・

敵の正体は．．

僕らの目の前にはG．．．もとい、その正体は僕に瓜二つの男の名が島田明久が僕らの前で最後の敵として立っていた

「初めまして別世界の俺」

「べ、別世界の僕が．．．召喚システムを盗んだ犯人ってこと!？」

「こいつは驚いた．．．名字は違うが顔が怖いバージョンの明久か」

「ふふ、まさか別世界の俺とやる事には驚いたが．．まあいい。どちらにしても始めようではないか．．．」

「．．．雄二は手を出さないでね」

「明久．．．？」

僕は雄二にこの勝負は手を出さないでほしいと言うと雄二は怪訝に見ていた

「同じ僕なら．．．同じ僕で決着を着けないとね」

「面白い．．．」

「わかった．．．そこまで言うなら俺は手を出さんが、危なくなったら手を出さしてもらおうぞ」

「ありがとう．．．」

僕は雄二にお礼を言うと、僕はゆっくりと木刀を引き抜くと向こうの僕も木刀を引き抜いた

「俺を倒せるのは俺だけってか？まあそんなのはどうでもいい．．．ただ俺は．．．」

「僕は．．．」

「「お前をここで倒す!」」

お互いに木刀を向けて睨むように構えていた。あいつは凄い殺気で僕の方を見ていた

「．．．．．」

「．．．．．」

僕らは静かに構えてお互いに動きを探っていた。これはここに来る前にのび太が教えてくれたことなんだけど．．．

『のび太ってさ、射撃の腕凄いよねー』

『どうしたの？いきなりそんなの聞いてきて』

『あ、うん。のび太に聞きたいけど、ほら射撃って速打ちが物凄いじゃない？その時に相手のどこを狙うとか考えてるの？』

『うーん．．．考えてるかと言えば絶対って訳じゃないけど．．．でもこれだけは言える。戦う前から自身の得意な戦いかたを负けるイメージはもって戦わない方がいいよ』

『？』

『とにかく、僕が明久に教えられるのは．．．命を懸けてでも負けるなっ
てことさ！』

『なるほど！．．．ってあれ？最初の質問は僕は何を聞きたくってその
質問をしていたんだって．．．？』

『．．．さあ？』

そんなことがあったのは内緒だけど．．．のび太も命を懸けて目の
前の敵と対峙していたんだから．．．僕も命を懸ける！！

「ふん！！」

「はああああ！！」

あいつが一步踏み出す瞬間に僕も踏み出した。あいつは突きの攻
撃をすると僕は木刀で上手いこと勢いを流し込んだ

「貫ったああああ！！」

「あまい！！（パシッ！！）」

「片手で押さえた!?なら．．．足で!!」

「ふん！こんなの動作もない!!」

僕は片手で止められたのを反動で右足で振り下ろすと奴は後ろに
反り倒れた

「あんたの運動神経はどんなんだよ!」

「それはお互い様だ!!どうやってその体勢で攻撃するのさ!!」

「はん！それは．．．運動神経がいいからだ!」

「ぬかせ!!ふん!!」

「いたああああ!?ヘッドロック!?がぼお!」

僕は別世界の僕の顔面にヘッドロック仕掛けてきた。そして、よろ
けた僕を見逃さず顎にアツパするとよろけていた自分はまともに喰

らってしまった・・・

「ふっ!!」

「くっ、うわああ!!」

「この程度でこの俺を倒せるとでも思ったか・・・? 甘いんだよ!」

ーパシッ!

「な・・・!! 坂本雄二!」

「雄二・・・?」

「悪いな明久・・・本当に手を出すつもりはなかったが・・・気が変わった・・・(グツグツ)」

「!?どこからそんな力が・・・!」

「てめえの面を見ているとだんだん腹立ってきた・・・。なんか腹立ってきた!!」

「(そうか!? 召喚獣が体に纏っているから力がパワーアップしているのか!?) ぐぐ・・・」

「おらあ!!」

「っち」

雄二が別世界の僕の顔を殴ろうとするが、別世界の僕はしやがんでよけた

「ツチ、避けるのかよ」

「全く・・・手を出さないでと言ったのに」

「いつている場合か。あいつは恐ろしいぞ? まだ力がそんなに出してないぞ」

「分かってるよ・・・。遊んでいることもね」

僕はゆつくりと木刀を構えると雄二もボクシングの構えをとっていった。対するそいつは武器を構えながら僕らを見ていた

「まあ、2人だろうが3人だろうがどのみち俺が負けることはない。なぜなら・・・」

「「きえた!」」

「俺には負けるほどの力がある訳じゃない!」

「ぐあああ!」

別世界の僕は木刀を思い切り僕らを攻撃すると太刀筋が見えな

かった僕らはまともに喰らってしまった。攻撃した別世界の僕は木刀を軽く横にふり僕らの方を見下すように見ていた

「乞うもあつさりだと拍子抜けだな……まあいいや。君たちはここで負けてもらおうよ……」

「イタタタツ……。雄二……たてる？」

「ああ……。しかし……。あいつは本当にお前か？明らかに狂喜になつていやがるし……。それに……」

「うん。攻撃が全く見えなかった……」

参ったな……

今までは召喚獣を操れば速いんだけど今は僕自身が戦う……

僕は果たしてこいつに勝てるのか……？そんな気持ちで頭によぎった……

見破るには．．

僕は今、目の前の敵を見て頭の中である文字がよぎって仕方なかった。さつきまでこちらが優勢だったのに、一瞬で戦場が変えられたかのように体が痛かった

「フィードバックか．．．なるほど確かに痛いな．．．」

「わかってもらえて何よりだよ．．．。それよりもあいつは何をしたの？全く攻撃が見えなかったよ．．．」

「俺の目的のためにも．．．邪魔をするならお前達を確実に倒してやる」
「よくわからんが．．．とにかく倒すべき敵は強力な敵って訳か．．．」

僕と雄二はまた先のきえた攻撃を警戒して構えていた。本当は雄二には手を出してもらいたくなかったけどこうもいつてられない

「だが、もう一回あいつが消えた攻撃したときに何をしたのか分かるだろう」

「うん」

「．．．お前達では不可能だ．．．」

「「え？」」

「お前等ではこの俺には勝つこと事が不可能だといったのさ。何故なら．．．」

「(もしかってもう一回来るのか!?) それはどういう意味?」

「その意味を知りたいのか? いいだろう．．．それは、この俺が強いと言っことだ!!」

「来るぞ!!」

別世界の僕は笑顔で走ると雄二と僕は構えていた武器を手にして、僕が先に木刀で対抗した

「ぐぐぐ．．．(こいつ本当に僕なの!?!力がとんでもない!、)」

「お前ごときが俺に地からで押し掛けるとでも思ったか?!」

「明久、しゃがめ!」

「!OK!」

「木刀を離しただど!?!」

僕は雄二の指示通りにしゃがむタイミングで雄二は木刀を掴ん

で・・・

「つらああああ!!」

「!?ぐっ!!」

雄二は別世界の僕に勢いよく横振りでやると、向こうは慌てながらも対応していた。そして、対応された雄二は舌打ちをして、対応した別世界の僕は笑っていた

「残念だったな。面白い攻撃だったが・・・この俺にはそれでは勝てない」

「ああ、残念だったよ・・・。俺ではなく、あいつの攻撃が先に通るのだからな!!」

「は・・・な?!?」

「つらああああ!!」

僕は別世界の僕に足払いをした。当然、下がお留守だから交わせるはずもなく足払い喰らい、そのまま地面に倒れるかと思ったが・・・
「なに!?!」

別世界の僕は片手で地面に手をおいて耐えていたのだと、嘘でしょ!?完全に不意をついての攻撃で地面に倒れるはずなのに、なんで?!

「・・・まさか、そのような攻撃で来るとはさすがに驚いた。この俺が二回も本気で驚かされるのはいつぶりだろうな・・・」

「く、ならもう一度!!」

「普通ならすぐに攻撃を移されてはまずいのだが・・・この俺には関係がない!!」

「うわあ!?!」

僕らがもう一度その体勢ならチャンスだと思い、攻撃を仕掛けるが別世界の僕は片手から両手で地面に手をおき、こちらにた折れ込むように両足で踵落とし仕掛けてきた

ヤバイと本能的に思った僕らは両腕でガードするも向こうの攻撃が上回り地面に倒れ混んだ

「つち、脳天を叩き込めれなかったか。運のいいやつめ」

舌打ちとともにそんな声が聞こえたが、今はそれどころではない・・・

「全く・・・本当にあいつは別世界のお前か？」

「そう思いたいけど・・・こんなに力の差があるなんてとんでもないよね・・・」

「おまけにあの運動神経は凄すぎだろ。のび太達が負けるわけだ・・・」
「だよね・・・。雄二、次の策はないの？」

「わるいな。いつもならすぐに思い浮かぶはずなのだが・・・今回はこんなに手詰まった感じははじめてだな」

「本気の台詞？それ・・・」

「ああ・・・」

参ったな・・・

雄二は冗談いつているのかと思っていたけど、顔はマジみたい・・・
「もうお前達の作戦会議は終わりか？それとも・・・もう、策がでないから諦めたのか？」

「は、いつている」

「もしかしたらこれ事態が作戦かもね」

「何？・・・まあいい。歯向かうならもう一度・・・貴様らを痛め付けたらいいだけだ」

「本当に別世界の僕は性格が悪いな・・・」

「どの口で言うんだかね・・・。別世界の僕」

お互いの武器を構えながら僕は警戒した痛め付けると言うのは、あの力業が来ると言うこと？

「くるぞ!!明久!!」

「(見えない攻撃・・・まさか?)」

「ここにくたばれ!!!」

「雄二!!もしかしたら見えない攻撃の正体わかったよ!!」

「なにー!」

僕は頭をフル回転させてあれの正体がもしかかったらと思いい、雄二にすぐに耳打ちした

「それは本当か!?明久!!」

「可能性としてはそれが考えられるよ!」

「だが・・・わかった!!お前を信じる!!!」

「作戦会議はおしまいか!? なら、これで終わらせてやる!」

別世界の僕は皮肉な言葉を言うのと悪い顔になり、ゆっくりとこちらに歩いてきた

「さて、少しの間だったけど・・・そろそろ終わらせるとするか?」

「(タイミングはよく見ろよ・・・)」

「(うん)」

「ー」

ー 今だ!!!

「なっ!?」

僕らは別世界の僕が直線で攻撃してくるのを読んで横に飛ぶとそいつは驚いていた

「お前の予想通りだな!! 明久!!」

「うん! まさかと思ったけど、まさかムツツリー二の特殊能力だったなんてね!」

「何故わかった!?!」

「お前が最初に見えない攻撃したときに場所を移動していた。まずその時点で木刀が動くと言う原理はない。それによく考えてみればあの攻撃で正面から食らったから明久はこう考えた」

別世界の僕は交わされると思っていたのかわかっていたのか驚いて聞いていた。そんな別世界の僕に雄二はさっきの仕返しと言わんばかりの悪い顔で説明していた。そして、僕もその流れを受け継ぐように話した「ここで僕は思い出した。のび太から聞いていたのは召喚システムが盗まれていた事をね。そして、そのデータをもとになにか作ることは可能だと思い、考えられたのは他人の特殊能力を使っているのではないかって」

「だが、俺がそれではなく純粋な攻撃とは考えないのか?」

「あり得ないね。もし、そうならもつと早く僕らを倒していたはずだ。だが、君はそれを使わなかったと言うことは、特殊能力としか考えられない」

「・・・ツチ。腐っても俺と変わらない部分があるんだな。ご名答・・・」

「さあ!! 今度は君が僕らにやられる番だ!!」

「覚悟しな！」

僕は一通りの説明を終えると共に、目の前の敵を倒すことを宣言した

このとき僕は気づかなかった・・・

あいつはまだ本気出していなかったことに・・・

怒り

明久 side

僕と雄二は別世界の僕の切り札を見破ったのでもう恐れるものはないと思い、木刀を構えた。僕らの頭によぎっていたのは・・・

——このまま押し切れる！

そう確信していた・・・

そう・・・このときまでは・・・

「さあ・・・君の切り札はもう読めたんだ・・・。今度は僕らが君を倒す番だ!!」

「このバカのいう通りだ・・・覚悟しな！」

僕らは互いの武器を構えながら目の前の別世界の僕を睨んでいたが、別世界の僕は先程とはうって変わって冷たい目になった

「吉井明久・・・君は世界をどう捉える・・・？」

「世界をどう捉える・・・？その質問の意味がわからないよ」

「なに・・・大人つてのは理不尽なものだ。世の中は正義も悪もない・・・。あるのは理不尽な世界だ・・・」

「何を言いたいのかはよくわからないけど・・・今、僕がわかっているのは君が街を滅ぼしたのでしょ!?そして、僕らの時代の物を盗んで悪用している!つまり、君の方がもっと理不尽なことをしてるよ!」

僕がそういうと・・・

「滅んだ・・・か。なるほど・・・君達はそういう風にとらえているのか」

「何?」

「確かに俺はこの街を攻撃しかけたが死者は出してない・・・。だが、これは世間への警告の意味でも込めて仕掛けたのさ」

警告??

「ひとつ昔はなしをしよう・・・。とある研究熱心な人とそのバカな研修生がいた話だ」

「(攻撃しかける?雄二)」

「(いや、まて・・・もしかしたら手がかりがつかめるかもしれない。な

ぜこの愚行に及んだのかもな)」

「その熱心な研究者は学業をより向上するためにあるシステムを研究していた。それが完成できればきっと、学力悩んでいる生徒も伸びると信じていた……。世間の人間も感心していた。しかし、現実是非情だった……」

その瞬間、別世界の僕は昔を懐かしむような顔から憎むような顔になった

「その人は事故でなくなり、研究を協力していた者の家族も失った……。そして、世間は亡くなった熱心な研究者を批判したのさ。『詮夢物語に語るだけかたって亡くなった人間』とな……。家族を失って尊敬する人も亡くなってしまった研究者はこう決心した」

「(その話って……)」

「そのシステムを完成させて世間の人間に仕返しするそして、あの人がしていたのを批判したやつらを許すつもりはなく……。見返したいただその一心で取り組んだ」

「……」

「だが、一人では所詮限界はある。そこであるときに謎の二人の人物が協力して、その研究者は悪魔の誘いに乗り……。その世界へ飛び、システムを真似るためにハッキングしてそのデータを元に作った……」

「その話つまり……」

「そう……。この話は俺が世界を憎んだ話だ……。そして俺は改めてわかったのさ……。人は残酷な生き物だとな!!誰かのために必死に研究していたのに……。誰かのために必死に頑張ってきたのに否定されてしまった者の憎しみの話だ!!」

「ぐっ!」

「明久!」

雄二が驚いた声して僕を呼び掛けるが僕はそれどころではなく必死に対応していた。なんて鋭く重たい攻撃なんだ……

「お前もいずれば大人に絶望するときが来る!!この俺が矛盾した世界に憎むようにな!」

「っ!」

「あの人がしてきたことに間違いはない！それを認めない世界！手のひらを返す世界！そんな矛盾な世界に誰が好む!!誰が許せる!?!」
「くうー!」

「なら一層この力で批判した世界を破壊した方がましだ！醜い欲望な大人の都合がある世界なんて・・・手のひらを返す世界なんて、この俺が破壊してやる方がましだ!!」

僕は必死に耐えるが、鋭く重たい攻撃が何度も何度も攻撃続いていた。それを見かねた雄二が動こうとしているのを僕は見えた

「明久!」

「雄二は来ないで!!」

「っ・・・!だが、明らかにお前は押されているぞ!?!このままでは・・・」
「たのむ・・・!こいつは別世界の僕なら僕自身が間違いをたださないといけないんだ!!」

「お前がこの俺に勝てるんでも思うのか!?!吉井明久!!」

「!っはああああ!!」

「なに!?!」

僕は彼の攻撃を受け流すと彼は驚きまともに突きの攻撃を肩にあたった。攻撃された彼は驚いていたのは僕は見逃さなかった

「なぜそこまで抗える!?!貴様とこの俺の力の差は明らかに俺の方が上だと分かりなら何故あきらめない!!」

「諦めないじゃない・・・」

「なに?」

「諦めたくないんだ!!」

「ぬう!?!諦めたくないだど!?!」

突き飛ばされた別世界の僕はにらみながら語気を強めていた。そんな彼に僕は目を反らすことなく続けた

「僕は諦めが悪い男なんていうのは自覚しているさ!!だけど諦めてしまえば、認めてくれる人も認めてくれないよ!」

「!?!」

「君だって本当はわかっているはずだ!!こんなことはダメだと!こんな風にしてはいけないと!!」

「・・・前に・・・お前に何が分かると言うんだ!?何も知らない子供のお前が何がわかるって言うんだ!?」

「うわっ!?!」

「ああそうさ! わかっているさ! こんなことをするのはダメだと!!だが貴様にそれをいわれたくない!」

僕は彼に吹っ飛ばされると、彼は睨みながら木刀を向けていた。今の攻撃されたは効いて痛いな・・・

「だが、そんな貴様がいったところで俺は何も変わらない! 世界も!人も!俺は家族も尊敬していた師も失ったんだぞ!」

「だったら・・・だったら尚の事!!君も前を見ないとダメだよ!!」

「うるさい!!もう貴様のわがままに付き合う暇はない・・・これで終わらす!!!」

加速が来るのか!?

「特別特殊能力01発動!!」

「(タイミングをずらせば行ける!!)」

「【加速】!!」

彼は目の前まで接近して来たので僕はすぐに横に飛んだがその時の彼の顔は僕は見えた・・・

「引っ掛かったな・・・」

「え?」

「特殊能力02発動!!」

「え!!?」

「これで貴様も終わりだ!!くらえ!!」

その木刀は惑い僕の方に思い切り向けてきた。これは・・・!?

僕はこのときのび太たちから聞いていたことを思い出した

『僕らは負けたのだよ・・・』

『姫路の技を使っていた』

つまり・・・

「【熱閃】!!」

別世界の僕により特殊能力の炎がそのまま僕へと包まれた・・・

諦めたくない・・・！

僕はこのとき炎に包まれる時がゆつくりと流れていて、尚且つスローモーシヨンのように感じた・・・。思えば僕はのび太達みたいになにもしていないな・・・

ああ、これで僕は終わりなのかな・・・

「これで終わりだ・・・【熱閃】!!」

「おい、明久!!」

雄二の心配そうな声が聞こえるけど、僕は返事する余裕もなかった。そんな別世界の僕は僕に向かって勢いがある熱閃を振るった

そして、僕の視界は炎に包まれた・・・

このときの僕は死を覚悟した・・・
すると・・・

『やれやれワシらがいないとダメじゃのう・・・』

『・・・(コクツ)』

秀吉とムツツリーニ?なんでここに・・・そう思っていると他の声も僕の耳に聞こえた

『やれやれ、のび太に似て本当に不器用と言うか怠け者なんだから』

『お前こんなやつに負けたらぶん殴る!絶対に負けるの許さん!!』

『本当にこんなところで諦める男なんて思えないよ。しっかりしなよ』

スネ夫、ジャイアン、ドラえもん・・・

『しっかりしなさい!アキ!』

美波・・・

『あなたならできるよ。吉井くん』

のび太の恋人の三上さん・・・

『待ってますよ・・・私たちは明久くんを』

姫路さん・・・

『そこで諦める君じゃないだろ!状況を覆してみなよ・・・』

のび太・・・

『『『戦え!明久!!!』』』

皆・・・ありがとう・・・僕は諦めていたんだ・・・だけど、君たちの声でもう一度諦めないで悪あがきするよ！

ーダンツ!!

そう決めた僕は足を大きく踏み込んで木刀を振り払いながら叫んだ

「ああああああああああ!!!」

「何!?!」

「諦める・・・ものかああああ!!」

「な・・・バ、バカな!?!ぐあああ!」

僕は熱い熱い炎を必死で耐えながら、木刀を別世界の僕の体を斜めに切り伏せた。切り伏せられた彼は後ろに吹っ飛ばされて呻いていた

「ぐっ・・・!」

僕は倒れないように木刀を杖がわりのように地面を立てて耐えていた。そして、体から来る暑さに思わず悲鳴あげた

「はあはあ・・・あ・・・熱いよ!!のび太達はあの炎を耐えたと言うの!?! スゴすぎるよ!?!」

「よく耐えた!明久!!」

「雄二!雄二は炎巻き込まれなかったんだね!?!」

「お前のお陰でな・・・。お前の頭は焼けなかったか?」

僕はそういわれて慌てて頭を触ったが焼けていなかった・・・良かった・・・

「見事なファイヤースキンヘッド期待していたのが残念だった・・・」

「心配と見せかけて残念がること!?!」

僕が雄二にそう抗議していると別世界の僕がよろけながら立ち上がった。その顔は驚愕な顔になっていた

「何故・・・耐えれた!?!間違いなく今のは効いたはずだ!?!なぜ立っていない!?!」

「たくないから・・・」

「なに?」

「負けたくないからだよ!!君に・・・別世界の自分に負けたくないから

だ!!」

「何だと・・・?」

僕の言葉に別世界の僕は怒りをこもった目でみていた。明らかに殺意のある顔になったけど関係ない・・・

「君が世界を憎もうが人を憎むとかそんなのは関係ない・・・!はあ!」

僕は別世界の僕を倒すためにもう一度全速力で木刀を振るうと別の世界の僕はしっかりと防いで叫んだ

「なら、お前はなんのために俺を戦う?!召喚システムとやらを取り返せば終わりなのか?!だが、お前が俺を倒したところで誰も感謝してくれないぞ!」

「言ったはずだよ。『関係ない』と・・・!」

「くう!? (剣が鋭く速いだと!?この俺よりも!?)」

「僕は難しいことはよくわからないし、世界なんて言われてもよくわからないけど・・・これだけは言える!君は間違えている!誰かに認めてほしかったんでしょ!?!」

僕がそういうと別世界の僕は目を見開き驚いていた。このまままいこと話せばいけると確信した僕は攻撃を続けながら話を続けた

「君はきつと求めていたんだ!恩師のやり方は間違いではないと!その人の死を受けられなかったからそれを走ったんだ」

「め・・・ろ」

「君はきつと止めてほしかったんだ!そして受け入れられなかったんだ!だけど、そんなことをしても誰も喜ばない!!」

「めろ・・・」

「君は大きな間違いをしてるのさ!!島田明久!!」

「やめろおおお!!」

僕が別世界の僕のしてきたことに否定すると、別世界の僕は怒りのあまり僕に向かって叫んだ

「お前に言われなくてもわかってるさ!!そんなことは!!だが、もう止まらない・・・いや!止められないんだ!!この憎しみが!!この怒りが!!」

「・・・」

「特殊能力00!!!【分身】!!!」

別世界の僕がそういと別世界の僕を含めて5体が並んでいた

「「もう貴様の戯れ言なんて聞きたくもない!!これで終わらせる!!」」

そして、彼らは叫びながら構えていた。これはどう考えても一人では厳しいよね・・・?

すると、見かねた雄二が僕の隣にたっていた

「明久、俺もあの現実を見ない別世界を叩くの手伝うぞ」

「本来ならそうしてほしいけど・・・あいつのとどめは僕がしたい」

「・・・はあ、分かった。だが、この数は明らかに俺とお前では厳しいぞ?そもそも、お前のそのしんどい体であるバカをとどめ刺すには厳しいだろうが」

「分かっているよ。だけど、それを見逃してくれるほど敵は甘くないよ・・・策はないの?」

「わるいな・・・この数で二人で倒す方法思い浮かぶには時間が足りないな・・・。熱さに耐えて攻撃するくらいしかないな」

雄二が冷や汗をかきながらその対象を見ると僕もこればかりは本当に不味いと思う・・・この様子だと策がないみたいだ・・・

「「この数でのこれなら交わせないはずだ!!【熱閃】!!」」

「(万事休すか!?)っ!!」

僕らは迫ってくる炎にもうだめだと思い、目を瞑ると・・・
「よく耐えたね。二人で・・・」

優しくそれで暖かい声が僕らの耳に聞こえた

「はっ」

【ひらりマント】!!!」

「何!?ぐうああ!!!」

青く小さなその体が僕らの目の前に立ち上がり秘密道具の名前を叫ぶと、攻撃していた特殊能力の熱閃は弾き返され3体がともに直撃して消滅した

「己・・・なら!!もう一度!!」

「させないよ・・・特殊能力発動・・・【ジャンボット・ガン】!!!」

「何!?!ぐお!?!」

別世界の僕の分針が諦めずに攻撃しようとする後ろからとんでもない爆音と共に銃を撃つたのが聞こえると、攻撃体勢になっていた体が消滅した……

こんなことできるのは僕らは知ってる……

「貴様ら……!?!」

そんな攻撃を潰された別世界の僕も驚きながら僕らの後ろいる人間を見ていた

「まさか、最後の相手が吉井明久君に似ている人物だったなんてね」

「僕も驚いたよ。まさか、召喚システムを盗んだ真犯人が彼だなんてね……」

「でも納得だわ。あの人たちに真の目的を聞いたのだから」

「ずいぶんとお前らは手荒な攻撃になったがまあいいか」

「やれやれ……皆疲れているのに……」

煙が収まると別世界の僕は驚愕の声をあげていた

「な……まさか!?!あの試練を越えたと言うのか!?!貴様らが!!」

その問いに答えたのは――

「僕らを甘く見ないでほしいな……。数々の命を懸けてきた冒険と比べたら大したことないよ」

「さあ、いよいよ決着をつけようじゃないか……! 僕らの世界の召喚システムを盗んだ男……島田明久!!!」

のび太を中心に僕らを先にいかせるために戦っていた仲間が僕らを守るように立ってくれていた……

変わらない信念

のび太を中心に僕らを先にいかせるために戦っていた仲間が僕らを守るように立ってくれていた……

「さあ、いよいよ決着をつけようじゃないか……！僕らの世界の召喚システムを盗んだ男……島田明久!!」

皆がいるから僕はもう諦めない……そう決心して武器を構えていた。すると、別世界の僕は動揺しながらも構えていた

「まさか、お前達があの試練を乗り越えるとはな……」

「君がなぜ僕らのことを知っていたのかは分からないが、君と協力していたものに聞いていたからこちらの過去を知っていたのだろう」「どういうこと!?!」

「恐らくその協力していた者は何らかの因果で利益を一致したため協力していたと僕は考える。また、その者は僕らと同様の世界がこの世界に流れ着いていたから君は僕らの時代……つまりこの時代にこれたと考えられる」

「……大したものだ。さすがは英雄の一人と言われていただけの冷静さと観察力があるな。確かに俺はお前達の時代に行けたのはその者らの協力があつたから盗めた……」

否定していないと言うことは本当にのび太の言うように僕らとは違う形でこの世界に!?

「それともう1つは君がそれを盗んだ本当の理由が分かったよ」

本当の理由……?

「君は……島田明久は学園長と大切な奥さんを救いたかったんだね」

「!」

「奥さんを……救いたかった?」

「ええ」

救いたかった……そんな僕の疑問に三上さんが頷いて僕の疑問を答えてくれた

「私は戦っていた人に聞いた。貴方は心の底から愛していた人の名前

は——島田葉波」

「・・・え？」

三上さんから聞いたな前に僕も雄二も驚いて声を出したが、唯一声出さずに問われていた別世界の僕はのび太と三上さんを睨んでいた

「貴方が心から愛いていた島田葉波さんはどうやら学園長と同じ日に亡くなったみたいね・・・亡くなった現実を受け入れられなかった貴方はあることを決めた」

「決めた・・・？」

「ここからは僕が言う。彼は亡くなった現実を受け入れられなかったときつき美子さんがいったが、別世界の明久はこの召喚システムを完成させるために盗むのと・・・もう一度学園長や奥さんがいる世界を作りたかった・・・」

「黙れ・・・」

「けどそんなことをしても誰も喜ばないのは、君が一番よく知っているはずだ・・・そうでしょ？」

「・・・黙れ・・・黙れ・・・黙れ・・・黙れ———!!!」

「「「「「つ！」」」」」

「・・・」

別世界の僕は怒り狂ったように叫び、僕らは息を飲んでいた時にのび太がゆつくりと武器を構えていた。そして、別世界の僕は先程僕に言われたときよりも語気を強めに言っていた

「ああーお前達の言う通り、俺は認めたくないのさ！愛していた女を失った事も！尊敬していた人が失ったことも!!だが、召喚システムを盗んでもう一度あの二人に会いたかったのさ!!そのためなら悪魔の契約だつてなんだって交わす!!」

「だが、それでその二人は喜ぶの？君が盗みを働いたと・・・自らの力で完成させずにそうして二人は喜ぶとでも・・・？」

「分かっているさ!!そんなことは!!だがもう俺は後戻りもできない!!そんな都合のいい道具はないと言うのもー!」

「道具？(そういえば、僕はドラえもんに万が一のためにつて渡されたのがあるよね・・・)」

僕はフツと思い出して懐からあるものを取り出してその道具と紙をみた。それをみた瞬間、僕はもしかしたらこいつの心を救える可能性があるかもしれないと思った

「明久・・・援護をしとこうか？」

「雄二・・・皆・・・ここは僕に任してほしい」

「明久・・・？」

僕の言葉にのび太は怪訝な顔になっていた。どうやら のび太は僕が貰った秘密道具は何なのか知らないみたいだ・・・

「なにか秘策はあるの？貴方の体はそれなりボロボロよ？」

「これくらい大丈夫さ・・・。それに・・・いつまでも諦めている別世界の僕をみているとイライラして仕方がない」

「・・・わかった。なら、ここは君に任せるよ」

「「「のび太（君）?!」」」」

「そんな覚悟した顔で言われたらもう止めるのも無粋でしょ?・・・決着を着けてきなよ」

「うん・・・」

僕は のび太 の言葉にしつかりと頷きながら、別世界の僕の方に向かってあるいた

「其処まで言うならお前から先に死ぬか・・・?吉井明久!!」

「死なないよ・・・」

「何・・・?」

「僕は絶対に君を止めて・・・大切な人達の元へ帰るのさ」

僕がそういうと彼はますます不機嫌になり、木刀をゆつくりと上へ上げた

「ならば!貴様のいた世界の技のひとつで焼かれて終わりだ!!」

「終わらない・・・終わらないよ!君も・僕も!!これから始まるのだから!!」

「戯れ言を・・・!特殊能力発動!!」

タイミングはまだだ・・・まだ僕には のび太 達にはない特殊能力・・・あれがあるじゃないか・・・

「【熱閃】!!!」

「今だ!!……!!」

僕がそれを迫るなか、聞こえないようにある言葉を言った……
「……ゴオオオン!!」

のび太 side

別世界の明久の特殊能力を発動しようとした瞬間に明久が何かタ
イミングを計ったように小さく呟くのを見逃さなかった。そして、そ
れと同時に爆発音が辺りに響いた……

「「明久!?!」」

「吉井君!?!」

何も抵抗していないように見えた皆は思わず彼を呼んでいたが僕は
目をそらすことなく黙っていた。恐らく彼はある方法を選んだのだ
と思う……それも君ならではの力が

だから……

「皆落ち着きなよ。大丈夫……明久は負けていない」

「だが、あいつは炎に飲み込まれたぞ?!?どうするんだ!?!」

「雄二、君が一番明久を信じないとダメじゃない?彼はまだ諦めてい
なかったし、恐らく彼ならではの方法が見つかったのだと思う」

「……だが……」

雄二がまだ不安そうにそちらをみた瞬間、聞きなれたバカの叫びが
聞こえた

「「あ、熱い!!!」」

「「「!?!」」」

「言っただけでしょ?明久ならではの戦い方があるって」

さあ!君の木刀を……固くなってしまったあいつの心を打ち砕き
な!

明久 side

僕は炎に飲み込まれる瞬間に僕はあまりの熱さに叫んだがある技
も発動した

その結果僕は……

「あー．．．熱かった．．．．」

「バカな!?!何故．．．なぜ貴様が分身できている!?!貴様にそんな力は．．．っ!」

「わからないなら教えてあげよう．．．。こいつは僕らの世界にあるもうひとつの道具．．．。『白金の腕輪』を使って分身したのさ!」

「だが、ダメージは確実に負うはずなのに何故!?!」

動揺している別世界の僕の問いに答えることなく僕は分身したのと一緒に構えていた

「いくぞ!!」

「くう!己!!!」

特殊能力を先程に使ったからもう連発はできないはずだ．．．

だから!

僕は別世界の僕の木刀を分身がまず上へと弾いた。武器を失った彼は呆然として、固まっていたのを見逃さなかった僕は．．．

「明久連斬!!」

ひたすら彼の腕や体を連続に攻撃していた。武器を失った彼はただまともに攻撃をくらい．．．それと同時に僕の分身片方が消えるが僕は勢いよく足を踏み込み．．．

「これで．．．終わりだああああ!!!」

「?!」

勢いよく木刀を振るった．．．

辺りは静かになり．．．

彼の声が辺りに響いた

「お前は．．．本当に諦めの悪い男なんだな．．．吉井明久．．．」

「それ僕が一番よくわかってるさ．．．。そして．．．僕の勝ちだ．．．

島田明久．．．」

「ああ．．．どうやら、そのようだな．．．」

ーバタン

それを言うと共に別世界の僕は．．．倒れた．．．

長きにわたる戦いが．．．ついに決着がついた．．．

すべての決着をつけたその後・・・

別世界の僕が地面に背を向けて手を大きく広げて倒れていた・・・それを見た瞬間、なかなか沸かなかった実感が徐々に沸いてきた

勝ったんだ・・・

僕は・・・

「別世界の自分相手に勝ったんだ!!!っ・・・よしやああああ!!」

僕は声を大きく出して嬉しく叫ぶと、ジャイアンやスネ夫、雄二がこちらによつてきた

「よくやった!明久!!」

「やればできるじゃねえか!!ついでに俺たちの仇も取ってくれてありがとうよ!!」

「いや、君たちは生きてるでしょ・・・」

「明久君、そこに座つてね?直ぐに治療始めるから」

「そうね。貴方はこの中ではそれなりにひどいわね」

「だ、大丈夫だよ!あ、その前にまっつて皆・・・」

「「?」」

「あいつの方は?」

僕は倒れたあいつの方が気になり、そちらに振り向くとのび太が別世界の僕の方に歩み寄つてしゃがんでいた

「いったい何を話すつもり?」

のび太side

明久達が勝利に喜んでるのを一瞥した僕は、別世界の明久の方にゆつくりと歩んで横にしゃがむと彼は不思議そうな顔でこちらを見た

「・・・なぜこちらにきた?」

「君と話したかったからだ。島田明久・・・」

「俺に話しかける理由はなんだ・・・?負け犬を嘲笑いにきたのか?」

「そんなのでわざわざ言いに来るほど、僕はひどい人間じゃないよ」

「どうだかな・・・」

僕はゆつくりと彼と話しながら、聞きたいこともいまなら聞けると
思い聞いた

「・・・召喚システムを盗んだのは他の協力者もいるときいていたが、
本当なの?」

「・・・データを盗んだのは俺だけだ。その者達はーだ・・・」

「・・・何だって・・・?」

僕は彼から聞いた衝撃の事実に固まっていた。もしそうなら・・・
納得はいく・・・

「・・・君から聞いた今の話から考えるにはこの世界の未来から来たと
言うわけではないみたいだね。・・・だが、いくら別世界とはいえ僕
らの学園を盗むのはそう簡単ではないがこれで納得した・・・」

「そうか・・・」

「君はどうするつもりだ?」

「・・・そうだな・・・ひとまず自主出頭して罪を償うとするか」

「そう・・・」

彼はもうやりきったように諦めたように呟くと、後ろから明久が後
ろから声かけてきた

「もしもやり直しできるなら君はどうしたい?」

「・・・なに?」

「明久?」

僕と別世界の明久がおかしなことを言う明久がこちらに近づいて
きた。もしもやり直しできるなら?・・・それはどう言うこと?・・・

明久 side

僕はのび太と別世界の僕との会話を聞いて僕は懐にあるのを確認
してゆつくりと歩み寄った。彼は戦ったわかったことがある・・・
本当は寂しかったんだと思う。苦しかったんだと思う・・・
だから、ただここでこの話を終わらしてはいけない・・・!

「もしもやり直しできるなら君はどうしたい?」

「・・・なに?」

「明久？」

僕の言葉に二人とも驚いていたが、僕は気にすることなく話を続けていた

「もう一度聞くよ？やり直しできるなら君はどうしたい？」

「・・・やり直しができるなら、もう一度あの人に会いたい。家族にも会いたい・・・この出来事がなかったことにしたい・・・だが、それは所詮夢物語だな・・・」

「方法はあるよ・・・」

「[[[はっ?]]]]」

僕の言葉に別世界の僕だけではなくのび太も含めて、皆も驚いていた。そして、動揺していた別世界の僕が問いかけてきた

「う、嘘をつけ!!そんなことが不可能だぞれ?」

「可能の筈だよ・・・この秘密道具をつえば・・・」

「[[[?!]]]]」

「それは?!!」

僕が取り出したもののにのび太とドラえもん以外は理解していなかった。だけど、僕はこの秘密道具を賭ける・・・

「こいつは【ウソ800】とってこいつを使ってきみの心を助けるよ・・・」

「俺の心を助けるだと・・・そんな秘密道具は俺は知らないぞ」

「知らなくて当然だよ。それは・・・その道具はのび太君と僕しか知らない道具だからね」

「[[[え?!]]]]」

「・・・」

そう・・・その道具はかって僕が一度だけ・・・たったの一度だけ使いたくはなかったが見返したために使った道具で・・・もう一度ドラえもんとその絆が繋がった道具でもある・・・

なるほど明久の考えは読めたけどある意味賭けだよ・・・

そう思いながらも明久はその蓋を開けて、なかにはいつていたガラス瓶を開けてごくごくつと勢いよく飲んでいった

「お、おい?それを飲んでどんな効果があるんだ?」

「まあ、見てなよ。…明久くんのしたいことは僕もわかったけどね」
「「え？」」

飲み終えた明久は周りを見て確認をしてから呟いた

「この戦った場所は汚ないね」

「「はっ?…ええ?!」」

明久の一言で最初は皆は疑問に思っていたが、周りを見た瞬間には先程まで色々と瓦礫などが落ちていたのだがそれを感じさせないぐらいきれいになっていた

「(効果はあるんだね…なら、話を続けるか)君の恩師も大切な家族もここで死んでいた。それも記憶がなく、目の前に現れない」

「お、おい?!さすがにそれは…」

「そんな言葉は…」

「…」

僕とドラえもんはなんにも言わず、他の皆はさすがにその言葉は無理だろ?って否定していたが…

突然、別世界の明久の前に二つの光が集まり、それを見ていた皆は目を細めていた

「「っ!!」」

あまりの眩しさに明久も別世界の明久も含めて皆が目を閉じていた。暫くして目が馴れてそこを見ると…

腕を前に組んでいて、別世界の明久の前に佇んでいた二人の女性がいた。それを見た別世界の明久の顔は驚き信じられない顔になっていた

「な、何で…?何で…師匠と葉波が…」

「…」

「い、生き返ったの…」

「「ごんの…」」

「へ?」

「バカアアアア!!!」

「うぎやあああああああああああ!?!」

「「「ええええ?!」」」

別世界の明久が恐る恐る立ち上がったって聞こうとしたら、彼の恩師とも言える人と島田葉波さんが別世界の明久の顔にリアットした

それを見た皆はあまりの一瞬で驚いた声をあげていたが、その当人の二人は気にせず明久を攻撃していた

「このバカ!!なに人様に迷惑かけていたのよ!?!」

「全くだ!!私達は死んで見守っていたが、まさかの悪事に走るとは!!!どういう見だい?」

「ぐは!?!」

「もう死んでてずっと見守っていたけど、何で別世界の人達の召喚システムを盗むのよ!?!それじゃあ、只の犯罪でしようがああ!!」

「いだだだだ!?!な、何で知ってる!?!」

「それだけじゃない!あんたは悪魔の囁きに乗ったことも知ってるよ!アタシも葉波もどれだけあんたの隠していたことも知ってると思ってるのだい!?!」

「・・・え?」

それを聞いた別世界の明久は心底驚いた顔になり、恩師と島田葉波さんの方を見ると二人ともあきれた顔で別世界の明久を見ていた

「あなたがどれだけ頑張っていたのかは二人とも知ってるわよ。でも、あんたが悪事に走ってしまったことに見逃せなかった」

「・・・生き返ってるお説教していると悪いんだけど・・・すこしいですか?」

「!?!?!」

僕はとりあえず、お説教が長く続きそうだと分かっていたので呼び止めると三人とも不思議そうな顔になっていた

「戦いももう終わりですから、まずひとつはこちらの世界の召喚システムのデータを返却してほしいこと。もうひとつはその悪事は無かったことのできるのですが・・・」

「!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「明久、メモを渡したからその通りに読んでね?」

「う、うん。・・・この街は災害が無かったから街は破壊されていなかった”。 “事故は初めからあった” 今回の出来事は抹消されな

いッ」

明久が僕のかいたのを見て読んでくれたら僕はドラえもんがこの世界の新聞発行的なのをだしてと言うと出してくれた

「僕らの世界の明久はしゃべったらダメだよ。皆これを見て」

「二」「歴史が変わってる!?!」「三」

「しかも、学園長の事故でなくなっていたと言うのが、災害によって二人だけ行方不明になっていたとなっていた!?!」

「さらに、別世界の君がやった悪事は無かったことになっているの。今は災害で住めないようになってるが、これからまた0から始めれるよ。君と学園長と奥さんと3人で新しい研究をね」

「・・・何でそこまでしてくれる・・・お前や英雄のび太は・・・」

「答えは単純だよ。・・・僕も明久もなにも悲しいことで終わってほしくないからだよ。本来これは自然摂理逆らっているようなものだけどね」

そう・・・これは本来なら許されることではないのはわかっているけど、これを明久だけの罪にはさせない。なら、これは僕も協力していたと言う事実をしないとね・・・

「そうか・・・少し待て」

別世界の明久がよろけながらゆっくりと立って、コンピューターに何か打ち込むとそのデータがひとつになり、僕らの方に近づいた

「これは君たちの世界の召喚システムデータだ・・・彼女達も生き返ったことだし、いまの俺には不要だ・・・」

「・・・分かった。ドラえもんがこのデータを四次元ポケットにいれていて」

「了解」

渡されたデータを僕はドラえもんに渡すと僕は彼に振り向いた

「君から聞いたそいつらはもう・・・?」

「・・・正直言えばわからない。だが、君達の召喚システムを奪ったデータはそれがすべてだ・・・悪用されることはないと思いたいがね」

「だね・・・確かにデータを返してもらったよ・・・」

「ああ・・・出来事は消えたとはいえ、俺のした罪は消えないから・・・」

これからゆつくりと考えるさ」

「別世界の僕……」

ボロボロになってる別世界の明久の悲しそうな顔を見た明久は何か言いたそうな顔をしていた

「吉井明久……覚えてほしい。当たり前前の日常は脆いと言うことを……俺が失って後悔した思いは……あるもの達以外には、あじわってほしくない……」

「わかってるよ……別世界の君にならないように頑張るよ」

「そうか……さあ！お前達もそろそろ本来の世界に帰るんだ!!大丈夫……もう俺も迷わないよ……」

「……皆いこう！僕らの世界へ帰ろう」

別世界の明久の言葉に皆はタイムマシンのある場所へ戻る中、僕は別世界の明久に呼び止められた

「英雄のび太……俺はお前と戦ってひとつ分かったことがある。お前の闇は深すぎる……」

「……」

「もしも、このままだとお前は本当にその闇に取り返しをつかないことになれば……お前は……どうするつもりだ？」

「その時はその時さ……。でもね、もう僕には託せる仲間がいるから、もう大丈夫……。それと君から教えてくれた情報ありがとう……。さようなら。別世界の親友の明久」

「……あばよ。別世界の親友の英雄のび太」

「うん」

これが僕と別世界の明久の最後の会話だった……。願わくば今後の彼の人生に幸あることを僕は願いたい

さよなら……。別世界の親友の明久

取り返した召喚システムと報告

僕達はタイムマシンに乗りながら今回の事件の事を話していた。あ、当然だけどタイムマシンの運転してるのはドラえもんだよ

「あー、久々の大冒険がまさかここまで疲れると思わなかったな〜」

「本当だよ……。元々、盗まれたのがここまで大冒険になると思わなかったよ」

「お陰で体が痛いや……。」

「まさか、最後の敵が別世界のお前だとはさすがの俺も驚いたぞ……」

雄二の言葉に皆もうなずいていて、美子さんが疲れた顔になりながら話しかけてきた

「そうね。結果的にはなんかハッピーエンドなので終わってはいるけど、結局、他の協力者は何者なのかはわからなかったわね」

「だね……。のび太君はなにも聞いてないの?」

「僕?……。僕が聞いたのは……」

「……聞いたのは……?」

「明久の学力が別世界の明久みたいによくならないって話」

「……だあ?!」

ドラえもんの質問に僕はそう答えるとタイムマシンもずっこけた感じで揺れていた。そして、その明久は涙目になりながら抗議していた

「酷いよ!?!別世界の僕ー!!」

「あ、いやでも納得かもな」

「どういうこと、雄二?」

「お前はあそこまで努力して賢くなる姿を想像したら鳥肌が止まらねえ……」

「ひどいよ!?!」

「……なんだかこの二人のやり取りを見てると本当に戦いが終わったのだと実感するわね……」

「……うん」

美子さんの言葉に喧嘩している二人を除いて頷いていた

でも君は君らしく生きてね？明久・・・

現代に帰ると、僕の部屋の机の前には・・・

「「「「「・・・」」」」」

「「「「「あ・・・」」」」」

目が笑っていない恋する乙女達が正座して待っていた・・・。それを見た明久と雄二とジャイアンとスネ夫は真っ青になっていた

「・・・事情は瑞希達に聞いている」

「けれどそれとこれは別よ」

「明久くん達・・・正座してくださいね？」

「そうですわね。武君もスネ夫さんもですわよ」

「「「「「・・・(ガタガタ)」」」」」

霧島さんの言葉に島田、姫路、真理亜さんが笑っていない顔で淡々と言うと明久達は震えていた

「「「「「(の、のび太達!?助けてくれ!!)」」」」」

「(・・・ごめん。助けられないから大人しく怒られてきなよ)」

「「「「「(この裏切り者おお!)」」」」」

「「「「「さあ、私達とOHANASIしましょう)」」」」」

ジャイアン達はその場でそれぞれの恋する乙女にお説教を食らっていた・・・。僕は暫くはほつところとおもいドラえもんと美子さんと僕とで学園長の方に行き報告しにいった

――学園長室――

僕らは【どこでもドア】で学園長室前につきノックをしたら、西村先生と高橋先生、学園長の3人がいた

「失礼します！2―Fの野比のび太です」

「2―Eの三上美子です」

「初めまして、のび太くんがお世話になっています。未来の猫型ロボットのドラえもんと申します」

僕らは挨拶すると同時にドラえもんも自己紹介をしてくれた。

それを聞いていた三人の先生方の反応は・・・

「「・・・へ？」」

当然だけど驚いた顔になっていただけ伝えておこう・・・。そして、事の詳細とシステムは完全に取り戻したと伝えると三人とも安堵を漏らしていた。そして、今回の件は学園としても内密にすることに決まった

尚、全部話すと不味いので説得して返してくれたからもう許してほしいと伝えた。先生方は、データも回収できたことだからもう大丈夫といっていた

そして報告も終わり、僕らは再びどこでもドアで美子さんの家ノ前まで送り、そこから僕の家に戻ると・・・

「「・・・」」

「「「「♪」」」」

げっそりしていた男組とスッキリした女性達がいたとだけ乗せておこう

それを見て本当にあの冒険が終わったのだと感じた・・・

これからも僕らの日常を大切にしないとね!!

「「「「????」」」」

白暗い場所である一人の黒い影がデータを打ち込んでいた

「・・・まもなく完成する・・・ふふふ、待っている・・・ハハハハハハハハ!!!」

その声は狂喜そのもので、その者の回りに声が響いていた・・・

これが何を意味するのか・・・
今はまだ誰も知らない・・・

バイトをしよう!!
バイトをしよう!! I

あの大きな事件も終わり、普段通りの日常になった。そんな中、僕は昼休みに珍しく明久と雄二と僕とジャイアンで4人でお昼御飯を食べていた

「あむあむ・・・のび太は今日は珍しく三上と食べないのだな?」

「あははは、今日は美子さんは真理亜さん食べるってさ。何でも二人の相談に乗ることになったからってさ」

「そういや、真理亜さんも言っていたな。三上と今日お昼御飯食べるからって・・・それより、明久。今日はいつもよりも不機嫌だが何があつた?」

「不機嫌も何も・・・母さんと少し揉めたのさ・・・」

「母さん??揉めた??」

そこからは明久の不満だらけの口をたくさん聞いた。母親から明久への仕送りがこないから連絡したらしいが両親の財布の中に入っているらしい。そして、明久が息子の強さを見せてやろうと、母親に対してストーカーのようにリダイヤルを連打した結果・・・

「嫌がらせ撃退音を鳴らされた後に着信拒否に設定された・・・というわけ?」

「そう。因みに金の権利の割合としては母さんと父さんで8対2・・・酷いと思わない?あの人、きつと僕の母親じゃないと思うんだ」

「明久それは言い過ぎだよ。でも、今の話を聞いていたら明久の家の力関係が明らかになったね・・・。だめだ、お父さんのことを思ったら少し涙が・・・」

「そっか・・・お前も苦労しているんだな・・・涙が出そうになるな・・・」

僕は明久の家の事情を聴き、お父さんが明らかに苦労人的なのが感じ取れて涙が出そうになったのと雄二は心底同情していた

「ど、どうしたの雄二?そんなに同情してもらっても気味が悪いんだ

けど・・・」

「いや、母親についての苦労は俺もよくわかるから・・・」

遠い目で窓の外を眺める雄二のその姿には哀愁が漂っているように見えた・・・

「なんか雄二も何らかの形で苦労しているのだな・・・俺も母ちゃんでも苦労しているよ・・・。主に家で・・・な・・・」

「ジャイアンも?」

「二人ほどではないけど僕もかつては・・・。うん・・・でも僕達・・・」

「うん・・・」

「ああ・・・」

「二・・・心の友よおお!!」

四人で泣きながら抱き締めていた。本当に泣きたくなるよ!!今はましだけどよく考えたら押し付けられたこともあった!!なんか、泣きたくなつたよ!!

「あれ、そういえばスネ夫は?」

「二あ、忘れていた」

「つちよ!?!君ら僕の存在を忘れるなんて酷いよ!!」

スネ夫が秀吉とムッツリーニと三人こちらにやって来たが、スネ夫は驚きながら突っ込みいれてきた

「だって・・・ね・・・」

「二存在密かに薄くなっている気がするから」

「二・・・確かに」

「それいわないでよ!?!みんななんか嫌いだくーマママー!!!」

スネ夫は涙をこぼしながら全速力でFクラスに出ていった・・・。少しからかいすぎたかな・・・

「して、明久はどうするのじゃ?」

「うくん・・・正直、困ってるんだよね。向こうも意地になつていてみたいでなかなか電話が繋がらないし、会いに行こうにも海外なんて遠すぎるし・・・」

「・・・自分で稼ぐしかない」

ムッツリーニが何かの雑誌を見ながら呟いた。正直、最近の彼は

ムツツリスケベですらない只のスケベに見えてきた・

「それを聞いていた明久はどうするの？」

「ムツツリー二の言葉はもつともだよねー。何か良いアルバイト見つけないとなあ」

「バイトか。それなら、駅前の喫茶店でバイトを募集していたぞ」

「二「駅前の喫茶店?」」

「へえー。そんなところにバイトの募集していたんだ？」

明久は雄二の言葉に興味もつてきいていた。すると、雄二は内容を思い出そうとして少し考えてから話した

「確か、今週土曜日だけの募集だったな・。 11:00~20:00勤務で日給8800円程度、未経験者歓迎とか」

「日雇いで未経験者歓迎?それは僕にとつて都合がいいけど——何かありそうだね」

「そもそも、今の明久はそれを気にするほどの財力の余裕はないだろ」
「・・・それを言われると痛いなー」

明久はムツツリー二の指摘に苦虫を潰した顔になっていたが、そもそもきちんと仕送りを計画に使っていなかったからこうなってるのではないのかな?って思うのは僕の気のせい?

「んじや、明久も面接に行くか？」

「え?『明久も』つてことは、雄二もやるの?」

「そのつもりだ。というか、もともと俺がやろうと思っていたバイトだからな」

なるほど・・・だから詳しいのか・

「なんじや。雄二も何か入用じやつたのか?」

「ああ。ちよつと自分の部屋に鍵をつけたくてな。とびきり頑丈なやつを・・・な」

何故かものすごく悲しい顔しながら言う雄二になんとも言えなかったのはなぜだろ?まさか、霧島さんが侵入してくるとか?ははは、まさかそんなことないよね??

「それで、募集って何人くらいだったの?」

「確か、五く六名つてなつていたぞ。結構広い店みたいだし、それなり

に人数が必要みたいだな」

「となったら参加するのは僕と雄二以外に誰かいない？のび太やジャイアンとムッツリーニや秀吉もよかったら参加しない？」

明久が僕らに一緒にバイトをしないかと誘ってきた。この誘いに乗るものと乗らないものがいた

「そうじゃな・・・演技の幅が広がるかもしれない。何事も経験じゃ」

「・・・カメラの購入資金の足しになる」

「俺は参加できん・・・。母ちゃんの手伝いがあるからな」

「のび太は？」

「うーん・・・よし！僕もその日のバイト経験してみたいから参加するよ」

僕も今は金をためておきたい理由があるし、バイトをするのもいいと思う。・・・最近はずちの学園はバイトするのはオツケーになったからいいと思うし・・・

「なら、決まりだ。今日の帰りに面接に行っていくぞ。募集が終わっても困るだろ？」

「確かにのう」

「それもそうだね」

「よし、決まりだ!!放課後にいくぞ！」

そんなわけで、僕ら五人はその喫茶店に面接に向かい、見事全員採用となった・・・

バイトをしよう!! Ⅱ

アルバイト当日になり、開店一時間前に集合した僕達だったが店長は今にも倒れそうなほど弱々しい姿で迎えてくれた

「ああ……。よく来てくれたね……。今日一日宜しく頼むよ……」

「「「は、はい……」」」

ここに居るのは僕ら五人と店長だけでドラえもんは久しぶりの町でどら焼き巡りすると言ってここにはいない。尚、バイトをここでするのも言っていない

そんな僕らは先程の店長の姿を声潜めて話していた

「(ねえ。この店長さん、本当に大丈夫なのかな?)」

「(体調が悪いと言うより……精神的に落ち込んでいる感じ?)」

「(何かきつかけがあればスグにでも富士の樹海に向かいそうなほどに弱っておるのう)」

「(これは噂なんだが……この店長、どうやら奥さんと娘に逃げられたらしい)」

「(に、逃げられたって……。なんとも言えない家の事情だよ……。でもこれで納得する部分もあるよ)」

雄二の言葉に僕はなんとも言えない顔になったが納得する部分もある。なにせ、こんな雰囲気で店続けるのは普通は困難なのだから「(家族に逃げられたから人手が足りないのかもしれない。そう考えると、日雇いでバイトを募集して帰ってきてくれるまでの繋ぎということだろう。……多分)」

「「「……なるほど」」」

「それじゃあこれ、君達の制服……サイズが合わなかったら言っ
ね……」

店長が僕ら五人ににたたまれた制服を渡すが……

「「「サイズが合いません!!!」」」

「性別が合いません……」

渡された瞬間、明久と雄二とムツツリーと僕の声が綺麗に重なったのと秀吉はどうやら性別違うの渡されたが……彼の場合は演技で

乗り越えれそうなのは僕の気のせい？

「あれ・・・？おかしいな・・・。きちんと目測したつもりだけど・・・」
「僕と明久は若干小さいのですが、坂本と土屋のサイズは明らかに合っていない思います」

「そうかな・・・。でも、坂本君はSで、吉井君はMで、土屋君はエロ――じゃなくてLに見えたんだけど・・・」

「二二(この店長意外と侮れない!!!)二二」

「・・・エロなどに興味はない」

「二二「なあにいいい!?!」二二」

ムツツリーニが今世紀最大の嘘を発言したので僕ら全員が思わず声はもって否定した

「ムツツリーニ。いくらなんでもそのウソはないよ」

「そうだぞムツツリーニ。ウソは人を騙せる範囲でつくものだ」

「そんな嘘はよく知ってる面子からしたら誰も騙せないと思うよ」

「・・・!! (ブンブン)」

得意の否定のポーズも白々しいよ・・・。まったく、なんて大それたウソをつくんだ・・・

「ま、それはおいといて明久は多分Lだから、ムツツリーニと交換してもらいますね。僕は交換する相手がいないのでMあるならお願いします」

「・・・Mなら丁度いい」

「店長。俺はきつとLになるので、交換してもらえますか？」

雄二と僕は交換する相手がいないので、店長に服を渡す。明久はムツツリーニと服を交換した

「そっか・・・そうだよね。うっかりして性別と性癖を間違えちゃったよ・・・」

「じゃから、ワシのは性別が合わぬと言っておるのに・・・」

秀吉の嘆きが聞こえたが、僕らは気にせずバイトの更衣室へと移動をした・・・

――更衣室――

更衣室はあまり広く使えないので、僕とムッツリーニと明久とで先に着替えていた。そして、着替えが終わった僕らは外に出ると雄二と秀吉が待っていた

「お待たせ。2人とも」

「・・・待たせた」

「なんとか着替えれたね」

ここのお店の男子制服は、黒のズボンとYシャツに同じく黒のベストを重ねた一般的なギャルソンスタイルだ。ズボンの上に前掛けのような黒のエプロンをかけ、首元に小さなネクタイをつけたら完成だ
そんな僕ら3人の格好に雄二と秀吉は笑っていた

「ははっ。意外と似合うもんだな。それっほいじゃないか」

「なかなかの男前じゃぞ、3人とも」

「そ、そうかな・・・」

「あはは・・・なんか照れ臭いよ」

「・・・同じく」

僕らは誉められたからなのか少しだけ顔真っ赤になっていた・・・
でもこの姿美子さんが見てなんて思うかな・・・

「では、ワシらも着替えるとするかの」

「そうだな」

ひとしきり感想を述べた後、今度は雄二と秀吉がロッカールームの中に入っていく

「・・・ちよつとまったー!!」

明久とムッツリーニが声を揃えて制止かけていた。因みに僕は服装をきつちり整えているかを念入りに確認していた

「バカ雄二！何を堂々と秀吉と一緒に着替えようとしているのさ！」

「・・・万死に値する・・・っ！」

『お前らは何を言ってるんだ。一緒に着替えも何も、男同士なんだから全然関係ないだろうが』

ドア越しから雄二があきれた声でそういつているのを僕らは聞こえた

「雄二！それはあくまで戸籍上の話だよ！」

「・・・書類は偽りしかない」

『待つんじゃ二人とも！事実でもワシは男じゃぞ!』

『あー、わかったわかった。着替えが終わったら話を聞いてやるから、今は落ち着け』

雄二のめんどくさそうな声が聞こえたが明久が何か閃いたのか雄二に呼び掛けた

「雄二っ！君がどうしても考えを改めないなら」

『あん？突入はするなよ？ドアの弁償なんて冗談じゃないからな』

「今から携帯で霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露しちゃうよ！」
『・・・』

ーガチャっ

「俺は廊下で着替えよう・・・」

「分かってもらえて何よりだよ。それじゃ、僕らは店長のところに行こうか」

「・・・(コクツ)」

明久とムツツリーニがホールにいった直後、秀吉の音が聞こえた

『うむ？背中のファスナーが上がらん……。雄二、すまんが少々手伝って——うん？雄二はどこに行ったのじゃ?』

「・・・悪いな秀吉。俺は自分の命が惜しいんだ」

雄二の雰囲気あまりにも悲しみ漂っていたのはここだけの話だ・・・。なんか、苦労してるみたいだね・・・

バイトをしよう!! Ⅲ

秀吉も着替えが終わり、僕らは店長に着替えが終わったことを報告をしようと五人で向かっていた

「店長、全員の着替え終わりました」

「・・・ああ、なら今から説明をし・・・」

「店長・・・?」

雄二が代表として着替えが終わったと告げると店長は弱々しい姿でこちらに振り向き発言をしていたが途中で固まった。あまりにも急に固まるので明久が呼び掛けた

「ディア・・・」

「二」「ディア?」「二」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

店長が両腕を大きく広げて怪鳥のように秀吉に飛びかかっていた。その様子には僕らは驚き止めようとしていた

「な、なにごとじや!」

「て、店長!?!何をトチ狂っているんですか!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

「話が全く通じない!?!」

「仕方ない!雄二!僕らで止めるよ!」

「おう!!」

明久が呼び掛けるも店長は聞こえてないのか叫んで飛んでいた。これはよろしくないと思った僕は護衛用の射撃で速撃ちと雄二は取り押さえようとしていたが・・・

「のび太の攻撃があたらねえ!?!なんて動きだ!?!」

「速撃ちには自信あるのにあっさり回避された!?!」

「のび太達が押さえられないなら・・・ムツツリーニ!店長にスタンガンを!!」

「・・・目標が絞れない・・・!」

残像でも伴うかのようなてんちかの動きに流石の僕達も対応できずにいる

「こんなに回避されるなんて・・・どうしたらいいの?!

「そうだ! 秀吉っ!」

「な、なんじゃ!? 明久!」

「店長の動きを止めるために『父親に勝手に日記を読まれた思春期の女の子』の台詞を大声で叫ぶんだ!」

「よ、よくわからんが了解じゃ!」

明久がテーマを告げると、一瞬にして顔が役者のそれになる。そして、はつきりと大きな声で叫んだ

『・・・お父さんなんて、大っつつっキライ!!』

たっぷりと嫌味や怒りの込められた台詞。愛しい娘(偽)にこんなこと言われたなら、流石の店長も動揺して動きが止まるはず――

「そうかつ! それじゃあ今度はお父さんと一緒にお風呂に入ろうっ!」

「!!」 「なんでそうなる!?!」 「!!」

「会話のキャッチボールが出来ないなんて・・・!! こうなったら実力行使しかない! 秀吉は下がって急いで服を着替えて! 雄二、ムツツリーニ、のび太! 全力で行くよ!」

「了解!!」 「!!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア――ツツツ!!」

僕は予測した動きで攻撃するがあっさり回避されて、雄二は雄二で押さえようとすると交わされる

「ええい! 化け物か!」

こんなに交わされるなんてなんか屈辱!!!

「・・・回避された?」

「こつちも回避されてしまった! 皆! なんとしても店長の暴走を確実に押さえるよ!」

「!!」 「おう!」 「!!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア――ツツツ!!」

「!!」 「おおおおおお!!」 「!!」

その後なんとかスタンガン最大威力を四回繰り返し返して大人しくなった・・・。武力行使はやむを終えない事情なので・・・許してく

ださい店長・・・

バイトをしよう!! IV

店長の暴走が収まり、僕らは息を整えていた。たった数分でとれだけ体力奪われたのかわからないけど・・・なんとか収まって良かった「なんとか収まったけど・・・どうしようか？」

「どうするもクソも、店長がこんなじゃ何もできないだろ。『本日臨時休業』とでも書いて入り口に貼っておこう」

「だね。幸い店に被害はなかったのは良かったけれど・・・僕ら素人五人ができるのはたかが知れているよ。今日は諦めるしかないね」

僕の言葉に雄二達もゆっくりと頷いていた

「うむ。バイトはまたの機会じゃな」

「仕方ないな。また他のバイトを探すとするか」

「・・・残念」

「え？ ってことは、バイト代は——」

「出ないよ。働いてないのだから・・・」

「そっか・・・そうだよね・・・」

僕の言葉に明久はものすごく落ち込んでいた。まあ、お金がピンチと聞いているわけだけどこれを機会にお金の使い方をきっちりしないとね

じゃないと、玲さんがまた明久の家に住むことになる。なんでも、玲さんは今海外にまた戻っているらしい。玲さんが海外に帰るときいたとき明久が喜びすぎてお仕置きされたときいている

ーカーランコロン

「いらしゃいませっ」

・・・へ？明久何してるの？

僕が状況つかめない中、入ってきたのは

「良かった、あいてるみたい。時間潰す場所なくて困ってたのよね」
「ほんと、助かったね」

明久の言葉を返事と勘違いして、OL風のお姉さんが二人お店の中に入ってくる。それを聞いた僕らは真っ青になりながら明久に問い詰めた

「(おい明久！何を勝手に招き入れてるんだ!?)」

「(ご、ごめん！わざとじゃないんだ！ちよつと頭の中でシュミレーションをしていたらタイミングよくお客さんが来ちゃったから・・・！)」

「(困ったのう。もはや追い返すこともできぬような雰囲気じゃし・・・)」

「(・・・店長が目を覚ますまで何とかするしかない)」

「(やってしまったのは仕方がないよ)」

「(だな・・・。まあ、メニューを限定したらなんとかなるかもしれない。できるだけやってみるか。明久と秀吉とのび太はウェイター、ムツツリーニはキツチンを頼む。俺はドリンク関連を担当する)」
「(了解！)」

雄二がカウンターに入り、ムツツリーニは裏手のキツチンへと姿を消す。僕と明久と秀吉はウェイターなのでホールに残る

「ワシが最初に行くから、お主らは次に客が来た時の準備を頼む」

「了解」

僕らの返事に秀吉はで入口で待っているお客さんに声をかけた

「二名様ですね？それでは、こちらへどうぞ」

本日一組のお客さんを連れて窓際の席に向かう秀吉。お客さんが席にかけてたところで一旦その場を離れ、お冷をトレイに載せて再びその場へと向かう

「(ご注文がお決まりになりましたらお呼びください)」

丁寧に頭を下げてカウンターへ戻ってくる。得意の演技で乗り越えるのは流石の秀吉だ・・・

「流石秀吉。違和感が全くなかったよ」

「うむ。舞台じゃと思えばどうということはないからの。むしろ観ている人数が少ない分余裕があるくらいじゃ」

「よし。僕も頑張るぞ」

「僕もがんばるとするか」

「その意気じゃが・・・あまり気負いすぎるでないぞ。緊張は身体の動きや滑舌に影響を与えるからの」

なるほど。確かに緊張したらうまいことしやべれないというのは納得だ

ーカーランコロソ

どうや第二のお客さんが登場だ。さて、これは僕がいくべきか明久がいくべきか

「(僕が先に行くね)」

「(健闘祈るよ)」

明久は出入口に待ち構えているお客様に声をかけた

『いらっチャッ!』

「(あ、噛んだ・・・)」

「(っ!!)」

お客さんが必死に笑いにこらえてくれるけどでも、その優しさは逆につらいよね・・・お客様は四人の女性で来店していた

『いらっチャ——・・・(ダッ)!』

『あっ!キミ、案内は!?!』

『大丈夫だよ!私たち全然笑ってないから!』

『もう一回だけ頑張ってみて!』

『フアイトだよ!!』

明久はあまりの恥ずかしさに猛ダッシュしていた。そんな明久は聞こえてないのか顔真っ赤にしてこちらに戻ってきた

「な、なんじゃ明久!?!なにゆえダッシュで戻ってくるのじゃ」

「失敗しても逃げちゃダメだよ!?!早く戻らないと失礼だからね!?!」

そう言ったら明久君はお客さんのところに戻ってお詫びを入れた

『す、すみません。ちよつと気が動転してしまいました・・・』

『気にしないで。誰にでも失敗はあるから』

明久が頭下げて謝るとお客さんは笑顔で許してくれた

『それでは、こちらのお席へどうぞ』

お客さんを窓際の席へ誘導する明久。どうやら秀吉が教えてくれたポイント2『転ばない』は大丈夫みたいだ。明久がメニューとお冷を出して、注文が決まるまで離れて待機した・・・

「・・・お疲れ様」

「・・・うん」

明久はあまりの失態に落ち込んでいた・・・僕もやらかしそうでないわいな・・・

「む、そろそろ注文が決まったようじゃな」

最初に入ってきたお客さんの様子を見て秀吉が先程のお客さんの方へと近づいていく

『ご注文はお決まりでしょうか?』

『エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットを二つ下さい』

『畏まりました。エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットをお二つですね。少々お待ち下さい』

メモを取って、秀吉が戻って先程の注文を雄二に話していた

「エスプレッソ、レモンティー、シャーベットを二じや」

「あいよ」

「・・・(コクリ)」

秀吉が注文を告げる雄二とムツツリーニが動きだしていた。うん、連携はいい感じ!

「明久、君の接客していたお客さんがメニュー決まったよ?」

「あ、ほんとだ。行ってくるよ」

「うん。いつてらしゃい」

明久は今度こそ失敗しないようにと気合い入れて、先程の四人の女性に注文を聞きに行った

『ごちゅっ!』

『『ゴホッ!?!』』

お客さんが噴き出した水が、店内に鮮やかな虹のアーチを描いた:

お客さんに罪なく明久に罪あり・・・

『・・・ご注文は、お決まりですか・・・』

正直ここまでくればもはやいたたまれない・・・

『私はホットココアとチーズケーキを。頑張って』

『私はオレンジジュースとホットケーキで。頑張ってね』

『私はミルクティーとモンブランを。頑張ってください』

『私はアップルパイ。頑張りなさい』

『は、はい。ありがとうございます・・・』

明久が簡単にメモを取り、雄二とムッツリーニに告げる。

「ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホットケーキ、モンブラン、アップルパイを一つずつと、頑張つてを四つ」

「・・・早速何かあった？」

「・・・今の明久にそれ以上は触れてあげないで・・・」

その後、明久は出来上がった料理を持っていったがその時お客さん達に『よくできたね』と誉められた時、明久君はとても切ない顔になったのは、ここだけの話だ・・・

バイトをしよう!! V

あの後お店は大忙しになり沢山のお客さんが来ていた。また先程、常夏コンビさんが来店し来たので明久に相手任せたのだが、喧嘩になりコーヒーを明久にかけようとする秀吉にかかり、秀吉は着替えのため抜けていた。尚、常夏コンビさんは明久の手によりお店を追い出した

ーカラン

そんな中、次のお客様が店に入ってきたので、今现阶段で動けるのは僕だけしかいなかった・・・

「明久は今、他のお客さんと相手になっているから無理だしここは僕がいくか！」いらつしやいませ。何名様でございますか？」

「二名です。可能なら窓側をお願いしたい」

「(この店女性が来るの多いなー)かしこまりました。ではこちらの方にどうぞ」

僕は席を案内して、その席に座らせるとその女性は何を思ったのか僕の顔を見て・・・

「あなた・・・いい男ね。私と付き合わない？」

「え?!」

「私今ならフリーなの。ね?付き合わない?」

な、なんか女性の目がものすごく怖いんだけど!?!と、とにかく回避しないと!

「お客様。申し訳ありませんが、私どもは彼女がいますのでお付き合いお断りさせていただきます」

「あら、残念・・・なら、むりやり事実でもー」

「メニューが決まりましたら、お呼びください!!」

なんかとんでもない人に絡まれてしまったような気がする・・・僕が戻ると明久がいたわるようにこちらを見てきた

「のび太・・・なんかものすごい人に絡まれたね・・・」

「・・・美子さんに見られたくない」

「もしも見られたらきちんと弁明するよ」

「・・・頼むね・・・。」

僕がそう落ち込んでいると来店の知らせる合図が来たので僕は明久に任せていた。そして、僕は先程の女性に注文が決まったと思いがかった

「ご注文はなんですか？」

「私のご注文は・・・あなたよ♪」

「だから僕は彼女いるといいましたよ!?そして、そんな注文はありませんー!」

「いいじゃない!愛は不滅と言うじゃない!?なら、私と付き合いなさい」

なんでこの人こんなに強引な注文するの!?ドラえもん助けてー!!誰でもいいから!」

「・・・何をしていますか？」

・・・あ、これ僕が怒られる奴だと思い振り返ると・・・そこには満面の微笑みで目が据わっていた美子さんが僕の後ろにたっていた・・・

あれー?これのみち僕が死にかけるの間違いないじゃないか・・・

何故彼女がいるのかというと遡ること数分前になる・・・

明久 side

変態な先輩達も追い出して落ち着くと来店の知らせる合図が聞こえた。本当ならのび太に手伝ってほしいけど・・・なんか、ものすごい怖い雰囲気的女性に絡まれている・・・

「ごめん、のび太。助けれそうにない・・・」いらっしやいませー」友を助けられないことに心のなかで謝罪して、お客さんを迎えると意外な客だった

「こんにちは、明久君。遊びに来ちゃいました」

「あれ、姫路さん?」

「やってるわね、アキ。へえ。結構似合ってるじゃない」

あれ、美波も来ていたの?元々この二人は今日はどこかに遊びに

いつていたのかな？

「ほらほら、店員さん。ぼーつとしてないで席まで案内してくれない？」

「あ、はい。何名様でしょうか？」

「5人です」

「え??5人って2人しかいないくない?」

「2人はちよつと遅れているわ。それと、もう1人は・・・」

美波が言いながら指で店の奥を示すと――

『・・・雄二。妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ?!いるはずのない翔子の声が聞こえるぞ?!呪いか?!』

うん、こういつてはあれなんだけど軽くホラーだ。そもそも、雄二は絶対に霧島さんにバイトを教えていないはずだから

「元々私たちがここに来たのは霧島さんが教えてくれたから」

「なるほど・・・あれ?でもどうやって知ったのだろうか?」とにかく、こちらへどうぞ」

「はい」

僕がお冷やとか出すと、霧島さんも戻って席に座った。そういえば、のび太はどうなっているのだろうか・・・?

「あ、美子ー。こつちよ」

「え!?!」

僕は美波が呼んだ人がのび太の恋人の三上さんだとしたら・・・のび太は殺されないかな・・・?

「ごめんなさい。おまたせ」

「(あ、これはのび太死んだかもしれない・・・)いらつしやいませ」
「吉井君、仕事しつかりしてるのね。てつきり、暴れたりするのかわか

思ってたわ」

「あ、あははは・・・(頼む!!のび太の事は気づかないで欲しい!)」
笑顔で席に座った三上さんに僕は言えない!!僕には三上さんに今のび太が求愛されているなんて言えない!!!言ったら・・・

のび太が怒られるだけ・・・あれ?別にそう思ったら僕に被害はいかないよね?

そう思っているところー

『私のご注文は・・・あなたよ♪』

『だから僕は彼女いるといいましたよ!?!そして、そんな注文はありませんー』

『いいじゃない!愛は不滅と言うじゃない!?!なら、私と付き合いなさい』

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

突然の女性の告白が聞こえて僕らは全員沈黙していると・・・

「・・・(ピキツ)」

「「「「「「「「」」」」」」」」

「・・・皆さんごめんなさいね。私は少しだけ席外します・・・。ええ、少しだけお話ししてきますから、ごめんなさいね?」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

僕もきちんと返事できたか怪しいけど、あ、あの霧島さんでさえ三上さんの言葉に返事が遅れていた。三上さんのあはれは・・・笑顔だけで怒っている笑顔・・・それも敬語を使っていた

・・・のび太・・・骨は拾うよ・・・

のび太 side

僕は現在人生最大の冷や汗が止まりません。ジャイアンリサイタル?そんなのが可愛いくらい今、僕の心は死にかけています

「あら、どなたなのかしら?」

「・・・まずは私の質問にお答えしてくれませんか?『何しているのですか?』と私は質問したのですが?」

美子さんが冷たい目で女性を見ていたが、僕には分かる・・・これは完全に怒っているやつだ・・・

「見てわからない?私は彼を注文といったのだけどなにか問題ある??」

「・・・問題ありますか?それといいこと教えましょう」

「何かしら・・・?!!?」

「つちよ!?!」

美子さんは相手に見せつけるように僕の腕を自分の胸に寄せていた。余りの突然の事で僕は顔真っ赤になり、かたや見せつけられた女性には驚いた顔になっていた

「私の彼氏に手を出さないでくれませんか？彼も断っているのですから」

「あら、それはほんとうかしら？その場逃れの的ではないのかしら？」

「残念ですが、私と彼は恋人関係です。よって、あなたの注文は受け付けられません」

「(美子さんの胸がぼぼぼくの腕にいい!?／＼／＼)」

僕はこのとき冷静ではなかったので今の二人の回りの状態は把握できず、パニックになっていた

そんな回りはというと・・・

「……………(ゴゴゴゴゴ)」

「……………(ガタガタ)」

誰も助けてくれる様子はなく、震えていた。そして、最初に口開いたのは――

「……………いいわ。貴方が恋人としているのなら諦めるわ」

「……………」

「ですが覚えておきなさい。……………女は欲しいものがあつたら奪いたくなるものよ。離れたくなかつたらしっかりと見張っておくことね」

「ええ、(忠告どうもです)」

「店員さん、(迷惑代としてお金はここに払っておくわ。お釣りはいらないので)」

そういつて女性はお金をおいて壮快と出ていった。余りの事で僕はボーとしていたが、すぐに気を取り直して外に追いかけるも……………

「……………いない？」

その女性は足が速いのかも姿は見えなかった

だが、このとき僕は忘れていた……………。そう、恋人の彼女を怒らしていたことに……………

「のび太君……………少しあっちでお話ししましょう？」

「……………あ」

その笑顔は……………怒っている……………つまりお説教コース確定……………
それを自覚した瞬間、美子さんのお話しが始まったことだけ伝えよ
う……………

バイトをしよう!! VI

人目がつかないところで僕は美子さんにお話し・・・もとい、お説教食らいました・・・。うう、今回は流石に弁明の余地はないよ・・・。「貴方が悪いとは全部悪いと言うのはないけど、もつとはつきり断つてもよかつたじゃないの?」

「あ、うん・・・それはそうだけど・・・」

「まあ、貴方は優しいから傷つけないように気を付けていたのかもしれないけどね・・・それにそんな貴方の優しさがあるの知ってるから私はあなたに惹かれているのよ」

「美子さん・・・」

僕は美子さんの言葉にパツと顔を見ると、とても慈愛のある笑顔でこちらを見せてくれた。この笑顔と目はいつもの優しげな美子さんだと僕は少しほつとしていた

「お説教みたいなこととしてごめんなさい」

「ううん、僕ももう少しはつきりと断れば美子さんに負担かけなかったのにごめんね」

「いえ、とにかくこの話は終わりました。お互いにきりがなくなりそうだから」

「たしかにそうだね・・・うん!この話は終わり!」

美子さんの言葉に僕も苦笑いしてこの話終えて、店の方に戻ろうとするところ――

「あれ?貴方達は・・・野比のび太君とEクラスの三上美子さんよね?」

店に戻ろうとした僕らに声かけてきたのは――

「Aクラスの木下さん」

「こんにちは。こんなところで二人は何していたの?」

秀吉のお姉さんの木下さんが僕らに不思議そうに声かけてきたので、僕は事の顛末を話すと木下さんは苦笑いしていた

「それはまた・・・そんなことが起きたのに二人はきちんと言合うつて本当に仲良いわね。三上さん」

「私は彼を信頼してるし、それに私にとっては再考の恋人だから仲良

いのは当たり前ね」

「僕も美子さんを信用してるし仲良いのは当たり前かな」

「惚れ話ご馳走さま。流石学園一に誇る最高カップルね」

木下さんが僕らの言葉を聞いて苦笑いしながらご馳走さまをするときのお手合わせして僕らにいった。

「え？僕ら今そんな立場なの!？」

「それは宏美から言われたことあるけど本当だったのね・・・」

「二人とも自覚なかったの!?(じゃあ、貴方を怒らすなど言う裏の暗黙ルールも存在していると言うのは言わぬが花ね)」

「?」

何故だろう?木下さんがこちらを見て、不思議そうにそして、なに
か隠してるようにじっと見ていたけど僕何かしたかな・・・?

「まあいいわ。のび太君もとりあえず店に入りましょう」

「あ、そうだ。僕はバイトの最中だった!!」

「あ、のび太くん。優子も元々この店に来る予定だったから追加お願いね」

「わかりました。店入ったら案内します」

「お願いね」

僕の言葉に木下優子さんは頷いて3人で店に入ると・・・

『ふぬああっ!?手首の間接が一度ハマられてまた外された!』

『だからどうしてアンタはそうやって頭の悪いウソしかつけないのよっ!高橋先生と一緒に来るわけないでしょ!』

『え!?え!?やっぱりウソなんですか!?そうなると美波ちゃんと二人できたのですか!』

『A hellish gate has opened. Com
pensate the crime with your de
ath. Are you ready, Yuji?』

『な、なんだ!?どうして翔子がいきなり戦闘態勢になってるんだ!』
「.....」

何でこんな状況になっていいのか知らないけど、ひとつわかってい
ることがある……。他のお客様にも迷惑になりかねない状況になっ

ていると言っていること

「代表に島田さん、ちよつとは落ち着きなよ。お店で暴れるなんて良くないよ?」

「・・・優子、それに美子も戻ってきたんだ。でも雄二が・・・」

「アキのバカが」

「言い訳しないの。霧島さんも美波もここは食べるところよ?それは他のお客様に迷惑なるわよ」

木下さんと美子さんが怒りで興奮していた二人を窘めると、二人とも落ち着いて反省したかのように席に座り込んだ

「うむうむ。姉上も良いことを言うのう」

「そうだね秀吉。お姉さんのおかげで助かった——って、その格好はどうしたの?」

「うむ。それじゃがな、サイズの合う替えの制服が見つからなかったので、こっちで代用しておるのじゃ」

「・・・・・・・・(ゴゴゴゴゴ)」

いつの間にか近くによつて来てた秀吉は、最初に来ていたウエイトレスの制服を再び身につけていたのをみた木下さんの後ろにはとてつもない怒りのオーラが僕と美子さんの隣に発していた

「秀吉、ちよくくつといいかしら?」

「んむ?なんじゃ、姉上?」

「いいからいいから♪。・・・のび太君、トイレはどこにあるのかしら?」

「あ、あの奥です・・・・・・・・」

「そう。ありがとう」

トイレのある場所を指すと、優子さんは秀吉の腕を掴んで笑顔のままそちらへと歩き出した。可笑しいな・・・秀吉が処刑台に連れていかれるかのような幻覚が見えるのだけど・・・?

「あ、そうそう。代表と島田さん・・・。さっきの台詞、撤回するね。他のお客様に迷惑でも、気に入らないものは気に入らないもの。存分にやっちゃいませよ♪」

そして、ボタン、とトイレのドアが閉まる音が聞こえた。そして、秀

吉の悲鳴が聞こえると共に制裁が再開された・・・

『雄二。許可が下りた。高橋先生とのデートのこと、全部聞かせてもらおう』

『なんのことだ!?それと聞かせろと言いなから聞く耳持たないように見えるのは気のせいか!?』

『あ、あの、明久君!さっきの話ですけど、本当は美波ちゃんと二人きりだったんじゃない!』

『ちちち違うのよ瑞希!アキはバカだから記憶が違っていただけ!』

『あがあつ!美波、落ち着いてまずは僕の腕を解放して!このままだと僕の腕に間接が一つ増えちゃう!』

このままでは本当に他のお客さんに迷惑かけてしまう!

『いい加減に・・・しなさいあああ!!』

「(ビクツ)!!」

美子さんの声でその場に聞こえていた全員が震えていたけど、関係ない!もう流石に我慢の限界

「ここは食べる場所!!制裁する場所じゃないのよ!」

「(・・・でも)」

「でも・・・じゃありません!そもそも他のお客様もいるのだからそういうのは駄目!それと、坂本君と吉井君!」

美子さんの怒りが明久達にも向いてきて、そんな彼らは美子さんに名指しされた瞬間背筋をきちんとして敬礼していた

「は、はい!!」

「ここは仕事の場所だから、こういう行為はきちんとお話ししなさい!!誤解なら誤解で後で話し合うとかきちんとしなさい!」

「(ハ、ハわい!)」

「返事は?」

「は、はい!!」

今の美子さんに反論したらもっと怒られると思ったのか二人とも声揃えて反省していた

「それと翔子も美波も瑞希もなにしてるの!まず、ここはどこかわ

かってる?!」

「「「「えつと」」」」

「わ・か・つ・て・い・る?」

「「「食事するところですよ」」」

「じゃあ・・・暴れていい所かしら?」

「「「「ごめんなさい!」」」」

流石の三人も今の美子さんはとてつもなく怒っているとわかって
いるのかしよんぼりとした子犬のような顔になっていた・・・

するとー

「き、君たち!お客様の前で何をしているんだ!」

今の怒り状態の美子さんにたいしてなにか言おうとしていたのか
分からないが鋭い叱咤が店内に響き渡った

「「「て、店長・・・」」」

「まったく、人が倒れている間に何をしているんだ君たちは。店をあ
けてしまったことはともかく、お客様の前でこんな真似をしているな
んて、何を考えているんだ!」

「「「「貴方が店長ですか?」」」」

「ん、なに・・・か・・・」

店長がまだこの状況が把握できていないのか知らないけど、美子さん
の言葉に振り返ってる見ると・・・固まっていた

「「「「何で倒れていたのですか?」」」」

「えーと・・・なんでだつて?」

「「「「そもそも、まず店長が倒れた理由は知りませんが・・・ま
ず責任者の貴方が最初にしっかりとしていたらこうならなかったの
ではありませんか!」」」」

「いやあの・・・」

「言い訳しない!勿論、勝手な判断した彼らも悪いですけど、店長が
しっかりとしていたらこうならなかったのではないですか?」

「おしやる通りです」

「もう・・・!人に怒るの怖かった・・・」

「「「「ええ(ドタバタ!)!?」」」」

美子さんが我を取り戻したのか急にそういわれた瞬間、美子さん以外の面子はズツコケた・・・美子さんはそんなキャラじゃないでしょ?!?!

——カラコンコロ

直後、カウベルの音が甲高い音をあげた。見てみると、そこには母娘と思しき二人組みが店内に入ってきたところだった

「どう、お父さん・・・。少しは反省した？」

「え?!店長は清水さんのお父さん!?!」

清水さんの言葉を聞いた僕と美子さんは思わず声を揃えてハモるが、店長のほうはというところ——

「み、美春!?!ディア・マイ・エンジェル・・・!」

店長の動きが止まる。今にも泣き出さんばかりだ。そんな様子に他のみんなも暖かい目になり、明久が店長のほうにかけよった

「店長。良かったですね。娘さんと奥さん、帰ってきてくれたじゃないですか」

「吉井君・・・ありがとう・・・。美春・・・もうどこにもいかないで・・・」

店長は涙を流しながらよろよろと清水さんに近づく。清水さんも、ゆっくりと店長に歩みよって——

「ああっ！美波お姉さまじゃないですか！さては美春に逢いにきてくれたんですね!?!そうならそうと言ってくだされば、美春もベツトを用意してお待ちしていましたのに!」

「み、美春!?!ここってアンタの家だったの!?!」

「むむ！この優しいげな雰囲気の気配は・・・のび太お兄様と美子お姉さまああ!!」

「うわー！（キヤー!）」

島田に抱きついたと思ったら今度は僕らの方に抱きついてきたので、僕と美子さんは慌てて受け止めた

「のび太お兄様と美子お姉さまがいるなんて美春感激です!!お兄様、ここでバイトもしてくれただなんてもっと早くいつてくださればよかったのに!」

「あはは・・・ごめんね？清水さん」

「もう・・・急に抱きつかないで？貴方が怪我するわよ」

「大丈夫です！お兄様とお姉様なら受け止めてくれると信じてましたから!!」

「『そんな信頼の仕方をされても・・・』」

僕らが困惑していると・・・

「貴様が・・・」

「はっ!!」

「キサマが、娘を誑かす女かあつ!!」

店長が一気に加速してこちら全速力で走って来たのを感じた僕は思わず、逃げた

「なんでええ!!?」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツ!!」

「うそおお!!?なんか異常に速いんだけどおお!!」

「の、のび太くんうう!!?」

「お兄様ああ!!?」

僕は店長の全速力に驚きながら僕もまたフルパワーで店長から逃げるべく走り去ると美子さんと清水さんの声が聞こえた

その後、清水さんが店長に『お兄様を襲うお父さんは大嫌い！暫く帰りません!!』というと、店長は嘘のように落ち込んだことだけ伝えよう

そして・・・

結果報告—

野比のび太

・給料——3000円

・清水さんの母親が謝罪として出された金で当初は断ったのだが、逆らえず受けとることになった

吉井明久

・友人（島田美波）による折檻

・生活費、お情けでゲット

・ただし、親に脅迫される

坂本雄二

・自分の部屋に鍵設置不可。

・妻（霧島翔子）による折檻及び妻の監視の目が厳しくなる

木下秀吉

・お店にて姉（木下優子）による折檻。

・自宅にて同じく姉による折檻

土屋康太

・想像しすぎて出血したことにより、給料手に入らず・・・

娘を激愛しすぎるのも問題だなく・・・

報告者

野比のび太

ドラえもん&バカテス ?? Lost Hero??
食べ過ぎ注意!!

あの召喚獣システムを取り返す冒険が終わって何気ない日常が続いていた。明久が金欠だからということと日雇いのなので一日参加した日もあれば美子さんのバイトのヘルプでお客さんが増えて大変だった……。あ、因みにバイトの後、ドラえもん和美子さんと僕の家族とご飯食べたのも最近だ

さて、そんな僕はいま何してるかと言うと……

「はぐう!?!ぐるるる!?!」

「ど、ドラえもん……。?大丈夫?」

「だ、大丈夫じゃないよ……。!!ぐるりゅう!?!」

強烈な腹痛に終わられて苦しんでるドラえもんに呼び掛けていた。なぜこうなったかと言うと、遡るのは二日前になる……

美子さんのバイトの手伝いも終わり、帰ろうとするとその日は美子さんの店で手伝っていた姫路と島田が明久に食べさせたために料理のレベルを上げたいと言っていた。因みに流れて霧島さんも料理したいと言うことで三上さんが講師として姫路たちが料理作るとなった

メンバーを分かりやすく言うとー

講師 美子さん

味見役 僕とドラえもん

料理する側 姫路 島田 霧島

となっていた

正直、美子さんが講師やるのと島田がいるからそんなにとんでもない料理にならないと二日前は思っていたけど……。現在、目の前でドラえもんが苦しんでるのみたら……。ね

「あ、あのドラちゃんはどうしてあんなったのですか?」

「す、すごい汗だわね」

「ええ……」

「……ロボットでもあんなに苦しく痛み感じるんだ」

美子さんをはじめとする女性メンバーは不思議がっていたが僕には分かる……。よく考えてほしい。島田といえば以前料理で明久に辛い食べさせたことを……。そして、姫路と霧島さんは……。察してほしい

そんな三人の手料理にドラえもんは警戒なく食べた結果……。この通りだ

「も、もしかって不味かったのですか!?それでお腹も痛いのですか!」

「あ、いや……。なかなか個性的な味で良かったよ……。その、ど、どら焼きの食べ過ぎでお腹がい、痛いだけ……。はぐうう!!だ、大丈夫だから……。ぐるゆ?!」

「ど、ドラえもんさん!?大丈夫じゃないでしょ!?我慢しなくっていいから!」

ドラえもんは女性メンバーに傷つけないように必死に強烈な腹の痛みを耐えながら何とか言葉を選ぶも美子さんが心配して声をかけていた

「ご、ごめん……。き、今日はもう味見できそうにない……。ぐりゅうう!!」

「汗がすごすぎますよ!」

「どんだけどら焼き食べたのよ……」

「た、確か……。20個……。お、衰えたのかな……。!?」

姫路と島田がドラえもんの腹の痛みがあまりにも長いのが気になり、声をかけるとドラえもんは女性メンバーに傷つけないようにあえて食べ過ぎたと伝えた

「……食べ過ぎはお腹を痛める要因。もう今日は無理しなくっていい!」

「そ、そう……。ご、ごめんね。ふぐうう?!」

「いいのよ。ドラえもんさんものび太くんも今日は味見役してくれてありがとうね」

「ううん。僕らで役たつて良かったよ。ね?ドラえもん」

「ど、どういたしまして……ぐるゆ!!美子ちゃん……ごめん……と、トイレ貸してくれない……?」

「いいわよ。下の方にあるからね」

「あ、ありがとう!!ごおお!!(ダッ)！」

「……」

ドラえもんがもの凄い勢いで腹の痛みに耐えきれなくなったのか全速力でトイレの方に向かっていった。余りの行動の早さには、全員が驚いていたのはここだけの話……

「ドラえもんさんがもう今日は限界ということでおしまいね」

「そうね。本当はまだここにいたいけど外をみたらいつ雨が降りそうかわからないから帰りましょう」

「……うん。……?」

「あれ、どうしたのですか?翔子ちゃん」

美子さんの言葉に賛同した島田がそういうと霧島さんもうなずいたと思うと外の方にちらつと見ていた。そんな霧島さんの行動に姫路が疑問をもつて聞くと――

「……雄二がまた何か隠している……お説教」

「坂本がなにか隠しているなんて分かるのは凄すぎるわよ。あれをしつかりと学ばないといけないわね」

「はい! 私たちも明久君がなにか隠しているのがないのか聞いておきましよう!!」

「翔子、本当に坂本君の話をきちんときいてあげなさいよ? たぶん無意味だと思うけど……」

霧島さんの不穏なオーラに何を思ったのか姫路と島田が感心していて、美子さんが呆れながら心配そうに窘めていた

「じゃあ美子、のび太、ドラえもん。今日はありがとう」

「また学校にですね」

「……三人ともいい人。また」

そんな3人は雨が降る前にさっさと帰ることにして玄関で別れたのだ。本当は僕よ着いていっていくのがいいのだが……ドラえもんがトイレからまだ出ていないので、少し待つことにした……

「今日はごめんね？忙しかった思うのに」

「あははは、気にしなくていいよ。それよりも、美子さん……」
「ん、何？」

「いや、ずつとこんな幸せな日々が続いたらいいねーって思ってた……」
「そうね。この間の冒険とかは大変だったけどね……貴方達四人とも慣れすぎていて逆に驚いたわ……」

「あははは……慣れちゃって怖いね……」

僕は何気ない日常が改めて幸せだというと美子さんはこの間の冒険のは大変だが、慣れている僕らが異常だったと言われると流石に慣れてしまえば怖いものはなかった……

「お、お待たせ……」

「ドラえもんさん大丈夫？」

「まあね……。食べ過ぎには気を付けるよ……」

ドラえもんがつかれた顔でいいながら玄関に向かうと僕もそちらに向かった

「じゃあ、美子さん。そろそろ僕らも帰るね？」

「ええ。風邪とか引かないように気を付けてね？ドラえもんさんもお体大事にしてね」

「ありがとう。じゃあ、またね」

「また明日！」

「ええ、また明日」

僕とドラえもんは美子さんの家を後にして、歩いて帰ることにした。ドラえもんは真っ青になりながらよろよろと歩いていたが――

「あ、雨が降ってきた!?!」

「このタイミングで!?!」

美子さんの家出てから数分で狙ったかのように大雨が降った……。帰宅後、ドラえもんも僕もびっしょり濡れだったのはここだけの話だ

こんな何気ない幸せは続いてほしい……。僕にとってはかけがえない日常だから……。

朝の激痛連続

美子さん達との料理教室も終えて翌日の朝は穏やかな朝になったかといえば・・・

「はぐう!!?!!ぐりゆううう・・・」

残念ながら朝から穏やかに済んではいなく、現在進行性で僕の大親友のドラえもんが昨日の試食会のダメージがまた出てきたそうであり苦しんでいた

「は、ハクシヨン!!!ど、ドラえもん大丈夫・・・じゃないよね?どうみても」

「の、のび太くんこそ・・・先程からくしゃみも止まっていないじゃない・・・ぐふっ!」

「汗がまたすごくなっているよ!?仕方ない・・・ドラえもんの寝ているところにある「スペアポケット」で「お医者さんカバン」とか出してー「ま・・・まった・・・」・・・ドラえもん?」

僕はドラえもんの寝ている襖の方に行き、スペアポケットを取り出そうとすると、ドラえもんが制止の言葉をいった

「と、とりあえず未来の方にみ、見てもらうよ・・・ぐふお!!」

「顔がどんどん真っ青になっているよ!?おまけにいつかの大冒険の時の腹痛顔になっているよ!?は、ハークシヨン!」

「とと、とにかく僕もきちんと病院いくから・・・のび太くんは風邪引いているのだからなにか薬飲んでよ・・・もう我慢できなああい!!」

ドラえもんはものすごい勢いで僕の机を開けてタイムマシンに乗り込んだ。何て言うか・・・ドラえもんもやはりあの料理は耐えられなかったのかな・・・

「もう限界だああああ!!!22世紀に即治療うう!!グフツ!」

時空間でドラえもんが大越で叫んでいたのは僕は知らなかった。それも涙をこぼしながら苦しんでいたことも・・・

そんなことを知らない僕は学校のいく用意をしていた。昨日は急に雨降られたお陰でくしゃみやみが止まらない・・・風邪引いたのかな・・・「ハクシヨンツツ!!!これ絶対に風邪引いたやつだ・・・。参ったな・・・

来週には西村先生の確認テストがあるからきちんと授業を受けないと補習コースになるのに・・・」

流石に何がなんでも受けないと美子さん達との今度の連休とかに旅行いけないのは洒落にならないよ!!

「何か一発で治る薬さすがに今日はほしいよ・・・ぶえーくしょん!!・・・にしても、何で昨日はあんな良いタイミングで大雨が降った・・・ハークション!!」

くしゃみが止まらない・・・ドラえもん助けてえええ!そう思いながら何がなんでも学校にいこうと思いき着替えて下に降りようとおもうと、紙が机の中から飛び出してきた

「何の紙だろう?」「これは未来の風邪薬です。即効性ですから是非お試しください。お試しのお申し込みは住所と宛先をかいてください!・・・何かタイミング狙われた気がするけど、この際四の五の言っていないらね!!」

それに未来なら一瞬で直せる薬もあるはずだし、ドラえもん以後でお詫びとしてどら焼きを買おう!!それでも姫路達のあれは一瞬で治せるかは厳しいけどね・・・

ーゴツツン!!

「いたあああ!?まさかの天井から荷物を頭に!?!」

見事に脳に当たった僕はフラフラとなり、バランスを崩すと右足の小指が机の方の角に思い切り直撃した

「つつ!?いたあああた!?こ、小指があああ・・・頭もいたい・・・」

負の連鎖が止まらない・・・。よろよろになりながらもとりあえず薬を取り出そうとする前に今日の天気を見ようと思いき、薬の入った箱を持っておりて、飲む前に歯磨きしてテレビを見ていた

「皆さん!今日の占いランキングの発表です!!」

「何々?今日の僕の運勢は・・・獅子座最下位!?!」

・獅子座は本日の最下位です。

・人生でどんそこを味わう日です。

・ラッキーアイテムは○○。

・今日死にまーす

「まてえええ?!なに?!僕風邪ごときで死ぬの!?この年で!」

「《今日死にまーすとなっていた獅子座の皆さんは不幸な一日になると思いますが今日も元気でいつてらしゃい!》」

「・・・何で占いごときでこんな言われなといけないの!?しかも、風邪引いてる上にさらに死ぬ?!そんな占いあたったたまるか!!」

占いが終わり、僕は思わず大声で叫びまくりそんなのは嘘だと思いきくとタイミング見計らったかのようにジャイアンから電話がかかってきた

「ん、ジャイアン?もしもしー朝早くからどうしたの?」

「のび太、すまん・・・今日、俺は学校いけなくなったから代わりに授業のノートとつてくれ・・・」

「ええ!?何で僕が!?スネ夫に頼んだらいいのに・・・」

「スネ夫も俺も体調ダウンなんだよ・・・ハーーークション・・・俺達熱で39。近くでいけないんだ」

「何で二人とも風邪引いてるの!」

「実はな・・・」

話を遡るのは昨日の事だ

昨日はジャイアンとスネ夫も真理亜さん達三姉妹の手料理を食べるため家に訪れていたのだが、たくさん食べ過ぎた上にダウンしたそう。さらに最悪なことに歩いて帰ってる最中に僕らと同じように通り雨でかなり濡れて風邪引いたそう。そして熱が出たことで完全に二人ともダウンしたそう・・・

「僕も風邪引いたけど二人ほど熱は高くないよ・・・ハーーークション!」

「そ、そうか・・・わかるいが、3人分のノートを書いてくれ・・・ブエークション!!」

「あれ?でもよく考えたら真理亜さんとかに頼んだらいいのに何で僕?」

「ああ、真理亜は俺がダウンしたと言うことでお見舞いもかねて一日看病することになったから行けない・・・。すでに真理亜は学校に連絡したそうだ」

「了解。とりあえず僕も風邪引いているから、途中早退もあり得ると思うのでそうなったら姫路と島田辺りに頼むかもしれないけどいいかな?」

【おう。すまねえな・・・後、のび太】

電話を切ろうとしていたら、ジャイアンが急に真面目なトーンになった。その真面目なトーンに僕も真面目に聞くことにした

「なに? ジャイアン」

「・・・いや、なんでもない。それより、お前今日の占い見たのか? ○チャネルのやつ」

「あ、うん。みたよ」

【お前はたしか、獅子座だったよな・・・。占い通りに死ぬなよ? 死んだらお前のお墓に俺の歌を聞かせてやるわ】

「ジャイアンまで占いでそういうの!?! (死んでもジャイアンの歌を聞くのも) いやだよ!?!」

【まあ占いなんて所詮占いだ。占いだろうけど・・・ゲツ!? ま、真理亜!?!】

【体調悪いのに歌を歌うとは何事ですか!?!】

どうやら真理亜さんが丁度ジャイアンの部屋にでも入ったのか歌を歌うときいて怒っているみたいだ。そんなジャイアンは物凄く焦った声になっているのは電話越しでもわかる

【つちよ、違う違う!】

【いい機会です!! この間の無茶したこともたつぷりお話しさせていただきます!】

【つちよ! のび太助けー】

ープツツン・・・ツー・・・ツー・・・

「・・・薬を飲んで学校いこうかな」

僕はジャイアンの助けなんか聞いてない! うん! なんも聞かなかったことにして、僕は学校のいく用意を進めた。このとき僕は激しく後悔することをまだその時は知らなかった・・・

「もう少しで手に入る……。フフフ……。精々、残りの時間を楽しむことを進めよう……。フハハハハハ!!」

そんな声があるのはまだ誰も知らなかった……。・

朝の不幸 I

結局、あのあと出る時間になったので、薬を飲むの家では断念して、学校についてからにしようと思った

「ハークション!!!..うう...風邪が辛いよ...。早く学校に行つて薬を飲まないよ...ぶえーくしょん!!」

くしゃみが止まらないし、喉も痛いし、いつもよりも体が重いな...早く薬を飲もうと思っていると美子さんからメールが届いた

From: 三上美子

件名: ごめんなさい

のび太君、おはよう。メールでの連絡で申し訳ないのだけど、今日は先いつといてくれない? お昼にまた会いましょう♪

追伸

ドラえもんさんの体調は大丈夫??

あー、今日は一緒に登校できないのか...はあ、占いでもついてないし、今日は一緒に登校できないなんて...本当に凶日になるのかも...

「とりあえず、美子さんに返信しないと...ハークション!! えーと...とりあえず、ドラえもんは未来で腹痛の治療するため一回帰っています...と送信」

送信すると共に僕は22世紀に急いで戻った親友を思い出した。あいつきちんと治療受けていたらしいけど...

「まあ、ドラえもんなら大丈夫か...ハークション!!」

そんなくしゃみ共に風が吹き始めた...。なんか今日は何だか雲行きが怪しいな...

まあとりあえずはいつも通りに学校行って

ゆっくりとすごそう

「危ない!!」

「へ?...」 「ガジャーーン」...

僕は誰かに呼び止められて、歩くのやめると目の前に花が積んでい

た花瓶が落ちてきたのだ。そんな僕は目の前の光景に愕然と固まっていたら、危ないと声かけてきた人がこちらに来た

「大丈夫ですか!？」

「……あ、はい……」

「本当にすいません!!こちらの不手際で落としてしまったのはすいません!!」

落とした人は必死に謝っていたが僕は何とかなだめることに成功した……。……占い当たりそうで怖いな……

ドラえもん side

僕はあまりの腹痛に耐えきれずに22世紀に急いで帰ると、セワシ君とドラミが出迎えてくれた

「ただいま……せ、セワシ君……」

「ドラえもん!!きちんと言われた通りに腹痛専門医の方に連絡したよ!」

「お兄ちゃん!すぐにそこで横になってね?!」

僕が帰ってくるなりに、セワシ君とドラミが忙しなく僕をいそいそと運んでくれた。ありがたい……流石にもう歩くのしんどかったから……

「連絡もらったときビックリしたよ!いったい何があったの!?!またどら焼き食べ過ぎてそうなったの!?!」

「……ジャイアンと同等の料理を食べたといったらわかる……?」

「……納得したわ……」

「納得するの!?!」

一度食べたらわかるよ……。あんな独特な味が歩かにもあると思わなかったし……世界は広いな……

「と、とにかく早く病院にいきましょう!!」

ドラミがこの話を逸らすべく、急いでロボット病院?!腹痛専門医?!の方に送ってくれた。のび太君大丈夫なのかな……ぐっ!?!また……

は、腹が……

「は、早く治療してほしい……」

そんな願いと共に僕は急いで病院に搬送された……。
「どら焼き食べたいな……。あ、だめだ。また腹痛くなってきた：
はぐろう!?!」

ごめんのび太君……。今日は帰れそうにないいい!!

朝の平穏な？日

僕は学校につくなり、Fクラスで荷物をおいて薬を飲もうとすると後ろから珍しく朝早くに声かけてきた人物がいた

「のび太おはよう！」

「明久、おはよう。珍しく朝早く登校なんだね」

「うん。まさか、朝早くに出会ったのがのび太なんて・・・早起きは三文の徳？」

「なんか漢字が間違えてる気がするけどあえて突っ込まないでおくね？でも何でこんなに朝早いのか？」

「今日は先生の手伝いと言えばわかる？」

「・・・納得したよ」

明久の言葉に僕は納得した。なぜなら明久は観察処分だからたまにこうして教師のお手伝いするときがある

「？のび太、その薬はなに？」

「あ、うん。風邪引いてね・・・家で薬を飲もうと思ったけど、時間がなかったから学校で飲むことにしたのさ」

「のび太が風邪？なんでまた・・・」

「実はー」

僕は昨日の事の顛末とドラえもんが現在未来で治療を受けている事をすべて話すと明久は真っ青になっていた

「そ、それは災難だよね・・・しかも、姫路さんと霧島さんの料理・・・さらに味付けは美波・・・のび太は何でそんなに平気なの？」

「・・・耐性というよりも・・・ドラえもんが僕の代わりにたくさん食べってしまったので僕は今ここにいるの」

「・・・あ、そういえばのび太はジャイアンから何も聞いてない？」

「歌の計画してるけどなんか真理亜さんに怒られたみたい。体調が悪いのになんかそんなことを考えたから怒られたのかな？」

「・・・(真理亜さん！ナイス!!)」

ここにいないジャイアンの婚約者の真理亜さんに心のなかで感謝

しきれない。とりあえず薬を飲もうと決めて明久にそういおうと思
うと明久はもういなかっただ

「いつの間に・・・?とりあえず薬を飲むまえに中に入っていた手紙を
見よう」と

僕は未来から来た薬を飲もうと内容を見ていた。えーと①二時間
後に効果が現れます。②一日効果もちます?③副作用はない

「・・・・・・・・まあいいや。飲もう」

ーゴツクン

その後、僕は体かいつもよりも軽く感じたので、Fクラスに向かう
と何故か裸にされていた雄二がいた・・・

「つて、何で下半身裸?!いや、パンツ一丁だからまだセーフ!」

「ああ・・・のび太か・・・よう・・・」

「お、おはよう・・・。な、なんで下半身だけなの?」

「フツ・・・この間の冒険で翔子に誤解されてな・・・その罰として今
この格好だ・・・」

「・・・・・・・・とりあえず、ジャージとかきたら?」

「・・・・・・・・それも没収された。あいつは俺に何を求めてその格好にさせ
る・・・・・・・・!!」

悲しみと怒りが漂った雰囲気を纏っている彼を見たら何とも言え
ない・・・・・・・・。つてか本当に雄二は霧島さんにこう言いながらも何だか
んだで後で気にかけてたりするときもあるよね・・・

「まあまあ、霧島さんなら訳を話したらきちんと返してくれるよ」

「いや、それはない。あいつは一度決めたら中々変えない。つまり今
日一日はあいつからズボンが帰ってこないのは確実だ」

「・・・・・・・・それはご愁傷さま・・・・・・・・。「明久くん、のび太君、坂本君お
はようございます」この声は・・・おはよう、姫路さんと美波!」

「おはようアキ、坂本、のび太」

声かけてきた方に振り向くとこのFクラスでの数少ない女性の二
人で、現在進行性の明久の恋を仕留めるために色々アプローチしてい

るが中々報われていない二人・・・

「おう。おはよう・・・」

「はれ？坂本くんスポンはどうしたのですか？」

「あれ言われてみればはいてないわね？ひよってして歩いていてスポンが破れたの？」

「ふっ・・・そっちならまだどれだけよかったか・・・」

「・・・あははは・・・」

雄二の悲しみに何とも言えない顔になっていたのをみた二人は苦笑いだった。まあ、あんなに悲哀漂わされたら何を言葉かけてあげたらいいいのかわからないよね・・・

「お主達は相変わらず騒がしいのう」

「・・・そういう日常は幸せ。そして、雄二のスポンに関しては・・・諦めろ・・・」

「何を諦めろというんだムツツリーニ!？」

「やあ、おはよう。秀吉とムツツリーニ」

「うむ。して、明久よ。お主大丈夫なのか？」

「え？なにが??」

秀吉の言葉に明久は???となっていた。何か明久は言われていることあるのだろうか？

「実を言うとな明久、先ほど鉄人が誰かを必死で探していたのじやがお主は鉄人に何かしてしまっただけかい？」

「いや、なにもしてないけど・・・?」

「ふむ・・・では何で鉄人はあんなに必死に誰かを探していたのじやろうか？」

「さあ???」

秀吉の言葉に僕ら全員が?だったがそんな疑問も考える間もなくチャイムがなり僕らはそれぞれの席に座ると、西村先生が疲れた顔でこちらにやって来た

「あー、諸君おはよう。朝のHRでの連絡は何件かあるからよく聞けよ。ひとつはここ最近風邪が流行っているから気を付けるように。もうひとつはーとあと、最後に本日の欠席者は骨川、氷華、剛田の

三人だ」

「？鉄人、スネ夫達は何で休みなのですか？」

「西村先生だ！・・・剛田と骨川は体調崩して今日はこれないということ。氷華もそれに近い感じで休みだからこのクラスでだれか代わりにノートとつてあげるように・・・吉井以外で」

「ひどい！！鉄人！あんた生徒に対して何て言葉を！？あんたの心は鉄でしか出来てないのか！！」

「なにげにひどい言葉をはいてるのはお前だ。吉井・・・とにかく今日もしつかりと勉強励むように！！いいな！」

西村先生は言い切ると共に教室を出ていった。なんか、今日は世話しなく忙しそうだなー

「っ・・・？」

今なんか痛みが走ったような気がするけど・・・気のせいかな・・・？

「さあ、皆さん今日はいきなり抜き打ちテストを行います。・・・またフラれたから八つ当たりじゃないので・・・」

「「何いいいい！？」」

数学の船越先生が入ると共にいきなりそれをいってきた

「そんなの聞いていないよ！？」

「うるさい！！私がそうと決めたらそうなの！じゃあ、確認テストはじめるね！！」

「「いやああああ！！！！」」

船越先生が生徒の意見を両断して、確認テストを行われた・・・明久とかが涙目になっていたことだけ伝えよう

小さな激震？

船越先生の授業：…もといいきなり確認テスト時間ははつきりいつて地獄だったと伝えておこう。そんな時間もありながらも、もう気がつけば3時間目に始まる前になっていた。だが、ある大きな異変がおき始めていたのはまだ誰も気づかなかった…

「……おい、のび太」

「ん、どうしたの？雄・ぐぼお!？」

「なんか知らんが…イライラする!!殴らせろ!!」

「つちよ?!い、いきなりどうしたのさ!?雄二!!」

突然暴れ始めた雄二に僕は戸惑いながらもなんとか攻撃を交わしていたが正直、いきなり攻撃するなんて戸惑うよ!

「雄二!?なにしてるの?!」

「すまん!とにかく今は黙って殴られてくれ!このイライラがとまらない!!止まらないから殴られる!!」

「くつ、明久とムツツリーニ!雄二を止めるの手伝って!!」

「了解……!」

「……(スツ)」

突然雄二がいきなりおそいかかってきた理由はわからないけど、恐らく霧島さんの関係でストレスたまっていたためそうなったのでは!?

「雄二、落ち着きなよ!!ってあぶな!!?」

「……異端者には死を……(バチバチ)!!」

「ツて、ムツツリーニ何してるの!?狙いは、のび太じゃなくなつて雄二の動きを止めるのが仕事でしょ!？」

「……明久、この間知らない女性と歩いていたのをみたから……まずは異端者を粛清する……!!」

「つちよつと待って!?そんなの言われても心当たりのないのだけど!!」
「……しばくれるな……!!」

ムツツリーニが明久に写真を見てると明久は顔を真っ青にしていた。正直、僕も気になるがいったいなんの写真なのだろう

「アキ・・・少しお話ししましょう？」

「明久くん・・・覚悟はいいですか？」

「・・・あの・・・弁明聞いてくれないのですか？」

「却下」

「聞いてくれない!?畜生!!逃げるが勝ち!!」

「諸君!我々FFF団は・・・」

「「哀に生きて哀に生きる・・・」」

「よって吉井明久はー」

「「我々の敵である!!」」

明久は全速力で教室を出ると共にムツツリーニとFFF団と姫路と島田が全速力で追いかけていった

「頼む!のび太!!お前を見るとイライラがとまらん!!殴らせろ!!」

「・・・うむ・・・なんなワシもだんだんとのび太に対して不愉快になってきたぞ・・・。すまぬ!のび太に殴りたい気持ちが出てきたのじゃ!」

「秀吉も!?ええい、なんかめんどくさいから逃げよう!!」

「逃がすか!!殴らないと気がすまん!!」

「何故かワシもお主を見ているとイライラがとまらん!!」

「なんでこうなるの!?・・・仕方ない・・・」

僕は覚悟を決めて、隠していた銃で秀吉と雄二をなんとか気絶させようと決めて構えようしたらー

「いたぞ!!野比のび太がここにいたぞ!!」

「え?」

僕は声きた方に振り向くと・・・

「ここにいたか・・・!!このイライラする気持ちをどうにかさせろ!!野比のび太!!」

「えええ!」

バッド等の武器を構えていた二年生の仲間達が大勢このFクラスに来ていた。よく見れば、Dクラスの代表やBクラスの代表の根本も見知った顔がたくさんいた

「つちよつとまって!何でみんなは僕にそんなに攻撃をしようとする

のさ!?!」

「このイライラな気持ちをお前にぶつけないと皆気がすまないのさ……」

「フッフフ、お前の独裁的な強さは今日でおしまいだ!!」

「覗きを邪魔された恨み……」

「「「今こそ貴様を撃ち取るときじやああ!野比のび太!!!」」」

「嘘お?!」

皆が一斉に飛びかかってきたのをみた僕は驚いた声をあげてとりあえずは逃げようと決めた

「(数は38人・逃げてても分が悪い!!なら……)撃ち抜くまで!!!」

ーパアン、パアン、パアン!!

「なに!?!ぐぼお!!」

「がぼお!!」

「ヒヤツハ!?!」

「な……なんて的確な……射撃……(バタンツ)!!」

「「「!?!」」」

「先に攻撃したのは君たちだから……やり返させてもらうよ!!」

僕が銃を発砲したのをみた攻撃したものは全員驚き固まっていた。

そんな彼らに僕は警告を出すと彼らは一瞬怯えたがすぐにきを取り直して叫んだ

「っ……!引くな!!相手は一人だ!撃ち取るぞー!!」

「「「「おお!!」」」」

「やっぱり殺るしかないのか……!!来るならこい!」

僕は飛びかかってきた学園の仲間に対して僕はし宣戦布告して武器を構えた

「「「「うおおおおお!!!」」」」

「撃ち抜いてやる!!てりやあああ!」

ー……数分後……

「「「「……」」」」

「はあはあ……」

僕に攻撃してきた彼らは地面にひれ伏していた・・・流石に今回は疲れた・・・。そう内心思っているとチャイムがなり、教室に入ってきたのはー

「キンコンカンコン♪着席しろー・・・なんだこの状況は・・・」

「西村先生・・・何故か彼らにいきなり攻撃されたので・・・正当防衛で仕返ししました・・・。その結果がこれです・・・」

「なるほどな・・・それとこの不愉快な気持ちは貴様が根源か・・・野比」

「え?（・・・これ西村先生も攻撃してくるパターン・・・?)」

僕が事の顛末を話したと同時に西村先生が何故か急に雰囲気が変わったので僕は冷や汗をかきながらまさかと思いつながら警戒していた。・・・さすがに先生相手となれば厳しいよね・・・

「はあ・・・ふん!!!（ムキムキ）」

「ムキムキになった!」

「野比・・・」

「は、はい!!」

「今すぐに学園長室にいけ・・・!!このイライラな気持ちをお前にぶつけたくはないからな・・・」

「は、はい!（学園長室に!?!・・・何か嫌な予感するな・・・）」

不思議に思いながらもとりあえず僕は西村先生の指示通りに学園長室に向かった・・・

『アキ!!女性と歩いていたことを説明しなさい!!』

『明久君!こたえてください!!』

『『『吉井明久死刑だああ!!』』』

『助けてのび太ああああ』

・・・ごめん明久助けられないよ・・・。こんな僕を許してね・・・
そんな悲鳴を聞いてから数分後に学園長室に着いた僕は・・・

ーコンコン

『誰だい?』

「二年Fクラスの野比のび太です。西村先生先生からの連絡をいただいたので訪れました。入って宜しいですか?」

『……入りな』

「失礼します」

僕は学園長の許可をもらい、学園長室に頭を下げてはいるといつになく深刻な顔の学園長が目の前にいた

「学園長、いったいどういったご用件でお呼びでしょうか？」

「……野比、これは今から大事な話だから他の人にこの話を情報を漏らしてはいけないよ……」

「……はい」

「……ふう……野比のび太……本日付でこの文月学園を退学処分とする……」

「……はい……?」

学園長が漏らした言葉に僕は……頭が真っ白になった……

面談と心当たり?

僕は学園長から突然の宣告に真っ白になり固まっていると学園長がため息をはくと共にこちらの方を見て・・・

「・・・安心しな。退学は冗談さ」

「・・・ハッ!?冗談ですか!」

「当たり前さ。流星にたち悪い冗談だったのは謝るけど、あんたが余りにも怖い顔ではいてきたからねえ・・・」

「いやいや、学園長!そんなのでいきなり言われましたら全員真っ白になりますよ!!」

「まあ落ち着きな・・・そこに椅子があるから座りな」

とりあえず退学に関しては冗談でよかったよ・・・でも、なんで学園長がいきなりそんなことを言ったのだろうか?!

「さて、あんたを呼んだ理由だが二つある。一つはあんたが何故か他の生徒や先生にやたらと殺意を持っていること。・・・あんた何したんだい?」

「うーん・・・生徒には返り討ちでやったことには心当たりはありませんけど、先生に恨まれる理由がわからないです」

「そうかい。それともう一つ・・・むしろこちらが本題」

「(学園長の雰囲気が変わった? なにか大事な話かな)」

学園長が最初の質問の答えに怪訝に考えていながらも、なにか気になる点があるのか黙っていた。そして、考えがまとまったのかため息をはいてから本題を切り出した

「・・・野比、ここは発信器も何もないから思いきってあんたの気になることを話しな。それと安心してほしいのはアタシは他の連中見たいにいきなりイライラしないからね」

「・・・なんでイライラしないのですか?」

「慣れているからねえ・・・主に吉井のせいだ・・・ね」

「・・・心中察します」

「(明久・・・君はいつた何をしたら学園長にここまで慣れさせたのさ?) わかりました。僕が気になって考えられることですが・・・」

僕は自分が今気になることと考えられることを学園長に話していると学園長はそれを真剣に聞き終えたら。そして、学園長は手を目の前に組んで真剣な顔で話していた

「ふむ。こつちも話しておかないといけないね・・・」

「といたしますと・・・?」

「・・・以前の盗まれた話を覚えてるかい?」

「・・・忘れるわけありませんよ・・・」

そう・・・忘れるわけがない。再び冒険したこととあいつとの再会、そしてかつての強敵が偽物とはいえ堪えたりした戦いだつたのも・・・その件であんたに聞きたいことがある。ドラえもん・・・だつたって?あの猫型は未来からきたといつたね?」

「は、はい」

「ふむ・・・野比。あんたが先程気になっていた話と私がジョークとはいえいきなりそれをいつたのは訳がある」

訳がある・・・?

そんな疑問に学園長はパソコンを開いて僕に見せてきた。そのパソコンをみた僕は一瞬驚いて学園長を思わず二度見した

「・・・」

「此方としては生徒がしたとは疑いたくはない・・・しかし、これは明らかに映像を写っているのは紛れもなく・・・文月学園の人間」

「・・・なるほどです。・・・で、学園長としては何を考えているのです?」

「この映像を恐らく他の先生・生徒が何らかの形で見たらあんたは厳しい立場になり辞めざる終えなくなってしまう。それはアタシとしては避けたい。これを見な」

学園長が見せてきた紙に僕はしっかりと目を通すと学園長が真剣な顔になっていた

「これは私が独断として下した処分として受け止めな。いいかい?」

「はい・・・。この件はくれぐれも」

「わかつてるさね。ただ・・・あのバカなら納得しないで聞きに来そうだがらそのときはどうしたらいいかねえ?」

「・・・いつも通り内密でお願いします。もしそのときに何かあれば彼は動いてしまいますが・・・ね」

「まああなたに関してはこちらに任せな。処分はその通りだから」
「・・・失礼しました」

僕は頭を下げて学園長室に出ていった。・・・この件・・・美子さんに耳入れられたら怖いな・・・

「本当・・・占いはめんどくさいな・・・」

僕は荷物をもって早退するべく、Fクラスに戻ったらFクラスの皆は何故かいなかった

「・・・仕方がない。手書きだけおいてかえるか」

荷物を背負うと共に僕は家へ帰ることにしたのだ。忘れ物もないように・・・授業のノートは姫路と島田に頼むように僕は書き置いているからもう大丈夫だろ

この時・・・僕はもつと冷静に考えて対応すればよかったと大きく後悔するのはまた別の話・・・

面談後のクラスは

明久 side

僕はズタボロになった体に鞭をうちながら、教室に戻っていった。うう……正直ひどい目に遭った……

「先生戻りました……」

「遅い！ いったい何をしていた!!」

「げっ!? て、鉄人……」

「げっ!? とはなんだ……? げっ!? とは……」

あ……ヤバい……つい本音が出てしまった……ってあれ?

ここで僕はある違和感に気づいて鉄人に質問した

「鉄人、のび太は知りませんか?」

「西村先生だ!!……野比なら早退した」

「え?! 一体何時の間に!?!」

「ついさつき帰ったみたいだぞ。どうやら俺がここに来る前に帰ったそうさ。……全く、お前たちがもう少しおとなしくしてくれればあいつも助かるのだがな……」

「ほへ? 今なんて言いました?」

「なんでもない。それより、島田と姫路もいないがどうした?」

「あれ? そういわれてみたら……可笑しいな……」

FFF団に襲われていて、なんとか追撃を交わせたがそのあとに姫路さんたちにお仕置きされた。そのあと……あれ? 姫路さんたちと一体いつの間に?!

「明久くんどうしました?」

「アキったらなにキョロキョロしてるの?」

「あ、姫路さんと美波。二人どこにいつていたの?」

「ああ、トイレいつていたの。それより、アキ……坂本たちは?」

「あ、本当ですね。坂本君は?」

「ああ坂本達なら、そこで寝ている」

鉄人に指差した場所を言われて見ると……

「「「「……」」」」」

「「屍のようになってる!?!」」

「「こいつらはどうやら野比にお仕置きされたみたいだぞ。全く・・・鍛え足りなさすぎだ!!せつかくだから他のクラスもいることだし・・・補習を行う!」」

「「うそ?!」」

「大マジだ・・・さあ、始めるぞ!!」

「はい、お願いします!」

「「ひいいい!?!ホ、補習は嫌だああ!!」」

その後、姫路さんと美波と秀吉以外は屍だったのは言うまでもない・・・のび太・・・ヘルプ・・・

のび太 side

僕は学園長室から出て家に帰ってから1人になって、あることを調べていた。それは前から気になっていたことがあったので、ドラえもん寝床の枕の下にあるスペアポケットを借りて調べ事をしていた・・・出てこないかー

僕はある調べ事をしていた結果、なにも出てこなかったことに落胆していた。絶対に出ると思ったのだけだな・・・何となくで時計を見ると、もう午後19時だった

「つてもう、19時?!」

僕は時計を見ると共に大慌てになった。そして、携帯も慌ててみると明久から連絡が何件か届いていたので僕は返信していた

「えーと何々?」【暫くは鉄人スペシャル補習授業をすることが決まったので助けてください】・・・鉄人スペシャル補習って何・・・返信」

ーピンポン

こんな時間に誰だろう??そう思いながらドアを開けるとー

「こんばんはのび太君。体調はどう?」

「・・・美子さん」

僕の恋人の美子さんが心配そうな顔で僕の家に来た。こんな時間

にどうしたのだろうか？

「のび太君、体調はどう？」

「問題ないよ。こんな時間にどうしたの？」

「その・・・裏山に案内してほしいのだけどいいかな？」

裏山に??なんでこんな時間になのかそんな疑問が出て仕方がないが、とりあえず頼まれた以上は・・・

「うん！いいよ!!」

僕は喜んで了解した。この時僕はもっと考えておけばよかったと後に思っている・・・

一方ドラえもんは・・・

「アガガガガガ!!」も、もう少しで出ででるう」

「お兄ちゃん頑張っつて!!」

「ドラえもん!!あともう少しで治療終わるから頑張っつて!!」

未来で腹痛原因となった食べ物を必死に治療されていたのはここだけの話だ・・・

夜の・・

僕は夜遅くに美子さんと裏山に歩いていた。そういえばなんで夜遅くに裏山を案内頼むのだろう??

「ねえ、のび太君。なんで裏山の案内頼むとか思ってる?」

「え?! (心読まれた!?)」

「クスクス、今心読まれたと思っていたでしょ? 私のはのび太君の事なら分かってるつもりよ」

「・・・やっぱり美子さんに叶わないや」

内心美子さんには隠し事出来ないと思つた。そして、僕は何故、裏山に案内を頼んだのか気になり美子さんに改めて話しかけた

「うん、なんで裏山の案内を頼んだの?」

「・・・単純に貴方がいまどうしてるのか気になったの。学校に早退したのは少し気になって・・・ね」

「(ああ、そういえば早退すると言う連絡していなかった・・・)ごめん。色々と忘れていたよ」

「なんで早退したの?」

「少し体がだるかったから帰つたの。連絡するの忘れてごめんね?」

連絡きちんと返信しなかつた事への謝罪と自身の体調をきくと心配そうな顔になっていた

「そう・・・もう大丈夫なの?」

「うん。まだ完全とは言わないけど、大分いい状態になったよ。・・・ゴホゴホッ!」

「まだ咳は出ているけども思っているより良好ね・・・よかった」

僕の体を伝えると美子さんは安心したように顔を下に向けていた。心配をかけてしまったのは申し訳ない・・・早く治そうと決意したと共に僕は歩くのをやめた

「!」

「のび太君?」

「美子さん、後ろに下がって・・・」

「へ?」

僕の言葉に美子さんは驚いた声をあげていた。そんな僕は警戒心を緩めず最大限に高めた

「(何!?!このいままでにない圧倒的なプレッシャーは!?!・・・やばすぎる) 出てこい・・・」

「ほう・・・私の気配をここまで気づいたのは経験または本能か?」

「つつ!!・・・こんな夜中に散歩くにしては殺意が尋常にはないのでね・・・美子さん。下がって」

「・・・ええ」

僕は美子さんに被害いかなないように警戒心を全開むき出しにして相手をにらんだ。以前、フードをして戦ったあの別世界の明久とは別格だ・・・

「・・・お前はもしかって・・・以前の召喚システムを盗んだ本人か?」

「・・・ほう?何故そう思う」

「以前、僕はあることを聞いた。『確かに俺はお前達の時代に行けたのはその者らの協力があつたから盗めた』ってね。これはまるで他に協力者がいる・・・いや、心を弱っていた彼を騙っていた奴がいるとわかった」

「だが証拠がない以上、それが私ではない可能性はあるだろ?そもそも、私とその男にそれをいった可能性はあるのか?」

「・・・フフ」

フード被っていた男が嘲笑う声で僕に指摘してきたが、僕も同じように彼を嘲笑った。それに気にくわなかったのか噛みついてきた

「何がおかしい?」

「証拠ならある。たつた今、君が男と言ったじゃないか?・・・いつ僕が男と言った?」

「・・・ククク・・・」

「?」

「ククククツ・・・ハハハハハハ!これは失礼。まさか自ら暴露してしまふとは・・・どうやら私は自分が思っているよりも言葉が出てしまったか」

「・・・」

「ご名答と言えばご名答かな。だが、君ごときが私の事を気づくとはいやはや・・・驚いた」

「それともう一つ。これは秘密裏で気づいたのだが・・・お前・・・時空犯罪者だな。それも未来から来た」

「・・・調子乗るなよ。若造が・・・」

その瞬間、フード被っていた男がとんでもない殺気を出していた。こいつ本当に時空犯罪者か!?

「我々は決して許さない・・・。お前と言う存在を!!」

「・・・え?」

「せいぜい貴様が苦しむ姿を見せてくれ・・・起動」

！回りに結界が出たと言うことはやはり、あいつは別世界の明久を騙したやつと言うことか・・・ならば・・・

「別世界の僕の親友を騙した君達は・・・」

「我が身にまよえ・・・サモン」

「敵だ。サモン」

僕は宣戦布告と共にあの別世界以来の自身の体を召喚した。対する相手はフード姿は変わらず、武器もなにかはわからないが・・・

「君のふざけた野望・・・この銃共に撃ち抜かせてもらおう」

「・・・哀れな・・・お前はすでにこの勝負の結末の未来は終わっているのに・・・」

「・・・何?」

僕はそのフード男の意味不明な言葉に??と思っているところ

「っが!!」

後ろから攻撃された衝撃を感じたので振り向くと・・・

「・・・」

「よ・・・美子さん・・・?」

僕の背後に攻撃したのは・・・僕の大切な恋人の美子さんだった。いったい何故・・・!?

一方22世紀にて・・・

ドラえもん side

皆さんこんにちはー。現在僕はどうしているかと言うとー

「明日まで入院・・・のび太君大丈夫かなー」

「お兄ちゃんつたらのび太さんなら大丈夫よ。今頃勉強終えて昼寝しているのじゃないかな？」

「あははは、確かにのび太君なら今頃昼寝しているか美子ちゃんといちやいちやしているんじゃないかな？」

「あーのび太さんの恋人ききたい!!」

「いいよ。例えばねー」

ドラミと仲良くのび太君の話しています。のび太君今頃イチャイチャしてるのじゃないかなー

疑問と望まぬ戦い

僕は背中がものすごく痛むのを感じるの共に攻撃した人に対して痛みをこらえながら疑問を漏らした

「美子さん……一体なんで……?」

「……」

「ぐっ……美子さん」

「うるさいわね……」

「……え……?」

僕は美子さんの返事に思わず戸惑って聞き返した。今……美子さんは何て言った??そんな戸惑ってる僕に美子さんは笑っていた

「クスッ……戸惑っているようね。私は正真正銘三上美子よ……ただし、あなたの敵よ」

「えっ……!?!」

「滑稽ね。味方と信じていた私に攻撃されたあなたは戸惑うわね。私がこの手で貴方を倒す……チンカラホイ」

「うわっ!」

美子さんが手を下ろすと共に僕は合わせて回避行動を取ると先程僕がいた場所は軽いクレーターみたいになっていた

「外した……次は当てるわ」

「美子さん……くっ!!」

迫り来る攻撃に僕は必死に回避行動を取りながら、フードの男の動きを警戒していた。正直まだ体が完治していないし、こういう行動とるのは正直ギリギリだ

それに……

「はああああ!」

「っ接近で攻撃?!(ぱしっ)」

僕は美子さんが全速力でこちらに来たので片手で攻撃を受け止めた。正直戦いにくい……だけど彼女は迷いもなく僕を攻撃しているし、どうしたものか……

「クスッ。やっぱり引っ掛かったわね……」

「え?」

「食らいなさい!のび太君!」

戸惑う僕に美子さんは両手を前にすると、赤いものがたくさん漂い、そしてそのまま両手に収束していき・・・

「さよなら。のび太君」

「(これは不味い!)くっ、回避は間に合わない!」

「飲みこまれなさい!」[ジャンボッド・ビーム]!!

その瞬間、僕の視界は真っ白に包まれ・・・辺りに爆発が起きた

ーーーーーゴオオオオン・・・

辺りが爆発とんでいる中、フードの男は歓喜に震えるように小さく笑っていた

「クククク・・・愛する人に手をかけられる気分はどうだ・・・?苦し
いだろう?辛いだろう!?絶望しなさい!」

「・・・」

「ふっふふ・・・ん?」

そんな声を聞くなか僕は・・・木を支えにして、何とか立っていた。そして、その笑っていたフードの男に睨みながら僕は美子さんの攻撃を警戒していた

「お前にもう一度聞く・・・美子さんに何した・・・!」

「何って・・・?答えは簡単だ。彼女を操っているのだから」

「何!」

「君の疑問を答えるなら、そうだな・・・私は君の大切な人の催眠したのさ」

なっ、いつの間に!?!そんな素振りもされるのも見ていないよ!

「いつの間に・・・彼女にそれをした!」

「簡単なことだ。そもそも君は気づかなかったのか?朝の連絡に不審に思わなかったのも、今日の急に友人に攻撃されたのも・・・そして、いま彼女の瞳はどうなっているかな?」

「!」

「全く・・・彼女は健気だったよ。最後まで私の催眠に必死に抗おうとする意志は強かったが・・・所詮私には勝てませんよ」

「まさかお前は・・・」

「ええ・・・最高でしたよ。彼女の心に野比のび太と言う存在を敵と思わせる瞬間にはほんとうによかったですよ」

「・・・遺言はそれだけか・・・」

「ん？」

僕はフードの男に確認の意味も込めて言うത്そいつは疑問そうな声を出していた

「遺言はそれだけかと聞いてるのさ・・・卑怯なフード！」

「ふっ・・・美子。その男に絶望を味わしてやるのとそんな生意気な口を叩き込めなさい」

「はい」

フード男の指示を聞いた僕はさらに怒りが貯まって叫ぶとフード男は愉快そうにこちらを見ていた

「なんだ？君は女の名前に何で怒るのかな？」

「お前は彼女を操っているだけの卑怯者だ。何より・・・人の大切な人を出した報い・・・覚悟しとくんだ！ぐあっ・・・」

「うるさいわね。フッフ・・・その右腕では銃も満足そうに持てないわね」

「（横からの攻撃も交わせなかったか・・・）美子さん・・・必ず君を助ける」

僕はやられた右腕を押さええながら、操られている美子さんに小さく誓った。彼女はそんな子ではないの僕が知っている

だからー

「優しい彼女を必ず僕が助けてみせる！君は僕が惚れた最高の優しい女性なのだから!!」

「そいつは難しいな。何にせよこの女は今はこちらの仲間だ。君ごときが助けられると思えないがね」

「・・・こんなときに何をいつてるの？貴方は・・・呆れた」

「答える。美子さんにいつ催眠かけた・・・？」

僕は美子さんの攻撃を警戒しながらフードの男にいつ、どのタイミングで仕掛けたのか気になり聞くと彼は嘲笑いながら答えてくれた

「美子、お前が答えてやりな。私の人間になり下がったのをな」

「はい」

感情や抑揚のない声で僕に向けて武器を構えながら美子さんは話始めた

??回想??

美子 side

私はのび太君とドラえもんさんが帰ったあとに、家で明日の学校の用意をしていた時だった。

ーピンポーン

『のび太君かしら?』

私は突然なったインタホーンに疑問に思いながらもとりあえず出迎えようと外に出た瞬間……

『っ!?!』

男にいきなり催眠攻撃された。不意打ちも当然のレベルで交わせるはずもなく、私は男の目を見て囁かれた

『野比のび太は敵……』

『そうだ。野比のび太はお前の敵だ。そして、お前は野比のび太の偽りの恋人だ』

『偽りの……違う……!のび太君は……』

『だが、野比のび太はお前の敵だ。繰り返す、のび太は敵だ。そしてお前達は偽りの恋人関係だ』

『あっあっ……』

『(目に光が落ちてきた。あともう一息)あなたの大切なものを奪ったのは野比のび太。……彼を倒せば取り戻せる。お前の失ったものがない』

私は必死に抵抗していたが、男の力、言葉に悪魔の囁きのように逃れられず、そしてー

『聞こう。野比のび太はお前にとってなんだ?』

『・・・敵です』

『なら明日は私と共にのび太を倒すために協力しろ。・・・美子』
『はい』

この瞬間、私はこの方の味方となりのび太君を倒すために敵になつた

のび太 side

美子さんから操られた経緯を聞いた僕は愕然としながら聞いていた。初めから美子さんは奴に狙われて操られたのか・・・!?

「私は貴方との関係は偽りだった・・・よって・・・貴方をここで倒します」

「フフフ、いいぞ。野比のび太は君を脅かす最悪の敵なんだ・・・始末しな」

「・・・」

僕は奴や美子さんの言葉に顔を下に背けて聞いていた。美子さん・・・君は・・・

「戦意喪失したか・・・始末してあげろ」

「はい。・・・え？消えた・・・？」

「何!?!」

美子さんの言葉にフードの男はそれを聞いて驚いていた。そんな、驚きの声と共に僕は・・・

「・・・どこを見ている。フード男」

「?がっ!!!」

フード男を思い切り左で殴り飛ばすと、男は少し離れた木の方に直撃した

「!」

美子さんは慌てて僕の方に急いで振り向くと武器を構えていた。僕はそんな彼女に目をそらさずに見ていた

「・・・死ぬ覚悟はできたんだ」

「出来てないよ。いまにも怖くって倒れそうだよ」

「なら何で私の前に出てきたのかしら？」

「美子さんは優しい子。これは君にとつても悪い夢だから・・・助けに来た」

僕はゆっくりと歩くと美子さんは怪訝な顔でこちらを見ていた。僕は懐にあるものを彼女に気づかれずに構えていた

「美子さん・・・ごめんね・・・」

「え？・・・(パン)・・・え・・・」

「・・・多少乱暴な方法になるけど・・・ゆっくり寝てね」

「の・・・び太・・・君(フラツ)」

美子さんは僕が発砲したのにまともに直撃した一瞬、目の光がとり戻ってふらつきながら僕の方にゆっくりと倒れてきた。そんな僕は・・・

「ごめんね。美子さん」

乱暴に倒した僕は美子さんに小さく謝罪しながら僕の体の中に収めた

次はフード男を倒す・・・！だから君は僕が守るから・・・今度
はいい夢を見てね・・・

別れと意地

僕は痛めている右腕で美子さんを抱き締めながら目の前のフードの男を睨んでいた。美子さんはすやすやと寝ていたのでとりあえず一安心だけど・・・目の前の敵だけはそうは行かない・・・

「・・・お前だけは許さない。僕の友を・・・恋人にもこのような目を逢わしたお前は許さない」

「フッフ、だがお前は今の状態は手負いの上・・・私の様々な策略により本来の状態より厳しいのではないかね？」

「・・・」

「そもそもたまたまあんないタイミングで夕立降るのも疑問に思わなかったかね？」

「あれも君・・・いや、お前の策略だったわけか」

「そう。そして・・・たった今貴方は自身の大切な人に手をかけた。つまり、貴方は彼女に酷い目をあわしたのだなら貴方も悪いがわだろ」

フードの男が僕に挑発しかけるような言葉を吐いていた。落ち着け・・・キレたら奴の思う壺だ!!

「ふー・・・確かに手をかけたが残念ながら、お前の思う通りになっていない。彼女は只今夢の中さ」

「・・・なに？だが、貴様はいまその女に銃を撃ったではないか？」

僕の言葉にフードの男は先程とは違い戸惑った声で僕に質問してきた

「おあいにく様。僕が使ったのは・・・【夢ドリーム銃】さ。・・・お前にはこれは使わないけどね」

「ほう、ならどうするんだ？ん？」

「とりあえずは・・・」

「む？」

「一時退散させてもらおう!!」【こけおどし爆弾】

僕はフードの男に向けて爆弾をほり投げると、辺りに煙が飛びまくり、フードの男が慌ててマントで顔をカバーしていた。その隙に僕は美子さんを抱え込みどこでもドアで退出した

「ぬう！……消えただと……まあいい。奴の性格を考えればここで待つのが吉だな……」

フード男の戸惑いの声が誰もいない森に声が響いた……

——美子の部屋——

やつがこちらの気配気づく前に咄嗟にどこでもドアを出して美子さんの部屋へと飛んだ。美子さんは僕の腕で安らかに安心したように寝ていた。そんな僕は美子さんをベッドの方に運び込んで寝転ばせた

「美子さんをベッドに横にさせて……布団を被せて……よし！」

「スツ……スツ……のび太君……」

「……美子さん」

僕は横になっている美子さんに優しく頭を撫でながら昔の事を思い出した

『分かったわ。貴方の言葉は信用してみるわ。少なくともよく考えたらあの根本が隠してくれると思えないもの』

『のび太君……今すぐに寝なさい！』

『はい／＼／私、三上美子は……野比のび太さんと付き合います／＼』

本当に……君にはたくさんの思い出や幸せをくれた……こんなダメダメな彼氏の僕を、好きになってくれてありがとう

『I and Yoshiko Mikami, the Nobie extension thickness, oh, eternal love is promised. I, d like together married to you and build a happy home. (私、三上美子は野比のび太さんと永遠の愛を誓います。そして、あなたと結婚して幸せな家庭を築きたら)』

『When I, d like you, I, d like just not to associate and also t

o associate now by the marriage
e premise. (貴方が良ければ、付き合うだけじゃなく結婚
前提でこれからも付き合いたい)』

美子さん・・・ごめんね。約束したのに・・・多分、僕は君との大
切な約束を守れないと思う

・・・だから・・・

「・・・美子さん・・・っ」

僕は寝ている美子さんに優しく口づけをした。そんな彼女は目
が覚めることなく、幸せそうに寝ていた

「本当に・・・ありがとう・・・達者でね・・・」

僕は寝ている美子さんを起こさないように透明マントを被り、美子
さんの家を出た。そして、外に出た僕は明久が出歩いているの見たので
呼び止めた

「明久??。こんな時間に何してるの?」

「あ、のび太!!早退したと聞いていたけど大丈夫なの?」

「あー大丈夫大丈夫!・・・まだしばらくは復帰は厳しいかもね」

「へ?」

「あ、明久。二つお願いあるのだけど・・・いいかな?」

僕はいまここにいる明久には何らかの縁だとおもい、二つお願いし
た

「?まさか!僕の命を奪うつもりか!」

「・・・僕をなんだと思ってるのさ?」

「・・・バカで裏の独裁者のび太」

「今すぐに撃ち抜こうか、明久?」

まさか明久にそんなことを思われていたとは泣きたいよ・・・。っ
てこんなことしてる場合じゃない!!

「明久、1つは・・・いまから渡す物があるから目を閉じてね?絶対に
捨てないですよ!」

「なんで?」

「・・・それは君にとっても希望になるものだから」

「へ?」

「明久目を閉じて!!」

「??よくわからないけどわかった」

明久が目を閉じたのを確認した僕は懐からあるものを明久に渡そうとする前にもうひとつの頼みをした

「それともうひとつ・・・あとは頼んだよ」

「へ? (ギョツ)」

さようなら・・・明久。僕は明久にあるものを渡すとすぐに透明マントで気配消した。そんな明久は目を開けるとー

「あれ・・・のび太がいつの間にかいない?!?!?」

僕がいないことにテンパっていた。・・・もう君にしか頼めない・・・頼むね明久。僕は急いで奴のいる裏山に駆けつけると奴はその場でずつと待ち構えていた

「・・・別れの挨拶でもできたのか?」

「・・・君に答える義務はない。それと僕があつても美子さんはお前の特徴をつかんでいるからお前が捕まるのは時間の問題だ」

「時間の問題・・・か。無知はあわれだな」

「何?」

「あの女に催眠仕掛けたとき私はもうひとつ仕掛けた。私の関する記憶の抹消。つまり、今回のこの事すべては彼女には記憶としてはない」

「!」

「よって、あの女が私に催眠でかけられたこともお前を攻撃したことも記憶にはないが、私の足跡は完全に消えたと言うことだ」

美子さんに今回の記憶は残らないと言った・・・?

「へえ・・・そいつは聞いて安心したよ」

「何?」

「なら遠慮なく・・・お前を全力で打ち倒せる!!」

「・・・愚かな・・・力の差をまだ気づかないとは・・・嘆きたくなる」

「一時的にとけてしまったけど改めて・・・サモン!!それといいこと教えてあげる」

「?」

僕の右腕はまだ痛いし体も痛い・・・けれど、そんなのはどうだっていい・・・

「お前はたしかにとんでもなく強いし、それに僕が勝てる見込みは確かに低い・・・が」

「が・・・なんだ？」

「勝つ希望つてのは諦めなかったら続くものさ。・・・お前はここで何としてでも止めて見せる・・・例えこの命に変えても!!」

はつきり言つて勝てるかと言えばいままでにないくらいこいつはとんでもないけど・・・こいつだけは・・・僕が止める!!!

「はあああ!!」

ーードゴオオオオン・・・

この日の夜・・・のび太の街では地震のような揺れが起きた・・・

そして・・・誰も知らないところで戦いの決着がついた事を明久達はまだ知らない・・・

翌朝と明久の朝

明久 side

姉さんは今学期の成績がまた悪くなれば同居すると言う条件のもと、僕は再び一人暮らしに満足に暮らしていた。そしていつも通りに・・・

「・・・はあ!!!」

ー チョキン!!

僕はカップヌードルの麺を1/6に切った。これで僕の朝食は完成だ

「うんーやっぱりミニカップヌードルはいいね！朝御飯はこれだけどお昼ご飯はしっかりと食べないとまた姉さんに・・・うう、考えたら寒気が止まらない」

僕は朝御飯を食べ終えて、いつも通りの学校に育成副に着替え終えてテレビを消そうとしたら・・・

ー 《次のニュースです。昨夜、○○で小さな地震がありました》
「ん？ああ、そういうえば、この街は昨日揺れたな」

ー 《専門家は活断層が少し動いた可能性があるが大きい震災起こる心配はないとってました》

なら余震の心配はないと言うことかー。安心して学校に行くか。僕は家をあとにして歩くと、僕の目の前にはー

「よう、明久。おはよう」

「明久さん、おはようございます」

「おはよう。真理亜さんにジャイアン」

ジャイアンの頬には湿布をはられていて真理亜さんと仲良く手を繋いでいた。ジャイアンは疲れた顔で真理亜さんは物凄い機嫌がいい笑顔であるいていた

「ジャイアン。なんで頬に湿布をはっているの？」

「あー・・・それは・・・」

「私が武君の顔を思いきりビンタしたからです」

「え？なんで」

「・・・昨日軽い地震あっただろ？その時真理亜の胸を触ってしまったて・・・で、ビンタを食らったわけ」

「・・・なるほど。でも、何で真理亜さんがご機嫌なの？」

「フッフ、武君がお詫びとして今度冬花と私と三人で買い物つれていってかれることになったのです」

「・・・妬ましい」

うん、妬ましいよ。真理亜さんは他の人が見ても姫路さん達に次ぐ美女だし、冬花さんも年下とはいえ可愛い子だった。そんな二人に好意を持たれてるジャイアンはある意味妬ましい

「あれ、そういえばスネ夫は？」

「スネ夫は日直でいないぞ。復帰直後に日直かとあいつはぼやいていたぞ」

「あ、忘れていた」

そんな話をしながら僕らはいつも通りの席に座り、時間がたつと雄二や美波、姫路さん、秀吉、ムツツリーニがいつも通り来た

「おはよう。昨日の地震はすごかったよね？みんなはその時何していたの？」

「うむ。ワシはその時姉上とテレビを見ておった」

「・・・写真の整理していた」

「うちと葉月はお風呂に入っていたときだったけど怖かったわ」

「はい。私もです」

僕の質問に秀吉、ムツツリーニ、美波、姫路さんが昨日どういう状況だったのか教えてくれた。すると、ジャイアンと真理亜さんとスネ夫と雄二もこちらによって来た

「その時の俺は真理亜と共にいたからな」

「はい。武君共にいました」

「僕は体調を取り戻すために、早く寝ていたよ(おもらししたことは内緒だけど・・・)」

「雄二は？」

なんかスネ夫が遠い目になっていたけどなんか触れないでおこう
と思い、雄二に話を振ったがー

「……俺は昨日、翔子のお仕置きが珍しく何もなく、尚且つ母親の料理しないようにいつも通りに台所をたっていた」

「珍しく？それは毎日攻撃されているように聞こえるよ」

「……」

「……え、本当なの？」

雄二の長いちんもくに僕は思わず聞き返した。いくらなんでも……そう思いながらも雄二の顔を見たら本当だとわかった

「雄二……どんまい」

「……ああ……」

僕は思わず握手するほど同情すると雄二も断ることなく握り返してくれた

すると――

「キンコンカンコン♪着席しろー」

鉄人がFクラスに入ってくるなり、すぐに僕たちにそう呼び掛けた。指示通りに僕らは座ると西村先生は連絡事項をいった

「えー、野比は休みだ。その代わりにだれかがノート書いてあげろ」
のび太が休みなんて珍しいこともあるんだな??……

え……まって?のび太が??

そんな小さな疑問が僕の心のなかに沸き上がってきた……

なんだろう?この胸騒ぎは……

誰にもわからないこの僕の疑問はなんだろう?!

小さな違和感

明久 side

鉄人の朝のHRが終わった直後にいつも通りの授業でいつも通りに過ごしていたが・・・なにか違和感が止まらない・・・。ずっとこの違和感が止まらないのはなぜだろう？

「ーさ」

「(のび太が休み？本当にのび太は体調悪く休んでいたのかな?)」

「ーさーくん？」

「(いつもなら誰かに連絡して頼みそうな気がするけど・・・連絡ができないほど体調が悪いのかな?)」

「あーひーくー」

「(駄目だ・・・考えれば考えるほどわからなくなってきた!!あーもう!!のび太の) バカ!!」

「」

「ほーう・・・それは俺に向かって堂々とバカと言うと思わなかった

ぞ・・・吉井・・・(ゴゴゴゴ)」

「」

怒気の効いた声を聞いて僕は改めて気付き、忘れていた。いまは普通に学校で授業を受けていたんだ!!

「まさか、貴様に堂々とこの俺にバカと言われると思わなかったぞ・・・」

「あ、あの・・・」

「そうかそうか・・・俺の授業が退屈なのか・・・仕方ない。他に何人かも退屈そうな感じを出していたからな」

「」(ギクツ!?)」

「ふむ。・・・姫路、氷華、剛田、骨川、島田、木下は、また耳をしっかり防いどけ」

「」?は、はい」

「(明久達はご愁傷さま) はい」

ま・・・まさかこの流れ前も同じことがあったよね・・・?まさ

かだよね?!!

「お前達に退屈な思いをさせたのはまだまだ俺の教えが足りなかったのだろうな。仕方ない・・・よくきけよ」

「ま、まさか・・・」

「あれは半年前のことだ。筋肉同好会をとある山で合宿を開いた。その時に集まったメンバーは俺や身長195cmで体重120kgの巨漢・ジョリジーニョ・グラシェーロや身長200cm体重100kgのペドロ達だった」

「(最悪だああ?!)」

あの夏休みであった強面の男二人だよね?!今の名前からしてあの二人だよね?!だめだ・・・背中が痛み感じてしまう・・・

『ん?よんだか?』

呼んでいません!!!つてか僕の脳内に出てこないで!?

「俺達は密室に閉じ籠り、汗まみれになりながらぶつかり合い、筋トレをしまくりながら刺激しあっていた。最初は軽く65kgを持ち上げて筋トレだった」

「(うつぶ)」

「だが、隣は俺よりも+10kgを持ち上げていてさらにそのとなりは15kgも持ち上げていた。俺は負けじと重さを増やしていき俺たちから汗をかきながら最終的には100kgも持ち上げていった。さらにー」

「(もうやめてくれえええ!)」

「そして・・・ん?なんだ、またこれからと言うときに真っ青になってダウンか。まったく、聞くのが嫌ならきちんと勉強するように!!」

呆れたように鉄人は僕らに苦言をいったあとに教室の外に出ていった。・・・夏よりはましだけど想像したら・・・ダメだ・・・また吐きそうになってきた

「まったく、明久のせいでひどい目に遭ったぞ」

「・・・(コクコク)」

休み時間に入り、雄二とムツツリーニが僕に苦言を言っていた。そして、美波と姫路さん、秀吉もこちらに来た

「お主はよくもまあ、堂々と鉄人にバカと言えたものじゃのう」

「たしかにそうね」

「でも、なんか頭抱えていましたね。ずっと私の呼び掛けも聞こえていなかったのですか？」

「え？姫路さん僕を呼び掛けていたの？」

「はい。でも、なんか必死に考えていたので、西村先生が気になり明久君の方に近寄った結果・・・」

「お前の暴言により鉄人の怒りに触れてしまったと言うわけだ。全く、小学生の問題もとけなくせに・・・」

その言葉を効いた瞬間、僕はムツとして雄二に言い返した

「失礼な！僕はもう小学校の問題は大丈夫だよ！」

「なら、俺が出す問題を答えろよ。・・・よし、日本史でいくぞ？」

「よしこい!!」

「こいつはたぶん常識だと思うから答えろよ？元長州藩の男、木戸孝允という人物がいました。ただし、この木戸孝允の名前になる前は別の名前がありました。さて、こいつの前の名前はなんでしょう？」

前の名前・・・？たしか・・・思い出せ！沢山教えてもらった人物

の名前の一人のはずだ!!ならば・・・名前は・・・

「桂・・・」

「[[[[[?!]]]]」

「桂・・・桂小〇郎!!」

よし、我ながら見事な回答になるはず!!そう思って雄二達のほうを見る――

「[[[[[.....]]]]」

「雄二？正解じゃないの？」

「・・・こんの・・・」

「へ？」

「こんのばか野郎ううう!!!」

「ブへえ!」

僕は雄二にキレイなアップーを顎に思いきり食らった。なんで・・・？

「明久くん・・・答えは桂小五郎が正解です」

「そんな答えは偉大作家様に謝らないといけない答えね・・・」
そ・・・そんな・・・

「孔明の罠・・・か」

僕は軽く意識吹っ飛んだ・・・

美子 side

私は・・・なにか忘れてる??

「美子??。そろそろ着替え終わらないと体育遅れるわよ」

「あ、わかったわ。宏美」

私は宏美の言葉とともに急いで着替え終わっていった

ーサヨウナラ・・・

「え?」

私は後ろから聞こえた声に思わず振り向くが、誰もいなかった

今の声は・・・?

「美子、遅れるわよ」

「あ、ごめん!宏美!!」

まっ、気のせいよね。早く急ぎましょう!

なにか大切なことを忘れてる気がする・・・何だろう?

小さな進歩

明久 side

僕らはいつも通りの昼休み・・・いや、訂正しよう。今日は僕と雄二と姫路さんと美波と霧島さんでお弁当を食うことになった

そのわけは数分前・・・

「アキ、坂本少し良いかしら？」

「あ、呼び止めてなんだ？」

「良かったらだけど・・・今から屋上でウチ達とごはん食べない？」

「別に構わないが・・・お前はどうかんだ？明久」

「え？僕も構わないよ」

雄二と僕は美波の提案に特に断る理由はないので了承すると美波は安心したように笑っていた

「良かった。なら、今から行きましょう」

「うん。判った」

僕と雄二は美波の案内で屋上に向かうとそこにいたのは・・・

「(ニコニコ)」

満面の微笑みの姫路さんと霧島さんが座って待っていた。いや、霧島さんの場合は無表情に近いのがなく緊張しているようにも見えた

「(屋上に昼飯・・・まさか?)」

「アキ」

「明久くん」

「雄二・・・」

「(私達の手作りのお昼ごはんを食べてちょうだい)」

「(あ、これは・・・処刑台につれていかれるあれだ)・・・は、はい」

僕らはいさつき一緒に食えるといった以上・・・今この場で断るという選択は・・・ない・・・

僕と雄二は逃げるという選択を捨てて、その敷かれたシートに座った。ああ、僕の命は終わりか

「あの・・・私たちがそれぞれで頑張って作った料理なので・・・その・・・」
「・・・よかったら食べてほしい」

「私達が各々作った料理だからどうぞ・・・」

姫路さんと美波と霧島さんは1つの弁当を取り出して僕につき出していた。僕は雄二と目のアイコンタクトをとった

「どうするの？雄二」

「・・・せつかくあいづらが作ってくたんだ。食べるぞ」

「あれ？今回は逃げないんだね・・・」

「バカ言うな。今、逃げてでも翔子は地の果て追いかける女だ・・・ならここは観念して受けた方がおれは身のためだ」

雄二はあきらめた雰囲気を感じながら儂く笑っていた。そうだね・・・逃げては彼女たちに失礼だから・・・

僕らのとる選択はー

「頂こう」

彼女たちの頑張って作った食べ物を頂こう

「じゃあ・・・」

「いただきます」

僕らは彼女達の作った手料理を

ーパクっ

ん、この味はー

「ハンバーグ？それともう一つのは・・・茹で玉子？」

「はい！茹で玉子は私が作りました！」

「私がハンバーグを作ったの。どう？私たちの作った料理は」

姫路さんが・・・あの姫路さんの料理がこんなにも美味しくなっている!?見た目だけではなく味も!?美波のも美味しい!!

「うん!!美味しい!!」

「本当(ですか)!?」

「うん!!またこの味を作ってね」

「はー!!」

「し、翔子!?これお前が作ったのか!」

「・・・うん」

「なんだ!?この目茶苦茶うまい卵焼きはー?!」

雄二のほうもなんかすごい興奮していて食べていた。どうやら霧島さんの手料理美味しいかったみたいだ

「でも疑問に残る・・・なんで、こんなに美味しいの？」

そう・・・姫路さんの料理はみんなが知ってるように壊滅的な部分がある。なのに何でこんなに美味しいのだろうか??

「あ、それはのび太くん達のお陰なんです！」

「のび太達の??」

「ええ、美子の指導のもと茹で玉子とハンバーグ、卵焼きの作り方を教えていたの」

「そして、のび太とドラえもんが味見として食べてもらったのだけど・・・」

「・・・何故かドラえもんさんがその後体調崩していた。そしてのび太がなんかこのメニューの作り方をきちんと手を加えないでその通りに作って』と言われたからこの通りになった」

「(あっ察した。そして、のび太！ありがとう!!ドラえもん、君の死は忘れない!)」

心のなかで僕らは今も苦しんでいるであろうドラえもん心に心のかで敬礼した。そして、のび太が学校来ないのはこんな理由なのかな?

その後、3人の手作りを美味しくいただきました・・・

小さな進歩後

僕は屋上で昼御飯美味しく食べた後、これを作った指導者は三上さんだとわかり、そして姫路さんの茹で玉子があんなに美味しくなっていたのはのび太とドラえもんの犠牲という名の元の体を張ったから姫路さんは美味しく作れたんだ・

「どうやら上手くいったみたいね」

そんな事を思っていると、この聞きなれている声は――

「美子（ちゃん）！」

「三人の料理が美味しく作れるか心配だったけど安心したわ。だって、二人が美味しく食べているから」

「ハッ！」

し、しまった!?!これでは他の料理も食べまくらないといけなくなる!?!

心のなかで汗が止まらず、ぎこちなく霧島さんや姫路さん、美波のほうに振り向くと――嬉しそうに笑っていた

「美味しく食べてくれて良かったわ」

「はい！頑張って作った甲斐がありました！」

「・・・旦那様を喜ばせるのも奥さんの仕事・・・(ポツ)」

なんか三人とも物凄く喜んでいたらまあ、結果オーライかな・

?あれ、そういえば――

「三上さんはなんでこんなところに来たの？」

「あ、うん。のび太君知らない?」

「のび太?」

そういえばのび太は今日休みだというのを三上さんは知らないのかな?

「今日のはのび太休みだけど、連絡がなかったの？」

「ええ、いつもなら返信もしてくれるのにこの二日間・・・昨日と今日は連絡がなかったの」

のび太にしては珍しい・・・。あんなに三上さんを愛してる男なのに連絡がないのは気になるな・・・

「のび太が三上に連絡しない? ・ ・ 何かあったのか?」

「分からないけどたぶん体調崩してるのかな?」

「え?! のび太くんは体調崩してるの?」

僕の言葉に美子さんははじめて聞いたかのように驚いていた

「あれ、のび太はそれも三上さんに黙っていたの? まあいいや) なら、放課後にもものび太のお見舞いいく?」

「おーそれいいな。 なら、メンバーは今ここにいる。 ・ ・ ・ 」 ・ ・ ・ ごめん吉井、今日は私と雄二はデートの日だから放課後はいけない」 ・ ・ ・ つておい!? そんなの聞いてないぞ?!」

「 ・ ・ ・ 雄二忘れたの? (ダンスの中の左の奥のほうに隠してる本を燃やしていい?)」

「(すいません。 私の記憶違いでしたから許してください) あー、すみん! 明久、デートではないが、出掛ける約束をしていたのを忘れていたからいけない!」

「あ、そうなんだ。 それなら仕方ないや」

うん、霧島さんと出掛ける約束を事前にしてたのなら仕方ないけど ・ ・ ・ 別にFFF団に今度通報しても構わないよね?

「あ、そうだ! せっかくならもうひとつどうせなら裏山にいつてみない?」

「 「 「 「 裏山? 」 」 」 」 」

「うん。 のび太が以前教えてくれた事なんだけど、裏山の頂上にいったら凄くいい景色が見れるんだって」

「本当か? それ」

「うん。 ただ ・ ・ ・ 」

「 「 「 「 ただ ・ ・ ・ ? 」 」 」 」 」

僕はここまで言うと言葉を選びながら考えた。 のび太から聞いた話では確かー

「ただ、 星空が見れるきれいな代わりにのび太は嘆いていたよ。 裏山の所々にゴミがあるのは人としてどうなのだろうって ・ ・ ・ 僕も同感だよ」

「そうなんだ ・ ・ ・ 」

「なあ、のび太のお見舞いは今日はどうする?」

「うーん・・・今日はやめておこう?のび太の体調はひよつとしたら連絡できないほどだからだがしんどいのかも知れないしね」

「確かにそうね。きちんと連絡するのび太が連絡できないほどしんどい可能性はあるね」

うん。いくらなんでも今日はやめて明日も来なかったらお見舞いおこう!

「なら、決まりだな。今日はやめておこう」

「ねえ、アキ折角だからのび太が言っていた裏山の場所を教えてください?」

「あ、私もいききたいです!のび太くんが言うほどその場所に気になるので!」

「オツケー。どうせなら夜にいかない?今日は夜綺麗だしね」

「なら、私もいくわ。本音を言えばのび太くんのお見舞い行きたいけど連絡できないほど体調崩してる事考えたら後日に改めた方がいいみたいだから」

決まり!なら時間は・・・

「その前に明久、今日は確認テストあるの忘れていないだろうな?」

「え?!そんなのあったって・・・?」

「お前な・・・。まあいいや」

雄二はあきれた顔で僕を見ていた。確認テストあったかな・・・あつた!しかも鉄人だ!!

「しまった!!!全く勉強してない!!誰かたすけてえええ!!」

「自業自得だ。そろそろチャイムなるな・・・そして、翔子。そろそろ俺の腕をねじ伏せようとする力を緩めろ」

「・・・?」

「なんの事?って顔するな!!とにかく痛いんだよ!!」

「・・・おう?」

「そう・・・って違う!!痛い痛い!!力を緩めろおお!!」

雄二は動こうとして歩くと霧島さんはしっかりと雄二の腕を握っていた。そんな雄二はクレームをいれるが、霧島さんは???となりなが

ら痛みを苦しんでいたのはここだけの話・・・

「じゃあ私も戻るね。またよ・・・」

「ん？三上さんどうしたの？」

「体調悪いのですか？」

「あ、何でもないわ。軽くふらついただけよ」

「そう？ならいいけど・・・」

確かに三上さんの顔色は少し悪いけど本人は否定している。うーん・・・最近風邪が流行っているのかな？

キーンコーンカーンコン

「あ!?!これ予鈴のチャイムだ!!急いで戻らないと!!」

僕の言葉にみんなも急いで走った。とりあえずは今日の夜はみんなが裏山の方に行くことに決まったので僕らは・・・いや、僕は勉強を必死にすることになった・・・

だけどこれだけは言えるー僕は勉強が嫌いだ・・・

夜の裏山へ散歩

夜になり、僕は約束通りに裏山で星空を見るために家を出ていき、マンションから離れて歩くと見慣れたピンクの髪の色した女の子とポニーテールの後ろ姿が見えたのとその横にも楽しそうに話していた女の子がいたので僕は声をかけた

「美波、姫路さん、三上さん！こんばんは！」

「あ、明久君！こんばんはです！」

「こんばんは。吉井君」

「アキ、こんばんは！」

あ、美波で思い出したけど葉月ちゃんはどうしているんだろ？今は確か美波と二人で暮らしていると聞いていたけど・・・

「ねえ、葉月ちゃんは一人で留守番？」

「あ、そっか言っていなかったわね。MO・・・葉月はお母さんと一緒に家にいるの。しばらくは国内にとどまれるらしいから」

「国内に？まるでしばらく海外にいつていたみたいない方だけど・・・」

「ええ、正確にはもう少しで日本で働けるように環境を整えているの。簡単にいったら以前海外で働いていた人たちを日本に勧誘して一緒に会社作るわけだから、不便ないようにしているわけ」

ほへえー。なんかよくわからないけどすごいね。そういえば、よく考えてみたら僕は自分の親が何をしてるのか聞いたことないのかも・・・

するとー

「そういえば結局裏山に行くメンバーは私たちだけ？」

三上さんが僕の思考を遮るように質問をしてきたので僕も頷いて答えた

「うん、秀吉はお姉さん達と外食で出掛けに行くみたい。ムツツリーニは誘ったのだけど、輸血のためダウン」

「そう。・・・なんか今のあの光景を見るのは慣れてしまうと違和感がないわね・・・」

「・・・よくよく考えてみれば確かにそうね。私もFクラスに馴染んできたということかしら？」

「あははは・・・」

美波の言葉に三上さんや姫路さんが苦笑いしていた。確かにFクラスに馴染んでいるのかと聞かれれば・・・馴染んでるんだよね・・・

「結構山奥だけど、姫路さんは大丈夫なの？」

「そういえばそうね。瑞希の体は心配ね」

「あんまり無理しないでよ？」

僕の言葉に美波も三上さんも心配そうに見ていた。よくよく考えてみれば姫路さんの体は弱いのはたまに忘れてしまうよ

「あ、あの！大丈夫です！」

「そう？無理はしないでね」

「はい！ではいきましよう!!」

姫路さんの言葉に僕らは信用してなんかあっても大丈夫なように僕が一番前に歩いていた

どれくらい歩いたかはわからないけど、大分歩いていき、時々姫路さんの様子を見て歩いていたが特に問題なく歩いていた。そして、目的地になると僕らは――

「二「うわああああ・・・！」三」

裏山から見上げた星空は綺麗に輝いていた。その光景に圧倒された僕らは思わず目を輝かせて声をあげた

これが・・・のび太が好きだった光景の一つ・・・なんかわかった気がしたよ。しばらくその星空にみんなは無言で見上げていた。数分たった直後に僕らは皆で顔を見合わしていた

「これはきれいな星空ね。のび太くんが裏山を愛していた理由・・・なんだかわかった気がしたわ」

「私もです！」

「私もよ。今度は皆でここに行きたいわね」

「うん！その時はのび太もーん？」

僕は話している途中に何か音が聞こえたのでその方向を見た。そんな光景に姫路さんが不思議そうに聞いてきた

「どうしたのですか？明久君」

「あ、いや・・・何か今聞こえなかった？」

「？いいえ、私たちは聞こえなかったわ」

「ええ」

「うーん・・・じゃあなんだろう??」

僕は先程聞こえた音がどうしてもきになり頭を捻らしていると姫路さんが両手をパンっ！と優しく音を出し提案出してきた

「それでしたら見に行きませんか？明久君がそばにいますことですし」

「そうね。何かあつてもアキがいるから大丈夫ね」

「・・・三上さんは？」

「私も構わないわ」

じゃあ決まりだと思ひ僕らは音がした方に暫く歩くと・・・

「!!?!」

そこには信じられない光景を目の当たりにした・・・裏山の一部がクレーターのようになつていて、さらに所々木が折れていた
「こ・・・これは・・・？」

「ど、動物が荒らしたのでしょうか・・・？」

「待ちなさい・・・動物が荒らすにしては異常よ・・・」

こ・・・ここにいったい何が・・・いったい何があつたというのさ!?

ドラえもん side

僕は現在病室で安静していた。ドクターの判断によると後2日は絶対安静で体内のを調べた結果、ドクター曰く未知の料理を食べたせいで恐らく体に不調起こしたという判断だった

「早く体をおなさないよ・・・あーにしても暇暇!」

「お兄ちゃん、きちんと安静したほうがいいわよ」

「そうは言うけどね・・・」

「なら、私が聞くから高校生になつたのび太さんの話を聞かせて？」

高校生になつたのび太くんの話しか・・・うーん、いろいろあるけど、よし！話の内容はこれだ！

「あのねー」

とりあえずはのび太くんのは今は心配しないでいいや。勉強しっ
かりしてるはずだから

夜の裏山の発見

明久 side

僕らは現在目の前の状況に戸惑っていた。これはいったい何があつたというんだ……。?!裏山で少し人が通らないルート……。いや通りにくいルートといえればいいかな……

そんな場所が……

「一部がクレーターのようになってる……」

「ねえ、アキが聞いていた話では裏山ではこうなっている場所は聞いてない?」

「僕が聞いていた限りこれはない……とおもう」

「では、これはなんでしよう……。?美子ちゃん顔色が悪いですよ」

「え?!」

僕は美波の質問に答えると納得をしてくれてその隣で姫路さんが三上さんに心配そうに声をかけると三上さんは心底驚いていた

「そうね。顔色が少し悪いけど大丈夫?」

「嘘!?私の顔色そんなに悪いの!?!」

「ええ、もしかって今日は体調が悪かったの?」

「いいえ、そんなことはないわ。体調もバツチリで体の調子もいいわよ」

「でも顔色が……」

「多分気のせいだわ。とにかく下にいきましよう?この原因を調べないと気になって寝れないわ」

「確かに気になるよね。このまま帰ってもなんか……気になって仕方がないし寝れそうにないね」

三上さんの言葉に僕はこれ以上聞くの早めておこうと思った。本人が大丈夫というならこれ以上追求するのはやめておこう

「ほへ?」

「?どうしたの瑞希」

「あの……よく見れば奥もずいぶん荒れていますよね?」

姫路さんが指差した方向を見ると確かになにかが起こった後の道

ができていた。木も倒れていて……これは本当に動物が??

「ねえ、とにかく奥いってみない?もしかしたら何かわかるかもしれないし」

「それは賛成ね。でも、美子・瑞希は大丈夫なの?」

「あ、あの……なんか幽霊でそうで怖いですけど……行きます!」

「私もいくわ……怖いけど……」

二人の意見を聞いた僕らはすぐにその荒れた道を歩いていた。所々にすごいあとになっていたけど……

「これは本当に動物がこれ暴れたりとかしていたのかな?」

「確かにここまで歩けば確かに可笑しいわね。所々可笑しいわね」

「はい。あ、あそこに大きい穴がありますよ?いきます?」

「そうね。とにかくここでとどまっているよりは行ってみたほうがいわね」

三上さんの言葉に僕らは頷いてその荒れたさきを歩いていった。いったい何があるんだろう……?

ゆつくりと先を歩くと……そこには地面がこれまでよりもとんでもないクレーターができていた

「もしかって昨日の地震は裏山に隕石でも落ちたのかしら?」

「美子それは流石に……ないと言い切れないのはなぜかしら?」

「でも、それでしたらニュースは取り上げられてるはずですよ?」

「確かにそうだね。でも……ん?」

僕はちらつと左に、何か見えたのでそこに振り向いたが誰もいなかった。今のはなんだろう??

「どうしたの?アキ」

「今何か聞こえなかった?ホラあそこに誰かー、あれ?」

「こ、怖いこと言わないでくれるかしら?何も無いじゃない!」

「そ、そうです!!」

「アキ!次その不用意な発言したら怒るからね!」

僕の言葉に美波達は怒ってた。え?僕が悪いのかな……

ー……しゃん

「はれ?明久君、何か聞こえませんでした?」

「ほへ？僕はなにも聞こえない」

「でもなにか聞こえたわね。なにかしら？」

「私も聞こえたわ。風のせいで木が揺れたのかしら？」

「でも風吹いていなかったよ？」

僕らはその音に関して不思議がつて話していると、何かこちらに近づく音が聞こえた……。この音は？

「ハイジヨ、ハイジヨ。証拠隠滅ノタメニコチラニキタガ現地ニ四人発見」

「「「ろ……。ロボットおお!?」」」

僕らの目の前に出てきたのは赤い目のロボットがこちらを見るなりに不穏な言葉を発していた

「抹消許可アリ。ヨッテ排除実施スル」

「!?（今なんていった？排除……。つまり僕らを殺すということ……。?）」

ロボットの言葉に僕はおもわず先ほどの驚いた気持ちからすぐに冷静に切り替えられた。今の言葉が正しければ僕らはこいつに……。殺されるということ!?

——そんなの……

「させるか!!おりゃあ!!」

僕は思いきり近くにあった小石をロボットにおもいきり投げた。そんなロボットは痛くも痒くもないかおでこちらを見ていた

「赤い目のロボット来い！僕が相手だ！」

「明久君（アキ）!?!」

「吉井君!?!」

「データ照合シマス。名前不明。バカトシカワカリマセン」

「ロボットなのにバカとிட்டた!?!ねえ、バカとிட்டた!?!」

僕はロボットをこちらに引き付けようと強くிட்டたが、ロボットからはまさかの予想外の言葉に僕の精神的なダメージを受けた。フツ……。中々やるね！

「姫路さん達は奥ににげて!!ここは僕が何とかするから！」

「でも……。いくわよ！美波と瑞希！」・美子ちゃん!?!」

「吉井くんがああのロボットを引き付けてくれているのならその奥に隠れましょうー!」

「そうね、アキが決めた決意はうちらがしつかりと応えないと!!」

「っ、明久君! 必ず帰ってきてくださいよ!!」

「心配しないでここは僕に任せて! それに、ぼくにはとっておきのがあるから」

「ハイジヨ、ハイジヨ」

でもなんかこいつどつかで見たことがあるのだけど・・・どこでだろう? まあいいや・・・

「僕の大切な仲間を手を出そうと言うのなら・・・僕も喜んでロボット1型とでもよぼうかな? 相手してあげる!」

「ハイジヨ!!? ハイジヨ!」

「(これ返すのうっかり忘れていたけどまさかこういうときに約立つなんてね・・・) いくよ!!・・・サモン!!」

僕が馴染みのある言葉を言うとロボットは驚き固まっていた。そして、僕は包まれた光が消えると右手に木刀を持ちながら体は学ランのほうになっていた

「服装ぐらい改造できないかな・・・? つとあぶな!!」

僕が服装のことではやくと、ロボット1型は発することなく攻撃し始めた。いきなり攻撃に僕はロボット1型に文句いった

「警告なしなんて君は人の心あるのか!?・・・あ、違った」

「ロボット心トイエ。マツタク・・・ダカラキミハバカトイワレルノダヨ」

「グフツ!」

こ、このロボットI型・・・僕をバカといつた!?

「もう怒った!!」

「?」

僕は目を閉じて息を整えた。思い出せ・・・僕の最大の一撃をあいっくに食らわすのはどうすればいいか

「?トニカクヨクワカラング・・・クタバレ! (ガチャ)」

「!狙うならここだああ!!」

僕はロボットI型が何か構えるおと聞こえたので高くとんだ。そして、ロボットI型は戸惑いながらも発砲していたが・・・

「ハイハイハイハイ!」

「ハジイタ!」

木刀で弾を弾いていたのに向こうは驚く反応示された。ふはははは!時に身体能力はロボットの思考を越えるのさ!!

「とりやああ!!」

「がつ!」

「・・・相手が悪かったね?バカはデータ通りとかそんなの度外視するから・・・ね」

僕はロボットI型に言い終えるのと共に木刀を軽く横降ったらロボットI型は爆発を起こした・・・

「アキ!!」

「明久君!」

僕は声をした方向に振り向くと美波と姫路さんがこちらに走ってきた。そして・・・こちらに向かつて飛んできた

「え?!」

「アキ (明久君) ー!」

「つちよつちよ!」

こつちに思いきり飛び込んできたのだが僕はどうしたらいいのかわからず動けずにいるとそのまま二人の体が僕に押し掛かった

「ぐふつ!?(お、重い!?)」

「良かったです・・・無事で」

「そうよ・・・心配したのだから・・・」

「あ・・・あの・・・」

二人が思いきり僕の首にも力いれていたの僕は少し意識とどびかけていた。だ、だれか・・・ヘルプ

「はいはい。心配していたのはわかるけど、吉井くんの顔を見なさい?死にかけているわよ」

「はっ!」

「二人の胸が僕のかおに……あつ、）……冥界に……いくよ……
ガクツ」

「あ、明久君（アキイイイ）!!!!?」

その後僕が意識取り戻したのは数分後だった……首がいたい……

裏山の探索 Ⅱ

明久 side

僕はいつも通り三途の川付近でお爺さんとお話ししていた。なん
で今回ここにおけるのかは記憶がないけど……

「なんじゃ？お主、またこんなところに来て……今度も女の子の涙流
さないためにご飯を食べたのか？」

「いえ、今回は違いますよ」

「やれやれ……全く……」

お爺さんはため息つきながらあきれた声を出していた。そして、幽
霊なのに此方に物凄い顔で睨んでいた

「もしもワシが生きていたのならお主のその足りない精神しごけたも
のじゃが……女相手となるとなかなか難しいのう」

「女性は強いですからね」

「そもそものび助も女に頭上がる様子は今だにないからのう。やれや
れ、男は良い意味で大変じやのう」

「のび助？」

スルト、お爺さんはなにかを思い出したように手を叩いて僕に方に
手を向けていた

「そうじゃ、お主に一つ頼みたいことがある」

「頼みたいことがある……ですか？」

「うむ。時間がないから簡単に言うぞ？」

「は、はい（なにか急に気迫出てきたなく……なんだろう？）」

「のび太を助けてやってほしい」

「ハイハイ、のび太をね。……へ？」

今このお爺さんは何て言った？のび太を助けてほしい？それは
いったいどういう意味……

「なにか引き寄せられる!？」

「なんじゃ、今回は意識覚めるの早いのじゃな」

「つちよつと待ってよ!?!のび太を助けてって……」

「お主はのび太に似ているのかもしれない……頼むぞ。小僧」

お爺さんの言葉と共に僕の視界は真つ暗になった……。しばらくしてから僕は目を覚ますと……

「アキ！大丈夫？」

「明久君、なんかぐったりしていましたけど……」

僕の顔に心配そうに覗いていた美波と姫路さんが僕の視界に入っていた。どうやらそんなに時間がたっていないみたいだが、心配はかけてしまったみたいだね

「うん、大丈夫だよ」

余計な心配させないように僕は二人に安心させるように答えた。そんな答えに二人は小さくほつと息をはいていたのは僕の気のせいではないはず

「でも先のロボットは何かしら……？」

「私達もわからないけど……」

「……いったい何が起きているのやら・あれ？ねえあそこの奥だけがかい穴出来ていない？」

三上さんが指差した方向を見ると確かにデカイ穴ができています。あれ、あんなの元々なかったような気がする……なかった気がする

??

「つちよ、アキどこに行くの？」

「あそこの洞穴にいくよ」

「「え!!」」

僕の一言に美波だけじゃなく、姫路さんも三上さんも驚いていた。え、そんなに驚くことなのかな？

「アキ何考えてるの!?!ただでさえ恐ろしいことあったのにそこにいても何があるかわかったもんじゃないわ!!」

「やれやれ、美波は怖いのか？」

「その言葉は私に喧嘩売ってるのかしら……？(ゴゴゴゴ)」

「あ……嫌々美波様の平らな胸みたくに喧嘩はー」「遺言はそれだけね？オツケー？」「あいだだだだだだ!?!その関節は曲がらないよおお!!」

だ……だれかたすけてええええ!?!

解放されたのは数分後だったが腕がかなり痛かったのはここだけの話だ……

——洞窟？跡地——

僕らは洞窟跡地みたいなのに足踏み入れたがはつきり言おう。ここ最近荒らされた感じというよりは……

「なんかぶつかってそうだったのかな？……まさかね？」

「はへ、明久君はなんでそう思うのですか？」

「そうね。なんか知ってる言い方みたいね」

え？そんなに言い方がおかしかつたかな？そう思っていると三上さんが入ってから急に静かになっていた

「三上さんどうしたの？急に黙って」

「あ、いえ……なんか……」

「なんか……どうしたの？」

「いえ……っ!？」

「美子ちゃん?!」

三上さんが急に前の方をみると急変して驚いた顔になり僕らが声かける前になぜか前の方に全速力で走っていた

「三上さん!」

「アキ、瑞希追いかけるわよ!」

「は、はい!」

「……!?!うそ……でしょ……」

僕らが三上さんに追い付くと何故かその三上さん様子がおかしくその場で呆然とした顔になった

「っ……」

「美子? いったい何が……え?」

「え……」

僕らがそこで見たものは……

僕らが見慣れた友人の愛用していた大切なもの……

それは・・・護身用の銃が砕けていた・・・
つまり・・・

「のび太く・・・ん・・・はあはあ・・・」

「美子？」

「そうだ・・・私は・・・」

三上さんはあの砕けた銃を見た瞬間、息が途切れなり体が震えていた

「いや・・・いやあああああ!!」

「美子（ちゃん）!?!」

三上さんは絶叫をするのにもふらつき前に倒れそうになる瞬間、
美波と姫路さんが受け止めてくれた

・・・いったい何があったのさ・・・!!?

悲劇の夜

あの後、三上さんが落ち着くまで僕らは帰らずに側にいた。あの三上さんがあの護身用の銃を見た途端に急に絶叫したのは気になる……

「美子の様子はどうか？瑞希」

「はい。いまは落ち着いていて寝ていますが……いったい何があったのでしょうか？」

「……とにかくこの護身用の銃は多分……いや……きつと違うはず」

「う……ん」

「！美子ちゃん、大丈夫なのですか?!」

「……(コクツ)」

三上さんが目を覚ます気配感じたので姫路さんが声かけると、三上さんは言葉を発することなく頷いていた。もしかして、三上さんもこの銃が何なのかわかったのかも知れない……

「……」

「とりあえず、今日は帰ろう？色々整理したいことがあると思うから」

「「……ええ(はい)」」

僕の言葉に三上さんをはじめとする姫路さんたちも悲痛な顔で頷いて返事していた。僕は何となくそれをそこに放置したくなかったから回収をした

「のび太……本当にこれは君が何かあったのか……?」

僕は碎けていた銃を見て本当にのび太が何かあったのか聞きたかった。僕が知る限り、のび太が銃の打ち合いで負けるなんて聞いたことない……となれば、これは……偽物の可能性もある……

「アキ……行くわよ」

「あ、うん。行こうか」

「……」

「美子ちゃん……」

「ごめんなさい・・・とにかく私も気持ちの整理がしたいから・・・一日待ってくれないかしら・・・」

「うん。後、無理はしなくっていいから家に送ろうか?」

僕の提案に美波も姫路さんも賛成していた。というか、三上さんが先程ののび太のを見てからどんだん顔色が悪くなっている以上、いまは一人にさせるのは危ない

「そうね。顔色もまた悪くはなっているわよ」

「あの・・・宜しければ今日は私の家で泊まりますか?それとも」

「わ、私は大丈夫だから・・・ね」

「・・・」

誰がみてもいまの三上さんは精神的にしんどい顔をしているし、辛そうな顔をしているがこれ以上本人を困らしたくはないのでとりあえずは三上さんの家の方まで送ることにした

僕らはそのあとすぐに裏山を下山して歩いていたがその間のみんなの会話はなくただ沈黙が続いていた。こんな空気を変えたいと思つた僕は下山しながら話を切り出した

「ねえ、この件は明日・・・ジャイアンとスネ夫とかにー」

「アキ、この事を明日に話すのは待ちなさい」

「え、なんで?」

「・・・いまの美子は精神的にしんどいものだから一先ず美子を家に送つて帰りましょう?」

「そうですね。私達も気持ちの整理したいのが本音ですから・・・それに美子ちゃんの今の気持ちはきつと誰にもわかりませんから・・・」

「・・・」

僕は三上さんの方を振り向くとまだ悲痛な顔で洞窟の穴がある奥を見ていた。もしかしたら三上さんはなにか心当たりがあるのかもしれないけど・・・いまは触れないでおこう

「うん。わかった」

僕らは下山し終わると、姫路さんと美波が三上さんと共に行動するといつて別れた。女の子だけだと危ないから僕もついていこうと思つたけど・・・美波と姫路さんの何故かの殺気に僕は黙つて従つ

た・・・

僕は家に帰る前にどうしてものび太の状態とか確かめたくなかったので現在のび太の家に家へ歩いていった。本当にのび太の護身用の銃なら・・・あそこで何かあったのは確實

♪♪♪

ん、誰だろ？この時間の連絡は・・・

「はい。もしもし」

「《アキくん、まだ帰宅してないのですか？》」

「・・・え?!ね、姉さん!?!」

「《こんな夜遅くに出歩いていて・・・姉さんは悲しいです》」

まって?!何で姉さんは僕が出歩いてるのを知ってるの!?!何で!?!

「待って!?!姉さんはいまどこにいるの!?!」

「《私ですか?そうですね・・・》」

まって・・・なんかどんどんと心拍数が上昇しててからだが震えるのだけど!?!まさか・・・後ろにいるとか・・・?

「姉さんはあなたの後ろにいますよ・・・アキくん」

「・・・oh」

僕の後ろには見慣れない男の人と僕の・・・そう非常識な姉がそこにいた

「こんな夜遅くに出歩く不出来な弟を持った覚えはありません・・・」

「あ、あの・・・」

「よって・・・折檻です♪」

「まって?!笑顔で殺気出すとかおかしいよね?!明らかに怖いんだけど!!」

「アキくん・・・姉さんは悲しいです。・・・首以外の骨は無くなると思つてくださいね?」

「つちよ!?!まって!!これには訳がー」

「問答無用です」

姉さんは笑顔でありながらもその背景にはどす黒い怒りが見えた。

ああ・・・のび太の疑問の前に僕は殺されるのか・・・しかも姉に

海の層にされるのか……

「はいはい。玲さんおちついてください」

「むう、なぜですか？この子は夜遅くに歩いていたのですよ？それを折檻しないとダメじゃないですか？」

「いやその言葉の意味をわかって……ああそうだった。この人は抜けていたね……はあ……」

その男性は苦笑いしながらため息を吐いていた。何だかすごく同情したくなる気持ちが出てくるのはなぜだろう……

「あの……姉がお世話になっていきます。吉井明久と言います」

「ああ、君が玲さんの弟さんか……初めまして。出来杉英才と言います」

「出来杉……ああ!!思い出した!!」

出来杉といえば――

「あののび太達がいていた学生トップの人!?たしか、スポーツ万能で学業は常にトップの人!」

「いや……それは昔の話だよ。えーと、お姉さんがおるけど、吉井君か明久君どちらの方が呼ばれたらいい？」

「あ、じゃあ明久の方でお願いします」

「うん、わかった!」

とりあえずはここで話すのもだし……姉さんがおるからうん、折角だし……

「ここで話すのもだし、宜しければ……僕の家で話しませんか？あと、姉さんもついでについて痛いいい!」

「姉さんをついで扱いする弟はこうです」

「あ、ちょ……!」

その後僕の体がどうなったのかは皆さんの想像に任せます……

憧れ

姉さんの折檻をくらい終えた僕は出来杉君と姉さんに家を案内させた。……今日に限ってきちんと掃除しといてよかったと思ったのはここだけの話だ……

「ここが僕の家だけど、少しまってね。えーと……(ガチャガチャ)」
「へえ、一人暮らししているんだ。偉いな」

「私の弟ですから……きちんと一人暮らし出来なかつたら問答無用の同居コース確定です」

「きちんと一人暮らしの生活しているよ!?(……あれからきちんと送りはきちんと無駄使いしないようにしているけど今日は僕は節約のため朝御飯はカップヌードルだったのは内緒にしとこう)」

もしも間違えてそんなの口出せば怒られるのは目に見えている。いや、確実に命はないだろう……

「さあ、中に入ってね」

「お邪魔します」

出来杉君を中に入れた僕はそういうと彼は礼儀正しく挨拶して入っていった。……こういってはなんだけど姉さんとどういいう経緯で知り合いになったのだろうか? 姉さんほ常識はずれなものも知ってると思うけど……

「アキくん、姉さんはシャワーを浴びますので英才君とゆっくり話してください。姉さんは今日は早く寝たいので宜しければ部屋かしてください」

「あ、わかった。姉さんの部屋は以前と変わってないから大丈夫だよ」
「分かりました。では私は一足先に休ませていただきます」

姉さんが部屋を出ると僕は出来杉君に話しかけた。確か、出来杉君といえば僕は聞いたことあるので思いきって聞こうと思った

「出来杉君は飲み物なにかいる? なにも用意してなくて悪いけど……」

「あ、お構い無く。急に押し掛けて悪いね」

「出来杉君に聞きたいけどいいかな?」

「僕で答えられることあればいいけど・・・なにかな？」

出来杉君は近くの椅子に座ると僕は向き合うように彼に微笑みかけながらある質問をした。これはのび太達から聞きたかったことだ
「どうして君は中学校卒業するのと同時に日本にいなくなったのかな？」

「あれ、なんで君がそれをしってるの？」

「いや、のび太達から聞いていてさ・・・出来杉君は高校は日本に通っていなかったって聞いていたから・・・どこに通っていたの？」

「あー・・・そういえば彼らにも言っていないかったな・・・僕はハーバード大学に飛び級で通っているんだ」

「ふーん・・・え?!」

僕はいまとんでもないことを聞き流さなかったかな!?!なんかいますごいことを聞いた気がする!!

「まってまって!?!いまなんかすごいことを聞いた気がする!?!飛び級で!?!」

「うん。いまは二回生かな」

「いや、凄すぎない!?!卒業するのと同時にハーバード大学に行くなんて!?!」

「いやいや・・・でも高校は日本の行かないでアメリカに飛び級で受けたのに訳があるのさ」

訳がある・・・?!!いったい何だろう・・・?

「僕はね、のび太君が羨ましかった」

「羨ましかった・・・?」

「うん。ああ、彼が嫌いとかそういうわけではないから安心して聞いてほしい。君は彼の小学校の時はどれだけ聞いていた?」

「ドラえもんとか冒険の数々、そして本人にとっての黒歴史的なものも聞いているよ・・・」

「そっか・・・僕は昔からどちらかといえば現実主義だった。たとえば、月にウサギはいないけど彼は何て言ったと思う?」

「え?!月にウサギはいないの!?!そんな・・・のび太のことだから・・・月にウサギはいたとか言うの?」

「あははは、まさにそれが近いね。のび太君は僕の想像つかないことをたまに考えるあの閃きとかが羨ましかったし・・・回りに友達が多かったのは羨ましかったな・・・」

出来杉君は寂しげに昔の事を思い馳せながら僕にポツポツと話していた。それはまるで過去に約束していたことを思い出すかのような顔で・・・

「だけど彼はたった一度だけ・・・そうたった一度だけ僕にあることをあることを頼ってきたんだ」

「頼ってきた？」

「彼はね・・・僕にあるお願いをしてきたのさ。当時の彼はわからないことあれば聞くことはあったかもしれないけど・・・お願いは珍しかった」

「え？のび太は何を頼んだの？」

「・・・彼が頼んでいたのは『僕の夢は誰もが共存して仲良く暮らせる世界がみたい・・・。そのためには君の力が必要だ』・・・恐らく彼がこれを頼んだのはきつとドラえもんがいる世界を目指していたのじゃないのかな？」

「ドラえもんがいる世界・・・それって!？」

「そう。かれはロボットも人間も差別がなく共存する世界を望んでいた。僕は彼と何度か話し合い僕は誓った。彼の頼みならまずは世界を知る必要があると思ってね」

「だからってハーバード大学で飛び級って規格外過ぎるよ」

「野比君は確かに理想家だ。だけど、彼のよさを僕は知ってる。いや・・・彼を知ってる人ならきつとこういう・・・誰よりも自然と人間を愛していた男で誰よりも優しい男ってね」

「・・・」

確かにのび太はすごく自然を愛してるのが見ててわかる。っていうか、のび太自身が誰よりも人を愛してるのは何となくわかるかも・・・

「明久君は野比君とはどういう関係？」

「あ、いっていなかつたって？僕と彼は同じ高校を通ってる面子だよ。」

そして、同じクラスメートなんだよ」

「そうなんだ。彼の事を聞きたいけど、それは今度彼に会えたときに聞くよ」

「あ、そうなんだ・・・ひとつ聞きたいけど、出来杉君は何をハーバード大学で勉強してるの？あと何で姉さんと知り合いなの？」

「ああ、それは簡単。玲さんは・・・僕の師匠みたいなものさ」

「ふんふん・・・はああ?!あ、あの姉さんが師匠!?!」

あの常識がない姉さんが弟子!?!しかもものび太の友達の出来杉君が!?!

「玲さんは僕の夢を聞いてね、『お友だちのために頑張るあなたは確かにいいでしょう。しかし、努力は過程でしかありませんので私が面倒見ます。結果を結び付くまではあなたは私の弟子です』って・・・正直、玲さんは凄いや。僕の理論を論破してくるからなかなか越えられない壁だしね」

「あの・・・姉さんが迷惑かけていると思うと申し訳ない」

「あははは・・・その件は大丈夫だよ。なれているから・・・」

心底苦笑した顔で言われて僕はますます申し訳なく感じた。そういえば、出来杉君や姉さんはなんでここにいたんだろ？

「僕らは明日の朝イチに帰るね」

「えっ!?!なんでそんな早くに帰るの・・・?」

「今週から大学がまた始まるから早く帰らないと不味いからね。こちらに帰ってきたのは向こうでやることなかったから一時の帰省だったんだ」

「そうなんだ。姉さんはなにか聞いてない?」

「玲さんは明日にでも顔だしてから実家の方に変える予定だったみたいだけど何故かここに来る前に玲さんがいきなり・・・」

『む!アキくんがなにか不純なことしていますね?』

「・・・っていつてあの付近にいたんだ。結局なにもなかったけどね」

僕はその言葉に冷や汗をかいたのは言うまでもない・・・あと少し遅かったら最悪今日から見張られていたかもしれない・・・

「さて、僕はそろそろ寝るよ」

「あ、最後に来杉君！」

「ん、なんだい？」

「……のび太は昔はどんなのだったの？」

「彼の昔は今はどうなのかは知らないけど……根本的なのは変わってないと思うよ？誰よりも弱虫だけど誰よりも心優しい少年だと言うことにね」

「そっか……ありがとう。出来杉君」

「うん。じゃあおやすみ」

「うんおやすみ」

出来杉君が向かいの部屋へ向かうと僕はひそかにある決意をした……それは……

のび太が何かあったか確かめにいく……

そのためなら明日は学校を休もう!!

もう一つの夢

翌日になり、姉さん達は朝早くに出ていった。ちなみに僕はねえさんがいる以上だからだらしめてはいけないと思い、急いで早起きして朝御飯を作ったのはここだけの話だ・・・そんな帰り際に僕は出来杉君にある質問した

「出来杉君」

「ん、なに？」

「出来杉君自身の本当の夢はなに？」

「え？」

僕の質問に出来杉君は一瞬驚いた顔になりこちらをみたので僕は苦笑いしながら疑問に思っていたことをどうしても今日のうちに聞いていきたかった

「いや、姉さんが協力するほどの夢って何だろうって思ってた・・・はは、答えにくかったら言わなくていいよ」

「ああ、僕の夢は確かに具体的なことを言わなかったね。僕の夢は：：そうだね：『宇宙飛行士になることと国を変えること』ってことかな？」

「国を・・・変える？」

「うん、まずは国を変えたい理由だね。僕は日本人は働きすぎているケースが多いのといつも災害とか何かになると保身に走る人とかみている、こんなのでは子供達は幸せになれないと思った」

「ふむふむ」

「だから、僕はこれからの子供のためにもまずは国の根本的な考え方を少し変えないと不味いと思うから国を変えたい。ひとつ言えるのは戦とかそんなのははっきり言って僕自身が嫌だよ」

「まあね」

「そして、誰もが学べる環境をきっちり整えていくことと・・・全員が救われるとは思ってないが、なにもしないよりはまし。それに・・・のび太君の夢のためにも協力するにはね・・・」

出来杉君は真剣な顔で僕自身の瞳を貫くかのようにはっきりと宣

言していた。なんか、出来杉君の夢の1つは確かに生半可な気持ちで
いってないのはよくわかる

「あとは、僕がもうひとつの夢宇宙飛行士なのは・・・これは野比君の
影響なのかな」

「のび太の?」

「うん。宇宙飛行士になって、月にウサギは本当にいるのか徹底的に
調べたい。そして、可能ならいつか人類が当たり前宇宙へいけるよ
うなことになっていきたいかな」

「・・・いい夢だね。君の夢が叶うことを僕は応援してるよ」

「ありがとう!!野比君達にもよろしく伝えてね」

こうして、僕は姉さんと出来杉君と家で別れたが姉さんは出来杉君
に迷惑かけないか心底心配だ。だって、あんな常識ない姉なんだか
ら・・・

さて、まずは僕はー

「あ、もしもし鉄人?すみません、今日は体調悪いので休ませていた
きます」

休む連絡を入れておかないとダメだね・・・お腹痛いと伝えてお
こう・・・

出来杉君達が帰ってから僕は一時間後、つまりもう皆が学校に行つ
てる時間であろうのを確認してから僕はのび太の家に電話を入れた

♪♪

ー・・・この電話は留守にしています。ご用件の方はー

「やっぱり連絡が繋がらないか・・・あとは、こつそりとのび太の家に
いこう。・・・どうも昨日、いや二日前から胸騒ぎが止まらない」

僕は家を出ていき、ないと思うが鉄人が外で見回りされたときに見
られたら補習コースが確定だ!!慎重に回りをみながら歩いている
と・・・

「あれ?あれは・・・」

「・・・」

「なんでこんなところに？おーい、三上さん」
「っ!？」

僕の声に三上さんは驚いてこちらをみていたが、そんな三上さんは僕をみるなりに慌てていた

「よ、吉井君．．．なんでここに？」

「それはこちらの台詞だよ．．．なんで君は学校を休んでるのさ」

「自分の事を棚にあげるのね．．．．．寝れなかったの」

「え？」

「昨日の裏山であれを．．．のび太君の碎けた銃をみてから．．．寝れていないの」

僕はそういった三上さんの顔を見たらあまり顔色も良くなく、本当に寝不足の顔色になっていた．．．やっぱり、のび太関係で寝れなかったのか．．．

「あのさ、のび太の家に今から行くつもりだけど．．．もしかしたらのび太は案外家で寝ていたりするかもしれないからね」

「．．．．」

「僕はいまからいくけど．．．三上さん無理なら本当に無理はしないでゆっくりしなよ．．．」

「いくわ．．．」

「でも．．．」

「いくと決めたらいくの!．．．．．もしも私のせいだとしたら．．．」
「それどういうこと．．．?」

僕はいまの三上さんの発言にさすがに聞き流せず思わず聞き返した。三上さんのせいってどういうことさ．．．?

「．．．吉井君、これは本当の話なのだけど．．．4日前の午後と3日前の記憶が曖昧なの。いえ、正確には記憶が抜けている感じがするの」
「え．．．．」

「考えたくはないのだけど．．．．．のび太君が連絡とれないのもあの銃のも．．．恐らく可能性としては私が．．．私が．．．のび太君を．．．っ」

三上さんは震えながら自分の体を抱き締めて顔を傾いていた。こんな三上さんは初めてだ．．．．．のび太．．．君はいま何処で何してる

のさ・・・大切な恋人をおいて!!

「もしものび太君の家にいくならお願い!!私もついていくわ」

「でも・・・」

「もしかしたらのび太君がそこにいるなら杞憂だけど・・・」

「・・・わかった」

三上さんの決意の顔をみた僕はこれ以上止めるのは失礼だと思い、僕は頷いた。こうして僕は三上さんと共にのび太の家に向かっていったがその間の会話はなかったと伝えておこう・・・

??野比家の前??

僕のはのび太の家の前に着いたのと共に緊張していた。頼む・・・のび太が家にいますように・・・

ーピンポーン・・・

「・・・」

「出ないか・・・。よし入ってみよう!」

「・・・ええ。・・・え!?どうやってはいるの!」

「へ?扉を思いきり蹴れば開くんじやないかな?」

僕がそういうと三上さんは頭を抱えていた。え?何か可笑しいこと言っていないよね?

「とにかくまずはドアノブを回してみようと・・・ってあれ?鍵を閉めていない?」

「え?」

僕の言葉に三上さんは驚いていた。のび太が鍵閉め忘れたのかな・・・?いや、のび太のことだから絶対に忘れていたに違いない!!とりあえずは落ち着いて家のなかに入ったけど・・・

「誰にもいない?」

「(なんでこんなに悪い予感をするんだろ・・・)のび太君の部屋にいきましよう・・・」

「う、うん・・・」

「(コンコン)・・・入ってみましょう」

僕らのはのび太の部屋の前になると一回ノックをしたが返事はなかった。ますます嫌な予感が……
そして部屋にはいると……

「！」

そこには……

誰もいなかった……

その現実が今押し付けられた気がした……

願いと希望

僕と三上さんはのび太の様子がどうしても気になりなのび太の家に訪れていた。そんな僕らはのび太の部屋に入るも・・・

『あれ？二人ともどうしたのさ？』

本来その部屋にいるはずの人物はいなく、中には静かな空間として誰もいなかった。のび太の使っていた机やヒーローの漫画物やそれに・・・

「これはあのとときのみんなでとった写真……。部屋はなにも被害あとはないけど当の本人がいない・・・」

「・・・！」

「三上さん？」

「吉井君・・・これ・・・」

「これは・・・手紙？」

三上さんは机の方に行き、おるものを見つけていた。そして、その見つけたものは手紙らしいものが置かれていた

「ひよつとして・・・のび太が何か書き置いていたのかな？三上さん、宛先は？」

「書かれていないわ。・・・見てみましょう」

「・・・そうだね。もしかしたら手がかりが何あるかもしれないから読んでみるね？」

「・・・お願い」

僕は三上さんに二回ぐらい確認してオツケーもらったのでその手紙を読んだ

ーこの手紙を読んでいるものへ・・・ー

この手紙を読んでいると言うことは僕が何かあったと受け止めてほしい。何もなかったらこの手紙は残していないけど・・・ね

さて、本題だけど恐らく僕の身が何か起きた前提で書いてくね？ここ最近、物凄く妙な視線を感じるがあったが攻撃されることはなかった。

しかし、○月○日に状況が一変となった。それは・・・友人達の子がおかしかった事と突然の攻撃されたことだ。僕はその日の夜に色々調べたが手がかりは掴めなかった。

もしもこの手紙が読んでいるのが親友達や仲間が見ていたら頼みたいことがある・・・。僕がもしも、何があっても探さないでほしい。何もかも忘れて僕と言う存在が消えても・・・ね

あとは頼んだよ・・・皆

野比のび太

僕はこの手紙をみて正直怒り心頭だった。なんでこんな文章を残して消えたんだ・・・僕の隣にいる三上さんは崩れ落ち泣いていた。本当に君は・・・何を隠しているんだ・・・!

「・・・僕はのび太を探す・・・あのバカがなに格好つけて消えたのかは知らないけどぶん殴らないとだめだね」

「え・・・でもどうやって探すの・・・?まさか言い出したのはいいけど・・・なにも考えていないとか・・・」

「・・・はっ!?そ、そうだった!!」

確かによくよく考えてみればどうやって探したらいいのだろうか?言い出してから確かにそののび太を探す方法はどうしたらいいのかわからない!!

「ど、どうしよう!?!」

「・・・」

「(せっかく希望を持たせるためにいったけどどうしたらいいのだろうか!?) う・うんー」

「・・・ックス・・・クックス・・・アハハハ・・・」

「え、三上さん・・・?」

なぜ突然笑ったのか戸惑った僕は三上さんの方に聞くと三上さんは少し笑い収まったのか少し深呼吸してこちらに話しきりだした

「ご、ごめんなさい・・・何だか、のび太くんと同じ感じが見えてつい笑ってしまったの・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

「吉井君・・・私のはのび太くんを探したい。もしかしたらのび太君が行

方不明になったのは……もしかしたら私が記憶少し抜けていたのに関係するかもしれないから……」

「三上さん……」

「正直言えば怖い……私のせいでのび太くんに関わったら……私は自分を許せなくなるかもしれない……」

「……大丈夫だよ。のび太の事だからきつと案外今ごろのんびりと昼寝でもしてるのじゃないかな？本人はたしかどこでも寝れると聞いていたから案外火山付近で寝ていたり？」

「それはそれで心配ね。主にのび太君の精神が」

ようやく三上さんは昨日の夜から見せなくなっていた笑顔が少し見れたがやはりその笑顔はどこかぎこちなかった……

「でも……のび太くんを探すにしてもどうした方がいいのかしら……？」

「うーん……ドラえもんがいたらいいけど……ドラえもん？」

僕はそこまで言っただけで気がついた。そういえばドラえもんがいないのはなぜだろう？僕は気になり、のび太の机の引き出しを開けようとする……

ーバゴオオオン

「ぐふっ!?!」

開けようとした瞬間にのび太の引き出しが僕の腹に直撃した。その直撃に思わず変な声だしてしまったのは悪くないはずだ……

「吉井君!?!」

「ぐ……っは」

「ただいまー!!……ってあれ？美子ちゃんと明久君がなんでここに？」

このタイピングでドラえもんが帰ってきたのだけど……このタイピングは狙って攻撃ではないよね？

だけどこれでのび太を探す方法ができる！

「ドラえもん!!折り入って真剣な話があります!!」

「・・・え?」

「22世紀の猫型に・・・この非常事態を助けてもらおう!!そして待ってて・・・のび太!!必ず君を助ける・・・その方法を探すから三上さんを・・・助けてあげて!!」

手がかりを求めて・・・I

僕らはドラえもんにのび太が行方不明になった事とここ二日間で起きた異変を話していた。その間のドラえもんは動揺することなくドン！と構えて聞いていた。話終えた僕らはドラえもんの方を見て聞いていた

「動揺しないんだね・・・」

「・・・いや、正直動揺しているけど、もうのび太くんも高校生。過保護に大騒ぎしては本人に失礼。ノロマで不器用だけど」

「さらつと毒吐いていない!? ねえ、いまさらつと毒はいていたよね!」

「あははは・・・」

「で、君たちの話はどうだね? のび太君に関する記憶というよりも美子ちゃん自身がこの二日間での記憶が抜けていると」

「・・・ええ、私自身なんでこの二日間の記憶がないのかわからないわ」

すると、ドラえもんは腕を組んでいて何か唸っていたかはもしかつて、三上さんの記憶を取り戻す方法があるのかな!?

「ううん・・・」

「もしかつて、三上さんの記憶を取り戻す方法があるの!」

「えっ!」

「うーん・・・無いこともないけど・・・でもこれは確認出ると思えないし・・・それに美子ちゃんの事を思うと・・・」

「・・・お願い。ドラえもんさん」

「え・・・よ、美子ちゃん?」

僕の隣の三上さんがいまにも土下座しかねないほど真剣な顔でドラえもんをお願いしていた。そんな、ドラえもんは戸惑っていたが三上さんはそんなの気にせず話を続けた

「私のせいでのび太君が何かあったのなら・・・それは私の罪。だからこの真実から目をそらしたくない」

「でも・・・もしも万が一・・・」

「吉井君、心配してくれてありがとう。でもこれは私が起こしてしまった可能性のある話だから目をそらしたくないの・・・いまもどこ

かで待つている彼をこれ以上待たせたくない」

「・・・わかった！そこまで言うなら僕も覚悟は決める！・・・つとその前に、お手洗いっつと」

「あら（ガクツ）」

ドラえもんの予想外の言葉に僕らは思わずつこけたのは悪くないはず・・・。少ししてからドラえもんは部屋に戻ってきた直後にすぐにふすまを開けた

「えーと・・・あつたあつた。はい、美子ちゃんに明久君はそこに座布団敷いているから座つてね」

「え、ええ」

「つてかいつの間にお茶を汲んだの!」

「まあまあ、そこに座つて待つてねー」

ドラえもんは暖かい目で僕らに穏やかに指示だしてきたのでその指示通りに待つて座つた。そして、目の前にはどら焼きを置かれた

「こ、これは?」

「これは僕がお気に入りの店でのどら焼き。よかつたら食べてね?」

「ええ、頂くわ。・・・あ、おいしい」

「あ、本当だ!?!つて何で襖にどら焼きを置いていたの?」

「それは・・・?」

「それは・・・?」

「・・・秘密」

「だあああ?!?!」

ここまで溜め込んでの秘密はないよ!?!秘密は!!そう思ったが僕は本来の用事を思いだしどら焼きを食べながら話を切り込んだ

「そ、そういえばさつき三上さんの記憶を取り戻す方法があるつていつたけどそれはどんな道具なの?」

「・・・何種類かはあるよ。ただし、時間はかかるかも知れない。それでもいいの?」

「ドラえもんさん、とりあえずはどんな道具あるのか教えてくれない?」

「えーと、とりあえずタイムテレビ。もうひとつは記憶を読み込んで

えーと・・・何て言う道具だったかな・・・長いこと使っていない道具だったから忘れていた道具なんだ」

「その道具はどういう風に？」

「え?!」

「のび太くんの手がかりをつかめるならもう危険なのでも受け入れるわ・・・」

「いやいや、この道具は危険じゃないよ?!そこまで追い込まないよ?!」

「そうそう!!と、とにかくその道具の名前はあとで早速やってみよう!」

僕がそういうと三上さんはその場に座って僕はドラえもんの後ろに座ってお腹の中のなにかを漁っていた

「美子ちゃんの記憶を読み取ると言いたいけどこれじゃあ本人が思い出せないよね・・・うーん・・・あ、これだ!」

「え、これは?」

「【ハツメイカ】♪」

ドラえもんのポケットから出てきたのはいかにも何かをたくさん取り出していた。そして、ドラえもんはハツメイカに繋がっているマイクに声だしていた

「思い出せない記憶を思い出せる道具がほしい」

ーがーがーピイイ!!

「あ、紙が出てきた。これみていいの?」

「あ、うん。美子ちゃんも手伝ってね?この万能ドライバーと万能箱とで3人で作り上げるから」

「わかったわ。吉井君、その名前はなに?」

「名前は・・・【思い出せ棒】?」

「え?!忘れ草とか忘れ棒のあべこべ!」

?なんだろ?ほんとうに記憶が忘れる記憶道具の名前はなんだろう?

「まあいいや、とにかく作ろう!」

「おお」

こうして僕達はその新たな秘密道具を作り上げていた。三上さんは

僕ら以上に集中して作っていたのだが僕がかりなのは・・・その記憶がもし戻ってとんでもない記憶だったら彼女は苦しまないのか・・・

「大丈夫よ」

「三上さん？」

「もう・・・のび太くんを見失いたくない」

その言葉と共に三上さんは決意の目をしていた。そうだ・・・三上さんはのび太の恋人なんだ・・・だからこそ、三上さんを信用しないと!!その彼女の言葉を信じて僕らはその秘密道具を作り上げた・・・必ず助ける事ができると、なにか手がかりができると!

作り上げること一時間・・・

それはついに完成した!!

記憶を・・・

僕らはいま、三上さんの記憶を取り戻すためにドラえもんの秘密道具で作り上げたのだが、材料は何を使ったのか聞いていなかったのドラえもん聞いた

「ドラえもん、この道具を作るために使った材料は何なの？」

「あー、【思い出せ棒】ね？えーと一番のメインを使ったのは【メモリ・ディスク】の使わない予備部品だよ」

「【メモリディスク】??」

何だろ？名前からして記憶に関係するディスクなのはわかるけど・・・

「あ、そつか。なら、例えば人間って思い出せないときがあるだろう？」「うん」

「そうね。確かにいまの私みたいに思い出せないのを置き換えたらかるわ」

「あははは・・・この道具はね、ディスクを相手の頭上に投げて記憶を抜き取り、その記憶を専用のプレーヤーにかけて映像として見ることが出来るんだ」

「え？ならそれを何で最初に使わなかったのさ!?!」

「記憶抜かれた人は一時的に抜けいるから美子ちゃんが見れない可能性がある。そこでこのハツメイカーで新たに作り上げたので三人でも見れるようにする」

な、なるほど・・・よくわかるようでわからない。このままだと僕の脳が処理できないから話続けてもらおう！

「ドラえもん、そろそろ三上さんの記憶を」

「あ、うん！任せて！準備はいい？」

「ええ・・・お願い」

「じゃあいくよ！えい！」

ーココオン

三上さんに棒を当てると同時にセットしていた映像が流れ始めた。これは・・・？

「どうやら記憶が抜けている部分みたいだ。この映像は僕やのび太くんが帰ったあとみたいだからここから記憶がないみたい」

「これは・・・三上さんが何者かに抵抗している?」
「・・・」

『野比のび太は敵・・・』

『そうだ。野比のび太はお前の敵だ。そして、お前は野比のび太の偽りの恋人だ』

『偽りの・・・違う・・・!のび太君は・・・』

『だが、野比のび太はお前の敵だ。繰り返す、のび太は敵だ。そしてお前達は偽りの恋人関係だ』

『あっあっ・・・』

『あなたの大切なものを奪ったのは野比のび太。・・・彼を倒せば取り戻せる。お前の失ったものがな』

そして場面は代わりのび太は右腕を押さえながら恐らく三上さんを操るその敵ににらんでいたのだろう

『優しい彼女を必ず僕が助けてみせる!君は僕が惚れた最高の優しい女性なのだから!!』

『美子さん・・・ごめんね・・・』

そして、最後にのび太の言葉が終わると共に映像は消えた。そして消えかけていた記憶が鮮明に戻ったのか三上さんは嗚咽を漏らして涙を流してしゃがんでいた

「のび太君・・・!のび太君!!!ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい!私は・・・私は・・・!」

「・・・」

ぼくらはただその映像を見てなんとも言えずに三上さんの失っていた記憶をみて最後までこのび太らしい戦いかたというか・・・本当に最後まで三上さんを案じていたんだ・・・

「のび太・・・」

僕はただその映像を見て自分のやるせなさが感じた。僕は自分がかここまで大馬鹿だと思わなかった・・・

『・・・あとは頼んだよ』

あの言葉の意味はそういうことだったんだ・・・

のび太は本当に・・・最後まで一人で戦っていたんだと思うともしも、あのときに僕がのび太を止めていたらこうならなかった？三上さんが泣くことはなかった？そう一度考えると頭がたくさん沸いて止まらなくなった

ーポンツ

ー君だから、希望を託せた・・・頼んだよ。明久・・・

「え？」

僕は肩に誰かに声かけられて叩かれた気がしたので後ろを向くと・・・そこには誰にもいなかった

「(のび太・・・うん、わかった) 三上さん」

「・・・なに・・・？」

「のび太を助けにいこう・・・？」

「「え？」」

「僕はあるときにのび太にあとは頼むと言われたけど・・・その言い出した本人が僕に任じたのなら僕は彼を助きたい！・・・それじゃあダメかな？」

僕は僕の思いを三上さんとドラえもんに言う就先程まで泣いていた三上さんの瞳には少しばかりは光が取り戻していた

「助ける・・・」

「うん。僕はのび太に助けられてきたんだから今度は僕がのび太を助きたい！それに三上さんものび太を助けてほしいよ？」

「・・・」

「きつとのび太は生きているし、大丈夫だと思う！なにせ、のび太は文月学園のもつとも怒らせていけない強い人間だから!!だからその・・・」

「ありがとう、吉井君・・・そうね。私ものび太くんにたくさん助けられた・・・だから、私も彼を助きたいわ!!だから・・・ドラえもんさんに吉井君！身勝手かもしれないけどのび太くんを助けてほしいの！」

その言葉に僕とドラえもんは顔を見合わせて・・・三上さんに微笑

みかけた

「そんなの・・・」

「勿論・・・」

「協力するよ!!」

「!」

僕らの言葉に三上さんは驚いたかおになり、そんな三上さんをよそに僕らの意見をいった

「大体のび太くんは、昔からノロマでドジっ子で頭も悪いし、誰よりも騙されやすいけど・・・高校になつてもそれはなおっていないかつたのならここは未来の猫型ロボットの出演!!」

「のび太は僕にとって友達!だからこそ、友達が困っている三上さんも協力してのび太にいこう!」

「ドラえもんさん・・・吉井君・・・ありがとう・・・!」

「では、とりあえずは第一回!迷子ののび太君のがかりをさがそう!!えいえいー」

「おおお!!」

待っていて!!のび太!

???

僕はいつもの日常を終えて、いつもの場所へ向かった。これはあの頃からの習慣で彼らがいまもそばにいる気がする・・・

「どうしたの?○○」

僕を呼び掛けてきた女性の声に僕は苦笑しながら答えた

「いや・・・なんか異変を感じたというか・・・少し気になる事が感じたよ」

「そう・・・あれからずいぶんたつけど・・・やっぱり会いたい?」

「・・・そうだね・・・彼らに会えたら僕も嬉しいよ。さてそろそろ寝るか」

「そうね。明日も頑張りましょう」

僕の言葉に女性は笑っていたがこのとき僕は知らなかった。そう
遠くない日に再会することを・・・

手がかりを求めて・・・Ⅱ

僕ら三人はまずのび太がどんな敵に破れたのかは情報ないので裏山に歩いていった。いくらなんでも三上さんが操られていたとはいえ敵の情報があまりないのは怖いから、そこでドラえもんの力を借りて昨日見つけた洞穴とかへ向かった

「ここから先がクレーターとかなっていったわ・・・」

「そうだね・・・ずっと先の洞窟ではこれが見つかった・・・」

「これは？」

「これはのび太が学校で護身として使っていた銃。あそこら辺で砕かれていた」

「なんで学校に銃があるのかはあえて問わないけど、それが砕かれていたか・・・。うーん・・・美子ちゃんの記憶では操られていた人は男の人か女の人かわかる？」

「ごめんなさい。記憶は確かに戻ったけど・・・そこはわからないわ。

一瞬でやられたから・・・」

「どうするの？ドラえもん」

「よし、まずは精霊を聞かか」

「え？せ、精霊を聞く?？」

僕らの疑問をよそにドラえもんはハート型の食べ物らしいのを取り出していただけこれはなんだろう？

【心の土】く」

「これは？」

「ハート形に固まった土の塊型のひみつ道具で勿論ただの土ではなく、これを砕いてばら撒くとその一帯の土地そのものが自らの意思を持つようになるんだ。これは昔のび太君が使っていたんだ」

「へえ・・・」

「これを回りに砕いてばらまいてくれない？」

ドラえもんが僕にそう指示だと僕は急いでここら辺の回りを砕いてばら蒔いていた。これで全部ばらまいたけどそのあとどうするのだろう？

「いつもならゆっくりとだけど今回は非常事態だから……次は【心よびだし機】！僕の後ろにいてね？」

「え、ええ（うん）」

「裏山の精霊よ、呼び掛けに出てきてほしい！」

「!？」

僕らはドラえもんの後ろにいて驚いたのはドラえもんの出した機械がだんだんと人の形みたいになってきていた。そして、形となった女性は僕らの方を見てきた

「……何年ぶりかしら？青狸さん」

「僕は狸じゃない!!久しぶりに呼び掛けた第一声がそれ!!」

「……まあいいわ。わざわざ私を呼び掛けた理由はわかっているけど聞きます」

「のび太君がここで何かあったのかを聞きたい！精霊の君ならなにかわかるのではないかな？」

「そう……。その前に後ろにいる小娘に問う……」

「っ！」

山の精霊は形だけのはずなのに何故か物凄い睨んでいるのが僕でもわかるくらい怖かった……。そんな怯えてる僕に対して、精霊はお構い無く問いかけてきた

「貴様は自分のしたことはわかってるのか？小娘」

「……ええ、謝って許されることではないのはわかっているわ。例え……彼が私を嫌っても仕方がなかったくらい私はひどいことをしたのだから」

「三上さん……それは……」「何を寝ぼけたとことをいつている？」……え？」

三上さんは先程まで精霊の答えの時に顔を下向けていたが精霊はあきれた声で三上さんの答えを遮っていた。そんな三上さんは驚いた顔でそちらを見上げていた

「よく考えてみなさい。のび太君はそんなこと言う人？彼なら操られていたのだから仕方ないよと受け止めてくれるわ」

「確かに……」

「自分がしたことわかってるのならきちんと彼を助けなさい。．．．私たちを大切にしてくれた彼を助けてほしい」

「．．．約束するわ。のび太君を必ず助けるわ」

「．．．その覚悟あるならもう心配はないね」

裏山の精霊の問いに三上さんは動揺することなくまっすぐな瞳で目をそらさずに真剣に答えていた。そんな三上さんの答えに裏山の精霊は安心したような口調で答えていた

「さて、美子ちゃん．．．本題はいつていいかな？」

「勿論よ」

「うん。じゃあ、山の精霊よ。ここできなにか起きたか説明してくれない？」

「．．．あの日の夜．．．彼は一度離脱していた。あなたを逃すためにね」

「！（そっか、ようやく疑問がとけた．．．のび太はあのときに遭遇したのは三上さんを逃がすためにあの時間にいたんだ）」

「私は彼があのまま逃げてほしいと思った。しかし現実は無情．．．彼はたった一人であのとても敵と戦っていた」

とんでもない．．．敵？

「彼は必死に対応していた。しかし、相手は無情といえるほど全ての攻撃を弾いていた。．．．信じたくはないが、超能力のような力だった」

「超能力?!?!」

「ええ、そんな敵にのび太君は．．．手も足も出ず敗北した」

「あののび太が．．．何も出来ないなんて．．．!のび太と言えば銃で対応できたのになんでしなかった．．．」

「．．．しなかったのではない．．．出来なかった。彼はもうすでに満身創痍だったからこそできる限りの事戦った結果があのかレーター」

「．．．」

「あの日あなたたちが裏山へ来たときにロボットに攻撃されたでしょ？あれは完全に隠蔽するためよ。世間にも貴方たちにも．．．ね」

それであのときロボット攻撃してきたのか……。すると、裏山の精霊が消え始めていた

「もう限界か……」

「あの!!もつと手がかりほしいのだけど……ヒントか何かない?」

「……あるのはあるが……」

「ならおしえて!!友達のピンチなんだ!」

「吉井君……私もお願ひするわ!必ず彼を助けたい……いえ、助けに行くの!」

「僕からもお願ひする!」

「ならば、私から言えるのは一つ……そいつは恐らく復讐者と私は考える。それともうひとつ伝える。かつての友を頼って探し出せ……あとは頼むね……」

それをいいきるなり、裏山の精霊が消滅した。僕らは託されたものが大きい……

手がかりを求めて・・・Ⅲ

裏山の精霊が消えてその場にいたのは僕ら3人だけだった。裏山の精霊の話によるとのび太を倒した敵は超能力使い・・・そして復讐者っていつていたね・・・

「ドラえもん、超能力ってそんなの使えるの?」

「あるのはあるよ。超能力になるための道具はね」

「あるの!?!」

「うん、あるけどもそれを習得するには三年かかるよ」

未来って何でもありなんだな・・・。だって、どこでもドアとかタイムマシンでも規格外なのについては超能力を使えるようになる秘密道具あるなんて・・・ってまてよ?」

「それなら、のび太を襲ったのは未来人?」

「あ、たしかにそうね。ドラえもんさんのその心当たりある道具で習得したのならその可能性はあるわ」

「・・・秘密道具で習得していなかった敵なら・・・いや、これはあくまでもあり得ない話だからおいとこう」
「?」

「あり得ない話?」

ドラえもんが珍しくはつきりと言いくそうな言い方をしたのは気になるけども、とりあえずは可能性としてはあると考えておいて・・・

ーググギョルルウウウ

「今は昼間・・・お腹減ったね」

「吉井君、いつになくともんでもない空腹の音だったわ」

「たしかに・・・」

「なら、ここで食べるにはあれだから・・・【どこでもドア】」
「どこでもドア?」

「ふふん、説明するよりもまずは・・・のび太君の家へ!」

そういつてドラえもんはどこでもドアを開けるとのび太の家へと繋がっていた。・・・これ、ほんとうに一家に一台あったら便利だよ

ね・・・

ーのび太の家ー

僕らは靴を脱ぎ、玄関に靴を綺麗においてからのび太の部屋へと座った。すると、ドラえもんはまたポケットを漁っていた

「グルメテーブルかけ」

「?」

ピンクの敷地が出てきたが、僕らはそれを聞いてさらに疑問が出てきた。「グルメテーブルかけ」って言う名前を聞いたら食べ物?でもでてないよね

「とりあえず、二人とも何か食べたいのかいってね」

「へ?じゃあ・・・カルボナーラ」

「私は・・・ホットケーキと出来るなら紅茶も」

「僕はどら焼」

ーボボボボン!!!

「え!?!」

「ふふん♪遠慮なく食べなよ。話はそれから」

「っ・・・じゃあ・・・」

「「いただきまーす」」

先程まで裏山で暗かった気持ちだった僕らは昼飯によりその心は多少は振りきれた。でも、やっぱりのび太がほんとうに生きているのかはわからないのが本音・・・

頼むのび太・・・三上さんのためにも生きていてくれ・・・

一方文月学園は・・・

ジャイアンside

「・・・」

「そうか・・・」

「・・・」

「・・・武、スネ夫さん」

屋上で俺は腕を組ながら目の前にいる・・・同じクラスの二人の美女と話していた。島田と姫路、そして、俺を心配そうに横で聞く真理亜・・・

「のび太が学校に来ないのはそういうわけか・・・。で、三上は？」
「・・・その、精神的なショックでもあると思うけど学校に来ていないの」

「あまりにも昨日は・・・」

「・・・決めた。真理亜、スネ夫、皆」

「「ん?」」

俺は決めた・・・三上が精神ショックで来ていないのは心配だが・・・

「あの寝坊助を俺とスネ夫とで探しに行く!」

「「え?!」」

「僕は強制参加!」

「のび太が心配じゃねえと言うのかよ!」

「いや、心配だけどうやって探すのさ!」

「バカ野郎・・・俺がなんも考えなしにいつているとおもうか?」

「うん」

「ええ」

「ーぱーおおん」

「何で僕だけ・・・(プスプス)」

「俺は女に手を出さん!ってか、真理亜には手を出さない!」

「だからって僕だけなのは不公平じゃあ・・・いたたた・・・」

「とにかく、俺とスネ夫は放課後にのび太の家に行く!いいな」

「「「少し待った!!」」」

俺が話を決めようとする、なにか会話を遮ったのでそちらを見る
と・・・

「その話はワシも聞かせてもらった。今回はワシも参加させてくれぬか?」

「・・・友達が困っているからこそ助けに行く」

「・・・文句はねえな?」

その会話を遮った人物は秀吉、ムツツリーニ、坂本だった。うん、

まあ、いいんだが・・・

「ムツツリーニ、その血だらけをどうにかしろ。坂本、そんなボロボロなのは霧島にお仕置きか？秀吉は・・・もはやつつこまん」

「何でワシのだけスルーじゃ!？」

「わかった・・・。なら、いまここにいるメンバー全員がのび太の家へいくぞ!!」

「!!」「おお!!」「!!」

「・・・おお」

へ？

「・・・雄二、また隠し事した」

「し、翔子!?いつのまに!？」

「・・・お仕置きとしてこちらにきて」

「くっ!とにかく、お前たちあとで!!」

霧島がゆっくりと坂本を迫ると坂本は必死な顔で逃げた。・・・

まあ、放課後の行き先は決まった!

待ってるよ・・・ねぼすけのび太!!

ー君たちに会いたい

「ん?」

「ジャイアン?」

「いや、なんでもない」

いまの声は・・・のび太ではない。一体だれだ??なんか懐かしい声だったが・・・

もしかって遠い星にいるお前とかじゃないよな・・・?

友よ・・・

手がかりを求めて・・・IV

明久 side

僕らはのび太の家で現在、これまでの情報とこれからの動きを的確にするために計画を練り込んでいた。ドラえもんが目の前で未来のスライドみたいなのを取り出してそれを説明し始めた

「じゃあ、まずは整理だね。まずは美子ちゃんは一時記憶喪失・・・もとい、のび太くんに関する情報や君をあやつた情報は消されていた。これは間違いないね？」

「ええ。ただ・・・」

「ただ？」

「私を操っていた人は残念ながら顔も見れていないから情報はないわ」

「ああ、そうか。先程のは僕らでも認識できなかったからね」

「まあまあ、そこはおいとくとして・・・次に明久君は？」

三上さんを操っていた情報が足りないのは残念だけどいまは整理する話だからそこはおいとこう。さて、次は僕の知ってる範囲の情報を与えないと

「僕が最後にのび太と会ったのはあの日の夜だった」

「その時ののび太くんは？」

「夜だからどういう状態かはわからないけどいま思えばかなり切羽詰まっていたのだね・・・」

「他に情報は？」

「情報・・・あ、そういえばその日の学校の様子はおかしかったよ」

「可笑しかった？」

「うん。それはー<♪♪♪>ごめん、電話でいいかな？」

僕が続きを話そうとすると、何か狙ったタイミングなのか電話の知らせが届いた。こんな時間に一体だれだろう？

「はい、もしもし・・・って雄二？どうしたの？」

《明久か!?!いまお前どこにいる!?!》

「え？今・・・今はのび太のいえにいるよ」

《のび太は今家にいたか?!》

え?のび太に関して聞くということは……恐らく雄二もなにか知ってたんだね

「のび太は残念なぐらいなかったよ」

《ツチ!!聞きてえこと出来たのに!!》

「聞きたいこと……?」

《ああ、つてその前にお前の周りには誰かいるか?》

「え、ドラえもんとか三上さんだけ……」

《そこに三上はいるのか……?まいったな……》

あれ、なんか三上さんがいると伝えたらなにか急に歯切れが悪くなったけどどうしたのだろうか?

「どうしたの?吉井くん」

見かねた三上さんが心配そうにこちらを聞いてきたので僕は今の現状を三上さんに伝えると三上さんは……

「(のび太君関係かしら……?)吉井君、スピーカーにしてほしいのだけどいいかしら?」

「え、でもなんか向こうの様子がおかしい……もしかしたら……」

「ええ、恐らくのび太くん関係だとおもうわ。……私のことになって急に歯切れが悪くなったのは……その可能性が高いわ。でも受け止めてみせるからお願い」

「うん、わかった。雄二、スピーカーにしていいかな?三上さんも受け止める覚悟できたから」

《……わかった。そちらはスピーカーにしといてくれ》

僕は雄二に伝えると雄二は覚悟したかのように話し始めた。そういえば、何で雄二は今このタイミングでのび太とか三上さんを聞きたのだろうか?

《これはお前も聞いて驚くが……》

「なにいつてるのさ?今さらそんなに驚かないよ?」

《その……三上も覚悟して聞いてほしい……》

「え?」

《これはさつきあのババアとかの前にとおるときに聞いた話なんだ

が………》

「ババア? ……もしかって学園長室だよね? その話が出た瞬間だんだん嫌な寒気が止まらなくなってきた」

「そのババアのほうがどうしたの?」

《……》

「雄二?」

《……悪い。いつになく冗談言えねえ話だ》

「それどういうこと?」

あの雄二が割りと洒落にならないという言葉に僕は違和感感じた。これじゃあ……まるでなにかとんでもないことがあったのじゃ……

《……のび太のことだな》

「うん」

《ババアの部屋から聞こえた話で……のび太は………》

「のび太がどうしたのさ? 雄二」

《っ……あのババアは……のび太を……文月学園を退学処分にするそうだ》

「………え……?」

僕らは思わぬ知らせに全員が固まった………

のび太が……文月学園を退学……?

手がかりを求めて・・・V

僕らは情報整理するためにのび太の家に行ったのだがあの情報を聞いた途端、僕らは急いで靴を入れてドラえもんにも【どこでもドア】を出してもらった

そして・・・

――文月学園学園長室――

「ババア!!!のび太が退学ってどういうことだ!!!」

「いきなりピンクのドアが出てきてしかも出てきたのは三上美子と未来の猫型のドラえもんにも・・・うちの二年を代表するバカかい」

「し、失礼します」

僕の後ろではドラえもんにも三上さんが礼儀正しく入っていたがそんなのはどうでもいい!!

「やい、ババア!のび太が退学ってどういうこと!」

「ああ、その事かい・・・《コンコン》――誰だい?」

――2―Fクラスの坂本雄二です。姫路と島田と秀吉と土屋と剛田と氷華と骨川とAクラスの霧島も入りますが入ってよろしいですか?

「雄二?」

「(ようやく来たかい) いいき、入りな」

「失礼します」

僕の疑問とよそに雄二たちが入ってきたのだが、その顔は暗かった。どうやら皆ものび太の退学を聞いていて暗いそんな中、雄二が代表として口を開いた

「・・・今回の件はどういうことですか?学園長」

「何のことだい?」

「・・・惚けるな。野比のび太の退学の件はどういうことだ?」

「・・・何であんたが知ってるのかね?坂本」

雄二が今までにないくらいの苛立ちと怒気のある言葉で問い詰めていたが、学園長は冷静に対応していた

「はあ・・・まあようやくあんたらが来たのは助かったね。これで話せ

るというものだい」

「なに?」

「「「「「??」」」」」

話せるという・・・どういうことだ? そう思っていると学園長は深いため息を吐きながら、僕らを一瞥して話しはじめた

「・・・まず最初に説明しておく・・・のび太の退学の話はした覚えはないね」

「「「「「・・・はあ?!」」」」」

「だ、だが!?! 学園長室前とおるときに確かにそのような発言を!?!」

学園長のぶっちゃけな発言に僕は啞然となり、雄二は慌ててそのような発言があったと聞き返すと学園長は思い出したように話した

「ああ、それはのび太の件なのは確かだが、こちらが話していたのは『もしものび太の件が本当なら退学だが、現在本人に調べてもらっている』って話さ」

「・・・雄二・・・」

「な、なら、一体だれと話していたんだよ!?!」

「ああ、あたしが話していた相手は・・・西村先生と学年主任の高橋先生だよ。少し前の件で話し合っていたからね」

そこまで聞いた僕らはゆっくりと雄二の方をみていたら雄二は冷や汗が溢れていた。どうやらきちんと聞いてなかったからのび太が退学だとおもったみたいだ・・・

「よ、よかった・・・」

「安心しているところ悪いが、のび太の退学処分は下してはいない。現在のび太は・・・あたし独断で謹慎処分を下した」

「「「「「・・・え?」」」」」

「因みにのび太自身も納得してるさ。・・・あたし個人は本当はしたくなかったがね」

したくなかったがね・・・? いやいや、まって・・・のび太は・・・
「つちよ、まって!?! 話がついていかれないけど!?!」

「私もよ・・・。退学ではなく謹慎ってのもまた気になります」

「訳を教えてくださいませんか?」

「……ここにいる全員が秘密出来るならのび太のことも話せるということさね。もしも情報を漏らしたら西村先生との個人合宿一週間してもらおうからね」

「……秘密にします!」

鉄人との死の補習は受けたくない!あの霧島さんすら、無表情とはいえ即答なのはやはり鉄人の補習は恐ろしいと再確認できたよ!

「…学べるのはいいことだけど一週間見張りでの西村先生との授業は大変」

「いや俺としてはお前が鉄人の補習受けると俺は思えない。ってか、一生あり得ない気がする」

「話し続けていいかい?」

あ、そういえば何でそんな理由になったのか知りたいから続きを聞かないと

「つい最近の話でのび太と話す機会があつてね……のび太にある映像をみせたのさ」

「ある映像を……?」

「その映像は……のび太が召喚システムの情報を盗んだ映像さ」

「……!」

のび太が……召喚システムを盗んだ!?僕は動揺のあまり思わず立ちとうとするとジャイアンが立ち上がりつて学園長に質問していた

「それは本当にのび太でしたか?学園長」

「その映像だけで見るなら……野比のび太は間違いなく、ぬすんでいたね」

「映像だけで見たなら?」

その言葉に僕はオウム返しのように聞き返すと学園長はため息をつきながら答えた

「そうさ、いくらなんでも野比のび太がそれをする理由は見当たらない。そこであたしはのび太と話したのさ。これは明らかに時間も時期も可笑しいってね」

「その映像はいつ?」

「ふう……あんたらが召喚システムの異常出たときさ。あのときは盗

まれていたのを結果的にのび太達が取り返してくれたが・・・あたしは
気になったのさ」

「それで写っていたのがのび太？」

「そこで、ドラえもんにたのみたいことがあるのさ」

「僕にですか？」

「あんなならこの映像を見て気づくのじゃないかね」

「僕でお役にたてるなら少し映像を拝見させてください」

学園長がパソコンをドラえもんに見せるとドラえもんはそのパソ
コンに向き合っていた。そして、最初は頷いていたが途中で大きく驚
いていた

「・・・学園長、これはのび太くんじゃありません」

「そうかい。ならこれは何で映像に出ていたのだい？」

「この偽のび太くんは・・・未来の道具を使っています」

「・・・何でそんなことがわかるのだい？」

「わかりますよ。のび太くんとは長い付き合いでしたから。・・・そも
そも本物ののび太くんならそんなことをする理由はないですし、これ
は明らかに歩き方とか偽物です」

「それもそうさね・・・。やはりこれはのび太ではなかったというのが
確実性がでたのなら・・・のび太の謹慎は来週からとこうとしようじや
ないか」

「あの・・・その場合ののび太は謹慎と先生方は決めているのですか？」

そう。さつきほどのは聞けば鉄人達も今回の件は知ってるなら、恐
らくのび太の謹慎とかは聞いているはず

「安心しな。のび太のは学校全体の判断ではなく、あたし個人が決め
た話で正式な決定ではないよ」

「よ、よかった・・・」

学園長の言葉に三上さんはほっとした声で顔を地面に向けていた。
そんな中、学園長が怪訝な顔でドラえもんに質問していた

「ドラえもんに聞きたいけど、あれが偽物ののび太なら一体どんな道
具なのかわかるのかい？」

「恐らくですけど・・・その道具は悪用して販売禁止になった変装する

道具です」

「そんなのがあるの？」

「うん。でも、ほらそんなの調べなくても分かりやすいのはこの犯人はのび太くんを偽るにしてはダメだったね。挙動不審にまわりをみていたし、メガネを何回もかけ直す癖はのび太くんにはないからね」

な、なんかドラえもんはのび太の事を知り尽くしているんだな……。そうきいていたら、なんか本当に純粋な深い絆があるんだな

「ま、これでのび太の退学の件は無くなったのなら失礼させてもらう方がいいか？」

「構わないさね。アタシはその猫型にどうしてもこれを調べてほしかったからお互いの用件はおわりさね。……。くれぐれも他の人に話さないようではないから気を付けな！」

「「は、はい！」」

そういえば学校でもかなりの機密なんだったね。僕らはどこでもドアで帰ろうとすると――

「明久、あとでのび太の家に行くから待ってろ」

「わかったよ。のび太の家で待つとくね」

雄二は思い出したようにふり返り、こちらに話していたので僕はその意図がわかったので了解した。これはごまかしたいときの時だ

「……雄二、少しお話を……。嘘をいったことに関して」

「……逃げる!!」

「……逃さない」

雄二は霧島さんの言葉を聞くなり、全力疾走で出ていったのに対して霧島さんもどこからその身体能力が出てきたのか無表情での全力疾走で走っていた

さて……。これですますなにか可笑しいことに気づいてきたが今はのび太の家で待たないとね……。

手がかりを求めて・・・VI

明久 side

あの後、僕と三上さんとドラえもんはのび太の家で皆が来るように待っていたのだが、どうしても気になることがあったのでドラえもんに質問した

「ドラえもん」

「ん、どうしたの？」

「のび太の家のにび太のお母さんやお父さんが見当たらないけど・・・まさか何かあったの？」

「そういえば・・・」

よくよく考えてみたらのび太の家で鍵が空いてるのは可笑しいし、なんでのび太の両親が家にいないのか解らない。そんな疑問に察したのかドラえもんは思い出したように手を叩いていた

「あー、そうだった。のび太君の両親は旅行へ行ってるんだ」

「また!?!」

「今回は、一週間温泉旅行だねー。ちなみに僕とのび太くんが買い物してるときにそれを当てて親孝行こうとしてプレゼントしたよ」

「へえ、なら大きい心配はしなくていいんだね」

「うん」

ーピンポーン

のび太の家でインターホンがなったと言うことはどうやら雄二達が来たみたいだ。さて・・・どこから話せばいいのやら・・・

来たメンバーは、ジャイアンと真理亜さん、スネ夫、雄二（なぜかボロボロな姿できていた）、霧島さん、姫路さんと美波と秀吉とムッツリーニ・・・計9人で僕らを含めたら11人の会議になるね

「・・・何だど？」

これまでのつかんでいた情報と起きたことを説明し終わると、雄二は心底驚いた顔になっていた。もちろん雄二に限らずに僕達も驚いていた

「わ、悪いけどもう一回いつてくれない？ドラえもん……」

「……うん。これまでの情報を聞いて考えていたら……のび太君はずっと前から目をつけられていたことになる。そして……今回……いや、これまで、全て嵌められたということさ」

「そういえば、あのときのび太が行方不明になる日何故かワシらがイライラしてしまっていたのう。あれももしかって嵌められていると言ふことなのか？」

「恐らくは……」

「だとしたら……何故明久には効果がなかったのじゃ？」

「それは……」

秀吉の疑問にドラえもんも困惑しているなか雄二とジャイアンがなにかわかったように手を叩いたので全員そちらに意識向けた
「わかったぜ！」

「ほう？剛田ももしかってわかったのか？」

「えっ!?二人はなんで僕が効果なかったのかわかるの!？」

「ああ……」

「それは……」

「明久が底抜けのお馬鹿だから効果が効き目なかった!」

「……納得」

「みんな納得しないでえ!?そんなので納得するなんておかしいよ!!」

なに!?その馬鹿は風邪引かないの理論的なのは!？」

「まあまあ、話続けるね？」

そんな中ドラえもんが皆を宥めていてドラえもんは新たにモニターを取り出して映像を写していた

「まず现阶段ではわかってるのは①美子ちゃんは操られていた②のび太君はその操った敵と戦ったがその後消息不明③今回の件は時空犯罪の可能性が濃厚だけど、現在どこにいるのか解らないそして……」

「……そして……?」

「④超能力使いの敵がいる」

「……はあああ!？」

「?!」

この最後の言葉にジャイアンとスネ夫を除く僕らがあり得ないと
言う反応をしていたが、スネ夫とジャイアンは難しい顔で腕を組んで
考えていた

一体どうしたのだろうか・・・？

「武君？」

「・・・ドラえもんはひよつとして・・・あいつらが関係していると
？」

「でも彼らはもう只の・・・」

「うん。だけど、実際の敵と戦っていないからなんとも言えないよ」

「だよなー」

そんな彼らの反応に姫路さんがおずおずと手を挙げてきた。どう
やら、他のみんなもその反応に気になるみたい

「あのー・・・さつきからそちらにしか解らない言い方されてますけど、
何が考えられるのですか？」

「あー、そこはその・・・」

「でも、ひとつ気になるけどのび太を倒した敵はいまどこにいるのだ
ろう？」

「そこなんだよねー。あの、のび太君が負けた敵は一体どれ程の力な
のか調べても出てこないんだよねー」

「そっか・・・なら、夜にもう一度同じ場所で行ったら案外出てくると
か？」

「いやそれはさすがに・・・あるのか？」

「少なくとも親玉が出てくる可能性もあるかもねー・・・」

「嫌々それなら、小物のやつが出てくるかもしれないぞ」

「ちよつと、アンタ達本来の話からずれているわよ」

「！！「はっ!?!」」」

美波があきれた声で言うとな僕ら男子陣は全員いま気がついたかの
ように声揃えていた。しまった、本題からかなりずれ込んでいた！

「なら、夜に裏山へ行くのは・・・明久、俺、姫路と島田とムツツリー
二と・・・スネ夫でいくか？」

「なんでドラえもんとかジャイアンではなくスネ夫？」

「まず、ムツツリー二なら偵察に向いてるのが一つ。姫路と島田がいるのは単純にのび太達が戦った場所を知っているからだ」

「もうひとつはなんじゃ?」

「スネ夫には無敵砲台というところっておきがあるし、接近もできる。あの意味バランスがとれているから編成いれた」

「なるほどのう。そして、明久と雄二の接近特化した二人でいくということかのう」

雄二の説明にみんなが納得していたが、なぜか僕はある疑問が出てきた

「なら、何故ドラえもんとジャイアンと三上さんと秀吉と霧島さんは編成していないの?」

「・・・事と次第によつては命を・・・ごほんごほん、お話」

「さらつと俺の命を奪おうとするな! ったく・・・これにも訳がある。もしも、裏山で何らかの戦闘があつたときにとつておきの戦闘豊富のためにドラえもんと剛田をここをおいてる。で、三上は体力があるしいざとなれば全員で走れるからな」

「霧島さんと秀吉が編成してない理由は?」

「最終兵器みたいなものだ。秀吉に至つては錯乱で声を偽ることもできるからな」

「なるほど・・・。あ、でもあの冒険で使っていたあの腕輪は他のメンバーは使えないと思うよ?」

そう、たしか手元にあるのは前回冒険いつていた僕らといま行方知れずののび太ぐらい。姫路さんや美波、ムツツリー二とか秀吉に霧島さんのはないのはきづいてるのだろうか?

「そこは僕に任せて! とりあえず、腕輪をはずしてだしてくれない?」

「?はいよつと(ポンツ)」

僕はドラえもんに腕輪を渡すとドラえもんはなにかポケットから鏡を取り出していた。それはなにだろう?!

「ふふーん」

「ドラえもん、それは?」

「まあ、見てなつて。ほいつと」

ボタンをおしてその腕輪を鏡に移すと・・・

「・・・!?」

「えええ!?」

「な、なんと!?」

「か、鏡から・・・」

「腕輪が出てきたああ!?」

ぽんぽんっとその鏡から腕輪が出てきて、五人分くらいのを出し終えたらスイッチ止めてポケットに入れた

「ど、ドラえもん。いまのは?」

「これ?ふふつ、「フェルミラー」といって、コピー機みたいなものさ」

「そ、そんなものがあるんだ・・・」

そして、ドラえもんが真剣な顔になったので僕らは全員で顔を見合わせてドラえもんの方を見ていた

「いいかい?裏山にいく組は心して気を付けてほしい。もしも、のび太君を倒した敵が出てきたときは無理せずには逃げる。そして、残る組は・・・少しだけ調べておきたいことがある」

「調べておきたいことがある?」

「うん。裏山の精霊が言った言葉を考えるなら・・・その可能性をかけて見ようとおもう」

「よくわからんが・・・よし!裏山組は準備いいな?」

ドラえもんの言葉に疑問をおもうもそこは頭の片隅に置いていた。そして雄二の言葉に裏山組のんなはうなずいていた

「よし・・・なら迷子ののび太を探すぞ!」

「「「おおおお!!」」」

第2弾!のび太を探せ!!

行動開始!!!

迫る魔の手Ⅰ

スネ夫 side

僕ら裏山組のメンバーは僕、明久と坂本と姫路と島田とムツツリー
二の6人でのび太の家にはジャイアンとドラえもんと三上さんと霧
島さんと秀吉の5人はのび太の家で待機。真理亜さんは妹達の心配
もあるから一時的に抜けてもらっている

『スネ夫、気を付けろよ?』

『僕らの考えが間違えてなかったら、あれの可能性があるよ』

どうやら、ジャイアンとドラえもんも僕と同じ点が気になったみた
いだ。・・・当たってほしくないな・・・

「スネ夫、さつきからなにか真剣な顔ですつと考えているけどどうし
たの?」

「え?」

「なにか深刻そうな感じで考え付いたから気になったのだけど・・・」
「あ、うん。ごめんごめん!少し気になることが・・・僕のなかで引つ
掛かっていることがあってね」

「気になることですか?」

「うん。今回の事件でどうしても気になるのは何故のび太だけ狙われ
ていたのかがね」

そう、これはもう一つ気になったことだ。のび太が狙われる理由が
解らない……。あののび太を倒した敵は未知数な上、同じくらい経
験を積んだ僕らでも勝てるかもあやしい

ーーーー超能力

この単語は僕にとっては見覚えがあるというより、僕らあのとときの
メンバーなら知っているはずだ。あの能力はもう使えないはずなの
に...それが本当なら誰が一体・・・

「ここか? 姫路と島田」

「はい。ここです」

「ここでのび太の手がかりを得たのよね」

「思っていたより綺麗だな・・・」

目が出ているとはいえ、想像していたのよりもきれいだった。のび太がやられたのは夜だから倒した敵が出てくると思えない・・・
「！」

「スネ夫君？」

「あちゃー、考え事しすぎて・・・気づくのが遅かったか」

「あ？・・・ああ、そうみたいだな」

「・・・2、いや、6体のロボットがいる」

僕の言葉に雄二とムッツリーニも気づいていたのかだらけモードから真剣な顔になっていた。やれやれ、やっぱり読みは当たっていたみたいだ

「皆、行くよ！サモン」

「！！「サモン！！」！！」

明久の掛けことばに僕らも声を揃えてサモンと言うと、僕のは少し改造をしていたので緑色の忍者の服装になって、ムッツリーニは黒色の忍者の服装だった。姫路と島田は召喚獣の格好と変わらない服装になっていた

「こ、これが人のまとった召喚獣!？」

「す、すごいです。何故か力が溢れます」

「姫路と島田は協力して一体相手しろ。スネ夫は目の前の一体頼めるか?」

「了解！明久が2体ね！」

「うん・・・ってこらあ!?!さらつと押し付けたな!?!」

明久の叫びを僕はスルーして、ロボットに向かってまずは手裏剣を投げるとー

「んっ?。(予想より反応は遅い?罠か?)」

いくつかロボットの体に直撃したので僕は疑問に思ったがそんなのはどうでもいい!さっさと倒す!

「でりやああー!」

ーキンツ

僕はさっさとけりをつけるためにロボットなら人間でいう心臓辺

りとかに刺せばおしまいだと思い攻撃すると案の定倒れた

さて他の皆は・・・

「くらいなさい!!はああ!!」

「ふはははは!!ストレス発散だぜえ!!」

「ムツリーニ、手伝つてよ!!」

「・・・別用件で忙しい(カシャカシャ!)」

あーうん・・・一応戦場なのになにこの緊張感のない戦いを感じるの?・・・?

数分後・・・

明久達もなんとかロボットを倒したので辺りは静まっていた。やはりドラえもんからまとめられた通り隠蔽が目的か?

「あー、やっと終わった・・・」

「ふう・・・なんかスッキリしたぜ・・・」

「・・・雄二はまさに鬼神の如く生き生きと戦っていた」

「どう戦えばよかったか解らないけど・・・瑞希は体力大丈夫?」

「はあはあ・・・はい。緊張しましたけど体力は問題ないです。・・・骨川君、どうしたのですか?」

姫路が心配そうにこちらに聞いてきたので僕は慌てて気を取り直して答えた

「あ、ごめんごめん!大丈夫だよ!」

「なにか気になることがあるの?」

「まあ・・・うん。このタイミングでロボットが出てくるにしてはあまりにもタイミングが良すぎすよね」

「言われてみれば・・・」

「・・・ムツリーニ、お前が仕掛けた奴は声はしないか?」

「・・・無反応」

「となれば、独断でロボットが攻撃してきた?」

「その可能性は低いとおもうわ。ドラえもんとか言っていたでしょ?隠蔽するために動かしていた可能性があるって」

「それに・・・今回この件は大きい問題になりそうだ」

僕らがそう話していると、辺りが急に暗くなった。そんな急激に暗

くなると思わなかった僕らは戸惑いを覚えていた

「暗くなつた!？」

「全員固まれ!!」

「了解」

僕らは全員がはぐれないように固まると一つの雷が落ちてきた。あれは・・演出?それとも・・そう考えているとフード姿の男?らしい人物が出てきた

「実に面白い・・・実に面白い・・」

「(ゾッ!)・・・っは!?!全員僕より前に出るな!!」

「ほう・・・。実力の違いを気づくやつもいたか?」

「スネ夫・・・?」

「(こんな威圧感・・・初めてだ!!)お、お前は何者だ!？」

「何者か・・・?ふむ、その問いには何を意味する?」

僕のといにそいつはなにもかも興味深そうな声で問いかけてきた。だがその間にも僕は気を緩めることなく、震える体に無理矢理鞭をうって刀を構えた

「ふむ・・中々興味深いな・・む?」

僕は相手に攻撃される前に手裏剣で威嚇をした。そのようなソイツは少しだけ動きが止まった

「ツク、坂本、明久!!姫路と島田をつれて逃げろ!!ムツツリーニは急いでドラえもんに知らせて!」

「スネ夫!？」

「本当にヤバイよ・・・。こいつ・・別格すぎる!!」

僕は刀を構えて前の敵を見詰めていた。こいつははつきりいつて全員で攻撃しても勝てない・・いや、勝てそうにもない!!

「ここは僕がどうにかするから行け!!明久達!!」

「でも!!」

明久達がなにか言おうとしていたので、僕は近くの木を素早く斬るとその木はまっすぐに僕と明久達の間で落ちた

「うわっ!？」

「骨川君!？」

「アンタどうするつもりよ!？」

「・・・悪いね。明久」

僕は振り向くことなく向こうにいる明久に優しく語りかけた

「スネ夫・・・？」

「この闘いの切符は僕とあいつしかないから明久達は参加できないよ。つまり、二人だけしか出来ないからな」

「スネ夫!!」

僕は明久の叫びを無視してゆつくりと前に歩くとフード姿の男？は腕を組んで待っていた

「敵役にしては律儀に待ってくれたんだね」

「ふっ、そちらの勇氣に免じて待っただけだ。・・・別れの遺言は終えたか？」

「遺言ね・・・そんなの要らないよ」

「なに？」

「あとのものが必ずなにかを成し遂げてくれるように・・・ただ僕はお前を倒せばいいだけだ!!」

「・・・面白い!!ならば!!恐怖と絶望で終えるがいい!!」

顔が見えなくてもわかるくらい嬉々とした声で僕にいつてきた

さして・・・

震える足を無理矢理力いれて僕は深呼吸した

「骨川スネ夫・・・参る!!」

地面を大きくけり、フードの男？へとむかった・・・

必ず倒す!!

迫る魔の手Ⅱ

スネ夫 side

僕はいま必死に敵を応戦していた。こいつはさつきから攻撃を交わしているんだけど・・・なんかさつきからこちらの反応を楽しんでいるな・・・

「ふふふ」

「何がおかしい!」

「いや、なに・・・所詮人間は脆いものだと思ってな」

「は?」

フード姿の男が嘲笑う言葉に僕は疑問におもった。そんな疑問をよそにそいつはさらに嘲笑うかのように話していたがそんなのはどうでもいい

「そういうえば、いくつか聞きたいことがある」

「ふつ、なんだ?降参でもするのか?」

「・・・お前は・・・何が目的だ?」

「目的?そんなの・・・復讐に決まっている!!」

フード姿の男が手をかざすと、周りの石が反応示していた。これは!?!

「少し遊ぼうか・・・楽しませてね」

「っ!?!」

「そーれ!」

まるで小さい子供が大人にせがむときの言い方になり僕は思わず寒気が走った。そんな僕に構わずそいつは攻撃をしかけてきた

「(超能力って情報はビンゴ!!) はああ!!」

僕は以前にもらっていたドラえもんの情報ぴったりだったので多少は動揺しながらも石をうまくこと交わしていた

「(となればのび太はこいつにやられた?)・・・ねえ、君は誰だ?」

「何、その質問は?」

「少なくとも復讐者というわりには戦いなれていない。僕達はこれまでに多くの経験をしてきたが・・・僕たちが倒してきた人間がこの場に

いるのか?」

「・・・」

「そもそもお前は始め気になることをいったね?・・・『人間は脆いものだ』・・・まるで自分が人間ではない台詞だね」

僕は目の前の敵の動きを警戒しながら皮肉を込めて質問するとそいつは・・・

「つくすす・・・アハハ・・・アハハハハハ!!」

「・・・(何わらっている?)」

「中々面白い考えしているけど・・・その質問に関しては答えるつもりは・・・ノーだね。そして・・・」

「!?」

奴が気になる言葉が続けるなか僕は上を見るとおもわず驚愕した。いくらなんでもこいつは明久達を先に逃がして正解かもしれない・・・なぜなら・・・

「くっ!!」

「うわー、すごいすごい!大きい岩を避けるなんて・・・よく気づいたねー」

「調子に・・・のるなあ!!」

「こんなの簡単に交わせるよ?」

僕は手裏剣をひたすらフード姿の男に攻撃するとそいつは冷静に交わしていた。そんな初歩的な攻撃を交わすのは予想通りなんだから!!

「そんなのはわかってるさ・・・つりあああ!!!」

「やけくそ・・・?」

「いや、そんなの通用しないのは百も承知。だから・・・」

「!?」

僕はあえて近くの木の枝をうまいこと手裏剣で狙うとそれはそいつの頭へと落ちた。そいつはそれまでの余裕さはまだあるも予想外の行動に目を見開いていた

「ツチ!!」

「(視線を上にあげた!いまだ!) 特殊能力発動!!」

「！」

そいつが別の視線にむけている隙に僕にとって最大の特特殊能力の武器を呼び出す時間ができた！

「それは？」

「……こいつは僕にとって最高の特殊能力」

「……へえ……面白い。此方の力と君の最大の力……どちらが上かな？」

僕の背後に【無敵砲台】を召喚していつでも発射できる体勢にしていたが目の前のこいつは何故か冷静に待ち構えていた

「……ひとつ聞こう」

「何？此方の質問に答えてくれなかったくせにこちらには答えろとでも？」

「いやなに：君たち英雄は何故、下らない人間のために戦っていた？」「なに？」

「私は……貴様達のように希望を満ちた顔が絶望的になるのがみたい」

そいつの言葉とともに恐ろしく鳥肌が止まらなくなった。なんで、こいつは……恐ろしく感じるんだ!?

「……っ」

「力の差もわからずに挑むその精神……理解できない」

「はっ……そんなの決まっている。僕らは……僕はお前みたいな頑固は大嫌いななのさ……!!」

「……質問に答える気はないということか」

「当たり前だ……発射!!」

「哀れな……」

……のび太……すまない。仇討ち……できないかも……皆……逃げれたかな……。ドラえもん……あとは頼むね……

——ゴオオオオオン

明久 s i d e

「「!?」」

僕達はスネ夫が殿してくれたお陰で裏山をもう少しで抜け出せるとなったとき、上の方から大きなおとが聞こえた。その音を聞いた僕らは全員足を止めた

「スネ夫・・・?」

僕はおもわず上で戦っているスネ夫が何かあったのではないのかと心配して呼び止めた。だが、このとき僕達は足を止める場合ではなかった

なぜなら・・・

「・・・目標発見。これより捕獲体制にはいる」

目の前に先程のフード姿の男とは違う意味で恐ろしい敵が近づいてるのを僕らは気づかなかった・・・

迫る魔の手Ⅲ

明久 side

僕らは今全速力で山を降りていた。スネ夫の殿のお陰でなんとか今のところはあのフードの男はいない……

ーードゴオオオン!

「二!二!」

突然後ろの方にとんでもないおとが聞こえたので僕らは振りかけたが、その場所は白い煙が漂っていた。その光景に僕らはおもわず足を止めた

「あそこから煙出てるのは……骨川くんのところですよ!」

「どう考えてもそうよね……アキ!どうする?」

「っ……」

「なに考え込んでいやがる!?骨川の決意を無駄にする気か!?さっさといくぞ!!」

「雄二」

僕は悪友の雄二が僕らを叱責するようにそういった。その顔はスネ夫の事が心配しているのが分かるの同時に焦っている顔だった

「正直お前たちの気持ちは分かるが、あいつはなんていった?」

「『ここは僕がどうにかするから行け!』……もしかして……」

「そうだ!俺たちのやることはこの事をドラえもんに伝えることだ!……なに、あいつものび太とともに多くの冒険を乗り越えたやつだ……きつと大丈夫なはずだ」

「そうね……そうよね!」

「はい!骨川君ならきつと……え……」

姫路さんが続きを言おうとすると、僕らは異常な寒気を感じた。こんな寒気……今まで経験したこと無い……

ー!逃げなきゃ……!

そう思い急いで逃げようと思ったら……

ー!ー!ペアアアン

「二!二!」

「……」

「ここから急いで逃げようとした僕らの目の前に突然横の方から攻撃が飛んできた」

「ええい!!こんなときに敵襲なんてしないでよ?!」

「ツチ!どこからの攻撃だ!?!」

「!アキ後ろ!!」

「明久君!」

「!」

僕は美波と姫路さんの言葉に後ろを振り向くと先程の男とは違う赤いフード姿で僕の背後から攻撃を仕掛けてきた

「っ、サモン!」

僕はいつものポーズをしないで発言だけするといつもの武器の木刀が出てきて相手の攻撃を対応した

「くっ!!」

「……」

「ーパシッ!」

「な!?(木刀を受け止めた!)」

「……」

「させるかよ!!」

相手が僕に向かって攻撃を仕掛けようとしたら、雄二が僕の間に入り込んで攻撃を受け止めてくれた

「……」

「ツチ、何してやがる明久!しっかりしろ!」

「ご、ごめん!さすがに今のは助かったよ……にしても……」

「ああ……まさかここにきて敵が来るとはな……サモン!!」

雄二は苦虫を潰した顔で自身の体に召喚した。それにしてもいつたはどこから攻撃仕掛けてきたのか……

「いやそれ以前に俺たちがこの位置にどうして逃げるとわかっていた……まさか……先を読まれた!?!」

「その可能性はでない……おい、お前は何者だ……」

「……」

そのフード姿の人物は答えず、むしろ無言にたたずんでいた。その一つ一つの行動に不気味なのが感じ取れるけど・・・なぜか僕は嫌な予感が止まらなかった

「・・・」

「・・・パアン、パアン！」

「・・・え・・・」

辺りに銃声が聞こえた瞬間、姫路さんと美波は信じられない声をあげていてた

何故なら・・・

「っガバツ・・・」

「・・・グハツ」

僕らはいつの間にか・・・目の前のフード姿の男に撃ち抜かれていた・・・それがわかった瞬間、僕らは気がつけば・・・ゆっくりと後ろに倒れた・・・

「ードザッ」

「坂本・・・アキ?!」

「坂本君！明久君!?!」

美波と姫路さんの声が聞こえた。隣にいる雄二は息はしているけど、起き上がるのが困難みたいだ。そして、僕自身も・・・

「逃げ・・・て・・・」

僕は声を絞り、二人には逃げてもらおうといったが二人は聞こえてないのかこちらに向かっていた

「(駄目だ・・・思ったよりダメージが・・・)」

「・・・」

「や・・・め・・・ろ」

「・・・」

そいつは次のターゲットとして見極めたのか姫路さんと美波の方を見た。僕は声を絞り。彼女達が傷つくのがみたくなく、声を出したが無視をされた

そして、そいつは・・・

一瞬で姫路さんと美波の前に立った

「え……」

「……」

「……パァン、パァン！」

「……それは……」

別の銃で姫路さんと美波を撃ち抜き……

二人は……

「……ドザッ」

眠るように倒れた……

「あ……. . . . ああ」

僕は声になら無い声で倒れた二人を見つめた。動け！動け！！ここで僕が動かないと！！

「……」

だが僕の思いとはむなしく体は動かず、それは姫路さんと美波を肩に担いだ。それは僕の方に一度振り向いてから再び暗闇の方へ二人を抱え込みながらここを去ろうとしていた

「ま……て」

「……」

「（踏ん張れ！吉井明久ここでたたないと二人が……）二人を返せ……！」

「……負け犬に用はない」

「え……. . . . ?」

僕はその声を聞いて驚いた……

その声は……

そう考える前に僕の意識はブラックアウトした……

皆に……. . . . 伝えないと……

迫る魔の手Ⅳ

スネ夫 side

僕は現在近くにある木に手すり代わりとして右手で添えながら何とか立っていたが、内心気分が悪かった

「くっ……本当にお前は何者……？」

「……」

「答える気はないか……。しかし、参ったな……。僕の最大の武器でもある攻撃をこうもあっさり……。防がれるなんて……」

「これで貴様にとつての最大の攻撃は終わりか？……なら、貴様との戦いはここで終わりだな……」

「(なんとか奴の戦い方はわかったし、手がかりはつかめた……)……まだ戦いは終わらない……」

僕は無理矢理痛む体を鞭に打ちながら目の前の敵をにらんだ。今こいつをここで倒しておかないと……

そう思い、ボロボロになった刀を右手に添えて相手の目線はずさないように構えた。すると、そいつは手をしっかりと前に出していた「終わりだ……」

「つちよつとまっつて!? そいつの右手はだんだん砲撃みたいに固まっている(;)」

「さあ……」

「くっ!」

僕は迫り来る攻撃に備えて体勢を整え直しながらどうやって交わすか考えていた

すると……

そいつは右手を突然手を下ろした。そんな様子には僕は怪訝な顔になった

「なんのつもりだ？」

「なに……目的は終えたから帰るだけだ」

「目的？」

「さらばだ。英雄スネ夫」

「待て……!!」

僕はその言葉の意味を問い詰めようとすると、そいつは消えた。目的とは一体……

「ぐっ……」

僕はそう考えを続けようと思うと体が限界だったのか地面に倒れ込んだ。どうやら情けで助かったか……

「……もう体が動きそうにないや。はあ……負けた負けた……」

「スネ夫さん!？」

「スネ夫君!？」

「……ん」

声かけられた方に振り向くと、ジャイアンの婚約者の真理亜さんが血相な顔でこちらに急いで走ってきた。その隣では……真理亜さんの妹の里緒菜ちゃんがこちらに走ってきた

「ああ……僕は最悪だな……まっ……た……く……」

こんな情けない姿を彼女に見られるなんて……そう思いながら意識はブラックアウトになった……

真理亜 side

私は武君の頼みで、何か異変があつたらすぐに連絡してほしいといわれていたので、数日前にのび太さんが行方不明になったと思われる裏山の別のルートの方にトレーニングのついでに歩いてると近くで爆発音がきこえました。

「お姉さま、今の音は……?!」

「近くの音ですね……私はいきますから冬花と里緒菜はここにいてください!!」

もしかしたら……あののび太さんの行方不明に関与してる敵がいるかもしれないと思い私は急いで向かおうとしました

「私もいきます!お姉さまに何かあつてはいやなので!!」

「私も……」

「っ……」

妹二人の言葉に私は一瞬行動を急ぐのをやめました。妹二人は今

回のこと知らない・・・けれど・・・

「(迷ってる時間はありませんね・・・) 冬花はたしか携帯お持ちでしたね! 走りながら武君に連絡してください! 里緒菜と私は冬花を守りながら急ぎましょう!」

「はい!!」

私の決断に二人はすぐに理解してくださり、私達は急ぎました・・・
そして、急いだ場所についたときは・・・

ボロボロの姿で仰向けになっているスネ夫さんが居ました

「スネ夫さん!?!」

「!?!」

「っ!?!」

その姿に私達は驚きの声をあげました。そんなスネ夫さんは一度反応を示されましたが、すぐに意識を失いました・・・

「スネ夫君、スネ夫君!! しっかりして!!」

そんなスネ夫さんの姿に血相を抱えて里緒菜がいの一番に急いで駆けつけていきました・・・

一体何が・・・

事態は私たちが思ってるよりも悪い方向に進んでいるのを私は知らなかった・・・

敗北と涙

明久 side

夢を見ていた……。それは僕の記憶にはない何かの光景……
『……………』

あれは……。のび太？なんかスゴい怪我を負っているし、それに近くにいるのは……。誰だ？

二人はお互いに視線をそらすことなく感じるはずのない風を感じ取れた

そして……

二人は銃を引き抜いた

———パァン!!!!

そこで僕の視界は真っ白になった

「はっ!?!はあはあ……」

僕はその音とともに目を覚ました

「何だったんだろう……。あの夢は……。いつつ……。！ここは……？」

僕は目を覚まして自身の体とその回りを見た。僕の記憶が間違いではなければこの場所は……

「起きたか？明久……」

「っ、雄二！……。つちよつと待つて？雄二は何で今そんな状況？」

「知るか……。朝起きたら手首足首縛られて目を覚ました俺の恐怖……。味わってみるか？」

「……。ごめん遠慮する」

僕のとおりには何故か縛られている雄二にドン引きしていたが、どうやら雄二は目を覚ましたらこんな状態だったみたい

「……。夫を見張るのも妻の役目」

「そんな役目あつてたまるか!?!つて・・・翔子!?!いつの間にも!?!」
「・・・気配を隠すのは得意」

いつの間にか霧島さんが雄二のとなりに座っていた。そんな霧島さんの行動に雄二は心底驚いた声をあげていた
「・・・なんか久々にその光景を見た・・・」

「つて、そうだ!!ここつて・・・」

「のび太君の家よ。吉井くん」

「三上さん・・・それにジャイアンにドラえもん?」

僕の疑問の前に先答えてくれたのはのび太の恋人でもある三上さんが答えてくれた。その後ろにはどこか疲れているジャイアンとドラえもんがいた

「よう・・・二人とも目覚めたみたいだな」

「あ、うん・・・」

「とりあえず、二人が起きた事は把握したよ・・・瑞希ちゃんと美波ちゃんが起きたこともね・・・」

姫路さんと美波の・・・それを言われた瞬間僕は昨日の事をはつきりと思いついて慌てておき上がった

「そうだ!!二人が・・・二人が浚われたんだ!!いつつ!」

「落ち着きなよ。君の傷は重傷ではないにしてもそれなりにダメージを受けているのだから」

「でも!!」

「落ち着け。今は慌ててもすぐに手がかりがある訳じゃねえんだから・・・」

苦々しく呟くジャイアンにそういわれた僕は渋々と騒ぐのをやめた。どうやら僕ら以外に最悪な情報が入ったのか・・・?

「ムツツリーニから情報をもたらつて俺達は急いで駆けつけたときにはお前と坂本が倒れていた。そして・・・スネ夫なんだが・・・」

「・・・俺たちを逃がしてくれたあいつは捕まっていないのか?」

「ああ幸いにもな・・・。無事とはいえないがな」

「え・・・?」

「スネ夫君は全身打撲でまだ目が覚めていない。そばに真理亜さん達

三姉妹がスネ夫君を看護してくれてる」

スネ夫がそこまでそこまでボロボロになっていたんだなんて……。回りが状況を説明してくれて僕らは沈黙が走るなか三上さんが口を開いた

「とにかく二人とも今は休みなさい。今後の方針としては二人の回復次第に瑞希と美波を助けるのを優先よ」

「え……。でも三上さんはのび太を……」

「……。ええ。本音を言えばのび太くんのことでも心配だけど……」

三上さんは辛そうに顔を伏せていたが、次には凜とした顔で僕らの方に見据えていた

「私の大切な友達を浚った人達を先に倒しておきたい。……。もしかしたらそこへのび太くんがいるかもしれないから……」

「……。そこへのび太が可能性は低いぞ？」

「わかってるわ。けれど……。けれど、もしかしたらのび太君も捕まっている可能性は否定できないでしょ？」

「……」

確かにのび太が捕まっている可能性は捨てきれない。それに……。姫路さんと美波がなにもされていない可能性は低いから早く助けにいかないか……

「なら決まりだね。僕らの次の方針は……。ね」

ドラえもんが優しい顔で三上さんの方を見てから僕らに聞こえるように話しかけた。勿論、僕らの方針は……

「瑞希ちゃんと美波ちゃんを助けに行くのと共にのび太君もその場に行ったら助けるでいいね？」

「ああ、のび太と明久にとってのお姫様方を助けにいかないとな」

「つちよ／＼／＼?!」

「ああ、確かにな。なら早く回復しろよ？ 姫路と島田の王子様」

「そうね」

「……。うん、吉井なら納得」

「そうじゃのう」

「……(ビシッ)」

ジャイアンの言葉にみんなが意地悪そうな顔で僕をいじってきた。
……ん？

「つちよつとまって!?!いつの間に秀吉とムツツリーニいたの!?!」

「……初めから」

「それ影薄いとかならない!?!いやそれともうまいこと気配隠していた!?!」

僕の突っ込みに二人はなにもなかったかのようにふるまっていた。
可笑しいな……こう言うツツコミ役はのび太のはずだけど……

「とりあえずはお前らは休め。俺は今から少し別部屋に行く」

「別の部屋?」

「ああ。あ、ドラえもん達はここで見張つといてくれ」

「うん。一応大丈夫だと思うけどね」

ジャイアンがドラえもんにそういうと、ドラえもんは小さくうなずいていた。今からいくところを考えられるのはひよつとして……

僕はジャイアンに聞こうと思って顔をあげるとジャイアンは既になかった

ジャイアン side

俺は明久達が寝ている部屋からでていき、ひとりになったあと俺はある部屋に向かった

ーコンコン

俺はその部屋の前に立ちノックをした。すると中にいる人物から「入って良い」と言われたので俺は中に入った

「……あいつの状態はどうなんだ?……真理亜」

俺は大切な婚約者の真理亜さんに質問をした。その質問に真理亜さんは小さく横に降った

「ダメですわ。まだ目覚めそうにありません」

「……そう……か……里緒菜は?」

「……スネ夫さんの側でずっと離れずにいます。冬花が時々様子を見てくれるので今のところは里緒菜が倒れる心配はありません」

「……………」

俺は真理亜さんのその言葉を聞き悔しそうに顔を地面の方に傾けた

「悪い予感正直あった……。こうなる前に無理矢理俺が代わりにいけばよかつたのに……………」

「いいえ、それはだれの責任でもありません」

「真理亜……………」

「悔しいのは私も同じですが……今は私達はすべき事はスネ夫さんが目を覚ましたあとのことも考えないといけません。あなた達の大切な親友ののび太君も……探さないといけないのですから」

「……………それでも俺は……………」

「……………武、あなたいつ寝た？」

真理亜さんが突然怒った顔で俺の顔を見てから機嫌悪くいった

「あつ、き、きちんと昨日寝たぞ!」

「嘘ですね。目の熊が隠しきれていないわよ」

「なに!?しまった……………」

「やっぱり寝れていないではないですか!」

はっ!?ついうっかり言葉をだしてしまった!?そう思いながら俺は真理亜さんの方に振り向くと……………」

「武君……………そこに寝転びなさい」

「いやあの……………」寝転びなさい……………」はい……………」

俺は怒気の含まれた発言をした真理亜さんに逆らえずに横になると……………」

頭が軽くなった

……………ん??

「……………真理亜さん?」

「今ぐらいいしつかりなさい……………」

「そのこれは膝枕……………」寝なさい……………」あ、はい……………」

俺の質問に答えることなく遮られ俺は大人しく目つぶることにした

……………真理亜さんが子守唄を歌ってくれてすぐに寝れたのはここ

だけの話だ
・
・
・

情報と議論

姫路 side

うす暗闇のなか、私は何かが頬に当たった感触したので、固く閉じていた目を小さく開けた

「んっ．．．ここは．．．」

はつきりしない頭に私は呟いてから回りをみた。そして、徐々に私は清明に思い出した。そうでした．．．私は．．．いえ、私達はフー
ド姿の男に．．．

はっ!?

「美波ちゃん！おきてください!!」

「ん．．．瑞．．．希．．．?」

「(ホッ)．．．よかった。美波ちゃんも無事でしたのですね」

「ここは．．．?はっ．．．もしかって．．．ウチ達は．．．」

「はい．．．どうやら私達は連れ去られたみたいですよ」

美波ちゃんが起きたことに私は軽くホッとため息を着くと美波ちゃんは落ち着いたのか、回りを見て呟くと私も小さくうなずいて答え
えた

ーコツコツ

状況を把握しようと回りを見ると、どこからか足音が聞こえたので私達は声を潜めた。そして、その足音がこちらに近づくと私達は驚き
ました

なぜなら．．．

「．．．」

「あ、あんたは．．．ウチ達を捕まえた．．．」

「っ．．．な、なんのようですか．．．?」

その人は私たちの言葉に答えることなくただ無言でこちらを見て
いました。そして、次にこちらに近づいて．．．

「え?」

何やらご飯とかをこちらに置いてきました。そして、その人は目的
を終えたのか私たちを一別して別のところへと歩きました．．．

えつと……

「どういう意図でこちらに来たのでしょうか……?」

「……さあ??」

私達はその人の行動に理解できず思わず首を傾けていたのはここだけの話です……

今は何もされないのでしたら、それは助かります……。私達を助けに来てくれるのを待っていますからね? 明久くん……

明久 side

姫路さん達が浚われて、僕らは心も体もボロボロになっていてので1日一休みしていた。そして、翌朝になり僕達は昨日話した方針で終えたが、そこから次にどのような行動をとるのか悩んでいた

「方針を決めたのは良いけど……敵の本拠地はわからないんですよ?」
「そうだな。あと翔子、俺の腕をへし折る気か? さつきからミシミシとなっていたのだが……」

「……ただ抱きついてるだけ」

「抱きついてるだけでここまでミシミシとならねえよ!?!? っていだけだ!?!」

「坂本雄二夫婦の会話はおいといて……なにか方法はない?」

「……夫婦……(ポツ／＼)」

「明久キサマ……ッ!」

僕の言葉に霧島さんが顔真っ赤にしていた。雄二は否定をしようとしていたが僕には分かる。あれは照れていて本音を言わないだけの雄二

……全く……雄二は霧島さんの恋心を気づかない鈍感な男だよ
「方法ね……。ドラえもんさんならなにか手がかりつかめるのじゃないの?」

「うーん……ないこともないけど……」

三上さんがドラえもんに質問をするとドラえもんは腕を組みなが

ら考え事をしていた。つてか方法がないとは否定しないんだ・・・

「それに関しては何も大丈夫だよ。明久」

「「「「!」」」」

「あ、目覚めたんだね。スネ夫」

僕らは声をした方に振り向くとまだどこか痛々しい感じで包帯を巻かっているスネ夫がこちらに来たのに驚いていたが、ドラえもんは冷静だった

「まあね……。まさか、たおれて一日経過してると思わなかったよ……

(悪夢で目が覚めたのは内緒。実は夢の中でジャイアンリサイタル開かれて苦しんでいた事を言えばジャイアンが近々計画しかねない)」

そんなドラえもんの問いかけにスネ夫は苦笑いで答えていた。そんなスネ夫の側には里緒菜さんがスネ夫の歩行を支えて、後ろにはジャイアンと真理亜さんと冬花さんがいた

「……その……武兄様と真理亜姉様から話聞きました」

「スネ夫君がここまでボロボロになったのもね……。そして、のび太さんが行方不明の話も」

「悪いな。今回は状況が状況なだけに話したのさ」

「申し訳(づ)ぎいません」

冬花さんと里緒菜さんが申し訳ない雰囲気です謝罪しててた。そんな謝罪にドラえもんは……

「まあ仕方ないよ。元々今回の件は事故みたいなものだからね……。それよりスネ夫くんは寝ていなくて良いのかい?」

「体はあつちこつち痛いけど、どうしても伝えたい情報があるから寝ている場合じゃないかな?」

「寝てる場合じゃない?」

僕の言葉にスネ夫は頷いていた。どうやら、僕らの知らない裏でなにか知ったらしい……

「ところで申し訳ないけど今いるメンバーを教えてくださいませんか?」

「女性のメンバーは私と真理亜さんと里緒菜ちゃんと冬花ちゃんと翔子ね」

「男子はムッツリー二と明久と剛田とスネ夫に俺」

「で、残りはドラえもん和秀吉」

「……姫路さんと島田さんは？」

「……ごめん。捕まった」

スネ夫の質問に僕は申し訳なく答えると、他のみんなも辛そうな顔になった。ただでさえ、のび太の行方不明で大変なのに……二人が連れ渡らわれたら……

「そうか……。色々と話したいことや聞きたいことがあるだろうけど、とりあえず、僕と戦った敵の情報をまず教えるね」

「あ、そうだ!!スネ夫はどうやって生き延びたのさ!？」

「運良かったと言いがいいようがないけどね……。とりあえず、僕からの情報は……冗談ではないからよく聞いてね？」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「超能力使い。それも……僕らが知っている超能力とは少し違うけどね」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

スネ夫の予想外な言葉にジャイアンとドラえもん以外は驚いていた。超能力って……あの瞬間移動とか気を操るあれ？

「明久がなに考えてるか何となく分かるけど、少し違うかな」

「え?!」

「あれはどちらかというところ……破壊するためだけの超能力……それも最悪の」

「……何をつかめた？やつの攻撃は？」

「……こう言いたくさないけどさ……ルカやルナちゃん達の力と似ている。いや、違うかもしれないけどあれは紛れもなくその力に近かった」

「「なっ!!?」」

今度はドラえもん和ジャイアンが驚いていた。なんか聞いたことない名前が出てきて驚いてるけどどうしたのだろう？

「おい、スネ夫……ふざけるなよ!!あいつらはあれをもう捨てたはずだぞ!？」

「僕もわかってるよ!そんなことは!!だけど……明らかにあんな力

があるのはそう考えてしまうよ」

「ううん・・・その議論をしても仕方ない。ジャイアンとスネ夫と僕とであの場所にいこう！」

「つちよつちよ!!つちよつとまって!!」

なんか三人だけで話進めそうになったから、慌てて僕は3人に呼び掛けた。そんな3人は僕の方に振り向いた

「先からルカ?ルナとか言う話だけど、いったいなんの話なの!?おまけに超能力って・・・そんな非現実的な」

「・・・そもそも召喚獣がオカルトだから今さら非現実的なもない」

「・・・確かに」

「霧島さんとムツツリーニ、それは言わないで!!とにかく、話してほしい・・・」

確かに召喚獣も非現実的な話かもしれないけどそれとこれはまた別!!

「・・・どうする?二人とも」

「・・・約束さえ守ってくれたら・・・な」

「・・・よし!僕が話すよ」

そんな僕らの真剣な顔にドラえもん達もまた覚悟を決めて話していた。そして、話し合いが終わったのかドラえもんは僕らの方に振り向いた

「今から話すのは本当の話で・・・この話は誰にも言わないのを約束できる?」

「・・・」

「二二(コクツ)」

「約束するからお願い・・・話してほしい」

僕らは全員その問いに真剣に答えるとドラえもんは回りを見て小さくため息をついて話し始めた・・・

昔話と説得

ドラえもん side

明久君達が聞きたいと言う意思が変わらないのがわかった僕は小さくため息ついた。本当はこれは話したくなかったけど・・・スネ夫君の話聞いたらそれどころではないよね・・・

「今からもう何年前かな・・・僕たちはたくさんの冒険をしてきた。始まりは恐竜の時代の冒険とかかな・・・まあ、たくさんの冒険をしてきてた中、僕たちは・・・のび太君と静香ちゃんとジャイアン、スネ夫と僕を含めた五人は・・・月にいったことがある」

「「「「・・・えっ?」「「「「」」」」」

僕の言葉にジャイアンとスネ夫以外は目を丸くして驚いていた。あ・・・よく考えたら僕も色々行きすぎて驚く感覚が麻痺してるのかなー

「いやいや!!?月?!moon!?!あの、moon?!」

「落ち着け、明久。思わず英語になっているぞ?」つか、お前がそんな単語知ってるのに驚いたぞ」

「確かにのう」

「・・・(コクコク)」

「・・・吉井はやればできる子」

「つちよつと!?!何で僕はこんな子扱いされるのさ!?!moonくらい僕も知ってるよ!?!それに、霧島さんフォローしきれてないよ!?!」

「皆さん、話が脱線していますよ」

「「「「はっ?!」「「「「」」」」」

真理亜ちゃんの言葉に明久君達は驚いていた。うん、皆、忘れていたな・・・そう思いながらも口に出さないと話を続けた

「話を続けて良いかな?僕らは細かい話は省くけど、僕らは月にある出会いを果たしたのさ」

「ある出会い・・・?」

「見た目は僕ら地球人と変わらない・・・そう彼らはエスパルといわれる力の持ち主で・・・僕らの友達さ」

「「「「エスパー?」」」」」

「まあそんな細かい説明はおいといて・・・そいつらを利用しようと考え
ていた連中がいて、そいつらと戦ったのさ」

「まあ、戦いを終えたその後は彼らの力を封印?したと言った方が正
しいかな・・・」

彼らの疑問のよそにジャイアンもスネ夫も話を続けていた。皆は
放心としていたが、明久君は疑問に思ったことを話した

「えーと要するに今回の事件となんか関係あるの?」

「「ある」」

明久君の疑問に三人は口を揃えていた

「いいか?今回の事件でまずひとつは相手が超能力であることとのび
太が負けて行方不明なこと」

「これらの種類から考えられるのは、超能力のことで月の方で念のた
めに確認しないといけないことがある。それは・・・封印した力がと
けてしまったのか」

「そのために僕ら自身も封印したパッチを取り出さないといけない。

そして・・・月にいく」

「「「「「」」」」」」

これをとると言うことは彼らの平穏を破ってしまうかもしれな
い・・・

明久 side

たくさんの冒険してきたとは聞いていたけど・・・まさか月まで行っ
ていたなんて・・・規格外にもほどがあるよ・・・

「なら、俺達にも月にいけないのか?」

「「「「「へ、雄二はなにいつてるの?」」」」」

「悪いがそれは無理だ。これはあいつらとの約束だから・・・お前達に
あの場所へつれていけない」

「何故だ?」

ジャイアンの言葉に雄二は明らかに怪訝な顔になっていた。そん
なジャイアンは否定した理由を話した

「そもそも、あの場所はここにいる俺達に静ちゃんのび太以外は連れ

ていけないと決めていたからな・・・」

「だが、そうはいつてられないだろ？それにもしものことを考えたとき一人つれていくのも良いのではないか？」

「・・・それでもダメだ」

雄二の提案にジャイアンは頑として首を縦にふらずに否定していた。何でそんなにダメなのさ・・・？

「吉井さん、坂本さん」

「ん？」

「武君のいうとおりダメなものはダメですから、今回はやめておきましよう？」

「今回・・・？」

僕はジャイアンの婚約者の真理亜さんの言葉を復唱すると、真理亜さんは物凄い良い笑顔でジャイアンの方に振り向いていた

「私に話せないことあるのはご存じですが・・・いつかは会わせていただきますよね？ドラえもんさん達のお友だちを」

「勿論だが？ただ・・・」

「向こうが許可くださればですよね？」

「そうだが・・・」

「ではそれで話は終わりですわ。もしも会えるのに会わしてくださいのではないでしたら・・・武さまの隠している襖の右奥にあるものを没収です」

「え？」

真理亜さんの言葉にジャイアンがこれまで以上にないくらい固まっていた。そんなジャイアンの様子からするとばれては不味いのかな・・・

「(明久、あとでこっそりと三人をつけて月にいくぞ)」

「(え、でも・・・)」

「(なにバレなかったらOKだろ?)」

「(確かに・・・そうしよう!!)」

「あ、もうひとついい忘れていましたわ」

真理亜さんが思い出したように手を叩いた。すると、三上さんと霧

島さんも思い出したように手を叩いていた

「スネ夫さんは安静ですわ。まだ体が回復していませんから」

「え、でも……」

「里緒菜を泣かせたのに？」

「お、お姉さま!？」

「……里緒菜さん、泣かせてごめんなさい。安静します」

真理亜さんの言葉に里緒菜さんは顔を真っ赤にしていたが、スネ夫は反省していたように項垂れていた

「吉井くんをはじめとするFクラスはここで待機ね。まだ体が回復してないし、土屋さんと秀吉君は見回りをお願い」

「……(グツ)！」

「わかったのじゃ」

「……もしも、二人があとをつけると考えていたら……」

「瑞希と美波に報告ね。翔子、坂本くんがもしもそんな行動をとつたらどうする？」

「……勿論、お仕置きをする」

「二命に変えても安静しよう」

命は大事だよね……

「さて、行くメンバーをあらためて再編成だな。スネ夫はまだ休んどいてほしい。で、ムツツリーニと秀吉は見回りだ。真理亜さんは……」

「わかっていきますわ。霧島さんと共に吉井さんと坂本さんを見張ればいいのですね？」

「……夫の拷問……もといお仕置き任せて」

「翔子、それは言い直してないからな!？」

「で、月にいくメンバーは僕とジャイアンと三上さんとでいくよ」

「「え?!」「」」

ドラえもんとかジャイアンはわかるけど何で三上さんも?そんな疑問にドラえもんは説明した

「まずひとつはそっちに策を考えれる雄二君がいるのがひとつ。それに同じクラスの扱いをわかってるのも君だしね」

「！・・・なるほどな。確かにこいつらの扱いは俺がしないとダメだな。だが、なぜ三上をつれていくのだ？先程の話なら連れていくのは否定していたのに」

「美子ちゃんが僕たち一緒に行動をする理由は、何かあっても対応できるオールラウンダー的な存在だからね。あとは、本当なら月には連れていきたくないけど今の美子ちゃんは学校に行くよりもこちらで協力した方が精神的に安静すると思ってね・・・」

「二」「納得」「二」

確かに三上さんなら冷静にこなしそうだし、今は学校にのび太がないことに自分ばかりせめてしんどい可能性もあるからそちらを優先した方がいいもんね。ん・・・あれ、それなら、僕らは冷静に行動をこなせない面子と言うこと??だめだ・・・なんか落ち込む・・・「なんで、明久君がこんなに落ち込んでいるの？」

「さあな。とりあえず・・・月の方は任せろ。あと・・・お前ら無茶するなよ」

「そちらもね」

「あ、でも・・・明日は学校あるよね?どうするの?」

そうだ。よく考えたら、明日は学校の予定があったよね・・・姫路さんと美波は敵に捕まっているし、のび太がいらないからどうしたものか

「あー、俺は休むことにしてる。それとドラえもんは元々学校通っていないからたいして影響ないし、三上はどうするんだ?いちおう拒否権はあるし、俺とドラえもんだけでも大丈夫だぞ」

「私は・・・休むわ。でも、瑞希と美波がいけない理由をどう話すかわね・・・」

「なら、姫路さんの家の方は僕に任せてね。あ、あと明久君達はいつも通りに学校通つといてね?流石に全員休むのは怪しまれるしね」

ああ・・・どうにかして休めないかな・・・でもサボっていたのがばれると・・・鉄人に殺されるから諦めて行くか

・・・姫路さん達は無事かな・・・

????

ーは・・・いったい何を失った？・・・ああだめだ・・・眠たすぎて深く考えられないや・・・。・・・うん、考えるのやめて・・・寝ようか！

・・・あれ？そもそもなんで寝ているんだろ・・・まあいいか！
お休み・・・

学校と抜き打ち

明久side

昨日のあのあと僕達はそれぞれの家に帰って一休みしてから翌朝を迎えた。ドラえもん達との約束通りに僕達は学校に行くことにした。そしてFクラスに向かうとー

「よう、珍しく朝が早いな」

「雄二こそ。で、ムツツリーニと秀吉もおはよう」

「うむ。おはようなのじゃ」

「・・・おはよう」

僕の挨拶にいつものメンバー・・・とまではいかないも笑顔で挨拶できた。そうした中、他のFクラスの仲間もはいてきた

「キーンコーンカーンコーン、着席しろー」

「二二」チャイムなってないのにいつもよりはやいだと!」「二二」

鉄人がチャイムなっていないのに教室に入ってきた事に驚いた僕達は声揃えて言うのと鉄人は疲れたようにため息をはいた

「確かに普段より早いが・・・それをしたのは訳がある」

「二二」訳?」「二二」

「そうだ・・・。それはな・・・」

「二二」それは・・・?」「二二」

「緊急全学年対象!!!荷物抜き打ち検査ああ!!」

「二二」なああにいいい!?!」「二二」

まさかの荷物抜き打ちに僕達は声を揃えて驚いていた。何でそんなに急にそういう行動になったのさ!?

「実はな・・・話は昨日に遡る」

鉄人が遠い目になりながら、疲れたように話し始めた

鉄人side

俺はその日仕事はなくいつも通り、昔馴染みの仲間と汗まみれになりながら鍛えていた。そんな汗まみれになっていたときに学園長から電話があった

『はい、西村です』

『西村先生かい？アタシだよ』

『学園長？どうされましたか』

『実はね、明日の朝の会議にも言うけど抜き打ち荷物検査をしてほしい』

俺はその時なぜいきなりそういう行動をとったのかわからなかったので質問をした

『荷物抜き打ち検査はつい最近やりましたがなぜ急に？』

『バカどものせいで教頭の部屋が壊れたり、なにかを壊したりの請求書がたくさんあってね……。念のために、物騒な道具はないのか確認してほしい』

『はあ……。しかし、それは2年生だけですか？』

そういう物騒な事を起こしてしまっていたのはとあるバカを思い浮かんでいたが、学園長は否定していた

『いいや、2年生だけではなく学園全体さ』

『では、他の先生達も伝えておきましようか？』

『いいや、荷物抜き打ち検査は西村先生が全部回ってくれないかね？』

それも不意打ちにやってほしい』

『？なぜ他の先生では荷物検査しないのですか？』

『誤魔化されるからね』

『ああ……。納得です』

『というわけで明日は頼むよ!!』

学園長からの指令に俺は断るわけにもいかず了承して、全学年荷物検査を不意打ちに実施した

明久 side

荷物検査をする経緯を聞いた僕たちはなんとも言えなかった。なんか心当たりありすぎて言えないよ……

「因みにすでに三年生の荷物検査は終えたぞ。一部はまあ……。そいつの趣味だから口を出さないが……。ポエムとか驚いたぞ……」

「ひい（ゾクッ!!）」

あ、なんか秀吉が震えている。．．．もしかってあの常夏コンビのどちらかのやつだったあれ？

「とにかく、全学年ではあととは貴様らFクラスだけだ!!」

「クツ!!全員逃げる体制を!!」

「動くなあ!!」

「!!」

須川くんが動こうとすると鉄人が怒号の叫びに皆は足を止めた

「無駄な抵抗はやめておけ．．．。さあ．．．覚悟はいいか？」

「!!」

「全員．．．荷物検査開始!!」

「!!いやああああ!!」

その後、Fクラスのほぼ全員が荷物検査引っ掛かったとだけ書こう。尚、姫路さんや美波が休みだと伝えられるとその日の男子全員が精神的なダメージをおったとだけ伝えよう．．．

姫路side

私達は敵に浚われてどのくらい経過したのでしよう．．．。脱出する方法は見当たらず、逃げようにもきつとまた捕まります．．．

「葉月．．．大丈夫かしら」

「葉月ちゃんなら大丈夫ですよ。明久君達がいいますから」

「そうね．．．。にしても．．なぜご飯がこんなに美味しいのかしら？」

「そうですね．．．」

私たちは捕まっている中、私たちを連れ去ったフード姿の男がこまめに様子を見に来て、

朝昼晩と3食きつちり出していきます．．．。それも美味しく．．．

「．．．」

「ぎゃあ!?!」

いつの間にかその話していたフード姿の男の人が目の前に来ていました。そして、服を目の前におかれました

「あ、これは・・・洗濯したからきろってこと?」

「・・・(コクツ)」

「これは命令でやっていたのですか?」

「・・・(フルフル)」

「じゃあ・・・自分の意思?」

「・・・(コクツ)」

「あなたは味方ですか?それとも敵ですか?」

私はこの人が敵だと思えません・・・。なぜなら敵ならこんなに優しくはしてくれません・・・

「・・・」

その人は答えることなく、再び過ぎ去った・・・。でもなぜでしょう・・・あの人は私は知っている気がします・・・

でも・・・早く明久君達に助けてもらってのび太君も探さないと・・・だから・・・

「私達はあなたを待っています・・・」

美子 side

私達は、今とある場所に向かっていた。そんな場所に向かっていた中、武君が感慨深そうにその場所を見渡していた

「ここにまた来るなんて・・・。しかもあの頃と変わらない場な・・・」

「うん・・・。あ、ここだ。美子ちゃんは回りを見てくれない?」

「わかったわ」

ドラえもんさんに頼まれた私は周りを見ていた。武君やドラえもんさんからここにつくまでたくさんの話を教えてくれた・・・

「本当にのび太君は私の知らない景色をたくさん見てきたのね・・・正直、うらやましい気持ちもあるわ・・・」

気持ちのいい風がなびかせながら私は心のうちにある気持ちを口に出していた。本当にのび太君を助けられたら、もう一度彼に謝りたい・・・そして・・・

「彼の口からもっと沢山の話聞きたいわ・・・」

「オーイ、美子ちゃん。見つけたからこちらに来てね」

「はいー!」

私はドラえもんさんの呼び掛けに答えてそちらに向かった。その場所に着いたときにドラえもんさんや武君はその手元にあるのを見せてくれた

「それは?」

「【異説クラブメンバーズバッチ】 ♪♪」

「異説クラブメンバーズバッチ?!!」

私の疑問にドラえもんさんは説明をしてくれた。【異説クラブメンバーズバッチ】とは、マイクに呼びかけた世の中にある「異説」をバッチをつけた者にだけ実現させるものだ

「つまりこれで俺たちを見返そうとして最初のはび太とドラえもんが月でウサギ王国を作ったのが始まりだ」

「月でウサギ王国を?!!」

「そりや、まあ普通は驚くよなー」

いやいや、のび太君達はいったい何をきつかけにそういう行動をしたの!?はつきりいってその行動力はとんでもないわ・・・

そう思いながらも、その【異説クラブメンバーズバッチ】をつけてドラえもんさんがどこでもドアを・・・

「その前に・・・念のために【テキオー灯】!!これを浴びると24時間どこでも大丈夫だよ」

ピカッ!!!

目の前にテキオー灯を私達は浴びただけどなにも変化はないわね・・・でも、よく考えたら宇宙なのに空気無いも当然でしょ・・・

「準備オツケーよ」

「OK。さあ・・・懐かしいあの場所に・・・」

「うんーいざ!!!月のウサギ王国へ!」

私はドラえもんさん達が会いたいといっている月のウサギ王国へと一緒に向かった・・・

必ずあなたも助けるから・・・だから待っていて・・・私の大切な

人・・・

???

一人のフード姿の男が目の前でひれ伏しているフード姿の男に向かって話していた

「・・・」

「あははは、今回の戦いはなかなか楽しめたが・・・でも、君もそろそろ本気で戦いたいだろうか？」

「・・・」

「あらら、だんまりか・・・。まあ、いい」

男は別の方へ振り向いた

「しかし・・・まあ、我らの憎しみとあの方の憎しみが融合できた存在とはな・・・。そして、ーはあわれな人形め・・・」

「・・・」

「まあもう少ししてからあの二人を駒として扱うのもありだけどじっくりと・・・時間を待つとしますか」

その男が見る光景は囚われている姫路と島田の姿だった

「・・・」

そんな男とはよそに先程から黙っていたフード姿の男はなにかを思っ黙って見つめていた・・・

再会と頼み

美子 side

私達は今日の前の光景に異様でとてつもない光景に啞然としていた。目の前に広がっているのは……

「これが……ウサギ王国……??」

「嫌々嫌々!?なんかすげえ発展してないか!?確かにあの頃よりも進歩することはあり得ても……」

「空を飛ぶ車とか開発してるけど……これドラえもんさんが教えたの……?」

「教えてない、教えてない!!そもそもこんな技術は誰が身に付けたの!?!」

私達は目の前で可愛い縫いぐるみみたいな存在が空を飛ぶ車が無数に飛び交わるのを見て啞然として……

「おやおや、なにか懐かしい顔もいますね」

「その声は……」

「亀太郎!」

武君がそう言うのと亀さんがガクツとこけていた。前屈みに倒れていた亀さんがよろよろと立ち上がりながら怒っていた

「そんな名前はない!ご存じない?私の名前は?」

「モゾ!!」

「そう!!モゾさんです!!」

亀さん……モゾさんが胸を張りながら、声を張り上げた。なんか、かわいい……

「モゾ、勝手に先にいかないでほしいよー」

「まあまあ、アル落ち着きましよう」

「でも何で急に走ったのだろう……か……え……?」

「「え……」」

私達は声をした方に振り向くと、そこには3人の男女が立っていた。年は私達と変わらないけどこの人達って……

もしかって……

「うそ・・・なんで・・・」

そんな疑問に答えるようにドラえもんさんがゆつくりと前を出て手を差し出した。とても懐かしそうに笑いながら

「久しぶりだね・・・。ルカ君、ルナちゃん、アル君」

「ドラえもん・・・」

その顔は信じられないと言わんばかりの驚いた顔をしていた。だけど、ドラえもんさんがずっと手を前に出してるのを見たルカさんが手を差した

「うん・・・久しぶりだね・・・僕達の大切なお友達・・・」

手を握ったその顔はとても懐かしそうに切なさそうに握っていた。その後ろではルナ?さんとアル?さんが優しい目で見ていたのを見たと見たと・・・

その後私達はウサギ王国のとある場所につれてもらい、改めて自己紹介をしてくれた

「ドラえもんさんと武さんは久しぶりだけど、貴方は初めましてね。私の名前はルナといいます」

「僕はルカ。ドラえもん達とは友達なんだ」

「僕はアル!で、この亀が・・・」

「モゾです。ご存じない?」

「初めまして、私の名前は三上美子といいます。ドラえもんさん達とはお友達で・・・その・・・のび太君の恋人です／＼／＼」

「／＼へ?／＼」

私の言葉にルカさん達が??となっていた。あれ、もしかして恋人の概念知らないという可能性は・・・

「恋人ってなに?」

「恋人っていうのは・・・うーん、簡単に言えば愛する人みたいな?」

あつたあああ!?嘘でしょ!?星が違えば恋人って概念はないの!?そして、武君は何を言うのかな!?あっているけど、恥ずかしいじゃない!?

「はいはい、話が拗れる前に本題を入れるけどいいかな?」

「あ、うん」

ドラえもんさんが手を叩きながらそう呼び掛けるとルカさん達は頷いていた。そうだわ、本題を入らないと・・・

「お願いがあるんだ・・・。のび太君を助けるために・・・協力してほしい・・・」

「・・・え、のび太?」

「それはどういうことですか?」

「!?」

「・・・少し最近に俺達はある敵と戦ったんだ。そいつは・・・かつてお前達が持っていた能力だった」

「!?!」

「そして、それ以前にのび太はそいつにやられた可能性がある」

「のび太がやられた!」

「そんな・・・三上さん・・・」

「私は大丈夫」

ルカさんは武君の言葉に驚いた声をあげていた。そして、ルナさんは私に心配そうな顔をしながら声をかけてくださったけど、私は心配しないで大丈夫と答えた

「話はわかったけど・・・その超能力を使っていたから僕らの誰かがそのような行動をしていたのではないかと気になったわけ?」

「ううん、逆だよ」

「逆?」

「そう、君たちがまた捕まって悪用されていたのではないかと心配になったけど・・・」

「そのような心配はなかったな。・・・超能力を失っているのも変わらないか・・・」

ドラえもんさんと武さんが安心したように話すとルナさんとルカさんが気まずい顔になっていた。一体どうしたのだろうか?

「実はその事で相談したいけど・・・」

「ん?」

「実は・・・超能力を失ったはずなのにアルがまた予言を出していたん

だ」

「……ええ!!」

私達やルナさんが驚いた声をあげていた。あれ、ルナさんはこの事をしらなかつた?

「つちよつと?!ルカ、アル!それはどういうこと?!」

「お、落ち着いて!ルナ!」

「いいえ、説明してくれないと納得しないから!」

「それが……僕たちもわからないんだ……」

納得いかないルナさんに対してアルさんが残念そうな顔をしながら話していた。すると、ドラえもんさんが手を顎に当てて考えていた「ひよつとして……」

ドラえもんさんが裏山で取り出した【異説クラブメンバーズ】のマイクをポケットから取り出していた。そして、納得いったような顔になっていた

「やっぱりか……」

「ドラえもんさん?」

「何者かが……君達の失った超能力を解放したみたいだ。この異説クラブメンバーズの道具を」

「……え?!」

それは一体……?

「でも、君達の体は変わっていない。……ということは……もしかしたら時が立っている影響で溶け始めてる可能性も考えられる」

「ううん……それよりももうひとつ気になることがあるんだが……アルの予言は?」

「あ、うん。大雑把に説明するとー」

ルカさんがアルさんの予言を聞いた内容はこうだ

ー英雄同士の激突。復讐の時ー

「……?」

その予言に私を含めた皆は?となった。一体どういうことだろうと思いつつもルナさんが手を叩いてみんなを呼び掛けた

「はいはい、とりあえず話を続けましょう?……本当は心配で来たの

が1つならもう1つの理由はなんですか？」

「・・・頼む!!大切な仲間を・・・友達を助けるためにルカ!お前の力が必要だ!!」

「!!」

「本音を言えばお前達に会うときこういう言い方したくなかった・・・」

「・・・少し待ってね?」

ルカさんが少しだけ待ってほしいといいどこかへ出ていった。ルナさんとアルさんと

モゾさん?がなにか決めたように見合わせていた

そして数分後・・・ルカさんが戻ってきた。その後ろには見たことない人たちだったけど、ルカさん達と同じ・・・?

「ドラえもん、ジャイアン、三上さん。みんなと話し合った結果、僕達にもお願いがあるんだ」

「お願い?」

「今このときだけでもいい。僕達の持っているを解放できるようにしてほしい」

「え?!」

「私達は貴方達に助けてくれた恩があります。それ以前に・・・」

「おや、ご存じない?」

「だって・・・」

「!!」

「友達を助けるのに理由なんて要らない!!」

ルナさんやアルさん、モゾさんとルカさんが声を揃えて言った。それを聞いたドラえもんさんは確認をするように聞いた

「みんな本当にいいの?」

「友達を助ける理由はいりますか?これは貴方達が教えてくれたことではないですか」

「うん!」

「・・・ドラえもんさん」

「・・・わかった」

ドラえもんさんは異説クラブメンバーズのマイクを取り出して呟いた

「エスパルは只の人間ではない。・・・超能力を使える人間だった」

ドラえもんさんが異説を唱えると、ルカさん達が青く包まれていた。青く包まれる様子に私は驚いて変な声が出ました

「こ、これは・・・!?」

「・・・美子ちゃんにひとつ話さないといいないことがあったね。ルカ達は元々超能力の持っていた人間だった。しかし、限りある命で生きていきたいと言う願いのもとあの力を無かったことにした」

「そんなことがあったなんて・・・」

「ごめん待たせたね」

すると、ルカさん達が覚悟を決めた顔でこちらに呼び掛けた。ルカさん達が協力してくれるのは嬉しいけど・・・

「行くのは私とルカだけで、モゾとアルは・・・」

「え?!なんで僕は留守番?!」

「私もですか!?!」

ルナさんの言葉にアルさんとモゾさんが納得いかないと言っていたがルナさんが優しく説得していました

「地球にいったことある私とルカの方が適任よ?それに・・・ルカが無茶してもすぐに止めれるのは私の役目だからね」

「たしかにそうですね」

「わかったよ・・・。ジャイアン!全部終わったら昔の約束通りにあれしようね!」

「この二人を頼みますよ!」

「おう!」

「じゃあ・・・いこう!!友のいる地球へ!」

「行きましょう!!」

ルカさん達の言葉にドラえもんさんは頷いてどこでもドアを出して月をあとにした・・・

貴方はいまどこにいるの・・・?そして、生きてるなら貴方の声を聞きたい・・・

ねえ・
・
・
のび太君
・
・
・

手がかりと対面

私達はルカさんらルナさんと二人を地球に戻って、のび太君の家に向かった。その歩いてる最中にルカさんとルナさんが感慨深そうに周りを見ていた

「なんか久しぶりに地球におりたけど・・・」

「すごい・・・地球の文明ここまで発展していたんだ」

「え?!ルナさんは地球に来たことあるのですか?」

ルナさんの言葉に私は驚いて聞き返すとルナさんは嬉しそうに笑いながら教えてくれた

「ええ。ドラえもんさん達に教えてくれてないのかしら?」

「あー・・・美子ちゃん、かぐや姫の話は知ってる?」

「ええ、確かその物語の最後ではかぐや姫が月に帰ったよね」

「あ、そうそう!その話でかぐや姫なのは私です」

「・・・ええええええ!」

まさかのかぐや姫は実在していたの!?!しかもご本人が目の前!?!嘘でしょう!?!

「あーその気持ちはすぐわかるよ。僕達も驚いたのだから」

「確かにな・・・にしても、こういつてはあれなんだが・・・これが現実な訳だからな」

「・・・本当に貴方達は色々な人に会っているのね・・・」

「でも、いまどこにむかっているの?」

「のび太君の家に向かっているのさ。本人はいないけどね」

私が混乱してる中、ルカさんが疑問を漏らしていた。そんなルカさんの疑問にドラえもんさんが苦笑いしていた

「あ、ドラえもん!!」

「お、その声は明久達か。・・・なぜそんなに明久と坂本の顔がボロボロになっている?」

武君がドン引きしたかのように驚いていた。もちろん私もあまりのボロボロに引いていたのはここだけの話・・・

「うむ。実はー」

秀吉君の話はこうだ。今日の朝に抜き打ちの荷物検査があつて幸い明久君達は没収はなかつたもののその後が大変だったみたい

「のび太がいらないからFFF団が暴走するわ。おまけに翔子になぜかお仕置きされるわ」

「僕に至つてはFFF団に『我らの女神様をたぶらかしてるのかあああ！泣かしたのかああ』って叫びながら追いかけられたよ」

「でしまいにはFFF団と明久と雄二が鉄人の手によつて沈められたわけじゃ」

「・・・没収は免れた。その代わり血の代償があつた」

「・・・妻は常に夫の側にいるのがあたりまえ」

いや、そのわりには坂本くんがボロボロなのはどうなのよ……。そして吉井くんは瑞希達がいなくつてもいつものことなのね・・・

「ん、その人たちは？」

「あ、紹介するわね。この人たちはー」

「ああ、自分の自己紹介くらい自分でするよ。初めまして、のび太の友達の前ルカといひます。でこちらは」

「ルナです。地球でかぐや姫のモデルですー！」

「へ？かぐや姫って・・・」

「はい！あのかぐや姫ですー！」

「！！！！ええええええ！！！！」

ああ・・・やっぱみんなも同じ反応になるわよね・・・霧島さんも滅多に見せないくらいの本気の驚きの声を聞いたのは初めてだわ・・・

その後、驚きながらも私達はのび太君の家に向かった。のび太君の部屋に着いた時にはスネ夫さんと里緒菜さんと真理亜さんと冬花さんがいた。そして私たちがいるとスネ夫さんが驚いた声をあげてい

た

「ルカに・・・ル・・・ルナちゃん?!?!」

「久しぶりだね。スネ夫」

「スネ夫さん、怪我大丈夫ですか？」

「だ、だ、だ、大丈夫アマよ！」

「スネ夫さん、この方と知り合いですか？」

里緒菜さんがキョトンとした顔でスネ夫さんとルナさんを見ていた。ルナさんは手を叩いてお辞儀した

「ああ、申し訳ございません。私はルナです。こちらはルカ」

「よろしく」

「あ、ご丁寧にどうも……。長女の氷華真理亜でこちらは妹のー」

「次女の里緒菜です」

「三女の冬花です」

それぞれの自己紹介を終えてルナさんがかぐや姫だったとはなすと3人とも固まっていたのはここだけの話……

そして、私達は今後の方針を話し始めた。ドラえもんさんが何処からかボードを取り出していた

「さて諸君!!!ルカとルナちゃんが入ったからあらためて情報を整理しておこう!」

「まずは一時的とはいえ私が操られていたこととのび太君が行方不明になったこと」

「そして、その裏山でのび太君の手がかりを求めるためにスネ夫と土屋君にスネ夫と瑞希ちゃん和美波ちゃんと明久君と雄二君のメンバーで探索してもらった結果……」

ドラえもんさんがボードで大きく重要と書いていた。ルナさん達は真剣に聞いていた

「俺達はそれぞれに襲撃された。スネ夫は負傷して姫路と島田が捕まってしまった」

「そして、僕は激闘を引き換えにひとつの情報を持ち帰ったのが……襲撃者の1人が超能力使いだったと言うこと」

「……………」

「これがこれまでの僕らの起きたことだよ……。纏めると、のび太君は行方不明、二人の女の子は捕まってしまった」

ドラえもんさんが話終えるとボードをし舞い込んだ。そして、ルカさんとルナさんは少し真剣に考え込んでいた

「なるほどね。確かにそれなら僕らも手伝った方がいいね」
「そうね」

「でも僕らはどちらかと言うと戦い向きではないよ?」

「そこは大丈夫。僕の秘密道具で対抗してくれたらいい」

なるほど、確かにドラえもんさんの秘密道具なら可能ね……。でも

「でも敵の本拠地は分かるの?」

「確かにあいづらがいると思われる本拠地はわからないよな」

「それなら心配ない・・・いてて」

私たちの疑問に答えるようにスネ夫さんがよろけながらも起き上がった。まだ体はむりしてはいけけないのに・・・

「で、何が心配ないのさ?」

「これを見てよ」

「これは・・・何?」

「ドラえもんのポケットの中から借りたのさ!」

「あー、いつの間にな!」

スネ夫さんがみんなに対して見せびらかした道具を見せるとドラえもんさんが心底驚いた声をあげていた

「昔のび太が教えてくれたのさ。ドラえもんの寝室にサブのポケットがあることをね」

「それは「トレーサーバッジ」といって、位置情報を把握する機器。バッジ「トレーサー」のある場所をタブレット型端末「リーダー地図」の地図上に表示する道具なんだ!」

「えーと?」

「・・・つまりこういうこと。たとえば、雄二が浮気していたとするとそれを事前に本人に教えないでそのバッジを渡す。そして、本人の隠していることが把握できる」

「あ、納得!」

「さて!?翔子、その例えはおかしくないか!?明久はそれで納得するな!このポケえ!」

「要するに相手の居所をつかめるわけか。スネ夫よ、やるな!!」

「ぐぎやあ?!」

武君がスネ夫さんの背中を思いきり叩くとスネ夫さんは痛いのかのたうち回っていた。つまりあの戦いの中スネ夫さんはあの敵から発見器つけたと言うこと!?

「よし、諸君!!今からこのバッジの画面を繋げるから少し時間がほしいのでまってね!」

「了解!!」

ドラえもんさんがいそいそと次の道具を取り出してそのバッジ全体を見れるように告げていた。そして、準備が終わったのかドラえもんさんが周りに呼び掛けた

「じゃあ、話を続けるからよく聞いてね。とりあえず画面はスイッチオン!」

「……はっ?」

写された画面に対して明久くんは変な声を出していた。いや、気持ちわかるけど……

「……ドラえもん、これ居場所わかるか?」

「明らかに現代ではないよね……?」

「見覚えがない場所を写されてるが……」

「……諸君、よく聞いてほしい」

「ん?」

「どうやら彼らのいる場所は……22世紀より遙か未来にいるみたい。それも……何百年も先」

え……つまり……22世紀よりもっと後の未来から来たと言ふこと……!?

「……居場所さえわかれば話は早い……行こうぜ!!仲間を助けによ!!」

「……今、この場にいるメンバー全員に伝えておかないといけないことがあるのだけどいいかな?」

「スネ夫?」

まだ体が痛々しく巻かれているスネ夫さんが提案があるのか手をあげていた。そんなスネ夫さんに私達は注目してみていた

「……今回のいくメンバーで正直悔しいけど僕をはずしてほしい」
「「「?」」」

「もちろんそれを言う理由がある。1つは僕の体が万全ではないと言
うこと。もう1つは……サブメンバーとしてここで待機しとくのが
理由」

たしかにスネ夫さんは今の状態は連れていくにしては酷な状態。
それにサブメンバーとしてここで待機する理由は何かあったときの
ためについてことね

「それで今回いくメンバーはルカとルナちゃん、真理亜さん、ムツツ
リーニと秀吉と明久と坂本とジャイアンとドラえもん、霧島さんと三
上さんでどうかな?」

「冬花と里緒菜さんはスネ夫君を面倒見るので待機つてこと?」

「うん。それに、ムツツリーニと秀吉は今回は一番必要になりそうな
気がするからね」

「でもサブメンバーとして三人こちらに残るのはバランス悪くない?
霧島さんもそつちにいたほうが早い気がー」

「頭が回る人はできるだけ多めの方がいいと思う。敵側がどんな策し
ても対応できるようにね」

「決まりだね。皆、みらいへ向けて……行くよ!!」

「「「おう!!」」」」

待っててね……瑞希、美波!必ず助けにいくから!!そして……
あなたは今も何処にいるのか知らないけど……早く話したい……

???

ふふ、あのお方のお側にいたけど、こんなに楽しい玩具を手に入れ
たのは最高だわ……早く私の理想を……叶えさせて!!

遙か先へと・・・

明久 side

僕たちはドラえもんのタイムマシンに乗り遙か未来の世界へと飛んでいった。タイムマシンに乗るのは二回目になるけど、よく考えてみたら姫路さん達をとらえたのは結局未来人ってことかな??

「そういえばいつだったか俺達はなぜかのび太にイライラしていた時があつたな?」

「うむ、たしかにあつたのう。今思えばなぜイライラしていたのじや?」

「・・・嵌められたということか?」

「イライラしていた?それはどういうこと?」

「ああ、実はー」

雄二はある時にのび太を無性に殴りたい気持ちになった事を話すとドラえもんは少し驚いてから考えていた。なにか心当たりある道具でもあるのかな?

「うーん・・・おそらく、康太君の言う通りはめられた可能性が高いよ。恐らくそれを使ったと思われる秘密道具はー」

「「「うわっ (きやつ!?)」」」

「くっ!」

「「「ー時空乱流発生!時空乱流発生!緊急事態トミナシテ完全防御システム作動!」」」

「時空乱流!?!皆!!完全防御システムでタイムマシンから椅子が出てくるからシートベルトして!!」

「いつの間!?!」

「この間の冒険前に改造したのさ!!皆ベルトした!?!」

「「「OK!」」」

「全速全身で突破体制を!!」

「了解」

「ぐうう!?! (こんな頻繁に時空乱流は起きないと言っていた!!なのに、なぜか起きているという事は未来そのものが今不安定にされてい

るということ?!)」

僕は歯を食い縛りながら昔のび太やドラえもんに教えてもらったことを思い出して、これが起きているということは一未来人は干渉されたくないからこの事が起きたのか!?

ドラえもんが必死にタイムマシンを操縦してくれたお陰でなんとか時空乱流を切り抜けたけど・・・ドラえもんさんがなにか懸念している顔をしていた

「・・・うーん・・・ひよつとしたら今回の冒険は過去最大に大変なことになるかも・・・」

「へ?」

「皆!もうすぐ出口だから準備はいい?」

「!!「おう!!」!!」

ドラえもんの判断に僕らは声を揃えた。さて、万が一でも戦闘になった場合はとりあえず、三上さんを絶対に守りきらないとのび太に殺されそう・・・そう思うとトンネルから出口の灯りが見えた

まっつて! 姫路さんと美波!!

「よつと!! ついたー・・・え?」

「どうした明・・・久」

「・・・なにこれ?」

出口についた僕らは目の前の光景を見て愕然となった。なぜなら・・・

「・・・ここが未来の・・・」

「地球・・・なのか・・・?」

「信じられません・・・」

「・・・ドラえもん、目的の場所までどれくらいだ?」

呆然としてる僕らの中でもジャイアンがドラえもんに位置情報を訪ねていた。そんなジャイアンの反応に僕は怒った

「ジャイアンはなににも感じないの!?! こんな光景に!!」

「これは遙か未来に起きた事だ。俺達が今やらないといけないのは姫路達の救出だ」

「だからって・・・」

「吉井君」

僕はまだ怒ろうと思ったら真理亜さんが僕の肩を叩いた。叩かれた僕は真理亜さんの方向に振り向くと・・・真理亜さんは首を左右に降っていた

「(武くんの顔をしっかりと見て)」

「え・・・あっ!」

「っ・・・!ぐっ・・・!」

そうだった・・・僕らのなかで一番精神的にも辛いのはジャイアンだった。欲考えてみたら長い付き合いのび太が行方不明、スネ夫が負傷・・・それだけでもジャイアンがもう我慢の限界が越えていることが今になってわかった・・・

「武君はずっと耐えていたのです・・・。だからあまりせめないでほしい」

「・・・ごめん」

「・・・いや、気にするな・・・」

僕の謝罪にジャイアンは気にするなと言っていた。本当に三上さんもドラえもんも辛いと分かっていたけどジャイアンが辛いということに頭なかつたのは申し訳ない・・・

「・・・さて、改めて今いるメンバーを確認するね? ジャイアンと真理亜ちゃん、明久君と坂本君と霧島さんと秀吉君に康太君と美子ちゃんと僕だね」

「敵の方角は?」

「ここから少し先に歩いたらあるね・・・ん?」

「ーガシャン、ガシャン!!」

「・・・どうやら敵が近づいてるみたいだね。お遊びするつもりなくすぐ排除かな?」

「さあな・・・だが・・・」

「サモン」

「二二二つていつの間にか霧島さんが召喚していた!」

「夫の仕事を支えるのは妻の役目。・・・敵は私が倒す」

雄二が行動へと移す前に霧島さんが召喚して目の前の敵をにらんでいた。ああ、これは予想外すぎてどうなるかわからない……

???

一人のフード姿が画面越しに興味深そうに見ていた。そのその場には大勢の物が腕を組んで見ていた

「ほう……まさか囚われのお姫様達を助けるために来たのか……？」

「……」

「ー」

「ふん、こちらに来るのも時間の問題だな。牢屋に閉じ込めた者は？」

フード姿の質問に一人の男がひざまずいて説明していた

「健康そのものです」

「ふむ。とりあえずは利用する手もありだな……。まあいい、何人こようが私達の勝利は揺るぎないが万全な対応に待ち構えよ！」

「「「はっ!!!」」」

そして一人のフード姿が画面越しに楽しそうに見ていた

「ふふ、どんな絶望顔を見させてくれるかな？美子……」

明久達に迫る魔の手はもう身近に迫っていた……

提案と作戦

明久 side

皆さん、僕は今、目の前の光景に呆然としています。街の光景とかが酷いとかそういうのではなくって……その……

「……邪魔」

ーバゴオオオン

霧島さんがロボット相手に次々斬り倒していた。色々と例えるなら、美波はワルキューレで姫路さんが聖女で三上さんが女神なら霧島さんは戦乙姫ってやつかな？よく欲考えてみたら美波のは当てはまるのかな……

「翔子の後ろにロボットが！」

「ルカ！」

「わかってる！てああ!!」

三上さんの言葉にルカさんとルナさんが超能力でロボットの動きを止めていた。その光景に僕らは驚いていた

「あれが……超能力……」

「すごいもう……」

「……驚異の力」

「……なるほどな。確かにこれではドラえもん達がしゃべらない理由は納得できるよな」

「翔子、今のうちに！」

「……ナイスサポート。えい」

ーバゴオオオオン!!!

言葉では力強さが感じないが、その行動は刀でロボットの急所を的確に攻撃した。その光景に僕は何て言うか……恐ろしく感じた

「今ので30体撃破だけど俺たちの仕事がない……」

「うん。秀吉君や康太君もカバーできるようにサモンしようとしたけど、翔子ちゃんが次々倒すもんね」

「本当は手伝いたいけど……『夫の仕事を支えるのは妻の役目。ここはやらせてほしい』っていわれたら……断れないわ……」

「「あははは・・・」」

いつの間にかさつきまで霧島さんをサポートしていた真理亜さんとルカさんとルナさんも苦笑いしていた

「・・・敵壊滅確認。いいい」

「お疲れ様。翔子ちゃん」

「・・・ルカとルナのサポートがあつたから疲れていない」

「とりあえず、一先ずは休みなさい。今から敵の本陣に乗り込むのだから無理は禁物。はい」

「・・・ありがとう」

「でも、これが地球の技術なのね。すごいですね」

「いえ、ドラえもんさんの未来がすごいのですよ」

真理亜さんと三上さんと霧島さんとルナさんの三人が話し合っていた。なんな向こうは女の子特有なのかすぐに話し合う仲になるのは速いなー

「そういえば、敵の本陣は近いみたいだけど・・・悪趣味な建物だね」「まあな。なにせ、相手はのび太とスネ夫を倒した敵な上、俺たちの仲間を連れ去った敵だ」

「でも、その超能力の事でおもったけど本当に僕らと同じ感じなの?」

「わからない。けれど、遥か未来でこんな崩壊をしていたら何が起きたのか気になるよ・・・」

「・・・秘密道具の可能性は?」

「恐らく低くね・・・。もちろん、可能性としては残しておくけど・・・」

「しかし、このあと本陣に敵に乗り込むときに確認したいのは敵の幹部とかいるのではないのかのう」

僕ら男子チームはこのあとの敵の本拠地にどんな敵が潜んでいるのか、敵のボスがどんな敵なのか話し合っていた

「一番心配なのは姫路さん達の状態だ。酷いことをされてないのか心配で仕方がないよ」

「恐らく姫路達を連れ去ったあの敵もいるはずだ。そして、のび太とスネ夫を倒した上に・・・」

「美子ちゃんを操っていた敵がいるはずだ。でもいまわかっているのは二人だけだよー」

「・・・ひとつ提案がある」

「僕らはどうしたものかと悩んでいるとムツツリーニが手をあげていた

「提案?？」

「(コクツ)・・・姫路達の救出は任せろ。隠密なら俺の本業」

「なるほど！確かにムツツリーニは足が速いからう」

「だがリスクはあるだろ？」

確かに雄二の言う通り、リスクはあるはず。いや、确实にある！何故なら、敵の本拠地のどこに捕まっているのかわからない

「今ある道具でなら方法はあるけど・・・」

「本当?!早く出してよ！」

「落ち着け明久。肝心なときにポケットから目的のもの出せないのがドラえもんの特徴だぞ？」

「失礼な!!今日の日のためにきちんと整理したよ!!」

「まあまあ、ドラえもんの秘密道具で探索できるのがあるならそれに越したことないが、ムツツリーニが潜入するときには使えるのはなんだろうか？」

雄二の質問にドラえもんは2つの秘密道具を取り出した。どこもなく音楽が流れたのは気のせいではなく

「【透明マント】と【トレーサーバッジ】〜!」

「おお、なるほどな!その手があったか」

「透明マントはなんとなくわかるけど・・・トレーサーバッジは?」

「トレーサーバッジは位置情報を把握する機器。バッジ「トレーサー」のある場所をタブレット型端末「レーダー地図」の地図上に表示するんだ」

「え?でも肝心の敵に居場所はわからないじゃない?」

「・・・明久、スネ夫がすでに手をうつっていたのをもう忘れたのか?」

「あ!」

そういえば、出発前にすでに手をうつてくれていたね・・・
「なるほどな。ムツツリーニはこれをつけて何かあったとわかるんだな」

「でも透明マントをだしたのはなぜ？」

「ムツツリーニの足を考えてそれを使えば確かに有効だな」

「皆、話がある」

雄二はみんなの言葉を聞き、作戦が思い浮かんだのか全員に呼び掛けた

「なに？」

「まずは今から言う作戦は姫路達の救出をするためのプランだ」

「ふむ、聞かせてくれぬか？」

「ああ、まずはムツツリーニと秀吉を別行動してもらおう」

「「「え？」」」

「二人には姫路達の救出を優先してもらおう。ムツツリーニなら加速力もあるし、秀吉は臨機応変にできるからな」

確かに・・・

「で、それ以外のメンバーは敵の親玉を叩きのめすメンバーで行くぞ。ただし、何が待ち受けているのかここにいる全員がわからない」

「OK。みんなもそれでいいかな？」

「「「「おう！」」」」

ぼくは回りの皆に賛成の意見を聞こうと思いき声かけると皆も納得してくれた

「それじゃ・・・いくよ!!」

「「「「おう!!!」」」」

僕は敵の本拠地へと乗り込んでいった。まっけてね、姫路さんに
美波!!!

???

一人のフード姿の男はただまちつくしていた。そんなようすに一人のものが声かけてきた

「なぜそこにずっと待機してる?」

「……………」

「ふん……そうか。きちん仕事をこなすならこちらは何も文句はない……」

「……………」

声かけた人物は再びその場を立ち去り、残ったのは一人のフード姿の人間だけだった

「……………はやくこい……………」

その言葉の意味は何を意味するのか……まだだれもわからない……

敵の本拠地へ進撃！

僕達は現在、敵の本拠地に入り込んで敵の親玉を叩きのめすために走っていた。ムッツリーニと秀吉は大丈夫かな・・・

「お？早速ロボットが出てきたな？まあ、敵の本拠地だから数が多いのは当然と言えば当然か」

「ドカーーーーン!!」

え?!僕は声をした方向に振り向くと、ドラえもんが空気砲で向かってきたロボットに打ち放った

「君達は自ら召喚して戦うわけなんだからここで体力を使っただけはないよ」

「なら私も手伝うよ」

「いや、美子ちゃんは今から先の戦いも恐らく必要になるから温存！ルカとルナちゃんも！」

「ドラえもん！くれ！」

「私もです！」

「ジャイアン!?真理亜さん」

「ほい!!」

ジャイアンの言葉に僕は驚く他所にドラえもんはポケットからなにかを取り出して渡した。それを見たジャイアン達は手袋をはめて目の前のロボットへむかった

「サンキューー！」

「これをはめればいいのですね！」

「二人ともむやみに突っ込みはー」

「ーバキツ!!ボコツ!!」

「「へ?」」

無数のロボット達が綺麗にうえに舞っていた。その光景に僕らは唖然しているとジャイアンと真理亜さんはー

「はあああ!!」

「うおりやあああ!!」

「「「ええ!?!」」」

ジャイアンがひたすら連続で殴っていると真理亜さんがカバーするように周りの敵を回し蹴りなどで倒していた

・・・某俳優も驚きのアトラクション並みの戦いだよ・・・

「つたく・・・こんな程度ならアップにもならねえじゃねえか」

「全く・・・先走らないでください。追いかけるの大変なんですから」
「悪い悪い」

「」「」「」「」「」

ものの数分で侵入防止であったロボットが山積みされていた。その光景に僕ら何も言えなかった・・・

「さて、とりあえずは奥に進もうぜ!!」

「そうですね。時間はまっけてくれませんかからね」

「」「」「いやいやまって?!」「」

事の数分で終わったとはいえ突っ込みたいことが山ほどあるよ! ジャイアンは強い分かるけど真理亜さんはなんでこんなに強い?!?!

「ねえなんで真理亜さんはこんなに強いのか?」

「ん? ああ、真理亜は俺よりも強いぞ」

「はい!?!」

「因みに空手有段者だぞ?」

「うそお!」

あんなに優しくお嬢様な真理亜さんが空手有段者!?! しかもジャイアンより強い!?!

「とりあえず、第一は突破だね。ムツツリー二達はうまくやっているのかな?」

「そのところはわからないけど、とにかく増援される前にここを急いで離れよう」

「確かにせっかく倒したのにまた増援されてしんどくなるのは避けたいね」

「よし! いそぐぞ!」

僕らは次の場所へと全速力で駆けつけた。ムツツリー二達が連絡

ないのは心配だけど・・・大丈夫かな？

???

ーードゴオオオン!!

辺りに煙や爆風が飛び舞うなか、二人の人物が後ろへと飛び込んでいた

「ぬう・・・まさかばれるとは思わなかったのじゃ」

「・・・油断したっ・・・!」

その後ろに飛び込んでいたのは姫路達の救出を任されていたムツツリーニと秀吉だった。そんな二人に攻撃したのは・・・

「・・・」

フード姿の男がゆっくりと戦闘体勢になっている二人へと歩いていた。そんな様子に秀吉は冷や汗をかいていた

「参ったのう。まさか、侵入しているのが見破られるのは予想外じゃ」

「・・・しかし、ここで引いても問題解決にならない」

「ならばとる策はひとつじゃ・・・」

迫り来るフード姿の男を見据えた秀吉とムツツリーニはお互いに肩を並べてそれぞれ構えていた

「ここで戦うのみ!!サモン!!」

秀吉は槍を主に身軽な格好でムツツリーニは忍者の格好で身をとっていた。対するフード姿の男はなにも慌てることなく見据えていた

「いぎ・・・」

「・・・参る!!!」

明久達が知らない裏で・・・秀吉達が敵と戦っているとは誰も思わないだろう・・・

未知なる敵

ムツツリーニside

正直、油断した……。ドラえもんのくれた道具で我が秘宝レベル：クラスの仲間を助けるために動いていた。最初は問題なく進んでいたが、まさか敵が身近に潜んでいると思わず攻撃を食らった

「しかしどうしてわかったのじゃ？」

「……完全に透明だったはず」

「そんなの誰でもわかる……」

「(喋った!?!しかし……)」

こちらの疑問に向こうは呆れたようにしゃべっていた。しかし、この声……。どこかで聞いたことがある気がする……

「何故誰でもわかるのじゃ？」

「……その男が鼻血を出していたからだ」

「……(スー)」

「……なんと……」

……。しまった。先ほどのジャイアンの婚約者のスタイルがあまりにも良かったし、写真を撮ることを想像したら血が出たのか

「はあ……。少し待つから早く血を止める。やる気が失せるから」

「すまぬ。なんか本当にすまぬ」

敵に止血をするのを待ってもらおうとは……。敵ながら律儀なやつだ……

「(キュツキュツ)……。待たせたな」

「そんなに待っていない……。貴様らはここで侵入してきたのだな？あいにいくく貴様らのお姫様を助けに行く余裕は……。与えない」

「(消えっ……!)」

「ぬうっ!？」

ードガシャーン

俺のとなりにはいたはずの秀吉がいつの間にか壁の方まで吹っ飛ばされていた。俺はその光景に固まり動けなかった……

しかし、それがいけなかった……

敵はそんなので待ってくれないから

「……フッ！」

「……ぐっ!?!」

一瞬ヤバイと思ったこっちはクナイを構えたが、その前に相手の攻撃がこちらに当たり思わず苦痛な声をあげてしまった

「危ないのじゃ、ムツツリーニ！ぬりあ！」

「!」

横から秀吉が槍を思いきり振るうとフード姿の男は少しだけ回避行動をとっていた。時間は作ってくれた！

「……(出し惜しみはなしだ) 加速！」

「むっ！（ムツツリーニがあれをすと言うことは……事前にたてていた作戦を行うのじゃな!!）」

「……」

俺はやつの回りを全速力で引っ掻き回していると奴は動かずに警戒していた。そして、回りが見えないくらい風を引き起こした俺は……

「(取った!）」

やつの背後に走り込みクナイを向けて刺そうとするとー

「ぐっー!」

俺の手首をつかんで勢いよく投げてきた。思わずダメージを受けた俺は苦痛の声をあげた

「……この程度で討ち取れるとでも?」

「……いや、俺は困だ」

「!」

「もらったのじゃあ!!」

俺は倒れながらやつという言葉に反論をすると共に秀吉が槍をやつに向けて攻撃していた。流石にかわせないはず!

だが現実は一

「ガハッ……!?!」

「……何……!?!」

俺たちの作戦は無情にもやつには通用することなく……一瞬、俺達は何をされたのか分からないが……これだけは言える……

迫る敵の悪意

僕は今、目の前の光景に愕然としている。何故なら姫路さんたちを助けに行くために別れたムッツリーニ達はいないで、目の前では所々ボロボロになっていている姫路さんと美波がそこにいたのだから……。「罨か……?」

雄二が何か懸念な顔をしてるけどそんなの関係ない!! そう思った僕は全速力で姫路さん達の方に駆け寄った

「二人とも!!」

「あ、おい! 明久!」

「まて!?!」

ジャイアンや雄二が止める声がするけどそんなの関係ない! だつて本物だよ!?! きつとこの二人は!

「姫路さん、美波!」

僕は二人を呼び掛けたが反応はいまいちだったというか、意識が覚醒してなかった……。体全体は傷らしいのが見当たらなかったのは良かったけど何でこんなところに……? 「眠っているだけだと思いが……」

「ドラえもんさん、一応二人の状態を確認できる道具はありますか?」 「任せて、【お医者さんカバン】」

真理亜さんの言葉にドラえもんは四次元ポケットからカバンを取り出して二人の状態を見てくれた

「……うん! 二人とも健康状態は悪くなく、寧ろ今は眠っている状態みたい」

「栄養とかとれてるの?」

「不思議なことに二人ともきちんと栄養は大丈夫みたい」

「え? それはつまりこの人間が姫路さんたちをきちんと食事を与えてくれたということ?」

僕の疑問に三上さんが答えてくれた

「きちんと栄養はとらしていた可能性としてはあるわね」

「でも何でこんなところに……?」

「脱走をしていたが、疲労が出てきて倒れたとか？」

僕とルカさんの疑問に皆は???となつていてどうしてこうなったのか考えていた。すると、ジャイアンが手を叩いて深く思考に入りかけた僕ら呼び掛けた

「分らないが、とりあえずは二人を保護するぞ。それに敵がここに潜んでいない可能性はないと思うから早めに動くのが得だな」

「そうですね。いざとなつたら私とルカが攻撃を防ぐこともできますから大丈夫ですよ」

「どちらにしてもまずはここから上へ目指そう」

僕らが上を目指そうとして動くなか、一人の女性がじつと何か考えていた。そんな様子にドラえもんや霧島さんが声をかけた

「……」

「美子ちゃん？」

「……どうしたの？」

「はっ!?な、何でもないわ!」

「何か気になることでもあるのか?三上」

「いいえ、恐らく杞憂なら言わないに越したことないから心配しないでいいわ」

「そうか。なら、いくぞ!」

「」「おう!」「」

雄二は三上さんの様子が気になり声をかけると三上さんは少しだけ驚きながらも何でもないと笑っていた

「うーん……(あの三上さんが呼び掛けに対する反応の遅さは少し気になるけど……本人が大丈夫ならいいっか)」

「……(ないと思いたいけど、この二人自体が罠の可能性が……いいえ、二人はきつとそんなことにならないはず。……あんな辛い思いをするのは私だけでいい……)」

三上さんが悲しそうな顔でそんなことを考えているのは誰も気づいてなかった……

因みに姫路さんや美波はまだ起きそうにないからどうしようと思っていたら、霧島さんと真理亜さんがそれぞれおんぶしてつれてい

くと言う選択になった

「……??」

一人のフード姿の男がある王座の席に座っているのを確認すると、膝まずいて報告をしていた。王座の席に座りその報告を聞いた人物は愉快そうに笑っていた

「ここに侵入者がきたというのか……」

「(コクツ)」

「ふむ。ならご丁寧にこちらも出迎えるまでだ……」

「なら、私が出ます」

王座の席に座り報告を聞いていた人物は次の手を考えていると、別の声が勇ましく声をあげた。そして、声をあげたその人物をみて確認の意図をきいた

「ほう、いけるのか……?」

「無論です。やつらにも絶望を必ずあげますよ……」

「ならば任せる。そして、貴様も待機しておけ」

「はっ! (コクツ)」

一人はしっかりと返事し、一人はうなずいて返事していた

明久達に脅威が迫っているのはまだ誰も知らない……

明久 side

僕らはゆつくりと歩き、次の扉があつた。なんかこれは前もあつたような気がするけど……気のせいだよな?

「姫路と島田はまだ起きないのか?」

「うん、そうみたいだね」

「でもなんであんなところに二人が?」

「そこはわからないが、とりあえず中に敵がいると思うから油断するなよ」

「わかってるよ」

僕と雄二は小さい声で話し合いながらゆつくりと扉を開けたら：：
そこには大きな広間が目の前の光景に移った

「・・・おい、何でなかはこんなにきれいなんだ？」

「わからないよ」

「――漸く来たのね。待ちくたびれたわ

「「「「「！」「」」」」」

僕らは誰もいないはずの広間から声が聞こえたので全員固まって
周りを見た

「・・・瑞希と美波をおんぶして戦うのは危険」

「そうですね。すいませんが、一回下ろします」

霧島さんが警戒しながら下ろす案を出していたので真理亜さんも
同意してゆつくりと地面におろした

「おい、どこにいる!?!出てきやがれ!」

ジャイアンの怒声で出てくるかと思われたが、相手は落ち着いた声
で返事していた

「――生きのいいボウヤ・・・ウフフ・・・やりがいがあるわね

「!」

ジャイアンが前に出ていった瞬間にジャイアンの背後からなにか
が攻撃を迫っていた。ジャイアンの回避が間に合わない!?

「はあ!!」

「っ!?!」

そんな回避が間に合わなく攻撃が当たると思われた瞬間に真理亜
さんと三上さんが前を出て攻撃を弾いた

「すまねえ・・・助かった」

「大丈夫?」

「全く・・・油断しないでください。それよりも背後から攻撃をするとは
ずいぶんと姑息な方なんですな」

真理亜さんはジャイアンに優しい顔で指摘したあとにどこからか
攻撃した人物にたいして怒りじみた声で周りを見ていた

「あらあら、小娘の分際で言ってくるわね?・・・」

「「「「「?」「」」」」」

「・・・その声は・・・?」

三上さんはなにか気づいたのか驚愕の顔を思い浮かべて、対する相手の女性は余裕そうな顔をしていた

「あら、もしかって私の事をおぼえてないのかしら?」

「えーと・・・誰?」

僕は目の前に現れた女性が何者なのかわからないが、向こうは何やら僕たちの事を知っているみたいだ

「どなたですか・・・?」

「そうね・・・私の名前を聞く前に・・・そろそろ遊びは終わりよ。戻りなさい」

「え?・・・くぼう?!」

「吉井君!」

「!」

一瞬なんのことだと思おうと僕の背後にいきなり攻撃が直撃して思わず変な声を出してしまった。そんなふっばされた僕を見た三上さんが心配した声をあげると皆も何事かとみていた

「・・・」

そして僕や皆がみた方向には、いつの間にか立ち上がっていた姫路さんと美波が僕に攻撃したのがわかった

「吉井くん大丈夫!」

「う、うん。なんとか・・・」

「ねえ、それはどういうつもり? 瑞希さんと美波さん・・・」

「・・・」

三上さんは僕の方に状態を確認して大丈夫だと伝えると安堵していた。そして、真理亜さんが咎めるように二人に質問をするが二人は答えなかった

「ふふふ・・・」

「クスクスクス・・・」

「何がおかしいの?」

「アツハハハハハハ!! アツハハハハハハ!」

「美波・・・? 姫路さん?」

「吉井君たてる?」

「う、うん」

真理亜さんの質問に二人は急に大笑いしていた。そんなように僕は戸惑うなか三上さんが心配そうに聞いてきたので僕はゆつくりと立ち上がった

「貴方達・・・今、吉井君に攻撃したのになんとも思わないの?」

「アキに攻撃したのになんも思わないかって?別になんとも思わないわよ・・・ってか、アキに興味はないし仲間や友達とも思っていないわ」「そうですね。吉井君に攻撃しても何とも思いませんよ?そもそも吉井くんなんか興味ありませんから」

「・・・え・・・?」

僕は今二人から放たれた言葉に呆然として立ち尽くしていた。今二人は何て言ったの・・・?

「今なんて・・・?」

「明久、前に出るな!!」

雄二がなにかいっているの聞こえるけどそんなの関係ない・・・今はきつと気のせいだよな?

「わかってないみたいだね。もう一度いってあげるわ」

「そうですね」

「私達は貴方の事なんも思っていないから・・・死んで?」

姫路さんと美波が僕に向かって全速力で攻撃を仕掛けてきた・・・そうか・・・君たちは僕の事なんも思っていないのか・・・嫌われていたんだね・・・

「(ああ・・・なんか・・・もういいや)」

僕は迫る攻撃に回避することなく受け入れようとしていたが・・・いつまでたっても二人の攻撃が僕に当たった感触しなかったので目を開けると・・・

「っ!?!」

「・・・」

真理亜さんと霧島さんが僕の前にたって姫路さん達の攻撃を防いでくれた・・・

怒り

美子 side

私達は……いえ、私は少なからず嫌な予感があったのになんも対策をたてなかつた自分に腹立つわ……

「吉井君、今の貴方の気持ちはわかるわ。……いえ、すべてわかるとは言わないわね。だけど今は辛いと思うけどここは……私たちに任せなさい」

「……吉井、ここは私たちに任せて」
「でも……」

「大丈夫です。きっと貴方の大切な人の心を取り戻して見せますから……だから先にいって下さい」

私や霧島さんと真理亜さんがここは請け負うと伝えたと吉井君は悩んでいた。私達としては、吉井君達が先にいってくれた方が安心だと思うけど……

「悪いがそれはできない。真理亜さん」

「!……なぜですか?武」

吉井君が悩んでる所、私たちのたのみを拒否する声があった。それは真理亜さんの恋人兼婚約者の武君だったので真理亜さんは少し怒っていた

「この二人を助けるはずの秀吉やムツツリーニが捕まった可能性が考えられる以上、下手に別行動は避けたい」

「……私達はその心配はない」

「翔子……あのな、相手は姫路と島田とそれに謎の敵がいる以上絶対に大丈夫という可能性はないぞ」

「それは……そうだけど……」
「それにな……俺はな、少なくとも恋人をこの場に任せて行きたくはないんだよ!」

「!……武君……」

真理亜さんは剛田君の言葉に驚いたように振り向いていた。その剛田君は少しだけ真っ赤にして私たちをみていたので真理亜さんは

クスツと笑っていた

「わかりましたわ。この敵を倒して瑞希さんと美波さんを救って一緒に行きましょう」

「・・・夫も心配してるから早めに倒させてもらう」

「決まりね」

私たちが今からとる策はどうするのかは、その時に決めたらいい。ただ、今私たちの気持ちは・・・

「（絶対に許さない！）サモン!!」

「フフフ・・・」

私達は目の前の敵・・・そして、友達が操られているのに我慢できるほどお人好しではないの・・・

だから・・・

「真理亜さんと霧島さんは瑞希と美波をお願いします。私は・・・あの敵と戦います」

「それはいいけど・・・やけにあの敵には凄く睨んでるけどなにか因縁あるのですか？」

「あるもある・・・。なにせ、目の前の敵は・・・声を聞いて確信したわ」

ええ、そうよ。あの声を聞いたら漸くはつきりとわかったわ・・・そして、この果てしない怒りの気持ちが抱いた理由を・・・ね

「あら？なにかしら」

「いい加減にそのフードをとったらどうですか？名前は知らないけど・・・貴方の声に聞き覚えはあるわ」

「へえ・・・？」

「三上さんはあのフード姿の敵を知ってるの!？」

吉井君が驚いた声をあげていたが、吉井君に限らずに周りの皆が驚いたように私をみていた

「ええ、恐らく吉井君や坂本君、翔子や美波と瑞希と木下君と土屋君は知ってるはずよ」

「「ええ？」」

私の言葉に吉井君達は驚いていた。私もついさつきまでは忘れて

いたわ・・・

「本当に忘れていたわ。ねえ・・・貴方なんですよ？のび太君をナンパしていた女・・・」

「!!?!」

「ええ!?!のび太君ナンパされていたの!?!」

「予想外の発言を聞きましたわ・・・」

「ふふふ、そうよ。そして私の名前は・・・はっ!」

私が指摘した敵は笑いながらフードをとった。見た目は20代前半で身長は・・・168〜170cmで髪の毛はショートで性別は女性ってことね

「改めて名乗るわ。はじめまして、私の名は・・・留瑠璃よ」

「留瑠璃ね・・・。なら、此方も名乗られていただきます。私の名前は三上美子よ。そして・・・」

「そして・・・?」

「私の大切な人をナンパした怒りを・・・いまここで受けなさい・・・!」

「!!?!「ひいひい!?!も、物凄くキレてるううう!?!」!!?!」

「クスクスクス・・・お互いにこの時間を楽しみましょう?小娘」

「戯れ言は聞くつもりはないわ・・・。覚悟しなさい!」

私は目の前の敵を必ず倒すと決めた・・・そして同時にこの女からいいようのない寒気を感じたのはきつと気のせいだと思いたい・・・

真理亜 side

三上さんは敵の正体を知っていて、尚且つのび太さんをナンパしていた人とは思いませんでしたわ・・・。あちらの敵は、三上さんに任して私達は・・・

「あんだ達が相手してくれるの?」

「そうですね。霧島さんが姫路さんを相手してくれるので、私はあなたが相手です。・・・さあ、覚悟はよろしいですか?」

「ふふふ、楽しませてね」

今の目の前にいる彼女は悪意に飲み込まれてますわね。さて、私は空手の格好をしていて美波さんは召喚獣と同じ格好ですか・・・

「来なさい。必ずあなたの心を取り戻して・・・吉井さんに謝ってもらいます！」

「あはは、あなたも負けて、私たちと同じ立場になってもらうわ!!」
「お断りします！」

美波さんは私に向かって突く攻撃を繰り返してましたが、私はこちらに来る攻撃を流し込む感じで交わしてました。勢いと攻撃は確かに鋭いですが・・・

「当たらなければどうしたことありません!!はあ！」
「っ!？」

私は気合いを入れると共に美波さんの手を強く叩くと向こうは当たられると思っただけだったのか驚いて後ろに飛び下がった

「ふう・・・美波さんにひとつだけいいこと教えます。私は今、3つのことに怒りがありません」

「怒り？」

「ええ。その前に・・・貴方は・・・妹のことを覚えてるかしら？」
「・・・え・・・」

「今操られてる貴方は・・・貴方の大切な妹を覚えていますか？」

「お、覚えているに決まってるでしょ?いきなり何を言ってるのかしら」

「(妹の事を覚えてるのに何故、敵に?) そう・・・ならもう1つ聞きますけど・・・貴方は吉井さんの事をどう思ってるのですか？」

「別に興味はない」

「・・・そうですか・・・」

操られて本心で言っていないとはいえ、さすがにこれは聞いていて苛つきますね・・・

「私が先ほどいった3つのことで怒っていると言いましたね。おしえましようか？」

「は、なにいつてるの?」

「まず1つは自分自身に対する怒り・・・」

「っ! (足蹴り!?避けないとこっちが危ない!!)」

私は右足で美波さんの体に向けて攻撃をすると、美波さんは慌てて

下がっていたがこれは予想通り

「こうなるくらいならあの日の夜に、もつと早く気づいてあげればこんなことにならなかつたのにと今でもおもいます」

「くう！調子に乗らないで!!はああ!!」

「はあ・・・ふっ！」

「(攻撃の軌道をずらした!?) つきやあ！」

突きの攻撃を仕掛けた美波さんにたいして、腰を落として上へ思いきり叩くと美波さんは驚いていたが、攻撃の手を緩めることなく両手を平いて突き飛ばした

「2つ目は・・・」

「調子に乗らないで!!」

「その短気な攻撃では私に当たりませんよ」

「ええい！何で当たらないのよ！」

「2つ目は・・・私は貴方達を操っている敵に対して物凄く怒ってます。はっ!!!」

「さつきより攻撃が重い!？」

私はこの世界に来る前に美子さんと二人で話すことがありました。のび太さんの話になったときの彼女の辛そうな顔を見たときに何かあったのか気になり質問をすると、彼女は包み隠さずに教えてくれた『真理亜さん・・・私はね、操られていたの』

『・・・え?』

その時の彼女の表情は一生忘れることはないでしょう・・・

『のび太君の行方不明の原因は間違いなく私が関係してると思うの・・・あの日の夜に敵に操られた私は・・・最低なことに恋人ののび太君に背後から攻撃したの』

『・・・』

『ドラえもんさんと吉井君のお陰であの日の記憶を取り戻したときに私は・・・あの日ののび太君を攻撃したときどう思ったのかわかったの』

『それは・・・もしかって、攻撃したくないという気持ちがあった?』
『いいえ、そうではないの・・・あの日の操られていた私は・・・のび』

太君に攻撃した時にとても楽しくなり攻撃を加えていたの』

『えっ……』

私はそれを聞いて物凄く驚いた。のび太さんと美子さんの恋人としては誰もが憧れる位の仲良しだったから美子さんがそんなことを思っていたのは予想外だった

『今でも思うわ。あの日の自分は凄く最低だと……大切な人に攻撃した私は恋人失格ね……』

『美子さん……』

『これでもしも……彼が帰ってこなかったら……ほんとうに生きていなかったら……私は……私は……っ!』

『美子さん……誰も見ていないので……今は泣いていいですわ』

『つつ……あああ!!』

声にならない叫びで泣いていた三上さんを抱き締めながら私はこのときに誓いました。この二人の仲を切り裂いた敵を……絶対に許さない!!

『だからこそ!!私は!!』

『くう!』

「今、目の前に操られている貴方達を助けることと悲しみを引き起こした敵を必ず許さないと誓ったのです!!」

「戯れ言をいわないで!!(このままでは本当に私が負ける!!そんなのはあつてはいけない!!)」

「そして、三つ目は……」

私はゆつくりと歩きながら吉井さんに向けていったあの言葉を思い出していた

『アキに攻撃したのになんも思わないかって?別になんとも思わないわよ……ってか、アキに興味はないし仲間や友達とも思っていないわ』

『そうですね。吉井君に攻撃しても何とも思いませんよ?そもそも吉井くんなんか興味ありませんから』

『私達は貴方の事なんも思っていないから……死んで?』

その言葉を言われた彼は絶望をしていた。そして、私達は彼がどう思うかで彼女達を思っていたのかわかつてるからこそ……

「操られているとはいえあなたたちが吉井さんに対して言ったのは……」

「交わされた!っ!?!」

私は美波さんの突きの攻撃を回避して目の前に迫って拳をしつかり握りしめて、後ろに引いた。そのように美波さんは怯えていたが関係ない!

「彼の心を傷つけたことが私は許せない!!!美波さん、彼の痛みをもとに味わいなさい!」

「回避できない!?!」

「はああああああああああ!!!」

「ーードシンツ!!!」

「っ……あ……」

「……目が覚めたときはきつとあなたはもとの美波さんに戻っているでしょうが……今はそこで眠ってください」

私は気絶した美波さんを抱え込み、小さく呟いた。そして、私の後ろには……

「真理亜、無事か?」

「はい♪私は大丈夫ですわ」

大切な人が心配そうにそこにいたので、私は明るい声で返事した。必ず貴方達を操った敵を殴るから……今はそこでねといて……

友達だから助ける

翔子 side

私はゆっくりと歩きながら、目の前の本当に大切な友達を見据えていた。そして、私はあの学校でいつもつかう台詞を呟いた

「・・・サモン」

「なら私も改めてサモンです」

私はいつもの召喚獣の格好に対して瑞希のはどこか禍々しいオーラを背負いながら私の方に歩いていった。私もまた、目の前の友達から目をそらすことなく歩いていった

「・・・」

私は正直、戸惑っているのが本音。吉井の事をあんな風に言うのは瑞希とか美波は本来はそんなことを思わないのはみんなよく知っている。それに・・・

「・・・瑞希、改めて聞くけど・・・」

「なんですか?」

「・・・本当に吉井のことなんとも思っていないの?」

「・・・ないですね」

「・・・そう」

私はそれを聞いて確信した。嘘をいってると言うことと操られていると言うことが確信できた

「(だったらここでこの戦いにかつて)・・・もとの瑞希に戻す」

「何をいってるのか知りませんが、私は負けるつもりありませんよ」
「・・・友達を助けるのに理由要らない。だから、今の瑞希は・・・必ず助ける!」

「翔子ちゃん、覚悟してくださいね♪」

私は刀を抜くと同時に瑞希も刀を抜いて私の方へ走った。あんなに傷つけないで闘うのは難しいけど・・・やってみよう

「ふっ!!」

「ひい!?!」

私と瑞希の刀が交差して刃りに少し風が吹いた時に何故か吉井と

雄二の震えた声が聞こえたけどどうしたのだろうか？

「いきますよ」

瑞希がそう呟くと共に私の視界から消えた。そして後ろから気配がしたので私は刀で瑞希の攻撃を防いだ

「・・・その程度攻撃なんて普通に止めれる。次はこっち」

「やりますね。流石翔子ちゃんです」

「そして・・・」

「え・・・(いつの間に消えた?)」

「・・・本物はこっち」

瑞希が戸惑うなか私は後ろへと回り込み瑞希がしようとしたことを私が後ろから攻撃を仕掛けると瑞希も冷静に対応した

「・・・流石」

「翔子ちゃんも凄いです。中々楽しくなりそうですね！」

「・・・それに関しては少し同感。気持ちが高ぶってきた」

「同じくです！」

私の言葉に瑞希も楽しそうに笑っていた。操られているとはわかってしまったか心のそこでは楽しく感じる

「少し待て!?!なんか翔子と姫路が物凄く生き生きと戦ってるのが怖いのだが!?!」

「うわ・・・もう、神様真つ青の戦いだよねー・・・」

「なんか女性同士の戦いってこんなに怖いもの？」

「それは偏見よ。ルカ」

「・・・あいつ人間やめると言われても俺は納得できるぞ」

「・・・雄二、あとでお仕置き」

「って何でだ!?!(小さい声でいったのに聞こえた!?!)」

このくらい妻たるもの夫の小さな愚痴は聞き逃してはいけないのは基本。それに、私のお仕置きの言葉に瑞希も反応を示していた

「お仕置きって何をされるのですか？」

「・・・石畳を使ったお仕置きと言葉でひたすらお仕置き」

「なんか参考になりそうな話ですね。貴方も私の仲間になってくれたら教えてくれませんか？」

「参考にしないで!?!操られているからそんな言葉をいつてるよね!？」
「うるさいです。黙ってください」

「・・・はい・・・」

「」「打たれ弱っ!」「」

瑞希の言葉に吉井は物凄く落ち込んでいた。そんな吉井に雄二達は突っ込みをいれていたけど、私は別の意味で瑞希から目を離せなかった

「瑞希」

「なんですか？そろそろ決着をつけるのですか？」

「吉井にとっては瑞希や美波も大切な存在。それは間違いなく言えること」

「・・・いきなり何をいつてるのですか？」

「それに・・・」

「・・・二人は私にとって大切な友達。必ず助ける」

「・・・もう話していても平行線ですね。そろそろ決着をつけましょう」
瑞希は刀をしっかりと目の前に見据えた敵を逃さないとやんばかりに構えていた。そして、雰囲気も変わっていた

「(吉井の話ではこの状態でも特殊能力も使えるといっていた)・・・うん。決着をつけよう」

「あなたを倒して私たちと同じ立場になつてもらいます!」

「姫路のやつまさか特殊能力をつかう気か!」

雄二の慌てている声が聞こえたけど、私のなかでは予想通り。何故なら、友達として瑞希の考えそうなことは分かる

「・・・全力で来て。瑞希」

「行きます!!」

「・・・戦いで話し合えばきつと分かるものもある」

「ありえませぬ・・・。【熱線】!!」

瑞希は刀を振り下ろすと共に熱線がこちらに飛んできた。正直ここまででは予想通りだから慌てることはない

「翔子あぶないぞ!」

「・・・雄二」

「!」

「大丈夫」

私の言葉に雄二は大きく目を見開いて驚いていた。そう・・・今の私は負ける要素はない・・・

ザシユツ!

「・・・え?」

「向かってくる熱線は・・・切ればいい」

「「「・・・ええええ!」」」

私の言葉に敵味方関係なく驚いていたが、私はすぐに呆然として瑞希に向かった。すると、瑞希は動揺しながら構えようとしたけども
う遅い

「・・・今度は私・・・ふっ!」

ーバチツ、バチツ!!

「あっ・・・そ・・・んな・・・」

「私の勝ち・・・お休みなさい。瑞希」

「うっ・・・」

私の言葉と共に瑞希はゆっくりと倒れた。・・・スタンガンで眠らせたのでセーブ・・・

さて、あとで雄二をお仕置きしないと・・・

女闘士の闘い

美子 side

それぞれの決着をつけているなか私は今日の前の敵を睨んでいた。この女だけは・・・私は許すことはない・・・

「あらあら怖いねえ」

「誰のせいだと思ってるのかしら？」

「フフフ、さあ？」

「本当につくづくいらつかせるわね・・・サモン!!」

「さあ来なさい。小娘」

大切な人を逆ナンパしていたのももちろん腹立つけど・・・この女は・・・この女だけは許すことができない!!

「三上さん、物凄く怒っているけど・・・あの人がのび太をナンパしていたのがそんなに許せなかったのかな・・・」

「それは違うわ」

「え？」

私は吉井くんの言葉に小さく反論した。その声に吉井君は驚いていたので私は話した

「貴方とドラえもんさんのお陰で封印されていた記憶が戻ったけど・・・もうひとつ私は思い出したの・・・」

「へえ・・・」

「あの日の私を操っていたのは・・・この女よ」

「!!」「な、なんだって!!」「!!」

「あら、思い出したの？」

「ええ、正確にはもう一人いたのかもしれないけど・・・少なくとも貴方が私を操っていたのは確かみたいね」

「ご名答♪貴方は楽しかったかしら?大切な人との・・・闘いをね!!」
「(来る!)」 「——はああ!」

留瑠璃の攻撃が私の方に向かって突進してきたが私は魔法で対抗していた。元々こんな攻撃を仕掛けてくるのは予想済みよ

「あらあら、初撃は防がれたかし・・・ら!」

「残念だけど、のんびり貴方と話すつもりはない……ここでさつさと倒させてもらおうわ！チンカラホイ！」

「風が……!？」

「……吹っ飛ばされなさい。この強風で壁の方までね！」

私が手を振り下ろすと共に留瑠璃のいたところには強力な突風が吹き下ろし直撃した。留瑠璃の声は聞こえないけど……

「飛ばされた……でもおもったのかしら？」

「!?つきやあ！」

私の背後にいつの間にかサクナはたつていたので私は大慌てで下がった。……こんな女性に背後をとられて思わず変な声を出したのは不覚よ……っ！

「いったいいつの間に!!」

「ついさつき移動したのよ」

「ふぎけないで！そんな簡単に移動はできないはずよ！それこそ超能力で……超能力？」

「フッフ、気づいたみたいね。私はね、空を飛ぶことやビームを出すことができるのよね！」

「つきやあ！」

「美子ちゃん!!」

「本当に甘いわね……まるで彼のように……ね」

彼……?それはどう言うことかと思いつながら私は顔をあげるとその女はまた無表情になって私に攻撃をいれた

「さて、今度は私の攻撃からだけど……交わせるものなら交わしなさい！」

「くう!!」

「攻撃を交わすだけで反撃はしないのかしら!？」

留瑠璃が笑いながら挑発してるけどその策に乗ってはいけないわ。乗ってしまえば恐らく私はやられる!!

「そうね、中々攻撃に隙が見つからないから苦戦するわね！」

「それを探するのが戦いでしょ？」

「たしかにそう……ね!!」

「っ突進して拳!？」

私は相手の攻撃がやんだのをみて全速力で走って拳を振るうと留瑠璃は少し驚いて手で私の攻撃を塞いだ

「……やるわね……っ！」

「貴方が油断してくれたから攻撃がうまいこと行けた……のよっ！」

「ぐっつつう……！」

なんて力なのかしらね……!!ってかこの人はサモンしてないし生身で戦っているなら……本当に強すぎないかしら?!

「考えことは余裕ね!はあ!!」

「っ!はあ、はあ……」

私は留瑠璃の攻撃を慌てて回避して後ろに下がったと同時に息が乱れていた

「あらもう疲れたのかしら……?」

「いいえ、少し息が乱れた程度だわ」

「そう……ならもつと楽しみましょ!三上美子!!!」

「!!……どうやらまだもう一段階あがるのね……負けられないわ!!」

私は目の前にいる留瑠璃の不敵な顔を見てまだ状況は緩むことはないと確信した……。必ずあなたを倒して……

のび太君の手がかりを聞く!!!

女騎士の闘いⅡ

私は目の前の敵でもある留瑠璃の雰囲気が変わったことに気を締めていた。少しでも油断したら・・・私がやられる！

「いくわよ・・・っ！」

「消えー・・・っ!!」

「三上さん!」

目の前にいたはずの留瑠璃が消えて私は回りを探ろうと思った瞬間、留瑠璃が私の目の前に現れて肩の方へ攻撃してきた。そんな様子に吉井君が心配した声が聞こえたので、私は毅然と返事した

「っ・・・この程度は大丈夫よ!（このままでは危ないから距離をとらないとー!）」

私はすぐに留瑠璃から距離をとり、本をもって構えていた。今の攻撃は速すぎて見えなかった・・・

「おいおい、いまのは瞬間移動か?!」

「ええ!?!それって最悪じゃない!?!」

「・・・違う」

「ドラえもんさん?」

「それは僕らも同じ意見だよ」

「はい。あれは瞬間移動ではありません。どちらかというも・・・速く移動したということですね」

「え?ルナさん、それはどういう事?」

私は戦いながらルナさんの意見を聞き返していた。私は目の前に消えて攻撃されたようにしか感じなかった・・・外から見たら違うとということ?

「正直、留瑠璃の今の攻撃は私自身は見えなかったわ。外からはどう見えたの?」

「恐らく、余りの速さで目が見えなかったのだと思います。・・・もし良かったら、私たちも協力して戦いますけど・・・三上さんの気持ちを私は優先にしたいです」

「・・・私は・・・っ!」

「あら？お仲間が協力してくれるなんて良かったわね」

相手の何かの攻撃が私の体を直撃した。今のも速すぎて見えなかったということね……。ルナさんが協力の案を出してくれて、留瑠璃は余裕さをだしながら待ち構えていた

「本音を言えば私一人で決着をつけたかったけど……。負けてしまえばのび太君の手がかりもつかめない……。だから……！」ルナさん、協力をお願いしていいですか？」

「はい！」

「ふふ、二人でも三人でも私は構わないわ……。ここは戦いの場。スポーツみたいにルールがある訳じゃないのだから遠慮しなくってもいいわよ」

「そう……。なら、遠慮なく仲間を頼らせて戦うわ！」

留瑠璃の言葉に私は不敵に笑いながら仲間を頼る選択にすると私の側にルナさんがゆつくりとよってきた。そうね……。闘いなら確かにスポーツみたいにルールはないのよね……

「私の役目はどちらかというサポートだから……。三上さんは戦闘をおねがいね？」

「はい！」

「……。あら？よく見ればあなたも可愛いわね。どう？貴方もだけど三上美子もよければ私たちの仲間にならない？」

「せっかくのお誘いですが、断ります。私は……。お友達を助けるためにここにいますので、あなたたちの仲間になるなんてのはあり得ません」

「そうね。私も断るわ……。特に大切な人を奪った敵とはね……」

「あらあら、残念ね……。ならここで私が引導を渡してあげる」

「おあいにくさま……。ここで貴方が私たちに負けるのよ。風よ吹き荒れくれ！チンカラホイ！」

私は手を前に出して呪文を唱えるのと同時にその攻撃は留瑠璃の方へと向かっていた。その攻撃に留瑠璃は少し慌てながら手で弾いていた

「(いまのは恐らく超能力かなにかで私の攻撃を弾いたのね)当たらな

かった・・・か」

「ふー・・・いまのはなかなか攻撃の速度が良かったわね。少し危なかったわ」

「残念ね。・・・私の攻撃だけが通用しなくって」

「え・・・？」

「貰いました！はあああ！」

「!?っあ!!」

私の言葉に留瑠璃は一瞬怪訝そうな顔をしていたが、ルナさんが超能力で留瑠璃を弾き飛ばすと彼女は予想外の攻撃に直撃して近くの壁に当たった。そして、彼女はゆっくりと立ち上がりながら疑問を漏らしていた

「あなたの攻撃は弾いたはずなのに一体なんで・・・？」

「そうね。確かに私の攻撃は弾いたからその攻撃は当たらなかったわね。けど、それはあくまで囿の攻撃よ」

「まさか・・・！もう一人の女性が!？」

「・・・」

「ええ、そうよ。貴方が気を緩むのを見越してね」

「なるほどね。確かに油断していたけど・・・もうその手は食らわないわ」

「・・・そうね」

私は留瑠璃がもう油断はしないだろうと思い、ルナさんに聞こえるように話していた

「流石に長期戦に持ち込めないし、体力もきつく感じるから・・・ルナさんはみんなに攻撃が当たらないようにそばいてほしいの」

「三上さんはどうするのですか？」

「・・・私はこの召喚状態でしか使えない特殊能力で・・・決着をつけるわ。あれを使うタイミングの時にみんなを守ってほしいの」

「・・・わかりました」

「相談してるところ悪いけど・・・攻撃再開させてもらっていいかしら？」

私がルナさんにたのみ事をしてると、留瑠璃は律儀に待っていてく

れた。私はそれを見て少しだけ疑問を言った

「・・・本当に律儀に待ってくれるなんてあなた本当に敵なの？」

「・・・敵よ」

「そう。でも、少しだけ今おかしいのよね」

「どこがおかしいのかしら?？」

「あなたが本気なら・・・さっきの攻撃で私は終わっていたわ。それに、瑞希と美波が操られていたとき最初はあなたを倒したら二人は正気に戻ると思ったの」

「・・・」

「けれど、そこで私は一つ思ったの。本当に貴方が操っていたのなら、その気になれば私たちを全滅させる指示もだせはす・・・つまり、貴方は・・・」

「もう御託はいいわ。そろそろ決着をつけましょう」

私が今の今まで疑問に思っていたことを話そうとすると、留瑠璃は冷たい目で私を見ていた

「・・・そうね。話すよりもここで決着をつけるのがいいわね」

「・・・ええ。三上さん、あなたのそのまっすぐな瞳に敬意を表して私は私の最高の一撃をあなたに与えます」

留瑠璃はゆっくりと手を前に出していたのと同時に私も手を前に出して特殊能力をだす準備をしていた

「・・・少しの時間だったけど楽しい戦いだったわ。これでもない笑っても私たちの戦いは終わりよ・・・」

「そうね・・・。貴方との闘いはこれで終わりよ」

「いくわよ・・・はあああ！」

「これは私の最高の一撃よ。特殊能力発動！【ジャンボット・ビーム】
ー！！！！
！！！！

「！！！！うわ！！！！」

わたしたちの攻撃がぶつかり合うのと同時に辺りに爆風が飛び散った。その余波で、ドラえもんさん達が吹っ飛びそうになってるか悲鳴をあげていたのが聞こえた

「はあああ！」

「つつ!!! (力は互角だけどーこのままでは私は負けてしまう!!)」

「私は・・・負けられないの!! 負けたくない! だから・・・ここであな
たに勝つ!!」

「! (またもう一段階あがってる!? どこから彼女はそんな力が:!!)」
私は力を入れながらもこのままでは負けてしまうと心が折れかけ
ていた。あんなにまだ力があるなんて!!

ー・・・美・・・子・

「(なにか聞こえる・・・?)」

ー美子さん・・・

「(この声は・・・)」

ー大丈夫だよ・・・君ならきつと・・・落ち着いてやれば大丈夫
だよ

「(・・・フフ、貴方はやっぱりどこかで見守ってくれてるのね。不思
議と・・・力が湧いてきたわ)」

「な!？」

「貴方が負けられない理由はわからないけど・・・私も負けられないの
よ!! 留溜璃!!」

「つつ!! 三上美子おお!!」

「留溜璃いいいい!」

「はあああああ!!」

私達はお互いの最高の一撃を出しきるために叫んだ・・・
そして・・・

辺りに光が走った・・・

ーーーードゴオオオオン!!!

女同士の闘いⅢ

美子 side

私にとってこの戦いは負けられないの!!留瑠璃がなにかを思って戦うように、私もまた負けられない!!そう思ってお互いの力を出しきりながら最高の一撃をだして辺りに光が走った……
そして……

「……」

お互いに力を出しきった私達は互いに倒れることなく相手の方を見ていた。そして、留瑠璃から口を開いた

「……どうして……」

「……」

「どうしてそこまで貴方は戦えるの?三上さん」

「……私には大切な人がいました。でも、その彼は今はそばにいませんけど……私は大切な彼がそばにいますと感じ取って……戦えたのです」

そう……私のあの一撃は留瑠璃にたいしての憎しみとかはなく、それ以前の攻撃は弾いて友達を操っていた怒りだった……けれど、彼女が本心で操ってる感じはなかった……

「そう……あなたのお陰で……私もなにか目が覚めた気分だわ……」

「留瑠璃さん……」

「三上さん!!」

私と留瑠璃の会話に吉井くん達が私の側に駆け寄ってきた。そして、彼女は優しく微笑みながら話していた

「貴方達は……本当にいい仲間なのね……」

「留瑠璃……貴方も本当は操られていたのですよ?」

「「え?!」」

私の言葉に吉井君と坂本君とルカさんが驚いた声をあげていた。他のみんなも私の言葉に目を見開いていた

「……いつから気づいていたの?」

「目よ。貴方の目」

「私の目・・・？」

「あのときにのび太君を声かけていた貴方は今思い出せば、暗い目の色ではなかったわ。そして、この場であったときの貴方は・・・暗い目をしていた」

「それだけで私が操られてると言う理由にはー」

「あとは最後の一撃よ。・・・貴方の子心の叫びが聞こえたの。あなたの心の声が『助けて』ってね・・・。そして、貴方はついさっきほど『目が覚めた気分だわ』といていたことから操られていたのがわかったわ」

私の言葉に留瑠璃は儂く苦笑していた

「・・・ええ、そうよ。ただ・・・残念ながら私を操っていた敵の記憶はないわ」

「そう・・・」

「それと一つだけ訂正なのだけど私の留瑠璃は偽名よ・・・」

「！！「え?!」！！」

「あなたのお陰で私は大切なことを思い出したの。この世界にいる理由をね・・・」

世界という言葉に私は小さく疑問を感じた。まるで彼女はこの世界の人間ではないと言う言い方ではないかな

「本当に私は大切なことを忘れていたのね・・・。そして、久しぶりね・・・ドラえもんさん」

「！！！！「へ?」！！！！」

「私の名前は・・・といたいところだけど先に急いだ方がいいわ」

留瑠璃の名前が偽物で本当の名前は何なのか気になるけど、それ以前に急いだ方がいいと言うのはどう言うことかしら？

「それはどういう事？」

「あなたたちの仲間が操られる可能性もあるからよ」

可能性・・・はっ!?

「秀吉君と土屋君があふないわ!!」

「でもどこにいるのだろ？」

「私が案内するわ。おそらくまだ間に合うなら操られないと・・・おも

うわ」

「どういうこと?」

「ここは本拠地よ。とらえ次第あなたたちの仲間をいつでも操れると言うことよ」

「「あー」」」

言われてみたらここは本拠地ならとらわれ次第すぐに操られる可能性はあるわ!

「急がないと!!」

「でも敵が潜んでいる可能性もあるのよ?どうするの?」

「でもいいの?留瑠璃さんはここの中の間人ですから裏切りとして攻撃されるのでは・・・」

「別に構わないわ。元々、私もそのうち消されると思っていたから」

「消されるってそんな大袈裟な・・・」

「いや、あながちあり得ないことはないだろ」

留瑠璃のこの行為が裏切りとして扱われないかと聞くと留瑠璃はきつぱりと答えていた。その答えに吉井君は否定をしようとしていたが、坂本君がしかめ面で話していた

「え、どうして雄二はそう思うの?」

「そもそも留瑠璃も操られていたといっていたら?となれば、その操っていた敵は恐らく俺の考えが正しければ・・・留瑠璃よりもかなり恐ろしい存在ではないかと俺は思う」

「確かにそうね。私も戦っていて留瑠璃は強かったわ。でもそんな彼女が操られていたとなれば・・・その操っていた敵の底が知れないわ」
「少なくとも、僕もその意見は同感だよ。ルカやルナちゃんが超能力を使えるように恐らく敵の親玉は・・・それ以上の可能性があるよ」
「少なくとも・・・これだけは言えますね。私達の大切なお友達を操っていて三上さんの心も操っていたその人物は・・・人として嫌いな部類でしょうね」

「・・・雄二、他にも理由があるのでしょ?留瑠璃の言葉を否定しなかった理由は・・・」

坂本君の意見に私もドラえもんさんも同じ意見で真理亜さんは嫌

悪感を出しながらその操っていた人は最低だと断言していた。そして、翔子が坂本君にもう一つの理由を問い詰めていた

「まあ、理由ってか何て言うか・・・俺の勝手な予想だが・・・その親玉はきつと俺達が束になっても勝てない気がする」

「それはどうしてそう思うんだい？」

坂本君が歯切れ悪そうに言うのとルカさんが質問をしていた

「あの留瑠璃も操っていた事が一つともう一つは・・・恐らくそいつがスネ夫と闘った可能性もある。そして・・・」

「・・・」

「のび太が行方不明になった最大の原因でもある敵の可能性がある・・・」

「え!？」

「少なくとも俺の知っているあいつはそう簡単に負けると思えない。・・・小学校の時とかはおいといてな」

「(ウンウン)」

坂本君がのび太君の知る範囲ではなしながら小学校の事は置いておいてと言っていた。その言葉にドラえもんさんと武君が力強くうなずいていた理由が気になるわ・・・

「けどまあ・・・ん？」

「どうしたの？雄二」

「ツチ、どうやら助けに行くまでもなく既に敵の手に落ちていたか・・・」

「え?・・・っ!」

「そんな・・・」

坂本君が突然別方向をみるとそこには捕まっているであろう二人が立ち尽くしていた。ただし・・・目の色は光が伴っていなかった

「おいおい・・・まさかお前らまでそちら側に落ちると思わなかったぞ?」

「そんな・・・なんで・・・なんで君達も操られてるのさ・・・答

えてよ!!ムツツリーニ、秀吉!!」

「・・・」

そこにいた二人は召喚獣姿で武器を持ちゆつくりと歩いていた
間に合わなかったの……？

私達はなんとしても防ぎたかった事態が引き起こされてショック
だった……

次なる敵・・・

明久side

僕は今日の前にいる人物を見て、どうしても避けたかった事態だったのに・・・あまりにも遅すぎたの？

「なんで・・・なんで君達が操られてるのさ!?ムツツリーニと秀吉!!」
「・・・」

僕の問いに二人は答えることなくゆつくりと武器を構えていた

「どうやら聞こえていないみたいね」

「ん?なにか小さい声であいつらなんか言ってるのか?」

「え?何々・・・だめだ。聞き取りにくい」

「・・・秀吉と土屋の言いたいことがわかった」

「本当?!霧島さん、あんな距離で何をいったのかわかったの!？」

「・・・(コクツ)」

三上さんは自分達の呼び掛けに聞こえていないことに気づいていたが、ジャイアンは秀吉達がか言おうとしているの気づいた。だけど距離がありすぎて、聞き取りにくい霧島さんはなんと、聞こえたみたいだ

「あいつらは何て言ってるんだ?翔子?」

「・・・怨み言みたいなことをいってる。もう片方はよくわからない」

「うーん、よし!ここはドラえもんの秘密道具で!!」

「そんな都合のいい道具はないと思いますが・・・」

「あるよ」

「「「あるのかよ!?(あるのですか)!?」」」」

ドラえもんの言葉に皆は声揃えて驚いていた。もはや、22世紀は何でもありなんだね・・・

「【心の声スピーカーバッチversion!】」

「心の声スピーカーは何となくわかるけどなんでバッチversion?」
「n?」

「そこはごちらの都合だよ。ジャイアン、このバッチを二人にめがけて投げて!」

「任された!」

「ジャイアンはドラえもんに渡された秘密道具を持ち、二人にめがけて勢いよく投げた!?そして、見事に二人の体についた!」

「ハワシは・・・」

「ん?これは秀吉の声?」

「ハワシは男じゃ!!!ワシは男なのに何故、明久は女としてみる!!ワシは何度も何度も何度も何度も何度も男といってるのに!!」

「!!!」

「ハ・・・明久、死ね。明久、死ね。あいつは異端児だ。FFF団の一員として明久を消し去る」

「!!!」

「あれ?ねえ、何故か僕だけ怒られてる?なんで?」

「なぜか僕だけ怨み言を言われてるけど気のせいだよね?と思って雄二達を見たが目をそらされた

「つちよつと!?なんでこつちをみないのさ!」

「絶対消し去る!!明久限定で!」

「ハワシを男として見ない明久をここで潰す」

「どうやら完全に操られてるみたいね」

「そうね。どうしましょう?」

「お二人の怨み言は事の原因の方にいくのが一番ですかね?」

「留留璃さん、どう考えてもあれは操られてないよね?!?そして三上さんと真理亜さんもそんなに冷静なのさ!」

「先ほどまでお互いに必死に戦っていた敵同士なのになんでそんなに和やかに会話してるのさ!」

「明久・・・」

「雄二・・・雄二はわかってくれるよね・・・?」

「知ってるだろう?明久・・・俺はな・・・お前が苦しむ姿が大好きなんだよ!!!あごお!」

「・・・浮気発言。制裁」

「つちよつとまで!?どうなったらそう捉える!!?あ、ちよ・・・ぎゃあおああ!!!」

雄二がガッツポーズして高らかに言うのと、霧島さんが雄二を制裁していた。うん・・・なんか、触れない方がいいかなく・・・

「坂本夫妻の恒例のやり取りはおいといて・・・なんで僕だけ怨み言をいわれるの!?!」

「吉井君、心当たりはない?」

「心当たり??・・・ないね」

留瑠璃さんがジト目で僕のほうを見ていたけど、心当たりなんてそんなの・・・ないよ?多分・・・

「ん!?!いまなんていった?」

「安心してほしいっていったのよ」

「一体どこに安心する要素があるの?」

「ルカの言う通りです。操られてるのに安心できるなんて・・・」

「フッフ、確かに操られているけど・・・どうやらあれは完全に操られていないわね」

「どういうこと?留瑠璃」

三上さんが僕らの疑問を代表に聞いてくれると留瑠璃さんは指を指しながらはなしてくれた

「私や姫路さん達が操られていたときはあんな分かりやすく操られると分かる道具はつけていなかったわ」

「!言われてみれば・・・ってことはあの手首のついてる道具を破壊したら元に戻ると言うこと?」

「恐らくね。どうやら、じっくりとやる時間がなかったことがひとつの要因ね」

「なら、あれは誰が相手しとく?」

僕らはあるの手首の道具をどうやって破壊するにせよまずは誰があれを止めるかだよね・・・

「木下君のは・・・私に任せられませんか・・・」

「ウチもよ」

「「「「「?」」」」」」

「瑞希、美波?!目が覚めたの!?!」

声をしたほうに振り向くと姫路さんと美波がゆっくりと起き上が

りながら話していた

「明久君……ごめんなさい。操られていたとはいえ、ひどいことをいつてごめんなさい……」

「ウチもよ……」

「ひどいことを……?あ、いやいや気にしなくっていいよ!!二人は操られていたのだから!」

そう……二人はあれを本心でいっていないのは僕も分かる。だから、起こる理由なんてないよ

「いや、姫路達はやすめ」

「雄二!？」

「それもそうだね。まだ操られてた時の疲労がつよいとおもうからいまは休んでいたほうがいいよ」

「それに……Fクラスの仲間を取り戻すのは代表の役目だからここは俺に任せろ」

「僕も手伝うしね」

「なら、僕も手伝うよ。ドラえもん」

雄二とドラえもんが戦うと言うと、ルカさんも手伝うといていた。確かに、僕が戦えば感情揺さぶられてむりかも……

「ま、ムツツリー二に関しては対策があるから任せろ。秀吉のも……な(ポキポキ)」

「二!」うわ、なんか悪い顔してるよ……」

雄二が悪い顔をしているのをみて思わず僕らは声を揃えて引いていた。すると、ドラえもんがこちらを見ていた

「ジャイアンと明久君は先いつてほしい」

「え?!」

「それと三上もだ。これ以上ここで人数大勢でここに留まるわけにもいかんだろ?」

「たしかにそうだけど……」

「よし、ルナさんと真理亜さん、三上さんは明久君とジャイアンと共にいつてほしい!」

「なあに、ここに残るのは俺とドラえもん、翔子にいまは休んでる姫

路達がいるから半々に分けるのがちょうどだろ?」

雄二達の言い分も分かるし、それが正しいと思うけど……でも、本当にそれでいいのかな?

「なら、私が先にいく5人を道案内すればいいのね」

「うん。君に頼めるかな?留瑠璃さん」

「構わないわ」

ドラえもんのためだけに留瑠璃さんは優しく頷いていたけど、僕はある日のスネ夫の別れたときを思い出した……

『わるいね。明久……ここは僕とあいつしか遊べないみたい』

その後のスネ夫は重傷を負い、今は現代で安静してるけど……

「いきましょ。吉井君」

「でも……」

「お前の気持ちもわからない訳ではないが……信じるのも友達の間目だろ?」

「っ……必ずあとできてよ!!来なかったら雄二覚えてね!」

「うるせえ!?!さっさといけ!!」

僕は雄二にそう伝えると雄二はいつもの感じで返事して僕らから背をむせた。……必ずみんなで帰ろう!

僕はその決意とともに駆け出した……

リーダーのお仕置き

ドラえもん side

明久君達が、次の場所へ向かったのを確認した僕達は操られた土屋君と木下君のほうを見た。確か、明久君達があちらのほうに向かう直前に留留璃さんがー

『私や姫路さん達が操られていたときはあんな分かりやすく操られると分かる道具はつけていなかったわ』

とあのときに二人の手首に黒い首輪があるのを見て言っていたよね。となれば、現状止める策はあれを破壊すればとまると言うことだよな？

「ドラえもん確認したいことがある。ーって可能か？」

「うーん、多分探したらあるかもしれないけど・・・タイミングが難しいね」

「なに・・・少しあのバカどもには誰を相手に喧嘩してるのか改めて体でわからせる必要があるとわかった」

「すごい悪い顔をしてるよー。まあでも・・・今回は連携して戦った方がいいよね。【空気砲】く」

「まあな。そこの操られたバカどもをきつちりとお灸据えてやるとするか、サモン！」

僕と雄二君は目の前の操られた二人を倒すべく、それぞれの武器を持った。そして、ルカが僕らに声をかけた

「現在この場で残ってるのは僕ら3人に姫路さんと霧島さんと島田さんだよな。どうするの？」

「その事なんだが・・・ルカは姫路達を守りながらタイミングがあれば頼みたい」

「それは構わないけど・・・坂本君は武器持たなくっても戦えるの？」

ああ、そういえばルカからしてみたら雄二君のは武器がないと思うのだけど、実は雄二君の拳には“ナツクル・メリケンサック”という武器があるのだけどこれはなかなか知らないのも仕方ない。というか、地球で生活してないから知らないのも当然だよなー

「大丈夫だ。すでに武器は持っているからな」

「そうなんだ……。とりあえず、二人は思いきって戦ってね」

「おう！」

「……………」

「どうやら向こうはご丁寧に待っていたみたいだよ？」

僕は目の前の敵がゆっくりとこちらに向かっているのを見据えて武器を構えると雄二君も向こうを見ながら話しかけた

「さて、そろそろいくがー俺を呼び捨てにしてくれ。君づけだと調子が狂うわ」

「ああごめんごめん。じゃあ改めて……行こうか。雄二」

「おう」

僕は改めて彼の頼み通りにを呼び捨てにすると、彼は生き生きと笑っていた。そして、操られた二人は武器をしっかりと構えて……

「……………死ぬ！」

「ドカーーン！」

こちらに飛んできた!!さあ、君たちも取り戻すよ!!

雄二side

俺はドラえもんの放った空気砲の合図とともにあの操られたバカどもの元に走った。さつさと、このめんどくさい戦いは終わらしたいからな!!

「おらあ!!」

「ぬう!?!」

「……………背後を取った!?!?!」

「そう来るのは予想済みなんだよ」

俺は最初に秀吉に攻撃を与えると秀吉は槍でガードをすると苦い顔で苦痛の声を上げた。そして、ムツツリーニは俺の背後に走り込み刀を振り下ろそうとしていたが俺は秀吉の方を見ながらムツツリーニの振り下ろそうとしていた右腕を押さえていた

「っ?!力強い……!」

「背後を取れたくらいで俺を倒せると思うなよ!秀吉と一緒に吹っ飛

ばされな!!おらあお!!」

「ぬおお!」

「ツ!坂本雄二・・・!」

秀吉は急に投げられたムツツリーニを受け止めることができずに下敷きになり、俺に投げ飛ばされたムツツリーニはよろけながら起き上がろうとしていたが、俺は指差して指摘した

「ムツツリーニ、下を見ろ」

「下を・・・?・・・!」

「いたたた・・・」

「お前は秀吉の胸をさわっていたぞ? (本当は触ってないが果たして効果はある?)」

「(ブシヤアアアア)・・・それがどうした?」

「あの人すごい血が出ているけど大丈夫なの!」

「あわわわわ・・・土屋君、いつもよりも血がすごく出ています!!」

「操られていても土屋は土屋なのね・・・」

「・・・才能?」

「なんていうか・・・本当なんだね。のび太くんから聞いたことあるけど、彼の血はとんでもなく出血しているということに驚いたよ・・・」

ムツツリーニの反応は変わらないかと思ったが、ある意味いつも通りで安心した。それよりも・・・操られていないときよりもかなり血が出ていないか?」

「・・・こ、この程度でこの俺を揺さぶれると思うなよ (ガクガク)」

「お主、味方ながらその耐えようとする精神は感心するわい・・・。さて、今度はワシらが反撃する!」

「・・・お前達を倒して後ろにいる俺の楽園を撮らせて貰う」

「まさかと思うけど・・・君は盗撮をしてないよね?」

「・・・俺はそんなことをしてない (フルフル)！」

「そんな必死にしているも仕方ないだろ? お前は結論からして操られても操られてもそうでなくってもエロは興味あるのろ?」

「・・・さあ戦おう! 異端児に死を!!」

「誤魔化したな?」

「うん、いまのは必死にごまかすやつだよね」

あれでゴマかせれると思うあいつの魂胆がすごいがな……。さて、チマチマ時間かけていたら明久達が何かあつてからでは遅いしな
「さっさと決着をつけさせて貰う！」

「それはこちらの台詞じゃ！ムツツリーニ！」

「・・・(コクツ)」

秀吉の言葉にムツツリーニはゆっくりと刀をもつて構えていた。何を仕掛けてくるかわからないが警戒をしているとー

「そいや!!」

「!?!」

秀吉が槍を思いきりこちらに投げてきた。あのバカは槍をこちらに投げて当たると思っているのか?と思うと、ムツツリーニがいつの間にか目の前に立ち、秀吉の槍を掴んでこちらに振り下ろした

「な!?!」

「・・・貫った!!」

「させない!!ドカーーーーン！」

ムツツリーニが槍を降りおろそうとすると、ドラえもんが空気砲でムツツリーニの攻撃を相殺してくれた。今のはさすがに予想外の攻撃過ぎて反応が遅れたな・・・

「・・・止められたか」

「ツチ、あんなとんでもない思い付きの攻撃はあのバカだけでいいのによ・・・」

「今のは一体・・・」

「恐らくムツツリーニの特殊能力の加速だろうな。だがそんなに頻繁は無理なはずだから・・・ルカ、ひとつたのみたい」

「何?」

「一瞬だけでいい。その超能力で弾き飛ばすことはできるか?」

「・・・わかった」

「助かる・・・合図をだすからドラえもんも用意してくれよ」

「うん」

俺はルカとドラえもんに先ほど考えた策を話していたのでそれを

実施する。そんな中、やつら二人は構えていた

「いくぞ?3,」

「・・・何をするのか知らないが、次は仕留める!!」

「2」

「同じくじゃ!いくぞい」

「1・・・今だ!!」

俺が合図出すとともにルカは手を前にかざしていた

「はあああ・・・!」

「ぬう!?なぜじゃ、何故、体が飛ばされるー!?」

「・・・不可解!!」

ーードゴオオオン

「よし!!!」

ルカの超能力で秀吉とムツツリーニが吹っ飛ばされていた。俺は第一段階の作戦がうまくいったと分かり、小さくガッツポーズしていた

「つつ・・・!ムツツリーニ!!いくぞー!」

「今度こそ・・・!」

秀吉は起き上がりながら先程よりも早く槍を投げるような動作に入り、ムツツリーニも走っていた

「そおおい!!」

「・・・これでおわりだ!・・・【加速】」

先ほどの攻撃を繰り返すように二人は連携して攻めていたが・・・その策はもう通じなかった

「!?」

「なっ!?」

「秀吉とムツツリーニよ・・・。お前達の考えてることなんぞお見通しなんだよ」

ムツツリーニは槍をつかみ加速を入っていたが、その攻撃はできずに終わった。なぜなら・・・

「全く・・・一か八かの策が成功するなんて焦るよ」

ドラえもんが秘密道具でムツツリーニの加速を止めてくれたのだ

から

「まあまあそういうなよ。きつちり動いてくれたお陰で助かったぞ」
「まあ、これで終わりだよね……。ごめんね、二人とも？これでおしまいだから」

「つつ!?」

「【相手ストッパー】からの【空気砲】で……」

「やめ……」

「ドカーーンン!!!」

「がっ……!!」

ドラえもんは空気砲をムツツリー二にめがけて思いきり攻撃をするとその衝撃のまま後ろにいる秀吉に直撃した

「……はあやれやれ、少しは頭を使って戦え。お前達の戦っていた相手は月の人間と未来の猫型ロボットと……アホどものリーダー相手だったからな」

俺は呆れながら目をまわしてたおれている二人に指摘した。さて……とりあえず、操っているのを潰すか……

そーいや……こいつらは一体だれに倒されてここにいたんだ???

明久 side

僕達はドラえもんに促されて先に進んでいたけど、なんか普通は敵が侵入していたら止めたりするのが一番いいのになにも仕掛けてこないのは不思議だな……

「明久、どうした?」

「ジャイアン? いや、普通敵が侵入しているの分かっているのに、なにも仕掛けてこないのは不思議だよな」

「まあ確かにな……」

「……私の考えだと恐らく、これは罠かあるいは……挑発かしら?」

「え、どうしてそうおもうの?」

「なるほどですね。三上さんの考えは恐らくあり得そうですね」
「そうですね」

三上さんの意見に真理亜さんとルナさんは納得していたけど、僕とジャイアンは理解できなかったのか頭のなかに???が無数に思い浮かんだ

「たとえば、坂本さんが霧島さんに大事なものを奪われたくないとします。しかし、坂本さんはどんな手を使っても守りたいものです。さて、明久さんはどう考えます?」

「うーん・・・とりあえず罍を仕掛ける?」

「ええ、それが本来の考えです。しかし、もしも罍を仕掛けていないとすればこれはどう考えますか?」

「あ、そうか!坂本は霧島さんに絶対勝つ自信があるから罍を仕掛けない!」

「あ!!」

ジャイアンの言葉に僕も理解した。確かに絶対に勝つ自信がなかったら、普通は罍を仕掛けるけど自信があるからあえて罍を仕掛けていない!

「全く・・・嘗められてるということか?」

「その可能性はあります。それだけ自信がなければこんなに遭遇しないのも納得できません」

「何れにしても、とんでもないわね」

「留瑠璃、もう少しかしら?」

「ええ。・・・っ!」

三上さんの確認に笑顔で返事していた留瑠璃さんが突然、足止めて顔は警戒していた。そんな留瑠璃さんに不思議に思ったが、僕も次の瞬間に異様な寒気を感じた

「なんなの・・・この異様な寒気は・・・!」

「それだけにとどまらず空気が重く感じます!!」

「・・・」

「留瑠璃・・・もう目の前なの?敵は・・・」

「そんなはずはないわ。まだ距離はあるのに・・・!」

僕以外の皆もとんでもない寒気を感じ取って皆は警戒体勢担っていたが僕はひとつ気になることが感じ取れた

「留瑠璃さん、敵はもうボスだけ？」

「・・・私の覚えてる限り、あと一人はいたけど・・・何者かまではわからないわ。赤いフード姿だったから・・・」

「(赤いフード？スネ夫から聞いた情報とは違うとしたら、そいつは何者?)」

そう思っ駆けつけていた。どちらにしても次は僕らが戦わないといけないのだから!!

――???

・・・そろそろ何人かがこちらに来るな?・・・先ほどの侵入してきた人物はあまりにも弱すぎたが・・・此度の敵はどんなやつが来るのか楽しみだ・・・

明久達の向かう場所には・・・なにかが待っていた・・・

待ち受けていた敵は・・・

僕は奥の方に進み、辺りを見渡していた。そういえば、ドラえもん達に連絡する道具とか貰っていなかったな・・・

「明久、そんなに回りを見てどうした？」

「いや、ドラえもんに連絡する方法とかないよね・・・何かあってからでは遅いかと」

「確かに・・・だが、そこは心配しなくっていいだろう？」

僕の心配事にジャイアンがあきれた声で否定していた。そして、三上さんと留瑠璃さんが真剣な声で指摘していた

「ええ、確かに吉井君の言う通りよ。何かあってからでは遅いけれど、今は先を進むしかないの・・・先程の異様な寒気は気になるけども・・・」
「もう少しで走ったら扉があるわ」

「ルナさんと三上さんと留瑠璃さんは明久の後ろにいて。そして、俺はその後ろに攻撃を警戒するから」

「わかりました。でも、今のその状態では敵が攻撃来てから防御は間に合わないと思いますか・・・？」

「そこは何とかするだろう？・・・明久が」

「僕がそこはジャイアンの役目でしょ!?!?っていたああ!?!」

僕はよそ見をしていたせいか上からなにかが落ちたのか僕の頭に直撃した・・・はつきり言ってる痛い・・・

「ほら早速役立ったぞー」

「武は何をバカなことをいっています・・・どうやらここみたいですすね」

「・・・みんな入るね？」

ぎいー

僕がドアを手掛けて中に入ると、ジャイアン達も周りを警戒しながら中へ入った

「・・・っ!?!」

「ジャイアン?・・・むー!」

ジャイアンが突然、先に階段が続いてる上の方をみると驚いた顔を

していたので僕もそこをみると・・・

「・・・来たか」

「「「っ!!」」」

「おいおい・・・何て冷たく心臓が捕まれたかのような寒気がするんだよ・・・」

「お前は・・・あの日の夜に姫路さん達を連れ去った・・・!」
「・・・ふん」

僕はあの日の夜の事を思い出した。あの日の夜はスネ夫が殿して僕と雄二と姫路さんと美波が必死に逃げていた時に敵の待ち伏せを食らった。その時に敵が何をしたのか見えないほどの攻撃で僕と雄二をダウンして・・・

姫路さん達を連れ去ったやつ!!

「お、おい? 明久」

「お前は・・・」

「ん?」

「お前だけは・・・許さない!!!サモン!!!」
「吉井君!!」

三上さんが僕を呼び止める声が聞こえるが関係ない!!僕は走りながら自身の体に纏うように召喚して木刀をもって走った

「吉井さん、闇雲にはだめです!!」

「うるさい!!うおおおおお!!」

「まずい・・・ルナさん、ひとつお願いがあります。吉井さんという人は今耳にも入っていないから恐らく回りのも聞こえない可能性がありますから止めるのお願いします」

「わかりました」

三上さんが僕になにかいたり、うしろでなんか会話してるのは聞こえるけどそんなのは関係ない!!!

「くたばれえええええ!」

「・・・はあ・・・」

高くとんだ僕は木刀を敵の頭にめがけて振り下ろそうとすると、そいつはため息を吐きながら・・・

ーゴゴオオオオン

僕の攻撃にたいして回避行動をとっていた。今のは小手調べ……つていけないよ!!

「はーはーはーはああああ!!」

「……」

僕はひたすら剣を振り下ろすと、赤色フード姿のそいつはポケットを手に入れて全て回避していた

そんな僕と赤いフード姿をよそにジヤイアン達は厳しい目で見てることをまだ知らなかった

「……だめだ。明久のやつは今冷静に攻撃していない」

「ええ、あんな乱れた攻撃ではどんな戦ったことがない人間でも避けることは可能です」

「このままでは吉井君が……」

「止めないのですか？彼はこのままだと……本当にいつかやられますよ」

「留瑠璃さんの言うのはごもつともですが……今まだ止めません。今は……」

そんな心配されてるのを知らない僕はひたすら剣を振り下ろしていたが、一向に当たらない!!なんで、こいつは避けれるの!?

「……」

「くっ、うおおおおおー!」

「……もうお前の攻撃は飽きた」

「え?ぐあ!!」

赤いフード姿の突然発した言葉に僕は驚き、攻撃を緩んでしまった。そこを見逃さなかった赤いフード姿は左こぶしで僕の顔を思いきり殴り、僕は思わずよろけるとー

「ふっ!」

「!!」

「……まだだ。はっ!」

「が!!」

赤いフード姿はよろけた僕に右肩を強く殴り、さらに顎を思いきりアッパーしてきた。まともに食らった僕は思わず右手にあった剣を離した。そして、そいつは右足で僕を思いきり近くの壁へ蹴り飛ばした

「がはっ!!……っ」

「……(フォン、フォンパーパシツ)」

「いつの間に僕の木刀を奪われた……!? いたっ!!」

「……とどめだ」

僕は起き上がろうとすると、赤いフード姿が右足で僕が起き上がるのを阻止して、ゆっくりと木刀を高くあげていた

「……恨むならお前の力のなさをうらめ」

「明久さん!？」

「く、留瑠璃さんとルナさんでの攻撃を止められないですか!？」

「無理です!! 明らかに距離があります!」

「それならこっちから急いでいくしか……!!」

「吉井君っ! (また……私は目の前で誰も守れないの!?)」

「(ごめん……姫路さんに美波……一緒に帰れないかもしれない)」

「……さらばだ」

「っ!!」

僕は迫り来る痛みに備えて目をつぶったのだが……いつまでたっても攻撃が来なかったのでゆっくりと目を開けると……

「……」

赤いフード姿の攻撃をする手首を押さえつけていた人物がいた。その人物はゆっくりと語りかけた

「そう簡単に……仲間を……やらせるかよ」

「ジャ……ジャイアン!!!」

「明久のためだと思って我慢していたが悪いな……この喧嘩は俺も買わしてもらおうぞ……赤いフード野郎!!!」

僕の前に頼もしく立っていたのは、のび太達と同じく多くの冒険をしてきたジャイアンが僕を助けてくれた……

選手交代

ジャイアン side

俺は今、明久を庇いながら目の前の敵を睨んでいた。本音を言えば、手を出すつもりはなかったが……

「お前は下がってろ。明久」

「でも!!」

「お前があいつに怒っている理由は理解できてるし、許せないのもわかっているが……今のただ怒ったお前では勝てないだろ。それは今ので分かった筈だ」

「……っ」

「……ツチ（グググ）」

俺は明久に今の戦い方では勝てないと指摘すると明久は悔しそうに歯ぎしりしていた。悔しいのもわかるし、苦しいのもわかっているが……今のお前は頭を冷やす必要がある

「少しの間だけ選手交替でいいか？頭冷やす時間を与えるからここは任せろ」

「……気をつけて。そいつは強いから」

「おう、まかせろ！寧ろ漸く歯応えのある敵が出て……血が騒ぐんだよ!!」

俺の左手は奴の手首を掴んでいたの、空いてる右手で顔を思いきり殴ろうとすると、赤いフード姿のそいつは空いてる片手で防いでいた

「へへへ……やるじゃねえか……」

「っっ……」

「そんな寡黙なキャラなんかよ。赤いフード野郎!!」
「!？」

俺は更に体全体に力を入れると、赤いフード姿は驚いたのか息を飲む感じがあった。当然、それを逃す俺ではなく足払い仕掛けると、奴はよろけた

「っーふっ!!」

しかし、奴は右手で地面を支えて横の体勢になりながらも左足で俺の体をめがけて攻撃してきた

「うお!! (あんな無茶な体勢で攻撃するとは驚いたぞ!)」

「……ぶっ飛べ」

「(赤いフード野郎の力が強まった?!) つが!!」

俺はやつの攻撃に耐えきれず、地面に思いきりたおれてバウンドを繰り返していた。そんな光景に明久たちの声が聞こえた

「ジャイアンさん!」

「ジャイアン!」

「あの剛田君を吹っ飛ばすなんて……?!」

「……今は……向こうの蹴る速度が速かった?」

「今の攻撃は分からないけど……正直、あの赤いフード姿の人の正体は私は分からない」

「いてて……大丈夫だ」

俺はゆっくりと立ち上がりながら砂ぼこりを叩いて相手を見た。たしかに、今の攻撃速度は異常に速かったが……二度目はない!

「こい……剛田武スペシャル武器第2 version 槍」

「まったまった!!? 槍!?! この間はバットだったのにいつの間に変更をしていたのさ!?!」

「なに、今回は……槍で相手をギタギタにしたい気分だな。ドラえもんに頼んで少し改造したんだよ」

「なんで改造したのですか?」

「いやー、なんていうかほら、バットをもって攻撃したら色々と真似する危険があるから敢えて槍に代えた」

「誰が真似をするのかしら……?」

「さあ? 主に吉井明久ならやりそうだから」

「僕そんなことしないよ!」

「……待っているのだが、まだか?」

「……敵が意外にも律儀に待っていてくれていた!」

「おう、悪い悪い。そろそろはじめようか」

明久達が戦いの中、敵が待っていてくれていたことに驚き、俺は軽

くお詫びした。しかし、俺たちが会話を繰り返り広げているなか攻撃はしないで敵も律儀に待つとかこいつは武士かよ……

「……(スツ)」

「ああ、そういや明久の木刀は取られていたんだっとな……。まあいい……。倒して取り戻せばいいだけだ」

奴は腰を低く下ろし居合い切りのような構えをとり、俺は槍を水平に構えながら敵を睨んでいた

「……」

お互いにその場にとどまりながら相手を睨んでいた。お互いに一つ一つの動作に警戒しながらゆつくりと息を整えていたが……。こいつはかなりの強敵なのは俺でもわかる……

「……」

「ハツ……」

「……っ……」

「ハ……ク……ン!!!」

「!!!」

明久のくしやみと同時に俺と赤いフード姿……。ええい！フード姿の敵とかの呼び方とかめんどくさいから赤いフードとでもいおう！

ーフオオオン!!

赤いフードと俺の武器が衝突すると辺りに爆風が飛び散った。こいつの力は衝突して分かったが……

「(俺よりも力がない!)なら、こいつはどうやってムツツリーニたちを……。?!」

「……ああ!!」

「考えさせる時間は与えないと言うことかよ！テリア！」

俺の槍と奴の木刀は何度も何度も交差していた。俺の攻撃と奴の攻撃で力は俺の方が上だがそれでも互いに決定的な攻撃は当たらなかった

やつが俺の腹を刺そうとすると、俺は肘と腕で防ぎ、俺の槍を奴の体に刺そうとすると奴は巧みによけた

「……ああおあ!!」

「空中へとこの俺に飛んで攻撃とは嘗める・・・なあ!! っら!!」
「!?」

「からの・・・はああああ!」
「っが!!」

赤いフードが飛んで俺に木刀で振り下ろして攻撃したが、俺は冷静に攻撃していない槍で弾くと奴は少し驚いていた。そして、空中で浮かんでいる赤いフードに対して俺は回し蹴りをする。奴は近くの壁に吹っ飛ばされた

「くらえ!!」

俺は更に追撃するように槍を投げると奴は慌てて横に飛んでいた。そこは計算通りなんだよ!

「なっ!?!」

「そのフード姿の正体そろそろ見せろ!! うらあ!!」

「っがは・・・」

俺のアップア攻撃に奴はまともに受けてフードが取れた

「っ! 己・・・!」

「・・・なっ!?! お前は・・・」

その赤いフード姿はフードがとれてその正体が丸わかりに顔が見えていたが、俺はおもわず驚き攻撃の追加をやめた

「フウフウ・・・貴様・・・この俺の姿を見たな・・・!」

俺はそいつの正体を知っている・・・

いや・・・今・・・

そいつの正体が明らかになり俺は・・・

「おいこら・・・お前は・・・何でそんなところにいるんだよ・・・? どういうことか・・・説明しろよ・・・のび太あああ!!!」

俺の怒りの声に奴は冷たい目で俺たちを見ていた・・・。そして、後

ろには口を手で押さえて涙ごぼしているものもいた・・・
お前は・・・本当に・・・のび太なのか・・・？

明かされた敵

美子 side

私は剛田君と赤いフード姿の敵の戦いを見て、驚いていた。剛田君は巧みに槍を使って攻撃をしているのと比べると、赤いフード姿は紙一重で交わしていたのに皆驚いていた

「お互いに決定的な一撃を探り合いながらの攻防ですが・・・武の方が攻めていますね」

「ですが、素人の私でも分かりますが・・・あの敵は攻撃を読みきつているかのように交わしていますね」

「なんかレベル違う戦いなんだけど・・・」

「そうね。私もあの戦いを見てそう思うわ」

「外野が手を出していい戦いではないね・・・もう少し離れましょう」
留瑠璃さんの提案に私たちは頷いて下がったけど、二人の戦いは徐々にヒートアップなり、辺りに亀裂が走ったりしていた

「これ本当に召喚獣を纏った戦いではないかな?!なんか、怖いんだけど!!?」

「そうですね。お互いの力のぶつかり合いでここまでになるなんて・・・」

「召喚獣ってのはなんですか?」

「私達の世界にある学校で取り入れているシステムなの。学力が高ければ高いほど、召喚獣は強いのに」

「へえ・・・自分で戦わないで召喚獣が戦うなんて斬新ね」

吉井君が驚き、真理亜さんが冷静に状況を見ながら話してるなか私は留瑠璃さんとルナさんに召喚獣の説明を大まかに話していた

「っ!」

すると、剛田君の戦いの方で状況が進展した。赤いフード姿の敵が空中へと飛んで木刀を振り下ろそうとしていたが・・・

「空中に飛んでこの俺に攻撃とは嘗める・・・なあ!!っら!!」

「!?!」

剛田君が冷静に空中へと飛んで振り下ろそうとした木刀を槍で弾

き、敵は少し驚いていた。そんな隙を剛田君は見逃さずに――

「からの……はああああ！」

「っが!!」

空中で浮かんでいる赤いフードに対して回し蹴りをすると赤いフード姿の敵は近くの壁に吹っ飛ばされた

「くらえ!!」

剛田君は更に追撃するように槍を投げると敵は慌てて横に飛んでいた。そして、剛田君は赤いフード姿の方へと全速力にはしって攻撃をいれる体勢になっていた

「なっ!？」

「そのフード姿の正体そろそろ見せろ!!うらあ!!」

「っがは……」

剛田君のアップア攻撃に奴はまともに受けてフードが取れた。その瞬間、私は一瞬大切な彼を思い浮かんだ……

「っ！己……!」

「……なっ!?!お前は……」

その赤いフード姿はフードがとれてその正体が丸わかりに顔が見えると……

「嘘……」

「なっ……?!」

「あの人は……」

「……」

真理亜さん達がそれぞれ息を飲んで信じられない声をあげていましたが、それは私も同じです……。何故なら……

「フウフウ……貴様……俺の姿を見たな……」

私は赤いフード姿の正体を見て目の前の現実が受け入れられなかった。そして、一瞬の内にある過去の事を思い出した

『……多少乱暴な方法になるけど……ゆっくり寝てね……ごめんね……美子さん』

『本当に……ありがとう……。……達者でね……。』

あの日の失った記憶を見たときの彼の優しい顔……。そして、悲し

く憐れ私を最後まで守ってくれた優しい彼を……そんな彼を思い出した私は目の前の移った人物を見て、涙が溢れて手は震えながら……その人物の名前をいった

「の……び……太……君……」

優しくかった彼は……今私達の敵へとたちふさがっていた……

私や剛田君は未だに目の前の光景が信じられず、固まっていた。あの日……行方不明になってしまった剛田君達の親友でもあり私の……最愛ののび太が……

「……俺の顔を見たな……!」

私達の敵として今、目の前に立ちふさがっていたのだから……

「ツチ……もう、この赤いフードも要らないね」

「お前は……のび太なのか……?」

「真正正銘お前らの知ってる野比のび太だよ」

赤いフードを脱ぎ、黒いタンクトップ姿になり腰には銃も備えていた。質問していた剛田君は今ののび太君の言葉に釈然とせず言い返した

「俺の知ってるのび太は一人称は『僕』であって決して『俺』とはいわないぞ!」

「偽物か本物かは勝手に判断したらいい」

「貴方は……」

「ん?」

「貴方は……のび太くん間違いはないわ。けれど……なぜ敵になって私達の前に立ちふさがるかしら……教えて」

私は今日の前のいる人物がのび太君だと言う証拠がこれって言うのがないけれど……けれど不思議と彼がのび太君だと言うのが心の中で感じ取れる

「フツ……」

そんな私の問いにのび太君は……

「消えっ……!」

「どこを見てる?」

「三上さん、後ろ!!」

え・・・

「少し、うるさい外野は眠ってもらおう」

「のび太、やめろ!」

のび太君が冷たい目で木刀で私の方に気絶させようとしていたのか私は動けず固まってしまった

しかし・・・

「え?」

「なに?」

私に攻撃は当たらずに、のび太君は戸惑った声をあげていた。何故なら、木刀を掲げたまま、止まっていた

「なぜ・・・っ?!」

「(今のび太君・・・皆が止める前に攻撃をやめた?)」

「三上さんに攻撃はさせません・・・!」

「今、貴方は何をしようとしていたのですか?!」

ルナさんが超能力でのび太君の動きを止めてくれて、真理亜さんがすぐ私のそばにかけよって激怒していた

「・・・ふん」

「っ?!」

のび太君はルナさんの超能力をふりところとうとしてるのか、力をいれ始めていた。すると、ルナさんが苦しそうになっていた

「この程度でこの俺を止めれるとでも??」

「ああ・・・俺がお前を殴る時間作ってくれたからな!!」

「!?!」

すると、剛田君が全速力でのび太君の方に近づき、槍を腹の方に横ふりするとのび太君は吹っ飛ばされた

「ツチ!!」

しかし、のび太君は舌打ちをしながらもきれいに着地をしていた。

そして、軽く木刀を降っていたら剛田君が私たちに指示だしていた

「・・・本当にわるいが、この戦い・・・俺にやらせてくれ」

「ジャイアン・・・なら僕も!!」

「お前は木刀を奪われてるだろ？しかも、今何故かあいつは……まるで俺達のことなんぞ興味ない敵かのように見ている」

「だからって……」

「いいから下がってろ」

吉井君がまだなにか言いたそうにすると剛田君はゆつくりと槍を構えながらのび太君に問いかけた

「お前はまるで俺達のことを憶えてないかのようにふるまっているが、お前の身に何があつた？答えろ……のび太！」

「……さあ、戦いでわかるのじゃないか？それとも……勝てないから聞くのか？」

「っ！そうかよ……ならば、寝坊助ノロマに目を覚まさせるとするか……覚悟はいいか？」

「……ふん」

のび太君は右手で木刀を構えて左手は右腕を押さえて構えていた

「……」

「っ！おああああ!!!」

剛田君とのび太君の攻撃が再びぶつかり合い、辺りに衝撃が走つた……

本当に貴方は……何があつたの……？

立ちふさがる敵

俺は正直、今までにないほどの怒りが溜まっていた。いや、正確には……先程ので一気に怒りが溜まったせいで俺は怒っているのだと心の中で考えていた

「……キイイイン!!!」

「ふん。俺に勝てるだけでも……?」

「ずいぶん強気じゃねえか?のび太……」

「事実をのべているだけだ」

「そうか……よ!」

「おつと!」

俺は槍であいつの攻撃を弾きながら、会話を繰り返していた。俺の知る限りののび太は女に手を出さなかった!!俺は槍の先であいつの頬に向かって攻撃すると、あいつはおどけた声を出しながら下がっていた

「フッフ、中々歯応えのある敵が出て来て俺は今すごく楽しい!」

「そうかよ……お前は楽しくてもな……俺は楽しくねえんだよ……のび太」

「ふん、この際だからはっきり言ってやろう。この程度では……お前を含む後ろの女も俺に捕まるの時間の問題だぞ?」

「何?」

俺はのび太の言葉を聴いて怪訝と聞き返した。今、あいつは何をいった?

「なんだ?のび太は俺に勝てるだけでも言いたいのか?」

「そうだといっている。……それとも、お前は何処と無く戦いが慣れている筈なのにぎこちないな……」

「ふん。うるせえ……お前を倒して目を覚ましてやる!」

俺は槍を水平に構えながら走ると、のび太はゆっくりと木刀を構えながら相手を見据えていた

「うらああああ!!」

「・・・ふん」

「ーガキイイイン」

俺の槍の攻撃にのび太は木刀を今までに見えないくらいに最速の速度で叩き落としてきた

「(今何をされた!?!この俺の攻撃を・・・叩き落とした!?!)!!」

「今・・・驚いて動きを止めたな?」

「しまっ!?!」

「はあああ!!」

「がっ!?!」

動きを止めてしまった俺の隙を逃さなかったのび太は俺に腹蹴りをしてきた。それをまともに喰らった俺は・・・

「ーゴオオオオオン」

「つがは・・・」

「「剛田君?!」」

「ジャイアン?!」

「武君!!」

近く壁に直撃した俺は苦痛の声を漏らすと留瑠璃や三上にルナさんや明久、そして・・・最愛の婚約者の声が聞こえた

「ぐっ・・・」

「つまらないな・・・」

俺は苦痛の声を漏らしながら起き上がろうとするとあのバカの声が聞こえたので、顔をあげると本当につまらないという顔をしていた

「この程度とは本当につまらない」

「のび太・・・」

「ふん。貴様は後で止めをさしてやるがひとまず・・・くたばれ」

「がはっ!?!」

あいつの攻撃に俺は地面に倒れて動けない状態になると、のび太は俺から背けてゆっくりと三上達のいる方に向かっていた。俺はあいつが何をやるうとしてるのか分かり、急いで立ち上がろうとすると体が動けなかった

頼む!!皆逃げてくれ!!

三上 side

私は・・・いえ、私達はゆつくりとこちらに歩いてくるのび太君を見て恐怖しか感じなかった。あの優しいのび太君なら絶対に・・・仲間を傷つけたりする行為はしないのに・・・

「ジャイアンが・・・まけた?!」

明久くんの声が聞こえるけど、私は今日の前の光景に愕然としていた。さっきほどののび太君は剛田君を躊躇うことなく・・・倒した・・・「よくも・・・よくも」

「なんだ？俺は女でも・・・立ちふさがるなら容赦しない。おとなしく、俺に捕まるなら手荒な真似はしないが」

「良くも武君を!!許さない!!あなたに人の心はないのですか!?!」

「ふん・・・そんなものつくに失ったさ。そんなの聞いてなんの意味がある?」

「なんですつて・・・?!サモン!!!」

真理亜さんが怒りのあまり召喚獣に変身して構えていた。私は真理亜さんの怒りもわかるし、剛田君が倒れた今・・・のび太君を止めるためにも・・・

「のび太君」

「誰だ？お前は」

「っ・・・」

「誰つてのび太の「吉井君!!!」っ・・・三上さん?」

そうよね・・・あれだけ私はあなたに最低なことをしたし、私のせいで貴方という優しさを失ったのだとしたら・・・それは私の罪として受け入れよう・・・

けれど・・・

「今の貴方は間違えている・・・私が貴方を止める・・・サモン!」

「三上さん!」

「・・・それでいいの?美子」

私が召喚獣に変身すると吉井君が心配そうな声で私に話しかける

のと、留瑠璃が心底心配してるのが分かる声だった

「私は大丈夫よ。留瑠璃と吉井君はルナさんと一緒にそばにいてあげて」

「わかったわ。けれど気を付けて……今の彼は見てわかったと思うけど貴方達の知る彼はもういないのよ」

「ええ……だからこそ……私達で彼を取り戻す!!」

「覚悟はよろしいですか!!のび太さん!!」

「やれやれ……この俺に歯向かうなら来い。そして教えてやる……俺の前で勝てると思うな。そして……捕まえさせてもらおう」

私と真理亜さんの覚悟に彼の心は届かずにただ無情に見ていた。もし彼に倒されてしまっても……まだ剛田君や吉井君がいるから……彼を助けるチャンスはある

「貴方は……私の大切な人だった……だからこそ……もう一度向き合って……貴方を止めたい!!」

私と真理亜さんは彼に向かって走った

本当の優しい貴方を思い出させて見せる!!

望まぬ戦い

美子 side

私と真理亜さんは私達の前に立ちふさがる目の前の敵・・・のび太君を見据えて私達は構えていた。私は本を使った攻撃に真理亜さんは格闘・・・対するのび太君は木刀を使って攻撃している

「貴方の過ちを・・・私たちが止める!!」

「・・・ふっ、二人で俺を止めれるとでも?」

「・・・操られてるのわかっているのですが、何故か聞いていて腹立ちますね・・・」

「事実を述べたまでだ。俺を倒せるとでもおもっているのなら・・・」

「!」

「嘗めるな」

いつの間にか私の後ろにのび太君が走り込んでいて冷たい声と共に木刀を振り下ろしていたが・・・

「私が気づかないとでも思いましたか?」

「!」

真理亜さんが回しけりでのび太君の腹に攻撃するとのび太君はまともに受けたのか少し後ろに飛んでいた。その隙を逃さない私は――

「風よ吹き飛べ! チンカラホイ!」

「ツチ!!」

手を前に出して呪文を言うと共に風が巻き起こり彼の方へ完全に直撃したかと思われたが・・・

「ほう・・・少しは戦える人物がいたみたいだな?」

何事もなかったかのように無傷でたっていた。さすがに私は信じられず、思わず声を出して目の前の光景を否定したかったな

「うそでしょ? 今のは明らかに直撃したと思ったのに・・・」

「中々のコンビネーションだったが・・・この程度では俺に当たることは容易くないぞ?」

「あれを回避したというのですか?」

「フツ……だとしたらそれがどうした？手詰まりか？」

「いえ……でしたら戦い方を変えたら宜しいのですよね」

「……何？」

真理亜さんは毅然とした態度で彼に言い返すと彼は怪訝に私と真理亜さんを見ていた。確かに、今の彼は強いし迷いがないけれど……戦い方を変えれば通じるはず!!

「今の貴方は私も知ってるのび太さんではありません。ですので……」（構えを変えた？なんだ……あの構えは）？」

「真理亜さん？」

左肘を曲げて後ろの方に下げて右腕はつき出すように構えていた。今の彼女は先程よりも冷たく相手を見据えていたのが素人の私でもわかるけど……私も気を取り直して相手を見据えていた

「行きます……！」

「!がつ!？」

真理亜さんは宣言すると共に一瞬の間合いでのび太君に距離を詰めて左手をつき出すように攻撃すると彼は驚き、苦痛の声をあげていた

「はいはい、はああああー！」

「ぐう!?!がつ!？」

「はいああああ!!！」

連続の突きの攻撃にのび太君はまともうけてよろけていると、真理亜さんがのび太君の膝に乗っかって右膝で彼の頭を攻撃した

「ぬう!!！」

「ふう……！」

「己……！」

「私ばかり見ていいのですか？のび太さん」

「何？……！」

真理亜さんの言葉にのび太君は怪訝に見ていたが、なにかを感じ取って回りを見ると彼は私の方に気づいた

「いつの間に!？」

「気づくのが遅かったですね。ですが、その前に……これをくらいな

「さい!!はああ!!」

「しまっ!?!がはっ!」

「この技は『鉤突き』といいます。簡単に言いますと、鉤突きは弧を描くようにして横から突き込む技……さ、三上さん。遠慮なく：彼の過ちを止めてください」

真理亜さんが仕掛けた鉤突きは肘が体から離れてから、拳をねじりながら肘を外側に開き、のび太君に対して斜めから突くように攻撃していた。その結果、彼はまともうけて少し後ろにのぞけていたが、耐えていた

そんな彼を見て、私は手を両手で前に出すと砲撃のように丸くなつて技を叫んだ

「もう終わりよ……目を覚まして!のび太君!」

「っ!?!」

「ジャンボット・ビーム」

目を覚ましてほしいという思いと共に私は彼に思い切り攻撃を放った

そしてー

ーードゴオオオオン

私の攻撃が思い切り彼に向かって直撃すると共に爆発音が辺りに鳴り響いた

「やりましたか?!」

「さすがののび太君も……え?」

「……信じられません……!?!」

「ツチ……今のは危なかったぞ……」

彼は舌打ちをすると共に、ゆっくりと立ち上がっていた。今の攻撃は確実に彼に当たっていた筈なのに何で……!?!

「……フツ……お陰でこいつが使い物ならなくなつたがな……」

「なっ!?!それはー」

「ムツツリーニと秀吉の武器!!」

のび太君はムツツリーニ……土屋君の使う刀と秀吉君の使う槍を地面に投げた。彼はつまりとっさの武器で投げて私の攻撃を止めた

ということ!?

「くっ!ならもう一度・・・!」

「残念だが・・・それはむりだ」

「何を・・・!?!」

真理亜さんがもういちどチャンスはをつくろうと構えていたがのび太君は否定していた。そんな言葉に真理亜さんが怒ろうとすると、のび太君が消えた

「いったいどこに!?!」

「・・・しばらく眠ってもらおう」

「え?あっ・・・」

「真理亜さん!?!」

いつの間にかのび太君が真理亜さんの背後に立って、何をしたのかわからないけど真理亜さんが地面に倒れた

「次は・・・」

「っ!」

「君も寝てもらおう」

ーバチバチ!

「あっ・・・そ・・・れは・・・」

スタンガン・・・

そうか・・・私と真理亜さんは・・・そのスタンガンで・・・

「暫くそこで眠ってもらおう・・・」

「のび・・・太・・・君」

「どうやらもう片方のもまだ意識あるみたいだが・・・あれでは暫くは動けまい。だが、・・・君は完全に眠ってもらおう」

私は動けない体を必死に起こそうとしていたが、彼は答えることなくもう一度私にスタンガンで攻撃をしようとするとー

「・・・いい加減にしやがれ・・・」

「!ぐはっ」

誰かが私の前にのび太君の前へ立ちふさがり攻撃をいれると彼は近くの壁に直撃した。そして、私を守ってくれた人は米担ぎで真理亜さんを抱えていた

「真理亜さんは三上とそばにいてくれ」

「だ・・め・・です。貴方は・・・」

「十分に休んだから安心してほしい。・先程のでもう完全に俺は切れ
た・・・」

指をぱきぱきと鳴らしながら私達を助けてくれたその人は・・・

「もう俺はお前を許さん。・・・本気で俺はのび太を・・・バラバラ
ラのメタメタにしてやる・・・!!」

私達の前に剛田君が怒りながら立っていた

「(・・・・貴方は・・・本当にここで終わるのかしら?のび太君・・・)
誰かがそう考えているのは私はまだ知らなかった・・・」

叫び

ジャイアン side

俺は三上と真理亜さん目の前に庇うようにたつてのび太をにらんでいた。真理亜さんがやられたのも勿論怒りの原因だが……

「お前……自分で何をしようとしたのか分かってるのか？」

「ペツ……さあな。しかし、何故立っていられる？」

「へ……そんなの決まっているだろうが……今のお前がものすごく腹立つと言うことが全てだ」

「……ふん。言い方を変えれば、勝算もなく俺に戦いを挑むと言うことだろ？」

からだに埃がついたのか、それを払う動作をしながら俺の方へとゆっくり歩いていった。相変わらず明久の奪った木刀を構えているな……

「人のものを奪うのは泥棒って教わらなかったか？」

「其は貴様がいえた義理か？人のものを奪ったことがあるのに」
「！」

俺はのび太に言われて、少しだけ固まってしまった。確かに昔の俺は「お前のものは俺のもの俺の物は俺の物」と言っていたが、俺はあいつにどうしても一言言わないといけない

「違うな……」

「なに？」

「いいことを教えてやる……。お前の言葉にひとつ訂正してもらわないといけないことがある」

「ジャイアン？」

明久の声が聞こえるが俺は構うことなく、目の前ののび太に対して指差した

「それはな……人のものを奪って許されるのは俺だけだからそうしたんだよ!!!」

「……はっ。」

「お……横暴だああああ!!?今日の前に横暴な発言をした人が

いるよ!？」

「武君それはちがいますよ……。頭がいたくなります……」

「ま、真理亜さん大丈夫?」

「なんていうか……。なんとも言えないわね……」

のび太をはじめとする皆が唾然としていて、真理亜さんが頭を抱えていたが俺はなにか間違えていたか??

「お前はどこぞの暴君だ!」

「暴君ではない。ジャイアンだ」

「そういう意味じゃない!! ああもう!! なんか貴様と話していると調子が狂う!!」

「そうか……。まあ、あとは……。戦いで語り合うするか……。そして……」

俺は軽く目をつぶりながら、あの頃を思い出していた

『喧嘩ならドラえもん抜きでやろう』

『何を……。まだ勝負はこれからだ……。!』

『ぼ……。僕だけの力で……。き……。君に勝たないと……。』

『ドラえもんが……。安心して……。帰れないんだ!!』

たった一度だけ……。たった一度だけ本気の喧嘩で俺はあいつに負けた……。だが、あの頃のあいつの方が……。根気よく最後まで俺に食らいついて戦っていた……

「目を覚ますついでに……。いい加減にあの頃の本当の決着をつけるぞ……。のび太!!」

「……。ふん……」

俺は槍を軽く振り回して目の前のあいつに矛先をむけるとあいつは気を取り直してまた構えた

「……。突然だがひとつ聞く……。お前は人の未来をどう思う?」

「はっ、み、未来??」

「質問を変えよう……。未来と言うよりも……。お前達は人をどう思う?」

槍を下げないまま俺はのび太の問いかけの意味にわからず困惑していた。いったい何が言いたいんだ?

「未来とか人とか・・・言いたいことが・・・分からないな!!」

俺は走りながら槍をあいっつ向けて攻撃を放すとあいっつは木刀で槍を受け流すような動作をして俺に話しかけた

「お前に夢はあるのか?」

「夢だと・・・?その・・・あるに決まってる!」

「そうか・・・なら、その夢が叶いもしない儂いものだとしたらどうする?」

「・・・何だと? (↑こいつの力が・・・なんか強くなってるのか?)」
「今の俺は・・・何故ここにいるのかはわからないがそんなのはどうでもいい。今の俺は・・・すべてを否定するためにここにいるのは確かだ」

「否定だと!?!つと!」

俺はのび太の言葉に反応を示しながら、あいっつの攻撃に対して俺は後ろに下がり、槍を構え直しながらものび太は攻撃の手を緩めなかった
「そうだ・・・俺が今ある記憶は・・・ある約束のためになにかを遂げようとしていたことだ」

「約束? (大方ドラえもんとなにか約束していたのか?それに先からのび太は何が言いたいのかわからない)」

「今の俺はもう・・・記憶がはつきりと思いつけないが・・・1つだけ確かな約束をしていた。・・・何かに『きつと一人でも立ち上がれることを・・・』と俺はなにかに約束をして・・・ある夢を目指してきた」

「!!」

のび太の言葉と共に俺の持っている槍が押され始めた。段々、のび太は語気を強めながら俺の槍を上へ押し上げた

「つくー!」

「俺はその夢のために頑張ってきた。そうだ・・・、誰かと共に共存する事がきれいだからこそ夢を見た・・・故に夢を見て真っ直ぐ進んできていた!」

「のび太・・・つ!!」

「夢をバカにされた悔しさ!友人に騙されて絶望を抱いてきた事も

あった!!多くの苦難を経験して、多くのものを救い!多くのものを失ってきた!!この身はなにかを守るために真っ直ぐただ歩き続けた!!」

「ぐお!!」

一つ一つの攻撃が重く鋭い一撃で俺は苦痛な声を出していたがのび太は怒りたまっていたのか攻撃が止まる感じはなかった

「そして、俺は何度も嫌になり何もかもすべてを投げ出したく10年も離れたときもあった!!」

「「「え?!」」」

今の言葉に俺は違和感を持っていた。あいつが10年も投げすてて行方不明になった話はしらないぞ!?

「ガッ・・・」

「ジャイアン!!」

「来るな!!この喧嘩は俺の喧嘩だ・・・そこで見てくれ!」

「でも!!」

「いいから来るな!!・・・俺を信じろ」

俺は明久に厳しく制すると明久は大人しくなり、同時に俺が写る瞳にはのび太はだれでもわかるかのように体全体も怒りに震えていた

そんなあいつに俺は問いかけた

「お前の夢は・・・誰かと共存するための未来だったのか?のび太・・・」
「そうだ・・・俺は人間とロボットを共存する未来・・・誰もが幸せな未来・・・そんな願いや夢を見ていた!俺は、そんな願いがあったからこそ頑張つてこれた!!そんな未来に実現することに憧れた!!だが!!人の願いは儂く叶わなかった・・・。ロボットを兵器を扱うもの!!人の命やロボットを破壊してもをなんとも思わないものもいた!!」
「のび太君・・・」

三上が悲しそうに呟くのが俺にも聞こえたが、アイツは気にとどめず俺に攻撃を続けてきて、俺は必死に防御とついていた

「故にこの願いは叶うことのない妄言にすぎなかったんだ!!あの頃のようにただ・・・まっすぐなにも考えなく追い続けてきた未来の果てがこれだ!!」

「やべ!!とばされる!!」ぐああああああ!」

「「ジャイアン（武君）（剛田君）!!」」

「夢なんて・・・叶わないものなんだ・・・そんな甘い夢を見ていきるくらいなら・・・何もかも破壊した方がましだ!!!」

「が・・・は・・・」

「つつ・・・武君!!!」

俺が地面に倒れるのと同時に真理亜さんが悲痛な叫びしていたのが俺には聞こえた・・・

未来の果て・・・あいつは確かにそういったな。・・・そうか・・・

あいつは・・・操られてるだけではなくこの未来・・・いや、俺達の遙か先のこの未来でなにかを見て絶望を抱いてしまったのか・・・?

「・・・っ!のび太・・・?」

「のび太君・・・?」

だが、俺はのび太の方を見たときあることを感じた。あいつの瞳は・・・いや、三上も気づいた感じだが・・・泣いてる?

そういや今でこそ泣かなくなったが、あいつの昔は泣き虫だったな。いつもドラえもんは道具を頼ったりして、でも時には頼らないでなんとか自分の力でやろうとしていたんだよな・・・

「ああそうか・・・お前は苦しかったんだな」

「なに?」

「記憶を失っても・・・お前はのび太だと安心できる・・・。何故なら、俺は知ってるんだよ・・・お前は誰よりも優しく真っ直ぐなやつだと・・・!」

俺は槍を支えにゆっくりと立ち上がり、のび太を睨んでいた。対するのび太は黙りながら見ていた

「俺が・・・いや、俺たちがお前の優しさを取り戻す!!そして、お前のその暴走を・・・止めてやる!!」

俺は槍を構えてのび太をにらんだ。必ず、あいつの正気を取り戻して三上の方に連れて土下座させてやる!!

覚悟しろよ・・・のび太ああ!

衝突

明久 side

僕はこのび太の悲痛な叫びを聞いて愕然としていた。僕の知る限りののび太はそんな事を一言もいってくれなかった……

「のび太は……本当に昔何があったのだろう……」

「……武君もあんまり昔のことを話さないですが、今ののび太さんのは明らかに憎悪を吐き出して攻撃しまくっていますね……」

「私達の世界を救ってくれた彼は、本当に真っ直ぐでした。今この場で見てる彼は……本当に誰ですか？」

僕の言葉に続けるように真理亜さんとルナさんも悲しそうにのび太を見ていた。確かに、のび太もジャイアンも昔何があったのかあんまり話してくれなかった

「……のび太君……」

「目をそらしてはいけないわ。美子」

「留留璃さん……わかってるわ」

「貴女にとっては辛いかもしれないけど……今の彼はすべてを憎む破壊者その物かもしれないわ。別の言い方をすれば……彼に目の前写るものは復讐する対象ばかりということなのかしら？」

「わからないわ……。けれど……彼はこの遙か先の未来を見て絶望を抱いていたのは確かみたい……」

「そうね。ただひたつだけ言えることはあるわ」

僕はまだ体が痺れてるのか起き上がれない三上さんが留留璃さんに支えられながら悲しそうな顔で話していたのを見た。そんな三上さんの悲痛な言葉を聞いて、僕は何とも言えなかったけど、三上さんの言葉に留留璃さんが一つだけ言えることがあると言うのに反応を示していた

「彼……のび太君は貴方の事も記憶にないはずなのに……止めをささなかったでしょ？それに関しては真理亜の時も同様」

「あつ……」

留留璃さんの言葉に三上さんも思い出したように小さく声を出し

ていた。確かに、あの時ののび太は真理亜さんと三上さんを攻撃していた・・・というよりはスタンガンで眠らせようとしていた

「貴方達は彼に目を覚ますために攻撃をしていたのに対して彼は気絶させて捕らえようとしていた。そこからなにか気づかない？」

「・・・ひよつとして、のび太君は無意識に眠らせようとしていた？」
「その可能性があるわ。普通なら奪った吉井明久の木刀を攻撃したらいいのに、何故か彼はそれをせずに別の選択を取ったことから彼は・・・まだ貴方達の知る彼が心の中に残っている可能性があるわ」

「(私では貴方を助けられないの？いえ、それは私のかつてな思いね・・・。私の事をあなたが憎いと言う気持ちがあるなら・・・別れられても仕方がない。それでも・・・) 私は貴方を愛してるから・・・のび太君」

僕らは恐らく決着をつくのがもうそんなに時間が掛からないと思
い二人の決闘を見届けながら三上さんの悲しそうな顔を見て、僕
の心にはのび太に対する途方もない怒りを抱いていた

早く帰ってきなよ・・・のび太!!

ジャイアン side

「おおおおおあ!!!」

「つく!!!」

俺は高く跳びのび太に向けて槍を振り下ろすとのび太は舌打ちをしながら苦痛な声をあげていた

「おらおらおらおら!!!どうした!？」

「ツチー!どうやら、俺は貴様になにか目覚めさせてはいけないものを触れたようだな!!先程よりも攻撃が重い!」

「はっ!そりゃあそうだ・・・俺はお前のガキ大将だから力強いのも当たり前だよ!!さっさと負けろ!」

「嘗めるな!!!」

俺が槍を振るいながらそう言うとのび太は交わしながら木刀を俺
に向かって攻撃してきた。確かにさっきまでの俺はのび太に負けて

いたが……

「うら!!」

「がはっ!!」

俺はのび太のからだに足蹴りで攻撃するとのび太はまともにくらい地面にバウンドして倒れたがー

「ツチ!!はあああ!」

ーパアアン、パアアン、パアアン!!

無理矢理上へ飛んで懐から拳銃を取り出して俺に攻撃を仕掛けてきた

「やはり持っていたのか……おらよ!!」

「弾いただと!」

「この程度の攻撃は俺でも弾けるが、戦闘だけはお前に負けたくないんだよ。のび太」

俺は軽く槍を横ふりしながらのび太に話しかけた。対するのび太は少しだけため息を吐きながら木刀の方を構えていた

「なんだ?もう、拳銃は使わないのか?」

「フツ……そう簡単に拳銃通用するとは思えなくってね……」

「そうかよ。まあ……」

「!」

俺はこれ迄にない最速の速度でのび太に向かうとのび太は目を見開いていた

「今の俺は……負ける気がしない」

「っああ!!」

「ツチ!!それでも反応をすとか流石だな!のび太ああ!」

「何故だ!先程までお前は押されていたのに!!何故こんなに動きも変わってる!」

「そんなもん決まっているだろうが……」

「何?」

「俺は泣き虫なお前を無視することできないし、友達を助けるのに理由がいるか?」

「!……もうこれ以上話しても平行線だ……」

のび太は俺の言葉を聞いて目を見開くが、すぐに冷たい目になり木刀を腰に下げて体を曲げていた

「あれは・・・おもしれえ・・・」

俺はのび太が何をしようとしているのか分かったが、あえてその策をのって構えた

「来い・・・すべてを切り伏せる!!」

「それは明久のものなんだがな・・・まあいいや」

俺とのび太はこれ以上はしゃべることなくお互いに構えをとっていた

「」「」「」「」

誰もが沈黙を保ちながら、目の前にいる敵から目をそらすことなく見据えていた。俺もあいつも神経を研ぎ澄ませながら・・・

そして・・・

「!はああああ!!」

おれとのび太は互いに高く跳び、のび太は居合い切りをしかけ、俺は槍を縦に振り下ろした。そして・・・

スバアアアアアン!!

「」「」「」

「・・・」

おれとのび太は同時に地面に着地して、そのままの体勢だった。先に倒れたのは――

「ぐっ!!」

「ジャイアン!!」

「武君!？」

先に倒れたのは俺だった。そんな俺に明久達の悲鳴が聞こえたが、俺はのび太の方を見た

「・・・まさか・・・俺を倒すのではなく木刀を叩きつけるとはな。おかげで・・・」

――ザクッ!!

「木刀が半分おれてしまったな・・・」

「ああああ!? 僕の木刀があああ!?」

明久の悲鳴が聞こえるがそんなの関係ない。俺はゆつくりと立ちながら、槍を捨てて構えた

「ここからは・・・ただの拳での喧嘩だ!」

「・・・いいだろう(スツ)」

俺の構えにのび太もまた構えていた。何だかんだアイツは拳銃を使わないで俺と同じように戦うなんて・・・

「(やっぱりアイツはあいつだな) 一撃で決める・・・!」

「(力は奴の方が上だ。油断してやられたなんて笑い話もできないな)・・・こい! 改めて名を教えろ」

「そうだったな。俺はお前にジャイアンと言ってたんだよ。・・・いくぞ!」

俺は全速力で走りながら叫ぶとのび太も走りながら右こぶしを強く握っていた

「のび太あああああ!!!」

「ジャイアーーーーーン!!!」

お互いに拳を顔に思いきり殴り、力を出しきっていた

「おああああああおおお!!」

お互いに倒れないと地面に踏ん張ると亀裂が走っていたが、そんなの関係なく俺らは互いに力を出し尽くしていた

「(絶対に・・・)」

『のび太君つつ・・・』

「(絶対に・・・三上を悲しませたこのバカを吹っ飛ばさないとけない!!! 三上はいつも一人で寂しく泣いていたのを俺はしってる!!) いい加減に・・・目を覚ましやがれええ! おあああああ!!!」

「っがは!!!」

俺のパンチにのび太は近くの壁に思いきり吹っ飛ばされた。俺は限界の体に鞭をうちながら心の中でもうあいつが起き上がるのは止めてくれと思いつつながら見ていたが・・・

「はあはあはあ・・・」

「嘘だろ・・・不死身かよ・・・」

「はあはあはあ．．．ここまでの敬意を払って．．．俺のもつ最大の一撃を放つてやる!!」

俺はまだ立ち上がるあいつに少し怯えるとあいつの体の回りに黒いオーラが発していた。さすがに今の俺はもう迎え撃つ力がない．．．畜生．．．ここまでか!?

「久しぶりに楽しかったぞ．．．そして．．．さようならだ」
「ツ!!」

「さあ!!すべてを破壊しろ!!撃ち抜け!」【ジャンボット・ガン】!!!
のび太は右腕を押さえながら俺に向けて思いきり攻撃を放った。さすがにここまでかと思っていると．．．

「ありがとう剛田君．．．のび太君を止めるために戦ってくれて」
俺の前に三上がいつの間にか来ていた。おれは驚き、小さい声で話した

「三上?」

「次は私が彼を受け止める番だから」

「まさかー、よせ!!三上!!もしもの事があれば!!」

「大丈夫よ。もう．．．私も覚悟を決めたから．．．」

迫ってくる【ジャンボット・ガン】に三上は真っ直ぐ見据えて手を前に出した

「今貴方の苦しみを解放するから．．．少しいたいけど我慢してね?のび太君．．．【ジャンボット・ビーム】!!」

ドカアアアアアアン

悲しき決闘の決着は．．．もう目の前だった

魂の叫び

本当に私はつくづく恋人失格だと痛感させられるわね……。私は
のび太君の苦しみがあることが気づけずにあそこまで彼を追い詰め
たのは紛れもなく私のせい……

『俺はその夢のために頑張ってきた。そうだ……。誰かと共に共存す
る事がきれいだからこそ夢を見た!!故に夢を見て真つ直ぐ進んでき
ていた!』

『夢をバカにされた悔しさ!友人に騙されて絶望を抱いてきた!多く
の苦難を経験して、多くのものを救い!多くのものを失ってきた!!こ
の身はなにかを守るために真つ直ぐただ歩き続けた!!』

『俺は何度も嫌になり何もかもすべてを投げ出したく10年も離れた
ときもあつた!!』

彼からとんでもない単語も聞くことがあつたけど、彼は過去にたく
さんの苦しみを経験してきたんだと彼の叫びから分かった

『そうだ……。俺は人間とロボットを共存する未来……。誰もが幸せな
未来……。そんな願いや夢を見ていた!俺は、そんな願いがあつたか
らこそ頑張つてこれた!!そんな未来にいきるために憧れた!!だが!!
人の願いは儂く叶わなかつた……。ロボットを兵器を扱うもの!!人
の命やロボットを破壊してもをなんとも思わない者もいた!!』

『故にこの願いは叶うことのない妄言にすぎなかつたんだ!!あの頃の
ようにただ……。まっすぐなにも考えなく追い続けてきた未来の果てが
これだ!!』

『夢なんて……。叶わないものなんだ……。そんな甘い夢を見ていき
くらいなら……。何もかも破壊した方がましだ!!』

彼の心の悲鳴とでも言うのか、この未来を見てきつと彼が見ていた
夢の果てがこれだと思つて絶望したんだと私は思う。そして、私は彼
の目を見ていたら……

彼は助けてほしいと望むかのような叫びが聞こえた気がした

「(ああ、貴方はきつと……。私達の知らないところで頑張つてきたの
ね……。)今助けるからね……」

そして、私は気がつけば倒れている剛田君の前へ立ちながら、声かけた

「ありがとう剛田君……のび太君を止めるために戦ってくれて」

「三上?」

「次は私が彼を受け止める番だから」

「まさかーよせ!!三上!!もしもの事があれば!!」

「大丈夫よ。もう……私も覚悟を決めたから……」

迫ってくるのび太君の特殊能力「ジャンボット・ガン」に私は真つ直ぐ見据えて手を前に出した

「今貴方の苦しみを解放するから少し痛いけど、我慢してね?のび太君……」【ジャンボット・ビーム】!!」

ドカアアアアアアン

私と彼の攻撃が互いにぶつかり合いながら、攻撃を出し続けていた。考えてみたら、彼とこうしてぶつかり合うのははじめてじゃないかしら……

「くうう!」

「……ねえ、のび太君……今の貴方は私の声が聞こえないかもしれないけど……私には貴方の叫びが聞こえるわ」

「いきなり何を言う……っ?」

私は彼の攻撃を対抗しながら語りかけた。その言葉に彼は少し戸惑った声を出していたのを私は聞き取れた

「本当に貴方はドラえもんさんの言う通り不器用と言うか……無茶をする人ね……」

「だから何が言いたい!?俺はお前の事を知らない!」

「っ!（やっぱり忘れられてるとなったら、こんなに悲しいのね……。そして、貴方はきつと思いついたら私と同じように自分自身を責める

かもしれないけど……）そうね。私が言いたいの……。これ以上貴方の苦しみを……憎悪を与えさせない!!必ず助ける!」

「なっ!!こ、この俺が押し負けているだど?!?!」

私は自身の思いと共に力を強めるとのび太君は驚きの声をあげていた。私は彼に聞こえるように大きな声をあげていった

「貴方は・・・私にとって大切な光!! 貴方が闇に落ちそうになったら私が貴方を助ける!!」

「っっ!!」

「思い出して!! 野比のび太!! 貴方は・・・私にとっても大切な人で共に生涯を生き抜く約束したことを!」

「この俺が押し負ける!? くそおお!!」

私は彼に聞こえるように呼び掛けると彼は徐々に押され始めたのだ。すると、私の後ろからも声が聞こえた

「いい加減に目を覚ませ!! のび太!!」

「!! のび太さん!!」

「!! のび太!!」

「!! のび太君!!」

剛田君をはじめとするドラえもんさん達もいつの間にか来ていたのか私の後ろに私を立ち支えるようにしてくれてのび太君を呼び掛けていた

「皆・・・貴方を待ってる!! 目を覚ましてええええ!!」

「っあ・・・!!! (ああ・・・そうか・・・俺は・・・君を忘れてしまっていたのか・・・)」

「(力が弱くなった?! これなら!!) 帰ってきて・・・のび太君!!!」

私の叫びと共に砲撃が強くなり のび太君はその光に飲み込まれ・・・

ドオオオオオオオン!!

のび太君がいた場所には爆発が起きた。その先におきた爆発が収まり、私達は緊張して見ていた

「!!」

「・・・っあ」

「な!? あれだけの攻撃をくらってまだ立つと言うのかよ!」

「なら、今度は僕らが止めー」「まって!」ー三上さん?」

私は吉井くん達の行動を止めるために強い口調で止めると吉井くんが戸惑っていた

「少し様子がおかしいわ」

「様子が??」

「……全く……随分と酷い話だね……そんなに真っ直ぐに攻撃するなんて……まるで……ひどい鏡をみた気分だよ」

「!」

「そのしゃべり方は……」

体がボロボロになりながら私たちに話しかけてきたのは……

私達の知ってる……

そして……

「……僕の……負けだよ……」

私の最愛の人が……ボロボロになりながらも苦笑していた……

フラグ

のび太 side

僕はボロボロになった体を無理矢理鞭をうちながら・・・必死に本来の僕を取り戻そうと戦ってくれたジャイアンと美子さんの方を見ると、美子さんが震えながら僕の方へとゆっくりと歩いてきた

「・・・のび太・・・君?」

「(ああ・・・まさか自分は今この声を聞くことができないと思っていたのに・・・もう一度会えて話せるなんて・・・)・・・ただいま・・・美子さん・・・皆・・・」

「のび太君!!」

「のび太ああ!!」

僕の言葉に美子さんが全速力でこちらに走ってきて、その後ろには他の皆もこちらに走ってきた。・・・ああ、だめだ・・・もう体が限界だ・・・

「(ポスツ)・・・え?」

「・・・お帰りなさい・・・のび太君・・・っ!」

「美子さん・・・」

美子さんが、泣きながら倒れそうになる僕を抱き締めていた。まだ、はつきりしない意識だけど、僕は「・・・っ!」

僕は先程までの僕のたくさんしてきたことを思い出したら、体が震えた。僕は・・・仲間を・・・姫路や島田をこの手で浚って・・・美子さんを初めとする女性達を・・・浚おうとしていた・・・?そして、美子さんに気絶させようとソーシャイアンを倒そうと「

「のび太君?」

「・・・なんでもないよ。それと随分と起きるの遅くなってごめんね」「本当だよ。本当に君は皆に迷惑かけて・・・昼寝しすぎだよ」

「ははは!!まあ、のび太らしいけどな」

僕は皆にしまったことへの罪悪感が出てきて、今までにないくらい絶望を抱いていた

「つつ……はっ……」

僕のいた場所は爆発が起こり、皆は驚いていた。そして、僕はまともにもダメージをくらいよろけた

「のび太……君?」

「っはあはあ……やはり……そうするよね……」

「のび太さん!? いったいどこからの攻撃!?!」

美子さんの声が聞こえるけど僕は別の方向を見ていた。そんな僕が見ていた方向に、真理亜さんが激怒していた方向を見るとー

高いところにフード姿が立ち尽くしていた

……いや、あのフード姿は……間違いなく……

「……」

そいつは発することなく手を振り下ろすと無数のロボットが出てきた

「っ!? こんだけのロボットが出てきたら先に進めないよ!?!」

「何体いるだよ!?!」

「足止め……?」

「そんな……!」

出てきたロボットの数々を見て皆は少なからず、恐怖を抱いていたが僕は心の中である決意をしたがその前に……

「ルカとルナさん……久しぶり」

「のび太……」

「本当にお久しぶりです。……できれば、こんな状況で挨拶したくありませんでしたけどね……」

「あははは……それに関してはごめんね……。耳を貸してほしい」
僕は苦笑しながら、ルカとルナさんにあることを耳打ちしていた。

すると、ルカとルナさんは目を見開いていた

「反対されるかもしれないけど……君達の力が必要なんだ……。君達だから頼めるんだよ……」

「のび太……わかった!!」

「……のび太さん……」

「これしか方法ないんだ……。お願いね。留瑠璃も……。ね」

「・・・ええ」

僕は3人にそういうと今度はゆっくりと美子さんの頭を撫でた

「の・・・のび太君／＼／？」

「こんな遠い未来まで来てくれて・・・ありがとうね。本当に僕には勿体ない最高の恋人だよ」

「・・・のび太君？あなた、いきなりなにを・・・」

「ルカとルナさん！留瑠璃！」

「「ええ！」」

僕の言葉に美子さんは何かを感じ取ったのか続きを言おうとする前に僕は3人に指示だすと、3人は――

「「「え？」」」

その場にいた僕の仲間を向こうの方まで・・・つまり、敵のボスがいると思われる先の方まで飛ばしてくれた。そして、続くように留瑠璃、ルカ、ルナさんも皆のいる方へとんだ

「・・・皆はいったかな」

そう・・・僕はね・・・

すると、僕のポケットに通信機がきこえたので出た

美子 side

私はのび太君の先ほどの言葉の意味を聞こうと思うと・・・

「ルカとルナさん！留瑠璃！」

「「ええ！」」

のび太君が3人に指示だして、気がつけば私達は先の続く道へと飛ばされていた。だけど、私は気がつけばのび太くんがいないことに気づいて探していると留瑠璃が通信機を渡してくれた

「どういうつもり、のび太君!？」

気がつけば私は恋人ののび太君に怒って声かけるとのび太君は返事してくれた

「「どうやら、僕以外全員そっちに行けたのだね・・・よかった」

「良くないわ!!あなたも早くこっちに!!」

「……ねえ、美子さん……」

「……のび太君？」

「僕はついさっきまでやりたいことやっていたんだよ……好きにやった落とし前はここでしないといけないから」

「そんなの関係ない!!わたしもそつちに……っ!!」

「僕もいくよ!」

「それは駄目だよ。ここは僕が落とし前をつけないといけないのだから……。それと明久……君は君にしかできないことがある……君なら……託せる」

「のび太!そんなのいつてる暇があればこつちにきてよ!君はまた一人で戦うつもり!」

「……言ったでしょ?落とし前はつけないとだめだって……それと美子さん……」

私は涙が溢れて止まらなくなり、のび太君の最後の言葉になるかもしれない……そんな言葉は聞きたくない……

「美子さん……一つだけ聞くとよ」

「のび太君……」

「別に……あんな数のロボットを倒してもいいでしょ?」

「っ……ええ!!早く倒して私たちに追い付いてね!」

「分かったよ。だから……皆は最後の敵を倒すのお願いね」

私は彼の言葉を聞き、もう泣くのはやめて通信超しだけどそんなのは関係ない……

のび太side

僕は皆になぜ残ったのか説明をしていて、そして美子さんが泣いてる声聞きこえた。本当は抱き締めたい……本当は皆と共に最後の敵を倒したい……けれどこいつらをほっとくわけにはいかない

だからこそ……

「言ったでしょ?落とし前はつけないとだめだって……それと美子さん……美子さん……一つだけ聞くとよ」

「のび太君……」

「別に……あんな数のロボットを倒してもいいでしょ？」

「っ……ええ!!早く倒して私たちに追いついてね！」

僕は彼女の言葉を聞いて、すこしだけ口許を緩めていた。そして、通信超しに――

「分かったよ。だから……皆は最後の敵を倒すのお願いね」

「……信じて待っているからね」

それを聞いて僕は通信機を切った。これ以上の言葉は要らない……

「うん……」

僕はゆっくりとうなずきながら迫り来るロボットを見据えて、自身の状態を確認した。右腕は……あのときの戦いから完治してない。左腕や足はまだ動く……武器は……拳銃……

「(敵は……35〜40位かな)ご覧の通り、君達の相手は多くの世界を救ってきた英雄でもある……この野比のび太が相手してやる……恐れずに向かってこい!!」

僕は自身に鼓舞させるために大きく宣言して……無数のロボットが僕の方に突っ込んできた

必ず……今度は必ず皆のもとへ合流するから……だから先に待っててね……

罨

明久 side

僕達はのび太の意思を受け継いで、この事件の黒幕・・・そして、大きな亀裂を走らせたやつがいると思われる場所へと走っていたのだけど・・・

「……………」

「……………」

「……………」

さつきから無言に前へ走りながらも、明らかに落ち込んでいますというオーラを出しながら走っていた。うん・・・確かにせっかくのび太の正気を取り戻したのに、また別れることになるのは辛いよね・・・？そりゃあ。僕も辛いけど・・・辛いけど!!

「ああ!!もう!!何落ち込んでるのさ!!ジャイアンにドラえもんに三上さん!!」

あまりにもこうずっと引き摺られたらたまつたもんじゃないよ!!それに、少なくとも他のメンバーも顔には出さないけど三上さんたちも同じ状態じゃないか!

「あのな明久・・・今のこいつらはー」

「確かに・・・皆の気持ちはわかるけどそんなの考えるだけ無駄だよ!」

「無駄・・・?なぜそう思うのですか、明久君」

「皆もよく考えてほしいよ。あののび太だよ?さつきの闘いでもそうだけど、のび太はそう簡単に倒れなかったでしょ?」

「確かにそうですが・・・留留璃さん?」

「ん?ーぐふえ!」

「今のあなたが言いたくなる気持ちもわかるけどもう少し言葉考えて喋るべきだと私は思いますけど・・・?」

留留璃さんがあきれた声を出しながら、僕の頭を思い切りはたいたのだ。あまりにもいい攻撃だから物凄く痛い・・・

「全く・・・美子達もいつまでも落ち込まないの・・・そんなに彼のこと信用できないの?」

「違っ……!」

「確かにあなたが彼を心配する気持ちはわかるわ。けれど……彼はど
ういう思いで貴方達を逃したと思う?」

「二あ……!」

三上さん達は留瑠璃さんの言葉に何か気づいたように顔を見上げ
て、やがて先ほど落ち込んでいたときよりもスッキリした顔になり三
上さんが口を開いた

「確かにのび太君は……決死な思いで私たちを逃してくれた……な
ら!!私はこのび太くんのためにも立ち上がらないと……彼に失礼だわ
!!」

「だな!のび太の意思をついで、あいつの仇を討つ!」

「いや、ジャイアン。のび太くんは生きているよ」

「皆さん……。今、彼はいませんが、前を進むことだけをしっかりとしま
しょう。今の彼は……。必ずこちらに来てくれます」

留瑠璃さんが三上さん達に激励するかのように回りを見て話して
いた。そして、三上さん達も覚悟を決めて前を向くことを決断をした
「二二(必ず敵を倒す!)」

「皆!敵はもう少してそこだよ!!準備はいい?」

「恐らく次の敵は最後の敵……。覚悟はできてる?」

ドラえもんや留瑠璃が私達に声をかけていた。いよいよ、僕ら
は……。ついに全ての悲劇の敵との闘いをまもなく迎えるのね……

「僕はバッチリだよ!!」

「俺もだ」

「僕もルナもバッチリだよ!!」

「ええ!」

「腕がなるのう」

「……本気を見せる」

「瑞希、私たちの心を弄んだ敵を叩きのめしましょう!」

「はい!!」

僕を初めとするFクラスの皆は気合いを入れていた。そして、今回
協力してくれたルナさんとルカ君も頼もしい雰囲気だった

「僕らで全てを終わらそう!!この悲しい全ての闘いを!!そして・・・必ず倒そう!!」

「!!」「おー!!」「!!」

僕達は近づいてきた最後の扉をゆっくりと慎重に開けた。もしかったら、敵がそこにいるかもしれないのだからー

だが・・・

「だれもいない?」

「きゃっ?!」

「っ?!三上さん!?真理亜さん!」

僕らは後ろを振り向くと、真理亜さんと三上さんが何者かに体を押しさえられていた。それを見たジャイアン達が駆け寄ろうとしたら、さらに別の悲鳴が聞こえた

「!?!」

「う・・・動けない・・・!」

「・・・不覚・・・!」

「ぬう!?わしもじゃと!」

「私も敵と見なされたのね・・・」

「姫路さん!美波!ルナさん!霧島さん!そして、秀吉!?留瑠璃さん!?!」

「な!?まだ別の敵がいたのか!」

「女性陣全員が人質!」

三上さん達がいつの間にかいた敵に取り押さえられて、抵抗を試みるもー

「っ!!」

向こうの方が力強いのかふりほどけなかった。それを見かねたルカさんが超能力で取りほどこうとしたら、赤い光がルカさんに直撃した

「っ?!こ・・・これは・・・!」

「ルカ!?きゃっ?!」

ルカさんが直撃した光に苦しんでいて、ルナさんも同様に苦しんで

いた。それをみたドラえもんが

「これはー!?」

「ドラえもん、今の心当たりあるのか!?」

「大まかに言えば、昔ルカ達が超能力が出せずに苦しんだ攻撃だよ!!
なんでそれが!?!」

「三上さん!」

僕は囚われた三上さん呼びけた。のび太に託されて三上さんも
守らないといけないのに!!

「まさか・・・敵がまだこんなにいるなんて思わず捕まるなんて・・・
完全に私も油断していたわ・・・ごめんさい!」

「くっ!（今の三上さん達は取り押さえられていて、僕らが下手に動け
ば・・・三上さん達は被害を受ける!）」

僕らは助けようにも女性陣が全員人質にとられて僕らは下手に動
けなかった

ーふはははは。まさかここまで計画通りにいくとはな!!

「くっ!」

僕らは声をした方向を見ると、3人の人物がこちらに歩いてきた。
フードを被っていて相手はわからないけど、正直嘘でしょ!?!と聞いた
い

「まだ敵がいたのか!?!」

「ふはははは。君たちはよくここまでたどり着けたな。おーと、今下
手に攻撃をすれば君達の共にいる女性陣が何されるのかわからない
が良いのかな?」

「くっ!」

ジャイアンとムッツリーニとドラえもんが先制攻撃を出そうとし
ていたが、女性陣を人質に取りられては攻撃できない!!

「ふふふ、ここまで計画通りにいくとは」

「ククク・・・」

「・・・」

僕達が攻撃できないとわかると彼らは優越感浸りながら僕らを嘲
笑っていた。それを見た僕は激怒して声をあげた

「そんなに嘲笑っている君達はそんな卑怯なことしかできないのか!!
よほど臆病者と見る!」

「なに?」

僕の言葉に二人のフードを被っていていた人物が睨んでいた。そして、一人の男が指をぱちんとならすとー

「「「つきやああ!!」」」

「っ!!」

その指が鳴らされたタイミングと同時に姫路さん達が悲鳴をあげていた。そして、僕らは振り向くとー

「う・・・」

三上さん達を始め女性陣がぐったりしていた。それをみて僕は再びそちらを振り向くと冷たい言葉が聞こえた

「・・・今のは軽く気絶してもらったが、命握っていることも忘れるな・・・」

「お前っ!」

「彼女達のことを思うなら手をあげろ。その意味はわかるな?」
「っ・・・!」

僕は姫路さん達の方を振り向くと、苦しそうに抵抗できないように押さえられていた。それを見て、僕らは・・・

「「「・・・!」」」

全員が抵抗するのをあきらめて、手を上げた。どうやら、今回の敵はかなりの姑息なんだね・・・

ごめん、のび太・・・僕らでけりをつけられなかった・・・

スネ夫 side

明久達が未来に向かってからそれなりの時間がたっていた。現代に残っていたのは僕と冬花ちゃんと里緒菜ちゃんだけだった

「はい。もうこれで包帯はおしまいよ」

「軽く曲げてみてください」

里緒菜ちゃんが僕の包帯を取ってくれて、冬花ちゃんが指示を出していたので僕はそれに従い軽く腕を曲げると痛みはなく、体全体に痛みは走らなかつた

「大丈夫だよ。ありがとう」

「よかつた……。ね、里緒菜お姉ちゃん」

「ええ……。あんな傷だらけのスネ夫さんはもうみたくない……。なんて口に出せば恥ずかしいわね」

「二人とも本当にありがとう。それよりも、のび太は一体何処にいるんだろ……」

僕がボソツと言うと、何処からかその声が聞こえた

「お兄様に何かありましたのですか!!?」

「……。つちよつと待って?なんで君がそこにいるの……。?」

僕は現れた人物に驚きながらもあきれた声で指摘した。はあ、本当にどうしてここにいるのか疑問にしかつきないけど……。とりあえずは……

「別の意味で胃が痛い……。助けて、ドラえもん」

誰でもいいから今のこの状況を助けて……

実験と生死さ迷いかける

ーードオオオオン

荒れ狂う辺りに爆風が飛び舞う中、一人の影が飛びながら無数の敵に攻撃を入れていた

「はあああ!!」

「?!」

その男の攻撃は見事に相手に一撃をまともに与えると次の標的へと攻撃を仕掛けた

「てりやあああ!!」

「!!」

「ふう! はあはあはあ・・・」

男は額から落ちる汗を左腕で吹きながら、回りを見ていた

「後・・・18体・・・!多すぎるよ・・・」

「ハイジヨ、ハイジヨ、ハイジヨ」

「でも・・・ここを無視すれば本当に明久達に危険が迫るし・・・何より・・・っ!」

「!」

迫り来る敵に、銃で速打ちをすると相手はゆっくりと倒れた

「何より・・・僕が好きなのをした以上ここで落とし前をつけないと・・・仲間に・・・友達に合わせる顔がない・・・!」

「ハイジヨ!!!」

「だから先程から同じ事しか言わないロボットを・・・ここで止める!!
そして・・・ここは英雄としての誇りよりも野比のび太としての誇りとして・・・ここで全滅させる!!」

敵の落ちていた武器を拾いながら、のび太は目の前の敵へと・・・

「まだ来る元気があつからこい!!纏めて・・・倒してやる!!」

「!!!」

「はああああお!!」

迎え撃っていた・・・

しかし、このときののび太はまだ知らなかったのは・・・仲間が捕まり、最愛の人が人質にされていたことだった・・・

明久 s i d e

僕達は男女それぞれに別の牢屋に入れられていた。三上さんをはじめとする女性陣は手足を拘束されていて、身動きがとれず、連れていかれた。また、超能力使いのルカさん、ルナさん、留瑠璃さんは完全に能力が使えなかった

「くそっ・・・あの野郎共汚い真似しやがって・・・！真理亜さん達も人質とられたら動けねえ！」

「幸いなのは女性陣が人質だが、殺される心配はないと言うことだな」
「・・・サモンするための腕輪も奪われてしまった。ドラえものの道具で脱出したいところだが・・・」

「奪われてしまったからのう・・・」
「ごめん・・・」

「だが落ち込んでいても仕方ない。問題は何故、あいつらは女性陣と男性を別々にした？」

そう、雄二の言ってくれた疑問の通りだけど何故姫路さん達を別のところにする？まさか・・・

「姫路さん達を操るつもりか!？」

「いや、恐らくその可能性は低いと思うよ。同じ手が使えるとは向こうも思っていないけど・・・」

「けど・・・なんだ？」

「僕にはものすごく嫌な予感がするよ。あれほどの敵が何故こんな手段を取るのか僕にはわからない」

「・・・確かに回りくどい」

僕が感じた危機感を口に出すとドラえもんが軽く横を振りながら否定していた。そして、ドラえもんの感じる危機感にムツツリーニも頷いていた

「しかし・・・それでも別のところへ連れていかれた女性陣は心配じゃ

のう」

「・・・(ブシャアア!!)」

「だからなんでお前はこう突然鼻血出すんだよ!!ムツツリーニ！」

秀吉が心配事を言うのとムツツリーニが鼻血を出して倒れていた。それを見かねたジャイアンがあきれた声で突っ込みを入れていた

「少なくとも・・・僕らも殺される心配はないけどね。ん？」

「どうしたの?・・・あー！」

ドラえもんが急に黙ったので振り向くと僕らを捕らえたフード姿の一人が紙を取り出して僕らに渡した

「えーと、なにになに？」

ドラえもんがその紙を見て読み上げてくれた

「えーと、「この中で一番お人好しで尚且つバカがいるのならそいつを教えろ。教えないと・・・人質がどうなるかわかるか?」・・・その質問に対してどういう意味があるのか気になるけど・・・」

「そりゃあ、お人好しでー！」

「バカと言えば・・・」

「うむ」

「・・・答えは決まっている・・・」

「二二「明久しかいない!!」「二二」

僕はその言葉を聴いて、泣きながら反論した

「つちよつとまって!?僕はそんなにバカではないよ!？」

「あ、また紙を渡された。「そんなバカかわからない疑惑がある者がいるの場合は問題を解いてもらう。尚且つ、人に聞くのは禁止」

「なんか分かってるよ!?ええい!とにかく解いてやる!」

「・・・問題」

「二二「つて!そこはしゃべるのかよ!」「二二」

僕が受けると決めたら、フード姿が喋っていたので僕らは思わず敵と忘れて突っ込みを入れた

「問題・・・」

「来るならこい!!」

「太陽系の内、唯一自転の方向が違うのはどこだ?」

「宇宙の問題!?そんなの分かるわけないじゃない!?!」

「明久、落ち着け!冷静に考えればわかるはず!」

軽く混乱してると雄二の声が聞こえた。確かに落ち着いたら、わかるはずの問題なら・・・

太陽系は・・・

- ① 太陽
- ② 水星
- ③ 金星
- ④ 地球
- ⑤ 木星
- ⑥ 土星
- ⑦ 天王星
- ⑧ 海王星
- ⑨ 冥王星

「わかった!答えは冥王星!!」

僕は考えた末、会心の答えを導いた。これなら正解のはずだし、僕がバカとか証明されない!

「」「」「」「」

「・・・太陽系といったはずだが?」

「へ?冥王星は太陽系じゃないの?」

「お前の答えは不正解。正解は金星で冥王星は――惑星として扱われておらず、準惑星として取り上げられている」

「・・・ああそういうことか」

「罨を仕掛けられていたのか」

「貴様、どこからそういう発想になる?」

何か敵に呆れられていた。そして気を取り直した敵は、僕に話しかけた

「とりあえず貴様がバカだと言うのがわかったから、こい」

「くっ、何かいちいち気に触るいいかたを!!」

何か気にさわるけど、ここは下手に動かない方がいい。三上さん達が、人質にされている以上従う他ない・・・僕は無力だ!!

居場所が知られたら不味いのか、僕は目隠しされながら連行されていたけど、なんかFFF

団の処刑を思い出すな……

「はっ!?まさか、僕は処刑されるのか!?!」

「何を思ったらそうなる……」

「え?ち、ちがうの?」

「安心しろ。処刑はしない」

「つてまた急にしゃべらず紙でかいた!?!しかも達筆!?!」

「勉強しました」

「何か気になる言い方だよ!?!……つて、いつのまに目隠しが取れた?」

僕はツツコミを入れてから自身の状態で目隠しが外されていたことに気づいて、回りを見た。どうやら、辺りは沢山の機械が置かれていたけど、これを壊したらいくらかかるのかな……

「よく来た。名前を聞こう……いや、やはり聞くのはやめておこう」「なんで!?!」

「貴様は今から、我々の指示に従わないと……分かってるな?」

「……で、君達をここでぶん殴ればすべて終わりじゃないの?（僕は何を指示従えたらいいの?）」

「貴様つつつ!人質いるの忘れるなよ!」

「あ、本音と建前が逆だったね。ごめん、ごめん」

僕は悪気なく謝ると、向こうは軽く血管が見えるくらい怒っていたがそんなのはどうでもいい

「言うこと従えば、仲間を解放してくれるの?」

「それは保証できない。すべて貴様次第と言うことだ」

「つ……」

僕はそれを聴いて、ますます相手は姑息なんだというのがはっきり分かったけど……催眠?でもするつもりか?

「そうだ、舞台を用意してあげるから……(パチン)」

一人のフードが指をならすと、何処からか牢屋が出てきてそこから出てきた人物達を見た僕は息を飲んだ

「……………」

「つ……留瑠璃さん、真理亜さん、霧島さん!?それに……三上さん、美波、姫路さん!!」

そこに出てきたのは別室に囚われていた真理亜さんを初めとする女性陣達だった。彼女達は手足が拘束されていて横になって眠っている状況だった

「皆!? (まさかみんな操られたのか!?)」

「安心したまえ。先程から抵抗ばかりされて少し眠っているだけだ。まあもつとも……君が言うことを従わなかったら……どうなるだろうね」

「お前!! (のび太もこうやって脅迫されていたのか!?)」

「なんだ? 立場がわかっていないのか? 仕方ない…… (パチン)」

「……………つああああ!!……………」

「皆!」

僕の目が気に入らなかったのか指を鳴らすと、囚われていた彼女達が苦しんでいた。それを見た僕は驚き、相手は不愉快そうに話していた

「まだ歯向かうならこれ以上苦しめるぞ?」

「分かった!! わかったから……皆に手を出さないで!!」

「はじめからそうすればいいものを……」

男はふたたび鳴らすのをやめると、姫路さん達はぐったりしていた。僕はそれを見て、彼女達が人質にとられたら何もできない悔しさときつと、まだ助けるチャンスがあるはず!!

「まずはこれを渡すが、手を離したりするのは許さないぞ」

「瓶?」

「これを次の敵が来たときに飲んでもらおう。安心しろ、毒はない」

「『どうやら、次の敵が来るから少し手入れしとくか』」

「なに?」

別のフード姿の人物が僕の方に駆け寄り、手を前にしていたが何をしてるのだろうか?

「裏切り者を倒せば女達は助かる。我らに従え」

「……は？なにをいつてるの？」

「「?!」」

僕の言葉に3人のフード姿が驚いていた。そして、一人のフードがわめいていた

「何故効かない!?催眠しかけたはずだぞ!?あの三上美子でさえも効いたのに!!!」

「え？あれ催眠なの?!全然わからなかったよ」

「つつ……!」

「仕方ない……敵がきたときにそいつを飲めばいい（その瓶は少し改造したからな……果たしてきくのか不安だが……）」

何か企んでいるのがわかるけど今の僕は彼らに言うことを従うしかない。仲間のためなら、今は悪役でもなつてやる!!

ーードオオオオン!!

「どうやら来たみたいだな。裏切り者が」

「さあそれをのめ!」

「つく……(ゴクン)」

僕は言われた通りにそれを飲むとー

「ぐほおお!!」

なんかどこかで味わったことのあるとんでもない味が感じて僕は意識が遠退いた。なんか敵が慌てていたけど……欺いたと言うことかな??

「な、な?!なんで倒れた?!普通にあれが入ってる瓶なら倒れるのはあり得ん!」

「……あ、すまない。これは過去にいったときにとんでもない兵器として作れるのではないかと採集したやつだった」

「何を採取した!?!」

「とある地獄シチューととあるポイズンクッキング。どういう風に作られているのか気になり採取したやつだった」

一人のフードが思い出したように話すと、もう一人のフード姿があ

きれながら別の瓶を取り出して明久に無理矢理飲ましていた

「まあこれで・・・実験がどうなるか楽しみだ」

「・・・」

「だな」

そんな会話されているの知らない明久はいつも通り苦しんでいたのはここだけの話だ

正体と復讐

のび太 side

僕はボロボロになった体を鞭うちしながら、ゆっくりと目的の場所へと歩いていったが、違和感を感じた。先にいったはずの美子さん達がいると思っただが、居ないのか？

「ん？」

「.....」

「明久.....？」

「あああああああ！」

「っ！く！！」

僕はいきなり襲いかかってきた明久の攻撃を横へと転びすぐに起き上がった。ここまで、来たらもうわかるけど.....明久は操られるのだね

「そんな姑息な真似をするのは.....お前達しかいないよね.....！」
僕はある方向に左手にある銃を発砲すると、そいつらは出てきた。そして、一人の男が怪訝に問いかけてきた

「何故わかった？」

「先程から隠しきれない悪意を丸出しだからね.....お前達が明久を操ってるのでしょ？」

「ふ、それは違うな。私達が直接こいつには操っていない」

「何？っ！」

「あああああああ！」

明久の蹴りに僕は紙一重で下がりながら今の言葉の意味を聞いた。それはどういう事か全くわからないからね

「それはどういう事さ！」

「いいだろう。裏切り者に特別に教えてあげよう」

「僕は君たちに仲間になった覚えはないのだけどね！」

「簡単な話。貴様を操ったときは違い催眠というよりも.....そうだな.....奴の性格も行動もすべてあべこべにさせたのさ」
「はっ？」

「【ジキルハイド】……こいつは服用すると人柄がまるつきりあべこべになる錠剤だが、それはあくまでもその道具の特徴であった」

まさか!?

「これを改造して、奴はこちらに言うことを従うように尚且つ……完全に手加減なく相手を倒すように解放した」

「お前っ! ああ!」

「さあ、吉井明久! 目の前の敵を……裏切り者を潰せ!」

「倒す……今度こそ君を倒す!」

「なにも考えないで攻撃するなんて……まるでバーサーカーと言うべきなのかな……」

僕はゆっくりと立ちながら、そのフード姿の三人に……いや、二人に名前を言った

「本当に姑息な真似で自分達は手を汚さないで、まさに死の商人にふさわしいね。そしてお前達二人の正体は僕は知ってる……時空犯罪者のMr. キャッシュとDr. クロン……!」

僕は忌々しくその名前を呼ぶとそいつらはフードをとって笑っていた

「ふはははは、よく覚えていたな。野比のび太」

「名乗った覚えはないのだけどね……お前達はタイムパトロールに捕まったはずだ!」

「ふふふ、確かに私達は捕まったが……何とか脱走したのだよ!!」

「タイムパトロールから逃げてもすぐに捕まるはずだ……なのにどうやって捕まらず逃げていた!?! つと!」

僕は二人が捕まっていたはずなのに何故逃げ切れたのか不可解だと思い、明久の攻撃を交わしながら問い詰めていた

「時空乱流……それを利用して、奴等から逃れられたのさ! そして、私達はかってお前達に敗北を味わってどれ程苦痛を味わったと思う……!」

「時空乱流は確かに厄介だが……まさか!?!」

「そう! お前達のこれまでの歴史を全て調べた! そして、その中の方法であったひとつがこれだ!! そして、かってタイムパトロールにばれ

ないようにしたあの手をも利用してな！」

「そして、私達は必ず・・・貴様を復讐すると決めた！Dr. クロンの施設を無にして、尚且つ私達の素晴らしい計画を破壊した貴様を！」
復讐って・・・逆恨みもいいところだな・・・

「だが、私達はさまざまな方法で貴様を以下に苦しめるか考え抜いた。あの青い狸は未来に帰っていてたし、貴様の仲間も各々バラバラになっっていた！お陰で計画はすぐにはできなかったが・・・ある日いい計画を追い詰めたのさ！」

「貴様には恋人がいたことがわかりそれを利用した！そして、案の定、貴様は恋人に攻撃されて手負いになった！」

「そして、この22世紀よりも遙か未来へと貴様を連行して、苦しむように仲間を攻撃させたのだ！」

「・・・あのときの夜は二人が僕を攻撃してきた訳じゃないのに、随分偉そうだね」

「なんとでもいえ・・・！貴様らに味わされた屈辱をおもえばな!!」

「・・・そうか・・・なら、一つ質問だけど・・・君達は・・・また禁忌を犯したね？」

「！」

僕の言葉に彼らは何故ばれたと言う顔になっていたが、僕はあきれて物が言えなかった

「この廃墟状態の未来は・・・貴方達がしたのでしょ？」

「ふ・・・ふはははは!!私達がそれをできるとでも？」

「ああ失礼・・・手を下したわけではないけど間接的に仕組んだのは間違いないでしょ？」

「・・・なっ・・・一体お前はどこまで知っておる・・・?!」

「最後の一人の正体は名前出てこないけど・・・それでもまずは貴方達を倒す！」

「ふ、その前に――目の前の敵を忘れているのではないか？」

「え？いたあああ！」

Dr. クロンの言葉に一瞬、聞き返そうとすると横から飛びけりがこちらの体に直撃して思わず変な声だった

「っ、明久！」

「さつきからよくわからない会話していて・・・お陰で怒りがたまつたよ！サモン」

「そんな理由でっ!? (さすがに手負いの状態で戦うのは厳しいけど・・・やるしかない!)」

「おっと、野比のび太! 抵抗することを許さないぞ」

「何?・・・!!」

僕はMr. キャッシュユが突然ワケわからない台詞を呟いたので怪訝に振り返ると目を見開いて思わず動きを止めた

「美子さんに・・・島田、姫路、霧島さんに真理亜さんに留留璃?!」

「きしやああお！」

「うわっ、明久やめるんだ! 僕達が互い戦つてもっ！」

「僕はお前を倒す!!!」

「(抵抗すれば、美子さん達が危険か・・・)・・・参ったな・・・ここまでボロボロになって更に人質とられて抵抗するのも出来ないなんて・・・しかも明久は話を聞かなさそうだし・・・どうしたもんかな・・・」

目の前には操られたというよりも・・・何らかの影響で性格が変わっているように感じるし、死の商人の二人が美子さん達の命も握っているというわけか・・・おまけにもう一人はまだ正体わからず・・・

「抵抗すれば・・・美子さん達が危ないか・・・」

「行くぞ!!!」

「く! (なんとか助ける方法を見つけないと!!!)」

僕は左手にある銃を持ちながら、目の前の僕を助けようとしてくれた友を・・・今度こそ助ける事を決めて僕は構えた

「来るなら来い・・・! 絶対に止めてやる!」

???
side

のび太達がぶつかっているよそれに、ある人物達が回りをみて呟いて

いた

「どうやら、この時代みたいだね」

「そうみたいね・・・」

「目的の場所までは大分先みたいだけど大丈夫？」

「問題ありません！」

「私達もです！」

「はい！」

それを聞いた一人の人物がゆっくりと前へ歩いた

「なら・・・行こう!!!」

「」「おう!」「」

その人物達は目的の場所へとゆっくりと歩いていった

全てを終わらせるために・・・

慈悲なき衝突

あの日の夜……

僕はたった一人の超能力使いに負けた……

『がは……』

『……やはり貴様は利用価値がある』

『っあ……』

『これまでの貴様の記憶と魂を完全に封じ込めてやる。そして、痛みも感じれなくしてやる』

『何が……目的だ……っ！』

『教えて言うなら……復讐と絶望を味わせるためだ。そしてー』

奴は僕に手をかざしてー

『次に目覚めたときは貴様は私達の完全な兵隊となれ』

僕はそこで完全に意識が切れた

そして今……

「っっ！」

僕は上がらない右腕を押さえながら、ある人物を見ていた

「どうしたの？もう終わり？」

「明久……！」

「どうやら、野比のび太はいい実験体でいい結果を我々にもたらしてくれた」

「うむ」

明久の言葉に僕は睨みながら、痛む右腕を押さえていた。どうやら本当にタイムアップだったみたい……

「全く……今回ばかりはさすがに助かる望みも低く挑むとは……だけど……がはっ！」

うるさいと言わんばかりの明久の問答無用の攻撃されて、僕は近くの壁へ直撃した。反撃すれば、美子さん達が危ない……

「もう一撃」

「っかは!!」

明久の拳が顔面に直撃して、僕は地面にひれ伏していた。どうや

ら、先程から体が重いのは明久達との戦いとそれ以前の戦いで一気に痛みが強くなったのか動きが重たく感じる

「本当に参ったな・・・」

「ふはははは！どうだ？我らが味わったと屈辱の痛み、苦痛はこんなものではないぞ!!もつとやれ！」

「黙れ」

「！」「」

「僕が今、戦っているのに口挟むな」

明久はMr. キャッシュとDr. クロンに睨みながらドスの効いた発言をしていた。どうやら、明久が改造した薬を飲んだと言うのは何となく察した

「明久の性格、無情になってただひたすら狂暴性が出ているとなると、飲ましたのは【ジキルハイド】だね？」

「！」

「ビンゴか・・・。僕はね、これまでたくさん道具を使っていたことがあるから覚えているのさ。それは確か、人柄がまるつきりあべこべになる錠剤だったはず」

「・・・」

僕の推理に彼らは啞然としていたが、そんなの知ったことではない。恐らく、僕は彼らによってあれを飲んだ可能性は低いが・・・ひよつとして、秘密道具の上に更に何者かが僕の心を操ったというところか・・・？

「！がはっ!!」

思考に沈んでいると、明久のけりが僕のはらに直撃して、美子さん達がいる牢屋に思い切り直撃した

「あだだだだだ!!?!」

するとその牢屋に直撃するや否、僕の体に電気が走り思わず苦痛な声をあげた

「がはっ・・・何故・・・電気が・・・!?!」

「これは、人質の脱出防止用だ。仕掛けるのは普通だろ？」

「さあ、吉井明久！野比のび太を倒せ！」

「つくそ……」

僕はよろよろになりながら、右腕を押さえて立ち上がっていた。正直、もう右腕は上がらないし武器を持つとうとすると痛みが走る……

「ここまでか……!?」

「のび太君……?」

「え……」

僕は声をした方向に振り向くと、気絶していた美子さんがまだ意識覚醒してないのかゆっくりと起き上がっていた

美子 s i d e

私達はあのフード姿の人達に囚われてそこから記憶がないのだけど目を覚ましたら、手足はきっちり動かないようにされてるし、瑞希達も横で寝ていた

「(一体どうなって……)」

「あだだだだだだ!!」

「(この声は……)」

私はその声した方向に振り向くと、片膝は地面に僣っていて右腕を押さえながらよろよろと立ち上がる人を見て私は思わず名前を呟いた

「のび太君……?」

「え……」

ボロボロになっていて、尚且つやっこの思いで立ち上がっている彼は私の大切な人ののび太君だった……

「よかった……無事に生きていたのね」

「まあね……っ!」

すると、のび太君が急に前をみてから横へと思い切りとんで逃げた。一体何がーと思っていると、その攻撃した人物をみて私は大声をあげた

「っあああ!!」

「な!?よ、吉井君?!」

のび太君を攻撃したのは吉井君だったけど……どこか様子がおかしい

「ふはははは！いいぞ！我らの復讐のためにそいつをもっと苦しめろ！」

「全てを無にしたそいつをこらしめろ！」

私は別の方から聞こえたこえをふりむくと、メガネをかけたお爺さんと身長が高く細い男がそこにいた。その言葉をきいて、私は確信した！のび太君達のこういう状況はこの人達のせいね！

そして、のび太君が攻撃しないのは吉井君が操られているから？いえ、それならもう少し対応してるはず

「それは私達が人質としてとられているからよ」

「！留留璃！」

「……奴等はそのなにしたかった戦闘が強い訳ではないから隙があれば倒せるはずよ……」

「うっ……まさか、私達が足手纏いになるなんてね……」

「ルナさん、美波、瑞希、翔子も目が覚めたのね」

私は目を覚ましたメンバーの名前をいうと真理亜さんがきつい目で先程の人たちを見つめていた

「私は少し前に……ですが、今にも怒りが爆発しそうです。のび太さんが反撃しないのは私達のせいです」

「そんな……」

「もしも反撃すれば、私達に電気を走らせて苦しめると……」

「な!?!あいつら卑怯じゃない!?!」

そんな……

「……なんとか今は我慢しないと行けません……のび太さんも私達も必ずあの人たちを倒せる手段が見つかるはずですよ！」

「そうね……」

私は今戦っている二人を見つめながら必ずチャンスが来ると今は我慢していた

ドラえもん side

「うおりやああ!!うおやああ!!」

僕らは閉じ込められた牢屋で現在、ジャイアンと雄二がひたすら殴ったりしてるのだけドー

「どああああ?!」

「雄二、剛田!」

「．．．まさに見えない壁に閉じ込められてる．．．」

先から出れそうで出れない壁にはじき飛ばされていた

「．．．．．どう?」

「超能力ではダメみたいだ」

「うむ。たのみの召喚獣は使えぬし、明久は戻ってこない」

「．．．．あれを破壊する方法は爆弾とかか?」

爆弾か．．．．秘密道具は取られたし、どう頑張っても破壊できない．．．

「．．．．方法は一つだけある」

「雄二!」

「．．．．禁断の手だがな．．．ドラえもん、耳貸せ」

「ん?ふんふん．．．．．え?!」

僕は今雄二から聞いた提案に驚き、目を見開いて思わず変な声だした

「そ、それは．．．不味いのでは?」

「背に腹は代えられないだろ．．．!剛田!」

「なんだよ．．．雄二」

先から上手いこといかなくってイライラしてるのがまるわかりだが、そんなの関係ない!

「剛田、歌を歌ってくれ!」

「え?」

「!!」

「?」

「歌を？」

雄二の提案に秀吉君と僕は真っ青になり、康太君とルカは??となっていた。そんな中、ジャイアンが怪訝に聞いてきた

「何で歌を歌わないといけないんだよ？」

「ほ、ほら！気分転換にどう？もしかしたら、その歌で敵が来て牢屋を一回開けて聞きに来るかもしれないし！」

「なぜ？」

「お前の歌があまりにもいいからだろ（あるいはとんでもない音痴でここがつぶれるかもしれないがな）」

「よ、聞きたいよ！」

「へへへへ、仕方ねえな。せつかくのリクエストを答えないと歌手失格だもんな」

ジャイアンがゆっくりと起き上がって、息を吸い始めた。さあいいよ、あの恐怖の歌が来る！

♪—————!!!

「「「?!」」」

その瞬間、僕らの意識はぶっ飛んだ……—

???
side

ある人物はゆっくりと気配を隠しながら、回りをみていた

「一体どこにいるんだろ——」

「—————!!!」

「?!?!、この歌は!!!」

「男は震えるからだをむち打ちしながらその音源の方へと駆けつけた——」

救出

ドラえもん side

僕はジャイアンの苦痛になるほど……いや、命がとられそうなほどの歌声を必死に耐えていた。忍耐のない秀吉君と康太君は屍のように倒れていて、雄二はギリギリ耐えていた。そして、予想外にもルカはなぜか耐えていた！

「おーれーはーはー♪」

「(ドラえもん、ドラえもん)」

「(なに……?)」

「(ジャイアンってひよつとして……アルと同じタイプ?)」

「(うん。でも何で耐えているの?)」

「(慣れているから……かな?これも作戦の一貫なんだよね?)」

「(うん)」

これで向こうが動いてきてそこをついて攻撃をするのが作戦の point だけだー

「(早く解放されたい……)」

ビシッ……

どこから亀裂が走った音が聞こえた。僕はその音が聞こえたが当の本人や回りは気づいてない

「ジャイアン、ストッパー！」

「あ?なんでだ……は!?!」

ービシッビシッビシッビシッ!!!

ジャイアンは機嫌悪く僕をみていたが亀裂の走る音が聞こえたのかその音が徐々に聞こえていき……

ーバリン!!!

その音がした源は、僕らの脱出防止の壁が割れたのだ

「(……ええええ?!?!)」

ジャイアンを含めた皆が驚いていた。そして、僕は驚きながらも何故割れたのかは何となくわかってしまった

「なんで割れたんだ!?!」

「知るか!?!と、とにかくせつかくの脱出するチャンスが出来たのだから出るぞ!ムツツリーニ、秀吉もおきてるな!」

「うむ(何てひどい歌なのじゃ・・・だがそれを本人に言うのはさすがに怖いのだ)」

「(ビシツ)!」

「よし、出よう!」

僕は閉じ込められた牢屋で出ると、これからの行動はどうすると話していた。少なくとも、美子ちゃん達を助けるの第一優先として、僕の道具は奪われたしみんなのも奪われたから・・・

「ここにいた!!」

「「「」」」

「本当に探したよ・・・」

「いやいや、・・・なんで・・・ここにいるの・・・?」

「何でここにいるかだって?そんなの決まっているだろう?」

その人物は一息ついて大きな声で僕らに聞こえるように声をあげた

「友達を助けるのに理由がいる!」

その人物は笑顔で僕らの方へと歩いていった

「どうやら僕たちの反撃の時間も目の前だと言うことが確かだね。待っててね、明久君」

のび太side

僕は今、身の危険を感じて横へと飛び込むと明久の攻撃した場所に軽く傷ができていたが、僕はそれみて冷や汗をかいた

「遠慮なくなつた分、攻撃が狂暴性になつてるし、美子さんが人質とられてれる上に反撃すれば・・・命握られてるのも同然」

「のおおびいいいたあああ!!」

「くっ!・・・このままでは美子さん達があいつ等に何かされるか分かつたもんじやないし、何とか反撃したいが・・・」

「ふふふふ・・・」

あんな二人の体のどこかで美子さん達の命を握っていると可能性が高い。方法としては、明久の攻撃を交わしながら後ろの二人に直撃させて何処かに解除する方法があるはず

「だけど・・・」

「・・・」

「けどもう右腕が上がるのも少しきつくなってきたかな・・・。ごめんね・・・明久を救えそうにないや」

「うがあああ！」

明久は叫びながら木刀を勢いよく突き抜くように攻撃してきた。対する僕はもう動けないから、最後まで目はそらさずに明久の攻撃を待っていた

「昔のあなたはそんなに直ぐには諦めなかったわ・・・立ちなさい！のび太君!!」

「！」

僕はその声を聞いて、明久の振り下ろす木刀の方をみて・・・

「パーパシツ!!」

「「なっ!?!」」

「・・・冗談きついよ。いくらなんでも」

「ふふふ、昔の・・・あの頃のあなたの方がまだ諦め悪かったし、真っ直ぐにいつてたのに・・・少しみない間にそんな人間になったの?」

「留瑠璃・・・」

僕はいつの間にかそばにいた留瑠璃に声をかけると留瑠璃は笑っていた。そして、Mr. キャッシュとDr. クロンはその様子に大慌てになっっていた

「な?!い、いつの間に出ている!?!」

「ええい!ならば、もう一度捕まえて人質に!やれ、吉井明久!」

明久は先よりも力を入れていた。僕は白刃取りをしながら必死に耐えていたが、このままでは――

「――様を――」

「「ん?」」

「苦しめたのはお前たちか!!」

「ほぎやああああ?!」

明久の背後に何か聞きなれた声が聞こえるのと同時に、明久の：いや、男の大切なシンボルを思い切り蹴りこまれると、操られた明久は跳び跳ねて苦しんでいた

「一体誰が・・・っつ」

僕はボロボロになった体が限界だったのか前の方へ倒れ込みそうになるとー

ポスツー

何かが僕の頭に直撃した

「え・・・」

「・・・お帰り・・・のび太君・・・」

「美子さん・・・」

倒れそうになった僕を抱き締めたのは、僕が傷つけてしまつて酷いことをした筈なのに、それでも抱き締めてくれたのは：美子さんだった

「うぐああああ!!」

明久が苦しむ声が聞こえたけど、僕はもう反撃するための力は今はなく、何とか立とうとすると美子さんが優しく止めた

「大丈夫よ・・・。ね、留瑠璃」

「そうね。のび太君：貴方は漸く元のあなたに戻り、最後まで耐えてくれたのね」

「美子さん、留瑠璃・・・」

「勿論・・・私達の大切な仲間・・・友達が来てくれたから」

「友達が・・・?」

僕は美子さんの言葉と共に僕の前に果敢に守ろうとしながら立っていたのは・・・

「お兄様を・・・お姉さまを苦しめたのはお前たちか!そして、何故豚が操られてるのか知りませんが、どのみち今は・・・美春の敵です!!」

「清水さん!?!」

「!・・・お兄様!?!美春は・・・美春は会いたかったです!!美春セン

サーでお兄様やお姉さまが何かあったと思い、ずつーと探してみました!!」

「ぐふ!?」

僕の方へと清水さんは飛び込んできて、僕は思わず苦痛な声を挙げながらも、疑問に思ったことを聞いた

「な、何故清水さんがここに?」

「美春だけではございませぬ!」

「え?」

その言葉を聞いて、驚くと共にD r. クロンがわめいていた

「何をしてる!?早く立たないか!?野比のび太を潰さないか!」

「いいえ……もうこの不要な戦いは終わりです」

「貴方達はここで終わりです……」

「良くも……操ってくれたわね」

「許しません」

「……(バチバチ)」

「な!?き、貴様ら先まで牢屋にいたはずだ!」

D r. クロンは真っ青になりながら指を指した人物は……牢屋に閉じ込められていた筈の真理亜、ルナさん、姫路、島田、霧島さんが立っていた

「どうやってでた!?それに手足も頑丈にしていたはず」

「それは簡単。私達が助けたから」

「なに?!誰だ」

「君達は……!」

「久しぶりね、のび太さん!」

「ドラミちゃん!!」

そこにいたのはドラえもんの妹でもあるドラミちゃんがウインクした後にD r. クロンに問い詰めていた

「貴方はここで降参することを勧めるわ」

「つつ……二度も……二度も阻むのか!!私の夢を!!」

D r クロンは懐で銃を取り出そうとしているのか怒りながら出そうとすると……

「貴方のは夢ではありません」

「が!?わ、私の銃が!」

「留瑠璃・・・?」

留瑠璃が指をDrクロンにむけてビームを放したのだ。すると、Drクロンは激怒しながら怒鳴っていた

「貴様!!産みの親を攻撃するのか!!」

「産みの親?私と貴方は血が繋がっていないわ」

「僕を・・・忘れるなあ!!」

「吉井さん・・・ごめんなさい」

「え?」

まだ操られていた明久がこちらへ突進しようとする、明久の前に二人が立ちふさがり・・・

「はあああ!!」

「が・・・は・・・(ボタン)」

「今度は私達もたすくれましたよ」

「遅くなつてごめんなさい」

明久をダウンさせたのは真理亜さんの妹の里緒菜さんと冬花さんだった。それを見て、Drクロンは振りと悟ったのか項垂れるように地面にひれ伏した

「わ、私の夢が・・・」

「時空犯罪者Drクロン!逮捕です!」

ドラミちゃんがなんかの秘密道具でDrクロンを拘束した。そして、僕は気づいた

「(Mr. キャッシュがいない!どこに・・・!)」

「のび太君?!」

「お兄様!その前に傷の手当てを!」

僕はもう一人の時空犯罪者がいないことに気づき、周りを見るとあいつはさらに奥の方へと逃げていた

「(あそこに!) あきひさをたのむね!」

「つちよ!?!お兄様!」

「のび太君!」

それを見た僕は美子さん達の制止を聞かずに走った

元と言えば僕の不手際で始まったんだ！だから・・・僕がけじめをつけないと!!

その一心で僕はMr. キャッシュを追いかけた

援軍

美子 side

Mr. キャツシユが逃げた場所へとのび太君が追跡して私達も追いかけてようと思つたが、吉井くんが呻きながら起き上がった

「うぐ……ここは……?」

「漸く起きた? 明久」

すると、吉井くんが起きたタイミングで声が来たのでその方向を見ると私達全員が驚いた

「スネ夫と静香さん!」

「貴方は安静していたはずなのに……それに源さんは確か海外にいたはずなのに……」

「その……お姉様達がスネ夫さんの件で言いたい気持ちもわかりますが、私や里緒菜も最初は止めたのです」

「だけど、スネ夫さんは嫌な予感がするからどうしてもいきいたいと言うのとスネ夫さんがドラミさんに提案したのです」

「お兄ちゃんを助けにいくなら、スネ夫さんだけでは不安だから里緒菜さんと冬花さんにスネ夫さんの護衛として一緒にね。そして、清水さんは……その……」

ああ、なるほど。どういうわけか、清水さんも遭遇というかのび太君の家を知って侵入したと言うこと?

「正直、私も驚いたわ。のび太さんが行方不明になっていたことに……だけど、もつと驚いたことも今はあるわ」

「……」

「留瑠璃? どうしたの?」

私は留瑠璃にそういうと留瑠璃は驚いた素振りを見てから私たちに言った

「何でもないわ。そ、その前にドラミさん? だったかな。何でこの時代?」

「虫知らせ機でお兄ちゃん達が何かあったと思つてのび太さんの時代にいったら驚いたわ。スネ夫さんが負傷してたから、理由を聞いて私

は直ぐにTPに連絡したの」

「じゃあ、TPはもうすぐ?！」

「それが・・・残念ながらタイムパトロールはこの時代にこれないわ」
「なんで・・・っ・・・まさか!？」

私はある言葉を思い出した。そういえば、ここに来る前にドラえもんさんが教えてくれたのがあったわね

時空乱流

つまり、タイムパトロールは不安定な時空では動けない状態ってこと?なら、ドラミさんはどうやって・・・

「そこは・・・スネ夫さんが取っていてくれた設定図のお陰で、一時的だけど、時空乱流対策ができたの。で、私と清水さんと里緒菜さんと冬花さんでいくつもりだったのだけど・・・スネ夫さんが提案したの」

「今回の事件では僕たちだけでは厳しいと思ったの。そこで、静香ちゃんを呼んで一緒に来たわけ」

「私や里緒菜お姉さままでは真理亜さんお姉さまみたいに回転はよくないですし、スネ夫さんは怪我でそこまで頭が回らない可能性があるの・・・」

「ドラミさんの秘密道具で静香さんを呼んだのです」

「え、でも・・・静香さんは今海外で学校なの?」

真理亜さんの疑問はもつともであるが、静香さんが苦笑いしながら説明していた

「確かに私の住所とかはスネ夫さん達も知らないけど・・・ある秘密道具でこちらにこれたの」

「」「ある秘密道具?」「」

「・・・はっ!そ、そんなことより皆!のび太を追いかけなくっていいの!？」

「あ!!し、しまった!」

「それは大丈夫よ。・・・のび太さんにとって頼りになる二人が共に走っていったし、坂本さん達はタイムパトロールがこちらにはいれる方法を今探してるよ」

「……あの、ひとつ提案があります！」

「冬花？」

「その……のび太さんと共に追いかけるメンバーとここに残るメンバーで分けませんか!？」

冬花さんが緊張した感じで手をあげていた。一体何故と思いがながら私達は聞いた

「今現在、人数は確かに大勢いますが……全員が全員万全と言うわけではないですし、まだ傷とか……」

「確かに……それにこいつを目を離せばまた逃げる可能性もありますからね」

「イダダダ!?年より優しくしないか!？」

冬花さんの提案に美春さんは頷きながら、D r. クロンの肩を思い切り強く潰しそうに触っていた

「年寄り?……そんな方どこにいますか?」

「な!？」

「私こう見えてもかなり切れてますのですよ?お兄様やお姉様に悲しい思いをさせて尚且つ……吉井明久という豚野郎を含む私の大切な学校の仲間を……!」

「イダダダ!肩が!肩がもげるう!!!」

「……拷問するなら私も残る(バチバチ)」

「いいわね。うちもこいつらにはどちらか怒らないときが済まなかったから(ポキポキ)」

「おじいさんでもやっていいこととやってはいけない事がありますよ!」

美春が笑顔で笑っているながらも目の方はかなり怒っているのが分かる……。そして、それに続く翔子、美波が黒いオーラだしながら囲んでいた。瑞希はプンプンと怒っていた

「私と冬花が島田さん達ともにこの計画の理由を聞いたときますので……お姉様と美子さんとドラミさんと……ルナさんと静香さんとスネ夫さんはお先にいつててください。あと吉井さんももう一人の方も」

「里緒菜さん・・・」

「スネ夫さん・・・無茶しすぎないてくださいね。まだ怪我回復してないから」

「気を付けるよ」

「皆！のび太さんの行方はこっち！【タケコプター】をつかつて！」

私達はドラミさんに渡されたタケコプターで、頭をつけると私達の中から空に浮かんだ

「ええ!?空浮かんでる!?なんか、感動！」

「気持ち分かるけど・・・今は急ぎましょう」

「は!!そ、そうだ!いそごう!」

私達はのび太くんの行っただと思われる道へと飛んでいった。のび太君・・・また無茶してなかったらいいのだけど・・・

のび太side

僕は現在ボロボロの体に鞭を打ちながらMrキヤツシュを追いかけていたが、さすがにこれまでの戦いのダメージが一気に来ていた

「(あの日の夜からきちんとした治療はしてないから右腕が段々感覚がなくなってきた・・・。恐らく、痛覚による痛みによってやられたね・・・)」

「こんなところにいたのか」

「誰?!・・・!」

僕は今聞こえた声に後ろを振り向くとそこにいたのは・・・

「探したよ・・・のび太君」

「全く・・・こんなにボロボロになりやがって」

「ここにいたんだね」

「ドラえもん・・・ジャイアン、ルカ」

「決着をつけに行くんだろ?俺はお前らが酷いことをさせた敵をぶちのめしたいのめドラえもんは時空犯罪を止める。で、のび太はすべてを終わらせるために追いかけているなら・・・俺たち3人で最後の敵を倒さないか?」

「・・・それでも・・・」

僕はついさきほどまでたくさんの仲間を・・・恋人を泣かしたのだ。そんなやつが今さら助けを求めてもいいのだろうか？

「今は難しいことを考えるな。・・・俺達は仲間だ・・・だから最期の敵をうつ。それだけでいいだろ？」

「・・・うん」

「敵は目の前！いこう!!」

「おう!!」

僕たちは隠し扉と思われる扉へと入り込んだ・・・

さあ・・・

今度こそ終わらそう・・・

・・・すべてを!!

敵意と迫る時間

最期の扉を潜り抜けた僕らはこの事を大きくなってしまった犯人の情報を話し合っていた

「何!? 今回の犯人はDrクロンとキャツシュだと!？」

「声がでかいよ。でも、今回の犯人はかなりの悪質だね」

僕がもたらした情報にジャイアンは心底驚いた声を上げ、中の様子を探りながらドラえもんは、注意していた

「あ、すまん。しかし・・・あいつらは捕まっていたはずだろ!？」

「そう。そこは僕も気になっていた」

「・・・何者かが手引きするにしては可笑しいよね・・・。メリットが無さすぎるし、考えられるとしたら・・・ん？」

僕は前になにか違和感を感じて見るとジャイアン達も僕が黙った理由がなにか気づいたのか前を見つめていた

「あれは・・・! ドラえもんの秘密道具がはいってる四次元ポケット!？」

僕らは目の前にあるのを急いで回収すると、それは間違いなくドラえもんの秘密道具がある四次元ポケットだった

「あれ? 皆の召喚獣用の道具は・・・あった!」

「おお! 俺の愛用していた召喚獣だー!」

「どうやら、他の皆のも・・・あれ?」

「どうしたの、のび太君」

「いや、恐らく今手元にはないのはムツツリーニの召喚獣と姫路のがない・・・まさか!」

僕はそこまで言うとなにか嫌な予感が来たので急いで、ジャイアンたちと共に向かうとMrキャツシュがそこにいた

「こうなればー! Mrキャツシュ、そこまでだ!!」ーなに!？」

Mrキャツシュが何かしようと思つた僕は呼び掛けると、向こうは驚いて振り向いていた

「もうお前に逃げ場はない! 諦めて投降するんだ!」

「ええい! 何度も邪魔しおつて・・・何故じやまをする!」

「あんたは時空犯罪者だ! 今回の事件はこれまでよりもとんでもなく

大きく起こしたのだからな！」

「今ここで投降すれば、僕らと戦わなくつてすむよ！降参を勧める！」

「つふふふ、野比のび太！貴様は何故操られたのか覚えてるか」

「……僕の記憶が正しければ……お前は僕に催眠グラスでも仕掛けたはず」

たしか僕の記憶がそうだったと思うが……何故か頭がぼやけている

「ふふふ、実は違うんだよな。貴様が何故操られたのかはこれを見たら分かるはずだ」

「！それは……【魂吹き込み銃】と……【メモリディスク】!？」

「そう！そして、私はこの世界にある願い事をして書き替えたのさ」

「書き換えた？どういふことだ!？」

キャツシユの言葉にドラえもんは怒りながら聞くとキャツシユは勝ち誇ったかのような顔をした

「そう！【もしもボックス】でこの崩壊した世界で生きていた貴様の記憶を抜き取ってコピーさせてもらった！」

「何？」

「勿論。コピー元に記憶はすべて返却した。そして、コピーした記憶を過去に生きていた貴様を捕まえて記憶にのせた！そして、それだけでは貴様は反抗する恐れがあるから、改装した【魂吹き込み】で貴様の善の心を抜いて憎悪を吹き込ませた！」

「つまり……今僕の少しは善が残っていたが、あとはそちらがつかんでいるといわけか……」

「良くできた計画だろ？そして、貴様の善の心はこちらが握っているの……この世界はもしもボックスで、作られた世界ではない。真正銘君が抱いた遥か先の絶望の未来の果てだ」

つまり……

① あいつは何らかの方法で平行世界の僕の記憶をコピーしていた

② 敵との激闘で破れた僕を捕まえて、遥か先……つまり、その崩壊した未来へと連れていかれた

③ コピーした記憶を僕に乗せて、改造した吹き込み銃で僕の善を奪

い、悪のを吹き込んだ

「だけど、それなら何故僕は美子さん達の記憶は思い出せなかった？」
「それもまた簡単な仕組みでね……。この改造した忘れ草で最初にすべてを忘れさせたのさ」

「・・・細かい話はよくわからないが・・・要するにお前はのび太をひどい目に会わせたのは確実だっただことだ」

「そうだね」

「一つ・・・お前達は何か勘違いしてないか？」

「なに？」

キヤツシユは嘲笑うように僕らに指差していた

「そもそも野比のび太を倒したのは私達ではない」

「何!?!じゃあ一体・・・秘密道具で超能力を鍛えたのではないのか!?!」

「ふ・・・そんなのではない。苦心したぞ・・・すべてを破壊するため
に手に入れた力をな!!」

「!!?! (ゾクツ)!!」

僕らはとてつもない寒気が感じとり、回りを警戒した。この感覚は
あの日の夜と同じだ・・・

「さあ行け!!我が最強の僕!」

「・・・僕!?!一体どこに・・・!!」

「二人とも上だ!!」

「・・・仕留める」

「お前はーサモン!?!」

キヤツシユの合図と共にジャイアンが感じ取った寒気がわかり上
を見上げるとフード姿が飛んでこちらに向かっていた

これは不味いと思い僕らも臨戦態勢へと入った・・・

雄二 side

俺は目の前に積み重なるロボットを背に目の前の機械を何とか解
除しようとして必死にパソコンを打っていた

「ムツツリーニ、召喚獣がなくなっても、お前の足ならいざというときに

対応できるな?」

「・・・無論」

「秀吉は俺とともにこれを解除するぞ! ああもう、なんでこんな複雑なことをしないといけないんだよ!」

「ドラミからの話じゃと、これを解除すればタイムパトロールもこれるらしいが・・・雄二、これを食べる!」

「あむ! くそ、未来の記号とか複雑すぎてきついぞ!」

俺は秀吉から渡されたパンを急いで口のなかに入れて作業をしていた。速くこいつを解除しないと後々大変だからな・・・

「・・・こちらのは解除できたがあとどれくらいかかる?」

「ワシのはまだ掛かるが・・・雄二は?」

「わからないが、とにかく急ぐぞ!」

「おう!」

俺達は再び作業を急ぎながら明久達が大丈夫か心配になってきた。そして・・・三上とのび太の仲もこの事件終えたら拗れないか心配だな・・・

明かされた最後の名

美子 side

私達……真理亜さん、私、スネ夫さん、ルナさんと留瑠璃、そして……吉井君とドラミさんとで急いでのび太くん達のいるところへ向かっていると、途中でルカさんに会った

「ルカ!!大丈夫なの?」

「平気だよ……。そちらの方は?」

「初めまして、お兄ちゃん……。ドラえもんがお世話になっています妹のドラミと申します」

「私の方は久しぶりね。ルカさん」

「もしかして……。静香さん!?そして、妹!?ドラえもんには妹がいたなんて驚いたな……」

「それより、ルカはなんでこんなところに?」

「ああ、実は証拠を握ってね」

「「「証拠を?」」」」

すると、ルカはたくさんの資料を取り出して私たちに見せてくれた。この資料を見たときに私たち全員が驚愕していた

「これは……。時空犯罪だけではなく違法をたくさんしてる……。ルカさん、これは何処で手に入れたの!」

「実は、みんなを探しているときに隠し扉みたいな資料室があって、そこに入ってみるとそれがあつたんだ」

「ありがとう!これで、犯人の罪も確実性として逃げれなくなるわ!」

ルカさんが見せた資料はドラミさん曰く、違法の研究であつてこれはまさに生命の論理を外していた研究だと

「もう少しで、のび太さんのいる場所よ!皆準備はいい?」

「「「(うん)！」」」」

ドラミさんの確認に私達は頷いて中に入るとなにやらたくさんの瓶が破損していた。それをみて、気味が悪く感じて先を歩いたら……

「「「「！」「」」」」

私達はその音を聴き急いで走ると、目の前に疑う光景が……

「……………」

「……………え、のび太君とドラえもんさん……………」

私の目の前の光景は壁に吹っ飛ばされてぐったりしてるのか、身動きしないのび太君と地面にひれ伏しているドラえもんさん……………そして……………

「うおおおおお!!!」

「……………オシマイダ」

「がっ……………?!」

バゴオオオオン

「武君!!!」

まだ明かされていないフード姿が剛田君をぶっ飛ばしていた。そんな剛田君をやられるのを見た真理亜さんは悲鳴あげながら急いで駆けつけた

「っ、ジャイアン!のび太、ドラえもん!」

「のび太さん、武さん、ドラちゃん!」

「スネ夫さん達は武さんの治療を!吉井さんと留瑠璃さんは私と共にお兄ちゃんを!三上さんはのび太さんをお願い!」【お医者さんバツグ】×3!」

「行かせない……………」

フード姿がこちらになにかをしようとすると……………何処からか攻撃が飛んできた

「!」

「友達をやらせないよ!」

「あなたの相手は私達です!」

「エステル……………厄介なのが来たな」

「ルカ達だけではないよ」

「何?っ!」

「……………あの日の夜はよくもやってくれたな……………」

「貴様・・・」

最後のフード姿を立ちふさがってくれたのは、ルカさんとルナさんとスネ夫さんだった。でも、スネ夫さんはまだ体の状態はあまりよくないのじゃ・・・

「大丈夫だよ。まずは、時間を稼いでここは任せて」

「・・・うん」

私達はスネ夫さんにあとを任せて、のび太君の方へと駆け寄った。辛うじて生きているのはよかった・・・私達はそれぞれを支えながら三人を同じ場所へと連れていき、お医者さんバッグで治療をしていた「のび太君の右腕は・・・骨折っ?!体のあちらこちらも・・・打撲?!そんな状態で戦っていたなんて・・・」

「武さんののも不味いわ。今は軽く左のを包帯巻いているけど・・・ドラちゃんも?」

「お兄ちゃんは、電気ショックでやられた感じみたいでミニドラが内部修理してくれてるわ」

あの三人が・・・なにもできないで負けるなんて・・・

「っあ・・・美子・・・さ・・・ん」

「!のび太君!目を覚ましたのね!」

「うん・・・美子さん達、今すぐに皆を連れてここを離れて・・・」

「何で!?またあなたを見捨てると言うの!?そんなのするくらいなら私にはあなたのそばにいるわ!」

「・・・僕らが相手したやつは予想以上の化け物だった・・・なにもできなかった・・・」

あののび太君が・・・かってないほど絶望をだいていたのがわかる・・・これは一体・・・何があったの?

「ここで一体何があったの!?あなた達ほどの人間がなにもできないなんて・・・相手は!?!」

「・・・あれは・・・っっ」

「無理に動かないで!あれはいつたいたいなんなの!」

「あれは・・・未来でも禁止になっていた・・・ぐっ・・・」

未来でも禁止になっていた!?それはどうということ!?

「あれは……かつて僕もしてしまったことのある未遂で終わった罪……」

「罪？」

「ドラえもんが防いでくれたらよかったものの、あれはー」

「うわっ！（きやつ！）」

「！ルカさん、ルナさん!!」

のび太君の言葉を聞こうとすると、ルカさんとルナさんが近くに飛ばされてわたしはそちらの方に意識を向けていた。そして、別の方向を見ると……

「スネ夫さん！」

「……くっ……」

「っっ……！のび太君、あなた達をあそこまでやった最後の敵の名前を教えて！」

「あいつに……名前なんてない」

「……え」

名前がない……？それは一体……

「あいつの正体は……22世紀でもっとも危険でもっとも最悪の秘密道具……その秘密道具の名は……」

「僕とのび太君だけが知っている最悪の秘密道具……」

「俺もそれを聞いて震えた……。あんなのが未来に発明されていたなんて開発したやつアホだろ……。いで……」

「武君、今は治療を！」

「大丈夫だ……そしてあれの名は……」

倒れていたドラえもんさんも剛田君もそれぞれに支えられながら、相手の姿をみていた。そして、3人は口を揃えてー

「史上最悪の秘密道具……【人間製造機】……」

3人の言葉が重くのし掛かっていた……

復讐と悪夢

のび太side

美子さん達は僕らの言葉を聞いて聞き返すように問いかけた

「人間……製造機？」

「うん……。かつて、あれは小学校の時に目の前にあった機械が人間を作れることに興味をもってドラえもんの内緒で作ったことがあった」

「人間を……つくる!？」

「そういえば……あのときあったわね」

「そう。そして……ドラえもんから聞いたときに衝撃の事実がもたらされた。あれは……人としてではない」

僕がそこまで話すと明久が疑問をもって、僕らにしつもんしていた「人としてではないって……どういうこと？」

「あの機械で作りに出される人間はミュータント(突然変異)であり、念力やテレパシーなどの強力な超能力を持っているんだ。つまり、あれは……その気になれば人を殺せる」

「つちよつと待って!?! 22世紀はなんでそんなの販売していたのさ!?!」

「わからない。だけど……」

「だけど、あれは本当に廃棄されたはずだ! あれは……僕らの時代できちんと破壊されたはず! 会社もなくなっていた!!」

僕の言葉に引き継ぐようにドラえもんもいていた。すると、僕はとてつもない痛みが体を感じていた

「っあ……」

「の、のび太君?」

「っああああおおああああああ!!」

「の……のび太君!?! どうしたの!?! ねえ、のび太君!?!」

美子さんの問いに答えたいが、僕は完全に体に痛みが走り声ならぬ叫びになっていた。どうやら、これは……!?!

「フフ……はははははは!! どうやらついに切れたみたいだな!!」

「っ！あなたがのび太君に何かしたのね!？」

「人聞き悪いことを言わないでほしいな。私は彼をとらえたときに・・・ただ単に治療していたのさ」

「嘘を言わないで！なら、この苦しみはなに?!」

「つつつつ!!がつ・・・(なんでこのタイミングで!!いたい!!いたい!)」
「知りたいのなら、君も同じ目をあえばわかるのではないのかね?・・・っ!」

僕はキャツシユに向かって、銃を左で何とか威嚇するように射つとキャツシユは真つ青になりながら引いていた

「な、なぜ動ける!?!確かにダメージは途方もないはずだ」

「うるさい・・・っう!」

「やはり痩せ我慢か！それはそうだろう！貴様の与えた薬が切れたのだからな！」

「「「「薬!」「」」」」

僕以外の全員が薬と言うキーワードに驚いていた。そして美子さんはキャツシユを睨みながら発した

「貴方は私の大切な人に・・・のび太君に薬を与えたってどういうことよ!」

「美子さん!・・・大丈夫だよ」

「のび太君・・・」

「みんなもよく聞いて。あいつのいったことは戯れ言だからね？大したことはないから・・・」

「でも明らかに・・・」

「確かに僕はあるにつに何かをされたけど薬ではないよ」

「じゃあ、何なのさ?」

「・・・(嘘は言えないか・・・)ドラえもんなら分かるじゃないかな?・・・へソリンスタンド」

「!!」

僕の言葉にドラえもんは驚いたように僕を見ていた。その意図を気づいた僕は頷いていた

「ドラえもん、へソリンスタンドってのは?」

「実はこれも後に22世紀で禁止道具に指定されたのだけど・・・ヘソ
リンスタンドは一言で言えば・・・毒」

「毒!」

「ヘソクリスタンドのガスが注入されると肉体や精神の痛みを感じな
くなる。どんな怪我をしても痛みをまったく感じず、また不快なこと
も平気なので、常に楽天的で幸福感に浸ることができる」

「えーと?」

「要するにあくまで痛みをなくすだけの強力な麻酔薬のようなもので
あり、怪我をしなくなるわけではないので危険なことをすると命にか
かわる危険な代物さ」

「つまり・・・のび太君の体にそんなことをしていということ!」

僕を抱き抱えながら美子さんはMr. キャツシユに激怒していた。
こんな激怒している美子さんは初めてかもしれない

「ふん。最初の操られた人形が偉そうに・・・む?!」

「・・・僕のことを罵るのはまだいい・・・けれど・・・」

キャツシユは何かを言おうとする前に僕は左手にある銃を発砲す
ると、あいつは少し焦った顔をしていた

「けれど・・・誰の許可で仲間や恋人を侮辱していいといった!!」

「(っ?!まだこの期に及んで目が死んでいないだど!?) ええい! やれ
!」

「・・・シネ」

「・・・?・・・っ!」

「え?の、のび太君!」

ミュータンが手をかざしているの方向を見て僕は本能的に美子さ
んの前に立ち抱き抱え留と彼女がテンパる声が聞こえたがー

「がっ?!」

「っ?!」

ミュータンの攻撃に僕の背中に直撃すると、美子さんは息を飲むの
が聞こえた。ごめん・・・少し窮屈かもしれないけど許してね

「っち、邪魔されたか・・・」

「ぐっ・・・美子さん・・・怪我はない・・・?」

「私は大丈夫よ!?!のび太君が・・・」

「つつ・・・」

「のび太君!!」

ミュータンの攻撃により崩れそうな僕に美子さんは僕を悲鳴あげながら抱えていた

「ごめん・・・流石にもう動くのもう厳しいかも・・・」

「っ・・・Mr・・・キャツシユ!私は貴方を許さない!!」

「許さない?残念ながら私は捕まらないし、許されるつもりもない!!何故なら、タイムパトロールがこの時代にこれないのだからな!!」

美子さんは僕を抱き抱えながら、キャツシユに対して怒りの声をあげているが、キャツシユは知らんぷりであった。万全な状態なら一撃でキャツシユを当てたのに・・・

「さあ!!諸君!いよいよ終わりの時だ!君達女性はまだ動けるかもしれないが・・・お仲間が動けない状態で攻撃されたらどうなるかね?」
「っ!」

「だが、私も積年の恨みがあるため・・・こいつと合体する!」

「あいつは何をいつてる・・・!?!」

「それは・・・!?!まさか!?!」

キャツシユの言葉に女性皆が身震いして、僕は美子さん達に触れさせるつもりはないから何とか立とうとしていたが美子さんが止めていた。そんな中、キャツシユはあるものを取り出したのを見て、ジャイアンは戸惑い、ドラえもんは驚いていた

「【ウルトラミキサ―】・・・!?!まさか、ミュータンと・・・!?!」

「その通り!!貴様に復讐する締めはやはりこれがいい!」

そういうとミュータンとキャツシユは合体をした。だが、意識は両方あるはずなのに!?

「!?!」

辺りが爆風飛び舞うなか、僕らの目の前に出てきたのは・・・

「素晴らしい・・・!これが史上最強の力!人とミュータンの混ぜ合わせた最強の力だ!」

出てきたペースはキャツシユであったが、入りの所々はミュータン

の面影があつただつた

「ではまずは手始めに……」

「!真理亜さん離れろ!」

「え……っ!体が動かない……!?!」

ミュータン&キャツシユは真理亜さんに超能力で動きを止めて……

「キエロ」

「つきやああ!!」

真理亜さんがミュータン&キャツシユの言葉と共に壁の方へ飛ばされて直撃するかと思われたが……

「つぐ……!」

「武君!?!」

ジャイアンが身を呈して、真理亜さんの壁の直撃を防いだ。そんなジャイアンの行動に真理亜さんは驚き、超能力は解かれたのかジャイアンを抱き抱えていた

「つぐ……怪我はないか?真理亜さん」

「私は大丈夫です!だけど、武君が……」

「心配するな……体は頑丈だからな……にしても……あのやろう……っ!」

真理亜さんの心配そうな顔にジャイアンは優しく髪の毛を撫でていた。とりあえずは……二人とも無事でよかつた

「そして……【加速】」

「え?」

キャツシユは目の前まで僕と美子さんのほうに加速してこちらまで接近していた。その瞬間、僕は本能的に美子さんごと抱き抱えた

「美子さん!くう!」

【熱線】

「あっ!!」

「のび太君!!!」

僕の体に砲撃が包まれたかのように体に痛みが走った。そんな美子さんは僕がかばつたお陰で大丈夫だつた……

「素晴らしい……素晴らしい!!!これがあれば……私に齒向かう

ものはいない!!! TPも怖くない!!!」

「最悪だな・・・本当に・・・」

キャツシユはどうやら・・・本当に落ちるところまで落ちたのだと改めて再確認できた・・・

何とか仲間を・・・美子さんをぜったいに守らないと・・・!

逆鱗

流石に今この状況で戦っても不利しかないし、僕ら自身も手負いで
厳しい……。あいつがこちらに攻撃するその前に手を打つ……。
!

「ドラえもんと、ドラミちゃん、爆弾を！」

「ー了解」

「爆弾だ?!しかも無数だ?!」

ドラえもん達はキャツシユに向かって思いきり投げるとキャツ
シユは大慌てで超能力で弾いていた。だが、それはこちらの計算通り
だった

「ふう……。む?!い、いないだ?!」

キャツシユが大慌てで僕らを探してるが、残念ながら僕達はその場
にいない。では、僕達はどこにいるかと言うとー

「な、何とか逃げ切れた……。…」

「明久くん、皆!!」

僕達はDrクロンを問い詰めていた場所へと「どこでもドア」で逃
げた。僕らは姫路達の近くの方まで転がって息切れを起こしていた

「はあはあ……。な、なんとか……。逃げ切れたのだね。……。ド
ラえもん達のさっきのあれはなに?」

「あれはこけおどし爆弾って言って、殺傷はないよ」

「それにしても……。Drクロンは?」

ルカの質問にドラえもんが説明していて、ドラミちゃんが今回の事
件の主格犯の一人でもあるクロンを探していたら……

「「「……。ええ……。…」」」

目の前のドン引きな光景が広がっていた。何故ならー

「さあ!もつと白状しなさい!」

「はいー!!私Drクロンは、三上美子を襲って洗脳しました!!そして、
二人の仲を切り裂いたのも私の提案です!!!」

「……。なんで、のび太を捕らえて三上を襲った? (バチバチ)」

「それは……。いわない!」

「瑞希、美春。重りを与えましょう」

「はい！」

「うぎやああああ?!いい、痛みがあああ!?!」

「お前達がお兄様にやって来たことを比べたらまだこれは・・・小手調べ！」

「小手調べ!?流石に許してくれえええ・・・」

Drクロンは女性陣に問い詰められながら、沢山のことを白状していた。そんな問い詰められてる光景に僕らメンバーは・・・

「ええええ・・・やりすぎじゃあ・・・」

「・・・大丈夫なのかな?あれ」

「さあ・・・?」

「拷問・・・?」

「・・・ナニコレ・・・?」

ルカとルナさんは純粹にやり過ぎな気がすると意見していた。そして、ドラミちゃんの問いにドラえもんは苦笑いしていて、留瑠璃とスネ夫は少しおどいていた

「あ、御姉様達!・・・つ、武お兄様、のび太さん、スネ夫君!」

「あわわわわ、ドラえもんさんや他の皆様の体のダメージが!」

「落ち着きなさい。私も本音を言えば慌てていますが、まずは落ち着きなさい」

「いや、真理亜さん。その巻き方だと俺の体が痛いんだけど?」

「はっ!も、申し訳ございません!」

ジャイアンの体にきつちりと包帯を巻いていたのだが、どうやら先程のジャイアンのダメージが頭から離れずに動揺はしてるみたいだ

「そ、それより戦いは終わったの!?!」

「残念ながら・・・まだね・・・」

「まだ!?!なんでよ!」

「あのやろうは禁断の手を使った・・・。ってか、正確にはどうやって禁止されてるのを手を出していたのかが、気になる」

「そんなことはどうでもいいよ!!とにかく、あれをどうにか対策しないといー」

明久が立ち上がりながら僕らに話していた。尚、クロンが苦しみながら僕らに抗議していた

「と、年寄りをいたわってくれないのか・・・！最近の若者は!!」

「こういうときだけ年寄り面はやめてほしいのですけど・・・」

「そうですね。貴方達のでかしたことを思えばこれでも結構押さえつけてますですよ?」

「嘘をつけ!?そんなの優しさもないじゃろ?!」

「貴方は昔、命の論理の外れたことをしていたのだから、逮捕されても可笑しくないわ。そして、動物の無意味な改造の恨みもあるわ」

「そもそも、私自身もよくも操ってくれたわね」

クロンの抗議に、ルナさんと真理亜さんは呆れた口調で指摘していたが、クロンはまだ抗議していた。そんな様子に静香ちゃんは真面目な顔で指摘していて、留留璃は冷たい目で見ていた

「う、うるさい!」

「貴方ね・・・」

「そもそも、なぜ貴様は平然と立っていられる!?野比のび太!!」

「は、どういうこと?」

「そもそも、私はお前の体に精神崩壊するくらいにヘソクリスタンドを注いだはず!仮に仲間にも精神的に苦しむはずなのに・・・なぜ!?心も奪ったはずなのに!」

「・・・ねえ・・・」

「っ!? (あ、これは・・・嫌な予感)」

クロンの言葉に僕は違和感を感じて聞き返していたが、クロンはしゃべるしゃべる。それを聞いた美子の声がいつもより低く発していたので嫌な予感を感じた

振り向くと――

「あ・・・」

「「「「?! (ガタガタ)」」」」」

「そもそも――「ねえ・・・」なんだ小娘・・・――え?」

「・・・・・・・・今のお話・・・・・・・・すこーし・・・教えてくれませんか?」

「だ、誰がはな——話してくれませんか？」ひい……!?」

美子さんは僕でもみたことないくらいのことまでにないの……
「すべてを話さない……!そして……私の大切な人の奪つた心を……返さない!!」(ゴゴゴゴ)」

「「「ひい!!」」」

「は、話しますう!!!本当に話しますからその怒りを沈めてください!」

「嫌です。もしも、誤魔化そうとするのなら……ね?」

「は、はいいい!!」

その光景をみたの反応は……

「「「修羅……」」」

「美子お姉様……怖いです」

「……(僕美子さんに酷いことしたから確実にあれくらい怒られるよね……。本当にこの事件終わったら僕別られるのかな……そうだったら仕方ないのだけど、なんか不安になってきた)」

「瑞希、美波、真理亜さん……翔子」

「「「は、はい!!」」」

「少し……手伝って?まだまだ隠してる可能性あるからね」

「「わ、わかりましたああ!!」」

「……りよ……了解……!」

あの霧島さんでさえ、すこし震えて敬礼してる!?!これで確信した……ある意味僕よりも……もっとも強く優しい人が目を覚ましたようだ……

怒り

美子 side

Dr. クロンの回りに現在、真理亜さんと美波と瑞希と翔子と私で話していた。私は腕を組みながら、クロンを睨んでいた

「……偽りなく答えてほしいのだけど……? 誤魔化したら許さないよ?」

「なにするつもりだ!? 拷問するつもりか!」

「拷問……? そんなのはしないわ……」

「(ホッ)「ただし、事と次第によるわ」……え?」

「私はね、本当にこれまでにないくらいのかつてない怒りを抱いたのは初めてよ……? 何でかわかる?」

「(よ、美子が年上にたいして敬語じゃないって……)」

「(……かなりきれている)」

「(何て言うか……)」

「(いまの彼女は間違いなく修羅ですよ? 拷問とか止めないつもりってかなり切れているわ)」

「なにこそこそ喋ってるの?」

「「いい、いえ、何でもありません!!」」

何でみんな私に対して敬語を使うのかしら? まあそれはおいといて……いま目の前にいる人は、のび太君と吉井君を苦しめた張本人。私も確かにこの人たちに苦しめられたけど……のび太君や吉井君はそれ以上の苦しみを与えられた

「まずは……貴方がいったのび太君の心を奪ったといったよね……? それをのび太君の心に返すことはできないの?」

「……」

「答えなさい。……できるのかできないのか」

「そんなの私の知ったことではないー」「チンカラホイ」……え?」

「もう一度聞いわ。できるのかできないのか答えて?」

「それはその……で、できます! できますからその手を下ろしてくださいー!」

「そう。なら、それを取り返す方法を教えなさい」

私は、クロンに対していつでも逃げたら捕まえられるように力をいれていた。本音を言えばもっと問い詰めたい

「……答えなさい……」

「……わ、私の右ポケットにある……」

「そう……。なら、その証拠を出してもらおうわ」

「は、はい……こちらで……ごいます。こ、この銃を彼に向けて放せば元通りになります。う、嘘では……ごいませんので!!」

私はクロンにのび太君の心が入ってる銃を渡してもらおうと、私はもうひとつ聞きたいことがあったのでまだ睨んでいた

「も、もういいだろ!?彼の心を返したのだから」

「まだよ。確かに彼の心を返してもらったけど、私はまだ話を一言も終わったといっていないわ」

「!?」

「あのミュータン……人造製造は廃止されていたときいていたし、その会社はなくなつたとドラえもんさんから聞いていたのだけど……なぜそれが貴方たちが持っていたのかしら?」

そう……何であんな危険なのが持っていたのか、わたしは気になつて仕方がない。何せ、あののび太くん達が危険と言わしめるほどの道具をなぜ??

「それは……元々復讐するためにそこにあった会社の計画書を盗んで作つたからだ!」

「そう……」

何から何までのび太くんに対する復讐って訳ね……。ここまできたらもはや……

「これで最後よ。あのミュータンを止める方法はあるのかしら?」

「し、しらない!こればかりは本当に知らないんだ!」

「嘘を言わないでほしい。貴方達は共同でしていたのならなにか知ってるはず!」

「た、確かに協力はしていたが止める方法は私は知らない!」

……どうやら本当に知らないみたいね。となれば、あれを止め

るのはどうしたらいいのかしら？

「なら簡単よ。戦って止めるのよ」

「戦って止めるって・・・あのね、美波のび太君達は流石に戦える状態ではないのよ？」

「確かにそうね。でもここは一人・・・いいえ、絶対に任せられる人物がいるじゃない？」

「え？」

只でさえ、のび太君や剛田君、ドラえもんさんと骨川君が負傷しているのに一体だれが？それに、静香さんも万全とはいえ厳しいかもしれない・・・

「それはあとで話すわ。その前に・・・」

「銃!?ま、まて!!貴様殺人者でもなるつもりか!?!はやまるな!」

「全部はなしたから殺さないとは私は一言もいってないわ!?!」

「のび太君や皆を苦しめた罰と思って・・・寝なさい」

「やめー」

ーパアン

私が放った銃は見事にクロンに当たり、彼は声出せずに倒れた。そして、近くにとり脈を取ってから・・・

「皆、演技はもういいわよ」

「「「こ、怖かった・・・」」」」

「ごめんなさいね。にしても、よく私が演技だと分かったわね」

「その・・・美子ちゃんらしくない行動で何となく察したのです」

「そう。それより、のび太君の奪われていた心をどうやってのび太君に・・・」

そう、のび太君の奪われていた心を取り戻したがどうやって彼に与えたらよいのだろうか？

「あ、それならドラえもんさんかドラミさんに秘密道具で借りてのび太さんの体に当てるのはどうでしょう？」

「真理亜さんの言う通りです!」

「それなら、兎に角のび太達のいるところへいきましよう?」

「・・・そうね。それと、Drクロンは殺してないからね」

「・・・それはわかっているけど、その銃は何？」

「ドラミさんから借りた秘密道具で名前は【ドリームガン】っていうの」

事前に借りていたけど、やっぱりこう・・・冷静に対応できたのび太君はやっぱり凄いわね・・・

私達はクロンを連れていきながら、キャッシュユの奇襲を警戒していた。早くこの戦いを終わらしてのび太君の傷を直さないと・・・

のび太side

僕らはそれぞれの治療を終えて、キャッシュユの対策を考えていた。ちなみに僕の傷は今の段階では完治は難しいらしく、包帯をきっちり巻いていた

「あの野郎の超能力を對抗するためには・・・ドラえもん達の秘密道具で対抗は厳しい？」

「うん。あの超能力なら確かに一瞬で・・・人を消しかねない」

「・・・あのさ、ドラえもん・・・」

「うん？なに？」

「今この場にいる男子メンバーってさ、僕にジャイアンにのび太、ドラえもん、スネ夫にルカでしょ？」

「うん。そうだね」

「で、負傷者はのび太やジャイアンとスネ夫、あとはドラえもん。現状戦えるのは僕とルカ」

確かに現状戦えるのは明久とルカかもしれないけど・・・

「「僕（俺）達は未だ戦えるよ!!」って痛たたつ・・・!!」

「3人とも無理しないの・・・ってか、明久くんはあれを止める方法はあるの？」

「ないよ。だけど、なにも方法はない訳じゃないでしょ？」

「うーん・・・」

明久の言葉にドラえもんは真剣に考えていた。確かに絶対って可能性は低いけど・・・

「のび太君、みんな！」
考えていると美子さん達が戻ってきた。難しいことはあとで考えよう……

約束

美子さん達がクロンとの問い詰めが終わったのかこちらに戻ってきた。なんか美子さんの手元にはなんか光の塊がみえた

「それは？」

「ドラえもんさん、ドラミさん【魂吹き込み】っていう秘密道具はある？」

「あるけど・・・それは？」

「のび太君の心よ」

「！！「ええ!!」！！」

美子さんの言葉に僕ら男子は全員驚いていた。美子さん・・・一体どうやって手に入れたのだろうか・・・

「お兄ちゃん」

「あ、う、うん！はい、美子ちゃん。【魂吹き込み銃】だよ」

「ありがとう。のび太君の何処に撃てば良いのだろうか？」

「心臓に撃てば良いのじゃない？」

「いや、それは流石に・・・」

「いいよ、美子さん・・・思い切り心臓に狙って撃ってね」

「！！「ええ!!?即答!!」！！」

「・・・わかったわ」

「！！「こっちも即答!!?」！！」

僕と美子さんのやり取りにみんなは怒濤の突っ込みをいれていた。そんなのをスルーしながら美子さんは震えながら心臓の方に狙いを定めていた

「(もしも・・・これが失敗したら・・・)っ！」

「・・・(震えてる)美子さん、大丈夫だよ」

「え？」

「大丈夫・・・大丈夫だからね。だから・・・撃ちなよ」

「のび太君・・・ええ！」

美子さんは僕に思い切り割りきった顔になり銃を発砲した。その瞬間、僕の頭のなかにはなにかが流れたー

『美子さんは必ず守る!』

『助けてー! ドラえもん!!』

ああ・・・心の記憶とでもいうのかな・・・まさか、自分自身が必要なを見るとでも思わなかったよ・・・

「のび太君?」

ああ・・・ようやく本当の意味で・・・君達の大切にしていた心が取り戻ったよ・・・

「ただいま・・・美子さん」

「のび太君・・・もしかして!」

「うん。またせてごめんね」

「っ・・・良かった・・・」

美子さんの安心した顔を見て僕はある覚悟を決めた。そう・・・この覚悟は・・・きつと

「ドラえもん、皆・・・これが最後の戦いだ・・・」

「のび太君・・・」

「相手は過去最大といってもおかしくないけど・・・打ち破る希望はあるよ」

「え?!それはどうやって・・・」

「あいつが合体であれになったのならこちらも合体したり良いじゃない?」

「それだ!!ドラミ!」

「ええ!のび太さんの言いたいことはわかったわ!「ウルトラミキサー」!!!」

目の前にウルトラミキサーを置いていた。そして、僕はみんなに僕の考えを聞いてくれるように呼び掛けた

「普通なら戦っても厳しいけどやつは最大のミスを犯してくれたよ」

「ミス??」

「そう。ミュータンと確かに合体して力は入ったけど・・・」

「そっか!!!確かにのび太君の考える通りなら・・・何とか勝てるかもー」

僕の言葉に明久は??ってなっていたが、ドラえもんはその答えがわかったのか希望がわいたように言っていた

「あ、その前にのび太ー」

「何？」

「あの日の夜に渡したものって何？ずっとポケットには入れてて触ってないのだけど」

「ああ、それで良いんだよ。全て後で訳は話すから・・・」

「でも、誰と誰が合体するのさ？」

「そうだけ。俺達全員ボロボロなのに」

スネ夫の言葉にジャイアンも疲れてように眩いていた。分かっているよ・・・だけど、これは・・・

「僕と明久が合体するのさ」

「！！！！え?!」

「ぼ、僕とのび太で!」

「無茶よ!?!のび太君の体はもう危険なのに!!それに・・・いくらあなたでも体があそこまで悪化していたら私は止めるわ!」

「止めないでほしい・・・これは僕の罪と唯一勝てる方法かもしれないんだ」

「でも・・・でも、それで貴方達があ敵に殺られてしまえば・・・」

「美子さん・・・」

「・・・っ・・・」

不安そうな美子さんは僕にゆっくりと抱きつこうとすると・・・

「んっ／＼／＼」

「！！！！っ!?!／＼／＼」

「んっんっんっ!?!／＼／＼」

美子さんが僕の口へとキスしたのだ。そんな光景に皆が顔真っ赤にしていたが、はつきり言おう・・・僕らも恥ずかしいよ!

「／＼／＼／＼／＼・・・ぷはっ」

「よ、美子さん／＼!?!な、何でい、いきなりそ、そのキスを／＼!?!」

「そ、その・・・必ず帰ってきてほしいという証で・・・はう／＼／＼」

「・・・／＼／＼／＼」

僕ら二人はなんとも言えない雰囲気になり、僕も美子さんも顔真っ赤にしていた。勢いでやってしまった／＼／＼

「(のび太の癖に生意気なんだよ／＼／＼)」

「(大胆にみんなの前でキスをして．．／＼／＼)」

「(見ててこっちまで顔真つ赤になったよ／＼／＼)」

「(なんか．．二人とも良い関係になつてゐるわね)」

「(のび太さんがあそこまで成長したなんて．．．)」

「(ふふふ、のび太君も美子も．．可愛い)」

「(私もいつかは武君に．．．)」

「(スネ夫さんに．．．)」

「(私も誰かに．．．)」

「(アキにされてみたい．．／＼／＼)」

「(明久君にいつか／＼／＼)」

「(雄二に襲つてやってみよう／＼／＼)」

僕らが顔真つ赤になっている他所に他のみんなも見てて顔真つ赤になつてて．．．

「ねえ、さっさとしようよ。敵が待つてくれないよ」

「二」「空気読めこのバカ!!」「三」

「へ?ぎやああああ?!」

「．．これは吉井が悪い」

空気読み忘れた明久が口挟んだ瞬間に皆から折檻を食らった．．．
「さ、さあ!そろそろしないと本当に襲撃されるよ!」

「そ、そうね!」

僕と美子さんは自分達で作ってしまった雰囲気何とか変えようとした。とりあえず、明久はごめんね

「．．どちらにしても時間は限られてる。ここで奴を止めないと．．
本当にみんな全滅だ」

「なら、もう覚悟は決めたよ．．いこう!のび太!」

「明久．．．」

「僕らがやれたら美波や姫路さんが．．女性陣が何されるか分かつたもんじゃないからね!」

「よし．．．」

僕と明久はウルトラミキサーの前に立ち、それぞれの頭をつけた

「ドラえもんーってできる?」

「うん? まあできないことはないけど・・・」

「そっか。それ聞けたら十分だよ」

「じゃあ・・・ウルトラミキサー開始!」

ドラえもんにあることを聞くとドラえもんはできるかもしれないと言っていた。そして、ドラミちゃんがウルトラミキサーを起動させた

さあ・・・全てを終えよう

全ての悪夢を終わらせよう・・・

「おおおお!!」

今こそ・・・一つになろう!!

その瞬間僕らは光へと包まれた・・・

二人でひとつの名前は・・・

光が包まれた僕らは不思議な感覚だった。思考が一つになったかのように、考えてることも行動もなにもか・・・感じる力が違う
「成功か!？」

ジャイアンの声が聞こえる・・・。ということは僕らの体は・・・
「・・・成功したああ!!」

明久と僕は声を揃えて出すと共にガッツポーズをしていた。それと痛みの感覚が今はないということは・・・一つになっているから上手いこと痛みが来てない？

「どう？感覚は？」

「問題ない。どうやら、のび太と明久が一つになったことで・・・体の状態は万全かつ・・・今までにない勝つ自身が溢れている」

「射撃の天才ののび太と時々異常な身体能力を發揮する明久が合体・・・なんか別の意味でとんでもない？」

「それどういうことかな!？」

「あ、これは明久の心の言葉をそのままいったのか」

「のび太さん、吉井さん違和感はない？」

「全然。むしろ、今なら負ける気がしない」

「私も戦うわ」

「留瑠璃!？」

留瑠璃が戦う宣言をすると美子さんは驚いていた。しかし、流石にそれは僕が止めた

「恐らく今からの戦いは尋常じゃない戦いになるから・・・留瑠璃はみんなを守って」

「・・・勝てるのね?」

「勝てるじゃないよ・・・勝つんだよ!」

留瑠璃の問いに僕たちはそれぞれの思いを話すと、皆は僕らの覚悟を聞いて頷いていた

「じゃあ・・・そろそろいくよ。皆はここで待っていてくれない?」

「まって、明久君!のび太君」

「アキ、のび太！」

「のび太君！吉井君！」

「っ……」

一つになった最後の戦いへ僕らはいこうとすると、美子さん達が呼び止めた

「「……………いつてらしゃん」」

「(明久……必ず帰ろうね)」

「(うん)」

「「いつてきます」」

僕らはあの最低な人間を叩きのめるべく、ゆっくりと歩いていた。もう誰にも泣いてほしくないから……

美子 side

私達は大切な人を見送ったあと、静香さんが口を開いた

「……ドラちゃん達がなんで私がここにいるのかずっと気になると言っていたわね？」

「うん。確かに海外は行っていたし、そう簡単に動けないはず」

「実はねー」

静香さんが苦笑いしながらここにこれた理由を話すとドラえもんさんが目を見開いていた。そして、私はその話疑問を持った

「それは大丈夫なの？」

「ええ、この戦いが終わったらの約束だから守ってくれるわ」

「……ねえ、ドラえもんさんにドラミさんと静香さん。私ひとつ思い付いたのだけど……」

「「?」」

私は今頭のなかに思い付いた事を駆け巡って、話した

「これはもしかしたら……」

「ミュータンを倒せる可能性のある方法かもしれないね」

「けれど、流石に絶対にできるとは言えないわ」

そんな話をしているとスネ夫さんと武さんがこちらの方へ来た

「・・・なあ、俺達もまだ戦えるからさ・・・行かせてくれないか？」
「どこへ？」

「のび太達のところだ。・・・俺やスネ夫はまだ奥の手がある・・・」
「でも打つ手があっても・・・」

ドラミさんのいう通りだ。私達はあの男に手も足もでなかったのも事実だと思っているとスネ夫さんと武さんが安心させる笑顔で笑いかけてきた

「迷うくらいならやって後悔したいよ」

「それにな、俺は子供の頃世界を救いたかった・・・。今度はあいつを救ってやる番だ」

二人ももう戦うという目をしていた。そんな、二人をみてドラえもんさんは――

「・・・よし！今いるメンバーは？」

「！」

「お兄ちゃん!？」

「元々今回の事件でのび太君は最悪の手段も考えていたとおもうけど・・・そんなことはさせないし、あいつは未来の时空犯罪者。明らかな歴史壊滅と悪質な行為、無断危険改造・・・そして、禁忌に手を出したのなら・・・闘おう」

ドラえもんさんの言葉に私達は・・・

「そうね。私たちが好き勝手に利用してくれたお礼はまだしてないものね」

「はい！」

「・・・お仕置きタイム」

「私も武君達の傷を追わせたあの男を倒さないと気がすみません」

「お姉さまがいくなら」

「私たちもいく」

「美春も協力します」

「もちろん私もね」

美波、瑞希、翔子、真理亜さんを初めとする三姉妹も同じ意見だった。そして、美春と静香さんもだった・・・

「私も戦うわ」

「もう・・・お兄ちゃん、私も協力するよ」

「俺も協力する!」

「勿論、好き放題やられてしまった僕ちゃんもね!」

「・・・ドラえもんさん、私も戦うわ!」

留瑠璃、ドラミさんや武さんスネ夫さん・・・そして、私も決意した

「よし!皆で協力してのび太君と明久君と共に闘おう!」

「!」「おう!」「!」

必ず貴方達だけ・・・戦わせないわ!

のび太side

僕と明久が一体化した体で、キャツシユのいる場所へと向かった。

そんなキャツシユは足を組ながら待っていた

「ようやく来たか。君たちがここにくるまで・・・この体を馴染むのは大変だったよ」

「そっか・・・それはよかったね」

「・・・?さて・・・貴様らは誰だ?」

「誰?・・・フツ、そんな簡単なこともわからないのか」

僕も明久も今・・・名乗りあげよう

「僕は野比のび太でも吉井明久でもない・・・今この場にいるのは・・・お前を打ち倒すためにいる」

「ほう?」

「お前は最大のミスをした・・・そして、僕らはこの戦いで終わらせに来た」

「小僧が・・・付け上がるなよ?この私に勝てるか!」

「小僧ではないよ。せめて名前をいうなら・・・ぼくらは2人で一つ・・・

「サルベーション」だ」

サルベーション・・・救いを求めるものを意味する名だ。これは

僕と明久の意味でもある・・・すべてを終わらせるための名だ!!

「覚悟は良いな?・・・この戦いを終わらせよう・・・」

そう・・・今度こそ・・・
この命に変えてでも・・・

守って見せる!!

激突

僕らサルベーションは、キャツシユ&ミュータンにたいして睨みながらゆっくりと歩いていった。そんな中、キャツシユは明らかに苛たつたように呟いていた

「この戦いを・・・終わらせるだど?」

「そう・・・もう、お前の助ける味方はいない。いくら、その力があってもお前は僕らに勝てない・・・だからこそ、降参することを勧める」

「フフ・・・フハハハハハ!!ハッハハハハ!!」

僕らの心からの声にキャツシユは・・・僕らの発言を嘲笑うかのように腹を抱えていた。そんな、高笑いを僕らはただ黙って見つめていた

「ひいひい・・・き、貴様ら中々の傑作な言葉をはきおって・・・お陰で笑い死になりそうだったぞ」

「(じゃあ、そうなっても面白いのに)」

「(明久、そういうの言わないの。ってか、今の言葉は皮肉だからね)キャツシユの言葉に明久は本当にそうなければいいのというが、あんなのは皮肉だから本当にそうならないよ

「この私とミュータンの力を手にした私に貴様らが勝てると思っっているのか?」

「少なくとも勝てない見込みは絶対はないということはある得ない」

「そうかそうか・・・なら・・・さっさと死ねえ!」

「口悪いな・・・。君達を倒す戦いはやはりこれしないよね・・・スーパーサモン!!!」

「スーパーサモンだど?!下らん!」

先程までキャツシユは嘲笑っていたが、キャツシユは僕らの言葉に戸惑いながらもビームを出していた

そんな攻撃に僕らは・・・

「フツ・・・ハア!!!」

ビームを・・・切り裂いた

「何!?!・・・攻撃した場所に奴等がない?」

「どこを見ている」

「!ぐはっ!」

僕はキャツシユに向かって右手に木刀をしっかりと握り・・・からだの横へ思い切り攻撃を当てるとやつはぶっ飛んだ

「貴様!!どうやって移動した!?!」

「どうやってって・・・ただ走っただけだ」

「ぶぎけるな!?そんな理論あるはずない!」

「だが現にお前はこの僕らサルベーションに攻撃当てられたという事実がある以上は・・・理論なんて関係ないさ」

「ぬぬぬ・・・!」

「悔しがってる暇なんてないぞ?僕らはたっぷりとお返ししてあげないと気がすまないのね・・・立て」

「貴様!?!さてはかなり残忍な性格だな!?!」

「絶対にそんな台詞お前に言われたくない!!!」

僕は木刀を持ちながらキャツシユ&ミュータントの方へ横切りへ振るうと、キャツシユはそんな攻撃に慌てて下がって・・・

「【加速】!!!」

「・・・はあ」

「(なっ、諦めて目をつぶっているのか!どこまでも・・・)」

「(明久、準備はいいね?)」

「(うん。3. 2. 1...)」

「どこまでも・・・この天才の私を嘗めているのかああ!!!」

「(いまだ!)ふう・・・はっ!!!」

僕らが目をつぶっているとキャツシユは激怒して僕らの方へ【加速】して飛んできたが・・・やつの叫んだ方向に僕は振り向き・・・

「なっ!?見えー」

「居合い切り!!」

「ぬああああ!!」

木刀を抜刀するように振るうとキャツシユは近くの壁へぶっ飛んだ。壁の方に僕らは冷たく言い放った

「立ちなよ。まさか、かの天才のキャツシユはこれで終わりなのかな

「？」

「ぐぐぐ、己・・・己えええ!!」

「上手いこといかなかったら喚くのか・・・あきれた」

「これならばどうだ!? 貴様らの仲間が使っていた【熱線】だ!! はあああ!!」

キヤツシユは怒りながら僕らサルベーションに向かって攻撃してきた。さつきは僕も万全な状態ではなかったからダメージ受けたけど・・・

「確かにこれは受けたら無事には済ますこと出来ないけど・・・」

「はっはは!! これならばー」

「今の万全な状態の僕らには効かない!! はっ!!」

僕らは気合い入れると共に熱線の攻撃を切り裂いた。そんな光景にキヤツシユは唾然としていて固まっていた

「なっとなな・・・」

「よし、気合いで切れた!!」

「き、気合いでそんなの切れるはずがない!! 貴様、本当に人間か!? 英雄だから出来るのか!？」

「英雄とかそんなの興味ないよ。僕は守りたいから守っている。それに・・・」

「!」

僕はキヤツシユの方まで接近して、両腕についていた腕輪を一瞬で奪った。そんなキヤツシユは真っ青になっていた

「お前程度の敵がこの二つの技を使っただけのものではないから返してもらおうよ」

「き、貴様あああ!!」

「そんな攻撃で僕に当てれると思うな（やはりキヤツシユは超能力が使いきれてない。こいつがないとなにも出来ない）」

意外とあっけなく終わるものなのかな。もう少し危険だと思ったけど、こいつが勝手に自滅してくれたから

「2度目の警告だ。降参しろ・・・キヤツシユ!」

「降参だ?!? この・・・っっ!?!」

キャツシユがなにか反論しようとする、急に苦しみだした。そんな様子には僕は心のなかで話し合っていた

「ねえ、のび太。急に苦しみだしたって体調崩したのかな？」

「いや、それはないとおもう。少なくとも・・・なにかを押しえてる感じ？」

「あのさ・・・こういうのって大抵進化とか何かのフラグだよな？」

「(そういう余計なこと言わないの!)」

僕らが心のなかで話し合っていると、明久の言葉にそれはフラグと
いうことですがに注意していた
すると――

「っっ!!やめろ!やめろおお!!」

「何かだんだん様子が・・・?っ!」

「アアアアアア!!」

やつが叫ぶと共にその周辺に風が吹き荒れて思わず僕は顔をお
おう行為をした。はつきりいつて何が起きようとしているのかが検討
もつかない!!

暫く爆風が収まるとそこにいたのは・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あらら・・・まだ戦いは終わりそうにないか・・・」

無言で立ちながら、顔を下へ向けているのが確認できた。あれを見
る限りどうやら・・・最悪の展開の可能性が高いよね・・・

下手したら・・・本当に今回の戦いで命落としかねないかも・・・

脅威

僕らサルベーションは今日の前にいるキャツシユに対して異様な
雰囲気纏ってるのを見て冷や汗をかいていた。さつきまでこちら
が優勢だったけど、何やら様子がおかしい

「……………」

「(何やら……とんでもない感じがするな)……先手必勝! 居合
い切り!」

キャツシユが何かする前に僕らは走り込んでキャツシユに向かっ
て居合い切りでダウンをさせようとしたが……

「!?か、体が……動かない!」

空中で僕らの動きが止まってしまった。こいつは……一体!?

「……………」

「つ?!まさかキャツシユが……!」

「アアアアアアア!!!」

「つが!!!」

—————ボゴオオオン

空中で止まっていた僕らはキャツシユはいつのまにか目の前に飛
んでいて、回しけりを入れてきた。まともに食らった僕らは壁付近へ
と直撃した

「ぐっ!」

「うおおおお!」

「つ!!つくそ!」

僕らは奴の攻撃を慌てて横へ飛んだ。すぐに起き上がって木刀を
構え直した

「ふう……………」

「フフフ…………アハハハハハ…………アハハハハハ!!!」

「…………どうやら、最悪のことが起きてしまったみたいだね。さつ
きと倒して破壊したかったのに……参ったな……」

本当に最悪だと思っていると、心のなかで明久が僕に質問をしてい
た

「(最悪なことってー)」

「(キヤツシユは誰と合体したか覚えてる?)」

「(・・・あ、もしかって・・・ピンチ?)」

「(ピンチもピンチ・・・何故なら・・・)」

僕は心の中のを話を終えると、目の前の敵へと意識向けた

「何故なら・・・キヤツシユはミュータントと合体したのだから超能力が使える。けれど、キヤツシユは使わなかったのではなく使えなかった」

「アハハハハハ!!」

「だが、急に人格が変わってしまったところから考えられるのは・・・今日の前のいるのはキヤツシユではなく・・・ミュータント」

「(ご名答・・・お陰で知恵も・・・体も馴染んできた!!!)」

「言葉も片言ではなく流暢だし、知恵も回る・・・参ったな・・・」
「(ここまで楽しませてくれたお前たちに礼を言おう・・・。そして切り刻みな・・・究極ミュータントという力をな!!)」

キヤツシユ・・・いや、今の人格者はミュータントだから究極ミュータントは手をかざしていた

「アソボ」

「っ!!やばい!!」

僕は飛んできた石を全速力で後ろへ交わすと奴の振り下ろした手はビームへとこちらに向かっていた

「っく!!」

「アハハハハハ!!凄い凄い!あの日の夜よりはまともに戦えるんだ!」

ミュータントは笑いながら感心するように呟いていた。そんな呟きに僕らは皮肉を込めて起き上がりながら言った

「どこかの敵のお陰さまでね・・・」

「なら・・・こいつはどーかな?」

「また体が動かない!?!」

「ほらあ!!」

「がっ!!」

ミュータントは僕らの動きを止めると共に動けない僕らにアツパー攻撃をしてきた。それをまともに受けた僕らは軽く浮かんだが……

「あんまり……なめるなあ!!」

「!!ぐっ!」

僕らは意地でも倒れずに頭突き攻撃をすると、奴の顔面に当たって奴はよろけた。そして、そのすきを逃さなかった僕らは攻撃を続けた「ジャイアン直伝!!ジャイアンのママがジャイアンに数々の痛みを与えた技!!【無限ビンタ】!!」

「がつ!」

「はああああああああお!!!イヤアアア!!!」

「ぐが!!な、なんだ!?その攻撃は!!」

「さらに!!僕自身がジャイアンに食らってきたダメージ!【ジャイアン拳骨】!」

「いだああ!」

顔にひたすらビンタ繰り出して、奴がよろけたのを見逃さなかった僕らは勢いよく左足を前にして腰を回すように右拳を奴の頭に攻撃すると苦痛な声あげていた

「ツチ!」

「はああああ……ふう……」

「……少し油断した。まさかそれだけの力がまだ残っているとは」
「(傷が再生されてる?ミュータントは再生能力があるのか?それとも……ダメージ事態は無かったのか?) 本当に嫌になるね」

「まだまだ遊ぼうよ……人間」

目の前にいるミュータントは冷たくどこまでも感情が危険で……最悪の存在になりつつあった。なんとかここで打開できればいいけど……難しいな……

「(けれどここで勝たないと……世界や時空を越えた危険が及ぶ可能性がある!ならば……) いいよ、遊ぼうか……ミュータント!!」

木刀を構え直しながらゆつくりと僕らは叫んだ。何にしてもここで倒してやるのだから!!!

一方その頃・・・

美子 side

私たちは先に向かっていたのび太君達を追いかけながら、ミュータントの対策を話し合っていた。あ、因みに今いるメンバーだけど以下の通りよ

男子：ドラえもんさん、剛田君、骨川君

女子：ドラミさん、留瑠璃、私、美波、瑞希、

翔子、清水さん、里緒菜さん、冬花さん

静香さん

合計は13人・・・よく考えたら凄い人数で今移動してるわね・・・
「そういえば、のび太君はどうしてあんなに罪だといっていたの？」
「そうですね。たしかに気になりますが・・・ドラえもんさん教えてくださいませんか？」

「うーん・・・実はあの時の事知ってるのは僕とのび太君、そして・・・
静香ちゃんなんだ」

「え!!僕やジャイアンはそんなの知らないよ!？」

「つまりあのときは俺やスネ夫も知らない出来事ってことでいいんだな?」

「うん。元と言えば僕も不手際があったただったけどさ・・・まさかのび太君が無断で使っているのは予想してなかったよ」

「無断?あののび太が無断?」

「なんか意外です・・・」

私の疑問に真理亜さんも頷いていた。そんな疑問にドラえもんさんは唸るように考えて発言していたら、ドラえもんさんの言葉にスネ夫さん達は疑問に話していた。そして、ドラえもんさんが黄昏のように言うと、美波と瑞希は驚いていた

「・・・一体何があったの?」

「そうね。のび太君が無断でって・・・」

「えーと・・・」

「?静香さん?」

「その……ね。私も昔少なからず関与していたといってもなんとも
言えないわ……」

「まあね……」

静香さんの言葉にドラえもんさんは黄昏るように遠い目をしてい
た。まるで、苦勞してきたかのように……

「それよりも……どうやってあのミュータントを倒すかだね」

「ドラえもんさん、あれを倒す方法はないの？」

「残念ながら……ない」

「嘘だろ!? 未来の道具あらゆるものがあるのに!？」

骨川君が話をかえるように話題をそらすと、私はあれを倒す方法な
いのかと聞くとドラえもんさんは申し訳ないように否定した。それ
を聞いた剛田君が驚くように問い詰めていた

「武さんの言う通り、未来の道具は様々なものがあるけども……あれ
に通用はしなかったの」

「じゃあ、のび太君とドラえもんはどうやってあれを止めたの？」

「えーと、私が聞いていたお兄ちゃんの報告では……時間の巻き戻し
でなんとか被害が起こることはなかったと聞いているけど……」

剛田君のことばにドラミさんが申し訳ないように残念そうに話し
ていた。それを聞いた私は疑問に思ったことを聞くと、ドラミさんが
思い出すように考えて話していた

「つまり、あの時はどの時間からやったのかが判明していたからでき
たが、今回はできないと言うことですか？」

「ええ。残念ながらいつどのタイミングで作ったのか判明してないか
ら……」

「じゃあ、戦うしかなくなるじゃない？」

「……島田さん、相手は超能力者ですからそう簡単に戦うのは難しい
と思います」

「冬花の言う通りです。現に、スネ夫さんにのび太さん、武お兄様が勝
てなかったのですから」

「……それに、吉井とのび太が合体しても勝てるという保証はない……
真理亜さんがドラミさんの真意に気づいたのか分かりやすく質問

するとドラマミさんは疲れたようにため息をついていた。そして、美波がもう止めるのは戦いしかないと言うと、里緒菜ちゃんと冬花ちゃんが慎重論でそれに続くように翔子も話していた

このままでは話が進まない……

「でしたら、私達はミュータントを倒すのではなく……止めるのはどうでしょうか？」

「止める……ですか？」

「はい。聞けば、超能力ですからそう簡単には倒せないのは明確です。でしたら、動きを止めるだけでもできるはずですよ」

「確かにそうね。美春の提案としては面白いわ」

「!!美子御姉様に誉められたー!!!」

「つきや?!こら、誉められたからってすぐに飛び込まないの!」

美春が誉められて私の胸の方に飛び込んできた。さすがに恥ずかしかったから軽く叱ると美春は私から離れて何やら驚いていた

「!」

「?どうしたの?美春」

「美子お姉様……もしかって……」

「つちよ、美春、美子がどうしたのよ?」

「美子御姉様の胸が……でかくなっていませんか?」

「!?!」

私は美春の言葉に私は顔真っ赤になり、美波は絶望した顔になっていた

「やっぱり人は付き合えば……アキに……」

「ギャフン!?!」

「胸の話とかそういう公共の場で話さないのですよ」

美波は何やら自分の胸をあてながらブツブツと呟いていて、そして真理亜さんが言い出した美春に拳骨を軽く与えていた

……胸は大きくなったかと聞かれたら実感はないけど……つていけない、いけない!

「と、とりあえず美春の提案は面白いわ（剛田君や骨川君がいるから……ひよつとして止めれる方法はあるのかもしれないわね）」

「よし!!なら、作戦をすぐにたてよう!方向性は決まったんだからな
!」

「だね」

必ずあなたたちを助けるから・・・それまで耐えて!!!

雄二side

俺たちはいま・・・猛烈に限界を迎えている

「ゆ、雄二・・・の方は・・・ど、どうじゃ・・・」

「あ、あとひとつで・・・終わる」

「・・・極力・・・げ、限界を・・・な、なんとか・・・た、耐えない
と・・・」

俺達は現在コントロールシステムの解除を必死にしていたが・・・
現在ピンチである。その理由は・・・

「あ、暗記パン・・・も、もうみたくない」

「い、言うのではない・・・」

「・・・限界が来てしまう・・・」

暗記パンの食べすぎによる胃の限界を迎えていた。これ以上食べ
ると俺たちの体が限界を迎える

「こ、これで・・・おわ・・・は、」

「!ゆ、雄二!耐えるのじゃ!いまここでくしゃみしてえらいことにな
れば・・・また残りひとつの解除がたいへんなことに!!」

「わかって・・・はーくしょん!!(ポチっ)ーあ・・・」
システムエラー。システムエラー。また解除をやり直してください
い<

・・・どうやら、くしゃみにより残りひとつのをまた解除
をしないといけないということか!!・・・ハハハツ・・・

「二」だ、誰か助けてくれええええ!!」

俺たちに終わりが見えない!!誰か助けてくれええええ
!!!!!!!

決意

のび太 side

僕らは今、ミュータントとなったキャッシュの攻撃を必死に交わしていた

「そろそろそろぞら!!」

「つく!!石がたくさん飛んでくるし、交わしても交わしてもきりがない!ならば・・・!」

「!」

僕らは木刀を上投げると、ミュータントは驚いたように木刀の方向を見ていた。当然攻撃するのが止まるから・・・

「(その瞬間を待っていた!)はっ!」

「ぎっ!」

「(さすがのび太!拳銃で速打ちに叶う敵はいないね!)」

「(いや、だめだ・・・止められた!!)」

「(え?!)」

「今のは・・・焦った・・・」

「まさか射撃攻撃が空中で止められると思わなかったよ・・・」

「惜しかったな。あと一息で攻撃が当たったのだが・・・これをかえそう」

「っ!くそ!」

僕らは自身のできた攻撃がこちらに飛んできたので慌てて横へとんだ。まさか止められる上にそれが跳ね返されるなんて思わなかった!

「クスクスクス・・・ああ、ああ、楽しいよ!あの日の夜とは比べ物にならないほど楽しませてくれているよ!!」

「(パシッ)・・・腹立つな」

上へ飛ばしていた木刀を受け止めながら僕らは今の言葉に怒りを感じて構え直していた。楽しいね・・・こちらは命を懸けているのに遊び感覚とは・・・

「遠距離で無理ならこれならどうだ!っはあああ!」

「おとつと・・・攻撃が単純だよ」

「避けたと思った？残念!!」

「！体を捻って攻撃!？」

「こっちはミュータントが交わすのは想定内なんだよ！テリヤアアア!!」

「ぐっ!!」

僕はミュータントが避けるのは想定内だったからこそ、裏の裏をかいた。案の定、向こうは体を捻った攻撃してくるとは思わなかっただろう

「(明久の身体能力があったからこいつができたのさ)つと、あんまりダメージ与えれなかったか・・・」

「ツグはああ!」

「!つととと・・・」

僕はミュータントの攻撃にたいして慌てて後ろにバック転をして武器を構え直した

「攻撃が甘かったか」

「人間風情が・・・」

「ん、雰囲気がかわった?」

「調子に乗るな!!」

「消えつー・・・がはっ!」

僕は視界に消えたミュータントに驚き周りを見ようとすると目の前に表れて突きの攻撃が食らった

「はあああ!!」

「(こんな突きの鋭い攻撃は・・・耐えれない!)ぐああああ!!」

「まだだ!」

「念力で何を!?」

「喰らえ」

「いだだだっ!!」

僕は突きの攻撃に耐えきれず飛ばされてしまった。そんな僕らに念力で動きを止めてさらに追撃するように電流攻撃された

「っあ・・・」

「さらに・・・」

「(まさか?!) くっ!」

「ガードしようにもおそい」

僕らはミュータントによって踵落とし攻撃をまともにくらって近くの地面に落ちた

「がっは・・・(息がっ!!!)」

一瞬呼吸できなかった僕らは吐くように声を出していた。ミュータントが攻撃続けるように周りにある石をこちらの方に攻撃してきた

「く、はああああ!」

「!」

「嘗める・・・なああ!」

僕らは飛んでくる石に対していそいで起き上がり、銃を打ちまくっていた。そんな攻撃がピンポイントに石が直撃していた

「まさか石を銃で打ち砕く攻撃をするとは・・・恐れ入る」

「ツハアハアハア・・・本当にミュータントは化け物だね」

「それはこちらの台詞。なんで平気なんだ?」

「さあね・・・(半分明久のからだのお陰だろうね。普通に拷問を耐えているから・・・ね)」

普段から明久は拷問に近いのを耐えているせいか、先程の攻撃はなんとか耐えきれた

「ほう?」

「何?」

「いやいや・・・あと何回耐えられるのかなって思っただけだ!!!」

今の言葉に僕らは少し焦った。確かに何回も食らえば身が持たないし・・・何より・・・

「(何よりのび太の体も元々ダメーজあるでしょ?)」

「(それを言うなら明久もでしょ?)」

「(僕はそれなりに頑丈だからね)」

「(なら僕もだよ。・・・とりあえずは)」

「(うん……)」

「(まだ……)」

心のナカの会話を終えた僕らはミュータントを見つめながら……
はつきりと宣言した

「ほう？まだ、たつ気か？」

「まだ……まだ！本当の戦いは……」

「ん？」

「本当の戦いは……これからだ!!!」

僕らの決意と共に木刀の先端をミュータントに向けるとミュータントは不愉快そうに見ていた。どうやら彼の心の中では心が折れたと思ったのだろうけどそんなに簡単に折れないよ!!

「……本当にしつこいやつだ……。良いだろう……。そこまで歯向かうならお前たちの女が泣きわめくぐらいの悲惨な姿にさせてやる!」

「……」つだけいっておくよ

「なんだ？」

「お前達は……必ず僕に……。いや、僕らは必ずお前たちに勝つことを先に教えておくよ」

僕らは確かな決意と共に木刀をかまえなおした

必ず生きて帰る！何がなんでも……。愛した人たちの待っている場所へ！

そのために……

お前を倒す!!

意地と増援

辺りが爆風飛び舞う中、二つの影が衝突していた。それが衝突する度に辺りに風が飛び散る

「はああああー！」

「つぎー！」

僕らはミュータントに超能力使われないように休む間をなく木刀を振り下ろしていた。そんな、攻撃にミュータントは苦虫を潰したように必死に交わしていた

「くそー！」

そんな中、ミュータントが僕らの攻撃がうざく感じたのか上に飛び、自身の態勢を整えた

「上に逃げられたか・・・なら!!」

「さすがに上に飛ぶ力はないはず・・・ん？」

「これならどうだ!!! (パァン)」

「どこを狙っている？」

僕らの攻撃はミュータントから大きくそれた。そんな攻撃されたミュータントは呆れながら僕らがきちんと自分に狙っていないことを呆れていたが・・・

「いいや・・・狙い通りさ」

「何?・・・!!」

「一撃目は囷の射撃・・・」

「まずい!くそー！」

「だが、二撃目の反応まではおそいね」

僕らの攻撃はあくまでも一撃目よりも二撃目に貫通するように連続攻撃をした。一瞬目を反らしたミュータントはガードをするのが遅れて肩に直撃した

「つつ・・・人間風情が・・・」

「その人間風情に好き放題やられたきぶんはどうだい?・・・僕らはお前らを許さない」

「嘗めるなああ!!」

「また消えた!? いったいどこに……」

「上だ! 間抜け!」

「っ! うわつと!」

持ち前の危機察知能力と明久の身体能力で横へと飛んで攻撃を避けた。大分この体も順応してきたけど……

「(その順応するの時間かかりすぎてからだがボロボロだよ)」

「(言わないでよ……)。お互いに意識交換しながら戦うのは意外とムズいね)」

「(それに関しては同意見だよ)」

「(だが、それは向こうも言えることのはず! 必ず勝機はある……)」

「(まだ戦える!)」

心の中でお互いに未だ動けることを指摘しあうと僕らは再び意識を現実に向けられた。そんな中、ミュータントは余裕そうにこちらをみていた

「……お前たち人間風情が勝てるんでも思ってるのか?」

「たとえ勝てないとしても……必ずお前に勝つ突きがある!」

「なんだと?」

「確かにミュータントは特異的な存在で脅威でもあるのはわかった。しかし、未来では国連が出る事態になっていたが何故お前達が支配できなかったのか不思議で仕方がない」

「……」

「答えは簡単。お前たちミュータントは……人間に負けたから消えたんじゃないかな?」

その瞬間、ミュータントからとてつもない殺意が出てきたのを僕は感じ取れた。それをみて、僕は殺意を出しまくるミュータントを見つめていた

「どうやら怒らせてしまったかな?」

「人間風情が調子乗るなよ……」

「事実だよ? 君達ミュータントが未来の世界で人間に支配できなかったのは……君達ら脅威でもない人間に負けたのさ」

「うるさい!!」

「うわっ!？」

僕はミュータントの叫びと共に風が飛び散り、必死に飛ばされないように耐えていた。いくらミュータントは今キャツシユと一体化してるとはいえ、元々ミュータント事態は赤ん坊

「痼癩を起こしたかな・・・っ?」

「もう・・・遊びは終わり」

「!」

「死ね・・・」

「う、上からか、雷?!?あわわわっ!？」

僕は必死に落ちてくる雷を回避して距離を取っていた。さつきまであんな力はなかったはず!。ってかよくよく考えたらミュータントの能力そのもの知り尽くしてないから・・・

「(未だ知らない能力があってもおかしくないと言うことか!?) っとな!」

「っ」

「!体が動かない!?またー」

「消えろ!」

「また雷!?あだだだだっ!？」

「まだだ!」

「壁に飛ばされる!？」

「ぎいああ!!」

「く!! (流石に今壁に直撃したらやばい!!)」

「ギャハハハハ!」

「(万事休す・・・か!?)」

せまりくる痛みに僕は覚悟して耐えようとしているとー

「!させるかよ!」

「!!ミサイル!？」

「っち!!嘗めるな!」

「空中での解けた?っ」と

誰からからの声が聞こえたのに、ミュータントは振り向くとミサイルが飛んできた。そんな様子にミュータントは両手で防ごうとする

と、僕らの拘束がかとけて地面に着地した

「いったいどこからの攻撃・・・？」

「よく頑張ったな・・・のび太と明久」

「遅くなつて悪かったね・・・」

「！」

「よく耐えていたね。流石のび太くん」

僕らの目の前にミュータントから守るようにだっていたのは・・・

「ジャイアン、スネ夫、ドラえもん・・・」

「なめるな！人間が・・・」

「「よくも私の大切な人を手を出したわね!!」」

「なに！くっ！」

ミュータントがジャイアン達に攻撃しようとする、別のところから攻撃が飛んできたのに慌てて後ろへとんだ。そしてその攻撃した人物たちは僕らを守るようにたっていた

「お待たせ、アキとのび太」

「あ、でもこの場合どう呼べばいいのでしょうか？二人は合体してるから・・・」

「まあまあ、二人とも本当にお待たせ。もう・・・あなたたちだけ戦わせないから・・・ね？吉井君に・・・のび太君」

その目の前にたっていたのは・・・

僕や明久が大切にしている彼女達が・・・守るようにたっていた

増援と……

僕らはボロボロの体になりながらも、なんとかゆっくりと立ちながら目の前に立っていた美子さん達に声かけた

「美子さん……姫路……島田……」

「本当に待たせたわね……二人とも」

「本当にボロボロね。しかもあいつは無傷って……不死身?」

「遅くなってすいません!二人とも……あ、合体してるから傷の手当てはどうしたらいいのでしょうか?」

「あはは……傷の手当てはあとでいいよ。ここに来たと言うことは……」

僕らがそういうと、キャッシュの姿になったミュータントが苦痛な声を漏らしていたのでそちらを振り向くと――

「ぎい?!」

「悪いわね。この戦いは私も参戦させてもらうわ」

「貴様……留瑠璃!!」

「ミュータントが人格持つても私の事が分かるとはね……恐れ入るけどもう貴女の仲間にはならない!はあああ!」

「くあつー!」

留瑠璃から渾身の蹴りをまともに食らったミュータントは苦痛な声を漏らしながら近くの壁へとふつとばされた

「留瑠璃、下がって距離をとって!」

「分かったわ、静香」

どうやら静香ちゃんもこちらに助けに来てくれたのは感謝するけど……でも……一つ言わせて……

「留瑠璃、空とんでない!」

「……あら?空飛べるって教えていなかった?」

「(あ、かわいい……っじゃない!)きいてないよ!美波達より可愛いとおもったけど空飛べるの聞いてないよ!」

「(明久!?そんなの今思ったらー)」

「かわつ／＼!」

「アキ、あとで合体解除になったらお仕置きね」

「明久君、合体解除なったら私たちと話し合いましょう」

僕は明久の言葉を発さないように心の中で止めようとしたが、明久が先に口を出してしまった。すると、留瑠璃は照れて島田と姫路は殺気を出していた

「あれ？何で僕限定!?!」

「(さあね)」

「やれやれ、合体してもお前はお前か。明久」

「ある意味すごいよね」

「二人ともお疲れさま」

「間に合ってよかったですね」

「ジャイアンにスネ夫にドラえもんまで・・・あれ？清水さんと霧島さんと冬花さんと里緒菜さんは？」

あきれながらこちらに來たジャイアン達にこんどは僕が対応すると、清水さん達がいらないことに疑問を持つと真理亜さんが答えてくれた

「里緒菜と冬花、清水さん、翔子さんはコンピューター室にいる坂本さん達の方へと向かっています」

「コンピューター室に？」

「はい。現状打開を開くための策として・・・コンピューターも強い二人に向かつてもらいました。翔子さんは・・・機械音痴と聞いてましたので、清水さんと共に護衛としてたのみました」

「「ああ・・・」」

そういえば霧島さんは機械音痴と雄二が昔いつていたな。つと・・・とりあえずは目の前の敵から意識を戻さないかね

「己・・・この期に及んで増援だ?!」

「のび太君、今日の前にいる人格は誰？」

「ミュータント」

「「「!」」」

僕がそういうと全員が身を締めた顔つきになり目の前の敵へと意識向けながら聞いていた

「だから空飛んでいたのか」

「そう。ところで留瑠璃・・・君は本当は何者？」

「・・・のび太さん、留瑠璃の事を聞くのはあとよ」

「？静香さん？」

「・・・今はミュータントを倒さないと・・・聞くのも難しいわ」
「・・・それもそうだね」

確かに聞きたいことは本当はたくさんあるけど・・・目の前の
ミュータントがそんな時間を与えらると思わない！

「人間風情が!!きい!!」

ミュータントはこちらに走って攻撃をいれようとする横からな
にかが飛んできた。いや・・・誰かがミュータントに飛び蹴りをして
きた

「おつと!!お前達だけ勝手に盛り上がるなよ」

「!雄二!!」

「コンピューターの方は冬花と里緒菜と秀吉とムツツリー二がいれば
十分だと思つてな・・・俺もまだ暴れたりないからな」

雄二が指をしながらミュータントの方を見て構えていた。雄
二が来たのは大きいけど・・・

「いいところに来たな、雄二!!」

「あ?なんだ、剛田？」

「俺とお前の力を混ぜ合わしたら勝てると思わないか？」

「混ぜる?まあ・・・確かに俺達が混ぜ合わしたら力は2倍は確実だな」

ジャイアンの言葉に雄二は怪訝になりながらも質問を答えていた。
その時僕らは何となくだけど・・・何となくだけど・・・答えがわ
かってし待てて冷や汗が出てきた

「俺と合体するぞ!!雄二!!」

「!!「はあああ?!」!!」

ジャイアンの言葉に雄二を含む皆は大声を出していた。いったい
なぜ・・・?

「あの・・・最期の敵なのに土壇場で存在無視されてる？」

その離れた場所でミュータントが戸惑いながらツツコミをいれて
いたのはなんかシニールだったと後に僕らは思う・・・

反撃開始

僕らはジャイアンと雄二の会話を黙って横で聞いていた。ジャイアンが突然変なことをいったので、雄二は固まっていた

「おい、坂本！なに固まつてる？」

「・・・はっ!?が、合体ってどういう事だ!?剛田！」

「ん？合体って合体だろ？それ以外の合体ってあるか？」

「合体って何を合体すんだよ!?ってか説明を求めろ！きちんと説明してくれないと俺が殺される!!主にあいつに!!」

ジャイアンは何故、雄二が叫んでるのかわかっていない感じだった。しまったな・・・ジャイアンって確かに昔より賢くなってるけど、頭使うのは得意ではなかったはず！そんな状態にみて呆れながらドラえもんが説明してきた

「あのね、ジャイアンと雄二には僕の秘密道具でもある【ウルトラミキサー】で合体して欲しいってこと」

「ああなるほどな・・・。で、状況は・・・？」

「状況は・・・」

「この私を・・・無視するなあああ！」

「!!!!」

ミュータントが興奮状態で当たりに風が飛び散っていた。そんな様子にジャイアンが冷静に指差して説明した

「ミュータントがキャツシユの体を使って暴れてる」

「そうか。大体わかった」

「なんでそんなに冷静?!」

「じゃあ、俺と剛田が合体するメリットはなんだ？」

ジャイアンの説明に雄二は納得した感じでうなずいていて、そんな様子にスネ夫がツツコミいれていたが、雄二はジャイアンにメリットを求めた

「俺の力と喧嘩、お前の喧嘩と頭の回転。どちらもパワーアップとしてメリットがあるだろ？」

「・・・デメリットは？」

「意識をどちらかにしないとダメだな。例えば喧嘩するときには俺が、知識を使うときはお前とかな」

「・・・分かった。なら、合体するか」

「ドラえもん。俺たちは合体するからたのむぞー!」

「はああ・・・わかったよ」

ドラえもんは呆れながらもウルトラミキサーを取り出して、ジャイアンと雄二の頭をセットするように着けた

「何をするのか知らないが・・・させるかああ!」

【ひらりマント】!!」

「ぎい!?!」

「からの!・ビーム!」

「嘗めるなあ!」

ミュータントが叫びながら念力で近くの岩を飛ばすと、姫路がジャイアン達の前に出てひらりマントで攻撃をそらした。防がれると思っでなかったミュータントは声を驚いた出すと留瑠璃がビームをミュータントに向けて攻撃すると激怒するように叫んでいた

「つく、防がれた!?!」

「攻撃は終わりか?ならー!」

「・・・どこを見ているミュータント?」

「!」

ミュータントは僕らの方に向かっていこうとすると、冷たい声が聞こえてこちらに向かうのを止めて回りを見っていた

「無敵砲台召喚・・・!」

「!」

「狙いは必勝!出し惜しみなしの100%!!さあ!無敵砲台・・・発射!!!」

ーードオオアオオオオン

「!?!こんなのにダメージ与えれるとでも!おもったか!!!」

スネ夫の無敵砲台の攻撃にミュータントは念力で攻撃を防いでいた。スネ夫は何か分かっていたのか、どや顔で話していた

「フハハハ、防いだぞ?」

「そこは予想通り。お前が防ぐのはね・・・」

「?・・・が!!」

ミュータントは砲弾を防ぎ高笑いをしていたが、スネ夫は読み通りだったのか普通に話してる。すると、ミュータントは?となっていたが左右から攻撃を食らい苦痛の声を漏らしていた

何故ならー

「砲弾や他の攻撃を防ぐのに意識向けすぎましたわね!おかげでこちらが動きやすくなりましたわ!」

「はあああ!」

「いつの間に接近を!?ぐうう!」

「あんたがスネ夫の攻撃に夢中なってる隙に走ったのよ!はあ!」

「がふっ!」

「美波さん、私と息を合わせてください!」

「了解!」

よろけたミュータントは慌てて念力か何かでしようとする、真理亜さんと島田はしっかりと足を踏みしめて技を叫んだ!

「この距離で回避するのはきついでしょう!?くらいなさい!」

「こんなのになげっ・・・!!(うごけない!?なぜ!?)」

「いんです!美波さんに真理亜さん!」

「!?いつの間にもう2人!?しかも超能力だと?!」

あの弧を描くようにして横から突き込む技・・・何故だろう?何故か見たことある技・・・

「【鉤突き】!!」

「がっ!」

横からの攻撃にミュータントは今まで受けたことないダメージなのか苦痛な声をあげていた

「っち!!」

ミュータントは後ろの方に下がりながら激怒顔になり、僕らを睨んでいた

「おのれ・・・人間ごときが勝てるとても本当に思ってるのか!」

「勝てるよ・・・」

「なに？」

「だって……ミュータントは先まで誰を急いで攻撃しようとしていた？」

「！」

ミュータントは僕の言葉になにかを思い出したように周りをみよ
うとしたが、もう遅い

「お前は……いや、お前達は……人を嘗めすぎだ」

「うらああああ!!」

「しまった!!」

「散々こちらをひどい目に合わせた怒り!!食らえ!ジャイアン&雄二
スペシャル攻撃!【GYマツハパンチ】」

「!!」

ジャイアンと雄二の合体した体で拳を振り下ろすと、キャッシュの
姿をしたミュータントは顔を思いきり殴られて、その余波で壁に叩き
のめされた

「よしやああ!!」

「ナイス!えーと……」

「その前に合体したお前達は何て読んだらいい？」

「僕ら?僕らは……サルベーション」

「(サルベーションって確か救いを求めるものか)……なら俺らはそう
だな……おれらの名はチーフだ」

猛々しい闘争心を隠さずにたくましい腕に逞しい体で指をならし
ながらたっていたのは……

それぞれが信頼できる親友が目の前にたっていた

「(……ここまで予定通り……)」

このときの僕らは気づかなかつた。ミュータントが……まだ本
気ではなかつたことに……

終わりと見せかけて・・・

キャツシユ姿で倒れているミュータントを僕ら全員見つめながら、不意打ち攻撃の警戒をしていた

「キャツシユ姿をしたミュータントか・・・。なんか、キャツシユの姿しているせいであまり強そうに見えないんだよな」

「あんまり気を緩めるのはよくないけど、その意見に関しては同意をするわよ」

「これで終わったのでしょうか？」

「武君と美波さん、あまり気を緩めるのはどうかと思います。姫路さん、そういうのは大抵なにか起こるパターンですよ」

「そうだよ。全く・・・美波はバカなんだからっていだだだだ!!」

サルベージシヨンの姿で意識は明久に譲るととんでもない台詞を島田にいうと、ここから先の展開は読めてしまった自分は悪くないはず・・・

「だ・れが・バカなのかしらねー？」

「つちよつと!?!僕もいるのだけど!?!ってか明久は一言余計!!」

「私をバカといった馬鹿にお仕置きよ!!!」

「「ガフツ?!」」

「のび太君と明久君の意識がひとつになって変な声出てしまった!?!」

「のび太が意識とんだ!?!この悪魔あ・・・あ」

「誰が悪魔かしら?そこのところ・・・体に聞くわよ!!」

「つちよごめんなさああい!!」

数分後なんとか僕も意識取り戻す前に明久を呼び掛けたが屍の返事しかなかった・・・。そんな中、島田は美子さんにお説教されていた

「全く・・・今の体にはのび太くんもいるのだから気を付けなさいよ」

「はい・・・ごめんなさい」

「普段の癖をすぐに直すのは無理かもしれないけど、やりすぎよ」

「はい・・・」

「・・・いやいや、気緩みすぎじゃねえか？」

ジャイアンと雄二が合体した姿・・・確か名前はチーフだったよね・・・？チーフ姿で人格はジャイアンが発言していたら、スネ夫が疑問そうにきいてた

「ってかなんで名前がチーフなの？明久達のもだけど・・・」

「あん？そんなの決まってるだろ？」

「へ？」

「剛田武はガキ大将で俺はクラスの代表っていう共通点があるから、名前をチーフってした」

「色々突っ込みたいところはあるけど・・・のび太君達の名前は？」

「サルベーション。意味はー」

「その名前の『意味は救いを求めるもの』でしたよね？」

「姫路さん、正解。これの意味はのび太が教えてくれたのだけだね」

「これの名前した理由は言わないけどこれのひとつの意味として明久に当てはめて思い付いたのさ・・・」

「あなた達気を緩めすぎじゃない？」

「あ、留留璃さん。先までいなかったとにどうやってあのタイミングで出てきたの？」

「ふふん、それはね、私か透明マントを用意したの」

「そういつて、さきまでいなかった場所からドラミちゃんが現れてきた。そこで僕は納得した」

「つまり、ドラミちゃんが持ってきた秘密道具の【透明マント】でタイミングを見計らっていたってこと？」

「ええ、ルカさんにルナさん、そして留留璃さんは能力使えるからわざと透明マントで存在を隠していたの」

「ドラミ、コンピューター室に向かった皆はどうなっている？」

「少しまってね。へこちらドラミ。里緒菜さん達、そちらはどうなっていますか？応答お願い？」

ドラミちゃんがコンピューター室にいる冬花さん、里緒菜さん、清水さん、霧島さん、秀吉、ムッツリーニがいるので確認をとると返事があった

へ・・・こちら、ムッツリーニ。コンピューター一部解除はなんとか

できた」

「「「おお!!」」」

「ん? まって・・. なんとか一部できたってどういうこと?」

〈現在別のを解除してるということだけだね〉

「さて? それはいつたい何を解除しているんだ?」

〈・・・. ついさつきまでミュータントの強制封印していた〉

「「「?!」」」

ムッツリーニのその言葉を聞いて全員が驚いていたが、ドラえもんとドラミちゃんは何故か冷静だった

「あのーなんで二人は落ち着いてるの?」

「ん、ああ。美子ちゃん達にきちんと説明していなかったね」

「「「へ?」」」

「のび太君、昔ミュータントの説明したことを覚えてる?」

「うん。・・. あ、そういうことか!」

ドラえもんの言いたいことに僕は理解して、なぜそういう言い方したのか気づいた。そんな皆は? となっていたので、ドラミちゃんが説明してくれた

「実は未来の世界でミュータントは勝手に自身のミュータントを増殖させていたの。そのせいで国連軍が出撃する事態まで起こったの」

「「「ええ!?!」」」

「じゃあ未来が壊滅したのは・・. ?」

「恐らく、増殖したミュータントが破壊衝動で起きた可能性はあるかもね」

「けどあくまでも可能性だからこそ、一つだけ嫌な予感があつて・・. ミュータントの装置の制止してほしくって急遽頼んだのさ」

「これでミュータントが大量発生することはないというわけか・・. あんなの数多すぎたらきついからな」

チーフ姿でジャイアンの言葉に皆はげっそりしながら頷いていた。確かにあんなの数多すぎたら本当に全滅もあり得た・・.

「さて、そろそろ解除をー」何も力がない人間ごときが・・. 調子のルナー!?!」

「「!?」「」」

「きゃっ!?」

「うわっ!?」

「っ!あぶない!!」

ルカとルナさんがどこから来た攻撃に弾き飛ばされて壁に直撃し
そうになると、ドラミちゃんとドラえもんがタケコプターを取り出し
て二人を受け止めた

「おいさっきの攻撃は・・・」

「まさか・・・!」

「まだ・・・戦いは終わってないぞ・・・!!人間!!!!」

「!!」

完全に倒したと思われたキャツシユ姿のミュータントが立っ
た・・・

くそ!!まだ戦いは終わらないってこと!?最悪のことが頭によぎ
た・・・

「三人とも僕らに捕まっつといて！（いきなり叫んでいったい何が起るんだ!?）」

「a a A a A a A a a!!!」

まだ叫びながら風が飛び散るなかスネ夫が果敢に立ち上がり叫んだ！

「何をするのか知らないけど・・・止めてやる！」

「スネ夫!？」

「特殊能力発動!!!」【無敵砲台!!】

「a a A a A a A!!!」

「ターゲットは目の前にいるミュータント!!・・・射てえ!!!」

「ーードオオオオン!!!」

スネ夫の号砲と共に発射されてミュータントの方へ向かい、そのまま防がれる様子はなく直撃した・・・

「やった!？」

「いや・・・防がれた・・・っ!」

「「「「え?!」」」」

スネ夫の言葉に皆は驚き、僕らは飛び散っていた爆風の方をみると・・・そこにたっていたのは・・・

「・・・aaa・・・!」

「・・・キャツシユ・・・の姿ではない・・・!？」

「な、なんだ・・・?あの・・・姿は!？」

「な・・・なんだあれは!？」

僕たちの目の前のキャツシユ姿だったミュータントは面影は見当たらず、目の前にいるのは、ただ破壊するための化け物としてたっていた

「全体的に灰色・・・そこだけ変わった感じだけどなんだ・・・この不気味な・・・寒気は・・・」

「・・・」

「気を付けろ、スネ夫!何かしてくるぞ!」

チーフ姿でジャイアンがスネ夫に警告出すと同時に僕らは本能的に美子さん達の前にたつた

「?アキ、のび太?」

「どうしたのですか?二人とも」

「のび太君・・・吉井君?」

「スネ夫もこっちに下がって!」

「わかっー・・・え?」

スネ夫も本能的にヤバイと感じたのか僕らのほうに下がろうとすると、何故かスネ夫は動きを止めていたので気になりみると、いつの間にかミュータントがスネ夫の目の前に迫っていた

「なっ!」

「ミュータント?!」

「死ね・・・」

零距离でミュータントはスネ夫に何かしようとするの気づいた僕はミュータントをめがけて銃をはなつたがー

「防がれた!?くっ!」

「ぶっ飛べ・・・」

「うわああああ!!」

「スネ夫!」

スネ夫はミュータントの手によって弾き飛ばされていた。それを見た自分達は不味いと思い、ドラえもんがスネ夫のほうまで飛んで止めにはいった

「止めても勢いが止まらない!」

「ドラえもん、手を離さないとおぶないよ!っああ!!」

「a a A a A a!!」

「!がはっ!」

ミュータントの念力と思われる攻撃に耐えきれず、二人とも壁に打ち付けられた。それを見たルナさんとルカさんが攻撃しようとする制をとっていたが、僕は止めようとした

「待っんだ!!」

「ルカ!」

「わかってる!はあああ!」

「・・・A a A a A!!」

「!？」

ルカとルナさんの攻撃がミュータントの叫びにより弾かれた。それを見た僕らは本能的に叫んだ

「全員下がれええ!!!」

「キエロオオオ!!!」

「!」「うわああああ!! (キヤアア)!!」「!!」

ミュータントは手を大きく広げると共に爆風が飛び散り、僕らは美子さん達を庇いながら飛ばされた・・・

「つく・・・」

「全てを・・・破壊し尽くす!!!」

ああ・・・これは・・・本当の最悪の展開だ・・・

決死の覚悟

絶望……

まさに今日の前にいるミュータントに対する評価はそれだけでも足りない……

「っが……いてて……」

「つけほけほ……っ、美子さん、姫路、島田は!？」

僕らはすぐに美子さん達の状態を確認しようと周りを見てると僕は啞然としていた

「(ジャイアンと雄二……つまり、チーフは起きているけど、その後ろに真理亜さんとルナさんとルカがいるけど……倒れている!?)」

「(ドラえもんやドラミちゃんもダウンしてる……。静香ちゃんも……留瑠璃も……スネ夫は……。そこでダウンしていたか)」

「(く、まさか……。まだ戦う気力あるなんてね)」

「(……明久……)」

「(なに?!のび太……え?)」

「(ごめん……。どうやら時間切れかもしれない)」

「(時間切れ!?まさか分離することになるの!?)」

「(それはね……。勝つための作戦としての手詰まりだよ……)」

「(紛らわしいよ!!何のび太らしくないことをいつてるのさ!!)」

そう、今僕らやジャイアンたちの二人以外はみんなダウンしてるし、後ろには美子さんや姫路達がいる……。このままでは本当にやばい

「キエロ……。キエロオオ!!」

「くそー!」

僕らは美子さんや姫路たちを横へ飛び込むと、先までいた場所は瓦礫に埋まっていた。もしあのまま受け止めれば……。そう考えるだけでもゾツとする

「このままでは……。っ！チーフ、ドラえもんかドラミちゃんの四次元ポケットをとって!」

「おう！」

「キエロ!!」

「ああもう！なに化け物姿になってるのさ！こっちだ化け物！」
「グッ!」

僕は石を思い切りミュータントに目掛けて投げると奴は苦痛の声をあげていた。その声を聞いた僕は奴の上に銃を打ち放すと、瓦礫が下へと落ちた

「チーフ！」

「おう！」

僕の言葉と共にチーフは美子さん達のいる場所へと真理亜さん達を運んできた。そして、僕はすぐに四次元ポケットであるものを取り出した

「あつた！」

僕は目的のものを見つけると、それをすぐに取り出した。もうこれ以上・・・仲間に深い傷を負わしたくない！

「これでーっ!?!」

僕はそれを取り出そうとすると体に異変を感じた。明久と僕の感覚がだんだん合わなくなってきたのに僕は寒気を感じた

「・・・もうこれ以上取り返しのないことになる前に・・・とる方法はただ一つ・・・か」

僕はある秘密道具を手元に持ちながらこれ以上最悪の方法で最低な方法なのはわかってるけど・・・ね。僕はこれ以上の被害を出させないために明久と心の中で会話していた

「(のび太、さっきの時間切れって本当は僕らの一体化がもう限界近づいてるのよね?)」

「(うん。わかってたんだね?)」

「(そりゃ、のび太と一体化していたら分かるよ。けれどここまで来たらもう僕も君も共に戦おうよ)」

「(命・・・本当に落としかねないよ?今ならまだここで分離して君だけ姫路達の方に・・・)」

「(それは無理。それにのび太、いくらなんでも一人で戦うのは無理で

しよ？何せ片腕は現在進行形で痛めてるのだから」

「(けれども・・・)」

「(ここまで来たら運命共同体ってやつさ！分離しても共に戦うよ)」

「(そっか・・・最後に確認するよ？もう・・・2度と帰ってこれないかもしれないんだよ？ーってことをするのだよ？)」

僕はある決意を明久に話すと明久は最初はその作戦を反対していたが・・・もうこれ以上の方法はないとうと明久は諦めた

「(運命共同体といったけど、他の方法はないの？)」

「(ない。それに覚悟の上だよ・・・あれを止めるにはもはやこれしかない！)」

「(・・・わかった。じゃあやろう！)」

僕らはお互いの合意の上で覚悟を決めた。もうこれ以上仲間が傷つくのがみたくないと決めた僕らはもうこれ以上言葉を交わさなかった

「チーフ!!!」

「なんだ?!こんなときに!?!」

「・・・いつもありがとう。僕らの友達としていてくれて」

「は?いきなり何を・・・」

「(ここから先は僕が・・・僕らがけじめをつけないとダメだから・・・ね」

僕らは化け物になったミュータントを目掛けて、銃を撃ちながらいくつかの秘密道具を持ち運んだ

「まさか・・・まで!?!」

「!?!」

「さよなら・・・皆!!【タイムストップ】!!」

その瞬間僕の回りはみんな止まった。もちろんミュータントも例外ではないが・・・

「時間は限られてるよね・・・【スーパー手袋】!!」

「!!!」

「よつと・・・(ここ)でいいかな?」

僕らは最後の仕上げといわんばかりに端と端の間にテープを引い

て、先までなにもなかった場所に空間ができたのでミュータントをここにほりだして、僕は最後の一瞥として止まっているみんなの方を見ようとしたが・・・

「ぐっ!! ああああ?!」

僕らが一体化していたのが光に包まれて元の体に戻った・・・

「なんとかギリギリで分裂したかな」

「だね・・・。さて、チーフの方にいくか・・・ってあら? (ポチっ?)」

明久がチーフの近くへと歩こうとするとチーフの頭に当たり固まっていたはずのチーフが動き回りを見ていた。そして、僕らの方を見て・・・

「・・・ああああ?!」

分裂してしまった僕らに指を指しながら、叫んでいた。巻き込まないようにしようとしていたのに・・・

「のび太、明久いつ分裂していた!? ってかミュータントは!」

「あそこにいるよ。そして、さっき分裂した」

「・・・お前らいったい何をするつもりだった?」

「ミュータントを閉じ込めるために、そしてそこで僕らは倒すつもりだった」

明久がチーフの質問に答えて、僕はこの後をどうするつもりだったのか説明をしていた。あれを閉じ込めて戦うといった瞬間・・・

「いっだっ!」

「このばか野郎!! なに二人だけで決着をつけようとしてる!」

「いでで・・・」

チーフは怒鳴りながら僕らの頭をげんこつに叩き込めて話していた。そんなメッセージを聞きながら頭を押さえていたが・・・

「どうせ・・・いくのなら俺もつれていけ」

「チーフ・・・」

「お前たちの戦いは俺の戦い。俺の戦いは俺の戦い。つまり、お前達がまだ戦うなら俺も戦うよ」

「・・・ありがとう・・・」

僕はその言葉を聞いてなにも言えずに、僕は小さく感謝してい

た。そして、僕らはゆっくりとあの空間のある場所へと歩き、その足を踏み入れてから美子さん達の方を見た

「何度もさよならになってごめんね……。でもこれしか方法ないんだ……。君たちが傷つかず、命をおとさない方法は……（助けに来てくれたとき本当に嬉しかったよ……。美子さん）」

「のび太……」

「だから今度こそ……。さよなら!!」

僕は僕らのいる空間と美子さん達がいる空間の線を切るのと同時に時間を再び動かした。本当に……。あいつだけは永久にこの空間から出さないように戦うよ……

さよなら!!

ーーぶちん

そして……

僕らとミュータントはこの世界から……。消えた……

残されたもの

翔子 side

私と清水と冬華と里緒菜とで優子の弟の秀吉と土屋康太がいるところへと向かってコンピュータ室で作業をしていた

「よし！あともう少しでおわりそうじゃ！」

「・・・救助かった」

「いいえ、御姉様のご友人が頑張ってるのを手伝わない訳にいきません！」

「私も里緒菜御姉様も武兄様達を助けるためにはこれくらいしかできないので・・・」

「しかし、パソコン打つスピード速いですね」

「慣れていきますから」

清水の言葉に冬華と里緒菜が同時に返事しながら次々と状況を打開していた

「!？」

「どうしました、霧島さん？」

「・・・いや、なんでもない・・・」

いま・・・雄二の声が聞こえた気がしたけど・・・気のせいかな・・・？

美子 side

何かが私を呼ぶ声が聞こえた。だれかがわたしをよぶ声をしていました

「うっ・・・ん」

私はその呼ぶ声から深い眠りから、目を覚まして回りをみると驚いて叫んだ

「ドラえもんさん、ドラミさん!?美波、瑞希、留瑠璃!?しっかりして！静香さん、ルカさん、ルナさん、真理亜さんも！」

「「「「「・・・」」」」」

「おー・・・いい」

「!その瓦礫に声が．．つて、もしかっつ!!今助けるわ」

私は声をした方向にいくと、そこにはスネ夫さんが目を回してダウンしていた。私は急いで瓦礫をのかすと、スネ夫さんは目を覚ましていたのかゆつくりとおきあがっていた

「助かったよ．．ありがとう三上さん」

「いえ．．．」

「いたたた．．っ、美子、スネ夫さん!無事だったのね」

「つつつ．．体が痛い．．」

私はスネ夫さんを助けたあとと同時に真理亜さんや他のみんなも目を覚ました。みんなが起き上がるのを見て正直、安心した．．

「良かった．．．」

「．．．あれ?」

「どうしたの?瑞希?」

私は安心したのと同時に瑞希が何故かキョロキョロ見ている。そういえば、今いる人数は??

「いえ．．今いるメンバーを見て疑問に思ったので．．．」

「疑問?どこがよ．．」

「えーと．．まずは女子ですね。」

真理亜さん、留瑠璃ちゃん、美波ちゃん、私と静香さんに美子ちゃん、ドラミさん」

「男子は骨川さんにドラえもんさん．．あら?」

「!」「え?」「!」「!」

まさか．．．!」

私たちは急いで起き上がり周りの状況を確認していた

「いない．．!のび太君や吉井君やチーフとなった剛田君や坂本君がいない!」

「武君つ．．!?!まさかミュータントにー!?!」

「いや、そんなのは関係ないみたい」

「え?」

ドラえもんさんの言葉に真理亜さんは啞然としていた。その言葉にみんなも??つてなっていた

「どういうこと?」

「よく周り見て…のび太君たちだけではなくミュータントの姿は見えないよ」

「!!」

「本当ですね…。私たちが倒れている間に何が…?」

「何があったんだろう…。って…。あー!!!」

「「「(ビクッ)!?!」」」

ドラえもんさんの絶叫に私たちは驚いて飛び上がった。ドラえもんさんほどの人がいったい何があったの!?

「お兄ちゃん、急に叫ばないでよ!?!うるさいよ!」

「な…。な…。な…。」

「「「「な?」」」」

「なんてことをしてくれたああああ!!あの四人は!!」

「お兄ちゃん?」

「【タイムテレビ】を出すからみんな見て!!!」

タイムテレビ?つまり、過去の映像を見ると言うことかしら?あら、でもそれなら現代のビデオとかと同じ原理ではないのかしら?

「みんなこれを見て!」

「私たちの動きが…。止まっている?ほれに吉井君とのび太君が分裂してる!?!」

「恐らく、のび太君達のが時間切れて解除になったのだとおもう。つてことはのび太君達が時間を止めたと思われる道具は【タイムストップ】か!」

「あれで手袋をはめてミュータントは別のところへ投げられた?つてことは、【スーパー手袋】で移動させたみたい」

「あれ?映像が動かなくなっただぞ?おかしいな」

突然、映像が止まりドラえもんさんがタイムテレビ本体を叩いていた。私は何となくそののび太君達がかかっていた場所の方角をみると…

「あれはなに?ドラえもんさん」

「あれ?…。!」

「なんかテープみたいなの……」

「つちよ、ちよつとごめんなさい!!」

留瑠璃さんの言葉にドラえもんさんはその指された方向をみると、目を見開いていた。そして、静香さんの言葉にドラミさんが急いでそのテープが落ちていている方のあるところまでいくとそれがなにかわかって落ち込んでいた

「ドラミさん!」

「そんな……なんて……ことを……」

「ドラミさん?」

「ああああ……そ……そんな……」

「ドラえもんさんまで?!」

「ひよつとして……その秘密道具ってまさか……?」

骨川君がなにか気づいたのか真つ青になりながらそれを指していた。そして、ドラえもんさんはその意図にきづいたのか力なく頷いていた

「うん。スネ夫の察してる通りだよ……あのテープは……【地平線テープ】」

【地平線テープ】って……!」

「それってまさか!!」

「うん……そして、美子ちゃんや瑞希ちゃん達には受け入れられない話だけど……」

「?」

「……のび太君をはじめとするジャイアン、明久君、雄二は……もうこの世界に……帰ってこれない……」

「……え……?」

「嘘……ですよね……」

真理亜さんの言葉にドラえもんさん達は悲しく首を横にふっていた。つまり……もう……本当にのび太君とは……会えないってこと……

「いや……いや……!!!」

「瑞希、美波?!」

私は美波と瑞希の方に駆け寄り絶叫してる二人をなだめていた。真理亜さんは呆然としていて、消えたと思われる空間の方へと眺めていた。骨川君は悔しそうに下を向いていて、静香さんは優しく肩を叩いていた

あなたは本当に……身勝手よ……
バカのび太君……っ！

覚悟

「……?」

「僕は今日の前にいるミュータントを相手にそれぞれたっていた。そんなミュータントは怒りながらも戸惑いながらも聞いてきた」

「オマエタチハイツタイナニヲシタノダ!」

「先程、時間を少し止めたのさ。お前を倒すための優先としてな」

「ジカンヲトメタ!」

「そうだよ。未来の秘密道具で【タイムストップ】を使つて時間を止めたのさ!!」

「(なんでチーフは自分達が考えたようにいうのかな?そして、明久の言い方間違えてる気がするけどそこはスルーだけど……)どちらにしてもここは思いきり戦える場所だ。……お前はここにいるメンバーともここに戦ってもらおう」

「ナニ!」

「僕らの言葉に本当の化け物姿になったミュータントは驚いていた。どうやら理性とかまだ驚く感じとかも出せるのね……」

「ドウイウコトダ!!」

「どうもこうも……この世界は僕ら以外は誰もいない!そして……お前も僕らもこの世界から出ることはできない!!」

「正気カ!ソノ言イ方ハマルデ……」

「そうだよ。……ここでお前を倒す!!」

「ムダナコトヲ!!コチヲヲトジコメルナラマダシモ!!倒すノハ不可能!!」

「確かにミュータントを閉じ込めておけば平和くつてなるわけかもしれないけど、そんなのはありえないのは僕が一番知ってる」

「何より、俺達ものび太もここでお前を決着つける方が良いと判断したんだよ」

チーフが指をポキポキとならしながらミュータントの方に歩いていった。そして、僕は明久にあることを耳打ちしていた

「明久」

「ん？なに」

「ポケットにあればある？」

「あるけど・・・？」

「今からやり方を教えるから、僕らが時間を稼いでる間に隙についてやってね？」

僕は明久に耳打ちをしながらやり方を説明していた。それを聞き終えた明久の感想は・・・

「それ本当に効果があるの？」

「ある。恐らく奴に勝つ方法はそれが一番と思う」

「まあ・・・作戦は分かったよ。やってみるから時間稼ぎ頼むよ！」
「うん！」

明久は僕の説明に納得して、この作戦を決行することにした。あとは明久の運次第でもあるけどね・・・

「チーフ、敵は一人。まだまだやれる体力はある？」

「当然だ！しかしあれだな」

「ん？」

「ミュータントがあそこまで化け物になるのは予想してなかったな。あれを見たらまあ何て言うか・・・」

「怖い？」

僕はチーフの返す言葉になんとも理解はしているけど敢えて和ますようにそして、励ますように声をかけた

「怖い？は、バカいえ。心の中の剛田武と坂本雄二の気持ちは一致している」

「へえ、その今のふたりの気持ちはなに？」

「強い相手をぶちのめせるのは中々ないから楽しみだ。後は雄二個人的にストレス発散できるチャンスだよ！」

「だろうね。僕もあいつに好き放題やられたから・・・この手で倒すチャンスができてよかったよ（まあ、その手を作るチャンスを自分で作った代わりに大きな代償を払うことになったけどね）」

チーフは軽くシャブ？だったかな・・・それをしながら楽しそうに笑っていて僕は僕で苦笑いしながら、心の中では残ってしまった大切

な彼女に申し訳ない気持ち一杯だった

「(こんな最低に男を好きになっってくれた美子さんは本当に僕にとっ
てはもったいない人・・・) 準備は良い？」

「おう」

僕は軽く拳をあげながらゆつくりと歩いた

もうあとは戻れないのだから・・・

「ミュータント、覚悟しろ!!」

ここでなんとしても命を懸けてでも止める!!

異空間での激戦

僕とチーフは最初から倒すつもりで走りながら攻撃態勢に入ると向こうもやられるつもりはなく、むかえうっていた

「モウ、手加減ハシナイ!!!」

「もう手加減しないのはこちらの台詞だ！チーフ、くるよ！」

「おうよ！」

「キエロオオ!!」

触手みたいな鋭い攻撃が無数僕らの方に攻撃を加えてきたので、僕はチーフに指示を出した……

「チーフ、横に飛ぶんだ!!」

「おう!!」

「アアアア!!!」

僕の言葉にチーフも横へ飛んで避けていた。するとその場にいた場所がえぐれていたのをみてチーフが舌打ちしていた

「つち！（今いた場所にはかなり抉れた後になっていやがる……!）」

「攻撃力は鋭く、速いのか……。何て言うか、厄介だね」

「確かに理性を失いつつ攻撃は遠慮なく破壊力も抜群だな……。ひとつでもダメージ受けたらこれは骨折ですめば御の字ってやつだな」

「チーフ、骨折ですむ前提で話すのはやめておこうよ？それにしてもなにもない空間であれだけの破壊力は恐れ入るよ」

「つてか、先ほどの攻撃した跡が何も無いようになってるな」

「まあ、ある意味ここは脱出する方法がない世界だからね……。っと！」

僕はまた飛んできた触手の攻撃を避けながらせめてを考えていた。少なくとも、接近をするにはあの触手を潜り抜けないとダメだから……

「なら遠距離での攻撃はどうだ！」

僕はミュータントに射撃による速打ち攻撃を仕掛けるが、ミュータントは冷静に念力で攻撃を止めていた

「アアアア!!!」

「っ！やっぱり理性は失いつつもミュータントはミュータントか……

ならば、頼むよ!!」

「おう!!」

再び飛んでくる触手攻撃にチーフがつかみ取り、それを・・・

「ふんうう・・・!!」

「アアアア!?!」

「りやあああ!!」

「ちぢった!?!」

チーフが触手をきれいにちぎる行為をしていたのをみた明久が驚いた声をあげていた。まあ、作戦をたてた僕も驚いてるけどさ・・・

「アアアアイタイタイ!」

「のび太!触手なくなったぞ!」

「ナイス!」

「!」

「頭を狙っては気づかれる・・・なら、足元はどうだい?」

「!」

僕は弾丸をひたすらミュータントの足元に打ちまくっていた。すると、念力で弾き返したらいいものの、後ろに下がっていた

「(どうやら計算通りか!?) いけ!チーフ!!」

「ナツ!」

「チーフスペシャル技!! 空手回し蹴り!!」

「ガツ!」

「から・・・の!!コンボ技!!くらえ!数々の痛みを味わった剛田直伝技!!母ちゃんの往復ビンタああ!」

「!!?!」

「・・・いや、あのさ・・・ここだけの話だから言いたいんだけど、回し蹴りはさすがに普通に攻撃したらいいのでは??と思っただが生き生きと攻撃してるから口を挟むのはやめておこう

「な、なぜ通用してるの?さっきまで効かなかったのに!」

「明久、これはさっき僕らも気づいたのだけど超能力には限界があると気づいたのさ」

「限界?」

「そう、限界」

僕は明久のそばによりながらチーフの怒濤の攻撃を見つめて説明を入った。ってか、これを気づいたのは本当についさつきだよ

「いい？人間の集中力は一説には集中力は15分、45分、90分ってなっている。けれどこれは個人差なわけ」

「え?!で、でもあいつ全く集中力とか落ちてないよ?」

「でも、あいつはミュータントの前にMr. キャッシュがいる。ただの怪物なら永遠に持続するのはあり得たかもしれないが・・・よつと」
「つまり、キャッシュと一体化してるから集中力の限界もあるって言うこと?」

「そう。これはあくまでも僕の仮説だけだね」

僕は苦笑いしながら、明久に念を押した。ただ、どうやらあれを見る限り集中力が持続するには限界が来たみたいだ・・・

「ちよい遠いけど、ここで畳み掛ける!!!」

「のび太・・・?」

「チーフ!!!」

「おう!!」

ここで畳み掛けるチャンスだと思い、僕は右手にある銃をミュータントにかかげて攻撃の狙い目を定めた。すると、チーフがこちらの呼び掛けた意図が気づいたのか

「おりゃああ!!」

「!!!」

高く飛んで怪物になったミュータントの頭を地面に叩きこむと僕はジャイアンに下がる指示を出した

「下がって!」

「とどめはまかせろぞ!」

「うん!」

「(腕が痛むけど・・・限界を越えろ!) お前との戦いはここで終わるだ!!」

「青二才ガアアア!?!」

「撃ち抜け!!」【ジャンボット・・・】

あいつは怒り狂いながらこちらに突撃攻撃を仕掛けてきたのをみて僕は冷静に狙いを定めて……

「クタバレエエエ」

「……ガン」!!」

「!!」

ミュータントに銃を容赦なく引き金を引くとミュータントは回避行動がとれずに僕の攻撃光に飲み込まれた……

打開策は・・・？

ドラえもん side

僕は現在必至に頭を悩ましながら、この現状を考えていた。のび太君達四人は完全に別世界に行ってしまったし・・・しかも断空されてしまったから行く術がない・・・

「ドラミ、どうしたらいいと思う？」

「うーん・・・」

「ドラえもんさん、ドラミさん。提案があるのですがいいですか？」

「留瑠璃ちゃん？」

僕はゆつくりとこちらに歩いてくる留瑠璃ちゃんの様子に？となりながらも向き合っていた

「先程の説明からして彼らの居場所は这个世界ではないと言うことですね？」

「うん」

「では、こちらから世界を繋ぐことはできないのですか？」

「世界を繋ぐこと？」

「はい。そのドラえもんさんの道具で再びその世界の境界を作ることにはできないのですか？」

世界を繋ぐ方法・・・つまり先程映像で手ていたあの道具でのび太君達のいる世界を繋ぐ

「・・・確かにそれなら確実性はあるし、助けられるけど・・・」

「けどなんですか？」

「・・・もしもそちらの世界に助けてにいけない・・・のび太さん達と一緒に戦うのは難しいわ」

「ドラミ!？」

「なんでそう思ったのか教えてくれない？」

留瑠璃は怒るところが冷静にドラミの方を見つめていた。対するドラミも冷静に落ち着いて理由を述べていた

「いくつかの要因はあるけど、のび太さん達がとった行動のわけよ」

「訳？」

「そう。のび太さんがあんな自己犠牲に近い行動をとるのは少なくとも誰かのためにあんな行動をしていると私は思うの」

「確かに・・・のび太君は誰かのために頑張るものね・・・」

「それに今の状態で繋げたら・・・折角、のび太さん達の決死の思いで起こした行動が無駄になってしまうわ」

「「・・・?」」

「それってまさか・・・」

「つまり、のび太君達は美子ちゃん達にこれ以上大ケガを負わしたくなかったからこそあんな行動をとったの」

「いまだに納得してない部分のある留瑠璃ちゃんに僕は分かりやすく説明をしていた。少なくとも、ドラミの言い分も正しいところがある」

「ルカとルナちゃんも含めて今この場で現状的に満足に動けるのは僕とドラミと留瑠璃、そして・・・」

「僕と」

「私ね」

「静香さんとスネ夫さん・・・」

「いや、貴方は先程までボロボロだったじゃない?」

留瑠璃が指摘する通り、スネ夫はボロボロだったはずだ。なのに何でそんなに動くの?!

「のび太とジャイアンはむかしから考えなしでしょ?だったら、その間で止める僕がいないと二人とも・・・迷うじゃない?」

「そうね。それにドラちゃんもドラミちゃんもいる。こんだけのメンバーがいるならきつとなんとか出来るはずよ」

「・・・確かにね。ん?静香ちゃんその手元は?」

「ああ、これ?・・・もしかしたらミュータントに倒す方法はこれが一番いいのかなって思ってた」

「・・・賭けてみよう」

「「うん!」」

方向性は決まった。これ以上は美子ちゃん達の負担をかけないためにもここは僕らが・・・

「……まつて……」

「美子ちゃん？」

「私も……「ダメよ」……留瑠璃……」

「今のあなた……精神的に不安定でしょ？それに、姫路や美波、真理亜も同様よ。そんな精神状態ではミュータントが出てきた場合あなた達は一瞬で操られるか捕まるの二つよ。戦える状態ではないわ」

「……でも……」

「でも何も無い」

「……」

美子ちゃんが目を真つ赤にしながら反論をしようとしていたが、留瑠璃は真つ直ぐに否定していた。正直、のび太君のことを心配してくれているのは僕としても嬉しいけど……

「覚悟はあるわ……」

「え？」

「私たちにも覚悟はあるわよ!!例え、嫌われても!!大切な人をほっておく訳にはいかないじゃない!!」

「!!」

美子ちゃんがこれまでにない怒りと叫びを聞いて僕らは驚いた

「それに……私はまだ謝っていない!!だから……私は……私達は……」

「はあ……わかったわ。そこまでの覚悟あるのなら止めないけど、危ないと思ったらすぐに引いてもらうわ」

「わかったわ」

留瑠璃と美子ちゃんはまっすぐな目で話し合っつて約束ごとを決めていた。それを見た僕は心のなかで留瑠璃の正体を僕はなんとなくわかってきたが……

「(留瑠璃……もしかして君は……ううん、それはあとで!) なら、まずは……【取り寄せバッグ】!!」

「取り寄せバッグでどうするの?」

「一応、のび太君の家で置いていたものがあるからそれをとるの……あつたあつた!【バリアポイント】ー!これを……スネ夫と静香ちゃ

んに渡すね?」

僕は二人にこの道具の説明をしながら手元にある「バリアポイント」を二人に渡した

「そして、僕とドラミはこのテープを繋げておく。美子ちゃんは……」
「三上さんは、これを使ってほしいの」

「これは?」

「ひらりマント」。名前のごとくひらりと交わしてくれるマントよ」
「これでもしもなんかの攻撃が飛んできたらこれで弾いたらいいよ」
「わかったわ」

僕は今現状を持っている作戦を伝えるとスネ夫はルカとルナちゃんのようにだつてらバリアを張り込んだ。静香ちゃんは現状心が落ち込んでる女子達をまえにバリアをはった

「必ず成功させるよ」

「ええ」

「3……2……1!!」

「いまよ!」

僕とドラミはのび太君達があ道具を使った場所へ繋げるとー

何かが空に思いきり飛んできた……

二度あることは

これは数分前までの話……

僕らは連帯を取りながらミュータントに最大の攻撃とも言える召喚獣最大の技を僕はあいつに向けて攻撃を与えた

「ジャンボットガン」!!」

「!!」

「「いけえええ!!」」

僕の代名詞ともいえる射撃とその召喚獣の特殊能力の名前を叫ぶとミュータントはその攻撃の光に包まれて……

そこにいたのは……

「ミュータント……ではない?」

うつ伏せに倒れているのを見た明久が疑問を漏らしていた。それをきいた僕は警戒しながらゆつくりと歩くと……

「……」

「キャツシュ!」

「ミュータントは消滅したのか?」

「さあ……?とりあえず、キャツシュは拘束するか」

ダウンしてるキャツシュだったが、ここに出れなくつてもどのみちこいつは捕まえないとまた悪い事をするからきつちりしておかないとね

「のび太、こいつを捕まえたのはいいが脱出できないだろ?」

「まあね」

「え!?脱出できないの!」

「うん。言ったでしょ?」

「あれ、嘘の方言ではないの!?本当だったの?!」

「いや言ったよ……。あ、チーフとりあえず、きつちりと捕まえた?」

僕の言葉にチーフはわるい顔をしながらうなずいていた。あの顔はなにかたくらんでるのかもしれないけど……もう少し我慢しようよ

「のび太、脱出できないならどうするのさ!!」

「慌てない、慌てない」

「そーそー、落ち着け」

「なんでのび太とチーフは落ち着いてるのさ!?!この世界から出れないならなにか道具ないの!?!」

「ないよ。この世界から出る道具はない」

「そ、そんな・・・!?!」

「まあまあ気長に休もうぜ。・・・さすがに俺達も分離の時間みたいだがな」

「え?。」

そう言うや否僕らの前にチーフはゆっくりと光に包まれて・・・

そこにたっていたのは・・・

「ああ、ようやく自分の体に戻れたぜ・・・。中中いい感じで体を動かせたな・・・」

「全く・・・合体やら何やらでワケわからん状態から今に至るまで俺は疲れたぞ・・・」

「お疲れ、ジャイアンに雄二」

僕は分離した二人にお疲れをいうと二人もニヒル顔で返事してくれた。僕らが話し合っていると、キャツシユがゆっくりと逃げるのが見えた僕は・・・

「ひいひい!?!」

「逃げるな」

銃を上に向けて発砲すると、キャツシユは悲鳴声をあげていた。そんなキャツシユに僕は警告の意味も込めて逃げるなど伝えると顔色がわるいようにこちらを見ていた

「俺達の仲間にずいぶんとたくさん姑息な真似をしてくれたな。Mr. キャツシユさんよ・・・」

「な、な、な・・・」

「そう言えばそうだったね。よくもこの僕を操ろうとかのび太を操ろうとか姑息な真似をしていたよね。全く・・・逃げれるとも思ってた?。」

「ま、のび太はともかく明久のは俺の大切な人も人質して操るとかひどい姑息な手を使った事実はあるわけだし．．．（ポキポキ）」

「ゆ、ゆ、ゆるしてくれ．．．」

「まあまあ皆の気持ちもわかるけど．．．ここで裁くのは違うでしょ？」

僕は怒り心頭の3人に冷静さをたしなめるとキャツシユは僕の方に神様をみたかのようにこちらを見ていたが．．．

「この世界から出れたら裁こう。法で守られてるのは温いからね」
「!?」

僕の言葉にキャツシユは絶望を抱いた顔をしていたが、僕はそんなので優しくしてあげるほど今は気分もよくない

「許すとも思った？はは、そんなわけないでしょ？僕の命変えてでも守りたい美子さんをひどい目にあわしたり、拉致したり、洗脳したり．．．そんなことまでしてまでこの僕が許すとも思ったか？」
「ひいひい!？」

「二（あ、のび太が激怒モードだ。合宿の時の見せたときよりも恐ろしい．．．）二二」

「（なんか今失礼なことを考えていたね？）キャツシユ、お前は．．．自分がどれだけでもないことを引き起こしたのか理解してるのか？」

「．．．．（な、なんだ!?!このわたしが震えてる!?!）」

「．．．．そもそも、僕に恨みあるならもつと堂々と攻撃したらいいのに．．．まさか、そこまで、姑息な手を好むと思わなかったよ．．．ねえ？Mr. キャツシユ」

「あ、あ、あ．．．」

「女性を大事にしない上に仲間を傷つけ挙げ句の果てには．．．その過信した結果僕らに負けたじゃないか．．．」

「．．．．」

「キャツシユ、お前は．．．お前達が僕の大切な人たちにしてきたことを僕は許さない。たとえ．．．彼女たちが許しても僕は許さない!」

僕はキャツシユを許さないと宣言すると共にキャツシユはどれだけ怒らせてはいけないことをしたのを実感できたのか震えていた

「さて・・・ん？」

「あ、あちらに世界が繋がったのかオープンしてる！」

「っ!!さらばだ！」

「二!!あ!!」

僕らの指摘にキャツシユは慌てて全速力で逃げていた。それを見た僕らはキャツシユを追いかけようとするが僕は满身創痕・・・

「仕方ない・・・明久!!」

「え?なに...(ガシツ!!)・・・へ？」

「キャツシユを・・・捕まえろ!!アキちゃんロケットオオオ!!」

「何してるのオオオ?!」

雄二が明久に思いきり背負い投げというよりは・・・吹っ飛ばした投げ方のようにキャツシユの方へと飛ばしていた

「!？」

「あああああお！」

「(なんで人が飛んでいる!?ええい、走らないー)な!?なんでこんなところにつまづーぐふえ!？」

「がふ!!」

「よしやあああ!ナイス明久!」

キャツシユは慌てていたせいもか躓いてしまい、そのせいで上から飛んでくる明久の警戒を疎かにしてしまい直撃した。・・・ただし頭ではなく腰に・・・投げた本人・・・雄二は嬉しそうにガッツポーズしていた

「いだだだ・・・あ、キャツシユが目を回してる・・・」

「・・・」

目を回してるキャツシユに僕らは囲むように捕まえていると、向こうの世界がオープンするのが見えて、とりあえずはキャツシユを連れて帰ろうとしていたら・・・

「まだ戦いは・・・オワツテナイイ!!」

「二!!」

「ガアアア!!」

キャツシユは目を回して気絶してるから、今の声はキャツシユでは

ないと判断して振り向くと・・・

「ミュータント!?!」

ボコボコともはや原型もない化け物そのもの姿へと再生していた
「細胞そのものまで消しきれていかなかったなあお!!」

「細胞で復活したと言うこと!?!明久、キャツシユを放すなよ!」

「わかってる・・・ってうわあお!!」

僕らはミュータントの念力攻撃で向こうの方まで飛ばはれると皮肉にも向こうの世界がオープンしてくれたお陰で世界の果てまでバラバラにならずにすんだ

「のび太君!?!剛田君、坂本君、吉井君?!」

「!!」「あらよつと・・・着地成功!」「!!」

「ぐえ?!」

僕らは着地すると同時にキャツシユが変な声出していたけどそんなの気にしないよ。そして僕らはある方向に見ると・・・

「決着を・・・!!!」

僕らは皆のいる世界に帰ってきたのと引き換えに、化け物になったミュータントがそこにいた

・・・いい加減にしつこくってうんざりだよ・・・

けじめ

僕は冷や汗をかきながら目の前のミュータントの分析をしていた
「細胞ひとつも残さないで倒さないと無理か」

「そのようだな」

「やれやれ、明久以上に頑丈だな」

「それは雄二も言えることだよ!? いたたたっ・・・」

僕のそばにはジャイアンと雄二がいて、その後ろでは先ほどの腰が
強打したのか痛みを苦しみながら起き上がった明久もいた

「皆帰ってきたのね!!」

「アキ!」

「明久君!」

「武!」

「・・・・・・」

それぞれの大切な人の呼ぶ声が聞こえたが、僕の大切な人の美子さんは無言だった。当然だろう・・・勝手に消えて勝手に現れて勝手に・・・死にかけていたのだから

「(別れられたらきつと僕はもう誰にも会わない旅に出るかもね・・・) ドラえもん! キヤツシユは捕まえたが、ミュータントはまだ生きてる!」

「わかってる、ドラミ!」

「ええ!」

「く、くそ・・・なんとしてでも逃げて見せる・・・!」

「「そうはさせない! 悪事をおかして脱走したキヤツシユに天罰を!」」

「あぎやあああだおあお!!」

ドラミちゃんとドラえもんが密かに逃げようとしていたキヤツシユに宣言すると雷が落ちて、叫んでいた

「超能力?」

「いいえ、なにか手元を持っているけど・・・あれはなにですか?」

「ガガガ・・・」

「ルカとルナちゃんの疑問に答えよう。これは、『十戒石板』といって、人がしてはいけないことを定める石板。これに戒めを彫りつけると、それを破った人に雷が落ちるようになる」

「え？それ死さない？」

「留留璃さんの疑問はもつともよ。ただね、これは自然の雷とは違って、対象者の頭上近くから発生するため屋内にも落ちる。また、打たれても傷は負わずに、しばらく気絶するにとどまるから大丈夫よ」

「なんか未来道具はなんでもありなのね・・・」

「さて、のび太君達！キャツシユの脱走の心配はもうない！あとはミュータントを倒すだけだ!!」

「「おうー!」」

僕らはその言葉を聞いてもうあとは目の前のミュータントに集中して倒せばいいだけの話だ

「よし!!あとはあのミュータントだけならも勝てるぞ!」

「チョウシニノルナ!!貴様ラ人間ごときがカテルトデモ!」

「お前はすでに死に体に近く限界の筈だ。もうこれ以上は降参することを勧めるよ」

「明久・・・それは言わない方がいいぞ」

「へ？なんで？」

「あのプライドを考えたら降参はあり得ない。つてか、あり得ないだけではないな」

「ああそうだったね」

「・・・」

ミュータントの言葉に明久がつよきにそう伝えようと、雄二が呆れながら指摘してきた。それを言われた明久はたしかにそうだと頷いていた

「ドコマデモ・・・我を愚行スルノカ!!!」

「(予備動作なしの衝撃波!?)」

「「あ、やばい?!」」

僕は警戒しながらも痛む体に動けなかったのと、ジャイアン達は痛むのだけではなく、疲労感も出ていたせいで動く反応が遅れていた。

これは不味いと思った僕らだったが・・・

「ひらりマント!!」

「ナニ!!!?」

動けない僕らの前に立ち、ミュータントの攻撃を防いだのは・・・

「・・・美子・・・さん?」

「・・・」

「邪魔シオツテ!!!」

「覚悟をするのはあなたよ・・・」

「!」

「行きなさい・・・美波、瑞希!!」

「覚悟をしなさい!ミュータント!ドカーン!!」

「!!!」

! 姫路達の空気砲の攻撃がミュータントに貫通するとミュータントは苦しむ声が聞こえた。どうやら僕らの知らない裏で作戦を組んでいたみたいだ

「・・・!?!」

「オノレ・・・オノレエエエ!!!」

ミュータントは怒りまみれになりながら己の手をナニかに集めると黒い球体になり攻撃する体制になっていた

・・・明久たちも満身創痍。防ぐのも回避するのも限界か・・・

「ここまでか・・・」

「のび太?」

僕はゆつくりと立ち上がり、まだ動く片手で銃を持ち歩きながら目の前の敵を見据えて構えていた

「腕も体もとつくに限界だけど・・・今は僕自身の最後の力を出しきる事だ・・・」

「のび太・・・まさか・・・」

「はじめをつけさせてくれ・・・ふん!!」

僕は気合いをいれると共に僕の回りに風が吹き荒れて、銃を構え直した。・・・本当に限界を越えるために

「うわっ!?!・・・!?!」

「・・・!?!」

「(受け止めるのは不可能。ならば狙いは必中!)」

「キエロオオオオ!」

「消えるのはお前だ・・・ミュータント!! 撃ち抜け! 砕け! これが僕自身の最後の技!! ジャンボット・ガン!!!」

僕とミュータントの最大の攻撃がぶつかり合い、当たりに衝撃が走っていた。後ろにいる明久も吹っ飛ばされる声が聞こえたけど、それはあとで!!

「(押し負けしてる!? やはり片腕では限界か!!!) くっ!!!」

「アハハハ! サスガノ貴様も最早体はゲンカイカ!!」

「ぐぐ! くそ・・・悔しいけどあいつの言うとおりだ・・・」

「・・・何で、弱気になってるの?」

「え・・・」

「しっかりしなさい! 私が惚れた男はそんなに心は弱くないでしょ!!!」

「美子さん・・・」

「そうね。美子の彼氏なのだからしっかりしなさい!!」

「留瑠璃・・・」

「あなたは誰よりも優しく強いよ・・・負けてはいけないよ! のび太さん!」

「静香ちゃん・・・」

ミュータントの攻撃と言葉に僕の心は少なからず認めかけてこのままでは不味いと思っていた瞬間に、僕の背中に3人の女子が支えてくれた・・・

「何?! 勢いが!!」

「・・・ありがとう・・・ミュータント!! これが・・・僕の最後の力だ!!!」

「お、おのれええ!!!」

「「「はああああ!!」」」

僕らは力一杯全力を出すために叫び続けると先まで強かったミュータントの力が僕らの方が力上待ったのを感じて精一杯叫ぶと

ミュータントは・・・

「うおああお!!」

僕の砲撃にミュータントは飲み込まれた・・・

「はあはあ・・・これで終わりだよね・・・」

「のび太君、大丈夫!?!」

「美子さん・・・皆・・・ありがとう・・・なんとか奴は倒せた・・・」

「そうよかつ・・・!美子さん!」・・・え・・・

僕は左の方から何か光るのが見えて僕は美子さんの盾になり庇うと・・・

「ぐっ・・・!?!」

「のび太君!?!まさか・・・」

左腕にダメージ背負い、僕は思わず膝まずいていた。そして、美子さんはすぐに僕の方に向けよって攻撃した方向をみると・・・

「ミュータント・・・!」

「マダダ!!マダオワラナイ!!ニンゲントイウヨクボウヲタオサナイカギリ!!タオレルコトハアリエナイ!!」

「力足りずにまた細胞を残してしまったか・・・万事休す・・・!」

「いいえ、あなたの負けよ。ミュータント」

「静香ちゃん?」

静香ちゃんが僕らの目の前にたち、ミュータントにたいして毅然とした態度で宣言していた

「ナンダト!?!」

「確かにもう皆は傷だらけで動けないかもしれないけど・・・ここに来る前にドラミちゃんと手を打ってるのよ」

「ナニ?」

「!」
「ーそういうことだ・・・くらえ!ドカーン!」

突如上からの攻撃にミュータントはまともにくらい、ダメージをおっていた。すると、攻撃したと思われるものが降りてきた

「約束通り来たぜ・・・親友!!」

攻撃した人物は誰よりも自信満々にミュータントを立ちふさがつ

ていた・・・
君は・・・!?

旧友

ここだけの話・・・

僕たちは多くの冒険、多くの人を助けて多くの人を守ろうとしていた。けれど、たった一度だけ会いたくても会いたくても会えない仲間がいた。それはなんだったのかなかなか思い出せなかったが・・・その黄色い背中をみて僕は思い出した

「君は・・・」

「全く、俺たちのことは完全に忘れてると思ったのだが・・・どうやら神様は俺達の力がまだいるみたいだな」

「ねえ！君はもしかしてー」その質問はあとだぜ・・・のび太・・・わかった」

「フツ、昔よりも賢くなってるな・・・」

「オノレエエ！あと一息で息の根を止めるつもりが邪魔しおって!!」

「邪魔？ああ・・・」

黄色い姿のそいつはミュータントの言葉に思い出したように冷静に対応していた

「貴様一人ダケノ増援ナラ勝ったも当然!!」

「悪いが・・・」

「?!(なんだ?!イマドコからの攻撃に私はウケタ!?)」

「俺一人だけの増援とは初めから一言も言っていないぜ?」

黄色い姿の言葉に続くように無数の攻撃がミュータントに直撃した。そして、それと同時に黄色い姿の回りにそれぞれ違う色の・・・ドラえもんと同じ姿が降りてきた

「ま、まさか・・・き、君達は・・・」

後ろでドラえもんがなにか思い出したかのように震えた声で彼らを見ていた。そして、そのロボット達はゆっくりとこちらの方へ見えてきた

「やれやれ、キッドは先に行きすぎですよ。まあ良いタイミングで攻撃を作る時間をしてくれましたけど・・・」

「そうだぜ。ったく・・・追いかける身にもなれよ?」

「ガウガウ（まあまあ。とりあえずは間に合って良かったよ）」

「まあ、ドラニコフのいう通り、間に合った良かったである」

「そうだねー。あれ？何しに僕はここに来たんだって？」

「「「（ズゴツ!?）」」」」

緑色のドラえもんが目的を忘れたと伝えると僕らを含めて全員がこけた。いや、後ろにいる僕らも思わずこけたけどさ!!

「ドラニーニョよ、我輩らはドラえもんたちを助けに来たのであるよ！」

「あーそうだった！」

「頼むからしつかりしてくれよ・・・」

「さてと・・・本来なら会えない時空で本来ならもう交わることがなかったのに・・・改めて言わせてもらうぜ。また会えたな・・・のび太！ドラえもん！ドラミ!!」

カウボーイを被った黄色姿のドラえもんが僕らの方に笑いかけてきた。そんな彼の言葉にドラえもんが震えながら言葉をかけていた

「き、君達は・・・そうか君たちが来てくれたのか・・・」

「お兄ちゃん思い出した？私も・・・やっと思い出せたの」

「うん。そうだね・・・そうだね・・・。なんか・・・長いことあつてない気がするよ・・・」

「ドラえもん・・・」

「のび太くんたちと共にあいつを倒すの手伝って!!キッド！王ドラ！ドラリーニョ！ドラニコフ！エル・マタドーラ！ドラメッド三世！ドラミ！」

「「「おう！」」」」

ドラえもんがみんなの名前を呼ぶと彼らも嬉しそうに武器を持ちながら、ミュータントの方へと見据えていた

「のび太君はもうここで休んでおいて・・・あとは僕らに任せてね」

「うん頼むよ・・・」

「任せて！」

「・・・つつ！（どうやらさすがに腕が限界か。もうだましましたましの上に気力も使い果たした・・・ここまでか）」

「のび太くん、腕が・・・」

美子さんは僕の腕がもう上がらないのに気づいたのか心配そうに見ていた。確かにもう打つ動作をするのは厳しいけど・・・まだ打つ手はある！

「・・・明久、そこにいる？」

「?どうしたの？」

「・・・僕らの特殊能力を明久に分け与えるよ」

「はい!?!」

僕の言葉に明久が驚いたように口を大きく開けていたけど顎関節いたくならないかな?まあそんなことはおいといて・・・

「時間は限られてるが、もうこれは君に託すつもりだ」

「まって!?!特殊能力をゆずるってどうやって?!」

「【ウルトラミキサー】で僕と美子さんの腕輪を融合させてさらに明久の腕輪を融合させる」

「そんなことできるの!?!」

「理論上は可能だと思うわ。・・・でも吉井君の特殊能力はないのよ?」

「・・・いいや、確かに特殊能力らしきものはないが、譲られてその能力手にしたものがああるよ」

「あ、あつた!!確かにあつた!でもよく考えてたら・・・僕にそんなのを譲っても・・・」

僕の言葉に明久は悩んでいるとジャイアンと雄二が口を挟んできた

「おいおい、難しいことを考えるなよ。要するにお前が最後の切り札というわけだよ」

「そうだぞ。それにお前はバカだがバカなりの戦いかたがあるだろう?」

「ジャイアン・・・雄二・・・」

「そうね。アキにしかできないことはあるわね」

「はい!私たちは明久くんを信じますよ!」

「美波、姫路さん・・・」

「明久の癖に悩むなんてらしくない！」

「吉井さんの戦いかたがあるではありませんか？」

「僕もルナも君を信じるよ」

「私もね」

「スネ夫、真理亜さん、ルカ君とルナさん・・・」

そしてまだ発言してない留瑠璃と美子さんは明久に笑いかけながら安心させるように話した

「男の子なら覚悟を決めなさい」

「・・・お願い、あなたの力でもうこれ以上の戦いを終わらせて」

「・・・」

みんなの言葉を聞いた明久は周りを確認するようにゆっくりと見渡して、何を決意するように目をつむり

そして・・・

「分かった。僕が・・・この戦いを終わらせるよ！」

明久は覚悟を決めた・・・・・・・・

反撃と怒り

ドラえもん side

なにげに僕からの目線って久しぶりな気がするよ。え、メタ発言はするな！って言わないでよ。・・・ぼくはいつたい誰に話しかけているのだろうか？

「おい、ドラえもん！ミュータントが目の前にいるのに考え事するのかよ!?!」

「あ、ごめんごめん！」

「相変わらずのドラえもんで安心しましたよ」

「うんうん！」

「そうであるな」

「もう！お兄ちゃんすっかりしてよ！」

「へなちよこのいう通りだぜ」

「でしょ、でしょ!・・・へなちよこ!?!今、キッドは私にへなちよこっていった!?!」

「ガウガウ（あっちも相変わらずだね）」

マタドローラ of 言葉に僕は考えていたのをやめて謝ると、王ドラは笑顔で発言していた。その発言に頷いていたドラリーニョとドラメツドに対してドラミは呆れた声で僕に激入るとキッドが同意していたらドラミは怒っていた。その様子にドラニコフが呆れたように話していた

「まあまあ、キッドもドラミさんも落ち着いてください」

「ふん!!」

王ドラ of 言葉にドラミとキッドはお互いにそっぽ向きながら怒っていた。それを見て、マタドローラは苦笑いしながら呆れていた

「やれやれ、相変わらずの不器用なやつだよなー」

「見ててほほえましいけどね。さて・・・みんな準備はいい!」

「」「」「おう!」「」「」

僕の言葉にみんなは意識をミュータントの方に切り替えるとそれぞれの武器や構えをとっていた。対するミュータントは僕らのやり

取りに苛ついていたのか拳を振り下ろしてきた

「ロボット風情がああああ!!スクラップしてやるうう!」

「おお?なんかでつかい拳が飛んできたな。こういうときは俺の順番だな・・・っほー!」

「赤いマントデドウスルつもりだ!!?」

「ひらりっ♪」

「!!?」

ミュータントが振り下ろした拳に対してマタドローラはひらりマントで攻撃の軌道を変えるとミュータントは苦痛な顔をしていた。そんな隙を逃さないマタドローラはミュータントに近づいてー

「さらに、俺様はな・・・回避がうまいのではなく、ドラえもんズーの」

「(持ち上げただと!?)」

「怪力なんだよ!!おらっ!!」

「!!!」

マタドローラが勢いよく投げるとミュータントは着地をとることも忘れて、地面に衝突すると見せかけて・・・

「いったぜ!王ドラ!」

「全く・・・貴方のそのバカ力だけは認めますよ」

「ああ、なんていった?!」

「さてつと次は私ですね。ホチャア!!」

「!!」

「ホチャア!!アタタタツ!!ホチャア!!」

王ドラは鋭い突きと蹴りを繰り返すと、ミュータントは声にならない叫びになっていた。そして、ミュータントは地面に落ちると王ドラは下がって構え直していた

「グググ・・・」

「流石にもう体が限界であろう・・・雷よ!ミュータントの方に落ちよ!!」

「!・・・!」

「させないよ!!それええ!」

「グウ!?ボール・・・だと!?」

「ドラリーニヨ、ナイスである。裁きの雷よ！落ちよ!!」
「アオオ!!!」

ドラリーニヨとドラメッド三世の攻撃が見事に直撃するとミュータントはたまらず膝ついていた

「ナゼダ・・・!?私は超能力があるのに・・・ナゼ地面に!?!」

「そんなのは簡単な答えだ。お前は確かにすごいし、一人でのび太達相手に彼処まで追い込んだのは凄いが・・・お前には限界がきたのさ」

「限界・・・!?ソナノアツテタマルカア!!」

「ガウガウ（仕方ない・・・）」

ミュータントは近くにある無数の石を僕らに向けて攻撃するとドラニコフは丸いのを取り出して・・・

「ツガガギ・・・」

「!?!」

「アオオオオン!!!」

「狼になった!?!」

ドラニコフの姿に後ろで明久くんが驚いた声をあげていた。驚くのはまだ早いよ・・・ドラニコフはタバスコをイツキ飲みすると・・・

「!?!?!?!?!」

「!!!火を吹いた!?!?!」

ドラニコフが火を吹く光景に明久くん達は驚き叫んでいた。まあ僕らもはじめてそれを見たときは驚いたよ

「ヌウ!?!?（前が見えぬ!!）」

「頑固な頭のでめえに一ついいことを教えてやるぜ」

「!」

「お前は俺達を怒らした。それだけだ!!ドカーン!!」

「アアアアア!!!」

キッドの空気砲の攻撃にまともに受けたミュータントは壁の方へと直撃した。もうげんかいははずだ・・・

「っ!まだ立つ気か!?!」

「・・・皆、あとは僕がやるよ」

「!明久君・・・?」

ゆっくりと僕らの前へと歩いていったのはび太くんの友達・・・明
久くんがミュータントの方へとむかっていた

「決着をつけよう。ミュータント」

明久くんの持っている武器が・・・綺麗に輝いてるのを僕は気づい
た・・・

まさか・・・明久くんは・・・

まさかの覚醒？

明久 side

僕はゆつくりとドラえもん達の前へ歩きながら、自身の馴染んだ呼び掛けをしようとしていた

「貴様・・・邪魔ヲスルツモリ!?!」

「そうだよ。もういい加減にお前をここで手を打たないとしんどいから僕が出向いたのさ」

「学もナニもない人間がチョウシノルナ!!」

「学ね・・・」

話は数分前に遡る

『いい？明久の腕輪は僕と美子さんののは確実に君の腕輪一つになった』

『うん』

『だけど、それだけの能力なら恐らくはとんでもない力になると思うしフィードバックがとんでもないはず』

『とんでもないことに・・・』

『うん。けれど、君だから託す。使い方は任せるけど・・・もうここでは戦えない僕らの代わりに頼むね』

この託された友達のを・・・

信頼されて託された力を・・・

必ず・・・

「お前を討つ!!ミュータント!」

「チョウシノルナ!!」

「皆の力を元にできたこの力を見よ!!サモン!!」

「!!!」

僕が言葉を発するとともに辺り一面が輝き、みんなはその光景に驚きの声をあげていた

「ナ、ナンダ!?ソノヒカリハ!」

「確かに超能力って凄いけど・・・果たしてお前は僕を捉えきれれるのかな?」

「?・・・!」

「まずは・・・腕」

「アキ・・・いつの間にミュータントの後ろにいたの!?!」

「す、凄い・・・」

「騎士?」

そう、僕の姿は背中にマントを羽織って右手には木刀があった。僕は軽く木刀をふりながらミュータントの方へ向けていた

「き、キサマ!?!イツノマニウシロニ!?!」

「さあいつの間に・・・だろうね!」

「!?!グッ!」

僕はミュータントの方に接近して両手で木刀を横に振るうとミュータントは苦虫を噛み潰したようにさがっていた

「先程マデソンナニ速クナカツタノニ・・・何故!?!何故ソンナニ速イ!?!」

「それは僕が覚醒したからだよ」

「「「いやそれはないよ（です）」」」」

「皆一気に否定しないで!?!泣くから!!」

僕が覚醒したという言葉に皆が否定したことに涙流したい!!枕がびしょ濡れなるくらい泣きたい!!

「フザケルナアアア!!」

そんな僕らのやりとを見て切れたのかミュータントが怒りみれになりながら触手を無数飛んできたが・・・フツ、今の僕には不可能はない!

「そんな攻撃で僕をとらえきれれると思うな!!せいああ!」

「ツチ!!コザカシイ!!」

ミュータントの攻撃を木刀で切り裂くとミュータントは怒りながら攻撃を続けようとしていたがー別の誰かが攻撃した

「させるかよ!!ドカーン!」

「グウ!」

「俺たちの存在を忘れていたな!?!おいお前の名前は!?!」

黄色いドラえもん・・・たしか、ドラザキッドだったよね?僕はその問いかけに大きな声で答えた

「吉井明久！」

「よし、明久！俺たちが援護するからお前は遠慮なくあいつを叩きのめせー！いいな！」

「OK！」

キッドの言葉に僕は返事するとともにミュータントの方へと全速力で走っていた。誰よりも早く！鋭く！相手を切り裂け！吉井明久！

のび太side

どうやらあの道具がうまく明久に馴染んでいたみたいだね。全く・・あとでとてつもない筋肉痛になるのを目に見えても戦おうとする姿勢は凄いよ

「のび太・・あいつはいったい何を使ったんだ？」

雄二が疲れた顔しながら僕の方へと質問してきた。その質問に姫路達も僕の方へと振り向いて聞いてきた

「ああ、明久に使ったのはね・・ドラえもん秘密道具さ」

「それはわかってる。だが、その道具はなんだ？」

「答える前に・・この世でもっとも速い生き物はなんだと思う？」

僕の言葉に、姫路がすぐ答えを導きだしたみたいでその名前を発言した

「空では隼ですよ。となれば、陸ではチーター・・明久くんはチーターの道具を使ってるのですか!？」

「うん。【チーターローション】っていうんだ」

「因みにだけど、隼は滑空時の最速が387.2チーターは115.8よ」

「美子誰にいつてるの?」

「何故か伝えないといけない気がしたのよ」

美子さんは僕のせいで疲れてるのかな・・なんかすごく申し訳ない気持ちを押し寄せてくるよ・・

明久なら・・・
すべての因縁を消してくれる・・・
あとは頼んだよ・・・
友よ・・・

誰よりも速く鋭く・・・

明久 side

速く・・・

速く・・・!!

もっと速く・・・!!

「誰よりも速くこの剣でお前を切り裂く!!」

「グウエ?!マダダ!」

「(背後からの攻撃か!?確かに後ろからなら伏せ下れないけど・・・)」
僕が触手を2本切り裂くとミュータントは怒りながらまだ抗おうとしていた。そんな、背後からの攻撃されてしまえば僕も防ぎようがないのだがー

「胴体がから空きだぜ!!ドカーン!!」

「シュート!!!」

「ガウウウ!!へファイヤ!!」

「ヌウ!」

僕一人で戦っているわけではないから、安心して飛ばせれるのさ!!

「青二才ガアアア!!」

「青二才ってどういう意味? (持ってくれよ!!僕の足!!)」

「因みにわかっていると思いますが、青二才というのは若くて、経験の足りない男をののしっている事です。まあ簡単に言えば、未熟者の癖に何をいつてるんだ? って言いたいわけです」

「それ今説明いるかな!?王ドラさん!」

「君がどういう意味と聞いてきたので答えただけですよ」

「確かにそうだけど!」

木刀を構えながら王ドラさんが説明してくれたけど今いるかな!?
それに相手は目の前に怒りを出しているから怖いんだけど!!!
!!!

「さてさて、速く倒さないと・・・ね」

僕はミュータントの方をみながらのび太に言われたことを思い出した。それは託されたときの事だ・・・

『いい？明久こいつを使うに当たっていくつか頭いれてほしい』

のび太がボロボロの体で僕にそれを渡す前に真剣な顔で話しかけてきた。僕はそれをそらさずに向き合っていた

『メリットは確かに足が速くなることだよ』

『本当!?!』

『メリットはね』

僕はのび太の言葉によろこぶがのび太は真剣な顔で僕の方にあることを指摘した

『ただし、デメリットがあるから注意してね』

『デメリット?』

『うん。それはー』

僕はのび太にデメリットを教えてもらった。それを言い伝えてもらったあとにのび太は真剣な顔で何度も確認してきた

『ーってなるけど・・・覚悟は良いのかな?』

『・・・』

『怖いのなら無理はしないでほしい。別の方法も考えてやるから』

『・・・っるよ』

『え?』

『やるよ!!僕が!!』

『・・・提案した僕がいうのもなんだけど・・・本当にそれで良いのかい?』

のび太が心配そうな顔でこちらをみていたけど僕にはどうしてもこれをやりたい理由があった

『僕は確かにバカで何も考えない残念な部分は少しだけあるかもしれないけど』

『(いや、そこはいつてないし残念な部分が少し?あれで?..)』

『仲間をまもるためなら僕は・・・それを使う!』

僕ははつきりと力強く宣言するとのび太は優しい目で何かを懐かしむように僕をみていた。僕の言葉で何か思い出したのだろうけど、その我が子を見つめるかのようななんかわからない目線やめてほしいよ!!

『じゃあ・・・あとは頼むよ・・・』

そうしてのび太は僕にすべてを託して・・・横になった。今はのび太の恋人でもある三上さんがのび太のそばにいる
だから・・・

僕は高く飛びながら壁の方へと走っていた

「ナ!?壁を沿って走るだ?!」

「ミュータント!僕がお前を・・・ここで討つ!!」

「!!フザケルナアア!!」

ミュータントは念力で瓦礫などを僕の方に向けて攻撃してきた
が・・・

「こんなものはおれさまにまかせろ!!ひらり♪」

「風よ吹き荒れろ!」

「ホチャアア!!」

「ドカーーン!!」

ミュータントの攻撃はドラえもんたちがそれぞれの攻撃で防いできた。お陰で僕はミュータントの方向へと全速力ではしりながら・・・

シユン!

そう切れた音が僕の耳に入り込むのと同時にミュータントの体は

「部ダメージをおっていた

!!?!」

「いたい?苦しい?そうだろうね」

「キサマアアア・・・」

「けれどね二度も言わす気はないよ。今の僕は・・・すべてを切り裂く自信がある」

「どこからその自信がわくのかはわからないが・・・あいつかなりキレてるな」

「うん。彼は人一倍お人好しで・・・誰よりも仲間を大切にする子だよ」

僕はミュータントに刃向けをするとミュータントは怒りながら僕をにらんでいた。そんな僕らの後ろにドラえもんがキツドの質問を

答えていた

「（・・・明久くんに賭けるか）」

「僕はお前を許さないよ。仲間を・・・友達を傷つけて許さないよ!」
「グググ・・・」

僕は木刀を構えてミュータントの方を見据えながら許さないことを伝えるとミュータントは怒り爆発寸前だ

「このままうまいこといけば怒り狂った攻撃を回避して頭をぶちのめせばおわりだ!」勝たせてもらうよ?ミュータント」

「(ドウスレバ奴をクルシメレル?・・・!）」

「終わりだ・・・」

「キサマの仲間ガナ」

「どこに攻撃をしてる?」「キヤツツ!?!」・・・!?!」

僕は声した方向に振り向くと・・・

「ツツツ・・・」

触手で捕まっていた姫路さんと美波が苦しげな声を漏らしていた。

僕はそれをみてミュータントの方に対して怒鳴った

「(地面に潜んでいたのか!?) 人質か・・・!?!」

「イヤ・・・サキニ心をオルニハ・・・」

「まさか!?!」

「ソノ大切ナ仲間ガキズツケラレタラドウナル?」

「電気を走らす気か!?!そんなの・・・」

「オツト、ウゴカナイコトヲススメル。他の人間モダ」

「!!「ツ!!」!!」

ミュータントの言葉に他の皆も助けようにも動けず、僕も歯ぎしりしながらどうしたものかと考えていた

「くっ!?!このままでは・・・」

「フッフ、コレデアトハ・・・」「・・・異端者には死を・・・」!!」

加速

次の瞬間、ミュータントの触手が二つの閃光により切り裂かれてい

た

「ナ!?!」

切り裂かれたミュータントは驚き、そして姫路さんと美波は二人の少女が確保したのと同時に別の二つの影が庇うように降りてきた

「っ!」

「お二人とも大丈夫ですか!!」

「間に合った・・・」

「・・・加速終了」

「全く槍でこれを切るのは難しかったのじゃが・・・なんとかなるものじゃな」

「・・・情報解読終えた」

「冬華さん、里緒菜さん、ムツツリーニ、秀吉!!霧島さんも!」

僕は美波たちを助けてくれた四人の名前を言うと安心させるように笑いかけてきた。だが、やられたミュータントは突然の乱入で叫んだ

「オノレエエ!?!」

「・・・よそ見は禁物」

ムツツリーニが叫んだミュータントの方にたしなめるように言う
と次の瞬間・・・

「お前が・・・」

「!」

「お兄様たちを傷つけた犯人かああああ!!」

「グ!?!」

「・・・エエエエ!?!」

僕は思わず、ミュータントがさらに誰かの蹴りで横に思いきり吹っ飛ばされると僕はさげんでしまった

「何者・・・!?!」

「本来であれば男に名乗るほど心は広くありませんが：今回は名乗りましょう。よく聞きなさい！お兄様やお姉さまたちを傷つけるものは神であろうが・・・この私清水美春が許しません!」

「・・・」

毅然とした態度でミュータント相手に堂々と名乗るとミュータントは苦虫を潰した顔をしていた

「おい、吉井明久」

「！君は・・・」

「ドラ・ザ・キッドだ。単刀直入にきくが・・・一撃で仕留めれるか？」
「多分」

「そうか・・・なら、あいつを倒すのお前に託す」

キッドはミュータントの撃破を僕に任せるとつたえるとともに僕は確認の意味を込めて聞いた

「なら・・・今すぐ仕掛けても良いのかな？」

「ああ。遠慮はするなよ！」

「OK。ミュータント!!」

僕は清水さんから僕の方へ視線移した。そして僕はミュータントの方に挑発した

「もうお前は僕に負ける未来が見えた！諦めろ！」

「ナンダト!?どこからその自信がわく!？」

「見せてあげるよ。特殊能力01発動!!」

「！」

「【二重召喚・改】！いくよ！」

僕は慣れたんだ名前を召喚すると共に無数の吉井明久が分裂したのと同時に僕らはミュータントの方に攻撃しかけた。それをみたドラえもんたちが驚いていた

「明久君がたくさんいるうう!!」

「凄い・・・」

「わああ、一体何人いるんだろう？サッカー出来そう！」

「いや、ドラリーニョよ、そういう話ではないのである」

「ウムムム、すごい分裂してますね」

「たいした数だぜ・・・」

「ガウウウ（そろそろ僕らも仕掛けるのよね?）」

「ああ。全員準備しろよ！」

ドラえもんたちがそんな会話をしていると他所に僕はミュータン

トが必死に撃破してるのをみて再確信した

「コチャクナアア!!」

「(ミュータントは僕の方に気づいてない・・・)ならば、最後の仕掛けだ・・・」

ミュータントは本体の僕がいるのが気づいてないのを確認して、腕輪の方をみていた

「(持つてくれよ・・・僕の腕!) ミュータント!!」
「!!」

「これでお前の全てが・・・終わりだ!!!特殊能力発動00!!!」
「オオオ!!!」

ミュータントは手をかざして黒い球体みたいなのを完成させていた。そんな中、僕は木刀が輝いてるのを感じ取り・・・ゆつくりと目を閉じた

「(感じる・・・皆の思いを・・・のび太の・・・思いも!!)」

「クタバレエエ!!」

「くたばるのは君の方だ!!くらえ!!【友の怒りの剣】!」

僕はミュータントが攻撃はなすと共に僕の最大の攻撃がぶつかり合った

光と闇の・・・

決着は・・・

迫っていた・・・

決着

のびた side

僕は美子さんに支えられながら明久が特殊能力を解放したのを見ていた

「……のび太君、あなたの体は大丈夫なの？」

「……わからない」

「そう……。吉井くんは大丈夫なの？」

「わからないけれど、後は明久に託したんだ。すべてを……」

そう……。僕はもう戦う力はもうないけれど、明久なら……。かつての僕よりも凄い事をしてくれるはず……

だから……

「負けるな……。吉井明久」

高校でできた新たな親友が……。この戦いの決着をつけてくれると僕は信じてる

明久 side

感じる……

暖かく力強く感じるこの魂は僕の心に届く！

「ミュータント!!」

「!!」

「これでお前の全てが……。終わりだ!!!特殊能力発動00!!!」

「オオオ!!!」

ミュータントは手をかざして黒い球体みたいなのを完成させるのと同時に。僕は木刀が輝いてるのを感じ取り……。ゆっくりと目を閉じた

「(感じる……。皆の思いを……。のび太の……。思いも!!)」

「クタバレエ!!」

「くたばるのは君の方だ!!くらえ!!【友の怒りの剣】！」

僕はミュータントが攻撃はなすと共に僕の最大の攻撃がぶつかり

合った

「グウウ!?!」

お互いの力が均等で思わず苦しげな声を出してしまったが……
「人間」ときが……勝てると思うなあああああ!!!」

「(理性も言葉も流暢になつてきた!?!しかもこの期に及んでまだ力が衰えないなんて……!!) 化け物め……!!」

「なぜ貴様は人間を庇う!?!何故だ!なぜそこまで頑張れる!?!」

ミュータントが突然僕に問いかけてきた。その問いかけてきた理由は知らないけど……

「そんなの決まっている……!」
「!」

「僕の大切な仲間を……友達を……傷つけたお前を許すこと出来ないからだ!!」

「力が強まっている!?!」

「もう誰も失わせない!!この吉井明久の誇りにかけて!!バカの誇りにかけて!!」

僕は木刀を強く握りながら、そして叫ぶように指摘した

僕は知っている……

誰かが泣いていたことを……

『のび太君……!のび太君!!ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい!私は……私は……!』

誰かが苦しんでいたことを……

『俺はその夢のために頑張ってきた。そうだ……誰かと共に共存する事がきれいだからこそ夢を見た……故に夢を見て真っ直ぐ進んできていた!』

『夢をバカにされた悔しさ!友人に騙されて絶望を抱いてきた事もあった!!多くの苦難を経験して、多くのものを救い!多くのものを失ってきた!!この身はなにかを守るために真っ直ぐただ歩き続けた!!』

『そうだ……俺は人間とロボットを共存する未来……誰もが幸せな

未来・・・そんな願いや夢を見ていた！俺は、そんな願いがあつたからこそ頑張つてこれた!!そんな未来に実現することに憧れた!!!だが!!人の願いは儂く叶わなかった・・・。ロボットを兵器を扱うもの!!人の命やロボットの破壊してもをなんとも思わないものもいた!!!」
『故にこの願いは叶うことのない妄言にすぎなかつたんだ!!!あの頃のようにただ・・・まっすぐなにも考えなく追い続けてきた未来の果てがこれだ!』

誰かが悲しげに苦しかったことに・・・

『達者でね・・・美子さん』

『全く・・・随分と酷い話だね・・・そんなに真っ直ぐに攻撃するなんて・・・まるで・・・ひどい鏡をみた気分だよ』

だから・・・

この負の連鎖を終わらせるのが僕の使命なんだ!!!!

「(人間の力が強くなった!?) マケルカアア」

「ツツ！」

「よし!、みんな今だ!!」

「」「」「おう!」「」

僕とミュータントがぶつかり合っていると後ろから声が聞こえた。

その声の主は・・・

「明久!!聞こえるか!」

「ぐっ!今そつちにあんまり振り向く余裕ないのだけど!!」

「聞くだけで大丈夫です!」

「わかった!何!?!」

「俺達の力をお前に託すぞ!!」

「え?!何で僕!?!」

普通なら他の人に力を託すのが一番いいのに何で僕う?!

「のび太がお前に託したからだ・・・」

「え」

キッドの言葉に僕は驚くと他のドラえもん達が僕に安心させるように呟いていた

「だから！俺達ものび太の意思を尊重してお前に・・・」
「君に倒す力を渡すの！」

「今この場で一番倒す力が残っているのは君だけです」
「だから、我輩達もお主にかけるのである」

「ガウガウ（負けないことを信じてるから！）」

「吉井さん！これはみんなの意見よ！」

「のび太君が君を信じてるように僕らも信じる!!」

皆・・・！

「皆、準備はいい!!？」

「「「「おう！」「」」」」

「（ウシロカラヒカルカンジガスルノハナンダ!?）」

「「「「「我ら、ドラえもんズ!!」「」」」」」

ドラえもん達がなにかを取り出して掛け声を発すると、ミュータントは苦しげに叫んでいた。そして、ドラえもん達の輝きが僕の方へと身に包まれた

「力が溢れる・・・！これなら!!」

「人は醜い!!この世で一番悪魔で最低ナノハ人ダ!!」

「たしかにそうかもね・・・けれど!!」

「!!」

「いつだって自分の敵は自分!!だから人間の良くも悪くも最後は自分次第で自分の意思！僕は・・・友達を助けるために今！この場で戦う意思を持っている!!」

「負ける!?このミュータントが!？」

「さようなら・・・」

ミュータントは自分が押し負けている現状に驚き、もう押し返す力が感じられないの気づいた僕は・・・力一杯出しきっていた

「「「「「いけええ!!吉井明久!!」「」」」」」

「うおおお!!」

!!

みんなの声援と共に僕は叫び声を出すと、ミュータントは光に飲み込まれた

暫く煙が漂い……………

やがて晴れると……………

「……………見事だ……………」

体がボロボロなのかミュータントは消滅し始めていた。そんなミュータントの先を見届けるために僕は木刀を下ろして見据えていた

「……………終わりだ、ミュータント……………」

「そうか……………このミュータントは……………負けたのか……………人間に……………」

「君はすごかったよ。たった一人でのび太や他のみんなを倒してきたのだからね。正直、僕も本当に死ぬ覚悟はあったけどなんとかこっちが勝ったよ……………」

「……………ならば……………なぜ負けたのだ……………」

「簡単だよ……………。僕には仲間が……………友達がいたからだよ」

「友……………達……………そうか……………一人の人間に負けたのではなく……………私は人間の……………」

絆に……………ま……………け……………た……………」

そういうと共にミュータントは完全に光になり天へと登った……………

長かった戦い……………

これで……………

……………終わった……………

決着 II

ミュータントが消滅したのを確認した僕たちは最初は状況掴めなかったが……

「ミュータントの細胞も確認されていな……つまり、完全に消えた……完全に消えたということは……つまり……」

「やった……やったよ!!!みんなやったよ!!!」

王ドラの言葉にジャイアンが確認するように呟くと明久が木刀を掲げて勝利の宣言をしていた

「おっ……しゃあああ!!よくやった!!明久ああ!!!」

「……(グツ!)」

「でかしたぞ、明久!」

「アキ!」

「明久君!!」

木刀を掲げて宣言した明久に雄二とムツツリー二と秀吉と島田と姫路……つまり、僕ジャイアン、スネ夫と氷華3姉妹を除いたFクルス仲間が駆け寄った

「……吉井は凄い……さすが未来の旦那様の親友……」

「ふん!お兄様の親友ならそれくらいできて当然です!!」

「凄い……。これが野比のび太君達が認めた男……吉井明久の……力」

霧島さんは毅然としながら、美春は当然と言わんばかりの顔で頷いていた。何だかんだで明久を認めてるのがよくわかるし、留瑠璃は驚き明久を見ていた

「ったく……大した奴だぜ」

「そうね」

ドラミちゃんとキッドは明久を優しい目で見据えていた。そして、他のドラえもんズも明久を見て感心していた

「それにしてもものび太でも苦戦した相手を倒すとは……あいつ中々やるな」

「少なくともどこぞのシエスタしないと力でないロボットよりは凄い

「と思えますけどねー」

「へー、それならどこぞの短足すぎて蹴りが弱いロボットよりも凄いだろうなー」

「あ?」

「は?」

マタドーラと王ドラがそれぞれ明久を評価しながらも毒をはいていた。そしてお互いの呟きを聞いた二人は声した方向に見据え・・・

「・・・・・・・・」

互いにメンチ切りあっていた。そんな様子にドラニコフはあきれていた

「ガウガウ（こんなときでも喧嘩って飽きないんだね・・・）」

「ねえねえ、さっきのは凄いキラキラな攻撃だったねー」

「そうであるな。あれはどんな宝石よりも高く美しくそして・・・友のために戦う彼の姿勢はすごかったである」

「ガウ（僕らもこれで安心したいところだけど・・・）」

ドラリーニヨは興奮して説明するとそれを相づちうちながらドラメッドも微笑んでいた。そして、ドラニコフがなにかを探すように回りを見ていた

「つつつ・・・、さすがに俺様ももう限界だぜ」

「もー二度とこんな頑張ることがないことを祈りたいよ・・・疲れたー」

「二人ともお疲れさま。のび太さんと美子ちゃんの方は・・・うん、今触れない方がいいわね」

僕らの状態を確認した静香ちゃんは今は触れない方がいいと判断してジャイアンたちの方に話しかけていた。さて、そんな僕と美子さんの状態はというと・・・

「・・・・・・・・」

お互いに向かい合いながら相手の目をそらさずに見ていた。そして、僕は彼女にどんな罵倒をされてもそれは・・・僕の責任なんだから・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・のびー」「バカなああ!!」・・・・・・・・

美子さんが喋ろうとしたタイムミングで横やりしてきたかのようにキャツシユ達の叫び声が聞こえた

「バカな・・・そ、そんなバカな・・・!!わ、私たちの史上最高傑作ミュータントが・・・破れただど!?そ、そんなバカな話があるか!夢だ!!夢に決まっている!!」

「く、このロープのせいで動けん!!そんな結末認めない!!」

キャツシユとクロンがミュータントが破れたことに騒いでいた。つてか、いつの間に意識取り戻していたのさ・・・

「・・・Dr. クロン、Mr. キャツシユ、もうあなたたちの負けよ」
留瑠璃がクロンとキャツシユの方に厳しい目で発言するとキャツシユが喚いていた

「留瑠璃!!貴様よくも裏切ったな!!」

「仲間になった覚えはないし、あなた達が私を操っていたのでしょ?」

「だが、産みの親は私たちだぞ!」

「残念ながら私は貴方達に育てられた覚えはないわ。・・・どうやら来たみたいね」

留瑠璃の言葉にタイムホールが開きその場に出てきたのは・・・

『漸く見つけたぞれ! Dr. クロン、Mr. キャツシユ、貴様らよくも脱走したな!!』

「!!」

「あれ?なにこの声?」

ドスのある声だが僕らは全員なぜかこの声に聞き覚えがあり声の主を振り向くと・・・

「は・・・」

「・・・え?!」

「なにい!」

「・・・驚愕」

「・・・こんなところになぜ・・・!」

「はえ?!」

「うそお!」

「な、な、な、」

明久をはじめとする皆が驚くのは無理もない。何せ出てきたのは……

「さあ、バカどもよ！お縄のつく時間だああ!!かくごはいいかああ！」

「て、鉄人んんん!?!」

明久の叫びが辺りに響いた……

一言言わして？

……なんでき……

決着と正体

僕らは先程みんなの力をとひとつにしてミュータントを完全撃破したのに喜びあっていたら、怒気のある声が聞こえたので振り向くと・・・

「はい?!?!」

「ナ、何でここにいる!?!」

「さあ、バカどもよ! お縄のつく時間だああ!! かくごはいいかああ!」

「て、鉄人んんん?!?!」

ムキムキの体に見覚えのある髪型、そして聞き覚えのある声・・・完全に鉄人こと西村先生だよね?!

「誰が鉄人だ!!」

「くそ、なんとか逃げるぞ!!」

「わかってる! あんな若造に捕まりたくない!」

「ふむ・・・俺が捕まえてもいいが仕方ない。たまには譲るから働け!」
鉄人の言葉と共に後ろから黒い影が飛び出してキャッシュュ達をひれ伏せさせた

「ぐうえ?!」

「貴様ら二人とも逃げれると思っただか!」

「凄いや・・・って、今度は須川君?!」

明久は出てきた人物に驚き、名前をあげると彼は怪訝にこちらを見ている

「ん、何で俺のことを知ってるんだ?」

「え、君は須川君だよな?! あのFFF団の!」

「FFF団? いや、俺はそんなに所属してないぞ」

「「は?」」

須川の言葉にみんなが啞然としていたが僕はもしかかってというあの仮説が生まれて納得した

「・・・なるほど。もしかって・・・」

「何か気づいたのか？」

「まあね」

「話は後で取り敢えずは・・・」

「こいつらを連行しろ!! 嚴重にだ!」

「「了解!! ボス!!」」

「誰がボスだ! きつさと動け!!」

ムキムキの軍隊が鉄人らしき人物に指示されながら動いているのを見て、下手に今は探りいれるのはよそうと決めた・・・

「くそ!! 歴史を残すべき私が捕まるとは・・・」

「すべこべいうな!」

「はあ・・・」

「悪いが逃がすことはもうない」

キャツシユとDr. クロンは恨み言をいいながらタイムパトロールへと乗せられた。そして、鉄人になている人がこちらに振り向き：

「協力感謝します!」

「あ・・・あなた達は」

「明久、この人達は僕らの知ってる人とはまた別の人だよ」

「そうなの!?!」

「ですよね?」

「うむ!」

いつの間にか鉄人がそこにたつて頷いていた。そしてそのとなりの須川が説明し始めた

「改めまして現代のあなた達が知る須川と鉄人・・・失礼、西村さんではありません。つまり、私達はあなた達がいついた子孫に当たります」

「「「・・・子孫?!」」」

「うむ。俺の名は西村鉄でタイムパトロールは色々な支部があるが、立場は副署長といったところかな」

「俺は須川灰。西村さんの右腕の存在で尊敬する人は二宮金次郎と西村さんだ」

「「(これ本当に須川!?)」」

須川君の子孫と思えないぶりの対応に僕ら全員が引いていると僕は苦笑いしながら対応した

「そ、そっか・・・」

「さて、我々はここで本来は引き上げたいところなのですが・・・」
「・・・わかつてるよ」

僕はゆつくりとそちらに歩くとドラえもん達やスネ夫、ジャイアン、しずかちゃんは何かに気づいたのか悲しそうに見ていた

「すみません、その前に少しだけ時間ください」

「留溜璃？」

「・・・わかりました。まずはキャツシユ達を刑務所に送り出しますので、我々は一旦失礼します。・・・二時間後にこの世界の歴史を修正しますので・・・」

そういうなり須川達はタイムパトロールへと乗り込み先にキャツシユ達を送り出した。そして、僕は留溜璃の方へと向き合った

「どうしたの、留溜璃」

「・・・まだ私の正体気づいていないの？野比のび太君」

「・・・」

「本当は気づいてるのじゃない？」

「・・・本当に・・・君なの・・・？」

「ええ、本当よ・・・。最も・・・残っていた概念的なものなのかしら」

僕はその言葉を聞いて悲しく寂しく笑いながら二度と口にするとはなかったあの言葉を聞いた

「・・・」

「私の名は留溜璃ではない・・・。本当の名は・・・リルル」

「・・・っ」

「え・・・」

「!?!」

僕はその名を聞いて寂しく思いだし、そしてその名に心当たりある仲間達が全員驚いた

「こういえばいいのかしらね・・・久しぶり・・・のび太君」

留瑠璃・・・いや、リルルは悲しく笑いかけてきた

君の名は……!!

最初に出会ったときの彼女は僕らの知ってあるあの子に似ているのを見て間違えるはずがない、あの子に違いない!……そう思っていた彼女は留瑠璃ではなくリルルと名乗った……

『私の名は留瑠璃よ』

だから、リルルではなかったのかと無理矢理自分の疑問を納得させていたが、彼女は別れ際に自らリルルと名乗ったのを聞いて回りは衝撃だった

「リルル……って……」

「嘘だろ……。だって、リルルは!!」

「のび太君との出会いはジュードを探すために地球にして探していた時ね。その時にミラーワールドだったかしら、そこで私とあなたの秘密の約束をしたわね」

「!」

「ボロボロになった私を助けてくれて、治療をしてくれたのはあなた達で静香が私と一緒にいたわね」

「!!」

「そして、あなた達四人は何万人の部隊を相手に戦っていたわね。そして、歴史を変えるために静香と未来を変えた」

「……」

リルルが話したすべては僕達五人しか知らない話だった。すると、ルカとルナちゃんが恐る恐る手をあげていた

「あの一、このタイミングで聞くのもあれんだけど……つまり留瑠璃の本当の名はリルルって言う子で」

「のび太さん達とは知り合いだったと言うことですか?」

「……うん」

「のび太!」

「間違いないよ……。他の人には知らない事を知ってるから、目の前にいるのは紛れもなくリルルだよ」

僕の言葉にドラえもん達は何も言わずにリルルのほうをみていた。

すると、リルルは苦笑いしながら人差し指を指しながら訂正するようにいった

「一言いっておくけど、私はあなた達とと共にいたリルルとは少し違うわ」

「とうとうと?」

「まさか、マンデラ・エフ・エクト!」

「なんだ?そのマンデ・エクトって」

「マンデラ・エフ・エクトだよ、ジャイアン」

「マンデラ・エフ・エクトっていうよりもマンデラ効果といった方が正しいですね」

ドラえもんの言葉にみんなは疑問をもっていると王ドラがこちらにかけよって説明し始めた

「ドラえもんの言う通り、マンデラ効果の可能性はありますよ。簡単に言えば事実と異なる記憶ということですよ」

「??」

「のび太君や明久君に分かりやすくに説明するね?たとえば、のび太君は今生きているけど、実はのび太君そのものが存在しない、またはこの世界にいない存在だと言うことに瑞希ちゃんや美波ちゃん美子ちゃんがその記憶にはいないはずの人物の記憶が刻まれてるっていうこと」

「!!」

「ええ、のび太死んでいるの!」

「例えばという話でしょうがああ!!」

「ギャー!?!」

「・・・ドラえもんさんの言う通りよ。今の私はリルルそのものの記憶が私に刻まれているようなものよ」

それを聞いて僕ら全員がリルルのほうをみてどのような気持ちでそれをいってるのかは計り知れなかった

「もう私自身が残された時間は少ない。だから話さないといけない」

「つつりルル!!」

「つきや!?!し、静香・・・?」

「また・・・またあえて嬉しい!!例え記憶が平行の世界だとしてもまたあえて嬉しいわ!!」

「っ・・・そうね、私もよ・・・静香」

静香ちゃんとリルルはもう二度と離さないと言わんばかりに抱きめして泣いて泣いていた。そんな様子にあの頃を知る僕らは大号泣していた

「うおおおお、だめだ!!こういうシーンは泣いてしまうよ!!」

「ジャイアン昔からこういう感動的な弱いもんね・・・涙が止まらないよ」

「うう・・・」

「はい、お兄ちゃん」

「ありがとう・・・ううう、涙あが・・・止まらないよー!!」

「・・・ツツ」

そんな僕らの様子がおかしい何も言わずに黙ってみていた。美子さんも、雄二も・・・そして、明久も何も言わずに見ていた。静香ちゃんとリルルが抱き合って泣き止むこと数分・・・リルルは重々しく口を開いた

「もう私の体も消えかけているのは感じるわ」

「!!・・・そっか」

「・・・私はあなたに約束したからね。いつか天使にでもなつて会いに行くって・・・クローンみたいな形での再開だったけど嬉しかったわ」
「僕は君にひとつ謝らないといけないことがある。あの時・・・僕らがもつと力あれば・・・僕がもつと頑張つて戦えば君にはそんな選択を与えなかったのに・・・」

すると、リルルは僕の方へと寄り添い頬を撫でた。そして、優しく愛おしく僕を撫でながら話した

「私はあの時の事は後悔してないわ・・・ジュードも・・・ピツポもね」
「リルル・・・」

「だけど消える前にひとつだけやりたいことがあるのだけど・・・美子」
「・・・何？」

「これはのび太くんが悪い訳じゃないのよ。そして、今からするのは

私の意思だからね」

「?・・・っ!?!」

「んっ!?!」

「!!!」

リルルはみんなの前で・・・

僕の頬にキスをした

「り、リルル?」

「唇のキスは美子のものよ。けれどね、頬ぐらいは許してね」

「のび太ああ・・・!」

明久がなにか言いたそうに僕を見てるがそれどころではない!!
そう思いながらもあることに気づいた

「!リルル・・・体が」

「・・・時間が来たみたいね」

「リルル!!」

「そんな顔をしないで・・・一っだけ約束してほしいの。・・・私を
忘れないで」

「!・・・うん、きつと約束守るよ・・・」

僕がそういうとリルルは笑い、そして回りをみた。まるで一人一人
忘れないようにじつくりとみて、そしてリルルの回りに光に包まれる
速度が早くなった

「っリルル!!」

僕はリルルを抱き締めておこうと思ったが一步遅く光包まれて消
えた・・・

ありがとう

優しき心を持った彼女は・・・

再び僕らの前で現れ・・・

僕らを救ってくれた大切な仲間・・・

旅の別れ

リルルがいなくなったあと僕らはそれぞれの思いを持ちながら空を見上げていた。そして、僕はゆつくりとみんなの方へと振り向いた。「ルカ、ルナさん、わざわざこんな遠い世界まで迎えに来てくれてありがとうね」

「のび太・・・その・・・」

「大丈夫だよ。・・・ごめんね、こんな再会で」

「いいえ、気にしないでください。友達だから助けにいったのですから」

「そっか。それを言われたら肩の荷が下りるよ」

僕はルナさんの言葉に笑いながら安心した顔で話した。そしてみんなに聞こえないように二人にも話した

「しばらくはまた会えないかもしれないけど、また会いに行っているかな？今度は地球を案内するよ」

「うん」

「それなら皆さんと今度回らないといけませんね！」

「うん。・・・ドラミちゃん」

「わかってるわよ。ルカさんとルナさんは私が元の時代に送ります。そして、月まで私が付き添いますので」

「ドラミさん、ありがとうね」

「気にしないで。でもその前に・・・キッド！」

ドラミちゃんはドラえもんズでもっとも仲良かった人と話にいった。もちろん僕や他のみんなもそこへ寄り添った

「はいはい、なんだ？へむちやら」

「へむちやら!?へむちやらっていった!?」

「へむちやらだろ？大体、もっと他の方法で倒せる頭はあつただろ」

「仕方ないじゃない!!・・・キッド！」

「なんだよ」

「・・・もう一度あえて嬉しいわ」

「!!」

ドラミちゃんが優しげな顔での言葉にキッドは顔真っ赤にして驚いていた。相変わらず仲良いのか悪いのかわからないな・・・。「やれやれ、これで私達も1件落ち着いたとして・・・約束の件楽しみにしていますよ。その前にこんな大勢ではタイムマシン乗れませんでしょ?」

「たしかにそうだよねー」

「そこは安心するである。我らドラえもんズを含めてそれぞれのタイムマシンがあるのである」

「ガウガウ（ドラミちゃんのタイムマシンにはルカとルナ、そして後は・・・）」

「女子グループで良いんじゃない?」

ドラえもんズたちの意見にドラえもんが最終的な意見をまとめて出した

「なら、美春ちゃんと秀吉君、里緒菜ちゃんと冬花ちゃんとルカとルナちゃんは先に帰ってね。あと、ムツツリーニ」

「うん、のび太達はまた時間あつたら月に来てね?みんな大歓迎だから」

「はい。貴方達は私たちを救ってくれた大切な人達なのですから」
「・・・いつか必ず顔を出しに行くよ」

「なら今度は僕たちも顔を出すから良いかな?」
「勿論!!大歓迎だよ!!」

明久とルカは約束だと言いながら握手していた。僕はその間に清水さんを密かに呼び寄せた

「どうしました、のび太お兄様?」

「清水さん、君にひとつだけ頼みたいことがある」

「!美春になにでも任せてください!お兄様のためなら体張ります!」

「そっか・・・じゃあ・・・これを学園長に渡してくれない?」

僕は清水さんに召喚システムに関するデータを渡した。すると、清水さんはそれを見て疑問そうにみている

「なぜ私に?お兄様が直接私にいけないのではありませんか?」

「データは約渡せた方がいいし、清水さんだから頼めるじゃあだめかな？」

「!!任せてください!!この美春が必ずや届けます!!お兄様任せてください!!」

「う、うん」

それをいうなり美春は秀吉たちに「早く帰りましょう!」と急かしていた。まあ、頼んだ身としてはあれだけど・・・行動力あるよね・・・

「じゃあ、ドラえもんさん!私達は先に帰りますね!」

「真理亜お姉さまをよろしくお願いします!武お兄さま」

「・・・待っておく」

「ではまた後でのう!」

こうして、秀吉と真理亜さんのところの妹達とムツツリー二と清水さんはドラミちゃんと共に現代へと帰っていった。ドラえもんズも先に帰っていくと話してドラミちゃんと共に行動した

残ったのは・・・

男：僕、明久と雄二とジャイアン、スネ夫、ドラえもん

女子：霧島さん、美子さん、姫路と島田と静香ちゃん、真理亜さん

「・・・終わったのよね」

確認するように疲れた雰囲気を出しながら島田は聞いてきた。それをきいて僕らは全員うなずいていた

「うん・・・終わったんだよ」

「そっか・・・」

「・・・」

皆の顔を確認しながら僕は目を伏せながらこれから僕はどうなるのかは自分が一番よくわかっているからこそ、別の方向を歩いた。そんな僕の行動に気づいたドラえもん達はなにか気づいたのか寂しげにみていた

「つく・・・あっ・・・」

誰にも見せれないその涙は優しい風とともにこぼれた。そして僕はある覚悟を決めないといけなさと共に決意した

「(リルル、君は約束を守ってくれたんだね。なら僕も約束を守るの
はじめをつけないと・・・たとえばみんなに怒られてもこれは僕
のけじめ)」

そして僕は崩壊してしまったこの世を眺めてから僕は現代へと
帰った・・・

僕はもうひとつのけじめをつけないと・・・ね

ひとつの真相

――現代――

あのリルルとの別れを告げてから僕らは無事に未来に着いた。本当は全員からだがボロボロだけどまずは現代へと帰ることを優先として戻ってきた。現代に帰るとそこには先に帰ったドラえもんズがそこにいた

「お帰りなさい」

「王ドラ!?それに他のみんなもいたの?」

「はい。約束していた事もありますからね」

「約束?」

「あれ、しらねえのか?」

「・・・もしかって、ドラえもんがしたのではないの?」

一体何の約束をしたのか疑問を持っていると、ドラミちゃんと静香ちゃんが手をあげてドラえもんズ達の疑問を答えてくれた

「あ、実は「先取り約束機」であることを約束したの」

『必ず、料理をするからお兄ちゃん達を助けて!』って伝えたの」

「なるほどー・・・え?それでキッド達が来てくれたの!」

「ああ、俺たちは何かに呼ばれた気がしたんだよ。そして、その呼ばれた声に導かれながら行くと」

「のび太達がいた場所へと来たのである」

なるほど、それでキッド達はこの世界に来てくれたのか・・・「さて、というわけで・・・」とキッドがゆつくりと立ち上がりながら僕らの方をみて・・・

「「「どら焼きを作ってくれ!!」」」」

きれいに土下座し慣れているのか!?と思うくらいきれいな土下座を披露してくれた。そのようにドラミちゃんは啞然としながらも任せて!買い物へ出掛けた。買い物へと静香ちゃんとドラミちゃんと美子さんが出掛けた

「あれ、姫路さんと美波はのこらないの?」

「うちはほら、葉月がいるから帰らないと」

「私も帰らないと不味いですから」

それをきいて僕らは納得した。それと同時に申し訳ない気持ちになったのはここだけの話である

「じゃあ、おれと真理亜さんとスネ夫と里緒菜、冬花は帰るな」

「あ、うん。・・・ジャイアン、ごめんね」

「・・・お前まさかと思うけど・・・」

「そうするって決めたから」

「・・・そこまで決めたなら何も言わんが、さっさと戻ってこいよ。じゃあ、俺らは帰るな!!」

そういうと共にジャイアン達は帰った。真理亜さんは怒りながらジャイアンの肩を持ちながら歩いていった。ムッツリーニ達は学園長に報告してくれたと共にそのまま家へと帰った。今、僕の家に残ってるのは僕とドラえもん、ドラえもんズと明久だけ

「あれ?雄二はいつの間にな?」

「帰った瞬間にそのまま霧島さんに連れていかれたよ」

「そっか、ラブラブな時間がほいいのか。邪魔しちや悪いね」

「・・・行動と言葉が一致してないよ。ナイフしまいなよ」

「はっ!?いつの間にか殺意わいてしまったよ!!」

そんな行動をあきれながらも僕は明久の体を心配しながら別の話題をそらした

「たぶん今は体がいたいとかそんなの感じないと思うけどどう?」

「え、全然大丈夫だよ?」

「あんなのあつた後で全然大丈夫だよって・・・まあいいか、明久だし」

「それはどういう意味かなあ!?!」

「「ただいま〜!」」

こうしてる間に美子さん達が戻ってきたのと同時にすぐに台所を使えるように準備をした

美子 side

私達はどら焼きを作りながら、何で今こんなことをしてるのか疑問

に思いながら作業をしてるとドラミさんが話しかけてくれた

「大丈夫？」

「え、なにがですか？」

ドラミさんの問いにどういう意図があるのかわからなかった私は思わず聞き返した。すると、静香さんが苦笑いしながら教えてくれた「さつきからずつと難しい顔をしていたわよ」

「そんなに難しい顔をしてましたか？」

「ええ」

私の問いに二人は即答で私はそこまで表情を出していたのかと反省しながら作業を続けた

「どら焼きを作るのは構わないのですけど・・・」

「けど？」

「こんなに数要ります?！」

私の今日の前にあるどら焼きは無数の積み重ねで山盛りになっていたのだ。こんな光景にドラえもんさん達食べきれぬのか疑問で仕方がないのだけど・・・

「ああ、美子ちゃんはしらなかったのね。ドラちゃんは未来とか現代とかでどら焼きを百個食べた記録があるの」

「嘘でしょ!?!」

「本当よ。お兄ちゃんたら、挑戦した翌日には必ずもう動けない状態になるのよ」

「それはそうでしょうけど・・・」

あの体でどら焼きをたくさん食べれるってロボットはすごいわね・・・そう話してる間にどら焼きが完成していき、次々と完成させたどら焼きを運ぶたびにどら焼きが消えていく光景に驚いた・・・
・・・のび太くんのことを相談しそびれたな・・・

ドラえもん side

僕らドラえもんズは現在どら焼きを食べながらのび太くんの部屋

で食べていた。のび太君らは僕らに気を使わしてくれて今彼らは家にいない

「「「「「」」」」」」

重い沈黙が辺りに響いていた。

それもそうだろう・・・長い間、僕やドラミは大切な親友達の存在を忘れてしまっていたのだから

「・・・さて、どこまで話せば良いのやら」

「まずはドラミさんにドラえもん・・・元気そうでした。キツドもドラミと会えて嬉しいそうですね」

「ぼっ!?王ドラ!!」

「っっ!!／／／」

王ドラの言葉にドラミとキツドは顔真っ赤にして照れていた。なんかこういうやり取り自体は懐かしく感じるな・・・

「ドラえもん達が私たちを忘れていたのは無理のないことなのですよ」

「そうであるな。ドラえもんドラミが忘れてしまっていたのは・・・別世界とかなってしまっただからである」

別世界・・・? 一体どう言うことだろう?

「まあ、簡単に言えばそうだな・・・俺達はある冒険をしていたときの話だな。世界を揺るがしかねないんでもないことが起きたのさ」
「それはいくつもの世界が混ざりあってしまったこのままでは消滅する恐れがある事態になったんだよー」

「世界が消滅する!?!」

「そ、アチモフのバカがとんでもないことをしでかしてくれてな。世界で禁忌とも言われる世界をリセットしかねない道具を作り上げやがった」

「世界をリセット!?!」

「当然そんな恐ろしい道具は廃棄するべく、俺達ドラえもんズも立ち上がってアチモフを追いかけて止めたのはよかったんだが・・・」

キツドが苦しげに昔を思い出しながら言葉を選んでしゃべっていたのと僕も思い出した

「時空があまりにも乱れすぎていたのと、このままでは本当に取り返しのつかない事態になるから僕ら8人である選択をしたんだっただよね……」

「……そうだ。二つにひとつしか選べなかった」

「1つはこの友情テレカを使いきるくらいにエネルギーを使つてもとの時空を取り戻す。もう1つは……」

「時空そのものを二度と通じないようにテレカで封印することだったよね？」

「そうだ。結果的に見れば消滅は防がれたが、お前とドラミが時空に飲み込まれた」

「世界を救った代わりに俺達のいた世界とお前のいた世界が分裂してしまい、俺達の世界はドラえもん達が存在しない世界になった」

「それで私達はキッド達の記憶がなかったわけだわね」

僕ら兄妹はその事実には納得していたのと当時になぜ今回はこの世界にこれたのか疑問に思っていた

「キヤツシユ達が時空の乱れ引き起こしていたのと先約束機のお陰だ」

「とはいっても、あまり長居はできないから俺達もそろそろ戻らないとな」

「つてことはまさかもう時間が……」

「えー?!まだいたいよ!!」

「それはみんな同じ気持ちである。しかし、このまま我輩達がここにいたらまた時空が乱れてしまう」

「うー……それは避けたいけど……」

「一時間……」

「え?」

ドラリーニヨの言葉に王ドラが真面目な顔で考えて答えてくれた。そんな答えな僕らは?となっていたが、ドラニコフが笑顔で話した

「ガウガウ（一時間以内ならここにまだ居て良いってこと）」

「!なら、ドラミ来てくれ!!」

「え、き、キッド!?!」

キッドがドラミをつれてどこかにいった。本当ならドラミをどこにつれていくうう!?!?っていう兄バカ的な台詞を言えば良いのかもしれないけど・・・

今は二人の時間をとらしてあげよう

またね

Drumside

私はキッドにのび太さんの家の屋根の方へと連れていかれて一緒に月を眺めていた。外につれていったわりには何も喋らないってどう言うことよ!!

「なあ、ドラミ……」

「なに？」

「元気にしていたか？」

「へ？」

「いや、そのよう……」

キッドは頭をかきながらなんか照れるように話していた。そういえば、昔からキッドは照れるのを誤魔化すときは頭をかいたりしていたわね

「元気よ」

「そ、そうか」

「キッドの相棒のエドさんは？」

「あいつはいまアメリカでゆっくりと休んでる」

「そうなんだ。キッドは高いところもう大丈夫なの？」

「高いのはいまだに無理だ!!」

「即答!？」

相変わらず高いところだ目なんだとわかる位顔真っ青になって震えていた。なんか変わらなさすぎて安心したのと、そして色々なことを話した

初めて出会ったときの事

宇宙で冒険したこと

お兄ちゃん達の誕生日サプライズしていたこと

とにかくたくさん話しくった。この時間が永遠に続いてほしいと思えるくらいだったけど、楽しい時間は終わりが来る

「そろそろ時間だな」

「キッド……」

立ち上がるキッドに私は寂しく感じてキッドを見つめるとキッドは優しく笑いながら私の頭を撫でた

「そんな顔をするなよ」

「だって！もう二度と会えないかもしれないんだよ!?寂しくないの!？」

「そうだな・・・確かに会えなくなるのは寂しいがな」

「え・・・んっ!？」

「・・・俺はいつでもお前を見守ってるさ・・・ドラミ」

わ、私はキッドにキスをされたの!?そう気づくまでは数秒かかったけど、私はなんだか負けっぱなしは嫌だからキッドにもう一回キスをした。そのあとのび太さんの部屋に戻るとお兄ちゃんが号泣していたのは引いたけど・・・

「さて、帰るか」

キッドが率先としてタイムマシンを乗り込もうとする何故か急に固まっていた。そして震えながら王ドラさんの方に振り向いていた

「あ、あれ?」

「どうしました?キッド」

「なあ、王ドラ。俺たちってドラえもんを助けるためにタイムマシン乗っていったよな?」

「そうですが、そんなこともわからなくなったのですか?イチヤイチャしていて?」

「・・・俺たちの本来帰らないと行けない時空がなくなってるのですけど?」

「「「「・・・はあああああ!!!」」」」

キッドの言葉に他のドラえもんズが全員驚いて叫んでいた。本来の時空が消えてしまった上に、もとの世界にかえれなくなったと言うこと?」

「えっと、つまり・・・」

「我輩達は元の世界に帰れず・・・」

「俺達ドラえもんズはこの世界に存在することになったと・・・」

「な、な、な・・・何で今生の別れになるのにこうなるんだよー!!!」

他のみんなも固まって動揺していた上にキッドが顔真つ赤にして叫んでいた。でも元のいた時空には帰れない上にずっとこのままと言わうわけにもいかないから・・・

「キッド、私と一緒に未来に帰らない？ドラえもんズも」

「「「「え？」」」」

「ああ、確かにそれはいいかもね！ドラミナイス！」

「ふふん！」

私の提案にお兄ちゃんは賛成してくれていたが、他のみんなは固まっていた。すると、キッドが一番懸念していることを聞いてきた

「まてまて、それでも俺達はこの世界の未来で戸籍登録はされてないぞ？」

「そこは問題ないよ。それに・・・」

お兄ちゃんがキッドの方に肩を寄せながら何か耳打ちしていた

「キッドもドラミのそばにいたいでしょ？」

「・・・あー・・・わかった。それじゃあお願いします」

「ええー！」

私は早くドラえもんズ達に未来の世界へ連れて帰ろうと一足先にタイムマシンへと急いで乗ろうとした

「あ、そうだ、のび太さん」

「ん？」

「・・・あまりかんがえすぎないでね」

「!・・・うん」

私はみんなに別れの挨拶をして先にタイムマシンにのっていった。色々なことがありましたがでも今回の旅は疲れたとだけは伝えておきます。そういえばキッドがお兄ちゃんに何か耳打ちしていたとき一瞬真つ青になっていたのはなんでかしら？

のび太 side

ドラミちゃんがタイムマシンへと乗り込むと次々ドラえもんズはタイムマシンへと乗り移っていた。最後キッドが乗り込むときドラ

えもんが・・・

「キッド・・・わかっていると思うけどもしかもしもドラミを泣かしたら・・・ね?」

と何か言っていたがどう言うことだろ?キッドはキッドで震えていたけど・・・大丈夫かな?」

「さて、そろそろ僕は静香ちゃんをアメリカに送り届けてくるよ」

「送り届けてくるよって、どこでもドアででしょ?」

「もちろんそうだけど、少しニューヨークで用事ができたから帰るのが遅くなるよ」

「それってまさか?」

ドラえもんが見せてくれた紙には・・・

「名乗れ、どら焼き世界チャンピオン大会?」

「静香ちゃんから見せてくれたこの紙は挑戦しない手はない!!」

「というわけでのび太さん。どらちゃんをNYの方に連れていくけど大丈夫?」

「まあドラえもんがどら焼きに目がないのは知ってるからいいよ」

「よし!!」

「よく考えてみたらロボットがどら焼きを食べるのってセーフなのかな?」

ドラえもんが喜んでいて静香ちゃんは苦笑いで僕は呆れていて美子さんは少し戸惑っていたけどそこは触れてはいけない!

「じゃあ、のび太さん、美子ちゃん」

ドラえもんがどこでもドアを出して乗り込むと静香ちゃんがドアを潜り抜ける前にこちらに振り向いた

「うん?」

「また・・・ね」

「うん・・・また・・・ね」

「ええ、また」

その言葉の意味はわかっている。例え遠くにいっても僕たちは友達で・・・仲間でもあるから必ずまた会おうと言う意味もあることを僕は知ってる・・・

さて・・・僕もけじめをつけないと・・・

謝罪

ドラえもん達もいなくなり、今この家にいるのは僕と美子さんだけだ。僕は今回のことで多くの迷惑をかけた上に仲間や大切な人を泣かした……

「美子さん……大事な話がある」

僕は彼女に話そうと決心して、彼女を呼び掛けた。対する彼女も何かを決心したように僕の方へと向きあいながら正座をしていた。僕も誰もいないのを確認して一呼吸おいていた

「(のび太くんが何か話すと言うことはそれだけ彼に何か覚悟して話しかけたと言うこと……だから、今は何を言われても私も受け入れる) 何?」

「……大事な話をする前にまずはごめんなさい。君を傷つけて……」

「君があいつらに操られたとき、すぐに助けられずに申し訳なかった。そして、あのときに僕があいつらに決着をすぐにつけておけば……」
僕はその言葉の先を言えずに土下座するように頭を下げて続きをいった

「あいつらに負けて操られたとはいえ、大事な人や友達を傷つけたのは絶対に許されないこと……だから、君を守れなくってごめんなさい」

「頭をあげて、のび太君」

凜とした声で美子さんは僕に言った。そして僕は頭をあげると、美子さんは悲痛な顔でこちらを見ていた

「それを言うなら私もあなたには謝らないといけないじゃない?」

「でも君は……」

「あの人達に襲われて、操られてあなたを傷つけた。さらに大切な人を忘れた私も同罪だとおもうわ」

「……それがあるから君には辛い思いをしてほしくなく、忘れてほしかったのも正直ある」

「そうでしょうね」

僕が美子さんにはそういうことを思い出してほしくないから忘れるようにしていたのだが、美子さんは軽く微笑みながらお見通しといわんばかりに僕を見ていた

「だから私もごめんなさい」

「もとより僕はそれを気にしてないよ」

「じゃあ、お互い様ね」

「うん」

そういつて僕らはクスクスと笑い、微笑みあっていた。最初の殺伐とした雰囲気はすっかりなくなりお互いにリラックスした雰囲気になった

「さてお互いに建前はおわりよね？」

「うん」

だが僕ははじめをつけないとダメという事を忘れてはいけない。彼女も何かをけじめつけるというのは性格上ありそうだ

「どちらから話す？僕は美子さんからでもいいよ」

「いやいや、のび太君からでいいわ」

「お互いに譲り合うこういうときは・・・」

「そうね」

「同時に言い合おう」

お互いの言葉にうなずきあいながら目をつぶって一呼吸して・・・

「せーので」

といつてから・・・

「別れよう」

僕らはお互いに同じように発して呟いた

そして・・・

それはお互いに覚悟をして決めてた瞬間でもあった・・・

僕らがそんなことが起きてるよそでは・・・

「僕の秘蔵コレクションがああああー?!」

「俺の秘蔵コレクションがああああー?!」

どこかのバカ二人が恋煩いしている人たちによって燃やされていたとか・・・

帰ってきた日常
帰ってきた日常

明久 side

僕は今大きな選択を迫られている。その右手には包丁・・・さて僕はその目の前のとるべき選択は・・・!!

「僕の迷いをたちきつてくれ!はあああ!!」

ザクッ

「・・・よし、八分の一のカップラーメンの完成だ!!」

僕は切り裂いた麺をお皿に入れて、さらにお湯を沸かしたのを皿にいれると・・・カップラーメンの完成!そして、それを食べた僕は・・・今日も一日頑張ると決めた

「行つてきますー」

僕は誰もいない家にそう言い残して学校へと歩いた。いつも通りの登校で学校に向かうと雄二が目の前にいた

「おーい、雄二」

「・・・明久か?」

「そうだよ。・・・どうしたの、雄二のそのボロボロに包帯巻かれた姿は?」

「そういうお前も絶望的な顔してるが何があった?」

「僕はその・・・簡単に言えば男の魂を燃やされた」

「・・・お前もか・・・」

僕の言葉に雄二はなにかわかったのか悲しそうな顔でこちらをみて僕も察した

「まさか・・・」

「俺もだ・・・俺も燃やされた・・・っ!」

「っ・・・雄二!!」

「明久!!」

そのまま僕らはゆっくりと抱き締めるように向かい合いながら・・・

「死ねや!!ぐふっ!?!」

僕と雄二はお互いに顔を思いきりに殴るとそれぞれ別の方の壁に直撃した。くっ、相変わらずいい拳を持っているじゃないか！

「明久てめえ!?今の殴る必要なかっただろ!!」

「雄二こそ、なんで殴るのさ!?!」

「それはお前が原因だよ!そもそも、翔子に連れ去られたとき俺はお前にSOSを求めたのに無視しやがって!」

「雄二こそ、霧島さんとたのしけイチャイチャしていい思いしていたなんてずるいよ!?!」

「なんだと!?!」

僕らが再び胸ぐらをつかもうとしたら……

「やめんか、このバカども!!」

「げっ!?!」

聞き覚えのある声に僕らは共に声をハモリながら声した方向に振り向くとそこにいたのはむさ苦しい鉄人……ではなく

「まったく、お主達は朝から何をしておるのじゃ」

「ひ、秀吉!」

「なるほど、声真似か……。さすがに鉄人の声は焦ったぞ」

「しかしお主達も急がないと不味いぞ」

「え?」

秀吉の言葉に僕は嫌な予感したので携帯を開くと……

僕らは全力で走った

結果、ギリギリに到着だったことだけは確かだ

HR

朝のHRの時間になる前に姫路さん達もギリギリの到着だったのは驚いた。とりあえずは鉄人のHRを聞かないとダメだな……

「さて、今日の連絡事項は召喚戦争はまだ禁止だ」

「え、まだできないのですか?」

「ああ、どこかの誰か達がよくしているせいか召喚のメンテナンスをなかなかできなかったからな」

「……ナンノコトデシヨウネ」

心当たりある僕らは目をそらしながら言葉を濁すと鉄人はあきれながらも他の連絡事項を話した

「あと、もう少して体育祭があるから体調崩さずに気を付けろ」

「あー、もう体育祭の時期か・・・」

「最後に今日俺は出張だから・・・くれぐれも問題を起こすなよ？特に吉井と坂本」

鉄人がこちらを思いきり僕の方をにらんでいた。鉄人が出張かー、すきなことできるなーとおもってたのに、なぜにらむ!?

「待つてください！なんで雄二はまだしくも僕も!？」

「お前達がこれまでの出来事を考えたら警戒はする!」

「ひどっ!？」

「じゃあ、きょうのHRはおわりだ」

そういつて鉄人が教室でいき、残った僕らは次の時間まで余つてるのでとりあえずは喋っていた。それもこの間の苦楽を共にした仲間と・・・

「おはよう。姫路さん、美波。ムツツリー二にジャイアンと真理亜さんも」

「・・・ビッ」

「おはようございます!」

「ハロハロー」

「よう」

「おはようございます」

この面子がいることにひと安心するも僕は一つ気になったことがあった

「今日のはび太来ていないのか」

「まだ謹慎なのかな?」

「まて、なんか聞き捨てにならないこと聞こえたのじゃが!？」

「は?」

「へ?」

・・・あ・・・しまった。この件は秘密している人いるの忘れていた・・・ゆつくりと姫路さんたちの方を見ると

「・・・」

「(ボキボキ)」

「(あ、これはまずい)」

ぼくはゆっくりと立ち・・・

「さらば!!!」

全力で逃げようとしたが僕の両肩にいつの間にか掴まれていた

「どこにいかうとしてるのかしら、アキ？」

「きちんと説明してくださいね？明久君」

「拒否権は・・・？」

「ない」

僕はその言葉をうなだれながら、正座をしていた。僕の秘蔵の本が燃やされたのも鉄人に疑われたのもこれもあれも全部、キャツシユ達のせいだ!!!!

あ、でも今気づいたけどドラえもんはきちんと帰ってるのかな？

さらつと衝撃告白！

明久 side

いい朝とは裏腹に現在の僕は深い絶望を抱いている。その理由は……

「はい、これで今日の授業はおしまいです。昼休みはしっかりと休んでください」

古典という難しい科目に苦しめられていたからだ。古典の先生がメガネをあげながら授業は終わったという合図をくれた。ようやく昼休みになり僕は……

「……」

「見事に真っ白ですね」

「屍になってるな」

「さすがのワシも疲れたのう。して、雄二達は……？」

「俺はなんとかな。だが、ムツツリーニは……」

「春はあけぼの、やうやう広くスカートが……」

「あの通り、授業のとは全く関係ないことを口に出しながら燃え尽きている」

「……ウチ古典はダメ」

「み、美波ちゃん！私が教えますから!!」

僕以外にも真っ白に燃え尽きていた人がいた。しかも、美波とムツツリーニに至ってはなにかも感情なくなっていた

「つたく、とりあえずは屋上いくぞー」

雄二が疲れた顔の面子を見て呆れながら僕らに行動を促していた。そして、僕はゆっくりと屋上へと向かうとそこにはすでに先客がいた

その人は……

「あ、来たのね」

僕らの存在に気づいて優しく微笑みながら、嬉しそうな声を出していた。そう、その人は僕の親友の恋人の……

「こんにちは、美子ちゃん」

三上美子さんがその場所で待っていたのだ。あれ、でも誰か連絡し

ていたのかな？

「ええ、瑞希。美波はどうしたの？」

「古典で・・・あー、大体わかったわ。苦手な科目で理解するのにすぐくつかれたのよね？」・・・そうよ」

「まあ、私も苦手な科目あるからわかるわ。特に美波は帰国子女だから日本語難しいのよね？」

「ええ」

「あー、とりあえずは飯食べないか？」

三上さんがすごく同情した眼差しで美波を励ましていたが、ジャイアンの言葉に僕らも頷いて座り込み弁当を開いて

「いただきます」

今日も美味しい食べ物を食べることに感謝だよ！とりあえずは僕は8分の1のカップラーメンの残りをたべておこう！

「・・・まって、吉井君はまさかと思うけどそれがお昼ご飯？」

「うん、そうだよ？」

「・・・あなた今日までどうやって生きてたのよ・・・」

三上さんは僕の答えに疑問が付きないのか頭を抱えながらため息をはいていた

「これが明久だからな」

「むしろ俺もビックリしたぞ」

「こやつ頑丈さにはワシも真似できない」

「・・・ダイエツトを極めた人間？」

「極めてない！」

むしろダイエツトする理由はない!!むしろしないといけない人つて・・・あれ、いつの間にか僕は美波に胸ぐら掴まれていた

「・・・アキ」

「み、美波？」

「今・・・ものすごーく、失礼なことを考えてなかったかしら？」

「美波って太ってるよね？（ナンノコトデシヨウ？）」

「・・・こんの・・・ばかあああああ!!」

「ぶっつっ!?!」

美波に勢いよくものすごいパンチを顎に直撃すると共に僕は後ろへと吹き飛んだ

「見事に無駄のない動きですね……。もし、接近攻撃するならあれくらい鋭く重い攻撃をすれば」

「いや、真理亜。冷静にその分析しないでくれ」

「今のは明久くんが悪いです！」

「フォローの余地もないわ」

「ふん！」

「ご……ごべんなさい……」

僕は土下座しながら美波の怒りを沈めていた。久しぶりに美波の拳食らったけどひにひに攻撃力が強くなっている……

「全くか弱い乙女に本当に失礼よ」

「か弱い……？ごめんなさい、拳を下ろしてください」

「本当に相変わらず仲良いわね」

僕らのやり取りをみて三上さんは笑っていた。あ、そういえば三上さんはのび太が今日は休みなのは知っているのかな？

「あ、皆に大事な話があるからよく聞いてね。多分驚くかもしれないけどね」

「何をいってやがる。今さら俺たちが何が起きても驚かない」

「そうですわね」

「そうですね」

「うむ」

「……俺も驚かない（カチャカチャ）」

三上さんの言葉に僕たち全員驚かないと伝えると三上さんは確認するようによくみてから、口を開いた

「ええ、実はね……のび太君と別れたの」

「へえ、のび太と別れたんだ……へ？」

「なんだそんなこと……は？」

「む？」

「お？」

「(ばきや!)……なん……だと……!？」

僕らは何気なく聞くとさらにとんでもない単語が聞こえて、ムツツリー二は磨いていたカメラのレンズに変な音を出すとももに声を絞りながら震えていた

「えっ……?」

「……………Getrennt??」

「あの……え?」

女性陣も驚き、三上さんの方に注目してみていた。そして、三上さんは……

「のび太君と別れたの!」

「二ええええええええ!!」

この日、文月学園では最も激震走ったとか……

さらつと衝撃告白！Ⅱ

僕は三上さんから衝撃の話を聞かされて全員固まっていた

「つもぬぐー?!」

「ジャイアン喉積めている!」

「しっかりしてください!!はあ!」

「ごほつごほつ・・・あー、助かった」

ジャイアンはあまりの衝撃に食べ物や喉に詰めて苦しんでいて、真理亜さんがすぐに背中を叩いて何とか全員気を取り直した

「別れたって・・・のび太と三上さんが?」

「ええ」

「ほ、本当なんですか?」

「冗談にしては笑えないわよ?」

「そ、そうですよ」

「いいえ、これは本当の話よ」

「な、なんと・・・!?!」

「衝撃・・・」

僕は冗談でしょ?と思い聞いていたが、どうやら本当の話で嘘ではないみたいだ。それに、三上さんは真面目に答えてくれていた

「まあ、そういうわけで今私たちは物凄く仲のいい友人に戻ってしまったの」

「それいつ別れた?」

「いや、坂本。おそらく昨日俺たちが帰ったあとにその話になったのだろう」

「さすがね。あのときみんなが帰ったあとに二人で話し合ったの」

ジャイアンが心当たりあるのか三上さんに質問すると三上さんは苦笑いしながら答えてくれた

「まって、まって、まって!?!なんでわかれたのさ!?!あんなだけ、二人は愛し合っていたのに!?!」

「誤解してるようだけど、私たちは愛し合えなくなったから、別れたのではないの。お互い今も愛し合ってるわ」

「じゃあ、なぜ?!・・・っ」

三上さんが少しだけ悲しそうな顔をしていたのを僕はみてさらに質問をしようとするのをやめた

「私たちなりのけじめなの」

「けじめってそんな・・・」

「・・・で、あいつがいないのもそれと関係してるのか?」

関係してる?どういうことだろう?

「ええ。彼は今・・・いいえ、今話すことではないね」

「なんでじゃ?」

「時計をみて?」

言われた通りに時計を見ると僕ら全員が固まっていた。もう残り時間が少ないとわかった僕は急いで食べ終えて教室に戻ろうとしたら・・・携帯に着信記録があった

From三上美子(のび太の愛人)

To 吉井明久

件名 のび太君の件で・・・

気になるなら放課後に話すから屋上に来てね。坂本君と剛田君と木下君と土屋君は来れないらしいの

なるほど・・・つまり、放課後に僕と三上さんと二人きりということかな?あれ、のび太に殺されない!?二人きりになると怒られないかな?!

そんな気持ちを抱えながら僕は午後の授業を受けていた。尚、気になりモヤモヤしていたので先生に物凄く当てられた。おのれ、のび太め!!

――放課後・屋上――

僕はゆつくりと屋上に歩きながら今日の出来事を考えていた。なんでなのび太と三上さんが別れたのだろうか?そもそも二人とも仲悪

い雰囲気は見たことがないし……

「まさか!?!のび太に愛人ができてしまい、責任をとって別れた!?!」

「なんでそうなるの!?!」

「発想が怖いです!!」

「いだああああ!?!」

僕の頭にハリセンを頭に叩かれてものすごい音をした。物凄く痛かったのと今の声は……

「姫路さんと美波もきていたの?」

「アキも呼ばれたのね?」

「うん、真理亜さんは?」

「真理亜ちゃんはお手伝いと剛田君のお手伝いです」

「そうか……ジャイアンめ。絶対にやましいこと起こしそうで……はないね。さて、僕ら三人は屋上にいくと三上さんが昼休みと同様に待っていた

「……午後の授業お疲れさま」

「あ、うん」

「美子、単刀直入に聞いわ。……喧嘩で別れたわけではないのよね?」

「それはないから安心して。三人とも時間をとってくれてありがとうね。本当はどこかの喫茶店でも話せばよかったのだけど、吉井くんは恐らく金がないと思うからね」

「……それは事実です」

く、さすがのび太の嫁様!!あ、いや。元嫁様?とにかく、僕の現状を把握するなんてなんてすごいよ!

「大まかに話すわね。のび太くんと私が別れたのははじめだといったわね?もちろんそれだけではないのだけど」

「え?」

「……実はのび太君は今……未来にいるの」

「へ?」

「まさかのび太は……」

「アキ、わかったの!?!」

「凄いです！」

「三上さん、のび太は・・・まさかと思うけど未来の旅に出掛けた！」
「そうそう・・・って、違うわよ!!さすがにそれは違うわよ！」

あれ、違ったの!? けっきりのび太のことだから失恋とか家出でもしたと思っただよ!

「あのね、のび太君は・・・そのね・・・」
「？」

「未来にいった。のび太くんはTPの方へとね」

「え?それって・・・」

「まさか・・・」

「TPの元に連行されてるの」

・・・連行?それってつまり・・・

のび太は逮捕されたということ!?!

ドラえもん side

あののび太くん瑞希ちゃん、美波ちゃんの失踪事件も無事に終わり、僕は今何してるかと言うと・・・

「うーん・・・」

今のび太くんの家で今回の事件の詳細を細かく報告していた。普段はこんなことをしなくたっていいのだけど、今回の事件はTPでも把握していない部分があったのでそれを報告していた

「あのミュータントは二度と出してはいけないし完全に廃止をできたのか確認しないとダメだと苦情もいれないと・・・あと、僕の秘密道具も修理を出さないといけないからそれもまとめないと・・・」

アメリカから帰って減多にできない秘密道具のメンテナンスもしていたが、今回は大半修理か・・・トホホホ・・・お金が飛ぶよ・・・
「あれ?」

僕はある資料を見つけたそれを見ていた。それをみてため息をつきながら僕はあきれた声を出していた

「全く・・・あとでフォローする身にもなって欲しいよ・・・」

そして、その資料をひそかに隠した。というか、ばれないように隠

したといえは正しい。さて、もう一踏ん張りど処理しないとね！

さらつと衝撃告白！Ⅲ

明久 side

三上さんが驚くことをもたらしたせいで、僕や姫路さんと美波も固まっていた。そして、それを話した三上さんの表情は予想通りの反応だといわんばかりに苦笑していた

「まあ、そういう反応になるわね」

「いやいやいや、一体何があったの!？」

「そ、そうよ！のび太がTPに連行されたなんて・・・」

「冗談ですよね？」

「残念ながらこれも冗談じゃないわ」

姫路さんが冗談であつてほしいと思ひ、聞き返すが三上さんは首を横に降りながら否定していた

「でもなんでのび太が?!」

「・・・TPってのはのび太君から大まかに説明してもらったの。まず、タイムトラベルというのは知ってる？」

「タイムトラベル??」

「時間旅行ですか？」

タイムトラベルって時間旅行って言うんだ。メモしとこう

「ええ、流石ね。で、TPはタイムトラベル・・・つまり、時間移動を利用して犯罪を阻止するために闘う警察隊なの」

「時間旅行に関係する警察か・・・」

「で、キャッシュとDr. クロンは犯罪をおかしたからTPが動いたわけ。それぞれの罪は違法行為だけどね」

「でも、なんでのび太が？」

「そうね、のび太がなんでTPに連行されたのかわからないわ」

「・・・のび太君は、はじめをつけるために未来にいったの」

「はじめ・・・ですか？」

のび太が未来に行くことがはじめになるのは果たして疑問だが・・・

「のび太君は瑞希と美波を拉致したと犯罪の手助けしてしまったこと」

「え?」

「本人はいくら操られていたとは言え、友達や女性に手を出したことが許せなかったみたい」

三上さんは悲しそうにのび太がけじめをつけた理由を話してくれた。でもそれとこれでなんで別れるの!?

「それを言うなら私も彼を傷つけたのだから捕まるべきだとTPに申告したのだけど、TPは『野比のび太さんの意思もあり、貴方は被害者であるので』と言われたの」

「えっと、つまりのび太は三上さんのために罪を背負ったと言うこと?」

「本人は否定するでしょうけど、おそろくね」

「じゃあ、のび太はもう会えないと言うこと!？」

「落ち着いて。まだ話に続きがあるの」

「続き?」

「ええ、のび太君は連行されたけどこちらの世界では一日だけ休むの」

一日だけ!?! どういうこと!?

「まあ、それはおいといて本当の話は・・・のび太君と別れた理由ももうひとつあるの」

「それは?」

「お互いに・・・何処と無く信頼しすぎていたのよ」

「信頼しすぎていた・・・?それは悪いことじゃないの?」

「ううん、もっと分かりやすく言えば依存しすぎていたの。のび太くんという存在に甘えていたから・・・」

「でもそれは向こうが悪いのでは」

「結果的に見ればそうね。でも、それは結果論よ。私はのび太くんを守れなかったところが傷つけた事実があるのだから・・・これは私なりにのけじめよ」

「・・・でもさ、別れる必要はなかったのじゃない?」

そう、どう考えても別れる必要性はないし、依存しても問題ないと思うのだけど??すると、三上さんはすこし考えていた

「けじめよ。私達は・・・私は!?!」・・・瑞希?」

「私は……!!二人が仲良く楽しい姿を見てこっちも微笑ましかつたです!なのに……なのに……別れるなんて……」

「瑞希……。美子、私も同じ意見よ。本当に二人が仲良い姿を見てこちらも微笑ましかつたの。貴方はそれで良いの?」

「……何を言われても私達はもうあの時間に戻れないのよ。お互いに決めたいじめと覚悟なのだから……。ね」

その時の三上さんの顔はなにかをスッキリしたかのようにあのときの罪悪感でやつれていた顔ではなく、笑顔だった

「三人とも時間をとってくれてありがとうね。明日にはのび太君は戻るはずだけど彼を責めないでね?」

「三上さん」

「話はここまでにしときましょう。……後悔はしてないから……」

「え、いまなんて……。」「じゃあね!」あ、ちよつと!」

止める間もなく三上さんは早足で屋上を去り残ったのは僕と姫路さんと美波だけとなった。あの三上さんとのび太の別れとのび太がTPに連行されていたなんて……

「……ウチは気にしてないのに」

「私もです……。確かにのび太君に撃たれて気絶しましたが……」

「僕もののび太に攻撃されてひどい目に遭ったけどそれは操られていたからなのになんで……。うん、いまはほつとこう」

ぼくがそういうと美波が怒ってきた

「ほつとくって……。アキはいいの!?あの二人が……」

「いい訳じゃないよ。でもね、のび太も三上さんも僕らには凶りきれない決意と悩んでいたと思うから」

「……そうね。私たちが今言ったところであの二人が別れる意思は変わると思えないわ」

「なんか寂しいです」

「うん、でもなんとかなるはず。じゃあ僕らも帰ろうか!」

「そういい、僕は鞆を持つとすると……」

「アキ……。すこし待ちなさい」

美波がものすごいドスのある声で僕を呼び止めた。そんな僕はな

ぜか嫌な予感をして逃げようとしたが下手に動けば・・・

「(殺される・・・)ど、どうしたの?」

「実はね、お姉さんからアキのあるものを燃やしましたって」「まって!? 姉さんといつのまに連絡交換していたの!?!」

「あ、それ私も連絡来ました! 明久君、説明してください!」「な、ななにを!?!」

「明久君(アキ)は年上のお嬢様系とかが好みなのですか!?!」

その問いに僕はゆっくりと・・・

「さらばだ!?!」

「あ!?!」

「逃がさない!?!」

全力で二人から逃げた! どのみちうまいこと説明しても怒られる! ならば、逃げた方がいい! そしていつの間にか姉さんが僕の家に来ていたの!?!

たすけてー!! ノビエモン!!!

のび太side

僕は今未来でTPの人と話し合いをしていた。とはいってもそんな犯罪した人を問い詰める話し合いをしてるわけではない

「・・・ふむ、なるほど。これで彼等の犯罪を立証できる材料が揃ったよ。すまなかったね」

「いえいえ、でも本当に逮捕しなくて良いのですか?」

「連行したとはいっても君も被害者だからな。しかし、操られたとはいえ女性を拉致した罪や友達を傷つけた罪はさすがに問題あるな」「ですよね」

まあ、そこは僕自身がわかっていたことだし、覚悟も決めていた

「しかし、君たちのこれまでの地球を救ってくれた事を思うと逮捕まではないかないよ。被害者というのも考慮してな」

「いえ、それは・・・」

「だが、それでは君が納得しないとと思ってな。我々から一つだけ頼みたいことがあるので受けるか受けないかは君が決めてほしい」

TPのトップが真剣な顔になったので僕も姿勢をただしてどんなことを言われても・・・

「・・・それはな・・・一日だけあることをたのみたい!!」

「あることですか・・・?」

「うむ、頼む!君しかいないんだ・・・!!」

僕はその時のトップの顔は別の意味で忘れないだろう。あまりにも悲哀漂いながら頼み込んできたのだから・・・

あれ?なんか嫌な予感が・・・まさかと思うけどなんか嫌な予感がするのが止まらない!!

・・・ん?今誰かに呼ばれた気がしたのだけどなんだろう?!

噂

美子 side

吉井くん達にのび太くんと別れたことを話して数日たった。けつきり昨日戻ってきたと思っただけどまだのび太くんは帰ってきてない。あんまり無茶してないかな・・・

「美子、この問題どうなの？」

「ここ？あー、ここはね、こうして、こうといったら行けるじゃないかな？」

私はEクラスの代表で親友の中林宏美と勉強していた。そういえば、何気に宏美を見たの久しぶりな気がするわ

「いや、何をいつてるの!？」

「宏美？」

「あ、嫌なんでもないわ。それよりも、」

「そういえば、美子」

「うん？」

「あの噂は本当？」

噂??なんの噂だろう?と思いつながらち珈琲を飲もうとすると、爆発的なことをいつてきた

「美子とのび太君が別れたと言う噂よ」

「ー?!?!」

宏美のことばに私は思わずむせてしまい、呼吸がしにくかった

「な、なんでそんな噂が!？」

「なんでって・・・ほら、ここ最近Fクラスなのび太君が学校来てないでしょ？」

「え、そうなの？」

「そうなのって・・・連絡とってないの？」

あ、そうだった。のび太君と別れた話はまだしていなかったわね

「宏美、少しだけ真面目な話があるの」

「？」

「実はー」

未来のこととか大きい出来事は伏せて私はのび太君と別れたことと今のび太君は家の事情で忙しく連絡取れないといことをはなした

「別れた!!!」

「つちよ!! 声でかいよ」

「声でかくもなるわよ!! なんで別れたの!? あんなに仲良かったのに!」

「それは・・・」

「まさかのび太くんが不倫でもしていた!」

そんなわけはないと言おうと思つたら、宏美の目が燃えていた。私
がものすごく引いていると宏美は私のてを握り

「美子!!」

「は、はい!」

「何があつても私は味方だからね!!! いいね!」

「は、はい・・・」

私は宏美の気迫に負けて思わず変な声でたのはここだけの話・・・
何か嫌な予感がするのだけど気のせいよね?

のび太 side

僕は未来でのTPの頼みが終わり現代に帰り・・・今何してるかと
言おうと・・・

「ううん・・・あー・・・は、腹が・・・」

現在寝込んでます。疲労感があつたのかもしれないけど寝込むの
は予想外だ。そんな僕の様子にドラえもんがあきれていた

「全く・・・22世紀から帰ってきたと思つたら、まさかの体調不良に頭
痛もしてるって・・・一体何があつたの?」

「死してなお世代が変わつても時代を越えても脅威だよ・・・」

「本当に一体何があつたの!」

ドラえもんがタオルを絞りながら叫んでいたけど、僕は定まらない
思考にぼーとしながら呟いた

「実はー」

僕はドラえもんの説明するとドラえもんは真つ青になり震えてい

た。それもそうだろう・・・何せこれの原因は・・・

「のび太君・・・よく生きて帰ってきたね。まさかこんなことになるのはね」

「うん、本当だよ。まさか・・・」

「ジャイアンの子孫と姫路さんの子孫と雄二の奥さんの子孫の手料理で味わい死にかけるなんてね」

そういうと共にお互いため息をついていた。そもそも、TPの人が頼んだ理由としては耐性があると考えて依頼したみたい。さらに言えば、指摘して料理を改善してほしいと頼まれてやったが・・・

「信じられる？未来ってわからないことがあるのよね？」

「本当だよー。でものび太くんひとつ間違えてるよ」

「なにが？」

「正確には、今いった面子の子孫がその子だからね？家庭図を辿ったらそれぞれの子孫同士が結婚していき、やがてそのすべての子孫の集合体になった子が・・・うん」

ドラえもんは喋りながらも何か察して溜め息をついていた。でも、そのため息は呆れたため息ではなく何かを悟ったため息だった

「こればかりは明久達に教えられないよ。なにせ、姫路のあの手料理とジャイアンの手料理と霧島さんの手料理と玲さんの手料理を混ぜ合わせた料理を出されたのだよ？しかも・・・」

「瑞希ちゃんは見た目がいい料理にジャイアンはどちらでもない恐怖の料理を混ぜ合わせて・・・翔子ちゃんと玲さんの料理はさらに未知の味わいになるって聞いたことがあるよ」

「それを一気に食らったお陰で向こうで入院して回復したかと思えば、こっちに戻った瞬間に激痛走る」

「そりあ、寝込むよね・・・。よく生きて帰ってこれたね」

「じゃあ今日も休みをいれる連絡をしたの？」

「うん。本音を言えばすぐに学校行って勉強したいけど・・・」

「あの怠け者ののび太君の口から勉強したいけどというなんて聞くと思わなかったよ・・・」

「失礼だね!？」

本当に失礼だよ!!昔から僕は勉強しようと思えば出来・・・るはずだよね?なんか自信なくなつた・・・

「でも僕も君の口から聞いて驚いたよ」

「そう?」

「うん、まさか君が・君達がそのような選択をとるなんて言うこと事態が予想してなかったよ」

「この選択に後悔はしてないよ。それよりもドラえもん」

「うん?なんだい」

「・・・少しだけ真面目な話をしたいのだけどいいかな?」

僕はドラえもんと呼ぶドラえもんも真面目な顔でこちらに振り向いていた

「どうしたの?」

「ひとつ聞きたいけど・・・明久のことで」

「明久君の事?」

「うん・・・明久の未来はどうなるのかタイムテレビでみれない?」

「というと?」

「なんかわからないけど明久に女難ありそうな気がして・・・ね」

「まさかー流星にそれは・・・何でだろう?ないと言い切れない」

ドラえもんが否定しようとしていたが、なんとも言えずに難しい顔をしていた。いやはや、何にしても明久は・・・

「この文月学園生活の間にもはやく出来たらいいのに・・・そして、彼の生活を直してくれる人がいたらいいな」

「それは本当に相手次第だよね・・・」

「今のところ明久に惚れてる人は・・・2人は確定だね」

「で、別の人ではジャイアンは真理亜さんと婚約関係だけど・・・三女の冬花ちゃんとはどうなったのだから?」

「スネ夫は次女の氷華里緒菜ちゃんと婚約関係だったよね。まあ、本人らはばれてないと思ってるけど・・・両思いなのは確かだよ」

「で、あと一番の問題は・・・雄二だよ」

そう、僕のFクラスの代表でもある雄二の名前を出したのに訳がある。それは・・・

「霧島さんとの進展だよ。雄二自身は否定しているけど、霧島さんは雄二のことを好きだよ」と

「でも、あの過激なお仕置きはどうかと思うよ……」

「ドラえもんのお秘密道具でなんとかできない？」

「流石にそんな都合いい道具はねー……うーん」

すると、ドアの方からノックする音が聞こえた

「のびちゃん、少しいい？」

「どうしたの、ママ？」

ものすごくいい笑顔でママが部屋に入ってきたのだ。そしてドラえもんと僕は急に寒気が来た

「なんか嫌な予感が……」

「ドラちゃんもおりなさい」

「あ、は、はい！」

「さて、体調はどうかしら？」

「う、うん！大分よくなってるよ」

「そう……なら今からの遠慮なく言えるわけね」

「え？」

ママは一枚の紙を見せてきた。その紙を見た瞬間僕らは真っ青になった

「のび太……説明しなさい？なんで……」

「ああ……」

「なんで高校生になって0点をとっているのかしら……ねえええ？」

「いや、あのその……」

「それと、ドラちゃん」

「あ、はい!!!」

「貴方が帰ってきたのはわたしもパパも嬉しいわ。例え未来から来てもあなたは私たちの家族だからね」

「っママ……でもね……え？」

「なんで……私が置いていたはずのどら焼きがなくなっているのかしらね？」

「し、し……しらないよ……」

「ドラちゃん、ほっぺについてるわよ」

「え!? とつたはずなのに……あ」

「……ふう……はあ……」

あ、この深い深呼吸は不味い!!

「二人とも今日のおやつは無し!!!」

「そ、そんなく……」

こうしてママはぼくらに怒って買い物へと出掛けた。僕らがママに怒られて落ち込んでると携帯がなった。一体なんだろうとおもい携帯を見ると……

吉井明久

宛先野比のび太

件名

と送られていた。あれ? なんか空白だなーとおもっていると

ギルティ

「え……?」

振り向くと……

明久がスローモーションのようにこちらに向かって襲いかかってきた

バカの襲来

僕はスローモーションのように明久がこちらに襲いかかってきた。あまりの突然で僕らは動けず固まっていたが・・・

「のび太ー!!がぼっ!!」

飛びかかろうとしていた明久だが、ドラえもんがパンチ銃を取り出して明久を殴った

「た、助かった・・・」

「っは!!あ、明久君大丈夫!!」

「な、なんとか・・・」

「いやごめんね。思わず、秘密道具をだしたよ」

明久はゆつくりと起き上がりながらその秘密道具の説明を聞いていた

「それは？」

「パンチ銃といってね、トリガーを引くと銃口からパンチグローブが飛び出し、相手を攻撃するんだ。昔これで体の大きなジャイアンさえも軽くぶつとばしたことがあるよ」

「ジャイアンをぶつとばした!!僕の体よく無事だったよね・・・」

無事だったよねというけど明久は日頃から死にかけているから耐性ついたのではないのかな?まあ、言葉気を付けたらもつといい方向に転がるのになー

「ところで何でいきなり襲ったのさ？」

「あ、そうだ!!のび太あああ!」

「な、なに!!」

「なんで三上さんと別れたのさ!!あんなに妬ましく甘くイチヤイチャな君達がわかれて驚いてるよ!」

あ、なるほどね。つまり明久達は僕らがはにかしらで別れた理由を知ったのだね?まあ、ばれても問題ないけど・・・

「その前に一つ聞きたい。今日は学校のはずだよな?」

「あ、それが・・・」

「うん?」

「休校になったのよ」

はい!?なんでまた休校に・・・?

「実はね・・・職員全員がダウンしたんだよ」

「・・・はい?」

話を聞くとこうだ。僕が休んでいた昨日の夜に先生達は近々ある体育祭の打ち合わせのために飲み会をしながら、会議していたそうだが・・・

「なぜか食当たりで全員ダウンしたんだよ」

「・・・え?それって」

「多分誰かの料理でとかではないよ・・・多分」

明久が目をそらしてる辺り確信は持てずなんとも言えないらしい。それにしても食当たりとは何て恐ろしいことに・・・

「で、たしかさつき君がいったのは・・・?」

「そう、なんでまた三上さんと別れたの?あれだけ仲良かったのに」

「僕個人が先に別れを切り出したの」

僕は明久の疑問をはつきりと答えるように別れを切り出したのは自分と言うと明久は混乱していた

「え!?ド、ドラえもんはどう思うの!」

「うーん・・・どら焼き美味しい(モグモグ)」

「つて、普通にどら焼きを食べてる!」

明久がドラえもん意見を求めるとドラえもんはどら焼きをたべていた。その行動に驚き突っ込みをいれていた

「まあまあ、のび太くん達が決めたことだから・・・」

「そんなのいつてる場合じゃないでしょ!」

「慌てない、慌てない。道は必ず繋がるからね」

「道?」

「まあ、気にすることはないよ。一応のび太君は・・・」

ドラえもんが僕の方に見てきた。この状態の説明をしようか?という意味で聞いてきたので僕はゆっくりと起き上がった

「実は――」

僕は僕で未来で起きた事を話すと明久はものすごくひきつった顔

をしていたが、それもそうだろうね

「それ本当？」

「うん、そしてそれが今の僕の現状だよ……」

「いやいや……よく生きて帰ってこれたね。提案した人たちはどうなったの？」

「半日だけダウンしたんだよ」

「なるほど……察したよ。つまり、今のび太とその人たちは実質仕事が出来ない状態って訳か」

明久が納得したようにうなずいていた。ちなみに僕はまだいろいろな意味で耐性あったからこれですんでる。いろいろな意味で……ね

「……美子さん……はどうだった？」

「あ、うん。大丈夫だよ」

「そっか……。明久たちもごめんね？操られていたとはいえ、君の大切な人達を浚って」

「あ、その事なんだけど気にしてないらしい。あとは、のび太……早くなおしてね？」

僕は浚ったことを謝ると明久が気にしてないといい、体を早く治してほしいと言われた。うん、やっぱりこういうときの明久のお人よりは凄いや……

「ありがとう。明日には復帰できると思うけど、とりあえず……」
「うん？」

「イヤ、なんでもないよ！ただ今回からしつかり勉強しないと、君のお姉さんが……」

「姉さんが？姉さんがなに!?怖いんだけど!？」

「しつかり勉強しないと君の家に住み込む可能性が高いよ」
「急いで帰ります！」

明久は急いで家へと走って帰った。本当に明久は時々こちらでは思い付かないことをするのだからとんでもないよ……

あ、ダメだ、また腹がいたくなってきた……!

とりあえずは明日からまた頑張るとするか……

久々の学校と御法度おこす

あの冒険の出来事と三上さんと僕が別れてから数日たった。僕は久しぶりの文月学園の制服を来て朝御飯を食べるために降りていた
「おはようー……ってあれ？ パパは今日は出勤遅いんだ」

「おはよう……って本当だ」

「ああ。最近是在宅とか色々仕事改革が進んでいるからな」

「のびちゃん、ドラちゃんご飯がさめるから食べなさい」

「はーい！」

朝御飯はトマトに野菜ジュース、そして目玉焼きと食パンとお味噌汁だ。お弁当は既に作ってくれていて机の上に置いてくれていた

「そういえば、のび太」

「モグモグ……ん、何？」

「のび太の学校はもうすぐ体育祭なんだろう？ なにか出るのか？」

「うーん、分からないや。できれば長距離は嫌かなー」

「のび太君は昔から体力だけはないからね。みんなは忘れがちだけどのび太君は元々は怠け者だからね」

「怠け者だからねって、余計だよ!? 昔より今のほうが大分しつかりしてるよ?!」

「でも、のび太ったら、たまに昔の癖出るわよね？ この間なんてギリギリまで寝かけていたこともあったわね」

「そうだな。たまに、お弁当を忘れかけたりしてるもんな」

「パパやママまで言う!! もう、僕は大人だよ!! あ、でも大人って言いながらも高校生はまだまだ子供だよね」

僕は口調では怒りながらも冗談なのは分かっているし、何より昔みたいにこうした朝御飯迎えるなんて思えなかった

「ご馳走さまー」

「のび太、体調は大丈夫なの?」

「うん、大丈夫!」

「そう、気を付けていくのよ」

「はーいーいってきます」

僕とドラえもんはママの話を聞いて返事してから家を出た。僕が学校いくならまだしもドラえもんはなんで一緒に出たの？

「少しだけ用事でねー。のび太君とジャイアンと真理亜ちゃんは同じ学校だったよね？」

「うん」

「で、のび太君・・・」

「うん？」

「君はどんなに頑張っても悪人にもなりきれないよ。たとえば、君が責任とって彼女と別れても君は君だからね」

「ドラえもん？」

「じゃ、僕は久しぶりにミーちゃんに会いに行くねー」

ミーちゃんはドラえもんのガールフレンドだ・・・というか猫は長生きできるものなの？ドラえもんはタケコプターをさしてミーちゃんがいるところへととんだ

「さてつと・・・急ごうー」

僕は時間が余裕でもドラえもんと別れてから恒例のランニングだ。まあ、これをするのは体力と足の筋肉をつけるためだ。そう思ってる
と文月学園につき、教室へと入った

「おはようございまーす」

「お、のび太じゃないか？もう大丈夫なのか？」

「まあね。雄二が一番乗り？」

「いや、あそこをみてみる」

「・・・」

「(ピクピク)」

明久とムツツリーニが死にかけていた。いやそもそも何があったの？

「例の取引だ」

「ああ、例のね」

「そ、ムツツリーニが血まみれになってる時点で察したよ。ってか、あの二人が朝早いことに驚いたよ」

「あー、あいつらが早く来たのは日直だというのもあるだろうな。そ

してそのついでに例の取引をした結果あれだ」

しかしいったい何を取引したのだろうか？そう思いながら明久たちの方へとゆつくりとよると・・・

「?!」

そこにあつたのは・・・美子さんの着替えてるときの写真だった。僕は気絶してる二人にゆつくりと耳元ささやいた

「起きろ。さもないと・・・学園長の写真を君たちの枕元におくよ？」

「いやだあああ?!?!」つて、あれ？」

明久たちは僕の言葉に慌てて、起き上がり周りを見ていた。そして、周りを見ている間に僕はあるものを取り出していた

「(カチャカチャって音がするけどなんの音だろう) oh, my god・・・」

「・・・wearregotohell?」

明久はゆつくりと僕がいる方向にみると、明久は徐々に真っ青になっていった。そして、ムツツリー二もなんの音か明久がなんで固まっているのか分からずに後ろを見ると真っ青になり英語で呟いていた・・・

「・・・さらばだ」

「あ、ずるい！ムツツリー二！」

なんで僕が銃を構えてるのか分かったのか二人は全速力で走っていた。どうやら、僕が銃をもった理由がわかったみたいだね

「何をしたのか自覚したみたいだけど・・・逃がすかああああ!!!」

「嫌あああああ!!!」

明久達が急いで窓から飛び降りようとするが僕は先に銃を発砲していた。しかし、彼らはそれよりも先に窓から飛び降りていた「つて窓から降りるのは危ないじゃない!」

僕は慌てて窓を見ると、明久達は無事に着地して逃走していた。相変わらずすごい身体能力だなくと思いつつも時間も見てみるとまだ余裕だな

「あいつら無駄に身体能力発揮するよな」

「雄二も人の事言えた義理ではないよ・・・ん？ムツツリー二がなにか

おとし・・・た・・・」

「どうした・・・おわ!?!」

「ふ、フフフフフフそうかそうか!!これまでも売ってるのは流石に問い詰めないとなあああ・・・あは・・・アハハハ!!!」

「の、のび太が壊れた・・・?」

雄二が怯えてるけど関係ない。僕はムツツリーニが落とした写真を見て必ず仕留めようとした

その写真は・・・

僕が夏の時に女装した写真だ!

僕は急いでFクラスから出ていき、ムツツリーニに問い詰めようと思った!そうと決まれば、追撃だ!

そういえば、そろそろ体育祭の前に召喚戦争できそうな気がするけどどこが仕掛けてくるのだろうか?もしくは僕らが仕掛けるのか?

??? side

あのバカどもは久々に騒がしてるみたいだねえ。どうせならそろそろ実験に付き合ってもらうのが吉ってもんよ

「しかし、これを実施するには一回だけ試さないといけないから・・・バカに頼もうかねえ」

それとも、誰かに頼もうか悩みどころだけどその前に・・・

「この未来の人間に盗まれたデータを二度と奪われないように嚴重にしないとイケないから確りしないとねえ」

流石に二度も奪われては恥だし、研究者として考えないとイケないことともうひとつは例の推薦の件も話し合わないとね

のび太の肅清タイム

僕は現在教室を出てムツツリーニと明久を追いかけていた。もちろん隠してるあれを問い詰めるためにね

「さてさて、どこにいるのやら・・・。案外身近に隠れていた可能性もあるから一撃で沈め・・・止めないとね！」

僕がどうやって明久たちを止めるか考えていると、後ろからなにか足音が聞こえたので僕は警戒しながら後ろに振り向くとそこにいたのは・・・

「なんだい、朝から元気そうだね」

「が、学園長!?おはようございます！」

僕は慌てて銃を隠すと学園長は気にすることなく、返事返してくれました

「ああ、おはよう。あんたにしては珍しく朝から騒いでるねえ」

「あ、失礼しました!所で学園長はなにを?」

「なーに、お前さんに話があるのさ。また西村先生経由で言うけど、放課後に学園長室きな」

「学園長室にですか?」

なんか僕はつい最近もお世話になつていたような気がしてあまり嫌な予感しかないよ。へたしたら、今度こそ退学とか?そんなの心当たりは・・・あつた。ひとつだけあつた!

「安心しな。退学とか謹慎の話ではないさ」

「よ、よかった・・・わかりました。放課後にお伺いさせていただきます!」

「それと・・・」

「はい?」

「頼むから吉井明久の学力をあげてくれないかねえ。色々な意味で頭がいたい」

「学園長：残念ながら明久は明久です。中々学力が上がることはないかと・・・けれど、努力したらきつとあいつはすごいですよ」

「はあ、小学生の時の0点記録更新していたあんたが言うと少しだけ

説得力あるねえ」

「つちよつと待つて!?なんでひとの黒歴史を知ってるのですか!?そう問いかけようとすると学園長は既に先の方へと歩いていった」

「は!?明久達を探さない」と」

「僕は急いで明久達がいそうなところを探したら、聞き覚えのある声が聞こえた。僕は聞き覚えのある声へ覗くと・・・」

「ん?」

「しよ、翔子!許してくれ!!」

「・・・だめ、浮気は許さない」

「まてまてまて!?その手元にあるのはなんだ!?」

「・・・軽く飛んでもらうだけ」

「意識をだろ!?それをいうなら、お前の手元を持っているのはスタンナーあばばば!!」

雄二がなにか隠してるのを霧島さんにばれてお仕置きされていたが、僕はなにも見なかった。見ててもなんでお仕置きされてるのか知らないから助けることできないから、ごめんね

僕は明久達がいそうな所はもしかしたら、あそこにいるのではないかと上へ上がると・・・案の定そこに隠れていた

「(ばれないように撃とう)」

ゆつくりとしゃがみながら息を殺して構えていた。あんのバカどもが何をしてるのか確認したいが・・・今は落ち着こう

「で、ムツツリーニ。例の物は?」

「・・・ここにある」

「!!そ、それは・・・す、すばらしいよムツツリーニ!!」

「(いったい何を見たのだろう?)」

「・・・自慢の作品だ」

「素晴らしい!!これはすごいよー!」

あの二人がここまで嬉々としてよろこびあっているのはいったいなんなのだろう?

「(何だ!?いったい何を取引してる!?)」

「そう・・・この姫路さんの照れる顔が美しい!」

「(姫路の写真? ってかいつとったのさ!?)」

「・・・因みにのび太の女装の写真を明日売る予定だが見るか?」

あ、これは見られたらおしまいだと思ひ僕はムツツリーニ向かって正確に頭を撃ち抜いた

「ぐぼ!?!」

「ムツツリーニ!? 撃ち抜かれた弾・・・この正確な射撃は!?!」

「やあ、明久」

「ひいい!?!」

明久は驚きながらこちらを見ると真つ青になっていた。どうやら、全部聞かれたと悟ったみたいだね

「く!!!」

「!?!」

明久は僕の方に向かって全力で走ってきた。まさか撃たれるの分かってこちらに来てるのか?

「とおおお!」

「僕の頭超しに飛んだ!?!」

「つと着地! そして、にげる!」

「あ、まて!!!」

くそ、まさか僕の頭を飛び越えて逃げるとは!! こういうときの身体能力はすごいよ!!

「あ、まてよ・・・」

もしも、明久が美子さんに女装の写真とか見せてしまったら・・・

社会的抹殺まったなしだ!!

それはふせがないとおお!!

ラツキー？

明久 side

僕は今、死の恐怖を味わいながら脱走してる。脱走してるというよりは正確には殺されそうになつて逃げてるのが正しい。え？誰に命狙われてるのか？それはね・・・

「うわ!？」

僕の頭になにかが外れていたが、そんなの気にしていけないと思ひ急いで逃げていた。

「ツチ、外した!!！」

「今舌打ちしたよね!?君は心優しき常識の人間だったよね?!この作品で常識のある人間だったはずだよね!？」

「そんなのは捨てた!!今僕はお前を何がなんでも討つて、終わらせる!」

「討つてどういうこと!？」

「例えこの野比のび太は・・・命に代えてでも・・・止める!」

「何!?その悲壮な決意恐ろしいのだけど!?!うわ、またかすつた!!」

暗殺者・・・いや、のび太が何度も何度も僕を狙っていた。本当に正確に頭を狙いすぎてるからいつか撃ち抜かれそうだよ!

「ええい!おとなしくうたれてくれ!」

「嫌だよ!!そもそもなんでそれをうつつのさ!？」

「君も持っているだろ!?!あれを!」

「あれってなにさ!?!もしかつてのび太の女装の!」

「いわせるかああ!!」

「うわっ!!」

「く!（残り1発で仕留めない!）」

のび太が銃を確認してることからそんなにはず!しかし、のび太があそこまで必死に攻撃するなんて恐ろしいよ!

「何とかやり過ぎさないと!!ん?」

僕は少し先に歩いている人を見つけて僕はのび太を止める方法が思い浮かんだ。その目の前には雑巾!

「よし、のび太!!」

「ん?」

「三上さんの写真とか欲しくない?!」
「・・・」

よし、のび太が足止めたところをみる限り別れていてもやはり三上さんのことが大好きなんだと再確認できた!これで交渉して落ち着かそう!

「今僕の攻撃とかやめたなら・・・三上美子版のをあげー」

僕がなにか言おうとすると、のび太は銃を一発足元に打ってきた。
あ、あぶなかつたああ!!

「動くな。もし動いたら・・・わかってるね?」

「は、はい!」

「よし、まずはその隠してる女装の写真をもやせ」

「いや、それは・・・」

「いいことを教えよう。ムツツリーニが先ほどメールでその隠してる女装の写真を焼いていいと言うことで許すと決めた」

ムツツリーニ!!友を裏切るなんて君は悪魔か!!

「因みにその女装の写真がなにかも知ってるから出さないと余計に寿命縮めるよ!」

「く・・・ここに置くから攻撃しないでよ!」

「よし・・・」

のび太は銃を構えながらゆっくりと歩いていった。よくよく考えたらこれはまるでテロと警察のやり取りみたいだな感じだよね?!

「(タイミングを見極めて・・・)うわっ!」

「あんまり、妙な真似をしないでね!?君を射ちたくないから!」

「いや、めちやくちや僕をうってきたよね?!ものすごくいい笑顔でさ!?!」

「あまりとやかく言おうと次あたまたまうつよ?」

「す、すいませんでしたああ!!」

今ののび太は本当に怖いよ!鉄人よりも怖い!!目が据わってるし、下手したら今ならのび太一人でも世界の時間を止めれそうな気がす

るし、世界中の人を倒せそう!!

「だけどこのまま黙ってやられるわけにはいかないの……さらば!!」
「逃がさない!! (ズルツ!) ……え?!」

僕はのび太に背を向けて走った。のび太は突然の僕の逃走に驚お
いかけようとしたがそれは計算どおりだ!

「な、な、何でこんなところに雑巾がああ!?!」

「しらーない♪」

のび太は濡れている雑巾に思いきり足をのせてしまい前屈みになつた。よし!これでのび太は倒れる!!とおもつてると、別の曲がり角から誰かが歩いてる声聞こえた

「うわわわ!!」

「あ、でも曲がり角にひとがきてるけど、これ鉄人に当たったら面白い!」

「わー!!」

「え?!」

のび太の叫び声とその曲がり角から出てきた人がぶつかった。ただ、僕はそのぶつかった人を見て驚いた

「あ!」

「いたたたた……(ムニユ?)」

「……………/ / / / /」

「よ、美子さん?!まさか……僕が今さわってるのは……/ / / / /」
のび太の下に倒れてるのは三上美子さんだったが、その倒れ方が不味かった。なぜなら……

「の、のび太君のエッチー!!!」

「ぐぼおお!!」

「うわ、あれはいたい……あ、恥ずかしがりながら三上さん走り去つた……」

三上さんはのび太に胸さわられて冷静じゃなかったのか足でのび太の股間を思いきり蹴っていた。のび太が崩れ落ちたのを気づいてなかったのか、顔真っ赤にして全力で走り去っていた

「おーい……のび太生きてる?」

「何でこうなるのく……がふっ」

「なんかごめんね……」

のび太はぎめぎめと泣いていたが、僕としてはなんとも言えず申し訳なかった。しかも、のび太と三上さんを仲直りさせると言うか再び結ばれるまではまだまだ遠いな……。はあなんか……。ごめんよ

二次被害

のび太が三上さんの強烈な強烈な蹴りを喰らい、暫くは動ける状態ではなかったので僕とムツツリー二とで教室につれていった。戻ったときに美波たちが驚いていたけど事情を話すとなんとも言えない顔になっていた

「のび太、大丈夫か？」

「野比、こればかりは同情する」

「・・・苦痛の極み」

「そこは鍛えても無理だからな」

「誰もが苦痛な経験をするやつだな」

その股間に強烈な蹴りを食らったことでダウンしてるときいた事で流石にFFF団も怒るところが悲しそうに肩を叩きながら慰めていた。おまけに、ジャイアンも雄二ですら震えていたみたい

「つてか、アキ・・・聞きたいのだけどさ」

「うん？」

「まさかと思うけど・・・アキ、アンタ何かした？理由はわからないけど西村先生がなんか凄く怒っていたわよ」

「あつそうなんだね・・・え？」

僕は美波から聞いたその言葉に嫌な予感がしていた。なぜこの流いで鉄人の話が出てきたのかわからないが僕はなにか忘れてると思つて考えていた

「まさか・・・）それいつみたの？」

「さつきでしたよね？」

「ええ、なんか頭にたんごぶできていたからなんかアキがついに西村先生に何かしたのでは？つてみんないつてたわ」

「あははは・・・(やつぱりいいいい!!)」

嫌な予感的中だ！恐らく、鉄人が怒ってるのは濡れた雑巾で廊下に置いていたことだ！鉄人が濡れてる雑巾あるの気づかず歩いていて転んだ！そして、頭にたんごぶできたにちがいない！

「明久君どうしたのですか？凄く顔色悪いですよ？」

「そうですね、吉井さん保健室いきますか？」

「だ、だ、大丈夫だよ!!」

「言葉に動揺さがみられるぞー。ってか、真理亜さん、明久の場合は今保健室いくよりも避難することをすすめたほうがいいぞ」

「へ、ジャイアン?それはどういう・・・!!?」

僕はジャイアンの言葉に疑問を思っていると、後ろからとんでもない怒りのオーラが感じた

「ひいいー?!(こ、この本能的に危険な感じは!!)」

「よーよーしーしーいーいー・・・!!」

「て、鉄人・・・ど、どうしました?」

鉄人が見たことないくらい恐ろしい微笑みであったが、それは僕にはわかる。これは・・・

「いやー、西村先生。そのお怪我はどうされたのですか?」

「ん、ああ、これはな・・・いやー、何処かの生徒が喧嘩売ってきてな・・・罍を仕掛けられたのだ」

「そうなんですかー。でもなんでぼくにそれを話すのでしょうか?」

「なに、あんなことをしそうなのはお前くらいかと思ってな」

「(指ポキポキならしてる!!まずい、まずい!)いやいや、西村先生僕がやったという証拠がないじゃないですか。それに、雑巾とかでころんだって言ってもぼくがやったわけではないですよ」

「ほう・・・それはいいこと聞いたな」

すると、鉄人は僕の首根っこをつかみ引きずるように教室の外へと歩いていていった

「あれー?なんか、可笑しいぞ?」

「何がだ?」

「先生、何で僕を引きずるのでしょうか?」

「貴様には問わないといけないこと増えたからな」

「何をですか。冤罪ですよ」

「貴様がさつき言ってくれたのではないか。『雑巾とかで転んだってぼくがやったという言う証拠がないじゃないですか』と」

・・・あ、これはまさか・・・

「お前達、一時間は自主だ。サボったら俺の個人授業受けてもらうぞ。さあ、お前は俺と楽しい楽しい時間を過ごすぞ。吉井!!」

「あ、つちよーいやあああああ!!!」

僕の叫びは学校中に響いたみたいですが、それは察してほしい。なおのび太は僕が戻ったときに勉強していたが、足元は震えていたのはなぜだろう？

布告

明久の先生からお仕置きされるのが終わったあとの休み時間に僕らはいつものメンバーで集まっていた

「あー、しかし召喚戦争してから大分時間たった気がするよなー」

「まあね。明久は見事にボロボロなのは触れないでおくけど・・・」

「今度こそ・・・翔子に戦いかって俺が上だと証明して見せる！」

「たぶんそれ負けるフラグだぞ」

「フラグ・・・ですか？」

ジャイアンの言葉に真理亜さんは疑問に思っていたがそれはあまり気にしなくていいやつだよ

「突然僕らのクラスに戦争を吹っ掛けられることなんてなんのメリットもないよね」

「正確には召喚獣戦争だな。この間の小テストとかで各々が点数アツプしてると思いたいけどな、明久」

「・・・ウンソウダネ」

「こいついま目を思いきりそらしたぞ・・・」

「そもそも、雄二」

「あん？」

「一応このクラスの主力はどういう風に考えてるの？」

僕は一応戦争吹っ掛けてもさかれてもある程度点数はあげたけどね。ただあのせんそうからどれくらいたったのだろうか？

「そうだな。まずはクラスの代表は俺と言うことは変わらない。で、主力の一番のメインは姫路だ」

「わ、私ですか？野比君ではないのですか？」

「確かにのび太は化学だけはすごい高いが・・・他の科目は姫路みたいに高いわけではない」

「言われてみればそうね。ウチは数学だけ武器だしね」

「ワシは国語とかじやの」

「・・・保健体育は俺の武器だ」

「二」安心しろ。ムツツリーニしかあれはとれない「二」

「毛解せない・・・！」

僕たちの言葉にムツツリーニは少し落ち込んでいたが、そこは気にしない方向でね！」

「剛田は・・・総合科目で特殊能力があるのだった？」

「正確には俺が一科目高いのは数学だけだな。ほら、うちの家は八百屋さんだったから自然に」

「あれ？総合科目で特殊能力発揮してなかった!？」

（※過去の悪夢とデビューでジャイアンは初めて召喚戦争参加しました）

「ふ、もうあのときみたいなのは無理だ。なぜなら、この学校に転入してからな・・・遊びすぎた!」

「威張ることですか!？」

真理亜さんがジャイアンの頭を思いきりげんこつしていてジャイアンは痛み苦しんでいた・・・お疲れ様、ジャイアン

「真理亜さんはそういうえば何が得意なんだ？」

「私ですか？私はそこまで勉強がすごいわけではないので」

「え？そうなの？」

「はい。それに、私はまだまだ未熟者です」

「明久騙されるな。真理亜さんは霧島さんと同じレベルのー!？」

「武君、久々に私と組手しますか？100本コースで」

「え、遠慮します・・・」

ジャイアンがなにか言おうとすると真理亜さんはものすごく笑顔でジャイアンを嗜めていた。真理亜さんがなんであんなに怒ってるのかはわからないが、そこは触れないでおこう

「で、過去に戦ったことあるのはE組とC組以外はしたことあるな」

「A組のは正確には一騎討ちだったけど雄二がきちんと日本史勉強してなかったから負けたのにね」

「ぐっ、い、言ってくれるじゃねえか・・・!？」

「まあ、今すぐに戦争しかけられるわけじゃないしな」

雄二がそれをいった瞬間ー

「残念ながらそれは落とし穴にいく道だ」

「「え？」」

僕らは声した方向に振り向くとそこにいるのは……

「いつかの変態発言したしばらく登場なしのEクラスの山田哲夫君
じゃないか！」

「それをいうなあああ!!」

「で、なんのようだ？変態・やまだ！」

「それでは変態山田になる!!俺は変態ではない!ってそんなことはい
まおいといて!!我がE組はFクラスに宣戦布告をする!!!!」

「「……ええええええ?!」」

僕たちはまさかの宣戦布告をされたことに驚きの声をあげていた
いつたいなぜ、突然に!?!

宣戦布告後……

僕らは緊急会議を開き、Fクラスみんなも聞く体制へと変わった。教壇の前では雄二が黒板で二学期召喚獣戦争開幕！とかいていた

「さて……まさかのE組から宣戦布告を食らったわけだが、召喚獣戦争のルールをおさらいするぞ！まずはのび太が説明してくれて」

「召喚獣戦争というよりも、別の言い方はこの学校特有の召喚獣を用いた『試召戦争』と言われてる。クラス間の勝負に下のクラスが勝つたら上のクラスと教室をトレードできる」

「分かりやすく砕いての説明ご苦労。早い話、クラスの代表がやられたらお仕舞いだ！Aクラス戦はクラスの代表として五人選んでだが今回は難しい！そこで、各自今持っている点数を書いてほしい！」

他のメンバーはそれぞれ今いくらあるかわからないという子が多かったので明久が手を上げていた

「今の自分の持ち点がわからないものの為に鉄人がFクラスの点数データをもらったよ！」

「ナイス。それと、改めてもうひとつ見直した。今度は……氷華真理亜がこのシステムの科目とどのくらいがすごいのか説明してくれ」

「はい。試験召喚システムに対応した学力試験は通常のテストと異なる点数上限が存在せず、時間内であれば無制限に問題を解くことができる。基本的には「1科目につき400点以上」が成績優秀者の目安となります」

「ふむ。じゃあ、科目はどんなのがあるかわかるか？」

「はい。教科は現代国語、古典、数学、物理、化学、生物、地学、地理、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育の13教科です」

真理亜さんの説明の通りに雄二がいまある科目を黒板に書き込んでいた。そして、書き終えた雄二が腕輪の話をした

「さて、次に腕輪を話すぞ？テストの点が単科目400点以上の生徒の召喚獣には「腕輪」が与えられ、点数を消費する代わりに腕輪に対応した特殊能力が使用可能になる」

「ふむふむ」

「現在このFクラスで使えるのは姫路、剛田、のび太、ムッツリーニの4人だが、氷華はどうなんだ？」

「あるにはあります。ですが、使ったことありませんね」

「ふむ、そこはおいおいと考えるか。ムッツリーニ、盗聴の気配は？」

「問題ない。仕掛けられていない」

「よし」

念のために盗聴の心配はしておかないと他のクラスにいま布告を仕掛けられたらきついからね

「だが、坂本。もしも俺たちが負けたら目標のAクラスに宣戦布告できなくなるのでは？」

「そこは簡単な話だ。なにも考えるな、今は勝つことだけを考えろ」

須川くんの質問に雄二はいまは目の前の敵だけを考えろと話していた

「まずは……ここまで説明したからそれぞれの点数を書いてくれ」

雄二はみんなに紙を配り、それぞれの点数を書いていた。僕の得意な化学は400点は越えていたが、僕は一緒に勉強していた恐らく美子さんはかなり点数上がっていると思う

「よし、この後にまた作戦をいうから各自今は休憩はいれ！」

「「おう！」」

雄二の言葉にクラス一同は大きい声で返事していた。なぜ今回Eクラスにからの宣戦布告仕掛けられたのかわからないが、負けてられない！

美子 side

私は現在Eクラスで対Fクラス撃破作戦会議をしていた。宏美からFクラスを宣戦布告するときには驚いたけど、とりあえずはやるからには勝つと腹をくくった

「いい？今回の相手はFクラスだけど、格下と思ってしまったら一学期にまけたDクラスBクラスみたいになるわよ」

「美子のいう通り、Fクラスは学力でこそは私たちよりは低いけど、事実Bクラスを破っている実績がある。そこで、今回は作戦をきちんと話し合いたいのだ」

私と宏美の言葉にEクラスも黙って聞いていた。相手はあのFクラスという認識は危険すぎる

「Fクラスで一番危険なのは姫路さんと野比のび太君よ。姫路さんは恐らく一学期よりもさらにすごい可能性があるからそこは一人で戦わないことね」

「姫路さんとのび太君は特殊能力はとんでもない破壊力があるからそこも警戒ね。それとそのつぎに剛田君ね」

「剛田って、途中から入ってきたやつだよな？」

「ええ。彼も特殊能力があるからね」

「Fクラスに三人も特殊能力が!?!」

私の言葉にクラスはざわめき、改めてFクラスの戦力での現状は恐ろしいものね

「まてまて、あいつもいただろ？」

「あいつ？」

「ムツツリーニ・・・いや、土屋だよ」

「!!!!」

そういえば、土屋君は保健体育がとて強かったのを思い出した。言われるまでは迂闊に忘れていたわ・・・

「はいはい！落ち着きましょう！いくら、特殊能力が多くても代表の首をとれば勝ちだからね！」

「そうね。それに、私達はただなにも考えなしで宣戦布告したわけではないのよ！いい？Fクラスを必ず倒すわよ！」

「!!!!」

宏美がどういう意図でこんなことを考えたのか知らないけどやるなら例えのび太君相手でも負けないから!!!

覚悟してね!!

Fクラスの作戦

僕はそれぞれ開始までの時間を見極めながら作戦をたてていた。今回の相手はEクラスだが、一学期は戦っていないし、球技大会のはまた別物だから本当の実力は未知数だ

「はつきりいって今回の戦いで仕掛けられるのは予想してなかったな」

雄二がしかめ面に今回の召喚戦争がまさかEクラスから仕掛けられるのは予想してなかったし、なにより……

「恐らく向こうはなにも考えなしに宣戦布告したわけではない。油断していたらこちらの足元が掬われるよ」

「それと、このクラスの戦力が足りなさすぎるぞ……。一学期や球技大会のに比べると下がりがすぎだな」

「それとは対照的に明久が世界史で200点とれてることに驚くよ」

「一応あいつなりに頑張ってるのは認めるがな」

「あれ？雄二は珍しく明久を誉めるね？」

「まあな。本人には言わないが、うちの戦力の一部はあのバカより大半が下だからな。今回のデータをみる限りはな」

雄二がため息ついて纏めていた点数を僕も見ても確かにため息をつきたくなる

「はああ……。確かにこれでは厳しいよね」

「だろ？英語は幸い、スネ夫や氷華が入ってくれたことでなんとか補えるがな」

一応わかりやすく説明すると、その任せれる科目のリーダーは古典は秀吉で数学は島田とジャイアン。保健体育はムツツリーニ。総合科目は姫路とで化学は僕、英語はスネ夫と真理亜さん。そこまでは良いけど……

「明久のは世界史以外は30点……」

「まあ、あいつのはそんなに気にしてないが回りのが勉強サボっていたのがわかるくらいきついな。全員20点代っていうのもまた……」

「とりあえずは思い付く限りの作戦で色々と考えて使える選択は使お

う。出し惜しみしてはきついし、今回の苦戦は免れないから」

僕らはできる限りこの休憩時間で話せることをたくさんした。開幕までの時間は足りないがなにもしないよりはましだ！

「今回、Eクラスとの距離はものすごく近いから短期決戦だね？」

「ああ。そこで隊長達も決めないといけないが、Eクラスは恐らくもつとも警戒しないとイケないのは三上だ」

「確かに美子さんなら僕らの戦い方を熟知してるはずだよ。ならそれを逆手にとる？」

「いや、あえてまつすぐいく。下手に逆手をとつてもやられる可能性がある。よし、作戦は決まった！」

雄二は作戦が決まったのか、教壇の方に向かい、呼び掛けた

「全員、作戦は決まったから注目！」

「「「」」」

「まずはいつも通りの前線組と交代組を分ける。前線組は一組四人とする。前線組のリーダーの名前いうから返事しろ。明久、姫路、剛田がリーダーだ。たのんだぞ」

「「おう！」」

「は、はい！」

「次にそれぞれのサブリーダーだが、剛田の組は氷華と骨川と姫路。明久は島田と秀吉とで好きなように動け」

「わかりました」

「オツケー！」

ま、確かに前線組はそのメンバーでいくのが良いだろうね。明久はとくに秀吉とやるのが一番良いかもしれない

「次にムツツリーニは前線出ないで情報を集めろ。場合によっては誰かと交代できるようにだ」

「・・・任された」

「で、のび太。今回は行けるのか？」

「問題ないよ」

恐らく雄二がこの質問したのは相手が美子さんと戦うことになっても行けるのか？という意味もかねて聞いているが、大丈夫

「やるからには戦わないとね」

「よし・・・全員これより14:00より開戦の合図が開かれる！Fクラスの野郎共!! Aクラスをもう少しまで追い詰めていたFクラスの意地をEクラスに見せやがれ!!」

「!!」「おおおお!!」「!!」

「全員出撃だ!!」

「!!」「おうー!!」「!!」

さあ、負けないよ！美子さん、Eクラス!!

おまけ

これは僕が知らないお昼御飯の時の話だ。姫路さんとジャイアンがなにやら話していた

「なあ、姫路」

「はい、なんででしょうか？」

「今度久々に二人で手を組んで料理しないか？」

「あ、それはいいですね！私最近試したい料理があるのでそれをいっしょにしませんか？」

「お？いいな！ならまた日程を組んで作らないとな」

「はい！皆さん喜べるように何か考えましょう！」

そんなやり取りをしているのは誰も知らなかったが、ジャイアンはそれともうひとつ企画してるのを僕らはまだその時気づかなかった・・・

「!!」「あれ・・・なんか寒気がする!!」

なぜか美子さん以外は全員寒気が感じたのはここだけのはなしだ・・・

Eクラス作戦会議

美子 side

私達Eクラスは少し離れてるFクラスよりクラスは綺麗なのは確か。それに、EクラスはFクラスより学力があるというよりも体育会系の集まりが多いのが特徴

「いいい？休み時間にもいったけど今回の敵はFクラスよ。要注意人物は頭入ったわね？」

教壇の前で宏美が腕を組ながらこれからの戦いを整理していた

「それと、今回は私達がFクラスに挑戦するのに訳があるわ」

「(え？私聞いてないのだけど) 訳？」

私はそういえば何故宏美が戦争をふっかけたのか理由がわからないわ。宏美はああみえて周りを見る力があるのになぜ？

「ええ、これは私怨とかではないわ。一人を除いてはね」
「？」

「一学期の当初ならFクラスは相手もしなかったし、勝てる相手だった。けれど、あのFクラスは結果どうあれ私たちをスルーしてひとつ上のクラスを撃破した。そして、Bクラスの嫌われものリーダーを撃破してAクラスまでおいつめた」

「……」

「ここまで話したらわかるでしょ？Fクラスは油断できない相手！私達がやるべきことはなにかわかってるわよね？相手の芽をたたくなら今と判断してやるのよ！」

「『おおお!!』」

宏美の言葉にクラスの皆も同調するように叫んでいた。そして、そのつぎに山田君が立ち上がり過去のデータを公表してきた

「山田、皆にFクラスの実績をみせてあげて」

「了解！まずはFクラスのこの学年でのこれまでの実績を見てほしい」

Fクラスの実績

A組戦0勝1敗

Bクラス戦1勝

Cクラス対戦歴なし?

Dクラス1勝(※停戦条約により引き分け?)

Eクラス対戦歴なし

「これを見てなにか気づかない?」

山田くんの問いかけに私はDクラスの事にききたいのか手をあげた

「山田君、このDクラスのはなぜ※があるの?」

「さすがクラスの副リーダー。文月学園のベストカップルの三上美子さん」

「そのあだ名はじめて聞いたのだけど!」

「いや、あなた達の仲は学園では有名なのよ?」

あう・・・のび太くんとこの間別れてるのにまさかそんな呼び方裏でされてるなんて・・・でも別れてるって今言いにくいわ・・・

「あうあう／＼／＼」

「美子ったら照れてるわね・・・つと、哲夫。続きを」

「そうそう、このときのFクラスはまずは野比のび太がダウンしていたことがひとつ。それともうひとつこれが起きたきっかけはDクラスから仕掛けたこと」

その言葉をききクラスは驚いていた。まさか自分達が仕掛けるまえにすでにDクラスがさきにやっていたとは

「仕掛ける提案したのは平賀君?」

「いや、これを提案したのはDクラスの清水さんだと」

「美春が?なんで美春がFクラスに仕掛けるように指示したの?」

「理由はよくわからないけど、女子情報ではFクラスの吉井明久が原因らしいわ」

あ・・・そういえば、思い出したわ。あのときはたしか吉井くんが美波にキスをして付き合ってるのでは!?!と噂になっていたけど・・・なるほどね、吉井君絡みなね(真実はなんとも言えないのがあったのよね)」

「他に質問は?」

「私からも質問があるわ」

「どうぞ、代表」

山田くんの呼び掛けに宏美もなにか疑問にあったのか手をあげていた

「まずはこの情報をどうやって集めたの？」

「各クラスのFクラスとぶつかった生徒からききました」

「そう。つぎに、Cクラスの戦いが起こらなかったのはなぜ？」

「Cクラス代表小山はBクラスと協定むすんでいてFクラスを倒す算段だったらしいが、なんでもAクラス木下優子に挑発されて戦争を仕掛けたいらしい」

「挑発？」

「はい、どんな挑発の内容はわかりませんが結果的にCクラス代表の小山は負けました」

まあ、元々小山さんは短絡的などころがあるからそこを恐らく坂本君辺りが狙ったのでしょね

「なるほどね。となると、Fクラスの代表はよほどキレるのでしょうか・・・Fクラスが他のクラスをつかって方が一仕掛けてきた場合は注意よ」

「「おう！」」

「山田君、他に情報は？」

宏美はこれまでの戦績からFクラスの戦いかたを警戒するように呼び掛けていた。そして、私は彼が持ちうる情報に他はないのか聞いてみた

「あります」

「あるの!？」

「わたし山田哲夫はあらゆるために成長しました！」

「いや、あなたどこからそのメガネ取り出したのよ?!」

私と宏美は山田くんの言葉に突っ込みをいれていた。おかしいわね、山田くんは元々こんなキャラじゃなかったのに何故？

「と、とにかく情報をお願い」

「了解。とりあえずこれを見てほしい」

Fクラス

要注意人物

姫路瑞希・野比のび太・剛田武・土屋康太・氷華真理亜・骨川スネ夫

予想外性の要注意人物

吉井明久

と紙に表示されていた

「姫路さんは言わずとも総合科目で特化している。それに骨川スネ夫と氷華真理亜さんも未知数の上、注意しなければならぬ」

「確かに。要注意人物の名前が上がってる人達は特殊能力を持っていて上にそれぞれの得意な科目がある」

「さらにいえば、予想外性のある予想注意人物はいわずとも何を仕掛けてくるかわからないから注意してほしい」

「そうなるかどうかという風に組み合わせていくかね。崩していくことも考えないとダメ」

「とりあえずはこれを叩き込んでおきましょう！そしてFクラスに教えてあげましょ」

「……」

「私達Eクラスは嘯ませ犬じゃないことを!!そしてFクラスより上だと言うことを!!」

「「「おおおお!!」」」

宏美の言葉にみんなは拳をあげて叫んでいた。そういえばうちのクラスは体育会系だからこういうノリは大好きだったわね

「美子、あなたからも激励を」

「わかったわ。……Fクラスが相手であれ、Aクラスが相手であれいまの私たちは関係ない！勝つために戦う！このEクラスは強い事を教えてあげましょ！」

「「「おうー」」」

「そして、私達がこの戦いを入れるのは敗北ではない！勝利を手に入れるのよ!!勝つのは私達Eクラスよ!!」

「「「おおおおおお!!」」」

さあ・・・私達の戦いは必ず勝たせてもらおうわよ！覚悟しなさい！！

Eクラス開幕！

チャイムがなる前に僕らはこれまで以上ない緊張感に包まれていた。いったい何に緊張しているかは言わなくてもわかっていると思うけど……

「全員戦闘態勢は十分か？」

雄二が重々しく口を開くと他のみんなも重々しく頷いていた。僕もジャイアンも真理亜さんも含めて皆緊張していた

「一学期の時にはまだ俺たちのデータがなかったからAクラスまでたどり着けたが……今回はそうはいかない」

「僕らのデータがばれてるということだよな？」

「ああ。だが幸い氷華のデータは未知数だし俺達はその救いだ。しかし、俺達がばれてるのに対するEクラスは未知数だからこそ厄介だ」

明久の言葉に雄二は苦々しく頷いてることから相当今回の戦いは気を締めないと僕らのクラスは敗北必至だ

「だが、なにも臆することはない。俺達はこれまでよりも困難なことが起ころうとも何があるうとも屈するな!!なぜか!それは俺たちFクラスはこれまで多くの困難もあった!しかしことごとくと覆してきた!」

「……」

「良いか!今からの戦いは俺ら弱小といわれていた底辺Fクラスが挑戦する側からされる側として出迎える!心せよ、勝つのはこのFクラスだということ!!」

「「「おおおおお!」」」

それと同時にチャイムがなり僕らは廊下を出てEクラスへと攻め始めた。僕は雄二と教室に残り紙を書いていた

「今回はジャイアン、姫路、島田、明久、真理亜さんらがどれだけEクラスを倒せるかだね」

「ああ、だが要注意なのはFクラスをここで漁夫の利を得ようと来るやからは必ずいる」

「Bクラス……だね？」

根本が率いるBクラスが恐らく仕掛けてくるだろう。なにせ、一学期の時に恨まれてる可能性はあるよねー

「ま、それも越して、既に手をうっているけどな」

「というど？」

「根本の誰得？女装写真をばらまく用意してるからな」

「鬼がいた!？」

「俺はまだ優しいし、それにそれを言うなら鬼は翔子だろ？あいつは本当に俺の意見を聞かずに無理矢理……やめよう、これ以上は言えば命が関わるし何もなかったことにしろ」

「う、うん……」

雄二それをいうとまた霧島さんになにか酷い目を合わされなにか心配だよ。だがそれを心配してももはや仕方がないような気がする。「まあ、というわけで、ムツツリーニはこれをばらまく用意をしとけ。主に例の裏で

な」

「……任せろ」

「それと、すぐにはばらまくなよ？ばれては元も子もないし、明久はつまらないミスしたら奴のある写真を売る」

「……例のやつで例のお買い得に」

「ああ、納得したよ。そして、明久が知れば間違いなくかわいそうだよ？主に誰が買ってるのかわかるとある意味……」

「一部を除けばな……ある意味あれを知ってしまえばさすがにかわいそうだな」

僕の言葉に雄二もなにか遠く見るような目で同情していた。僕も明久に好意を持っている人は知っているし、持っていてはいけない人も知ってるから流石に同情する

「ま、兎に角——坂本大変だ!……あ?」

「し、島田と秀吉がやられた!その精鋭部隊もやられた!」

「何だ?!」

島田と秀吉は密かな精鋭で送り込んでいたのに、いったいなぜやら

れた!?

明久side

僕は今現在目の前の立ちふさがる敵に冷や汗をかいて後ろには秀吉と美波がショックのあまり固まっついて鉄人につれていかれた

「まさか、教室にいたの思ったのに……!」

「ふふ、残念でした。美子がFクラスの代表なら教室にいたことを前提に攻めると話していたからそれを逆手にとらしてもらったわ」

「ぐっ……!?!Eクラス代表中林宏美が裏のルートで待ち構えていたなんて大胆不敵だ!」

「球技大会のかりを返させてもらうわよ……!よくも私をデッドボールしてくれたわね!」

まだ根に持っていたの!?!あれだけ、謝っていたのになんでおこるのさ!?!

「謝っていない!あんたは謝っていない!そもそも、謝ったのは野比君くらいよ!」

「あれ、そうだった?」

「……まあいいわ。奇襲も成功したし、後ろの部隊が相手してくれるから私はここで引くわ」

中林さんは後ろに下がり入れ替わるようにEクラスの精鋭隊が出てきて、僕以外は中林さんによって全滅した

「まさか、古典と数学はBクラスレベルまで上がっていたなんて……!」

「美子の教えのお陰で点数が上がったのよ。じゃあ、みんなは頼むね」
「「「おう!」」」

中林さんは奥のほうへと歩いていき追いかけてようにも精鋭部隊が邪魔して追いかけない!くそ、サモンをする前にこんなに敵いては間違いなく殺られるよ!?!まさか、美波や秀吉が手も足も出ずにやられるなんて……!」

「なんだ、なんだ？ 救援要請があるときいてきてみたら、面白いことになってるな？」

「！」

「俺も手伝うぞ、明久！」

「じゃ、ジャイアン!? 真理亜さんと一緒では!？」

「あー、俺が真理亜から逃げた！」

「へ？ それどういうー！」

「さあて、構えような？（本当は真理亜が姫路と共にFクラス進行組を対抗している。俺は秀吉と島田がやられたから急いで明久のほうに駆けつけたんだよ）」

な、なるほどー！ ジャイアンは僕がピンチだとわかって助けてくれたのだね?! さすが、ジャイアンだよ！

「さあ、いくよー！ ジャイアン！」

「おうー！」

今の僕には心強い味方がいるのだから!!

裏の裏

第2学期、召喚獣戦争Fクラス対Eクラスで最初に離脱したのは島田と秀吉で、俺達のクラスが最初に二人は殺られた。明久の話だと、Eクラス代表の中林が、わざわざ奇襲しかけて明久以外は全滅したと……

「そして、明久と俺が今こいつらを倒さないといけないか」

「まさか、裏から攻めると言う案がばれると思わなかったよ」

「バレバレに決まっているだろ!? あんな大きな声を出していたら!」

「……一応聞くんが、何て言っていた?」

「なんかまな板とかでそれを聞いてFクラスの島田が怒ってる感じだったな?」

なるほど、なるほど、こつそりといくはずがこいつらに会話を聞かれてそして中林がそれを逆手にとり奇襲したというわけ

「ほぼおまえらのせいじゃねえか!? そもそもどうしたらそうなった!?」

「く、罍をはめられていたなんて……!」

「「いやいやいや、俺たちは罍を仕掛けていないし自爆したのはそちらだろ!」」

どうやら、はめられたと言うとりこいつら三人の自爆で敵に気づかれてこういう状況になったと言うわけか?

「まあいいや。Eクラスの名前で……あれ? 顔を見覚えあるな?」

「ジャイアン〜!」

「お、スネ夫合流したか!」

「合流したか!……じゃないよ! 真理亜さんが大激怒していたよ!」
「なんで!」

「ジャイアンは今回別の部隊のリーダーでしょ?なのに、真理亜さんや僕に押し付けてここにいたらおこられるよ!」

「やべ……助けにいくって言っていなかった?」

そういえば、明久達の連絡が繋がらなくなったから俺は慌てて押し付けてここに来たのだだったな……!」

「兎に角早くいかないと……ああ、でも敵がいるのか！仕方がない……！あとで真理亜さんに謝るの手伝うよ!!」

「ありがとう、心の友よ!」

本当に助かった！真理亜は怒ると恐いし、それこそ本当に聖裁まっ
たなしだな!

「明久は体制整えるため逃げろ!」

「うん!あとは頼んだ」

「逃がすなあ!追え!」

「そう簡単に行かせると思っただけか?英語でFクラスの剛田武と骨川スネ夫はEクラスの三人に挑みます!」

「え?僕は巻き添え確定!」

「承認します!」

英語の先生の合図を聞いた俺たちは召喚するための言葉を出した。
相手は三人で俺たちは二人だが相手に不足はない!

英語

Fクラス

骨川スネ夫

剛田武

vs

Eクラス

園村俊哉

丸 悠生

長島峻

「サモン!!」

俺たちがそう言うのと周囲は召喚獣フィールドが展開されている場所
所に俺達の召喚獣がでていた。スネ夫は忍者で俺は槍を持ちながら
出てきた

「なに!?英語を仕掛けられただ!?」

「いつのまに!?」

「いや、後ろに先生いるじゃん…」

向こうの二人は驚いていたがもう一人があきれながら二人の方を

指摘していた。確かに俺たちの後ろにいるがまあ、それはいいとして！

「さっさと召喚しろよ、逃げたら補習されるし、さあどうする?!」「
「く!!サモン!!」」

俺たちの召喚の合図に向こうは動揺していたが、三人とも慌てながらも召喚してた

英語

Fクラス

骨川スネ夫 430

剛田武 200

vs

Eクラス

園村俊哉 190

丸 悠生 194

長島峻 188

俺たちが召喚獣出すと、スネ夫の点数が異常に高く俺たちは驚いていた！なにせ、スネ夫は数学は380点出していたのは知ってるが、それ以上に400点以上を英語出してるのは……まさか、本当に社長の後を継ぐために努力して!?

「な、な、なに!?!やつは数学と英語が得意なのはデータにあるが、こんなに高くはなかったはずだ!」

「350点代のはずなのに!?!」

「たしか、テストの点が単科目400点以上の生徒の召喚獣には「腕輪」が与えられ、点数を消費する代わりに腕輪に対応した特殊能力が使用可能になる……あ」

「わははは!!スネ夫、お前はこれを見越して用意してたんだな!?!」

俺がそう言うと、スネ夫は忍者の姿になりながら頷いていた。本人の話によると相手がどれだけの手練れかわからないからあえて一番高い点数を召喚したらしい

「前衛はジャイアンにまかせよう!」

「おう!」

「く、くるぞ！かまえろ！」

「おう！」

「秘技、手裏剣攻撃いい!!」

スネ夫の召喚獣が手裏剣攻撃すると向こうは大慌てで回避して逃げていたがそれは予想済みだよ！

「横の警戒を怠ったな!!」

「しまっー」

「おりやあ！」

俺の半身とも言えるジャイアン召喚獣は走りながら槍を横風ぎで切り落とそうとすると、園村俊哉の召喚獣が慌てて縦になって止めていた

「ぐっ?!」

「そんな力で俺を止めるわけないだろ！」

「今助ける、園村！」

「増援に行かせない!!」

「く!?!」

スネ夫が二人の増援を防いで俺は園村に攻撃していたら……別の所に声が聞こえた

「作戦通りにはまってくれたのね」

「え？」

「Eクラス三上美子がFクラス骨川スネ夫と剛田武に……古典を挑みます！」

「なあに?!?!」

「承認します！」

や、ヤバイ！古典は俺もスネ夫も苦手なの一つ科目だ！ということ
は……！

古典

Fクラス

剛田武 100点

骨川スネ夫 100点

v s

Eクラス

三上美子 260点

お、終わった!?この点数差は予想してなかった!!

「ごめんね?今回は勝たせてもらおうわ……」

「そ、そんぬああ?!」

古典

Fクラス

剛田武 0点

骨川スネ夫 0点

vs

Eクラス

三上美子 250点

Fクラス骨川スネ夫、剛田武、戦死!!!補習行き決定!!!

七夕

七夕とは織姫と彦星が一年に一回しか会えないイベントである。さて、そんなイベントに僕は今何してるかというところ……

「明久、それはもう少しそっち」

「そこなら誰も怪我しない？」

「オーライ。というか、僕とのび太とドラえもんだけじゃなくムッツリーニも手伝いをしてよ!？」

「……今カメラの整理で忙しい」

スネ夫の家で僕と明久はみんなで食べる席を用意しながら、竹の置く場所を探していた

「秀吉、今日の来るメンバーは？」

「うむ、姉上に工藤とお主のお嫁さんと三上と清水と氷華三姉妹と姫路と島田姉妹」

「そうか……さて、こら？俺の嫁とはどう言うことだ!？」

「え？もうお前たち結婚する前提なんだろう？」

「そうだね。あと、結婚式するとき僕らのホテルとかも作つところかな？」

「するかボケえ!?!そして、なに考えてる!?!」

ジャイアンとスネ夫と秀吉と雄二は今日来る面子を確認していたが、秀吉の言葉に違和感を持った雄二が叫んでいた

「にしても、良いの？スネ夫」

「いいのいいの!パパとママの水入らずの時間を過ごしてほしいから出掛けているし、僕の家はものすごく広いからね」

「確かにお前の家は広すぎるくらいだな……。ツというか、よくあの二人を呼べたな？」

「……ここに来るまでに姉上には色々とおつたからのう」

秀吉が何やら遠い目していたし、美春はなにやら僕らが楽しそうなイベントをするとわかり行くと行っていった

「そういえば、七夕と言えば昔あべこべ星の事を思いだすなあ」

「……あべこべ星?」「……」

僕は七夕といえはあべこべ星の事を思い出していた。そんな僕の言葉に皆はキョトンとしていた

「うん、色々あつて昔ドラえもん地球に似た星を見に行つてねそこがあべこべ星」

「あべこべとはまさか……?」

「例えば明久が女の子になってるとかね雄二が女の子で霧島さんに迫るとかね」

「最悪だああああ!!それは嫌だよ!」

「天と地がひっくり返してもそんな世界は認めねえ!!」

「ふむ、ワシはどうなっているのかのう?」

「あはは、なに言ってるのさ?秀吉は秀吉じゃないか?」

明久が何を当たり前なことを聞くの?といわんばかりに秀吉を見ていて秀吉はなにやら釈然としていなかったが無理矢理納得していた

「しかし、夏休みでのび太達が付き合うの聞いたときは驚いたなあ」

「やつとかよと思つたな」

「そうそう。で、その後僕らはのび太に半殺しされたよね?」

「あれは明久達が悪いからね?そもそも、僕たちの告白を盗み聞きした時点で有罪だけどね」

「コワツ?!のび太目が据わっているよ!」

僕の言葉に明久が震えていて、それに続くように当時の被害者も震えていた。全く盗み聞き何てしなかったらよかったのになあ

「そういえば、のび太」

「うん?」

「この時間時空はいいのか?」

「それ触れたら消されるから言わないのが華だよ」

「さて!!そろそろ女性達が来るはずだから……」

ドラえもんが四次元ポケットに手を入れて秘密道具を出そうとしていると知っている声が聞こえた

「うわー、骨川君の家つてこんなに広いのね」

「彼の家は私達氷華財閥と霧島財閥と同じくらいのごい家ですから

ね」

「はい。真理亜お姉さまの言う通り、スネ夫の家はとても広いですし」
「それを昔自慢しすぎて里緒菜お姉さまや真理亜お姉さまに折檻されて丸くなりまし」

「折檻って……骨川君は何をしたのでしょう?」

「お金持ちってこういうのを言うのよね?」

「……私も負けていない」

「代表の家も普通に広いわよ」

「あははは! 確かにね!」

後から遅れてやってきた女性陣が全員揃ってきていた。そして、美春が僕を見つけるなりに飛び込んできた

「のび太お兄様ああ!!」

「へ? み、美春!?!」

「お会いしたかったですうう!!」

「へ、のび太しっかりと竹をもっーぐぎやああああ!」

「明久くんの頭に竹が直撃したああ!?! えつと、えつと!」

「こら、美春。作業してるのび太くんにいきなり抱きつかないの! 吉井君、大丈夫? ドラえもんさんは慌てないで落ち着いて道具を探して!」

「良妻賢母に……いえ、それ以上の良妻賢母になっているわね」

「真理亜、冷静に分析しないの! その意見は同意見だけど」

そんなことがありながらも僕らは七夕パーティーを始めた

「あー! 明久!! 俺のエビフライを食べるな!」

「ふふん! 食事は戦場! 油断した方が悪いのさ……つて、こらあ! ムッツリーニは僕の唐揚げをとらないの!」

「……弱者の戯言」

「ムッツリーニ君、パンツ見せてあげるからその食べ物くれない?」

「……つつあ……興味……ない!」

「えー本当に? (チラツ)」

「……ごぶつ (プシユー!)」

「ムッツリーニが血まみれになったあ!?! 雄二!」

「今それどころじゃねえ！俺の命がかかってる！」

「そんなのどうでも良い！ムツツリーニを助けるのが先！」

七夕の日に僕らはBBQと美子さん達が作った手料理を食べていた。因みにドラえもんがこの時間軸にいるのは触れてはいけないよ？

「全く静かに食べれないのかしら……少し待った秀吉はなんでそんな女装をしてるのかしら？」

「あ、姉上これには訳が!!」

「少しお話をしましょう？」

「待ってくれ!?翔子、その婚姻はどこで……」

「……雄二結婚をしよう」

「それ以前に何で判子も押されている!?やめろ!!」

明久たちはご飯の修羅場になっていて方や雄二達はなにやら迫られていた。因みにジャイアンとスネ夫はというと……

「真理亜お姉さま、どうします？」

「1度ならず2度も、私のご飯を急いで食べるなんて……そんなに私の特盛り大盛り食べたいのですね!?!」

「おう!いくらでも食べられるぜ!」

「良いでしょう!ならば私たち姉妹の手作りの超特盛り唐揚げを!」

「食べられますか!」

「よしゃあ!こい!」

「スネ夫、これ美味しいわよ」

「あ、本当だ」

かなり盛り上がっていて、スネ夫は里緒菜さんとまだ付き合っていないときいているけどもうあれはイチヤイチャしてるレベルでは? ジャイアンは真理亜さんと冬花ちゃんの料理に楽しげに食べていたが見ているこちらがお腹満足になりそうだ

「さきー!ドラえもんさんもこれを」

「いいの?」

「はい!お兄様の世話をしていたということは私にとってもお兄様の弟のように思ってますー!」

「いや僕ロボットだけど!?それ以前にのび太くんとは兄弟でも僕の方がお兄ちゃんのはずだけど!」

「え、そうなのですか?」

「のび太が弟キャラ……なんか不思議と違和感がないわね」

「エビフライおいしいですう」

ドラえもんは島田や姫路、葉月ちゃんと美春を相手しながら食べていたけど会話全部聞こえるからね?

「みんな思い思いに楽しんでるね」

「そうね。のび太くんの七夕は何を頼んだの?」

「うん……ずっとみんなといられますようになかな?」

「ふふ、奇遇ね。私もよ」

「すごい奇遇だね。あ、そろそろ食べよう」

「そうね」

僕と美子さんはお互いに手を握り合いながら、みんなの方へと歩いていった

―男として認められる日が来ますように

―愚弟がきちんと生きていけますように

―五体満足で卒業できますように

―盗撮……いや、新しいカメラで繁栄しますように

―ムツツリ―二君をいつまでもいじめますように

―お姉さまが振り向いてくれる日が来ますように。あ、あとお兄様

たちといつまでも……

―雄二と結婚できますように

―翔子からの制裁が逃れる日が来ますように

―振り向いてもらえる日が来ますように

―思いに気づいてもらえる日が来ますように

―真理亜さんとこれからも婚約者として守れますように

―武君が無茶しないようにと音痴を直してください

―武お兄様がきちんと味見しますように

―ジャイアンリサイタルが復活しないように

―スネ夫と早く付き合えますように

―皆がこれからも笑って親友が幸せで生きてくれますように

―美子さんとこれからも共に歩けますように

―のび太君と共に歩けますように

今もどこかで多くの人が七夕の願いを飾っているだろう……

こんな幸せな時間が続けば良いのにね……

反逆

明久達がとんでもないことなってるのを知らない僕は現在今か
りの強敵と対峙していた。それは目の前にいる……

「く……山田大丈夫？」

「なんとか……!!のび太!!上からの攻撃を回避しろ！」

「…うわつと!？」

僕は山田の声を聞きなんとか回避行動ができた。僕らの召喚獣は
構えながら目の前の敵を対峙していた

「僕と山田が対峙していたらまさかいきなりこんなことになると思わ
なかったよー！」

「同じく!!何でこいつらはこういふときだけ意気投合する!？」

「うるさい!どちらも彼女いる上に毎日毎日惚気あいやがって我慢の
限界なんだよ!!もういまこの場にいる俺たちEクラスもFクラスも
関係ない!!」

「「「おおー!!!」」」

「我らは貴公らに対して反逆を起こします！」

「「「敵は目の前のリア充にあり!!!」」」

「何で意気投合するんだよ!!」

僕と山田がなぜか意気投合しているクラスメイト達に思いきり
突っ込みいれていた

事の発端は数分前……

僕は僕と同じFクラスの仲間と共に別ルートを走っているとEクラ
スに待ち伏せされていたがそれは予想すみ!

「いたぞ、Fクラス達だ！」

「く、やはり待ち伏せされていたか！」

「お前達の戦力となる島田と木下秀吉、剛田、骨川の四人は犠牲を払い
ながらもなんとか撃破した!次は貴様だああ！」

「お前はEクラスの仮参謀山田哲夫！」

「んなあ……仮参謀ではない!!仮参謀ではないから!!」

Fクラスの仲間の一人の声に出鼻をくじかれたように前によろけて倒れまいと耐えてから突っ込み入れていた

「Eクラスは何人か犠牲払ってしまったが、そちらも多く犠牲払っただろ！」

「く、確かに四人もやられたのはいたい……けれど、それもこちらは何も手を打っていないとおもう!?!」

「何い!?!」

「僕らもそれをやられても大丈夫なように真理亜さんや僕がこれまで隠れていたのさ!」

僕がそういうと山田はなにかに気づいたのか慌てていた

「しまった!こいつらは罠だ!!本命は氷華が代表の方に!!」

「いまここにいるFクラスの皆は山田の軍を止めるの協力して!!」

「「「「おおおおお!」」」」

僕がそういうと僕の率いたFクラスの仲間はEクラスの方に突撃していた。Eクラスの山田達は苦虫を潰したように対抗しようとする……

「少し待て!Fクラスの諸君!」

Eクラスの一人がFクラスのみんなを呼び止めていた。Fクラスのそのうちの一人須川が聞いてくれた

「なんだ!降参か!」

「お前達F F F団の事はよく知ってる!」

「(あ、他のクラスについてF F F団のこと認識されたの!?)」

「それがどうした!」

「よく考えろ!!お前達の後ろにいるのび太は我らEクラスの副代表三上と付き合っていることに怒りを抱かないのか!」

「「「「!」」」」

「な、なにをいう!?!それを言うなら……Eクラスの山田もEクラスの代表中林と歩いてるのみたぞ!それもおかしいと思わないか!」

「あれ?なんか嫌な予感がするのだけど……?」

山田の言う通りに何やら嫌な予感が薄々と迫っていて怖いのだけど……!?!

「た、確かによく考えてみたら……だが、野比のび太も付き合っているのを見て怒りを抱かないのか!!」

「抱いてるに決まってるだろ!!そちらこそ山田が中林と歩いてるのみて殺意わかないのか!」

「確かに山田ごときが付き合ってるの見たら悔しくなってきた!」

「おーい、今日の前にFクラスを倒さないと……」「山田あ!俺は……いや女がない俺達はお前の敵だあああ!」なんてだ!」

「諸君、我々FFF団はいまこそ野比のび太に反逆しようではないか!」

「いま召喚獣戦争なのに何でそうなるの!」

まさかのEクラスとFクラス……いや、FFF団が反逆することに驚いて僕と山田は少し驚いていた

「さあ!!Eクラスの友よ!」

「おう!我ら盟友のFFF団よ!」

「今こそ、我らの力で慈愛なく躊躇いなくこのおろかな二人を天に変わって我らが仕留めようではないか!!サモン!!」

「!!おおおお!!サモン!!」

というわけでいま(最初)に至る!まさか本当に仲間を反逆される時が来ると思わなかったよ!

「!!絶対仕留める!」

「絶対返り討ちしてやるうう!」

Eクラスの怒り心頭組&FFF団

対

Fクラス野比のび太&Eクラスの山田哲夫

いざ尋常に勝負!!

反逆した理由

僕と山田が限定的な手を組むのに対して向こうはとんでもない嫉妬の炎が見えるくらい怒っていた

「そもそも、野比のび太！俺達FFF団はこれまでと同じと思うなよ！我らは貴様にいつか撃ち取るためにいくつも策を作ってきた!!」

「我らはこれまで貴様の恐怖の政治に怯えていたが、多くの仲間がいる今!!怯える必要はない!!」

「我らはEクラスの同志と共に!!」

「二〇山田哲夫と野比のび太を粛清する!!」

FクラスでFFF団のトップでもある須川と副リーダーの言葉に僕はなんとも言えなかつた。そんなつもりはしてないし、彼女がほしければ自分は自分達の行いを……

「それは俺達も同じ意見だ!!なんで、Eクラスの地味で覗き魔ポジションでおまえが彼女できたのか理解できない!!」

「まてまて!?!今の言葉おかしいだろ!?!お前達もあのととき覗きを参加していただろ!?!……ダメだ、思い出したら気持ち悪くなってきた……」

「確かに俺らもあの合宿のあれは参加はしていたけど……うつぶ……」

「お前なんて恐ろしいことを思い出させる!?!うえぶ……」

「あ、まさかのFFF団も山田を含むEクラスの皆が真っ青になっている。いったい君達はあの合宿でトラウマに……?」

因みにバカとのび太の召喚獣のお仕置きの間を見ていただければ彼らが何を見たのか少しわかるかも。あるいは……ね?

「ええい!!兎に角、我らは貴様らにこんどこそ!!」

「うちとらせてもらう!!船越先生!!」

「げえ!?!」

船越先生とは!!年齢不詳の女性で独身であることにこじらせて、生徒に求婚を迫っていると噂がある!明久が被害遭いかけたのを思い出したよ

「船越先生!!我らFFF団とEクラスの同志は!」

「Eクラスの地味山田とFクラスの魔王のび太に数学を仕掛けます！」

「いいわね、青春ね……いいでしょう!! 承認します!!!!」

「承認します!! じゃない!」

「!!」「サモン!!!」「!!!」

「やるしかないのか!! サモン!!」

「地味ではない!! サモン!」

数学

FFF団 90点×10人

Eクラス同志 120×10人

vs

魔王のび太 200点

地味山田 150点

僕らは彼らが召喚すると共に僕らも慌てて召喚すると点数を見るとそこまで驚異ではないが……

「こう、敵も味方も関係なく手を組まれると人数が多いのがネックだね!! あと、名前に悪意ある!!」

「同感!! 俺は地味ではない!!」

「!!」「いや、お前は地味だよ!!」「!!!」

「ガーン!? 俺は地味なのか……そうか地味なのか……あは、あはははは……」

みんなに指摘された山田は悲しそうに落ち込んでいた。さすがに山田は持ち前のメンタルは傷ついていてみんななんとも言えなかった

「どいつもこいつも……もうこうなったらお前達全員血祭りじゃあああああ!!」

「うお!? 地味山田が覚醒した!?!」

「山田の癖に何か怒っているぞ!」

「ええい、者共引くなあ! 地味山田や魔王のび太といえどこの人数は勝てるはずがない!」

だから僕のどこが魔王なのさ……というか、山田の怒りがさつきか

「らこつちが驚くくらいすごいんだけど……」

「そういえば、魔王のび太に審議を下さないといけないとダメなのがある!!」

「だから僕の名前は魔王ではないよ!」

「風の噂で調べたのだが貴様!昔女の風呂を覗いていたのだなあ!?!」

無実と言おうとしたが下手な発言は自分の首を絞めることに!それ以前に、それをしていないとは言いきれない!!なぜなら……

『きゃー!!のび太さんのエッチ〜!』

数えきれないほどしてると言うことを話せば僕の命にない!!

「否定しないと言うことはそういうことだと認める〜!」

「貴様あああああ!?!何を羨ま〜いかがわしいことを!!」

「彼女いるのに飽きたらず、覗きもしていたと!?!覗きもしていたと!?!

諸君!我々FFF団は野比のび太を許すことができるか!?!否!」

「「「許さない!」」」

「野比のび太これは事実なのか!?!」

FFF団は嫉妬の炎が凄く、明久をいつも襲うときよりも恐ろしく、それに山田は山田でまさかの覗きを確認してくる

「我ら楽園もたどり着けなかったのに!!貴様は昔から言い思いをしてるではないか!!」

「うわ、なんか皆の血の涙がすごい!」

「俺たちの楽園をおまえはすでに味わっていたとは!!!」

「「「全員突撃だあああああ!」」」

バカなの!?!この人達バカなの!?!

「山田槍飛んでくるよ!」

「!ええい!あとできけばいい!」

山田は飛んできた槍を回避してすぐに起き上がり周りを見ていた。僕は山田に大丈夫か聞くと山田は指を指して指示出した

「く……山田大丈夫?」

「なんとか……!!のび太!!上からの攻撃を回避しろ!」

「!うわつと!?!」

僕は山田の声を聞きなんとか回避行動ができた。僕らの召喚獣は構えながら目の前の敵を対峙していた

「僕と山田が対峙していたらまさかいきなりこんなことになると思わなかったよー」

「同じく!!何でこいつらはこういふときだけ意気投合する!？」

「うるさい!どちらも彼女いる上に毎日毎日惚気あいやがって我慢の限界なんだよ!!もういまこの場にいる俺たちEクラスもFクラスも関係ない!!」

「「「おおー!!!」」」

「何で意気投合するんだよ!!」

僕と山田が本当になぜか意気投合しているクラスメイト達に思いきり突っ込み入れていた

「あらあら………何やらすごいことになっていますね………」

僕らのかげに隠れている人に誰もまだ気づいてなかった……

反逆者の友情と……

僕と山田はFFF団&Eクラス同志連盟と対立していて、船越先生の召喚もとの数学で苦戦していた

「そりゃいあ!!」

「うおおお!!」

「貴様ら補習行きだあああああ!」

「二「おのれええ!!」二」

最初のFFF団&Eクラス同志達は人だったが僕と山田で何とか削りながら倒していくが……

「まだだ!!立ち上がれ同志よ!!」

「おおおお!」

「われらの楽園を先に手に入れたあやつを討ち取るまでは!!」

「こいつらゾンビかよ!」

「FFF団10人Eクラス同志10人の計20人に対2人でなんとか8人減らして12人……でもまだ多いよ!」

僕と山田は冷や汗をかきながら倒しても倒しても立ち上がって迫ってくる相手に少し怯えていた。というか、本来は敵同士なのに何でこういうときだけ意気投合してるのさあ!?

「須川!!こんなことしてる場合ではないのに!!」

「Eクラスもだぞ?!なに今意気投合してるのさ!」

「だまれえええ!!貴様にわかるか!?!どんだけ告白しても振られてしまう運命を!!ああん!?!」

「う、運命だと?!」

「何で、山田が驚くのさ!?!」

僕は次々撃ち抜きながら山田の突然の驚きに僕はなんとも言えなかったがそこは気にしない方向で!!

「運命って何が運命なのさ!?!」

「俺達は告白してことごとく粉碎されている!なぜか!それは人のエゴ!人の望みだからな!」

「ぐっ!しっこい!!」

「ぬおあああ!?!」

須川の演説を聞きながらもなんとか三人撃破していき残り9人もいる!さすがに連戦で疲れてきたよ!

「これ以上は無益だ!!君達に降参することを勧める!」

「今ならまだ俺達はひどいことしないから、もうやめろ!」

「うっ……」

「者共ひねるなあああ!」

「!!」

僕らの説得に何人かは降参をしようとしていたがそれを止める声が上がって回りはそいつをみた

「いいか!?ここで降参してみろ!どうなると思う!?!」

「……はっ!?!」

「気がついたか!?俺達は反逆した時点でもう、その選択はないんだよ!お前達が降参してもせめないが……俺は最後まで抗う!!」

「何を今さら……みずくせえことをいいやがる!我らEクラス元も抗うと決めておる!」

「なに!?!」

「そうだぜ、須川!!我らFFF団は死ぬときもいかなるときでも共に戦うと決めたではないか!」

「お前達……っ!」

須川はその後ろで立とうとしてる仲間達をみて涙を流していた。うん、普通なら感動したりするのだろうけど……なにこの目の前での友情みたいなやり取りをしてるのは……何て言うか……

「僕らが悪役になっていない?」

「だよな……反逆したのは向こうなのに……何で俺達悪役?」

「なんか理不尽だよね……はあああ……」

本当に理不尽だよ……何が悲しくって仲間裏切られて戦わないといけないのさ……。山田も呆れていてどうしたものかと考えているが僕はそれよりも、明久と雄二と真理亜さんがまだおとなしいのが気になるなあ……

「女たらし魔王のびた!それと影が薄く変態の山田!我らは最後まで

抗う！」

「誰か女たらし魔王だよ!？」

「影が薄く変態とか認めない!!」

「しらん!!我らは9人もまだのこってる!しかしお前達は2人だ!!だから、降参するのは俺たちではなくお前達の方だああ!!」

そういつてとびこんでいくFFF団の連中4人とEクラス4人が突っ込んできて僕たちはさすがにきついと思ひ構えてたら……

「…隠れて我慢していましたが、全くいい加減にしなさい……このおバカさん達!」

「「え……」」

「拳骨……粉碎!」

数学

???
???点

vs

FFF団とEクラス 8人 0点

突然声が割り込んできたと思つたら、見えない速度で突っ込んでいたFFF団やEクラスが無情にも首を撃ち取られていた

「え?!何奴!？」

須川達も予想外なのか回りを見てみると僕は今とてつもなく鳥肌がたつて山田もなにか震えるようにゆっくりと後ろを振り向くと……

「ふふ、全く……何をしてるのですか?須川さん」

「え、Fクラスの剛田武の婚約者……氷華真理亜様……!？」

「い、いつの間に……というか、なにか怒ってませんか？」

「ふふ……懲りないお方達ですねえ……」

にこやかにそして優しく慈愛があるように笑いかけているが僕の本能的に告げている……。これは三上さん……美子さんの怒った時と同じだ……

「(山田)」

「(な、なんだ?)」

「(僕たちは下手に動かない方がいいと思うけど君はどう思う?..)」

「(……おとなしくして)」

「(うん)」

僕たちは今なにもかも下手なことで行動すればとんでもない怒りに巻き添えくらいそうだと思っておとなしくしていた

「フッフッフ……」

「あ、あの……なんですか？その含み笑いは……？」

「今残りは貴方だけですわねえ。Fクラス須川さん？全く今私達が戦わないといけないのはどこのクラスですか？」

「Eクラスです……」

「ええ……ですが……」

ビシッ！と明らかに真理亜さんの付近にヒビが入っていた。いや、
擲楯とかではなく本当にヒビが走っていた

「……こう好き勝手に味方を攻撃するなんて……本当に……」

「へ？」

「全く……なんでこういうことになってるのですかなあ……！！」

「「ひいいい!？」」

真理亜さんがどんどんどんどん怒りが強くなってこれ以上一歩でも発言が誤れば……

「5秒以内に謝る選択をすれば許します」

「ごめんなさい！」

須川は勢いよく土下座をしていたのに対して真理亜さんがにこやかに笑ってるのはあれはまだなにかやる気だと思った

「良くなりました……では次のお仕置きはあとですね……まずは軽く落ちてもらいますよっ」

「へ？……あ!？」

数学

Fクラス

氷華真理亜 win

vs

Fクラス

須川 g o t o h e l l

真理亜さんが無情にも須川の召喚獣の首をはねていた。そして出ていた表示に僕らは点数ではなく書かれていた

「あれ？表示おかしいのだけどお?！」

「怖い……Fクラス女の子怖い………」

「ふふ、男子全員……また覚悟しといてくださいね」

「さあ、負け犬は補習行きだあああ！」

「いやあああああ！」

「うふふふ、反省してくださいね」

須川は西村先生につれていかれて残ったのは真理亜さんがものすごいこやかにまた笑っているのと僕と山田だけだが、これはまた一波乱がありそう……

健やかに……

8月7日……それが僕の生まれた日だ……。昔僕の誕生日の時に僕の名前の由来はいつたいたいなんなのだろうと思つた僕はドラえもんとタイムマシンで過去にいつた。今だから言えるけど当時僕の名前を最初に呟いたときもつとかつこいい名前にしてもらおうと思つた……

『すこやかに大きく、どこまでも、のびてほしい』

当時のパパが込めた僕の名前の意味を聞いた当時の僕は本当に心のなかでとてつもなく恥ずかしく申し訳ないと思つた。そこから当時の僕は少しでもパパ達の思いを失礼ないように努力した……。ドラえもんが未来に帰るときも約束して頑張ると決めて努力していた
そして今……

「くそが!!早く終わらせないと俺たちの命がヤバイんだぞ!確りしろ!ガバツ!」

「ジャイアン、しつかりいい!!のび太も燃え尽きないでええ!!」

「俺……こんなにダメな男だったのか……ごめんなさい、本当にスネ夫やのび太もごめんなさい……」

「ふふ、なにいつてるのさ……僕もだよ……僕もスネ夫やジャイアンに謝ることたくさんあるよ……」

「……………ここまでか……………」

「く……………ここまで手強いとは……………」

そう……まさかここまでひどいと思わなかった……何で……何で……

「……………何でここまで教え込んでいても理解できない!!明久あああ!!……………」

「作る側が悪いのさ!!」

僕らは落ち込みながら明久の夏休みの宿題を教えていた……事の発展は数日前に明久が期限までに夏休みの宿題を終わらなかつたら、それぞれ罰ゲームを与えると聞いた

「はじめはお前だけが夏休みの宿題を期限まで終わらなかつたら罰

ゲームを受けたらいいのにお前は……!!俺たちを巻き込みやがったああ!!」

そう、明久は自分だけ罰ゲームされるのを逃れたいから僕らを巻き添えにしたのだ。因みにスネ夫もその場に居合わせたから逃がすまいと明久の夏休みの宿題を教えることになった……。夏休みの宿題を普通にやれば早く終わるだがここで考えてほしい……

「えーと……雄二此処の解説がわからないのだけど」

「あ?あー、これはな……であるから……となる……たがら…答えは?」

「あ、なるほど!これの通訳の答えは……Yuji had an affair with Kirishima even though she loved her. That's why I got angry.」

「おい、こら!表出ろや……!!」

この通り問題の意図とは全く違う答えになっていくのだ。なにせ、文月学園開設以来代表するバカでありなおかつ僕の所属しているFクラスの中でも最もすごいバカと雄二は言っていた。因みに明久の答えは日本語でいうと……

「雄二は霧島さんのことが大好きなのに不倫しました。だから世間に怒りを買うことになった」

という意味であり、明久の答えは自ずと雄二に怒りを買うことになってしまったのだ。全くきちんと問題文を見たらわかるのに……

「明久……英語のかいたら次はここね」

「げ!」

明久はものすごい嫌そうな顔をしていたが明久に悪いけど僕たちの命が関わっているのだから優しくしてあげるのはいけない

何故なら……

「明久が自分で宣言していた夏休みの宿題を今日中に終わらさないと……!」

「俺達はそれぞれとんでもない罰ゲームが待ち受けているのだからな!!」

「だから死に物狂いで終わらさない!!」

「俺もスネ夫も真理亜さんや冬花、里緒菜になにされるかわからないから頼む!!」

「……保健体育なら教えられる……」

「ムツツリーニ論点ずれてるのじゃ! 明久、古典はあとここをやれば終わるのじゃ!!」

僕達は明久が本日中に夏休みの宿題を終わらせないと連帯責任として美子さんや真理亜さん達に何されるか分かったものじゃないよね!!

「もう休んでいいよね……!?!」

「」「休むなあ!!」「」

明久が謎の余裕を出していたが、5日前に蓋を開けてみたら一問も答えていなかった! そんなこんなで二轍でなんとか追い込み、1日爆睡してから最後の1日に追い込みをかけていた

「あともう少しで、今日が終わってしまうからなんとしても答えるのじゃ!」

「不味い、不味い! 外からなんかゆっくりと歩いて迫ってくる音が聞こえるのだけど……!?!」

「振り返るな! 早く終わらせるんだ!」

「……残り1分!」

そんなこんなで必至にやりながら残り時間が十秒になった頃に明久はついに最後の問題を答えた

「残り時間が……10秒……ギリギリすぎじゃのう……」

「ま、間に合った……」

明久は机の上でぐったりしていたが、僕らはもつと疲れたよ……本当に間に合ってよかった……

「つたく……俺たちを巻き込みやがって」

「ごめんごめん。でもこれでできるよね」

「出来る?」

明久と雄二の言葉にそれはどういう意味なのかと思うと、部屋にノックがありみんなは動けないので僕が出ることになった

「美子さん？」

「吉井君の宣告していた宿題期限なんか終わったのね」

「うん。あれ、何で知ってるの？」

「うん、それは訳はあとで話すからね。あ、のび太君少し気分転換に移動しましょ」

美子さんに誘われた僕は部屋にいるみんなに一言断ってから部屋を出ていった。気分転換っていったいどこにあるのか……

「にしても、霧島さんの家広いな……」

「ええ、翔子が吉井君の宿題を終わらせるために場所を提供してくれると思わなかった。恐らく表向きはそれで裏は……」

「雄二との時間をとるためだよな……そういえば、何でさつき終わったことを知ってるの？」

「その問いは翔子ちゃんが監視カメラ密かにつけていたみたい。本人いわく『……雄二が浮気しないため』……って瑞希と美波は何を想像していたのかバットを磨いてたから真理亜さん達とその行動をとめたわ」

美子さんがものすごく疲れた顔をしていたので相当別室で霧島さん達は暴走していたのか何やら疲れていた

「ここは……泉？」

「そろそろね」

「へ？何が……!？」

次の瞬間とてつもない光が僕の目に差し込み僕は思わず反らしてしばらくして光が収まると……

「これは!？」

「ふふ、十二時ぴったり……のび太君……お誕生日おめでとう!」

「へ……え!？」

僕は慌ててみると時計は0時ぴったりになっていた。絵、でも明久の勉強の時部屋の時計は……そうか、時間をずらしていたのか!？」

「のび太君……私はね、あなたのことが大好きなの。だから、大好きな人との誕生日の最初に祝いの言葉を言いたかったの」

「ありがとう。僕も美子さんのことが大好きだよ」

「ええ。私たちはこれからもお互いに成長していきましよう?」

僕達はお互いに見つめあい、やがて誰もいないことを確かめながらゆつくりと迫りキスをした……お互いの温もりを忘れないようにしっかりと……ね?

「……つぶはっ……うん。あ、ところで僕の名前の由来は知ってる?」

「そういえば聞いたことがなかったわね。どういう意味なの?」

「すこやかに大きく、どこまでも、のびてほしい……それが僕のこの世で最初にプレゼントをもらった名前の由来さ!」

僕が笑顔でそれをいうと美子さんもまた笑顔で返してくれた……

ねえ、僕が生まれたあの頃の僕へ……

きつとこれからも僕は多く挫けては立ち上がり凹むこともあるけど……何度も何度も立ち上がる力があるからね?だから、僕は今日も頑張る……

だって僕のパパやママの願いは「すこやかに大きく、どこまでも、のびてほしい」といつていた……だから、僕はいつまでもいつまでも成長して伸びていくよ……

僕はドシで間抜けでうっかり屋さんで昼寝が大好きな人間だ……けれどそんな僕に寄り添ってくれている大切な人がいるからこれからも……野比のび太としての物語を歩んでいくよ

策

須川達の反逆者達も全員いなくなり残ってるのは僕や真理亜さんとEクラスの山田哲夫だけだ

「お互い尋常じゃない被害を受けたから……野比のび太。俺たちの決着はまたあとでしないか？」

山田は味方が誰もいないことを悟りながらため息をついて僕たちに交渉してきた。お互いに反逆者達を制圧するのにかなり疲れた

「……もしその提案は断るといったら？」

「その時はその時だ……しかし、今ここでやりあってもお互いに損しかないだろう？」

「そうですね……のび太さんも疲労がありますし、良いでしょう。山田さんはEクラスの方に今戻るのでしたら私たちも今は手は出しません」

「……感謝する」

山田が疲れた顔を隠さずにここから急いで走り去っていった。本当はここで決着つけてもよかったが疲労があるし、お互いに今は得がないからね……

「のび太さん、急遽Fクラスに戻ることになりました」

「わかった」

真理亜さんがクラスに戻ることを提案してきたので僕らも戻る選択をして今は無理に深追いしても今の僕はやられるだけだ

「ーというわけなんだ」

僕はすぐにFクラスに戻りことの説明を話すと雄二は頭を抱えていた。隣の明久も同様になんとか生き残ったらしいが、頭を抱えていた

「まさかバカ共が作戦を無視してEクラスの一部と手を組みやがって反逆していたとは……」

「のび太よく生き延びれたね……」

「本気で危なかったよ……久々に命の危険を感じたよ……」

「ですが、残った戦力は私とのび太さんと……」

教室にドアがあく音したのでふりむくと、そこには姫路とムツツリー二が疲労感いっぱいに戻ってきた

「……ただいま帰還した」

「も、戻りました……」

「姫路さんとムツツリー二！」

「姫路？お前の率いた部隊は？」

「あ、それがその……皆さんがいきなり暴走して……美子ちゃんたちに返り討ち食らってました」

「のび太の元奥さんの三上さんに返り討ち食らった!? どういうこと！」

「どうやら姫路達は美子さんに先手をたくさん食らわされたのかこつちに戻れたのは二人つてのは痛いね……あと、明久の言葉で訂正あるのはまだ婚姻届けしていないから奥さんもなにもない!!」

「今回はEクラスが俺たちの作戦を上回っていると言うわけか。いつもならなんとかなるが今回はウチのクラスがここまで追い込まれるとは……Eクラスは相当な勝ちの執念が強いみたいだな」

「まあ、三上さんは勝負事に関しては負けず嫌いだからね……やると決めたら相当考えて戦略を組み立ててきたね」

「向こうも戦力かなりやられてるが、それでもこちら側が不利なのは変わらないか……よし、明久」

「うん？なんだい？」

「この紙をEクラスに届けてほしい」

「………僕に死ねと？」

明久が雄二の指示を聞いて震えていたというよりも怒りが溢れて震えていたと言うのが正しいよね

「………」

「………」

「………そうだ」

「よし、雄二。今すぐ社会的に死ぬかハッピーエンドに向かわすかどっちがいい？」

明久が携帯を取り出して雄二に何かを見せると雄二は少しだけ顔

色悪くしていた。何かを葛藤するように悩んでいたが覚悟を決めて明久に悩んで悩んで決めた答えは……………

「明久、俺はお前を信用してる」

「たった今僕は君の信頼はないけどね！」

「落ち着け、明久。俺はな、本当の事を言うのは照れ臭く言えなかったが……………」

「なに？急に改まって……………」

「俺はな、本当のこのクラスの切り札であるお前だからあえて、敵に向かわせて勝ちを決めてほしかったのだよ」

「切り札……………？ぼくが？」

あ、これはいつものように騙されてしまう落ちか……………明久も少し成長したと思っただけならまた騙されるのか……………

「そうだ。俺はなこのクラスの本当の意味でのすごいのはお前だと思ってる……………頼めるか、明久？」

「ふう……………僕に本気を出せと言うのだね？」

「そうだ。遠慮なく行ってこい」

「分かったよ。でもその前に……………」

お、明久がどうやら行くことを決めたみたいだけど……………？

「今残ってるのはバカ雄二とのび太、真理亜さん、姫路さん、ムッツリーニだよ。で…僕はこの紙をEクラスの代表に渡したらいいと言うわけか……………」

「そうだ。あとは頼むぞ」

「任せて！」

明久は勇み足でこの教室に出ていこうとしていたのを見て僕はじつと雄二の方になんの紙を渡したのか聞くと……………

「はは、安心しろ。……………スリル満載の紙だよ」

それはもう……………

「二(悪い企みが成功すると言う顔だなあ……………)」

どうか明久が死なない事を叶いますように……………

乗り込み

明久 side

僕吉井明久はFクラス代表の雄二から渡された手紙を手に持ちながら、Eクラスの方に歩いていくとEクラスの山田哲夫がこちらに歩いてきた

「一人だけ来るとは良い度胸だ！」

「まっつて！僕は戦いに来たのではなく、Eクラスの代表に話合いに来たんだ！」

「なんだと？今さら話し合いだと？」

「僕らも君達も被害は尋常じゃないはずだ。現に君と共に来たのは君を含めて3人！」

「……その手紙はあるのか？」

僕の言葉に山田君は疑いながらも手紙の事を聞いてきた。その山田君の行動にEクラスの仲間達が止めていた

「山田?！」

「確かにEクラスも先程の戦いで被害がとんでもないことになった……というより、反逆してしまったことで当初の作戦は全部バーとなったからな」

「それもそうだが……」

「その手紙はある！だから案内してくれ！」

「……良いだろう。だが、わかっていると思うが妙な真似するなよ？」

「ふふ、そんなこと言われるとしたくなるよ！」

「……構えろ」

「あ、うそうそ！ごめんなさい！手紙を渡すだけなので！」

「ったく……」

山田君は呆れながらもEクラスの方に案内してくれることになっていた。その間僕が妙な真似しないようにつれてきた二人が後ろを警戒しながら僕の方にも警戒していた

「(本当に手紙だけなのか？吉井がこうして不意打ちで攻撃すると思っただが……)」

「……何て思っているけど、攻撃すれば間違いなく今挑めば戦死になるし、そんな馬鹿な真似はしないよ。……さて、その手紙の内容は僕も知らないけど雄二を信じよう！」

「……なんて考えているけど絶対明久は雄二のこれまで騙されていた経験を忘れているよね……」

この時僕も山田君も気づいてなかったが、後ろから気配を隠してこちらを追跡していることに……そんな気づいてない僕らはゆつくりとEクラスに歩いていった

「再度確認するが、お前は一人なんだな？」

「うん。この手紙を渡すためだけに来たの」

「そうか……入れ」

山田君がそう促すと僕はゆつくりとEクラスに入っていくとそこには自信満々に立ちながら僕を睨むEクラス代表……

「よく来たわね……学園を代表するおバカさん」

「失礼な!?僕のどこが馬鹿なのさ!?中森さん！」

「中林よ!中林!同じ学年なのに人の名前を間違えるか!!それも二回目よ!」

「まあまあ、宏美落ち着きなさい……。吉井君も私たちのペースを乱すためにわざと間違えたのよね?」

「え……あ、うん」

「絶対に真面目な間違いをしたわよね!?そういうところがバカなのよ!!」

中林さんが怒りながら今にも僕に突撃しようとしていたが、山田君とのび太の……元恋人三上さんが必死になだめていた

「全く火に油を注がないでくれ……」

「はあはあ……」

「宏美は水分を取って落ち着いてね?で、吉井君その手紙とやらを渡してくれない?」

「あ、はい」

僕は三上さんにその手紙をわたして三上さんは宏美さんと共にその手紙の内容を読んでいた。最初はフムフムという感じで読んでい

たが……

「は……う？」

「へえ………」

「ひい?!」

三上さんと中林さんが女の子ののだす声ではない低い声になっていたのをきいた僕らは震えていた

「フフフフフ、そう……ねえ、吉井明久君」

「は、はい……何でしょうか……?」

「今このクラスは何人いるかわかる?」

「えーと……5人……?」

「そうね。……山田君……このバカを殺りなさい」

え……殺りなさい?殺されるの!?なんで!?そう思うと三上さんが目を据わりながらその手紙を読みなさいと渡してくれた

「えーと……<Eクラス代表へ、吉井明久がEクラス相手には僕一人で十分だし、中林は怖くないから勝てる勝てると言っていた。尚、三上に対しては……ツンデレで隠れ巨乳と言っていたのでお仕置き任せる……>……嵌めたな!!雄二いい!!」

「山田達!!このバカを仕留めなさい!!」

「さすがにこれは怒るわよ!!」

「違う!!僕のはめられたのいい!!」

雄二のやつ何が切り札だああ!!絶対にこれ僕を生け贄にしたよね!?最低だああ!!絶対にこの戦いを終えたら嵌めてやる!

第395話

明久 side

くそ、絶体絶命とはこういうことを言うのか!? 何で僕が雄二に頼まれて渡したのがこういうことになるのさ!? 僕はなにも悪いこととしてないのに!

「ふふ、私たち相手に一人で挑むなんて……その度胸を免じて代表の私と美子は相手しないで哲夫が相手してくれるわ」

「吉井君、この手紙の内容はさすがに貴方が悪いわよ……。私も少しだけ怒ってるからね?」

「確か、手紙の内容はEクラス代表へ、吉井明久がEクラス相手には僕一人で十分だし、中林は怖くないから勝てる勝てると言っていた。尚、三上に対しては……ツンデレで隠れ巨乳と言っていたのでお仕置き任せる>だよな。……まあ確かに三上さんもスタイルはいいからなあ」

「私という彼女いるのに浮気を考えたり、女の体を考えるのはどうなのかしら? 山田?」

「滅相もございません!」

山田君が小さい声でそれを言うと後ろにいる中林さんが山田君に對してかなりドスのある声で問い詰めていた。それをヤバイと感じた山田くんが慌てて僕に向き合っていた

「(くそ、うっかりな発言で首を絞めてしまった!! もし、今……:……少しでも変な考えをすれば間違いなく、殺される!?)と、とにかくそんな卑劣な内容を書いてきたお前を許せないから我ら山田達が相手だ!」

「く、来るならこい!」

「俺たち三人でお前を倒してやる! いくぞ者共!」

「我らFクラス吉井明久に世界史を挑む!」

わざわざ僕の暗記していた世界史を挑むと言うことは負けに来たと言うことかな! よかろう! 今の僕は強い吉井明久だよ!

「「サモン!!」」

世界史

Eクラス

山田哲夫 120点

大山唯 120点

長野奈々 130点

対

Fクラス

吉井明久 240点

3対1で、僕一人で果たしてどこまでいってできるのか怪しいけど、やるだけやるの事をするしかない！

「やはり予想通り世界史は高い点とれてるみたいだか……相手は一人！早急に仕留めるぞ！」

「はい!!」

「ヤバイ、槍!?くそ！」

大山さんの召喚獣は槍で振り下ろしてきて僕は慌てて下がると長野さんは弓矢を構えていた

「回避した場所に来ると読んでいたわ!狙いはそこ！」

「くっ……それなら弾くのみ!!」

「木刀で槍を弾いた!?(だてに召喚獣の扱いが上手いだけではないのね!!)」

「まずは厄介な弓矢を……!?!」

僕は弓矢使いを一気に仕留めようと思い、接近したが山田君の召喚獣が足を振り下ろしてきたので慌てて回避した

「ツチ、回避したか！」

「弓矢に槍に……?山田くんのは？」

「ああ、これはムエタイだ！」

「ムエタイ!?!絶対に食らいたくないやつだ!!」

そう本当にムエタイだとしたらあのタイキックを食らうことになる!本来は召喚獣はダメージは負わないものだが……

「(観察処分下されてる僕は確実にフィードバックで痛みが来る!それだけは避けたい!!だから……!)絶対に勝つ!!」

「意気込みは良いのだが、3対1で明らかにお前が不利なのは変わら

ないぞ?」

「ふふ、ところが勝つチャンスがあるのだよね。出し惜しみなく!攻める!!」

「?」

「召喚腕輪解禁!!」

「何いいい!?!分裂したあ!?!」

このデータはなかったのか、少し向こうは動揺していたがすぐに気を取り直して分身した僕と対峙していた

「く、たかが一人が分身して増えただけだ!」

「ふふん!それはどうかな?」

「なに!?!」

山田くんの言葉に否定して言うと、僕は召喚を操りながら接近させて一人目を首に切りかかった

「まず一人!」

「くう!?!」

「一人の相手に二人でいくのを卑怯と思わないでね。背後注意!」

「!?!」
僕がそういうと一人は慌てて背中を振り向こうとしたがそれはすでに遅く首を切りかかって消滅した

「大山!?!」

「人の心配してる場合じゃないよね?」

「しまっ……」

「そりゃあー!」

仲間がやられたのを動揺していたのを見逃さなかった僕は長野さんにも同様に首を跳ねた。山田くんは冷静に下がって様子見ていたが僕も仕掛けずに落ち着いて距離をとって構えていた

「大山唯!・長野奈々!・補習行きだアア!!」

「いやああああ!!」

二人は鉄人に抱えられて補習行きへとつれていかれて僕と山田はその光景を見て……軽く引いていた

「……」

そんな光景を見て本音を言えば補習行きは避けたいが……まずは山田くんを倒さないとダメだ！

「我が名はFクラス吉井明久！」

「我が名はEクラス山田哲夫！」

「いざ尋常に勝負!!（一度だけこういう名乗りしてみたかった！ノリ乗ってくれて嬉しいけどでもは別!）」

僕は必ず君を倒して僕はEクラス代表をも撃ち取る！いざ参る!!

のび太side

明久が出ていってから僕らはFクラスの教室で待機しながら話しか合っていた

「明久がなんとか二人撃破したみたいだな。さて、これで向こうは三人となったが……」

「向こうもこのまま終わると思えないね。こちらの残りは真理亜さん、姫路、僕、雄二、ムツツリー二だけ……」

「はい。美子ちゃんはきつと私たちが予想するよりもはるかにすごいと思います」

「となれば……ムツツリー二、姫路は俺とそばにいて。氷華とのび太は向かってくれ」

「了解！」

恐らくもうここが最終場としての勝負の分かれ目だ。Fクラスのためになんとしてもここで勝たないと……!」

「では急ぎましょう」

「うん」

僕と真理亜は明久の増援としてEクラスの本部へと急ぐことになったがこの作戦は明久にかかっているから何とか耐えてくれ……!」

EバカとFバカの決着

のび太side

僕が急いで駆けつけると、そこには一騎討ち状態になっているEクラスの山田哲夫と明久がぶつかり合っていた

「ぐー！」

「そんな攻撃……俺には丸わかりで読みきった！」

明久の召喚獣が木刀を振るうも、山田の召喚獣は難なく回避していた。そして、回避をし終えた山田君はすぐに攻撃を仕掛けるが明久は木刀でうまいこと防いでいた。どうやらお互いに互角で中々決着がつかない感じみたいだね……

「どうします？手助けしますか？」

「うーん……いや、明久の戦いに邪魔をしたくない……だから、ここは様子を見ておきましょう」

「そうですね……おや、向こうも気づいたみたいですね」

真理亜さんに手助けしますか？という問いかけに今の明久の戦いに邪魔をしたくないから様子見をというのと、納得してくれた。すると、真理亜さんがなにかに気づいてそれに言われると僕もその方向に見ると……

「のび太君……」

「美子さん……」

美子さんはいつもの優しい顔ではなく真剣な顔でこちらを見ていたので僕も目そらすことなくその瞳を見つめながら今でも大切な人であり僕の元恋人の名前を呟いた

「美子、今は向こうに手を出さないわ。まずはあれの対決を終えてからよ」

「……」

「のび太さんもですよ」

「……わかってるよ」

そう……今、ここでぶつかり合ってもいいが、それをすると今戦っている二人にも余波がいくからここは手を出さないでその状況のみ

ることにした

「本当にお前はわが校の筆頭するバカ代表だが、召喚獣の扱い上手いよな！」

「それはどうも！だてに観察処分者としていろいろと手伝っているわけではないからね！」

「はっ、雑用の間違いだろ!!」

「それを言うなあアアアああ!!」

明久は山田の言葉に少し頭が来たのか木刀を真っ先に向けて突撃していたが、山田は冷静に慌てることなく回避していた。どうやら、山田もそれなりに扱いがうまくなっているみたいだし、明久もああ、言いながらも状況をうまく見つけている

「Eクラスの山田さんは召喚獣の扱いがあんなにうまくなっていると
思いませんでした」

「同感……いや、もしかしたら扱いが上手くなったと言うよりこの二年生は皆扱いがうまくなっているのかもね」

「4月からそれなりに経過してるからですか？」

「それもあると思うけど一番は山田君が勝ちたいと言う意志があるからだと思う」

僕の瞳に写る光景には、山田君は間違いなく慢心もなく明久を敵と見なしてそして何がなんでも勝つと言う決意が現れてるのがよく分かるが……

「このまま君はやられて終わらないつもりだよな？明久」

僕は自然と彼の名前を呟くと明久の召喚獣が下がって落ち着くように構え直していた。対する山田も深追いすることなく冷静に考え事をしていた

「今の山田君相手に闇雲に当てては無理だ。僕は彼よりも点数は格下だし、少しでも気を抜けばやられる！仕留めるチャンスは……」
「(正直心のどこかで決着はすぐにつくと思ったが、対面してわかる。今の吉井明久はなにげに強い……チャンスは……)」

お互いに距離をとって、明久の召喚獣は木刀にたいして山田君は武器がないのか、あるいは元々ないものになったのか知らないが、

構えていた

「……」

「息が詰まりそうな雰囲気になりましたね……」

「勝負は一瞬だよね……は……」

僕はくしゃみしそうになり、上を向いてくしゃみを押さえようとしていたが、一歩遅くくしゃみした

「ハークション!!」

僕のくしゃみを合図に明久達は走り込み、互いに空高く飛んで互いの名前を叫んだ

「吉井明久アア!!」

「山田哲夫オオオオ!!」

お互いの名前を叫びなら最後の一撃の攻撃が交差して、地面に着地して勝ったのは……?

「……!?!」

「……お前は強いよ……吉井明久……」

「君もね……山田哲夫……」

Eクラス

山田哲夫 0点

対

Fクラス

吉井明久 0点

二人の対決は互いに0点になって、引き分けという形になり互いに補習行きが自動的に決まった

「補習行きだアア!」

「いやあだアアアアアアア!!」

西村先生に連れていかれた二人の悲鳴が廊下に叫んでいるのが聞こえたがそんなのは関係ない

「やて……」

「つぎは私たちの番ね……」

三上さんも僕もお互いに覚悟を決めたように向かい合った。明久達が覚悟を決めて戦ったように僕らも覚悟を決めて戦わないとね

⋮

第397話

ここまででの戦いでお互いに多くの犠牲を出したが、それは勝つために挑んでるからだ。今この部屋に残ってるのは……

「……お互いに戦いは終盤ね」

「そうみたいだね……手加減はしないよ？」

「当たり前よ。野比君」

僕はもつとも大切に誰よりも幸せにしたかった元恋人……三上さんと向き合っていた。そして、後ろにはEクラスの代表中林さんが腕を組んで見つめていた

「この戦いは手を出しません……お互いに思いきりしてください」

真理亜さんが優しく力強く呟いた言葉はこの教室に響いていた。その言葉を聞いて僕も三上さんもお互いに真剣に向き合った

「後ろに高橋先生がいるのね。総合科目で……挑むわよ」

「望むところ!!」

僕らの発言とともに真理亜さんが途中で連れてきた高橋先生が前に出てきた

「総合科目……承認します!!」

「サモン!!」

総合科目

Eクラス

三上美子 3200点

vs

Fクラス

野比のび太 3200点

総合科目はお互いに同点か……どうやら、この戦いは激しくなりそうみたいだけど三上さんが高いのは恐らく僕らと共に勉強してきたのもひとつの要因だろう

「私の召喚獣は本を使った魔法使いで、あなたはガンマ……拳銃使いね。まさに非科学と科学とのぶつかり合いね」

「そうだね。それに点数も互角……どっちが勝利しても不思議じゃな

いね」

「ええ……いくわよ!!」

三上さんが魔法で砲弾を打ちまくってきたので召喚獣の僕は銃で対抗していた。恐らく、最初に攻撃したのは様子見もあるのだろう……!

「普通の人や並の召喚獣では困難だけど、野比君は普通に銃で攻撃を打ち落とすなんて流石ね」

「そういう三上さんも冷静だね。いや、あえて牽制もかねて攻撃したのだよね?」

「ご名答……よ!」

三上さんの召喚獣が地面に手を置くと、何かを仕掛けていた。普通に何も考えないで接近してはやられるから……

「この距離から狙って打つ!!」

「させないわ!!」

僕の召喚獣が撃ち抜こうとすると三上さんの召喚獣は僕の地面に尖った岩を出現させていた。これを貫かれたら不味いと思った僕は前に飛んだ

「くっ!」

「まずはこっちから削らせてもらおうわよ!」

「え!」

三上さんの召喚獣が接近していて、僕は慌てて速打ちをしようとするも三上さんの攻撃が早かった

ゴンツ!!

「あっ……!!」

「本の角に頭をどつかれると……痛い……」

「た、確かに……!」

僕の召喚獣の頭に三上さんの召喚獣の攻撃……本の角での攻撃にまともに食らったせいかわか地面にしゃがみこんで押さえていた

「痛みのフィードバックなくなって良かったわね。たぶん、これをリアルに倉ったら辛いわよ」

「うん、たぶんものすごい痛いと思う」

お互いにその攻撃がもしも実際に喰らったら痛いというのは想像できるし、かなり辛いと思う……

「だけど……攻撃の手を休めたのは失敗だね！」

「えっ!？」

僕の召喚獣が起き上がり、三上さんの召喚獣に足払いをしていた。まともに受けた三上さんの召喚獣は地面に倒れると今度は僕の召喚獣が三上さんの召喚獣の頭を銃でこづいた

「油断大敵だよ……三上さん」

「ふふ、野比君ったら流石ね……。ええ、お互いに勝負はまだまだこれからよ！」

お互いの勝負はまだ始まったばかりだし、総合科目だからいつでもお互いの特殊能力を放すことが出来る……。三上さんは、本当に僕の行動を理解してるかもしれないけど僕も三上さんの行動を理解してるつもり……

「(どういう理由でこの戦いを仕掛けたのかは知らないけど、まずは美子さん相手に勝つしかない！でもやっぱり、凛々しい美子さんも他の男に見せたくないなあ……)」

「(流石ね……本当にのび太君は強いわ。私達が別れたのはお互いが許せなかったから……けれど、やっぱり別れても恋心は消えないものね)」

お互いに思考を巡らせながら何が有効なのかを考えて思うことはただひとつ！

「(君に勝ちたい!!) 勝負!!)」

声揃えるのと同時にお互いの召喚獣を走らせて再びぶつかり合っていた

決着を……!!

何度も何度もお互いの攻撃を回避しながら決定打を見せないように探りあっていた。こちらが、銃で攻撃をしようとするとうこうはそれを読んで反撃する

「（一見はなんともないように見えるが押されてるのは間違いないこの僕だ！銃で撃とうとするのをすべてタイミング読まれている）」

「（のび太君は、射撃のセンスはとんでもないくらい正確かつ速い！そんな攻撃を少しでも譲ればこちらがやられる！）」

お互いに特殊能力は有しているが、タイミング誤ればこちらがやられるというのが良くわかつている……

「流石、三上さんだね！僕の手を全て読みきっているじゃない！」

「そういう野比君も私の考えを読みきってるじゃない？やっぱり、お互いに読みきってるじゃない？」

「そうかもね！」

僕の召喚獣は後ろに下がり、銃を放とうとすると三上さんはそれを許すことなく本から魔法の攻撃をして来た

「そうはさせないわよ!!」

「わわわ!?魔法弾!？」

「からの……アクセル！」

三上さんの言葉にその魔法弾はより早くなり、僕は回避するのが一杯だった。本で魔法の攻撃を仕掛けるなんて……恐らくあのときの自身で召喚を纏うのを成功してから色々とアイデアが出てきたのだろう

「だからって……こんな速い攻撃をされると打ち落とすのも難しいよ……」

僕は苦笑いしながら、召喚獣を操って回避していた。回避していた僕は三上さんの顔を見ると楽しそうに笑っていた

「そういうえば貴方とこうしてぶつかり合うのは、初めてよね？」

「クラス単位で……でしょ？」

「ええ……あの夜はノーカウントで今回がはじめてのぶつかり合いよ

ね」

「……そうだね」

あの夜という言葉に中林さん達は、知らないのか怪訝な顔していたがそれは僕たちにしか知らない共通の話だ

総合科目

Fクラス

野比のび太 2800

対

Eクラス

三上美子 2800

お互いの点数を見ながらなんだで点は削れてしまっている……それをみて次の打開策としては特殊能力でければいいのだけど……

「あはは、三上さんは流石に手強いね(たぶん向こうも同じことを考えてるよねー)」

「それは野比君にも言えることですよ?簡単に終わらせてくれないのだから……(たぶん向こうも同じことを考えてるだろうとのび太君は心のなかで思っているはず。変な話、私たちはお互いの手の内は読めてしまう……だからといって別の手を下手にすればやられる)」

「お互いにクラスのためにも負けられないということだね!」
「ええ!」

僕達はお互いの探りあいをしながらもこの戦いは不謹慎ながらも楽しく思い、笑顔で戦いあっていた。そうか、最近色々ありすぎて忘れていたけど……

「召喚獣での戦いはこんなに楽しいものだったんだね」

「そうね、私も同じ意見よ。本当に色々ありすぎてこの当たり前の日常を忘れていたわ」

「僕もだよ……だけど今はそれとこれは別だね。この勝負は負けたくないから何がなんでも勝たせてもらうね!!」

「それは私もよ!」

「……何故かしら?普通の会話なのにイチヤイチャしてると思うのは

「……？」

「い、イチャイチャしてない／＼／！」

「思い切り仲良く口揃えて反論してるじゃない……。これをイチャイチャといわないでなんて言うのかしら？」

「宏美!？」

中林さんの言葉に三上さんは顔真つ赤に見ていたが、僕も顔真つ赤でお互いに攻撃するのを止めて中林さんの言葉を反論していた。そんな、中林さんはニマニマしながらも僕らを見ていたが、今は何をいつても勝てる気がしないよ！

「と、とにかく切り替えて戦いを続けてみましょう!!」

三上さんがまだ顔真つ赤にしながら僕の方に向き合い僕もまた顔真つ赤にしながら向き合い構えていた

「……今の点数は……」

総合科目

Fクラス

野比のび太 2600

対

Eクラス

三上美子 2600

「(くっ、隙がないから決定打与えれないし、向こうも同じだと思うけど……) それでも、私は負けられないのよ!!」

「っ!？」

三上さんが接近してきて、本を閉じて蹴る攻撃を仕掛けてきた。僕はまさかいきなり突撃攻撃しかけてくると思わなかったのでもともとにダメージ受けてしまった。更に攻撃の手を緩めずに本を開いて魔法弾をしかけてきた

「くらいなさい!!」

「回避が間に合わない!? くっう!」

「よし、リードを奪ったわ!」

「……くっ、本当にすごいよ……でもここから逆転をする!」

僕は気持ちを持ち直して、すぐに召喚獣で銃を打つが、三上さんは

冷静に回避していた。どうやら、タイミングを見計らっていることから、こちらからの接近を仕掛けるには厳しいと僕は判断した

「ならばっ……!!」

「(銃を構えるのは止めないで、なにかをたくらんでるの?)……え?! 銃を上に向けてた!」

「(視線は銃の方に向いた!!) 今だああ!!」

「はっ、フェイク!」

召喚獣の三上さんに接近してきて、肩の方に押し出すように強く攻撃すると三上さんは苦虫潰した顔になっていた。攻撃し終えた僕はバックステップ入れて上に投げていた銃をとり、何発か攻撃した

「っ!!」

連続の攻撃に三上さんは召喚獣としての致命傷を避けながらもダメージを何発か受けていた。そして、三上さんはため息つきながら僕の方に苦言を呈していた

「遠距離が接近するって相変わらず無謀な攻撃するわね……あれでもし、私がつられてなく攻撃していたらやばかったのじゃないの?」

「勿論其は賭けだよ。でも、人間は不思議なことに注目すると視点は外すこと出来ずに見てしまうのだよ?」

「確か心理学で何かあったわね。運動残効かしら?それとも……まあいいわ。そんなのはおいといて、次はそう簡単にいくとおもわないでね!」

「勿論……だからこそこの手を打つ時間が必要だったのさ」

「時間……はっ!」

三上さんはなにか気づいたがその時間がほしかったことに気づいたのはさすが!

「僕に冷静になる時間を与えたね!」

僕は銃を構えてその狙いを聞こえるように話した。お互いに冷静でも攻撃の手をやめなかったから中々決め手をどういくか悩んでいた

「だからこそ、ここで決める!!」

「(本当に……) 私も負けるわけにはいかないのよ……!ここで決める

のは私の台詞よ!!」
「特殊能力発動で決める!!!」
お互いの覚悟を決めて今決着を…!

第399話

もうこれ以上接近しかけたり遠距離で仕掛けたりするのは厳しい!!ならば、こういうのをもつと早く仕掛けるのが一番いい

「この一撃は決して敗けの一撃ではない。勝利へとつながる一撃で僕は君に勝たせてもらうよ!!」

「それはこちらの台詞よ……。私も最高の一撃で貴方を打ち倒す!!」

「いぎ……」

「尋常に……」

「勝負!!」

お互いにそれだけを言いながら次の動作をしないで睨みあっていた。召喚獣は僕と同じ意思でタイミング外さずに打たないと負ける……。でもそれは向こうも同じ条件

「(本当に……本当に最高だよ。僕が心底信頼できて最高の人と戦えるのは嬉しいよ。美子さんは僕にとってかけがえのない大切な人だ。だからこそ、僕は彼女を傷つけてしまったことは責任をとらないとダメ……彼女の精神的なものも肉体にも傷つけてしまったからこそ別れを切り出した)」

「(私はあの男たちに操られて彼を傷つけてしまったことは今でも許せない……。操られたから罪はない?そんなわけではない……。どんな理由であれ私は……彼を苦しめてしまった。だからこそ、責任とって別れたの。彼が悪いわけではない)」

お互いに今何を思ってるのかはわからないけど、僕自身は本音はいまだに好きだし、大切な人なのは変わらない……。だからこそ、もし彼女から許されるならもう一度……

「(もしも、この僕が君に許されるならもう一度話したい!!) 特殊能力発動!」

「(私はあなたのそばに歩いて生きたい!) 特殊能力発動!」

「ジャンボットガン／ジャンボット・ビーム!!!」

お互いに声を揃えて、特殊能力を発動して僕は銃を三上さんは手を

前だして、お互いに狙いを定めていた

「狙いは一撃……」

「一発で決着を……」

「一発射ア！」

僕達は声揃えると同時に攻撃をして、打つと攻撃は相殺しあいながら押し合いになっていた。恐らくここからは気力になるけど……

「(点数は互角……ここまで来たら勝ちたい!)」

「(普通に押し負けそう!でもね……この勝負は負けない、負けるわけにはいかない!) ああああ!」

「ぐう!? つ、強い……!」

「私は……もう負けないと決めたのだから!!」

三上さんの言葉とその瞳は確かな決意が映っていた。僕はあのとき、三上さんを傷つけてしまったからこそ責任を感じて別れた……。君は今何を思っているの？

美子 side

私と彼の特殊能力ぶつかり合いながら、私は彼の瞳を見ていた。私が写る彼の瞳の奥には、決意、そして迷いが出ているのが私には分かる

「(本当に彼と別れを告げた私が言うのもあれだけど……私は彼に酷な選択をさせてしまったのかしら……)」

そう思いながら彼の特殊能力を対抗しながらそう思い馳せていた。もう少し話し合えば良かったのかと思うが、お互いにそれは無理だと思ふ。なにせ、私の方はあの男達に操られてしまったとはいえ……彼を傷つけた……

『クスッ……戸惑っているようね。私は正真正銘三上美子よ。……ただし、あなたの敵よ』

『滑稽ね。味方と信じていた私に攻撃されたあなたは戸惑うわね。私がこの手で貴方を倒す……チンカラホイ』

『うるさいわね。フッフ……その右腕では銃も満足そうに持てないわね』

あの日、私は操られた記憶は最初は思い出せなかった……けれど、のび太くんを探すために記憶をなんとか思い出すと私があのとときに渦巻いた気持ちは罪悪感がなかった

『聞こう。野比のび太はお前にとってなんだ？』

『……敵です』

『なら明日は私と共にのび太を倒すために協力しろ。……美子』
『はい』

本当に何度思い出してもあんな連中に操られた私は不甲斐ないわ。そして結果的に私は彼に助けられたものの彼は代わりに捕まった……

だから私は彼に別れるときにも決意した……もう二度と……

「(私はもう二度とあんな姑息な連中に操られる自分にも……)私は負けないと決めたのだから!!!」

私の叫びとともに特殊能力の威力は強くなり、彼も苦しそうにうめいていた

「ぐっ!」

「今度こそ……お仕舞いよ……!!」

「僕だって……負けたくない!!」

私の叫びとともに彼も必死に足掻いていた。確かにいつもののび太くんならここで逆転するでしょうが……

「今日は私が勝たせてもらうわ!」

「僕だって……簡単に負けるつもりは……ない!!!」

彼の叫びとともにぶつかりあった攻撃に光が走った。辺りあった光に私たちは目を覆いそして次に目を開けると……

私たちの召喚獣は消えていた……

第40話

僕と三上さんの召喚獣が消えてしまってきた。特殊能力をぶつかり合いながら、召喚獣が消滅するということは……

「相討ち……かしら?」

三上さんが確かめるように空中の方を見て、僕も空中を見るとそこには点数が表示されていた。そして、僕も三上さんもその点数を確かめてからため息をついた

「召喚獣戦争をやるのは数えるほどしかないけど……これは初めてのケースじゃないかしら?」

「どうだろうね……。僕もいまその現状に困惑してるよ」

「その情況の説明を俺がしよう」

僕たちはこの状況に困惑していると、西村先生がやって来た。なにげに久しぶりに見たけど相変わらず体がでかいなあ……

「西村先生がですか?」

「ああ、この勝負は……引き分けだ!!! よって、共に戦死!!」

「引き分け……か」

その言葉をきいて僕も三上さんも「はあああ……」と座り込み点数を見た。さつきまで確認してなかったけど……

Fクラス

野比のび太 0点

vs

Eクラス

三上美子 0点

draw

まさかこんな結果になるなんてなあ……まあ補習行きは確定みただね……

「それと……このEクラスとFクラスの対決は終結とする!!」

「……………ええええええ!!」

「なんでかはこれから俺が説明する」

西村先生の言葉に僕も三上さんも驚きの声をあげると、僕たちの背

後に声かけてきた人たちがいた

「雄二！」

「坂本君……それに……宏美」

「ふふ、大夫話し合いという名のぶつかり合いでできたみたいね……わざわざクラスを巻き込んでやった甲斐があったわ」

「……………へ!？」

いま聞き捨てにならない言葉を聞いたのだけどクラスを巻き込んでの戦いをやった甲斐があった……？

「実はな……」

雄二の話は昨日にさかのぼる……

『三上美子と野比のび太の仲を取り戻したいから協力しろ?』

『ええ、そうよ』

その日の昼休みは僕も三上さんもいなかった。というより、お互いに別々の行動をとっていてそれを見計らった中林さんは雄二に接触した

『正直、あの二人は仲悪いわけではないし、寧ろ別れるのに納得いかないわ』

『それに関しては同感だな。だが、そんな理由で動くにしては……』

『召喚獣戦争を仕掛けたらいいの。いっておくけどこれは美子を除くEクラスの同意よ』

『なるほどな。それなら、良いと思うが条約ははっきりさせないとな』

雄二は中林さんと共に条約をきつちりと話し合っていたそうだとその条約を見せてもらうと

1. EクラスとFクラスの勝敗条件は野比のび太と三上美子の対決で決まる。尚、そのように対決持ち込めるように仕向ける
2. お互いの遺恨なくぶつかり合う
3. その日の対決に決着つかない場合は、翌日一騎討ちとする
4. 相討ちの場合は引き分けとする
5. この条約は戦いを終えたあとに二人に必ず事後報告をする。

尚破った場合は西村先生の補習授業をうける

この誓いを破らないようにここに宣言する

Eクラス代表

中林 宏美

Fクラス代表

坂本雄二

とこのようにきっちりと条約を記載されていて僕と三上さんは顔真つ赤になりながら二人の代表をみていた

「え、じゃあ……この戦争は私達のために……う？」

「そうしないと二人とも話し合わないでしょ？大体、別れたといいながらも二人ともまだお互いに好きなのは誰が見てもわかるわよ」

「まっつて、雄二はどうやってFクラスに説得したの?!」

「そんなの決まってるだろ、いつもの言葉で話したただけだ？ちなみにFクラスでこの件を知ってるのは俺と剛田と骨川、氷川と島田、姫路だ。秀吉とムツツリーニも知ってるぞ」

「まっつて!?!なんで僕だけ仲間はずれされてるの!?!」

Fクラスでもこの件を知ってるのは明久以外はいつもの面子は知っていたそうさ。それを聞いて明久はなんで教えてくれなかったのかと聞くと……

「口が軽いから」

と二人の代表が口揃えていつていた。それを聞いた明久は否定をしようとおもいつつも何か言えないのか目をそらしていた

「つまり僕らは君たちにはめられたと言うわけだね」

「人聞きの悪いことを言うな。お節介といえ。それと、明久は絶対に口軽いしお前達にばれると思っていたから言わなかった」

「うう、なんか恥ずかしい気持ちよ……」

三上さんの言葉に僕は頷いた。だっつて、こんなことのためにクラスを巻き込んでやっていたのだから……

「ま、鉄人。これでこの戦争は終わりだろ?」

「鉄人と言うな。まあ、この戦争は終わりだが……坂本、吉井。お前達は補習をするからな」

「なんでだ!?!」

「なんでだと……? そんなの決まってる!! 貴様達が以前の戦犯でもあるから学園長から、この戦争を終えたら貴様らを補習しろといわれていたのだ! さあこい!!」

「絶対に許さないぞ、ババア!!」

「なんで僕まで!!!」

そういうや否西村先生は二人をつれてこの場所を退出してそれに続くようにみんなも退出していった

「じゃあ、あとはお二人で真剣に話し合いなさい」

中林さんは手を振りながら出ていき、残ったのは僕と三上さんだけだ……さて、改めて何を話すべきかなあ……

「野比君、場所変えてそこで話し合いましょう?」

「……うん、そうだね」

僕たちはとりあえずこの場所で話すのもあれなので場所を移動することにした……。とりあえず明久は御愁傷様……

第401話

EクラスとFクラスの戦争は相討ちで終わり、お互いのクラス交換はなかったが、いま僕は三上さんと屋上で冷たい風を浴びながらも外のグラウンドの方を見ていた

「まさか、今回の戦争は二人の代表や仲間たちにはめられたなんてね……」

「そうね。本当にお節介というかお人好しと言うか……なんか色々な意味で救われたわね」

「まあね……にしても最後の僕らの対決は、結果的に見たら引き分けだけど多分、クラス全体の結果で見れば僕の負けだと思うよ」

「どうしてそう思うの？」

三上さんが不思議な顔でこちらを見ていた。まあ、確かに不思議に思われても仕方がないけど僕からしたらあれは負けだよ……

「まず1つは、主力組の敗北。ジャイアン達がやられたのはこちらとしてはかなり痛かったし、明久と僕だけの攻撃では敗北する恐れが高かった」

「私たちもあんなにうまくいくと思わなかった。けれど、あなたたちはそれを逆転する力があるじゃない？」

「分が悪いよ。肉体的な対決ならまだしも、点数は0になったら敗けなのだから頭を使わないと厳しいよ」

そう、召喚獣は頭を使ってそいつをうまくいこと操りながらなおかつ戦略で勝ちにいくから強い。たとえば、明久なんて召喚獣は誰よりも操作はうまいけど、その反面頭が残念なのとダメージ受けたあとの反動がきつい

「味方を上手いことを生かしながら相手を倒す……たしかに、それは一見簡単なようで難しいよね」

「ただ、その結果……まあ、僕たちは苦しめられたけどね」

「あなた達が考えそうなことを考えてその選択一つ一つを選んだのよ」

「なるほど」

まあこう話してはなんだけど、あのあともし戦いもつれていたら、どうなっていたかはわからないね

「さて……お互いのクラスの話し合いはおしまいね」
「だね」

お互いに今度はなんの話をするのか理解しているのでお互いの顔を見つめあっていた

「……なんかこうして顔を見合わせるのは久しぶりな気がするね」

「そうね。……あんまり寝ていない感じ？目の隈が見えるよ。一応いっておくけど、私相手にごまかしても無理よ」

「あはは……実はあの日以降から自分が何がダメだったのかどうしたら防げたのかと反省していたら朝を迎えることを多々あったよ」

「そう。私も1人の時間はずっと反省していたわ……何がダメでどうしたらよかったのかね」

「三上さんは被害者でしょ？あいつらに操られた訳だし、それなら僕は君を傷つけた罪があるのだから悪いのは僕だよ」

あの時、君を傷つけないで助ける方法はもしかしたらいくつかあったのかもしれないし、それに……

「それに、女の子に暴力するなんて最低なことを僕したからね」

「本当に頑固ね……」

「それが僕だからね！」

「ま、この話ももうお仕舞いね。お互いに謝り続けてたらきりがないからね」

三上さんは自分の手を叩きながら、僕の方を見ていた。そして、三上さんは嬉しそうにこつちにわらいかけてきた

「大事なのはこれからどうする……でしょ？」

「うん。あのね、三上美子さん……君がよければだけど……もう一度だけダメダメな泣き虫である少年……僕野比のび太と……付き合ってくれませんか？もう二度と君を泣かせたくないから……」

「……ありがとう、のび太君。でも、ごめんなさい」

そりゃあそうだよね、……お互いにあんな別れかたをしたのだからもう一度付き合ってもらうなんていうのは自己満足すぎるよね……

「私はあなたと付き合うのではなく、高校を卒業してあなたと結婚したいから、私と結婚してくれませんか？つまり婚約をお願いよ」

「……………え……………」

僕は断られたと思って落ち込んでいたら思わぬ続きの言葉に、顔をあげた。そして、その時の三上さんを見ると優しそうにそして愛おしそうに僕をみていた

「ふふ、いっておくけど本気よ？私は貴方と結婚したいということに……………嘘はないわよ」

「ありがとう……………君を必ず幸せにするから……………結婚する前提で婚約者として付き合ってほしい！」

「ええ、私三上美子の人生を貴方に捧げるわ。勿論、不満あるときはしっかりとぶつけ合って話し合いますよ!!それが夫婦つてものでしょ……………?」

「……………うん、君が悩んだときや苦しいときそして、僕もまた君としっかりと向き合うよ!約束するよ、君を必ず大切にそして、幸せにするって……………」

彼女の差しのべた手に僕はしっかりと握りながら誓いの言葉をたてた。もう二度と彼女を悲しませないと!!

そして、時は流れる……………

最終回 君の名前は……

あの召喚獣システムがある文月学園を卒業して数年……在学していたときは色々とおったけどあの明久が無事に卒業できたことが今でも驚いてる……

「はい、ストップ!!!今明らかにおかしいのがあったよね?!」
「ん、明久どうしたの?」

僕は明久がなぜいきなりそういうことをいつてきたのかわからずに首をかしげると明久が必死に抗議してきた

「いやどうしたのって……今明らかになに冒頭の文章でおかしいのがあったよね?!なんで僕がデイスられてるの!?!」

「……そう突っ込み入れたのは、文月学園始まって以来の伝説である男吉井明久である……」

「ムツツリーニ……さらつとナレーションを付け加えないで!?!それをいうなら君も伝説の男でしょ!?!」

「たしかにのう……お主やムツツリーニは伝説の男扱いじゃからのう」

明久は文月学園始まって以来の超おバカさんで彼を越える馬鹿はいまだにいないと西村先生が言っていたね。ムツツリーニこと土屋は、盗撮の技術が凄すぎてムツツリーニ商会では大もうけしていたと裏伝説がある

「っていうか、卒業して数年だけど雄二は今日参加できなかったのは残念だったよ……」

「雄二は卒業と共に霧島と婚約者になり、本人は何とか結婚ルートを回避したいが親同士は公認であるからもはや結婚しないという選択はできないからのう」

「……そして、いまや霧島財閥の仕事を手伝っていると……」

「霧島財閥といえばジャイアンとスネ夫は真理亜さんを初めとする三姉妹と小暮先輩の立ち上げた会社で働いてるのだよね」

ジャイアンとスネ夫は卒業と同時に大学進級して経営の勉強を学びながら会社を営んでいた。ちなみにジャイアンの実家はその会社

の系列として仕組んでいて、農業の契約したり家電関係の契約をして自身の実家を大きくしていたみたいだ

「そういえば、秀吉とムツツリー二はよく帰ってこられたね」

「明久のいう通りだね。ムツツリー二は世界中で写真を撮っているし、秀吉は劇団に歩んでるもんね」

「……友の誘いだからな」

「ワシもたまたまこの日はオフだから飲み会に参加したのじゃ。まあ、雄二は参加したくつてもできないじゃろうな」

「そうだね、前に明久と雄二が合コンしていたことがばれて、霧島さんは大分怒っていたみたいだし、今は監視されてるみたいだね。明久はよく今日は参加できたみたいだね……」

僕がそう明久の方に振り向くと明久は気まずそうに顔を背けていた

「うっ……」

「え、まさか……黙って参加したの!？」

「し、仕方がないじゃないか!?!どのみち折檻コースは確定だし!」

そう明久が答えると、ノックする音が聞こえたので振り向くと、そこには……

「のび太君、おつまみ作り終えたから入って良いかしら?」

「うん。いいよ、美子さん」

「失礼するね」

入ってきたのは、僕の恋人であった三上美子さんだ……いや、今は違うのだったよね……

「三上さん、こんにちは……って今は三上さんじゃなかったね。野比美子さんだったね」

「ふふ、昔の名字でも良いのに」

「今日はお主達の家へ招いてくれてありがとうのう。しかし、のび太の行動も驚かさされるわい」

「……法律上結婚できる年齢になると、すぐに婚姻届をだしていたのも記憶に新しい。それと、結婚式あげるのも一番だった」

「そうね、私達が結婚するときはどちらの両親も welcome だつ

たわね。しかも、霧島財閥、骨川財閥、剛田財閥がバックアップの結婚式だったのよね。今でも良い思いだよ」

「そうだったね」

そう、僕と美子さんは今は夫婦関係となり仲良く家に暮らしているのだ。ちなみにこれは明久達には秘密だが、いずれは僕の家族と美子さんの家族と僕らで住めるように現在稼いでる

「それより、吉井君はまだ三人の告白の返事答えてないの？三人ともこの間カンカンだったし、今日は私達の家に来てるとさつき話していると怒っていたわ」

「え、そうなの？明久は姫路達に告白されていたの!？」

「……島田と姫路は気づいていたが、島田妹の葉月ちゃんにまで告白されたのか」

「まって、なんで今の流れでその三人とわかったの!？」

「「……」」

この通り明久は今、三人に告白されていてまだに返事だしていかないのだ。だから、この間の合コンばれたときは三人の怒りすごかったよ……

「まあ、一応私からも今回の件は穏やかに済むように話したから後は頑張ってるね」

「うう……またおこづかいが飛ぶよ……この間許してくれたから大分カットされてるのに、またカットされたら……」

「きちんと連絡しなかったお主の自業自得じゃ……」

「……のび太、ドラえもんは？」

「ドラえもんは今未来で色々な道具を取り寄せてくれてるのだよ。あ、そうだ。秀吉のお姉さんはどうしてるの？」

「姉上は今小説家として売れているから大変じゃ。そういえば、思い出したのじゃが中林宏美はプロテニスになったのじゃったな？」

「ええ。ちなみに山田君は宏美のマネージャーとしてスケジュールと体調管理してるみたいよ」

「みんなすごいなあ……」

明久がそんなことをいつているが、その言葉に僕らはすぐにうんと

いえなかった

「いや、君も大概だよ？」

「うむ？　そういえば明久は今何してるのじゃ？」

「え、僕は料理人になったのだよ？」

「明久はね…自分の店を持つために今まで日本や海外で修行していたの。学力はあれだけど料理はすごかったからね…☆一つの店で修行足りしていたらしいよ」

「なんと!？」

「…脅迫して働かせてもらったのか？」

「なんでそうなるのさ!？」

だって、あの明久だよ？　平気で友人に売りそうな明久だからそれをしてもおかしくはないや…。　そういえば僕もそろそろ報告しないとね

「今日は明久達に報告したいことあったのだよ。　姫路達は仕事の都合で無理だったから残念ながら後で話すことになるけどね…」

「うむ、そういえば報告とはなんじゃ？」

「…思い出した。　たしか今日はそれをかねて飲まないかと誘われたのだった」

「うん…実はね…僕と美子さんに子供ができるみたいなんだ」

「へえ…つてええええ!？」

「ぶー!？」

「つて汚いよ!？　二人とも僕の顔をめがけて吹き出さないでよ!？」

僕の言葉にムツツリーニと秀吉は飲んでいたものを綺麗に明久の顔へと直撃した。　さすがにそれはかわいそうだったので、美子さんが明久にタオルを渡すと明久はしっかりと拭いてこっちを見た

「い、いつ子供生まれるの!？　つてか、なんでそんな大事なことをすぐに連絡しなかったのさ!？」

「妊娠がわかったのは今朝だよ。　すぐに両方の親に連絡してそれは伝えてるし、明久は今日空いていたのは知っていたからついでに他のメンバーも空いてたら伝えようと思ってね」

「…なるほど、それでドラえもんもないのか」

僕の説明にムツツリーニは納得するように眩くと秀吉も気づいたみたいだ。そして、明久はムツツリーニの言葉の意味を理解してなかったので秀吉が説明してくれた

「明久、ドラえもんはどういう存在か知っておるじやろ?」

「えーと、ダメなのび太を立派にするために22世紀から来たのだったよね?」

「うむ。そして、ドラえもんは本当の役目はなんなのかわかっておるか?」

「っ、そうだ!子守りをしてる猫型ロボットだったね!」

「そうじゃ、つまりドラえもんは22世紀に帰ってのび太の子供のための用意しておるのじやろ?」

「うん。ドラえもんはドラえもんズ達とともにその用意してくれてるのさ」

「生まれてくるこの名前は決めてるの?」

明久の言葉に僕は頷き、美子さんの肩を抱き寄せながらみんなに聞こえるように話した

「女の子の場合の名前はまだ決めていないけど、男の子なら決まってるわ……」

「聞きたい!」

「野比……ノビスケ。二人の子供が男の子ならノビスケと決めていたの」

文月学園に入る前の僕は静香ちゃんに告白した結果、ふられて未来が真っ暗だった……。けれど、今の僕ならきつと過去の僕にこう伝えることは言えるだろう。

未来はいつだって君にしかわからない答えがある。他人が君の人生を決めるのじゃない、君の物語、君の人生は君が決めていく……。そして最後には君自身の答えがあるからね

僕?僕の今の答えはね……

僕は今……幸せです……

良い夫婦になろう（特別編）

これは、文月学園を卒業してから数年は経過しているの話だ……。あの頃の伝説な学生達は、働いていたり学生生活を過ごしていたり様々な人生を歩んでいた……。これは、そんなある男の話だ……

「のび太……折り返って相談がある」

深刻そうに僕の家に入ってきたのは、あの文月学園史上初めての観察処分者を受けた吉井明久がやって来た。今の明久は、卒業してから料理の勉強をして今や自分の店を持つために働いている

「いきなり、深刻そうに来てどうしたのさ？」

「そうね。いきなり会いたいなんて、本当にどうしたのよ？」

「本当に急にきて申し訳ない……。でも、のび太や三上さんしか相談できないうことなんだ!!」

「僕達にしか？」

一体どうしたのかわからないけど、三日前に明久がどこかで会えないかと連絡がいきなり来た。電話では相談しにくいので直接会いたいと言うので僕と美子さんの家……。あ、三上美子さんとは高校卒業後すぐに入籍したよ

「簡単に言う……。命の危険さらされています」

「二来ていきなり物騒な相談!?!」

予想外の相談に僕達はビックリするが、明久本人は本当に真面目な相談みたいで、これはどうしてあげたらいいのか黙って聞いていた

「実はね、姫路……。いや、瑞希ちゃんや美波、葉月ちゃんの三人に命の危険がさらされているんだ」

「まさかと思うけど……。いまだに告白してないの？」

「うっ……」

「なるほどね。三人に迫られているけど、告白をしてないと言うこととこの間の合コンの件で大分怒りを買ってしまったのね」

「おしやる通りです……。雄二に至っては未だに霧島さんに監視されながら生活しているよ」

「あれでも、少しずつましになっているのだけど、愛情が強いからね」

そう、あれでも霧島さんは卒業後の雄二の扱いはましになっているのだが、この間の合コンみたいにやると……かつての霧島さんに戻り、お仕置きされるのだから

「まあ、それはおいといて明久は三人をどうしたいの？誰かを選んで他は……付き合わないと言う選択はないの？」

「……その選択は正直できない」

「なんで？吉井君は、知っているかもしれないけどこの国は……一夫多妻制度ではないのだよ？私としても、言いくいけど……誰かを選ばないといけないのよ？」

「……それでも……それでも!!僕は誰かを捨てて誰かを選ぶって言うのは難しいんだ!!」

明久が叫びながら、立ち上がるのその姿はあの文月学園の時の周りを巻き込む力があつた吉井明久だった

「何故？」

「葉月ちゃんは、僕と出会ったときからずっと……好きでいてくれる子だ。あの子は大きくなっても、僕を必死に振り向かせようと色々動いてるのはわかっている」

「そういえば、葉月ちゃんは吉井君と結婚するって、ずっといつていたもんね。美波が危機感を抱いていたの思い出したわ」

「美波は、確かに怒ると怖いし、お仕置きされるときはいつも僕の体が持つか不安だったけど……それでも!!美波は可愛い女の子なんだ」

「へえ……」

島田姉妹に対してしつかり向き合おうとする明久の姿勢に美子さんも感心して黙って聞いていた。明久は、僕達の暖かい目線に気づかずに姫路さんに対しての思いを打ち明けた

「姫路さんは……僕にとつては、本当に本当に初恋の人で学生の時も彼女が僕の奥さんになってくれたらなあって何度か思っていたよ。でも、僕はバカだから、無意識に遠慮していた部分もあるんだ。……」

例えば、姫路さんの料理とかアドバイスしたらよかったのにな」

「ああ……」

姫路さんの料理に関しては、やはり何度か死にかけていたみたいだな。卒業後も彼女は明久の胃袋をつかもうと料理出していたのは知っているし、その度に死にかけながらも完食していたのを思い出したよ

「だけど、僕は三人のうちの誰かを捨てて、誰かを幸せに選ぶなんてできない……だから、僕は決心した」

「何を？」

「たとえば……たとえば!!許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない!!正直に言おう。今、僕は……純粹に三人と結婚して生きたい!!」

かつての合宿で明久は秀吉に問われていた。『明久。なぜここまで圧倒的に不利な状況にありながら諦めないのじゃ？お主は観察処分者じゃ。痛みのフィードバックもある』と……その時の明久の答えは、『純粹に覗きをしたい!』と宣言すると共にどこかで道はずしてしまった彼の増援がやってきて、その後西村先生を倒したのだから……

「どんなに批判されても、それは覚悟の上？」

美子さんは、厳しい目で明久に問い詰めていた。それも当然かもしれないが、美子さんにとっては大切な親友の二人に対しての覚悟が軽かったら許せないのかもしれない

「もちろん。だから、悩んで悩んで出した答えはそれだよ!!確かに、批判はあるかもしれない……けれど、生半可な覚悟でこれを決めたくてではないよ!!」

「例え、その道のりが険しくつても？」

「うん……僕は何度でも言おう……彼女達を愛して、必ず幸せにして見せる!!」

「……ええ、合格よ。吉井君」

「……へ？合格？」

明久の覚悟を聞いた美子さんはさっきまでの厳しい目線から優しい目線へと切り替わり、合格と告げると明久はキョトンとしていた。まあ、明久の相談は何となく予想通りだったと言えばそうだよなー

「ごめんね、吉井君の相談が何なのかは、ずっと気にしている人たちがいてね」

美子さんは、そういうながら手を叩くと後ろのドアが開き、入ってきたのは……

「あの頃の豚野郎が、偽りなくはつきりと答えたのに、美春はすごく感心しました」

「え!?!し、清水さん?!」

「悪いね、清水さんだけではないのだよ」

「あ、明久君……」

「お、お兄ちゃん……」

「あ、アキ……」

美子さんの合図に入ってきたのは、かつて、島田キス事件や盗撮事件で明久を激しく憎んでいた清水さんだった。そして、清水さんだけではなく、顔を真っ赤にした話題の三人かはいってきた

「え、何で三人がいるの?!まって!?!まさか……」

「ええ、豚野郎がお姉さまに対していった台詞を全部聞きましたよ」

「さ、最悪だああああ!!」

「お兄様が、もしかしたらこういうことあるかもしれないから待機してね? って指示聞いてよかったです。これで、この豚野郎を弄る機会が増えましたね」

清水さんが、明久のあの台詞を聞いて嬉しそうに笑っている。因みに相変わらず僕達の事をお兄様、美子姉様と呼び募っている上に生まれてくるかもしれない子供のために色々協力してくれている

「お兄様、美子御姉様。美春はきちんと仕事をこなしましたよ!」

「ありがとう、美春はえらいね」

「えへへへ、美子御姉様に誉めてくれれば明日からも頑張れそうです!!」

美子さんが清水さんを誉めていると、尻尾があつたら、それはもう興奮してますよと言わんばかりに振っているだろうなあと思うくらい笑っていた

「さて、明久。あの言葉に偽りはないよね?」

「(ええい、男は度胸!) そうだよ! 僕は例え困難でも……三人を幸せにする覚悟を決めたよ!!」

「もう安心だね……。じゃあ、三人にきちんと行ってあげなよ」

「う、うん……。あのね、三人とも……」

明久は意を決心して、三人に向き合っていた。その当の三人は、緊張していて明久と向き合っていた

「三人とも知っての通り、僕は頼りないし少しうっかりするけど……」

「うっかり??」

「……少しうっかりするけど!! 3人の事は必ず大切にやるからね! だから……結婚前提に付き合ってください!!」

「……はい!!」

明久の一世一代の告白に三人は泣きながらも、その涙はきつと何よりも美しく綺麗な涙だろう……